

ようキャ

磨は星

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

転生者・左京夢月は高度育成高等学校に入学直後、四方二三矢に出会ったことで別作品キャットルーキーの前日談だと思ってしまう。

楽天的な性格のおかげで深く考えることなくあっさり切り替えるが、特異な性質のせいもあって前の人生では考えられない事象に次々と遭遇していく。

東風谷早苗、佐倉愛里、綾小路清隆、戸塚弥彦、一之瀬帆波、龍園翔。

左京が矢継ぎ早に面倒事へ巻き込まれていく内、関わりがあつた者達に徐々に変化が見られ……。

これは、よう実でも、キャットルーキーでも、東方でもなく。しかし、その全ての要素が混ざり合つた世界で、気の向くまま変わらぬ歩みをする一人の青年の物語。

タイトル正式名：ようこそキャットルーキーの前日談だと思つている学園へ

タイトルが見切れたりするのが好みではないので縮めました。

2022／06／26

今更ながら、多重クロスとパロディのタグを追加しました。

2024／01／09

目次

1章、日常の延長

1、高度育成高等学校	1
2、邂逅	13
3、キャットルーキー	21
4、部活動説明会	27
P、四方二三矢	36
7、遭遇	43
8、奇貨	49
9、人生	56
10、勧誘	64
11、努力	71
12、羨望	78
13、珍客	82
14、一手	91
15、代償	99
16、世間話	106
17、青春	115
18、規則	123
19、早合点	129
20、平等	137
21、頭脳戦	143
22、誤解	152
23、常識	158
24、一心不乱	166

4 3、	4 2、	4 1、	4 0、	3 9、	P、	P、	3 8、	3 7、	3 6、	3 5、	3 4、	3 3、	2 章	3 2、	EX、	3 1、	3 0、	2 9、	2 8、	2 7、	P、	2 6、	2 5、
一気呵成	綾小路清隆	美学	友達	悪辣	櫛田桔梗	東風谷早苗	異変	利益	例外	喧嘩	自爆	天才	トラブルな日常	凡人	さんきゅっぱ	空転	疑心暗鬼	先行投資	勝者	力押し	佐倉愛里	偶然	普通
394	378	369	346	334	322	309	299	287	278	270	262	255		242	234	225	218	210	202	195	189	181	173

3章、非日常サバイバル

44、誓約

45、チカラ

46、謝罪

47、敵

48、下克上

49、旅行

50、自由

51、結成

52、才能

53、子供

54、陽キャ

55、月見(前半、戸塚視点)

56、石ころ(後半、高円寺視点)

57、危険

58、本物

59、失言

P、神崎隆二

60、宝

61、邪悪

62、策士

63、自然

64、人間(後半、東風谷視点)

65、迷言

66、夢(後半、綾小路視点)

67、幕引き

680

4章、思考しない非日常

68、魔法

691

69、逃げ道

702

70、調整

715

71、意気投合

727

P、一之瀬帆波

737

72、不確定要素

752

73、演技

761

74、共謀

773

75、悪友

785

76、法則

800

77、仕切り役

811

78、指名

824

P、軽井沢恵

837

79、聖人

849

80、気質

861

81、覚醒

871

82、損得

883

83、宴

895

84、サクラ

907

4・5章、日常から見えてくる願い事

85、奇跡（後半、高円寺視点）

921

86、信頼

934

87、命名決闘法案

942

107、	龍虎	121512001189117711671158114411331118110911011088
106、	お礼	
105、	パロディ	
104、	始まり(前半、四方視点)	
103、	主人公	
102、	前夜	
101、	嘘(前半、堀北学視点)	
100、	清楚	
99、	統率者	
98、	目的	
97、	協力	
96、	クロ	
	5章、花道へと繋げる日常	
95、	願い(前半、佐倉視点)	107510621050103610211006992980964953
94、	親友	
93、	分水嶺	
92、	同類	
EX、	小東方高育桜	
91、	前日談	
90、	平穏	
89、	妖怪	
P、	坂柳有栖	
88、	月	

1章、日常の延長

1、高度育成高等学校

キャットルーキーという漫画をご存知だろうか？

全部で3部作のプロ野球の傑作漫画で、以前とある事情でヒキニートをしていた期間のあった俺が読みふけていたお気に入りの一つだった。

その作品の連載中は、漫画やアニメといったものをそれほど見られない境遇だったので、落ち着いた状況になって初めてハマった漫画だった。

1部では雄根・神童といったピッチャー、2部では四方という野手、3部では寅島・三日月のバッテリーが主役になり、2部からは順にトムキャッツに入団してそれぞれのワンシーズンを描いた個人的にはとても面白い作品なのでぜひ人にお勧めしたい。

なぜ冒頭から唐突に漫画作品の宣伝をしだしたのか、察している人も多いかも知れないが、よければ俺の話にしばらくお付き合い願いたい。

前の人生、新卒でブラック企業に入社してしまって約7年。

週半分は深夜どころか会社に泊まりこみになり、もう半分である定時より多少遅れるくらいの日でも食べて寝るだけの生活だった。休日は泥のように眠り、何とか夕方や夜に起き出して洗濯や最低限の掃除をするのが精一杯。

それまで持っていたはずの趣味や交友関係はほぼ消え失せた。と

いか学生時代の友人達や何が好きだったのかすら思い出せなかった。

入社直後からしばらくは毎日のように上司から怒鳴られて凹んだり反論したりしていたが、だんだんと慣れてくると諦めて無反応になつていった。

『辞めよう』と『死のう』とかそんな少しでも前向きな思考は、元氣や氣力といったモノがないと湧いてすらこないことを2年目に知つた。

後は惰性のように、死んだ目で通勤して仕事をしていただけだ。

そして、30歳を目前に控えたある日。

いつもの電車に乗ろうとホームで待っていると、違うホームの発車ベルを聞いた途端に前触れもなく吐いてしまった。何故か体も震えていて、吐瀉物の処理や汚いと思うよりも前に自分でもわけがわからずホームから逃げ出してしまった。

次に気づいたら自宅の玄関に倒れこんでいて、ドアが開けっ放しだったので何とか閉めると、もう限界だったのか立ち上がることも出せずにドアを背にへたり込んで動けなくなっていた。

♪♪♪

どれくらいそうしていたのか自分でもわからないが、スマホの着信音で僅かに正気が戻ってきた。しかし表示される上司の名前に固まってスマホが手から滑り落ち、着信音が止まってもその日に俺が再度動き出すことはなかった。

ちなみに無断欠勤したことに思い至ったのは、手遅れにも程がある次の日の朝である。

そして無断欠勤から数日後。

俺は会社を辞めた。

会社を辞めてからは自堕落に過ごした。

ネットや最近のは微妙に合わないのが多くて古い本ばっか読んでみたり、E10naで無駄にマクロを組んだりして廃人クラスに上り

詰めようとしたり、中古ショップで買った天体望遠鏡で月や星を観察したり、エ○動画を漁っていつの間にか薄くなっていた性欲を復活させようとしたり……。

そして1年が過ぎ、2年が過ぎ、貯金が百万を切った頃。

俺は、この天体観測旅行を最後にいい加減就職しようと思った山で遭難して死んだ。

正直、特に悔いはないが人生は失敗したな。

最後の瞬間に思ったのはそれだけだった。

そんな経験から、ブラツク系だけはなるべく避けるように動くのが俺の基本方針となるのは自然な流れだったのだろう。

左京 夢月（さきよう むつき）。

それが今の俺……僕の名前だ。

僕は創作や二次創作などでいう転生者というものなのだろう。

転生という事象に遭遇したようだというのは、幼少期から理解していた。

なにせ両親が若く、二つ上の兄もまだ同じ家に暮らしていた時点で、生まれ変わったというよりも生まれ直したと早いうちから判断が出来たのだ。

不思議と前の人生の記憶はあるが、学業が多少楽になる程度でたいした影響はなかった。

ただ自分も外見は子供だが子供達に混じって遊ぶのは考えていたよりも苦痛だったのは誤算である。

その苦痛に我慢できなくなり、小学校を卒業した時にこの事を両親

や兄に打ち明けたり、単独行動が多くなってしまうたり、どうしてもか勘が良くなりすぎていて不可思議な経験をしたりもしたのはそのう事情だ。

ただそうした特殊事例以外は、普通に優秀程度の子供時代だったと自分では思う。

とはいえ社会人経験を持つだけに幼少期から小学生までの生活は本当に苦痛でしかなかったので、家族も打ち明ける前から不自然には思っていたかも知れない。

何よりタバコとコーヒーへの制限がもう耐え難かったから、後から自分でも不自然に思えるくらいに子供でも飲めるコーヒーへのこだわりが強くなってしまった。

銘柄を選べないこととドリップコーヒーが自由に作れないのが我慢できず、ある年のお年玉全額をコーヒーセットに費やして後悔していたのは、子供として大層おかしかっただろう。

当然のことながら、タバコは最低でも大学生になるまでリスクを負って隠れて吸うか、我慢するかは二択しかないので、泣く泣く我慢するしかなかった。

中学が上がってからは自由が増えた分いくらかマシになったが、タバコが吸えない問題は後数年は解決しないので、高校はいつそどこかの寮に入って魔が差してタバコを吸わないように物理的に離れる計画を立てたり妄想して誤魔化している自分がいた。

そんな苦痛はありつつも平穏な日々ではあった。

僕の転機は、中学校の修学旅行で京都に行った時の事だ。

その時はそれほどたいした事だと感じていなかったが、後になるほど思い出される印象深くなる出来事だった。

いつものように自由行動になるやいなや、僕は気配を殺して集団からある程度距離をとりダッシュして単独行動の自由を得る。

後で怒られようと、同じ班の奴等に迷惑をかけようとこれを改めるつもりは今のところない。

一応、班の奴等には単独で動く旨は伝えてあるし、問題は少ししか

ないだろう。

そうして一人で京都の洛中をふらふら廻っていると疲れてきた。なので、休もうと観光地から離れた喫茶店をスマホで検索してのんびり向かう……途中で、既視感を覚える占い師っぽい人物を見かけた。

その人は小さな店舗に机や椅子に筒のようなものに棒？が詰まっている道具を設置し、軽く掃除してから店前に看板と料金表を広げていた。

個人的には、占いか信じていないのだが、その人の和服や半分閉じられたような目、尻尾みたいに後ろでくくった髪型、料金表に書かれている『四方 陣一』という名前が気になって仕方なかった。

ヒキニート時代に読んで面白かった漫画の主人公の苗字も四方だったし、容姿もなんだか似てる気がする。

折角の不思議な縁、ここで見るだけってのもアレだし、一度占体験してみようと思いい立ち、僕にしては珍しく他人に興味を湧いたのも手伝って、試しに進路でも占ってもらおう事にしたのを覚えている。「すいません。この料金表の通常コースで占ってもらいたいんですが」

「おや？ 学生さんかい？」

「はい」

「ああ。修学旅行のシーズンだからなあ。でも、うちみたいな所に来る学生さんは珍しい」

四方さんは、僕がイメージしていた占い師とは少し違っていた。

なんとというか気さくというか話しやすいというかで、話しかける直前にふっと浮かんだ浮世離れしててズバズバ内心を当ててきたり不安を煽ってくるような言動はなかったのだ。

だから口下手気味な僕も話しやすく「進路についてです。お願いします」というだけでよかった。

「おまえさんには3つの道があるようだ。

赤の道は、北に進むことで巻き込まれる。

青の道は、動かない事で進んでいく。

緑の道は、東へ薦められる事で始まる。

まあ易ではこう出たが、参考程度にして信じすぎないように「他にもちよいちよい話したりしたが、本題の進路についてはいまいちわからない赤青緑の三色の道だった。

四方さんによると、占い（彼は易と言っていた）にははつきりわかる言葉はあえて使わないとのこと。

当たってるかどうかは置いておいて、赤と緑はまだよくわからないが、青の道は前の人生に近いブラック企業くヒキニートく死亡ルートのような確信めいたものを感じる。

そうなるとう然青の道だけはない。

前々から、何故か地元で進学すればまずいような気がしていたが、この占いは最後の一押しをしてくれた。いつそ外れていてもかまわないから、地元以外への進路に絞ろうと思う。

僕は四方さんにお礼を言うと近くの蕎麦屋に入り、昼食を食べながら思索に耽った。

まず赤の道は、岐阜（陶芸）・長野（機械）・山梨（宝飾）の三県にあるそれぞれの職人・技術者への進路を指していると思われる。

将来の一人暮らしと自分の手札を考えて、若年でも大丈夫な何らかの職人が技術者を希望していたが、巻き込まれるものにもよるが危ない事は勿論、ブラック部活やブラックバイト等の仕事に関係する場合、精神を病む事が早まわしにされることを考えざるをえない。

最後の緑の道は、先日進路相談で挑戦してみないかと学年主任から言われた『高度育成高等学校』ではないかと思う。

進路の候補は他にもあったが、薦められた高校で僕の希望がある程度叶う地元ではない寮制度がある高校というのはここ以外はなかった。

ただ完全入寮制で、入学から卒業まで外部と完全遮断。

先生に聞いたり、ネットで情報を漁ってもほとんど出てこない秘匿性。

僅かに出ている情報は、進学率100%とか他にも胡散臭いを通り越してありえないデマとしか思えない情報のみ。

こちらはこちらでヤバそうな匂いがぷんぷんしている。

特に都合の良い情報しか出さずに、外部との連絡を遮断するあたりにブラック企業のやり方を連想してしまう。

そこで決断の決め手（四方さんの占いを100%信じるわけではないが）になったのは、赤の道の『巻き込まれる』に対して、緑の道の『始まる』というワードである。

青の道も含めて、どうせ全て嫌な予感があれど未知なら、深く考えずに印象が一番マシなところでファイナルアンサーしてもいいんではなからうか？

僕は進路という重要でありながらめんどくさい問題をとりあえず半分占い、半分勘に委ねることにしたのだ。

こうした経緯で約半年後、僕は高度育成高等学校へ入学することにしたのである。

高度育成高等学校への入学の前日に泊まっていた近くのビジネスホテルから、かなり余裕を持って出発した。

地元が名古屋な為、前日には現地近辺にいる必要があったからだ。大都会のど真ん中にあるのだから、遠方の生徒に対する配慮もほしい

ものである。

ホテルが駅前でしかとれなかったもので、そこからはバスで高度育成高等学校前という停車場で降りるらしい。

混むのが嫌だった僕は8：00の便で行こうとバスを待っていた。

ちなみに学校初日の指定登校時刻は9時で、僕の泊まったホテル最寄駅からは約20分程とのことだ。なので、15分おきに出ているバスの最終便2本前ならそれほど込まないだろうという計算である。

バスの座席に滑り込み、あと3年は見れなくなりそうな景色を窓越しに眺めていると、やはり見えなくていいものがちらちらと視界に入る。

務めて無視するようにしてはいるが、あまり見えて気分がいいものでもないことがほとんどなので車内側に視線を動かす。

車内は混むのが嫌だった僕と似たような考えなのか同じ制服を着た者達もちらほらいるが、一般の客含めても立っているのはほんの数人だ。

この時間でこの人数ということは、これ以上出発を遅らせていたらぎゅうぎゅう詰めの中車で娑婆での最後の時を過ごす事になっていたかもしれないと思わず少しほっとした。

立つのくらは問題ないが、満員状態は僕の問題に多大なダメージを与えてくる。

避けられるなら避けたほうが無難だろう。

と、その時だ。

近くに立っていた僕と同じ制服の男子が少しふらついた。バスの揺れが原因ではなさそうなのが顔色から判断できたので、席を譲ることにした。

満員状態でさえなければ立つのに否やはない。

「気分悪そうだし、よかつたらどうぞ」

ふらついていた男子にそう声をかけ、気を使わせないように少し離れたところまで進んで手すりに掴まる。

前の座席に座っていた大柄なハゲ……スキンヘッドの奴も腰を浮かせていたので、僕が動く必要はなかったかと思いつつも、視線を

外に戻しておとなしく到着を待つことにした。

およそ15分後、料金を支払ってバスを降り、これから通うというか住むことになる高度育成高等学校を見回してみる。

最初にクラス表を見て自分のクラスへ行けることが学校案内にあったので、とりあえず置かれていた案内の矢印に従ってそこに向かうことにした。

「お〜い」

門をくぐってすぐにあった警備室っぽい場所の物々しさにビクツとはしたが、自分に問題はないはずであるため気にしないことにする。

少し早足になってしまったのは職質とかが怖かったから仕方ないのだ。

「お〜い、って!」

門から少し進んだところ、なにやら肩を叩かれ、声をかけられた。

「ん?」

振り返ってみると、同じ制服の男子二人。

片方はバスで見かけた気がする大柄なハg……スキンヘッドでもう片方は特に印象に残らない感じの奴。

なにか僕が忘れ物か落とし物でもしたのを届けたりとかいう話だろうか?

「えっと、何でしょう?」

スキンヘッドの存在感におもわず敬語になってしまったが、たぶんというか確実に同級生だよな。僕と同じ学園外から来たわけだし……。

「あゝ、やっと追いついた。バス降りてから呼んでたのに、振り向きもせずスタスタ行くし」

「ああ、ごめん。一応、声は聞こえてたけど自分だと思ってなかったわ」

「まあいいか。さっきはありがとな」

「?」

何故か印象薄い奴に礼を言われた。

「いや、バスで席を譲っただろう」

不思議そうな顔だったのか、スキンヘッドが気づいてフォローしてくれてようやく思い出した。

「重ねてごめん。気にしてなかった」

「謝らなつて！ 座って休んだら気分良くなったし、ホント助かった」
「良かったよ。初日から不調だと大変そうだな。今は…大丈夫そうだな」

少し話した結果、クラス表と一緒に見に行こうと誘われ、自己紹介することになった。

「僕は左京夢月」

「俺は戸塚弥彦だ。よろしくな！」

「葛城康平という。こんななりだが、同級生なので敬語は必要ない」
彼ら二人はそれぞれ薄い奴が戸塚弥彦、スキンヘッドが葛城康平と名乗った。

戸塚はともかく。葛城は…苦勞してそうだ。

僕も思わず敬語使っちゃってたけど、長い付き合いっぽい戸塚との初対面時はどうだったんだろう？

葛城の自己紹介の一言に、内心勝手に悲哀と諦めを感じてしまいながらも、僕たちは雑談しながらクラス表まで向かうのだった。

何気に、勝手に長い付き合いかと思いついて葛城と戸塚もあのバスが初対面だと聞いた時は意外すぎて、思わず「何でそんな馴染んだんの？」と聞いてしまった。

二人とクラス表のところまでたどり着くと、直ぐに葛城と戸塚はAクラス、僕はBクラスに名前が見つかった。

ここら辺は特に思うこともなく、別れ道で二人と「んじゃあ、またな」と声をかけ合ってから、再び一人に戻って歩を進める。

だいぶ時間に余裕が出来ように登校したが、それでも結構な数の生徒が既に居ることに驚きながら、1年の4クラスを通り過ぎ、2・3年生の区画に軽く寄り道して教室内の誰かに目を向けられたら移動

をする。

移動教室で使いそうな部屋や非常口の位置を早いうちから把握しておくその後から楽が出来るので、時間が空いた時に生活空間の把握するのは昔からの僕の癖なのだ。

まあ、理科室や視聴覚室などは別の棟にあるのかまたの機会になりそうだけでも。

そんな感じでふらふら練り歩いていたら登校時刻の10分前になったので、Bクラスへ向かう。

向かう途中にAクラスがあつたので覗いてみると、既に葛城がリーダーみたいな感じで中心に立ちつつなんか言ってる不思議と笑えてきたが、彼は学級委員にでもなるつもりなのだろうか。想像したら、意外としつくり来て笑いは収まった。

予定時刻の5分前くらいに、Bクラスに着いた。

もうほとんどの生徒が登校していて、おかげで空いている席が自分のだとわかりやすくなっていた。

教室前に貼ってあつた座席表からすると、僕の席はあの緑髪の女子の後ろのようだ。

教室真ん中らへんの後方。

まあ悪くないポジションなんじゃなからうか。目立たない位置ゆえに逆に教師からの注目もありそうなので個人的には微妙な位置といえなくはないが、最前列や人気者の近くでなければ最悪どこでもいい。とりあえず静かにしていることにしよう。

しかし思考を割かれてしまう事柄もまた存在する。

それは残りの待ち時間で、緑髪の後ろ頭を眺めていると沸いてくる、とても今更ながら前の人生で通った学校との違いだ。

具体的には。

他の奴等、髪色冒険しすぎじゃね!?

なんでこんな脱色にしてもおかしい髪色があふれてんの!?

生物学的に、薄いピンク髪はまだしも緑とか紫とかありえないんじゃないね!?

派手に染めてんのか!? あんな真面目そうなのに!?

僕は内心でそのように混乱しながら、前の席の緑髪や教室前方にいるピンク髪、ふらふら歩いてた時に見かけた他所のクラスだろう紫や真ピンクの髪に、異次元に来てしまったかのような心細さを感じていた。

2、邂逅

派手な髪色を眺めているうちに時間がたつていたのか最初の交流時間をガン無視してしまっていることに気づくと同時に始業を告げるチャイムが鳴り、スーツ姿でウェーブのかかったセミロングの女性が教室に入ってくる。

おそらくはこのクラスの担任なのだろう。見た目の印象としては、話しかけるのに勇気を要するような美人である。

「新入生のみんな、はじめまして！ 私はBクラス担任の星之宮知恵です。

保険医だから、みんなと直接関わることはホームルームくらいしかないけどよろしくね！

あ、初めに言っておくけど、この学校には学年ごとのクラス替えは存在しないよ。これから三年間一緒に過ごすことになるから仲良くしてね！」

ふむ。

まず体調が悪くても限界まで我慢することが今決まった。体調が悪いときに、勇気を振り絞るようなことはなるべく避けたい。

しかし僕の内心は置いておくと、担任の第一声や笑顔はクラスメイト達に好印象を与えたようで、彼女への好意的なささやきが聞こえてくる。

男子からは勿論、女子からもなので自己紹介などの機会があれば彼女を見習ってせめて笑顔は心がけよう。

「今から一時間後に、体育館で入学式が行われます。それまではこの学校のルールについて説明するよ。まずは資料を配るから前の人は後ろに回してね」

前の緑髪が振り向いて僕にも資料が回ってくる。一セット抜き出して、最後尾にまわす。配られた資料には、寮での学校生活の義務化や肉親であつても外部との連絡を一切禁止すると書かれており、以前貰った入学案内と全く同じだった。

僕は確認のため担任の話を一応聞きつつ、資料を流し読んでいく。許可なく学校の敷地から出ることも禁じられているが、高校生に必要なものは数多くある施設で揃えられるようだ。

カラオケやボーリングなどが入ったアミューズメントセンターといった娯楽施設やスーパード・コンビニはおろか、ショッピングモールまであるため、学外と同じ生活ができる。個人的なものとしては、場所が都会であるため懸念していた大き目の公園や天体観測が出来るようなスポットもあるようなので一応ホツとした。

「次に今から配る学生証カードについて説明するね。これを使えば、施設内にある全ての施設を利用したり、お店とかで商品の購入が出来るよ。ただ、使うたびに所持ポイントを使うから使い過ぎに注意してね。」

基本的に学校内ではこのポイントを使って買えないものではなくて、学校の敷地内にあるものなら、何でも購入可能だよ」

僕が知らなかっただけで、学生証兼電子マネーはキャッシュレス決済の進んでいる場所では珍しくないのかもしれない。

前の時はこんなシステムの学校は聞いたこともなかったが、ここは政府が管理している学校ともはや街と呼んでも過言ではない広さの敷地だ。

キャッシュレスを進めると共に、紙幣や硬貨を持たせないことで、起きるだろう金銭のトラブルの可能性を低下させたり、金銭感覚が壊れていないかチェックしたりするのだろう。

「施設では機械にこの学生証を通すか、提示すると使用できるよ。ピッてするだけだから簡単！ それからポイントは毎月初めに自動的に振り込まれることになっているから計画的に使ってね」

使い方は、Suicaやmanaのようなイメージでいいのだろうか。

振込みがされるということは、逆に生徒や先生相手に振り込んだりもできるとも取れる。

もしこの推測があっているなら、商売や交渉などもすることになる可能性があるのです、一通り使い方は調べておいた方がいいだろう。

「確認してもらったらわかるけど、みんなに平等に10万ポイントが支給されてるよ。1ポイントにつき1円の価値があるから、10万円持ってるのと同じだね」

教室の中がザワついていているが、とりあえず確認してみると10万の数字の横にPPとあった。これが僕の今使えるポイントなのだろう。

画面の右下に残高照会・購入履歴などのアイコンがあったので、一応そこも押して確認してみる。

すると、購入履歴は当然のことながら真っ白だが、残高照会を開いてみると10万PPの横に1000CPという数字があった。

「ポイントの支給額の多さに驚いた？」

この学校は実力で生徒を測るから、この学校に入学できた皆には、それだけの可能性と価値があるってことなんだよ。そのことに対する評価だからポイントは遠慮なく使っていていいよ。

あと、このポイントは卒業後に学校側が全て回収することになっているから、ポイントを現金化することはできないことになってるんだけど、譲渡に関しては自由だから、卒業前くらいに誰かに渡すとか工夫してね。あ、でも無理矢理カツアゲとかはしちや駄目だからね。学校はいじめ問題とかにも結構敏感だからね」

どうやら担任からの説明はこれで終わりのようだが、質問はないかと見渡しているのだろう。

初っ端からあんな美人に質問するのは、正直ものすごく嫌ではあるのだが質問と疑問があったので手を上げざるを得ない。

「先生、質問いいでしょうか？」

「お？ 勿論だよ！ 何でも聞いてね！」

溢れる陽キャっぽいパワーに押されながらも、勇気を振り絞って質問する。

ついでに初対面のクラスメイト達の前だったと見られながら後悔したが、後で先生を追いかけて一人で質問するよりはマシだと自分に言い聞かせながら何とか口を開く。

「えっと、2点ほど質問と疑問が。」

まず質問なんですが、アルバイトの許可や申請ってどう感じるな

んでしよう?」

高校に入学したらバイトをやるうとしていたが、入学前からわかる特殊な学校ゆえに最初に聞く質問はこれしかなかった。

きつと他にも聞く奴がいると思っていたのにいなかった為、自分で聞くしかないと思ってしまったのだ。

「アルバイト? 10万ポイントでは足りないのかな?」

「いえ、そういうわけではなく高校生になったらバイトしようと考えていたので」

「……なるほどね! でもあんまりうちの学校でアルバイトって聞かないなあ。でも確か職員室の近くの事務室で申請書はもらえたとおもうよ」

なんか一瞬形容しがたい表情になったけど、気のせいかもしれないし、そつとしまつておこう。

「それで、もうひとつの疑問はなにかな?」

なんか雰囲気がおかしいような気がするも、ここでやっぱなしとかいえないし、そもそも聞いておかないと変な時に気になってしまいそうだ。

「もうひとつは、ポイントの残高照会ページにある1000CPという項目です。」

10万PPの方はさつき先生が言っていたお金……電子マネーだとわかるんですが、こっちのCPの説明はなかったと思うのでちよつと気になってしまっただけです。

もし僕が説明を聞き逃していたらすいません」

「うくん、答えてあげたいけど、学校の規則で今は答えてあげられないんだ。ごめんね」

「あつと、了解です。ありがとうございます」

ふうふう。得られた答えは微妙だったけど、最初は何とか乗り越えられた。

担任は僕から視線を外し、他の質問がないかと見回したがなさそうと判断したのか最後に「他には質問ないみたいだね。じゃあ良いスクールライフを!」といって入学式の準備のために去っていった。

……去り際、前方の誰かと僕の方を一瞥して、嫌な予感を増幅させていった事さえなければ良さそうな先生だと思えたかもしれない。

担任が出て行つて数秒後。

既に仲良くなつていたコミュカの高そうなクラスメイト達は、近くの席で集まって買い物に遊びにと、とても楽しそうにお喋りしている。

一人の者も何人かはいるが考え込んだり妄想したりボーとしたりで特に苦はなさそうである。

唯一となつてしまつた先ほどの時間の質問者である僕を見てくる者もいるが、僕自身一人でいても苦ではないタイプであるので話しかけてこない限りは別に注目を浴びようとたいした問題にはならない。視線は気にせずバイトの事を考えていると、前方の席にいた薄ピンク髪がガタツと立ち上がつて振り返つた。

「はい！ みんな、注目！」

振り返つた顔は陽キャの頂点とでもいうべき美少女で、愛嬌ある雰囲気もあいまつて人気者になるだろうなと素直に思える。こうして大勢の前で注目を集めるのだから、度胸やカリスマにも溢れているだろう。

……天は2物を与えるのは渋りまくるのに、3物・4物を与えられる者が時々いるのはなにゆえなのだろうか？

僕がそんな呪いに似た内心をしているとも知らずに、彼女は自分に注目が集まつていることを見回してから確認すると口を開いた。

「入学式までまだ結構時間があるし、今から自己紹介しない？ 縁あつて3年間一緒のクラスメイトになつたし、早く仲良くなりたくなつて」

「さんせ〜」

薄ピンク髪の近くにいたこれまた陽キャ感漂うイケメンが賛成し、教室の雰囲気は自己紹介へと流れていった。

「じゃあ、言いだしっぺの私から自己紹介するね！」

一之瀬帆波っつていいます！ みんなと早く仲良くなりたから後で遊びに行ったり連絡先交換したりしよう！ 3年間よろしくね！」薄ピンク髪改め一之瀬は、先ほどの担任から薫陶を受けた者かのごとき笑顔と口上だった。スタンディングオーバーションもかくやといった拍手と「よろしく」返しに、極まった陽キャは凄まじいと認識した。

その後も、いち早く自己紹介に賛成の意を示したイケメン柴田や、出会ったばかりだろうになんだか一之瀬を見る目つきが怪しい白波（女子）、落ち着いた雰囲気だが何故か僕を見てきたりする神埼。

次々に進んでいく自己紹介だったが、人を覚えるのが苦手な僕は苦戦していた。

何とか特徴や雰囲気をつかえて覚えようと四苦八苦している僕に気づいたのか、はたまたただの偶然か、一之瀬は僕含めた前後の席が最後になるように調整している感じだった。

そしてついに前の席、緑髪の女子の番が回ってきた時には全員を覚えるのを諦めて、一応聞いているだけの状態になっていた。

「東風谷早苗（こちや さなえ）です。」

家でもある守矢神社で風祝をやっています。守谷の神様を信仰すれば奇跡がおこせるので、少しでも興味があれば私の所までお願いします」

緑髪改め東風谷は、テンション低下デバフにでもかかっているかのようにならりと立ち上がり淡々と自己紹介というか実家と思われる神社の宣伝をして肅々と座った。

誰もがどう反応すればよいのか迷子になる中、僕は直後ではあつてもトリではない、不幸中の幸いだと無理やり幸運に感謝することで現実から逃げようとしていた。

まあ一瞬、雰囲気釣られて窮地に陥ったかに思ってしまった僕だったが、冷静に考えればたかが自己紹介である。

失敗したところで、東風谷ほどの和気藹々ブレイクは起こせまい。

それに一之瀬や陽キャ軍団がフォローして僕や後ろの奴が終わった頃には、また雰囲気軌道修正がなされていることだろう。

自分の分はささっと片付けて時間が解決するのを待つに限る。

そう考えが至れば、普通に立ち上がり口を開けた。

「左京夢月です。」

趣味は昼は日向ぼっこ、夜は天体観測です。また雨の日などは読書をすることもあるのでそちらも趣味といえれば趣味かもしれません。また僕への注意点として、話しかけたら逃げる事があるかもしれませんが嫌っている場合はほぼないので懲りずに接触を図っていただけたらなと思う次第です。それでは皆様、よろしくお願いします」

最後にペこりと頭を下げ、着席する。

相変わらず空気は死んでいるが、名前と趣味を公開し、自分への取り扱い注意点まで添えた完璧な自己紹介であると自画自賛したい。

残念ながら、担任や一之瀬っぽい笑顔は無理だったが、口上は勝るとも劣らぬ名セリフに聞こえたに違いあるまい。

しかし、トリを務める奴にはプレッシャーになってしまったかもしれない。すまん。

と、内心調子に乗りまくっていると、後ろの席から立ち上がる音が聞こえたので軽く振り返る。

寝ぼけ目、後ろで尻尾のように括った髪、170センチの僕よりかなり小さい身長。

なんだか凄く既視感を覚える外見だ。

具体的には去年京都で見かけたおっさんよりも彼は……。

「四方二三矢（しつぽう ふみや）といいます。」

趣味は特にありません。よろしくお願いします」

「四方？」

「ん？ ああ、そうだけど。俺のこと知ってるの？」

僕は短く自己紹介して即座に着席した四方に、つい声をかけていた。

「マジで!? もしかしてただけど出身って京都だったりしないか？」

「え、ホントに知り合いだったけ？」

「あ、ごめん。去年に『四方』って苗字の人に京都で占ってもらったことがあってさ。その人と話さなかったら、この学校来てたかわからなかったから、凄い偶然もあるものだって興奮しすぎた」

「へえ。それたぶん親父だと思う。京都駅近くじゃないか？」

「そうそう。名前はうろ覚えだけどたしか四方陣一、だったような……」

「親父だ。よく話しかけたなあ。中学生が占って貰うにはハードル高くなかったか？」

「うくん、僕は勘で動いてることが多々あるから、あんまり人を気にしてない時があるらしい。中学で時々指摘されただけで自覚はないんだけどな」

「うんまあ、今の状況を見るとそれは正しそうだ」
「え？」

四方が手で前を見てみるという風にするので、向き直ってみると教室内の空気はいまだに凍っていた。

東風谷が巻き起こしたブリザードの持続時間は意外と長いらしい。

確かにこの状況では話をするには向いていないのかもしれない。

僕は教室内を見渡し意味もないうなずいてから、一旦仕切りなおしをしようと四方に提案し何故か苦笑を浮かべながら了承されたのだった。

3、キヤットルーキー

四方で全員の自己紹介が終わり、局地的で一時的な氷河期が来ていたが我らがBクラスの一之瀬はめげなかった。東風谷さん、左京君、四方君ありがとう、とまとめて拍手してフォローしてくれたのだ。

すると自己紹介初期の頃の空気感に解凍されて雪解けが訪れたのだ。

一之瀬以外にも、ぱらぱらと申し訳程度に拍手や「よろしく」コールを贈られ、僕は満足だった。

これからクラスを中心は彼女になるかもしれないと思わせる一幕でもあったので、心の中で一之瀬のことは女神と呼称することにした。

そんなこともありつつ、和気藹々とした雰囲気のまま入学式に出席し、この後はクラスみんなで歓迎会をやろうと盛り上がっていたが、残念なことにバイトについて聞きに行く用事があったため一人別れて事務室へ向かうことにした。

四方には、今日は色々忙しいので明日以降にゆっくり話そうと約束してあるので、バイト関係と荷解き、買出しはできれば今日中に終わらせたい。

今は好きだった漫画そのままの『主人公』が目の前に現れたことで少し動転しているような気もするが、それもやることをこなしていくうちに収まるだろう。

事務員に聞いてみたところバイトをするために必要なことは、まず事務室でバイトの申請書と許可証(あわせて2000PP)を購入し、許可証を希望バイト先に提示することで僕は履歴書と申請書の記入欄を、バイト先が申請書の残りの必要事項を記入してくれるシステムらしい。

最後は事務室に提出と、写しをとって生徒会に提出すれば完了とのことだ。

何故生徒会への提出義務があるのかはわからないが、特殊すぎる学校なだけに新入生にはわからない事情でもあるのだろう。

もらった2枚の必要書類をクリアファイルに入れて鞆にしまい、買出しとバイト先探しを目的にまずはショッピングモールやスーパーがある方へと行くことに決めた。

だが、地図で見るとショッピングモールとスーパーは反対方向とまでいわずともかなり離れていたもので、まずはスーパー近辺で消耗品や食料品の買出しを済ませてから寮まで行って、荷解きと生活周りを整えることを今日の目的に設定した。

スーパーでは、念のためバイトを募集していないか確認したがどうやらしていないようだ。

ついでに買出し途中、これまでにスーパーなどでは見たことがないコーナーがあった。

なんと無料コーナーである。

初めて目に入った時は、目を疑ってしまった。

質が極端に悪いのかと思って何種類か確認したが、普通の商品だった。採算とかどうなってるんだろうと思ってしまう。

店員を捕まえて聞いてみたが、この学園の救済措置と言っていた。そんなに無駄遣いする奴が多いのか、10万貰えるのは最初だけなのか、それとも罰金系の何かがあつていくらポイントがあつても足りないのか、他の何らかの理由か。

凡人である僕の頭ではいくら考えても答えは出せないだろう。

しかしクラスメイトの四方が、キャットルーキー原作の四方であれば頭脳明晰だろうから情報さえまともに渡せば代わりに答えを出してもらえるかもしれない。

そんな考えが頭をよぎるが、いくら同姓同名で似ていようと、現実世界に漫画の登場人物がいるわけがない。まして、あの漫画は時代設定すらかなり前の話だ。スマホどころか携帯電話さえ大多数が持っていないかった頃のはず。

しかし仮に僕がキャットルーキーの世界にいたとかそういう系の創作的展開であつたとしたら、時代が違う上に僕という異分子が存

在する以上様々な齟齬は出てくるから、四方がプロ野球選手にならないIFもありえたりするのだろうか？

確か四方二三矢のトムキャッツ入団は、高校卒業してしばらく親父の手伝い。その最中に、1部・雄根小太郎の電波ジャックからのリーグ優勝を見たことが切欠だったはずだ。雄根は四方の2〜3歳上くらいで、時系列も似ているなら現時点では高校3年生か入団直後。そして電波ジャックと1部は、雄根の入団2年目か3年目。

……今の時代で、電波ジャックなんて事がプロ野球選手とはいえ一個人に可能なんだろうか？

僕は頭を振って、考えても仕方ない不安をやるべきことに紛れさせる。

考えても仕方ないことは、さっさと切り替えてしまう方が精神衛生上、一番いいと思っっているのだ。

事務室での待ち時間で書き出しておいた買出しメモを見ながら、無心で物資を買い込み寮へと急いだ。

寮の自室には入学案内のとおり荷物が届いていたので、まずミニ冷蔵庫に電源をつないで買ってきた食料品を詰めていく。

普段使いの道具もそれぞれでまとめて風呂や台所、物置なんかに放り込んでいく。

布団とちゃぶ台を荷解きしたら端に寄せて、座布団を3枚重ねて布団の上に。

慣れているのでささっと荷解きが片付いた。

落ち着いてきたので、お茶を飲むために湯を沸かして、水筒を軽く水洗い。

急須へ茶葉を入れて準備しつつ、ついでにダッチコーヒーの仕込みもしておく。

お茶を一杯飲んで人心地いたら、いつの間にか夕方になっていた。

残りの湯でお茶を出し、水筒に入れて肩から提げる。

仕込んでおいたダッチコーヒーを冷蔵庫に保管したら、鍵と学生

証、スケッチブックと鉛筆だけ持って出かけることにした。

思考整理の為の外出なのでシヨツピングモールへは行かず、適当な広場を見つけてそこで絵を描き始める。

そうしていると、先ほど紛れさせておいた不安が顔を出してくるが、一旦時間を置いたことで今の僕は気分は変わっている。

なので、解決策というよりも「どうにかなるさ」みたいに考えることができた。

……うん。

バイト探しはともかく、キャットルーキー関連はもうある程度適当でいいや。

万が一、ホントにキャットルーキーの世界にいるかもしれないから、とにかく1年生の体育祭で四方が活躍することと、野球部にスカウトされて入部するか迷うようならなるべく後押しするようにすればOKだろう。

考えてみれば高校時代なんて、原作の四方にとっては前日談みたいなモノだし、僕としても好きな漫画の主人公に似てるか本人と、同級生で友達になれるんだから悩む必要も問題もなかったわ。

電波ジャックとかも何とかなるかもしれないし、そもそも雄根がいるかもわからない時点ではどうしようもない。

なら残るのは、縁があつた四方をキャットルーキー関係なく手助けしつつ、ついでにこつちも助けてもらう的な友達になる方向性だけである。

考えがまとまった後は、気ままに絵を描いて、腹が減ったら焼肉屋で入学祝のつもりで一人焼肉を楽しんだ。

朝といえばコーヒー。

コーヒーといえば、ブルマンNO. 1。

これは多少値が張ろうとも譲れない僕の至高の習慣である。

幼少期にコーヒーセットを買ったのを始まりとし、現在まで続く月に最低4000円を払い続けた意思と拘り。外界と隔離されようと、円がポイントになろうと、朝のブルマンNO. 1と夜の川根茶それぞれ一杯は変わらない。変えさせない。

直近の最優先目的は、ショッピングモールあたりでコーヒー専門店・日本茶専門店を発見することである。

外から持ち込めた分量はおそらく2ヶ月分程度、節約して使えば3ヶ月、お茶に関してだけなら出がらしで我慢しても半年持たないくらい。それを超えた時に店を見つけていなければ、物理的に飲めなくなってしまう。

そのような許せぬ事態に陥らないためには、店自体も探す必要はあるがポイントの確保手段を増やしておくことも必要だろう。

月初めの支給日だけでなく、バイトなどでの別の入手経路確保は急務だ。

どういうことか『無料』などという明らかにおかしいコーナーがあるスーパーの件や、昨日の担任の答えられない発言から、CPの数字を含めた伏せてある情報も嫌な感じがしている。

正直、10万PPは4月だけで、来月からは何かで稼いでね、的な事を言われているような気がしてならない。

前の人生で、似たようなだまし討ちをする会社に出向した経験から疑心暗鬼になっているだけかもしれないが、僕のブラック企業探知センサーはこういつている。

——ここはクロだ、と。

事情通の誰かの協力を仰げれば、こうした確信に届きうる情報収集の効率アップを望めるかもしれない。

だが、今までに情報を集めたり活用したりしそうな雰囲気があったのは自己紹介をする空気感を作り出したクラスメイトの一之瀬か、昨日少し一緒になった葛城。

四方や戸塚はそういう面では普通の奴な気がしているし、僕の勘も学級委員長的な雰囲気のある二人のどちらかが適任だといっている。

しかし片方は人気者美少女、片方は別クラスの中心で話していた男。どちらも話しかけるハードルは高い。

とりあえず話しかける勇氣と状況が搾り出せれば一之瀬、無理そうなら人が周囲にいない機会を見て（傍にるのが戸塚だけならセーフ）葛城に相談してみる方針でいこう。

勿論、それまでに自力で情報を得られたり店を発見できれば、それに越したことはないわけだが。

次に今の優先度はそれほど高くないが、持ち込めなかった天体望遠鏡。

夜空を見上げるだけならいらぬが、天文部に入部、なければ創部するつもりなので、天体望遠鏡はほしい。

欲を言えば、文化祭展示用にある程度高性能なカメラやスカイセンサー・赤道儀も欲しいが流石に予算が足りないだろう。

僕はモーニングコーヒーを飲み干しながら、バイトとお茶・コーヒーに関する計画と情報をなるべく早く得る決意を新たにした。

ところで決意を新たにした直後、ふと思いついたのだが。

昨日の入学初日にほとんどの時間を一人で過ごした僕は、情報収集などというコミュニケーション能力が要求されるミッションに頭を抱えた。

そして学校のことにして、コーヒーやお茶の店にして、誰かに話を聞くより、いつそ自分の足と偶然に頼る決断へと傾くのは、僕にとってごく自然なことだった。

4、部活動説明会

「おはよっす」

登校2日目。

始業ベルの1分前に自分の席へと滑り込み、四方に声をかけつつ筆記用具などを机に出したりして準備する。そうしていると、すぐに担任が入ってきてホームルームが始まった。

担任が言うには、今日は初日だから授業は昼までで、昼からは部活動説明会があるようだ。

ホームルームが終わって担任が出て行くと、なぜかまた昨日のように神埼という奴がこちらの方を見ているが、すぐに入れ替わりに1限目が始まる為か特に動きは見せない。

意図が見えなくて少し不気味だが、人には色々あると思い、意識から外して授業に集中する。といっても、初日ゆえか簡単な説明や紹介程度だが。

関係ないが、この1分前に来るというのがミソで、こうした時間管理が可能で更に応用できるようになれば、手を抜けるところでは徹底的に手を抜けるようになるのだ。

例えば、授業が始まって、態度を悪くしたり、寝たり、サボったりという手抜き以前の行為はしないし、むしろ授業はかなり真剣に受けている。

これは、ここで勉強することでもうこれ以上はしなくていい、という手抜きなのだ。それは真剣にもなろうというもの。

後ろの四方も基本ノートは取っていない感じだが、真剣に授業を聞いているのは伝わってくる。

こういう必要な時に必要な分だけやるという性質は、今日発見した僕と四方の数少ない共通点で、だからこそ真剣に授業を受けているのがなんとなく肌で感じられるのかもしれない。

意外だったのは前の東風谷で、こちらはノートに何か書き込んでいるがおそらく他所事を考えている。

結構真面目そうな印象を持っていたので不思議ではあるが、緑頭が細かく動いていることから少なくとも集中してないのはすぐわかる。何かあったのだろうか？ と下種な勘繰りを入れて遊ぼうとしたがすぐに飽きて、授業に意識を戻した。

少し違うことは考えたが、基本的には授業に集中していた。

だからその時の僕は、僕を見つめる視線があることに気づいていなかった。

「四方、昼に学食行かないか？」

午前の授業が終了し、部活動説明会を無視するなら帰るだけとなったが、昨日約束した四方との話をしたかった僕は学食に誘ってみた。

「ああ、俺も行ってみようと思ってたからいいよ」

「よっしゃ！ 昨日は用事があつて行けなかったから地味に楽しみなんだよな。ついでにクラスでやった歓迎会の事とかも教えてくれよ」
「わかったよ。でも俺も途中で帰っちゃったから大したことは言えないぞ」

「話の種程度だから、大したことじゃないんだよ」

四方は快く了承してくれて僕らは軽口をたたき合いながら学食へ向かうのだった。

学食では、ここでも存在した『無料』にまたしても嫌な予感を感じさせたが、時々食べていた山菜がメインの定食ということで試しに注文してみた。四方はBLTサンドのセットにしたようだ。

「ここにも無料ってあるんだな」

四方が僕の頼んだ山菜定食を眺めながら複雑そうに零した。

「だよな。まだ学食は無理矢理ないこともないか？ みたいに見えるくもないけど、スープやもしかしたらコンビニにまで無料コーナーあるって、胡散臭すぎてちよっと怖いんだけど」

「タダより高いものはないっていうもんなあ」

「まあ、そのタダ自体はかなり好きな概念なわけだが」

「そりゃあ、大体はそうなんじゃないか？」

やはり四方も疑問に思っていたらしく、無料商品について不審がつているようだ。

山菜定食自体は、山菜を食べ慣れていた僕の味覚もあるかもしれないがご飯に一汁一菜とお茶が付いていて普通においしく、節約したいときや弁当を作るのが面倒な時とかにこれからも重宝しそうだ。

喉に痞えるような無料に対する不安と疑問が解決した暁には、週何食かはお世話になるかもしれない。

ほぼ二人で同時に食べ終わり、ご馳走様と手を合わせる。

いただきますは世界各国に様々な種類や派生型が存在するが、ご馳走様というのは日本と他数国にしか存在しない概念だ。

個人的にこの言葉と習慣は、日本らしさと風流を感じるためには欠かせないことの一つだと思っている。

海外でトラブルシューティングさせられていた遠い過去と、帰国してから最初に日本を感じたご馳走様という言葉と紅葉の赤は生まれ直しても忘れられない記憶だ。

直ぐに思考が脱線するのが僕の悪い癖である。

今は四方が目の前にいるのだからと、遠い記憶を振り払って口を開く。

「そういうえば、四方って部活動説明会は行くの？」

「ん。一応行くつもりではあるけど、どこかに入る気は今のところないかな。左京は？」

「僕は天文部目当て。なかったら創部するしかないから面倒臭さそう」

「創部？ わざわざ部活を作らなくても活動自体はできるんじゃない？」

「うんまあ、活動自体はできるんだけどさ。夜に天体望遠鏡や荷物を持ってうろついていると職質が怖いんだよね。だから部活です！ っていう言い訳がしやすい肩書きがほしいのもあるというか」

「ああ、なるほど。夜が活動のメインだからこその悩みか。」

……でもちよつとそういうの面白そうだな。俺も混ぜてもらって
もいい？」

「勿論。ただ天文部さえあれば創部の苦労はなくなるから、あつてほ
しいなあ」

部活動説明会まで僕たちはそんな感じで駄弁っていた。

そろそろ時間になってきたので、四方と食堂を出る。

体育館に向かいながら、四方から昨日の歓迎会では盛り上がりついで
た話を聞いた。何でもクラスほとんどが参加したボーリング大会の
ようなものにまで発展したらしい。

四方自身は2ゲームだけ参加して途中から買出しに行ったとのこ
とでそれ以降は知らないらしいが、一之瀬が初対面同士のクラスメイ
ト達とは思えないぐらいにまとめていたから、雰囲気は良くて楽し
かったと言っていた。

そんな感じに体育館まで行くと、既に結構な数の生徒が集まってい
た。

人ごみとか満員状態が嫌いな僕は、空いている空間がないかさつと
周りを見渡し、ぽつかりと開けている空間を見つけるとそこへと進む
べく四方へ声をかけた。

「四方、あそこが空いている。すまんが、人ごみが苦手なので早めに移
動したい」

「……やっぱりお前すごいな」

四方がなぜか呆れ混じりに僕を褒めてきたが、それよりも優先すべ
きは広い空間への移動である。

見覚えある緑髪の東風谷が台風の目になっているかのように空白
が出来ていたので、何とかそこに滑り込んだ。四方も後からゆっくり
着いて来て、やっと一息つくことが出来た。

「東風谷……でいいか。僕は左京、んでこっちは四方で、一応クラスメ
イトになる。僕達は説明会終わるくらいまで近くにいるかもしれない

いが、害はないと思うんで気にしないでくれ」
「はあ」

一応、空白の中心でうつむいて佇んでいるクラスメイトに声をかけ、自分と四方の名前を名乗ってここにいる許可をもらおう。

こちらをチラツツと見てため息のような返事があったただけだが、これで説明会の間はここにいっても不自然ではないだろう。

微妙に周囲からの視線は感じるが、僕は集団に混ざって満員状態になるぐらいなら客寄せパンダのごとき道化になるのも辞さない。

少なからず注目を集めてしまいでいいので四方には悪いと思うが、東風谷の作り出した空白はたぶんワルイモノが原因ではない。

そりゃあ、ちよつかいかければ反撃というか苛烈なナニカが返ってきそうではあるが、僕は生まれ直してからこうした不可思議な出来事を何度か体験してきた。

その経験からすると、東風谷が纏っている空気は大分濁っている気はするが、追いまわしたり危害を加えようとしてくるお化け側ではなく、神社仏閣などに逃げ込むと追われないように守ってくれる神様のなそれだ。

東風谷本人が、神様やお化けと関係あるのかはわからないが、こうして一時、空間の間借りをするぐらいは許してもらえらるだろう。

「なあ、ここなんか変じゃないか？ 寒いというか圧迫感を感じるというか」

僕が神様っぽい存在への最低限の礼は尽くしたと安心していると、四方がそんなことを言い出した。

そういえば四方は陰陽師・阿部清明の子孫だったかで霊感的なモノを持ってて、幽霊系のエピソードもあったっけ、と思い出しながら僕は答える。

「うん。四方の気のせいだ」

「いやいや！ 左京、それは気づいてるけど面倒だからテキトーでいいやって反応だろー！」

「おお。こんなに早く僕を看破されるとは」

「はあ、もういい。こんなところで言い争うのは東風谷さんに悪いかも

だし、説明会も聞き逃しそうだもんな」

「そうそう、今重要なのは空いた場所でゆっくり聞ける事。それ以外はテキストでいいって、たぶん」

「……知り合ってそう経たないけど、左京がのんきで適当なのは理解したよ」

「……………はあ」

四方だけでなく、俯いていた東風谷からも呆れたように見られた僕は反論しようと口を開いた。

「いや色々『1年生の皆さんお待ちせしました。これより部活動説明会を行います。私はこの説明会で司会進行を務める生徒会書記の橘と言います。本日はよろしくお願ひします』……もうそれでいいや」

口を開いた瞬間に説明会が始まってしまったので、四方や東風谷の視線とかどうでも良くなり目的を天文部を探すことにチェンジする。

橘と名乗った女子の司会が部活名と役職、名前を言う度に、体育館の舞台上にそれぞれの部活の部長かそれに準ずる人が並んでいく。

一人ずつアピールしていくのだろうが、思ったよりも数が少ないことに不安が募る。

サッカー、バスケ、野球、バトミントン、ラクロス、テニス等々。体育会系・スポーツ系で有名どころの部活は大体揃っていたと思う。

野球があったのは四方のあるかもしれない未来図からは外せないものであって良かったと安心した。

だがしかし、だ。

反面、文化系の部活はかなり少ない種類しか紹介されなかった。

美術部や吹奏楽、科学部に茶道部などのメジャーなものは一応ある。変り種としてはボードゲーム部や経済学研究会などもあるが、電脳系や趣味を発展させたタイプの部活はあまりなかった。

個人的にあると思っていたのになかったのは、文芸部や模型部にパソコン部、そして……天文部だ。

そう、天文部はなかった。

つまり作るしかないということだ。

このポイントという特殊な制度と敷地を持つ高校で、バイトを探し

ながら、創部手続きは勿論、掛け持ちでもいいから顧問になってくれる先生への交渉や部員集めの場合によっては必要かもしれない。

何よりないと何も始まらない天体望遠鏡は必須のものに昇格した為、ポイント入手はさらに急務となった。部員集めにも先生との交渉にも、せめて最低限の道具を揃えておくことは説得力が違ってくる。

また行動の早さも重要だ。

いくら広い敷地とはいえ天体観測できるスポットはそれほど多くない。

そこを何らかの集団に先にとられたら目も当てられない。定期的に観測スポットを回するためには出来る限り押さえておきたいのだ。

特に補導確率がほぼ0といってもいい学校屋上の使用許可は、創部ができなかつたとしても、大金（大量か？）のポイント使用が必要だとしてもどうしてもほしい。

大きく動くことは、頭も殊更良くなく、仲間作りが苦手気味な僕では思っているところでも思わぬところでも躓くかもしれない。四方は助けてくれるかもしれないが、できたばかりの友達を早々に面倒事に巻き込むつもりはない。

しかし問題や疑問が入学以来増え続けているが、やることはやっと思えてきた。

- 1、アルバイト先、またはポイントの入手先を見つける
 - 2、コーヒーとお茶の専門店を見つける
 - 3、天体望遠鏡をはじめ天体観測に必要な機器や情報を揃える
 - 4、天文部の創部と天体観測のスポットを押さえる
 - 5、無料やCPといった胡散臭いものの情報収集
- とりあえずこんなところだろうか。

所詮僕の頭なのでたいしたことは考え付いてはいないが、なんとなく5番目以外はすぐに動き出したほうがいいような気がしてきた。

説明会はだいぶ進んできているようだが、目的のものがなかった僕にもうここにいる意味は薄い。

偉そうに黙って睥睨してる奴が出てきてなんか静かになってきたことだし、出口までの道も拓いてきてる。

「四方、天文部はないみたいだし僕はもう行くわ。

東風谷、場所借りたみたいですね。それとありがとう。

それじゃ、また明日」

「はあっ?! ちよ、まてー!」

「……さようなら」

『私は、生徒会長を務めている堀北学と言います。』

生徒会もまた、上級生の卒業に伴い、一年生から立候補者を募ることとなっています。特別立候補に資格は必要ありませんが、もしも生徒会への立候補を考えている者が居るのなら部活への所属は避けて頂くようお願いします。生徒会と部活の掛け持ちは、原則受け付けていません』

四方は僕を呼び止めようと振り向いていたが、丁度その時生徒会長の堀北と名乗る人物が話し出した。

四方もすぐに気づいて口をつぐむ。

一応、着いてくるかと思つて少しだけ待ったが動く気配はなかったので、手を一振りしてから僕はそのまま出口に向かって歩き出した。

『……………』

——私達生徒会は、甘い考えによる立候補を望まない。……………

汚点……規律を変える

……………歓迎しよう』

出口に向かっている間、堀北生徒会長の話が途切れ途切れに意識に入ってきていたが、僕はそれに対して特に何も思わず締め切られていた体育館の扉を開けて出て行つた。

余談だが、出口付近にいた男女二人組の男の方にメツチャ見られたのが微妙に気になっている。あっち方面の人間でないことを祈つて

おしづ。

P、四方二三矢

最初は面白い奴だと思っただけだった。

入学初日にクラスメイトの一之瀬が自己紹介しようと言いついで、順番に自己アピールしていくのを眺めながら俺は無難な自己紹介で済ませて、そこそこにとけ込めれば上々の結果だと思っていた。

しかしある生徒、俺の二つ前の席に座っていた東風谷早苗という生徒が短い自己紹介をした時から教室内の空気は変わった。

東風谷が話した内容自体も多少変わっていたが、それ自体は問題じゃない。

重要な問題は東風谷が話している時は勿論、話し終わって着席しても教室内には肌寒い空気が蔓延し、圧迫感が押し寄せてくるのが止まらなかったのだ。

おそらくは俺だけじゃなく、クラスの連中全員が得体の知れないナニカを見るように東風谷に注目して固まっていたのだと思う。今や教室内は、先ほどまで失敗気味な自己紹介があっても陽気にフオーロしていた一之瀬や柴田といった面々すら喋るところか動くことも憚られるナニカが支配していた。

後で考えても、実際に時が止まったかのような時間は数秒程度でしかなかったと推測できるが、それでもその場その時にはそれが永遠に続くんじゃないかという不安を多く含んだ錯覚があった。

そんな中でその空気を打ち破ったのは、俺の前に座っていた男だった。

誰もが教室内に蔓延するナニカに押し潰されそうになっていたというのに、その男は自然に立ち上がり普通に口を開いて自己紹介を続行していた。

「左京夢月です。趣味は昼は日向ぼっこ、夜は天体観測です。また雨の日などは読書をすることもあるのでそちらも趣味といえれば趣味か

もしれません。また僕への注意点として、話しかけたら逃げる事があるかもしれませんが嫌っている場合はほぼないので懲りずに接触を図っていただけたらなと思う次第です。それでは皆様、よろしくお願ひします」

左京と名乗った男は、この状況で呑気ともいえる自己紹介をしてクラスメイト達の反応がないことにも気にしたそぶりを見せず、一礼して着席した。

気のせいかもしれないが、言いたいことを言えて満足そうな雰囲気の前から漂ってきたのを感じて、不思議と俺も内心が非日常から日常へ戻ってきたような気がしていた。

そのおかげか自己紹介の途中であったことを思い出し、何とか立ち上がって自分の名前だけはクラスに向かって搾り出せた。頭から無難な言葉が消え去ってしまったので普通の状況なら失敗になったかもしれないが、この時は完全に冷静になっていたわけではなかったし仕方ないと思うしかなかった。

しかもこの日の予想外がまだ完全に終わったわけではなかった事は、俺が着席した直後に左京から話しかけられて思い知るのだった。

式の前にそんな変事がありつつも、入学式は無事に終了した。

一之瀬をはじめとしたクラスメイト達の陽気なフオローが功を奏したのか、もう変な肌寒さや圧迫感は残り香もなくなっており、みんなで親睦会をしようと盛り上がっている。

どうしても警戒してしまう東風谷や、バイト関係か用事があると saying していた左京はいつの間にか消えていたが、一度寮に戻って荷解きしてから再集合というので俺は参加することにした。

クラスのほとんどが参加した親睦会はボーリングの大会と呼んでも過言なさそうな物にまで発展して、とても楽しい時間になった。

一之瀬や神埼といった気持ちのいいクラスメイトも話しかけてくれて、連絡先を交換したりボーリングで軽い勝負をしたりと居心地がいい。よくボーとしているとかマイペースとか言われて集団から浮くことが多かった俺としては、ここのクラスでよかったとかみ締める

ように感じていた。

残念ながら、初めての一人暮らしで買出しや荷解きの続きがあった為に、2ゲームで抜け出すことになった時も一之瀬達は快く送り出してくれて、同じような用事があるクラスメイトと同様にさり気無い心遣いが籠っている一言をもらった。

次の日は、目が冴えてしまって早めに登校することになった。

自分の席に座って大人しくしていると、昨日知り合った神埼が声をかけてきた。

「おはよう。 早いんだな四方」

「おはよ。 なんか目が冴えちゃってね。 それにそういう神埼も早いな」

「ああ、どうもこの学校は裏がありそうに思えてしまって色々調べようと考えているんだ。 例えば、店にあった無料商品とか昨日星之宮先生にされていた質問や返答とかだな」

「へえ」

「よければ四方も気づいた事を教えてくれると助かるんだが、どうだ？」

「うん？ 俺か？ 怪しくは思ってたけど、正直深く考えてなかったからよくわからないなあ。 というかなんで俺？」

神埼は少し思い出すようなしぐさをした後に話し出した。

「最初に10万ポイント貰えると聞いて盛り上がった時に、冷静に見えた奴には話を聞いておこうと思ってな。 俺が見た限りでの判断だが、四方や一之瀬、まだ来ていないようだがあの時に質問していた左京ともこの話をしてみたい」

「左京かあ。 なんの因果かこの学校に来たのは俺の親父がきっかけって言ってたって」

「ああ。 その話をしていた自己紹介の時も、東風谷周りのあの空気をまるで気にもしていなかったような独特な雰囲気があった。 昨日の親睦会でその話になった時は、本人不在ではあったがなかなか面白かったぞ」

「確かに。東風谷のあの空気も気になっちゃうけど、左京は左京で結構謎があるな」

特にあの親父の店に中学生単独（いや単独かはわからないけど、なんとなく一人な気がする）で入店するとか度胸があるなんてもんじゃない。東風谷の件も含めると、左京のこれまでに興味まで湧いてくる。

どう育てばそうなるんだ？とか失礼極まりないから口には出さないが……。

神埼と学校や左京について話していると、東風谷が登校してきたので神埼は自分の席に戻っていく。

神埼含めてクラスメイト達も別に嫌っているわけではないのだろうが、東風谷の雰囲気は人払いする圧力のようなものを強く感じる為か、東風谷の周囲は左京以外登校しているにも関わらず空席のままだった。あれだけ気遣いや心配りが上手かった一之瀬までもが声をかけられないのだから、東風谷は相当な物なのだろう。

「おはよっす」

始業時間の直前になってようやく左京が登校してきた。

俺に声をかけると返事も待たずに、手早く筆記用具などを出したり、机周りを軽く掃除したりしている。

こういうところは効率重視というか真面目で、ホームルームが終わって、初日からいきなり授業が始まったも、真剣に集中しているのは伝わってくる。俺も授業中は集中しているからそれほど意識は割けていないが、こういう部分は共通点なのかもしれないとぼんやり思った。

その後は特筆すべきことなく午前の授業が終了し、左京から昼食に誘われたので学食に行った。一之瀬や神埼が話しかけようと見ているのは気づいていたが、教室内では東風谷の空気もあって近寄り難く、話していると俺が左京のペースに巻き込まれてしまうこともあって気づいたら二人で学食にきていた。

じっくり話してみてもわかったが、左京は裏を感じさせない奴だっ

た。

一之瀬とは違う意味で何処となく居心地のいい雰囲気を作り出し、まだ会ったばかりの俺を友人だと思っているのが伝わってくるので最初は少し困惑したが、昼食が終わるころには俺も左京を友人だと思いうようになっていた。

元々部活には入る気がなかったが、左京が天文部目当てに部活動説明会に行くというので俺も行ってみることにした。

この新しい友人は月や星の魅力を楽しそうに話し、部活がなければ自分で作ってでもやってやると初めて見る熱さで語っていた。乗せられる、というか自分から乗っかりに行こうとしていたのは自覚していたが、左京を見ていると興味を掻き立てられ、つい自分も混ぜてくれと意見を翻していた。

そんな感じで駄弁りつつ、此方からは親睦会のことを話したり、親父の占いを聞いたりしながら体育館に着いた。思ったより人が多かったので人ごみが嫌いだと言っていた左京を見ると、一点を見つめてこう言い放った。

「四方、あそこが空いている。すまんが、人ごみが苦手なので早めに移動したい」

この人ごみの中で、その空いている場所に心当たりがあった俺は一応左京の目線の先を見ている。

そこには案の定、東風谷早苗が俯いたまま佇んでいた。

「……やっぱりお前すごいな」

俺が呆れだか感心だかをしている間に、左京は人ごみを器用に抜けて進んで行く。そして東風谷の近くにたどり着いてあっさり一緒にいる許可を取り付けた頃には、もう俺に突っ込む余力は残っていなかった。

しかしこうして3人していると直感的にわかってきたことがある。

東風谷にはナニカがあつて、それが原因でああいう雰囲気生まれてしまう事。

左京はある程度そのナニカの正体がわかっていて、だからこそ何らかの手順というかルールというかを守って東風谷に自然体で接する事ができるのだと。

そしてそれは左京にとって普通の事だから人に説明するのが面倒だという事。

「うん。四方の気のせいだ」

俺が呈した疑問に対するこの一言からそうした事をなんとなくでも察せてしまう。

それでもちよつとムカツときたので、俺にしては珍しく軽くからかう一言が出てしまった。

「……知り合つてそう経たないけど、左京がのんきで適当なのは理解したよ」

「……………はあ」

まさか東風谷が乗ってくるとは思わなかったけど、反論しようとして司会の橘先輩にさえぎられて諦める左京はなんか笑えてしまった。

それからしばらくの間、左京は部活の紹介を聞いて考え込んでいただけで、また俯いてしまったままの東風谷や元々それほど関心があったわけではない俺も無言の時間を過ごした。

俺にはこの三人の空白外から、（僅かにこちらを見てくる者はいたものの）結構な数が友達と喋りに来ているかのように色んな声を聞いていたが、何も口を開いていない左京と東風谷の方に意識を持っていかれている自分を感じていた。

だから気づくのに遅れたのだろう。

各部のアップールや周囲の声を聞くとともになしに聞いていると、何かあったのかだんだんと静かになっていくのを感じた。周囲から少し遅れて原因を探った俺は、直ぐに壇上の人物がこの張り詰めた空気の発生源だと気づいた。

東風谷のナニカとは違う。

多分この人がこれまで積み上げてきたものがこの静寂を観衆に強制している。今、口を開くのは誰であろうと憚られるほどの張り詰

め、そして塔のごとく積み上げられた努力の静寂。

そんな中――

「四方、天文部はないみたいだし僕はもう行くわ。

東風谷、場所借りたみたいですまん。それとありがとう。

それじゃ、また明日」

左京の特に抑えたわけでもない声だけが体育館に響いた。

そして振り返ることもせず出口の方に向かって行く。

俺はつい声を裏返らせながら、制止の言葉を出そうとした。

「はあっ?! ちよ、まてー!」

「……さようなら」

東風谷の声と被ってしまったが、心を落ち着けて話そうとした丁度その時に壇上の人物が話し出してしまった。

流石に再度声を出して邪魔をすることは憚られ口をつぐんだ。躊躇っている間に左京は少しだけ静止して待つような姿勢はとったが、直ぐにまた出口へ向かって進み始め、既に俺から見えるのは彼が手を一振りしている後姿だけだった。

度重なる衝撃と落差にもはや話を聞く精神状態ではなく、出口の方を見つめて呆然と立ち尽くしていた自分に気づいたのは、左京に便乗するように東風谷も去って、全てが終わってから一之瀬に声をかけられた後だった。

俺の新しい友人は基本的には面白い奴だったが、油断すると落とし穴が開いていたりする難解な奴でもあった。

7、遭遇

目的に掠ることすらなかった説明会については頭から消去しつつ、体育館を出るまでは早足で歩き、外に出てからは最短経路を頭に描いてショッピングモールへと駆け抜けた。別に駆け抜ける必要性は全くないのだが、四方に天体観測について語っていたら天体望遠鏡が欲しくて欲しくて我慢できなくなかった。理由はそれだけである。

息を整えながら、コーヒーとお茶は後日に回して天体望遠鏡が売っているカメラ屋や電気屋、中古屋などの場所を巡って品定めをしていると、ある電器屋で最新技術を使ったトラス式天体望遠鏡を見つけた。

空気を通すことで減退するレーザーによる視界を、揺らぎがほぼ0の状態でクリアに見せる天文関係者垂涎の品だ。数字を見る限り補正光学装置はそこまでではないが、持ち運びできるサイズでこの性能は破格といっても過言ではない。実家で使っていた望遠鏡は勿論、前の人生で大枚はたいて買った天体望遠鏡すら遠く及ばない。

今まで気づいていなかったが、どうやら科学技術に関しては前よりかなり進んでいるらしい。値段も120万程度で今は厳しい値段だが、不可能な額ではないだろう。バイトをする際の良い目標が出来た。

……それにしても欲しい。

あまりにも欲しすぎる物が目の前に出てきた為に、思考停止と思考放棄の境界線で反復横飛びしながら見ていると、いつの間にか後ろのカメラ売り場にいたらしい女子が後ずさりしていたらしく尻がぶつかってきた。

「ご、ごめんなさいー!」

「ん。高価な売り場だからなるべく気をつけろよ。

……あ、やっぱ今のなしで。」

ほぼ何も考えてなかったから普通に返してしまったが、入学2日目

に交流も部活動説明会もほっぽってこんなところにいる新入生など
そうはいないだろう。つまり、この真ピンク髪の俯いて謝っている女
子は先輩に違いない。

「此方こそすいませんでした。先輩こそお怪我などはありませんか
？」

「ごめんなさ………えっ？ 先輩？」

「僕も少し思考放棄していたみたいで注意力がなかったみたいです」

「え？ うえっ？」

「はい？ 上ですか？ ああ、上級生とかそういう……」

「ちがっ、ちがくて！」

そう思い至ったところで態度を270度回転させて慣れない敬語
にしたのに、なぜか余計に混乱度合いを上昇させたこの先輩が非常に
面倒臭い。なにやら行き違いが発生しているような気はしているの
だが、原因がわからないことにはどうしようもない。

僕としては、たいしたことは起こっていないのだから冷静に謝り
合つてさようならが理想的なのだが、この先輩に今、冷静さを求める
のは難しいと考えざるを得ない。もういつそ敬語より慣れない軟派
な態度でお茶でも誘ってさらに混乱させた上で嫌われて別れる方針
で接するかと、ヤケクソ気味に口を開こうとして此方を見ているソレ
に気づいた。

「あ」

思わず、開きかけた口から音が漏れてしまったがそれどころではな
い。

形容するのは難しいのだが、あえて表現するならソレは負の感情の
塊……のようなお化けの欠片だ。以前に僕が見たことがあるソレは、
赤色の靄が猫にまわりついていていたが、今回は緑っぽい何か絡みつ
いたような人間だ。

そう人間である。

あれがそうして、ナニかがどうにかなら襲ってくるようなお化
けの欠片が人間にくっついている。

そのことに気づいたら怖くなってきた。

僕はここに来てまだ2日目で街の地理をほとんど把握していないから、地元では逃げ場にしていた神社や寺なんてあるのかすら確認していない。守ってくれる可能性がある神様っぽい存在というところと東風谷がいるが、現在どこにいるかどころか連絡先すら知らない。今更ながら、四方をはじめ誰とも連絡先を交換していない自分自身への無能さと怒りを感じる。

しかし今は僕の恐怖と焦燥の元凶の方が優先だ。

幸いといつていいのか狙いの中心は目の前にいる先輩っぽいのが、いくら初対面かつ面倒臭くてもこの先輩を見捨てて逃げるのは矜持に反する。かといって、あまりお化けの狙いの中心近くにいると、僕にもターゲットが移る可能性を上げることにはなるのだが……。

僕が黙ってしまったせいなのか、いまだに「あの」だの、「あわ」だのしか口にしないこの頼りない先輩をチラ見する。

うん。状況を正しく認識しているかは怪しい。それに認識が正しくなくとも、成人男性の通り魔、もしくはストーカーに狙われているのが、お化けの事を抜いた場合の事実だ。今は見ているだけだが、どの事実であつても先輩が危険なのは変わらない。

さつきは冗談みたいな考えだったが、僕は本気で下種なナンパ男の演技をして、この場から『先輩ごと』逃走することを決意した。

まずは先輩の立ち位置と手の場所を確認。

それから身長や歩幅をざっと割り出す。

手に持っている袋から、壊れやすい精密機械の類を持っていて、激しい動きは難しいと仮定。

いきなり動いてじろじろ自分を見てくるからか、混乱と慌てた精神状態。

顔・胸部あたりに視線を走らせた時に微量の警戒感あり。

詳しい性格や心理は不明。

先輩の状態を確認したら、これから最低限、店を出るまでは現時点で斜め横にいるお化けの方を注視し続ける。くっ付いている人間は目を向けていないが、お化けが此方を見ているのが僕には分かるから

だ。万が一、跡をつけられたら逃げる意味がかなり薄くなるので、可能な限り監視してるぞという意思だけはお化けに示して牽制しておく。

ナンパ行為自体については、先輩の方を向いていない上に意識の大半がお化けにいつているから変だと思われるかもしれないが、それこそ今さらだ。

ともかくこれで準備はできた。あとは実行だけだ。

さあ、左京夢月渾身の演技をこの世にしらしめるのだ！

「あく……ねえちゃん、オイラにぶつかっておいて……えくと、謝罪だけってのはないんじゃないんですかあ？ ……せ、誠意。そう誠意をみせてもらおうかい。ぐ、具体的には、うくと、ワシ、じゃない！ あくと、それがしに茶でも馳走になっても罰はあたらんぜよ。

返事はハイカイエス以外認めねえぞ、オラ」

演技は少し詰まって、途中からもう何言っているのか自分でもわからなくなってしまうが後半の要求が通じればいいので、先輩が返事をしてもしなくても後ろ手で無理やり手を繋ぐ。僅かに意識を割いている先輩の反応は啞然として動きを止めているようで、抵抗しないのは助かった。

お化けの方に視線を固定したまま、先輩のざっと推定しておいた歩幅に大きなズレが生じないように慎重に斜めに歩いて店の出口に向かう。

……あと少し。

汗が目に入って鬱陶しい。

繋いでいる手もきつと震えと冷や汗でひどいことになってる。

ああ、向けられる悪意がこんなにも怖いとは思わなかった。

………出口まであと数歩。アレをまだ見てはいるけど、動いてはこない。最後まで動かないでくれ。

こんな時なのに、汗まるけになってしまったから洗濯の心配がわいてくる。

自動ドアを斜め後ろを向きながら先輩を引っ張ってぐり、まだ絡み付いてくる視線の方角を睨み続ける。

外と店を隔てる壁や自動ドアがあるのに、まだ意識を逸らしちゃだめな気がする。

店を出てからも見られている気配はあったので、僕は意識を先輩を見ている視線の元に集中して慎重に歩いていたが、小さな広場にぽつんと佇む喫茶店の前に来て、何故かいきなり視線が消えた。

そんな時に、バシヤツ、という水音が聞こえて反射的にそちらを向く。

先輩と手を繋いだままだったのを忘れていたので、少し振り回してしまった。

喉が渴ききつていて掠れた声になっていたが、何とか先輩に謝り、一先ずもう大丈夫と判断して手をほどく。

「すいません」

「……うん」

先輩は僕を責める雰囲気でもないが、ほどいた手を見てみるとそれなりの力で握り続けてしまっていたのか少し赤くなっていたので、僕はなんか一人で空回りした拳句、引つ張りまわした思いがわき上がってきて再度謝ろうとしたが、安全だと体が判断してしまったのか、よりによってそこで――。

腰が抜けて崩れ落ちた。

「えええっ!?! ちよ、大丈夫ですか?」

「……うん。ちよつと腰抜けただけで大丈夫だから。あんまり言わないでくださいね。情けなくて死にたくなるので」

その時の僕は、見ようによつては女子の先輩に道路の真ん中で土下座してたように見えるだろう。

だが個人的に見れば、実際はもつとかつこ悪い。

お化けから逃げきつて安心した結果、腰を抜かした。助けていたつもりと一緒に逃げてた先輩は普通に動いてるのに。

「お二人とも。 その様子だとしばらく動けないみたいだし、うちの

店に寄って行きませんか？ サービスしますわ」

オマケに打ち水していた人妻風美人のお姉さんには、一部始終を観戦されていたのが僕の精神的ダメージを更に増大させていた。

現実逃避の為に見上げると、そこには喫茶店の看板が風に揺られてカタカタと音を立てていた。

『喫茶・芳香』

入学2日目。

後に高校時代最良の喫茶店となる場所との出会いは、そんな情けない成り行きであった。

8、奇貨

お姉さんは霍 青娥（かく せいが）と名乗り、名刺を出してきた。この喫茶店のオーナーらしい。

霍ではなく青娥の方で呼んでほしいと言われたので、抵抗はあるが青娥さんと呼ばせてもらうことにした。

印象としては、普通の人間と違う気配なのはなんとなくわかるのだが、お化けとも神様とも違う不思議生物な感じがした。悪い気配は……実はちよつとだけ感じるのだが、何かがどうなるわけでもないだろうしと思いい先輩の方を見てもOKっぽかったので店に入って休ませてもらおうことにした。

僕は、腰が抜けていて歩けなかったので、両脇を青娥さんと先輩に抱えられるようにして店に入る。

最初は、汗を大量にかいていて崩れ落ちた時の埃にもまみれているからと断つたのだが、そうなると這って店に入る変質者に見える。青娥さんに言われ精神的ダメージを負ったところで、先輩がいつの間にか反対側に入り込んで二人で僕の両脇を支えていた。

こうして挟まれているとハーレム野郎初級者になつたかのような妄想も頭をよぎったりもするが、これまでの経緯を考えると青娥さんとはともかく、先輩の方はナンパされたと思つたらわけもわからず自分を連れ去ってきた奴を逃がさない為でもあるのかもしれない。

まあどんな理由だろうと、多分もう大丈夫な状況になつた気がしているし、特に隠すこともないから聞かれたことには答えていこう（信じるかは置いておいてだが）。それがせめてもの誠意というものだろうと、引つ張つてまだ少し赤っぽい先輩の手を見つめながらおとなしく進んでいった。

ゆつたりと腰掛けられるソファ一席に案内されて下ろされた。

僅かな時間とはいえ、美女・美少女の至近距離での密着に加え、巨乳二人（特に先輩の乳はヤバかった）のサンドイッチだったが、正直その瞬間はエロいことは思考の1割もなく、その前の醜態と自分の汗

の匂いや汚れが心配すぎて、残念ながら役得を感じる余裕がなかった。

しかし、ソファアールで少し落ち着いてようやく余裕が戻ってきた時にまず思ったのは、

——マジで、本当に、真剣に、残念すぎる。

という後悔である。

まるで確変で777が出たというのに、スロット台が物理的に炎上したかのような気分を現在進行形で味わっていた。体力と気力が万全で余裕がある時に、是非ともサンドイッチをもう一度だけでいいのでやっていただきたい。そうなれば僕は庭駆け回り炬燵で丸くなるくらいに狂喜乱舞の雨あられとなることだろう。

きよろきよろしながら対面に座った先輩や、水やお絞りを取りにカウンターの向こうへ行った青娥さんを眺めて、僕は失われた時というものに改めて思いを馳せた。

青娥さんが出してくれた水を飲み、お絞りで手や顔を拭く。

手はともかく、顔を拭うのはおっさんくさいと思っているが、今日みたいな状態だとむしろ拭わないほうが不都合が多いので周囲に遠慮せず実行する。喫茶店に来るたびに、こうしたかったとかは少ししか思っていない。

「あの、さつきはありがとうございます。たぶんわたしを助けてくれた、んですよね？」

僕がスッキリしていると、先輩がお礼を言ってきた。

いつ見ても慌てている印象だったので、僕の行動が善意で受け取られているのが嬉しい。それと同時に僕は彼女を悪く見ていたり、侮っていたかもしれないと、少しだけ反省する気持ちもわいてくる。

「二応そのつもりでしたけど、さつきの僕の醜態とか、ナンパとか、引っ張って店から連れ出したりとか……その、すいませんでした！」
「ううん。最初はびっくりしちやっただけど、その、わたしも嫌な感じがして逃げようとしてたし、あの店員の人が見てた事に気づいてからの……ええと、君？あなた？が何かで真剣になってるのはなんとなくわ

かつちやつたから」

先輩はあのお化けには気づいていなくても、危険については察知して自分でも逃げようとしていたようだ。確かに女子の身から見た場合、お化けなんて非科学的なモノより通り魔やストーカーの方が恐ろしいかもしれない。そしてその危険に気づいていたからこそ、僕の不自然な行動が良い方向に解釈されてしまったのだと推測できる。

……しかしあの時の僕は、何故に連れ出すのに下種いナンパの演技などという不自然かつアホな手段をとったのだろうか。今思い返しても錯乱していたとしか思えない。

まあ、それはともかく。

「すみません。まだ名乗ってもいませんでした。」

僕は1年のBクラス、左京夢月といいます。良ければ先輩のお名前も教えてもらっても……」

「そうー。それもー」

「は？ どれです？」

僕をどう呼べばいいのか困ってるっぽかったので名乗ってついでに先輩の名前を聞こうとしたところ、今までの引っ込み思案な印象を覆す力強さでさえぎられた。

「なんでわたしを先輩って思ったんですか!？」

「え？ だってこの時期に高価な機器のコーナーにいたり、部活動説明会とか新しい友達との交流を気にしない新入生ってあんまりいないかなって」

「それ、左京君にも言えますよね」

「僕は説明会の途中で抜けて天体望遠鏡を見に行っただけで、友人だって一人。拡大解釈(葛城と戸塚)で3人。無理やり付け加えて(東風谷) 4人もできてますよ!」

「……そうですか」

こちらをなんともいえない目で見ているのだが、何だというのだろうか。

先輩はしばらく無言だったが、おもむろに口を開いた。

「改めまして、『1年』Dクラス、佐倉愛里です」

「……うん？ 1年生？」

「うん。1年生」

発音と意味が違う同じ言葉が即レスで返ってきた。

《悲報。先輩は同級生だった》

徐々に意味が脳に浸透してきて変な電波を受信したが、もう先輩呼びが定着しかけている時分だったので、ちよつと考えて一応提案してみることにする。

「……佐倉愛里さんか。これからがあるかはわからないが、佐倉先輩と呼んでも？」

「意外とかたくなっ!? ダメだから！ 佐倉でも愛里でもいいから先輩はやメテ」

「仕方ないか。では佐倉と。それと同級生とわかつたからには、敬語は打ち止めにさせてくれ。慣れていないので無駄に疲れる。……敬語はともかく、しばらくは先輩呼びが口をついてくる事はあるかもしれないが」

「しかたない、とか！ いや、だから、ダメだからね！ 敬語はないほうがいいけど！」

ブフツ

僕と佐倉が言い争っていると、カウンターを拭いていた青娥さんが突っ伏して震えているのが見えた。先ほどの音は、彼女が何かに吹き出した音だろう。

佐倉も気づいて、引っ込み思案な部分が再発したのか顔を赤くして小さくなっている。

少し経って状況が落ち着いたらと判断したのか青娥さんがカップを3つ持ってこちらへ寄ってきた。

「お待たせしました。お話中だったから控えていたのだけれど、ちゃんと淹れたてですわ。ミルクと砂糖もお好みで入れてくださいまし」
「ありがとうございます」

「……ありがとうございます」

青娥さんが出してくれたのはコーヒーだった。

少し離れたところからしばらく動いていなかったような気もしているが、コーヒー好きの一人としても満足できる味と熱さだった。というか、これはブルマンNO. 1だ。まさか初めて入った喫茶店にあるとは予想外である。

しかし勿論嬉しいし、僕には全く問題ないのだが、ブルマンNO. 1は結構お高いはず。佐倉に嗜好品にそこそこの額を出す余裕があるのか脇に置いてある買い物袋を見ながら心配になったので、青娥さんに確認を取っておく。

「青娥さん。すごい美味しいんですけど……おいくらですか？」

「お金はいりませんわ。その代わり、私と少しお話していただけませんか？」

「お話ですか？」

あつポイントっていうんですか。

そんな眩きが漏れ聞こえる。やはり学生と違って、商業関係の仕事をしている人は現金での取引かそれに代わる何かもあるのだろう。

「はい。うちの店はほとんどお客さんが来ないので、たまに来るお客さんとお話することが最近の私の楽しみなのですわ」

そういつて朗らかな笑みを浮かべる青娥さんの頼みを、僕は佐倉と頷きあつて了承した。

この後は、3人でコーヒーを楽しみつつ、青娥さんが追加で出してくれたサンドイッチやするめで腹を満たし色々話した。

僕はコーヒーやお茶、天体やアルバイト探しの事なんかを話し、佐倉はカメラ（これが買っていた物品だった）に昔から興味があった話や自撮りというものをやるつもりだと話していた。

青娥さんの話はキョンシーや死神とかのお化けの話に、和歌や聖徳太子の話とジャンルとしてはホラーか歴史寄りの話が多かった印象だが、初めて聞く発想や説なのに何気に整合性がとれているのを感じてちよつと戸惑った。佐倉はホラーも歴史も結構好きなのか、日が落ちる頃には青娥さんと楽しそうに過ごす事ができるようになった。

「遅くまで話してしまったので夕食もどうぞ」と言われて夕食までご馳走になっっている時には「アルバイトはうちの店で手を打ちません？」と誘われたり、意外にも佐倉がそれに乗ってきたりして二人とも雇ってもらえることになったり。

正直、あまりにも親切すぎるし、とんとん拍子に上手いき過ぎていて、青娥さんの雪崩のごとき「恩」パレードが怖い。帰りにも僕と佐倉にお土産として、それぞれコーヒー豆と化粧品をくれたし、バイトまで世話してもらっているのに、僕の勘でも引つかかる部分はあっても裏を感じない善意に思えるところが得体がしれない。

バイトの手続きに関しては休日のほうがいいだろうと、必要な書類の事や都合の良い勤務時間を話しあうのは明日の土曜日に決まり、二人と連絡先も交換したのでおそらく問題はないだろう。

何気にここに来て最初の連絡先交換が仕事関係の青娥さんと佐倉なあたりに、前の人生におけるブラック企業の呪いを感じたりもしたが、少なくとも表面上は美女と美少女である。ブラック云々は関係ないと思っておこう。

暗くなっていたから佐倉を送るついでにやっとき寮まで帰ってきた。

佐倉は青娥さんが余程気に入ったのかこれからのバイト楽しみとか、明日学校行ったら書類もらってくるから一緒に行こうとか、控えめにはしやぎながら女子寮へと入っていった。

佐倉を見送った後、僕はのんびりと自室に向けて歩き出した。

一つ、佐倉には言えなかったことがある。

それに何か証拠とかがあるわけでもない。

が、僕には青娥さんがあの店員にお化けをくっつけた黒幕だという確信があった。最初は勘でしかなかったが、佐倉も交えて話すことに材料が増えて確信へと変わっていた。

しかし同時に、朗らかな笑みで楽しく話していた時や親切の「恩」パレードをしてくれた青娥さんにも嘘はなかったと判断している。

そして僕がそう思っていることも青娥さんは察知していたような気がする。

まあ、だからどうというわけでも何かするわけでもないのだが。

青娥さんは何かで僕か佐倉が奇貨になりそうだと判断して愉快犯から恩を売りまくる方針に変更した。

……とかだったら平和でいいなあ。

心からの願望でこぼした独り言は、見上げた月へと吸い込まれていくようだった。

9、人生

入学から3日目。

今日、4月6日は土曜ということもあり、学校は休みである。

本来なら昼まで寝て、昼からは日向ぼっこに出かけ、気が向いたらスケッチしたり昼寝したりして過ごすのだが、バイトの手続きがあるのでそうもいかない。ただやることはほぼ決まっている上に、そう時間もかからないとは言われている。

入学から忙しく動いている時が多かったので、佐倉と合流したらさっさと用事を済ませて公園のベンチとかでボーっと過ごそうと思う。

僕の提出書類の自分の記入欄ももう埋めてあるので、あとは雇い主である青娥さんに記入してもらい判子を押しってもらうだけだ。仕事や給料、他諸条件も昨日話して納得している。

佐倉は初めてのバイトだと浮かれながらも客商売に不安そうでもあったが、おそらく彼女の心配はほとんど杞憂に終わるだろう。

なにせ喫茶店なのに客が来るとは思えない客入り具合なのだ。昼過ぎから宵まで、僕と佐倉、青娥さんの三人で宴会しても誰も訪ねてこなかった時点で普段の閑古鳥が窺える。普通ならむしろ潰れてしまう心配をするのが妥当なんだろうが、あの青娥さんが困窮している姿が想像できない。

別の本業の収入源があるとか、元々金持ちの道楽とか予想はできるが、つかみどころのない部分は昨日色々みただけで青娥さんに聞いてもはぐらかされるだけだろう。

「ちわっす」

「お、おはよう」

青娥さんとの約束では昼食を食べながら形だけの面接をとのことだったので、昼前に学校の事務所側のホールで佐倉と合流して佐倉の

分の書類を入手した。

またしても引つ込み思案が発症していたのか12時ちよい前だというのに朝の挨拶だったり、事務員を呼ぶ事が出来なくて代わりに僕が呼んだり、記入箇所疑問点を教えたりといった一幕はあったもののおおむね問題なく予定を消化していき、今僕たちは青娥さんの待つ喫茶店へ向かっている。

「左京君はバイト経験あったりするの？」

「ないな。だけど元々高校にきたらやろうと思ってたことのひとつだったから、一応の下調べだけはしてた」

道中で佐倉に聞かれたのでこう答えたが、下調べなど勿論していない。

僕の内心を読めるものがいたら嘘・誤魔化しと取られるだろうが、『今』のみに限定すれば確かに経験していないから誤魔化しではあっても嘘ではない。ただ前の人生での経験や知識を使うことを躊躇わないだけだ。所詮、僕は貯金を使って少しの楽をしている凡人に過ぎないのだから、楽ができる場所ではとことん楽をしていきたい。

「そっか。　すごいね」

「あー？　すごい？」

「うん。　やりたい事をはっきり言葉にできて、実行できるってすごいよ」

「そういうもんかねえ。　逆にやりたくないことは最後までやらないから、帳尻はあってるんじゃないかね？」

「ふふ、わたしはわかりやすくいいと思うよ」

「あ！　一応釘刺しとくと単純ってわけじゃないからな……たぶん」

「うふふ。　自分で言ってる自信なくしてる」

「うっさいわ」

佐倉は事務所ではおどおどしてたくせに、人が少なくなつたとたんにまた浮かれてるっぽい雰囲気に戻っていた。

コイツ、実は内弁慶だな。と、出会って二日目にして確信した。

喫茶・芳香に到着すると、昨日は余裕がなくて気づいていなかった

が、いい味を出している建物や植物が昨日と同じように僕らに静かな顔を見せている。それらに風情を感じながら通り過ぎ、教えられていたベルを鳴らすと、すぐに青娥さんが迎えて入れられて、食事のいいにおいが流れてきた。

「左京さん、佐倉さん。いらっしやいませ。お待ちしておりましたわ」今日の青娥さんエプロンをしていることもあって、昨日より人妻風味が強くて一瞬入るのを躊躇ってしまったが、雇い主になる人にそれではこれから疲れそうなので何とか頭から変になりそうな考えを追い出す。

こういう時に人妻・NOR属性があれば喜ぶたのかもしれないが、個人的にあれともう二つは何度生まれなおしても理解できない属性だと思う。

「青娥さん、今日はお招きありがとうございます。それと面接よろしくお願いします」

変なことを考えてしまったのを気取られているかは不明だが、僕は用意していた台詞で最低限は礼儀を示す。佐倉も心の準備はしてあったのか静かにお辞儀していた。

「ええ。久しぶりのお客様でもあるから腕を振るったの。まずは料理を楽しんでくださいまし」

そんな感じで始まった食事は、昨日の宴会とは違って穏やかに過ぎていった。

料理はどれもおいしく、僕も佐倉も語彙力を失くしておいしいと言わなかったとか、食後に持ってきたお茶を青娥さんと佐倉に淹れてみたりとか、佐倉がカメラで三人の写真を撮ってみたりとか。それに誰よりも青娥さんが喜んでる風だったのが個人的には少し意外だったが、僕も佐倉も楽しめたのでWINWINで有意義な時間だった。

面接では、書類の不備を軽くチェックした青娥さんが直ぐに店側の欄を埋めて判子を押してくれたので、変に緊張感が高まらなくて僕はともかく佐倉にはありがたかっただろう。

仕事内容は、大方予想通り料理・掃除や庭の世話、変り種では大工

仕事やパソコン関係で青娥さんが出来ないことやわからないことを教えるなどで、あとの時間は好きにしていってよいとのこと。

しかしやはり接客はないんだと悟る結果となった。

ただ待遇面は破格で、月に13日出勤で勤務時間は16〜21時の間4時間。月給は10日支給の10万固定で、時給換算すると約1900PP。体調不良・学校行事などでこれなくなる場合は要連絡。

相当な好待遇で、いまだ青娥さんの「恩」パレードはとどまるところを知らないようだ。

やるべきことは終わったので、今日のところは帰っても少し休んでいってもまたお話ししていてもいいと青娥さんに言われたので、僕は気になっていた広場で日向ぼっこすることにした。佐倉はフィルム写真を現像できる暗室にできそうな部屋があるそうで、そちらを見たり必要な物をリストアップしたりしてここで現像するために張り切っていた。

ちなみに佐倉が買っていたカメラはデジタルなのだが、喫茶・芳香にもフィルムカメラがあり先ほど撮影したのはこちらだった為に現像が必要になったのだ。

一応僕にも現像の知識はあったのだが、佐倉が張り切って調べたりしていたのを見て手を出すのは無粋と感じ、こうして日向ぼっこに精を出している。あくまで、邪魔をしないためであり丸投げしたとかそういうことではない。

そういう理由で、僕が何も考えずにボーっと座っていると足音が聞こえた。

「こちらでしたのね」

「青娥さん？」

「少々、左京さんにお聞きしておきたいことがあるのですが、お隣よろしいですか？」

「はあ、勿論ですが」

ボーっとしていた為、気の抜けた返事になってしまった。急いで意識を切り替え、隣に座った青娥さんの方を向く。

「単刀直入に聞きます。左京さん、仙人になる気はありませんか？」
「は？」

「仙人となれば、不死でこそありませんが不老となり、絶大な力を得ることも可能です。竜の血や人魚の肝などを食べればある程度の修行をスキップすることもできるでしょう。わたくしの弟子となつて共に歩みませんか？」

「……」

「左京さんは、わたくしが佐倉さんにしようとしていたことに昨日には勘付いていましたわね。いくつかの術に関しても。」

今日の面接も左京さんが佐倉さんに話してしまえば、あるいはなかったかもしれない。わたくしは、むしろその可能性の方が高いと考えておりました。

……だから今日お二人が来て本当に嬉しかったのです」

まあ考えてみれば、お化けや神様がいくらいだし仙人だつていてもおかしくはない気はする。もし僕がそんな超常の力を手に入れる事ができたら、今の自分よりもどれほど人生楽しくなるのだろうか。「佐倉さんでは素質はともかく器が足りていないので難しいですが、わたくしの術を見破ることができる左京さんには可能でしょう。」

一度きりの人生、力を持つ者になつてみませんか？」

「……それで」

「決心がつかまりましたか？ では、すぐできる事はまず肝を」

「あ、いやそうではなくて」

なにか勘違いさせてしまったようなので失礼ながら言葉を遮らせてもらった。

「なんででしょう？」

「力を持つことができた僕はともかくとして。」

……その、青娥さんのメリットは？」

「長い時を共に生きることができるとはいけませんか？」

「いえ、いけないというより……その、それって嘘、ですよね？」

「あら」

そういつてしまうと、青娥さんは得たいの知れない笑みを深めた。

もしも僕が青娥さん以外の超常的存在を知らなければ、前の人生経験がなければ、騙されたり受け入れたりしていたかもしれない。

でも僕は知っている。デメリットを隠して僕に都合のいい提案ばかりの話に乗るとしつぺ返しがくることを……よく知っているのだ。

青娥さんは一見穏やかだし優しくておまけに美人だ。でも享樂的な面も見え隠れしているのを僕は感じている。

青娥さんとの雇用契約はその享樂的な面の一例でもあるだろう。契約とはいってもいつ切られるかわからない。楽しくない、興味を失った。こんな理由で見限られても驚かない印象を僕は青娥さんに既に持ってしまったているのだ。

断っておくと、それが悪いとか嫌いだといっているわけじゃない。もしそう思っているなら、雇用契約はともかく、親しく接したり楽しい時間を過ごしたりはできない。

まだ出会って僅かだが、青娥さんが見せた様々な顔は良くも悪くも執着しすぎないような『人』に見えていた。僕自身も少なからずそういった面はがあると自覚しているので、なんとなく居心地がいいのだろうと思う。

それに――

「……なにがおかしいのですか？」

僕はいつの間にか笑っていたのか青娥さんが心なしか真顔風味で僕を見ていた。

「不老。力。あるいは何らかの超常の知識。僕は何がどれだけ手に入るとしても、枠外にあるチートやルール違反を使うのは好みじゃないだけなんです」

「それは信じていないからではありませんか？ 左京さん自身の事も含めて」

「確かに僕は『それ』を手に入れた自分を信じられていないです。だけど、今の好みや心配を無視して無理に信じたりする要領の良さや度胸は僕にはない。僕は凡人なんです。」

「だったら最初から信じられなくていいと僕は思ってます。」

「……」

青娥さんはしばらく目を大きくしてこちらを見ていたが、やがて天を仰いで諦めと呆れが含まれたため息を漏らした。

「はあ。無理でしたか。まさかこんな人間とは思ってもみませんでしたわ。同じことを繰り返す毎日やストレスがたまる生活。退屈に思っていたんじゃないやありませんこと？　左京さんはわたくしの同類だとみていたのですけど」

「話してた限りで思ってたんですけど、たぶんルールの違いなんじゃないですかね」

「ルール？」

「はい。ある程度共通のルールの中で残機0の舞台は日本。目的は決まってるけど色々遊んだり条件や範囲を限定したりして楽しいかどうかを競う人生という娯楽。だから残機無限アツプの不老チートや超常の力を使ったルール違反を僕は好みじゃないから断った。僕はそんなに深く考える質でもないし、たぶん短くまとめたらこんな程度の事だとおもいますよ」

ELONAの影響が少しゲーム臭のする例えになってしまったが、僕としては本当にこんな感じに考えてただ2度目の人生を謳歌しようとしているだけだと思う。

「まあ実際には一度生まれ直しているから残機1だったんで、今は人生ボーンラスステージと思って気楽にやってるってところですかね」

「あらまあ!!　転生、というやつですか？　私も長く生きていますが同じ人間になって記憶まで残っている事例は初めて聞きました」

「ああそうでした。そういえばお化けとか見えるようになったのも、生まれ直してからで……」

「それに似た事例はあったりしますね。たとえば事故が原因で頭を……」

僕と青娥さんは僅かな間を挟んで、中途半端ではあるが今日の話はもう終わりという暗黙の了解でもあるかのように、無言のうちに話題を変えていた。最後の最後まで結論を出すのをお互いに避けた結果だろう。

その後は、佐倉が呼びにくるまで青娥さんと日向ぼっこをしながら

取り留めのない話をしていただけだ。

青娥さんの事は、言うまでもなく完全な一件落着というわけではない。あえていうなら、一件不時着とでもいうべき状況に落ち着いたと見るのが良いかもしれない。お互いに佐倉の件をほとんど話さなかつたのも、(青娥さんはわからないが)正直そこまでの義理や必要性を感じていなかったというのもあるが……ぶっちゃけていえば、無理に決着しなくてもいいだろ的な面倒事を適当に避ける癖が発動しただけである。

まあ、とりあえず他事はおいといで、今日の僕にとって重要な事は一つ。

祝バイト確定!

それだけである。

10、勧誘

4月7日は何も予定のない日曜日である。

これまで入学してからというものの忙しく動き回っていてあまり余裕などなかったが、以前立てた目標である5つ。

- 1、アルバイト先、またはポイントの入手先を見つける
- 2、コーヒーとお茶の専門店を見つける
- 3、天体望遠鏡をはじめ天体観測に必要な機器や情報を揃える
- 4、天文部の創部と天体観測のスポットを押さえる
- 5、無料やc pといった胡散臭いものの情報収集

この内、1はほぼ達成。あとは書類を事務所と生徒会に提出するだけ。

2も青娥さんが仕入れたものを安く分けてくれる約束をしているので達成。

3は昨日の帰り道に中古ショップで目星をつけておいた4万ほどの天体望遠鏡を購入しておいた。確認したが多少古い型ではあるが僕が実家で使っていたものと大差ない性能なので、部活動には問題なし。

4は佐倉と事務所に行った時に、抜かりなく創部申請書と入部届け数通を貰ってきている。顧問の問題はまだあるが、説明会前に話した感じ四方は入ってくれそうであるし、必要定員は3名とのことなのであと一人。もし四方が駄目でも最低二人を集めるだけでいい。何なら佐倉やその友人に頼み込むという選択肢すら存在する。

5は何に関係があるのかは不明ながらc pが少しずつ減少しているのを確認している程度で、今のところ無料商品やPPとの関連性も不明。なにもわからない現時点では、c pがカレッジポイント・クラスポイントなどクラス単位・学年単位・学校単位・進学系統の何かを取得・購入するためのポイントではないかと推測している。

例えば、資格取得などの為に学外に出る、休んだことで取れなかつ

た単位を取得するなどだ。

僕で言えば今は980c pとなっているが、登校した2日で20c pを何かで消費したということだ。僕はこの何かをバイト許可ではないかと睨んでいる。このようにc pを消費してp pを稼いだり、逆にc pとp pで売買・トレードしたりして何らかの許可を得るために使うポイントなのではないだろうか？ その推測があっているなら一つ考えていることがあるのだが、実現するかはその時になってみないとわからない。

ここら辺の検証は一人では限界があるので、四方や佐倉にも聞いてみれば少しは見通しがよくなるかもしれない。

このように5つの目標がこの短期間に5番以外はほぼ達成しているのだ。ほとんどの達成に深く絡んでいる青娥さん様様である。

何が言いたいかというと、今日は余裕を持ってくつろいでいい日曜という最高の日であるということだ。小難しい考察など最高の日曜にするものではない。

では、何をするのか？

決まっている。

全裸だ！

新しい部屋、一人旅や出張でホテルに泊まった時、実家や自宅で誰もいない時。

こうした場合の僕は、まず風呂に入り、全裸のフルオンでアイスコーヒーを嗜み、ぐうたら寝転がりながら気が向けばお茶を飲み、今は無理だがいつもより良いタバコで一服する。そして1日中ひたすらごろごろして過ごす。

これらは禊のような儀式の一種ともいえる神聖なる行為なのだ。

裸になった時の僕の気分はまさに神そのものである。その領域の全ては僕のものであり、咎める者も水を差す者もないし、むしろ自分以外誰もいない。そうして支配欲と征服欲を満たして自己満足することが最高の日曜にふさわしい過ごし方といえるだろう。

僕は風呂にお湯を溜めながらいそいそと服を全て脱ぎ去り、僕の考える最高の休日を演出するのだった。

4月8日。

僕が神になった次の日は当然だが月曜日である。学生・社会人の多くが、聞いただけで気分が悪くなる地獄の曜日とも言えるだろう（偏見）。しかし、こんな日にも必要な行動というものが存在している。

それはつまり、天文部勧誘と創部だ。

一応、佐倉とともにアルバイトの申請書を事務所と生徒会へ提出する用事もあるが、事務所と生徒会にも書類を提出するだけなので問題はないだろう。生徒会についてはついでに聞いておきたい事もあるので、それと勧誘が上手く行けば一気に創部まで持っていける可能性もないことはないと思っている。

後から振り返ると、僕はこの日、目的をとんとん拍子に達成できていたことと前日のリフレッシュで調子に乗っていたのだろう。

凡人が調子に乗ると碌なことがない。

僕はこんなことも忘れてしまうほどに浮かれに浮かれて浮遊しているくらいだったに違いない。

いつもとは違い、授業時間から少し早めに登校して四方がいるかを確認し、四方の周囲から人が去っていくのを見て近寄っていく。

取り込み中だったら機会を待つことになっていたと思うので、僕が教室に来た時に話していた友達らしきクラスメイト達が離れていったのは僥倖というものだろう。

……僕が嫌われているわけじゃないよな？

脳裏をよぎったそんな考えを切り替えがてら消し去り、四方に声をかけた。

「おはよっす」

「左京？ おはよ。今日は少し早いんだな」

自分の席に座りながら後ろを向いて四方と挨拶を交わす。

四方は少しだけ意外そうにこちらを見たが、構わず本題を切り出していく。

「今日はちよつと四方にも用事があつてな」

「俺に？」

「天文部の創部に最低3人部員が必要なんだが、良ければ入らないか？ 勿論、嫌なら断つてもいいし、なんなら名前を貸してくれるだけでも十分ありがたいが」

こうした勧誘は意外と勇気がいる。

四方は説明会で前向きな事を言ってくれていたが、それでも会ったばかりで性格もつかみきれしていないから、気が変わっていないとも限らない。それに判断材料としては弱いが、キャットルーキーでは天体望遠鏡を買っていたぐらいだから興味はあるかもしれないが、もし本人だったとしても僕の知る四方は数年後の姿なのだから現在の興味が違つたとしてもおかしくはないだろう。

そんなわけで、断られる可能性はあると思っていた。

「ああ、もう行動してるんだな。勿論いいぞ。その入部届けに名前とクラスを書けばいいのか？」

「お、おう」

そう思っていたのだが、普通にOKしてくれた。

僕が差し出していた入部届けにさらさらと書き入れ、返してくる四方に安心しつつ驚きながら入部届けをクリアファイルに入れる。

「それと連絡先を交換しておこうと思うんだが、どうだろう？」

「そうだな。ちよつと待つてくれ」

そういうと四方は鞆からスマホを取り出し、こちらもあつさり交換できてしまった。

「受けてくれてありがとう。正直、すごく助かった」

「まあ、俺も左京に毒されて天体に興味わいてたし、説明会の時に約束したしな」

「毒とはこれまた手厳しい」

あまりしつこく感謝するのは僕の趣味ではないので、わざとおどけてみたが四方には伝わっているだろうか。最初の勧誘を乗り越えられたのは四方のおかげといつても過言ではないので、四方に何かあつたら必ずこの借りを返すことを内心で決める。

四方の勧誘に成功し、時計を見てみるとホームルーム10分前を指していた。

これぐらいの時間があればもう一つの用事も実行できるだろう。

僕は四方に最後にもう一度感謝と断りを入れると、今度は前の席の東風谷に声をかけた。

「東風谷、おはよう」

「やぎよ……」

声をかけた時に、いつの間にか近くに来ていた一之瀬と神埼（たぶん神埼のほう）が僕の名前を呼んだような気がしたので、そちらを見てみると数歩先で固まっていた。僕かあるいは東風谷のどちらかに用があるのかと思つて少しだけ待ったが、動かなかったので改めて東風谷の方に向き直る。

「東風谷、いきなり声をかけてすまん。話があるので少しだけいいだろうか？ それほど時間はかからないはずだ」

「……おはよう、ごいいます。かまい……ません」

東風谷は緩慢な動作でゆるゆるとこちらを向くと、挨拶と承諾の言葉を返してくれた。

彼女のことはほとんど何も知らないが、説明会の時や今の言葉を聞く限り、変でもあるが良い奴だと思う。この前のお化けの時には助けとして思い浮かんだ数少ない存在で、佐倉に聞かれた時の（聞かれたわけじゃなかったっけ？）友達枠でもある。

葛城や戸塚と違って、折角クラスメイトで席が前なのだから、女子である為に声をかけ難いという点を考慮に入れても勧誘しようと思つていた。勇気の貯蔵も四方が成功したことで十分とはいえなくともある。

「さつきから後ろで話してたから聞こえてたかもしれないんだが、今は天文部の部員を勧誘している。良かったら東風谷も入らないか？」

「……なんで、私……なんですか？」

「なんとなく？」

「……」

ところで関係ないと思うのだが、東風谷に声をかけてからなんか視線をえらく感じる。そんなに僕が女子に声をかけるのがおかし……もしかしてナンパか。ナンパだと思われていたりするのだろうか？ 見てる奴らは僕が変な動きをしないか監視しているのかもしれない。

思い当たった心当たりに気分が落ち込むのを感じながら、今は東風谷の勧誘だと無理やり切り替える。

「あ、あらかじめ言っておくと、馬鹿にしてるとかナンパとかじゃないぞ。……この学校に来てまだ短いけど、なんとなく縁のようなものを感じるというか、勘だけど友人になれそうな気がするんだよ」

「……天文部。……なにを、する……つもりなんで、しよう？」

「お？ 興味でてきた？」

「……少しだけ」

東風谷に言うと同時に周囲へも言い訳するテクニクを披露していると、東風谷が興味を持ったのか質問してきた。

「まだ創部できてないから確定じゃないけど、月1回か2回、夜に屋上や公園で天体観測するだけの予定だよ。月や星の蒞蓄が聞きたいなら喜んでするし、天体望遠鏡ももう買ってある。あとは長時間の観測をするような場合は夜食も作ったりする、くらいかなあ」

もっと必要な事はあるかもしれないけど、一言で言うなら夜空を眺めるだけだと思ってる僕がいた。

「二応、活動実績が必要かもしれないから文化祭の時とかは誰かにカメラを借りて撮影したりそれを展示はするつもり。それと四方にも言ったけど、ぶっちゃけ僕だけでも最低限の活動は出来るから、最悪名前貸してくれるだけでも十分助かる。勿論、一緒に活動できるならそれに越したことはないけどな。……こんな感じだがどうだろう？」

文化祭の際、僕が佐倉のカメラを当てにしているのは、言う事でもないだろう。

東風谷は渾身の勧誘トークを吟味しているのか静かな目を僕に向けているが、言いたいことは全て言っただけで東風谷次第であるの

で、こちらとしては入部届けを出して期待を込めながら見つめ返すだけである。

「……………お誘い、ありが、とう、ございます。…………よろ…………しく、おねがいします」

「こちらこそありがとう。よろしくな、東風谷」

僅かな時間見つめあつた後、東風谷は入部届けを記入して承諾の返事をしてくれた。

最後に朝っぱらからナンパした野郎だと思われていた事を払拭できたかと周囲を見回すと、一之瀬と神崎がまだ固まったままこちらを見ていたので、僕はフツと笑ってこう言い放つた。

「一之瀬、神崎。そろそろホームルームだぞ。早く席に戻った方がいいんじゃないか？」

人の話を堂々と立ち聞きして変な監視してるから、僕などに反撃を許すんだぞ？

不思議そうにこちらを一度見て素直に自分の席へ戻っていく二人を見送りながら、しばらくは調子に乗りまくって謎の上から目線な僕の内心だったが、よりによってクラスの中心人物的な美少女へ偉そうな言葉で注意してしまった事にホームルームの最中やっとなりつき、やっちなまつたと後悔することになった。

11、努力

ホームルームの間は、一之瀬に謝った方がいいのだろうか？とかグルグル考えていたりしたが、条件反射というものか1限目が始まる頃にはすっかり頭が切り替わっていて授業に集中していた。ちなみに一之瀬と一緒にいた神埼に関して、昼に事務所へ行った帰りに外へ食べに行ったファミレスでようやく思い出したが、野郎に謝罪する分にはそこまで問題ではないのでなんかの機会に一度話せば何とかなるだろうと放置することにした。

結局一之瀬には次に話す機会があれば開口一番で謝罪しようと思え、気が楽になった僕は茶をすすった。3年あるんだから、いつかはまた話す機会が訪れるだろう。

午後の授業からは憂いがなくなった為、合間の休憩時間でもボーっとすることができて四方や東風谷に声をかける余裕も出来ていた。

四方はともかく、東風谷と連絡先を交換するのを忘れていたことにもこの時に気づいてすぐ交換できたのは後の事を考えるとよかったのだろう。こういうことは時間が経つごとにやり難くなっていくから、早く済ませておくに越したことはない。東風谷も思い至っていなかったらしいので、二人して抜けていたなど笑いあつてこの件は終了した。尤も東風谷の方は相変わらずの表情であったが。

放課後、佐倉と待ち合わせして生徒会へバイト申請の書類を提出しに行く約束をしていたので、遠回りなDクラス方面を横切りながらゆっくり歩いて生徒会室へ向かう。一人で向かってよかったが、佐倉の内弁慶っぷりを知っている身としては、彼女が話すどころか生徒会室に入ることすら成功判定が必要なレベルだと思っていたので、たいした手間でもないし僕らの精神安定のためにも一緒に行くのは都合がよかった。

「左京君！」

そうしてゆっくり歩いていると、背後から声をかけられた。佐倉が

小走りにやってくるのは階段を上っている時に一度見えていたので、僕は特に何を思うでもなく振り返って挨拶した。

「ちわ」

「はあ、はあ……ふう。……ちわ、じゃない、よ。気づいたなら、待つてくれても」

「目的地は一緒なんだし、そこまでに合流できればいいかな、と。それに面倒だし」

今の佐倉は内弁慶モードなのか乱れた息を整えると文句を言ってきた。

どうせ生徒会室に着いたら、引込み思案へとシフトチェンジするだろうと思っていたので適当に返す。実際、到着まで合流できなかったら生徒会室の近くで待つているつもりだったのだ。

「それって面倒なのは5割だよね！」

「うんうん、佐倉も僕をわかってきたようになにより」

まあ、面倒と思っているのが5割なのも間違っていない。事務手続きなどというものは、たらい回し前提で考えて効率重視に素早く面倒事を進めてしまうのが比較的に乗なのだ。

「わかったというよりも、わからせられた気がするんだけど」

「……佐倉、わからせ、はマズイ。二度と口にするんじゃない」

「……………なんで?」

そのワードを聞いてどこからともなくメ〇ガキ風佐倉のイメージが飛んできたが、彼女には似合わないことこの上ない。しかし詳しく説明するわけにもいかず、注意だけをするに留めた。

佐倉はわけわからないと顔に出ていたが、そのままわからない期間をなるべく延長させたいと汚れている自覚のある僕は思った。

「ノックは3回でよかったっけ?」

「た、たぶん?」

思わぬところで自分を振り返る機会が訪れていたが、生徒会室が見えてきたあたりで目的を思い出して、ちよつとした疑問を口からこぼす。佐倉もよく知らないようだったが、間違えてもたいしたことでは

ないので気にせず扉をノックした。

「え！ まだ心の準備が……」

「入れ」

生徒会室の中から許可が出たので、まごまごしている佐倉の背中を軽くたたいて扉を開く。

「失礼します」

「し、しちゅれいしみやす」

不覚にも、佐倉のなんかふにやふにやしてる『失礼します』に噴出しそうになった。何とか下を向いて笑いを堪えたせいで、用件を切り出すのが少し遅れてしまった。

僕に不意打ちトラップを仕掛けてきた張本人は真っ赤になって俯いているので怒るに怒れない。

「……1—Bの左京夢月です。本日は、アルバイト申請に来ました。よろしく願います」

佐倉を見てみるがまだ言葉を出すのは無理だろう。でも何も言わないのも印象悪くなりそうだ。

代わりに紹介するべきか迷っていると、入室許可を出した声の男が口を開いた。

「生徒会長の堀北学だ。申請なら書記の橘に言うといいだろう」

目線で指された先にいたのは、軽く手を振っている温和そうなお団子髪の女子だった。おそらく彼女が橘書記だろう。

これはフォローされたのだろうか。

入室早々に噛んでしまったこともあるだろうが、佐倉が僕の想像以上に萎縮している。自分よりも人当たりのいい同姓に対応させることで落ち着かせる算段のような気がする。

もし違ったとしても僕はそう感じたのだから、一言お礼を言っておくのは礼儀だろう。

「お心遣い、ありがとうございます」

「……ほう」

堀北生徒会長は、意外そうにこちらを見たがそれ以上は口に出すことなかったので、僕は生徒会長に目礼した後でいまだ萎縮している佐

倉の背中を押しながら橘書記のところまで進んでいった。

それは突然のことだった。

でも僕の見るところ橘書記のとしたその後の対応は最善に近いものだったのだろう。

萎縮して俯いて大人しくしていた佐倉は、僕が背中を押しして移動している時に唐突に顔を上げたかと思うと、何故か必死そうに涙目で自分の名前を叫んだのだ。

「わたしは佐倉です！ 佐倉愛里です！」

本当に唐突過ぎて僕はフォローどころか動くことすら出来なかった。そもそも何で佐倉こんな行動に出たのか全く理解できなかったのだ。その為、再び静寂が訪れても僕は何らかの行動に出ることが出来なかった。

出会って数日。僕が佐倉について知っていることはそう多くない。というか少ない。

当然だ。佐倉や他の友達に限らず、誰かに口にしらない不安や悩みなどがあつたとしても、僕は基本的に気にしないし深入りもしない。そんな僕が、その誰かの押さえつけているものが噴出した時に何かが出るわけがない。

そんな関係あるのかないのかわからないことで頭を空転させていた僕だったが、橘書記は違った。

「佐倉さん、少し向こうで話しませんか？ 大丈夫です。なんとなくわかるような気がするんですよ」

佐倉にそう言うと、生徒会長へは目線かなにかの方法で、僕にはここで待つように言ってから、奥の部屋に一緒に行ってしまった。

橘書記に任せておけば大丈夫。

初対面だし、根拠もないが僕の勘はそう教えてくれていた。

一見では頼りなさそうにも見えていたが、僕などよりもよほど有能だったということだろう。

佐倉が落としていった書類を拾い集めて、待てと言われていたテー

ブルと椅子のところそれぞれ書類をまとめていく。とはいっても、バイト関係が僕と佐倉でそれぞれ3枚、天文部の創部申請書・屋上の使用許可申請書と入部届け3通なので、合計でも11枚の紙切れだ。

「バイトもそうだが、うちの学校で創部とはな」

自分で思うより注意力が落ちていたのか、いつの間にか生徒会長が近くに来ていることに気づいていなかった。どうやら佐倉と行ってしまった橘書記の代わりに書類の受理をしてくれるつもりのようなのだ。

生徒会長が仕事をするというのに、いつまでも混乱してどうする。僕は一度深呼吸すると、普段の自分をイメージして無理やり落ち着いて口を開く。

話をしていれば、きつといつもどおりに振舞えるだろう。

「バイトはともかく、創部は部活動説明会に行った時に天文部がなかったので苦肉の策ですよ」

「そうか」

「ああ、そうだ。生徒会長に聞いておこうと思つた事があるんですが、今言っちゃってもいいですか？」

「なんだ」

返事は単語だが、書類だけでなく僕にも意識を向けているのはわかるので、気にせず聞いておこうと思う。ここにくる機会はないはずだから、少ない機会を逃せばもつたない。

「CPで部活の顧問を雇うことって出来ますか？」

「……なに？」

「いや、CPつてのが残高照会ページにあつたんで担任にも聞いたけど教えてくれなかったので、少し気になってここ何日か観察していらんですけど少しずつ減ってるんですよ」

「……」

「僕が思いついたのは、学校や資格関係の権利かなにかを買ったりするポイントなんじゃないかなあって」

「……」

生徒会長は早くもチェックや受理作業が終わつたのか、バイト関係

の書類を持っていたファイルに挟んで、部活関係の書類を僕の前に置いて、少し探るようにこちらを見てくる。

「例えば、入学から2日登校して20CP減ってたのはバイトの申請に消費されたんじゃない、とか思えて。多少飛躍してますけど、この推測が正しければCPで天文部の顧問を雇ったりも出来たりするかも、と」

「ひとつ聞きたい」

「何でしょう？」

「その考えを誰かと共有したか？」

「いえ。正直、入学から数日色々動き回りすぎてて、じっくり誰かと話すことすらほぼしてなかったことについて先ほど気づかされました。情けないことに」

「だろうな。……お前の発想や観察力は面白いし、推測も完全に間違っているというわけではない」

僕は自分の前に置かれた書類を片付け、生徒会長との話を続けたがこの流れは……。

「だが、お前は個人に視点が偏りすぎている。視野を広げることが出来ていれば、気づくことは他にもあっただろうな」

うん。途中から薄々感づいていたが、どうやら顧問雇用は出来ないらしい。しかし流れが読めてきたので出来れば変えたいが……おそらく無理だ。僕は諦めた。

生徒会長の反応から、CPではなくPPなら場合や交渉によっては可能性があるかと新しく推測できるようになったのが収穫ではあるが、これもやはり四方とかの頭良い奴に確認を取ってからがいいだろう。僕のような凡人では所詮ただの思い付きだという考えがどうしてもわいてくるのだ。まあ、相談や確認を実現できるかは僕の気分次第なのがなんともいえない現実なのだが。

それにしても話してて改めて思うのだが、この学校は生徒会長といい、先生といい、思わせぶりな事ばかりで面倒臭い。

もつとはつきり、これは○○だよ、とか言っほしい。

まあ、それはともかくだ。

この生徒会長が努力家なのは十二分に伝わりすぎてきたが、佐倉と橘書記が戻ってくるまで二人で話しながら雑用を手伝うことになった僕の身になってみてくれ。

そうだよ、生徒会長が忙しそうにしてるの見て、つい佐倉たちが戻ってくるまで手伝いますって言ったのは僕だよ。だけど、普通に遠慮なくこき使ってくるし、助言という名の説教で精神攻撃することないだろう。

特に初対面の後輩に、言葉や表現を変えて次々に努力の押し売りしてくるのはやめてほしい。僕は努力なんか嫌いだと何度口から出そうになったことか。更にはその押し売り品の中に時折玉を混ぜるのだから、話すのと考察でめちやくちや頭を使う羽目になるのだ。

きっとこの人、友達いないだろ。

佐倉達が戻ってくる頃には、この見立ては確信に変化しているだろうと確信していた僕が死んだ目で雑用をこなしていたのだった。

そう僕は努力が嫌いである。

普通の人間には努力できる環境にも時間にも限界や制約があるし、失敗も挫折もある。努力という意外と限界点が低い行為を他人がするのを否定はしないし応援も一応するが、僕には必要ない。

また何か失敗したときに努力が足りないという奴もいるが、失敗⇨努力不足と考えている奴は努力⇨成功と考えている事が多いように見える。生徒会長はそういう輩ではないが、努力そのものよりそういう奴が僕は何より嫌いだ。

ただ、僕自身が努力が嫌いなのは変わらなかつたが、この厳しいが優しい努力家とこの時に話せたのは良かったのかもしれない。

まあ馬車馬にされた上で念仏聞かされたかのような一時を過ごすことになつても、このなんとなく良かったような予感がするせいで、この生徒会長を嫌いになれなかつたのが少し悔しかったのも嘘偽りのない本心なのだ。

12、羨望

「左京君！」

佐倉と橘書記は僕が雑用を始めて30分ほどで戻ってきた。

二人とも表情は明るく、仲良くなったことが窺えて羨ましかった。僕は会長（いちいち生徒会長と呼ぶなど言われた）の作り出す説教地獄を味わっていたというのに、佐倉は優しそうな橘書記と親睦を深めていたのだ。そして何が原因であんなったかは未だにわからないが、現在は笑顔を浮かべてこちらに向かってくるほどの回復をしている。

橘書記のカウンセリング能力が素晴らしいモノだとわかったのは喜ばしい事だが、僕の状態がわからないのは減点である。

「佐倉」

「会長、ただいま戻りました」

「ご苦労」

僕が佐倉に呼びかけている横で会長と橘書記は穏やかに言葉を交わしているが、僕は佐倉にあることをしたくてたまらなかった。そして会長と接した実感から、そこまで怒らないんじゃないかね？と考えが至った瞬間、何かを話そうとしていた佐倉に対して行動に出ていた。

「左京君、あのね！ わたし」

端的に言うと、僕は佐倉の顔面に手を伸ばし、力の限りアイアンクローした。

「えええええ！……あだ、あだだだだっ、ちよ、痛い痛い！ え、なんでえ！」

「僕が地獄で閻魔に絞られている時に、自分だけ優しげな橘書記と天国で過ごしたことについて何か思うことは？」

もしかすると僕の見当違いである可能性も僅かにある為に、少し力を緩めて言い分を聞く姿勢を取る。勿論、手は顔面から離さないし、逃がすつもりもないから佐倉の肩をもう片方の手で抑える。

僕は某ラノベ主人公のごとく真の男女平等を体现する男。女子が相手であろうとも、アイアンクローだろうがドロップキックだろうが

敢行する用意がある。

「地獄で閻魔って……会長なにしたんですか？」

「仕事を手伝うと言うから、雑用をやってもらったついでにいくつか助言しただけだ」

会長と橘書記が何かを話しているのは認識しているが、今の最優先は佐倉である。

「茜先輩はわたしを落ち着かせてくれて、色々アドバイスしてくれただけだって！」

「ぎけんな！　なんで佐倉は優しげな橘書記で、僕が閻魔なんだよ！

羨ましくてしかたないだろうが！　しかも下の名前を呼ぶ夢のシチュエーションの一つをさらっとこなしてるなんて、いつの間に内弁慶モードを橘書記に適用できるようになったんだよ!!　羨ましいを通り越して、もはや妬ましいわ！」

「内弁慶モードってなに!?　いや、それ以前にそれって八つ当たり……」

「そうだよ！　八つ当たり以外の何物でもないよ！　悪いか!？」

「開き直った!？」

アイアンクローの姿勢で言い争いあっていた僕と佐倉は、数分後の生徒会室のソファで並んで小さくなっていった。いや、正確には佐倉だけが小さくなっていった。ちなみに会長は佐倉を気遣ったのか少し離れている執務机で業務の続きをしている。

佐倉が小さくなって、僕がそのようになっていない理由は簡単である。

なぜなら、僕は雑用業務の対価をもらっていない。そしてその対価を勝手に徴収した気である為に、貸し借りなしのトントンと気楽に考えているから。つまり騒いだことを雑用の対価として徴収した、ということにして僕は脳内を改竄していたのだ。

これができるのできないのではストレスのたまり具合が違う。ブラック企業に生きた経験が、僕の傍目からは堂々とした態度と気分

を支えているのだろう。

……すごい嫌だな、それ。

「全く入学早々、生徒会室で騒ぐ新入生なんて前代未聞ですよ」

「すいませんでした」

橘書記はため息交じりに僕と佐倉に説教している……つもりなのだろう。

しかし佐倉はともかく、社会人経験と先ほどの説教地獄を乗り越えた僕にはぬる過ぎる。唯一、罪悪感を刺激される手法は僕にも効くが、先ほどの八つ当たりで言いたいことは大体言えてスッキリしている僕にとつてはたいしたダメージではない。

佐倉も小さくなっているし、反省もしているっぽいのが、橘書記という下の名前を呼ぶほど親しくなっていた相手ならば、緊張したり固まったりはないのだろう。これがもし会長であれば、またもや硬直していた可能性は高いように感じる。会長もそれを察して橘書記から言われたこともあって、任せて仕事に戻ったのだろう。

「あの、なんでそんな目で私を見るんですか？」

ふと気づくと橘書記が不思議なモノを見る目で尋ねてきていた。

佐倉の方かと思ったが、どうやら僕らしい。

「え〜と、意味がわからないんですが」

「……左京君、茜先輩を見る目がキラツキラしてる」

佐倉に指摘されて、少し考えてみると答えは直ぐに見つかった。おそらくアレが原因だろう。

「たぶん尊敬と感謝がにじみ出たからじゃないですかね」

「尊敬と感謝？」

「はい。だって、あの閻魔……会長を討伐、じゃない調伏して、後の仕事を任されてたじゃないですか。あの単独で全部やりそうで友達いなさそうな会長に、ですよ？ 僕は今日ほんの少ししか関わってないけど、きつともものすごいことですよ、これは！」

「言い直せてないよ。たぶん調伏じゃなくて説得とかなんじゃ？」

「……会長のイメージがえらい事になってる」

佐倉と橘書記はちよつと引いてるっぽいのが、個人的には会長は魅力

もある有能なパワハラ上司になる素質がかなり高い部類だと思う。

そして僕の経験上、こうした人間から本当に信用・信頼されるのは至難だ。能力だけではだめ、信じるだけでもだめ、相性の良い人柄・性格だけでもだめ。全て揃っていても忍耐力もかなり高いものを要求され続ける。

橘書記は、これがある程度クリアしているのだ。これは尊敬に値する事だろう。

「……それに、橘書記は友人で同僚の悩み相談もしてくれたいみたいで、すし、その他にも色々フォローされていたのはなんとなく感じてたので、そりゃあ流石の僕でもお二人に感謝ぐらいしますよ」

「左京君」

「あ、でも会長の方には感謝してるとか伝えないでくださいね。こき使われて嫌いになりたかつたのに嫌いになれなかつたのが少し悔しいので」

「……左京君」

同じ僕の名前を呼ばれたのに、何でこんなに聞こえ方が異なるのだろうか？

ちなみに余談だが、橘書記による説教が終わり、生徒会室を出る時。

佐倉が橘書記と話しながら連絡先を交換しただろう事を匂わせる仲の良さの横で、何故か僕は会長に威圧的に睨まれ（いや本人的にはただ見てるだけかもしれないけど）ながら会長と『だけ』連絡先を交換していた現実には、佐倉への羨ましさが再び溢れてくる事を僕は止めることができなかつた。

……僕も橘書記ルートが良かった。

鞭である会長ルートと飴である橘書記ルート。

この二つがあるなら飴の方を羨望してしまうのは、人として仕方のないことであろう。

13、珍客

入学から忙しくしていた僕だったが、生徒会室へ申請に行ったの境に、やるべきことがだいぶ減り、この学校での生活にも慣れてきたのかある程度のルーチンができて、ようやくのんびりできるようになってきた。

朝のぎりぎりを狙って登校し、四方と東風谷に挨拶。

それから授業を真剣に聞き、時折わからない箇所があると四方や東風谷、先生に質問したりして合間の休憩時間に解決することで勉強を授業限定にして手抜き準備に余念はなかったと思う。

昼食では半分を自炊の残り物弁当を学校傍の水路で、半分を安い無料の飯を学食で食べて使いすぎているポイントの節約に努めていた。それとまだ一回ずつだが、水路では東風谷と、学食では四方とじっくり話しながら食えることができたのは、佐倉の轍を踏まない布石の第一歩となったことだろう。

特に東風谷は、しばらく口を開いてないと上手く喋れなくなると言っていて、ヒキニート時代の僕を髣髴とさせ親近感が沸いた。四方を除いたクラスメイトの中で最初から妙に東風谷に好印象があったのは、たぶん神様やお化けなんかが原因ではなくて、こうした者特有の暑い日に見つけた空白の木陰と涼しい風セットのような東風谷の雰囲気のせいかもしれない。それが少し話せて思った僕の印象である。

放課後は、バイトに行くか、ふらふら歩き回って観測スポット探索をしていた。

その甲斐もあってか屋上以外に3箇所ほどの天体観測できるスポットを発見し、木曜日には最初の月見の会を開催できた。部員である四方と東風谷が参加してくれたが、佐倉も誘ったら来てくれて屋上で4人で月見をした。

ただ月を見て、合せておいた天体望遠鏡をみんなで回しながら月見団子を食べ、時折僕が解説したり蘊蓄を披露するだけでみんなはあま

り話していなかったが、友人と夜空を眺めるだけで僕は満足したのでやはり無理してでも創部してよかったと改めて思ったりもした。

それとバイトに関しては、やってみると意外とキツイ日もあり、特にパソコン周辺のインフラ整備を青娥さんに頼まれた時は土日の2日掛かりの大仕事で、その間の掃除と料理の研修などは佐倉任せになってしまったので、二人してヒーヒー言いながらこなすことになった。一応、当初の甘い予測とそう離れていない楽な日もあったのだが、大変な日の印象が強くていつ大変な日に襲来されるか僕と佐倉はしばらく戦々恐々とする事になっていた。

しかし関係ないが、客がここまでまったく来ていないのだから、実は喫茶・芳香は喫茶『店』ではないのではなからうか？そんな疑問が頭を駆け巡る今日この頃である。

しかし一見では順調そうに進んでいる新しい日常だったが、問題がないわけでもない。

まず、まだ天文部は正式に発足していないこと。

そう顧問である。

活動が活動なだけに部費と部室はなければいけないでかまわないと考えて、申請の時の部室は正式な部に昇格するまで屋上と僕の自室でいいですか？と会長に確認をとったから問題ない。部費も出ないことだけはわかっていれば支障はない。

だが、顧問だけは名前だけでもいないとどうしようもない。

一応、四方が担任の星乃宮先生に聞いてくれたのだが、この学校では担任を務める教師は新しい部活の顧問ができないとのこと。なので、授業に来る各学年の担任以外の教師が来る度に打診しているのが結果は芳しくない。

そしてもう一つは――

「四方！ 今日カラオケ行こうぜ」

「うちだけじゃなくて、Dクラスの女子も来るらしいぞ」

「四方、相談したいことがあるんだが」

化学の授業中のグループで、クラスメイト達から親しげに話しかけ

られている四方を含んだ男子中心のグループ。

ポツリポツリと会話するだけで基本無言の時間を過ごす僕と東風谷、そして名前すら覚えていないなんか色々キツイツインテールの女子の3人グループ。

ついでに、グループがいくつも重なったような一之瀬の大人数グループ。

淡々と実験とレポートを進めていく僕のグループは問題ないのだ。

こうした理系分野において東風谷は独壇場といつてもいいほどの手際の高さを見せるし、最後の一人の名前がわからないから呼ぶときに困ったりするが、何気にこのツインテール女子とはグループ作業が必要な授業では余り者同士で何度か組んでいる上、名前を呼ぶ機会も来ないから知らなくても君とかで誤魔化せたりする。

問題は、盛り上がっている四方のグループである。

といっても四方やそのグループメンバーに問題があるわけではなく、クラスメイトと仲良くしている四方を見ると、もしやと思える推測が頭をもたげてくるのだ。

僕の後ろの席にいる四方は、僕と話している時と授業中以外はかなりの頻度でボーとしている。誰かが話しかけに来たり、スマホをいじったりということをあまりしないのだ。

しかし四方が席を離れたりと、神埼や他のクラスメイト達が四方に寄っていつて声をかけたりするところは何度も見ている。

……前からうすうす思っていたけど、これは本格的に僕が嫌われるとかで避けられているのでは？

教室にいるのは基本授業中と短い休憩のみというBクラスの中でもトップを争うほど短い滞在時間な僕なので、嫌われているのはただの思い過ごしである可能性もある。だが、教室で座っている方に話しかけにクラスメイトが来ない理由があまり思いつかない。

「考えすぎない方がいいですよ」

「……チツ」

「すまん」

手は動かしていたのだが考え込んでるように見えたのか、最近挨拶

や話すことが増えてスムーズに話す事が可能になった東風谷とツインテールに窘められてしまった。まあ、ツインテールの方は舌打ちだったわけだが。

僕は二人に一言謝ると意識を切り替え、手順を再確認しながらレポートを集中して埋めていった。

授業が終わって、昼食の時間になったので今日は屋上に向かう。

天気が良くて絶好の日向ぼっこ日和なのだ。こんな日は時間いっぱいまで何も考えず寝転がろうと、屋上につながる扉の脇に置いておいたデツキチエアを少し陰になっている場所に設置してダイブする。そして遅刻防止のタイマーを作動させ、持ってきていた水筒からお茶を入れてひと啜りの後、弁当を食べはじめ。

こういうのんびりした時間が僕は最も好きだ。

誰かと食べるご飯や話したりする時間も好きではあるが、一人静かにお茶を啜って空や景色を眺める時間はまた違ったモノが自分を満たしていく感じがする。

学校生活は騒がしく、耳を塞ぎなくなる時がある。別にそれが嫌いなわけではないけど、時折こうしてぽっかりと空いた空間で何も考えたくなくなったりする。でもそういう時こそ、取り留めない考えが浮かんできたりするものだ。

そんなことを意味もなく考えていると、バカムゴツ、という大きな音がして屋上の扉が開いて誰かが入って来た。

「あゝ、もう、しんどく」

そんな疲れたOLのような雰囲気です屋上に来たのは、またもや可愛い系の女子だった。

この学校、なんでこんな容姿が良い奴が多いのだろうか？そんな疑問がわいてくるが、その間もその女子は目の前で愚痴をこぼし続けている。

「山内も池もキモすぎだつての！ 人の胸じろじろ見すぎで鳥肌収ま

んない！ ホント、マジであいつら死ねばいいのに」

色んな名前を次々に罵倒しながら愚痴をこぼしている女子は、乗ってきたのかだんだんテンションが上昇してきた。胸とか言ってるし、大半が男子なのだろうか。

「ほんと、最っ悪！ アイツ、ちよつと可愛いからって調子こきやがって！ 大体なんで同じクラスなんだよ！ マジで最悪も最悪。絶対追い出してやる！」

言い放つと同時に、女子とは思えない鋭い蹴りを目の前にあつた貯水タンクに叩き込んだ。

「掘北！ 死ねっ！」

ガンツという音がついさつきまで静かだった屋上に響き渡り、最後に悪態をつくところを振り返った。

——そして、デツキチエアで寝転がっていた僕と目が合った。

「は？」

「あ、ども」

同じ場所を使っているわけだし、目があつたので一応挨拶はしたが固まっている彼女を見て自己紹介はするべきか悩むところだ。独り言のつもりで愚痴をこぼしてるところを見られる恥ずかしさは僕も理解がある。しかし、寝ていたらあれよあれよという間に事態が進行してしまつた僕に何ができただろう。

静かに速やかに屋上を出る？ 無理。屋上の扉は彼女が入つてきた時にすごい勢いで閉まつたし、開けたら結構音が響く。

どこかに隠れる？ 無理。彼女がいる貯水タンク付近か今僕がいる建物の影くらいしか物がないのにどこに隠れるというのか。

早いうちに声をかける？ 無理。あんな来てすぐに愚痴を吐きまくってた彼女がいたのに、どこにそんなタイミングが存在するということだ。

「あんた、誰？ いや、それ以前にいつからここに！」

僕が悩んでいると、彼女の方から問いかけてくれた。ちよつと混乱？ してるっぽいが、これは乗るしかあるまい。

「えつと、大体昼休みが始まつたあたりから居たよ。ここはうちの天

文部が許可取ってるから、時々来るようにしてるんだ」

「……」

「それと僕は天文部の左京夢月……です」

話す毎に、もはやこちらを睨んでいるといっても過言ではない目付きにビビッて、つい敬語になっていってしまっていたが仕方ないだろう。怒り狂う女子が怖いのは万国共通の常識であるからして。

「……で、クラスと学年は？」

「1年B組です」

「よりによつて同学年のBクラスか」

何か不都合でもあったのか渋い顔だが、こちらとしても聞いておかないといけないことがあるので、恐る恐る話を切り出したみた。

「それで、その、貴方様のお名前などお尋ねになつてもよろしいでしょうか？」

「Bクラスなのに私を知らない？ あんた、ほんとにBクラス？」

「え、もしかしてなんですがクラスメイトだったりしますか？」

「ちがうけど」

「……知ってないとマズイ人だったりは」

「しないから！ ああもう、私はI—Dの櫛田桔梗っていうんだけど、ほんとに知らないの？」

こう言うということは櫛田は有名人なのかもしれない。

しかし四方や東風谷との話では出てきたことがないと思うし、Dということとは佐倉と同クラスのはずだが彼女からも聞いたことはなかった。というか考えてみたら、佐倉から自分のクラスの事を聞いたことすらなかったかもしれない。

まあそれはそうと、櫛田が落ち着いてきたっぽいからこちらも口調を元に戻そう。

「えつと、悪い。正直、名前を聞いたこともないと思う。というか普通、半月じゃ他クラスどころか自分のクラスの奴すら覚えきれてないだろう」

「ん、あれ？……まあいいか」

櫛田は、僕が口調を戻した違和感があったのか少し疑問に思ったよ

うだが、落ち着いたらならさつきと話を進めたかったので用件を聞くことにした。

「それで僕に何か用でも？」

「あー？……あ、そうだった！ あんた、さつきのを見てたでしょ」

「さつきのつて、あの堀北死ねキツク？ えくと、鋭い蹴りだったね？」

「誰が蹴りの感想を言えと言った!？」

「他の心当たりは……僕の位置からだと言ったとパンツは見えてないぞ」

「違うから！」

「じゃあ何なんだよ。他に思い至ることはないぞ」

櫛田は謎の食い下がりを見せているが、僕としては蹴りとパンツのことしか印象に残っていないのでだんだん面倒になってきた。ちなみに蹴り足を戻した直後に見えたパンツの色は薄ピンクであった。

「ああもうっ！ 今、見て聞いた事を誰かに言うなっというのよっ！ それくらいわかれ！」

「女子のパンツのことなんて言えるわけないだろう。僕が人格を疑われるわ。常識で考えろよ」

「だあああ、パンツはどうでもいいってのよ！ いや、よくはないけど！」

「本当に何なんだ、この女。どうでもいいと言ったり、よくないと言ったり。」

「情緒不安定か？」

「誰が情緒不安定よ！」

「櫛田」

「おあああ、あああああっ！」

心の声が漏れて聞き返されたから答えたのに、今度は吼えだした。

まだ昼休みは半分ほど残っているが、今日の昼はこの珍客の相手で潰れそうな予感がした僕はため息を漏らした。

とりあえず情緒不安定で興奮している櫛田を冷静にさせる為、以前

の月見で使った椅子や紙コップを出してきて、お茶を入れて差し出してみる。今は狂乱していたのが嘘のように不気味な沈黙を保っているが、いつまた暴れだすかわかったものじゃないので腫れ物に触るような気持ちで接してみる方針で行くことにした。

「少し熱めだから気をつけてな」

「……」

「んじや、なんか話したくなったら声かけて」

まだ時間は充分に残ってるし、こつちを見ているとはいえ無言なら相手をしなくていいので助かる。一声かけた僕は、座っている櫛田から覗き容疑をかけられないようにデツキチェアの位置を調整して配置し直し、櫛田から背を向ける形で寝転んだ。位置がずれた為に少し眩しいが、これもまた一興というものだろう。

「……ねえ、あんたさ、さっきの私ってどう見えた？」

「んー？ 愚痴を垂れ流すところを知らない奴に見られてどうしよう、って感じ？」

寝転がってしばらく経ってから櫛田は口を開いた。

僕としては思うところをそのまま返したただけだが、どうも櫛田からするとトンチンカンな答えだったようで、再度質問を投げかけられてしまった。

「そうじゃなくてさ。」

「……私って可愛いし性格も良いから普段は人気者だし、1年生だったら一部を除いてほしい友達なんだよ。それで、さっき私が罵倒してた奴らって、友達だったりクラスメイトなんだよね」

「へえ」

どうしよう。びっくりするほどどうでもいい。

「もしバラされたらみんなに嫌われる。でも私はみんなに嫌われたくない。その為にも、あんたがバラさない確証がほしい」

「……はあ。さっきも言ったけど、誰がそんなことバラすんだよ」

「信用できない……って言うおうとしたんだけど、なんか自分でも不思議なことに本当にバラさないような気がするのよねえ」

「そもそも不満解消に愚痴こぼしたり、物に当たったりするのは誰で

もやったことくらいあるだろう。そんなことバラすもバラさないも
ないと思うんだが」

クレヨンし○ちゃんネ○ちゃん母娘みたいなもので、別に誰にも
迷惑かけてない奴で外面がしっかりしてるなら問題ないと個人的に
は思う。

「……うくん。私、人を見る目は結構自信あったんだけど、一部を除い
て嘘は言っていない……気がする」

「そうだろう、そうだろう。実際に嘘なんてついてないし、バラすつも
りもないからな。……ん？ 一部？」

「うん。えっと確か『僕の位置からだどパンツは見えてない』だったか
な」

「え」

僕が思わず櫛田の顔を見ると、確信を得たように口角を吊り上げて
笑顔に変わっていく櫛田がそこにいた。

まさか最もバレてはいけない嘘を本人に解き明かされてしまった
のでは？

「それじゃあ、左京君？ お互いに秘密を握り合ったところで戻ろっ
か。そろそろ5限目始まるよ！」

「……ッス」

「ああ、一応連絡先交換しとこ？ なにかで役に立つかもだし」
「……」

無言で端末を差し出した時に見た櫛田の笑顔は、これまでにないほ
ど邪悪に黒光りしていた。

……ところで、なんか聞くタイミング逃し続けてたんだが、堀北つ
て会長のことじゃないよな？ 同じクラスとか言ってたし、何よりあ
の人が可愛く見えるとか末期にもほどがあるもの。

僕は快晴の青空の下、そんなことを思いつつ、暗澹たる気分を味わ
いながら屋上を後にするのだった。

14、一手

櫛田と事故った次の日、登校すると心なしか教室内がいつもより騒がしいというか嬉しそうというかで、浮ついているような気がした。

あの事故は、昨日時点ではともかく現在では大事だと思っていないのだが、もしかして深層心理では意外と影響があったりするのだろうか？ つまり僕の心持ちのせいで、教室の空気がいつもと違うような気がするのかと僅かに考え、四方に探りを入れることにした。

「四方、今日なにかあった？ どう言えばいいのか教室内の空気というかがおかしい……ような？」

「ああ、たぶんあれじゃないか。先週告知があった水泳」

四方と東風谷に挨拶をした後に濁して聞いてみると、あっさり要因と思われるものを教えてくれた。僕側の理由じゃなくてよかったと安心しながら、新たな疑問もわいてきた。

「温水プールとはいえ、4月に水泳ってそんなに浮き足立つものか？」

僕としてはもう少し後にしてほしかったと思っていたのだが」

「……水泳自体がどうというより、女子の水着姿が楽しみなんじゃないか？」

「ああ、色欲関係か。言われてみると楽しみな気になってくるな」

確かにこの学校はまだ学生なのに可愛い奴や豊かに実った奴が多い。昨日の櫛田もじろじろ見られたと愚痴っていたし、東風谷や佐倉など僕が話す友人達も女としてみればかなりの高レベルだ。

しかし友人達や櫛田は友人であると同時に色物としても見ていてあんまりエロい気持ちにならないし、一之瀬を筆頭にクラスメイト女子達はそもそも交流がなさ過ぎてほとんど僕の認識外にいる。

それでも目の前にすればエロいことも考えられるが、現場で現物を目にする前に想像や期待で楽しむ事は盲点だった。

「色欲関係って、おまえ。それに楽しむ過程もなんかおかしくないか？」

「そうか？ でも今は楽しみになってきた気もするし、結果が似たん

なら別におかしくてもいいんじゃない」

こうして僕の知見と興味が少し深まったりもしたが、授業が始まるといつもどおりに集中して工程を消化していく日常に変わりはないかった。

事前の告知の通り、この日の5・6時限目の体育は水泳だった。

着替える間、クラスメイト達の話や聞き取りはなしに聞いていたが、よほど心待ちにしていたのか更衣室の段階から落ち着かない言動の柴田や、真剣に誰々が可愛いかと情報交換？する奴ら、それを聞いて敵情を察する軍人のような表情で分析や解説を披露していた神埼ともう一人など、色々な種類の楽しみ方を確認できたのは面白かった。

ただ隣の四方ともども口を開いてなかったせいも他の奴らよりもだいぶ早く着替えを終えてしまった。野郎共の半裸の只中で棒立ちする趣味はなかったのも、四方に声だけかけると手早く着替えた数人に続いて僕は早々に室内プールへと踏み入れた。

「結構広いな。だいたい地元の大きめの温水プールくらいか」

「こういう施設見ると流石に日本有数の高校なんだなって思うよ」

「これを40人程度で使えるんだから豪華だよなあ」

プールは50mのレーンが10列くらいの広さで、水泳の大会を開くことも可能そうな規模だった。説明会の時はまともに聞いていなかったが、案外この学校の水泳部はここを獲得できる実績を積み重ねている名門なのかもしれない。

四方と雑談をしていると、次々とクラスメイトが入ってきては感嘆の声を上げていく。

僕は人口密度が高くなってくると密やかに隅に移動して、わいわいと話しているクラスメイトを眺める位置取りをする習性がある。そして同じような習性を持っていると思われる東風谷も、いつの間にか近くで座ってぼんやり外を眺めるのが集団行動時のパターンになってきた。四方は最初こそ僕が消えることに戸惑っていたが、最近では

普通に受け入れて今は神埼と話しているようだ。

こういう時の僕は、東風谷と何かを話したり聞いたりするわけでもなく、かといって居心地が悪いわけでもなく、ただ空白を楽しんでいた。東風谷がどう思っているのか本当のところは知らないが、嫌だつたら離れている性格なのはわかってきたので東風谷も悪くない時間だと思っっているのかもしれない。

しばらく東風谷と二人でボーっとしていると始業のベルが鳴って先生が入ってきた。

見るからに体育会系のマッチョな先生で、暑苦しいところもあるが言うことも笑顔もさっぱりしているので僕としては好感の持てる先生の一人だ。

「ようしよし。お前ら集合しろ！」

尤も、ことあるごとに外やプールサイドに響き渡る声を授業で出してビクツとさせることがあるのが玉に瑕だが。

「見学者は2人だけか。例年と比べてもかなり少ないな。みんなやる気があるようで先生は嬉しいぞ」

そう言っ浮かべる笑顔にも、例えば担任のような余分なモノを多分に含む不純物があまり感じられない。

「まずは準備体操。その後は実力を見るためにも早速泳いでもらう」

「あのく、私、泳げないんですけど」

「なに、心配はいらない。俺が担当するからには必ず夏までに泳げるようにしてやる。泳げるようになっておけば必ず後で役に立つぞ？」

「うう、わかりました。お願いします」

この後、全員で準備体操をして、50mレーンの最初から最後までを軽く泳いだ。泳げないと言っていた女子も金槌というわけではなかったようで、友達に引っ張ってもらって泳ぎきり先生に一応の合格をもらっていた。

ひとまず全員が泳げることを確認できたのか、先生がプールから上がって来た生徒を再び集めて言い放った。

「これから男女別に競争してもらおう。1番速かった奴には俺から特別ボーナスで5000ポイント。逆に1番遅かった奴には補習の義務

をプレゼントだ」

この競泳のご褒美というべき宣言にスポーツ全般や泳ぎに自信のあると思しき者達から歓声が上がっていたが、僕の脳裏には行き詰まりかけていた問題解決の最後の一手が閃いていた。

「先生！」

まずは可能かの確認と、僕の意思表示だ。

「左京か。なにか質問か？」

普段ほとんど発言しない僕だから、先生としても少し戸惑っているのかもしれない。顔と声には珍しいと書いてあるのが僕にも見えた。クラスメイトから見られているのも感じているが、今の僕に止まるという選択肢はない。

「質問みたいなモノです。それで、1番速かった人への特別ボーナスなんです、僕だけ5000PPの代わりに先生に天文部の顧問になっていただく権利が欲しいです！」

「なに？ 顧問？ いや、しかし先生は既に水泳部の顧問なんだが……」

「顧問といっても名前を貸してもらえただけで問題ないですし、給料……PPも可能な限り払います。それと運動系と文化系は、生徒だけでなく顧問の掛け持ちも可能だと生徒会長から聞いてます。お願いします！ 正直、手詰まりで正式な部とするのは諦めかけてたんですが、できるなら正式な部として発足させたいんです！」

一息に言ってしまったので乱れてしまった息を整え、姿勢を直立させると誠意を持って頭を下げてお願いした。

「お願いしますー！」

しばらく無言の時間が形成されてしまったが、腹芸が得意には見えない先生に理と情を絡めて僕の本気を伝えることができれば十分な勝算があった。

「……わかった。1番早ければ顧問になろう」

「ありがとうございます！ あと授業止めてしまってくださいません！」

これで問題はシンプルに僕が1位になれるかどうかにか絞られ――

「先生！俺も天文部だから左京と同じボーナスでお願いします」

「私も天文部です。左京さんと同じ報酬でお願いしますね」

———と黙っていたが、四方と東風谷も協力してくれるようだ。

僕も意識の隅っこで期待はしていたが、声を上げてくれるとまでは思っていなかった。それも四方と東風谷の両方が、だ。

先生は驚きながら二人の提案も了承してくれて、この競泳で僕ら3人の誰かが1番なら顧問になってくれると確約してくれた。この直後、一人で勝手に行動した事で、四方と東風谷から交互に小言を言われる事になったが、それでも協力してくれたことには本当に感謝できない。

こうして僕と天文部にとっては大事な50m自由形による競泳が開催された。

競泳は男女3回ずつの予選で人数を絞り、予選上位6人で決勝を競う形式のようだ。

四方や東風谷と話すのもそこそこに数名の男子と飛び込み台の上で待機する為に移動する。

僕の出番は男子の1組目でこの後すぐだ。

飛び込み台の上に立つ他の者達を尻目に水に入って背泳ぎに似たスタート姿勢をとる。やったこともない飛び込みをぶっつけでやるリスクを負うくらいなら、最初から田舎の爺さんから習った泳ぎだけで勝負したほうが分があると思ったからだ。

先生に上から忠告された時も問題ないと返し、一人水中でスタートの合図に集中していた。

やがてスタートの合図とともに上を跳び越していく奴らの気配を、僕も全力で壁を蹴り横向きにスタートしながら感じていた。

飛び込みできない関係上、最初は仕方ない。そう割り切って、水を

切り裂くように掻き分け、あおり足で姿勢を制御しながら体の捻りも利用して速度を上げていく。

感覚では中盤を過ぎるころには隣のレーンの奴に追いつき、反対側の奴を抜かすと同時に僕が出せる最高速でラストスパートをかけてゴールまで泳ぎきった。

『左京、27秒86』

『源、29秒21』

.....

「おっし！ 何とか最低ラインを超えられた」

「お疲れ様です。伸泳とは珍しいですね」

僕が予選を突破できたことを喜んでいると、東風谷が声をかけてきた。

あの泳ぎ方は伸泳という古式泳法の一つではあるのだが、クロールやバタフライと違って加減さえできればかなり楽ができる泳法で速度もまあまあ出るので、僕は愛用していたりする。何より楽ができるという部分が僕を惹きつけてやまないのだ。

「ありがとう。本物の伸泳とは微妙に違うらしいけど、このタイムは田舎の淵で遊んでた成果だな。子供の頃に爺さんから教えて貰ってよかった」

「ああ、やっぱり川遊びで？」

「そうそう。東風谷も知ってるってことは年配の方と遊んだりしてた？」

「ええ。私の場合は近所に湖と小川があったので」

東風谷と田舎トークしていると遠目に2組目の四方が整列しているのが見えた。

そして軽く泳いだのを観察した中では、このクラス最優の身体能力だろうと目していた柴田やなんか不思議と目に入ってくる神埼も2組目らしい。

この組には僕のように飛び込み台から降りてスタートする奴はいないようで、全員合図とともにそろってスタートを切った。

「速ええ……」

「四方さんがブツギリで速いですけど、あの2番目の人も結構速いですよ」

「柴田な」

2番目の人……柴田のことだ。僕も人のこと言えないけど、やはり東風谷もまだクラスメイトの名前を覚え切れていないようだ。

それはそうと、四方がだいぶ距離を離している為に遅いように感じるが、確かに柴田も僕よりは速いような気がする。

そんな風に二人で見ていると、すぐに四方がゴールして、しばらく経ってから柴田。この二人は他の生徒がゴールしてプールから出るまで何か話していたが、タイムが発表されると柴田は陽気に去っていき、四方は僕と東風谷が寄ってきているのを気づいていたのかその場から動いていなかった。

『四方、24秒15』

『柴田、27秒02』

……………

2位の柴田と約3秒、僕と比べれば四捨五入で4秒という圧倒的な差で、普通に考えれば顧問の問題は早くも片付いたかのように見える。

だが、今の僕は何か不安が湧いてきている。

四方はこういう時、動かずに僕たちを待ったりするタイプだったのだろうか？

こんなに近くまで来ているのに、僕と東風谷の言葉に手を振り返さない男だったろうか？

天文部が発足できるなら、僕は活躍できなくてもいい。四方がブツギリで勝てるならそれで万事OKだ。しかし、このまま四方に頼ることに嫌な予感を覚えて仕方ない。

四方二三矢はキャットルーキーで集中力が並外れていた人物として描かれていた。

集中することで敵の弱点や癖を見抜く洞察力を発揮したり、火事場の馬鹿力を任意に引き出し、単身瘦躯の肉体でありながらパワーヒッター並みの強打とアベレージヒッターのテクニックを併せ持つ天才。

ただ集中したときに力の加減ができないのと、肉体以上の出力を発揮した時に体を壊すリスクもあつたはずだ。

本人かはいまだに不明だが、僕が四方とこれまで接した実感ではそれらの特徴はおおむね間違っていないと思う。

——それならプロ入り数年前で肉体ができていない四方が無理に全力を出して、体を壊さないなんて楽観的なんじゃなからうか？

考え込んでいた事に気がつくと、僕は嫌な予感に押されるように四方と僕のタオルを取りに行ってくれた東風谷を捕まえて、ある頼みをしていた。

願わくば杞憂で終わりますように。

僕は、実家近くでいつも逃げ込んでいた小さな神様と、歩いていく東風谷の近くに感じる神様っぽいモノに祈りをささげた。

15、代償

「それにしても、四方さん凄いタイムですね」

「ホントだよ。東風谷の番どころか、僕もいらんじやないか？」

「……ハハハ。俺もなかなかのモノだろ？」

競泳3組目を観戦しながら、僕たち3人は話していた。

話しながら観察したのだが、やはり四方にいつもの精彩というか余裕というかはあまり感じられなかった。おまけにわき腹や肩の辺りを気にしているあたり、痛めた可能性まで出てきている。おそらく東風谷も先ほどの僕の頼みの件もあって、なにかおかしいと感じてはいるだろう。

「3組目は問題なさそうですね」

「そうだな」

3組目は30秒前後のタイムだった二人が決勝に進み、四方は勿論、僕でも勝てる可能性が高いはずだ。

「そういえば東風谷は大丈夫なのか？」

東風谷は男子の決勝前にやる女子の3組目なのでまだ少し時間はあるが、いつまでも僕や四方のところに居ていいのだろうか？ 勝敗はともかく、女子のコミュニケーションがどういった仕組みなのかかわからないので、ふと思った疑問を聞いてみる。

四方もそうだが、正直僕の提案に乗ってくれただけで感謝しているので、勝敗は気にしていない。元々、僕だけの一手のつもりだったので、できれば調子を崩したのが明らかになってきた四方は棄権してほしいが、たぶん言っても意味がないどころか結果的にマイナスになるのが容易に想像できる。四方という男は、見た目の柔和さを裏切る頑固さなのだ。

「うっ！ 本当はいけないんでしょうけど、その、一之瀬さんや他の女子の皆さんは私が苦手なように見えて……」

「少しだけわかる。僕も話したことはないも同然だけど、近くに居る時に無音の空間になることがあるんだよなあ」

「それに一之瀬さんは見るからに善人オーラが溢れすぎていて、ちよつと近づきづらいいと言いますか」

「やっぱ、そうだよな！ 自分が近づいたら浄化とかされるんじゃないかと身構えちゃうよな！」

「……お前ら、一之瀬のことを何だと思っっているんだ」

「聖人？」

一之瀬の話をしていると四方が呆れた顔で聞いてきたので答えたから、東風谷と被った。かつては女神と称しようかと思っていた時期もあったが、そうすると僕が以前にした一之瀬への無礼が神罰となって返ってきてそうな気がしたので、神様関係はやめておいたのだ。

それはそうと、被ったままではアレかも思っただので、もう一つ頭に浮かんだことで打消しを狙ってみる。

「あ、いや。レッドリスト入りした希少種かも」

「それは……ありですね。言われてみるとエゾナキウサギっぽいような気がしてきました」

「ブッハ！ 東風谷。お前、具体例を挙げるなよ！ 話す機会が来た時に頭をよぎったらどうするんだ」

「フフツ、すいません。なぜか頭に浮かんでしまいました」

「言いたい放題だな」

僕らは、そんな感じで東風谷の出番ギリギリまで駄弁っていたのだった。

東風谷が去っていき、女子3組目でスタートした。

話していた時に横目で見ていただけだが、今のところ女子で運動性能が高いと思われるのは2組目だった安藤（四方が名前を教えてください）だろう。

東風谷も高いとは思うのだが、なんというか波というか幅のようなものがあってイマイチはつきりわからない。今も東風谷がトップでゴールしたので速いのは間違いない。スタート時点から手びれ足ひれが付いているかと思えるほどの推進力を出していたのに、更に全身をくねらせながらあおり足で静かに速度を上げる蛇のような魚雷の

ような泳ぎだった。

「凄い事は凄いのだが、静音性が高すぎて凄さがわかりにくいというのだろうか。」

「しかし、東風谷も速いなあ」

「そうだな」

四方はこの時間では回復できなかったのか、調子が悪いのが今の返しからもわかる。

この際、難度が高いのは承知の上だが、試合を捨ててでも四方に勝つことを本気で考えた方がいいかも知れない。

このままだと四方は、何かあった時に無理したり我慢したりして、僕や東風谷がそれに気づかない場合があると命取りになりかねない気がする。さっきのレース直後も柴田と話していたのに、柴田は四方の調子の変化に気づいていないような感じだったことから、気を張っている四方の変化を感じ取るのはたぶん僕や東風谷でも難しいかもしれない。気づくとしたら、かなりギリギリになってからだろう。

だから、僕か東風谷になら丸投げしても大丈夫だと四方に何とか思わせたい。東風谷への対応にはまだぎこちなさもあるし女子ゆえか少しハードルが高いが、同性の僕なら勝つか実力を認めさせれば不可能ではないはずだ。今なら四方は手負いといってもいいほどの状態で実力が最大限に発揮できない可能性もあつて、勝機はある。

僕は四方とスタート地点に向かいながら、すれ違った東風谷に「ナイス！」と声をかけながら、小声で保険をかけた。

決勝では、僕は3コース、四方は5コースだった。ちなみに間の4コースは柴田である。

飛び込み台の上に乗ってプールを見下ろしていると、隣の柴田から声をかけられた。丁度いいので、宣戦布告しておく。

「おっ、今回は飛び込みでやるのか？」

「ああ、やったことなかったから予選ではやらなかったけど、今回だけはリスクよりタイムを取る」

「やったことないって、大丈夫かよ？ 腹打ったらメツチャ痛いぞ」

「できないなら必要な時にできるようになればいい。僕ならできる」

「……すごい自信だな」

「左京だと、本当にできる気がしてくるから不思議だな」

柴田とは今まで話したことがなかったが、心配してくれるあたりいい奴なのだろう。四方からは褒めてるのかりツプサービスなのかわからない言葉が聞こえてきたが、今の僕は必要な時に必要な事をするだけだ。

「四方。柴田もだ。今回は僕がもらう。だから流して八百長してくれてもかまわないぞ?」

「言ってくれるじゃないか。オレだって負けないからな」

「勿論、俺もだ。左京にも柴田にも勝つさ」

柴田と四方の笑顔での宣戦布告返しになんか嬉しくなるが、相変わらず嫌な予感が消えない。いつそ一応言っておいた僕の言葉通りに流して負けてくれたら、安心するのだろうか?

でもそんな想定はありえない。目の前にいる四方という奴は、入学以来の友人としても、漫画の主人公としても、意外と負けず嫌いだということ僕には知っているのだ。

だから無理矢理に四方の欠場を狙わず、全力で手負いの四方を負かせて、引ける時には引く事ができると教えてやる。

僕は改めて、デバフが盛られた天才の友人に勝つ決意をした。

予選の時と同じように、先生の掛け声の後に合図が鳴る。

それと同時に、全力で集中して思いつきり台を蹴って前方に大きく跳躍する。そのまま勢いを殺さぬよう自分を針の先のようにするイメージで入水。予選の時とは違う大きな抵抗が体を阻むが、それを手の動きとあおり足で何とか速度を落とさないようにしながら体勢を整える。

四方同様、僕にも優れた身体などはない。しかし、集中することで身体能力や運動神経をブーストできることは、四方が先ほど見せて証明してくれた。あとは四方の集中力に少しでも近づけた上で、自分なりに応用するだけだ。

水面に浮上すると、柴田が僅かに斜め後ろに位置しているのが視界に入る。四方は水しぶきでしか確認できないが、予選の時ほどは柴田や僕との差はついていないと思う。やはり体自体に無理が出てきているのだろう。

と、その時。四方の水しぶきが近くなったような気がした。

現実でも錯覚でも四方の限界が近づいているのでもかまわない。感覚的にコースはまだ中ほどだが、ここで勝負を賭けることにした。水を切り裂く手の動きに集中して、手足に力が入り過ぎないように調整しつつ、最後の余力を泳ぎに注ぎ込んでいく。

これで届かなければ勝ち目はなかったが、ゴールが見えてきた辺りで四方の横にまで追いついた。今まで見たことがないほどに必死な顔がクロールの合間にチラツと見えたが、おそらく僕も似たような顔になっているのだろう。頭の隅でこんなことを考えているが、スパートを早くかけすぎたせいで倦怠感と体の各所に微痛があるのだ。余裕がなさ過ぎて柴田の位置も把握できていない。

最後は気力でなんとかゴールした……のだと思う。気づいたらゴールに手を着けて寄りかかっていた。横を見ると柴田が着いていて、その奥の四方もぜえはあと疲労しきった息を漏らしていた。

『左京、 25秒98』

『四方、 26秒00』

『柴田、 26秒43』

……………

1位を盗み取った感慨も沸く余裕がない僕と四方のあまりの疲労困憊っぷりを見かねたのか柴田が手を貸してくれて、二人してふらふらしながらプールサイドに上がってすぐへたり込んだ。

「お前ら全力出しすぎだろ。オレもつい熱くなっちゃったけどさ」

「……ぜえぜえ、ゴッホ。ハハ、夢中に……げほ、なりすぎ、たかもはあはあ」

「ケホツゴホ……四方、柴田、はあはあ、僕の勝ちだ！ ゲホツ」

「……二人ともゲホゴホうるさい。肩かしてやるから少し黙ってる」

柴田は僕と四方を近くのベンチに運んでくれ、タオルまで持ってきて

てくれた。東風谷が女子の決勝に出ているので、ここにいるのは僕と四方、それと柴田だけである。

四方はともかく、自分を負かした僕まで介抱してくれるとは真にいい奴だ。そう感じた僕は、深呼吸して息を整えると本音で礼を言った。

「今までこの爽やか系クソイケメンとか、この顔面があれば一生女を勘違いさせて生きていけそうとか思ってたごめん。柴田っていい奴だったんだな。ありがとう」

「……お前、そんなこと思ってたのかよ」

「左京は齒に布着せる言い方を覚えような」

僕の真摯なお礼に対し、柴田は複雑そうな顔で何かを呟き、四方は引つかかることを言ってくる反応が返ってきた。

ともかく、勝ったのは僕だ。落ち着いたらようやく実感がわいてきた。

「しかし、四方はともかく文化部に負けるとは思わなかったぜ。結構自信あつただけどなあ」

「ムハハハ、本気になった凡人を舐めすぎたようだね、柴田君？」

実感がわいてきた時に、柴田がそう悔しそうに零すものだから、僕はおだてられた猿になり気分的には木に登った。そして、その勢いそのまま四方にも矛先を向けて無意味に煽る。

「それに四方君？ 不調を押しナメプ紛いの勝負をした挙句、本来ギリギリ足元に及ぶか及ばないか程度の僕に負けるってどんな気持ち？ ねえ、どんな気持ち？」

「……やっぱり気づいてたか。スタートの前から雰囲気違ったから、もしかしてとは思ってたけど」

「まあ結果から見れば、あの予選のタイムと比べて一目瞭然だわな。流石にオレもあれには勝てる気しなかったのに、決勝では勝負になつてたしな」

四方と柴田が話しているが、僕は気にせず疲れを忘れてスキップしながら二人の周囲を廻りつつ言葉を投げつけていた。調子に乗ると後から後悔する事は理解していたが、男には引けない場面があり、僕

にとつてはまさにこの時だったのだろう。

「これに懲りたら、自分の勝負所以外できつくなったら僕か誰かに投げられるようにするんだな、四方ちゃん？ 引くべき時に引けるのは恥じゃないぞ」とか。

「あつ！ そういえば柴田に自己紹介してなかった。僕は左京夢月という。入学から日が開いてるし、僕はあまり目立たない方だから、覚えられてるか疑問だったんだよな」

「今かよ!? マイペース過ぎるだろ!……一応言つとくと、オレは柴田颯だぞ」

「柴田……颯だな。了解だ」とか。

「無理や我慢をするのはともかく、友達に隠すのはもうやめろよ？ 少なくとも僕や東風谷はそれを利用したり弱点のように突いたりは……なるべくくしない。うん、今回みたいなしんどいは僕ももうごめんだ」とか。

僕は女子の部で1位を取った東風谷が来るまで、柴田との自己紹介も挟んで四方へ思っていた事をこのように数々の言葉と態度で煽り散らしていた。普通にやれば、もう裏技以外で四方に勝てることはないだろうからこの好機を逃す手はないだろう、と思いつながら。

だが、四方とついでに柴田にした気分が赴くままのイキリ発言と態度の代償は、夜に冷静になった僕の黒歴史レコードを大幅に更新し、部屋を悶え転げ回って睡眠時間を削る形で支払われることになることを、この時の僕は予見できなかった。

16、世間話

水泳の時間の後、水泳部顧問の東山先生は約束どおり天文部顧問を兼任してくれる事になり、天文部は晴れて正式な部活動となった。

その際、東山先生から水泳部に誘われたのだが僕はアルバイトがあった為に断り、四方と東風谷も特に理由なく断っていた。なんとなく不義理を働いたように感じてしまったので、何か返せる機会があったら返したいと思う。

しかし何気に競泳の男女1位と男子2位を天文部が独占する結果だったが、今回は運がよかったのだろう。

水泳部のエース級みたいな奴がいなかったことに加え、四方・東風谷という限定的ながら規格外の成果を出せる人材がいたことがこの結果を弾き出したのだ。

僕だけだったからおそらく柴田に負けて終わっていただろう。

柴田といえば、この件がきっかけになったのか少しだけ話しかけてくるようになった。連絡先も交換したので、これでBクラス内では連絡先3人目、青娥さんや佐倉、会長に櫛田を含めた全てでは7人目となる。

僕は人付き合いが苦手だと自己認識していたが、半月と少しで7人もの連絡先交換という交流をこなし、交換や接触こそほとんどしていないが橘書記や葛城・戸塚などの縁があった人物もいる。

これは自己認識を改める必要が出てくるほどの快拳といっても過言ではないだろう。

というようなことを、偶然天文部の屋上に集った部員2人と外部協力者の佐倉（入部届けを受け取っていない為）に語ったところ東風谷と佐倉は大きく頷いてくれた。

だが四方は微妙な顔で自分のアドレス帳を見せてきて、そのずらりと並んだ件数で僕を含めた3人を圧倒してきた。

「いや、入学したばかりなんだし、普通にすれば連絡先なんて自然に増えるものだからな？」

「いやいや！ 僕は普通なのに増えてないだろう。東風谷のヒキニート気質や佐倉レベルの内弁慶ならまだわかるが、あの領域にまでは到達してないはずだ！」

「……ヒキニート気質」

「……内弁慶」

視界の端で東風谷と佐倉に流れ弾が直撃して落ち込んでいたが、強く生きてほしい。

「左京は、多少愛想は良くても付き合いが悪すぎるんだよ。さつきだって柴田に誘われてたのに断ってただろ」

「しようがないだろう。カラオケとか1人で行くような場所に、なんで連れ立っていくんだよ。わけわからないし、楽しくもなさそうじゃないか」

「……よくわかった。まず根本から色々おかしいな」

四方は頭が痛そうに額を押さえているが、早くも復活した東風谷や佐倉も僕に賛同寄りの意見を上げる。

「そうですね。宴会中に歌うならわかりますけど、歌いに行くだけなら一人が定番でしょう」

「わたしも一人なら行ったことあるよ。自撮りの為だからあんまり歌ってはないけど」

「ほらみろ。僕ではなく不適切な場所に誘った柴田がおかしいんだ。それほど親しくないうちは奇をてらうのはやめておいたほうが無難なんだぞ」

「……お前ら」

3対1になったからか、自分でもそう思っていたのかはわからないが、いよいよ返す言葉もなくなった四方。

フツ、またつまらぬ論破をしてしまった。敗北を知りたいものだ。いやごめん、やはり好き好んで知りたくない。

四方を撃破した事でまたもや悔しがらせてしまったかと改めて四方の顔を見ると、何故か悔しさの色はなく、なんとも形容しがたい微妙な表情で僕を見ていた。いや、僕と東風谷と佐倉の3人を見ていた。なんというかこう、どうしようもない奴を見る目というか、手の

施しようのない患者を診る医者のような目というか……。

何故そんな目で見られているのかは不明だが、加速度的に居心地が悪化の一途を辿っているのは感じる。この現状を受けて、僕は解散することにした。

しかし解散のきつかけがわからなかったので、そのまま散開するわけでもなくしばらく4人で見つめ合う無言の空間が形成されていたが、真つ先に堪らなくなった僕は3人に声をかけて逃げるように屋上から出る。すると両隣には東風谷と佐倉も付いてきていて、彼女らにとつても居心地が悪かった事を無言で伝えていた。

結局、屋上扉近くの階段を下りたところで僕は図書室方面、東風谷は玄関方面、佐倉は特別棟方面に散らばっていった。

電話の切り時などもだが、集団がスムーズに解散する為の流れとはどう作るのだろうか？

こういう時、僕はその答えを希求してしまう。

元々なかったような用事が完璧に消え失せた僕は、仕方なく本を返却するとともに新しい本を借りる目的で図書館に向かっていた。

図書館ということで油断はいけない。いかに早く返却箱に借りていた本を突っ込み、速やかかつ効率的な動きで新しく借りる本の貸し出し手続きを終える。司書にも図書委員っぽい生徒にもなるべく気づかれないように素早く全てを終えなくてはならないのだ。

この行為自体に意味は特になく、あえて言えば僕の癖みたいなものだったが、今となつては必要な行動であつたと確信している。

なぜならあの図書館には、最低でも二人の洞察力が鋭く目ざとく動いてくる人物がいて侮れないのだ。特に司書と銀髪の生徒は、タイプこそ違うものの住んでるのかと思うほどにはぼ常に存在する脅威だ。例えるなら司書の方は不動からの流水、銀髪の方は神出鬼没だろうか。僕が本を探す途中で接近を感知して撤退した回数は、そろそろ片手の指で足りなくなっている。

おそらく、あの二人には百貨店や服屋、本屋などで店員に声をかけ

られる恐怖が理解できないのだろう。少し言い方を変えるなら、ファミレスで後から来店してきた客を目で追うタイプと見ている。ん？こっちは少し違ったかもしれない。

そんなわけで油断せず今日は無事に本の返却と貸し出しを済ませることができた。この学校で過ごしていて安心する瞬間の一つである。

僕が三冊の本を持ってきていた本の専用袋に入れ、達成感を感じつつも図書館を後にしようとしていた時、久しぶりの知人を見かけたので思わず声をかけていた。

「葛城、戸塚。久しぶり」

「む？ 左京か」

「左京！ 久しぶりだn」

「ばっか！ 少し静かにしろって」

「わ、悪い」

一応背後に図書館の扉はあるが、場所柄大きな声は厳禁なので慌てて戸塚を注意する。

万が一、誰かが寄って来ようものなら折角の偶然をフイにすることになっても逃げ出してしまう可能性がある僕は、葛城と戸塚に声を抑えて少し外で話さないか提案してみることにした。

「ここだと落ち着かないし、どこか場所を移して話さないか？ 入学以来、葛城にも戸塚にも遭遇しなかったから、ちよつと気になったんだよ」

「俺も左京とは話してみたいと思っていた。弥彦もいいか？」

「勿論ですよ葛城さん！ 昨日、雰囲気が良い喫茶店見つけたのでそこに行きましょうー！」

「いや、別に急がなくてもいいぞ。ここに來たって事は図書館に用事とかあったんじゃないのか？ 少しぐらいなら待つから済ませてきていいよ」

「そうか。では悪いが返却だけしてくる」

用事があったのは葛城だったようで、一言断って僕と入れ替わりに図書館の中に入っていった。

ちなみに戸塚も葛城に付いていこうとしていたが、この素で声のボリュームが大きい奴が本人の用もなさそうなのに図書館へ入るのを憂慮した僕が引き止めるというミツシヨンも発生したが、葛城が思ったより早く戻ってきたので助かった一幕もあったりした。

戸塚お勧めの場所は、おしゃれっぽいカフェという未知の場所だった。

二人と雑談しながら付いていくところに連れて来られ、僕としてはおっかなびっくりだったのだが連れの二人が慣れた感じで注文しているのを見て、すかさず乗っかることで事なきと平静を得ることができた。「つ、連れと同じもので」と「お勧めでお願いします」は万能の言葉である。

二人とは、初日に少し話しただけの関係ではあったが、久しぶりということもあってお互いの近況をだったり連絡先を交換したりしているうちに、いつの間にか打ち解けて話せるようになっていた。

「しかし戸塚って、結局葛城にはさん付けと敬語に落ち着いたのか。同級生に畏まるってどうなんだ？」

「これは敬意の表れだ！ 別にいいだろ」

「いや、僕はいいんだけどさ、葛城的にはどうなのかなって」

「俺は普通にしてくれと言ったのだが」

やはり葛城は苦労人でなおかつ良い奴だ。なんだかんだで戸塚の好きにする事を許容しているし、あまり人と話すのが得意ではない僕へも色々気遣って話題を振ってくれようとしているのがわかる。自分で言うのもなんだが、僕も戸塚も付き合うのに苦労するタイプだろう。

「葛城さんはリーダーになるべき人なんだ！ だから俺が敬意を示すことは大事なんだよ！」

「……葛城、好かれるのも大変だな」

「……わかるか。戸塚がすまん」

「とりあえず恥ずかしいから、あいつの声のボリュームを下げよう」

「そうだな。俺がなだめるから左京は話題を変えてくれると助かる」
「了解だ」

戸塚が演説ばりに葛城の賞賛を始めて店から注目を浴びてしまったので、僕と葛城はそれぞれできることで戸塚を平静にさせるべく協力することとなった。

「そういうえば葛城達に聞いておきたいことがあったんだ」

「おん？　なんだ？」

「……ああ。何でも聞いてくれ」

葛城がなだめたことで戸塚が平静を取り戻した機を見逃さず、僕は以前から疑問だったことを話題に出した。些か葛城がなだめ疲れしているようだったが、葛城の犠牲を無駄にするわけにはいけない。

「PPとは別にCPっていうのがあるのは知っているか？」

「CP？」

「ああ、残高照会ページにあったやつだろ。俺も何に使うのか気にはなってた」

葛城は知らないみたいだったが、戸塚は存在だけ知っている状態のようだ。

「そうそう。もし戸塚達があれの使い方を知っているなら、聞いておきたかった時があつたんだよ」

「そう言ううってことは、もう必要ないのか？」

「ああ。さっき言った天文部を作る時、顧問を雇う為に使えるかなって生徒会長に聞いてみたんだよ。結果はダメだったけど」

「へえ。何に使えるんだろうな」

「待ってくれ！　CPとは何だ!?　左京はともかく何故弥彦が知っている？」

戸塚と話していると、疑問顔だった葛城が待ったをかけたきた。

確かに知らない事を目の前で話されるのはあまりいい気分とはいえないだろう。まして戸塚は知っているようだから尚更だ。

僕は実例を見せたほうが早いと思い、端末を取り出してPPとCPが表示されているページを葛城に見せて説明した。

「ほら、このPP表示の横に数字とCPってのがあがる。これ、今は810CPだけど、入学した日には1000CPだったんだ。何かに190CPを消費したと思うんだけど、その何かがわからなくてなあ」

「俺は結構端末を弄ったりしてたので、なんかの拍子に見つけてました！」

「こんなものが……。PPはトップに表示されるから残高照会など気にもしていなかった」

「あれ？俺の端末だと960CPになってるな。」

「……ってか、よく見たら左京のPP残高3万切ってるじゃねえか!? 大丈夫か?」

「これは天文部関係の出費が多かったんだよ。……天体望遠鏡の4万は高かった」

葛城はショックを受けているのか無駄に深刻な顔をしているが、戸塚の方は知っていた余裕があったのか僕のPP残高を見て心配してくれた。

葛城同様にやはり律儀で良い奴だ。葛城が大変そうだと思いかけていたが、こういう場面を見て案外良いコンビなんだなと思いついた。

「……俺の端末も960CPだ。偶然弥彦と同じポイントになった可能性もあるが、CPというのはクラス単位のポイントである可能性が高い気がする。左京と弥彦はどう考える?」

「葛城さんの言うことだったら間違いないですよ！絶対！」

「葛城と戸塚のポイント見ると、やっぱりそっちかなあ。……会長の言い方からそんな気もしてはいたんだよなあ」

しばらく考え込んでいた葛城だったが、顔を上げるとクラス単位仮説を口に出した。

一応仮説としたが、葛城は確信を顔に滲ませているし、僕も会長地獄での発言から薄々そんな気がしていたので異論はない。戸塚はもはや言うまでもあるまい。

そしてそのことに思い至つたらしい葛城は次々に仮説を具体的に
していった。

「個人単位ではなくクラス単位という仮定の上で、まずはおそらくそ
れぞれの授業態度。それからうちのクラスでは、まだやっていないが
テストやスポーツ大会。あるいは部活や何らかの活動実績で増減す
ると見た」

「流石です葛城さん！　じゃあ、少なくとも左京のクラスやC・Dより
はうちが上って事ですよね!?　ちよつと覗いただけですけど、Bはと
もかくC・Dクラスは滅茶苦茶うるさくて、もう学級崩壊レベルでし
たよ！」

「……それって、僕個人じゃほとんどどうしようもない事柄なんだけ
ど」

いつの間にか世間話が考察披露の場へと姿を変えていた件。

やはり頭が良い奴らは、何かのきっかけであつという間に具体的な
答えに辿り着いて細部を詰めていくようにできているのだろう。葛
城や戸塚が整理した情報や考察を得ても使いようがない僕のような
凡人ではこうはいかない。

「左京、今日は有意義な話ができた。礼を言う」

「どういたしまして。僕からすると、特に何かしたわけじゃないけど
な」

「もしポイント足らなくなつたら言えよ？　友達だし、バスでの借り
を返しがてら俺が貸してやるからな」

別れ際、葛城から律儀で真面目な礼を受けていると、僕のポイント
を見てしまった戸塚が心配してくれていたのかえらく義理堅く感じ
る申し出をしてくれた。

「ああ、ありがとう。まあ来月の10日にバイトの給料も入るし、たぶ
ん大丈夫……だと思おう」

「バイト!?　この時期にもうやってんのか!?!」

「まだ言ってなかったっけ？　そうたいしたことでもなかったしな」

「……左京とはこれからも話してみたいな」

「そうですね。左京、葛城さんもこういつてるし、また今度遊ぼうぜ！」

「おうよ。ただ直接・間接でもメールでもいいけど、電話以外で誘ってくれ。僕は電話に出るのがもの凄く苦手なんだよ」

「了解だ！ それじゃあな」

「また会おう」

「じゃあな」

二人と別れてからは、いつものように部屋に戻った。

久しぶりに会って話した二人と友達にもなれた気がしていた僕は、月を見上げ満足してお茶をすするのであった。

17、青春

四方に加え、柴田や葛城・戸塚と友誼を結んでからの1週間は……実はそれほど以前と変わりなかった。柴田や葛城は部活か何かで忙しそうにしていたし、戸塚が葛城から注意されたとかで凹んでいたの
で相談を聞かされたくらいだ。

愚痴といえ、あれから1度だけ櫛田も屋上にきたらしいが、僕も他の部員もいない時だったようで、屋上に入れなかったと連凸された電話で怒られた。そのせいで、苦手極まる電話という通信手段を使う羽目になった上、バイトがなかった一日をひたすら愚痴をこぼす櫛田の横で天体望遠鏡の手入れをするわけのわからない状況を過ごす事になってしまった。

それにしても愚痴をこぼしている対象を全く知らない僕に、かなりの熱量で同意を求められたところでどうすればいいのか。聞いている限り、櫛田の愚痴に頻繁に登場する堀北という人物が会長ではないと確定したので、頷いて大人しく聞いているくらいしか出来ないのだが……。

櫛田対策を他の天文部関係者にも分担させようと画策しようとしたが、四方は最近神埼や一之瀬達に連れて行かれる率が高くなり、東風谷や佐倉に至っては櫛田はおろか葛城と戸塚さえ避けるコミュニケーションっぷりを遺憾なく発揮していて無理だった。そもそも櫛田の愚痴現場を秘密にする約束もあるので下手なことができないという理由まである。

しかし関係ないが、教室にいる四方を連れて行く時に一之瀬や神埼が、ついでのように僕や東風谷も誘うような言葉を発することがある。この言葉はたいがい四方が行くと確定した段階で発せられることがほとんどなのだが……。

「あつ、左京君と東風谷さんも来てくれたりしないかな?」

「おお、そうだな。一度話さないか?」

『あつ』や『おお』という付け足されている音声。

おそらく望まれていないだろうと察することができる僕と東風谷への疑問系での誘い文句。

僕や東風谷が断りを入れると感じる少しだけ安堵したかのような表情。

四方や柴田は気のせいとか考えすぎとか言ったりするが、これだけの状況証拠があつて行けるわけがない。

この件については東風谷も同意するだろう。なにせこの後は、東風谷とともに複数の視線を感じながら場を離れるまでがワンセットなのだ。嫌われてはいないのだとポジティブに考えることはできるが、邪魔には思われているだろうと容易に想像できる。

この現状を東風谷がどう思っているかはともかく、僕にはこの状況を覆す必要性を感じないのもあつて、正直もうクラスに関しては放置しようかと考えている。葛城と戸塚の推論からCPの意味はなんとなく把握できているが、僕が気づけたのだから四方や一之瀬達みたいな頭の良い者もとくに答えを導き出しているだろう。クラスの足を引っ張るような事さえしなければ、敵意にまでは発展しないと踏んで割り切ることにした。

それからしばらく経ち、4月の終わり。

いつものようにご近所さんへの朝の挨拶をして授業を受ける準備を終えて待っていると、何故かホームルームが終わって教室から出て行くばかりの担任がまだ残っていた。

1時限目は物理だったはずなので自習にでも変わったかと思っていると、担任は始業ベルが鳴り終わった後、口を開いた。

「突然だけど今日は物理の時間を変更して抜き打ちで小テストをやるよ。だけど緊張したりとかしなくても大丈夫。今回のテストは今後の参考ってだけで成績には反映されないからね」

これが葛城達の言っていたCPの増減テストというやつなのかもしれない。

相変わらずはつきり言わないのでわかり難いが、推測どおりだとす

るなら低い点をとった場合にクラスのヘイトが僕に向く可能性がある。一之瀬や柴田を見る限り、トップ層はあまりダーティーな事はしなさそうだが、念のために少なくとも僕と東風谷だけはある程度の高得点を取っておいたほうがいいかもしれない。流石に邪魔者から本格的に嫌われ者にランクアップするのは御免を蒙る。

東風谷からテスト用紙を受け取り四方にまわしながら、僕は面倒事を回避する方策の事ばかり考えていた。

少し考え事で時間を消費してしまったが、テスト中だった事を思い出して切り替える。

改めてテスト用紙を見ると、5教科各4問の一般常識テストみたいな構成だった。

簡単な連立方程式、英語や漢字。中学1年生レベルといっても過言ではない問題を、引っかけとケアレミスに気をつけて慎重に解いていく。その引っかけすらほぼなかったので、更に疑って2重のチェックでやったが後半まで問題にもならなかった。

しかし、最後の3問は異質だった。

連邦準備制度に関する穴埋めに、航空力学における解釈ミス、問題を読み解くことすら一苦勞の古文。

明らかに入学直後の高校1年生に出される問題ではない。はつきり言つて僕のような2度目の奴を除外すれば、天才と呼ばれるような習得効率が異常な人種、または桁外れに勉強してる努力家ぐらいにしか解けない問題だろう。

例えば、航空力学の解釈ミスは、当時の流体モデルの作り方が間違っていて計算上の揚力が半分になっていた事。などと大雑把にでも知っていて更に深い部分まで説明できる高校生がどれだけいるんだ。一応、最後の3問は古い問題が多いので色々な参考書で勉強していれば解答可能かもしれないが、一ヶ月前までの普通の中学生にはほぼ無理というものだろう。

それと個人的に何より許せないのは、この難問と同じグループのよくな扱いで真横に存在する英語の問題。

バスケットボールを英訳せよ。

……この学校は新入生をおちよくっているのだろうか？

僕は自分で書いたbasketballの文字を一睨みしてから、記憶をひっくり返しつつ解答していく作業に戻った。

「左京君、テストどうだった？」

「あー？ 美学を感じない気持ち悪い構成だったな」

「美学？ 構成？」

放課後、屋上に行くと言った佐倉が扉の前で自撮りしていたので鍵を開けて招き入れた。

バイトがない日、僕はそのまま暗くなってくるまで寝て過ごす為にデスクチェアを移動させていると、佐倉からテストの事を聞かれたので思ったままを答えた。

「うーん。説明が面倒臭いんだが、目的が学力の確認とかの真つ当な理由じゃないと思うんだよなあ、あのテスト」

「そんな感じあつたかなあ」

「いや、解かせる気しかない簡単な問題と、解かせる気がほぼない難問の構成だぞ？ この学校の秘密主義や胡散臭さも相まって裏に何かあるの確定だろ。んで、僕は裏に何かあるテストに美学なんて感じない」

「ああ、それで美学と構成」

佐倉はコクコク頷いているが、その姿を見て、ふとテストの何日前に頭をよぎった懸念を思い出した。あれは僕と東風谷に当てはまっているが、佐倉にも当てはまる可能性が高い気がする。

邪魔者やいない者として扱われるのは楽なので僕としてはお勧めの立ち位置なのだが、あれは嫌われ者や集団の敵に転じやすい位置でもある。仮に転じてしまった時、東風谷は凶太さや強さを感じるのかもしれない。佐倉はどうなのだろうか？ もしなんらかの落ち度が佐倉に生じた時、佐倉が周囲からの敵意やそれに準じるようなモノを跳ね除ける事ができるのだろうか？

「佐倉、CPって知ってるか？」

話していた事から急転、頭に浮かんだ懸念に不安になり、気づいた時にはCPについて僕がわかつている部分の説明と、テストやなんかでポカをやってCPを減らしたと明らかになってしまった場合のリスクを話していた。

佐倉も僕が珍しく真面目に心配しているのを察してか黙って聞いてくれた。

どうも佐倉には、初対面時の印象のせいもか四方や東風谷のようなわかりやすい『強さ』を感じないのだ。そんな佐倉だけが他クラスな事に僕は少し心配になっているのだろう。

正直、心配しすぎだとも被害妄想に近いとも思っているが、CPなどという使えないしどうでも良いモノが原因で、佐倉がクラスから排除される可能性はできるだけ少なくしておきたい。

話せる事は話しきると、佐倉はうつむいて言葉を零した。

「そうならない為には何かした方がいいのかな？」

「正直、僕にはわからない」

実際に何をするべきかなんてわからないが、ここで僕が良い事を言うか黙ってれば佐倉は我慢やら努力やらの結論にたどり着いて変わったりするかもしれない。

「だけど……」

「僕は自分が嫌な事はしたくない。努力や奉仕活動はその最たるものだ。他人がやる分には応援くらいするけど、自分には必要ないと思ってる。代わりにやりたい事は何が何でもやりたいし、その為なら多少苦労してもかまわないと思ってもいる」

「それ、青娥さんの所へ面接に行った日に……」

「ああ、似たような事言ったかもな。でも意味が少し違う」

「違う？」

「そんな器用な事ができる僕じゃない。」

「ところで、佐倉が考えている『そうならない為の何か』ってなんだ？」

「え？ それは、勉強や運動を頑張ってる……」

「じゃあ、今やってる自撮りやバイト、天文部の活動はどうするんだ？」

「……それは」

答えは明白だろう。

勉強や運動、一緒にたにすれば努力の割合を増やすに従って好きな事ができなくなっていく。まあ、時間と労力を何に割くかは佐倉の自由だし強く言う気はない。

だが、僕は友達と思っている奴と楽しむ事を我慢する気だけはない。

「そんなに頑張らなくていいんじゃないか？　僕はさつき言った通りまともに努力した事なんて記憶にないぞ」

「……」

これは前の人生も含めてだ。

「必要な時に必要な分だけやれば、あとはテキストで十分だつて。運動はアレかもだが勉強なら、僕も四方も理数系限定だけど東風谷もいるから、教えるくらいは余裕だろうし」

「……」

「だいたい、まだ1ヶ月程度だけど、一緒に遊んでた友達がなくなる事が多くなったら寂しいだろうが」

「……ぷふっ」

結構真面目な話をしていたというのに、うつむいていた佐倉が吹き出したのを僕は感知した。

「あつ！　なに笑ってんだよ！　これでも真面目に」

「ごめんごめん。だって絶対これから頑張ろうって流れのお話だったのに、寂しいから頑張るなって言うんだもん」

「いや、普通に寂しくないか？　冷静に考えてみる……いや待て、冷静になつたらなんか僕が恥ずかしくなってきた。……なあ、やつぱりさつきの言葉なしにできないか？」

「もう遅いからね？」

ぐっ、生徒会室の時と違って回復が早い。

早々に内弁慶モードの笑顔になるとは、橘書記の薫陶はいまだに成果を挙げ続けているのかも知れない。

「……でも頑張る理由ができちゃったから、時間見つけて頑張ってみ

る！ あんまり頭良くないけど良かったら教えてね」

「ああ、教えるつて言っちゃったしそれはいいんだが、なんで頑張るなって言ったのにやる気になったんだよ。天邪鬼なのか？」

「……ひみつ」

まあ佐倉に言いたい事は言えだし、忠告というか警告もできた。棚ボタ風味ではあるが、やる気にもなってるっぽいし、遊ぶ時間を減らすんじゃないかって僕達天文部に頼る方向に誘導もできた。

しかし四方といい佐倉といい何故友達に頼る選択肢の前に自分だけでやろうとするのだろうか？ 僕やあと東風谷なんか友達だと思っただ奴には割と頼る気満々だというのに……。

それはともかく、今日の佐倉との話は流れがよくわからない部分はあれど、僕の羞恥心にダメージが加えられた事と、新たな謎ができた事以外は、なべて世は事もなしって事で片付けられたと考えてもいいのだろう、きつと。そして女子高生にマッチポンプ染みた話題を仕掛けたことと吐いた言葉も、今が楽しければいいって事で片付けてしまおう。これは、そう、美しい青春の思い出って奴だ。

自己弁護が完了して落ち着いた後、結局寝る暇がなかった事で面倒になってきた僕は、笑顔のまま内弁慶モードを発動しているっぽい佐倉から視線を外し、いつの間にか6時を過ぎて暗くなってきた空を見上げながら、コイツを送るのと夕食どうしようと考えていた。

「……………左京君、ありがとう」

余談だが、寮まで送った別れ際。

帰り道の屋台で売っていた夕食代わりのたこ焼き一パックを渡したところ、溜めに溜められた礼を言われた。やはり女子高生に夕食たこ焼きは微妙だったのかもかもしれない。空腹時にはあまりに美味そうな匂いだった為、つい佐倉の分まで買ってしまったのだが、これは最後の最後で失敗したかもしれない。

まあでも、部屋に戻って食べるとたこ焼きは予想通りに美味しく、僕は本日の星見は素晴らしいモノとなる事を確信しつつ、新たな黒

歴史を封印しながら4月最後の夜を楽しめたから、とりあえず終わりをければそれでよしという事にしておこう。

18、規則

美味しいオマケ付で楽しんだ4月最終日が終われば、当然のことながら5月である。

モーニングコーヒーから始まるルーチンをこなして、ホームルーム1分前を狙う時間で登校する。

教室内はいつぞやのプールの日のようにざわついて落ち着かない雰囲気だったが、気分がよかった僕には関係なく四方と東風谷に挨拶し、授業準備をして始業を待っていた。

すると珍しく始業ベルが鳴るか鳴らないかの時間に担任がやってきた。

「皆、おはよう〜」

「「おはようございませ〜」」

「元気で結構〜。でも今日はちよつと大事な話があるから聞き逃さないようにね〜」

元気な生徒達が一斉に挨拶しているのを軽く流した担任はそう言うのと、大きな紙を取り出し全員に見えるように張り出した。

そこには昨日の小テストの結果と思しきものが、順位、名前、点数で並べられており、もし自分がヤバイ点数だったら晒し者になった、と僅かに恐怖がわいてきた。

今回は幸いにも解答できる問題がほとんどだったおかげでそんな事態にはならないだろうが、こういうやり方なら次以降のテストも気が抜けないだろう。

「まずはこっちの紙だけど、これは皆の予想通りこの前の小テストの結果です！」

相変わらず朝から陽キャ感満載の先生である。時々、陰キャみたいな登場するけども。

「皆、優秀だね〜。平均点は約78点！これならテストで退学者は出ないかもね〜」

さり気無く出た退学という言葉聞いて、元々覚めていた目が醒め

た。まずは自分と四方・東風谷の点を確認する。

僕95点、四方90点、東風谷……70点!?

これは、おそらく苦手分野で点数を落としたんだろう。でもこの点数ならそれほど慌てることでもないか。

そんな風に僕が考え事をしている時も担任の話は続いていて、誰かがした質問の声で意識をお知らせに戻した。

「ああ、言ってなかったかも？ この学校は赤点で即退学だって」

「聞いてないですよ！ 追試とかもなしで即退学なんですか!？」

一人が悲鳴のような声を上げて質問？しているが、担任は取り合わない。

「そうだね、追試もなく即退学だよ。これは規則だから何があっても変わらないよ」

「規則だからって、こんなのあんまりじゃ……」

「でもそんなに重要なことじゃないと思うなく。この優秀さなら、普通に通ってれば赤点はまずないよ。そんなに退学したくなければ勉強頑張つてね」

意気消沈した生徒が力なく座り会話の切れ目に入った時、今度は一之瀬が質問の声を上げた。

「赤点ラインはどうやって決めているんですか？」

「赤点はクラス平均の半分だね。今回で言うと39点かな」

「ありがとうございます」

「じゃあ、次の説明に移るね」

担任はそう言うともう一枚の紙を張り出した。

Aクラス 950

Bクラス 690

Cクラス 490

Dクラス 0

そこには僕が昨日の夜にチェックしていたCPと同じ数字がBクラスの横に。そして、他のクラスのCPだろう数字が記されていた。「この数字は各クラスの成績がポイントに反映されているものだね。更にこれに100を乗算したのが皆に支給されるPPに反映されま

す。今日のP P支給額の変動を疑問に思ってた子はこれで納得してね」

葛城達の予測はP P以外だいたい正しかったということだろう。ということは生活態度やテストの点数、あとなんだっけ？ ああ、部活や何らかの実績？とかもあつたような覚えが……。

僕が葛城達との会話を思い出そうとしていると、またもや立ち上がった一之瀬が担任と問答をしているのが目に入ってきた。

「このポイントはどういう基準で増減するんですか？」

「生活態度をちゃんとすればこれ以上は減らない。今はこれ以上言えないかな」

「そうですか。ではこのポイントは、左京君が初日に質問していたC Pでしょうか？」

「そうだよ。初日の初っ端にあんな質問されたの初めてで印象に残っちゃったのよね」

ただ聞いてたと思つたら、なんか飛び火してきた気がする。心なしか見られているようにも思えて、僕は横……はお隣さんがいるので上方に視線をずらした。

しばらくその居心地悪さが続いたが、四方に後ろから突かれても上方を見つめ続けると、ようやくプレッシャーから開放された。ふう。「でもこの結果は十分に優秀だよ。700CP近く残せたクラスは歴代でも上位にかすってるしね。流石にBクラスに選ばれただけのこととはあるね」

「選ばれたということとは」

「お察しの通りだね。優秀ならAクラスに。評価が落ちるごとに下のクラスに。この学校は入試時点での評価でクラス分けしてるんだよ」担任の話を聞いていてふと閃いたことがある。

この学校の入試含めたクラス分けは、学力や運動能力、あるいは協調性なんかも含まれているだろうが、『評価』の真の最優先事項はおそらくIQ、または知能指数と呼ばれるものだと直感的に感じた。

余談だが、IQが高ければ学力も高く記憶力が良いとかいう思い込みがあつたりするが、それは間違いだ。僕の実感だが、例外はあれど

むしろIQが低い者の方が学力や記憶力は良い場合が多い。特に記憶力は、IQの低さを補うようになり高い例がほとんどである。

極端な例だが、チンパンジーのカード実験がわかり易いだろう。チンパンジーにカードの神経衰弱を教えると人間ではまず勝てなくなるというアレである。

話を戻そう。

IQ測定を僕自身は小学生時代とともに2度も経験しているが、変なテストっぽいものを受けた後にある程度の適性？があるかと判断されると親と学校に呼び出され、精神病院っぽいところで正式な検査をさせられるのだ。これは他に同じような経験をした奴だと話したりすることではなく感覚でわかったりするのだが、この学校は妙にその感覚が反応する奴が多いことが気になっていた。

そして、これが時々存在する優秀に見える者が下位のクラスに分けられ、凡庸に見える者が上位に分けられる理由なのではないだろうか？ つまりIQが高い者から順にA〜Dに分けたことで、僕や東風谷、戸塚などが上位クラスに、櫛田が下位クラスに分けられることになってしまったのかもしれない。僕も東風谷も戸塚も言動や性格はかなり違うが、僕が見たところ全員が会社組織などでたまに遭遇する典型的な高IQの怠け者タイプか不器用タイプなのだ。可能性はあると思う。

と、そんな他所事を考えているうちに一之瀬と担任の問答も佳境に入っていたようだ。

「——つまり、CPでAクラスを抜かせばいいってことだね！ 就職率・進学率100%のご褒美を目指して頑張ってください！」

「Aクラスにならないと恩恵が受けられない……なんて」

担任のテンションは相変わらず緩急が激しいが、一之瀬含むクラスの半分くらいはショックが大きかったようだ。担任はあまりに沈んでいる一之瀬を見て言いすぎたと思ったのか、これまでよりだいぶ優しくげな声で励ますような言葉をかけた。

「一之瀬さん、それに他の皆にも。この学校の卒業生としてちよつとしたアドバイス。入学している以上、このことは変えようがない規則

で、ショックを受けても文句を言っても意味がないよ。それなら前向きにAクラスになる方策を考えようが得策だと思うな」

そう言うのと周りを見渡して、うつむいて何かを考えてるっぽい一之瀬で数秒視線を止め、急に視線を上げたことでボーっと担任の方を見ていた僕と目が合った。合ってしまった。

「何か質問があれば受け付けるけど、左京君？」

「ゲツ……じゃなくて、何もありませんよ？」

「うふふ、やっぱり面白いよね、君」

「いやいやいや！ 面白みの欠片もない男としてこれまで生きてきたので、僕より面白い奴ならきつと山のようにいますよ」

僕は何とかゲツと言ってしまったことを誤魔化す為に焦ってしまっただが、気づかれていただろうか？ 担任を含めて先生からの注目は碌な事にならないから、なるべく避けたいのだが……。

心配ではあったが担任はそれ以上何も言わず、再び教室を見渡して質問の有無を確認すると、僕に向けたような笑みではない柔らかな笑みを浮かべて激励の一言を残していった。

「皆、頑張っただけ」

美人とは恐ろしいものだ。

なにがどうとは具体的に説明できないが、僕はそれを初めて実感した。

なんかもうすでに一日が終わったような精神的疲労をしているが、さっきのはただのホームルームで行われた担任からのお知らせである。退学関係の事以外はそこまでたいしたことではないので、さっさと思考を立て直していつものどおりに授業に集中していった。

この日は、ホームルームで波乱っぽい事はあったが、昼も放課後も四方や柴田が話しかけて来ず、東風谷から以前の月見団子のお返しにやしようまのお裾分けしてもらっただけで、特筆すべき出来事はなかった。

それにクラスを中心である一之瀬があからさまに何か考え込んで黙っている為か、教室全体が昨日までよりどこか静かである。今日の

ようであれば、休み時間に教室で読書をするのも悪くなかったかもと
帰り際によく思いついたが、結局実行はできずそのままバイト先
へ向かった。

19、早合点

テストで赤点取れば即退学のお知らせの翌日。

昨日は退学と聞いて少し驚いたが、クラス平均の半分なら僕は問題ない。知り合い連中も佐倉に僅かな不安が残るくらいで、それも勉強を天文部で手伝えばついでに東風谷の苦手分野克服もできて一石二鳥だ。おそらく僕達の中から退学者が出ることはないだろう。

憂いが少なくなった僕はゴールデンウィーク目前に控え、PPも無事69000入って10万近くまで持ち直した事で、テントでも買つて外れの大公園でプチキャンプDE天体観測をしようかと画策していた。泊りがけの予定であるので流石に女子を誘うことはできないが、四方と柴田あたりは誘って今日に買出し、明日に実行である。急であるし、四方達が来れなくても一人で行けば十分楽しめる。完璧な計画だろう。

完璧な計画のはずだった。

いつものように直前に登校して授業準備していると、朝のホームルームで担任から少し時間をもらつた一之瀬が、放課後に皆に話があるから時間がほしいと言ひ出した。

教室内では賛同の声が溢れていたし、たいした時間はかからないだろうと思ひ僕も了承した。四方達を誘うのは一之瀬の話が終わつた後の方が落ち着いて誘えるだろうから少し手順を変える必要ができたが、今日の僕は意気揚々なので柄にもなくワクワクしながら放課後まで待つことにした。

「みんな、時間を貰っちゃつてごめんね。それとありがとう」

放課後に教壇に立ち、まずそう前置きした一之瀬は一度心を落ち着けるように深呼吸してから話し出した。

ところで何故か担任も隅で座っているが、なにか意味があるのだろうか？

「今日はこれから先のBクラスの方針を話し合いたくってみんなに集まってもらいました。PPやCPにクラス全体の運営、それから退学やシステムの事についてなにか意見のある人はいますか？」

そこからの一之瀬は姿勢を正してクラスメイトに語りかけるように向き合っていた。

誠実に真摯に問い掛け、意見が出れば柔軟性を保ちつつ臨機応変に対応し、不採用になった意見を出した者にもフォローと気遣いを忘れなかった。そして恐れず意見が言える雰囲気を作り出した事で、学級委員会制度やクラス内ネットワークでの情報共有、CP・退学対策など、有用ではあっても存在してなくて開いていた穴を少しずつ塞いでいった。

僕はブレインストーミングをここまで綺麗に活用する人を初めて見て驚愕していた。

出される意見や採用されて形を整えていくやり方こそほとんど優秀の域を出ないが、これは高校生レベルではない。言いたい放題の状況を何とかまとめたり、混沌とした場になって光るモノを見つけて拾い上げたりする話し合いになると思っていたのに、前の人生でもあまり経験のない実りのある会議だった。

もしもどこかの会社で、ある程度自由に動ける管理職として一之瀬がいれば、よほどの不運が重ならない限り、問題は少なくなっていくだろうとさえ思う。

だが、何より僕が驚いたのは――
「最後に私からもいいかな？」

そんな前置きから始まる一之瀬の提案。

「私はみんなとAクラスで卒業したい。その為には他のクラスに勝つことも大事だけど、誰かが退学になりそうな時に助ける何か欲しいの。そして、その何かはPPじゃないかって話し合った時に思っ、いざという時にPPをまとまった額で用意しておきたいの」

「つまり銀行みたいにどこかにPPを集めておくってことか？」

「いいんじゃない?」

——銀行だった。

学級委員会制度でBクラスの学級委員長になった一之瀬の採った戦略は、二度目の僕をして天才の所業といわざるを得なかった。

「左京?」

「左京さん?」

突然、前後から四方と東風谷に名前を呼ばれた。

いや、何故か教室中から注目を浴びている。一之瀬や黙っていた担任までも唾然とした視線を飛ばしてくる状況で、僕はようやく自分が椅子を蹴倒して勢いよく立ち上がった事になっていた事に気づいた。

「左京、どうしたんだ?」

「左京君、なにかおかしかったかな?」

「あ、いや、一之瀬……さんの戦略があまりに衝撃的だったから、つい立ち上がっちゃったというか」

四方と一之瀬に言い訳しながら、椅子を元に戻す。

「衝撃的?」

「そりゃ、完全実現の可能性は小さいかもしれないが、ある程度でも成功すればって」

「何のことだ?」

四方はこの戦略の凄まじさを理解していないのか、のんきに問い掛けてくる。頭が良い癖に妙に固い四方に少しでも僕の驚きを共有してもらおうと、一之瀬が伏せただろう事は言わないように注意して彼女の推定戦略目標を口に出した。

「ばっか! 四方、今の一之瀬の話聞いてたらわかるだろ!? 一之瀬は最低24億PP以上を荒稼ぎするつもりだ!」

「「「は?」」」」

「そこまでいけなくても、もしもほんの少しでも成功すればPPに困らなくなる可能性はあるかもしれない! 交渉と学校の対応次第で

は生徒会にも協力を要請して」

「ちよ、ちよ、ちよっと待って！ 私、そんなつもりは」

「一之瀬……さん。この戦略、隠さずに共有するほうがいいと思う。一人でできる事には限りがあるからな」

「だから、違うんだってば！」

ここまで隠そうとするとは。四方、佐倉に続いて一之瀬も一人でやるタイプだったのか。これまでほとんど話した事がなかったから知らなかった。

そんな感じに言い合いをしていると、こうした場面では珍しく東風谷が口を開いた。

「えくと、結局のところ一之瀬さんの目標とか戦略ってなんだったんですか？」

「東風谷さん、聞いてくれて本当にありがとう！ 私はいざという時の為にPPを貯めておけば、役に立つ事もあるだろうって思ってただけだよ！」

「まだ言うのか。到底一人でできることじゃないだろうに」

一之瀬はよほど隠しておきたい理由でもあるのか東風谷に聞かれてもまだ白を切っているが、クラス全員でもほぼ無理だろうに一人では確実に無理だ。

もう一押し説得しようかと思っただけの時、僕が一之瀬に注視しすぎて忘れていた人が動き出した。

「それで、左京君が想像した一之瀬さんの戦略ってどんなのだったのかなあ〜？ 先生、気になるなあ〜」

「ゲゲツ、担任！」

「……それは聞かなかった事にしてあげるから、ぼら、吐いちゃいなさい？」

「いや、他人の戦略内容を勝手に暴露するのはちよっと」

「一之瀬さん、左京君はこう言ってるけど？」

担任が一之瀬に流し目を送ると、もう混乱から立ち直ったのか一之瀬も領いて口を開いた。

「左京君はそう言ってるけど、本当に違うんだよ。だから私にも教え

てほしい」

「……………おおう。もしかして僕って墓穴掘って自分から飛び込んだ？」

「どちらかというところ早合点とか早とちりじゃないか？」

「そうですね」

ここまで何度も複数から言われれば、自分が勘違いしていたのでは？と認めるしかなかった。というか冷静になってみると、この誠実で善人オーラを振りまいている一之瀬が、クラスどころか学校以上の規模のプロジェクトを一人で実行しようとする訳がなかった。

「……………銀行作って、信用創造とかを駆使して荒稼ぎする戦略だと思ってました」

「銀行と信用創造？」

現在、僕はさつきまで一之瀬がいた教壇に立って、勘違いの内容をゲロる公開処刑を受けていた。

幸いなことにクラスの方針には多分影響ないと最初に伝えたら、そのまま帰った者が数名出たので気持ち人数は減っている。少数とはいえ減らすことができた大きな要因は、学級委員会発足と生活態度改善以外の決定事項はゴールドエンウィーク明けにもう一度話し合っ確定させると一之瀬が補足していたのが大きいだろう。

だが担任はまだ残ってニヤニヤしながら見てくるし、鸚鵡返ししてくれた一之瀬や残った大多数のクラスメイト達も教室の前の方に集まって、なんか真面目っぽい顔で僕が話してるのを聴いている。

「だって電子マネーみたいなPPを集めるとか、みんなとAクラスで卒業とかって言ってたから、銀行作って信用創造とかで24億以上を荒稼ぎして、BとD全員でAクラスに移籍するつもりだと思うだろ!?」

「……………」

「前日の小テストにも連邦準備制度なんて出たんだ、そりや連想して

も仕方ないだろう?」

「「「「……」」」」

「それに担任まで教室に居るんだぞ!? 学校との交渉を見据えて、予め話を聞かせておくつもりだとも思うだろう?」

「「「「……」」」」

「……あの、せめて、なんか反応ください。バカじゃねーの、とかでもいいので」

「バカじゃねーの」

「あつ、お前、柴田! 僕が窮地だからって何追い討ちかけてんだよ!?

友達だったらこういう時こそ助けろ、このクソイケメンが!」

「オレにクソイケメンなんて言ってくる友達はいないぜ。つと、それは置いといて、そもそも銀行はともかく信用創造って何だよ?」

最初に一之瀬が鸚鵡返ししてくれた以外、誰もが無言なのに見られながら一人で話すのは洒落にならないくらいキツイ。正直、普段やってる先生方やさっきの一之瀬を尊敬するレベル。そんな中で、内容がどうであれ会話を始めてくれた柴田はまさに救いの糸である。

こう会話になってくれば、もはや日常と変わらない。

「信用創造ってのは、簡単に言うると預金を集めて貸し出すことを繰り返すと、世間に循環する金が増える銀行の機能だ」

「それが俺たちの何に関係するんだ?」

「んじゃ、適当な例を書いて説明しようか」

柴田に続いて今度は神埼が質問してくれた。なるべくわかりやすそうな名詞と金額を頭に浮かべて、教壇の後ろにあるボードに書き込んでいく。ちなみにその時、書き込むペンを探したら一之瀬がスツと渡してくれた。マジで有能秘書とかも似合いそう。

1、四方が一之瀬銀行に1万PPを預金 (預金1万PP)

2、一之瀬銀行が天文部に5千PP貸し出し (預金1万PP、貸付5千PP)

3、天文部が四方に部費5千PPを支給 (預金1万PP、貸付5千PP)

4、四方が一之瀬銀行に5千PPを預金 (預金1万5千PP、貸

付5千PP)

「この1〜4までの流れで何かに気づかないか？」

「……後半、銀行は何もしてないのに預金が増える？」

「イエス！ 簡単に言えばこれが信用創造という機能で、更に繰り返していけば僕達のPPを何倍にも増やせるって寸法だ」

今度は一之瀬が答えを出してくれた。

でも伝わって喜ばしい反面、わかりやすさを優先した結果、なにか大事なことが抜けてないか内心ドキがムネムネしてくるな、これ。

「尤も、独自通貨であるPPがあるということは、経済的混乱を抑えるためのシステムもあるはずだ。本来、独自通貨とはなるべく避けるべき制度だからな」

「つまりPPの銀行やそれに近い機能を持たせた機関を作るのは難しい？」

「うん、僕はそう思う。ただでさえ現状の学校とSシステムを否定するに等しいのに、最低限その学校に改変を受け入れさせたり、生徒会は勿論、上級生含めた他全クラスやその担任達と交渉したり、システム開発・運用・保守なんかの人材も必要なんだ。他にも越えるべきハードルは多いし、僕もそれほど詳しい訳じゃないから断言できないけど、金融分野特有の問題とかもあつたりするかもしれない」

利益だけ見れば凄まじいが、越えるべきハードルが多すぎて労力が半端ないことくらいは僕でもわかる。自分で勘違いして言い出しておいてなんだが、正直入学1ヶ月で始める事業ではないと思う。

「……現状は不可能だと思うけど、どうにか利用できたりしないかな？」

「さあ？」

「さあ、つてお前……」

「いや、だつて手段がわからないから、一之瀬がぶち上げた時に勘違いして突っ走っちゃった訳で。今、説明したのも担任や一之瀬に聞かれたから、何か参考になればいいな程度だったんだよ。だから聞かれてもわからんとしてしか答えようがない」

「お前という奴は……本当に」

「あれ〜？ 私や一之瀬さんのせいにするんだ〜……………」
(ククツ)

一之瀬や四方は何か利用する方法を考えようとしているようだが、僕は本当にわからなかったので正直なところを答えた。こういうのを考えたり実行に移すのは、僕のような凡人ではなく、地位があるお偉いさんや頭の良い奴の仕事だろう。

あと担任よ、変な部分でだけ反応しないでくれ。もうニヤニヤ見ているのは諦めたけど、人聞きもタイミングも悪いチャチャ入れを生徒にするのは余計に性格悪く見えるぞ。最後に笑ったのも見えてるんだからな。

そんなことを考えていた僕に、その日の結論を導く質問が飛んできたのは間が悪かったと思うしかなかった。

「じゃあ、この時間はなんだったんですか？」

「無駄、かな？」

「は？」

「ヒエツ…………月並みだけど、無駄にするかしないかは君達次第…………つて事にできない？」

————できなかつた。

そして僕はクラス会議に混乱をもたらした罰として、学級委員会の罰ゲームを受けることとなった。一之瀬他クラスメイトやほぼ関係ない担任はともかく、四方や東風谷まで笑顔で僕の受ける罰ゲームを決める話し合いに参加していたことに遺憾の意を表したい。

しかしどうでもいいことだけど、最後に問いかけてきた白波？とかいう女子、怖すぎるだろ。あの「は？」に霸王色が含まれてても僕は驚かないぞ。

20、平等

僕に科された学級委員会の罰ゲームは、結局『一之瀬の言うことを聞くこと』に決まった。

これは実質無罪放免と言ってもいいだろう。なにせ、一之瀬とは接点がほぼないし、これまで面と向かって話したことすらないも同然の関係である。一之瀬から僕への意識も、どちらかというとマイナス寄りの無関心であることは予想できるので、向こうから接触を図ってやることもないはずだ。休みが明けたら挨拶と僕がやる事の指示を貰いに行く必要があるが、それ以降は再び接点が消えるだろう。

皆が無駄に笑顔を浮かべて話し合っていたから、とんでもない罰でも企んでいるのかと思ってしまうていたが、そこはクラスの中心が一之瀬である。善性に寄った采配をしてくれるものと信じていた。これで心置きなく遊びに行ける。

昨日のあの状況では、四方や柴田を誘うことも TENT を買いに行くこともできなかったが、天体望遠鏡を持って公園で夜明かするだけなので必須のものはそんなにない。今となっては正式な天文部員なので、補導対策もばっちりである。

そんなわけで今日は昼まで二度寝して、いぎ鎌倉で三度寝だ！

「左京君！」

「左京さん、こんにちわ」

昼過ぎに寮を出て、公園の東屋で日向ぼっこをしていると、佐倉と東風谷に遭遇した。

どこかへ行った途中なのだろう。二人仲良く結構なことだ。

「……………はよ〜〜」

「……………今日は一段と気が抜けていますね」

「でもバイトの暇な時とか結構こんな感じになってたよ」

「ああ、そういうえば学校でも空き時間ではスライムみたいに融けていきそうになってましたっけ。

……でも昨日、クラスであんなことがあったのに、何でこんなのにんきにしていられるんでしょう？」

「左京君、オンオフが激しすぎるよね。というか、また何かやらかしたの？」

「ふあゝあ。……あ、お茶飲む？　水筒しかないから回し飲みだけでも」

充分すぎるほど寝て、日向ぼっこまでしていたせいも、口も頭も回り始めてくれない。

「はい、いただきます。」

昨日クラスのリーダー的な人が言っていた事を早合点して大騒ぎした挙句、投げっぱなしで普通に帰ろうとしたんですよ。その後もふざけてるような事を言い立てたりしたので、ついに首輪を着けられる的な罰まで受けるようになった……はずなんですけど」

「それって、ちゃんと首輪がつながってないんじゃない？　わたしは、そもそも左京君が束縛されてる姿が想像できないからそう思うのかもしれないけどね。」

……ありがとう。あ、おいしい」

「いやまあ、実を言えば私もそんな気がしてるんですけど、左京さんのおかげで居場所ができたような恩を感じてる身からすると少し心配と言いますかなんというかで」

「あつ、ちよつとわかる！　なんか左京君って、滅茶苦茶に進んでるようにしか思えないのに不思議と目的地に着いてそうな雰囲気があるんだよね。だけど、進んでる時は不安だったり心配になったりして……バイトや生徒会での事、思い出しちゃったなあ」

僕の頭上で茶を飲みながら話に花を咲かせている佐倉と東風谷だが、本人が目の前にいることを忘れているのではなからうか？

でもそうか、佐倉は不安や心配だったのか。

今考えてみると、電器店から生徒会まで目的と効率だけを考えて怒涛の勢いで事態が進めてしまったから、じっくり進めるタイプっぽい佐倉だと精神が持たなかったのかもしれない。

東屋のテーブルに突っ伏していた状態から顔を傾けて覗いた佐倉

は、悟りを開いたかのように遠くを見つめていた。

一方、東風谷が言う恩には心当たりがない。

居場所云々をいうなら天文部の事かもしれないが、あれはなんとなくで誘った話を受けて貰った僕の方が恩を感じるべきだろう。それに彼女の近くに感じる神様にも何度か助けられているような気もしていることから、どちらかというよりは僕が受けている恩の方が多いと思われる。

……………でも、まあいいか。考えるのが面倒くさいし、眠くなってきた。……ねむ、い。

一瞬、ほんの少しだけ思考能力が戻ったがすぐに力尽きて、僕は二人も近くにいるにもかかわらず本気で惰眠を貪りにかかった。

「人は平等であるか否か？」

そこそこ寝て起きたら佐倉と東風谷がまだ居て、いきなり問いかけられた。

「寝る前にしていた話題が、どう変化すればこんな哲学的な問いかけへと至るんだ？」

「私達にもわかりません」

「わたし達、なんでこんな話してたんだろう？」

問いかけてきた癖に、どういう流れでそうなったのかわからなくて疑問顔の二人がそこにいた。まあ話題が二転三転してわけわからなくなる事はそう珍しいことではないが……。

しかし、平等か。あんまり頭使わなそうだし、別に答えるくらいはいいか。

「平等って聞こえが良い場合が多いけど、僕が思うに結構怖かったりもするからできるだけ否であった方がいいな」

「あ、普通に答えるんですね」

「怖い？」

「うん。一時的に平等になったただけならそれほどおかしなことじゃないけど、平等であり続けるのは自分も周囲も怖いししんどいだろう？」

「?」

「わかりにくかったのかまだ疑問顔が消えない二人を見て補足を入れる。」

「例えば、産まれた瞬間は環境に差はあれど平等だよな？」

「そうだね」

「こういうのは別にいいんだよ。どうせすぐに平等じゃなくなるんだから」

「平等じゃなくなる……ですか」

東風谷が考え込んでいるが、何か琴線に触れるようなことを言っただろうか？

「僕が怖いのは能動的に平等であろうとする、もしくはあろうとし続ける人だ」

「能動的に……」

「こういう奴は怖いぞ。友達を本当には友達と違ってなかったり、場合によっては冷徹に切り捨てたりすることを躊躇わない。それに敵になる前の段階、邪魔者と見做されただけで攻撃されたりもする。これは感情を排しているとかいうわけじゃなく、本当に機械的な行動原理で動くからだ」

「……」

「しかも、こういうタイプは何らかの分野や能力に秀でていたり、場合、出世して集団のリーダーやその周辺、あるいは独特な立ち位置で目立っていたりする事もある。そしてその自負の為か、本質的にはほとんど友達や仲間を必要としていない」

会社組織で言えば、有能と言われたりするリストラ担当者がわかりやすいかもしれない。

共感性がなく、それを必要ともしない人間は意外と多いのだ。そして、そういう人間を求めている組織も。

「僕はそんなしんどそうな生き方の奴にはなりたくないし、金や効率

とかの理由であつさり人を切り捨てる奴は怖いからな。だから人は平等であるか否かという問いには、できるだけ否と答えたい」

「……」

「……まあ、僕の平等はそういう印象つてだけで、佐倉や東風谷の答えはまた違うんだろうし、ただの雑談にそう考え込まなくてもいいんじゃないね？」

なんか結構真面目に考え込んでる二人が不思議だ。確かに本音ではあるのだが、所詮僕個人の勝手な言い分なのだから軽く流せばいいと思うのだが。

「でも、もしも自然体で真の意味の平等を体現し続けている奴がいたら、僕はそいつを人間とは思えないだろうな」

まだ考え事をしている二人を横目に、とある饅頭顔の原型がそう評されていた事をなんとなく思い出しながら、僕は独りごちた。

「ところで、そろそろ完全に日が落ちるが帰らなくていいのか？」

実は僕が起きた時点で夕方だったので気にはなっていたのだが、今はもう橙よりも群青や黒が強い。この東屋近辺はまだ電灯がつき始めてるので明るいのが、軽く見渡しただけでも公園の道は結構暗い場所がある。

それにしても女子高生二人が、夜の帳が下りたのに公園の東屋で並んで考え事。

この状況、まるでエ〇ゲかAVの導入のようではないか。

この街ではないかもしれないが、万が一友達二人がよからぬ輩に声をかけられて、その想像が現実になってしまったら寝覚めが悪いなんでもんじゃない。

また逆に、佐倉はともかく東風谷は返り討ちのついでにソイツの金ちゃんとかを潰したりしそうな雰囲気もあるので、想像だけでもヒュンツとなる。勿論、どこがとは言わないが。

僕がバカな想像をしていると、東風谷が我に返ったように聞き返してきた。考えていたことを勘づかれるわけにはいけないので、何とか切り替えて取り繕う。

「左京さんは帰らないんですか？」

「僕は元々ここで星見したりして夜明かしするつもりだったからな。でも二人が帰るなら寮まで送るぞ。たいした手間でもないし、一応心配でもあるからな」

「ええ!? 公園で? 一人で?」

「ん。四方とか男連中には声かけるつもりだったけど、昨日色々あつてその暇がなかった」

「その色々あつた次の日に、公園で夜明かしするってなに考えてるんですか?」

「だってアレって実質無罪放免だろ? 酒とか飲めたら、一之瀬の優しさと統率力に乾杯したいところだよ」

そう言うと、二人は顔を見合わせて「やっぱり!」と言いながら吹き出した。

しかし仲良い様子は微笑ましいのだが、なんか腹が減ってきたので早急に何かを食いたい。しばらくは様子を見ていたが、食欲に支配された僕は我慢できず、いつぞやのように二人の背中にツツパリをかましつつ、追いついてるように寮へ向かって歩き出した。

「ちよっ、押さないでください!」

「歩く! 普通に歩くから!」

「いいから行こう。夕食に行くついでに送るから細かいことは後だ。今は早急に丼物が食いたくて仕方ないんだ」

「自分は、さっきまでのんびりしてたのに!」

「気分屋すぎるでしょう、この人」

「うっさいわ。僕は、丼物への欲求と二人への心配を解消するべく急ぎたいんだよ」

この後、なんやかんやありながら二人と牛丼を食べて満足した僕は、星見スポットへと戻り一晩中星を堪能したのだった。ちなみに食後には二人を寮に押し込んだのだが、その時ついでに自分用のお茶を補充するのを忘れて、缶で我慢することになってしまったのはこの日最大の失敗だった。

21、頭脳戦

ゴールデンウィーク前半は星見と延々とだらだらできる充実した休日であったが、後半のバイトの日に青娥さんの新しいパソコンの設定とLANケーブルの断線への対処が発生した。問題自体は大して難しいものでもないのですが、解決して終わったのだが、後ろで僕の作業を見ていた青娥さんと佐倉が大げさに感心したり喜んだりしていたのが少し落ち着かなかった。

詳細は聞き流したが、なんでもこれからの佐倉の主な仕事はこのパソコンで行うことになるようで、ネットが繋がらないとどうしようもなかったとのこと。偶に青娥さんと出かけて撮影会したり、自撮りした画像や動画の使い道はこの仕事が理由らしい。

先月末の宣言通り佐倉は、勉強や運動ではないが頑張っているようだ。

必要なら手を貸すと約束したようなものだし、今回程度のことでも助けになるのならまあいいかと、僕は笑いあっている二人を背後に使いやすいフリーソフトを入れる作業に戻った。

そのようにゴールデンウィークを謳歌した僕だったが、何事にも始まりがあれば終わりがやってくるもので、本日5月7日は登校しなければならぬ。本当はこのまま2度寝を決め込みたいのを我慢して、僕は連休前のルーチンに切り替え行動を開始した。

「四方、東風谷。おはよ」

4月中に繰り返していたルーチンは意外と正確で、ホームルーム直前のいつも通りといえる時間に登校できた。なんか珍しく四方の席の周りに人が集まっていたので、自席まですり抜けて行くのが少し面倒だったが、なんとかロスなくたどり着いて二人に挨拶する。そしてそのまま準備をしようとする、四方の周りにいた一人である一之瀬から声をかけられた。

「あ！ やつと来た！ 左京君、もうすぐホームルームだから手短に言うけど、お昼に少し時間がほしいんだけどいいかな？」

「ん、わかった」

一之瀬が声をかけてきた理由はおそらくPPの収集だろう。

休み明けに具体的な決定をすると明言していたし、銀行は設立できないにしろポイントは集めておいた方がいいという判断なのかもしれない。僕としても、全額徴収とか無茶を言われなければ異存ない。

それに考えてみると、一之瀬を含むほとんどの人と連絡先も交換してなかったし、Bクラスのグループチャットにも参加してなかったので、伝達手段が細かい者に対する対処である可能性もある。

昼休み。

今日の昼食は学食の日だったので、一之瀬との話をさっさと終わらせてしまいたかった僕は、授業の終わりのベルがなって先生が出て行くと同時に席を立って一之瀬の元に向かった。ついでに一之瀬に用事もあったので一石二鳥だったのである。こういうことは勇気と勢いがあるうちに済ませておくのが僕のモットー、ということにしておこう。

まだ授業の片づけをしているクラスメイトたちを尻目に教室を横断して進む。普段ほとんど見ない奴が我が物顔で突っ切っているのが珍しいのか微妙に注目を集めているが、目的への最短経路が見えているのに回り道する気にもなれずそのまま一之瀬へ直進した。

「あつ、左京君。ちよつと待っててね。今」

「気にしなくていい。とりあえず僕がやれることだけ済ませるので一之瀬……さんはゆっくり聞き流してくれ」

一之瀬の都合を無視するつもりはないので、まず彼女が聞いているだけでいい用事を済ませることにする。

「改めまして。左京夢月です。既に知っているかと思いますが、よく考えたらほぼ話したことなかったので忘れていた可能性を考えて自己紹介を先に」

「いや!? 先週あんなインパクトを与えられて忘れる奴とかいねえか

ら！」

「何だよ、割り込むなよ柴田。そんなのわからないだろう」

「にやはは、流石に左京君を忘れるのは難しいかな」

「えっ、そう？　じゃ、もう一つの用事を。」

「……以前は無礼を働き、真に申し訳ありませんでした！」

どうも忘れられているということはなかったようなので、自己紹介を省いて次は謝罪に入った。きちんとした姿勢で90度に折り曲げた礼の謝罪である。これだけの本気を見せたのだから許されたと思ってもいいのではないだろうか？

「え？　え？　なんで謝られたの私!？」

「——っ！　ツツコミが雪崩と渋滞起こしてて、なに言えばいいのかわからねえ」

「ふう。スツキリした。」

ああ、あとこれ僕の連絡先な。登録は一之瀬……さんにお任せするよ。それから、クラス貯金の振込先はいつでもいいから教えてくれるな」

これでとりあえず僕側からの用事は済んだだろう。

後は一之瀬から何の話があるか次第だが、多少待ってればいいだけだ。ちようど柴田が立ち上がって内なる敵と葛藤してるっぽかったので、柴田の席に座って待たせてもらうことにした。

「つまり、前に私や神埼君に偉そうな態度をとった事を謝ったと。」

そっちは忘れていた、というか気にしてなかったなあ」

「これは言葉を省きすぎだろう」

「いや、神埼。言葉だけじゃない。行動自体や説明を含めて色々突然すぎる上に足らなさ過ぎる」

「……で、お前はなにをやってるんだ？」

「昼食のついでにおにぎり握って一食浮かそうとしてる」

しばらく待っていただけだったが、神埼と四方が介入したことにより事態は収束を見せていた。二人のおかげで、このままでは昼を食いつぶされる可能性に気づかされた者達が、共に学食に向かう選択を

選ぶのは必然だったのかもしれない。そして、そうならばクラスの指折りのコミュ力・知性の強者達である。学食に行くまでの道程での聴取で大体のことがつまびらかになったようだ。

現在は学食で、一之瀬はなにやら物思いに耽り、神埼と四方は僕をデイスリながら意気投合しており、柴田は僕が作っているお握りに興味があるのか質問してきた。

「それってやっぱ節約の為か？」

「節約の意図もあるけど、単純に放課後に屋上とか公園とか行つて腹減ると面倒だから、予め夜飯になる物を用意するのが癖になつてるんだ」

「だから、から揚げ定食と山菜定食二つも頼んでたのか」

「うん。学食に来る時はラップや水筒を持ってきて、再度食べる時用にもう1食になるよう調整するだけで手間もほぼかからないのがいー」

定食ならお握りの具にも困らないし、山菜のようにそのまま具にもおかずにもできる物も多く、味噌汁は1杯分を専用の水筒に入れば、下手な弁当よりも豪華な夜食に早変わりだ。

そしてそれぞれの食事が終わり、一之瀬というかクラス貯金に3万PPを振り込んで、僕が連絡先を交換していなかった一之瀬と神埼と交換したり、グループチャットに参加して話が一段落ついたのを機に、一之瀬の話を聞いてみることにした。

「それで一之瀬……さんは、僕に何の話があつたんだ、ですか？」

「クラスメイトだし、普通に話していいよ。」

……実は定期テストの赤点对策について昨日グループチャットで会議したんだけど、勉強会をすることになってね。良ければ左京君と四方君も教師役になつてくれないかなつて」

「うーん、悪いけど先約とバイトがあるからあんまり時間は作れないし、前の小テストの点数で教師役選定してるんだつたら、偶々知つてることだったから高得点になつただけの僕より90点以上を普通に取つた奴のほうが適任だと思つよ。」

……それに」

実際、あの小テストの結果で教師役選定するのはやめた方が無難だ
と思う。

問題傾向とか以前の出題だったし、むしろあの難題を解いたのが僕
のような2度目の奴以外にもそれなりにいる事が驚きだ。そういう
解答できた奴から教えてもらうのが、真つ当な学力向上の観点からは
有益だろう。

「それに、なんだよ?」

「いやあ、僕って授業以外で勉強とかしないから、多分教え方めっちゃ
下手だよ? おまけに退屈ししたら、勉強してる横で寝たり本とか
読んだりするよ? そんな奴に教えてほしいか?」

「あ、それ俺もかもしれない。流石に邪魔するようなことはしないけ
ど、どうやって助言すればいいのかまったくわからない。それに誰か
に教えたこともないし」

「……」

「四方、お前もか……」

僕は教師役には不資格すぎる。

それでも佐倉や東風谷のような遠慮が少ない友達にはなんとか教
える段階にたどり着ける自信もあるが、名前すらほとんど覚えていな
いクラスメイト達には教えるどころか会話段階で躓くこと請け合
いだ。

そして僕ほどではなくとも、四方もあまり向いていないのはなんと
なくわかっていた。

四方は熱中したり夢中になったりして、集中した状態で真価を發揮
するタイプだ。

これまでの付き合いで勉強にはそこまで熱心でないのが8割方判
明しているのだから、授業では軽い、もしくは浅い集中状態で受けてい
るだろう。それでは教えるほどの理解度には届きにくい。

尤も四方の場合、そんな漏れたような余剰の集中力にも拘らず個人
成績上位にいる時点で規格外ではあるのだが。

「そんなわけで、時間の問題と僕自身の適正から判断して、悪いけど今
回の話は断る」

「俺も勉強会はともかく、教師役は辞退していいか？ 正直、迷惑かける未来しか見えない」

「……そっか、しょうがないね」

「一之瀬、いいのか？ 四方もだが、左京とは早いうちになるべく相談ができる状態にしておいた方がいいと思うが」

「焦っても仕方ないよ。今、無理にお願いしてもお互いに困るだけだしね」

一之瀬への話は終わったと思うが、一之瀬と神埼から漏れ聞こえる話を聞くに、これ以上ここにいると面倒事を呼びかねない気がする。

そう感じた僕は、速やかに立ち去ろうとした。

「——っ！ 待て！ 柴田！」

「おうよ！」

それは超反応で僕の左腕を掴んだ四方と、呼び声に応えて右腕を掴んだ柴田がいなければ成功していたことだろう。

「流石、Bクラスのはぐれメタル。四方、お手柄だ。まさかこのタイミングで逃げ出すとするとはな」

「誰かはぐれメタルだ！ 僕はただ面倒事の気配を感じて立ち去ろうとしただけだ！ というか離せって」

「左京がそうやってしよつちゆう消えるからそんなあだ名が付くんだろ！ 逃げないなら離すからとりあえず座れって！」

「ぐう、四方と柴田が両脇を固めていたから何かあるかもとは考えていたのに、不覚を取った」

「なにが不覚だよ。四方と神埼に言われてなければ反応できないような手際だったぞ。つうか何で逃げる必要があるんだよ？」

「柴田にはこの面倒事の気配が感じられないのか！」

「なにこれ？」

一之瀬は呆気にとられているようだが、これが仕組まれていた姦計である事は明白だ。

一之瀬は勿論、四方や柴田もしないだろう事から、おそらく、いや確実に神埼が発起人だろう。なんの落ち度もない僕を面倒に巻き込

もうと企て、四方と柴田を引き入れ、機を見計らって実行した。一之瀬にはあえて策を話さずに話させる事で注意を集め、洞察力・反射神経に優れる四方と身体能力に優れる柴田を左右に配置することで僕が立ち去るのを阻止する策だろう。

おそらく、この集団の参謀は神埼だ。

「見事だ、神埼。僕の特性や性格をほとんど接することなく見抜き、策でもって嵌めた事は賞賛しよう。しかしやはり僕は面倒事はごめんなんだ。虫がいいとは思うが交渉しよう」

「なに？ 俺とか？」

「……最近特に思うんだが、左京の思考回路ってどうなってるんだ？」

「本能で動いてるんじゃない？ サッカーやっていると稀に見かけるんだが、当たり外れで滅茶苦茶印象変わる奴が多いんだよなあ」

「待つて待つて！ 何でいきなりこんな変な雰囲気になってるの!？」

私は左京君と少し話してみたいなって思っただけで……あれ？ なんかデジャブっぽい？」

口とは裏腹に策に嵌ったと見せかけて、僕ははまだ面倒の回避をあきらめてはいない。全員の思考を可能な限り止めて、どうでも良いと思わせてみせる。

そう、これは神埼が参謀だと見抜いた風に賞賛し、場をかき乱してタイムアップとあわよくば撤退を狙う僕からの反計である。

本当に参謀かはわからないが、その辺はどうでもいい。この場の主導権を握っているのは一之瀬か神埼で間違いないのだ。そして同じ初対面に近い者でも、話すのに緊張する一之瀬を狙い打つよりは神埼の方が成算が高いはずだ。

「とぼけなくてもいい。一之瀬はご覧の有様だし、四方や柴田が姦計を使うようには思えない。つまり消去法で神埼、君がこの策の黒幕だろう？」

「いや、確かに四方と相談して話し合いの場をつくろうとは考えていたが……」

「どつちかというと、俺が仕組んだと言った方が正解だと思うぞ」

「なん・だど!? 四方、僕の裏をかいたのか？」

「ねえ!? その前に」覧の有様って、左京君から私ってどう見えてるの?」

「エゾナキウサギ?……じゃなかった、一之瀬は頼りになる学級委員長様にしか見えてないよ」

「絶対、言い繕ったよね! 私、ウサギみたいに見られてるの!」

しまった。いきなり一之瀬に話しかけられたから、つい口が滑った。東風谷のせいだ。あとでどら焼きを贈ってやろう。いかん、わけわからない。僕も混乱しているのかもしれない。冷静にならねば。

一之瀬の乱入があつたことで、ここから誤魔化しつつ帰る方に話題を誘導する難易度が上がってしまったが、無理矢理にでもやるしかない。

「さて、茶番はさて置くとして」

「茶番! 今、茶番って言った!」

「……さて置くとして、まさか四方に裏切られるとはな。僕は大変ショックを受けた。もう昼休みも終わるし、心の傷を癒すためにも僕は先に戻らせてもらおう」

「お前、面倒臭いからって色々有耶無耶にしようとしてるだろ?」

「昼休み、まだ半分以上残ってんぞ」

「左京、そろそろ諦めるんだな」

「本当にさて置かれた。でも……ウサギ……ウサギ。複雑なような、少し嬉しいような……」

一之瀬だけは違うことを考えているようだが、話の矛先を逸らそうと揺さぶろうと四方達3人の目線が離れてくれない。というか、なんと食後に僕たちはこんなところで頭脳戦のようなモノを展開しているんだろう。

そんなことを考えたせい、僕の口から思っていたことが零れ落ちた。

「何でただ飯食って話してただけなのに、こんな四面楚歌というかオスつぽいというかな状態になったんだ?」

「左京(君)のせいだろ(でしょ)!」

「……君ら、息びったりだな」

初めて話したBクラスの首脳陣はとても仲が良いことがわかった。

22、誤解

「クツクツク。久々に切れちまったぜ」

「ああ、またなんか言い出した……」

「話題がな」

「まだたいしたこと話してないだろ」

「……というわけで帰っていいか？」

「いい加減にしろ。話が進まないだろうが！」

非常にやりにくい。

いまだ四方と柴田に包囲されている現状では口しか出せないというのに、その口から出る言葉が切れかかっている。こういう時に友達である二人、特に四方は厄介だ。何をやろうと話そうとロックオンされ続けているのだ。

それに前方では多少攪乱したとはいえ神埼が目を光らせているし、一之瀬まで復帰を果たしている。

会長の説教地獄の時ほど絶望的な状況ではないが、逃げられる道が見えない。

「左京君って、こんな人だったんだ」

「一之瀬、油断するな。はぐれメタルというだけあって、逃げるバリユエーションも豊富なようだ。念入りに警戒するに越したことはない」

「しっかりと神崎君！ 乗せられてるよ!? 最初は普通に話してみただけで、そしてそれだけだったじゃない！」

「……………そういえば、そうだったな。いつの間にか左京のペースに乗せられていたようだ」

そして最後の希望であった神埼の混乱も一之瀬によって解除されてしまったようだ。

——これは詰んだ。

「クラスの運営方針について意見を聞きたい？」

僕が諦めた事で話し合えると思われたのか、一之瀬から切り出

された話は意外なものだった。面倒そうなのは変わらないが、予想とはその方向性が違うというのだろうか。

なにセクласの運営やら方針やらと僕はこれまで関わった事もなし、目立ったと思われる行動も先週のクラス会議だけだ。とすると、これは僕個人に意見を求めているのではなく、広く募ってクラス中に聞いて回っているのかもしれない。わざわざクラスとかかわりの薄い僕にまで聞くほど人材が枯渇しているわけではないのは、四方の存在が証明しているのだ。

こんな話なら始めから普通に話しておけば、あっさり解散になっていたかもしれない。逃げようとするのでかえって面倒を引き起こしてしまった例として、肝に銘じておくのがいいだろう。

まあ、それはそれとして。

「なんで僕に？ 自分で言うのも恥ずかしいが、僕はこれ以上ないほど普通の凡人だぞ。方針とかそういうのは優秀な奴、例えば一之瀬自身や四方、神埼の方がいいんじゃないか？」

入学直後にバイト探しや創部に動き出し、次の週にはそれらをほぼ達成する行動力。

競泳では普段の自身の実力を超えるだろう四方や柴田を上回る結果を出して、顧問獲得の交渉を成功させる交渉力と勝負強さ。

小テストでは一之瀬とも同率の1位95点を取る学力。

先日のクラス会議では、信用創造という誰も考えていなかった案を言い出す発想力。

……これが自称凡人がこれまでの1ヶ月で成した実績と見せた能力なのだが、これを聞いても意見を聞く価値もないとでも？」

「確かにそれだけ聞くとほっとけないわな」

「それに四方君から聞いたけど、4月中にCPについても予想が付いてたって」

「ああ、プールの少し後だったかな。確認したいと言われて聞かれたなあ」

「あれのおかげで少しはCP減少も抑えられたと思うんだよね」

そんな事実ではあるが異常に持ち上げられた評価を聞いた僕は、落ち着くためにふう、と一息吐いて神埼達を見つめた後、自信を声に乗せるように堂々と言い放った。

「それは誤解だ」

「こんな誤解っていう言葉の使い方する人初めて見たよ！」

「褒められてるんだから素直に受けとけばいいだろうに」

「まあ、落ち着いて聞け。」

バイトと創部は偶々良い巡り合いをした結果だ。学力についても、小テストでは解かせる気しかない問題と解かせる気のない問題の構成で、偶々解かせる気のない問題の方を知っていただけ。信用創造の件も偶々僕の他に言い出す奴がクラスにいなかっただけで、銀行と聞いて思い浮かべた者はいたはずだ。

……さて、これで誤解は解けたか？」

「何回、偶々って言うんだよ」

「ありえないと思うのに、左京の場合、本当にそう思ってそうだから謎に説得力すら感じてしまうんだよなあ」

「ああ、それとCPについては会長や葛城・戸塚と話してる時に偶々判明していったから、僕の功績じゃない。ついでに、偶々は最後まで5回だけだ」

これだけ言っておけば僕の過大評価に至る誤解はある程度解けただろう。

それに加えて、元々の質問というか意見についても現時点の思うところを言っておけば納得させられる可能性は更に上がるはずだ。

「あと一応言っておくと、今はクラスの運営方針とかに不満や何か言いたい事がある訳じゃないから何も言わないけど、意見を言う必要ができたら言うよ。勿論、一之瀬達が困ったり問題が起きた時には微力ながら手を貸すしな。まあ、僕自身は何が何でもAクラスを目指したいわけじゃないから、場合によっては断るかもしれないけども」

「やっぱり左京はAクラスの特権に興味なかったか。俺は実家の商売があるから卒業だけでできればよかったけど」

「四方もかよ。もしかして案外特権目当ての奴って少なかったりする

のか？」

「そんなの知るか。僕は若い内は世界を旅したいから、その辺に融通の利く大学や職場へは推薦なしの実力で行くことがせめてもの礼儀だと勝手に思っているだけだ」

正直、一之瀬のクラス会議での手際を見る限り、運営だの方針だへの口出しは無用どころか害悪ですらあるだろう。一之瀬が健在で問題が起きるとしたら、学校や攻撃的な問題児とかのクラス外への対処あたりではないかと思う。

「一之瀬、どうする？」

「……私の意見だけど、とりあえずこのままでもいいと思う。左京君がそれで良いなら口を出す事じゃないし、手も貸してくれるみたいだしね。私としてはもつと前に立ってくれると助かるけど、会議での約束があるとはいえ無理強ひしたら左京君がどう出るか全く分からない。今まで見たことがないタイプだから、計りかねてるっていうのもあるかな？」

「俺がこれまで友達やって知った左京は、朱に混じって赤みもささないような奴だから、上手いこと動かすには何らかの仕掛けがいるかもしれない」

「どうしても左京を動かす必要ができれば、動かざるを得ない状況を作り出すのが良さそうだな」

「そうかあ？ オレはキッチンと頼めば渋々でもやってくれそうな奴だと思っけだな」

今回は、本当に予想したような面倒ではなかったようだ。

それはそうと、4人が仲良きことは良いのだが僕への対応が杜撰なものではないだろうか？ このままでは便利屋のように使われたりするかも知れないので、釘を刺すと同時にタイムアップを知らせることにした。

「おーい、皆さん。本人の目の前で考察したり堂々と面倒事に巻き込もうとするのやめてもらっていい？ なんかあれば一応手伝うって言うてるんだから、もうこの話は終わり！ さあ、そろそろ本当に昼休み終わるから教室に戻ろう」

「にやはは、ごめんごめん。つい、ね。

……ホントだ！ いつの間にか時間経っちゃってたね。みんな少し急ぐよ」

一之瀬は軽く謝りながら時間を確認すると号令を下して教室へと向かい、神埼と柴田が小走り気味についていく。

僕はあえてゆつくりと席を立て遅めに歩き出し、3人の姿が此方を少し気にしながら徐々に遠ざかっていくのを見て、ようやく息を吐いて緊張を解いた。

「お疲れ」

「はあ、本当に疲れた。しつぽー、全然助け舟出してくれないどころか、なんで一之瀬達に手を貸してるんだよ。柴田は、まだわかるけどさあ」

僕と同じペースで歩いていた四方が労いの言葉をかけてきたので、文句を言っただけだった。実際、柴田は付き合いの深さから見ても一之瀬達に付いても仕方ないけど、四方の性格的にこういう場合は中立寄りになると思っていたので少し疑問ではあった。

「俺にも色々考えてる事があるんだよ。それにお前は良い意味でも悪い意味でも結構注目されてたから、遅かれ早かれだったと思うぞ」

「マジかよ。もしかしてあの過大評価が原因か？ 今回で完全に誤解が解ける……ってのは流石に楽天的過ぎるかなあ」

「左京は過大評価というが、事実ではあるからな。前に一之瀬や神埼と話してた感じ、それ以外の要因もあるっぽいし」

「……………もう、なるようになればいい。考えてみると、敵意を向けられるんじゃないかなんでもいいや」

四方の言う事が本当なら、なんかよくわからない部分でも一之瀬達の関心を買っていたようだが、僕はもうこれ以上考えるのが面倒臭くなっていたので放置することにした。一之瀬が言っていた事を信じるなら、多分これまでとそう変わらないに違いない。

今日は簡単な確認だけだと高をくくっていたら、微妙に疲れる昼食になった。

午後の授業に間に合うように調整したペースで四方と歩きながら
思ったのは、そんなどうでもいい感想であった。

23、常識

一之瀬達と昼食を共にしてからも表面上僕の生活が変わるようなことはなかった。

一之瀬や神埼から声をかけられたりメールが来たりするようになったが、頻度としては葛城や戸塚と同じくらいで指示もほとんどない為、基本的にこれまで通り気楽にやっていけている。

ただ天文部員のうち四方はクラスの勉強会に参加するという事で、テスト明けまで忙しくなるかもと言っていた。ちなみに勉強会に少しでも参加する割合はまさかのクラス内9割で、僕と東風谷を除くと2人しか不参加がないそうだ。

東風谷は小テストの結果が少し悪かったので、一之瀬や四方から勉強会に参加してくれるように誘ってくれた話もあったが、僕自身が参加しないし、したくもないのに勧めることなど当然できない。その為、無理とだけ返して、バイトがない日は授業後即座に東風谷と屋上に逃げ出して籠城する毎日を送っている。

まあ籠城と言ってもただ鍵を閉めて他人が入れないようにするだけなので、部員である四方や佐倉、あとは葛城・戸塚なら普通に招き入れていたりするが。

そんな経緯で屋上で共に過ごす時間が増えている東風谷だが、授業中の印象通りにかなり真面目な部類だった。

籠城生活をするようになってすぐ、自分の成績やクラスの勉強会を断っていることを気にして自主的に勉強を始めたのだ。佐倉がきた時も、葛城・戸塚がきた時も、パラソルを屋根代わりにした勉強スペースで黙々と問題集を解いていたくらいである。

元々それなりの頻度で屋上に来ていた佐倉はそれを見て危機感を覚えたのか東風谷の近くで勉強を始め、わからない部分を僕に聞いてくるようになった。もう少ししたら、東風谷を含めて退学対策をしようかと思っていたので自発的にやり始めたのはいいのだが、Bクラスの面々といい、みんなやる気がありすぎではなからうか？

葛城と戸塚がきた時は、ちょうど二人がいい感じに集中し始めたあたりだったので、邪魔をしないように声をかけて鍵を東風谷に托してから、屋上を後にした。

場所を移しながら簡単に事情を話すと葛城は二人に感心し、戸塚はまだテストまで3週間あるのに今から頑張ってるのかと呆れて葛城に叱られていた。でも正直、僕としては戸塚に同意したいところだった。

そんな感じに東風谷が屋上で勉強するようになって1週間と少しが過ぎた。

今日は満月を鑑賞する予定である為、放課後から軽く昼寝して、食料も買い込んできているし、照明代わりのランプもバイト先から借りてきている。それに佐倉がバイトでいないので、前々から引つかかっていた事を解消しておこうとも思っている。東風谷は今も勉強しているので彼女達の分を含めて少し多めに用意しておいたのだ。

この日の僕は無性に焼きせんが食べたくなっており、カセットコンロで肉や卵、焼きそばを焼いたりして準備を始めた。

焼きせんとは、地元で呼ばれていた名前で正式名称は知らないが、えび太くんなどの大判せんべいに適当な具を乗せて食べるB級グルメの一種だ。今回の僕はすでに挙げた通り肉や卵、焼きそばに火を入れてマヨネーズで食べるが、リーズナブルなお菓子で簡単に作れるから好みでのカスタマイズも色々可能なので時々食べたくなったりする。

ちよいちよい摘みながら、学食産のお握りを焼きお握りにしたり、味噌汁やお茶を淹れていると結構本格的な一食になっていく。調理の音や匂いも食欲を刺激してきていい感じである。なんとなく口笛を吹きながら、もうすぐ完成する夕食と本日のメインであるまだ薄いが出始めてきた満月を見て楽しい気分になってきた。

「楽しそうですね? 私が呪文みたいな英単語を必死に覚えているのに、横でお腹が減ってくる匂いをさせて「ああ! 今日満月で見て

の通り晴れ渡った空だ。なんか楽しい気分になってくるだろう?」
「……はあ。もういいです」

「おっと、そうだ。東風谷達の分もあるから食べていかないか? 最近勉強ばっかやってたし、偶には月見をしながらの夕食で気分転換といこうじゃないか」

「……そうですね。ではお言葉に甘えて、ご馳走になりますか」

東風谷が今日は勉強を早めに切り上げたのかこちらに来たので、月見と夕食に誘う。

勉強疲れでもしているのか少し元気がなかったので、夕食にはまだ早いがお茶と焼きせんを紙皿に乗せてテーブルに一つずつ並べていく。

「……やっぱり気づいてるんですね」

「そりゃあ、あんだだけ主張されたら流石に気づくさ。神様達の事だろ?」

「はい」

テーブルを挟んで対面に座る僕と東風谷だが、僕の側には1つ、東風谷の側には3つのお茶と焼きせんを並べたのは、神様の分のつもりだったのだ。

飲み食いできる存在なのかはわからないが、僕がお供え物をすると思いでいた地元の小さな神様は知っている。嫌いな物じゃないかと思いつつ、折角のタイミングなのでお供えしてみた。東風谷や神様達には、一度ちゃんとしたお礼を伝えたかったので今日のタイミングは好都合でもあったのだ。

僕は一之瀬にやったような冗談じみたものではない本気の感情を籠めて、東風谷と神様達に頭を下げ御礼を言った。

「これまで落ち着いて二人になる機会がなくて言えなかったが、プールでの僕や四方、それに佐倉の事や他にも色々ありがとう。特にプールは一步間違つたら大変な事になってたかもしれない。」

——心から礼を言う。本当にありがとう」

「あの、こちらこそ信じてくださってありがとうございます。ごぎいますとか、左京さんが神様を信じて疑わなかった結果ですとか、巫女や風祝らしい事

を言いたいんですが、この並んだせんべいやソースの匂いに気が散ってしまって集中できません。まず食べませんか？」

「確かに。冷める前に食べよう」

実は御礼を言うタイミングが少し早かったんじゃないかなって途中で気づいたのだが、なんか話の流れ的に言う流れかと思つて、つい早まってしまったようだ。ちよいちよい摘んでいた僕はまだしも、空腹だろう東風谷の腹の音が聞こえた段階で中断して食べ始めるべきだったかもしれない。

そんななんか締まらない感じで食べ始めたのだが、ふと手をつけていない神様達の分が気になったので焼きそばを頬張っている東風谷に聞いてみる。

「……そういえば、神様達の分つて何処かに供えておいた方がいいの？ それとも僕達で食べちゃったほうがいいの？」

「はぐつ、むぐ。そのままで大丈夫ですよ。左京さんはある意味で守矢神社を信仰している信者さんより信仰してくれましたから、かな……神様方が受け取らない事はありえませんが」

東風谷がそう言うや否や、黒い何かが神様達の分を覆い隠してすぐ消えた。勿論、お茶や焼きせんべいごと。

しかし今更だが、神様へのお供えが焼きせんべいというB級グルメでよかったのだろうか？ 自分が食べたかったものを優先してしまつたが、団子とか高級感あふれるお菓子とか酒とかお供えにふさわしい物はそれなりにあつた気がする。まして御礼を伝えるのだから、雰囲気や場ももつと考えたほうが良かったかもしれない。

「……でもお供えを受け取ってもらえたって事は、さっきの御礼は伝わつたのだろうか？」

「ちゃんと伝わっていますよ。風祝の私が言うんですから間違いありません」

僕の漏らした独り言が聞こえたのか東風谷が太鼓判を押ししてくれた。

時々東風谷が言う風祝というのが何なのかいまいちわからないけど、聞こえ方からするとおそらく巫女や祝子の風特化バージョンなの

だろう。すると、この近くで焼きせんを食べているかもしれない神様のどちらかは風神様かそれに類する神様なのだろうか。プールでのことで、てつきり水関係の神様かと思っていた。

まあでも、そんな考察にはたいした意味はないだろう。僕は少なくとも不思議な力で助けてもらった事だけは確信して東風谷含む神様達に感謝しているし、それだけわかっていけばやる事は一つである。しかし東風谷がああ言っているのに何度も口に出すのは好みではないので、僕はしばしの間、心の中で祈るように先程中断してしまっていた感謝をした。

ありがとう。

《貴様が信じた事で少しだけ猶予が延びた。一応礼は言っておこう》

《猶予ができたってのがいいことかはわからないけどね》
不意に吹いた柔らかな風と共にそんな声が二つどこかから返ってきた気がした。

「左京さんは、この時代では珍しく信心深いですね。本当に守矢教に入信しませんか？」

僕は数分ほど祈っていたようだが、そんな東風谷の言葉で我に返った。

東風谷はいつもの静かな雰囲気が入信を勧めてきたが、僕がどう答えるかわかっているのだろう。そういう顔をしている。

「断る。東風谷は友達だし神様達にも感謝しているが、面倒そうなおとはしたくない」

「ふふっ。言うと思いました。神様を信じられないとか宗教だからとかでなく、面倒だからというのが左京さんらしいですね」

「それ以前に、僕がどう答えるかわかって聞くなよ。察してただろう、さっきの顔」

「確かに察していましたが、だからといって左京さんを勧誘しないのはありえないですよ。」

「……今回は諦めますが、気が変わったらいつでも言ってください。私は見た目によらず執念深いですから何度でも勧誘しますしね」

「……………東風谷の場合、見た目通り執念深いの間違いだろ」
実際、下手なことしたら祟られそうな気がしたので、せめてもの反撃として訂正してやった。

「えっ!? 東風谷の髪って、他の奴には黒髪に見えてんの?」

「はい。四方さんのような感覚が鋭い人には、緑にも見える時があるようですが大半の人には黒色らしいですよ」

「マジかよ。佐倉とかクラスの奴らに僕的にはありえない髪色が居たから、東風谷の緑髪も普通だと思ってた」

東風谷による勧誘が一段落して、話しながら適当に用意した食い物を摘みながら月の出を待っている時、何気に雑談の中から入学以来の疑問の一部が解明された。

「あつ、クラスの方たちはともかく、佐倉さんの桃色の髪は霊的な素養を示しているので、私達以外にはあまり桃色に見えないかもしれません」

「はあ? じゃあ、もしかしたら佐倉も神様やお化けとか見えたりするのかな?」

「話した限りでは見えませんが、人ならざるモノに目を付けられやすい事は間違いないと思います」

「…………ああ、そういえば入学直後にそういうのがあったわ。あの時は幸運に転がったけども」

なんかまだ1ヶ月半程度なのに、もうだいぶ前のような気がして忘れかけていた。

あの件は、青娥さんと一応話がついて片付いた事になったが、佐倉からすればまだ解決していないだろうし、お化けを抜いても電器店の

店員自体がアレな雰囲気だったのであれ以来現場にも近づいていない。

……佐倉、何気にお化け関係だけじゃなく変質者にも目を付けられやすい説まで浮上してきてしまったな。

「なにかあつたんですか?」

「うんまあ、東風谷なら理解あるかもしれないけど、ちよつと仙人の遊びと不審者が噛み合ったつぽい事態が起きてな。その狙いが佐倉だったっていう」

「仙人様ですか。それで佐倉さんには妙な気配を感じる時があつたんですか……」

「一応言つとくと、その仙人って僕と佐倉のバイト先のオーナーだし、話もついてるからしばらくは大丈夫だと思うぞ。勘だけだ」

最近は特に仲良くしてるし、仕事を一緒にやっているとところを見るとお互いに気が合っているのだろう。僕としても、青娥さんは享樂的というか気まぐれなところがあるから完全には安心できないが、あそこの居心地はいいし美味しいコーヒーやお茶もあつて大体の仕事は樂なので気に入っているのだ。

「基本的に仙人様は人間の味方とはいえ、自分たちを狙ってきた存在のところよく働くことを決めましたね。左京さんはともかく、佐倉さんは意外でした」

「僕はともかくって何だよ。」

……というか考えてみたら、佐倉は仙人とか黒幕とか知らないかもしれない。オーナーが告白してたらわからないけど、少なくとも僕は何も言つてなかつた気がする」

「それ、本当に大丈夫なんですか!? なんとというか常識的に考えて!」

「佐倉に言つても信じられるかというのもあるし、お化け関係で常識に囚われてたら何もできないだろう。結果良ければそれでいいって、多分」

「……………まあ、佐倉さんからバイト先のことは楽しそうに話しているのを聞いてますし、わざわざ藪を突くこともない……んでしょうか? ちよつと心配だったり、納得いかない部分があります

けど」

東風谷はなにか考え込んでいるようだが、考えてもしようがない事を考えても時間の無駄である。

それより、もう四半刻もすれば完全な満月が姿を現すことのほうが重要だ。腹もくちくなくなってきたことだし、天体望遠鏡やデッキチェアの設置とかそろそろ始めておいたほうがいいだろう。学校の屋上は最大20時までしか使用許可が取れないので時間は無駄にできないのだ。

僕は東風谷や食べ物類はとりあえずそのままにしておいて、屋上扉の脇においてある道具を取りにいくために立ち上がった。

24、一心不乱

「ふざっけんじやないわよ、あの女！ 何様のつもり！ ほんつとムカつく！ お願いだから堀北死んでくれ！ いや、やっぱりあんな奴にお願いなんかしたくない！ 死ね！」

僕が道具を取りにいく為に立ち上がると同時に、屋上の扉越しに櫛田のものと思われる罵声と扉をガンガン蹴りつける音が響いた。

これには流石の東風谷も驚いたらしく、珍しく目を丸くさせた顔を見ることになった。

「こんな日に限って屋上は開いてないし最悪！ 綾小路の奴も役に立たないし、他は役に立つどころかキモい目を向けてくるのばかり！」

どうやら本日は櫛田の愚痴の日だったらしい。聞けば即座にわかるほど、絶好調に荒れ狂っていらっしやる。

東風谷に知り合いだと声をかけて、一応屋上の鍵を取りに荷物のところまでUターンする。

「あの、招き入れて大丈夫なんでしょうか？ もしかして何か憑いたりする人だったりしません？」

「ただの情緒不安定な疲れたOL風同級生だから大丈夫。時々愚痴りに来るだけで、多分敵意さえ向けなければ比較的普通に話せるから変に刺激しないようにな」

「なにと比較してるんですか、全く」

「なになって、それは」

「言わなくていいですよ。なんとなくわかりますので」

東風谷と話しながら鍵を取り、再び屋上扉へと向かう。

そして扉へ近づいているのだが、なぜか既に罵声や蹴り音がしない。いつもなら荒れ狂い続けて賢者タイムに入るまでは罵声や打撃音が聞こえてくるのだが。

前2回と違い、静まるのが早い気がして少し不審には思ったが、新しいパターン構築でもしているのだろうと考え直して、屋上扉を開け

て櫛田に文句を放った。

「お〜い櫛田。入れてやるから扉を蹴るな。もうすぐ月がいい感じで………ゲツ！」

「左京さん、どうしたんです………か」

そこにいたのは、胸を揉みしだかれている櫛田と揉んでいる見知らぬ男だった。

それを見た僕が思った真実は一つだった。

コイツ、よりによって彼氏とイチャつく場所に屋上を選びやがった！

とすると、さっきの罵声や蹴り音は変態プレイの一環である可能性がある。

僕が思いつくものとしては、荒れる彼女を宥めつつ、甘え甘えられの屋上露出プレイとかだろうか？

……15、6の同級生なのに、二人ともなんてハイレベルなんだ。男は先輩である可能性もあるけども。

それによく見れば、僕や東風谷が思いきりガン見しているのに、男が櫛田の胸から手を離す気配すらない。どちらが主犯かは判断つかないが、この男からは櫛田の胸を揉みたい意思だけは嫌というほど感じる。なにせ不測の事態が発生しただろうにまだ布のこすれる音が聞こえているということは、この男は手を動かして自ら揉み続けているのだ。

おそらく、この男の乳に対する思いは並々ならぬものがあるのだろう。

そこまで考えて我に返った僕に不意にどこかから湧き上がってきたのは、意味不明で強烈な父性だった。

いかん！ 東風谷の情操教育に悪すぎる！ 早々にこの変態共から引き離さなければ………！

4人で見つめ合ったまま沈黙している現状だが、種類は違えど以前に四方や佐倉がいた時に体験した居心地悪さを乗り越えた僕には打ち破れるはずだ。

「こ、東風谷！ 見るんじゃないやありません！ 先に屋上に戻ってなさい

！」

「どんなキャラですか。でも確かにお邪魔するのもなんなので、少し出入口から離れたところで時間を潰しましょうか」

「ま」

「そ、そうだな。櫛田、こんな場所だが彼氏さんとゆつくりしていつてね。僕達は1時間くらいは扉の方には近づかないようにするから！」
「待てえええっ！」

言うが早いか速攻で扉を閉めようとしたというのに、乳揉み男が驚異的な速度で接近し、閉まりそうだった扉をこれまた凄まじい腕力で引き戻した。櫛田もその男の動きに合わせるように扉の開閉スペースに足と靴を差し込む。

「いやだ、待ちたくない！ 変態カップルの見せつけ露出プレイとか、僕は勿論、東風谷にも見せたくない！ 屋上使うなら、僕達は帰るから」

「だから違うつつってんでしようが！ どうしてあんたと会うのはこう間が悪いタイミングなのよっ!？」

「話を聞いてくれ！ これにはわけが」

「おっぱい星人は黙っててくれ！ 他人の前でも乳から手を離さなかった奴の言葉に説得力などあるものか！ 万乳引力でも唱えるつもりなら聞こえない場所で勝手にやっつてろ！」

「……………おっ、ぱい……………星……………人？」

まず事実を並べつつさりげなく乳揉み男改めおっぱい星人の視線を一見蔑んでいるような視線に見える素の東風谷に誘導して撃沈し、夢破れたかのような雰囲気（あれ？ あいつ表情変わってないけどちゃんと落ち込んでるよな？）で静かに座り込むのを確認した後、次は櫛田へと矛先を向けた。

僕たちを帰らせないなら、このままバカップル共のテンションを落としまくって、エロい気持ちなど駆逐した上で、無理やり横で月見してやる。

最初から様子見などしない全力のストレートで正気に戻しつつ、攪乱と問題提起だ。

「櫛田の捻じ曲がりまくって終わってる性格や性癖に今更口出しするつもりなんかないけど、僕達に被害を齎すなら考えがあるぞ」

「だー、もう！ さっきのは綾小路君にアレを見られたから脅してただけだっつうの！ よりによって変態カップル認定すんな！」

「脅してた、ですか？」

「あ、しまった。もう一人いたんだった」

「なんだ櫛田、早くも開き直ったのか？ それなら元々隠す必要なんてないんだから、僕に口止めとかいらなかっただろう」

「そっちの子にはあんたのせいでバレたようなもんでしょーが！」

よし、東風谷もナイスサポート。

歪んだ劣情を抑え切れなかった疑いがある櫛田には、いくつかの問題に思考を分散させて引つ掻き回したし、これで二人ともエロい気持ちなど消し飛んだことだろう。男の方にも先手を打っておいたし、ここから立て直して再度奮い立つような真性でなければ、もうこちらとしてはどうでもいい状況にできた。

つまり、あとは櫛田を適当にだめて月見を始めるだけである。

場の空気はそう思えるような状態になったし、いつもの僕に切り替えて夕食のお誘いと軽い警告でも出して、彼女らが食べてる間にさっさと月見に移行しよう。

「うんうん。僕が悪かったね。お詫びに夕食代わりに焼きせん食べてかない？ 勿論、彼氏さんも一緒にどうぞ。あ、僕は向こうで月見してるけど、東風谷には変なことしない方が身のためだよ」

「唐突に素に戻らないでください。ついていけないじゃないですか」「あんた言いたい放題していきなり態度変えた挙句、投げっぱなしか！ 待ちなさい、誤解が全然解けてないでしょうが！」

「僕より櫛田の問題に新規参入した東風谷と落ち込んでるっぽい彼氏さんほつといてもいいの？ それに誤解とか面倒だし解かなくてもいいよ」

「だ・か・ら、脅してただけで彼氏じゃないっつってんでしょー！」

「痴女か痴漢冤罪じゃあるまいに、脅して自分の胸揉ませる女がどこにいるんだよ。軽く服引つpegがされて終いだらうが」

「……綾小路君へたれだし、服についた指紋で強姦されそうになつたつて言えば」

「……もしそれを本当に考えてたとするなら、お前相当疲れてたんだな。性格は知らないが、あんなヤバい速度と腕力を持つてる男相手に、二人きりでそんな自殺行為するほど普段の櫛田は馬鹿じゃないと思つてたんだが」

「……」

もしかすると櫛田は、ストレスとかなんかの焦り的な原因でおかしくなつていたのかもしれない。

冗談交じりに言っただけなのに黙ってしまった櫛田を見て、本当にそんな脅し方でどうにかなると思つていたことに真実味が出てきてしまった。これからがあるかわからないが、少しは優しさを持つて接してあげた方がいい気すらしてくる。

そしてそんな行動に出た櫛田の胸を一心不乱に揉むだけだったおっぱい星人も、襲わなかつたということとは下種・外道ではないのだろう。彼はそう、ただおっぱいが好きただけの青年だったのだ。

変な時に僕の優しさスイッチがオンになつてしまったが、ここは月見を後回しにしても暖かい食事と言葉を彼らに届けなければならぬ。そんな使命感を感じる。

沈黙してしまつた櫛田を促して案内を東風谷に任せ、僕ははまだ無言で座り込んでいるおっぱい星人を立たせて先ほどまで食事をしていたテーブルまで運んだ後、二人にまだ残つていたお茶と焼きせんを出して持て成す事にした。

「さあ、櫛田もおっぱい君も遠慮なく食べ。落ち込んだ時には、何かを腹に入れるのがいいらしいぞ」

「あの、左京さん。櫛田さんはともかく、おっぱい君……さんの呼び方はどうにかならないものでしょうか？」

もうかなり暗くなつてきているが、広範囲を照らすランプの光があるので問題ない。

二人の好みはわからなかつたので、とりあえず櫛田には肉と卵、

おっぱい君には全乗せ+マヨネーズ多目で提供してみた。いつの間にか東風谷か神様方が消費していたのか出した分を含めて残りが5セット分くらいになっていたが、これだけあれば足りるだろう。

自分の焼きせんセレクトに満足していると、東風谷から物言いが入ったので他の呼び名候補を言おうとしたら、おっぱい君が口を開いた。

「頼むから名前で呼んでくれ。俺は綾小路清隆だ。綾小路でも清隆でもいいから、おっ……君はやめてくれ………本当にやめてくれ」

「ん。了解した。僕は左京夢月で、こっちの人見知りしてる奴が東風谷という。

綾小路、よろしくな」

「……別に人見知りしてるわけじゃないですよ」

「……ああ、よろしく」

「で、東風谷。今更だが、綾小路の横で餓鬼の如く焼きせんを食ってるのが櫛田だ」

「一言余計だつづうの。これが美味しいのも逆にムカつく」

櫛田はやさぐれてるような感じでバリ、ムシヤと焼きせんを食ったので、自分から名乗らないかもと思って東風谷に紹介したら、意外にも焼きせんを美味しいと返してきた。

それを聞いて少しうれしくなった僕は、つい軽い宣伝みたいな事をしてしまった。

「だろう？ コスパがよくてB級グルメの中でも野菜を使ったりもできるから、気をつけようと思えば栄養バランスさえ調整できるのかなかの一品だと僕は思ってる」

「あんた、ムカつくとも言ったのは聞こえなかつた？」

「聞こえたけど、美味しいとも言っただろう。自分が好きな物を褒められたら、普通嬉しくなるって」

「……はあ。左京君と話しているとやっぱり調子狂うわ」

「普通……そういうものなのか」

本人は調子狂うというが、櫛田はやっぱり適当な話題でも何かしら

話させていると調子が戻ってくる感じがする。根っこがおしやべりなのかもしれない。

綾小路の方はよくわからない。会話の変なところに引つかかっているような印象はあるがそれだけに見える。でも、珍しく東風谷が警戒しているのはわかる。僕も彼には既視感があるのだが、その疑問を口に出すのならば二人の時の方がいい気がする。

でも綾小路に関しては初対面故にこうなるのも仕方ない部分があるし、まずは前から考えていた東風谷がいる時に榎田が来た偶然を有効利用しよう。

「とまあ見ての通り、性格とか捻じ曲がりきって悪魔と見紛うほどの奴だけど、自分に正直でもあるから、今みたいにはぼろっと零す言葉は結構本音に近いんじゃないかと思う。東風谷とは相性が良さそうだったから今回偶然紹介できてよかった」

「私ですか？」

「それ褒めてるつもりなの？ 喧嘩なら買うわよ」

「褒めても喧嘩売ってもないよ。特に理由なんかないけど、愚痴を零しにくる榎田の印象だとなんとなく東風谷と相性が良さそうだなあ、と」

「……」

「なんとなく、ですか」

「ん。見込み違いだったらごめん。」

——と、タイマーがなってるから日没だ。悪いけど、そろそろ月見したいから話はここまで。僕は約1時間後の19:30まであつちで月を見てるつもりだから、3人とも帰るんだったら気をつけてな。あと面倒だから忘れ物はないように」

そして僕はいい加減月見に移行しよう。

何故か再び静かになった榎田と東風谷、ついでに綾小路も気にはなるが、日没になってしまった。屋上にいられる時間は限られているのだから、こちらを優先させてもらう。

まあ、前の月見でも天文部関係者4人で蒞蓄以外ほぼ無言だったし、今回も特に問題は起きないだろう。

25、普通

天体望遠鏡を月に合わせて、デツキチエアを設置していると、イロモノ二人に挟まれて辛かったのか綾小路が逃げ込んできた。

彼自身にもイロモノとしてなかなかの素質を感じていたが、彼にはまだ自らがイロモノであるという自覚がないようなのである意味仕方ないのかもしれない。

「左京は月が好きなのか？」

「月っていうか、星も太陽も天気も空関係は全部好きだぞ。綾小路のおっぱいに対する思いにも負けない自信がある」

「……………オレの印象をおっp…………胸から少し離してくれないか」

「無理だ」

「……………そうか。即答か」

そんな感じに綾小路とポツリポツリと談笑しつつ、天体望遠鏡で満月を見せたり、蘊蓄を語ったりしてみたが、彼と話せば話すほど四方に似ている印象が深まるのを感じる。

ただ四方は天然、綾小路は無表情のせいか人工のような印象の違いもある。

そして、綾小路に対する既視感は、確定ではないがおそらくこれが原因だろうと思われるものに見当はついていた。

アポロ・アーウィン。

キャットルーキー3部終盤に登場する敵チームのライバルキャラである。

四方と同様に、集中することで人間の運動能力の限界を超えることができ、頭脳や洞察力、発想力まで高レベルで兼ね備えた作中屈指のスポーツの天才。四方は天然、アポロは人工という違いはあるが、ほぼ同タイプといえるだろう。

ただ四方と違いアポロは父親の研究成果、悪く言えば実験体やモルモットとして生活していた弊害か基本的な感情表現がかなり薄く

なっているという話があった。

キャットルーキーでは登場機会が少なかつたというのもあるが、友好的に接した者へはちよろいとすらいえる友好を、敵対的に接すれば敵意を返していたシーンと最後までらしいしかまともな感情の描写がなかつたと思う。

四方という実例を知った上で綾小路を見てみると、彼がアポロ・アーウィン本人なんじゃないかという憶測が頭を離れない。漫画での顔や名前こそ違うが、四方や四方父に感じた既視感に似た何かも感じるのだ。

それに僕は、入学後にキャットルーキーに登場していた人物で現時点で活躍している選手を調べている時に、アポロの父親と思われるゼオス・アーウィン教授が執筆したスポーツ科学の理論が掲載された雑誌も見つけている。その中には個人スポーツで次々に結果を出す息子の記録が記されていた。つまり実在はしているのだ。

更に先ほど扉のところで見えた綾小路の速度と腕力は、僕に競泳の予選で見た本気の四方を彷彿とさせた。

その本気の四方を彷彿させるほどの人物が、アポロの他にいる確率はいかほどか。無表情のまま座り込んでいた綾小路に、勝利を掴んでも喜ぶでもなく無表情のままだったアポロがここでも重なる。

ここまでアポロの印象や特徴に酷似した綾小路と、世界のどこかにいるだろうアポロの存在を掛け合わせると、綾小路清隆とは何らかの事情で偽名を使ってこの学校にいるアポロ本人なのではないかと思えてしまうのだ。

とはいえ、初対面の友達の彼氏……いや、今更だが櫛田って友達枠に入るのだろうか？

……まあ考えても仕方ないし友達って事にしておくとして、友達の彼氏っぽい奴に「綾小路って偽名？」とか聞くのはどうかと思う。正直、滅茶苦茶気になっているが、流石に失礼だし忍んでいるのなら敵対行為にもとられかねない。

「ところで綾小路に聞きたいことがあるのだが少しいだらうか？」

「なんだ？ 胸の事なら答えないぞ」

「違うわ。お前は、おっぱいの事しか頭にないのか。そんなおっぱいで頭いっぱいじゃ夢も詰め込めないだろうが」

「おっぱいで……夢いっぱい」

「ブツ……って、ムツツリの言い分はどうでもいいんだよ」

「……ムツツリ……」

ただ好奇心が猫を殺すとしても、アポロが無表情の裏でおっぱいに情熱を燃やす人物だったら面白いし、アポロの事を抜いて人違いでもそれはそれで面白いので聞いてみようとしたら、想定以上に綾小路のムツツリ度とおっぱいへの思いがかかった。

なんだよ、おっぱいで夢いっぱいって。

そんな返しをされると思ってたから、一瞬吹き出しそうになつたわ。こんな愉快な返しを即座にしてくる時点で少なくとも頭脳の方も只者ではないな。

僕はなんとか思考を整理して笑いの衝動を押さえ込むと、単刀直入に斬りこんだ。

「アポロ・アーウィンって知ってるか？」

「は？ 櫛田でも胸でもなくアポロ………なんなんだ一体？」

「アポロ・アーウィンだが……その様子だと、どうも人違いだったっばいな。なんか綾小路が似てるような気がしたので勘違いしたようだよ。すまん」

本名を言い当てられたにしては、質問を櫛田や胸の事だと思つていた反応ではおかしい。惚けてたり、嘘をついているようにも見えない。ということは四方やアポロと同等レベルの別人の可能性が高くなつてしまった。

……え？ 天才である可能性が高い奴が本物のアポロを除いても入学から3人目!? この学校どうなってるんだ。胡散臭い部分もまだ多いし、2度目の僕すら今まで見たこともないような異才にポンポン出会うんだけど。

僕がある意味、この学校にきて最大級の戦慄をしているとも知らず、綾小路は自分に似ている奴に興味を沸いたのか質問してきた。

「オレに似ている奴がいるのか？」

「んー、個人的な印象だけど、綾小路とアポロってかなり似てると思うんだよな。会ったことはないけども」

「会ったこともないって……まあいい。それで、どんな奴なんだ？」

「アポロはアメリカの大学教授の息子らしいんだけど、その教授がとあるスポーツ理論を出してて、アポロを実験体みたいに扱ってるんだとき。んで、色んなスポーツすごい実績を挙げ続けてるアポロの事を含めて雑誌に載せてたけど顔はわからなかった。顔がわからなかったから、もしアポロが綾小路本人か近しい奴だったら面白そうだなあと思ってた試しに聞いてみた」

「……実験体。オレはそんな感じに見えるのか？」

「ああ、違う違う。どっちかというところ、さっきの扉付近で見せた身体能力と無表情で座り込んだ姿が僕の想定するアポロの印象に被っちゃった感じだろうか」

「待て。さっきのは咄嗟に出た火事場の馬鹿力みたいなもので、オレは普通の高校生だぞ」

「ダウト。あの急加速と豪腕で『普通』は無理がある。」

それにアーウィン教授のスポーツ理論は、端的にいうと火事場の馬鹿力のコントロールだ。それを偶然でも何でも的確な場面で使えるなら、そいつは……綾小路は天然・人工問わずアポロに近い何かを持っているのはほぼ確定だ」

四方みたいな。

それに加えて、漫画知識のアポロと綾小路の特徴が僕の見るところかなり被っているものもあるが、これは信じられるものではないし言うことではないだろう。

それはそうと、なんか綾小路がいやに食いついてきた。無表情の中にも何かを必死で掴もうとするような意思を感じる。僕が言った何かが綾小路を刺激してしまったのかもしれない。

確かに、お前はモルモットに見える、みたいに聞こえなくもないから不快にさせてしまった可能性は高い気がする。

なので、お詫びの意味でもなにか言っておきたいが初対面では何を言えばいいのか判断つかない。勢いで話を進めようという

時に困る。

残念ながら僕の知っていることはそう多くないのだ。

だから答えられることにはなるべく齟齬が出ないように、雑誌の記憶をひっくり返ししながら会話に答えるのが僕のせめてもの誠意である。

「……………それはもう、とりあえずいい。それで、そのスポーツ理論と
いうのは」

「僕も軽く読んだだけだけど、『優れた人間を作るためには、肉体とともに脳や精神も鍛えなければならぬ』という考えの下、催眠療法や脳の覚醒みたいな怪しげな物も使って、様々な訓練をさせながら超人みたいな人間を作ろうっていう理論だと思う。実際、アポロの実験データというか実績も載ってたから、ある程度の成果は出てるんじゃないね」

「……………」

思い出した理論を簡単に説明すると、綾小路はもう言葉もなく、なんかえらく真剣な顔で考え込んでいた。おっぱいへの執着は少し違うが、唐突に何かに熱中するところや端的な言葉が多いところなど、やはり綾小路は四方や想像上のアポロに似ている気がする。

そんな綾小路の琴線に触れるような部分を興味本位で引つ掻き回してしまつたかもしれない。悪いことをした。

でもまあ、アポロでもその関係者でもなさそうなのはわかつたし、好奇心もそれなりに満たせた。唯一の話し相手は黙ってしまったし、もう質問がないなら僕はあと僅かになった月見の時間を楽しみますか。

僕は考え込んでいる綾小路の事は脇において、デツキチェアに寝転がって綺麗に輝く満月をタイマーが鳴るまで見上げ続けた。

ピピピピツという電子音が屋上で発生し、本日のメインイベントの終了を告げていた。

少し引つかかっていた東風谷と神様達へも御礼できた。偶然櫛田

が来たので、東風谷に紹介できた。綾小路と話しながらの時間もあつたが、ゆつくりと綺麗な満月を鑑賞しつつ、ついでに好奇心も満たせた。

今日は、総じて充実した月見だったんじゃないだろうか。

「綾小路、そろそろ時間だ。20時までに出ないと怒られるから、そろそろ帰宅の準備をしてくれ」

「……ああ」

綾小路が横にいてボーっと夜空を見上げていたので、声をかけて正気に戻す。

月見の後に改めて見た綾小路は、月の狂気や魔力というべきものが逆におっぱいへの思いとかを浄化したのか、落ち着いた雰囲気になっていた。それに天体望遠鏡やデツキチエアを片付けていると、綾小路がデツキチエアを運んでくれる親切さまで見せたのだ。

やはり月は偉大である。

屋上を見渡すと、ランプで明るくなっているテーブルのところにはまだ東風谷と櫛田も残っていて、仲良くなったかはともかく一緒にいても問題はなくなったようだ。

二人にも声をかけてゴミと残り物を分けて詰め、テーブル周りを片付ければ、あとは出しっぱなしの東風谷の勉強スペースだけなので、ランプを持ち運び形態にすればいつでも帰ることができる。

ふと櫛田と綾小路が月明かりしかなかった屋上で変態心が騒いで再び奮い立つかもと心配にもなったが、流石に時間制限もある為にそういうことにはならないようで、ただ二人とも無言で見つめ合っているだけだった。

……ケツ、このリア充共が。

まあ、こうした内心を抑えてこそ大人だろう。僕は肉体年齢はともかく大人経験があるし、櫛田がイロモノである認識もあるので羨ましさや妬みもそこまで沸かない。

ただリア充爆散しろとささやかに願うのみである。

それを考えれば東風谷は立派なのだろう。警戒こそしているが全くそのように思っている風もなく、いつもの静かな佇まいには一種の

貫禄を感じる。

「よし、もう忘れ物はないな。さあ皆のもの、帰ろう」

「ああ」

「……………」

綾小路しか返事を返してくれなくて少し寂しい。

櫛田は綾小路ばかり見てるし、綾小路も返事は返してくれたけど櫛田に注意を向けている。ただいつもと違って東風谷が声を出さないのは、綾小路に謎の警戒心を持っているのとバカツプルに関わりたくないからだろう。後半の気持ちはわかる。僕も単体ならともかく、屋上露出プレイを見せつけようとする二人組とは関わりたくない。

そんな事を考えながら屋上扉の鍵を閉めている時に、顧問の東山先生が急いだ感じでやってきたので応対する事になった。

ちなみに今回の屋上使用や夜間活動なんかの許可申請は東山先生が手配してくれた為、前回と違い大変楽ができた。特に生徒会室に行かなくてよくなったのは大きく、僕の先生への態度も自然と丁重になっている。

「左京！ 見に来たがもう終わってしまったか!？」

「東山先生、お忙しい中ありがとうございます。今、解散するところですよ」

「すまん！ 一度はきちんと活動に参加しようとしてるんだが、大会や定期テスト以外にも仕事が溜まってしまっただけだ」

「とんでもない。僕が無理を言って顧問を引き受けてもらったのに、忙しい中で気にしていただけで十分ですよ。元々名前だけ貸してもらおう約束でしたし」

「そう言ってもらえるとありがたい。だが秋には少し暇ができるので、その辺の天体観測には呼んでくれ」

「了解です。秋は月に星、澄み渡った空に紅葉、花鳥風月の全てが素晴らしい季節なので、ただ見上げるだけでも楽しい時期ですよ」

「ハハハ、楽しみにしておく。それではそっちの3人共々気をつけてな」

「はい。それでは」

東山先生と別れ、校舎を出たところで月を見上げてみると、意味もなくテンションが上がって走り出したくなかったが、後ろの3人が無言でブレーキをかけてくる。

この3人からは屋上で揃ってからずっと技撃軌道戦でもやっているのかというような緊迫感が漂ってくるのだが、何故か3疎みになりながら一緒に歩いてくるのだ。

寮の方向に歩いているのだから一緒なのは当然といえば当然なのだ、散開しようとする東風谷や綾小路がなにか目力の籠もった懇願的なモノを送ってくるし、櫛田は人とすれ違う度に変な百面相をしていて不気味なので、よくわからないブレーキが多方面から複数かかる。

その微妙な均衡の為、無言で帰宅する4人組ができてしまった。いや、僕は別に無言でいようと思ってるわけじゃないが、誰も口を開かないだけだ。

結局、寮にたどり着くまで解散できず、僕達『3人』が乗ったエレベーターを降りるまで妙な空間で過ごすことになった。自室に入っ
て思わず安堵のため息が漏れたのも当然といえるだろう。

……関係ないが、エレベーターの扉が閉まる直前、バックステップして自分だけあの空間から早々に離脱した綾小路にはいずれしかるべき報いが訪れることだろう。

26、偶然

5月24日。

飛び入り参加2名の月見が終わって、1週間ほど過ぎた。

最近の天文部の面々は勉強に精を出し、葛城や戸塚、櫛田も忙しいのかあれ以来見ていない。中間テストまで1週間になったから、そろそろエンジンをかけ始めているのかもしれない。

綾小路だけは一度顔を出して、アーウィン教授のことに始まり、システムや会長がどうか過去問がどうか今何やっているんだとか、ビツクウエーブに乗っているような勢いで聞いてきたが、何故僕に聞くのかわからない事が結構多かった。ただ意図は不明で面倒でもあったが、彼には借りがあるし隠すことでもなかったので思うことをそのまま答えたら、一応納得したような雰囲気小さく頷かれた。正直、何に納得したのかまったくわからないのだが、四方ともそういう時があったりしたので気にしないことにした。

ついでに去り際。

「用事がなくてもまた来てもいいか？」

「来てもいいけど、それなら入部してくれると助かる」

と返したら苦笑いを浮かべながら考えとくと言い残して去っていった。

今の感じだと望みは薄そうだが、これでまだ入部手続きをしていない佐倉に続いて2人目の入部候補者になり本当に入部してくれると、佐倉と合わせて部員5名を達成できる。顧問の時ほど重要ではないが、達成できると部室と部費の申請が解禁されるので是非その気になつてほしいものだ。

またこの間、僕自身が日向ぼっこ以外では暇になったので、勉強で佐倉や東風谷がわからない部分を教えるだけでよく、そこそこ大きな自由時間ができたのは僥倖だろう。これを機にやりたいことを消化していこうかと考えている。

ただその前に、各クラスの勉強会のせいかわ僕にとって不都合な事に

図書館に人が多くなっていたので、雨の日に読む本や場所の調達が億劫になってきている事への対処も必要になった。

これからもテストの度にこうなることが予想できるので、代わりにできそうな場所を僕より2年多く過ごしている会長にメールで質問したら、図書館の裏口のような場所にある図書資料室という場所を教えてもらった。追加で説教臭い文言もあったのが余計だったが、これでとりあえずこれから読み物や場所に困ることはないはずだ。

この良好な状況を享受できている僕は、まずは前からやってみたいと思っていた自作流しそうめんを実行に移してみることにした。幸い、以前バイト先で竹林に生えているたけのこを収穫する仕事が入ったので、ついでに竹も5本ほど伐採させてもらい材料の準備できているのだ。

最近では昼休みに屋上や資料室を借りたりして、おにぎりを齧りながら、本体や支柱、カーブなどを設計したり、ウォータージャグから流れる水や流すそうめんの適切な勢いを計算しながらこつこつ加工したりと充実している。

着々と出来上がっていく流しそうめん装置を見た佐倉や四方は、テスト前になにやってるんだと最初は否定的だったが、東風谷や先ほど挙げた綾小路は浪漫を解するようで、完成してもそうめんを流すのは中間テストの後にして、絶対私（オレ）も呼んでくれと別々に頼んでくるほど気に入ったようだ。綾小路に至っては連絡先を渡してくる本気度である。

正直面喰らったが、そうめんを流す役をどうするか考えていなかった。なので交代要員の有力候補を確保できたのは棚から牡丹餅だ。勿論、了承して連絡先を交換したら、表情はほんの少ししか変わらないのに雰囲気はめっちゃ嬉しそうに変わって、僕の下心ありな自覚を通して罪悪感を刺激してきた。日頃、彼女……榎田を封印している苦労を労働の意味もこめて、当日は彼にも楽しんでもらおうと考え直し、交代要員には別の人員を充てようと思う。

しかしまだ話をしたのは2回目だが、何気に綾小路の表情が僅かでも変化するのを初めて見た瞬間だった。

5月の最終日はみんなお待ちかねの中間テストだ。

1日で5教科全てを終わらせて、週明けに結果発表するようだ。

それにしても退学がかかっている割に、1日に全てを賭けさせるわ、救済措置は一つもないわ、結果を最下位まで張り出して晒し者にするわけで、勉強が本当に苦手な奴には地獄のような制度である。蜘蛛の糸は、馬鹿にはやらんという意思表示だろうか。

ただそれより僕としてはその次の日、テスト休みと言われている土曜日に月初めのPP支給が行われるのかが地味に気になっている。CPは今朝確認したところ690のままだったので6月の支給額に変動はなさそうだし、土曜支給があるかないかでPP銀行のようなものの有無やポイント関係の部署の動きなどがある程度判別できるのではないかと僅かに期待している。

もしも支給日が6月3日の月曜日にならずにずれ込むようであれば、十中八九専用部署による運用・保守と判別できるが……おそらくそうはならないだろう。以前に聞いた担任や会長の話からは、彼らでさえPP関連のシステム情報を伏せているのではなく完全には把握できていない節があったので、相当秘密厳守しているシステムに違いない。

ちなみに中間テスト自体に関しては、こんなどうでもいい他所事を考えている時点でお察しである。授業内容と多少ずれている部分はあったが、真剣に授業を受けた上に2度目の僕に死角は少ない。小テストと同じようになぜか少し古い問題の割合が多いとは感じたが、あそこまでおかしい構成でもなく強いて言えば決められている問題を出しているだけのような印象だ。もしかすると定期テストは授業と違って、学校や国から指定された問題を出さなければならぬのだろうか？

でもまあ、これなら平均90点前後程度は取れるし、軽く勉強を見た東風谷や佐倉も苦手教科でさえ50点をきくことはないと言言できる。クラスの勉強会にも参加した四方や柴田に至っては問題にもならないだろう。

最後の英語を終わらせた時にそう確信した。

そのまま時間が過ぎるのを待っていると、ようやく中間テストが終わった。

今日はバイトがある為、早めに顔を出して仕事前にゆつくりとコーヒーを楽しむつもりなので忙しいのだ。

「んじや、四方、東風谷。僕はこれからバイトなんで、また来週」

「はい、また。ここしばらく歴史や古文を教えてくれてありがとうございまして」

「どういたしまして。その様子だと問題なさそうだな」

「テストが終わったと思えば、バイトも入れてたのか。左京も好きだな」

「あそこのコーヒーは僕の生命維持飲料だからな。下手しなくても僕が淹れるものより美味しい」

四方や東風谷には、僕がバイトに何を求めているかある程度話している。

きつい日はいまだにちよこちよこがあるが、やはり好きなものを好きに口にできるこのバイトは僕にとって最高の仕事場である。だからといって、本格的に就職したいとか、いつぞやに誘われた仙人になろうとかは考えていないわけだが。

それはともかく、二人に声だけかけて今日もいち早く教室を出る。

早足で進む僕の後方で少し遅れて東風谷も出てきたのもチラツと見えたが、階段を下りるころには見えなくなっていた。おそらく違う方向から帰るのだろう。東風谷が屋上に来ない時に何をやっているか知らないが、彼女も僕に近い帰宅方式を採用しているのは気づいているのだ。

校舎を出たくらいで早足は止め、意識して速度を落とす。

稀にだがここら辺で佐倉が追いついて来ることがあるのだ。友達でイロモノだろうと、同級生の美少女と登下校する夢のシチュエーションを叶える機会を逃す手はない。故に自分でも馬鹿な事をしていいると思いながらも、偶然を発生させる確率を上げようと無駄な非効

率をしてしまうのだろう。これは僕も男である以上どうしようもないのである。

そんな自嘲をしつつ歩く速度を上げることもせず ゆっくり歩いていると、前方から粘つくような視線を感じて思わずそっちを見てしまった。

そいつは見覚えのない男だった。

外見は、中肉中背で細めの目に作業着を着ていて普通なのだが、なんとというか雰囲気の変なのだ。といつてもお化けや神様、青娥さんの術のようなモノは感じない。おまけに僕の感覚は普通の人間だと教えてくれている。だからそういう意味では脅威ではない。

しかし、嫉妬や憎しみを煮詰めたような目と、何かに対する執着心が保身を越えて溢れそうになつているとでもいえばいいだろうか。ただの勘でしかないが、注意していないと信号待ちしている時に車道に押し出されたり、バイト先に押しかけて火をつけたりしそうな危機感を覚える。

「左京君！」

その時、離れた場所からタイミングが良いのか悪いのかわからない佐倉の声が響いた。それにしても、このタイミングで僕に追いつくということは、佐倉も僕や東風谷と同じ帰宅形式なわけだがそれは今はいい。

その声を聞いて僕は悪い夢から覚めたように我に返り、僕を見ていた男は身を翻して去っていつている。最後に佐倉の方を一瞥した男の目には不穏さしか感じなかった。

僕が嫌な予感を感じて足を止めていると、佐倉が追いついてきていつもの内弁慶モードで、少し不思議そうに疑問を口に出す。

「でも左京君が追いつくまで待つてくれるの珍しいね。いつもスタスタ進んで行つちやうのに」

「……佐倉。なるべく首を動かさないように目だけで僕の右の角を見てくれないか？」

そんな佐倉に、何事もなければいいという一縷の願いをこめて右方の確認を頼んでみる。

「どうしたの？ あつちに何が——ひっ！」

「すまん。配慮が足りなかった。佐倉は今日バイトないだろうけど、とりあえず青娥さんのところまで行くぞ。歩けるか？」

「う、うん。なんとか……」

まあ当然いるよな。あの雰囲気だったし。

佐倉の怯えようから推測するに、かなりヤバい状況なのではないのだろうか？

歩けるか？ とは聞いたが、見るからに腰が引けている佐倉に入学直後の電器店よりも状況が悪そうな印象を覚える。万が一、今すぐ襲われたりしたら二人とも逃げることもままならないかもしれない。だって、僕も膝がカククンカククンいいそうになってるのを必死に堪えてるくらい怖いもの。目の前の佐倉は涙目になっているが、僕もきつと涙目だろう。

物語の主人公とかは何でこんな状況で格好良くヒロインを助けたりできるんだろうとか、佐倉とついでに僕が惚れてもいいから今すぐヒーロー登場カモン！ とか意味のない妄想が頭を通り過ぎていくが、状況は時間が経つほど悪化するかもしれない。

まだ何もされていない現時点では、警察への通報はおそらく悪手になる。すぐに駆けつけてくれると思えるほど僕は楽天的じゃないし、あの男をかえって刺激することになって、この場はまだしも次が恐ろしい。

暴力沙汰で頼りになりそうな連絡先は東風谷と綾小路、あとは会長くらいだが、東風谷はなけなしの矜持が完全粉碎される為除外。綾小路と会長は、本当に数回会ってメールしただけの浅い付き合いなので、流石に巻き込めない。そもそも学校関係者はテスト終了直後で連絡に気づくのが遅れる可能性もある。

故に残る選択肢は青娥さんしかない。

あの仙人なら不思議パワーを借りようとしなければ、そして彼女の利益を出す考えを思いつければ助けになってくれるはずだ。僕や佐倉とは別次元に存在するような仙人な上に、利益といっても金とかの即物的なものではないことがわかるだけに交渉も容易ではないが、青

娥さんのテリトリーに逃げ込めば最低限一時の逃げ場にはなる。

——よし。改めて目的地は喫茶・芳香で決まりだ。

それはそれとして。

「佐倉、ちよつと聞きたいんだけどさ………手繋いでもいい？ 正直、めっちゃ怖くて足がガクガクしそう」

「……別にいいけど、そこは左京君が見栄張ったりして格好良く決めるところなんじゃ？」

「格好やええかつこしいで、危機をどうにかできるなら苦労なんてしないんだよ。逃げる事になっても、どつちかが置いてかれることもないナイスアイディアだろうが」

「というか手を繋がなかった場合、咄嗟の時に運動能力的にはおそらく佐倉を置いて逃げる事になる。まさかこの乳で俊足という可能性はないだろう。ちらりと同じくらいのサイズに見えるうちのクラスの学級委員長や女子が体育で爆走していたのが頭をよぎるが、佐倉はあんな例外には見えない。」

まあ僕の邪念と矜持はともかく、友達を見捨てるとかありえない。更には佐倉を置いていった事に気づいたら、Uターンしてあの男と対峙するなどという愚行にまで発展する可能性すらあるのだ。

なにより僕はこんな話に時間を消費する気も、恐怖を誤魔化す良い手を我慢する気もない。一応の了承はあるのだから、さっさと強引でも手を繋いでしまつてバイト先まで移動してしまおう。

「あっー！」

「行くぞ」

うん。確かに手を繋いだことで恐怖はだいぶ薄れて、ペースを合わせる必要はあるが走れるようにはなった。

しかし誤算もあつた。

なんか滅茶苦茶手が柔らかくて、物理的な距離も近づいたので佐倉の気配や匂いも強まってしまったのだ。おかげで思考があつちこつちへ散ってしまう。

入学直後の時は初対面に加え、お化けの事に集中しすぎていてそれどころではなかつたらしい事によく気づいた。

僕は女子と手を繋ぐ事を甘く見ていたのだろう。

よく考えたら、前の人生を含めても大学の時に一人と付き合ったことがあるだけのモテない君が、そこからざっと計算して20年以上ぶりくらいに手を繋いだのだ。それも前の緊急避難ではなく、恐怖はあるとはいえ多少の精神的余裕がある状態で。

もはや佐倉を見る勇氣はなくなっていた僕は、一応監視のつもりであの男を見て。

——固まった。

やべえ、あいつの狙いは完璧に佐倉だった。

これだけ離れてるのに佐倉への執着と僕への嫉妬……どころか憎しみすら感じる。まるで可視化されたオーラを纏っているかのようだ。相変わらず超常の力は感じないが、怖いものは怖い。

僕は佐倉への恥ずかしさと、執着男への恐怖でわけがわからなくなりながらも、どうにか再起動を果たして佐倉のペースに合わせながらバイト先へ急いだ。

P、佐倉愛里

人と触れ合うのが苦手だ。

人の目を見て話すのが苦手だ。

人が集まっているところで過ごすのが苦手だ。

いつからそれが苦手だったのかも覚えていない。

わたしはそれらが苦手だったから、一人で大丈夫。孤独でも大丈夫って、いつも自分に言い聞かせて仮面を被って生きていた。

本当は心の底から、心を通わせる人がほしいと願っていたのに。

どこでもいつも一人きりで……目を伏せながら人との関わりを拒絶していた。

そんなわたしだったから、高校入学直後に友達ができ、その後もだんだんと自分の周りに人が増えてきていることが信じられない時がある。最近では友達の前で仮面がはがれている自分に気づいて吃驚する事すらあるのだ。

頼りになって優しい青娥さん。いつも相談に乗ってくれる茜先輩。無口だけど寄り添って一緒に考えてくれる早苗さん。冷静におかしいところを突っ込む四方君。

そして、このみんなとの縁を繋いでくれた左京君。

二度も怯え震えながら必死で手を引く張って助けてくれたのにも勿論感謝しているが、生徒会室でわたしを友達と言ってくれた事が特に今でも心に残っている。勿論、初めてのお月見で東風谷さんや四方君に紹介してくれたり、いなくなったら寂しいと真剣に伝えてきた事も、わたしにとっては大事な思い出だ。

左京君は、基本的に格好良くなって突飛で器用を装いながら不器用だ。でも不思議と大木に寄りかかって休む時のような無条件で受け入れてくれるような安心感と信頼も感じる。これはわたしや東風谷さん、四方君も共通して感じていたのを話していた時にわかった。

わたしは人を拒絶し、東風谷さんは何かに絶望し、四方君は人と距離を置いている。

そんなわたし達3人を、何も言わずに友達として受け入れて居場所を作ってくれた。

東風谷さんが言っていたが、奇跡のような縁だと思う。

わたしはそんな左京君に奇妙な魅力を感じている。

2ヶ月くらい結構一緒にいたけど、彼は度々一人でいる姿を見かけてもわたしと違って孤独と感じない。逆にその在りように何処か惹きつけられてしまう。本来、人に話しかけることをしないわたしや東風谷さんが、自分から声をかけたくなってしまうのはこの独特な雰囲気も原因だろう。彼が何かすれば、それってどうなの？ という言動が多いことをわかって近寄ってしまうのだから。

「よし。起業しよう」

何とか何事も起こらずに喫茶・芳香に着いて、わたしが付き纏われていた事や脅迫状の事を話して、芋づる式にグラビアアイドルをしている事まで知った左京君の第一声がこれだった。まるで意味がわからない。さつきまで確かに涙目で震えながらわたしの手を握っていたのに、もう堂々とわたしと青娥さんに言葉を放っている。

これまで何度か見たが普段と同一人物とは思えない変わり身だ。でも面倒事を嫌う割りに、この変わりようだと逆に面倒事を引き寄せたのではないだろうか。改めて考えてみると面倒な性格だ。

そんなことがふと頭をよぎる中、困惑しながら横を見ると、ここでは面白いモノでも見るような珍しい青娥さんが左京君に応答していた。

「起業？」

「一つは警察対策です。警察が丁重に扱ってくれる職業の一つ、それが」

「メディア関係者ですわね」

「その通りです。アイドル単体では被害が出るまで動いてくれる確率

は低いですが、こういう時に警察を動かしたりして守ってくれるのがプロダクション事務所のはず。ですが外と連絡も取れない現状では、佐倉の所属事務所にはどうすることもできない」

「つまり学校敷地内にプロダクションを行う会社を起業して佐倉さんを所属させ、わたくしや左京さんが役員として同行して警察を渋々でも動かして安全を確保するのですか？」

一緒にいるとすぐわかることだが、彼には途中経過を省きすぎる悪癖があつて、わたしも早苗さんや四方君でも付いていけるかは半々なのだ。

今？ やりたいことはなんとなくわかるけど、どうしてその案が出てきたのが全くわからない。普通は、もっとこう、違う感じになるんじゃないだろうか？

この悪癖、わたしが知る限りでは、青娥さんだけが理解できている気がする。そして左京君話は話を通じる人がいると細かい説明は当然のごとくカットしてしまう。

「はい。まずストーリーカーの件を何とかする中心は僕と佐倉。それまでの安全は学校と友人達に頼って時間を稼ぎつつ、できるだけ証拠を集めます。青娥さんはまず法務局で登記を出してもらって佐倉の所属事務所との交渉をお願いします。適当でもいいのである程度の社会的肩書きを青娥さんといいでに僕に。警察を動かす時に、僅かでも説得力を上げられるかもしれません」

「……なるほど。でもこれは直近の問題を解決しつつ、長期的な一手も考えていますかね？」

「勿論。上手く軌道に乗せれば所属クラスにおける佐倉自身の問題を粗方吹き飛ばせる方向も狙える可能性があり、更には佐倉自身は勿論、青娥さんにも利益が生まれますよ。」

それに聞いた話ですが、佐倉関係の外部との交渉や撮影なんかも青娥さんが手伝っていたらしいじゃないですか。だから今月号の雑誌に佐倉がグラビアを飾れたと。ならこれまでにプラスαが付くだけで青娥さんには『あまり』損はないと思います」

なんかわたしを置いてけぼりで、話がとんでもない事になっている

ような気がする。

どうにか目立たない方向にしたいくてどこかで話に入ろうとしてくれるけど、二人が話している内容が頭にすんなり入ってこなくて割って入れない。それにどうも話していること以外にも何かありそうなのに、わたしにはそれがなにかわからない。

「……………うふふふ。良いでしょう」

(まさか、このわたくしをこのように利用し、かつ利用されようとする人間が現れるとは。ストーリーカーごとき、今のわたくしの術でもどうとでもできると知っているだろうに)

まごまごしていると、ついに何らかの承諾がなされてしまった。

左京君と青娥さんは、わたしから見ると割と似たもの同士というか同類なので、二人共ノリノリになるとブレーキ役がいなくなるのだ。思えばわたしがバイトをすることになった経緯も、いつになくテンションが変になっていった時に二人のノリに乗せられたからだだった。その後が続いたのが青娥さんとの面接、生徒会室での恐怖体験と茜先輩との出会いだったのもこの印象を強めているのだろう。

……最初の1週間で高校入学までに人と接しなかった分を一気に摂取した結果、オーバーフローを起こし茜先輩に助けってもらったのをまた思い出してしまった。

遠く感じる過去を思い返している間に、左京君と青娥さんの話は詰めに入ってしまった。わたしが付き纏われていた事が中心だったはずなのに、いつの間にか話か明後日の方向へ行つて、ふわふわ現実逃避をしている間に何処かに着地していたようだ。

「佐倉、社名は桜プロダクションでどうだろう？ 佐倉の苗字と植物の桜を掛け合わせたなかなかの命名だと思うのだが、芸名の雫プロダクションや他の命名でも勿論かまわないぞ」

「佐倉さん関係の交渉は任せてくださいませ。何か要望があれば外に届けてきますわ」

これはもうだめだ。逃げられない。

左京君の笑顔を曇らせる事にも罪悪感を感じそうだが、特に青娥さんの笑顔がもう本当にやばい。あれははいとYESしか求めてない

目だ。聞いてないとか、目立ちたくないから嫌とでも言おうものなら、青娥さんの怖い部分を見ることになりそう。いつも優しい青娥さんだけど、ネットアイドルをしている事がバレてから一緒に撮影してくれたりする時や、ふとした時に見せるこの壊れた笑顔と厳しさはもはやトラウマ物なのだ。

「ぎ、桜プロダクションがいいです。要望は今のところ思いつきません」

「なんで急に敬語?」

「さあ、何ででしょうね?」

……ともかく交渉が順調に行けば、登記は桜プロダクションで所属タレント佐倉愛里、社長左京夢月、相談役霍青娥で出していきますわ」
「お願いします。こちらはこちらで進めておきますね」

そう言つて頭を下げる左京君がいつかみたい我真剣な顔になっていたので、わたしは制止の言葉も出せずについ見入ってしまった。話はよくわからない部分も多かったけど、左京君は絶対に裏切らない。

それだけはわかる。

そんな確信にも近い直感がある。

本人も言っていたけど、左京君は間違いや勘違いも結構起こすし、知識はともかく頭は良くないのかもしれない。それに努力が嫌いだったり突飛な言動が日常的に頻発する欠点があったり、突出した能力もあるわけじゃない。

それでも真剣になった左京君は誰かの為に動ける人だ。

初めてあった時や4月最後の屋上。それに授業で四方君が無理していた時に東風谷さんに万が一の場合の救助を真剣に頼んできた事もあったそうだ。自分の力が及ばないと判断したら、友達や他の誰かに頼ることも躊躇わないのだろう。

そしてやり方はどうあれ、本当になんとかかしてしまおうのだ。

その誰かや友達の為に。

左京君にはそんな不思議と信じたくなる雰囲気があった。

「でも一応、最終確認だ。佐倉、この話に乗ってくれるか?」

だから目立つかもしれないなかつたり青娥さんの事を抜いても、もうその最終確認を断る選択肢はわたしにはなかった。

「左京君、青娥さん。宜しくお願いします」

「お任せくださいまし」

「これは僕や青娥さんじゃなくて、佐倉の踏ん張りどころだぞ。でもまあ、できることは何とかするさ」

あくまでも自信満々に飄々と、しかしその態度はわたしの事を考えてだとわかるから。

左京君のその在り方はとても眩しかった。

わたしは人と触れ合うのが苦手だった。

わたしは人の目を見て話すのが苦手だった。

わたしは人が集まっているところで過ごすのが苦手だった。

本当は心の底から心を通わせる人がほしかったのに、いつも一人きりで目を伏せながら人との関わりを拒絶しているだけだった。

これまでずっとそうだったけど、左京君に引つ張られて少しだけ変われたと思う。

ただこれだけは自信を持って言える。

左京君達はわたしの大切な友達だ。

まだ心を通わせることができているとまでは思っていないけど、その入り口への第一歩はようやく踏み出せたんじゃないかな。

今はそう思えるようになった。

だからわたしはわたしに出来ることをやると決意した。大切な友達みんなに恥ずかしくない自分になる為に。

27、力押し

交渉により、佐倉のストーカー対策の重要部分を青娥さんに投げることに成功した。

交渉材料と安全マージンの為に起業することにはなったが、後々のことを考えるとやっておいた方がいいのは間違いないので、諸々の問題には目をつぶろうと思う。僕は青娥さんを術とかの反則技以外を利用しようと思っただけから、代わりに彼女の退屈を紛らわすのは妥当な対価になると思いたい。僕の想像があっているなら、長命もしくは不老な存在の最大の敵は退屈なのだから。

しかし別の面倒はできたが、これで僕と佐倉の安全以外に憂いはもうないだろう。

それにも万が一の為にまず東風谷を配置した。そして追加で佐倉と同クラスの綾小路やメンタルケアに橘書記と一之瀬、権力を持つ会長にも話を通して、何人かが了承してくれて佐倉の身を各方面から守ってもらう事ができればある程度の安全は確保可能である。

ちなみに既に東風谷には昨日僕と佐倉から頼み、今は二人でいると連絡を貰っているので土日だけ外出を我慢してもらってその間に打てる手は打っておくつもりだ。

ひとまず防御はこれでいいとして、攻撃には僕と承諾を貰ってある四方を配置し、手助けに柴田と神崎、綾小路、葛城と戸塚にも一応メールを送っている。テスト結果が出ていない現状でクラスのリーダー格が承諾してくれる可能性は低い、DクラスのPP事情を考慮するとそれなりの高確率で綾小路なら動いてくれると見て、5万の報酬を全員に提示しておいた。

攻撃役の役目は、佐倉に送られていた手紙と写真以外の証拠を集める事だ。例えば佐倉の盗撮写真を撮影した機器などである。洞察力に優れた四方なら隠しカメラなども探し出せるに違いない。これを見つけて学校所有かを先生や生徒会に確認すれば不正に設置したかは明白で、中身を確認できればさらに明確な証拠の一つにできるだろ

う。

もしもこれらの証拠を入手できないか、入手できても警察を動かせなかったとしても、青娥さんがストーカーと『遊んで』くれるように話を誘導した時には乗ってもらえているので、手続きと交渉を終わらせる時間さえ稼げばどちらに転んでもおそろく大丈夫なはずだ。

まずなるべくこちらの対処に気づかれにくく嫉妬心を煽らない同姓の東風谷の防御を100積んで、僕と四方の攻撃で100。更に知らない人間にはおよそ予測不可能な青娥さんの100を別方向から。これを基本に、他に連絡を取った者達が助けを承諾してくれば、ストーカーと対面する機会を最小限に、上手くいけばもう出くわさずに完封できるほどに優位を積み上げることができよう。

特に会長や橘書記の生徒会が学校を動かしてくれるか、生徒に付き纏うストーカーがいる事を知って学校が自発的に動くかすれば、最低でも学校の敷地からの追放・進入禁止措置は取れる。佐倉の心情的にはストーカーが警察に捕まる結末の方が安心できるかもだが、実は釈放以降など先の事を考えると学校との繋がりを切られた後に青娥さんの玩具兼実験体になるだろうこちらの処置の方が安全なのだ。

つまるところ僕がしたことは、起業という餌に元凶であり実験材料とでもいうべきストーカー本人をふりかけてメインを青娥さんにお任せし、自分含めた友達や知り合いで攻撃と防御の手はずを整えたただけだ。

あのストーカーがどうなるかはわからないが、適度な暇つぶしの材料を提供した青娥さんなら、佐倉が安心できるようにきちんと安全が確認できる決着をしてくれると確信している。なぜならそうした方が、いずれ僕や佐倉で遊ぶ時により深い享樂を味わえるからだ。

正直、問題の先送りどころか別の負債で負債を返す事になる可能性はかなり高いと思うが、ストーカーへの対策と危ない仙人の遊びの二択なら僕は後者を選ぶ。更に起業という餌であり枷でもある一手を最初に提示した事により、よくわからない術やお化け関係で僕と遊ぶような事は青娥さんの中で優先度が下がっているはずだ。それならまだ僕が対処可能な遊びになる……してくれると思う。してくれ

るといいな。してください。お願いします青娥様。

ともかくそんなわけで、土日を使って僕と四方は寮々学校間のルートを探索しながら歩いているのだが……。

四方の観察眼が凄まじすぎて僕の順番が全くない。四方ならできそうとは思っていたが、ここまでとは思わなかった。

次から次へと隠しカメラを発見し、一旦通り過ぎた後に死角から忍び寄って隠しカメラを端末で撮影しているのだ。もし学校の備品だったら勝手にどうこうするのはまずいという判断から、週明けに教師に画像で確認するつもりだろう。今日僕が唯一できたことは、少しでも早く事態を収められるように探索が終わったら会長に撮影した画像を送信して、教師とは別方面の裏取りするようになっただけである。

しかしこれを見ると、もう四方一人いれば僕とか要らない子なんじゃなからうか？ そんな疑問すら浮かんでくる手際だ。

「……それにしても、改めて確認すると多いな」

「そうだな。もう10近いんだが、このいくつかが個人の物だとすると怖くなってくるぞ」

「それもそうなんだが、校舎に入ってから隠しカメラの数が多すぎて、いちいち一つずつ確認してられない」

「は？ 校舎にそんなに監視カメラがあんの？ むしろ減ると思ってたんだけど」

「ほら、あそことあそこ。それにあっちにも」

「本当だ……確かにこの数と密度は面倒だな。」

……うん。校舎はパスしよう。今は登下校ルートの方が優先だ」

寮から学校までに結構な数のカメラを発見して、逆に撮影しながら校舎まで来た時に四方が面倒そうなことを言い出した。教室や廊下にもいくつか設置されているのは気づいていたが、防犯とCPの査定に必要な数台を要所に設置してある程度だと考えていたので、確認が大変になる数があるとは思わなかった。これは後回し案件（後でやるとは言っていない）にしよう。

「もしかして左京は教室にあるカメラに気づいてなかったりするの？」

「うんにゃ。僕らの席の上方と四隅にあるのは気づいてたけど、流石にそれは学校が設置したんだろうし、どうでもよかったからな。校舎にもそんなに数があるとは気づいてなかったけど」

「校舎のもほとんど学校が設置している可能性が高いから今回の件には関係ないだろうけど、玄関ホールから教室までで30近くの監視カメラ。この学校、やはりどこかおかしいぞ」

「でもそれこそ今更じゃないか。一発退学のテストやクラス間の争いを煽るような担任の言葉もあったし、この学校では基本的に正面からじゃなくて裏口から人や制度の隙を突いたり騙し合う事を奨励してるんだろ。カメラはその手段や道具に応用する為と、設置見本のような感じじゃね？」

ただ予想外なのはカメラの数だけで、四方にきな臭さを言われても驚く事はなく、入学からこれまでの印象を補強して「ああ、やっぱり」となるだけである。

「騙し合いか……俺の苦手分野だなあ。学校のシステム的にこれから他のクラスの奴とやりあう事になると考えると、俺も変なところで騙されないように気をつけないとまずいかな」

「苦手ならいつそ、そういうのが得意そうな奴らに投げちやえばいいんだよ。例えば東風谷や神崎あたりに。四方や一之瀬みたいなエース級は持ち味を活かせればそれだけでも充分だろう」

「……なあ、その時にもし左京に投げたらどうする？」

「騙し合いとか僕も苦手分野なんだが……そうだな。その時の状況次第だけど、凡人には凡人のやり方がある事を教えてやるよ。別名、人頼みとか力押しとか言うかもしれないが」

「人頼みに力押しねえ」

「奇策が正攻法に勝るとは限らないように、騙す事が信頼に勝るとは限らない。要は最低限の数があってそのアベレージが高いなら、単純に内を固めて外を適度に攻めるだけで大抵は問題ないって事さ。余裕があれば追加や遊びの一・二手も打てるしな。現在の状況みたい

に」

実際、何かが起こった時にこれを基本方針にして、しつかり自分と自分の周囲を把握しておけば、本当の意味での予想外や怒りや恐怖などの感情由来の混乱を起こされない限り、僕のような凡人でも対処はそう難しくない。勿論、起こされる何かにもよるだろうが、このトラブルシューティングやクレーム対応の経験を応用した考えが通じる場面は意外と多いのだ。

あまりに監視カメラの数が多かったので、僕達はとりあえず見切りをつけて校舎を出た。

これから僕は四方と連携しながら今度はスーパー・コンビニ経由で寮に向かい、行きと同じように端末で監視カメラを撮影していくつもりだ。

本来ならカメラの入手先が近いショッピングモール経由を先にするべきかもしれないが、予め佐倉に最近の外出先や下校ルートを確認してみたところ、スーパー経由での帰宅、校舎とは学生寮をはさんだ反対の端にある大きな公園（GWに僕が星見をしていた公園）、その手前のバイト先の3つが主な行動範囲だそうで、ショッピングモール付近には入学直後以外は行っていないと返ってきたのだ。佐倉が盗撮された写真もそのあたりのものしかなかったのだ。あっち方面の裏取りは動いてくれた場合の警察に任せる方が楽だし効率的だろう。

「左京ー」

探索しながら進んでスーパーが見えてきたところで、綾小路が僕を呼んでいるのに気づいた。四方に軽く綾小路を紹介しながら合流する。

「あいつ、誰だっけ？」

「綾小路。佐倉と同じクラスの男子だったから声をかけといたんだ。屋上にも来たことあったんだが、四方は初めてだったか」

「ああそういえば、流しそうめんの話をした時に聞いたような……」

「んで、簡単に今回の件を打診したら手伝ってくれるっていうから、スーパー経由ルートの探索を頼んでた。僕らが予定よりだいぶ早く

移動したからここで合流になったけど、本当は学校で合流してそのまま一旦は寮に戻るつもりだったんだよ」

「……驚いたぞ。昨日唐突にメールが来たと思えば、5万でバイトしないか？ の一言だからな。その後の内容詳細が来なかったら、迷惑メールの類だと勘違いしていたぞ」

「大丈夫だ。今、綾小路はここにきて、僕らに声をかけてきた。ということは頼んだ仕事の半分は大体終わったんだろ？ きちんと払うから安心しろ」

「いや、そこじゃない。そういうことじゃないんだが……どうすればいいんだ、こいつ」

「綾小路、でいいのか？ 左京に関しては色々諦めた方が楽になれるぞ」

初対面から早々に、カメラ探しの影響か疲れた雰囲気醸し出す綾小路とそれを慰める？ 四方。東風谷と違い、比較的友好的な出会いとなったようでよかったよかった。この様子の二人ならとりあえず一緒に行動すれば勝手に関係を築くだろうから、僕はこれ以上何かしなくてもいいだろう。

「でも流石にやりすぎじゃないか？ 綾小路はまだお前に慣れていない感じなんだから、もう少し気遣いくらい……いや、ちよつと待て。綾小路にこつちのルートを頼んだつてことは、ひよつとして公園方面も誰かに頼んでないか？ そういえば朝に柴田や神崎がなにか……」

「頼んでるに決まってるじゃん。そつちはテスト直後な上に高確率で釣れる材料がなかったから、Bクラスの何人かと、Aクラスの葛城と戸塚つて奴にダメ元で頼んでた……んだが、校舎らへんにいた時になんか了承のメールが来てた。いやあ、あつちは範囲がやばそうだからホント助かったよ」

代償は直近だけでも綾小路、葛城と戸塚の3人合わせて15万とけして安くはないが、やるからにはできる限り徹底的にやっておく。佐倉は勿論、僕自身が狙われる可能性もついでに低くしておく為には、ここでPPをケチつてもしょうがない。

次のバイトの給料日やPP支給日には、Bクラスの神崎に一之瀬、

橘書記や会長へと順々に払っていく予定なので、しばらくギリギリのPPで生活することになってしまいそうなのが難点だが。

柴田？ 四方や東風谷にも報酬出せないのに、柴田に出すわけないだろう。ある程度以上の付き合いの友達には借り1で統一である。

28、勝者

「あく、すまないがお前の名前を聞いてもいいか？」

「I―Bの四方だ。綾小路のことはさつき左京に少しだけ聞いたよ。今回は大変だったな」

「……左京はいつもこうなのか？ いや確かに突然だったが、冷静に考えるとオレとしては利益の多い話なんだが」

「大人しい時もあるけど、大体な」

「そーなのかー」

「ハハハ……ハア」

綾小路を加えた僕達は、話もそこそこに次の目的地へ向かっていった。

なにやら後ろで四方と綾小路が話しているが、着いてきてくれるのなら問題ない。

なんせ目的地といってもホームセンターで、昨日頼んでおいた品物を受け取りに行くだけなのだ。もう本日の彼らがやる事は僕に撮影した写真を送るくらいなので、他の面子とも合流して成果を回収したあとに全員に飯を奢って解散のつもりなのだ。

ちなみに頼んでいた品物とは、ずばり佐倉用の痴漢撃退スプレーである。

ないとは思うが、万が一佐倉が一人で不審者と対峙してしまった場合を考えた対抗手段だ。本来店頭では買えないはずなのだが、調べてみるとショッピングモールの専門店とホームセンターでPP購入可だったので、念には念を入れる形で揃えておくことにした。使わないに越したことはないが、今回使わなくても自衛・逃走手段が乏しいというか絶無な佐倉にはあった方がいい物だろう。

しかし、これで綾小路達へ払う予定の報酬とこの後に使う資金を除くと、所持PPはほぼ0になった。無料商品の救済措置と生活関係の費用不要がなければ、流石の僕でも踏み切るのに時間を要したかもしれないので、この時ばかりは学校の制度に感謝した。

用事を済ませたホームセンターから寮への道。

情報交換したり適当に世間話しながら3人で歩いていると、ふと綾小路が真面目な雰囲気になって口を開いた。

「なあ、左京に少し聞きたいことがあるんだが」

「んあ？　なんだ？」

「左京は何で別クラスの佐倉にここまでするんだ？」

「自分の為だけど」

「そこには何らかの別の狙いがあるのか？　例えば、佐倉を通してDクラスに借りを作りたいとか、恋愛的な意味で好きだとか……」

「そんなに変だったりクラスがどうかの意味なんてないさ。ただ友達が自分で対処するには厳しそうな状況で中途半端に放置したら、僕が美味しい飯食べられなくなるだろ。」

「だからやっぱり自分の為以外の何物でもないな」

「左京らしいな」

思うところをそのまま返すと、横で四方が微笑しながらどうとでも取れる言葉を漏らし、綾小路も心なしか雰囲気が柔らかくなっており、デフォルトの無表情がほんの少し崩れている。

彼らのように頭が良いと、大した事でなくともこんな風に言葉や物事の裏を考えて疑う癖ができたりするのかもしれない。想像するだけで大変で面倒そうである。

「……櫛田が言っていた事もあながち馬鹿にできないな。これは確かに信じてしまえそうだ」

綾小路の少し気になる独り言が聞こえてきたが、まあ付き合いも浅いうちに良くて半信半疑くらいの割合なら充分すぎるのだ。今更ながら、綾小路を含めてどんな理由や思惑があろうとこんな時期に手伝ってくれた者達には感謝である。

四方と綾小路を引き連れ、寮を通り過ぎたところにあるファミレスに入る。

ここが、柴田と神埼組、葛城と戸塚組との合流地点だからだ。

まさか連絡を取ったほぼ全員が即日承諾してくれると思わなかった為に、僕の段取りに不手際が起きて待ち時間が発生していたが、幸い四方も綾小路も退屈はしていないようである。

というのも時間潰しに店にあった将棋盤で、初戦と二戦目は初心者らしい四方を相手に俺TUEEEして煽りつつ遊んでいたのだが、二戦目から負けず嫌いな四方が夢中になり始めると、急激に上達して対抗してきた。そのゲームこそなんとか押し切ったものの次は負けそうだと思った僕が、次のゲームを食事奢りを餌に傍観していた綾小路へ投げて負けを回避しつつ、彼の暇も解消してあげたのである。

最初から奢るつもりであることを言っただけでよかった。まだ知り合ったばかりだし、彼はほとんどの場合に無表情で感情を読みにくいので軽い頼み事に即物的な材料しか提示できないのだ。

まあでも、今では一進一退の攻防戦が繰り広げられているので、面白い転がり方をした方だろう。

そんなきっかけで始まった勝負だったが、綾小路は四方に一步も引いて折らず、四方も鋭く切り返しては激しく局面が入れ替わる。この勝負は見ているだけでも結構面白かったが、一度でも四方に勝っていた僕は高みから見下ろす気分まで味わえたのは最高だった。今、正面から勝負したらどっちにも負けるだろうけど、それは考えてはいけな
いのだ。

これが一粒で二度美味しいというやつだろう。いや、四方と綾小路も楽しんでるっぽいから、三度美味しいのかもしれない。

「これは……」

「どうしたんですか？ 葛城さん」

「おっ、葛城と戸塚。今日は手伝ってくれてありがとな」

気付いたら結構な時間が経っていたのか、いつの間にか葛城と戸塚が来ていた。

「クラスは違えど、うちの生徒の危機なのだからむしろ当然の事だ。それより……この二人は？」

「友達の四方と綾小路。なかなかの名勝負だろ？」

「ああ。そのまま能力に直結するわけではないにしろ、これは侮るこ

となどできんな。どちらもBクラスか？」

「四方はBだけど、綾小路はDクラスだな」

「なんだ、できそこないのDかよ。じゃあまぐれか偶々か？」

「弥彦！ この勝負がまぐれであるはずがない。また仮にそうであったとしても左京の友人を貶めるような事を言うな。わかつたな？」

「うっ、確かに。左京、すまん」

「……出来損ないのD。とすると、Bは馬鹿、Aはアホ、Cはカスかなかなかのセンスだ」

「折角謝つたのになんてこと言うんだよ！ 葛城さんも俺もアホじゃない！」

「そんなことわかってるさ。でもこういう冗談のセンスは大事にした方がいいぞ。人生に潤いが作り易い」

葛城や戸塚のような性格だとなおさらだ。

あえて言わないが、彼らには偶に力を抜いて適当に過ごしてみる事を勧めたい。

例えば、葛城は僕が怒っていると思ったのか目で謝ってきていたが、そんなことはしなくていいのだ。僕が言ったことはただの助言なので、怒ってもいけないし皮肉でもない。政治家やお偉いさんじゃないんだから、失言も失敗も冗談で流せば無駄にギスギスしないだろう。

それに、四方も綾小路もこれだけ真横で（主に戸塚が）騒いだりしてたのに、気にした素振りもなく真剣に勝負を続行しているのだ。集中しているせいで聞こえていないのかもしれないが、彼らは出来損ないだの馬鹿だのと言われることに大して意味を感じていないのだと思う。どちらも自分への絶対の自信があるから、同格以上でなければ悪口に限らず言葉は届かないのだ。

だから友達とはいえ他人である僕も、当人が怒らないようなことに目くじら立てるつもりはない。それに葛城達が気づいてくれればもっと気楽な関係になれるので、多少は苦労も軽減されるはずだ。

「ふむ。四方がこれほど接戦になる相手が左京以外にいたのか」

「ふへえ、結構疲れたなく。左京、やってきてやったぞ。だからなんかよこせ」

「へいへい。柴田も神崎もあんがとさん。アイスコーヒーを人数分頼んであるから、とりあえず休んでいてくれ。葛城たちもな。二人の勝負が終わったら、全員まとめて紹介するよ」

「あゝ、生き返るゝ」

「わかった」

「了解だ」

「……しゃあねえな」

話が途切れた時に柴田と神崎も合流してきたが、四方と綾小路の勝負が終わらないうちに話を進めると2度手間になるので、待つてもらうことにした。葛城達もそう思ったのか了承してくれた。

それはそれとして、休日に僕を除いても濃い野郎共が6人もこの店に集結してしまっただが、営業妨害とかで追い出されたりしないよな？

店員の目を気にしながらとあるファミレスで始まった名勝負を観戦していたが、綾小路のいくつかの悪手の末に形勢が傾いていき四方の勝利に終わった。

「参りました」

「……………なんとか勝てたな」

「フウハハハ、四方3タテならずだな。両名、これから精進したまえ」
「ナイスゲーム。」

——左京は煽るんじゃない

なんとなくこれだけ打てる綾小路が終盤に悪手を打つのは不自然にも感じたが、わざと負ける理由も証拠もないし気のせいだろう。勝った四方はどこか納得のいつていない顔で将棋盤を見ているが、考え込んでも完全な答えは綾小路にしかわからないのだから、気のせいという事にしておけばいいのだ。

四方とこんな名勝負をしておいて最後だけポカをやって負けたところで、綾小路が実力者であることはある程度考えることができる奴にはもう明白である。その事も、あれだけの思考力があるなら自分で理解しているだろう。だから実力や思考力を隠すわけではなく、変な意味でもなく本当に偶々失着したのだ。しつくりとこないし、意味も

わからないが、そう考えるのが一番マシでスッキリできる。

ただ僕的には東風谷が綾小路を警戒（東風谷のは勘か神様の助言が理由かもしれないが）していた一端は、この意味のわからなさにあるんじゃないかと当たりが付けられたのが収穫といえれば収穫だろうか。直に対戦した四方もあからさまではないにしろこれから綾小路を警戒するだろうし、クラスのリリーダー格っぽいポジションの葛城や神埼にも一目置かれる可能性が高い。

もしかしたら綾小路の目的は、天然マッドメイトでなければ自分が警戒されることそのものにあるのかもしれない。しかし今そうする意味が全くわからない……わからないのだが僕は今回だけは雰囲気や話の円滑さを考えて、綾小路の目的を妨害することになってもみんなの注意を分散しておくことにした。支障が出ることはないと言い切れないからだ。

ちょうど良い事に、その材料は既に手元にある。

四方は綾小路に勝ち、お試しの初戦と2戦目だったとはいえ、その四方に僕が勝っていることだ。

そう、つまり唯一にして真の勝者はこの僕である。

という理屈である。これがこじ付けだろうと無理矢理だろうと、適当な名分とその認識があつてノリにノッてきた僕は、葛城に窘められなくても止められないし、止まらない。

「煽ってるんじゃない。敗者決定戦の対戦者二人に激励を贈っているだけだつて」

「ハハハ……この野郎」

「敗者……」

「おやおやあ？ 四方君、いつものお顔と口調が崩れていますよ？ 綾小路の冷静さを見習ってみては？ 敗者の中の勝者らしく、な」

「うーん（うーん）」

四方はまだほんの触り程度に軽く煽っただけだというのに、まるで隠し玉でも喰らった走者のごとく全力で悔しがっており、相変わらず普段と表面に似合わず負けず嫌いである。僕はその様子を見てもう二度と四方と将棋をせず、勝ち逃げする事を誓った。次やったら、逆

襲されることは火を見るより明らかだからである。

綾小路は冷静に考え事をしてるだけに見える。少なくとも怒っている雰囲気はないが、推測した彼の目的が違ったのか、妨害されても修正できると思っているのか、あるいは煽りが効いてないのか全く読めない。流星にアポロと間違えるような人材には強者の風格もあるものだ。

というか雰囲気調整や反応を分析したりするより、格上の四方と綾小路に偉そうにするのが楽しすぎて僕自身が冷静に考えられていない気がする。

なにこれ!? 癖になりそうなんですけど。これからこいつらが初見で僕に覚えがある分野とか見つけたら、積極的に勝負を仕掛けてみようかなと思いはじめてる自分を発見したんですけど!?

「それが煽っていると言っている! 二人の名勝負を汚すような真似は俺が許さん」

「葛城さんがこう言ってるんだから少しは従えよ、左京!」

「それは左京もだと思っただが」

「こいつはこういう奴だよな。競泳の時からそうだった」

ただ後先考えずに調子に乗っただけは、少し失敗だったかもしれない。熱くなってきた葛城だけでなく、他の3人も乱入してきたのだ。

しかし甘い。

全員あわせても、この場で僕を止める意思と発言権を得るのには全くもって足りていない。

その為に必要な資格は一つである。

「ふはははっ! 文句があるなら王者である僕に挑むがよい。無論、将棋でな」

つまるところ、僕に勝てばすべて解決という事だ。

「望むところだ! その性根、叩き直してくれる」

「あの……葛城さん? なんか左京に乗せられてませんか?」

「ほう。今度は左京が打つのか。これは興味深い一局になりそうだ」

「つうか、話が脱線しまくってるじゃねえか……いや、最初からレール

に乗ってなかったわ」

「うんうんうん」

「しかし、友達か。」

「……オレの高校デビューはここから始まるのか」

ところで、僕達は何故ここに集まったんだっけ？

葛城と開戦する直前、ふとよぎったそんな疑問が四方の悔しがる呻き声に埋もれていったのは、完全なる余談である。

29、先行投資

まあ流石に、僕は本来の目的まで忘れるほど真性のポケではない。これは口に出さないようにわざと目的を忘れることで、脳内に容量と言葉を生み出す我流テクニクの一つである（嘘）。

「さて、左京。負ける覚悟はできたな？」

「ふっ、葛城。我は王者ぞ？ 負けるわけがない。」

それにもしも僕が負けたとしても、第二第三の僕が必ずや雪辱を果たすだろう。第二の僕は四方に、第三の僕は綾小路に代役を頼んだ上でな。故に最終的な僕の勝ち揺らがない。

言うなれば受け継がれる意思。時代のうねり。人の夢。

これらと同じく止めることができない流れなのだ」

「それはもはや左京ではないだろう」

「おまえ……葛城さんにもだけど、四方や綾小路とかいう友達をあんだけ煽っておきながら……なんて奴だ」

「ワ○ピースの台詞って、やっぱ色々言葉を繋げ易いよな」

「で、こいつは何を言ってるんだ？」

「なんか勝手に第三左京の代役にされてる事に物申したいんだが」

まずは開戦直前に葛城が挑発してきたので、とある魔王と某海賊王の台詞を合成・改変して演出しながら、さり気なく綾小路と四方を代役に抜擢して注目を減らす誘導を試みる。

結果はそう誘導したとはいえ、みんな面白いようにだいたい想定通りの行動を取ってくれてありがたく、またノリもいいことがわかった。特に戸塚の発言を狙っていたので、これが出た以上目的の半分は達成できた。

なんか意外と本気でとられていて誰もわかってなさそうな気もしているが、おそらく大丈夫だろう。気づいてくれるか、もしくはわかった奴が後でフォローしてくれるはずである。

個人的に、綾小路への警戒の流れになってしまった時に危惧していたのは、綾小路もしくは四方と僕自身が対戦することだった。そう

なってしまうと誰が勝っても、僕や四方はともかく綾小路の居心地が悪くなる可能性があり、手伝ってくれた恩を仇で返す事になりかねない。

だから煽って僕に注意を集め、注目されていた二人を話の外に置いた後に、警戒対象を有耶無耶にしたのだ。

こんな面倒な気遣いをリーダーというか集団の纏め役は、友達でなくてもいつもやっているのだから頭が下がる。今回は僕が集めた面子なので自分でやったが、出来る限りやりたくないものだ。

まあ煽るのをノリノリで楽しんでいたのは否定はしないが。

警戒を分散させる目的の対戦相手候補としては、能力と性格的に本命になる葛城、対抗神埼、ダークホース柴田、大穴戸塚と見ていたが、やはり葛城は真っ直ぐな男である。乗ってきた（いや乗ってくれたのかもしれないが）その上で、勝ち負けによるリスクも賞品もなにも決めていないのだ。

神埼や柴田が乗ってきた場合だと注意を集める為には盤外戦術メインになっただろうし、未知数な戸塚が葛城の手を借りたりして挑んでくるなら多分状況は読めなくなっていた。どちらにしろ変な方向に話が転がる可能性は高かったので、素直に挑発に乗ってくれてありがたかったのである。

およそ想定していた中でこの理想的な流れにできたのには、葛城の存在が大きい。悪意が薄く真っ直ぐな葛城以外が乗るのでは、この結果にすることは難しかったはずだ。

ともかくこの勝負自体に意味があったので、もう勝とうが負けようがどちらでもよく目的もほぼ達成できた。あとは難しい事を考えずにお互いに全力を尽くして遊ぶだけである。

だから。

「葛城、ありがとう」

「いきなりなんだ？」

「礼の副賞として、このゲームで葛城の弱点を教えてやろう」

「……油断はしない」

見かけによらずお人よしで、いつも義理堅い葛城の間接的な助力に

感謝を。

将棋が始まって先手の葛城が採った戦法は堅実で慎重な性格通り、穴熊。

それに対し、僕は基本的には桂馬とと金を多用した波状攻撃、決め手の駒はなるべく動かさずに機を待つ戦法。

これが上手く嵌り、攻撃の際にできる浮き駒を取りつつ丁寧に一枚ずつ葛城の防壁を剥がして、ついでに手駒を回収できた。そして防壁の穴に意識がいった瞬間を見逃さず、馬と銀、葛城の防壁で逃げ場を塞いだ。

最後は、布石も使って一気に連続王手まで持っていき投了である。

「……ありません」

「対戦、ありがとうございます」

結果からいえば僕の勝ちではあるが、途中の攻撃の切れ目で攻勢をかけられていたら普通に負けていたと思う。基本性能というか頭脳はあちらの方が上と思われるので、常に主導権を握り続けて葛城と相性の悪い戦法と苦手な攻勢が勝敗を分ける流れにしなければ、辛勝・惜敗どころか惨敗だったに違いない。

教える時まで宣言しておきながらそれでは格好悪すぎるから勝てたのは良かったのだが、ずっと綱渡りしているかのような気分だった。この上、もし勝負で何かを賭けていたら、遊びなのに冷や汗びつちよりだったかもしれない。

「もうわかってるかもしれないが、葛城の弱点はこれだ。思考が防御に寄りすぎているから、好機に適切な手が打てない事があるんだ。上手くその状況にできるか不安だったけど、なんとか結果で示せて良かった」

潔く敗北を宣言した葛城や他の面子を見た感じ、もう煽ったり気遣ったりしなくていい状況っぽいので、最後に葛城に指摘だけしていつもの自分へと切り替える。

「さて。みんな今日は手伝ってくれて本当にありがとう。」

遅くなったが、ここは僕の奢りだ。好きな物を頼んでくれ」

「お前、勝負の前と後で態度違いすぎじゃね!？」

「途中からおかしいとは思っていたが……やはりか」

「左京はいきなり変わりすぎなんだよ。しかも何がスイッチなのかかわからないし……」

「……」

「ちよつと楽しかったけど、あんな疲れる状態でいつまでもいられるか。現実とゲームの違いをしっかりと認識しろ」

騒ぐ奴、納得気味な奴、文句言ってる奴、困惑してる奴、気にせず注文しようとしてる奴とこの場には色々いるが、まさか僕が我とか王者とか自称する人間に見えていた奴がいたのだろうか？ 他はどうでもいいが、中二発言を本気だったと思われるのは流石にアレだと一瞬思ったが、弁解の面倒さが僕の中で軽く上回ったので結局スルーすることにした。

「ああ、そういえば頼んだ物が届くまでにそれぞれの調査結果をくれ。報酬は払える奴には今すぐ送るわ。ただ報酬は綾小路、葛城、戸塚、神埼の先着順に払っていくから所持PPの関係上、悪いが神埼には少し待ってもらおう事になる」

代わりにやるべきことは、また忘れないうちにさっさと済ませておこう。

まず手早く綾小路と葛城・戸塚に5万PPずつ振り込み、ここの支払い分を残しておく。もし足りなかったら……こつそり四方か柴田に借りよう。

……正直、大判振る舞いしすぎたんじゃないかと少し後悔してる。せめて3万にしておけば神埼と一之瀬まで払いきれたのだが、こんな手伝ってくれる人がいると考えてなかったのだ。

「まだ頼まれた事も終わってないのに、本当に貰っていいのか？」

「左京の方は大丈夫なのか？」

「細かい事は気にせず受け取ってくれ。生活する分には問題ない。

それにしばらくはPPを使うような事もないはずだ。流しそうめんも準備自体は整ってるしな」

綾小路や葛城はそう聞いてくれたし、少しは後悔もしているが、趣味や遊びに多少制限ができるだけで本当に問題ないと思っている。これまでで必要最低限の道具は揃えたので、生活ができればいいのだ。

そう思っていたのだが、考え込んでいた戸塚が口を開いたことで予想外の方向に流れが変わった。

「……なあ左京。葛城さんはともかく、今回俺はたいしたことできてないし、やっぱりポイント返すよ。代わりにバスでの借りを返したって事にしといてくれ」

「そうしてくれるとこっちとしてはありがたいけど、戸塚はいいのかな？」

「ふむ。それなら俺の取り分から戸塚に半分渡せば八方丸く収まるな。

左京は後先と自分の事を考えないのが弱点だぞ？ ポイント支給日にPPを使い切っては、友人として心配にもなる」

「葛城さん……。」

「そうだぞ、左京。俺も葛城さんもAクラスでPPには余裕があるんだ。下位クラスの友達から搾り取るような真似できるかよ」

「はは、これは一本取られたなあ。」

「……わかった。ありがとう。何かあつたら言ってくれ。今度は僕が借りを必ず返す」

「フツ、俺も将棋の借りを返させてもらう。次の機会を楽しみにしているぞ」

葛城の言葉と戸塚から返ってきた5万PPを見ながら、僕は二人をまた少しだけ理解できたような気がした。

この二人の性質はどちらかというところと四方に近い。ということは困る事があるなら、対人・学校関係の捌め手が裏技気味な何かの可能性が高いだろう。

僕は、その時が来るのならできる限り助けに入ることを今決めた。

「オレも「綾小路は絶対に全額貰ってくれ」……せめて最後まで言わせ

てくれ」

「却下。」

綾小路はDクラスのPP・CP事情という足元を見た報酬を提示して巻き込んだんだから、余裕があるとわかっている葛城達とは事情が違う。入手機会が少ないんだから、貰える物は貰える時に貰っておけて。この学校での金……PPの有用性に綾小路ならもう気づいているだろうか？」

葛城達の話に一段落ついた時、話していた最後の一人である綾小路が何か言い出しそうな雰囲気だったので、口を出した瞬間に遮る形であつた切つた。

僕の言つた事があつているかはわからない。だが小さい弱みを突いて報酬で釣り上げたのに、その報酬を無くしたり減らすなどあつてはならない。これは僕の矜持の問題であり、佐倉と同クラスである点からこれからの付き合いが予想できる為、先行投資の意味合いもあるのだ。

「PPの有用性？」

「わかつてて惚けるのも相手によつては意味ないから、それもあるべくやめてくれると助かる。イラツとする奴もいるだろうし、無駄に警戒されて損したりするぞ」

これは勝手に想像した東風谷の警戒理由だが、今日も一步間違えたら四方や他にも第一の警戒対象にされていたかもしれないので、軽い忠告と僕なりの助言を伝えておく。

おせっかいかもしれないが、彼にだけは確実に物心両面の先行投資しておいた方がいい気がしているのだ。佐倉の件もだが、四方と競るような奴が巡り巡って敵に回るなんてことになれば目も当てられない。恩も借りもできた強者感ある人物には、出来る限り友好的にいきたいのである。

故に僅かでも彼からの信用を損なうことは自分の首を絞める事になるだろう。

「警戒されるのは……嫌だな」

「だろう？　まあアレな初対面だったから僕にはそうなつても仕方な

いが、伏せるモノはできるだけ少なくしておいた方が、結果的には楽に生きられる。これが平穩に生きる為の秘訣……かもしれない」

「最後に詰まったのは何なんだ」

「いや今更だけど、隠し事も特殊っぽい奴も多い学校にいる時点で平穩から遠くなってるんじゃない？ とか考えたらちよつと自信がなくなつたというか……」

「ああ……確かに………な」

綾小路の納得とともに思わず二人で遠い目になってしまったが、まだ言うことは残っていたので、何とか切り替えて大人しく観察？に徹していた神埼へ話しかける。

「神埼とここにはいないが一之瀬は、10日まで待つてくれ。どちらにしろクラス貯金を差っ引くと5万が残らない」

「クラス貯金？」

「それはかまわない。俺も、おそらく一之瀬も遠慮するつもりではあつたからな。」

……が、この場でクラス貯金のことを口に出すのはどうなんだ？」
神埼は僕の支払い先延ばしについては快く了承してくれたが、クラス貯金を他に知らせたくなかつたようで問い詰めてきた。ただこれに関しては、僕だけじゃなく四方や柴田も隠すつもりがなかつたらしく、先んじて反論やBクラス以外の面子に説明などを始めてしまつた。

「いいんじゃないか？ ここにいるのはライバルではあつても敵じゃないだろ。知られても害はないって信用した方が建設的だ」

「ああクラス貯金つてのは、万が一の時に備えてうちはPPを集めてるんだけど、そのことな？」

「僕は隠す事でもないと思つてたからだけだな。」

でも葛城達も綾小路も、口止めするわけじゃないけど無駄に広めることは止めてくれよ」

「……はあ。この暴れ馬どもを俺一人で制御できるわけもないか」

「お前も苦勞してるんだな」

「神埼、安心してくれ。俺も弥彦もなるべく口外はしないと約束しよう」

「葛城さんが言うなら俺は従います！」

一部問題もあつたが、これで今日集まってくれた者達にするべき事はほとんど終わった。

最後、情報を秘匿しようとしていただろう神埼が四方と柴田にバラされて少し可哀想な事になっていたが、一応の口止めはしたし、四方の言うように真似したり応用してくれたらそれはそれで有益な結果が出そうなので多分問題ではないだろう。

それに綾小路や葛城・戸塚が神埼と話すきっかけにもなったようである。何よりである。

その時、ちようどそれぞれの頼んだ料理が届き始めたので、柴田が真っ先に飛びついて笑いを取っていた。

地味に、解散まで少なくとも表面上は終始穏やかに交流できたのは、クラス屈指の陽キャであるムードメイカーの柴田がいた影響もあつたのだろう。

自分の報酬にも言及しなかったし、こういう奴だとわかっていたから借り1にしておいた僕の判断は間違いないと確信した。

柴田がいなければ、苦肉の策でこのポジションを櫛田に頼み込もうとしていただけに安心感が桁違いである。ムードメイカー適正はあれど、櫛田のあの承認欲求に素直な性格は、確実にこの場の何人かから颯爽を買ったに違いない。

その後、僕はみんなと寮前で別れながら、助力に来てくれた友達に改めて感謝し——次々と増えるスマホの受信を知らせる通知を見て、気合を入れなおした。

降りかかる火の粉を、火事どころか焚き火になる前に消火してやる。

30、疑心暗鬼

寮の自室。

僕は佐倉と彼女に付いてくれていた東風谷を呼び出し、痴漢撃退スプレーの説明をしながらメイクアウトしておいた夕食と一緒に渡していた。差し入れには、冷めても美味しい唐揚げやドーナツを選んだから無駄にはならないはずだ。

必要ないかもしれないが、一之瀬と橘書記の分も買ってきたので、差し入れがてらお礼の言伝も二人に頼んですぐ帰るように促す。

進捗すら簡単にしか説明できなかつた為か二人は何か言いたげではあつたが、昨日青娥さんから借りてきたノートパソコンでの作業途中であることも前面に押し出して、早めに帰ってもらつた。

口には出さなかつたが、女子が男子の部屋に長居することで生じる弊害は、こうした閉じた環境下では致命傷になりかねないのだ。東風谷はまだしも佐倉には、同クラスに一之瀬のような庇護者か友達が確認できるまで、できるだけ僕の部屋に呼ぶのは避けた方が無難である。

ともかく防衛役の二人の様子を見たところ不具合はなさそうだ。

まず佐倉から時々名前が出るくらいだから、少なくとも橘書記には信頼を置いていると思われる為、こちらは元々心配ない。

佐倉と会つた事もなかつただろう一之瀬はわからないが、あの善人氣質であり、佐倉と仲の良い東風谷から太鼓判が押される事を考慮に入れると、佐倉近くに配置したのはプラスに働く……といいな。ただ一之瀬と東風谷の仲が悪いとは言わないが、なんかお互い苦手意識のありそうな様子を思い出して一抹の不安がよぎるだけだ。

……まあ、女子同士の関係は苦労するのが僕ではないし、佐倉に丸投げしよう。そうしよう。

尤も、本来コミユカの高い一之瀬は、橘書記や生徒会との橋渡しや補助などの遊撃として配置するのが適切な気もするのだが――

会長の周りが一時ハーレムみたくなりそうなのが気に入らない。

ただそれだけが、その配置にしなかつた理由である。

僕が野郎まみれか一人で動いている時に、会長は橘書記をはじめ一之瀬、東風谷、佐倉と楽しくやっていると羨ましくて妬ましい事この上ない。冷静に会長の性質含めた安全性や関係を考えればそれが良い手かもとは渋々思うが、これは感情優先で却下させてもらった。

なので僕自身が会長とやり取りすることになろうと、一之瀬と東風谷が苦手同士と知っていても、この配置しかなかったのだ。劇薬の匂いをぶんぶんさせている櫛田をそこに混ぜなかつただけ、僕にしては気遣いしている方である。そのしわ寄せが佐倉に行つてそうなのは、会長が女子ではなかつた故の不幸なのだ。

僕は寮に戻つて直ぐに佐倉達を呼ぶと同時に、収集した情報の確認・精査をしてもらおうと会長と四方を通して担任にも送信していた。二人には昨日の時点でもある程度現状と情報を伝えていたので、進捗を報告して確認してもらうのと説得力を増加させる為である。

そしたら意外と大事にとられたのか土曜の夜にも関わらず、そう時間を経ずに両者から返信があつた。

このうち担任への対応は、四方が頼まれてくれたのでまだマシだと思ふべきだろう。

後で面倒に発展するかもしれないが、四方と東風谷にだけは佐倉がアイドルであることを含め僕が知るほとんどの情報を開示してある。交渉ではなく、伏せる情報を取捨選択しながらの説明が主目的なら、僕よりも四方が適任だろう。

誤算は会長の方である。

メールでは不十分だと言い出して連携の申し出まであつたのだ。これは僕が、青娥さんから借りてきたノートパソコンで収集した情報を整理していた時に電話で言われた。

生徒会と教師は、学校との繋ぎ役や確認だけでも動いてくれれば御の字と考えていたが、佐倉か橘書記あたりが何かしたのか他の理由か想定以上に協力的な事に少し戸惑つた。

「左京、そちらに学校のものではないと確認した画像に印をつけて送つておいた。そのカメラの内部情報を収集してこちらに送れ」

「それは明日です。今は学校の敷地マップに印のあるカメラや画像と場所をリンクしてありますんで、それが終わったらそちらにも送信して今日はもう寝ます。なので、会長も寝てください。何時まで仕事するつもりなんですか」

何故、僕が会長と電話でこんなやり取りしているのかというと、経緯はこんな感じだった。

そして会長のワーカホリック魂をなめていた事を実感とともに味わっていたのである。

そろそろ0時を回るというのに、連携を申し出られてから一向に詰める勢いを止める気配がなく、それどころか電話越しに熱意まで感じさせてくる始末なのだ。

つまり現在の状況は、苦手な会長と電話、眠気のトリプルパンチにKOされそうになりながらも、学校や警察への交渉材料を整えている状況ということである。

学校への提案と訴えに手を貸してくれるのは非常に助かっている。会長も生徒とはいえ、権力がある程度使えるのは戦略の幅を広げられるからだ。僕も自分と友達の危機がかかっているのだから、手抜きも出し惜しみもするつもりはない。

駄菓子菓子。

もとい。だがしかした。

もう1日の成果とは思えない情報量を何とか資料レベルに落とし込んだので、明日の日曜に裏取りすることで交渉材料には充分なのだ。つまり寝る時間を削る必要はないのである。

会長としては、凡人の手際に不満があるのかもしれないが、これ以上は僕には厳しい。思うに今回、手足と耳目になってくれた友達連中が優秀すぎたのだ。集めた情報量にふさわしい手際を合格基準にしないほしい。

そんなわけで、僕は半ば無理矢理に会長からの通話を切って、作っていた資料を各方面に送信して本格的に寝に入った。

次の日の早朝6時。

起きて軽くシャワーを浴びた僕は、ストーカーの設置したと思われるカメラ情報を抜く為に寮を出た。

可能性は低いと思うが、アクセス制限されていないカメラがあることに賭けつつ、最もかかる確率が高いだろう寮前の隠しカメラが写る位置の寮所有Webカメラに、動体検知で画像を保存する仕組みで罨も張っていたのだ。3日間かつ夜間のみという条件で寮の管理人から許諾を得た罨だが、これはストーカーの姿が撮影できればラッキー程度で、それほど期待していなかった。もつと高性能なカメラが使えれば多少楽ができるのだが、使える手札になかったものは仕方ない。代わりに足を使うことにしたのである。

ここまでくれば、僕が何を材料にストーカーを追い詰めるのかは誰の目にも明らかだろう。

そう、ストーカー規制法に加えて個人情報保護法、他諸々である。ストーカー規制法だけでは、警察が動いてくれたとしても現状では罰則なしの警告だけで終わってしまうのもありえてしまう。なので少しでも証拠と罪状を積み上げ、逮捕されればそれでよし。警告だけで終わってしまったても、最低限学校側がこの敷地からの追放処置をできるだけの有害さや危険性を示したいのだ。

「早いな、左京」

「ゲゲツ、会長!?!」

「そう嫌そうな顔をするな。朝の鍛錬ついでに、裏取りの確認をするだけだ」

僕が、回収したカメラに撮影された画像を寮の脇で確認していると、ジャージ姿の会長が姿を現した。昨夜の電話後を考えると、寝るのが遅くなった僕よりも会長は寝ていないはずだ。

ナポレオンや曹操じゃあるまいし、この人の睡眠時間ってどうなってるんだ？

しかし人のいないだろう日曜の早朝なのに、よりによって会長と出会ってしまうとは……。

「……お前は、孤高と孤独どちらだろうな?」

「はあ、どっちもボツチじゃないですか。つまり僕がボツチだと?」

もしかして喧嘩売ってます?」

「ボツチ……か。ククツ、違くない」

「ちよつと! 何笑ってるんですか。ホントに喧嘩売ってるなら、絶対買いませんからね。無理に買わされても、泣いて謝る事になるだけですからね。主に後輩の僕が!」

なんとか気にせず確認作業をしていると、少し後ろにいた会長が脈絡もなく喧嘩?を売ってきた。

ただ反論する時に思わず振り向いたら、珍しく……:というか初めて会長が笑っているところを見た。そして、そこに悪意はないと感じて言葉に詰まる。

これは何かを思い出していて、ふと口から零れたのを偶々僕が拾ってしまっただけのようだ。

でも、暗に僕をボツチ呼ばわりしたかと思って少しムカツときたので、答えのない問答でマウント返ししてやろうと思う。

「ところで話は変わるんですけど、会長は色々な意味で余裕あります?」

「俺に……今は余裕など必要ない。僅かの力や時間すら無駄にしたくないからな」

「はい、ダメダメ決定。無駄こそ楽しむ為の秘訣で美学です! 全て予定通りなんて悪夢と変わらないうでしよう。折角だから、お偉いさんになっても美学を考えて楽しく行きましょうよ」

ふう〜、やっぱり無駄な言葉には無駄な言葉で返すのが気分良いな。こういうのは実際に勝ったかどうかはどうでも良く、例えわけのわからない屁理屈でも言いたいこと言って気分が良くなった者勝ちなのだ。

会長みたいなタイプに無駄談義は相性最悪なので、これならイキれると思つてやった。反省も後悔もしていない。そしてついでに、普段偉そうな会長に上から目線な感じになれて、説教まで封じられるのが最高である。

ここまでなら怒らないライン、と予想できる奴にしかやれないけども。

「む。口ほどに手を動かしてから言え」

「残念でした。僕は、目も手もきっちり動かしながら話してますよ。説教魔人もやることやってる奴には無力ですよね」

「誰が説教魔人だ。お前は本当に煽り性能だけは高いな」

「会長は僕に言われたただだからまだマシ。僕なんか自はともかく他が認めるBクラスのはぐれメタルですよ。苗字はともかく、せめて夢とか月とかの名前と絡めたあだ名にしてほしかった——っ」と

そのまま会長と居ながらにして説教を回避する秘策、マホトーン（なるべく喋らせないだけ）を使いつつ雑談していると、目当てのモノを見つけた。

交渉材料になりそうな画像である。

そこには、普通に変質者が気持ち悪い顔でカメラの入れ替えをする犯行現場が写っていた。更には、後姿丸出しで茂みに上半身突っ込んだ汚い尻までばっちり撮影されているのは、どう考えればいいのかのう。

「左京、どうした？」

「いやまあ……ともかくコレ見てください」

「ふむ……変態だな」

「罨とかじゃないですよね？」

「なんの罨だというんだ。やってていることのわりに迂闊だが」

確認してみると、撮影時刻は午前2時前後。

辺りが暗い為に写りは悪いが、電灯の付近に設置されていたカメラに狙いを絞ったおかげか顔も行為もばっちりである。その顔は、確かに金曜に僕と佐倉へ異常な目を向けていた男で間違いない。間違いないし、証拠の一つにもなり、僕や佐倉にも都合が良いが………正直、ここまでタイミングと都合が良すぎるのが気になる。

呼びかけた者達がテスト直後にもかかわらずほぼ全て集まって協力してくれて、情報収集も少数かつ半日で信じられないほどの成果を出し、罨を仕掛けて即日で顔写真や犯行現場という証拠を取得できた。

こんな事があるんだろうか？

「良くも悪くも、事態が進む時は意外とこんな物だぞ。そんな時に大事なのは、自分の許容量を超える流れだったとしても、良い方向にする努力を忘れない事だ」

「そんなものなんですかね？　なんかあんまりにもトントン拍子だと、逆に自分がしつかりやる事やれてるか不安になります。」

……それと、さり気無く説教を挿入しないでください」

「しかし、左京にもそういう意識があるとはな」

「僕は、基本そういうことしか意識してないですよ。自分にメリットか危険がないとやる気にもならないですし」

考え込んで口が止まったからなのか、会長に説教の隙を与えてしまった。

でもそのおかげでやるべきことに集中できるので、どう思えばいいのか悩ましいところである。

「だが、そこで一歩立ち止まって考える事ができるなら充分だ。勢いに任せて行動しないのは、そういう意味で良い事だろう。左京は自分に正直なところが結果的に責任感になっている節があるからな」

「そういうトコロですよ、会長」

どうという言葉を放つても説教臭くなるのは会長の性質なのだろう。

まあ深く考え込んでもしようがないし、疑心暗鬼になりかけていた所を留めてくれたと解釈しておくことにした。

31、空転

会長と別れた後も、僕は確認を取った隠しカメラを一つ一つまわって情報を更新し、アクセス制限のないカメラからは情報を抜いている。

驚くことに半数近くで情報を抜くことができ、ストーリーカーも動体検知のシステムを利用していたおかげもあって、佐倉の他に何人かの隠し撮り画像まで保存されていたのが確認できた。

……ところで絶対にストーリーカーでもそのターゲットでもないと確信できる金髪男が、相当数カメラ視線でポーズを決めていたのだが、ストーリーカーが佐倉の目の前に姿を現すまで焦れた遠因は、こいつが煽ったせいではなからうか？

なんせ関係ない僕ですら、取得した画像数のほぼ半分近くを占める金髪男には呆れを通り越して尊敬までしそうになってくるのだ。目的を邪魔されたストーリーカーなら、焦れて怒り狂ってもおかしくはないだろう。

ただそれはおいておくにしても、一之瀬や櫛田、知らない女子連中の画像まで保護してあったのは、収穫といえるだろう。これは余罪を水増しして追い詰める上でプラスになるはずだ。罪状や証拠すらすっ飛ばして、感情的・生理的に無理と思う『被害者』を増やすほど人を動かしやすいくなるのである。

昼前まで歩き回って、取得できた動画・画像を会長と担任に送信し、また次のカメラへと移動を繰り返している時に、朝にも会った会長と僅かに遅れて担任から呼び出しがあった。

両者共に、なにやら少し慌てた雰囲気でも学校まで来てほしいとのことだったので、そのまま学校に向かう。

校舎に入ると、玄関ホールで担任と会長が待ち構えていた。

この時点で微妙に予感的なモノはあったが、担任はいつになく真剣な顔で僕に付いて来るように言うと言と早足気味に歩き出した。歩きな

がら会長に目線を向けてみるが、こちらも口を開かないまま前をじつと睨んで進み出した。

この方向は職員室かと思いつながら二人に付いて行くと、そこはあつさり通り過ぎ、生徒会室にも向かわず、今まで探索以外で立ち入ったことのない区画に進んでいるようだ。

ようやく担任達が立ち止まったのは、理事長室という普通なら卒業まで縁がない場所であった。担任がノックをするとすぐに中から許可が出たので、3人で「失礼します」と声をかけて入室する。

入室してまず目が向くのが、部屋の中央に座っているおっさん。

おそらく、というか部屋名からして確実にこの学校の理事長だろう。おぼろげに入学式で見たような記憶がある気がしなくてもない。

次に、そのおっさんの後ろに飾られている『実力主義』の文字。他に似たような雰囲気のものもあったが、僕の好みではなかった。この部屋から出た瞬間忘れてしまう程度のもつまらない部屋。そんな印象を受けた。

「日曜にすまないね。星之宮先生、堀北生徒会長。」

そして君は初めましてだね、左京夢月君。

今日は少々聞き捨てならない報告があったので、呼び出させてもらった。

……ああ、左京君。私はこの学校の理事長で、坂柳というんだが覚えてるかな？」

僕が光に反射してよく見えなかったネームプレート？に目線を集めていたことに気づいたのか、坂柳理事長がやんわりと名前を教えてくださいました。

「覚えてなかったです。すみません」

「ハハハ、正直でよろしい。でも無理もないよ。私を新生が見たのは、入学式の時だけだろうからね。」

君とはゆつくりと話してみたいところでもあるんだけど、まずは本題から済ませてしまおうか」

声や態度からは結構余裕ありそうにも見えなくてもないが、理事長は何か焦っているのがなんとなくわかる。

この人は初対面の新入生相手に、前置きもそこそこに本題を切り出すようにする性質ではおそろくない。視界の端で担任が小さく驚いているのは、いつもと違うからだろう。本題とやらに関連した彼にとつて何らかの不測の事態が発生、もしくは発覚したのだ。

だから焦っているとはいいかないかもしれないが、小さく動揺していつもと違う態度になっているのではないだろうか。

「さて、堀北君と星之宮先生から報告はもらっている。

わが校の女生徒がストーカー被害にあっている、との事だったけどそれは事実かい？」

ストーカーか起業の件でいずれ学校のお偉いさんに呼び出される覚悟はしていたが、あまりにも早すぎる。僕は最速で月曜のテスト結果発表の直後。想定通りなら数日。遅ければ1〜2週間はかかると思っていたのだ。

ここの敷地内は少し特殊っぽいけど、学校という組織が動くにはまだ材料を揃えられていないし、警察は尚更だ。

だからこそ佐倉以外の画像を材料にして、他の盗撮被害者を水増ししつつ交渉すれば、学校が無視できないほどの『声』を確保できると思っていた。

「事実です。僕……私自身も金曜日にも遭遇しましたし、脅迫と言っても過言ではない手紙や画像は、生徒会や星之宮先生に提出した証拠の通りです」

「では、今朝提出された写真は」

「あれは、今のところ盗撮されただけの被害者ですね。あるいは、狙いを絞る目的もあったのかもしれませんが」

「狙いを絞る……」

ただ理事長の事情はわからないが、これだけ早く呼ばれてこの状況なら利用しなければ損である。

会長も担任も口を出してこないうちに学校のトップを誘導したり口車に乗せられれば、危ない上に面倒臭い警戒や証拠集めを丸投げできるのだ。

理事長の反応的に、被害者が佐倉単体ではなく複数になりそうだから

らか、もしくは特定の誰かを心配しているかのどちらかな気がする。それなら、そこを突いて一気に解決までスキップできる可能性があるはずだ。

「不正に設置されていたカメラには、保護された画像が複数人・何種類かありました。それも先ほど提出したのですが、それだけに佐倉……狙われている女生徒以外にも目を付けていた可能性は否定できないはずです」

しかし、ここで雄弁に語りすぎるのも良くない。

例えば、理事長くらい年代なら娘か息子が僕や佐倉と近い年代にいと踏んで、現時点の交渉材料で危機感とヘイトを向けるだけで充分かもしれないのだ。それなのにやりすぎて逆に冷静になると事を長引かせてしまうかもしれない。

だから、極力聞かれたことだけ……それに一つ二つ付け加えてなるべく淡々と答える。

これは無能な上司を誘導・誤魔化して仕事してもらうための手法の応用なので、本来こういう学校の理事長相手には適さないのだが、8割方意思を固めている人への伏せ札を開示させる後押しにはなるのだ。

伏せられている札。

それを把握するか、都合の良いように書き換えてからが本当の交渉である。

好転する札ならそのまま流れに身を任せればいい。だが悪化する札である場合を考えて、リスクはあっても勝算の上がるハツタリによる保険は賭けておくのである。

最初にして最重要かもしれない目標は、相手の手札とその使い方を確認することだ。

ここからは必要な手順を間違えるわけにはいかない。

顔色一つ変えずに、この場の人を、言葉を、そして流れを読みきつて、最短距離を突っ切つて確かめてやる。たとえ僕がどんな目で見られようとも。

「それで君……左京君はこれからどうするつもりなんだい？」

「僕自身と狙われている友人達を守りつつ、反撃の機会を待ちますよ。その為の環境はここ二日の間で整えましたし、決定的な証拠をつかんだ時点で終わらせられる準備をしたつもりです」

この状況、普通なら素直に学校へ対処を頼み込んだ方がいい。

しかし、あえて道を逸れる事で学校がどう出るか、もう出ているのかを確かめておく方が先を考えると良い予感がする。今ならそれほどリスクなく、学校の出方がある程度ならわかるのだ。

読み違えていても、僕が用意周到な馬鹿か、学校や警察はおろか何も信じていないサイコパスのように見られるかもしれないだけである。

あるいは――

「僕は自分と友人達には出来る限りの守りを敷いたので、あとはあのストーリーカーが『何か』で暴発して捕まるのを安全圏から笑って眺めようかと。」

これで、めでたしめでたし、ですね」

――自分勝手なヒトデナシか。

覚悟を決めて、笑顔を浮かべながらそう言い放った理事長室には、敵意のようなモノや重い空気が立ち込めて……いなかった。

今の僕は、理事長と担任からは苦笑され、会長からは呆れたような視線が向けられている。会長だけは予想と違わぬ反応だが、理事長と担任も似た雰囲気ということはハッキリは必要ではなかったか通用しなかったのだろうか。

「星之宮先生、今年は面白い生徒が入りましたね」

「そうですね。普段は目立たないのですが、稀に台風の目になるので目が離せない生徒ですよ」

と、いうことはだ。

この後は、学校が対処してくれると捉えていいんだろうか？

あのハツタリで播るがないというのは、僕の当てずっぽうが外れていたか、最初から対処をするつもりだったか。いずれにせよ、好転の札だったということ。

それにしても雰囲気がおかしい気がしていたので手を打たせてもらったが、何もしないか無難な選択が正解だったのかもしれない。

理事長が動揺していたように見えたのも、担任の不自然な態度も、会長が全然口を出さなかったのも、他になんらかの理由があったのだろう。

「意地悪が過ぎたね。」

左京君達が集めた証拠の数々で、警備部を動かせるだけの名分は立ったよ。流石に今日中には無理だけど、明日の朝一であるのストーカーには敷地からの強制退去させるように通達してある」

「これだけの証拠があれば、立件もできるから安心してね。きちんと警察に引き渡すから」

理事長と担任が口に出す言葉は、僕や佐倉から見れば非常に都合が良く動きも早すぎるくらいで、想定の中でもかなり上位の対応である。

ただこの二人から感じる雰囲気では、もつと腰を据えて構えた対応になると思っていたので邪推してしまう。学校側か、もしくは理事長にはなにか早急に動かなければなかった要因があったのではなからうか？

まあでも、まだ完全には油断できないがストーカー事件は学校がスピード解決してくれるようだ。

こうなってみると、僕の知り合いを総出で巻き込んだ盛大な茶番にも思ってしまうが、本来問題対処をしてくれる人達がやってくれるなら、多少の徒労感や不審点はどうでもよくなるから不思議である。

ここ数日を脳内イメージで例えるなら、ひたすら回し車で全力疾走しているような空転具合だったから、良い方向に転がってくれたのは安心した。

この土日の成果で、数日以内に学校が動いてくれなければ、佐倉を含めた知り合い以外の盗撮された者を利用して対象者を陥れようと思っていただけに、無駄な危険を冒したり、犠牲者を出さなくてよくなったのは大きい。

こうした危険を伴う工作が僕は得意ではないのだ。

その後は、会長含む全員から何故か探られるような目を向けられつつ、表面上は穏やかに理事長や担任の話を聞かされたりと雑談していただけた。

いくつか懸念していた新たな面倒事や起業に関しては全く話に出なかった。

……それはよかったけど、親バカの娘自慢とか倫理・善悪諸々のアレコレなんて、僕に言うんじゃない。

直球だろうと変化球だろうと、説教臭いのはいらなそうと思いつながら、ただただ聞き流し続けるだけの時間だったが。

次の日。

佐倉のストーカーは、本当にあつさり和学校外へと連行されていた。

確認の為に早朝に呼び出されて、一緒にその光景を見ている僕と佐倉だったが、学校の警備員に引き摺られながらも喚いている執着心はあつぱれといえなくもない。その姿勢には、青娥さんの遊び相手としての素質を感じた。

個人的には、大口を叩いて準備を整えただけで結局ほとんど人任せだったので、佐倉とは顔を合わせ辛い気分である。もしどうしてこうなったかを聞かれても、僕には何故かこうなっていたとしか答えられないからだ。主要部分を人任せにすると、こうもいたたまれなくなるとは思わなかった。

B・Dクラスの担任二人が後ろに居るので、なにか言いたくても内弁慶な佐倉ではこの場で口には出せないのは、不幸中の幸いだろうか。

「このこのっ！　こんな可愛い子を守る為にやるじゃない、左京君！　今、一応シリアスな場面なんで、担任はお口ミ〇キー」

「なんで私の口にミッ◯を配置しようとするの!？」

そしてそれとは別に、僕は早朝に起きた眠気と女ばかりの空間で居心地悪さや緊張を感じていた。

今も星之宮先生がからかってくるのを窓際にあつたミツキー人形を顔に押し付けて、なんとかかわしている現状である。更には、それを佐倉のクラス担任である茶柱先生が無言のまま見てくるのもまた居心地悪かったが、教師達がいるので佐倉に詳しい事情説明をせずに済んでいることだけは助かったと言えなくもない。

そもそも一室で美女・美少女3人ということ自体に奇行や妄言が零れるほど緊張していたから、居心地悪さやいたたまれなさは今更ではあつたのだが……。

しかし関係ないけど、緊張のあまり体が微動しているのだが、この振動エネルギーを発電とかに回せないだろうか？

人格はよく知らないが、外見だけならこの場の誰よりもエロい茶柱先生に見られていると、緊張で震える自分を自覚してしまうから、そんな馬鹿げた思考でつい現実逃避したくなるのだ。

……最初は担任が茶柱先生に絡んでいたのだから、そのまま最後まででる絡みし続けて先生同士で注意を逸らしあつておいてほしかった、と思うのは僕の我侷だろうか。

そんな状態だったから、きつかけ以外は最後まで直接対面することなかったストーカーを校舎から見ている時も、当然特に思うことも湧いてくるモノもほぼなかった。

想定とは外れたが、青娥さんとの話もあるし、もう万が一もないだろう。

強いて言えば、手を打っておいたいくつもの対応策を使わずに終わったから、PPの借金と青娥さんに頼んだ起業関連の処理が少しもつたいなかった気はしているが、当初の目的はほぼ達成しているので、よしとすることにした。

今回の明確な収穫といえるのは、佐倉と青娥さんを通した円の収入源だが、意味を持つてくるのはだいぶ先になるだろう。

所持PPのマイナスを突き破った全放出&借金と青娥さんへの借

り。
願わくば、このデメリットの対価が功を奏すのを祈るばかりである。

EX、さんきゅっぱ

さんきゅっぱ。

違う言い方で、39800円。

これが何の値段かお分かりになるでしょうか？

わからないんだろうな、って確信しています。

これは私に付けられていた値段らしいです。

私は、売り物でした。

記憶もほとんどない子猫時代に売られていた値段がさんきゅっぱ。

今にして思うと、なんでものいい4万でも3万5千でもなく、さんきゅっぱだったのかわかる気がします。

なぜならその頃の私には、聞きわけがない特徴と脱走癖があったからです。

だから少しでもお得感が出るこの値段だったのでしょう。

でもある時、そんな私を買う人が現れました。

理由はお得で珍しいから。

私はほとんど全身真っ白なのに尻尾の先だけ黒かった特徴があるので、珍しいといえれば珍しかったのでしょうか。

聞きわけがなく脱走癖がある猫でも、そんな理由で買われることもあるようです。

でも私はそのおかげで、飼い猫としてほんの少しだけ暮らすことができました。

記憶には残っていませんが、多分幸せな時間だったのでしょう。

それからの——捨てられてからの日々を考えれば、ですが。

ペットを飼い続けるのは結構なお金が必要です。

お得さと物珍しさから私を買うような人や家族では、物珍しさがなくなってしまうえば追加でお金を出してまで私を育ててくれるわけがありません。

だから私は当然のようにすぐ捨てられました。

その人の顔すら記憶に残らない早さで。

端的に言えば、巡り合わせが悪かった。

ただそれだけの話でしょう。

そんな『私』の最初の記憶は、いつの間にか見たこともない林にいて、誰かもわからない誰かをずっと待っているところから始まりました。

勿論、生きている間に誰かが来ることはありませんでしたが……。

私の横に置かれていた僅かな食べ物が尽きる頃、ようやく私は捨てられた事に気づきました。

ですが、なんとか猫なりに回らない頭で状況を理解してからが本当の始まりでした。

当時の私の体に比して大きかった箱に、捨てられて薄汚れたほぼ白一色の猫。

そんな状況でしたが、最初の頃はまだ希望を持っていたような覚えがあります。

誰かが拾ってくれる……とまでは思えずとも、何とかなるさ、今を耐えればきつと、と誰かを待ち続けながら鳴いていました。

それはだんだん無駄な事だとわかってきていましたが、やめられませんでした。

不幸中の幸いか、ただの偶然か、あるいは捨てた人の最後の良心か。私がいいた場所は天敵がない場所のようでした。

しかしどういう理由かはともかく。

安全ではありませんでしたが、逆に言えば保護してくれたり拾ってってくれる人も現れない場所です。

つまり現れるモノは、私の食べ物になる虫と捕まえられる鳥くらいでした。

そんな日々がずっと続きました。

虫にも鳥にも見つけたら飛び掛ってみるのですが、私はペットショップ育ちの元飼い猫。

鳥は一度も捕まえられず、小さい虫ですら簡単にいきません。

それでも私は生きる意思だけは失くしませんでした。

狩りのやり方を考えたり、獲物の動きを覚えたりして、必死に生き

ていました。

どのくらいあの生活をしたでしょう。

少ししか経っていないような気がします。

とても長い時間だったような気がします。

私は寒さに気をとられた隙に前足を鳥に突かれたせいで、上手く動けなくなっていました。

血は止まっていますが、体中が痛くて虫すらまともに捕れません。これだけ寒くなってくると、地面を掘るとかしなければ虫が見つからないのです。

ここでペットショップや元飼い主を恨んだりすれば、物語のようになんか不思議な展開になるかも。とか現実逃避気味にそんな意味のない妄想すら浮かんでいました。

でも……そんなことは考えはしても実行しようとも思わないし、思えませんでした。

ただ、この苦しみから早く解放されたかった。

それだけです。

恐怖よりも恨みよりも理不尽さよりも、苦痛の割合が圧倒的大差で勝っていました。

私を捨てた人のことなど考える余裕もありませんでした。

この時期は、ひたすらに苦痛と戦っていた事しか記憶にありません。

後から思い返しても、この時はただ辛く苦しかっただけで、『私』が少しずつ消えていくような時間でした。

そんな時間も、だんだん暗くなっていく視界と共にある意味では終わりを告げていました。

次に意識が浮上した時、私は死んだと確信していました。

真つ暗闇の中では実はそれさえもはつきりわかっています。せんせですが、温かい何かに包まれて揺られている感覚はあったのです。なの

で、死んだと思っても無理はないでしょう。

だからこうして意識を取り戻しても目を開けるのは怖かったのですが、いつまでもそうしているわけにはいきません。

思い切って目を開けてみると、そこはまたしても知らない場所でした。

微かに残る飼い猫だった時に感じた暖かな空間。柔らかなクッション。時折揺れますが、現実でも何かに包まれているようです。

でも気づいても体はまだ上手く動かせないくらい重かったです。

「あつ、起きた！ 星兄さん、父さん、母さん！ やっぱりまだ生きてるよ！」

私が目を開けると、人の子供でしようか。

慣れない手つきでクッションごと私を包んでくれていたのは、この子だったようです。不思議と明瞭に聞こえる声が、なんとなくすごく嬉しかったのを覚えています。

その子は振動の中で少しでも私に伝えまいと、片手に手すりを掴んで、もう片手で優しく私を包んでいました。

「変な感じしてたから、つい持ち帰っちゃったんだ」

私がお子を見つめていたからでしょうか。

この言葉は私に向かって言い放たれたようです。

最初は何の事かわかりませんが、その子が言うには私は変な感じがするとのことでした。そう言われてみれば（この時はこの子だけでしたが）話もわかるし、いつからか尻尾もなくなっています。

でもこの時は、言葉が通じる人がいることも理解できなければ、状況も理解できずに混乱してしまいました。私を受け入れ理解できる者など、何処にもいないと既に諦めていましたから……。

それに加えて、誰とも会話どころか交流すらしなかった生活を長くしていましたから、言葉を理解している自分すらとてつもなく気味悪かったのです。

この子は誰？

何が起きたの？

混乱し怯える当時の私に拙いと思ったのか、私を手で包んでいる子

供は謝り、もう少し落ち着いてから話をしようと言案してきました。「ごめん。起き抜けに、いきなりすぎたかも。」

でも大丈夫、ここは多分安全だから話はもう少し休んでからにしよう」

「お〜い、月〜。多分はないんじゃない？」

「そうだぞ。父さん、ちゃんと安全運転で帰るからな」

逆らう体力も気力もなかったのもありましたが、多分体力や気力があっても私は言われたとおりに休もうとしたでしょう。それほど逆らいがたい誘惑だったのです。

ただ休む為に目を閉じると、色んな感情が混ざって何かわけがわからなくなりました。

「おっと、忘れてた。僕は左京夢月。よろしくな、小さな神様」

その当時からしばらくは、本当に混乱していたのでほとんど記憶から抜け落ちてしまいましたが、少しだけ覚えているのはその子の自己紹介と。

——ただの猫だった頃には想像もできなかった安心感に包まれて眠る幸せでした。

その後の私は、その子、夢月の家と近所の神社で何故か小さな守り神として過ごすことになります。

拾ってくれた夢月は勿論、ばあちゃん・父さん・母さん・星兄さんもみんな私を可愛がってくれました。

いろんなものをくれたり、教えてくれたり、逆に教えたり、時々変なお化けに追われている夢月を守ったり。

私の尻尾が無くなって、夢月限定とはいえ話せるようになったり、神様になったりした事が気にならないと言ったら嘘になります。

でも夢月に相談して、わからなければわからないままでもいいんじゃないかね？ と軽く言われて以来、なんだか馬鹿馬鹿しくなって悩むのを止めてしまっただけからは、吹っ切れて毎日が楽しかったです。

そして楽しかった中でも、一際心に残っている夢月の言葉があります。

「なんか気が合う奴がいる気がした。それで拾ってから一緒に話したら実際に気が合った。」

「やっぱこれが一番の理由かな」

「これは何で私を拾うことになったのかと聞いた時に返ってきました。」

「なんだ結構適当じゃん、って思う人がいるかもしれませんが。もしかしたら、気が合わなかったらどうしてたんだよ、ひどくね？　って思う人もいるかもしれません。」

でも、私にはその言葉が今も心に残っています。

そんな勘のような不確かなモノを頼りに、わざわざ消えかけている不審な猫のところまで来てくれる人なんて、今まで夢月以外に見たことがありません。

夢月は、私を値札についた値段じゃなくて、神としてですらなくて、ただ友達として見てくれたのです。それも優しさや慈愛といった正の要素だけでなく、負の要素も含めてです。

その上で、私に価値を、家族を、居場所を、友達までくれました。

言葉を聞いた直後は、神様になっていた影響が初めて涙が零れてしまうくらいの衝撃でした。

そうそう、正式に名前が決まったのもそのくらいの時期だったと思います。

小学校帰りの夢月と話すようになった時に、名前を聞かれてつい不思議と忘れられなかった『さんきゅっぱ』と答えてしまいました。でもそのままじゃああんまりにもアレだということで、398 || サクヤという事に。

尤も、夢月や他の家族も小さな神様やヒメちゃんと呼んで、あまりサクヤとは呼ばれませんでしたが。

私が守り神の生活に慣れてかなり経った頃に、夢月が高校生になって家を出て行きました。家を出る直前に、高校を卒業したら少しだけお金を貯めて一緒に旅をしようと約束したので、絶対に見守って旅を

しようとは決意しました。

全寮制で3年間外との連絡ができなくなる特殊な学校のようなのですが、私には関係ありません。私ができる最大限の加護をかけたおかげで、分霊のように使える事もプラスに働きました。

今は少しだけ、時々、結構、毎日のようにその分霊を通して様子を見にも行ってはいますが、神としての力が弱すぎていざという時にも私は何もできません。本当にただ見守っているだけなのが歯がゆいです。

邪悪な存在と宴会したり契約しそうになっていた時は、何度も気づいてくれるように頑張りました。が、結局は夢月自身で見抜いて解決し、落とし処を見つけていつの間にかバイト先にしていました。何もできなかったこともさることながら、邪悪な存在とわかっているのに、どうしてもそうなったのかわけがわかりません。

夢月がプールで溺れそうになった時は、何故かその場にいた二柱の神に必死で頼み込むことで事なきを得ましたが、私は何もできませんでした。おまけにその後、面倒な頼みごとまでされてしまいました。その他にも、今もなんとか走り回っている夢月の手助けしたいのですが、私は相変わらず何もできていません。

でも夢月のことですから、心配いらぬような気もしています。あの子は、何者にも縛られないだけの素養があり、保身も人事を尽くすのも天命を待つのも得意な子ですからね。やる時には、周りを巻き込んでも何を利用しようともやり遂げられます。

ほら、お偉い人間達を無自覚に脅して学校を動かしましたよ。

それに今度は知らないとはいえ、娘が盗撮された写真を見ている理事長の前で、暗にそちらに狙いを誘導するようなことを目の前で言い放ちましたね。娘思いの父としては、あんな情報や写真を送られた時点で動かざるを得なかったのに、ああ言われたら逆に夢月が仕込んだわけではないと察するしかなくて、理事長も担任も苦笑しているじゃないですか。

あくあ。結構親身に説教されてるのに、あれは聞き流してますね。

今回も夢月はほとんど自力で何とかしてしまいましたが、できるなら直接助けになりたいですよ。

……おそらく私が消えてしまう覚悟を決めれば、神の力を振り絞れば……一度だけなら助けにはなれるでしょう。

ただ私自身の事なのに、私だけではその覚悟を決めきれないだけなのです。

これに関しては、プールで助けてくれた神達にもそれだけはやめろと止められています。

知ることがあれば、きつと夢月も止めるし怒るし悲しむでしょう。

こんなにも不自由を感じたのは、ペットショップでケージに閉じ込められていた過去にすらなかったことです。

でも……その不自由が嬉しかったりもするのですよ。

だから、このとても幸せな不自由を壊さないでください。

壊そうとするのなら、祟り神になっても貴女を滅ぼします。

——という妄想の話でした。

ですが……もしも夢月を害するということのなら、この妄想を実現させる用意があることだけは覚えておいて貰いたいですね……邪仙・霍青娥。

私はサクヤ。

夢月の小さな神様です。

夢月が本気で私に願うなら、私は願いを叶えるでしょう。

例えそれで、消えてしまうのだとしても……。

それが神という存在の役目だと、私の中の神様が教えてくれるのです。

小さく弱いからといって舐めないほうがいいですよ。

貴女の■■■■は私の物なのだから。

32、凡人

面倒事が大体解消できたその日には、告知どおり採点が終わっており、定期テストの結果発表もあった。

確認を終えた僕と佐倉は、それぞれの担任に雑用を頼まれた、という体で職員室経由で荷物を持って教室に戻るようになった。

これは担任から出た提案だったが、こういう流れのほうが自然だし、佐倉がアイドルであることをなるべく秘密のままにしておきたかった僕と、おそらく佐倉自身にも渡りに舟だっただろう。

今のところ、ストーリーカーの件を関係者以外には知られていないし、協力してくれる際に口止めも頼んでいる。そして直接的な脅威が去った以上、他に知らせることもない。

更にアイドルであることは、盗撮被害者をわざと増やして美少女達の影に隠した上で、四方や東風谷にも口止めしておいたから、本人含めた天文部関係者4人と青娥さんしか知らないはずだ。

学校は知っているかもしれないが、佐倉のあの特徴的なピンク髪が写真や動画にしか反映されない事までは至れないだろう。

どう見えているかは、四方にピンク髪佐倉の写真で説明した時に驚いていた反応で概ね判断できている。おおっぴらに撮影会したりアホな暴露をしない限り、アイドル業を続けてもこれから露見する可能性は低い。気づかれるとすれば、起業関連からなるはずだ。

懸念としては、素顔と隠しきれない乳くらいだが、こちらは佐倉自身で気をつけているっぽいし、内弁慶気質による人付き合い悪さもあるので多分問題ないはず。早々に次の人外や変質者に狙われることなどないと思いたい。

……うん。後で、しばらくはできるだけ東風谷と一緒にいてもらえるように頼んでおこう。

ここまでして、もし一難去って安心した所で新たな一難に見舞われたら、佐倉には変質者ホイホイの称号をくれてやろう。

ともかく、Dクラス組と分かれてからも、歩きながら一人でなにやら喋っていた担任とBクラスに入る。考え事していた上に聞き流していたので、話が一欠けらも記憶に残らなかったのは完全なる余談である。

それでも一応は雑用名目の同行なので、担任の指示通りにテスト結果を張り出していくと、偶然自分の名前を見つけた。

結果は470点と想定とそう変わらない点数だった。

しかし500点満点が8人も存在していて、この点数で総合19位なのは少し意外である。しかも葛城や四方でさえ10位以内に入っていない事も地味に驚きだ。

Bクラス内1位の一之瀬でも総合9位で、全教科満点は達成できなかったのに、それが8人とは……。

この満点のうち二人がAクラスなのはまだしも、残り全てがDクラスなのは、以前に考えたIQ最優先でのクラス分けの予測に、いよいよ信憑性が出てきたのではなからうか？ 学年全体を見ても、A・Dクラス所属に高得点が固まっているわけだし。

ただ上は置いとくとして、佐倉も東風谷も赤点からは遠いし、綾小路や戸塚も意外と学力はないのか下のほうだが赤点付近にはいない。

まあ友人・知り合い連中に退学圏内に居ないなら、こんな考察はどうでもいいか、とさっさと思考を切り替えた。

なぜなら、僕にとっての関心事は別にあるのだ。

そう、流しそうめんである。

「堀北会長!？」

「葛城に一之瀬か。奇遇だな」

「え、お集まりの皆さん。今回の件ではお呼びした大体の人に、大変お世話になりました。本当にありがとうございます。」

ささやかですが、今日は好きに飲み食いしてってください」

「あっちはスルーするんだな」

結果発表があつた日の放課後。

僕は流しそうめんを実施すべく、朝に佐倉と安全を確認した直後、

いやその前から動いていた。

具体的には、部員である四方と東風谷は勿論、佐倉に青娥さん、綾小路、葛城、戸塚、堀北会長、橘書記、柴田、一之瀬、神埼、櫛田、坂柳理事長、星之宮先生、東山先生などに連絡をとっていたのだ。

本日の学校自体は昼までで、おまけに明日はテスト休みという好条件である。その上、知り合いの各クラス＋αの打ち上げは明日と知った僕が遠慮することはない。

いち早く確保できた四方と東風谷、佐倉といった人材に手伝いを頼んで指示を出して、準備を整えたのだ。

その甲斐あって、何とか夕方開催に間に合ったのである。

まず僕と四方は、中庭の使用許可を勝ち取り、食堂の備品を借りて移動した。その後は流しそうめん装置の組み立てである。

東風谷と佐倉には、食材の支度・盛り付けを頼んだというわけだ。

残念ながら、校舎に入れない青娥さんと、クラスの方に参加する櫛田。あとは坂柳理事長、東山先生は不参加だが、代わりに誰かが誘ったのか恐い印象が強い白波？ともう一人のクラスメイトらしき女子。それと見覚えはないが、佐倉と東風谷の後ろにいるなんか威風堂々とした女子が飛び入りで参加していた。

ちなみに佐倉と東風谷は、人が集まった理由の中心付近にいるにも関わらず、安定の人見知りを発症させているようだ。そう考えると、あの見覚えのない女子は佐倉か東風谷の友達なのかもしれない。

それにしても流石に20名近くいると、風流でも涼しげでもなくなってしまう。

しかし人数が増える事も見越して、流しそうめんと立食の場所を分けておいた僕に死角はなく、分散して好きに過ごしてもらうことにした。ちなみに立食の料理は、青娥さんが不参加なのに提供が喫茶・芳香である。

これらの食材は、宣伝はしなくてもいいとお達しがあるので、実質タダ飯・タダ飲みし放題なのだ。

タダ、無料。

素晴らしい言葉と概念である。タダより高いものはないとも言わ

れるが、対価なく貰えるモノが僕は大好きなのだ。

それにタダとはいえ、和洋の様々な食品は味もさることながら、目にも楽しいのでありがたい。

青娥さんの名前に中華がないのが微妙にモニョる気もするけど、考えてみるとあのバイト先でも中華を見たことがなかったのだからとなく納得してしまった。

それはともかく、顔を合わせるなり葛城と一之瀬が会長に驚いていた。

しかし僕はあつちの関係を全く知らないので気にせず、お礼と無礼講を宣言した。

隣にいた四方は気になるのか聞いてきたが、一応担任もいるのに最初からぐだるのはなしだろう。

だから、自信を持ってハツタリをかましておいた。

「問題ない。ここまで僕の計算通りだ」

「ここまでがお前の計算どおり？　すごいな。どういう計算式を使ったらこんなわけのわからない状況になる数式を生み出せるんだ？」

「四方、そういう突っ込みはなしでお願い。今回、色々友達に協力してもらったから、ノリで僕と連絡先交換した全員を招待したらほぼ全員が揃った。」

——実はただそれだけなんだ」

「ノリで生徒会長を呼ばないでください！」

でも四方にはハツタリが通じなかった。

それで仕方なく正直に話したら、今度は橘書記からツツコミが飛んできた……が、この場にいる佐倉という主賓兼盾の存在を忘れていたのは、橘書記らしくない失策と言えるだろう。言えるほど、橘書記のこと知らないけども。

「うう、すみません、茜先輩」

「ああああ、違うんです。愛里ちゃんは悪くないんです！　左京君がふざけたこと言うから、つい」

「……………茜、先輩？　愛…………里、ちゃん？」

何気に東風谷がショックを受けているが、気持ちはよくわかる。

あの内弁慶とこんなに親しげ接している橘書記の存在が信じられないのだろうか。

というか、今更だが橘書記は会長と一緒になくていいのだろうか？
会長は、あつちでA・Bクラスの面子に一人で囲まれて、食べるのも大変そうなのだが……。

それにしても、やはり人数が増えそうだと判明した時に、あらかじめ会長にそうめん流しの代役を打診して呼んでおいてよかった。十中八九、最初は立食に配置した会長へ人が集まると思っていたから、これで流しそうめん側はしばらくゆつくりできる。

ともあれ佐倉達女子4人（いや一人は喋ってないから3人か？）が盛り上がりすぎてきたようだったので、僕は口を閉じ存在感を薄くして四方と共にフェードアウトしていった。

だって何人か友人とはいえ、女子集団の会話に混ざるとか精神削られるし……。

ただそうして場所を離れると、そうめんを流す事ができない。

代わりに何か面白そうな者がいないか全体を見回してみる。

「これが……みんなは一人のために、というやつか」

「みんなに一人語り？ 確かに綾小路は一人っぽいが、それは自虐過ぎないか」

「みんなは一人のために、だ。その微妙に刺さる聞き間違いはヤメロ」
「おまえ、わざとだろ」

すると、ぽつんと一人で黄昏ていた綾小路を見つけた。

一旦、そうめんを流すのを完全に断念して近寄り、優しく声をかけるとなかなか嫌がってそうな反応が返ってきた。ついでに四方からもジト目を送られた。

こういう反応をするから、僕に目を付けられていると彼らが気づくのはいつになるだろうか？ 四方はそろそろ気づき始めている気配があるが、綾小路はまだまだ遊べそうで何よりである。

「ところで、すごい面白い話あるんだが聞いてみないか？」

「お前、そのハードル……飛べるのか？」

最初に面白いとつけた話って、ほぼ面白くないぞ」

「心配するな。これだけ面白い話はそうはないはずだ」

「更に難易度を上げていくのか……」

「二人とも、吹き出す覚悟はいいか？ リアクション準備がいるなら、それくらいは待つぞ」

「そこまで言われると気になってくるな。よし、聞かせてくれ」

「ふむ。では——今からものすごく面白い話を綾小路から聞こうと思う。どんな話が飛び出すのかワクワクしてくるな」

「自分で飛ばないのかよ!? というか、ハードル上げるだけ上げって、オレにパスするな!」

「ふふふ、ははははっ! 面白い1年がいて聞いて見に来てみれば……くくツ、三者三様でなかなか興味深い奴らが揃ってるじゃないか」

「おつ、わかる? 凡人で普通の僕はともかく、この二人は面白いよな!」

彼女はさつきまで佐倉達の後ろにいた女子だ。

綾小路と四方で遊ぼうと近づいている時から視界には入っていたが、男3人の会話に混ざってくるとは少し意外だった。

でも第一声を聞く限り、なかなか話のわかりそうな御仁だったので、お近づきの意味をこめてついでに取っておいたお菓子を進呈する。

この学校の例に漏れず彼女も美少女だが、東風谷に似た雰囲気の色いかなんとなく話しやすいのだ。

「いや、その前に。この人って誰だ?」

「四方も知らないのか。左京、誰なんだ?」

「え? 僕が知ってるわけないだろう。クラスメイトの名前すら怪しい僕が、なんで知ってると思ったんだよ」

「お前が主催だろうか」

「主催って言っても、ほぼ知らない奴とか普通に参加してるしなあ。あっちの一之瀬の隣にいる二人とか」

「あー、左京は白波と網倉まで知らなかったのか。

……ってそうじゃない」

「くくッ、噂もそんなに馬鹿にしたものではないな。

——ああ、失礼した。私は2—B鬼龍院楓花という者だ」

2年ということは先輩である。

それなら次からは敬意を払った方がいいかもしれない。

この接触には特に裏も意味もなさそうだと僕の勘は判断しているし、ワンチャン佐倉か東風谷の友人だったらこれからも会う可能性がある。気に入られる必要はないが、あえて嫌われる必要もないだろう。

あまり礼儀に厳しいようには見えないが、口調とは裏腹に上品な所作で菓子を口に運ぶ鬼龍院先輩を見て、最低限この場では先輩を立てようと少しだけ思った。

僕を含めたこちらの紹介を軽く済まし、引き込むつもりだった綾小路と菓子を食べ終わった鬼龍院先輩にお碗と箸を渡して誘ってみた。すんなりOKが出た。

善は急げとばかりにそうめんを流すところまで連れて行くと、何故か東風谷と橘書記がいなくなっていた。代わりに佐倉が、小さくはしやぎながら一人流しそうめんをしていたので、後ろを着いてくる3人に振り返って目配せする。

すると綾小路と四方は呆れ顔で、鬼龍院先輩は男前にニヤリと笑い返してきた。どうやら意図は通じているようである。

「それでは、今よりわが社の通販を始めます！」

「ふんふんふん♪」

……ふえ？ 左京君？」

「本日も紹介するのはこちら、桜プロダクション所属タレント『雫』愛用のシャープペンシル！」

ちなみに今僕が掲げたシャープペンは土曜に自室に落ちていた物なので、あるいは東風谷のかもしれないがそこらへんはスルーである。

余程のお気に入りでなければ、死ぬまで借りてるだけとか言っけばどうとでもなるだろう。

「このシャープペンシル、ただのシャープペンではありません。将来への不安。

CPによる格差。

クラス間トラブル。

これらを解消してくれる素敵アイテムなのです!」

「即買いだな! 値段はいくらなんだ?」

「ええ!?……え? というか誰?」

僕の宣伝トークにわかっていたかのように、即座に合いの手を打ってくれる鬼龍院先輩。

これは、どこかで僕の意図に気づいてノってくれたのだろう。頭が良さそうな雰囲気もあるし、想像以上にノリがいい。

「今ならお値段、なんと!」

——10万PP! 10万PPです!」

ただ佐倉に借金……借PPを切り出すより、冗談と悪ふざけでノせてみよう計画の方が面白そうだったのでやってみただ。誰も本気でノって来ないのはわかっていたが、鬼龍院先輩が手伝ってくれたし、滑っていつぞやの氷河期のようにになったら僕が責任を取ろうとは思っている。

「ほう。10万か。

よし、買った!」

「毎度ありい! こちらに振り込んでいただければ、コレは貴女の物です!」

あとは鬼龍院先輩に連絡先兼振込先を表示して、結果を待つ。

振込みは1PPでもあればいいので気楽に待っていると、通知音と一緒にその時が来た。

「はいはい、お買い上げありがとうございます——って、マジで10万振り込まれてる!

ちよ、ちよつと、鬼龍院先輩! あんた、あんだけわかってそうな雰囲気出してて気づいてなかったとかなの!」

「くつくつく、何のことだ？ 私は後輩がお勧めした素敵アイテムとやらを購入したただけだが？」

「いやいやいやいやっ！ それこそが嘘だって今確信しましたよ！ だいたい、これが佐倉にポイント借りようとしてた茶番だって察した感じ出してたじゃないですか！」

「えっ！ どういうことなの!？」

「何を言っている。察していたからこそだ」

シャーペンを渡し、PPが振り込まれたのを確認するついでに額を見て意表を突かれた。意図が伝わっているものと思っていたので、本当に振り込まれた10万が意外すぎたのである。

当然すぐ抗議したが、暖簾に腕押しだったので方針の練り直しが必要になった。この先輩を見る限りないとは思うが、なにもしないままでは最悪な弱みが出てしまう。

しかし、もしかしてこの先輩にかなり深い部分まで見透かされてないか？

さつき会ったばかりだと思うのだが、こんなに会話が飛んだりすると昔からの知己みたいだ。天文部関係者や綾小路とは違う意味で要注意人物な気がしてきている。しかも下手を打てば、丸呑みされそうなほどにイイ性格をしているのだ。

なんか先輩から受ける印象が、東風谷や青娥さんみたいな鬼才、もしくは四方や綾小路みたいな天才なんじゃ？ みたいに変化してきた。

まあ、それはともかく。

「あ、佐倉にちよつとポイント借りたかったんだけど、そのまま言うのってなんか格好悪いじゃん。だからまあ、冗談染みて笑い話にできそうな悪戯して後々に返せばいいかなあ、と」

「んん？ それなら俺に言えばいいだろ。何で佐倉なんだ？」

「いや四方と東風谷、あと柴田は既に借り11なので、流石にこれ以上は増やせないよ。」

「だけど、会長と橘書記には早めに報酬出してきたいんだ。このままだと、来月以降になっちゃうしな。」

「てか、鬼龍院先輩に詐欺染みたことしちやったのもまずい。早く1」

0万PP返さないと……」

「説明してくればちゃんと貸すのに、なんでこう変な事するかなあ。

……先輩？ 左京君がすいません。わたしから返しますので」

「いやいや、気にするな。先輩として、後輩の手助けをするのは自然なことだろう？ 詐欺とも考えていないし、ただの投資だと思って受け取っておけ」

佐倉達にネタばれしつつどうしようか考えていると、鬼龍院先輩がえらく男前な台詞を吐いた。

ううむ。悔しいけど、格好良いし、様になっている。

僕が同じようにすれば、きつと失笑の嵐になるだろう。

それに上級生だから10万程度は屁でもないのかもしれないが、この年齢で自然にこう振舞えるのは只者ではない。

こういう人には、下手に返そうとする方が失礼になる気がする。

だから諸々の考えは内心に留めて、遠慮せず使うことにしよう。

「ありがとうございます！ しばらく貧乏生活することになると思ってたので、とても助かります！ この投資を損だとは思わせないつもりだから、何か困ったら一報ください」

「左京、先輩だぞ!? 少しは遠慮しろよ。というか、せめて敬語くらいまともに使ってくれ！」

「ははは！ 私は一向に構わんよ。」

しかし直接目にするまでは、多かれ少なかれ腹に一物：そんな奴だとばかり思っていたが……くふっ、これほど馬鹿正直な曲者だとは思わなかった。実に興味深い」

四方には注意されてしまったが、言葉に注意を払うとなんとなく気持ちの分量が減ってしまう気がするのだ。だから僕はこういう時、なるべく自分の言葉で言うようにしている。

礼儀を尽くせないのは悪いと思っているが、この先輩なら礼儀よりに情を重視で接した方がお互い気楽だろう。幸い、悪くは思われなかったっぼいし、本人から言われない限りこれからもこの路線で行こうと思う。

まあ、これから鬼龍院先輩との縁があるかはわからないのだが

……。

ともかく忘れてしまわないうちに動こうと、僕は鬼龍院先輩に御礼を言ってから一言断り、そうめんを流すのを佐倉と四方に託して一旦場を離れた。

尤も、佐倉はなんか文句みたいなことを言いながら付いてしまったが、残った綾小路ならフォローとかそうめんを流す役もやってくれるだろう。それにあの二人なら、鬼龍院先輩も退屈しないに違いない。遠目に見る会長はまだ人だかりの中にいるようで、今振り込みをすれば対応が遅れることが予想できる好都合な状況だ。

僕は落ち着いた場所でないともメールを打ち間違えたりするので、流しそうめんと立食の間の広場——座ることが出来るスペースまで移動した。

その場所まで佐倉も付いてきていたが、とりあえず気にせず会長に10万を振り込んだ。一応、僕が連絡先を知らない橘書記の分が含まれている事もメールで知らせておく。

これで残りは、一之瀬と神埼の報酬10万だけだ。6月10日まで約1週間あるが、終わりが見えてくるとやっぱり安心する。

しばらく鬼龍院先輩には足を向けて眠れないな。

ここまでできてようやく数日の面倒事がほぼ片付いた実感がわいて、一息つけた。

やることを済ませて落ち着いてからは、改めて佐倉の言っていることを大人しく聞いて、質問には答えている。それでも、まだ不満気で言い足りない様子だったのだが……ぶつちやけると、なんでこんな風になっているのか理解できない。

かなり人を巻き込んでしまったが問題は解決したし、PPも僕は空っぽになったが鬼龍院先輩のおかげで佐倉の消費はなかったはずだ。

もし僕が佐倉の立場であれば、ラッキーと思って感謝して終わらせただろう。

本当に何が不満なのかわからない。

いや、待てよ？ 僕のこれまでに佐倉の今の態度のヒントがあるのではなからうか？

……そうか、思い至ったぞ！

「だからね、私も」

「——佐倉、太った？」

なんか長くなりそうな気配を感じて面倒っぱかったので、佐倉の文句を遮って真相と思われるモノをぶっこんだ。

その原因は、おそらく土曜に買ってきた夕食代わりの唐揚げとドーナツだろう。見た目から太った感じはしないが、女子は1kgにもうるさいと聞く。

起こった問題の責任は僕と半々とはいえ、二人で怖い目にあって対応に数日振り回され、そのストレスか体積が増量した時に早朝から僕とともに呼び出される。その際には、担任二人と一緒にそれなりの時間拘束されて、不安の残っていただろうテストの結果発表までであったのである。

その直後、食の誘惑とも言えるこのイベント。

さつきからの付き纏いには僕達への礼も含まれている可能性はあるが、この本命の気を紛らわせる為と見て間違いあるまい。

こうして謎は全て解けたのである。

「このっ、もう!!」

「太った感じはないし、そう気にするなよ?」

「違うからね! だいたい左京君は……」

まあ実のところ、そんな理由じゃないのはわかってたけど、さつきまでの佐倉から思考をずらすには、この失言しか思いつかなかったのである。

真面目に思いつく不満点としては、最初の案のように僕と佐倉が中心になって解決しなかった事や、PPを僕だけが支払った事。あるいは佐倉の気質的に人を巻き込んだ事。もしかすると、ストーカーの末路にも思うところがあつたのかもしれない。

だが、事態が終息した今となってはそれらは些細な事だ。

そんなものでうだうだ悩むのは不健全だし楽しくない。だから遠

慮や負い目的なモノが残らないように、やり方はどうあれ多少怒らせたのである。

これで完全にはいかないだろうが、明日からいつも通りに戻れることだろう。

誤算は想像以上に佐倉が怒った事と、今回呼んだ面子が続々と集まってきた、事情を知るなり代わる代わる僕に説教したり、呆れたりしていったことだろう。

どうも冗談でも女子に「太った？」と聞くのは、ギリギリアウトだったようである。

僕は集まってきた面子に言い訳を繰り出すために、一時は落ち着いていた口と頭を再度フル回転させることにした。

ともあれ、集まった面子はみんな楽しそうだし、そうでなくともリラックスはしているみたいなので、凡人の僕にしてはそこそこ上手い着地点に辿り着いたんじゃないだろうか？

2章 トラブルな日常

33、天才

『私は天才ではありません。ただ、人より長く一つの事柄と付き合っていただけです。間違いを犯したことの無い人とは、何も新しいことをしていない人だ』

これはアルベルト・アインシュタインの言葉だが部分的に変更して、ついでにどこかで聞いたことがある気がする私見を加えることで指導者や凡人についても言及してみよう。

天才は、僅かでも情報が得られた時から行動を開始する。

優秀な指導者は、情報が2割の段階で判断する。

頭が良い人は、3割で判断する。

凡人は、5割を超えたあたりで判断を始める。

無能は、全部の情報が揃わないと行動しない。

馬鹿は、答えが出揃っても例外を恐れて動かない。

これに照らし合わせると、僕は少しだけ頭が良い人寄りの凡人に該当することがわかるだろう。更にアインシュタインの言葉を『人より長く一つの事柄』ではなく、『二つの人生』に変更すればまさしく僕の主張と同じである。

僕は、伏せられた情報が5割未満では直接的な行動に出ることができない。だから間接的に情報を集めて5割の壁を超えるようにしたり、どうなつてもいいようにいくつもの対応策と不必要なほどの戦力を揃えようとしてしまうのだ。

前のストーリーカーの件も、もし最初に巻き込まれたのが僕ではなく、四方や一之瀬、あるいは東風谷や綾小路であれば、天才や優秀な者らしく格好良くスマートに解決していたに違いない。それこそ物語のヒーローのごとく快刀乱麻の大活躍の末に、ヒロインな立場っぽかった佐倉も成長したり恋愛物語に発展したりしたかもしれない。

その後の展開も、アイドルな事や素顔のカミングアウトをして学校

の人気者へジヨブチェンジさせたり、その為に内弁慶な性格を克服させたりと、色々考えられる。そうでなくとも、隣に寄り添って友達とともに苦難に立ち向かう成長物語になっていた気がする。

でも、現実には僕が巻き込まれたことで急かされるように動き続けた結果、ストーカーにすらほとんど関わらず、当然目に見える変化や成長どころか大々的なカミングアウトもなかった。予想外に短期間で解決したから、一之瀬や綾小路といった先を考えると有為な人材との交流すらほとんどなかった状態のはずである。

おまけに起業やアイドル業は限られた者にしか知られていない。

外と遮断されている現状で、PPではなく円を稼ぐ手段の一つに選んだから、戦略上はなるべく秘匿した方が知る者全員にとって何かと有利なのだが、佐倉だけは別だ。本人が「変わりたい」と言っていたその絶好の機会と手段を失わせ、代わりに来るかわからない先の利益と保険に変換してしまったのである。

四方と東風谷、柴田にも借り道だが、これは佐倉にも何かを返さなければいけないだろう。

自分自身が受けた恐怖と打った策で、佐倉の本気を邪魔してしまった事は、僕の美学に反するからだ。

……………という感じに偉人の言葉を隠れ蓑にした適当な理論武装しておけば、だいたいの人への言い訳と真相を曖昧にする理由付けになりそうだ。

よし、佐倉か事情を知る誰かに問い詰められたら、この方向性で行くことにしよう。

先の事件解決、または中間テストの結果発表から約1週間経った6月10日。

天文部はほぼ平常運転に戻っていた。

少し変わった点は、バイトがない日などに一之瀬や神崎、綾小路などが訪ねて来たり話しかけてくるようになった事か。

ただ綾小路はともかく、一之瀬と神崎にはまだ報酬が出せていないので、どうしてもぼつが悪くなる。最近では東風谷のバリアもあまり効かないし、四方や柴田などは逆に手引きしたりする事すらあったから油断できないのだ。

尤も、流しそうめんの時に会長と報酬の事を話しているのを見ているはずだから、僕が譲らないのは承知しているだろう。だから彼女らの話している内容や性格的にもPPの受取拒否や取り立てではないと思うのだが、面倒事の予感があるためについて避けてしまうのである。

今日の夕方にバイトの給料が入ったら2人に振り込んで、それにより以前のような距離感に戻ることを密かに期待していた。

「入学から敷地内を歩き回って思っただけどき」

「どうしたんだ？」

「この学校って、風水とか四柱推命とか結構考えて造られてる？」

なのでそれまでの時間稼ぎも兼ねて、四方に話の種を蒔いてキャットルーキーをきっかけにかじった易？のような知識を確認したりして好奇心を満たしていた。

あまり人が立ち入れないような話題の条件は厳しいが、四方や綾小路だとそれなりにニツチなネタを振っても大丈夫だとわかってきたから、色々応用できて重宝するのだ。

「ああ、たぶんきちんとした風水師がついてるだろうな。規模はそれほど大きくないけど、四神相応の理に基づいて設計されているのがよくわかる」

「やっぱりか。それって北はどうか知らないが、東西南の三方にそれぞれ目立つ道と河と池があつたアレだよな？ 詳しくないからなんだけ」

「いや、充分詳しいと思うぞ。俺も確認したけど、知ってなければ意味があるかなんてわからないからな」

それに今日は、佐倉がバイト、東風谷は掃除当番でいないので、四

方と二人である。

同クラスなのに、今まで意外とこういう機会は少なかったというの
もあって、本職の手伝いができる知識を持つ四方と話してみると面白い。
い。

ちなみに四神相応の理とは、西に白虎の住む道（バス停のある道）、
東に青龍の住む河（公園を流れる川）、南に朱雀の住む池（畑地帯にあ
るため池）、北に玄武の住む山。これらに守られた地形という意味で
ある。

四方が言うには、北の商業区画も微妙に高台部分にあるようなの
で、おそらく意図して風水的な守りを施しているとの事だ。

科学の発展した学校にこうした仕組みがあるのは興味深い。

もしこれをしたのがキャットルーキーの登場人物なら、第一候補は
ダイオーグループの相談役？九条静山だろう。失礼ながら、四方の父
にはあまりこういう大規模な事業に関わるイメージがないのである。

しかし、九条か。

アポロがいると思われるんだから、四方のライバルである孫の九条
数真も存在するんだろうなあ。何人か実例が確認できたし、もういい
加減キャットルーキーが現代化したような事実を認めなければなる
まい。

九条数真。

2部・四方のライバル兼天敵のピッチャーだ。

四方と共に高名な陰陽師を祖とし、特異な精神と洞察力、優れた応
用力や独創性を持つ上に、自分だけではなく他人にすら実現可能な道
筋まで考えることができる。

直接対決は勿論、盤外戦術にまで対応できる頭脳には四方すら及ば
ない部分が多く、その洞察力で裏をかいたり様々な策を編み出したり
と、洞察力や正確性もさることながら、特に知略で未来の球界1・2
を争う人物だろう。

個人的には、キャットルーキー原作で四方と勝ち負けを繰り返して
いたが、全体の印象としては九条が勝ち越していた感じがするくらい
だ。

考えてみれば、綾小路に全体的に廃スペックなアポロを重ねて少しびびってたけど、まだ九条と重なる奴じゃなくてよかったと思う。野球の括りがない九条（つぼいタイプ）と競うと仮定すると、四方や東風谷を計算に入れても凡人の僕が対抗するにはかなりのリスクを負わなくては足元にも及ばないだろう。

だからといって四方や綾小路、アポロが組し易いというわけではないが、手段を選ばなければいくつか通用すると思われる手札もあるのだ。

しかし、その手札を見通して手を打ってくる九条タイプだと、対抗策が非常に限られる。その上、僕の知り合いでは東風谷か戸塚くらいしか効果的に使えないだろう。僕自身だと、初手でかろうじて引き分けに持ち込むのがやっとになるはずだ。

漫画でしか知らないが、現実で考えると九条数真は天才レベルの高IQタイプだ。

しかもIQに最も影響の強い地頭の部分であるS因子の数値が高い状態にも関わらず、教養部分であるG因子の数値を上昇させる挑戦や学びを怠らない本物である。

原作で少し話に出ていた留学やノーサイン投球、魔球開発などが、このことを裏付けている。つまり四方やアポロとS因子の数値はそう大差ないかもしれないが、G因子の数値は時が経つにつれ開いていく可能性が高いという事である。

そんな九条と予備知識なく初対面に近い状態で対峙すれば、例えば四方や綾小路が最初から本気でも『初戦』は確実に負ける。実際、四方もアポロも初戦では負けているから、僕の勘に基づいた確信に間違いはないだろう。

この追隨できる者も稀な頭脳と洞察力、機械とすらいえる正確さが、遊びや何らかのゲームとかだったとしても、こちらに向けられると思うと想像でもマジでぞっとする。

まあ、原作通りなら現在はアメリカ留学中だろうし、九条みたいな四方への特効持ちがそうそういるわけがない。

……なんか綾小路の時も似たような事を考えた気がするけど、本当

にいないよな？ この思考がフラグじゃないよな？ 四方の天敵だと性質が近い葛城や一之瀬とかにも特効ありそうだから、九条本人も九条つばい奴もノーサンキューなんだからな？

………もし本当に存在してあまつさえ敵対とかしちやったら、綾小路か東風谷にぶん投げよう。あいつらなら大丈夫だろう、きつと。

風水師から連想してしまった不安にも解決策？を見いだしたし、少し考え事に熱中して無視したような形になってしまった隣の四方を見ると、いつの間にかデツキチエアで寝始めていた。集中力を考えると、たぶん四方も似たような失敗をしたりするから、その対処法が『ほつとく』なのだろう。

悪いと思うが、四方で助かった。

これが陽キャの誰かなら、話しかけられたりして思考を散らされてモヤモヤしたものが残ったかもしれない。僕が陽キャに苦手意識を覚える要因の一つで、仮称・話をしていないといけない症候群（偏見）である。

そうして四方とのんびりしていると、遅れていた東風谷を皮切りに綾小路、柴田、神崎、一之瀬、白波、網倉が続々と入って……って、ちよつと待て。

——なんで？ ここ、放課後の屋上だぞ。

百歩譲って綾小路と柴田まではともかく、他の面子に面倒事の匂いを感じて仕方ない。

一之瀬と神崎は屋上に来たことも初めてだろうし、白波と網倉にいたっては接点が学級委員会と宴会くらいしかなかったはずだ。名前を知ったのも、宴会の時だったくらいだしな。

逃げ出したくなるが、以前に食堂で逃げようとしたことでかえって面倒を引き起こした前例がある。ここは先手を譲って出方を見るのが無難だろう。

そう考えた直後、僕は視界に入った東風谷の面倒臭そうな雰囲気を見て思わずまた逃げ出したくなっていったが、なんとか衝動を堪えてい

る際ににこやかな一之瀬が話を切り出してしまった。

「いきなり押しかけちゃってごめんね。ちよつと話がしたいんだけど、今いいかな？」

「いいけど、ここだと人数分座れないから場所変えていいか？」

「勿論！どこか希望はある？」

「寮近くまで移動する事になるけど、行きつけの飯屋だと助かる」

「了解だよ！みんなもいいかな？」

夕食にはまだ早い時間だが、屋上の戸締りしてからゆっくり移動すれば、着くころには5時は過ぎてているだろう。

その時間帯なら僕には充分食べられるし、他の人は適当なモノをつまめばいい。それになにより、落ち着いたり思考したりする時間ができる。

そして落ち着いて片付け始めるふりをしながら一之瀬から視線を外して見回すと、だいたい状況は読めた。

この場では口を開いてはいないが、No. 2っぽい神崎の視線と意識の方向を考えると、おそらく綾小路がいることで本来の用件を切り出せない状況のようだ。

ということは、切り出したかった話はBクラス絡みの面倒事と予想できる。たまたまだろうが、綾小路グッジョブだ。

場の流れが少し見えてきたので、手早く後片付けして移動を開始する直前。

手伝ってくれた綾小路へ笑顔で親指を立てると、怪訝な顔が返ってきたのは余談である。

34、自爆

理系には大雑把に言って、工学系と理学系の二つがあると僕は考えている。

工学系は、思考を下から積み上げていくビルドアップ型。反対に理学系は、全体を見ながら思考を掘り下げていくトップダウン型。

開発の現場とかにいと、この違いは顕著にわかる。

工学系は部分ごとに開発して1つずつテストしていくので、進捗がととも早い。しかしテスト期間中に機能が衝突したりして出てくる不具合を直す作業が加わる場合もかなり多い。

一方、理学系は全体のバランスを調整しながら作るので、テストまで時間がかかってしまうのである。ただ最初から全体の整合性を考えているので、テストまでたどり着いてしまえば後は楽だ。問題は、期限や納期に間に合わないケースが出てくる点だろうか。

また実験失敗の反応を例に、それぞれの問題解決のやり方を考察してみよう。

工学系の多くは、実験が失敗に終わると手順の最初からやり直して不具合を見つける。

理学系の多くは、失敗結果から失敗の原因を絞り込んでいき、不具合を発見したりする。

例えば、この方式で文系でも無理やりこの場にいる面々を独断と偏見で分類すれば、四方や神崎、白波が工学系になるだろう。そして僕や東風谷、我が派閥に引き入れた綾小路は理学系な印象である。

ちなみに一之瀬や柴田などの出さなかった名前は、意見を表明していない中立派閥だ。

なお一応言っておくと、これはどちらがいいという話ではなく、思考が種族や文化すら違うのではないかと考えたくなるくらいに違うと言いたいだけだ。

つまり、その両者の意見が食い違えば戦争になる——かもしれない。

「もう結果は決まってるんだろ。東風谷も綾小路もこちらにいるんだ。そちらは白波と神崎の二人、こちらは三人、中立四人。明確な優劣が目に見えていると思うが?」

「まだです! まだ中立の誰かが意見を表明すれば数の優位はひっくり返せます。特に帆波ちゃんがまだ中立のままなんですよ!」

「ふっ、無駄な足掻きを。確かに一之瀬を引き入れれば同点どころか逆転も狙えるだろう。ただ……これまでの一之瀬を見ていれば一目瞭然。

——賭けてもいい。一之瀬は選ばない」

「くう、悔しいけどそんな気もします。だけど、それでも一縷の希望に縋らずにはいられません! 好きな気持ちだけは誰にも負けたくないんです!!」

帆波ちゃんは、どちらが好きなんですか!?

私: 私は本当に好きなんです!!!」

「そうだな、一応聞いておこう。一之瀬、どちらを選ぶ?」

「えくと、考えたことなかったけど、どっちかというとなけのこ、かな?」

ただこの第一次きのこたけのこ戦争は、勃発直後のこの時点で我がたけのこ派閥の完勝が確定したといつても過言ではないだろう。相手の見積もりが甘く、意図せず一之瀬を引き入れることにも成功したのだ。

これは勝ち誇らずにはいられない。

「くつくつく……くはははっ! 白波い、墓穴を掘ったな!? 優勢な我が派閥に大駒まで贈ってくれるとは……お可愛いこと、なんてな」

「——ッ!!! そ、そんな……帆波ちゃん………何故!」

「千尋ちゃんにとって、これはそこまでのことなの!」

この戦争の発端は、行きつけの飯屋がサービスでやっている飲み物に付くちよつとしたお菓子だ。白波は、きのこたけのこの利点を各派閥でプレゼンしているうちに熱くなったのだろう。

だが僕もここに来るまで白波から、わけもわからず睨まれたり、

突っかかってこようとしてはやめるみたいなストレスの溜まる対応をされたので、反撃の機会を狙っていたのである。そして丁度いいことに、僕の推しはたけのこだったので、こだわりがなさそうだった東風谷と綾小路を言葉巧みに引っ張り込んで、本気で叩き潰したのだ。

白波の敗因は、なかなかのプレゼンをした神崎を引き込めた事で調子に乗りすぎ、一之瀬を読みきれなかったことだろう。意気込みや熱量に差があるのにも気づかず、一之瀬の性質すら考えていない。

そんな白波では、一之瀬がきのこを選んだ場合も想定して「選ばない」と予防線を敷いていた僕には到底――

「で、賭けに負けた左京は何をするんだ？」

「ばーどうん？」

『――賭けてもいい。一之瀬は選ばない』

勝利の余韻に浸っていた僕に意味不明な言いがかりをつけてきた四方。その手に持つ端末から、僕の声が流れた。ついでに僕の背中にも冷たい汗が流れた。

「一之瀬は、たけのこを選んだが……もう一度聞こう。」

左京は何を賭けたんだ？」

「……」

この状況から導き出される答えは……四方は隠れきのこ信者？

言質を取られるだけではなく録音までされては、白紙の小切手を握られたに等しい。まさか予防線を逆用されるとは……。

しかし幸い賭けと言ったのは僕だけだ。

ここは東風谷と綾小路に援軍を――

「つて、二人とも居ねえ!？」

「さて、墓穴を掘ったのはどちらだろうな？ ああ、東風谷と綾小路なら早い段階でいなくなってたぞ」

「馬鹿な！ あの二人が数の優位を自ら捨てる判断をしたのか!？」
まずい。

この場のたけのこ派閥は、僕と新人の一之瀬だけになってしまったのに、きのこ派閥は白波と神崎に加えて隠れていた四方を加えて、数が逆転してしまった。仮に残る柴田と網倉を一之瀬で釣り上げられ

ても、四方が虎視眈々とこの時を待っていたのだとしたら、詰みまでの道筋に手落ちがあるわけがない。

まさか、この僕が負けるというのか？

一之瀬を手中に収め、磐石と思われる体制を築いた直後に？

——そんな馬鹿げた話があつてたまるか！

「ふん。数で逆転されたからなんだというんだ？」

「何だと？」

「ここにいる僕は、これまで数々の難題を乗り越え、経験値だけなら同級生の中でも百戦錬磨の覚醒左京。その気になれば革命前夜の自爆テロすら辞さないぞ。だから詰んでいると思つても、気をつけたほうがいい」

「何が言いたい……いや、何をするつもりだ？」

「こうするんだよ!!」

「ぎゃ、あ……う？」

僕は白波を宥めていた一之瀬の肩を抱き寄せた——瞬間、触れない距離かつ触れているように見える位置で自らの手を固定する。

周囲からはなるべく乱暴に見えるように、それでいて実際に触れないよう細心の注意を払いながら、肩を抱くふりをして彼女のように扱っているのを見せつけたのだ。

つまり、きのこ・中立派閥の誰かの暴走↓うやむや、的な流れを狙うのである。

四方や神崎どころか中立派閥にすら見破られるだろうが、ほぼ初対面の僕でもわかる執着の強さを覗かせる白波のパッションを一之瀬への馴れ馴れしきで煽れば、四方や神崎がいくら論理的に収めようと無駄だ。

一瞬とはいえ、一之瀬を抱き寄せるのはかなり躊躇いがあつたが、やった甲斐はあつた。

思った通り四方と神崎は冷静なままだが、沸点の低い白波は見るからに我慢の限界に達してそうで、女子がしてはならない顔になっている。あれならもう一押しすれば暴走させられるかもしれない。

これは…行ける！

「人数で負けていようと、一之瀬がこちらのモノという事実は変わらない。そして、一之瀬さえいれば戦力差など簡単にひっくり返せる……というのは、さつき白波も言ってたことだよなあ？」

「ぐぎがげ(´▽´)」

「おい！ 白波、落ち着け！ 人様に見せられない顔になっているぞ！」

「そこまでやるか、左京」

追加で、挑発して暴れだしそうになる白波を四方と神崎が抑える隙を突いて、気取られないうちに起死回生の言葉を一之瀬にささやく。上手くすれば、神崎や四方にすら通用する見込みもある奇策だ。

抱き寄せた瞬間こそ焦りが見えた一之瀬だが、触っていないことに気づいて以降は不思議そうなキョトン顔を僕に向けていただけだ。演技に気づかれるから出来るだけそれもやめてほしかったが、今は思考がスポンジみたいになっている方が好都合。

言い換えれば、空白になっていた心の隙間に、僕のささやいた言葉は順調にしみこんでいくからである。

なぜそれがわかるかというと。

「ぎ、(ぎあひ)♡ (ぎあ〜い)♡

ホント私達相手に反論もできないなんて、君達よわよわだね♡

もしかして♡ 悔しくもないのかな？ きやははは♡」

一之瀬が直後、僕のささやいた言葉を昇華させたメスガキ口調で周囲をなぎ払ったからだ。

最初はぎこちなかったが、だんだんノってきてからは演技に熱が籠っていた。佐倉と違い、おそらくこっち方面の素質もあるのだろう。見込んだとおりである。

このように普段は言わないような事を言い放ち、本人自らアレンジまで加えてきのこ派閥の口を封じてくれたのだ。

たけのこ派閥に賛同したのは、僕の内心を読み状況を波立たせない為かと邪推していたが、彼女こそたけのこを真に思っていたのかもしれない。

現在、この場には地獄のような静寂と「きやははは♡」という幻聴

のような山彦が未だに響いて聞こえる。

一之瀬は我に返ったのか呆然としたまま赤くなって震え始めたが、本日のMVPは彼女で決まりだろう。

僕は心の中で彼女に感謝の祈りをささげた。

この新たな黒歴史を作った彼女に祝福を！

一之瀬がマルチタスクの容量限界を超えるか、予想外の何かを質か量のどちらかで基準以上ぶつけると鸚鵡返しする癖があることには気づいていた。

だから僕はそれを見越して、その際にできる隙を利用したのである。勿論、正確には予想していただけだったが、どうやら今度の賭けには負けなかったらしい。

明日までに報酬のPPを払ってスッキリしたらきちんと面倒事も聞くので、今日の処はこの派閥の勝利でもって利用したことは見逃してほしい。

それにしても、一之瀬みたいな普段は明るく優しいかつ自分が可愛い自覚の薄い美少女に、上から目線なメスガキ口調はなかなかのギャップ萌えを発生させるものだ。また自分が放った言葉が徐々に浸透して羞恥心を呼び覚まし、ようよう赤くなりゆく横顔も風情ある良き光景である。

「……………にや、にやあああああつ！ 忘れて！ みんな、お願いだから忘れてえええ!!! なんかつい言っちゃったのおおおお!!」

「だ、だ、大丈夫だ。オレの中ではストライクだったぞ？」

「ほ、ほら。柴田君もこう言っているし、恥ずかしがることないよ、帆布ちゃん」

「そうだ。今のは、この場にいる全員の脳裡に刻み込まれる威力だった。

安心しろ。これから一之瀬の持ちネタとして、ことあるごとに思い出させてやるからな」

「バ、バカー！」

「ほんとにやめてえええ……！ ああああ、私、何であんなことを」
しかし、まあ……うん。こう……冷静になって真っ赤になって絶叫する一之瀬を見ると、手段を選ばないのはやっぱりダメだな、と思えてくる。なんか僅かに謎の罪悪感までわいてくる取り乱し様だ。

というわけで、これから一之瀬と言いつ争う事があれば、ここぞという所で「ぎあこ♡」や「よわよわ〜」という言葉を使うのがいいだろう。それに多少は適正があると思われる東風谷か櫛田あたりにメスガキ語や概念を習得させるのも有効かもしれない。使いどころは応用を利かせればいくらでも思いつく。

付け焼刃だった今回ですら、真正面から受けた白波と神崎は完全に動きを止めて固まっており、周囲の状態変化で四方も動けなくしたほどなのだ。

これは一之瀬の切り札として一考の価値があると、今度進言しておこう。きのこたけのこ戦争に関して、完全に忘れ去られているこの威力は捨て置けない。

個人的にも、宣言どおり一之瀬で逆転したのは痛快だったしな。

一之瀬は戦争が始まる事こそ阻止できなかったが、戦争を即座に止めるという快挙を成し遂げたのだ。

流星、慈愛深き我らBクラスの学級委員長。

(僕の) 目的は大体達成してくれつつも自爆して注目を独り占めまでしてくれるとは、もはや英雄といってもいい働きである。MVPを取ったことといい、もう新人などとは呼べないだろう。

そこに痺れる憧れ……憧れはないかなあ。

真っ赤になって取り乱している姿は、カリスマブレイクしてしまったように見えるから不思議である。

ともあれ一段落ついたところで、東風谷や綾小路も先に帰ったみたいだし、僕も速やかに帰るとしよう。リーダー格が動けず、四方も周囲を動かせない今が好機である。

まごまごして一之瀬やみんなに冷静さを取り戻されて綾小路がいなくなっていた事に気づかれると、面倒事を切り出す余地を与えてし

もう可能性がある。

それにしても、こんなくだらない事だったのに、まるで甲子園で敗退したエースを励ましているかのような状況にできる一之瀬の魅力とBクラス首脳陣の団結力は凄まじい。激励されているのが、真っ赤になった一之瀬自身でなければもっと絵になる光景だったかもしれない。

唯一、僕から視線を外さなかった四方に見送られながらその場を去ったので、その後のことはわからないが、今日はBクラスの首脳陣にとつてきつと美しい思い出になったことだろう。

記念に何枚か写真を撮っておけばよかった。

僕は、眼福な光景を見せて好機まで生み出してくれた一之瀬に敬意を示し、気分良く全員分の支払いを済ませて店を出た。

なんであれ特筆すべき出来事も起こらず、平穩無事に帰ることができて何よりである。

爽快な気分で帰り道に見上げた夜空は、いつにも増して僕を魅了してやまない美しさを感じた。

35、喧嘩

6月11日。

昨日の帰宅後に確認したら僕の給料が振り込まれていたの、即座に一之瀬と神崎に5万ずつを支払った。これで借金は完全になくなり、かなり気が楽になった。

一方、所持PP残高は昨日のおごりの出費もあつて1万をきつていく。

この残高では、今月の残り20日を快適に過ごすには心もとない。だが、懸念がほほ片付いた心中は晴れ渡る青空のごとき爽やかさがあり、後悔も反省も微塵も存在しない無敵モードである。

だからいつも通り直前に登校した時、四方から昨日のことやその他で愚痴られても華麗に聞き流してしまう心持ちであった。

まあ面倒事や本題というのはあくまで僕の想像であつて、それが外れていたならそれはそれで楽である。それにPPの支払いが本題で、履行されたから元の距離感に戻った可能性もなくはないだろう。

この時は、僕になにか話したい事があるならどうせ昨日の本題だろうから、昼か放課後あたりに一之瀬か神崎と共に接触してくると思つていた。その時こそ真面目に聞けばいいと、ほとんど耳を素通りさせてしまったのは、先を考えると失敗だったのだろう。

事前情報なしに新たな面倒に突撃することになったのだから。

予想に反して昼休みまでは特に接触も呼び出しもなく、四方や東風谷と雑談するだけの平穏な時間が流れ、一之瀬も神崎も近寄ってくることはなかった。

いつもと違う点として、時折白波からは遠くから鋭い視線が飛んできていたが、僕に心当たりが全くなかったのもその内に気にならなくなっていた。あの女子は言動から狂犬っぽい、一之瀬に傾倒している。なので余程でなければ単独での暴走はないはずだ。

そんな訳で、昼になると同時に弁当を持ち出して青空ランチを決め

込んでいると、東風谷が話しかけてきた。

弁当の日は一緒になることもあるが、大抵は無言の時間になるので少し珍しい事態だ。

「夢月さん、お話いいですか？」

東風谷は流しそうめん以来、二人で話していた橘書記が何かを吹き込んだのか、それなりの仲の者には名前呼びになった。とはいっても僕の知る限り彼女は僕と佐倉、四方、あとは櫛田くらいしかその対象としていない。そこそこ話しておきながら、一之瀬や綾小路ですら苗字呼びなのは流石と言える。

更にそれ以外の者に対する姿勢は、次の発言でだいたいわかるだろう。

「売られた喧嘩を買いたいんですが、その相手がCクラスの女子である事以外は名前も顔もおぼろげで困ってるんです。売られたのは愛里さんの件の直後だったので日を改めたら、忘れてしまいました」

「それって要は人の確認だろ？ だったら、四方か……苦手かもだけど一之瀬に聞いたほうが予測が立つんじゃない？」

このように見た通りに排他的といえるほど他人に興味がなく結構好戦的なのだ。というか、大抵の事は実行できる能力や行動力もあるから、さっさと自分の面倒を片付けてしまいたい気質なのかもしれない。

「それなんですけど」

昨日、一之瀬さんに聞いてみたら私と似た感じで何人か因縁付けられてるみたいで、近いうちにCクラスに行つて話し合いをする……と、言われてしまいました」

「それじゃあ回りくどいし面倒か」

「はい。せめて、私に売られた分は高値で買い取りたいんです。殴り込んで、相手がわからないとどうしようもありませんし……」

個人同士の喧嘩ですめばまだ平和だと思うが、東風谷以外のクラスメイトにもなにかしらされているなら、Cクラスは目的を持って動いている、または動かしている人物がいる可能性がある。

この入学気分から脱却しつつある時期、他クラスに目的を持って

ちよつかいをかけるとすれば……情報を得る為の威力偵察か？ または不良漫画的なトップを狙う下克上というケースもありえたりするのだろうか？

……こんなの現代の学校ならありえないと思うのに、キャットルキーが現実味を帯びてきてからというもの、原作でたまに起こっていた乱闘や暴力などの危ない想定が混じりこんできて少し困ってる。

これも雄根とか神童とか加縫とかの喧嘩早い奴らも現実にいると思ってしまう弊害である。時代と環境が違うのだから、早いうちに認識を調整しておかないと思わぬ落とし穴がありそうで怖い。

僕自身の暴力経験は、かすれ始めている前の人生でのパワハラ上司と高校時の教師に殴られた事くらいで、前の学生時代に限定すると教師から殴られた以外は見えていた経験しかないのだ。

そんな経験が役に立たない分野なので少しは心配だが、この時期にクラスを動かせるような学生がいるなら、こんな初手から全面戦争な展開やプランは考えないだろう。つまり今ならまだ比較的安全という訳である。

「それで僕か。」

頼み事は、Cクラスに同行して人物を特定、少なくとも絞り込めばいいって事か？」

「そうして貰えたら助かります」

「今日はバイトもないしいいよ。最低限の備えをして放課後にでも行こう」

「お願いします。それで、二三矢さんや一之瀬さんにはどうします？」
なので仮に不良漫画の主人公や敵役みたいな奴がいようと、基本東風谷の付き添いポジションな僕は目を付けられないだろうから危険もないはず。それなら東風谷のやりたいようにさせて、借りを返すついでに一手置いておくのも悪くはない。性格上、一之瀬や四方には取り辛い選択だから、僕が付いていくのがベターだろう。

四方は非好戦的な以外はいまいち読めないが、おそらく一之瀬は乗り込む事や喧嘩を素直に許容しない。

誰かと争うことは極力避け、話や魅力の通用しない相手なら情と策

でもって抱きこもうと試み、無理だと判断すれば表面的だけでも協力関係を結ぼうとし、それでも駄目なら次は撤退を選ぶ。全面戦争は最後の手段……にもするか怪しい。

それが僕が一之瀬に抱く印象だ。

故に、順当にいけば東風谷の喧嘩もCクラスとの問題に絡めて話し合いの方向で進めて、痛み分けのような形で収めようとする気がする。四方や神崎が介入することで多少結果内容は変動するだろうが、この予測は大きく間違っていないはずだ。

つまり東風谷の望むわかりやすい直接的な対決や勝負、喧嘩は、どちらのクラスリーダー（片方は憶測だが）の目的・方針とも微妙にずれているのだ。

東風谷はそれに合わせるのが面倒なのだろう。

僕としても話し合いで長引かせるくらいなら、さっさと乗り込んで白黒付けた方が好みなので、嗜好は一致している。

「察するに、昨日に一之瀬達がしようとしていた本題がこの話だろう。なら、今日ここまで接触してこなかったのを、黙認している無言アピール、またはあつちとこつちでそれぞれ好きにやりましょう。って解釈で僕達は好きに動かないか？」

……怒られそうだから、四方や一之瀬には聞かれるまで内緒で」

あとは東風谷と口裏だけ合わせて隠すそぶりを見せずに勢いで突っ込んでも、我らがリーダーは意外と押しに弱そうな面もあると知り得る機会に恵まれたので、押し切る算段はある。怒られるとは思ってから、一応聞かれない事を祈るけども。

「それはわかりやすくなっていますね！ 実はCクラス襲撃を提案してたんですが、全員から猛反対されてまして……」

「おいおい。僕は襲撃するわけじゃないぞ。ただ人を割り出しに行くだけだ」

「わかっています。無差別じやただの迷惑な人ですもんね。しっかり確認をしてから、落とし前を付けなくては」

なんかこの娘、いやに嬉々としてるんだけど。

これまでにない笑顔で襲撃を口にする東風谷に一抹の不安はある

が、成算はあると信じてみよう。ついでに危ない奴がいなくても信じておこう。

「ん。それがわかってればいい。」

んじゃ、僕はちよつと用意するものがあるから先に戻ってて。でももし四方達に勘付かれてなんか聞かれたら、素直にゲロちやつても大丈夫」

「話してもいいんですか？ 二三矢さんはともかく、一之瀬さんの雰囲気から止められるような気がするんですけど」

「それで放課後に呼び止められても、僕が軽く足止めするからまず勢いでCクラスまで突っ切ろう。突入さえしてしまえばこつちのものだ」

今回は佐倉の時とは違い、知り合いには直接的な荒事に向いていない人材の方が多そうなので、最低限東風谷と僕だけで何とかなる準備をしておく。

まあ荒事っぽいとはいえ、相手は所詮高校1年生。Cクラスに四方や綾小路クラスの人材がいるか、無駄に敵を作るような真似さえしなければ、大人のストーカーが相手だった佐倉の件より危険はないだろう。

僕は東風谷と放課後の約束をして一旦別れ、準備のために残りの昼休みを費やすのだった。

その日の放課後。

「それでは、行きましようか」

「そうだな。さつさと済ませてしまおう」

終業のベルが鳴ると同時に、東風谷が立ち上がり催促してくる。

だが、昼の嬉々とした様子から、こうなると思つて準備を済ませていた僕に死角はない。既に準備は完了している。

「待て！」

「待ちなさああああいー！」

なので早速Cクラスに行こうとしたら、四方と一之瀬がいきなり肩を掴んできた。

四方は後ろの席なのでまだわかるが、一之瀬は授業の片づけを放棄して最速でこちらに来たとしか思えない早さである。真面目な学級委員長殿にしては珍しい。

「なんだよ、四方に一之瀬。僕ら、これから用事があるんで、話があるなら手短に頼むな」

「はあはあ……どこへ行くつもりなの?」

「知ってるかもしれないけど、ちよつとCクラスに行つて火種と『その他』を投げ込んでくるだけだよ」

「想像以上に過激な発想!? つて、駄目だからね! どうしても行くなら私も行くからせめて穏便に解決しよう!」

東風谷が話す話さないに関係なく、止められた時点で用件はわかっていたが、事前の打ち合わせ通り一応は足止め兼説得をしておく。

無視して進む事もできるが、後の事を考えると小出し程度に主張しておく事はかなり重要なのだ。

「えー、面倒じゃね? あつちから喧嘩売つてきてるんだから、高値で買い取つた方が早く済むだろ。軽く見て強そうだったらその時こそ穏便に交渉しようぜ」

「問題をもっと大きくしようとしてどうするの!? まずは話し合い! そこだけは絶対守つて!」

「いやいや。このケースで話し合いだと、前に頼つた会長は中立で、他の面子は別クラスだろ? 面倒な事になるのが目に見えてるじゃん。

だから、僕らが直接火元をぶつ飛ばすのが一番楽だつて」

「いやいやいやいや! だからつて最初から荒事を考えないで!? 法律とかこの学校のルールの事もちゃんと考えて!」

「大丈夫だ。東風谷はともかく、僕は襲撃まで考えてない。それにどうにもならなくなったら、ちゃんと一之瀬に投げるからそんな時は頼む。

まあ、詳しい話はCクラスを見てからな」

「それが駄目なんだつて!」

「大丈夫だつて。いいから、一之瀬は晩飯の事でも考えながら休んだけ」

「何で夕食!？」

のらりくらりと話していると、東風谷が焦れたのか口を開いた。先に行ってもよかったのに、どうやら僕を待っていてくれたらしい。

「夢月さん。話してるなら先行ってますね」

「東風谷さん!？」

「あのさ、東風谷：お前も空気ってものをもう少しだな……」

「ああ、大丈夫。もう話は終わったし、改めて行くか」

「終わってないよ!？」

「うんうん、また今度な。んじや」

「ああああああ! 待って待って! 行く! せめて私も行くからあ!」

「いや、別に来なくてもいいよ」

「行くから!!」

何人かを試すのに必要な事は言ったし、ぎつとあまり知らないクラスメイト達を観察できた。

神崎他数名からは逆に観察されていたようだったが、この雰囲気なら一之瀬と完全な敵対をしなければ、かなり自由にやれそうだ。途中から口を出さなくなった四方と少し離れた位置にいる柴田の呆れた感じを見て、そう確信した。

Bクラスでのやる事がほぼ終わったので、既に歩き出していた東風谷の横に早足で並ぶと、まだ見ぬCクラスへの初対面をシミュレートしながら進む。

なんかだんだん言動や印象が幼くなってきた一之瀬も付いて来てしまったのは、少し予想外だが、ある意味問題ないどころか一石二鳥だろう。

ひとまずの目的は東風谷の喧嘩相手を見つけるだけなのだし、やってくれるかはともかく僕より一之瀬の方が人探しには適しているのだ。それに『僕』の目的達成にも、一之瀬がいることで説明が省けるメリットも付いてくる。

メスガキの言語や概念に触れた結果、内面も微妙に影響を受けてい

る…とかでなければ、彼女自体に不安はない。と思いつながら、昨日までとなんとなく雰囲気が違う気がする一之瀬を連れて即席3人パーティーでCクラスへ向かう事になった。

…連れ二人には失礼ながら、なんかチュートリアルクエストの引率をする者な気分である。

36、例外

現代日本において、IQというものは高ければ高いほどいい……というものではない。

そりゃあ、漫画やアニメの登場人物のように、IQ180を超える数値をたたき出す天才なら周囲が放っておかないだろうが、一般？の高IQの者はせいぜい140前後である。

そして——160くらいまでの者はまず組織で出世できないと思っただ方がいいだろう。なぜなら、大抵の組織の幹部以上のIQは120前後が大半を占め、高IQの者が説明しようと上の者が話をほぼ理解できないのだ。

なんなら精神科で高IQと診断されると、精神病かのように扱われる風潮すらある。嘘だと思ふなら、適当な会社で高IQの者を探してみるといい。馬鹿やアスペルガーや発達障害などの障がい者風味な人間に紛れるか、あるいは役立たずとして眠っているか、辞めているかのどれかだろうから。

ともかくこれらの要素を含め、俗に言われるIQが20以上離れると会話ができないというのは事実だと、僕は経験から知っている。

勿論、これは僕がまだ今回の人生では社会に出ていないので確実ではないが、前とそこまで生活・政治・経済などに差はない世の中である以上、完全なお門違いという事はないはずだ。

そこで僕は前の人生の焼き直しにならない為に、高校入学を機にくっつかの実験的計画を練っていた。

その一つが『例外』とハプニングを利用する事である。

幸い、この学校には四方という想定外が存在していた。それだけでなく友人知人にも奇人変人が続々と現れ、IQは僕と同格以上と思える東風谷や戸塚、総合的には同世代の中でも上澄みだろう一之瀬や葛城、櫛田。そして、四方と同格にすら見える綾小路に佐倉。

佐倉は条件付だし、頭脳や身体能力といった点では普通に近いから少し癖が強いが、おそらく学校外活動か大学以降で相当化けるタイプ

と思われる。

他にも柴田を筆頭に優秀な人材も揃っていて、伏せられていた札も明らかになり始めてきた今は一つの好機といえる。

それを踏まえれば、同学年でこの時期に唯一纏まって動き出したと思われるCクラスには、正体不明の存在X的な何か（長いので次から存在Xとでもしておこう）がいる。

例えそれが考えなしの暴力だとしても、苦手な暴力の匂いはしていても、東風谷の事を抜いてすら、ここで顔を繋ぎに行くのはメリットしか感じなかった。

良し悪しはともかく、最低でも例外を作り出せる人材の有無を確認できるのだ。

学校、ひいては将来のこれからを考えると、この行動は近い未来で必要になる気がする。だから東風谷という規格外の人材のモチベーションが高い時に便乗できるのは、渡りに舟だった。

そんな事を考えながら歩き、Cクラス前。

ヒキニート気質な東風谷や付いてきてしまっただけの一之瀬に先陣を切らせるのもなんだし、同級生の教室に気負って入るのもおかしいだろう。

「はじめまして〜。ここにやにやちわ〜！いきなりだけど、カチコミ一丁お待ちしました〜！」

……あつ、相手は僕じゃないよ」

「なんで最初からそんなに過激な事言うの!?! 穩便につて言ったのに！」

「つていうか、噛んでますよ」

「噛んだわけじゃなくて、せっかく付いてきたから、うちのリーダー成分を出しといた方がいいかなって」

「リーダー成分ですか、なるほど」

「そんなの出さなくていいから！東風谷さんも納得しないで！」

だから挨拶と用件、それに注意点を他所のクラスにもわかるよう端

的に言っただけなのに、また一之瀬に怒られてしまった。あちこちにツッコミ入れるなんて、やつぱりリーダーってなんか大変そうだなあと思った（小並感）。

一方、東風谷は平然と見回してたり、平素と変わらぬ態度なあたり目的がブレたりはしていないようだ。

「なんだ、てめえら。喧嘩売りに来たのか？ それとも笑わせに来たのか？」

「ん？ いやいや、喧嘩売ってきたのはこのクラスの女子の誰か。

それで、この東風谷が高値で買いたいらしいんだけど、そいつの顔や名前を覚えてないってんで、僕が人探しとその他で付いてきたんだ」

「で、後ろは？」

「ああ、やつぱり一之瀬は他のクラスでも知られてるのか。でも、一之瀬はなんか付いて来ちゃったただだから、僕から紹介するのもなんだかなあ」

そう言つて対応と目線を一之瀬に投げる。

その意を汲んでくれたのか他の理由か、咎めてきた男子に対して場違いにも挨拶をし始めた一之瀬は、なにも言っていないのに囚役を買って出してくれていた。意外と内心は殴りこみに乗り気だったのかもしれない。

ともかく、手が空いたので東風谷と同じように教室内を見回してみると、此方を睨んでくるグループが二つほど存在しているのに気づいた。

片方はほぼ男子のグループだから、カチコミという言葉や僕の態度がその理由だろう。

もう片方は女子4人組なので、勘でしかないが東風谷に喧嘩を売ったのはこの中にいる気がする。

ただこれ以上絞り込むのも面倒だし、相手から動いてもらうようにするか。

「と言うわけで、東風谷に喧嘩売った人々。名乗り出てくれない？」

当然、僕や一之瀬は邪魔しないし、させないから安心してくれ」

「てめえ、舐めんじゃねえぞ！ ふざけたこと抜かしやが……」

「石崎!!」

件の女子4人の反応を観察しながらジャブを放つと、石崎と呼ばれた男子が乗ってくれた。これは一之瀬と話していた男子にすぐ鎮められてしまったが、元々4人の中から候補を絞りこむ一手だったから問題ない。

何故なら名乗りこそなかったが、ひと際大きな反応を示した女子がいたのである。

十中八九、あの女子で間違いはないだろうと思つて隣を見ると、そこにはターゲットの当たりがついて嬉しげな東風谷。

「東風谷、わかってるよな?」

「当然です」

確認の為に声はかけたが、絶対の自信を感じさせる返事が返ってきた。それは到底下手を打つ未来が見えない、誰が見ても成功以外あり得ないと感じさせるものだ。

これなら喧嘩の始末は勿論として、教室内カメラからの隠蔽までを計算した完璧な犯行をしてくれるだろう。

ターゲットを目指して進み出す東風谷。

ひとまず役目が終わって見送る僕。

一応、一之瀬やCクラスの奴らが止める可能性もあると思つて後方で待機していたが、血の気の多そうな石崎や石崎を止めた奴も他も。そして一之瀬さえも動かないまま。

東風谷がターゲットに到達した。

「守矢の分社に危害を加えて破損し、ふざけた謝罪で私に喧嘩を売ってきたのは

——貴女ですな?」

「な……あ……」

そう目の前の女子に言い放つ東風谷は、本気で怒りや敵意を向けているわけではない。

それでもにじみ出る迫力は馬鹿にできるものではなく、纏う雰囲気はどこか人と隔絶した何かを感じさせる。

Cクラスの者達や一之瀬は動かなかったのではなく、この雰囲気
に気圧されて動けなかったのだろう。あんまり僕には感じられない圧
力？なので、たぶんが付くけども。

「貴女ですね？」

「…あ、あ……は」

「貴女ですね？」

「だ…だ、だったらどうだつて」

壊れたテープレコーダーのように3度繰り返された質問。

冷静さを欠き精神的に追い詰められた女子が、それでも3度目にな
んとか言葉を搾り出した。

——その瞬間、前のめりに傾いていき、そのまま倒れるところを
体ごと東風谷に掴まれて、椅子に座らせられていた。

「あら、どうしたんですか？」

衆目の中で堂々と音も衝撃もない完全犯罪な一撃を食らわせなが
ら、白々しく問いかける東風谷。

僕からは後ろ姿しか見えないが、おそらく凄まじい笑みを浮かべて
いるのだろう。ターゲットの周囲にいた3人などは、尻餅についてパ
ンツ丸見えな事にも気づかず怯えているくらいなのだ。

「なにか言わなければならぬ事は？」

「……………ごべ、ん…なざい」

「…まあいいでしょう。あまりやりすぎると怒られますし……」

東風谷が何をしたのか僕には見えなかったが、大半の奴にも見えな
かっただろう。

これなら教室内のカメラからも、位置・角度や精度を考えれば映つ
ていないはずだ。証拠になる痣や外傷を残す性質でもない。

今のは僕から見て、呼び出しを食らおうと言い逃れが容易な完璧な
仕事だった。

それにしても、あの女子は東風谷の地雷を的確に踏み抜いた上で喧
嘩を売るとか、破滅願望でもあるのだろうか？

ターゲットのふらふら具合を見るに何らかの手段で頭を揺らされ
たっぽいけど、これを軽く実行してしまえるほど底知れないのが東風谷

なのだ。

だが、たとえこうした事ができなかつたとしても。神様達の事を知らないにしても。規格外の本質がわからないにしても。

手ごろな獲物が何人もいただろうに、何故それらを抜いても色々ヤバそうな東風谷を狙った？

思うに、彼女は不運とか考えなしとか以前の問題だったのだろう。本能や危機感が退化しているところなるという見本のようなターゲットである。

「夢月さん、どうでしたか？」

不敵。

喧嘩を売ってきた女子を一撃で倒して振り向いた東風谷の笑顔は、こう評するのが適しているだろう。

「普通に最高だろ？　これを機に、布教する時は『学園の不敵な巫女』とでも名乗ってみたらどうだ？　学校や風祝よりこっちの方が語呂や通りがいい」

「それ、ちよつと面白そうですね！」

ただ実際に最高だったが、問題もあつた。

こいつ、テンションが高い状態だからか力加減が甘すぎである。

軽口ついでにハイタッチしたら、手に多大なダメージが入つたのだ。

以前の月見からちよくちよく勧誘を受けるようになったので、いい機会と思つて東風谷の勧誘欲を別方向に仕向けようとしたら、文字通り痛い目にあつた。悪気はないのだろうが、常人の事も少しは考えてほしいものである。

しかし、こんな力を収束したモノを食らつた、いまだ名もわからぬ女子よ。

慰めになるかわからないが、触らぬ神に祟りなしという言葉を内心で送っておこう。内心じゃ意味ないじゃん、と言われるかもしれないけど、もうどうでも良くなつたから関わるのは面倒なのだ。

それはそうと。

「東風谷、お前え…少しは加減しろよ。めっちゃ痛い」

「すいません。でも夢月さんも少しは鍛えた方がいいですよ?」

「余計なお世話だ…:…ん?」

僕が涙目で痛がろうとマイペースな東風谷に、一度わからせてやろうと思つては神様方がブレーキになるせいで葛藤していると、いつの間にか隣に銀髪の女子がいて声を出さずに笑っていた。

「うわ、いつからいたの?」

「ふふふ、初めからですけど」

「というかどちらさん?」

なんとなく見覚えがある気はしないでもないのだが、きつと気のせいだろう。

「それでは自己紹介させてもらいますね。」

小中の時からお前いつからいたのと言われ続け、体育の時間にはペアになる人ができずに先生とペアを組み続け、卒業までみんなからさん付けで呼ばれてきた日陰者。

ユナ・ナンシーです」

「ああ、これはご丁寧に。」

僕は現在に至るまで、お前つていつの間にか消えているよなど言われ続け、最近ではなんかでのペアや組もイロモノ固定になっていそうで戦々恐々している不定形魔物もどき。

ユリック・ノーマンです」

この女子、かなりの変わり者だと確信した。

Cクラスのイロモノ枠は彼女で間違いない。

銀髪なので、ワンチャン本名である可能性もないことはない。だが、佐倉のような条件付きの髪だったりするかもしれないし、そもそもこんな特殊な名前を名乗ってくるなら、真相がどうであれ僕のふざけた返しも許されるだろう。

ちなみに僕と彼女が名乗ったのは、アガサ・クリステイの『そして誰もいなくなった』で犯人が使用した男女それぞれの偽名である。こちらでなく、U・N・オーエンなら知っている人も多いだろう。

僕は反射的に返したただけだが、何者とも判らぬ者ネタを織り交ぜて

放ってくるあたり、本名でなければ彼女は何らかのマニアと見た。

彼女のようなマニア系の人種は、一時的とはいえ僕のような普通の凡人では荷が重い相手だが、もう一つの目的のためには初っ端から精神的マウントを取られるのはちとまずい。

だから初対面で偽名&ネガティブな自己紹介をぶちかます相手に、同じように返して凌いだのだが、そう何度までできることじゃない。

もしも次以降があるなら東風谷か一之瀬に徐々に意識の方向を誘導して、丸投げするのが無難な気がする。まあ普通にしていれば、あれだけ派手に動いた東風谷へ興味が移るだろう。

「……………え？　なんて？」

「はあ、東風谷よ。ここは、オーエンかそれに関連する名前を名乗る場面だぞ。しっかりしてくれ」

「そんなのわかりませんよ！　オーエンだかなんだか知りませんが、なんでそんなのを名乗る必要があるんですか!？」

「ノリだが？」

東風谷は知識やノリを理解できないのか常識的な反応をしてしまっていたが、こういうのは同レベルの返しができない時点で負けである。

尤も僕とは違い、もう目的は果たしているのだから、今更東風谷に勝ち負けなど関係ないが。

「だから唐突に変なノリに乗らないでください！」

「いや、僕に言うなよ。僕はそちらのユナ・ナンシーに応えただけなんだから、文句は元凶に……って、本人が笑ってるんじゃないぞ！」

「……………うふふふ、失礼しました。私、本当は椎名ひよりと申します」
「あ、ども。えっと、僕は——」

ともかく、雰囲気的にこの女子はCクラスのリーダーや存在Xではないとは思うが、狙いや布石を見破られる可能性がある。こういう文学少女系マニアタイプのイロモノは、思考力が高い事も多いのだ（偏見）。

というか、やっぱり偽名である。そして、これによりまたもやイロモノ確定である。

彼女が出てこなければ、東風谷が倒した女子を蹴り続ける安全策が使えたのに、こうなつては仕方ない。下手を打つと本命との初対面をマイナススタートにしそうな相手なので、欲をかかず時間稼ぎだけをしているしかないだろう。

しかし、なんとというか印象に反して外側が楚々とした美少女なので、丁寧な言葉を使われて不覚にも反応が迷子になってしまった。

それでなんとか自己紹介しようとしたら、視界の端に動き出した人物が見えた。ようやく周囲が解凍されてきたようだ。

これで本番に移行できるだろう。

「てめえら、人のクラスに漫才しにきたのか？ ひより、お前もいい加減にしろ」

想定外の乱入はあったが、周囲に時間と余裕を与えれば、こうして最初に割って入る奴がほぼ本命だと自ら教えてくれる。

僕はそう考えて時間稼ぎしていたのだから、その甲斐はあったと考
えるべき……なのだろうか？ 改めて相対すると、想定は何倍も怖い
のだが……。

37、利益

「んで、『お前』は何でうちに来やがった？」

「……それは僕のことだよな？ それなら話す前にこちらもお聞きください、Cクラスを動かしてる……と思われる存在X的な奴、つてお前か？」

僕をすっかり見て問いかけられたので、失礼ながら疑問に疑問で返させてもらった。

カチコミに反応した石崎を止める言葉を発したのも、東風谷の行動前に一之瀬が挨拶に行ったのも、今ひよりと呼ばれた女子との会話に割って入ったのも、全てこの男だ。

それらの要素から僕の中ではもうほぼ確定しているのだが、確認は大事である。

「存在X？」

「……まあいい。俺がCクラスの王、龍園翔だ。それにしても、よくもまあ好き勝手やってくれたな」

「……王？」

あれ？ もしかして中二病人か？ なんかちよつと前の演技で知覚した傷口が開いていく錯覚を覚えるんだけども。

でも、そのおかげで恐怖が驚くほど少なくなったから、これが痛し痒しというやつか。

「僕はついてきただけで何もしてないんだが。あつ、僕の名前は左京夢月だ」

「お褒めに預かり光栄至極。学園の不敵な巫女、東風谷早苗です」

「改めまして。椎名ひよりです☆」

「さつき話してたし知ってると思うけど、私は一之瀬帆波だよ。」

「……ところで、なんで椎名さんがこっち側に混じってるの？」

それはそうと名乗られたら名乗り返すのが世の情け。

連れ+αもほんわか空気に変異させようとしているのか、ボケなのかは知らないが、ツツコミ処のある自己紹介を始めていた。

勿論、僕も龍園も華麗にスルーする所存である。

「左京だと？ Bクラスのはぐれメタルがカチコミたあな」

「それ、他クラスにも広まってんの？ 誰が流したんだよ、全く」
目立つこともしてないのに、なんでこんな変なあだ名が各地で広
まってるんだよ。

いかん。一旦深呼吸して落ち着こう。

……ふう。

「それはともかく、だ。僕の用件は一つ。

——龍園、ビジネスパートナーにならないか？」

「ああ？ ビジネスパートナーだと？」

「おう。PPを一緒に稼がないかという話だ。違う言い方では、スカ
ウトしに来たでも可」

会っただけなのでまだ確信には至らないが、僕が考えている事は龍
園が最も成功率が高そうだと勘が告げている。少なくとも次点の会
長や綾小路に頼み込むよりも、僕か東風谷が先頭に立つよりも良い結
果になるはずだ。

更に別の意図もあり、ここで龍園に言葉を畳み掛けることで、最初
の一撃としては充分だ。

初対面の交渉では、口を閉じた方が圧倒的不利な立場になるのだ。
それを利用して、苦手意識的なものを滑り込ませたい。

だから徹底的に喋りまくり、考えさせて口数を減らす。そうするこ
とで問答無用の暴力もある程度抑止できる。

誰だろうと、殴りかかるのと話すことは両立できないのだ。

僕は準備もしてきているが、龍園には不意打ちに等しいだろうか
ら、仮にスペックで負けていたとしても成算は高いはずだ。

龍園には性能の違いが、戦力の決定的差ではないと教えてやろうで
はないか！ なんて、どこぞの赤い人になった気持ちで自己暗示まで
かけた僕に、怖いものなどあんまりない。

「具体的には、まず最初に恋人ガチャを作ろうと考えてる」

「恋人ガチャだあ？」

「先日「彼女・彼氏欲っしい」とぼやいていた生徒達を見たんだが、

そこで確信したんだ。学生にとって、恋愛という状態異常は金：PPになる、と」

「状態異常って……それはあんまりにもあんまりなんじゃ」

ちよつと一之瀬が挟まったが、おためごかしの事だ。口を止めるのはやめた方がいいだろう。

心苦しいが用件が済むまで、なるべくスルーさせてもらうことにした。

「……そこから着想を得て、恋人募集中の奴の捨てアドやいくつかの特典を入れたガチャを作る。爆発的な儲けは期待できないが、継続して収入が見込める可能性が高い」

「……」

「おまけに、こちらにいる東風谷の神社のご利益の一つが恋愛成就・縁結びなんだ。

つまり、絡ませれば将来的に円を運用する場合でも無税にできる手段がある」

「……おい。なんで俺にこの話を持ってきた？」

「待ってください。なんで初対面のこの人なんですか？」

なんか思ったよりも薄い、一応反応は返ってきた。同時に東風谷が釣れたのは想定内なので、簡単な内情と能力適正を説明した方がいいだろう。

ただ、今回は龍園が仕掛けた事と似た威力偵察も兼ねているので、顔見せとお近づきになるのが第一目標である。この説明では詳細も隠し玉も伏せるので全貌は絞れないだろうが、興味くらいは引くことができるはずだ。

その証拠に、龍園は考え込んではいないし、これはそれなりに考慮に値する提案だったということ。

それと計算外だが、ユナ・ナンシー改め椎名と名乗った変わり者女子も面白そうに聞いているので、本格的に交渉する時は後押ししてくれるかもしれない。

「うん、龍園と東風谷の疑問は尤もだ。

だが、まず友達で最も能力の高い四方は、こうした商売の中核に向

いていない。次に綾小路と佐倉は、性格や能力的に無理：というか違う運用の方が適している。となると、仲間内では僕か東風谷しかいないわけだが、僕達には致命的に人望が不足している」

「うっ」
「ああ、ちなみに龍園。今出した名前は、協力してくれそうな面子な？」

神社の事を引き合いに出したから東風谷は顔色を変えたのだろうが、言ったように仲間内には適正の低い者しかいない。

しかし、いないなら探すとか育てるとかすればいいのだ。これだけ早い時期なら、目を付けておいて気長に関係を築いていくこともできるだろう。

それこそアレな企業人が時に口にする矛盾した即戦力さえ求めなければ、龍園には期待できるポテンシャルを感じる。

「そこで龍園だ。彼は行動力と先見性。そして特にこの短期間でクラス単位の集団を率いる統率力を垣間見せた逸材だ。万が一、早めに引き入れられれば、PPを稼ぎつつ、東風谷の神様の信者を増やすチャンスを作る上で……」

「いやいやいやいや！ 話が飛びすぎてますよ！ ホップ、ステップ、ジャンプの3段飛びが、いきなりジャンプから始まった感じですよ！

それにその特徴なら、一之瀬さんでもいいじゃないですか!？」

全く東風谷は何を言ってるんだ。

今回みたいな東風谷による奇襲。

一之瀬をスカウトする場合、計画の成功率が上がる代わりに、こうした限りなく黒に近いグレーな手に制限がかかり、おまけに一之瀬の胃に継続ダメージを与える可能性が高い。わかっているこの学校の現状で、その二つは無視できないデメリットを産むだろう。

それに自分のクラスのリーダーを気遣ってやるくらいの心配りは僕にもできるのだ。

「アホか。一之瀬をスカウトしようものなら、各方面から怒られるだろうが。」

だから一之瀬以上に適正がありそうな奴を、ちよつと前から探して

「ただ」

「それが、俺だと……」

「いきなりこんな事言われても困るとは思ったんだが、東風谷の用があったからついでに僕も会ってみようかと」

「ついで……か」

だが、一応本人がいる前でそのまま言うわけにもいかない。

なので流れを変える意味でも一旦話しを戻して、関係改善の為に準備してきた物品を龍園に渡す事にした。

「——まあでも、とりあえずそっちは置いて、順序が逆になったが僕の用件じゃない方を片付けてしまおう」

当然のことだが、目的を果たすのに必要な小道具は準備している。

ついでに面倒を起こした事への文句（本来は東風谷宛でもある）も付け加えて、僕は龍園の前の机にそれらを並べていった。

「これはよくわからん喧嘩を買った東風谷の分！」

これはちよつかいをかけられていたBクラスの奴等の分!!

そしてこれが何よりも重要な——面倒事に突っ込んだと悟ってしまった僕の分だ!!!

そう言い放って龍園に叩き付けたのは3つ。

内訳は、ホールのショートケーキ、天体観測の招待状、学校の考察と対応を書き込んだメモ帳である。

叩き付けたといっても、勿論ケーキはそつと置いた。ぐちゃつとなったら、嫌がらせと変わらないからな。

「お近づきの印だ。ケーキはよければ皆さんでどうぞ」

「……………なんだこれは？」

「何だといわれても困る。」

僕と東風谷だけではクラス間にまで発展しそうな喧嘩を買うのはリスクが高すぎ、一之瀬含むBクラスの奴らにもおそらくそれは反対される。挙句、抱き込もうとするにはPPが心もとないんだから、一之瀬の方針通りにいっそ表面だけでも仲良くしようって提案だが？」

「ええー！ー！ 夢月さんも殴りこみに来たんじゃないんですか!？」

「ばっか、お前！ 見るからに喧嘩慣れしてそんな奴が多いだろ。特に龍園やあっちにいるSPみたいな黒人と殴り合いとかできるか！ だいたい僕には殴りたい相手なんかいないねーんだよ！ それなら、今こそ一之瀬が言つてた話し合いの時だろ！」

「こいつ……まさかマジで『ついで』程度の理由でカチコンできやがったのか……？」

「東風谷の目的は達成したんだから、もうこっちはさっさと手打ちにしようぜ」

言うまでもないが、後半の言葉は東風谷に向けたものだ。

龍園本人が纏う暴力の気配を軽視できないのは当然として、此方を静かに見つめているデカイ黒人と殴り合いにでもなれば一撃でKOだろう。それどころか、Cクラスにはさつき名前が出た石崎も含めて喧嘩慣れしてそうな者が予想以上に多い。Bクラスと同じ基準で考えるべきではなかった。

そしてそうであるとわかった以上、次善の策は来る前に一之瀬が言っていた話し合いしかない。

様子見とはいえ、ビジネスパートナーの申し出のこともあり、更なる関係悪化と劣勢にならない為なら、出せるものは出してしまった方がいいのだ。

事前準備に抜かりはなかったので、今回はそれができる。

「……………クックック。面白えじゃねえか。甘ちゃんクラスだと思えば、堂々と乗り込んできて喧嘩をかう女に、手土産片手に俺をスカウトしようとする馬鹿か」

「馬鹿とはなんだ。」

一応補足しておくとして、さつき渡したメモ帳には2・3年生の退学者情報やトラブルの対処方針を、生徒会長から聞き出した物がいくつか書いてある。聞いた感じだと伏せてある情報も多いっぽいけど、これで威力偵察もどきの必要性は低下するだろう」

これは佐倉の件で、ストーカーが生徒だった場合の想定をした時に

聞いていた事だ。

学校の情報を集めているなら、なかなかの価値になるのではなからうか？

「ええ!?」 ちよ、それ私も知りたいんだけど!」

「へえ、それに気づいてやがったか。しかもこの様子だと一之瀬にも報告してないみてえじゃねえか。いいのか? 教えてやれば、ご主人様に褒めてもらえんぞ?」

「……会長と関わりがありそうだった一之瀬は、知ってると思ってたんだよ。後で纏めた物をメールで送るから今は勘弁して。」

あと:僕、そういうプレイはちよつと……」

「プ、プ、プレイって!」

半分蚊帳の外だった一之瀬が妙なところで食いついてしまった。そして僕と龍園のなんてことない軽口の応酬を、たくましい妄想力で発展させるという事故も起きたが問題はない。ただ、綾小路に続き一之瀬も純粹型ムツツリだった事が白日の下にさらされただけだ。

一方、僕と龍園は胡乱な視線を一之瀬に向けた後、今日会ったばかりだというのに阿吽の呼吸を思わせるスルースキルで話を続行することになっていた。

「ともかく、これで挑発や嫌がらせ行為をやめてくれると一之瀬への面目も立つから、できれば考えといてくれ」

「できれば?」

「ああ、どうせ裏取りや既に着手してるのもあるだろうし、メモ帳の最初に書いた名前以外の奴以外は好きにすればいい。色々終わったら、以降しばらくは自発的にやめることになるだろうしな」

僕としては、荒事関係に不安が残る四方と佐倉だけはこうしたことから遠ざけたいが、名指しすることで逆に狙われてもまずいので、ここには天文部関係者+ α として東風谷・綾小路・戸塚の3名もデコイ代わりに混ぜておいた。

「ここにはてめえの名前がないが」

「僕なら狙ってもかまわない。そんな事より、これで手打ちにしてくれるんなら、僕的には本題の恋人ガチャについて返事が欲しいんだ

が、どうだ？」

あつ、しまった。自分の名前を入れ忘れてた。

でも、この状況で「やっぱ僕の名前も入れといて」とか言えない。

問題ない……わけないが、今更言っても仕方ないから軽く流して、一応ガチャの事について聞いておく。

丁度よく変える話題があつてよかつた。

「そんな事、か……ハッ、いい度胸じゃねえか。」

——逆に聞くが、NO以外の返答があると思つてんのか？」

「思つてるわけないだろ。今日は用件ついでの顔合わせが目的で、龍園風に言えば威力偵察のお返しみたいなもんだ」

「……ふん」

龍園が考えなしな奴か、暴力オンリーの奴だったらわからなかつたが、少し話せば理解できる知性ある暴力の匂いをさせる奴には、まず力と結果を見せなければ引き入れることはほぼ無理だ。東風谷や僕が見せたものだけでは、まだ龍園には不足だろう。

しかしこの探るような視線。

次に何らかの波風が大きくなった時、あちらから接触してくるかもしれない。それまでは情報や判断材料を集めつつ内を固め、辛抱強く大胆な制圧・反抗の機会を待つタイプ。

龍園という同級生が、僕にはそう見えていた。

「そうか。そうくるか。」

………クツクツク。おい、お前ら！ 俺が命令するまでBクラスへの手出しするな！ 逆らえば制裁を加える！」

故に、このあたりが落とし処だろう。

天文部関係者ではなくBクラスとしたのは、なかなか興味深い返し方だが面白い。

僕も龍園も、ここで全てを明かす事も返答もできない。だから手札を見比べる時間——要は期間限定の不可侵条約のようなものがある方が、お互いに都合がいいということだ。

その後は、龍園と一之瀬の両クラスリーダーが揃っていたこともあつてスムーズに問題解消し、これからのクラスメイトへの説明や種

明かしも手間を省けた。

窮屈だっただろうが東風谷の要望も叶った。

僕もCクラスに一手を置くことが……まあできた。

なににせよ龍園が、最低でも利益すら拒む反抗期のガキではない確認ができたのは収穫だ。

最高なら少し経験を積むだけで、軽々と僕以上の成果を出せるようになるだろう。

やはり、今この時に媚を売れたのは大きかった。

と、ひと段落着いた時だ。

想定内だが面倒な部類の一手が、一之瀬との話を終わらせた龍園から放たれた。

「おい『左京』」

「なんだよ。まだなんかあったか？」

「てめえが俺に付け。そうすれば潰さねえでおいてやる」

「断る。それは面倒にもほどがあるぞ、このドラゴンフライ野郎！」

しかし、流石に小さい火種を投げ入れといて、投げ返されないとは思っていない。

ここで即断即決で断れなければ、一之瀬に不審の種を植え付けられてしまっていたかもしれない。

おそらく失敗するとわかってはいたのだろうが、油断できない奴である。

東風谷は……なんか思い出し笑いみたいな笑顔になってるし、たぶん大丈夫だろうが。

「俺をふざけた名で呼ぶな！　ぶっ殺すぞ」

「うっせえ！　僕が本名に掠りもしないはぐれメタルなんだから、龍園翔がドラゴンフライなのはむしろ自然だろうが！」

「てめっ、無茶苦茶言ってるぞ!？」

「ドラゴンフライが嫌なら、ドラゴンボーイにしてやるよ」

「そこじゃねえよ！」

あえてズラした名前とあだ名の関係性について議論してくるなら、

龍園は言葉の分野では敵ではない。年相応に我儘な部分を見せるくらい熱くなつては、この場をひっくり返せる言葉や策は出せないだろう。

それでも感情を押しさえ込んで冷静になろうとしているのは見て取れるが、経験値が不足している。この隙に、こちらは適当に返しながらかきりのいいところで帰ってしまえばいい。ともかく龍園をある程度理解できた以上、長居して冷静に戻ったり、何らかの策を編み出されるتماずいだけだ。

一度でもこちらの土俵に乗せたなら、そのタイミングを組むのは難しくない。

全ての用件が済んだ今、ここに留まる必要もないし、僕は機を見て東風谷や一之瀬の方を振り返り、帰るよう促した。

そしてそのまま扉の方へ進み出したら、ギリギリ立て直しを間に合わせてきた龍園に再度呼び止められた。

「待ちやがれ」

「ん？」

「夢月さん!!」

呼び止められて振り返った時には、もうかわせない地点まで龍園の拳が迫っていた。そして、東風谷の警告に応える反射神経は僕にはない。

まあでも、龍園がここで本当に殴ってくるようなら、この先が非常に楽になった事だろう。

しかし、やはりというべきか、残念というべきか。助かったというべきか。

それは僕の鼻先で止まり、続いて拳の向こうから脅すような声が聞こえてきた。

「左京夢月——従わねえなら、てめえだけはいつか必ず潰す。それを覚えておけ」

「ハッ、やれるものならやってみろ。僕は逃げも隠れもデフォルトだ。かかってきた奴全員に徒労感を味あわせてやるよ」

「そこは逃げも隠れもしない…のでは？」

「これははぐれメタル……」

「格好悪いです」

「その女子組！ 男の口上にツッコミ入れるんじゃない！」

「……チツ、もうさっさと行きやがれ」

「龍園君……その、ごめんね。色々お邪魔しました」

「ふう、まったく。」

「……んじや龍園、またいつかとか」

しかし直前の流れ的に冗談だと思つて龍園にはなんとなく返していたが、Cクラスの扉を通りながら、改めてふと思う事がある。

——これはもしや本気で闇討ち宣言だったのでは？

それに気づいた事で、僕の内部で暴力的な集団に狙われる未来予想が湧き上がり、恐ろしさで逆に抑えきれない笑いがこみ上げてきてしまった。

「ふっふっふ、ふはははははっ、あーはっはっは！（泣き）」

顔で笑つて心で泣くつてこういう感じなんだと初めて知つた。これが物の本で知る、追い詰められて防衛本能が働いた状態なのだろうか？

……あの野郎、帰り際になんてことしてくれるんだ。新月の晩が怖くなつたらどうする。マジでふざけんよ。次の機会があれば、絶対仕返ししてやる。

はあああああ……。

なんかめっちゃ怖い奴らに目をつけられた気がするんだけど、気のせいだったりしないかなあ。どう考えても、ちよつと話しただけで何もやってないオマケの僕より、殴りこんだ東風谷の方が主役級の暴れっぷりだっただろうに。

そこには、何故か収まらない（泣き）笑いを響かせながら、東風谷と一之瀬が付いてくる確認すら忘れて、恐怖に怯え情けなく撤退する自覚が生まれた僕がいた。

最低限の目的が全て達成できたことだけは救いだろうか。

やんぬるかな。また立つ鳥跡を濁してしまった。

なんでスツキリ去らせてくれないんだ。ホント勘弁してよ。

脅され、高笑いとともに去っていった僕。

この事実を、自分自身で客観視できる機会がかなり後にやってくることを、僕はまだ知らない。

38、 異変

あれは、僕がまだ俺だった頃。

ある仕事でデータベースの作成をしていた時のことだ。

それは、様々な実業家や起業家をひたすらデータ化して打ち込んでいくだけのつまらない仕事だったが、そのあまりのつまらなさにふとどんな起業家が成功する傾向にあるのだろうと、現実逃避気味に疑問を持った。

その時に、暇つぶしにちようどいか程度の理由で簡単にデータを整理して適当に分析してわかったのだが、起業する場合にそのまま本業を続けた起業家は、辞めた起業家よりも失敗確率が3割以上低かったのだ。

これはリスクを嫌い、アイデアの実現可能性に疑問を持っている人が起こした会社の方が存続する可能性が高いということを示している。そして逆に言えば、大胆なギャンブラーが起こす会社の方がずっと脆いのである。

これは、ある分野で危険な行動をしようとするなら、別の分野では慎重に行動することによって全体的なリスクを低減した結果だろう。ある分野で安定感があることで、別の分野では思い切った行動に出る余裕が生まれるのだ。

故にこれを参考に、僕は学業にバイトor仕事を加えたものを本業として生活に組み込むのを第一段階として、趣味嗜好の安定化が第二段階。

そして、例外やハプニングに乗じて起こされた『何か』を発展させるのが第3段階と、これまでさりげなく意識してきた。

こうして順調に段階を踏んでいた時に、降って沸いたのが龍園とCクラスの問題である。

おまけにそこには東風谷の用件と彼女の高いモチベーションという追加要素まであり、冷静なつもりで案外浮き足立って調子に乗っていたのかもしれない。

今は、認めたくないものだな。自分自身の若さゆえの過ちというものは。って感じになっっているが、自分の認識している失敗と恐怖は、赤い人っぽく流そうとしても無理があった。作り物の模倣をしたところで、当然のことながら事実は無理がなかったのだ。

ここに至っては、龍園が本気でないと思ひ込んで、それでいて注意を怠らないようにするしかない。

そう切り替える為、もう多少強引でも一時はつちやけてしまった方が精神衛生上いいだろう。

「いよっしゃー！　なんであれ、祝・目標全達成！　東風谷に一之瀬、ブワアーツと飯に行くぞ！　今日は僕の奢りだあ!!」

「流石夢月さん！　私、お寿司が食べたいです！」

「お寿司ですか。久しぶりですね」

「……あの、いいの？　それに椎名さんもいるよ？　ちゃんと見えてる？」

というわけで、Cクラスからの直帰途中。

笑いの衝動が収まるころには、ヤケクソ気味なハイテンションになった僕が、二日連続の宴会を決行しようとしていた。

はつきりいって1万程度の残金でこれは正気の沙汰ではないが、この時は現実逃避に財と労を惜しまない気分だったのである。

普段の帰宅ルートから微妙に外れた寿司屋にて、2千PPで各人へ適当に握ってくれるよう注文してお茶を一服すると、ようやくテンションも収まってきた。

冷静に現状を確認すると、飛び入りの椎名がいたので少し予算がギリギリだが、大食いな奴はいないっぽいから何とかなるだろう。

「ところで今更なんだが」

「何ですか？」

「これって異変だよな？」

「異変…ですか？」

そうして4人で食べて落ち着いてくると、ちよつとした疑問が頭に浮かんできたので、口に出してみた。

僕が女子3人と食事している状況も異変といえば異変だが、これはどちらかというと面子に関するものである。

「ああ。まず冷静に考えてみたんだが、椎名って変人だよな？」

「そうですね」

「本人を目の前によく言えますね」

「次に一之瀬がベストオブ変人なのは当然として、東風谷も相当だよな？」

「遺憾ながらそうかもしれません」

「待って！　なんか当たり前のように、私がおかしい事になってる！」

酔っ払いは酔っていないと主張する酔っ払い理論からすれば、変人じゃないと主張する奴は変人である。

まあ、そんな理屈を並べ立てるまでもなく、一之瀬が変人であるというの、この場の共通認識といつても過言ではない。よって何か喚んでいる文句は、すべてスルー安定である。

「つまり、この場にいる常識人は僕だけということにな……」

「二それだけはない（です）！」

「当たり前のように声を揃えるなよ。君らは変人であることを自ら証明したいのか？」

「なんでそうなるの!？」

「今までほぼ接点のない3人がいて声が揃うというのは、波長の合う変人が集結したということだろう」

「暴論です！」

変人どもをからかうのはやはり面白い。

3人が取り乱したり声を荒げたりするほど、僕自身の精神が落ち着いていくのを感じる。

人の嫌がることをやりなさいという教えは、自分を取り戻す為の手法として有効なのかもしれない。

しかし、まさか一之瀬を前にして落ち着くことがあるとは、今日まで思ってもみなかった。

「……改めて言い直すが、異常な変人の集い。略して異変に、僕のような普通の常識人がいるという事はおかしいのではなからうか？」

「夢月さん。もしかして、酔っ払ってるんですか？」

ただこれは自身の沈静とからかいの意味もあるが、実は不可思議な事象に僕は自覚なく巻き込まれているのではないか？ という真面目な疑問でもあるというのに、東風谷はあろうことか酔っ払い疑惑を吹っかけてきた。

「失敬な。酔うわけないだろう。目の前にある和歌山の名酒・黒牛だって、年齢とPPを鑑みて我慢してるというのに」

「なんで高校1年生の左京君が、お酒の銘柄を知ってるんでしょうねえ」

「それを言うなら、回らないお寿司屋さんにも結構慣れてそうでした」
「左京君……もしかして」

こいつら、ついには連携までとって、足元を掬いにかかってきた。

やっぱり波長の合う変人組だったのかもしれない。

いや、椎名が潤滑剤代わりになって、東風谷と一之瀬を噛み合わせている可能性もあるか。

そんな新たな疑問はともかく、こういう時の手札は仕入れてある。適正のない僕が使用しても、雑に話を変えられる程度の威力はあるはずだ。

「あつ、これは良くない流れが来てる気がする。こういう時は、一之瀬がきの」

「左京君。ちょっと黙ろうか——ね？」

「アツハイ」

しかし、メスガキの話題で誤魔化そうとした気配を察知されたのか、びっくりするくらい真顔になった一之瀬の迫力に僕は屈してしまった。

何かを察した東風谷と椎名も空気を読んで押し黙った。

これが権力を握った人間の横暴な振る舞いというやつだろう。

それからは寿司に舌鼓を打ちながら、何故か僕が説教を受ける状況へと変化してしまった。しかも、放課後になったあたりから遡ってだ。

よく覚えていられるものだとか内心で考えて聞き流していると、彼

女から注意が飛んでくる。よってこれは、一之瀬が油断できない説教の使い手だという無駄知識が増えただけの出来事である。

ところで、一之瀬という高レベルな美少女からのソレをご褒美に思える猛者よ。

この権利を格安で譲るから、どこかで譲渡手続きできないだろうか？

……などと東風谷と椎名に目で訴えてもみたが無情にも無視された。やはりこういうのは、男子でないと理解できないのかもしれない。

とまあ、そういった冗談は置いておいて、ここからが本題になるだろう。

食事と一之瀬の説教の切れ目を待っていたのか、僕が言い出すまでもなく東風谷が切り込んできた。

「ところで、夢月さんが言っていたガチャのことですが」

「ああ、東風谷とは話しておかないとだな」

ちなみに、これは忘れていたわけではなく、元々集める事ができて鍵を持つ人物には、時機を見てまとめて話そうと考えていただけだ。

どうせ現在は初期投資に必要なポイントがないので、焦っても意味はない。

ただCクラスでフライングしたから、この機会に東風谷にはきちんと説明して、あわよくば仲間に引き入れてしまおうという腹だ。アイディアだけ聞かせて早くやりたいと思えば、ポイントの負担もしてくれるかもしれないからな。

「まず僕の目的だが」

「ちよつと待ってください！ ここには一之瀬さんや椎名さんもいますよっ。」

「それは問題ない。まず一之瀬がこの話で動くとは思えない。それに椎名の方は、いつそ龍園に伝えるとかして出し抜いてくれると、ある意味僕も助かる」

「どういうことですか？」

「それを今から説明する」

実際、一之瀬と椎名はこの話を聞いても聞かなくてもほとんど関係ないだろう。食べ終わったなら、残るのも帰るのも自由である。

もし僕が言ったとおりになってくれたら、儲けはなくなるが面倒も減るので、それはそれでいいのだ。

「それで、えーと、なんだっけ。そう、表の目的は会社の予行演習がメインだ」

「会社の……予行演習？」

「ただ、Cクラスで言った信仰やPPの獲得も嘘じゃない」

神社でお参りすれば恋愛運が上がるといった噂を流したり、恋人ができるかもといった宣伝をすれば、興味を持つ者は一定数いるだろう。それに恋愛関係の状態異常になる・なられることを求めている者、ポイント消費を抑えたい者ならガチャに関わりたくなる確率は高い。

結果として、神社への信仰……まで行かずとも、認知度の向上と多少の利益は得られると思う。

「ポイントの消費を抑えたい者？」

「学食かどっかのカフェあたりと交渉必須だけど、1日1回特定の有料商品を無料にする代わりに、ガチャに入れる捨てアドや顔写真を何枚か提供してもらう。当然、その分の費用は交渉するが、できれば半額以下の負担までを目標にしたいな。女子の客も増えるだろうし、やってやれないわけじゃないと思う」

「出会い系でいうサクラですか」

「まあ、似たようなものだな」

サクラみたいだが、どちらかというとハズレ枠だと個人的には言いたい。

当たりしか入っていないガチャなんて、存在意義が問われるものは作りたくないのだ。

当たりだけのガチャだと極端な話、早い者勝ちで一人が独占して身を公開・転売・出会い系みたいに横入りする奴らが容易に想像できる。

そんなものよりは、まだゲーム性があつて開けた時のワクワク感がある方が僕の好みだ。

「それと東風谷はアプリだと思ってるかもしれないが、今はアナログ形式でぼちぼちやってみようと考えている。」

これは手間や管理の簡略化と、ガチャを回すコインをなるべく1人1〜3回分に制限して、トラブルを起こしそうな奴や真面目系の奴に目を付けられる可能性を少しでも減らすためだ」

大まかにガチャには、アプリを作るか、リアルのがチャ機を用意するかの二通りがある。

アプリだと、PPへの対応システム構築や追加コンテンツを含めたある程度のクオリティを求めたいなら、本職SE並みの技量や初期投資が必要になる。いずれはともかく、今の段階だと避けたほうがいい。

一方、ガチャ機本体は2万程度で販売しているのを知っているし、学食と交渉することで即展開することも可能というお手軽さ。手始めにやるならこちらだろう。

まとめると、まず守矢神社の分社にガチャ機の設置。

学食には、恋人募集&学食で得したい女子向けに、捨てアド記入用紙・BOXを設置。

生徒会と交渉して周知・宣伝のビラを撒く。

表向きこんなところだろう。

ちなみに、ガチャの中身を女子に限定にするのは、下半身に支配された男子の方がより下心を持って、ポイントを落とすだろうという目論見である。

言い換えれば、状態異常：恋愛などという理解不能の病気より、抑えきれない性欲を狙った方がまだ僕に理解できる分野になるからだ。

勿論、そのまま言つて軽蔑されたいわけではないので女子向けにもう少し綺麗に言つと、この閉じた学校の総生徒数450前後という数字と、その中の恋人募集中な女子の数字を考慮すれば、これでカップルが増加するわけじゃなく、宝くじより確率の高い夢を買う感じに近い。という感じで濁したが。

だから、ガチャを回す為のコインは最初1000PPくらいで販売するのが妥当と考えている。

宣伝や反響で多少収支の上下はするが、おそらくこの第一段階では良くてトントンがいいところだろう。

「ぶつちやけたタイトルを付けると、アナログで内輪の出会い系もどきく守矢神社の宣伝も兼ねてく企画かな」

「それだと話の流れから、東風谷さんの神社の宣伝が裏の目的ってことだよな？」

——もしかして東風谷さんの為に今回みたいなことをしたの？」

「ちよ、どう解釈すればそうなる!？」 前の報酬で懐が寒くなったから小銭稼ぎしつつ、東風谷への借りを返し、えーと…問題を解消する事でBクラスでの功績?とか地位も得る一石三鳥のこの行動は、僕自身の為以外に考えられないだろ」

「夢月さん、照れなくていいんですよ? この私の…絶世の美少女の目を惹こうと借りを返してくれたんでしよう。だったら、勧誘に応じてくれるのが一番の」

「ハッ」

「鼻で笑われた!」

何故一之瀬は人聞きの悪いことを、さも真の理由であるかのように言い出したのだろう。僕の反論にも納得した風に頷いているが、本当にわかっていいのか心配になってきた。

さっきの説教といい、彼女は僕に何か思うことでもあるのだろうか? 一之瀬には特段なにかした覚えはないのだが……。

乗った東風谷も、自称の美少女部分是否定しないが、イロモノのくせに僕が惚れてる前提かつ『絶世の』まで付けるとは厚かましい奴である。いつそピーマンとかクソ緑とでも呼んでやろうか——いや、だめだ。そういうえば、こいつ普通は黒髪に見えるんだった。

まあ、東風谷の場合は冗談半分ナルシスト成分半分だろうから、適当に流すのが一番マシだろう。

「動機はどうあれ、恋人ガチャは利益より宣伝重視ということですね」
「それなら、もしここで龍園君が出し抜いたら彼が損をしちゃうって

こと?」

「そこは龍園次第だな。安易に手を出せばただ損するだけだと思う。だけど、このビジネスモデルを上手く発展させることができれば、大儲けもできるかもしれない。僕としては龍園と面識を得るのが目的だったから、そこらへんはどっちでもいいけども。」

……まあ実際会って話した限りの印象だと、椎名が全部話したとしても様子見すると思うけどな」

「私は同じクラスとはいえ、それほど龍園君を知りませんが、今の段階で出し抜こうとする方だとは思いません。どちらかというところ……」

「利益が確定した時に搔つ攫う……じゃね?」

「ふふっ、そうだと思います」

あの暴力的とすらいえる独特の香ばしさを感じる世界観。

間違いない。

龍園翔。

彼は、中二病と高二病のハイブリットだ。

それも様々な可能性を予見させるほどクレーバーなタイプ。

ああいうタイプは、何かに阻まれない限り自分のやり方を重視するから、初対面の僕からの話を素直に受け取らないはず。

知っていれば最初にガツンとやってから、こちらが退く方法をとってたかったが、さっきの逃げ腰を見られてしまったからには、方針を考えねばなるまい。おそらく天体観測の招待状に応じてはくれないだろうし、どこかでもう一度話をするタイミングを作るしかない。

それにしても、ここまでゲロって、あえて伏せた事も一之瀬と椎名に言われてしまったので、この際もう切り札以外は提示してしまう。

「さて、大まかに説明したところで本題だ」

「本題?」

「うん。」

——つらつらと語っておきながら、現在の僕のPPは枯渇寸前なんだ。だから、やるかやらないかは東風谷次第、って事だな。正確には、すぐやるなら東風谷のPPで。一ヶ月くらい待ってもいいなら僕

が出せるようになる。勿論、関わらないのもアリだ」

寿司の支払いがなくても1万程度だったことを考えると、すぐに動く場合に東風谷のPPをあてにしていたことは明白だろう。今回は僕よりも東風谷の方が結果的に得るものが多くなるので、対価を出せば即座に動ける選択肢も用意し、プランの説明をしたのだ。

これをよりわかり易くするためにPP残高を表示させ、東風谷と他3人に見える場所に端末を置く。ちなみに寿司の代金計8千PPは支払い済みである。

残高1231PP。

これが、現在の僕の残金なのだ。ない袖は振れない。

……ん？ 東風谷と他『3人』？

「あらく、6月もまだ3分の2くらい残ってるのに、相変わらずギリギリで生きてるね。左京君は」

「ひゅいっ！ な、なぜ担任がここに……」

いつの間にか輪に混ざっていた担任を認識した途端、ジャーン、ジャーン！ という銅鑼の幻聴が僕の脳内で轟き出していた。

P、東風谷早苗

神様を信じるかと人に問うと、信じられるわけがないと人は答える。

奇跡を起こせると人に話し、実際に起こしてみると、懐疑か排他が返ってくる。

私はそれを繰り返して、徐々に諦めていった。

小学生だった頃——私がまだ希望を多く持っていた頃、空を飛ぶという奇跡を人前で披露したことがある。

当時の私にとっては、少し長めの祝詞と祈りでできるお手軽なパフォーマンスのつもりだった。

だけど返ってきたのは、先生からのお説教と同級生からの排他的感情だった。

『常識』を知り、生身で空を飛ぶ奇跡などありえない、と先生達の中では決まっている。

だから、先生達は飛ぼうとも思わないし、飛んでいる私が何らかのトリックで浮かんでいると——危ない事をしていると考えたのでしょう。

そして先生がお説教した。私が悪いことをした。と解釈した同級生は、私に異質なモノを見る目を向けて避けるようになったというわけだ。

この時は、現代に満ちる常識が私のみならず神奈子様や諏訪子様の存在自体すらも抑止して、窮屈な場所に押しやろうとしているように感じていた。

そしてこの件が後々まで尾を引いた小学生時代は、ほとんど一人で時を過ごすことになった。

だが、そのおかげで神奈子様達との修行に専念でき、知識と力を得ることによって——神奈子様達へ流れる力が少しずつ減じている事に気づけた。それは人々が神様を信仰しなくなったという原因と、

既に存在する事すら危険域にあるという事実も併せて。

神奈子様は私の寿命くらいまでは見守れると言ってくれたが、それはつまりその後消えてしまうことと変わらない。

それに気づいた中学生の私は焦った。

今思えば、その頃の私は信仰を集めようと空回りばかりだった気がする。

お昼に学校の放送室に乱入して宣伝放送したり、登校前に拡声器で「信仰の朝が来ました〜！」と声を張り上げてみたり、メルマガをやってみたり。

当然、信者は集まらず、それがさらに焦りを加速して悪循環へと陥っていた。

そんな中でも、私の美貌を目当てに色気づいた男子だけは寄ってきたが、それが生んだ結果は女子のコミュニティからの完全排除と、その女子達に追従する男子からの攻撃だった。何度か男子ごと返り討ちにしているうちにどちらも来なくなったが、代わりに友達どころか話しかけに来る人もいなくなったので、痛し痒しに感じたものだ。

そうして周りが静かになると冷静に考える時間ができて、私は悟らざるを得なかった。

この世には、私にしか見えない・できないことが存在している。

いくら神様のことを言い立てても、奇跡を見せても。

周りの人からは、見えないナニカに話しかけては信仰を求め、種わからない手品で目立とうとしているようにしか見えならしい。

両親や妹を含む周囲の人たちから注意や心配をされて、見かねた神奈子様に力を制限されて使えなくなった時。

ようやくこの事を悟ることができた。

だが、もう遅かったのだ。

自分にしか見えない神様や自分にしかできない奇跡。

異常といってもいい身体能力に、同世代が苦戦するレベルの理系知識の吸収効率。

少数の例外以外は黒髪に見える私の緑髪。

あげれば次々に私の異質な部分も他にも浮かび上がってくる。

しかもそんな異質な部分に加え、世間一般からはズレていると思われる価値観や常識も問題だった。

苦心の末、価値観や常識を世間に合わせる事は一応できた。

しかし、無理矢理型にはめたことで生じる不自由は、私の想像を超えて苦しかったのだ。

少しでも自分を出せば、騒がれて排除される。

そんなイメージがこびりついて、息苦しかった。

これは思い込みだけではなく、これまでの経験が私にそれを確信させていたのだ。

でもじつと自分を殺し続けていると、心が動かなくなっていく自覚があった。

その為か、日々が退屈で……本当に退屈でつまらない。

かといって下手に動けないので、だんだん私は日課以外で自発的に動くことすら少なくなっていた。

《早苗、一度外の世界を見てきたらどうだい？》

そんなやる気の出なくなった私を見て何を思ったのか、昔より気配が薄くなった気のある諏訪子様が、東京のとある高校のパンプレットを見せながら、珍しく私に行動を勧めてきた。後ろには、心配そうな神奈子様も見える。

どうやら最近の私は、普段マイペースな諏訪子様にも気を使われるほど酷い有様だったらしい。

度々進路について言われるようになり、そろそろ進路を決めないといけない時期ではあったのだが、何もしていなかった事によく気づいた。

とはいえ、地元を離れるつもりはなかった私にその勧めは寝耳に水である。

ただこのままでは腐っていくばかりだとも思っていた事もあり、倦怠感に抗いながらも、前々からの疑問を試すとともに、やる気を搾り出そうとちよつとした賭けを試してみることにした。

人は何故、神様や奇跡は信じられないのだろうか？

普通は目に見えないし、見えない人には存在を証明できないからか？

私には見えるし話せるし感じるそれらを、何をしようと誰も彼もが信じてくれず、頭がおかしい子扱いするのは——何故なんだろう？「神様も奇跡も私には常識みたいなモノなのに」

だから、諏訪子様にも勧められた高度育成高等学校だけじゃなくて、地元の高校にも入学できるようにしておいて、せめて諏訪にいられる残りの時間は、全力で神様や私の異質なナニカに気づいてくれる人を探そう。

見つけたら、これまで通り地元で。

見つけられなかったら、勧め通りに外へ探しに行く。

そんな賭けを試みることにした。

もしもそんな人が見つかったら……現れたら。

今の私にそんな奇跡を起こすことができたなら。

神奈子様も諏訪子様も信仰の減少だって何とかできるはず。

なんとって私は奇跡の風祝なのだから。

しかし、高度育成高等学校入学までの数ヶ月。

結局最後まで、■■■に気づいてくれる人は現れなかった。

その時の賭けが僅かに頭に残っていたのかもしれない。

5月半ば、中間テスト前のお月見前のちよつとした雑談中に、つい夢月さんに聞いていた。

この頃はまだ友達を苗字で呼んでいたと、懐かしく思い返して会話が鮮明に蘇った。

「左京さん。私の髪って……何色ですか？」

「あー？ ド派手な『緑色』だろ？ この学校、珍しい髪色の奴が多いから『ド』が付くほどは目立たないけど……」

「ふふふ……やっぱり夢月さんにはそうなんですネ」

「いや、何がそうなんだよ」

「実はほとんど人には黒髪に見えるらしいですよ」

「えっ!? 東風谷の髪って、他の奴には黒髪に見えるの?」

思い返しても、なんでこんな事を聞いたのか自分でもわからない。でも神様の存在に気づいて——確信していて、前に助けられたとあれだけ真摯に感謝して祈っていた夢月さんなら、そう応えてくれると思っていた。

それだけでも中学時代までの私は救われていたけれど、驚きからすぐに立ち直った夢月さんは、さらに「常識に囚われてたらなにもできないだろう」と言い放った。

勿論、前後の会話から、私に向けてではなくその仙人や自分へ向けた言葉なのはわかっていたが、それでも私が感じていた枷と不自由——と頭のネジを一番多く吹き飛ばしたのは、まぎれもなくこの言葉だった。

左京夢月は、忘れ去れてゆく現人神の末裔たるこの私が最初に認めた人だ。

神奈子様が教えてくれたところによると、奇妙な神様のような怨霊のような動物霊のようなものが憑いているらしいが、基本的には普通の人間が現人神に奇跡を感じさせたのだ。

これは認めるしかないでしょう。諏訪子様の力を故意に垂れ流して作った、人払い兼選別の為に纏っていたものを突き破って接触された時点で一応その力を認めてはい

た。だが、最初はその何物でも受け入れる器と独特の雰囲気を利用するつもりだったのに、いつの間にか逆に取り込まれていたのである。

ある時、絶望していたのも忘れて、友達にされていたと気づいたあの衝撃は忘れられない。

昔の私が願った奇跡が時間差で発動したのかと思ったほどだ。

そして、愛里さん、二三矢さん、桔梗さんと極めて狭かった人間関係を徐々に広げられたのも、彼の存在が大きかったのでしょう。

嘘臭い匂いがしてなんとなく気に食わない綾小路とかいう男子は

ともかく、夢月さんが連れてくる人は基本ハズレがない。

二三矢さんと桔梗さんは慣れるまで少しかかったが、今となっては私にとってなくてはならないツツコミ役と悪友になっている。愛里さんは言わずもがな。

こうした友達と過ごすたびに、ずっと私に纏わり付いていた不自由が、常識が、退屈が、自分で自分にはめた型が。

ただ話したり遊んだりするだけで、だんだんと崩れていった。

というか、この頃になるともう夢月さんを筆頭とした友達に影響されてか、自分を殺すくらいなら、押さえ込もうとしてくる存在を返り討ちにしてやろうという心境になっていた。

おそらくこの心境の変化が、カチコミなどという暴挙に喜びを感じ、圧倒的な力で敵を下して、柄にもなくテンション高くハイタッチを交わす遠因となったのだと思う。

現代社会では、信じられないことなんて起こらない。

私自身には夢のように不思議な事も、奇跡も、きつと起こせない。そう思いながら、退屈でつまらない毎日を過ごしてきた。

だけど——私の想定とは色々ズレていたが、奇跡は起こっていた！

私ではなく、左京夢月というただの人が中心となっただけで、奇跡は起こされていたのだ!!

それも何度も!!!

これに気づいたのが一人の時で本当によかった。

もし誰かと一緒にいる時に気づいていたら、力一杯抱きついていかもしれない。

あれほど制御できない感情の波だ。感極まって泣き喚いて、これ以上更新できない黒歴史になっていた可能性すらある。

その相手が、夢月さんか桔梗さんだったら、卒業まで遊ばれたことだろう。

だって、私ならそうする。

だから、あの二人なら骨までしゃぶり尽くすと確信している。

でも、最近はそんなことすらも楽しい。

愛里さんや二三矢さんは友達として。夢月さんや桔梗さんは方向性の似ている悪友として。

私は今、彼らと一緒に何かをするのが楽しくてしかたない。

そして現在。

口をつぐんでいた私がなんとなく少し昔を思い出している間にも、新たに参戦した担任教師が夢月さん包囲網に加わっていた。

「何故って言われても、私は左京君が一之瀬さんと東風谷さんを引き連れて他のクラスに殴りこんだ、って聞かされたんだよ。それで事情を聞こうと、一之瀬さんのGPSを頼りにここに来たの」

「あ、そうなんですか。お疲れ様です。一之瀬さんはこちらに。」

それじゃ僕はこれで失礼します」

「なに私に丸投げしようとしてるの!? 今度は逃がさないよっ! 星之宮先生からも言っちゃってください!」

夢月さんは、担任の先生が出てきて急速に悪化した現状を把握した瞬間、逃走しようとして一之瀬さんに捕まってしまった。両肩付近を押さえられているので、あれでは逃げ出すのに2ステップは必要でしょう。

あつさり捕まったのは、夢月さんから見て一之瀬さんはほぼノーマークだったので、油断したせいかもしれない。

「それにしても、他所のクラスに乗り込んだ上に、白昼堂々と出会い系を立ち上げるようにするわ、そこで人の勧誘までするわ……。ホントに前代未聞よ〜?」

「はっはっは、何のことでしょう? 恋愛弱者で凡人の僕がそんなことをするわけないでしょう。察するに、なにやら事実が捻じ曲がって伝わってしまったのでは?」

……ところで、あの、一之瀬さん？ そのお、そろそろ離してくれ
ると……ですね」

「離れたら逃げるからダメ！ 左京君は一度しっかりお説教された方
がいいと思うのー！」

「私思うに、今まさに左京君が自供した状況だと思うんですけど」
「ふふっ」

さつきまでの話を近くで聞いていた担任の先生に気づいていれば、
椎名さんの言う通りの状況でしょう。つい笑いが漏れてしまうが気
にもならない。

そう、一之瀬さんを怒らせていた時点で、もう先生は来ていた。

つまり誤魔化すのは手遅れということです。

「うふふ。面白いし、私は左京君の好きにさせてあげたいわ。でも教
師として規則は守らせなきゃダメなのよね。私が許しちゃったら、
他の先生方も納得がいかないからね」

「……なんでつスカ？ 面倒は少しかけるかもですけど、なるべく迷
惑はかからないよう動きますし、先生にとっても得にもなるかもしれ
ないですよ？」

「私は学校組織に勤めてる教師なの。生徒が規則を破ろうとしたら、
最低でも注意はしないとイケないんだよね。組織に属するっての
は、こういう風に自分の意思だけでは動けなくなるってことなのよ。
というわけで。」

——さあ、罰則は勘弁してあげるから、大人しくお説教されなさ
い！」

しかし夢月さんはまだ諦めない。

さつきの龍園？とかいう人じゃないけど、不意打ちだったはずなの
に、いったいあの粘り強さと言葉の数々はどこから湧いてくるものな
のでしょうか？

……それにしても夢月さん、本当にこの二人が苦手なんだなあ。

私も人の事は言えないけど、もうなりふり構わず言葉を搾り出して
いる感がすごい。

「罰則とか説教とか、必要じゃないなら無くてもいいじゃないですか。

担任みたいな胡散臭さと腹黒さが服着て歩いてる美人と正面から話すとか、僕みたいな男にとつては精神をやすりにかけられるようなものなんですよ。なので、どうせなら不問にしてください」

「ええい！ もう年貢の納め時だよ！ いい加減観念しなさい！ 先生と二人が嫌なら私も付いていってあげるから」

「アホか！ 裏があろうがなかろうが、明るい感じの美女・美少女が苦手だっつってんだよ！ これで一之瀬まで来たら罰ゲームEXだろうが！」

「……………私って…胡散臭い？ ……腹黒そう？ ……裏がありそう？」

「あつ！ そ、そんな事…なくもないですけど、私から見ても星之宮先生のお腹は黒っぽい群青って感じだから大丈夫で…すよ」

「一之瀬さんまでそう思ってたんだ……」

あんなに胡散臭いのに、意外と打たれ弱い！

あの先生が、涙目になってショックを受けるとは思わなかった。でも夢月さんって、思ってた事そのまま出すと口撃力があるから、不意を討たれると大人でも結構ダメージありそうかも？

そして、一之瀬さんは根が正直なせいかわれが止めになっていますね。

これは案外本当に返り討ちにして夢月さんが逃げ切るかもしれない、とワクワクしてきた。

……まあ他に気をとられても慌てても離さない夢月さんの両肩に置かれた一之瀬さんの手と、狙いを定めている目の椎名さんがいなければ、ですけど。

「……………初めてこうして向き合ってたけど、予想以上に手強いわね。これは直接向き合わなきゃわからない感覚だわ」

「そうです。僕を手強いと思ってくれたなら、そろそろお開きにしましょう。今のが説教だったってことにすれば、学校にだって」

「いや、貴女方は何と戦ってるんですか？ 左京君のお説教がだんだんズレてきてますよ」

「おまつ、椎名………さん！ さつきからなんでちよいちよい軌道修正

してくれちゃってんの!? 折角ここまで誘導したのに、あとちよつとで……」

「——左京君? あとちよつとで……なにかな?」
「あ」

それにしても無理のある言い訳をしながら、なんとか逃げ出そうと四苦八苦している夢月さんを見ると、自分も原因の一つであるにも関わらず、おかしくて仕方ない。

それに私を通してこの場を見守っている神奈子様や諏訪子様も久方ぶりに明るい雰囲気を出していて、それを感じるだけでも嬉しかった。

ほんの数ヶ月前までの私には、こんな風になるなんて想像できないでしょうね。

ガチャの答えは返せなかったけど、なんとなく急ぐこともない気分だ。

本当に必要なら早いうちに言ってくると思えるくらいには、私は夢月さんを信頼している。

カチコミに付き合ってくれたけど、普段の彼はのんびりするのが好きで勝ち負けにすら結構適当な性格だ。

だが——いざとなれば私の起こせない類の奇跡を起こし、ありえないくらい迅速に動き、不屈の精神で逆転の目を探り、驚異の勝負強さと実行力で『なんとなく』当たりを引き寄せる。

そんな人だと思っている。

担任と一之瀬さんに挟まれながら、怒られて謝罪を繰り返す夢月さんの姿からは、微塵もいざという時の雰囲気は感じられないけれども。

「てめつ、東風谷と……ついでに椎名……さんも、なに笑ってんだよ! これで説教はもう今日二度目なんだぞ! ここは東風谷に任せるから、そろそろ代わってくれ!」

「うふつ、左京君の自業自得ですね。ああ、ついでに言っておきますが、今更私にさん付けは要りませんよ? うふふふ」

「ぶふふふ、すいません無理です。ぶふうー！」

「左京君、まだ話は終わってないよ？ 余所見しないの！」

「美女と美少女に囲まれてモテモテでいいじゃない。ま、私は腹黒が
服着て歩いてるみたいと思われてるけどね？」

「もう勘弁してくださいよ。あれは、そう、つい本音と建前を間違えた
だけで」

「左京君、左京君。それ、フォローじゃないからね？」

「いったあ。また心が傷ついたなあ。というわけで、お説教の追加入
りま〜す！」

まあ、難しいことはいいや。

初対面だけど、笑ってる椎名さんの近くなら私が笑っても目立たな
い。

お説教をしている一之瀬さんや担任の先生も、話しているうちにだ
んだん夢月さんがわかってきたのか、どこか楽し気だ。この分なら、
私の番は回ってこないだろう。

彼がいると大抵は場が荒れるから、見てるだけでも本当に退屈しな
い。

つまらないなんて思う暇もないくらい面白いことが起きる日々。

だから呆れることは多いけど、最近は笑うことも増えた。

そして今日もまた――。

私は東風谷早苗。

学園に住む奇跡の風祝で、いずれ神へと至る可能性を持つ者。

神奈子様も。諏訪子様も。そして私も。

いつかみんなに忘れ去られ、消え去っていく運命にあるのかもしれ
ない。

それでも、この奇跡のような時間を私は絶対に忘れないだろう。

上空に浮かびながら、下で笑いに包まれている早苗とその友人を観察してみる。

諦めきれずおらず、どうにもならなくなっていた早苗に自分を取り戻させ、本来の明るさが徐々に戻りつつあるのは、あの青年を含めた周囲の人間達のおかげだ。

これでもう心配して、しよつちゆう様子を見に来る必要はないだろう。

そして、もう一つ。

《面白い》

あの人の子は、神々を認識し信仰もしている。

しかし決して頼ってはこない。

相手が神であろうとも重要な選択を自分自身以外に委ねることはしない。

簡単なようでいて難しいこれこそが日本古来の信仰の在り方と言えるだろう。

早苗にすらできているとは言い難いそれを、私が知る限り3度、あの青年ははつきりと示した。

それでいて——自分の知る神をも利用する古の将や軍師のような視点を持っていながら——全く違う発想に行き着く稀有な者。

あれが化ければ、手塩にかけた早苗に匹敵するところまで駆け上がるかもしれない。

未だ不安定な自分達だが、その時に立ち会えるかを相方と賭けて、これからの楽しみの一つに加えるのもまた面白そうである。

私は——私達はただ夢想する。

人間でも神と同等の強さを発揮できる勝負。

もしも、そんな夢のような神遊び、つまり祭りがあったなら。

そんなことができる神のセカンドライフを送れる場所があったな

ら。
あの人の子とも、早苗達と一緒に遊んでみたいものだ。

P、 櫛田桔梗

それは夏に近づいている暑さを実感する6月のある日。無駄になるだろう幾度目かのあいつら、糞女と綾小路君への接触をした時のことだった。

「あっ！ 夢月さん、桔梗さんです！ 見つけました！」

「でかした、東風谷！ やっぱり佐倉か綾小路にも協力を仰ぐべきだったかと後悔し始めてたよ」

騒ぎながら唐突に現れたのは、ストレス解消によく利用している早苗と左京君。

早苗はともかく、左京君から私に会いに来るのは珍しい。というか初めてかもしれない。

それに免じて、どうせ無駄になると思っていたこともあり、今回は目の上のたんこぶ女を見逃がしてもいいかという気持ちになった。

「桔梗さん、どうもです」

「今日はDクラスのリーダーとしての櫛田に話があつてきたんだ」

「———その貴方！ 櫛田さんがリーダーというのは誰が言っているの？」

「それでだな、立ち話もなんだし、空いてたら図書資料室とかで話せないか？」

「なんでしたら、奢りますからどこかのカフェでもいいですよ？」

「ちよつと！ 聞いているの!?!」

「……堀北、無駄だ。この二人、全く聞いてないぞ」

私が口を開く前に、胸も器の小さい女には見逃せない発言だったのか口を挟んでいたが、早苗と左京君から完全スルーなのが笑える。

それにしても、私の目の前には綾小路君とついでに高慢女もいるのに、まったく目に入っていないところが彼女達らしい。もうそこそこの付き合いになるが、この二人は何か目的がある時は、気になるモノがないと他に目が向かないという一点で共通している。

「それはいいけど、その前になんでまた私がリーダーだと？ 初耳な

「ただけだ」

「え？ 櫛田以上にリーダーっぽい奴がまだいるの？ 正直、会ったことのある同級生の中ではトップクラスのリーダー気質だと思ってたんだが」

「そうですねえ。悪知恵も色々教えて貰えましたし、押し出しはそれこそ一之瀬さんともタメ張れそうなくらいですもんね」

「ちよつ、早苗、言い方あ！ 悪知恵とか誰かに聞かれたら、私のイメージが崩れるでしょーが！」

この場ならまだいいけど、二人は私の素を隠すものと認識してないから全くもって始末が悪い。

でもそれを知った上で、私をリーダーだと思っていた勘違いは好ましい。

早苗も左京君も嫌うどころか認めて普通に受け入れるから、どうしても私から本気で嫌うことができないのだ。

「それで改めて聞くが、櫛田、今は時間あるか？」

「待つてくださいい！ 綾なんとかと知らない人もいます！ 桔梗さんの友達かもしれません」

「うん？ あ、ホントだ。綾小路じゃん。いつの間に……」

「最初からいたぞ。左京達の目に入ってなかったただけだ」

「綾小路君の知り合いだったの？」

「あ、ああ。オレの友達でさきよ」

「それと櫛田と綾小路の友達か」

「待ちなさい！ 貴方、誰が櫛田さんの友達だと思ったのか言ってみなさい！」

「あんた」

「堀北、お前……。櫛田しか否定しかつたということは、ついにツンデレのデレが解禁されたのか？」

「それは認識違いね。私に友達なんていないわ。必要ないもの。」

——あと、綾小路君は頭沸いているの？ 滝にでも打たれてきなさい」

だから私はこの状況で、どう返そうかと迷って返事が少し遅れた。

その間、憎たらしい女は左京君や綾小路君にいつもの上から目線な態度でいつかも言ったような台詞を吐いていたが、左京君に全く相手にされてない事がわかって内心愉快でたまらない。

私も何度か向けられたからよくわかる。

あれは興味ない時の返し方だ。

左京君からすれば、このビッチ女が私か綾小路君の友達じゃなかったらどうでもいいのだろう。それくらい理解できる付き合いはあると自負している。

一方、私の友達と呼んでいた女の主張を聞いてちよつと考える仕事をした左京君は、何かを思いついた顔で口を開いた。

これまでの興味なさ気な態度からは一変。それは予想と違って気遣いと生暖かさを感じられる口調で、かつ本人ができるだけの優しい気な笑顔である。

それを見て私は、なにか嫌な予感がした。

「んー？ ……ああ！ わかる、わかるよ。友達がいないから、そんな残念な性格になったんだよな。ちよつとせつなくなってきたし、せめて唯一の友人っぽい綾小路には優しくしてやれよ？」

「うわあ、確かにこんな風になっちゃうなんて、せつなすぎる！ あれ？ そうすると、もしかして私達ってお邪魔だったんじゃないですか？」

「——な!？」

「——ぶふうー！ あはつ、あははははは!!!」

「おわあつ！ 吹き出した!? つ、唾がオレの服に！」

まあそれは、この友達いない女と話した結果、残念という評価を下して、一見では優しく、こき下ろす（二人はそのつもりじゃないだろうけど）までのことだったが。

これには久しぶりに啞わせてもらった。

啞った事で人をせつなくさせる女が睨んできたが、そんなことすらおかしさのスパイスにしかならない。勢いあまって思わず綾小路君にご褒美（笑）まであげてしまったが、これくらいの幸せのおすそ分けはいいだろう。

「いやそうは言っても、この時期だし、櫛田の慈善事業かイメージ向上計画がてこずってるだけじゃないか？　なんかわからんが、拗らせすぎて逆にストリートになったこの黒髪の可哀想な子を、長期的接触で治す美談的な感じで」

「なんか人気者を維持するのも大変そうですね。でもそれだと桔梗さんが笑い出した理由がわからないんですけど……」

私が吹き出し、綾小路君が慌てだし、現在笑い者になった女が目つきを鋭くさせているというのに、マイペースに会話のような追撃を続ける二人。喋れば喋るほど、煽ってるんじゃない事には気がついていない。

もはやいつ実力行使に出てもおかしくない暴力女の雰囲気だけは察しているようだが、平常運転なのは見てのとおり。早苗は疑問を持ち始め、左京君は微妙に面倒に思ってるっぽくなってきたが、この二人ならこの後はきつと……。

それにしても。

残念な性格。こんな風。せつなすぎる。黒髪の可哀想な子。

か・わ・い・そ・う・な・子!!

なんとも絶妙な言葉のチョイスだ。

これで嗤うのは我ながら性格終わってると思ってしまうが、それはそれとして吹き出したままの勢いで笑いが止まらなくてお腹が痛苦しい。

「あっ！　ひよっとしてあの人が……」

……夢月さん、とりあえず先に桔梗さんと話しませんか？　このままだと、笑いすぎで話せなくなっちゃいますよ」

「お、おう。なんだかわからないが、そうだな。」

というわけで……えーと、そんな残念少女？　すまんが、自己紹介とアドバイスはまた今度に……」

「左京お！　オレが抑えているうちに早くブレーキを踏め！　これ以上は殺人が起きかねないぞ！」

「貴方からのアドバイスなんて不要よ!!　それより誰が残念少女なのかはつきりと言ってみなさい！　ことと次第によつては」

「誰って、あんた以外いないだろ。」

あと綾小路はなに言ってるんだよ?」

予想どおり、早苗はようやく私が愚痴っていた存在を思い出したのか残念少女（笑）を放置する事にしたようだが、左京君は以前にも私や綾小路君に猛威を振るったその無自覚な舌鋒を弛めない。

彼からすると、名前がわからないから適当な呼び名を付けただけなのだろうが、その名付けのセンスよ。的確にボツチ女を逆撫でしていく言葉選びは、もはや才能だ。

おかげで、私のお腹にも更なるダメージが蓄積している。

「あつはははは！ あはっ、ちよ、ふふ…もう、やめっ…お腹が…ひぎい、痛」

「櫛田は櫛田で、何がツボったんだよ?」

「女の子には、色々あるんですよ」

「堀北、少し落ち着け。左京は悪気があって言ってるわけじゃない…はずだ」

「どいて綾小路君。この男はきつい制裁がお望みのようよ」

「怖いわっ！ ともかく落ち着けて。さつきから、もう人を殺しかねない目になっているぞ!」

「うわあ、物騒だな。残念な上に危険度まで高いのかよ、おつかないな」

「なんですって!?!」

「いいから、左京はしばらく喋るな！ 頼むから!! マジで!!!」

「うつくく、いたっ…あ…いひひ、ひい、ふう…ふうふっ」

「き、桔梗さん、大丈夫ですか?」

僅かな間に私はグロッキーになってしまい、早苗がさすってくれる背中が心地いい。

残念で危険度の高い女は、少しだけその場で左京君を睨みつけて足踏みしていたが、それでも監視カメラを警戒してか「非常に不愉快よ!」と言い捨てるだけで、綾小路君も置いて足音荒く去っていった。ざまあ。

当然、私には非常に愉快でしかないひと時だった。

笑いすぎたお腹は痛かったけど、ここ最近のストレスが全て吹き飛ばすほどスッキリした。

特にあの残念女の負け犬の遠吠えをこんなところで聞けるとは思わなかったから、思いがけず最高に爽快な気分である。

気分はスッキリしたが、笑いすぎてぐったりもしってしまった私を早苗が支えてくれ、とりあえず近場の図書資料室という左京君の隠れ家的なところに案内された。

なんでも図書館や図書室に人が多かったり、雨が降った場合などに、室内活動する時用に借りている場所らしい。

結構な情報通を自認している私も知らない事を利用した上で、予想を外してくるのが左京君だ。その手札を一枚知れたのは良い気分にとさらに拍車をかけるが、そこまでして私と話したい事とはなにか興味もわいてくる。

そして私が落ち着き、興味を抱いたと察したのか、左京君は整理するように話し始めた。

その話は、数日前、早苗の要望で一之瀬さんと一緒にCクラスへ殴りこみしたことから始まり、恋人ガチャという商売をしようとしていることとその中身だった。

ついでに、欲しい人材としてCクラスリーダーの龍園という人のスカウトしたりといったものもあつたが——なにそれ？ この人たち、普段なにやってるの？

素でなにやってるのかわからず、宇宙猫の心地になりながら聞いていると、ようやく私に繋がる話になった。

「そもそも龍園は東風谷の話を聞いた時に有望っぽいとは思ったが、最初から引き入れられるとは考えていなかった。東風谷やCクラスとの問題を知らなければ、名前を知り、顔を合わせる機会すらまだなかったはずだ。

そんな者を僕は計画に組み込もうとは思わない。

さて、ここで一つの疑問があるだろう。そう。

では元々は誰に目をつけていたのか？ という部分だ。その答えあわせをしよう」

「なにをいきなり芝居がかったことやってるんですか？」
「かっこつけたくないんじゃないか？」

「僕が知る限り、同学年で商売系の協力者に最も向いていて、最良の人材は榎田桔梗、その人だ。」

——うむ。東風谷君、綾小路君。人の見せ場に割り込んだ責任は重い。償いに、この後の榎田のスカウトを命じる。決め文句がぐだつたから、成功率は格段に下がったことだろう。あくあ。

というわけで、東風谷は友達としてのアドバンテージで、綾小路はそのイケメンなご面相で籠絡を目指すとよいぞ。励め」

でも最初は知らない流れまで説明されたからわけがわからなかったが、よくよく考えると私のやることは少なく、それでいて利益は多くなるように配慮している。更にいうと早苗の利益は信仰の獲得だろうから、私ともそれほど利害が対立しない。

ふざけてはいるけど、これは早苗や綾小路君が変なことをする前に、さっさと決めてしまったほうがいい話だと直感した。

「いいわよ。毎日とか無給とか無茶言わず、ある程度融通利かせてくれるなら引き受けてあげる」

「え？ ホント？ 引き受けてくれるなら、東風谷が要らないおいしい部分はほとんど回すつもりだったから、それくらいお安い御用だ。ああ、それとリスクについても大体は僕が受け持つから、榎田は好きにやってくれるだけでいい」

「榎田、本当にそんなに軽く引き受けてしまっているのか？ オレに籠絡しろとか目の前で言い放つ男だぞ？」

「うんっ、いいよ！ 嘘は言っていないっぽいし、他のクラスだけど左京君って意外と義理堅いところもあるから、基本的に他人に無関心な綾小路君よりも信用できる！ あと早苗の為にもなるし、PPも稼げて一石何鳥にもなるからね。」

それになにより——ううん、こつちはいいか」

それに入学してから数えても一番集中して一挙一動に注意を払っているけど、私の目に狂いがなければ、左京君は一切嘘をついていない。

私に何をやらせたいのかはまだわからないけど、左京君の性格や思考を考えると、彼の利益はおそらく手早く手に入れられる小銭だけだ。

しかもそれ以外、例えば成功すればその功績は私、失敗すれば責任は左京君が取る、ということも裏では考えていると思う。

本当にメリットはほぼ私、デメリットはほぼ左京君自身、といった感じに。それも逆ではなく、本気で。明らかに釣り合っていない。

この考えはただの直感だけど、不思議と合っている自信がある。

思えば左京君には、最初に会った時から変な『何か』があると感じている。

私のアレを一部始終見ていた第一声が「ども」で、言い争った末に混乱のあまり叫んでしまった私に持て成しだけして放置。しかも初対面でやらかした私の前で後ろを向いて寝る。

これだけでも色々おかしいけど、普通アレを見た後で事も無げに振る舞い、無防備に寝るなんてできるだろうか？

それを観察するだけでほとんど何もせず、結局は一応の弱みを握り合ったということで信用した自分も、今思えば私らしくなかった気がする。

綾小路君のように、いや他の誰でも。

何をされても信用なんかできないから、どんな手を使ってでも、容赦を無くしてでも。

そう思っていたのに、信用させられてしまっていたのだ。

その少し後には、素のまままで仲良くなれてしまった早苗まで紹介されて。

それからの対早苗・対左京君でも、ずっと私らしくなく迷走している自覚があった。

——今の私は、きちんと早苗や左京君……『友達』を利用してきているだろうか？

だから、私はそれを確かめたい。

「それで私は何をすればいいの？」

「櫛田に頼みたいことは、一ヶ月ほどの宣伝と屋台での運営・集客だ。勿論、ガチャ以外の儲けは全て櫛田。この条件でどうだ？」

「その前に、宣伝と集客ってなにやるのよ」

「宣伝はその、桔梗さんの人脈を使って、守矢の分社で恋人ガチャを始めました〜というのと、守矢神社には恋愛成就のご利益がく的な事を触れ回ってくれば充分……なんです。その、夢月さん発案の集客が少しアレで……」

「アレ…ってなにやらせる気？」

「うむ。屋台を出して食べ物売るつもりなのだが、櫛田には1日に1回人前でチョコバナナやりんご飴をなるべくエロく食べてほしい。ああ、ちなみに休みは要望がなければ基本僕がバイトか部活動をやる日だ」

「はあ!? エロくって、あんたなにやらせようとしてんのよ! つつうか、それなら早苗でも佐倉さんでもいいじゃない」

「だめだ。東風谷も佐倉も、容姿はともかくイロモノ感と処女丸出しなのが前面に出すぎていて色気がない。しかも接客・演技力以前に、度胸もしくは他人への耐性が低めだ。まだ長期ならそれでもいいが、短期だと櫛田以上の爆発力はない」

「しよっ! いや、え? この私がイロモノ!？」

「私が処女じゃないとでも言いたいのか!？」

「すごいな左京。それを女子、しかも本人達の前で言うのか」

まただ。

客観的には酷い発言だけど、どれだけ見ても嘘も下心もない左京君の言葉に、自分の中の何かが満たされ、つい笑みが浮かびそうになってしまう。

それを隠すために不服な部分を前面に出して反論してみるが、効果が出ているかいまいち自信がない。

「そうじゃない。二人は前面に出すぎているのが問題なんだ。こういう女子は軽い出会いにおいては敬遠される場合が多いというデータも……ないが、なんとなくそんな気がする」

「ないんかい！」

「要は付き合えそうとかヤレそうに見られるかどうかってことだ。東風谷や佐倉の透かさずとも見える面倒臭さを知り、かつこの環境下で容姿だけを見て手を出そうなんて思う奴は相当の馬鹿だ。そんな奴は多分いないだろうし、万が一いても貰うだけしかできない甲斐性のない奴に違いない」

「……透かさずとも見える面倒臭さ」

「……そういう奴、結構いそうだな」

その証拠に、早苗と綾小路君が口を挟んだ時、こちらをチラッと見て驚いたような顔をしたから、もう限界かも知れない。今日の私は絶対おかしい。

一旦会話を止めてクールダウンしないと、取り返しがつかなくなる予感がした。

だから、私は一つ二つと深呼吸して思考を切り替えていった。

・
・
・
さして。

綾小路君も言っていたが、その相当の馬鹿。

うちのクラスでは心当たりが何人も思い至るんだけど、Bクラスにはそういう奴はいなかったんだろうか？ 流石にうちの3馬鹿レベルはいないと思うが。

とはいえ、左京君の言うこともわかる。

早苗は、私から見ても美人だけど人が近寄る雰囲気じゃないし、彼女なんて欠片も興味がなさそうなのは、軽くでも接すればすぐわかる。彼女の目的は信者集めなのだし、それはアイドルに近いと思うからむしろその方がプラスに働くしね。

佐倉さんは名前だけで実はあんまりどんな娘か覚えてないけど、眼

鏡をかけた胸が大きくて内気なタイプだったと思う。

胸が大きいと危険も大きくなるかもだし、その上にストーリーカーがどうとか早苗が前に言っていた。ストーリーカーの件もあつたばかりの内気な娘には、確かに無理があるだろう。

「実際や内心はどうあれ、その部分に大きく影響する親しみやすさという点で、櫛田に勝る奴を僕は知らない」

「一之瀬さんよりもですか？」

「あのなあ、東風谷。」

あの時は言えなかつたけど、仮に一之瀬に頼んで承諾されたとする。それで櫛田にもそうするけど一之瀬なら当然、僕達に口出しできない重役ポジだよな。そうなると、ある程度の手綱は渡さないとまずいよな。

——そんな状態でまたなんかあつた時、カチコミなり仕返しなりのダーティー寄りな手を、あの聖人といつても通じそうな一之瀬がすんなりとらせてくれると思うか？」

「うっ、ダメですかね、やっぱり」

「あの人、左京にそこまで言われるくらいなのか？」

「正直、僕や東風谷、櫛田あたりのアライメントが悪寄りな奴は、いつか浄化されるんじゃない？ って可能性を考えるレベルで並外れた善人だと思ってる」

「どんだけだよ。っていうか悪寄りの自覚はあつたんだな」

「ともかく、商売やリーダーの資質が高い奴の中でも櫛田は、清濁のバランスが良い上に東風谷含む関係性も良く、押しまで強い有名人。さらには新たなPP入手手段を今、最も高く買ってくれる位置でもある」

「……確かに、考えれば考えるほど桔梗さんが適任に思えてきますね。桔梗さんなら、正面突破以外でも何か助言してくれそうですし」

「これだけの好条件が揃ってるんだ。選べるなら断然、櫛田の一強だろう。一之瀬でも龍園でも及ばない部分のメリットは計り知れない。

だから僕は、この人選が冗談抜きで最良だと思ってるぞ」

さらりと桔梗ちゃん印の謎ポイント百点満点の発言が飛び出たが、

切り替えた成果が出たのか、不敵な笑みを意識しつつ、唇をかみ締め
て零れそうなニヤニヤ笑いを何とかこらえることができた。

そんな笑顔で話を聞いていた健気な私を見た左京君は――。

「うっわ、きつしよ！　なんだ櫛田、その邪悪な笑顔は？　思わず自分
の体を抱きしめたくなったわ」

「……夢月さん。それはないですよ」

「ないわー。これは流石にオレでもわかるぞ。左京、マジでないわー」
――この男、本当にどうしてくれよう。

笑いの衝動は、上げるだけ上げられた末に、唐突に下げられて一気
に冷めた。

今はもう確かめるとかどうでもいいから、ただ左京君を一発ぶん殴
りたい。

39、悪辣

個人的に注目している歴史に、インパール作戦というものがある。日本では愚かとか無謀とか判断ミスだとかの散々な評価だが、英国では高い評価になっている戦だ。

ぶつちやけて簡単に説明すると、後世の日本視点だと無謀な作戦と無様に負けた部分だけで評価されているからこそその酷評だろう。

一方、英軍視点では日本軍の勝利寸前でなぜか日本側が撤退していった夢でも見ているのか？ といった不可思議な結末の戦なのだが、そこら辺は関係ないので割愛しよう。

ともかくこのインパール作戦は、戦略など広い視界で見ると、戦術や結果など狭い視点で見ると評価が激変する、と言いたいだけだ。

さて、この作戦で僕が感銘を受けた部分なのだが、日本が戦自体は負けてもいいからとインド兵を最後尾に配置した点だ。

つまりインド兵を前線に出さないことで「日本は本気で西欧の植民地を独立させようとしている」「植民地兵を矢面には立てない」と周辺国へのアピールしていたのである。

モンゴル帝国でも、大英帝国でも、多くの近代国家でも。前線に出されるのはまず植民地等の異民族の部隊だった事を考えると、これは他と一線を画す戦略だと思う。後に米軍も、このやり方を部分的に採用して徴兵をやめた点も見逃せない。

残念な事に、一般には負け戦や悲惨さだけに注目が集まっているが、もしもこの戦略通りに当時のインドで独立運動が始まっていたら、イギリスという国は消えていた。という論文を前の人生で読んだことがある。

戦自体もさることながら、東のスターリングラードと呼ばれるのは伊達ではないのだ。

こうした『負けて勝つ』戦略は、戦史を見る限り日本のお家芸といつてもいいのだが、僕は一学生でこれがどこまで応用可能かの実験を目論んでいた。

それで肝心の何のためかという理由についてだが――。

時代や場所のズレはまだいい。
だが、四方の苦手分野をピンポイントで狙い打つ、騙まし討ち上等な校風。

CPを含めた敵味方の蹴落とし合いを誘発するかのようなシステム。

東風谷や綾小路など、どこかで物語に登場しそうなイレギュラーっぽい異才・天才のような存在。

次々に起こる問題やトラブル。

仙人や神様といったよくわからないが存在するナニカに、それらに伴ってなのか僕自身の転生などの起きている不思議な現象。

これらの要素は僕に、本当にキャットルーキーの世界にいるのか？という疑惑を再燃させるには充分だったのだ。

何故ならキャットルーキーでの四方の高校時代が、これほどの特殊性を持つ学校だったとはどうしても思えない。今の僕は、何もしなければ四方がプロ入りどころか野球を始めるかすら怪しく思えている。

だからおそらく四方の最初のターニングポイント、体育祭などで野球部の奴から四方が「足の速さ」に目をつけられ野球部に入部する、という最低限の布石の準備だけはしておきたい。

その布石の為の手札と選択肢を増やす一環として、東風谷とその神様達、綾小路というイレギュラーは勿論、佐倉や櫛田含む友達には、僕に付けば美味しい思いができるのかなとか思わせておきたいのだ。

この友達連中については、僕の普通の外見や低い対人能力を考えても好かれているとは思わない（特に思考のわからない女子連中）が、それぞれ一定の利用価値と友好の感情は感じてくれていると信じたい。

最低限、頼った時に交渉できるならそれで充分ではあるが、僕が感じていいる友情の半分程度はあろうかと思つて接したほうが日々が楽しいからだ。

だからというわけでもないが、友達との交渉などの際、僕に利益がなくても想定と違っていても、目的達成に繋がるならかまわない精神で、全力で恩を売ることに決めていた。

それはまさにインパール作戦の戦略のように、負けて勝つことで少しでも友好度を上げることに願をかけてだ。

以前に何かで綾小路や一之瀬から行動理由を聞かれた時に、「自分の為以外の何物でもない」と返したのはまさにこのことだったというわけだ。実に利己的だろう。

だが、それをしたいくらいに、僕はキャットルーキーという物語が今でも好きなのだ。

頭が良い四方や綾小路に櫛田……いや他の奴らにも。きっと僕の行動原理は不可解に思われているだろう。

しかし、少なくともこれから体育祭前後までの数ヶ月だけは、望む未来の為に思いつく手は全て打ち尽くすつもりだ。

なので、もう諦めて僕の船に強制乗船していてくれ。悪いようにはしないから。

と、内心言い訳がましくしても止めない程度には見たい未来があるのだ。それは面倒事に自分から飛び込んででも、実現させたいくらいに……。

Cクラスに訪問した時からしばらく。

僕はそれなりに忙しく過ごしていた。

ただ一之瀬や担任にはあれ以来なにやら目をつけられたのか、なにかと説教やら雑用手伝いやらをやらされ、逃げると一度だけだが会長を召喚してくる禁じ手まで行使された。無駄に手回しの良いことがある。

おかげで放課後以外は逃げ回る日々になっていた。

当然、そんな中でもガチャ機本体やカプセルの仕入れや守矢の分社の下見等々、それ以外にもやることはいくらかもある。なので、四方と佐倉、時々暇そうな綾小路に裏方を頼み込んでこなすことで、何とか達成条件をクリアしていったのは、むしろ当たり前の対策である。

う。

そして何よりも重要なことは、成功の鍵になり得る者をスカウトすることだった。

それは瓢箪から駒的に発見した龍園ではなく、僕には元々目星をつけていた人物がいたのだ。

ただ僕自身は何度か愚痴を聞いただけでできほど親しくない相手だったので、ここでは東風谷を頼った。綾小路か佐倉でもコンタクトは取れたかもしれないが、下の名前を呼び合うほど親しい東風谷が適任だったのだろう。

もったいぶる意味もないので明かすが、その人物は櫛田桔梗という。

結果から言えば、最後こそ出荷直前の豚を見るような目で見られたが、全体的には色よい返事をもらえた。

これはおそらく東風谷の影響が大きかったに違いない。

なんせ櫛田には探して会いに行ったのだが、間が悪かったのか櫛田と一緒にいた女子がなんか怒って帰ってしまったのだ。

実は僕はその時、交渉失敗を覚悟していた。

あの可哀想な娘が綾小路に一番心を許していると理解できた瞬間に、一步引いてアドバイスを送ったのだが、どうも行き違いが起こって怒らせたのである。

それからは東風谷に倣って、なるべく場が落ち着くまで見ないようにして口数を減らしたのだが、食い下がられて口を出すたびにヒートアップさせるという悪循環。

櫛田は笑っていたが、交渉前に彼女の慈善事業をぶち壊したかも？と、正直諦めムードだった。

それが何とか持ち直したのは……意味不明に笑いすぎてふらついていたのを、東風谷に回収してもらってからだ。なんとそれだけで櫛田の機嫌が良くなったのは奇跡だろう。

それからはとんとん拍子に話がまとまったから、東風谷がいなければこう上手く事は運ばなかった可能性が高い。

ただ東風谷との友好度だけで帳消しにして、引き受けてくれたと考

えるには腑に落ちない部分が多すぎるので、何らかの不測の事態も起きていたのかもしれない。

歩けないほど笑いまくったせいで脳に酸素が足りてなかった可能性や、一番近くにいた東風谷や交渉の場に着いてきた綾小路がなにか見えない援護をしてくれた等々。

櫛田が笑った原因や、綾小路が疲れた雰囲気醸していた事など、他にも僕にはわからない事だらけでもうお手上げだった。

あれら一連の出来事は未だに原因不明ながら、このように考えてしまふ程の失敗だろう。

ただまあ、改めて色々考えても真相に迫れそうになかったので、綾小路に丸投げするつもりで思考停止したのだ。彼ならあの娘の友達っぽかったし、やってくれるに違いない。

それに比較的簡単に櫛田を引き入れられたのは圧倒的僥倖である。これ以上、わからないことで藪を突いて蛇を出すつもりはないので、シンプルに東風谷のおかげだと片付けて、僕は忘れることにしたのだ。

そんな経緯であったが、櫛田が引き受けてくれてからは恐ろしい速度で事態が進んだ。

打ち合わせで詳細を詰めていき、具体的なビジネスプランにするとともに、恋人ガチャに入れる恋人募集の紙、恋募札を記入してもらう場所について、まずはつきりと狙いを絞った。

学食ではなく、4月に戸塚お勧めということでも行っただお洒落なカフェ、パレット。

ここ一本である。

今では女子の人気スポットになっているらしいので、ここが適所だと櫛田は推していた。

すでに挙げたとおり場所の情報は櫛田提供だが、宣伝も生徒会や教師に頼らない生徒間のネットワークと口コミをメインとし、ポイントのないと思われる1年生は端から諦めて、2・3年生に狙いを定めていた元々のプランも相性がよかったのだろう。

その他いくつかの変更点を現実に落とし込む為の会議でも、櫛田と四方によって整える事ができたのは良い誤算である。僕だけで立案・実行していたら、穴だらけになるところだ。

本当にスカウトできて良かった。

また櫛田の功績はこれだけではない。

パレットで独自のポイントカードを発行してもらい、恋慕札1枚書くごとに1ポイント、10ポイントで500PPの割引券と交換というアイデアの提案も、店側にスムーズに受け入れられたことだ。

これは櫛田と一緒に交渉に行ったら、これなら宣伝効果と来客アツプを見込める企画ということで、月2万という格安価格で請け負ってくれた。それは櫛田の猫かぶり……愛想良い交渉スタイルに、パレットの交渉相手が絆されたようにすら見える手腕だった。

それとガチャの設置場所だが、東風谷が守矢の分社を作った小さめの神社には、神主や巫女などの管理人がいなかったため、これ幸いと坂柳理事長にコンタクトをとって東風谷が仮の巫女をできるように手配すれば、あとは思うがままだ。

程無く神社の隅にガチャを設置することができた。

基本巫女に資格は必要ないというのもあるかも知だが、苦笑しながら許可を出してくれた理事長にも感謝である。

学校からの許可を得た僕達は、次に東風谷と相談の上で参拝客を迎える準備にかかる。

神社は最初、電子マネーが支払い手段の街な為か、ガランガラン鳴る鈴や賽銭箱、手水場もない、鳥居と社（と分社）、それに小さな池だけの神社だった。

だが、それらが無い神社は流石に寂しくまた人も来ないと思い、青娥さんの伝で手に入れてもらって色々配備した。そして入れる賽銭がなければただの箱でしかないの、5円玉と10円玉も何本か仕入れて絵馬やお守りとセットで販売することに。

ついでに青娥さんや会社関係のビジネスも展開して円を確保できたのは僕にとっても一石二鳥で、学校や神社でのポイント稼ぎにも影

響しないように調整してもらった。

ちなみに、境内で販売する絵馬やお守りは東風谷がどこから調達してきて、費用も東風谷持ちとすることにした。というか、「設備はともかく、小物は任せてください」と申し出られた。

ガチャ機本体も当初は当然1台だったのだが、運営を始めて1週間で過ぎるころには、1台2台と増設できるくらいには繁盛をしている。

きつとそれだけ恋人を欲していた男が多かったのだろう。

ああ、そうそう。

櫛田にやらせようと言ったエロく食べさせるパフォーマンス屋台だが、場所・仕入れ・申請の煩雑さ・雰囲気壊れる、などの理由により櫛田・東風谷の両名から無事却下された。本当に採用されていたら問題だったので、特に東風谷から却下されてホツとしている。

あれはそれらしい理由を作って櫛田を引き入れやすくしつつ、佐倉を人前に出さなくてもよくする理由作りの一環なので、公序良俗に反してまでどこかからの攻撃材料を作るつもりはなかったのだ。

あとこれは余談なのだが、本格オープン前日に暇な友達何人かで参拝して、みんなで賽銭や絵馬のお試しをしたら、そこで事件？が頻発した。

東風谷は何故か無駄にうろついた挙句に佐倉に抱きついて固まって動かなくなるわ、櫛田はいきなり高笑いを始めて四方と佐倉と偶々来ていた椎名に凝視されてるわ、そのせいか佐倉や綾小路まで挙動がおかしくなるわで大変だった。

それも普通の常識人たる僕と四方がいなければ、事態収拾ができたか怪しいレベルでだ。

こいつらには勿論感謝しているけど、唐突な奇行を集団で起こすのはやめていただきたいものである。

どうでもいいが、通りすがりの変人である椎名と、もう佐倉と同じ準天文部員だと勝手に思ってる綾小路は、笑ったり見ているだけで役に立たなかった。

そしてオープンから16日後、6月29日の土曜日。

この頃になると、ガチャや櫛田の宣伝の成果もあつてか、神社にはカップルが多く来るようになっていた。ほとんど2・3年生だが、カップルで参拝してお賽銭を入れたり、絵馬を書いたり、まるでデートスポットの様相だ。

「うおおお！ またハズレたあああ！」

「量産型、量産型、量産型、量産型、量産型、量産型、量産型」

「可愛い子、きてください！ 神様仏様可愛い子様お願いしますすううう!!!」

……隅に並べてあるガチャを、悲壮な顔と声で回しまくっている哀れな男達を見ない振りすれば、だけでも。

そんな中、東風谷と櫛田は来客対応をしたり、掃除やガチャの補充、絶望状態に陥っている男達を洗脳……もとい慰め気味に励ましたりと、八面六臂の大活躍である。

「先輩っ♡ 残念でしたね。でも先輩かつこいいし、次がありますよ！」

「……すみません。当たりを出せばいいんですけど、私達にも入れた後は操作できなくて……」

主に櫛田の本気で惚れられないように甘言を弄する特殊技能が、この神社では猛威を振るっていた。

甘言とは、心折れた時こそ最大限の効果を発揮するので、この役を櫛田中心に回すのは繁盛の必須条件といってもいい。むしろ、ここでお互いポイントと評判を得て、東風谷への見本的な形にできる点が、櫛田を最良の人材としてスカウトした最大の理由だ。

そして僕は販売業務をしつつ、東風谷さん、櫛田さん。一思いに、信仰とポイントを落とすりピーターへと変貌させてあげなさい。とか某宇宙の帝王みたいな事を思いながら、その極悪コンボを眺めているだけである。

個人的には、櫛田の上目遣いを含んだ演技と怒らせない程度の微妙

に無神経な発言が絶妙に惚れないバランスで、しかも男が他から孤立したタイムリングを見逃さない計算高さが空恐ろしいと思う。

しかし、流石に人の中に潜り込む手腕に定評がある櫛田。

予想通り一番人気は間違いなく彼女だった。

東風谷はまだぎこちないが櫛田からその技術を教えてもらった盗んだりすれば、実家や神様達の事を抜いても役立つはずだ。少なくとも容姿はお墨付きなのだし、これからは普通に信仰を増やせるように工夫すれば目的も達成できるだろう。

販売には今日は、ガチャコインを僕が、絵馬を四方が、お守りやおみくじは顔を髪で隠し気味な佐倉が担当している。賽銭はコイン以外を買うことで5円玉・10円玉の4枚セットが付いてくる仕組みだ。

販売は一応一人でも可能なのだが、折角広めなスペースでもあるし、裏方だけじゃなくてこっちもやってみたいと言われたら断る理由はない。

コイン以外でこちらに来るのは大抵カップルで、防犯用の監視カメラも設置してあるから、今までに問題は起こっていない。

ただコインは基本男子相手なので、僕か四方、綾小路が売り手をするようになっているだけだ。

それとここには極稀に会長・橘書記の生徒会組や鬼龍院先輩が、レア枠で葛城達や椎名が協力してくれる時もあり、友達連中+αなども来た事があるので、運次第で珍しい遭遇ができるかと妙な評判も立ち始めているようだ。

SRの会長達と鬼龍院先輩は一度ずつしか来ていないが、人気者なのかやたらと上級生の来客に驚かされていたのが印象的だった。

尤も、会長や橘書記は協力しに来たんじゃなくて、お客だったチャラそうな2年の副会長とやらのけん制?に来たらしい。

なので、すぐにその先輩と連れを引っ張って帰ってしまったが、珍しく説教をしてこなかったので助かった。その為、あのチャラ男先輩と彼女さん?には影ながら感謝していたりする。

また肝心の収支だが、これは成功といってもいいだろう。

半月ほどで、すべてひつくるめた売上は40万近くに上り、パレットとの提携費用やガチャ機本体、監視カメラなどの経費を差っぴいても、純利益は20万を超える。

残り2週間ほどがあれば、売上50万は確実に超えるだろう。

主要人物がB・Dクラスともに3人ずつなので分け前の計算も楽だし、これならDクラスの3人に多めに分配したりもできる。

先生や生徒会から度々注意や監視染みた視察がなかったら、1ヶ月ならずとももつと続けたかったが、こうしたアングラ系の商売を規制する校則を各方面から要請された結果、来月の中ごろには規則違反になってしまうのだ。

まあ、元々それほど長くはできないとは思っていたし、バイトがある僕と佐倉は予定の調整が大変だったので、続けられたとしても誰かに任せることになっただろうが……。

ともあれ、社社の本業だけはそのまま東風谷が引き継げるように理事長や会長と交渉したし、恋愛成就の評判は定着しつつあるので、しばらくは廃れる事もないはずだ。

東風谷の反応も悪くはなさそうだし、だいぶ回り道したがこれなら神様達への恩返しは、それなりにできたと考えてよさそうである。

ところで関係ないが。

僕は東風谷や櫛田とは別口で、ガチャというビジネスを目的の為に利用していた。

実はこっそり桜プロダクション名義で佐倉、いや雫の広告を作つて外の企業に恋人ガチャのビジネスモデルを売りつけ、他のアイドル業やプロデュース料の収入同様に、青娥さんに円で預金してもらうように頼んでおいたのだ。

最初は、この預金から僕や佐倉のバイト代支払いの足しにしてもらう程度だったが、雫の人気があつたせいかな今では予想以上の収入源となつている。

それにビジネスモデルも思っていたよりも高く売れたらしいし、それだけ青娥さんの手腕かコネ、もしくは雫というアイドルは価値が高かつたのだろう。

おかげで万が一の時に切れる札が一枚、どうにか使い物になる最低レベルに達した。

初対面時に会長から説教を受けた際、ポイントの動きが学校に即座にバレると知つた以上(当時は匂わされただけだが)、このように別方面の力を考えておくのは凡人として当然の対策だと思う。

この初動なら、たとえば似たようなことをしている天才や秀才がいたとしても、僕が凡人であっても、そう遅れ取らないはずだ。

しかし遅れを取らないのは一回だけなので、この他にも経験や知識で想定できる問題の対処法・回避法は、これから何通りも準備していくつもりだ。

そしてその中には当然のように、卑怯・卑劣といえる用意もある。

これらは誰かに指摘、もしくは気づかれるまでも人には言えないが、もし知られたら……そうなったとしても、できるだけ友達に嘘はつきたくない。

嘘を貫く行為は僕には高難度過ぎるのだ。

なら最初から極力しないほうがいい。

だから僕は、嫌われる可能性が高くても、きつと気づいて聞いてきた『ソイツ』には答えてしまふだろう。

なんとなく何人かの候補を頭に浮かべてみると、僕はそうする予感がある。

ただまあ嫌われる覚悟の上で止まらずに実行して、話しぶりから

色々気づいているっぽい鬼龍院先輩や青娥さんと笑い合えてしまうあたり、僕は自分で思うよりも悪辣なのかもしれない。

40、友達

6月の末日は僕がバイトに入る日なので、ガチャはお休みだ。

佐倉はシフトに入っておらず、青娥さんもやる事ができたと外出していったので、久しぶりに昼からずっと一人でゆっくりできた。

ここは、客が来ない上に僕にとってフェイバリットな物に溢れた最高の喫茶『室』である。

一応これから、佐倉：というか雫の画像・動画を編集や加工したりチェックしたりもするが、掃除と在庫チェックで本日しなければならぬ業務は終わりだ。

ちなみに、佐倉とは基本的に一日シフトをズラしているだけなので、明日は二人、明後日は佐倉だけ、明々後日はどちらも休み。といったローテーションになる。

ただ月13日さえ守れば日を空けるスケジュールも大丈夫だし、今日のように青娥さんが不在になるなどの理由で昼前〜夜の2日分になったり、佐倉の撮影条件次第（朝や昼の写真を撮る為）で日時の変更・延長もできたりと、結構自由な感じになっていた。

「あ〜〜。終わった〜」

《夢月〜、青娥に言われた分はもう終わったのか〜?》

「終わったぞ〜。これからお茶飲んで一休みしたらPC作業あるけど、とりあえず終わった〜」

《お〜、じゃあ青娥からの伝言だ〜。棚の羊羹食べていいらしいぞ〜。いるか〜?》

「いるいるう。あんたもいるか〜? お茶も淹れるぞ〜」

《私は〜、ここから出られないから〜、いつものように気にするな〜》

「りよーかいだ。伝言サンクスな〜」

在庫チェックしていると偶に声をかけてくる顔も名前も知らない通称『冷蔵庫の人』。

冷静に考えるまでもなくおかしいのはわかっているが、僕や青娥さ

んの名前を知っているし、害もないので普通に話す仲になっていた。青娥さんが不在の時しか話しかけてこないところを見ると、真に留守を任されているのはこの冷蔵庫の人っぽい。

こういう時、ここは本当に世間一般の常識を投げ捨てているとつくづく思う。

お茶と羊羹で一服して平穩を満喫した後は、ガチャビジネスの畳み方を自分の整理の為に文書化しながら、東風谷が困らないように事後処理マニュアルを作った。

勿論、こちらは副業みたいなものなので佐倉関係の作業が優先なのだが、友達のアイドル顔を画面越しに見続けていると飽きる。なので区切りがいいところで、始めた商売の畳み方に浮気するのは仕方ないことなのだ。

ガチャはほんの少しもったいない気もしているが、規則のこともあり、ここが引き際だと思う。先生や生徒会が出張りだしている今、欲をかくべきではない。

それにもう元々僕の目的である小銭は、充分すぎるほど手に入ったし、ついでにへそくりもできた。

ポイント支給日も明日だし、Bクラス組とバイトやアイドルをしている佐倉には必要ないので、これ以上無理に稼ぐこともないだろう。

それと忘れてはならないのが、稼いだPPの分配だ。

これは話し合って、功績が高くポイントの使い道が多い櫛田に一番多く6万を。ポイントの入手経路が少ない綾小路に二番目に多く4万7千を配分している。ちなみに僕を含めた他4人は4万ずつで、綾小路の額は端数分である。

とはいえ、これはその日ごとに割り出した純利益から次の日に分配している総計なので、ポイントが枯渇寸前だった僕はそこそこ使って今では2万数千程度に目減りしていた。

それに本当は櫛田と綾小路には、他にも承諾を得た上であと2万ずつ乗せるつもりだったのだが、怪しまれたのか初日に現在の配分を主張・決定された。なので櫛田と綾小路の取り分は、こつそり四方に協

力してもらって貯金してある。

これは思い切って経費として使うか、残ったらガチャ期間終了後にまとめて二人に送りつけるつもりだ。

僕自身のポイントは、明日になれば久しぶりに10万近くになるので、ぶつちやけそれで必要充分である。余りは欲しいだろう奴に渡したほうが有意義だろう。

CPも中間テストの結果が反映されていたのか、確認したらいつの間にか753CPとなっており、3万のクラス貯金を抜いても大分余裕が戻り、バイトの給料も10日後くらいに入る。しかも残ったガチャの運用期間もまだそれなりにある。

基本、中2日で行っていたこれまでから逆算して、単純にガチャ開催はあと5〜6回。

これだけあれば急に失速しない前提だが、持ち金は20万ポイントを超えるに違いない。

そうだったら、お祝いに最高に気分の良い夏の星見へ行こう。

最近はくそ暑くなっているし、今度は南の池なんて涼しげで楽しそうである。

ああ、自分で始めたとはいえ、この仕事の多い期間が終わるのが待ち遠しくてしかたない。

そんな感じに「僕」の6月末は、バイトしながら極めて平穩に過ぎていった。

「みんな、ごめんね。ちよつとトラブルがあつて1年生のポイント支払いが遅れてるけど、解消次第支給されるから心配しないでね」

7月1日の朝。

担任が何故かこちらの方をチラチラ見ながら、ポイント支給の遅れやCPの変動について説明していた。

そういうところだぞ、担任。

意味ありげに何度もこちらを見るものだから、四方をはじめクラス中に「左京が何かやったか？」みたいな雰囲気漂いだした。

後ろから二番目の席だから注目こそされてないが、注意のベクトルが僕に向かつて流れ出した事くらいはわかるのだ。

全く、事実無根の言いがかりで人畜無害・地味ポジの僕にヘイトを向けなくてほしいものである。そんなだから、腹黒だの胡散臭いだのと言われるのだと声を大にして言いたい。また説教を食らうかもしれないから言わないけど。

それに四方や柴田も、少しは東風谷を見習うべきだ。

特に柴田は、振り返ってまで遠くの僕を見るんじゃない。

代わりに東風谷を見ろ。

その東風谷は、担任がこちら方面に向ける視線に動揺を隠せていない。

いつになく緑頭がフラツフラしてる。

まるで自分が原因だと思っているかのような仕草だ。

逆に言えば、僕が原因だとは頭の片隅にもないだろう。

友達とはかくあるべしである。

ともかく、ガチャで稼いだからポイントがすぐ支給されなくても僕に問題はない。

クラスメイト達も浪費家は一度痛い目を見ているし、まだ余裕があるだろう。

となれば、一応確認しておくべきは変動したCPだ。

あまり重視していないが、もしも他のクラスとのCP順位が変わっていたら、折角慣れてきた『B』の自己紹介ともお別れになる。ころころ変わってもらおうようでは座りが悪いので、しばらくはこのままでいたいものだ。

さて、そのCPはといえば。

A 1044

B 763

C 526

D 90

これだけくつきり分かれていけば、いきなりクラスが入れ替わることはないだろう。

ただ担任の背後に張り出された紙を見てそう安堵しつつも、これから本格的な何かがある予感がする。

理由としては佐倉達Dクラス組に不利すぎるので、挽回というか状況打開のチャンスがないと、学校が重視している『実力』を発揮する下地ができない為だ。

それならポイント大量獲得系のテストや他クラスとの賭けみたいなイベントが、少なくとも年1回くらいはあっておかしくはない、と思う。

「そのトラブルとは何か質問してもよろしいですか？」

「今は言えないかな」

「今は、ということとは」

「うーん。学校の判断だから、いつになつても言えないかも？ ごめんね、私にはどうすることもできないんだ」

考え事をしている間に神崎が担任に質問していたが、いつぞやのようには言えないの一点張りだ。

その対応に、他の生徒達も口には出していないけど不満そうな奴はいる。

給料っぽいものが出る日に出なかつたのでみんなの不満はわかるが、見た目によらずコンプライアンスを遵守する担任に正面突破だけでは無理だろう。こういうタイプは、切り口を変えて隙を作り出すとかないと伏せた札を開示しない。

しかも仮に担任が口を割って原因がわかって、ポイントが支給されるわけではないので意味がない。

多分神崎はそれをわかつている。

一之瀬が黙ったままなのも、クラス内の役割分担をしっかりと把握した上で、神崎に任せているのだろう。

言ってみれば、これは神崎が不満を持つ生徒の代弁しているだけなのだ。

そして予定調和で必要な茶番は、僅かな謎を残して恙無く終了した。

担任から受けた謂れ無きチラ見のせいで午前の教室内の居心地が悪かったので、今日は青空弁当の気分になり屋上に向かっていると、階段の上り口で落ち込んでそうな雰囲気綾小路を見かけた。

他クラスの綾小路なら気楽に話せそうなので、昼食に誘ってみる。

「しかし昼に綾小路と会うのは珍しいな」

「いや、ちよつとビックウエーブに乗り損ねてな……」

「綾小路、海を眺めてるだけじゃ乗る乗らない以前の問題だぞ？」

「なんで左京もわかるんだよ？ お前は堀北か」

そして了承も曖昧なまま自然に同行の流れになったので軽口をたたくと、相変わらず妙なボケを放ってきたので、適当にありそうなことを諭えて返したら思わぬ反撃を食らった。

念の為、階段の方を確認してみるが、当然そこに会長はいない。

でもいるかと思つて肝が冷えたので、綾小路に注意喚起をしておこう。

「そんな黄昏た雰囲気してれば誰でも想像つくわ。あと名前を呼んではいけないあの人の名前を呼ぶんじゃない。呼ばれて飛び出てきたらどうする」

「ハリポタかよ。てか、左京が言つてるのつて生徒会長のことだろ？」

オレが言つたのは妹の方なんだが」

「妹？ 会長つて妹がいたのか……」

「お前……マジか？ 一度、オレや櫛田がいる時に一緒に会つてるだろ。次の日、大変だったんだぞ」

「ふくん、そうだっけ……でも、まあいいや。それは置いといて、折角来たなら昼飯食つてかね？ 昨日の残り物だけど、そこそこ量が多く

「食うー」て？」

面倒くさい地雷的なモノを踏んだと感じて雑に話をそらしたら、なんかすごい勢いで了承された。

なんで綾小路は、こんな食料なさそうな場所に来ておいて飢えてるんだ？

内心ちようどいいと思いなながらも、腹減ってるんなら素直に学食行
けよ、とも思っていた。

「お、おう。じゃあ、その椅子2つ持って来てくれ。僕はテーブル
な」

「了解だ」

ただ今日の弁当が結構な量あるのは事実なので、正直助かる。

すでに3食連続で、ほぼ同じメニューなのだ。

これで持ち帰ってまた夜も食うのはかなりキツイ。

昨日はバイトが早めに終わったから、調子に乗って作りまくってし
まったのである。

自分だけだと絶対また残るので、是非とも消費しきってほしい。

そんな事を思いながら準備を進めつつ、綾小路の胃に向けて僕は期
待に胸を膨らませていた。

「なあ、今更だが残り物って何だ？」

「ハンバーグとヴィシソワーズだけど、パンとパスタもあるからそこ
はお好みで」

ハンバーグとかコロツケって、自炊だといつ作りすぎてしまうよ
ね。

あるある——って、ねえよ。

百歩譲って、あつても20個は超えねえよ。

ヴィシソワーズやパスタ、パンで誤魔化しても、もはや飽きと胸焼
けを抑えられないくらいだよ。

途中で気づいて止めるよ、僕。

「なんでそんなものが残り物に……」

「下手に時間があると、ついやっちゃうことってあるよな？」

……うん。朝でようやく半分ちよい消費した分量を、昨夜作っ
ちやったんだ。味はそう悪くないと思うから、マジで遠慮とかするな
よ」

「どんだけ作ってるんだよ。少しは自重しろ」

「その返し、反論できないから勘弁してくれ」

「お前は5分くらい前のオレか」

「何のことだ？」

「……いや、なんでもない。彷徨っていたオレに向けられた冷ややかな目を思い出しただけだ」

「へえ」

最近暑いので、朝に広げておいたパラソルと建物の影で食事の準備をしながら、綾小路に軽く事情を説明した。

すると変な言葉を返されて、意味がわからなかったのでスルーする。

話すたびにだいたい思うが、綾小路はわけのわからない奴である。

まあ、これはきつと彼流の軽口のようなモノだろうし、食事して話してれば徐々に慣れていけるだろう。

幸い、冷めてもおいしいハンバーグと冷製スープなので、食事自体は満足できる質と量だから話の種にはなるはずだ。

そして食べ始めてしばらく経った頃、綾小路がおもむろに口を開いた。

「なあ」

「あー？」

「なんか予想外に美味いんだけど」

「そりゃ、残り物とはいえ友達に不味いものは勧めないだろ」

「……友達。オレと左京は友達なのか？」

「んなもん自分で決めとけばいい。僕は友達と思ってるんだから、綾小路がどう思っただけだ」

「……………」

実際、綾小路がどう考えていようと、すでに僕は彼を面白い友達と認識してるので結果は変わらない。

それに現在、僕の飽きが限界にきているハンバーグの山を美味いと言いながら崩していく綾小路は、某国民的アニメの名台詞「おお！

心の友よ！」と言いたくなるくらい頼もしい。これで友達だと思わないなどありえないだろう。

「ちよつと聞きたいんだが、左京にとって友達の定義とかあるのか？」

「綾小路、お前……それ、友達がない奴の台詞だぞ」

「そ、そうなのか……？」

「まあいいけどさ。」

ああ、定義といえるか知らんけど僕にとっての友達は、信頼できる奴……かなあ」

「信頼？」

「そ。」

よくわからん奴、変わった奴、性格終わってる奴。こんな風に色々アレな要素があっても、信じて頼った時に応えてくれる奴は友達だと思ってるってこと」

「アレなって、お前……」

「僕からすると、綾小路は未だによくわからん奴だけど、佐倉の時や、最近だとガチャやや今日も助けてくれたから友達なのは確定だな」

「よくわからん奴……。素直に喜べないんだが」

「好きに思えばいいさ。さっきも言ったが、僕は好き勝手に友達だと思ってるからな」

「……」

つい指摘してしまったことで、なんか綾小路の悲しい過去を発掘しそうになったので、急いで話題を戻した。

何気にこれは僕にも効果抜群な話題なのだ。

発掘を続けて、僕と綾小路の食欲を減退させるようなことがあれば、誰の得にもならない。

……危うく綾小路諸共、無駄に自爆するところだったぜ。

でも綾小路が、物思いに耽ってるというか考え事をしてるというかで、影響が少なそうなのはよかった。

尤も、彼のポーカーフェイスはいつも僅かしか崩れない。

なのでいまいち読みきれていないが……多分、喜んでいる？ つぼい気はするから、発掘しかけたことは許されたと見ていいだろう。

「しかし、そうか。オレと左京は友達だったのか。」

——いや、待て。それなら、もつと一緒にどこかに遊びに行ったり誘ったりがあってもいいんじゃないか？」

「あのなあ。なんでいきなり面倒臭い彼女みたいなこと言い出したんだよ。野郎同士の友達なんて、自然に集まって適当に遊ぶくらいでちょうどいいだろ」

「……そういうものなのか？ でもクラスの友達は、ほぼ毎日一緒に昼飯や遊びに行ったりしてるぞ」

そうして安心してると、綾小路は何を思ったのか、野郎相手にすれば黒歴史確定の言葉をこぼしてきた。

その余波で勢いあまって僕の黒歴史である以前佐倉に放った「寂しい」発言の傷まで開いていく。

……後で転げまわって、癒しつつ忘れ直す予定を入れておこう。それにしても――。

これは重症ですわ。

ある意味、僕や東風谷よりヤバイ領域に至っているように見える綾小路。

僕の見たところ、友達への憧れか何かに幻想を抱きすぎ、浮き足立ってもはや浮遊してるんじゃないだろうか？と思わせるレベルだ。

なのでここは一つ、地に足を付けさせる指摘でもしてみよう。

「うくん。そもそもなんだけどさ」

「ああ」

「綾小路って、そういう奴らの中に入って楽しめる？ 僕も似たようなものだけど、なんか綾小路がそういう風にパリピに混ざって騒いでる想像が全くできないんだけども」

「え？ パ、パリピ？」

「party peopleの略。たくさんの人達で盛り上がるのが好きな奴ら。」

例えば、櫛田みたいに人の集団こそが居場所みたいな奴？ 実は内

面的に櫛田にこの例えは微妙なんだけどな」

「うっ！ た、確かに……あの中にいるオレを想像してみると、楽しそうだけど凄く疲れそうだ。というか、すでに何度か似たような体験してた気もする。」

つまり、イメージトレーニングは完璧なはずなのに結果に結びつか

なかったのは、もしかしてオレがパリピに向いてなかった……からなのか？」

「イメージトレーニングって……。色々重く考えすぎだろ。綾小路は何がしたいんだよ？」

「……………何がしたいんだろうな？ 自由で、平穩で、友達と楽しくやりたい……とかだろうか？」

「適当に指摘をした結果、浮遊していた綾小路をはたき落とす事になった件。」

「ま、まあ、内面を吐き出すことで楽になれる事もあるだろうし？」

元々雑談だったのに、相談とか愚痴に変わってたから適当に答えたくなったなんてよくあることだし？ そもそも僕相手にする話としては不適切だし？

僕がそうして自己弁護の理論武装で固めている間、綾小路は自身の内面を再構築して立て直そうとしているかのようにだった。

お互い、ハンバーグは口に運びながらだから、いまいち深刻さは感じられないが……。

だから欠片も罪悪感はないけど、傷口を自覚させたところに塩を塗りこんでしまった気がしたので、フオローっぽい事もしておくことにした。

「それって佐倉の件や守矢神社の商売に関わってる時点で、全部達成してるようなものじゃん。それで納得できないなら、僕と四方を除いた我がイロモノ集団、天文部の仲間入りすることで手を打ってみないか？ 綾小路のイロモノ指数ならトップも狙えるぞ」

「オレがいつも間にイロモノに!? ていうか、謎の指数を俺に適用させないでくれ！」

「そうすれば友達と遊んだり、イベント参加もできてWINWIN！」

「やったねっ！」

「聞けよ!？」

「榎田と東風谷は微妙だけど自動的に最低3人も友達できるお得意に、一応綺麗どころも揃ってるから目の保養もできる！ うわー、断る理由なくない?！」

「それは……悔しいが、冷静に考えると魅力的な提案だ」

「クツクツク。いい加減観念するんだな、綾小路。」

さあ、これからは僕の手のひらの上で踊るがいい。尤も、綾小路つてこういう踊りスゲー下手そうだから、むしろ踊らせる側に回りそうな感じだけど」

「お前はこういうキャラなんだよ!! 話や喋り方がころころ変わりすぎて、逆に素直に承諾できないだろ!」

「すでに僕の友達認定はされているのだから、準や候補といったものが外れて正式部員になるだけさ。意味不明でわけわからない奴だからって、怖がらなくてもいいんだぞ?」

「そして唐突なデイスリ! 勧誘してたんじゃないのか!」

「うん。でも飽きた。違う話題にしよう」

しかしフォロー中に飽きたので、あえて会話にしない適当な雑談に連続でシフトしてみた。

綾小路はいつになく騒いでいたが、飽きて面倒になったので仕方ないことだろう。

打てば響く綾小路相手なら、やはりこうして遊んでるのが気楽である。

「こいつ、自由すぎる! これだけ露骨だといっそ清清しいわ!」

「おつ、ナイスツツコミ! その調子で楽しそうな話題プリーズ!」

「またか、その無茶振り! 早くもツツコミすぎて頭と喉が痛くなってきた」

「それはいけない。昼食を食べ終えたら、保健室で胡散臭い保険医から診てもらおうといい」

「胡散臭い保険医ってなんだよ。それに昼食を食べ終えたらって……」

「いや、うちの担任なんだ、それ。あと昼食優先なのは、綾小路の胃に期待をかけてるからだな」

「胃に期待……そんなの初めて聞いたぞ」

そう零すと、なんか疲れてそうな綾小路は、ヴィシソワーズを一気飲みすると大きく息をついた。

喉の為かもしれないが、それならお茶やコーヒーもあるのだから
そつちにすればいいのに……。

その日の昼休み。

僕となんだかんだで言い合いながらも、綾小路は期待通りにしつかりとハンバーグを平らげてくれた。

なので細かいことは置いとくと、僕は肩の荷が降りて、綾小路は腹を満たせた。

これぞWINWINの友達関係というものだろう。

と、綾小路と別れる際に言ったら、彼は悟ったかのように儂い笑顔を浮かべ一言。

「ご馳走様」

と、告げてきた。

勿論、その礼に対して僕が返す言葉は決まっている。

「お粗末様」と。

親しき仲にも礼儀あり。終わりよければすべてよし。

最後の最後でこれらの要件を満たすとは、やはり綾小路はわかっているかと再認識する時間だった。

41、美学

7月1日、綾小路に馳走した放課後。

バイト中に佐倉と掃除していたら、それは降ってきた。

そして思いついたら即座に立案・実行する僕なので、すぐそれを口にする。

「さて、今日はちよつと佐倉にやってほしいことがある」

「……なに？ 最近わかってきたけど、普段の左京君がそう言う時つて、ろくでもないことが多い気がする」

「大丈夫。これを持って写真を撮らせてほしいだけだから」

もうそこそこ友達をやっているというのに、疑わしそうに僕を見る佐倉。

そんな佐倉を安心させるようにそう言って、僕は今まで自分が使っていたブツを佐倉に手渡す。

「え？ なんでそつと掃除機渡すの？」

「だって芸名が雫だよ？ なんか幻○旅団にいそうじゃん。だったら、掃除機と眼鏡は必須だろ」

「わたし、あんまり似てないし、掃除機持ってもあのシズクには見えな
いと思う」

「またまたご謙遜を。念、使えるんでしょ？ 軽く片付けちゃつて
くださいよ」

「○メちゃん！ つて使えないからね」

「そうか、やっぱり無理か。佐倉がああ○団員だったら、掃除が楽
になったんだがなあ。

……一応聞いておくけど、内緒にするから掃除の時だけデ○ちゃん
具現化できない？」

「そんな風にチラチラ見ても、ノリツツコミしかできないよ！ つて
いうか、わたしじゃなくてもあんなこと不可能だから！」

「ノリツツコミはしてくれるのか……」

もし青娥さんが僕にしたように佐倉を仙人に勧誘して承諾されて

たら、そろそろ四大行っぽいナニかができるかも、と思つて試しにさり気無く聞いてみたのだ。

なんか個人的に、仙人というネ○ロやビ○ケのイメージが強いせいか、あっち方面で考えてしまふんだよなあ。

まあ、僕の勘でも佐倉は人間としか判別できないし、仙人の勧誘をしていないか資質が低いかのどちらかなのだろう。

なお、これまでに何種類か仙人っぽいナニカになってないかの確認はしている。全部違ったけども。

それはともかく、幻影○団員シズク……の振りをした佐倉の写真を撮らせてもらうことはできた。

途中から本人もノリノリになってきて、撮影や表現の要望に熱が入ってくるほどである。

僕？ 勿論、普通に居た青娥さんと笑い合つて、更に佐倉を煽てまくりつつ撮影続行しましたがなにか？

なぜこんなことをしたのかというと、仙人かどうかの確認ともう二つ。

あとでこの写真を佐倉に見せて前の一之瀬のように恥ずかしがったりすれば絶好の話題変換ワードになる為と、うだうだ悩んでそうなので気晴らしにちようどいいと思つたからだ。

まあグラビアをやつていて、今更服すら変えないコスプレごときで恥ずかしがるとは思っていないが……。

佐倉は定期的（という頻度でもないが）に意味不明に曇る事があつて面倒なので、こういう材料は日頃集めておいた方がいいのだ。

無条件に曇りからの感情変化を起こせるなら、場を選ぶ必要はあるがウザく「し・ず・く・ちやくん」と呼んでからかってみようかと思ふほどになるのである。

そんな感じに、佐倉に仙人の確認を取つたのはワンチャン楽ができないかと思つたのもあるのだが、どちらかというと考え込んでる？というか何か言いたそうな仕草を見せていて面倒モードだったからだ。

「左京君って、悩み少なそうだよな」

「失礼な。少ないんじゃないやなくて皆無だ。」

なんせ、考えても仕方ないことは忘れるし、どうにかできそうならさっさと動くからな」

「これ失礼かなあ」

「短気は鈍器というだろう？ 言葉とか知識とかの力押しで悩みは大抵解決してるものなんだよ」

「それ短気は損気……」

「損気も鈍器も似たような響きだし、些細なことは気にするな」

やはり勘は間違っつてはいなかったようで、佐倉は面倒な状態へと移行しているようである。

そうでなければ、ツツコミの切れ味がこんなに悪くなるはずがない。

しかし色々話したが、多少明るくなった程度で結局その日に佐倉が『いつもどおり』になることはなかった。

2日は、ほとんど日常と変わりなかった。

しいて言えば、朝のホームルームで担任がポイント支給が遅れている原因を話して情報を募ったことと、Aクラスになると担任にもボーナスがあるから頑張つて、てなことだけだ。それとガチャの時に少し遅れてきた櫛田と綾小路から原因がDクラスに関係していたので「何か知らない？」とか「明日の放課後、一度Dクラスに来てくれないか？」とか聞かれたくらい。

ちなみに、Dクラス来訪については四方と東風谷が乗り気つぽかつたので、予定が空いていた僕も適当に承諾した。

とまあそんなわけで、3日の放課後。

僕と四方・東風谷の3人は、Dクラスへ向かっている。

かなり聞き流したが、櫛田によると冤罪をかけられたクラスメイトがいるらしく、なんとか無罪を勝ち取りたいそうだ。

個人的にはどうでもよかったが、櫛田（とついでに綾小路）に言われれば断れない。

これは櫛田に恩を返すいい機会である。

しばらく一緒にガチャ運営していて気づいたのだが、櫛田は佐倉とは同じ性別とクラスなのに、佐倉とついでに四方からは一歩引かれてる感があつて、なんというか警戒？されている。なので、恩を返す機会は貴重なのだ。

そうしてDクラスに入つて見回し、最初に目に入ってきたのは佐倉が赤髪の暴漢に襲われているところ——状況を認識した瞬間から思考が飛んだ。

「——ッ!!」

「あ?」

次に、僕が我に返つたのは空中だった。

気づいた時には、その赤髪の暴漢に向かってドロップキックを放つていたのだ。

「——つてえな! 何しやがる!!」

「東風谷、頼むつ!!!」

「——ヒュッ!」

幸い、その暴漢は直前に佐倉から手を離していたので、佐倉に被害はない。

尤も暴漢の体格だと、命中こそしたものの僕では速度も質量も不足しているのは明白だ。

ただ今は僅かに後退させる程度で充分だ。佐倉から少しでも距離を離せば、こちらには未だに底が見えない風祝がいる。

僕が叫ぶと前後して、緑の影が落ちた僕を追い抜いていき、妙な呼吸音?が聞こえた。

次いで、椅子や机がたてる音や騒ぐ声。

そして、人が倒れる音。

当然、起点は東風谷早苗である。

倒れていてよく見えていなかったたのでおそらくが付くが、音からして赤髪の暴漢に何かの攻撃を食らわせたのだろう。

東風谷の身体能力が並外れて凄まじいのは知っているので、たかがチンピラ一人や二人なら問題なく倒せる。

だが、まだ気を緩めていいわけじゃない。

僕は落下したことで痛む体を無理やり起こし、再度声を張り上げた。

「四方！ 佐倉を守りつつ一之瀬へ連絡！ まだ仲間がいるかもしれないから、警戒も頼む！」

「おう、わかった!!」

「東風谷！ 暴漢は!?!」

「確実に意識を刈り取りました！ しばらくは目を覚まさない程度には力を込めてあります！」

「ナイスだ！ 状況からしてこの暴漢はCクラスの鉄砲玉の可能性が高い！ 不意打ちに気をつけて、威圧しながら佐倉達の周りで守りを固めてくれ！」

「はいっ！ 任せてください！」

「佐倉！ 僕達には誰がこのクラスの者かわからない。四方と東風谷に情報を！」

「ふえっ!?!」

佐倉だけ状況に着いて来れていないが、襲われたばかりだし無理もない。

しかしあの二人が付いている以上、もう安全なのは間違いないだろう。

四方と東風谷の警戒を抜ける奴など僕には思いつかない。

それに五月蠅かった声を東風谷なら強制的に静めることもできる。ついでに守っている間に佐倉を落ち着かせて、情報を聞き出してくれるはずだ。

Dクラスの奴らには悪いが、それまで一緒くたに警戒させてもらう。

とにかく、僕はまず暴漢を押しやるのが優先だ。

軽く見回してみると、椅子に埋もれて倒れている赤髪が見えたので急いで駆け寄り、うつ伏せに転がして背中を踏みつける。こうする事で体重移動を調整すれば、気づいたとしても立ち上がるのがかなり大変になるのだ。

簡易的な拘束だが、Dクラスリーダーもしくは櫛田と話しておいた

方が良いので、もし目覚めてもその間だけは最低限暴漢の動きをとめておきたい。

次はこのクラスのリーダー格と事後承諾でもいいから話を通すことだ。

ざっと見たところ、否定していた櫛田を除いてリーダーっぽい奴は2人。

こちらに駆け寄ろうとしていたイケメンと、ふんり返って爪の手入れをしていたと思いき金髪の男。この二人からは、東風谷の威圧の中でも会話になりそうな余裕を感じるからだ。

他に大丈夫そうな櫛田と綾小路は、なるべくリーダー格として扱って欲しくなさそうだったので、必然的にあの二人のどちらかがDクラスのリリーダーだろう。

そしてどちらも一応こちらを見ているが、僕の足元（の暴漢）を見ているイケメンと僕自身を見ている金髪なら、よりリーダーらしいのは金髪の奴な気がする。勘だが、どこか東風谷に通じるモノも感じるのだ。

「いきなり失礼。」

君がDクラスのリリーダーか？ もしそうなら少し話したいのだが、時間や都合は大丈夫だろうか？」

「おや？ 私かね？」

「そうだ。ああ、僕は1―Bの左京夢月。左の京都に夢の月だ。良ければ君の名前を聞いても？」

「フツ。いいだろう」

短く微笑みながら承諾されたが、やはり只者ではない雰囲気を感じている。

その男は優雅にすら見える仕草で爪を手入れしていた道具をゆっくり仕舞うと、自己紹介をしてくれた。

「私の名前は高円寺六助。高円寺コンツェルンの一人息子にして、いずれはこの日本社会を背負って立つ人間となる男だ。先程は私に代わり、その醜いモノへの制裁ご苦労」

長い髪をかき上げながら、そう言ってまた優雅に微笑む高円寺。

ナルシストっぽい部分もあるが、よく笑う奴だと認識を更新する。

「美学も矜持もない輩にムカついただけだから礼とかいいよ」

「遠慮せず受け取っておきたまえ。私が礼を言うのはなかなかないことだ」

「ん。そんじゃ、どういたしまして」

「それにしても、この私の前で美学を語るとはねえ」

「語るってほどじゃない。この暴漢には知性も品性もないと思っただけだ」

「確かに美しくなかったねえ。あと少しムーンボーイが遅ければ、私自ら制裁していたかもしれない」

……ムーンボーイ？ それはもしかしなくても僕の事か？

こんな時になんだが、はぐれメタルよりもよほどいいあだ名である。

高円寺は口も上手いようだ。

——つて、そうじゃない。

「そうなつてた時も興味あるけど、まずは起きた事態と結果について謝罪したい。Dクラスを騒がせてすまなかった。それと責任は僕が取るが、それは少し後にしてほしいんだ」

「私は全く構わないとも。しかし、そのレッドヘアー君をどうするかね？」

「とりあえずCクラスに叩き返してこようと思う。冤罪だなんだと起こっている状況で、Dクラスの者を攻撃する意味があるとすれば、Cクラス以外にはないはずだ。」

尤も、それにしても腑に落ちない部分もあるからこの下種の暴走な気はしているが、それでも交渉材料程度には使えるだろう。だから冤罪をかけられたとかいう奴にも、Cクラスまで付いてきて欲しいんだ。その結果次第で、今回このクラスで騒動を起こしたことを大目に見てもらいたい」

「H m m。君なりの美学を持ち、礼儀をわきまえているムーンボーイに一応助言しておく」

「待ってくれ!!」

僕が高円寺に交渉を持ちかけていると、先程から足元の赤髪を見ていたもう一人のリーダーっぽいイケメンが、遮るように待ったをかけてきた。

しかし話しかけた高円寺以外に、誰かが割り込んでくるのは想定内だ。

クラスに乗り込んできた暴漢が暴れたのに、Bクラスの僕が主導権を握っている状況はリーダー格にとって面白くないだろう。本来ならこの暴漢を引き渡して、Dクラスのやり方に任せるのが筋というもの。

かといって、このCクラスの鉄砲玉という札がないと、冤罪とやらを何とかするには面倒な事に――。

「須藤君は――その赤い髪の男子はDクラスの生徒なんだ!! だからCクラスに連れて行っても意味はないよ!」

「……………は？」

――なると思つてたら、なんか意味不明なことを言われた。

「……………い、いやいや。それは流石に冗談だろ? そ

んな馬鹿がいるわけが……………」

「残念だけど本当だよ」

「櫛田……………」

「それに今回はなんとというか間が悪かったというかなんだけど、その…事件の当事者で冤罪だって訴えてるのも須藤君なんだ」

「――え? そのの、えーと…イ、イケメン? ……それって本当?」

「この場面で、その呼び方はやめてくれないか!? 僕は平田洋介。名前か苗字を普通に呼んでほしい!」

「……………平田…君。あー、よろしく?」

「うん。こんな時だけど、よろしく左京君。須藤君に関しては、概ね櫛田さんの言っているとおりだよ」

「そういうことだよ、ムーンボーイ」

「高円寺……………」

「君がこれからどうするか、見物だねえ。願わくば……まあこれは言うまでもないかもねえ」

衝撃の事実。

予想をはるかに下回る類人猿が同級生だったことだ。

こんな状況で、リアル加縫（名前からして別人だろうけど）と遭遇するとは流石に想定してなかった。キャットルーキーの加縫みたく棒でも持たせたら人間に進化したりするのだろうか？

いやいや、それどころじゃない。

そんな猿に出会いがしらのドロップキックをかまし、東風谷に追撃やDクラス内の威圧まで頼んだ短慮な者もいるのだ。

……勿論、僕のことである。

これはもはや損害が出るのは防げない。

それならいつそ事情を無視して僕以外の損害を最小限に誘導しつつ、須藤とかいう猿を僕と同程度以上の処分で事態を終わらせたい。

正直事情はよくわかってないが、最低でも佐倉を襲っていた奴を無罪にはしたくないのだ。他人に迷惑かけといて自分の尻拭いもせず暴れるような奴は、退学までいかずともなんとしても停学まで持っていきたい。

そう第一目標を決めたら、次はほぼ全方位にとって妥当な収め方だ。

考えるに、僕と須藤に停学、東風谷には僕の指示だったという建前で嚴重注意あたりを申し出れば、僕が知る前例から判断して生徒会や教師は飲んでくれそうな気がする。折角作った神様達への恩を返せそうな神社やガチャのこともあるし、僕と東風谷の両方が停学する事態だけは避けたいので、東風谷の分は僕が受け持つ形だ。

ついでに、一応保険として須藤ともめているというCクラスの生徒（達？）に対し、嚴重注意か停学、あるいはCP減点の提案もしておく。このレベルの損害までなら、おそらく龍園は許容するだろう。むしろDクラスに猿がいる情報に喜んで、退いてくれるかもしれない。ざっとした方針を固めた僕は、とりあえず何か口を出そうとしていたっぽい四方と佐倉を目で黙らせ、物事を進めてしまうことにした。

四方や佐倉に火の粉を残すのは愚策である。

「よし、大体の状況はわかった。」

……今から学生裁判？だかをやってるらしい生徒会に連絡して出頭する。そこで僕とさr：須藤の停学処分を主張するから、これをもつて手打ちにできないか？」

「H A H A H A H A H A！なるほどなるほど…それが君なりの美学の示し方というわけだ。私の美しさとはまた違うが、その『美学』は理解できるねえ」

何故かなにやら親しげになった高円寺はともかく、他からはヘイトを集めるだろうが、これで東風谷と佐倉に向かうはずのモノは、全てとはいかずともそれなりに僕へ誘導できただろう。

それぞれのクラスのCPを減点させて敵視されるのは、僕と猿だけにするのが一番収まりがいい。東風谷はまだしも、佐倉に飛び火させるのは筋が通らないと思う。

つまるところ、僕も猿もやっちゃったことは自分で責任を取るのが当然だと思うからである。

42、大馬鹿野郎

高円寺が機嫌良さげに口を閉じると同時に、先程の僕の言葉を聞かえていたのか教室に一之瀬が駆け込んできた。

「——停学ってどういうこと!? 今度は何をやったの、左京君!」
自分で四方に呼ぶように指示しておいてすっかり忘れていた一之瀬に柴田・神崎が慌てて来たが、やることは変わらないから別に構わないだろう。

一之瀬達の後ろから近づいてくる別の集団がいなかったら、だったが……。

「おいおい、騒がしいと思えば。

雑魚どものクラスで、なにを面白そうなことやってやがるんだ、左京?」

その集団とは、龍園と凸凹トリオ（主に殴られたと思いき顔が）である。

一之瀬がDクラスに入ってきた時に、龍園の笑っている顔も後ろに見えたので、頼まれ事も一気に片付ける欲が出てきてしまったのだ。

本来情報を得たとしても、こんな風に別のクラスに来るようなタイプではないと見ていたが、勝負処や引き際を感じ取ったのかもしれない。

相変わらず油断はできないが頼もしい嗅覚だ。

「あー、一之瀬はともかく龍園が何で来たのか知らんけど、ちようどよかった。さっきこの暴漢の猿にドロップキックをかましてしまったな。自分の尻拭いだけで、暴漢の処分含めて他のトラブルもさっさと終わらせようかと思ってるんだ」

「暴漢……どろっぶきつく……」

「クッククック、ぶっ倒して背中踏み付けにするとかやるじゃねえか。逃げ隠れがデフォルトなんじゃなかったのか?」

「いや、気づいたらドロップキックしてて空中だったんだよ。それに暴力性が高かったから、万が一起きた場合の拘束も必要だろ? これ

ならだいたいの動きは封じられる」

「ああ、それでずつと踏んでたんですねっ！ 夢月さんが何かに目覚めたのかと心配しましたよ！」

「はあ……。東風谷は東風谷で何を心配してるんだよ。ここはもつとこう、違う心配をするべきだろう？」

一之瀬は呆然と何か呟いていたが、僕達の話の影で柴田と神崎が四方と佐倉に寄っていくのも見えていたので、少しほっとした。

ついでに東風谷は今日も平常運転のようで何よりである。

東風谷はわからないが、四方なら先程僕が目で伝えた四方自身や佐倉をフェードアウトさせようとしている事も察しているはずだ。

今も何かを握っている気がする佐倉が動こうとする前に止めてくれているのだから、考えや狙いは読んでくれる前提で四方を信じられない。それでも早く動かないと、多分佐倉に限らずどこからか横槍が入ってしまう気がする。

そして、一之瀬ほどではないがBクラスでも善良な部類の二人であれば、四方から事情（考えか？）を聞いて協力してくれる可能性は高いだろう。保険として見た場合、雰囲気をよくしてくれる柴田と平均的に高性能な神崎が付いてきたのは幸運だった。

「まあいいや。これから生徒会長に連絡入れるから、龍園達も少し待っててくれない？ 後ろの怪我してる3人なんだから、この赤い猿とやりあったの」

「ククツ、赤い猿ってまんまじゃねえか。それでてめえ、どう片を付けるつもりだ？」

「さつき聞いてたんじゃないのか？ 僕と猿は停学、って申し出るつもりだよ」

「そっちじゃねえ。うちの石崎達3人をどうするって聞いてんだよ」
「出たところ任せに決まってるだろう。その辺の事情なんて僕は知らないし、証拠とかが『出てきたら』停学、最悪退学って感じになるんじゃないね？」

「ふざけ「石崎！ わかってねえなら後で説明してやるから今は黙ってろ。他の二人もだ」……龍園さん……わかりました」

今、僕の一当て代わりの野放図な発言を受けて、龍園が石崎を止める前に違う方向へ一瞬視線を送った。

その相手は……東風谷、もしくは佐倉か。

まだ推測の段階だが、龍園が来た事でだいたいの構図と道筋は見えってきた。

おそらく東風谷か佐倉は、龍園が仕組んだ事に対する札を持っている。

だから龍園本人が当事者3人と動き、何らかの対処を試みようとしていたところにDクラスで騒ぎがあった。覗いてみれば、僕が猿の上で踊ってるのが見えてブツこんだ。

大雑把には多分こんな感じだろう。

それが情報か物品か証拠かは彼女らに聞いてみないとわからないが、龍園と僕はこの札を開示させたくないという点で協力できる。尤も、龍園にその事はわからないだろうが……。

ともあれ、そこを上手く突ければ、Cクラスを退かせることができるかもしれない。

猿が佐倉を襲った理由も、佐倉が協力を拒んだか人見知りを発揮して話ができなかったからだと考えると話が繋がってくる。どちらにせよ、暴れたのだからその責任は必ず取らせるが。

「……左京君、とりあえず須藤君から足を下ろしてくれないか。もう押さえつけておく必要はないだろう?」

「ふむ。そうだな。これから電話するし、その方がいいか」

そうした考えがあったから、平田からそう言われた時に都合だった事もあって受け入れた。

東風谷か佐倉の札を使わないなら、もう一枚くらいCクラスへの手札がほしいのだ。

龍園は流石に無理だろうが、他の3人の目の前で無防備に電話すれば、僕に攻撃をしてくる可能性が生まれるかもしれないと考えて距離を測る。

痛いだろうし、とても怖いのが、前の上司に責任を押し付けられた際に何度も罵られ殴られ踏みつけられた経験を持つ僕なら、不良っぽい

とはいえ高校生の一撃くらいは耐えられるはず。

しかし、なんで他のクラスの教室で殴られるかもしれない恐怖と戦いながら、3クラスのリーダーを含む大勢の目の前で、苦手な会長に苦手な電話をしなくてはならない事になったのだろうか？

これがわからない。

なぜか教室中が固唾を呑んでいるように静かになっていくことだけが救いだろう。

僕はそんな現実逃避をしながら、さり気無く龍園達4人を左方に置くように会長へ電話をかけた。

「——というわけで、僕と須藤は停学処分が妥当かと愚考します。C・Dクラスの裁判もあつてお忙しいでしょうが、この後停学の手続きをお願いしたいので、少しだけ時間をいただけないでしょうか？」
静かになっている教室内で、僕が事情説明する声だけが響いている。

誰も邪魔せず、とんとん拍子にほとんど報告や提案を終えてしまった。

これで僕と猿の停学はほぼ確定した。

あとは気になるのは、期間やCPの減少の多寡くらいだろうか。

もし退学の札を切ってくるなら本当に闇が深すぎるが、あの理事長や会長を見る限りそれはない、と思いたい。そもそも処分を下すのが生徒会なのもおかしいと思うが、少しでもまともな精神があれば退学の引き金が高校生には重すぎる事はわかるだろう。

そう、僕は自身の停学に思うところもあるが、少なくとも猿も直接的に退学になる可能性はないと高をくくっていた。あの程度の小競り合いで退学の札を切るようなら、人を育てる教育機関としては終わっているからだ。

だから停学期間も退学にならないギリギリ、つまり最大でも期末テストの直前までの2〜3週間と見ている。

定期テストは赤点即退学なのだから、受けることさえできなければ即退学になるはずだ。流石に、初犯でいきなりそうなるような処分にはしないだろう。

それはそうと思惑に反して、龍園の統率が機能しているのかCクラス凸凹トリオが動くことなく、会長との電話が終盤に差し掛かってしまった。

猿に関してだけならこれだけでいいが、櫛田と綾小路に頼まれた冤罪とやらを何とかする手助けが問題だ。猿の停学にもう一つ重ねると、Cクラスの出方次第で退学まで持っていかれるかもしれない。なのでこの頼みを履行するには、どうしてもあと一手が足りなくなる。

どうしたものかと話しながら思考を回すも、会長には事情を伝えきって、教室内のカメラからの裏取りもするように頼んだのもう後戻りはできない。再度呼び出されたら、そこから停学期間に移行することになるだろう。

頼み事をクリアし、佐倉や四方をフェードアウトさせる為には、この電話後の僅かな空白時間で龍園を——Cクラスを退かせなければならぬ。それができなければ、例え四方か東風谷が解決しようとも、僕は胸を張って櫛田達へ借りを返したと言えない。

『はあ…お前は毎度のように何かをやらかすな……』

——校内放送と端末の通知で時間は追って通達する。それまで左京・須藤の両名は校内で待機するように』

「あー、今回もお手数かけます。よろしくお願いします」

考えがまとまらないまま、タイムアップが来てしまった。

もう出たところ任せで、龍園に当たって砕けるしかないのだろうか？

電話を切り、黙考しつつ、破れかぶれの策を実行するか迷っていると、教室内がなにやら騒がしくなっていた。

「夢月さん！」

「左京っ！」

「左京君!!!」

「須藤君!?!」

「ふざけんなっ!! あれは正当防衛だ! 関係ない奴が勝手に俺まで停学とかほざいて決めてんじゃねえ!!」

「——っ!」

そして、そんな半ば諦めの境地だった僕に突然、物理的な衝撃が走った。

キャパ限界になっていたことで思考の外に出されていた猿が飛び起きて、殴りかかってきたのだ。思考に集中しすぎて猿を完全に眼中からも外していたから、まともに食らってしまった。その上、予想外の相手と方向だったので、とても痛い。

まあでも、僕もあいつにはドロップキックをかましたし、これでお相子だろう。ダメージ量は東風谷の分を加算したと考えて忘れることにした。

ただ怖いし、これ以上痛い目に遭うのも御免なので、猿とはなるべく目を合わせないようにするべきだろう。

僕は起き上がると、殴られ転がったことで少し距離が離れてしまった龍園達へ向けて進み出した。

「おいっ!! シカトこいてんじやねえよ! てめえが先に蹴り入れたんだろうが!? ビビってんのか!」

「須藤君!!! 駄目だっ! これ以上やったら本当に退学になってしまう!!」

「いい加減にしなさい!! もう何をやっても無駄よ、須藤君!」

猿や平田達が何か喚いて騒いでいるが、思ったより足にきているようにフラフラして聞く余裕がない。

だが、最低でもここで龍園を翻意させなければ、片手落ちのまま四方や東風谷に櫛田達との約束、C・Dクラスの問題解決を丸投げすることになる。

それはタコすぎる格好悪さだ。

それに東風谷はともかく、相性が微妙っぽい四方と龍園が当たるのは避けたい。おまけに、折角名前を出さないようにしている佐倉にまで無駄に人の目が向く可能性があるのはもっと許容できない。

だからメツチャ痛くて怖くても、今ここで僕が動いておかないと駄

目だ。でないとは後顧の憂いを残してしまう。

でも余力もなくなっているのだから、龍園へ言うべき言葉だけに絞って、何とか口から搾り出すことしかできなかつた。

「さあ、僕は……有言実行したぞ」

「……」

「……龍園……君は、どうする？」

「……はっ、ははー！ ハーハツハツハハハハハツ!!」

そういう意図で僕なりに必死に伝えたら、龍園に教室内どころか外まで響くほど馬鹿笑いされた件。

「ハハハハハツ!! どうするだあ?! どうするってか?! おい、お前ら、今の聞いたかよ?! 自分で自分に停学処分確定させて、赤毛猿に一発ぶん殴られただけでフラフラな奴が、こんなアウエーな状況で俺に聞くことが!! どうする、だぜ?! 傑作すぎるだろ、おい!! ハツハハハハハツ!!」

それでも、馬鹿笑いしているのは龍園だけだった。

東風谷や高円寺のように静観している者達もいるが、教室内の大半は呆然としているようだ。直前まで騒いでいた猿や平田達すらいつの間にか静まっている。

一之瀬達は勿論、このDクラスの教室内にいる者達をほぼ無視した形なので、大半から敵意を向けられる事を予想していたのだが、龍園が馬鹿笑いしたせいで何か流れが変わったのだろうか？ 痛みと恐怖で僕自身が冷静ではないので、上手く思考がまとまらない。

だけど凸凹トリオが動かなかつた以上、晒してもいい手札と言葉で龍園に撤退を認めさせるには、もう僕の意味を示して、退いてやつてもいいか、と思わせる手しかないのだ。ハツタリや口八丁でピースを探りながら舌戦をする余力は僕にはもうない。

だから何を言われても、龍園から目を離さず彼が応えるのを待つしかない。

「ははっ！ 馬鹿だぜ、てめえ!? んな震えながら、涙目で顔歪めてよ!! 関係ねえだろうに、マジで馬つ鹿じゃねえの!! くっははははははっ!! ああ、この格好つけのクソツタレがよお!! 笑わせてくれる

「じゃねえか、この馬鹿野郎!!」

尤も余力があつたとしても、自分でも馬鹿やっている自覚はあるので、嗤われても反論できなかつたかもしれない。

というか他人から見ても意味不明な理由で、使うべき時に効果のありそうな札を使わないのはまさしく馬鹿者だろう。

それでも、あまり面と向かつて馬鹿馬鹿言わないでほしい。普通にムカつく。

「はーっはっはっはっは!! じゃあ、そんな馬鹿野郎を面白えと思わされちまつた俺は大馬鹿野郎じゃねえか!!」

龍園はそうしてしばらくの間、黒歴史確定の大笑いをしていたが、笑えば笑うほど夜に自室を駆け回る時間が増えると認識しているだろうか？

周囲どころか石崎達Cクラスの3人までも目を丸くして声を失っているのだ。

後で、生暖かい目をした彼らにからかわれた時に後悔するがいい。これだけ遠慮なく笑ってくれたのだ。

もし石崎達がしなさそうなら、僕が全力で笑ってからかい尽くしに行つてやるから、今のうちに覚悟しておくことだな。

一方、僕が復讐の念を燃やしている間に一息ついて冷静さを取り戻した龍園は、僕から視線を外して身を翻し、出口へ向かいながら口を開いた。

「石崎、小宮、近藤。お前らは須藤に対する訴えを今すぐ取り下げてこい。理由は後で教えてやる」

「……………え、あ…はい。わかりました! おい、小宮、近藤行くぞ!!」

あれ? 冷静になつたら、口に出せなかつた意思に伝えてくれるとか、いきなり普通に良い奴になるじゃないか。

……………しょうがないな。からかうのはこの借りに免じて許してやろう。

しかし関係ないが、呆気に取られていたのに龍園から言われて即座に行動を開始した石崎にはなんとなく親近感を覚える。下つ端同士のシンパシーというものだろうか。

尤も、今のところ認知している限りでは僕を踊らせている奴はいないと思うので、下つ端同士というのは語弊があるかもしれないが……。

ともかくこれで、東風谷や佐倉の持っているかもしれない札を使うことなく、Cクラスは退いてくれた。

応えてくれた龍園は勿論、凸凹トリオにも感謝である。

「左京、これはてめえへの貸しだ。停学明けたら一度顔を出せ」

「ん。了解だ。それと…ありがとう」

「へっ、気色悪いこと言ってるじゃねえよ。貸しだつてんだろ」

承諾と感謝を返すと、龍園は最後に憎まれ口を叩いて去っていった。

そして都合がよかったので、僕も龍園の後ろについて教室を出てから、反対方向に別れることにした。

P、綾小路清隆

『力を持っていながら、それを使わないのは愚か者のすることだ』

思い出したくもないその言葉が正しいのなら、左京は愚か者なのだろう。

なぜなら東風谷や佐倉が状況を左右する『力』を持っていると察していながら、最後まで決して使わず、使わせなかった。使おうというそぶりさえなかった。

逆に徹底的に佐倉や四方、東風谷を話の中心から遠ざけようとするして、彼女らもそれに応えていた。

それでいて龍園の言っていたように、本来左京には関係ないことで体を張った。

そして——ついには、その自分の言葉と行動だけで、あの危険な匂いを放つ龍園という男に退くことを選択させたのだ。

それは殴られた顔を腫らして歪め、転がって埃があちこちに付き、見ようによつては無様ともいえる姿だったが、オレはその在り様どころか心動かされていることを自覚していた。

だから、左京を初めて見た部活動説明会の時のような静寂の中。状況が味方したとはいえ。

結果はどうあれ。

ほぼ一人で絡まった問題をシンプルに解決し、自然体で去っていく左京が愚か者であるとオレには思えなかった。

左京達がDクラスに来る前日。

元々、オレと櫛田が左京達をDクラスに呼んだのは、須藤が明かし

た目撃者が佐倉と東風谷である可能性が高かったからだ。

須藤によるとその目撃者は、蛙と蛇の髪飾りをつけた長い黒髪の女と、俯いて顔がわからなかった地味な女だそうだ。

それを聞いた櫛田は、後者は絞り込めなかったが、前者を特徴から東風谷だと断定した。それなら後者は佐倉以外ありえないだろうと推測し、二人に聞き込みをすることになった。

そのうち東風谷は昨日ガチャで集まった時、櫛田が聞き込みをしてあっさり事実であるとの確証を得た。

しかし彼女は目撃者ではあったが、同時に去り際の須藤に「チクんなよ」と佐倉が脅された事で静かに怒っていた。それこそ佐倉がいなければ、そしてCクラスの3人が血を出して倒されていなければ、その場で東風谷VS須藤の2回戦が勃発していただろうと思わせるほどに……。

それを押しとどめたのが佐倉の存在と、櫛田の薫陶（左京曰く、優しくすることで人望を得る手法）で、なんとCクラスの3人を佐倉と二人で介抱することを優先したそうだ。

佐倉はともかく、よりによって以前Cクラスに殴りこんだらしい東風谷から介抱された3人の心中は察するに余りある。さぞ、困惑したことだろう。

ともかく、これでは東風谷に証人になってもらうことはできない。

櫛田はまだしも、彼女からあからさまに距離を取られているオレが説得することも無理だ。

しかも無理に頼めば、これ幸いと須藤を攻撃しかねないからやめておいたほうがいいと、四方と櫛田の意見が揃った。

だからもう一人の証人（バイトに行っていてこの場になかった佐倉）に打診する事を考えたのだが、佐倉はある意味では東風谷以上に接触が難しい。

なにせ、あの櫛田が話こそ僅かにできたらしいが、ほとんど目も合わせられないのだ。オレなど話どころか、素顔を見たことすらもないも同然の有様。

「BクラスのUMAが左京と東風谷だとするなら、DクラスのUMA

は佐倉と高円寺といえるかもしれない」

「……他のあだ名もアレだけど、なんで僕がUnidentified Mysterious Animal、つまり未確認なんだよ。僕も含めて普通に名前が確認されてるだろうに」

「まあまあ、そんな矛盾はよくあることですよ。私も昔、色々呼ばれてました。」

ところでそんなことは置いて置いて、あの脅してきた人を退治すればいいんですね？」

「置いとくな、戻せ。僕達に変な感じに知れ渡ったらどうするんだ」「もう手遅れじゃないか？　というか、東風谷。退治って本末転倒にもほどがあるだろ」

「二三矢さん、そんなことは退治してから考えればいいですよ。とにかく私は悪者を叩きのめして、気持ちよくなりたいたいですっ!!」「むう、手遅れ……。しかし僕の分くらいなら櫛田に協力してもらって、実はUMAは一之瀬だったとして流すように誘導すれば、今からでもワンチャンあるか？　流石に難しいかな」

「だから、その悪者？　が東風谷達の介抱した3人だったかもしれないって話をしてたんだろっ！　それと左京は左京でなに言ってるんだよ!?!」

あまりの前途多難さに思わず口から零してしまったら、関係ないことへの反応が返ってきた。

四方以外、ろくに話を聞いていないことがこの会話から丸わかりだ。特に左京。

現状、佐倉とまともにコンタクトを取れるのが東風谷と左京で、次点が四方だという事実を頭を抱えなくなる。

「早苗達に頼みたいのは、冤罪を何とかする為にうちのクラスへ来て早苗達から佐倉さんに話を聞いてほしいだけだからねっ！　今、須藤君を退治されたら、私達が困っちゃう！　ヤルなら、迷惑にならない場所と時間を選んで!!」

「……櫛田はそれでいいのか。このままだと今すぐではなくても、本気で須藤が退治されてしまうような気がするんだが」

「にやっ!？」

……あつ、そうだったね……てへっ♪」

しかも話の流れに焦っているのか、この面子だからか、櫛田もいつもの仮面がはげかけて本音がのぞいている。

指摘すると気づいたようで、笑って誤魔化しやがった。

その仕草も、裏面を考慮に入れても非常に可愛かったのは複雑だったが……。

ともかくその後、軌道修正した櫛田の説得でまず東風谷を口説き落とし、東風谷が滅茶苦茶やらないかの監視に四方が。暇だし櫛田といでに綾小路に借りを返せるかもと左京が。なんとか次の日にDクラスへ来てくれることを約束してくれた。

ただこの時点では、期待していたのも警戒していたのも、圧倒的に東風谷早苗の割合が多い。四方はブレーキ役。左京はやる気がなさそうだったのもあって、東風谷が暴走した時の代役程度にしか考えていなかった。

……注視すべきは左京だったと、オレにはまだわかっていなかったのだろう。

次の日の放課後、須藤が佐倉に詰め寄って脅し始めた時、まずいと思っただ。

今呼んでいる東風谷が来たら、手助けしてくれるどころではなくなくなる。

そう確信していた。

櫛田も同じだろう。

焦った顔で、須藤を止めようと立ち上がった。

そして何故かそういう時にこそ現れるのが——あえて一人だけ名指しするが——左京夢月という男なのだと、オレは思い知ることになる。

オレよりも、櫛田よりも、いち早く駆けつけようとしていた平田よりも。

腰を浮かせかけていた高円寺や、目の前の二人を止めようと手を伸

ばしていた四方よりも早く。

左京以外で真つ先に動いた東風谷すらも出し抜いて。

——特に優れた身体能力でもない左京のドロップキックが須藤に突き刺さっていた。

重力に従って落ちながら左京が叫ぶころには、東風谷の恐ろしく研ぎ澄まされた掌底が追撃で放たれて須藤は崩れ落ちていたが、それはもはや問題ではない。

オレは驚愕していた。

ただ一手でオレの想定していた流れを崩された。

立て直そうにも修正不可能な位置まで即座に持つていかれ、すでに強引に想定外の結末へ向かっている。

左京を中心にして。

これは、判断と行動が早すぎる。

時に支離滅裂な言動になることはあっても、左京の理性と知性はそれなりに高いものだど認識していた。

四方にすら止められなかった東風谷を上回って左京が先に行動するのは、理性的にも身体的にもほぼ不可能だ。にも関わらず、実際に誰よりも早く動いたのは左京だった。

そしてそんなオレの内心をよそに、そこからは左京の独壇場だ。

あつという間に場の空気を掌握し、四方や東風谷や佐倉に指示を出して、Dクラスのリーダーと見た高円寺（本当は違うと言いたかったが）と交渉していた。

その際、いくつかの勘違いで詰まる場面はあれど、一之瀬や龍園が来てからも、堀北会長に電話していた間も、須藤に殴られようと、目的だけはブレさせずに最短距離を渡りきったのだ。

なにより目だ。

須藤に殴られた時、左京はオレと堀北の近くまで転がってきたのだが、目的しか見ていない目をしていた。真つ直ぐ前だけを見ていた。

それを見て気圧されたかのように須藤の動きが一瞬止まり、その隙に平田が、少し遅れて堀北が間に入っても左京は変わらない。

よろけながら立ち上がり、ただひたすら龍園に集中して、殴った須

藤すら眼中になかった。

ここからは何とか理解が追いついてきた。

おそらく左京には目的が3つあり、全てを平行して達成するつもりであったから、鍵になる龍園の決断以外は些事と考えていたのだろう。

その目的とは。

佐倉に危害を加えた罰を須藤に与えること。

佐倉や東風谷に注目が集まらないようにすること。

そして——オレや櫛田との約束通りに須藤の冤罪を何とかすること。

左京の言動から、この3つが導き出せる。

思いがけず龍園という男が来た事で、そうして両立できないはずの目的を、冤罪を晴らす：ではなく冤罪自体をなかったことにしたことで、東風谷や佐倉の握っていた『力』を匂わせるだけで使わない方向に持っていったのだ。

残るのは佐倉に危害を加えた、という須藤自身が起こした一件の罰だけだ。それも堀北会長に洗いざらい話したことでほぼ達成している。

ここまでしたからには、呼び出されても左京が殴られた部分についてはすつとぼけるに違いない。必要以上を求める男ではないからだ。だが、これだけ考えることのできる奴が、何故あんなことをしている？

オレなら仮に思いつけても、これだけ勝算の低い手は打てない。

もし龍園が突っぱねていたら？

佐倉が証拠になる物を持っていなかったら？

殴ってきた須藤が平田や堀北に止められず、再度攻撃してきていたら？

ぱっと思いつくだけでも、これだけ失敗に繋がる要素がある。

まず佐倉の持つ情報を確認した後、裁判で時間を稼ぎ、龍園がいない場を狙って、他の3人を嵌めて裁判を取り下げさせる策を採るのが安全だったはずだ。勿論、これにも賭けの要素はあるが、協力者が増

えるほどリスクは減っていく。

左京であれば、こうしたことを考え付かないわけがない。

オレは左京を、基本的に裏表がもろに顔に出るリアリストだと見ていた。

そしてリアリストの特徴は、リスクとリターンを天秤に乗せて計算でき、より大きいリターンの為ならある意味冷酷な判断もすること。

なのに、今回の左京が打った手は、リスクは莫大な割に、リターンは微々たるもの。

数々のリスクに身の危険や自身の停学すら度外視して綱渡りするかのような事をしておいて、リターンは借りを返すことと佐倉達に注目が向かないことだけ。

なんだそれは？

月見の件、佐倉の件、ガチャの件。

オレの知識では、これまでに左京が打った手を見る限り、先を読んだ物事に対処するリアリストだと示していた。

だが、これではあえて間違った方向に進む愚か者……という解を導き出せてしまう。しかも、愚か者でありながら結果を叩き出したという不可解な存在に。

いや。オレは思い違いをしていたのかもしれない。

左京を日常やガチャの運営などだけで見ていたから、そもそもリアリストであると誤認していた可能性はないだろうか？

孫子曰く、敵を知り己を知れば百戦危うからず、という言葉もある。

いい機会だし、左京の起こす予想外な手筋に勝つにはより分析・予測して敵になった時に――。

――オレは、今、何を考えた？

――友達である左京が、敵になると考えたのか？

――Dクラスの問題に巻き込んでしまって、それで停学になりつつも、榎田のついでとはいえ、オレにはなんの事かもわからない借りを返してくれた左京を？

――いつまであそこにいるつもりなんだ、オレは？

……オレは事なかれ主義なんだ。
これ以上は、やめよう。

とりあえず今は、殴られた時に左京が落としていった端末を届けよう。

左京が去って、東風谷や四方、佐倉がそれを追ひ、その更に後に一之瀬達と櫛田が追ひ始めていた。

オレもそれに続けば自然に合流できる。

近くでは堀北や平田が、左京が電話で言っていた「威嚇や脅しを反撃できない者にする」ことを、会長は軽く考えすぎている」というような言葉や監視カメラの事を須藤に言い聞かせていたが、届け物を理由にオレは抜けることにした。

どの道、堀北に功績を立てさせてオレの隠れ蓑にする思惑は一時凍結だ。

もうここにいる意味は薄いだろう。

(須藤も停学が確定したので完全にはいかないものの) 徐々に教室が元のざわめきを取り戻していくのが、何故かやけに耳障りだと感じながら、オレは櫛田達を追いかけた。

後ろから櫛田達に追っていくと、左京は思いのほか簡単に見つかった。

自販機から購入したと思しき水を顔に当てながら、ベンチでだらりと手足を伸ばして先に追っていた四方達や鬼龍院先輩と会話していた。

「また派手にやられたものだな」

「コラテラルダメージってやつですよ。やることは大体やったからしばらく休めるし、問題ありません」

「いやそれもだけど、停学になったのは問題だろ」

「そこらへんは別にいいよ。この学校、内申とか意味ないし、退学さえ避ければどうとでもなるさ」

Aクラスなら進路は希望通り、それ以外には何の保障もしないと言われていた。

それを踏まえるなら、確かに停学は大してマイナスにならない。

左京のように全く気にせず、目的の為なら自分から停学になりいく奴はまずいないだろうが、本人次第で挽回が可能な処分ではあるだろう。

「ふむ。確かにそういう考え方もできるが、後輩はもう少し周りを見たほうがいいな。友人に悲しい顔をさせるのが君の美学なのか？」

「うぐつ。それを言われると……」

その、停学明けたらちゃんと謝るけども。

みんな、勝手にごめん。特にそれぞれのクラスには前例からして

……CPもいくらか減点されるかも？」

左京はいつものように飄々と答えていたが、流石にバツが悪いのか素直に謝った。

櫛田や一之瀬達が来ていることにも気づいていたのだろう。謝った後にオレ達へ向けても頭を下げてきた。

それと察することができたことがある。

聞こえてきた話を聞く限りの推測だが、おそらくここで休んでいた左京に最初に接触したのは、鬼龍院先輩だ。

今は、怪我をしている左京に先輩が話しかけたところに四方達が追いついた、といった状況なのかもしれない。

流しそうめん以来、この先輩は左京をやけに気にかけているように見えるので、話しかけても不思議ではない。

「でも、悪い。」

僕は借りを作ったら、それを返さないと気がすまないんだ。今回は

佐倉と櫛田・綾小路だったけど、なにかあった時にできると判断したらまた勝手にやると思う。

……まあそのついでに過程も結果も楽しむし、僕自身の為でもあるだろうから、これに懲りなかったらまた付き合ってくれ」

「えっ!? わたしにも……返すもの? わたしが…じゃなくて左京君が?」

「ん。詳しくは時間がある時か、察してる四方か……あるいは綾小路に聞いてくれ。今は多分もうすぐ呼ばれて、それからは停学だと思うから。」

……一応聞いとくけど、四方も綾小路も察してるよな?」

一つ一つ状況を整理していると、見てないようで見えていた左京からのキラーパスが入った。

これだから油断できないんだよな、こいつ。

というか、四方はまだしも左京のオレへの評価が異常に高い。

思考力を見抜かれるような事はしていないはずなのだが、左京の洞察力をまだ低く見積もっていたのかもしれない。

「まあ一応な。でも軽くは説明するけど、お前もするんだぞ。綾小路はわからんけど、俺は大体しかわかってないんだからな」

「あんな状況でよく周りの反応まで見ていたものだな。」

ただオレは察してるか微妙だと思っぞ」

「あの場で冷静だったのは、東風谷と高円寺以外にはお前ら二人だけだろ。そして冷静であれば、洞察力や思考能力が凄まじいお前らが察しないはずがない。能力はともかく、冷静じゃなかったり、そもそも考えてもない奴には難しいかもだけどな」

「左京君……」

冷静じゃなかった奴はあの場にいたほぼ全員だろうが、考えてない奴は東風谷だな。

東風谷は左京が停学になることが確定的になった今ですら、たいしたことではないとでも言うかのように平静なまま。

左京も東風谷も、この程度では揺らがないと確信出来るほどマイペースな性質だ。

「ま、そんな大層な意味はないからな。なんかあった時に助けて
チョーダイ、ってな事を言う為って感じな受け取り方でOKだ」

一方、考えている間に左京は謝りながら、軽く笑ってそう言っ
た。

それは不思議といざという時の頼もしさを感じさせる雰囲気
で、沈みそうになっていた空気を吹き飛ばしてくれた。

「……くっふふ。後輩。君は実に面白い。」

だが、それだけに惜しい。

今の君の狙いは、非常に小さい穴に遠距離から通すのと同義だ。
今のままではな」

「はっはっは……怖っ！ 先輩、僕と会うの4回目ですよね？」

鬼龍院先輩には左京の考えが読めているのか忠告と思われる助言
をしていたが、笑みを引きつらせてはいたがそれでも左京は普段と
変わらない。

考えや冗談はあれども、基本的に嘘はない自然体。

オレを友達だと言ってくれた左京のまま、誰よりも先を行った。

「そうだぞ。しかし、現時点では4割合っているかどうかといった
ところだろうし、後輩はこの程度で焦るタマでもないだろう？」

「はあ、これだから天才ってやつは……。」

ある状況に対応できる用意をしてるだけなんで焦ることはあり
ませんけど、怖くなるのでやめてください」

「ふふっ、次から気をつけよう。」

——さて、私はそろそろ失礼する。後輩、その使い処を誤るな
よ。言うまでもないだろうがな」

「りょーかいです。」

先輩、気が向いたら天体観測にでも来てください。特に役割のない
時間をプレゼントしますよ」

左京とわかるようなわからないような会話をして、この場のほとん
どに関心どころか目すら向けずに鬼龍院先輩は去っていった。

オレと四方にだけ意味あり気な視線を寄越して。

それはまるでオレ達に——。

いや、それは今はいいか。

「つーわけで、先輩のことは置いといて。」

佐倉、櫛田、綾小路。ちよつと変則的だけど、これで借りを一つ返したぞ。須藤って奴は停学だから、完全にとはいかなかったけどな」
オレを含めた者達に向かつて左京がそう言った時、この場で左京と最も話したかったらうBクラスの者達が動いた。

「一之瀬、あんまり時間はないが、今しかないと思うぞ」

「……………四方君……………うん。決めた。これ以上、左京君を野放しにしておくど、何をやらかすかわからない。」

だから、前に学級委員会で決めた——私の言うことを聞く権利を行使させてもらうよ」

「は？ 一之瀬…いきなり何を」

「これから左京君は1ヶ月に1度は私と話し合いすること、それ以外でも何か問題が起こったら報連相を徹底すること。この二つを約束してもらおうよ、左京君」

「……………ははっ、それでも一之瀬はやっぱ甘いな」

左京はもつと厳しい対応を想定していたのだろう。

一瞬、呆けて笑ったからだ。

勝手をしてクラスに損害を与えた左京を責める事も問い詰める事もせず、強力な言う事を聞かせるカードまで使って甘い処分で済ませた。そして東風谷や四方は勿論、神崎や柴田も異を唱えないところを見ると、この一之瀬の発言をリーダーの決断だと認めているのだ。

「甘いかな？ でも今までやさっきの左京君の方が甘いし危なっかしいよ。これで少しでも自分の事も考えてくれるといいんだけどなあ」
「むしろ僕は自分の事しか考えてないんだけどなあ。」

———わかったよ。でも詳しくは停学明けてからにしてくれ。僕と須藤は停学とCP減点以上の処分にはならないだろうから、まだ機会はあはずだ。今はちよつと他の用もあるからな」

「うん。クラスみんなには今回の一件をある程度説明しておくね。でも左京君が戻ってきた時にも説明することっ！ これだけはやつ

てもらおうよ！」

「当然。一応、補填の見込みもあると思うから、その時にクラスへ弁明すると約束する」

「弁明じゃなくて説明ね？ 左京君がやった事を、褒めはできないけど個人的に私は否定できないし……。」

—— あっ、割り込んじやってごめんね」

櫛田が勧誘されていた時に、左京が並外れた善人だと評価していた一之瀬。

確かにこれは善人だ。

オレや櫛田、佐倉に向けてすまなそうに謝る一之瀬を見ると、左京の評価はおそらく正しい。

左京が一之瀬をリーダーと認めている風があるのは、能力や性格などではなく、こうした部分に対してかもしれない。

この上で、左京を一之瀬が使いこなせる器量があればBクラスは脅威となるだろうが、この対応と判断を見る限り一之瀬はリーダーというよりはマネージャーの適正の方が高いだろう。

そのままでも手強い存在にはなり得るが、逆に左京が一之瀬を使いこなすような事になれば、手がつけられなくなる可能性もあるという事だ。

この時のオレは無意識にその可能性を想定していた。

「あーっと、すまん。話をぶった切るけど、もう時間ないから必要になるかもしれないことを手短に言う。」

もしも僕の停学中にガチャ関係の規制がされちゃったら、バイト先のパソコンに商売の畳み方マニュアルみたいなのを作ってあるから参考にしてくれ。

佐倉、デスクトップの方に僕の名前のファイルがあるから必要な時は頼んだ。四方と櫛田、それに綾小路なら多分上手く使えるから、ちゃんと言うこと聞くんどうぞ東風谷」

「なんで私を名指しするんですか!？」

「えー、だってお前、気分や感情で動くじゃん。必要な時は誰からだろうときちんと吸収しろよ？ 僕が言えた義理でもないけどさ」

「うぐぐ、わかりましたよ。でも代わりになるべく早く停学終わらせて、今度のテストも助けてください」

「代わりにならないのだがそれは……。しかも期間は僕が決めるわけでもないし」

「あの…左京君…それはわかったけど…」

「ん？ ……ああ、佐倉がなんか冤罪の証拠だかを持つてるって話もあつたっけ？ どっかに提出されると龍園に不義理な感じになっちゃやし、最悪また狙われるかもしれないから、形があるものは龍園に会う予定がある僕に預けとくか？ SDカードとかならデータ抜いた後に返すか弁償するからさ」

「どうやら自分がいなくても大丈夫な商売の畳み方まで準備していたらしい。」

「抜け目ないというかなんというか。こういう部分を見るとやはりリアリストのやり方に見える。」

「一方、佐倉からあつさりと証拠映像（と思われる物）を預かり、それを使うこともせず龍園に渡してしまうだろう部分は、到底リアリストのすることではない。」

「この不思議な男が目指しているものが何なのか、オレにしては珍しく——いや、初めてかもしれない——興味を掻き立てられていた。」

『1年Bクラス、左京夢月くん。1年Dクラス、須藤健くん。生徒会室まで来てください』

「ちょうどその時、穏やかな効果音の後、無機質な案内が学内に響いた。」

「タイムアップのようだ。」

「おつ、意外と早かったな。んじや、みんな、また停学明けに。」

「それと四方、東風谷、佐倉、櫛田、綾小路。」

「——あとは任せた」

「休んだことでいつもの調子を取り戻したのか、もうフラつくことなく立ち上がると、いつも通りの調子で挨拶した左京は軽い足取りで進みだしていた。」

本当に軽い感じにオレや友達連中に後のことを託して……。

あまりにあっさりといなくなった為、左京が見えなくなるまで全員でなんとなく見送っていたが、誰ともなしに我に返ると今度は一番事情に詳しくそうな四方に注目が集まった。

一之瀬達途中から来たBクラスの面々も、ほとんど蚊帳の外に出されたまま全てが終わってしまったので、せめて事情くらいは知っておきたいのだろう。

櫛田もここに加わり、四方に補足していた。

東風谷だけは佐倉の手を引いて、皆から少し離れた位置で何か話し始めていた。

ただ、どちらも今のオレにとつてはどうでもいいことだ。

どうでもいい、は言い過ぎかもしれないが、優先順位は低い。

四方達と何かを話すよりも、東風谷や佐倉に確認や聞き込むよりも、したいことがオレにはあった。

今なら急げば追いつけるはずだ。

その初めての衝動のままに左京を追いついて、つい問いかけていた。

「左京」

「んあ?」

「お前にオレを葬ることができるか?」

「アホか。できてもやらねーよ。何が悲しくて友達を葬らにやならんのだ」

即答だった。

それは、『あそこ』やそれに類する場所では到底出ない発想。

……実はもう確信していた。

発想と行動力で、あの時の左京は確かにオレを上回っていた。

気づいてしまえば、認めるのが合理的だろう。

認めた上で、衝動のままこんなことを唐突に問いかけてしまったオレ自身に対しても、それを確信させた左京に対しても、不思議と内側から湧き上がってくるモノがある。

制御できないほどに『楽しい』という感情が。

オレにこんな強い感情があるとは思ってもみなかった。

「ははっ。なんとなくお前ならそう言うと思ってたぞ。」

だけど、左京との勝負は面白くなりそうだ。気が向いた時にでも誘ってくれ。左京ならいつでも受けて立つ」

「へいへい。んじゃ折角だし、いつかぶっ倒してやるよ。」

あつ、倒すであつて、葬るじゃないからな？ そこんとこそつちも…というか、そつちこそよろしく。綾小路に葬られるとか冗談じゃないし」

「ああ、わかってるさ。そのいつかを楽しみにしておく」

「わかってるならいいや。」

そんじゃあな、綾小路」

そう言い置いて、今度こそ左京は去っていった。

相変わらず力の抜けた自然体で、これから停学になるとは思えない態度だ。

半ば敵意に近いモノすら籠めた問いかけをしてもペースを崩せず、か。

本当に変な奴だ。

左京との約束。

「今度は」勝ちたいが、一体どうなることやら。

予想以上でもなく、以下でもない。

予想『外』で風変わりなオレの友達、左京夢月との勝負自体を望んでいることに、この時のオレはまだ気づいていなかった。

43、一気呵成

二度あることは三度あるという言葉がある。

二度別れたはずの綾小路が、再度追いかけてきて僕の端末を届けてくれたことである。

どうやらDクラスの教室で落としていたようだ。

しかし相変わらずよくわからない奴である。

Dクラスにも損害を出したから怒ってるかと思いきや、楽しげな雰囲気を放ちながら宣戦布告？をし合って、そのまま別れた直後にまた来て落し物を渡されたのだ。

休んでいた時も、さつきも渡す機会はいくらでもあつたらうに意味がわからない。

冷静に見えて、意外とそうじゃなかったのだろうか？

流石にバツが悪そうではあつたが、彼はきつと僕以外の友達にも空気読めない奴と認識されているに違いない。いや、届けてくれたことを普通に感謝はしているのだが。

ともあれ、何故かその綾小路に勝負？を申し込まれたので、本命とは別に何通りかの勝ち筋を探しておくことにした。

どんな勝負にするかそれぞれで条件は異なるし、言葉は物騒なモノだったが、こういう勝負は歓迎である。

僕だけ、友達あり、人数の動員あり、何でもあり。

色々想定して、お互いや参加者が楽しめる勝負を考えるのは、いくつになっても心躍る。

そうしていると、オリジナル・二次のTRPGやゲームを自作して、ネット友達と遊んだ前のニート時代が次々に思い出される。

GMとしてはそこそこだったのが、プレイヤーとして裏技を見つけ出したり作ったりするのが特に楽しかったなあ。

それに綾小路のような天才が、ただ勝負する気になってくれた幸運は何物にも代え難い。

問題は綾小路が僕との勝負を約束したことだけだ。

これを言葉通りに受け取るのは微妙だが、ほとんどの分野で軽く一蹴できるはずの凡人な僕と勝負しても、綾小路の勝ちほぼ決まっているだろう。

だが、それではお互い面白くないので、まだ勝負になる可能性が高いインドア系かそれに類する物で僕が挑んでくると彼は考えているかもしれない。

確かに手段を選ばず勝ちに行くだけなら、ハメ技イカサマ解禁のゲーム以外は、有利なプログラムを組んだ自由度の高い電脳系、あるいは運に全てを任せた運ゲーを僕は選ぶ。

しかし僕の直近の目標は学校の衆目の前で、四方が身体能力を前面に出して大活躍することだ。

だから綾小路との真剣勝負の第一弾は、勝手に運動勝負（綾小路VS四方）を設定目標にすることにした。

尤も、単純に勝負するだけなら回数制限もないだろうし、他に夏休みとかに遊びや楽しむ方向の勝負も考えようと思う。これはお互いの準備と交流の意味が強くなるが、お互いに真剣に遊ぶのには楽しさが必要である。

それに天才VS凡人転生者なんてなかなか面白そうなカードだから、友達も巻き込んだお試し企画を考えやすいのも都合がいい。対綾小路なら、最低でも僕以外に2〜3人か四方・東風谷を巻き込めなければ、勝ち目が低すぎるからだ。

ともあれ話を戻すと、盛り上がった体育祭などの佳境で、この勝負を利用して四方と同レベル以上、つまり綾小路か、あるいは学年は違うが会長との名勝負を演出したいのである。

僕自身と直接勝負するわけでもないから、綾小路がこれを僕からの勝負だと受け取ってくれるかは賭けになるが、四方と真っ向勝負をできて勝ち負けがわからない相手は、今のところ綾小路しかないのだ。

欲を言えば避けられた場合の保険として、彼らレベルの誰かも何とか対戦カードに載せておきたいが、あんな天才共は乗せるのが至難だと相場が決まっている。

綾小路は何を思ったのか乗ってくれた（いや、向こうから申し込んできた？）が、例えば会長を同じ土俵に引つ張り出す労力を考えれば、これがいかに難しいかわかるだろう。

確認したことはないが、会長も佇まいからして綾小路にも劣らない何かを持つていると僕の勘は言っている。

だが、あまり直接の接触がないせいかもしれないが、なにを持って交渉したり乗せたりすればいいのか見当も付かない。直球で頼んでみるのを最後の手段にして、情報収集しているだけになっているのが現状だ。

本気を出した四方の相手が務まるのはこの二人以外では、Dクラスで少し話した高円寺に何かの可能性を感じるのと、女子故に当たりようがない東風谷と鬼龍院先輩あたり。

もしかしたら他にもいるのかもしれないが、お膳立てに加えるには知ったばかりで不確定要素しかない高円寺ですらギリギリなのだ。準備期間も長くて3〜4ヶ月しかない。

この目論見は暗に鬼龍院先輩にほぼ成算がないとまで忠告されておいてなんだが、今回のやり取りを上手く組み込めば、本気になった綾小路と万全の四方を当てて、遊びではない名勝負を組む案もできないことはない幸運……なんじゃないだろうか？ 大勢が絡む計画なので、めっちゃ不安だが。

ただこの対戦カードさえ組めれば体育祭、もしくはスポーツ系のイベントで、野球部の奴らに能力を見せつけ四方をスカウトさせる事に現実味が出てくるから、すでにガチャの客を通して軽く根回しまでしているのだ。

……………うん。誰の同意もなく友達含む大勢を利用する計画なので、四方の野球部入部を達成できても土下座待機が必要になるだろう。

これは成否に関わらず、特に勝負を楽しみにしているとまで言ってくれた綾小路と、何も知らせていない四方には、僕史上最大級の謝罪になることを確信している。

——つて、今はそれどころじゃなかった。

あまり遅れると、また説教が追加されるかもしれない。

それが会長になるか担任になるかはわからないが、結果を覆すようなことにはならない。それなら、説教はない方がいいのだ。

時間はこれからそれなりに確保できる予定なので、その時にゆっくりと練っておこう。

僕は、取らぬ狸の皮算用を頭から振り払い、早足で生徒会室へ向かった。

生徒会室には、すでに僕以外の面子が集まっていた。

会長と橘書記のいつもの生徒会コンビに、須藤と平田、石像のように固まっている黒髪美少女。そしてB・C・Dの各クラス担任だ。

裁判がなくなつてCクラスは退いているはず。

もう手続きだけの状況で、Cクラスの担任の坂上先生だけがいるのは違和感がある。だが、それをいうならDクラス側の人数も多いので、状況が急変した結果、なんらかの不具合が発生したのかもしれない。

「その顔は、誰にやられたんですか!」 星之宮先生、早く左京君に治療をー!」

「誰とかじゃなくて、転んだんですよ。あえて言えば自分に、ですね」

「そんなわけないでしょう!? もしかして脅されているんですか?」

「いやいや、本当に転んだんですって」

「——ともかく、裁判の前に治療をしてもらってください! 話はそれからです! ほら、星之宮先生!!」

「アツハイ」

そんな中、なぜかいたCクラス担任の坂上先生が真っ先に駆け寄つてきて、えらく親身になってくれた。

この人にも裏に何かありそうな気はしてはいるのだが、腹が黒そうだったり、エロい格好で雰囲気の不気味な先生より、(たとえ演技だったとしても) ずっと親しみが持てる先生だ。

しかし裁判とか言ってたし、やはり伝達に不備があったようである。

ついでに初めて認識したが、坂上先生の剣幕に呆気に取られていたうちの担任は、腐っても本物の保健医だったみたいだ。

救急箱のような道具は持っていなかったが、冷やっこいシツプを持っていて僕に貼り付けてくれたのである。その手つきも手馴れていて、緊張はしたが少し見直した。

ただ坂上先生の勢いに押され思わず担任とハモってしまったのが仲良さ気に見えそうで、なんとなく個人的に嫌である。緊張しなくて済む坂上先生の方が担任だったらよかったと思う。

治療というか診察というか観察というかをしてくれている担任を見ながら、しみじみそう考えてしまったのがよくなかったのだろう。

つい、心の声が漏れてしまった。

「担任を坂上先生とチェンジで」

「ぶふあっ!! くくっ、チェンジ…ぶふ、ふふっ」

「治療してるのに、なんてこと言うの!!」

「……ま、まあまあ、星之宮先生。左京君も本気ではないでしょうし」

「いえ、本気といえば本気ですが」

「くっくくく」

「担任のチェンジなんてできないからね!? 前から思ってたけど、左京君は私の事を何だと思ってるのよ!? それと、佐枝ちゃんはいつまで笑ってるの!!」

「うっくくく」

「……………ふう、すまん。取り乱した」

相変わらず担任は元気である。

というか基本的に教師は元気なのかもしれない。

坂上先生の最初の勢いや、茶柱先生のクールを装いながらなんとか明後日の方向を向いて吹き出す様は、まるで僕がイメージする元気な

新入社員のようなのだ。

しかし関係ないが、担任の普段の間延びした口調は作っていたと見て間違いないと今、確信した。

こういう部分が腹黒っぽいのだと、いつか自他共に認識させたいものだ。

それにしても、茶柱先生に笑われ、坂上先生には困惑されていたところをみると、意外と担任は先生間ではいじられキャラだったりするのだろうか？

「話がややこしくなりますから、左京君は少し黙るように。」

会長、先生方の為にも先に状況説明した方がよろしいかと」

「……そうだな。橘、プロジェクトの準備をしてくれ。」

先生方、まずはこちらのモニターをご覧ください」

先生達の元気の源やいじられキャラについて考えていると、仕事モードの橘書記に黙るように言われた。

声の大きさ的には担任達の方が騒いでいたというのに、僕が注意されたのだ。

これは権力を傘にした横暴な職権乱用の一例だろう。または噂に聞く忖度というものかもしれない。

生徒会であろうとも、低きに流れるということか。

——とか、なんか難癖つけて出て行きたくなるほど面倒になってきた。

勿論、僕は結果が決まっているからといって、物事の順序も説明もすつ飛ばして良いわけではない事は理解している。つまり面倒だが待つしかないことも……。

それに、これが終わればきちんと停学になるだろうし、停学対象のもう一方の須藤はともかく、平田や黒髪女子のお付二人も静かにしている。

ここは、ぐつと我慢して大人しく礼儀正しく振舞うべきだろう。

先生達に乗せられて僕まで騒げば、收拾をつけられるついでに処分も上乘せされるかもしれない。

というか、そもそもなんで先生達が騒いでるんだよ。

常識のない大人達だ。

一部騒いでいたが、生徒は全体的に静かな中。

橘書記と会長の声で一時沈静化し、全員でモニターへ注目することになった。

僕も貼られたばかりのシップの冷たさを感じながら、つい30分程前のDクラスの様子が上映されるモニターに視線を移した。

その結果、起こったことは――。

「「「「.....」」」」

圧倒的沈黙である。

B・Dの担任は佐倉につかみ掛かる須藤↓僕のドロップキックらへんから呆然と見ていたし、会長と橘書記は電話していたのがまさかDクラス内だったと考えていなかったようで、僕の停学宣言を見聞きして表情が消えた。

Dクラスの奴らも、固まっている女子以外は無言のまま、上映が終わったモニターを見続けている。

比較的關係が薄かった坂上先生すら、龍園が馬鹿笑いして訴えを取り下げる指示をしたあたりから口を開いていな...開きっぱなしだ。

うんまあ.....重々しいね!!

空気が重くなってきて鬱陶しいことこの上ない。

面倒臭さが限界になってきたので、もうさっさと停学手続きを済ませて帰ろうと思い、僕が率先して口火を切った。

「えー、そういうことですので、明確に暴行を加えた僕と須藤は停学。東風谷及び須藤と揉めていた3人には、嚴重注意か奉仕活動などがよろしいんじゃないでしょうか?」

「いやいや! 左京君は思い切り須藤君に殴られているでしょう!」

映像に残っている以上、転んだなどという言い訳はできませんよ!!」「ああ、あれはちよつとぶつかって転がったんですよ。その際、何かが顔に当たった感触があったので、殴られた感じに見えちゃったんでしょうね」

「いやいやいやいや!! これを見る限り、左京君はあの女生徒を助け

ようとした被害者でしよう!? やっぱり脅されてるんじゃないですか!?!」

「んだとっ!! つなこと「脅されている!!!」それは穏やかではありませんね。ですが、そんな事実はありませんよ。僕は本当に転んだだけですよ」……」

全員が無言の間にまともに入ろうとしたら、我に返った坂上先生がヒートアップして、須藤にまで延焼しそうになった。

なんとか大声で遮ることはできたが、想定以上に燃え上がりやすい須藤を見て、アフターケアの難易度がヤバいことを今更ながら悟る。

須藤と坂上先生の相性が最悪っぽいのに加え、元々動物に沈黙などという知恵はないのだ。だから一気呵成に勢いで全てを流してしまう他の選択はないだろう。

何故か坂上先生と須藤が黙り込んだ今が好機。

だから——会長：早く！

早く処分を下して!!

じゃないと、折角まとまったのに別の問題が発生してしまう。

と、会長に念を送っていたのが届いたのか、ようやく口を開いてくれた。

「坂上先生、左京、須藤の3名は静粛に。

異例ですが、左京夢月より要請のあったこの証拠映像に加え、申し出てきた処分を元に手配していました。

暴力を振るった証拠のある左京・須藤両名には1週間の停学。

またしっかり確認はできませんが、暴力的挙動の見えた東風谷。怪我をして訴えを起こしながら僅かな期間で訴えを取り下げた石崎、小宮、近藤。こちらの4名には、各担任と学年主任より嚴重注意の処分をお願いします」

ああは主張したが、ワンチャン東風谷は見逃してくれないかな、と思っただけど流石に無理があったようだ。

「それと各クラスにペナルティとして、クラスポイントの減点を行います。

生徒会条項に照らし合わせ、B・Dクラスには50CP、Cクラス

には30CPの減点ということになります。

さて、ここまで何か異論はありますでしょうか？」

減点の計算が少しおかしいのは、多分東風谷に減点ができなかったか、僕の方にまとめたからだろう。

客観的に見て、3クラス中で最も問題が少なかったBクラスに一番重い処分が下されると、表向きの公平性が崩れるからだ。だから『実力』とやらを重視するなら、最高でもDクラスと同等の処分にすると思っていた。

つまり、これは満足のいく結果である。

「異論ありません！」

なので、早速停学の手続きに入りたいのですがっ!？」

「左京君……なんでそんなに嬉しげなの？」

「嬉しくはないですよ？ でも結果が決まってるなら、その結果を受けてどうするか考えた方が楽しいじゃないですか。それに僕はやれることはやったし、色々友達に任せることもできたので、退学にさえならなければ満足だったんです。

なので——会長」

「……」

「温情ある措置、ありがとうございます！」

「——ッ」

なんか変に見られているが、以前担任がした発言しかしていないので気にしないでいいだろう。

それと僕が嬉しげに見えるとすれば、須藤の短気さを見て焦つたのを察して手順を簡略化し、スピーディに事を進めてくれた部分だ。この場にいることを長引かせたら、本気で退学になりかねない危うさを須藤に感じていたので本当に助かった。

しかもこの場には興奮気味な坂上先生もいたので、須藤にとって挑発的な発言に反応して逆上……こんな展開があつた可能性は否定できない。

だから逆に言うと、もしも生徒会長や理事長、この場に揃つた面子や状況などが違えば、多少強引にはなるが退学処分にもなり得ていた

と思う。十中八九ないと確信までしていたけど、可能か不可能かといえば可能だったのだ。

それを理解した上で、退学どころか停学期間を1週間なんて短期に設定する配慮までされて感謝しないなどありえない。

それにもう一つの要因。

当初は須藤を抑えてくれると密かに期待していた平田と黒髪女子だ。

何か躊躇っているのか動き出しが一步遅れて結局ほとんど動かない平田に、終始石像になっただけの女子。

高校1年なのだから仕方ないとも思えど、もうこの二人は動いてくれたらラッキー程度にしか思えなかった。期待外れである。

……というか、何故にほぼ関係ない僕と坂上先生が須藤何某の処遇を争っていたのだろうか？ 退学にさせる気はなかったとはいえ、助ける気も義理もなかったはずなのだが。

平田はまだ一応須藤を抑えてようとしていたが、あの女子はマジでずっと固まってただけだったので本当に何故この場にいたのか最後まで謎だったくらいだ。

ここは僕じゃなくて、同じクラスのあの二人や担任の茶柱先生が須藤を弁護したりフォロワーする場面だろうに、ほとんど動きも見せないとか……。

そのつもりがあつたのなら、きちんと仕事をしてほしかった。

僕の役目ではないアフターケアも最低限やったし、これで文句がある奴は僕を引き込んだ櫛田と綾小路までどうぞ、と言い放つてやる。丸投げ祭りだ。

特に、今更なにやら神妙な感じになっている須藤に向けて、そう念じてやった。

まあなんにしろ、これで幕引きである。

その後もちよつとしたひと悶着はあつたものの、無事担任から停学手続きをもらうことができた。

苦節2時間。

ようやく……本当にようやくトラブルは終わったので、これで僕の
1週間限定の停学ライフは幕を開けることだろう。
全く。適当に頼みを承諾したら、えらい目にあつたものだ。

3章、非日常サバイバル 44、誓約

小東方高育桜。

これは停学中の空き時間に考案した綾小路用のシューティングゲーム企画である。

自機は、綾小路・東風谷・四方の選択式で、道中ステージを潜り抜け、次々現れる6体のボスを撃破すればクリアというシンプルなシステムだ。ちなみにタイトルに関しては、それぞれの苗字から良さ気な一文字を拝借しただけなので他意はない。

つまり、比較的プログラミングが楽なシューティングに鬼畜な弾幕を加え、仮想プレイヤー・綾小路に敗北をプレゼントするつもりである。

遊びとはいえ、やるからには完璧に勝つつもりでやる。

それが美学に沿った心意気というものだろう。

何気にまだ構想段階だというのに、ラスボス（予定）『佐倉愛里』の猛攻の前に沈む綾小路を想像すると、いくらでも煽り言葉が浮かんでくる。格上にイキる楽しさを知ってしまったので、なるべく早く完成させたいものだ。

交流あるかは知らないが、あの内弁慶に「桜の下で散ってください、綾小路君！」とか煽られる綾小路の反応が今から楽しみで仕方ない。

尤も、シューティングはパターンの組み合わせだ。

反射神経や操作技術だけでもある程度クリアできると思うが、安全地帯や要領を学習されれば綾小路には通じなくなるだろう。

だからその対策に、四方と東風谷にテストプレイを頼んで、クリア不可能ギリギリを攻めることで可能な限り余裕を削る設計でいく。

更に難易度変更とは別に、当たり判定と火力が小さめだがホーミン

グ性能のある四方機と、火力特化の東風谷機という選択肢を作ること
で、スタンダードな綾小路機との差別化を図り、初見なら陥る可能性
が高いお試しプレイで後半部分の試行回数をここで少しでも削る。

おまけにこの思惑通りにいなくても、僕や佐倉のような一般人が
遊ぶのにも楽しい機能なので、付けておいて損はないという計算だ。

無理をすれば夏休み中に完成させられると思うが、折角ならクオリ
ティやイラスト・音楽も凝ってみたい。

この企画、じっくり煮詰めてVS綾小路の第2弾に採用しよう。

しかし細かい勝利条件は作ってから考えるが、話しぶりからゲーム
にあまり詳しくなさそうな綾小路に鬼畜難易度をぶつける企画。

もうこの時点で勝ち確といっても過言ではないのではなからうか
？

自分で言うのもなんだが、この狡猾な対綾小路戦略を思えば心の底
から笑いがこみ上げてくる。

「ふわぁーっはっはっは!!! これは勝った！ 第2部完!! 皆様、お
疲れ様でしたー!!」

「おいっ!!! 何時だと思ってるんだ!! うるせえ!!」

「ご、ごめんなさい〜」

怒・ら・れ・た。

勝ち確妄想で思わず高笑いをしてしまい、当然のように隣人からク
レームが入った停学初日の夜。

この寮、防音がしっかりしてると思ってたけど、流石に窓を開けて
深夜テンションの高笑いはダメだったか。

これから気をつけよう。

停学が執行される7月4日。

担任と手続きした次の日から停学期間に入るとのことだったので、
なるべく外出は控える為にバイト先へ寄って休暇申請をしてきた。

ついでにノートパソコンやポケットWiFiも借りて、停学中の過
ごし方などをググっていたら、不意にアイデアが湧き出したのだ。

罰則的な位置づけである課題は、本来高1の生徒だけでは不可能な

数Ⅲやベルヌーイの定理などの問題がいくつかあったものの量自体はそれほど多くなく、数日午前の時間を費やせば達成できるモノだった。

少し時間がかかりそうなのは、アステカ文明滅亡時についての小論文くらいだろう。コルテスの手腕は色々面白いので、改めて調べながら書いてみるつもりなのだ。

そしてこの課題なら、救済措置と思われる教師の手助け（補習的な講義か？）がなくても問題ないと判断できたので、対綾小路へのサブ案を考えていたらこの企画を思いついたというわけだ。

まあ負けてもいいのだが、やっぱり勝った方が気持ちがいいのである。

だからつい夢中になっていたら、深夜テンションも相まって失敗してしまった。

窓も開けたままだったので、下手したら上級生や職員の寮にまで響き渡っていたかもしれない。

この学校に新たな怪談が生まれたらどうしよう。

とまあ、初日にそんなちよつとした失敗をしてしまったが、午前はその日の分と決めた課題をこなし、昼以降は調べ物をしたりコードを打ち込んだり、と充実した停学ライフを過ごした。

1週間なんて、あつという間だった。

なんなら期末テスト直前まで停学でよかったかも、と楽観までしていた。

そんな舐めた考えのまま迎えた、停学明け前日の7月11日夜。

唐突に部屋に現れた青娥さんが興奮しながら齎した情報と届けてきた書類を確認してしまった事で、天国から地獄に落ちて、より混乱状態を悪化させてしまうことになる。

ところで関係ないが。

状況把握後にどうでもよくなったが、青娥さんが現れる時に大穴を部屋に開けて、去ってしばらくすると跡形もなくなった穴。

元に戻って本当によかった。

とある情報を聞いた上で書類を確認して混乱した状態のまま、部屋

に人が通れるほどの穴が開いてたら寝られなくなっていただろう。
無駄にテンション高くなっている青娥さんには、二度と訪れてほしくないな、と穴の開いていた壁を見ながら強く思った。

7月12日。

停学期間の最終日だが、僕は緊急で理事長と話すことができたので、アポを取って昼過ぎから理事長室で話していた。

その結果、薄々気づいていた気が重くなる事態が確定した。

綾小路に謝らなければならなくなったのである。

しかもこの時は、生徒達がほぼ下校して、戸締りも終わっている19時現在。

それなのに、綾小路もDクラス担任に呼び出されているとのこと
で、まだ校舎に残っているらしい。

その情報どおり、進路指導室から出てくる綾小路が見えた時は、「不幸だー」とか某上条さんのごとく嘆きたくなった。

せめて濁流のようになっていく心の整理をしてからにしたかったが、綾小路はそんな甘えを許してくれないようだ。金曜の夜に部屋へ訪れるよりはまだマシだったけども。

約1週間ぶりに直接見る綾小路は、何かあったのか荒れた雰囲気に見える。

とはいえ、これは停学期間中に綾小路に作ってしまった僕の負い目のせいで、そう見えるだけかもしれない。

正直、話すのは嫌だが素直に打ち明けて謝罪しないと、後でバレた時に終わると確信しているのだ。

なので軽く挨拶し合ったところで、まず話し合いの状況を作るため

に切り込んだ。

「ところで綾小路。少し真面目な話があるんだが、今から時間あるか？」

「？……珍しいな、左京がそう言ってくるなんて」

「うっ、自覚はしてる。だけど、それくらい重要な話なんだ。だからというわけじゃないけど、僕の部屋で落ち着いて話したいんだが……」

「ああ、別にいいぞ」

「……ありがとう。重ね重ね恩に着る」

「……？」

僕の部屋に不思議そうな綾小路を伴い、座布団3枚を全て綾小路に回して、いそいそと謹製の冷茶を淹れる。そしてお茶請けに昼に弁当用として作ったものの食べる気にならなかつた焼きおむすびも添えて、できる限りのもてなしでこれから備える。

気休めのもてなしをした僕は、味がわからないのもつたいたいなが冷茶を一気飲みして、覚悟を決めると前振りから話を切り出した。

「最初に言っておく。これから、綾小路にとって……その、不快だったり…僕をぶっ飛ばしたくなったりする…かもな話をする。

言い訳するなら、けしてわざとじゃなく本当に後戻りできなくなつてから発覚したから、どうしようもなかつたという事を考慮に入れた上で、落ち着いて聞いてほしい」

「本当になんなんだ？ 左京が歯切れ悪い言い方になるのを初めて見たぞ」

興味を持つてくれたのはありがたいが、こちらは前置き時点で、ドキドキが止まらない。勿論、悪い意味で。

この状態はすごく心臓に悪そうなので、もう覚悟を決めて一気に言ってしまうことにした。

「あー、その……だな。

——あ、綾小路の父ちゃんを学校から出禁にしてみました！ すまん!!!」

「……………はっ。」

「本当にすまん!!!」

謝って済むことじゃないと思うが、知らなかったんだ。僕の停学：の少し前、強引な買収を仕掛けてきたのも向こうだったし、やり方は企業秘密だけど防衛機構的なモノで撃退しちゃったから、送られてきた誓約書の名前でようやく綾小路の父ちゃんじゃないかと気づいて、理事長に確認を取ったらビンゴだったっていう……」

本当は青娥さんの不思議パワーで潜入&洗脳に近い逆撃をしたらしいが、詳しくは知らない。その上、術やら不思議パワーやらは勿論、青娥さんがやったという事まで口外禁止なので、無理にもほどがあるレベルでぼかしてしまった。

こんなやり方で、ストーカーの件での裏約束を利用してくるとは夢にも思わなかった。

ホワイトナイトもまともに頼めないどころか、株式すらないも同然で、できたばかりの会社に、一学生と顧問、アイドルだけの社員3名構成。

この状況で、政府との繋がりがあると思われ、かなりの規模が想定される組織を撃退とか説得力がなさすぎる。

無理無謀に加えて、無茶振りすぎてつらい。

そりゃ、理事長も電話越しにもわかるレベルで呆然として、速攻で綾小路の父ちゃんに確認の連絡入れるよ。

あつちの分野も規模もわからないけど、外からこの学校に介入できる時点で相当な金か権力を持つてる者なのはわかる。それを金も権力もない学生2人と一応大人枠(仙人)1人が作ったばかりの会社が、返り討ちにしたのだ。

しかも理事長から裏も取れてしまったので、笑うしかないことにこの現実味がないことは事実だと確定してしまった。

この事実を、明かせる情報だけでは信じてもらうことすら困難だろう。

そして証拠を見せて信じてもらえたとしても、それはそれで敵対しかねないのだ。

それでもなんとか動きを止めずに、恐る恐る綾小路の父ちゃんが送ってきたというその証拠、誓約書(署名捺印付き)の写しもちやぶ

台に出してみるが、怖くて綾小路の顔が見られない。

億が一の確率を引いて「名前が違うから別人だぞ」とか言っただけだ。

『私、綾小路 篤臣は今後、高度育成高等学校の規則を遵守し、敷地内に入ることをいたしません』

『桜プロダクション及びその社員への手出しをいたしません』

誓約書には他にも何項目か書いてあるが、綾小路に多少でも関係あるのはこの2項目だろう。

道理を引っ込ませていきなり無理を通そうとしてきたので自業自得なのだが、不可侵の誓約書を書かせてしまっているのだ。

これを見ているだろう無言のままの綾小路が怖い。

ここは元々外部との接触は禁止の場所ではあるが、政府などの権力ある組織や仕入れが必要な商業関係など小さい抜け道はいくつかある。

この誓約書にも自分以外にやらせるとか、明確な期間や今後などの文言もない（抜け道がある）ので、綾小路の父ちゃんや学校のこともそれほど言えないが、普通に桜プロダクションをスルーしてくれてたかなと思う。

ちなみに、例えば佐倉がアイドルとして活動するのも、こうした抜け道を利用して青娥さんが取ってきた仕事で稼いでいる。

何らかのメッセージになりそうな部分は佐倉と僕で消したり編集している成果か、外部との接触禁止事項的にはグレーゾーンと目こぼしされているのか、今のところはこれでお咎めはない。

……この抜け道と理事長へのコネがあれば、桜プロダクションへの手出しは行きがけの駄賃程度の意味しかなかっただろうに。と、今更だが強く言いたい。

まあ端的にいうと、綾小路の父ちゃんはその抜け道を使って息子に接触しようとしていて、ついでにな・ぜ・か桜プロダクションを攻撃。

——そして、理の外側の仙人から返り討ちにあったのだ。

もうアホかと。

そんなことができるなら、普通に理事長を通して接触しろよと。

鳶が鷹を産むどころか、馬鹿が天才を産んだのかと。

まあ綾小路の父ちゃんか鳶か馬鹿かはともかく、普通の会社だったら確実に潰されていたこのやり方は強引にもほどがあるだろう。

しかも回りくどいことをした上で、他人である僕や青娥さん含む桜プロダクションに面倒事を振りまき、挙句返り討ちにした後も友達の子綾小路へ負い目を持たせるとか。

もうマジで、はた迷惑な馬鹿親にしか思えない。

権力者であるのはほぼ確実なのだが。

ふう。落ち着け。

息子には関係ないし、なんなら綾小路はもう友達の一人なのだ。その親族が馬鹿親なのは、いっそ生暖かい目で流してしまおう。

権力者だろう綾小路の父が、何でこんなでできたばかりの小企業に攻撃してきたのかを含め色々不明点もまだ多いが、理由も伝達せずに攻撃してきて返り討ちにあったのだから、この結果は当然だと納得するしかない。

しかし、その結果によって父と息子の接触もできなくなった。

もし家族が危篤とかの緊急性がある理由で焦って綾小路に接触しようとしていたのなら、謝っても謝りきれない。

勿論、息子小路のみだ。馬鹿親のことなど知ったことか。

「……………ま、待て待て待て待てっ!! どうしてそうなった!! 何故こんなことになっている!？」

「ともかくお茶でも飲んで落ち着いてくれ。きちんと1から話す」

沈黙を破って綾小路が慌てるのも無理はない。

規則違反を犯してまで自分に接触しようとした父と、それを阻止した僕（ホントは僕じゃないが）。綾小路家がどんな関係かはわからないが、良好な仲だったら僕を敵視してもおかしくはないのだ。それに仲が悪くても何があったのか気になる事だろう。

まあ、この無表情で「パパ、お願い? 誰々を消して?」みたいな綾小路は僕の想像限界を超えているので、大好きな父ちゃんに甘える綾小路とかは考えたくないわけだが…………。

ともかく少しでもいいので綾小路にいつもの冷静さを取り戻すよう促し、自分も喉の渇きを癒すためにお茶を注ぎなおして一息に飲み干した。

あれだけ取り乱しても、その頃には表面上は平静っぽくなった綾小路はやはり流石といえよう。

「あー、まず前提として中間テスト後に佐倉の件で会社を作ったんだよ」

「……この桜プロダクション、というやつか？」

「そうそう。この時は警察を動かす後押し目的で起業したんだ。それである時は結局必要になる前に終わらせちゃったけど、話せない事情もあって続けて運営してたというわけ」

「その会社にあの男が圧力が買収を仕掛けた？」

あの男？ 家族仲が悪いのだろうか？

まあ、それはいいや。

混乱はしてるみたいだが、一応正しく認識はできているみたいだから、頷いて続きを話す。

「最初は先月末だったかな。あの赤髪に蹴り食らわせて停学になる少し前、会社の業務や事務処理してたら、何者か——綾小路の父だったが——にいきなり営業妨害と強引な買収にしか見えない攻撃をされたんだよ」

「それでどうしたんだ？」

「うんまあ。さっきも言ったけど、企業秘密に触れないように話すとふわふわしてるんだが……少しなんやかやでござったついた後に、その：返り討ちに」

「……」

「それで、その誓約書が届いてすぐ理事長に確認を取ってみたら、綾小路の父ちゃんだったという罊が発動。ちなみにそれが昨日のことだったりする」

「……」

我ながらふざけてるかのような言い分だが、僕は真剣である。

邪仙（もう、こう呼んでもいいんじゃないかな）が陥れてきた面倒

事に話せない箇所多数の中で、なんとか繋げようとしたらこうなったのだ。

それでも知った時期だけは後付だが、一応嘘ではない。

だが、この色々バレバレでガバガバだろう言い分なのに、誓約書という明確な証拠はあるのだ。

この不自然さ全開っぷりのせいで、無言で考え込んでいる綾小路に敵対されたら邪仙認定を確定させてやる。

実際の停学中は、青娥さんがほぼ運営していた期間なので、この辺も又聞きと推測が混じるが、僕が作成した覚えのない誓約書（僕の名捺印付き）や理事長への確認では本当に驚愕したのだ。

驚愕というか、やられちゃった感が溢れすぎて、しばらくどうしていいかわからないくらい混乱した。というか未だに混乱してたりする。

主に、裏約束があったとはいえ、青娥さんの偽造技術と僕に全てを丸投げしてやりたい放題した上で、『企業秘密』とやらで言えない事を増やしまくってくれやがった奔放さに……。

「——改めて本気で謝る。」

反撃した事自体は悪いと思ってないが、もし綾小路への家族内の緊急連絡目的とかだったら洒落にならないから、これからなんとか用件や理由を探ってみる。万が一にも、手遅れにならないうちになるべく早く……」

「左京、謝罪も探る必要もない。むしろオレが感謝したいくらいだ」

「は？ え、深入りするつもりはないけど、緊急性があるかもしれないぞぞぞ？」

「それはない。」

……詳しくは言えないが、オレは父親と確執があつてな。この学校に來た理由の一つも、外部との接触禁止が使えろと思つたからなんだ。だからこれ以上、接触したり探りを入れたりしないでくれ」

とはいえ、仙人や大人の事情は綾小路には関係ない。

なので誠心誠意謝って許しを請い、言えない部分はそのままに、望んだらなんとか綾小路の父ちゃんへの連絡を取れるようにしなければ

ばならない。

このことは理事長に交渉してもいるし、「本人が望むなら」と意味深な許可のようなものももらってある。父ちゃん側の都合が合えば、直接会うことすら可能かもしれない。

だから、こう申し出たのだが――。

綾小路は思いのほか穏やかな声で連絡を取ることを断り、何故か感謝？までしてきた。

僕としては奔走しなくてよくなるので助かるが、本当にいいのだろうか。確かに綾小路からは、僕に対して怒りなどの負の感情を感じないが……。

しかし、どんな家族なんだ？

僕がそんな疑問を持ったことに気づいたのか、綾小路は露骨に話題を変えた。

思うこともあったがなんとなく深く触れてほしくなさそうだったので、それに乗る。僕の方も深掘りされるほどボロが出るのはわかりきっているので、好都合ではあるのだ。

「ところで左京に聞きたいんだが、あの男はこの学校で直接会ったのか？」

「へ？ いや、理事長がテレビ通話はしたらしいけど、僕はメールのやり取りを数回しただけだ。

理事長が言うには、忙しくて動けないので、入校許可を貰う手間が惜しい。だから適当な場所を乗っ取るとかして、敷地内の足場を作って何らかの正当性を得よう、って理由らしい。んで、そんな理由なら、そもそも学校には来てないんじゃないかな」

「……そうか。来ていない、か」

関係なさそうな質問をしてきた綾小路の表情は変わっていない。

しかし、僕が返答したあたりから怒ってるっぽい空気が滲み出てきていた。

「ど、どうした？ やっぱり怒ってたりするか？」

「いいや。『左京』には怒っていない。

――ま、ちよつとした思い出し怒りってやつだな」

「？」

だめだ。

やっぱり、綾小路は内心が読みにくい。

僕の勘というか感覚が罪悪感を伴って誤作動を起こしてるのか、いつも通りのわけわからない奴……に見えて、それなりに怒っているように見えてしまう。その対象が僕じゃないのが嘘ではないと、なんとなくわかるだけだ。

ただ、思い出したかのように普通に焼きおむすびを食べ始めたし、適当なおかずも作って謝罪代わりにすることにしよう。

この話も終わらせたいようなので、難しい話はやめて切り替えることにする。

なにより、綾小路がパクついているのを見てると僕まで腹が減ってきた。

一応、和解？したことに安心したからだろう。

昼を食べられなかったツケがここで回ってきたのだ。

綾小路に待ってもらおうように一声かけてから、僕は台所に向かい、残っている食材から手早く食べる物を作り始めた。

この後は食事を挟んで、二人共自然に話題を変えていた。

なんかこの流れに覚えがあるなど思ったら、初対面の青娥さんに勧誘された時となんとなく似てたからだった。僕が青娥さんポジションっぽかったけども。

ということは、お互い目の前の面倒事に対して現実逃避していたのかもしれない。

まあ、盛り上がることこそなかったが、ちよこちよこ描いていた絵を見せたり、小論文用の読み終わったテスカトリポカを貸したり、電気を消して天体観測したりと意外と普通に楽しめた。仕事関係、ガチャやクラスのことすら話に上らなかったからかもしれない。

そうして過ごせた為か、今では綾小路は本当に怒っていなかったよな気がしている。

だって怒ってたら、雑談とかせずに帰ってるだろうし……。

だけど、綾小路の父ちゃんの問題もだが、須藤の停学でも。そして言えないが少し先の未来の事でも。

今、口に出す謝罪は必要だと思い、帰り際にもう一度、誠心誠意を込めた感謝と謝罪を伝えておいた。

最後の最後だったからか、綾小路は珍しく目に見えるほど動揺してようだったが、なんとか正しく受け取ってくれたと思う。

複雑な家庭っぽい一面が見えたり、彼にも色々複雑な事情があるのだろう。

45、チカラ

僕が躊躇うことなく停学という手段を取ることができたのは、様々な幸運を認識していたからだった。

第3者の褒め言葉はどんな時も一番効果がある。この「伯爵夫人はスパイ」という作品で出てくる台詞をご存知だろうか？

もつと言えば、これは第3者から得られた情報は高い信頼性を感じるという心理効果のことでウインザー効果というのだが、櫛田はこの第3者を非常に上手く乗せることに長けていた。

つまり彼女は客商売をはじめ、宣伝や情報戦において、やり方・使い方次第では得がたい能力の持ち主と言えるのだ。

しかも似た性質を持つ一之瀬や龍園といった強い信条や信念を持つ者と違い、意に沿う契約さえ結べれば最大限の能力を最小限の労力で発揮してくれる。そして上手く転がってくれば、時が経つにつれ結果を出してますます有名になるので、ハロー効果まで付いてくるのだ。

その櫛田と親しい友達である東風谷がいて、四方や綾小路のある程度のサポートがあれば、ぶつちやけ客商売に僕と佐倉は必要ない。

更に男である以上、この恋人ガチャという商売においては櫛田より効果が落ちるが、何気に営業マンの適正が高いと思われる戸塚にも、必要なら僕の浮いた分の分け前で手助けを求めよう四方にメールしておいた。あいつはあいつで問題もあるが、OKしてくれたら葛城も付いてくる可能性は高いだろうし、支障は少ししか出ないだろう。呼ぶかはわからないけども。

あと佐倉が僕の停学期間中、ガチャとバイトのどちらを優先するかはわからないが、この機会に青娥さんなら「佐倉さんが必要ですわ」的な言葉をかけるはずだ。

それを言うだけで、僕の分の穴を塞ぐことができると考えさせる事ができ、上手くすれば依存度まで上げられるからだ。やらない手はない。

自分を必要だと言ってくられて実際に役立つ職場と、言ってくれたとしてもそれほど役に立てるわけではない職場。

この状況なら佐倉の性格上、僕の穴埋めができるバイトを選んでくれる確率が高いと思う。

佐倉を利用するみたい……いや、しつかり利用していて気分は良くないが、だからこそガチャもバイト先も大丈夫だと考えていた。

僕は東風谷や櫛田、青娥さんや佐倉を信じて頼れる幸運を認識していた。

四方や綾小路、他友達もいるし、凡人一人がいなくても何とかなるに違いない、と。

バイトといい、ガチャといい、僕は非常に幸運である。

そう考えていたから、奇しくも停学明け直後に最後のガチャの営業日が重なっても心配しておらず、実際に東風谷と櫛田主導で問題はほぼ潰してくれていた。残っていた仕事は、最終日の精算と生徒会・学校への提出書類くらいである。

関係者が全員集合していたので、佐倉からもバイト方面に問題なかった事を教えてもらったのもよかった。

なぜかという、前日の土曜にバイト先に顔を出しているのだが、憎たらしいほどニコニコな笑顔の青娥さんへ仕事しながら苦言を呈することに終始していたので、休み中の事を詳しく聞けなかったのだ。

結果はどこ吹く風とばかりに、変な羽衣やるからと再度仙人の勧誘をされただけで終わったが……。てか、野郎が羽衣もらってどうするんだよ。

勿論断ったが、他人（今回でいえば綾小路）へ迷惑をかける系の暇つぶしはやめてください、とだけは強く言っておいた。

ただ、おそらく意味はないだろう。

僕と同じく、やりたいことを我慢できる性質ならあの笑顔はない。佐倉の分も残ってるし、ヤツはまたやると確信している。

なぜなら、僕ならそうするからだ。

ガチャ最終日の営業では、何人が僕個人への客がいたのは予想外だが、綾小路が連れてきた須藤と謝りあって、本当に謝るべき佐倉へと流したり。Cクラスの元凸凹顔3人へ龍園に会いに行くことを改めて約束して、ぬるつといた椎名へと流したり。

こんな感じに、他に対応できる人がいることがほとんどだった。つまり、客数以外はいつも通りだったといってもいいだろう。

数少ない人任せにできなかった者も終了間際に訪れたので、精算後の打ち上げに誘い、OKをもらって事なきを得た。

その際、左右で佐倉と綾小路が大口を開けてボーっとしていたので、偶々持っていたチョコボールを放り込んだら、二人ともむせてしまった。まあ、一時的に待たせることになった客には受けたから結果オーライだろう。

二人には正直、すまんと言えない。

出来心だったのだ。

ともあれ、最終日であるからか過去最大の盛況さを見せた恋人ガチャは、こうして恙無く終了した。

終了したということは、やることは一つである。

そう打ち上げという名目の宴会だ。

尤も、今回は停学で途中退場した僕の主催ではなく、この商売を成功へと導いた中心人物、榎田と東風谷が開いた。東風谷は最初に榎田と二人で「乾杯」と宣言した後は、当たり前のような顔で普段と変わらず飯を食い始めたが、あの引きこもり気質が開いたことには変わりはない。

いや、もう引きこもり気質からは卒業したのかもしれない。

なお、面子は榎田に天文部員、佐倉、綾小路。加えて、後半代わる代わる手伝ってくれたという椎名、葛城、戸塚。

それと、東風谷が連れてきた姫野というクラスメイトの女子だ。

彼女は、僕とも何度かグループ活動で一緒になったツインテール女子なのだが、東風谷と交流があるとは知らなかった。ついでに名前も今まで知らなかったが、話す前に知れたのでノープログラムだろう。

もう一人僕を訪ねてきた客もいるにはいるのだが、僕に用事がある
と察したのか他の理由か、「私には似合わない質素さだが、なかなか風
情のある店だねえ」と平然と宴会の方に混ざって優雅に食事を始めて
いる。

この大物感を醸す彼の名は高円寺。

何故僕を訪ねてきたかはまだわからないが、待つてくれていると受
け取って食事を共にすることにしたのだ。

なので待つてもらった対価に、彼だけは僕が料金を支払うことにし
ている。

ちなみに僕を含めた他の人には、稼いだポイントの余りで払うと最
初に榎田が言っていた。

ともかく、そうして宴もたけなわになった頃。

僕は早速、行動に移した。

榎田と戸塚以外は基本静かに飲み食いするタイプばかりなので、話
を切り出しやすいのはこの集まりの美点である。

「さて、本日集まってもらったのは他でもない……」

「集めたのは桔梗さんと私で、これはガチャの打ち上げなんですけど
ね」

「……東風谷。初手から僕を泣かせたいのか？ 泣くぞ？ 高1男子
が年甲斐も遠慮もなく泣くからな？ 本気だぞ」

「いいから本題を言え。お前に付き合っていると、何かやろうとしてる
のは否応なくわかつちゃうんだよ」

Dクラスで勝手に真っ先に動いて停学になったからか、東風谷や四
方の当たりがきつい気がする。

一応、宴会の最初に感謝と謝罪はしたのだが……。

「……よろしい。次なる目標はこれだ」

それら冷たい目にも負けず準備してきた紙を広げ、僕は今回、最優
先で勧誘したい者を真っ直ぐに見て、目標をぶち上げた。

『綾小路打倒計画Ⅱ』

「……………おい」

綾小路が何か言いたげに見つめてくるが、とりあえず無視である。

「というわけで、綾小路を打倒する計画を練ってきた。

最低限の骨子は停学中に作成済みなので、より洗練させるために力を借りたい」

「おおっ！　そういうことなら賛成です。綾なんとかを陥れる計画なんですかね!?!」

「いやいや！　というか何がというわけでなんだよ。いきなりそんなこと言われても、わけわからないぞ!?!」

「……知ってはいたが……こいつ、マジでなにをやらかしてくるかわからん。あんなことがあった2日後に、こんな形で真正面からとか……」

「僕が友達を陥れる計画をこんな場で言い出すわけないだろ！　いい加減にしろっ!」

「いい加減にするのは左京もなんだよなあ」

「何気に『II』が気になるのは私だけでしょうか……」

なにやら騒々しくなってきたので、軌道修正しようとしたが収まらない。

なので、もう気にせず続きを話すことにした。

「これは僕から綾小路への挑戦であり、遊びでもある計画だ。

触りだけはもうできているので、論より証拠。ちよつと遊んでみてくれ」

といっても、パソコンを取り出して、作ったゲームを公開しただけだ。

まだ自機3キャラと最初の道中・1面ボス『左京夢月』しかできてない上に、イラストは僕の手書きで、音楽など適当に拾ってきたフリーの物で代用しているくらいだが。

偶々対面にいた椎名へ差し出してみると、興味を引かれたのか結構な奴がそつちに回ってしまった。椎名もそれを受けてか、プレイ前に色々操作してみるついでに集まった奴に見せているようだ。

「へえー！　シューティングゲームか。

これ、綾小路以外に俺と東風谷も自機で選べるみたいだけど、使えるのか？」

「ああ。まだ差別化の為の性能差はできてないけど、普通に遊ぶだけならできるよ。ほぼ調整してないから、今はクソゲー一步手前かそのものだけでも」

「私の自機もあるんですか？」

「うん。」

基本ストーリーは、学校で異変を起こした『左京夢月』というキャラを討伐するのが目的…と見せかけて実は？　って感じだから、僕と関わりが深い奴ほど重要ポジに設定してある」

「え、そうすると愛里さんは……？」

「ふっふっふ。気づいてしまったか。」

そう、僕の盟友であり、このゲーム製作において最重要人物でもある佐倉には、とっておきのポジションを用意してある。完成した暁には驚嘆してほしい」

「わたしが最重要人物?!　なんで!？」

現時点でのゲームの説明を四方と東風谷にしていると、ボーっと聞いていた佐倉が話しに入ってきた。自分の名前が出たからかもしれない。

「試作品をやればわかるだろうけど、僕だけだと自機を落とす効率重視で弾幕を組んじゃうから、美しさを加えたい僕としては佐倉が必須なんだよ。」

なんせ知り合い全員見渡しても、佐倉に勝る美的センスの持ち主がないいな」

「美しさ?」

「美的センス?」

なんか佐倉とマイペースに食事を続けていた高円寺がひと際大きく反応していたが、実際そう感じているので問題ないだろう。

中学生単独で、自撮りで、そして少し後押しされただけで週刊誌のグラビアを飾り。

その後も継続して人気を獲得し続けている佐倉。

体は早熟だったと考えても、事務所の援護もなくアイドルを名乗れて、グラビアまで飾れる状態に中学時点で到達していたのは、容姿だ

けではありえない。

ブログの文章や自撮りは僕も仕事でチェックしているが、あれらだけで多くの人を惹きつける魅力を感じさせるなど、ただ事ではないのだ。

どれほど魅力的なアイドルだろうと、そこそこ人気の雑誌でグラビア枠を取るのには相当な労力が必要である。それを青娥さんに聞くなり、ただ出版社とコンタクトを取り、雫を見せただけで向こうが乗り気になったという。まともな営業もせずだ。

これがどれほどすごいことかは、営業経験があれば自明だろう。

これらの情報から憶測すると、佐倉愛里という人間は——あえて言うが——美しさを創り出し、付与させられ、それを見た人を魅了できると考えてもいい。

僕は、こと『美しさの表現』という分野では、彼女の右に出るものがないと考えている。

説明しにくいのが、天生の美的センスとでもいうのだろうか。

これを弾幕で表現できれば、きつと面白くなるし綺麗に仕上がる確信すらあった。

だから僕の考える楽しい勝負の協力者には、是非とも加えたいのである。

「だから佐倉——頼む。

勝負を楽しく美しくしたい。その為に、佐倉のチカラを貸してほしい」

頭を下げて心からお願いと、少しの間、佐倉はきよんととして俯いた。

その反応を見て、テスト前に頼むべきじゃなかったかも、罪悪感が湧いてきた。

でもなるべく早く彼女を確保しておかないと、会う機会自体が激減してしまうのだ。夏休みに入ってからだと、友達とはいえ女子は誘いにくくなる。まともに会えるのはバイト先ぐらいだろうか。

それに後で思い至ったが、青娥さんが言ったような言葉の二番煎じ的な誘い文句を、僕も言ってしまったのかもしれない。

しかもよく考えたら、軽い頼みならともかく、佐倉に真剣な頼みごとをした事はなかった気がする。ならば、いきなりこんな風に頼みごとをしたら、呆気にとられて混乱しても不思議ではない。

「わたし……役に立てるの?」

「当たり前だろ。むしろいなかったら、綾小路からブーイングされる未来しか見えない。」

だから頼むよ。な? 僕にできる事ならなんでもするからさ」

少しして顔を上げた佐倉は自信なさげにそんなことを聞いてきたが、それは無用の心配である。

佐倉が役に立てないなどありえない。

僕が大ポカやらかす可能性の方が高いくらいだ。

口に出してしまった以上、ここでもなんとしても口説き落とさなければ、本当にブーイングされてもおかしくないと思っっている。だから、佐倉に手伝ってもらえないなら、計画の撤回や延期も視野に入れるつもりで誘った。

いわば佐倉勧誘は、成否や勝ち負け以上に重要な完成度を分ける分水嶺といっても過言ではないのだ。

「……………ずるい。そんな不意打ちで真剣に頼まれたら断れないよ」

「はっはっは、知らなかったのか? 僕のような凡人が人を頼る時は手段を選ばない。特に絶対必要な奴ならなおさらだ。」

——それで改めて聞くが、手伝ってくれるか?」

「……………うん、いいよ」

佐倉に承諾の返事をもらって、いよいよ勝負の下準備が整った事を実感した僕から、思わず雄叫びのような感謝が出てしまった。

「おおー! おっしやー!」
佐倉、マジでありがとう!! 共に綾小路を打倒して煽り散らそう!!」

「そ、それはどうかと思うけど……ゲーム、なんだよね?」

これで、完成度は50%UPを見込める。

その分、難易度はいくらか低下するかもしれないが、友達の協力を考慮に入れると充分取り返せる。

と、考えていたのに——。

「勿論！ 佐倉に加えて、四方と東風谷、他何人かの手を借りられれば勝ったも同然だから、綾小路を煽りに煽ってやろう」

「こいつ……」

「あつ、ちよつと待った。俺は今回、挑戦者側にしてくれないか？」

「はあつ!? 四方、なんd」

「それなら、私も挑戦者がいいです！ 前から一度、夢月さんと勝負してみたかったんですよ!!」

「おおい!! お前ら、なんでそんなに好戦的なんだよ!?!」

「いやなに。考えてみたら、俺って左京に何度も負けてるんだよな。負けっぱなしだと……こう、癩だろ?」

「そんなことないって!! プールの時は本当にまぐれだし、他には勝ち負け以前に勝負してない」

「こつちもそんなことはないと答えておこうか。将棋や口論、行動力ではいつも敗北感を感じさせられていたんだよ。いやはや、このままだと辛いよな?」

「辛いんだつたら、その半笑いやめろや!」

「ふふふ、私は勝負はしてませんが、ずつと勝てるかどうかかわからない相手にも挑んでみたかったんですよ。その上、夢月さんはなんか勝負を持ちかけたくなる雰囲気があるので!!」

四方や東風谷がなんか綾小路みたいな事を言い出した。

こいつら、実は似たもの同士だから犬猿の仲なんじゃ? という疑惑が僕の中で生まれたが、著しくゲームの難易度が下がりそうな事態にそれどころではない。

「東風谷までかよお……。むしろ、僕相手なら勝ち放題だろうに。」

なあ、佐倉……いや、この際、誰でもいい。この二人、身勝手すぎると思わないか? どつちかでいいから何とかこつちに引き込める奴はいないか?」

「身勝手とか、左京が言うか……」

「いや、早苗も四方君もめっちゃ嬉しそうだし、それは無理っつてものでしょ」

「うう、だよなあ。」

こうなつたら……櫛田、それに戸塚達や椎名、姫野さん、高円寺も。反射神経や器用さに定評がある者を、知ってたら教えてくれないか？ 学校トップクラスくらいの奴がいないと、想定する難易度に調整できない可能性が高いんだ。報酬も出すし、交渉も自分ですから、マジで頼む！」

「そんなこと言われても」

「……ちよつとわからないな。葛城さんはどうです？」

「俺も数値で判断できない生徒の情報は持っていないな」

「このゲーム、結構難しいですね」

「チツ、性格悪い弾幕……」

「……H m m」

四方と東風谷が僕と勝負したい意思が本気なのは見て取れたので、途中で切り替えて残りのメンバーを勧誘したが困った。

この二人と綾小路以上の反射神経を持つ可能性の者が、僕には会長か鬼龍院先輩しか思い至らない。だが本気ではあっても、流石に遊びで切り札を一枚切るのではない。

反射神経に関してこの場の面子は、さつきからプレイしてピチュリまくっている椎名や見るからにドン臭そうな佐倉では言うに及ばず、櫛田や葛城・戸塚も良くて僕より少し上程度だろう。ほとんど知らないの、色々不明な姫野や高円寺といった者もいるにはいるが、判断材料が少なすぎる。

「あ、あの……わたし」

「ぎゃー!! 駄目だから! 佐倉!! 佐倉、君だけはそのままの君でいて! 友達で同僚で同級生じゃないか!? 東風谷はあっち側だけど、別に敵になるわけじゃないから!! 僕を見捨てないで!!」

「違くて! そうじゃなくて、青娥さんなら力になってくれるんじゃない?」

でも青娥さんだと………なんか面白がって挑戦者側に回る未来しか僕には見えないんだけども」

「あつ、そうだよね」

本当は、経験豊富な青娥さんという選択肢もなくはないのだが、邪

仙との取引材料は四方や東風谷を翻意させるより難易度が高い。

折角提案してくれてなんだが、綾小路への謝罪祭りの記憶はまだ新しいのだ。

佐倉もなんとなくそう感じているのだろう。あつさり意見を引つ込めてくれた。

いつそ、多少なりとも融通が利く櫛田・葛城・戸塚に加え、柴田や神崎などBクラス組を起用して数で補おうかと考えていると――捨てる神あれば拾う神あり、とでも言おうか。

行儀良く食事を終えた高円寺が救いの手を差し伸べてくれた。

「ははは、ムーンボーイ。君はラッキーボーイでもあるねえ」

「高円寺か。というと？」

「この私の興味を引いて、僅かばかりの時間なら割いても良い、と思わせていたことだよ」

「む。僅かって、どのくらいだ？」

そう聞くと、高円寺は指を4本立てた。

高円寺が口を開くと場がしん：となったが、凄まじい影響力だ。

ただ僕にとつてそれよりも重要なのは中身である。

「4時間か？ それとも、ないと思うが4日だった？」

「それを聞くことに意味はあるのかね？」

「ないな。一応聞いてみただけだ」

充分とは言えない。

だが、高円寺の4時間があればそれなりに期待してもいいような気がする。まさか4分や4秒でもないだろう。

それなら、出せるだけ提示して、hour単位で契約しておくのが最適解だと僕の勘は言っている。

能力も性格も知らないが、初見からだ者ではない雰囲気だったし、体格やさつきの影響力だけで見ても底知れないナニかを今も感じている。

賭けにはなっても、相当に分の良い賭けにできそうだ。

「……よし、高円寺。君に賭けよう。」

1日に付き1時間の作業で時給1万。きり良く1万プラスで、総計

5万。

——これでどうだ？」

「フツ。いいだろう。」

偉大なるこの私を動かした事、生涯誇るといい」

「誇るかどうかは、お互いのこれから次第だな。」

でも、ありがとう。高円寺には安いだろうが、イラストや音楽の事も考えると、これが現状のフルベットなんだ。だから、即答してくれたオマケで僕の借りも付けよう。何かあれば言ってくれ」

「H m m……。ムーンボーイ、やはり君は不可解な男だねえ」

「ああ、それと振込みや仕事用に連絡先も交換してほしい」

札を言っそう申し出ると、高円寺は微笑を浮かべながら連絡先を交換してくれた。

不可解とも言われたが、これ以上ないほどシンプルな誘いだっただろうからスルーする。

ついでにこのよく笑う男なら、乗ってくれるんじゃないかと思ったので天文部への勧誘もしてみることにした。

「それとよかったらだけど、天文部に入らないか？」

「「え」」

「これからいい季節だし、美しい空を眺めるのも乙なもんだろ」

「……ふむ。なぜ、私なのかね？」

「んー、なんとなく…かなあ。」

高円寺って話してみると面白いし、美学やロマンを理解できるみたいだから、なんとなく気に入った。なので、勧誘してみたんだが駄目だったか？」

なにやら妙な沈黙の中、変な雰囲気か漂っている気もするが、高円寺は野郎だからナンパには見えないはずだし、綾小路や戸塚にも勧誘したのでから今更だろう。

つまり僕の気のせいである。

「勿論、入部しなくてもいいし、活動に来て来なくても良い。

ただ入部してくれたら、月1か2くらいで活動連絡は入れるけどな」

「H A H A H A ! この私を正面から勧誘し、それでいて私への敬意や尊重も忘れない。

フツ。面白い男だと改めて認識したよムーンボーイ」
「おっ、それじゃあ」

「入部してあげようではないか。だが、私が興味を失った時にどうなるのか。それを考えておいた方がいいかもねえ」

「その時はその時に考えるよ。」

受けてくれて本当にありがとう。それとよろしくな」

一応、入部届けを持ち歩いててよかった。

すぐに取り出すと、高円寺は快く記入してくれ、新入部員となってくれた。

これで、佐倉か綾小路どちらかを口説き落とせば、図書資料室の近くにキープしてある部屋を部室にできる。部費はともかくこつちは是が非でもほしかったので、高円寺には感謝してもしきれない。

報酬ありとはいえ、綾小路打倒計画Ⅱも手伝ってくれるし、真に良い奴である。

しかし、結局高円寺が何故訪ねてきたのかは謎のままだった。

46、謝罪

7月15日は海の日で学校はお休みである。

それなのに、今日も今日とて僕はお仕事がある。

ブラック反対と声を上げたいが、停学期間を満喫した僕には何も言えない。

ちなみに、この仕事というのは青娥さんに頼んでいた人員募集——
—外で各種業務を行うことができ、ゆくゆくは桜プロダクションの社長を押し付け……任せられる人材をメインに探してもらっていた事を指す。

僕も学生である以上、学業や学校行事を完全に無視するわけにはいかない。大人の人材募集は必須だろう。

その人材候補が入社希望とのことだったので、理事長から許可をもらってテレビ電話で面接したのである。

いい大人が学生の下に付くことになる上、面倒な外部接触禁止の制約があるのであまり期待していなかったのだが、青娥さんはきっちりこれらの条件を掻い潜れる人材を見つけてきたようだ。

松雄と名乗った画面に映った人の第一印象は、なにかで追い詰められ絶望してる人……という感じだったので、どうしようかと一瞬迷った。松雄のようなタイプが、不意に突飛な行動に出る例を知っているからだ。

ただ逆にうちの会社では、こういう人の方が信用できると勘が働いたので即日採用した。

一時的で名目だけとはいえ、僕の部下になるのだし直感に従うことにしたのである。

それに選り好みしていると、夏休みまで働くことになるかもしれないのだ。ぶっちゃけ、条件をクリアできる人材なら、多少の傷はスルーするつもりだった。

採用を松雄に伝えると、目を見開いて驚き、自分が入社する不利益について言ってきたが、正直そんなことはどうでもいい。

というか、そんな事情を言わなければ、すんなり僕や会社を利用し
て社会復帰を果たせただろうに、馬鹿正直な男である。

でも、こういう人は嫌いではない。

奇貨置くべしでもないが、こういう大人は大事にしておいた方がい
い。

それと松雄は前職で綾小路の父ちゃんと同関係あったようで、あの馬
鹿親の危険性にも言及してきた。

だが、今度はまとも？なカウンター策も準備しているし、一応は誓
約書もある。

桜プロダクションを潰す事に相当なりターンが見込めなければ、流
石に泥沼の戦争までは踏み切らないだろうと説明しておいた。

この上で、もしかた潰そうとしてくるなら、最終的に負けることに
なっても嫌がらせの限りを尽くしてやろう、と悪魔の囁きを松雄へと
贈ってやった。何やら面倒臭い事情がありそうだから、あの手のタイ
プが最も嫌がる保険を準備していると教えたのだ。

実際、綾小路への義理はあるから一度は飲み込むが、また僕達へ手
を出してくるなら容赦しない。

青娥さんとともに今度は真つ当な手段で地獄を見せてやる。

綾小路の今後をある程度考える策も付属することになるので、なる
べくやりたくはないが……。

その結果は——いや、彼の返答やこれ以上のやり取りを明かすの
は、誰得であり、松雄の名誉のためにもやめておいた方がいいだろう。
なにより無粋というものだ。

ただ外部に人材を1名雇用した。

この事実だけがあれば充分である。

このように連休中にいくつか想定外なこともあったが、おおむね平穏な生活が戻ってきた。

あとは事後処理のような小さい面倒事を順次片付けていけば終了だ。

打った手はすでに青娥さんや鬼龍院先輩にバレているモノもあるが、ほとんどバレても問題ない手と者にしか勘付かれていないと思う。

この状況なら、しばらくゆつくりしても罰は当たるまい。

ゲームについても佐倉は手伝ってくれと言ってくれたし、高円寺もスカウトできたので問題ないだろう。それに高円寺が天文部に入部してくれたことで、佐倉にも勧誘できる流れにできたことは柵から牡丹餅である。

本人は「わたしって入部してなかったの!？」と驚いていたが、手続きしてないんだから部員でなかったのは間違いない。

うっかりは誰にでもあることなので仕方ない、と片付けてしまおう。

まあ期せずして、入って直ぐに天文部員（綾小路以外）が真つ二つに割れる結果となったが、改めて僕の視点から考えるとこれはこれで面白そうだ。

所詮遊びの一種でしかなく、四方や東風谷は勿論、綾小路も本気で叩き潰しにはこないとわかっている状態で、あの3人を煽りまくれるチャンスは僕の何かを満たしてくれる。

僕がやることを整理してみると意外と多かったので、テンションを上げる要素は必要だろう。

なんせこれからBクラスで謝罪して、龍園に殴り合いの映像を届け、目の前で消去し、生徒会に入部届け2通を提出。その際、忘れずに部室（と一応部費）を許可してもらわなければならない。

その後、手に入れた部室でブリーフィングしつつ、佐倉と東風谷に期末テストまで四方と勉強教えて、バイトのシフトを前倒しで少し詰めて組む。

休んだ分の補填と夏休みに入ってからの時間を確保するためだ。
……停学明け直後なのに、なんかやること多くね？と愚痴を溢したくなる面倒臭さである。

隙間時間でプログラミングしながら、勉強と弾幕の指摘を教え合う基本計画は悪くないと思うのだが、そもそも隙間時間が作れるのか不安になってくる。

他にも停学のペナルティがまだ他にもあって、部活に影響を与える可能性を考えると、何らかの対策や準備も必要かもしれない。

どうするにせよ、やるべきことを一つずつやっていくしかないだろう。

「此度は停学して50ものクラスポイント減らしてしまい、誠に申し訳ありませんでしたあああ!!!」

というわけで、7月16日の火曜日。

僕は朝のホームルームにて、Bクラスで開口一番に全力で謝罪していた。

「あ、その、左京く」

「遠からず訪れるだろうCPの変動イベントでは、なるべく獲得量が多くなるよう動きます!!!」

「いや、ヤギぢよ」

「ですので、皆様！　どうかそれまで僕の処分は保留にして」

「いいから！　聞いてっ!!!」

「へぶっ」

勢いそのまま謝罪を済ませようという目論見は脆くも崩れ去った。

あの優しいな一之瀬が何故かハリセンを手に持ち、僕に叩きつけたのだ。

ちなみに担任は、またしても隅で腹を抱えて笑っていやがる。

しかし、舐めることなかれ。

連休を含め10日近く休息した僕の引き出しは、一手潰されたくら

いでは堪えない。

一之瀬に二の句も出させない意図で急いで鞆を漁り、念には念を入れて準備しておいた『それ』が壊れていないか確認の後、二手目を放つ為におもむろに顔にかけた。

「YEAHHHHH!! 改めて! パリピ左京だぜ〜! みんな、お久〜!」

これぞサングラスで視界を暗くすることで実現した、セルフ目隠しを応用したパリピの術。

これは近くにいるハリセン持ちの一之瀬すら、黒い何かにしか見えないほどの濃度のサングラスなのだ。アイマスクの代わりになるかと思つて買つておいたのが功を奏した。

つまり見えなければ恥ずかしくない理論だ。

「……一応聞くが、なんのつもりだ?」

「いやっふう! 停学しちゃったから顔合わせ辛くて、イメチェンで誤魔化せないかと考えてたら到達したんだぜ〜? どうよお、これえ!?!」

「この地獄のような沈黙で答えがわかりませんか? っていうか、なんでそこに到達しちやっただんですかね……」

「ごだわり……かな?」

なんてなつ! ひゃっははははっ…はっぐ、ゴホツゴホ。

……ごめん、コレ…想像以上にキツい。やっぱり…普通に、喋らせて。かはっ」

「勝手にしろよ。全く、心配して損した気分だぜ」

「おお、これは柴田君。僕はなりきれなかったけど、君をイメージした事でパリピ左京は完成したんだ。一応礼を言っておこう」

「お前はどんな目で俺を見てるんだよ」

再度の柴田の問いには答えず、僕はフツと笑つて内心で現実逃避に専念する。

勿論、サングラスはかけたまま……。

実は思い切り恥ずかしかつたのだ。

なんなら、僕の第一声の直前に近くに来ていた四方と東風谷がツツ

ゴミを入れてきた時点で、燃え上がるような羞恥心が僕を支配してわけわからなくなっていた。

なんとか柴田までは強がりを変えたが、もし更なる追撃があれば開き直るか恥ずか死かの二択だっただろう。

見えなければ恥ずかしくないとか、冷静に考えてあるわけがなかった。

盛大に滑った現実も認識したくない。

そうだ、引き籠もろう。

これから貝のように生きるんだ。

……よし。無理だと思っていたが、このネガティブな精神状態ならいける。

三手目は、号泣会見IN左京アレンジで決まりだ。

会見でもないし、実際に号泣はできないだろうが、「ゴノよのなかつ！ この世の中のおお、問題を解決したい一心でえええ!!」とか言つて泣くだけ………なわけがない。

想像だけで、前の二手とは比較にならない恥になることが確信できる。

当然、ボツである。

「ふう、危ない。」

真面目に謝るつもりだったのに、変なことを口走るところだった「嘘でしょ？ この人、これまで変じゃないと思ってたの？」

「もう相当変なこと言ってただろう左京」

「でも逆に、この左京が躊躇った変なことって何か気になるな」

「やめてやれよ。このサングラスかけててもわかる赤面具合からは、照れ隠しとしか判別できないんだからさ」

「……ああ、四方。正論はお止めください。サングラスが外せなくなるじゃないですか」

「くくく、そうだったのか」

「あはっ！ 可愛いところもあるのねえ♪」
くっ、殺せ。

もはやそう言いたくなるのを必死で堪え、言葉のナイフと辱めが過

ぎ去るのを待つのみ状態だ。

忍者とは、耐え忍ぶ者なり。

僕は忍者じゃないけども。

「みなさん、いけませんよ。」

夢月さんがこんなにも落ち込んでいるというのに、笑っちゃうなんて失礼じゃないですか!」

「東風谷……!」

「安心してください夢月さん。私はどんな時でもあなたのみかたつ——ぶふあつ!」

「てんめえ、このっ!!」

「くっふふふふ。あはははは! くうっ…パ、パリピキ、さきよう。ふふっ、ひくははは!! それで変に見栄張って照れ隠しするとか…あつはははは! じわじわ、くるっ!! ひっひっひく、げほっ、ごほっ…おえ」

「笑いすぎだろ! ピーマンみたいに頭ん中空っぽか!」

それにしても、なんか東風谷に最近、やけに絡まれているような気がしている。会ったばかりの時にかかっていたデバフが解除されて、イキイキしてる感じだ。

誰かがそう変化させているのだと仮定すると櫛田あたりが怪しいが、余計な事をするものである。その誰かがいるのなら、絶対に許早苗……じゃなかった許さない。

そのおかげでフォローされた時に一瞬だけ良い奴かと勘違いしてしまっただが、本当に一瞬で裏返ったではないか。

ついでにこのクソな緑髪女に、マジでいっぺん『わからせ』が必要なこと気づいてしまった。

即落ち2コマは……法に触れるだけでなく、そんな技術も力もヤル気もないから無理にしろ、例えば嫌ってるっぽい綾小路と仲良くしなければならぬ、という状況を作って嫌がらせをするなどの策は考え付くのだ。

または一之瀬あたりと二人きりにするのもいいな。あわよくば浄化させて綺麗な東風谷として、生まれ変わらせてやりたい。

もう数日しか使えない手札をきつてでも、どれかの策を実現させてやる決意を新たに、心を安らげることにした。

僕の肩をバシバシ叩きながら笑っている東風谷と、ついでに笑いに笑っている担任への復讐計画を練っていると、いつの間にもやら教室のあちこちでも笑いに溢れていた。

笑いが伝染してしまったのかもしれない。

これも全ては東風谷と担任が導火線と火薬を弄んだせいだ。

だから僕は悪くない。

……はあ。なんで真面目に謝罪して笑われにやらなんのだ。某裸エプロン先輩はいつもこんな劣勢の中で負け続けていたのか。そりゃあ、時には「笑うなっ！」って怒鳴りたくもなるよ。

こうして僕の謝罪の場だったはずのホームルームは、グダグダのまま時間切れまで笑われて終わった。

関係ないが、ここしばらく笑われることが多い気がする。由々しき事態である。

せめてクラスメイト達は、真面目な場面くらいは少し空気を読んでほしいものだ。

ただ教室中が程度の差はあってもほとんど笑ってるのに、唯一、一之瀬だけは感心したような目を向けてくれていて、その事実には少し慰められた。ハリセンで叩かれたけど、やはり根本の優しさは変わっていないように感じる。

地味に、ホントに聖女かよ、と改めて思わされた次第である。

ちなみに後で聞いた話だが、その聖女にハリセンなどというモノを持たせて僕を叩かせた罰当たり者は、四方と柴田とのこと。

曰く、何かやらかしたら遠慮なくやってくれ、と言いつつ放つたらしい。なんてやつらだ。

僕の謝罪をなんだと思ってるのか、小一時間…は面倒だから3分くらい問い詰めた。終わったら、カップ麺が食べごろでいい感じである。

しかし綾小路との勝負に相乗りしてきたことといい、最近の四方は一体何を考えているのかわからなくなってきた。

何はともあれ、理解できない流れでクラスから僕は許された。

そのまま普通に授業を進め、昼休憩の時に四方や一之瀬からそう伝達されたので、素直に受け入れることができたのだ。言われても理解はできなかったが……。

昼食を一緒にとった時には、ほとんど聞き流したが他にも四方や一之瀬から色々聞いた。

中でも微妙に気になった話があり、なんでも僕の停学中に東風谷が色々やらかしたらしい。

といっても、暴力や違反などの罰則が必要になるものではなく、雰囲気凍らせる類の言動である。

東風谷からも「夢月さんがいないせいで、説教される事が増えました」と文句を言われたので、何かやらかしたのは確実だ。ただその会話を聞いていた四方が僕を見ながら「左京と比べたら、東風谷がマジに見える」と呟いていたのが腑に落ちない。

……こいつらは、本当に僕をどう認識してるんだよ。これではまるで、ほとんど何もしていないというのに、僕が東風谷を超える問題児のようではないか。

まあそれはともかく、これでBクラスでの謝罪は完了と見ていい。

僕の地味ポジな地位も守られたに違いない。

これで明日から、元の空気のようにフェードアウトする日常に戻ることだろう。まだ一抹の不安要素は残っているが……。

次は、龍園に会いに行く約束を果たして、こちら方面も完全な決着をしておくことにする。

コピーを取っているとかそういう疑いがかかるかもしれないが、佐倉から渡された喧嘩映像を目の前で消去して、少しでも退いてくれた恩を返したいのだ。

放課後、僕は四方と東風谷に一言かけてから、Cクラスへ向かった。

47、敵

Cクラスでは、龍園や石崎達3人の前で映像（佐倉のアイドル活動部分は消去済み）を見せて消去するだけの簡単な仕事だった。

教室に入室してほとんど事情をぶちまけると、何故か龍園には呆れられ、石崎達には礼を言われた。コピーしていないこともかなりあっさり信じてくれて、拍子抜けしたくらいである。

椎名も口ぞえしてくれたとはいえ、ごたつかなくてよかった。

Cクラスの用事が早々に片付き、この分なら生徒会室へ行く用事も済ませられると思ったので急いで向かう。

この日は行けるかわからなかったのでアポを取っていないが、ガチャの事後処理や天文部関係の処理を済ませられれば後が楽になるので、駄目元で行ってみるのだ。

その勢いに乗ったまま生徒会室に突入したところ、会長も橘書記もいなかった。

代わりに、一之瀬といつか見たチャラ男副会長が話していた。

そして僕は今、形だけのノックと「失礼します」だったせいか、めっちゃ副会長に睨まれている。

「……チツ」

睨まれただけではなく、舌打ちまでされた。

どうも嫌われているよう……いや、僕のような取り立てて特徴のない奴が嫌いなのもかもしれない。ほぼ初対面で嫌われる理由はそれが、礼儀がなくなってなかったくらいだろう。

ともあれ、この雰囲気では彼に処理を頼んだり何か聞いたりはできない。

仕方ないので、会長の机にメモを残して速やかに退散する為、副会長達に会釈して通り過ぎ、ささつと備え付けられていたメモ用紙に記入する。

書いている最中、副会長が一之瀬に何か言われるかと思ったが、どちらもちらを注視したまま無言だった。

しかし背中を向けているのに、ザクザクと刺さる視線を感じて居心地が悪い。

また「邪魔。はよ出てけや」みたいな声無き言葉も送信されていそうな気もしてる。

流石に一之瀬は、そんな敵意溢れるモノを向けてないと思うが……。

「なんだお前。さっきから邪魔なんだけどく？ 用が済んだら——

ああ、済まなくても、さっさと出てけよ。今、忙しいんでな」

最後まで無言かと思っていたが、声をかけられた。

しかも想像通りの内容で、相当イラついているようだ。

メモに用件も書き終えたことだし、これ以上機嫌を損ねないように当たり障りない対応で退出しよう。

「すいません。もう用事は済みましたので帰ります。

失礼し……ん？」

そうしようとしたところで、ようやく異常に気づいた。

一之瀬がなんかおかしい気がする。

具体的には、二日酔い状態で登場する担任くらい……は言い過ぎだが、その2〜3歩手前のような……？

「おいっ！ 何してんだ!?! 早くいけ」

つい考え込んでしまい、副会長に呼びかけられて我に返った。

一之瀬の様子が本当におかしくても、よくわからない中で何ができるわけでもなし、僕には関係ないといえば関係ない。

異常というのもほぼ勘によるものだし、ここまで全く口を開いていないのが性格的におかしいとなんとなく思えただけなのだ。

でも——。

「副会長、一之瀬。これ、差し入れです。よかったら、お茶請けにどうぞ」

不思議と初めて生徒会室に来た時の佐倉と今の一之瀬が被って、放置はできなかった。

とはいえ、僕は橘書記と違ってカウンセリングとか不可能なので、ささやかなお菓子——副会長にはイライラ解消にはこれと違って

る小魚の子袋。一之瀬にはチ○ルチョコ数個——を二人の前に置いただけだ。

元々、小魚は櫛田、チロ○チョコは東風谷のご機嫌取り用に持っていた物だったが、今日はもう会わないだろうし、あげても問題ないはず。

副会長や一之瀬がどう思うかは別として、何もせずに帰ることだけが引つかかっていたので、僕はこれで満足である。

「ふざけてんのか？ だいたい生徒会室は基本飲食禁止だ」

「あつ、そうだったんですか。それは重ね重ね申し訳ありません。本当にただの差し入れのつもりだったので……」

「……次から気をつけろよ？ 次があればな」

渡した駄菓子の効果か、副会長の態度がいつの間にか少し軟化していた。

一之瀬もいまだ口は開いていないが、顔は上げている。

これで元々そうするつもりだったが、アポを取ってから出直すことへの引つかかりはなくなった。

次に来た時は、きちんと挨拶することにして今日は帰ろう。

「はい、そうします。では失礼しました」

「おう。」

……あ、待て。お前、確か…左京とかいったな？ 恋人ガチャを

やっていた……」

「はい？ そうですが」

「あれは面白かった。特に堀北会長のあんな顔は初めて見た。だから違うものでもいい。」

——俺が許す。もつとやれ」

「ははっ、そんなこと言っていないんですか？ 副会長には、会長が僕に説教をするのを『させなかつた』恩があるんで、あんまりリスクを投げたくないんですけど」

「気にするな。後輩に配慮させるほど狭量じゃねえよ。それに久々に俺を沸き立たせてくれた礼だ。これでもお前を買ってやってるんだぜ？」

とりあえず様子がおかしい一之瀬は置いておいて帰ろうとすると、副会長にガチャヤ「それ以外」を褒められた。

こうして話してみると、結構気さくな先輩でホツとする。

入室当初は、僕が何かを邪魔してしまつて苛立たせていたのかもしれない。

すまないことをした。

「だけどお前、その間の悪さは直した方がいいぞ。いつか藪を突いて蛇を出しそうだ」

「直せるものなら、とつくに直してるんですよ……」

「ま、そりやそうか。端から見るとぶんにや面白いからいいんだケドネ」副会長に言われるまでもなく認識していた忠告された。

それにさつきまでとは態度を一転させて、今は機嫌良さ気にけっけつくと悪そうに笑っている。これはわかつてからかったのだろう。

ただこれはこれで様になっており、整った顔面に影を感じさせる雰囲気も相まって、どこか油断できないと思わせるものがある。

「またなんかやるようなら俺にもかませろ。面白そうなことだったら、特別に手伝つてやつてもいいぞ?」

「じゃあ、今度なんかやる時は話を通しますよ。基本的に僕は好きだから『それ』をやるだけで、相乗りは誰でもOKなんで」

南雲と名乗つた副会長にそう返すと、連絡先を交換してやろうと申し出てきた。

この学校に来てからたまに遭遇するが、こういう自信に溢れポジティブに振舞える人を、最近羨ましく思う。

これが若さというものなのだろうか?

僕もこうありたいものだ。

「今日は、ありがとうございます。その機会があれば、お願いするかもしれない」

ところで副会長への勝手な印象なのだが……。

——なんとなく。本当になんとなく、『敵』になる予感がした。

副会長には思考回路を焼ききれるほど回しても敵わないとは思わない。

格上ではあっても、綾小路や四方、高円寺にもか……彼らには感じている圧倒的格上感を感じない。

どちらかというところ、一之瀬や葛城に対して持つ形容し難い信用に似たものを感じさせる雰囲気の人だ。

当然、嫌いではないし、むしろ好きな部類に近い雰囲気である。

『安易に自分の正しさを主張せず、相手の言い分を尊重する』

凡人であるがゆえに、僕はこれを大事にしてきた。

だから、これまで出会ってきた奴らは勿論、ほぼ初対面の副会長にもそうしたつもりだ。副会長も一見では友好的にそれに応えてくれた。

そこに、おかしいところは何も……ちよつとしかない。

悪印象も全くない。

なのに——何故か副会長とはいつかぶつかると気がしてならない。

僕は不思議なこともあるものだと考えながら、何事もなく副会長と連絡先を交換して別れた。

真相は“神”のみぞ知る、といったところだろう。

生徒会室を出ると、外は夕暮れに赤く染まっていた。

期末テストまで1週間を切ったので図書館が閉まるこの時間になると、生徒はほとんど残っていないのだろう。

校舎内は、ひどく閑散として見える。

それにしても、副会長との初対面は不思議だった。

そのせいで、僕にしては珍しく彼に興味があった。

新たに連絡先に追加された南雲雅という人物がどんな人物なのか、知ってそうな奴に聞いてみるのも良いかもしれない。

さしあたっては。

「左京君！」

「や、やあ」

僕のすぐ後に退出してきた一之瀬が無難だろうか。

生徒会室ではずっと口を閉ざして考え事？をしていたが、本来無口な奴ではないはずなので話くらいはしても怒らないと思う。向こうから声をかけてきたし。

……嫌われてなければ、だけでも。

まあともかく、深呼吸していつもの自分へ切り替え、まず先ほどの無礼を謝罪する。

触り程度の挨拶や謝罪から入るのが、僕流の緊張を和らげるコツなのだ。

「あー、なんか邪魔したよな？ いきなり来てすまん」

「ううん。南雲先輩には、ちよつと相談に乗ってもらってただけだから大丈夫。

……それに、私は堀北会長に断られて生徒会に入れなかったから、あそこへは何度か顔を出してるだけなんだよね」

「ふーん。あんなヤバそうな所に入りたいとか変わってんな」

「ヤバそうって……」

淡い笑顔を浮かべながらそう言う一之瀬だが、やはりいつもと何かが違う気がする。

そもそもほとんど彼女を知らないが、僕相手とはいえ腕を組んだまま人に話しかけるタイプには見えないのだが。

ただこの状態で副会長の人となりとかを聞き出すというのは、空気を読めていないのでは？ と思えたので、本題の前に少しジョークを放り込むことにした。

「ところで話は変わるけど、一之瀬って腕組むと胸がどえらいことになるな。青少年には目に毒なんじゃないか？」

「——なっ!?!」

「ふくむ。これは性的搾取といっても過言ではないかもしれない」
「む、え？ せ……なん」

「あつ、ちよつと訂正。『どえらい』より『どえろい』の方がしっくりくるわ。」

うん、こつちにさせて」

「……」

「えつと……ごめんな？」

……うん。

これがジョークではなくてセクハラというものだとということに、無言で靴からハリセンを取り出す一之瀬を見て思い至った。

緊張していたせいで、加減を間違ってしまったようだ。

その為、僕は振り下ろされるハリセンを甘んじて受け入れた。

ただ素直に受け入れるのはなんだだったので、ついでに一計を案じることにする。

「おぐう、痛え……あつ」

「あ、あれ？ 今度は結構痛かった？」

「こ、これは——寝転がってる時にスマホを顔面に落とした痛み＋曲がり角で足の小指をぶつけた痛み」

「痛そうな例を足して口に出さないでよ！ こつちまで痛くなってきちゃうー！」

「更には、そこへ0をかける」

「それって……つまり痛くないんじゃない！」

「冷静に考えて、たかがハリセンでそんな痛みが発生するわけないだろ。アホなのか？」

「……左京君。いい加減にしようね？ じゃないともう一発いくことになるよ？」

「一之瀬……君は優しい人のはずだ。そんなことはしないと僕は信じてる」

「はあ、こんな時ばかり……。でもちよつと嬉しい」

「……ちよろ」

「何か言った？」

「いえ、何も？」

本当にチヨロイのか、ただ乗ってくれただけなのかは不明だが、なんとなく調子が戻ってきている気はする。

対櫛田気分転換術は、一之瀬にも有効なようである。ジト目にはなっているが、ハリセンをしまつてくれた事実がそれを証明している。

ともかく、これで一之瀬の異常と、僕の緊張も少しは解れただろう。何気に一緒に歩いているだけなのに、緊張しっぱなしなのは疲れるのだ。

というか、何故一緒に歩いているのか？

聞きたいことはあったが、それはあくまで僕がであつて、一之瀬ではない……はずだ。それとも、何か話したいことがあつたり……。

「……ねえ。左京君って、なんで誰かの為にすぐ動けるの？」

「どしたん？ 急に」

折角の機会なので計画実行のタイミングを計りながらも、二人で歩いている現状に疑問を抱いていると、一之瀬に問いかけられた。

意図がわからず質問で返してしまつたが、一之瀬は更に詰め寄って聞いてきた。

「入学直後の時も、クラス会議でも、佐倉さんの件でも、東風谷さんの件も。停学になつちやつた件でも……。

いつも左京君が先にいるんだよ。いつの間にか事態の中心にいて、なんだかんだで真つ先に動いて解決しちゃうの。

……どうして、そんな風に動けるの？」

「一之瀬。買いかぶりすぎてるぞ。僕はただ自分がしたいことを好きにしているだけで、やりたくないことはやってないんだ。

だから誰かの為じゃなく、自分の為だ。それで、それ以外に理由なんてないよ」

「本当にそうかなあ。

——なんか最近、左京君がBクラスのリーダーになつた方がいいんじゃないかと思える時があるんだよねえ」

「——失礼」

それまでの話からは脈絡のないその発言を聞いた瞬間、僕はツツコミどころか緊張すら忘れて一之瀬の額に手をやった。

「にやあつ！ いきなり何するの!？」

「いや、一之瀬が体調崩したりすると一大事だからな。……うん、熱はないな」

「そこまで変だった!？」

「龍園に並ぶ優れたリーダーの素質持ちの一之瀬がそんなことを言うなんて、変でなかったらなんなんだよ。失礼を承知で、正気を疑ったぞ」

「え……あ、私が……?」

「何があったか知らないが、そんな馬鹿げた事を言うほど疲れてるなら早く休んだほうがいい。なんなら一応保健医な担任のところまで診てもらえ。いや、無理にでも連れてくから覚悟しろ」

「……………ホント不思議な人だね、左京君って」

こっちの台詞だと返しそうになるが何とか堪える。

一之瀬は独特の雰囲気があるので、どうも調子が狂わされるのだ。

しかも普段でさえそうなのに、本格的に心配になってくるこの発言。

それに加え、なんか青春してるみたいでむず痒く、なにより恥ずかしくもなってきたので、多少無理矢理に話題を変えることにした。

「……………今日はクラスメイトとの橋渡しをしてくれてありがとう。この礼はそのうちな」

「……………にやははつ。どういたしまして。」

私も左京君と話してちよつと楽になった気がするよ。こちらこそありがとう!」

う、凄まじい善人オーラに押される。

東風谷への浄化を画策してるのに、気を抜けば僕が浄化されそうだ。

綾小路との会話を参考にして流れを変える意図で礼を告げてみたら、笑顔で倍返しされた。

……慌ててたから、参考にするべき人物を間違えた。

あのおっぱい命の男じゃなくて、方向性以外は一之瀬と似た印象のある龍園あたりを参考にするんだった。龍園もほとんど知らないけども。

「そ、それはそれとして、保健室には連行するぞ？ 僕と違って担任に苦手意識とかないだろうし、放り込むことに躊躇はしないからな！」

「ああ、やっぱり星之宮先生は苦手なんだ？」

「何を他人事みたいにな……。」

ジャンルは違えど、一之瀬も僕の苦手リストに載ってるんだから、強行手段…手を引つ張らせるとかさせるなよ」

「……それを正面から私に言うあたり、左京君はただ者じゃないよね。

参考までに聞きたいんだけど、左京君が苦手なタイプってどんな人なのかな？」

そうして強引に保健室へ向かっている間も、一之瀬は口を閉じない。

大人しくついては来てくれるが、考えがまるでわからない。

だから思うところをそのまま返してるのだが、これは脳死で反応してるくらい精神的にギリギリで、会話内容まで気が回ってない為だ。普段なら、もう少し取り繕える…はず。

「一之瀬だと、苦手項目のうち……善人、陽キャ、美女or美少女、優しい、集団の纏め役、説教してくる、良い人、可愛い、真っ直ぐ、良い人すぎる。」

これら、10項目に該当するから苦手なんだ」

「何個か被ってるっていうか、苦手なタイプを聞いたら、私を苦手な理由が返ってくるとは思ってなかったなあ。」

——それに私はそんなに……良い人でも可愛くもないよ」

「僕がそう確信してるだけだから、一之瀬の自己認識はどうでもいい。

それより気になってたんだが、美少女の自覚がない美少女はトラブルを引き寄せるぞ。だから早めに、『自分は美少女！ 可愛すぎてどうしよう！』って、東風谷みたくナルシった方向に舵を切ることを勧める。そうなった方が、人生楽しいからマジでオススメ」

「……ふっ。なにそれ」

もしも、この状況を僕自身が俯瞰的に見ることができたら、きつとこう思うだろう。

緊張が限界突破した結果、舞い上がって口が止まらなくなった凡人、と。

まあ、それでもなんとか目的は達成できた——普段の一之瀬の精神状態には近づけられた——のではなからうか？

「……ふむ。普段を知らんから断言できないけど、だいぶ冷静になったようだな」

「え？」

「一之瀬と二人で話すのはただでさえ緊張するんだから、これ見よがしに悩んでる？……落ち込んでる？……ような雰囲気放つのは勘弁してくれ。居心地が悪すぎる。」

僕には橘書記みたいに、女子をカウンセリングしたり元気付けたりするスキルはないんだ」

こんなことを話してしまった言い訳だが、緊張に加えBクラスでの黒歴史の件も相まって、この時の僕は何かの拍子に浮遊しそうなほどふわふわしていたのだ。

「私……そんなにわかりやすかった？」

「うん。生徒会室にいた時点で一目見れば丸わかり。」

副会長もわかってたんじゃないかなあ。案外、一之瀬で遊ぶのを邪魔したから最初は不機嫌だった、とかありそうじゃないか？」

「……うあ。言われてみれば……これまでも……思い至る節……ある、かも……」

「！」

そんな精神状態だったから、会話の合間に途切れ途切れに溢しながら、何故か青くなつてから赤面してゆく一之瀬を見て、チャーンストと思つてしまった僕は悪くないだろう。

——即座に自分のスイッチを切り替えて、つい傷口を抉りにいつてしまった。

「ざあーっ♡ 精神的ざあーっ♡」

恥ずかしく。一之瀬みたいに優秀な人でも、冷静さを欠くところな

るんだろ。あつひやつひや！」

「うにゃあああ!! 人が自己嫌悪してる時に追い討ちかけるの止めてくれないかなあつ!？」

「そうあざとくにゃんにゃん言っても、過ぎたことは変えられないぞ☆」

「そんな猫みたいに言ってるじゃない！」

「ハッ、普段から口癖みたいに言いまくってるじゃん。」

てか、それは無理な注文というものだ。僕は隙を見せつけられると、脊髄反射で言葉が口について出てくる性質でな」

「ああもうっ！ 左京君は、ほんつとうに……！」

「いやあ。そう褒めるな。照れる」

「褒めてないから!!」

経過はともかく、普段の一之瀬っぽくはなつたし、僕は意図的に緊張を忘れて楽しめた。

人の黒歴史を弄ぶと、代わりに自分の黒歴史が押し流されていくから、恥をかいた時は積極的に一之瀬をからかう選択肢も、一考の余地がある気がしてきた。

隙だらけだから、押しまくれば何とかかなりそうな一之瀬の雰囲気が悪い。

空気や話の流れを気にして、副会長についてやとある計略は口に出せなかったが、思いがけず爽快な気分になったからまあいいか。

この発見も、今の気分になったのも、一之瀬のおかげである。

余談だが、あの後も保健室まで一之瀬をからかい続けた結果。

赤面したままの一之瀬を、まだ開いていた保健室へ放り込むことになったのは失敗だった。

ニヤニヤ笑いの担任に変な誤解をされた可能性がある。

尤も、察した瞬間に身を翻して逃走体勢に入ったので、僕自身には問題ない。

だが置いてきた一之瀬は、きつと大変ウザい目に遭い、しなくてもいい苦勞をする羽目になったことだろう。

ご愁傷様。と、一応心の中で黙禱しておいた。

何はともあれ、僕の黒歴史を一之瀬にスライドできたし、今日は転げまわることなく気持ちよく睡眠できそうだ。

一之瀬、ありがとう！

などと感謝しつつ、ひどく爽快な心持ちで足取り軽く帰宅した。

今日は偶々見かけた流れ星に、一之瀬に幸あれと願う余裕すらある良い日だった。

48、下克上

7月17日朝のホームルーム。

今日は朝からニヤニヤしてる担任が、夏休みにあるという旅行の宿泊部屋について確認しておくように言っていた。1学期の最終登校日に確定されるそうさ。

旅行自体は中間テストの結果発表あたりで告知されていたようだが、佐倉の件を皮切りに色々あって完全に頭から抜けていた。

ただ部屋割りはずでに終わっており、僕が停学して聞いてなかった事を考慮して、今説明しているのかもしれない。

なぜなら日程や持ち物などの説明を、期末テスト前にする必要性はないのだ。確定にも時間的猶予はまだある。

だからおそらく、この説明はDクラスの方でも行われているはず。日程は8月1日から2週間で……って、やばいじゃん！

バイトに必要な13日間をクリアするには、8月後半はほぼ毎日バイトしなければならぬ。1日で2日分のシフトとかにもできるが、そうすると今度はプログラミングに支障をきたす。

これはどこかで融通を利かす必要がある。ちなみに僕の部屋は4人部屋で、四方、柴田、神崎がルームメイトになるらしい。

僕の停学中にそう決定され、すでに部屋表は提出済みと四方から聞かされた。

旅行と聞いた直後は、余りもの組になると思ったので助かったのだが、面子を考えるに別の懸念が生まれたので、早いうちに解消対策しておくほうが無難だろう。

そんなわけで昼休み。

僕は、柴田、神崎、四方を昼食に誘い食堂へ来ていた。

「3人も。テスト前の昼時に集まってもらって悪い。」

なるべく早く確認と提案したいことがあるんだ」

そして全員が食べ終わって落ち着いた時に、改めて本題を切り出した。

「なんだよ珍しい。てか、左京から誘ってきたの何気に初だったんじゃないかね?」

「基本僕は一人で食ってることが多いからな。」

今日は3人に話しておきたいことがあったから、まだ融通利きそうな昼に誘ったんだが、迷惑だったか?」

「いや……迷惑というわけではなく、少し困惑してるだけだ。」

東風谷や一之瀬を誘わなかったということは、トラブルやクラスのことではないんだろう? だとすると、他に思い当たらなくてな」

いきなり誘ったからか、柴田と神崎は戸惑っているようだ。

前置きから入ったほうがいいかとも思ったが、面倒なのでとりあえず結論だけでいってみようと思いついた。

「まず旅行の部屋割りのグループって、僕達4人で間違いないよな?」

「ああ、その話だったか」

「間違いないけど、それが何だよ?」

「そこに重大な懸念がある。だから一つルールを決めたい」

「……何?」

「ルールだった?」

「……………なんか、ろくでもない予感が」

まあ四方は不明だが、これだけだと柴田や神崎の視点、僕の懸念がわからなくてもしかたない。

地位やカースト的に体験もしないだろうし、そもそも彼らのステータスで僕の想定する状況に陥ることはありえないはずだ。

ただ僕には死活問題になりかねないから、面倒になる前にはっきり言っておくだけである。

四方は薄っすら勘付いているようだから、全員を気にしなくて良さそうなのは助かった。

「そう、ルールだ。」

——ぶっちゃけ、旅行中に誰かが彼女やセフレを連れ込んでおつ

はじめようなら、他のルームメイトにあらかじめ一報を入れることを僕は提案したい！」

「！」

「セフツ……！ おまつ、なんつーことを」

「おっぱじめるって、お前な……食堂でする話じゃないだろ」

「……そんなこと……するわけないだろう」

「いいから聞け。これはとても重要な事だ。」

僕は場合によっては、2週間近く船の中で放浪や野宿することになるかもしれないんだぞ？」

「船の中で放浪や野宿というパワーワード……」

独断と偏見による判断では、柴田と四方の反応は驚いたり呆れていて、これは少なくとも演技ではない確信がある。よって白確。

しかし——神崎。

彼は言葉を返す前に少し詰まった。驚いて声が出せなかった可能性を考慮に入れても、黒寄りの灰色に分類しておくのが無難だろう。

綾小路や一之瀬の例やプールの更衣室での件もある。

クール系ムツツリーニだと仮定してマークしておく。

つまり、神崎はヤル時はヤル男だとみえたのだ。

だから僕は、主に神崎へ向けて体験談を語ることで、遠回りに思いとどまるよう説得することにした。

思い出したくもない事だが、これも旅の快適さの為だ。しかたない。

「……重要性をわかってもらうために、僕が中2の林間学校で実際に体験したことを話そう」

「左京が？」

「ああ」

「実際に……」

「………当時、僕が同室の男子2人と話していた時だ。」

夜も更けた頃、女子2人が部屋へと入ってきた。同室の男子達の彼女達だった。更に言うと、僕以外の4人はいつも一緒にいる友達同士でもあって、当然のごとく僕は孤立した」

言葉を切つて間を作り、あの悪夢の旅行体験を神崎達に少しでも想起させる。

二度とあんな苦難を繰り返したくないという強い意思をもって……！

「さつきまでバカ話していた男子達がそれぞれの彼女といちやついている中、僕は必死に寝ようとしていた。

しかし、1組が一緒に押入れに籠ってアレな声を出し始め、もう1組が今にも真横でおっぱじめそうになると、もう限界だった。あまりの居心地悪さに部屋を逃げ出し、暗かったので日が昇るまでずっと……朝食の時間を過ぎても、月や星、空を見ていたんだ」

「……………」

光あればまた闇があるように、楽しいことの裏ではつらい事があるもの。

陽キャやクール系？のイケメンには想像もできなかったのだろう。

柴田と神崎は絶句していた。

何故かマスコット枠だっただろう四方まで、雰囲気につられてか沈黙しているが。

「その後の事は言うまでもないだろう。

ともかく2週間もの長期旅行で、この話と似たような事態に陥らない為に、こうした場合の連絡は徹底しておきたい。それさえあれば、事前準備もできるしな」

「……わかった。もしそんなことがあるなら連絡を約束しよう。二人もそれでいいか？」

「はあ。セフレどころか彼女もないのに……。

虚しい約束になりそうだな、オイ」

「はは。まあ、これで左京の気が済むならいいんじゃないか」

「ありがとう。それでその場合の女子本体やゴムとかの事なんだが」

「あれ？ この4人で食堂にいるの珍しいね。左京君がいるし」

言質をとったので、これで懸念も大体は消せた。

ついでに具体的な部分も聞いてしまおうと、次は片付けや避妊について話そうとしていたら、一之瀬が話しかけてきた。

手ぶらということとは、トレイを片付けて教室に戻る途中だったのだらう。

「い、一之瀬!?!」

「俺達は左京に呼ばれたんだよ。ちよつと話があるからつて」

「へえ〜! 何の話をしたの?」

「りよ、き、客船旅行の事だった:ZE。な→あ←、神崎」

「あ、ああ。なんでも……ない話だぞ?」

四方は普通だが、柴田と神崎があからさまに挙動不審だ。

さっきのはシモ系の話でもあったので、女子に聞かれたくないのはわかる。

しかし、間が悪かったのか動揺を隠せていない。

堂々としてればいいものを……。

と思つていると案の定、一之瀬に不審に思われていた。

「左京君、神崎君達に何を話したの?」

——僕が。

「知りたいか?」

「知りたい……かな?」

答えながら柴田達をチラ見すると、必死に首を横に振つていた。

圧倒的思春期行動である。

それを女子の前でつつかない程度の情けは僕にも存在した。

だから。

「知りたいならもつと媚びへつらえ!」

「え?」

「媚びへつらつてくださいっ!!」

「し、知りたいでございますう?」

「語尾はにやんで頼む」

「知りたいにやん!!」

「ぶははははっ! きっしょ! まさかマジで言うとは……ははっ!」

「ひどっ! え、つていうか私、また騙されたの!?!」

「そっだよ?」

「~~~~~っ!!」

いわれなき言いがかりには、断固たる態度で対応することにした。滅法甘いことに定評がある一之瀬なら、勢いだけの誤魔化しが効果的なのだ。むしろ下手に勢い以外を混ぜると、勘付かれる可能性が上がる気がする。

仕上げの締めにからかいを一つまみすれば、話を逸らすのは実にたやすい。

これもまた、能力差が戦力差にイコールで結ばれない証明の一例といってもいいだろう。

ちなみに、おちよくられた一之瀬とその後の僕への小言による精神消耗は、いわゆるコラテラルダメージである。

ただこれだけで終わらせると、2日連続でおちよくった一之瀬の恨みを買うかもしれないので、昨日仕入れたばかりの材料でご機嫌取りも忘れない。

この一之瀬が喜ぶ可能性も高い案は、前に戸塚に相談された内容とほぼ同じだった為、考える手間もなかったのが助かる。

なので僕は一之瀬が少しだけ落ち着いた瞬間を見計らい、ソレを吹き込んだ。

そして——予想通り、その効果はバツグンだった。

実行に際しての懸念も口に出されたが、戸塚や葛城との話し合いにより予備知識がある僕には問題なく、ほとんどの部分を明快に答えることができた。

そこからは希望が出てきたのか笑顔になり、先ほどの話など忘れたかのように四方達と会議を始めた一之瀬を尻目に、僕はそつと席を立った。

これは、吹き込んだことがバレちゃいけない対象者にさえバレなければ、成就しても文句は来ず、話を一気に変えることができ、一之瀬の機嫌も良くなる一石三鳥の策だったのである。

まあ次の日の放課後——バレたら一番まずい者に、即バレしてただけども。

「左京。一之瀬と葛城が生徒会の席を買収し、ポイントで新たな制度を作った件について聞きたいのだが？」

「ぶふっ！ まさかまさかですよねえ。あの真面目な二人がねえ〜」

会長は厳しい顔で、副会長はニヤニヤ笑顔で。

左右を見れば、橘書記といつもより小さく見える一之瀬・葛城。

事の起こりは、4月頃に戸塚から葛城を生徒会に入れる方法を相談されたことだ。

その時の僕は、信用できる教師を見つけて協力を頼み、後にできた理事長とのコネも加えて、教師側がおおっぴらに生徒会に介入する案を出した。

それが生徒会への教師推薦枠制度。

更にこれだけでは不十分かとも思い、生徒会の席自体を買うことも次善の策として提案しておいた。

そしたら、慎重な葛城が両方を採用したのだ。

曰く、席を買う事はともかく、この制度を作っておくことが後輩への道しるべになるとのこと。

戸塚と葛城が教師と交渉した際、その制度を作るのに100万P P。

その教師から聞き出した生徒会の席を買う額も同じく100万P Pとなったらしい。

ちなみに昨日の一之瀬には、一之瀬の分100万P Pに加えて、葛城に相乗りする代わりに葛城が足りない分のポイント負担をするように助言しただけだ。

そうすれば、すぐ生徒会に入れるよ、と。

これは教師と生徒会に繋がりが薄い……というか個人以上の繋がりが無いと見たからこそその隠密性ある案なのだ。

事実、発覚まで会長にはバレてなかった口ぶりだった。

だから生徒会に入る二人は当然目立つだろうが、せいぜい教師と交渉した戸塚あたりまでが注目される範囲だと考えていた。

僕は提案だけでこの件にはほとんど直接的に関わらないようにしていたし、他にも色々やっていたから立案者がバレることはないと思っていたのだが――。

「……………何故バレたし?」

もしや、ありえないと思っていたが、葛城か一之瀬が僕の名前を出したのか?

「聞かなくてもわかるわ! お前以外の誰がこんな事を考え付く……いや、考え付くまではともかく、実行させてあまつさえ実現までもつていける奴など他にいるか!」

「い、いるんじゃないっすかね。」

ほ、ほら。あの、『ポイントさえあれば何でも買える』って前に担任が言っていましたし、だったら空いてれば生徒会の席も買えるし、制度を作る権利も買える……って感じで」

「くっはは!」

——って、いるわけねえだろっ! 百歩譲っていたとしても、これまでの実績がお前しかありえなくさせてんだよ! 生徒会を通さずに校長含む教師の推薦枠を作り出して、会長にも悟られないで生徒会へ入れるとか常識外れにもほどがあるだろうが! しかも二人もだぞ!?

「つうかお前、なに普通に自白してんだよ!」

異議あり。

推薦枠を作り出す案含め、いくつかは確かに僕がきっかけだが、実際に100万PPで作れるように教師と粘り強く交渉した葛城・戸塚。それだけだと席を買い取れるポイントが残らなかった彼らの分のポイントを、クラス貯金から出す(当然クラスからの承諾を得た)代

わりに相乗りを申し出た一之瀬・四方。

総計300万PPを捻出し、最後まで厳しい条件を走りきった葛城と一之瀬なら、僕が案を出さなくても何とかなつた可能性はあると思う。

つまり、会長と副会長のいないという答えは間違っている。

だから、そう主張して少しでも話を逸らしたい。

「待ってください！ 確かに案自体は僕の可能性が「その可能性しかねえよ」あります！」

ですが、実行したのもポイントを集めたのも推薦枠を作り、その上で席を買った「買わせたの間違いだろう」のも、新役員二人です！

言わば僕は口を出しただけの一般生徒「一般生徒は制度を作り出したりしません……」であり、二人はリーダーとして充分の資質を示したのです！

常識に囚われず、賢明なご判断をお願いします!!」

「お前はもう少し常識に囚われろよ」

「……はあ、それはもういい。既に一之瀬と葛城は庶務として生徒会の一員になっている。」

「ご丁寧にそれぞれ100万PPを支払った上、今までこの学校に存在しなかった教師の推薦枠まで持ってこられてはな」

駄目だ。

既存の生徒会役員から総ツツコミである。

葛城と一之瀬はともかく、僕が逃げられる道筋が見えてこない。

流石にこの状況と相手に口八丁は分が悪すぎる。

それに会長は冷静に葛城と一之瀬は仲間と認めているようだが、反面僕を見る目にはヤバさしか感じない。

このままでは、またブラックな何かに従事させられてしまう。

何とかして逃げなければ……！

「だが——お前は別だ、左京。」

来い。別室でたっぷり絞ってやる」

「そ、それは、その……アッ！ 的な意味でしょうか？」

でしたら、なんとしてもお断りしたいのですが……」

「ブツハ！ お前、すげえな!! くっははははは！」

「左京君っ！ 会長になんてことを言うんですか!? 早く謝ったほうがいいで…すよ？」

「……っひー！」

そうして焦ってしまった結果、最初の地獄の蓋を開けてしまう失言。

「……ふっ。ははは。」

初めてだ。俺をここまでコケにしたたわけ者は……！」

「フ、フオーザ様の物真似ですか？ 会長、お上手ですね？」

てか、眼鏡を光らせながら寄ってこないでください。怖いです！
ちよっ、なんで腕を掴むんですか!?!」

「………言いたいことはそれだけか？」

「ノウツ!!」

まだ…まだあります！ 山ほど言いたい事がありますので、どうか…どうかお慈悲を！」

「黙れ。…お前に喋らせておくと埒が明かないことがわかった。故に、考えを改めることとしよう。」

「……これから先、俺がお前に遠慮することはない」

「そんなっ?! 会長、おねげえしますだ！ 遠慮プリーズ！ 僕、人畜無害な後輩なんですよ!?!」

「口を閉じろ。お前には発言権も拒否権もない」

会長はもう駄目だ。

橘書記も止めることはできないだろうし、副会長は……笑ってやがる。

駄目だ。

この生徒会はもう駄目だ。

それならば。

「一之瀬に葛城！ なにそんな落ち着いて見てるんだ!! もっと慌てるよ！」

僕が暴虐の主に連れ去られそうになってるんだぞ!! 今こそ下克上を成し遂げろ！」

「また人聞きが悪いことを……。そんなことが出来るわけなからう」

「左京君。今度こそ年貢の納め時だねっ！　がんばって♪」

「ち、ちくしょおお!!　味方がいねえ!？」

まだ毒されていないはずの葛城と一之瀬に助力を仰いだが、あつさり見捨てられた。

葛城はともかく、一之瀬など嬉しそうに輝く笑顔で、である。

希望が叶って嬉しいのはわかるが、むしろ僕がWe got hi mされていることに喜んでるようにさえ見える。

僕が一之瀬に何をしたというんだ！

「……ほう？　暴虐の主だと?？」

「はっ！　ちがつ、違うんです！　これは言葉のあやといふかなんというか……」

「しかも造反教唆とも取れる反社会的言動。これは矯正も必要のようだな」

「あ、ああああ」

更に失言に次ぐ失言を利用された事によって、有無を言わず僕は別室へと連行された。

一縷の望みを賭けて橘書記と副会長にも助けを求めたが、呆れたり笑っているだけで誰も助けてくれなかった。

良識を持ち「みなさん、アーツ！　で通じるんですね?」とか言つて、場を凍らせる選択肢を取らなかつた僕を擁護する声はなかつた。なかつたんだよロツク。

だから、この話はもう終わりなんだ。

「橘」

「は、はいー!」

「後輩二人の面倒を見てやれ。今日のところは軽く見学させる程度でいい。頼んだぞ」

「かしこまりました!」

「南雲もできれば橘をフォローしてやってくれ」

「了解です」

会長は僕を引き摺りながら指示を出し、別室の扉を閉める直前に一

言。

「ああそれと、一之瀬、葛城。

ようこそ生徒会へ。経緯はアレだが、何であれ実力は示したんだ。歓迎する」

「あ、ありがとうございます!! よろしくお願いします!」

「ククツ。おい、新入り二人! 早速だが、まずは予定外に足りなくなつたお前らの机を運ぶぞ。

それから——」

それ以外で地獄を隔てる扉が閉まる寸前に聞こえたのは。

——葛城と一之瀬のやる気に満ちた挨拶、そして南雲副会長の笑いを含んだ上機嫌な声だつた。

なんで扉一枚で、こつちとあつちで……こんなに空気感に差があるんだ(絶望)。

・
・
・

その後の僕に、何があつたかつて?

……思い出したいくないから、記憶は忘却の海へと捨てたよ。ヤツはいい奴だつた。

そもそも生徒会室に来た目的。

部室と部費の申請と許可を橘書記がやってくれていたことだけが、この日のアレコレに疲れた僕の慰めである。

49、旅行

青い海。白い波。青白い顔。

吹き込んできた強い風にあおられた隣の小さい体を支えつつ、窓の外に広がる雄大な景色に思いを馳せてみる。

ここは8月初日の猛暑を感じさせない太平洋のど真ん中。

そう、世はまさに大航海時代！

「うぷぷぷ……」

「大丈夫か、四方」

そんな気分の中、豪華客船の展望室とトイレを往復しつつ、四方の呻きと僕の介抱が冴え渡っていた。

朝5時という早起きをすぎたせいかな酔いしている四方の口に、ガムや飴を放り込むことで緩和を図っている。吐くものを吐ききった風なのでもうトイレ移動はしなくていいだろうが、口の中をリセットしたほうがまだマシになる為でもある。

というか、酔い止めとか持ってくればよかった。神崎に頼んで担任に聞いてきてもらっているが、自分でも持っていればロスはなかったのだ。

「折角の旅行なのにごめん」

「ん。僕は気にしなくていい。ただ神崎や他には後で礼を言っとけよ」

「ああ。わかってる」

正直、四方の酔いだけでなく僕もここに来ていた予感がするの
で、そこにひと手間加わるだけの僕には感謝も謝罪も必要ない。

ただ四方とお互い気遣い合って、あえて離れてくれた東風谷に一之瀬・柴田と、薬や水をもらいに行ってくれている神崎には必要だろう。
親しき仲にも礼儀ありというからな。

しかしデッキは人が多かつたし、ダイレクトに風が当たると思っ
て、ちよつと離れた第二展望室に連れてきたけど、こつちも結構な数の窓が開いているのであまり変わらなかったかもしれない。人は大

分少ないけども。

「四方君。酔った時は、遠くを見るといいらしいですよ」

「……ありがとう。やってみる」

その普通に風が吹いてて人気のあまりない展望室には、ひっそりと本を読んでいた変わり者の椎名も居た。

いや、こんな場所に居て助けてくれたんだから、椎名が変わり者で良かったというべきか。四方の気も紛れるしな。

「……絶景だな」

四方はされたアドバイスを即座に実行したようである。

そう小さく零していた。

僕も釣られて海の方を見てみると、海鳥と目が合った……：……ような気がした。

なんとなくそのまま目をスライドしていくと、小さなベランダのよ
うな場所に鳥の餌BOXと思しきものがあり、ヤツラに催促されてい
る気分になる。

「左京君？」

その気分のままフラフラ近くまで行き、BOXのボタンを押す。

すると予想通り餌っぽい包みが出てきたので、船と併走飛行してい
た海鳥達に向かって少量投げつけてみると、上手い！ と、言いたく
なるキヤッチを海鳥達は見せてくれた。

「四方、椎名。君らもどうだ？ 無理には誘わないが、気分転換になる
かもだぞ」

「……では、少しだけ」

「……面白そうだな」

振り返って二人に聞いてみると、意外と乗り気になったようだ。

まず軽く僕がやってみてから餌袋を渡すと、最初はおずおずと。だ
んだん楽しさがわかってくると、自分でもBOXから取ってきて餌投
げをやり始めた。

椎名はともかく、四方は調子が戻ってきたのかもしれない。

ひと段落着いたら、さっきまで吐いていた四方の腹が減ってくる
(胃に内容物がないから)と予想して、朝食の時に包んでもらっていた

サンドイッチをわかるところに置いてこう。

さて、そろそろ何故僕達が船上の人になっているかを説明しておこう。

といっても、ほとんどの諸君には説明不要であろう。

なので、7月後半から今に至るまでに何があったかを軽く思い返すことで代用とする。

あの生徒会での忌まわしき出来事があってからしばらく。

……あれは本当に、本当に忌まわしい出来事だった。忘れたはずなのに、説教の断片が浮かび上がってくることさえある。

改めて明言するが、僕にとって努力だの自己研鑽だのは信じるに値しない。

そんなことを言ってくるのは、マジでブラックな組織に属する奴だけだと思ってる。

ちなみに、ここで僕がいう努力とは主にサビ残やそれに類するモノのことだ。

時に現代社会では、サービス残業などの事を自己研鑽や努力と言い換えるのである。

だから、僕は自己研鑽や努力などという言葉を断固として信じない！

ふう。またフラッシュバック的な発作が……。

後で桂枝加薬湯と四物湯を飲んでおこう。

余談だが、桂枝加薬湯は、体を温めて緊張をほぐす作用があり、冷え性や便秘・下痢などにも効果がある。つまり腸の調子を整えれば多分間違いではない。

四物湯は、血の巡りを良くすることができ、冷え性に皮膚の乾燥、しみに効果がある漢方薬だ。

この二つはトラウマのフラッシュバックに効くとされている。

ただ実は、このコンビは効果があるってわかるだけでメカニズムは解明されていないらしい。

なので使用はどうかとも思うが、青娥さんの店には何種もの薬品や薬学書あつて面白かつたので、僕は薬学にはまつていた時期があつたのだ。

そうするとついその知識を使いたくなくなってしまい、店の物も使つていいと言われたのもあつて、時々青娥さんに分量などを見てもらいながら自分の体で実験している。

関係ないが、おそらくこうした薬学・医学を何やかやで変化・発展させたのが、仙人の伝説とかで出てくる術や仙丹なのではないかと思つてゐる。とても興味深いものである。

……また脱線した。

ともかくそうしたことがありつつも（あ、ついでに期末テストも）なんとか乗り越え夏休みに突入した僕達には、高度育成高等学校が用意した2週間の豪華客船旅行が待つていた。

勿論、8月までの間もゲームを作つたり、勉強を教えたり、8月分先取りでバイトを少しだけしたり、期末テストがあつたり、部員十何人かを呼んで天体観測をしたりした。

新たに獲得した部室は、僕的にはなかなかの立地にあり、部員達十 α ともども暇な時や休みにも使つてゐる。

部費はスズメの涙で、なおかつ学校のシステム的に遠征や合宿できない関係上、完全に死んでゐるが、部活用のカードを貰えたのでこれも後々何かに利用できるかもしれない。

ゲーム製作と佐倉や東風谷の勉強を見るのは、同時にその部室で行つた。

ただテスト勉強は生徒会へ出向いた日以降の土日2日だけなので、それ以外のバイトがない日はほぼゲーム製作に時間を使った。おかげでテスト後に美術部へ依頼を出した背景と、僕が書いたキャラの雰囲気や7月中に合わせることができたのである。

更に佐倉監修の絵や弾幕を、高円寺のテストプレイと指摘で改良し

ていくことには手ごたえを感じたので、とりあえず高円寺のあと1回分はこのスタイルで仮の完成を目指そうと思っっている。

ちなみにこのうちの土曜、7月20日は僕の誕生日だった。

なので、一之瀬と東風谷が部室に来ていた事を好機と捉えて、誕生日プレゼントを強請り東風谷の浄化を図る計画を始動させ……：ようとしたら、まさかの一之瀬の誕生日でもあるという人生の不具合。

膝をつき、誕生日を相殺されて諦めた計画をゲロった時には、東風谷にNDKを僕に向けられ、散々煽られ尽くした。

特に「へーい！ 頭よわわ夢月さんく？ 下調べも満足にできないざあくこ？」とか罵られたのには、捲土重来を誓うレベルである。

あの性格の奴に、NDKやメスガキ語を教えた奴共々、絶対に許さん。

一之瀬も頭を抱えていたから、この件については協力し合えるかもしれない。

しかもこの上、四方や佐倉には呆れられ、高円寺にも笑われたのだ。綾小路や櫛田がクラスの方の勉強会に出てた為、いなくて本当によかった。綾小路はともかく、櫛田がいたら絶対に悪乗りしていた確信がある。

ていうか、ふと櫛田が黒幕なのでは？ という疑惑が湧いてきた。同時に、はるか昔に僕自身が吹き込んだような記憶も脳裏をよぎったが、それは当然気のせいである。

22・23日の期末テストでは、主要科目は前回とほぼ同じ点数なのに、僕の順位がギリギリ一桁という奇怪なことが起きた。

また四方や葛城、高円寺や一之瀬といった者達も軒並み上位に名を連ね、確かにいた他のDクラス満点の者は半数以上が20位圏内からすらいなくなつた。

確かに5教科から11教科、日数も1日から2日と変化していたので、面食らった部分はあつた。だが、全教科授業を聞いていればほぼ回答できる難易度に調整されていたから、むしろ簡単になっているように思える。

これに関しては、勉強していた友達連中も同じく感じたそうだな。なので、前は一体なんだったのかと首を傾げることに。

この件についての僕の憶測だが、Dクラスは中間テスト自体を買収しようとしたのではなからうか？

それが問題か点数かそれ以外かはわからないが、制度や席を買い取るのだから、それなりのポイントを使えばテストの買収も可能性はある気がする。

これには「何の為に」という部分とDクラスのCP的に致命的な穴があるわけだが、もしこれが解の一つならあのクラスには何かがあると思えてならない。

思うにこういうことは櫛田より綾小路か高円寺あたりが有力候補っぽいので、次にゆつくり話す機会があつたら一度聞いてみるのもいいだろう。良い話の種ができた。

28日には、部員みんなのみずがめ座δ流星群を観測した。

部員全員が参加し、それ以外に鬼龍院先輩や綾小路も来てくれて、夜空を流れる星々を眺める楽しい時間だった。

学校が大都会の真ん中なので、見れたとしても微妙になるかとも思っていたが、実際そんなことはない。神社近くの広場から見えた星々は、なかなか馬鹿にできないもので参加してくれた全員で見入ってしまうほどである。

佐倉や美しさにうるさいと最近わかってきた高円寺も認めたのだから、これからもこの調子で天体好きを増やしていきたいものだ。

一方、僕は改めて天体の素晴らしさ・美しさに触れ、言葉を失って時間を忘れていた。

まあ逆に言うところのホストとしてはアレなのだが、お喋りな奴は参加していないし、きつと他にとつても最高の天体観測になったことだろう。

この日はきつと、誰かものすごくツイていた奴がいたに違いない。

その誰かに感謝を示し、観測会が終わってからの食事は全て僕の奢りとした。

なんとなくのノリでしたことだったが、ゲストの鬼龍院先輩や綾小路にも驚きつつ喜んでもらえたようなので、たかが数万程度なら安いものだろう。

とまあ、適当に回想しているうちに神崎が戻ってきており、四方も置いておいたサンドイッチを食べられるくらいには回復していたよ
うだ。

「あっ！ イルカですよ!?!」

そんな中、突然椎名が声を上げたのでそちらを見てみると、確かに船に併走するように泳いでいるイルカの群れ。

それを見ての、神崎の一言で場は凍りついた。

「ふむ。食べられるのだろうか?」

「イルカを食べる!?!」

「ああ、普通に売ってるところもあるらしいな」

「食べる事は物の本で知っていましたが、実際どうなんでしょう」

「へえ、でも一応食べるんだ」

「食べる奴なんてイルカ?」

……………こいつ、真顔でこういう駄洒落を言う奴だったのか。

「はあ?」

「……………ああして泳いでるのを見ると、僕はあんま食べる気にはならないな」

「……………ですよねえ」

「……………」

もしかして、神崎は綾小路に弟子入りでもしたのか?

僕としたことが、彼の印象がわけのわからないことになっている。

でも滑って流された程度で赤面しているようでは、まだまだ綾小路の域には到達していないな。よりによってこの面子に言うとか、気づかないかスルーされるに決まっているのに…………。

芸風的には綾小路に近いから長じればどうなるかわからないが、あっち方面を伸ばしても先は明るくないのではなからうか？

そのなんともいえない空気の中、唐突に船内アナウンスが流れてきた。

『生徒の皆様にお知らせします。お時間がありましたら、是非デッキにお集まりください。まもなく島が見えて参ります。暫くの間、非常に意義ある景色をご覧頂けるでしょう』

うわあ。意義とか言ってる時点で、もはやブラックな部分を隠す気ゼロじゃん。

旅行って言葉で釣って騙し討ちまで仕掛けてくるのかよ、この学校。

僕・四方・椎名は顔を見合わせると、お互いがげんなりしているのを確認できた。真剣風味な雰囲気に戻った神崎が羨ましく思えるレベルである。

神崎はアナウンスを聞いて僕達に一言断り、すぐデッキに向かってしまった。

残った僕達は、無言のままおもむろに端末で学校運営の情報サイト（更新されると後出し情報が載る事がある）を見始める。

更新されたばかりのそれによると、これから行く無人島は面積約5？、最高標高230m。どうやら国から借り受けて管理している島のようなのだ。

生活するには十分な広さではあるが、この島で何らかの騙し討ちしようとしている学校の思惑を僕はすでに確信している。四方と椎名も同じような結論に至ったのか、げんなり顔から諦め顔へと変化していた。

遠目に見えてきた島は美しいのに、そのせいで素直に感動できない。

「また……なんか裏があるんだろうな」

「そうでしょうね」

「いい加減にしてほし」

「……はあ」

3人で面倒に思っている間も、船は不自然にもほどがある高速航行で、高々と波をかき分けて島の周囲を一周していた。

そしてそれが終わる頃には、30分後の上陸と、ジャージに着替え、所定の荷物の確認と端末所持、私物を置いてデッキに来る指示が再びアナウンスされるのだった。

50、自由

ブラック企業の研修。

これはかなりの場合で、典型的な『洗脳』の手法だ。

理不尽・意味不明・非効率・人格否定・人格攻撃・束縛・監視・外界との遮断・下のものに対しマウントを取り続ける。

こうした例に当てはまれば当てはまるほど、そこはあの忌まわしい深遠に近いといえよう。

なぜなら、洗脳の基本はこれらだからだ。

……僕が、いきなりこんな反社会的な思考に至ったのには勿論理由がある。

まず僕達は、死ぬほど暑いデツキに集められた。

そこで端末やスケッチブックを奪われ、監視装置の一種と思われる腕時計を付け、炎天下の下に並ばされ、真嶋先生の突然の一言から始まった特別試験とやらの説明を聞かされたのだ。

その時に想起されたのが洗脳手法である。事前に想定した面倒事の中でも、かなり嫌な部類の予想が当たってしまった。

価値観や尊厳を徹底的に否定・破壊し、組織が都合の良いように誘導……いや、もう作り直すとすらいつてもいい。

今現在、真嶋先生や茶柱先生が反論している生徒に対し、無理矢理なマウント取りをしているのは洗脳の一環だろう。更にクソ暑い中という悪環境を加えると、疑いようもない。

また同時に仲間意識を強く認識させて、仲間と敵で区別させるようにも誘導している。本来、敵ではないはずの別の集団を敵と見るように少しずつ……。

これにより個人主義ではなく、集団……自クラスを優先する人間を作り出した事がわかる。

だがこれで出来るのは、疑問も持たずに考えることを止め、言われたことだけを効率的にこなす人間だけだ。

先生達自身にそういった意図があるかはわからないが、自由がテーマと言いつつ、この特別試験はこれまで以上に思考停止を誘導する意思を感じさせる。

しかも先生を言い負かしても意味がないどころか悪化する未来予想が容易な事まで、ブラック企業の理念で満ちているのだ。

例えばSシステムや退学の説明の時から、担任は学校に似たような事を言わされていた節があった。

短期的な分野に集中し、長期的な分野を疎かにする背景は、ここからきていると思われる。

横並び教育に、余計なことをしないようにする基本方針の上で、餌に釣られ限られた者だけが横紙破りを推奨されるのだろう。

入学前から疑ってはいたが、この特別試験でもう確定したといってもいい。

——この高度育成高等学校は、ブラック企業かその類の組織の上層部、及びその駒や密偵などを育成する為の学校だ。

だから、卒業生もこの学校の前情報もどこにも見つからなかったに違いない。そんな進路ばかりなら、情報流出のリスクを考えるようになる——『教育』されるだろうからだ。

ネットにすら情報がなかったのは余程の縛りがあるときだ。

生徒会は、おそらく政治・経済分野での上層部候補を、蠱毒的な何かで淘汰させるモデルケースなのだろう。実際に僕が見た会長や副会長からして、そう察することができた。

凡人の僕が気づけたのだから、葛城や一之瀬も当然これには気づいていただろうに、よくそんなところに入りたがったものである。

理事長が善人寄りに見えた為に確信に至るのが遅れたが、本気でヤベー学校に来てしまったと今更実感している。

ポイントで転校とか……無理に決まってるよなあ。

ここまで役満が揃って、穏便に逃げ出す余地を残すわけがない。

それに四方や佐倉といった友達も身内のように思っているので、仮に転校可能だとしても自分だけではできない。既に包囲網は敷かれているのだ。

「ああ。これは、やっちゃまったなあ」

「いきなりどうした？」

柴田に独り言を拾われてしまったが、返す言葉がない。

いくつか打開策を思いつくことこそあっても、そのどれも成功率は低く……しかし行動しないと、どんどん沼にはまってしまいう為に動かざるを得ない。

ブラック企業・ブラック研修の類似試験など、できれば近づきたくなかったし、受け入れたくもなかった。

納得のいくものでないのは、想像がつくからだ。

だけど、この流れはもう変えられないだろう。

一応、これからデツキでマウント取りまがいの問答しているところに、まだマシな策を携えて打って出てみるが、これでどれくらいの人数を敵に回すことになるのか。

少なくとも、先生達やこのおかしなルールを無条件で受け入れようとしている生徒達には、目の敵にされる可能性がある。それなりの確率でだ。

それでも僕が行動しない選択はない。

まったく憂鬱なことである。

憂鬱なので、ぶっつけで成功率半々もないくらい思い付きも試して、いっちょ楽しむ心意気でやってみることにした。

「あ、ちよつと借りますね」

「——っ!？」

生徒へのマウントを取り終え、壇上から降りて去ろうとしている真嶋先生に忍び寄り、手から拡声器を抜き取り、再びスイッチを入れて声を響かせた。

一仕事終わったと思った瞬間こそ大きな隙を生むのは周知の事実なので、僕程度でも忍者の真似事ができるのである。

次の指示を出そうとしていたのか、別の教師も拡声器を手に何か言おうとしていたが動きが鈍い。どうやら様子見してくれるっぽい。

僕の姿は前の方の奴しか見えないだろうが、声が聞こえて僅かな間に解散にならなければ問題ない。すぐ壇上に上るからだ。

「え、同級生のみなさん、ならびに先生方、スタッフの皆様。こんにちは。

僕は左京夢月と言います。んでいきなりアレなんですけど提案があります。

——試験とかシカトして、4クラス合同で遊びまくりませんか？」

そうして声を響かせながら壇上に上って提案してみるが、しん：として反応がない。

少なくとも真嶋先生から拡声器を返す要求が出ると思っていたのだが。

この提案だけでは具体性に欠けるせいかもしれない。

その証拠？に、さつきまで先生に質問とか文句を言っていた生徒や僕のクラスの面々。それぞれころか、敵に回すかもと思っていた先生方すらこちらを凝視して黙り込んでいる。

これは、もう少し詳細をプレゼンしないと駄目であろう。

「競争にかまけて大切な部分を忘れるのは、実にナンセンスです。

では、その大切なこととは何か。それは健康です。節約しすぎで我慢したりして、そこを疎かにする可能性が高いのがこの試験のように思えます。

だからそんな最後以外ほほ辛いだけことは止めましょう」

あのブラックな洗脳紛いの流れでは、こういうことをだれも言い出しそうにないのでしかたない。精神だけとはいえ、これは年長の僕の役目だろう。

だがこのクソ暑い中、長々と話す気はないので、めっちゃ簡単に端折って重要部分だけ話した。

「体調崩すのが10人といわずとも、5〜6人がリタイアしたら必要物資とあわせてほぼ0ポイントになるんですよ？ 40人規模の集団4つで慣れないサバイバルとか1週間もしたら、そのくらいは出ますって。」

特に女子は体力差やストレス・体調に加えて、あー……人前でこれはちよつとデリカシーに欠けますが、生理とかあるでしょ？ リタイアしないにしろ、相当な配慮が求められる。ポイントを消費するわけですし、こんな無理ゲーな試験はシカトして始めから遊びましょう！」

佐倉とかまさにこれが心配だ。

あの性格では配慮が行き届いてなかったとしても自分からリタイアできないことは予想できるし、1週間もあるので不調までいかなくとも相当な負担になる。またリタイアできたとしても、同調圧力で村八分になりかねない気さえする。

同じ運動音痴っぽい椎名は、自分の限界を見極められ、一応の処世術もあると見ているので問題ないだろうが。

「具体的な中身は、例えばAクラスが食料、Bクラスが生活関係、Cクラスがレジャー用品、Dクラスが足りない部分の補填。みたいに分担して遊びまくります。」

そして、ポイントが足りなくなればリタイアして船に戻ってもいいし、キャンプを楽しみたい人は残って、それぞれ楽しめばいいんじゃないでしょうか？」

もう一つ、Dクラスへの配慮にも一応言及しておこう。

あのクラス、日常に多大な影響を与える遊びや娯楽品を購入できない今の状態は、試験関係なくヤバい気がしているのだ。

「ああ、それとCPが必要だろう。Dクラスには、他のクラスからある程度のフォローとポイント獲得イベントを開催して有利な初期位置に設定し、賞品——試験ポイント？をゲームなどで補填する。というのはどうでしょうか？」

みんなで共倒れリスクを犯すより、困っているクラスに協力する方がなんぼかマシですしね」

実際、40CPしかないDクラスは、我慢大会ばりの吝嗇サバイバルを実行しそうな雰囲気があるのだ。さつき大声出してた奴らからして。

だが佐倉の心配もあるが、僕が高円寺か綾小路の立場ならそう決まった時点でリタイアする決意を固め、心配な友達もリタイアさせる可能性が高い。

つまり僕のような奴が数人いたら、その時点でポイントなど残らないだろう。

「ついでに先生方に言いたいんですが、さつき言ってた企業研修って△○のでしょ？ あんな確定でブラックな研修を例に出して高校生相手にマウント取らなくても、こんな無人島にいてポイントの縛りまである時点で自由になんてできないですよ。」

なので、ここはいつそテーマの『自由』を逆手にとって、自由に試験を無視して先生方も一緒に少し特殊なバカンスに仕立て上げましょう！ そっちの方が楽しくなると思うんで！

こういう企画はうちの学級委員長が得意そうだし、他のクラスにも多分そういう奴が一人くらいいるはずです。折角の機会、遊ぶついでに同級生同士の親睦を深めるのに使ったらどうでしょう？ つていうのが僕からの提案でした」

ついでにちよつとイラツときていた先生達のマウント取りについても一言皮肉り、最後はクラスのトップ的な奴らへの丸投げで締める。

引き合いに出した真嶋先生や茶柱先生から睨まれたので、これ以上僕から何か言うのはやめておいた方がいいだろう。正論でDVされかねない。

だから一之瀬。頑張つて交渉してくれ。

交渉次第で楽しさと快適さが段違いになるだろうから、是非魅力的な企画で他クラスを口車に乗せてほしい。

特に真面目が服着て歩いてるような葛城は反対しそうだから、アイドルである佐倉にも匹敵する顔と乳で葛城含む野郎共をまとめて籠絡してくれると助かる。佐倉とは違う意味で、絶対やらなさそうだけ

ども。

「ハアハッハッハ！ 相変わらず面白いアイディアだよ夢月。

ただ私は推奨したいが、どうやらあまり賛同者は多くないようだねえ」

「やつぱりそうか。反応が薄い気はしてたんだが……」

「左京君！ 言わんとすることはわからないでもないけど、試験を無視するなんてみんなで集まってる所で言うことじゃないでしょ!」

「一之瀬の言うとおりだ！ お前にはみんなで頑張るといふ協調性や向上心がないのか!」

そもそも一之瀬も賛同してくれなかったので、絵に描いた餅になっただけだが。

「……………そうか。無理か」

「当たり前だろっ!! 我慢すりや来月から小遣いが増えるんだぞ!」

だいたい健に蹴り入れてうちのポイント減らしてきた奴が、なに偉そうに言ってるやがる!」

「いや……………だけど左京が言っている事にも一理あるんじゃないか?」

「一理も二理もあるか！ 残せるポイントが少なくなるんじゃないか！

それにお前ちよつと前、あいつに停学にされたのを忘れてんのか!」

なんでそんな庇うようなこと言うんだよ!!」

基本真面目なタイプの葛城からの反対は想定もしてたが、一之瀬もやはり反対か。

それに特にDクラスの方を中心に強硬な反対意見が出ている。

これでは、最善策の達成見込みはないだろう。

「——やるじゃねえか、左京。

一之瀬に葛城、それに話す価値すらない雑魚ども。お前らはもつと考えるんだな。お前らが言う『みんな』に提案する場がここしかないかったんだろ、左京にはな」

「龍園（君）!?!」

龍園、それ正解。

ここ以外に軌道修正の機会を僕は思いつけなかった。

不幸中の幸いで龍園の良い奴モードが発動していて、助け舟を出し

てくれたようだ。彼には実現の可能性が潰えたことが見えているの
だろう。

どういうつもりかはわからないが、この時の僕にとってこれは最高の
助け舟だった。

状況は、龍園が僕の肩を持ってくれたおかげで、いつの間にか僕への
批判からリーダー同士での言い争いに変化していたのだ。

これは龍園が作ってくれたフェードアウトする絶好の機会。無駄
にするには惜しい。

そんな好機ともいえる3クラスリーダー（高円寺はリーダーじゃな
かったらしい）の言い合いの最中、機を見逃さないようにしつつ、高
円寺への好感度も上昇を続けていた。

まず沈黙を破って最初に賛同の意を示してくれ、暗に僕の引き際だ
と教えてくれたのだ。感謝は当然だろう。

それに前にも、ムーンという月を使ったあだ名をつけてくれたこと
もあった。ちよつと独特で微妙に恥ずかしくもあったが、不定形の魔
物よりはまだマシである。

こちらが広まっていれば、この不定形の輩め！ から、この月の輩
め！ に印象が変化することが考えられたのだ。あわよくば月人や
月の民と呼ばれていたかもしれない。それはなんか格好良いと、僕の
内に眠る中二病が言っている。

しかも天文部員にもなってくれて、綾小路打倒計画や今の提案にも
賛同してくれたし、自称していた偉大というのも器のでかさを自覚し
ているからこそなのだろう。

しかし後から続いた者共は、高円寺の言うようにほぼ賛同者ではな
いのだろう。

葛城はともかく、計画の中枢に据える予定だった一之瀬も賛同して
くれない事実が、もはやこれまでと告げていた。

あと、がっかりしてるので聞く気もないが、Dクラスの声が大きい
奴らもまだ口々に僕を批判している。予想通り、敵対に近い感じに見
られているだろう。

なにせよ有象無象はともかく、2クラスのリーダーから反対が

あつては、実現の可能性はほぼ消えた。

龍園が助け船を出している今のうちに僕も消えておくのが吉だ。

見たところ先生方も担任を含め乗り気ではなさそうなので、もつと粘っても無駄でしかない。

というわけで、切り替えた僕は高円寺に「賛同してくれてありがとう」と視線を送り、龍園にも内心感謝すると、言い争っているリーダー3人や他何人かを、気づかれぬよう注目が外れた隙に大回りですルーして四方と東風谷の間に戻った。

Bクラスどころか言い合いに参加していない他所のクラスの奴らからも、信じられない……みたいな視線が僕に送られてくる不可思議な現象があつたが、最善策を達成できる見込みがないなら次善策に移るのが建設的である。元々、成功確率はそう高くない見込みだつたしな。

なので気にせず、次の策に移行することにした。

ただその前に一休みしよう。

「さて、ここ暑つついし、全体説明も終わったみたいだし、あつちの陰に移動して一之瀬を待つてようぜ」

「了解です。何事もなかったかのように振舞う夢月さんに驚きつつ、暑いからツツコミません」

「いや、ツツコめよ。周りからメツチャ見られてるからな」

——左京君っ!? またなの!?

——いないだと! あいつどこに行つた!?

何処かから名前を呼ばれた気もしたが、役目が終わった僕にもう用はないので、きつと気のせいだろう。

「ただでさえ目立つ東風谷がまたなんかしたんじゃね? 僕は提案して帰ってきただけだぞ」

「さりと私のせいにはしないでくださいよ。今回は明らかに夢月さんが原因です」

「んなわけがない。まあでも、どっちのせいでもいいよ。僕達みたいな一般生徒はのんびり寝て待つてればいいさ」

「考えてみればそうですね。早起きしたので少し眠いですし」

「こ、こいつら。あまりに自由すぎる。空気や協調を気にしない性質なのは知ってたけど、ここまでだとは……」

なんせ学年全体で我慢比べの流れになりそうだったので、目立つのは嫌だったが失敗前提の一石を投じたのだ。代償にかなり気疲れしている。

速さが最重要とはいえ、どこのクラスも動いてない今、休みつつ待つのは理にかなっている判断なのだ。

僕達は駄弁りながら移動して、陰になっていた場所に寝転んで文字通り果報を寝て待つことにした。

四方や東風谷もなんだかんだで共に寝転がったし、これで共犯である。

僕単独ではなくなり、サボっても目立たなくなるし、怒られる時も助けてもらえるだろう。

——ふっ。計算通り（嘘）。

51、結成

目を閉じて休んでいると、また遠くで一之瀬が僕の名前を叫んだよ
うな気がした。

今度は気のせいとかでなく、こちらを疲れた顔で見てクラスごと近
づいてくるので、おそらく実際に呼んだのだろう。

ようやく言い争いが終わったようだ。

一之瀬の悟ったような顔がそれを証明している。

それから集まったBクラス全員で話し合いの流れになり、最初の方
針を決めることになった。

ここで僕は、これしかないという案を真っ先に出しておくつもりで
ある。

僕の考えには速度が重要だからだが、他になんか一之瀬から何か言
いたげというか、節約に関してや説教をしてきそうな不穏な気配を感
じるからでもある。

だから注意を逸らし、分散させたい。

そこを勢いで力押しすれば、説教からは逃れられないかもだが、少
なくとも節約貧乏生活の方向にはいかないだろう。

「さあ、話し合いで方針を決めるよ！ みんなどしどし意見を言っ
てねっ」

「ヨシッ！ これで方針が決まったも同然だな！」

「え、何も決まってるじゃないよ？ むしろ何も話し合ってるじゃないよ！」

「いやいや、うちには東風谷という機動力があるんだから、東風谷があ
るいは柴田をリーダーにしてひたすらスポットを取りまくる！ ド
派手にな。これしかないだろ？」

「ええっ!？」

「そんなことしたら他のクラスから簡単にリーダーを当てられてしま
うだろ！」

「そうだ！ 指名されてしまえばスポットのポイントはなくなるんだ
ぞ！」

四方と神崎から反論されたが、そんなことはルールブックを流し見た時に把握している。

一之瀬や四方、神崎はクラス間競争も視野に入れているのだろうが、それはおまけでいい。この異常なゲームを制する鍵はいくつか想像できるが、スポットの掌握が最も安全性が高いのである。

AとDクラス全員で遊びまくる案ができなくなった時点で、まず真面目に生き延びる方法を模索しなければならないからだ。

それを踏まえた上で、重視すべきは残すポイントでもリーダーでも他クラス対策でもない。

ある程度生活を快適にした上で、楽しんで試験を終えることだ。

その為には、先を考えた投資は無駄ではない、的なことをみんなに言っておかないと、あらぬ方へ向かって……最悪詰む。

ここで手を抜いて、苦しいだけでストレスを貯めるサバイバルになっちゃえば、僕は耐え切れなくなって勝手にリタイアしてしまうに違いないのだ。せめてそれだけは避けたい。

つまり僕は、リーダー当てることは所詮オマケと割り切り、ポイントを最大限稼ぐのは東風谷か柴田に丸投げしつつ、大多数で楽しむ案に切り替えたのだ。僕自身がその大多数の中に入れば、非常に楽しむことができる。

尤もただそれだけでは賛同を得られないので、少し頭を捻れば誰もが思いつく対策を前面にして押し切る方法も考えてあるが。

「ふう。四方、神崎。相変わらず君らは頭は良い癖に固いな。」

——担任！ リーダーを当てられてもペナルティが発生しない権利は、試験ポイント、あるいはPPやCPでいうといくらで買えますか？」

「あ、ポイントか……。それは盲点だった」

「また試験を根底から覆すようなことを。」

あのね左京君、試験には守らないといけない最低限のルールがあつてね……」

「そういうのはいいですから。やれるかやれないかでお願います」

「はあ。私がやった人知らないから断言できないけど、できるとし

ても多分最低50万PPはいくと思うよ。試験ポイントとCPでは無理だね」

それがこれ。

駄目でも二の手三の手への変更も容易で、想定される問題対処に適任な担任も都合がいいことに一之瀬が連れてきていた。

で、一之瀬が引つ張つてきた担任なら答えを持っていると見て聞いてみればビンゴ。

確認ができたなら、あとは餌を撒きながら食いつくのを待つだけである。

できないとは言わず、対価を提示するということはできるといふことだ。

特別試験とやらの攻略法は、各種ポイントとインスピレーションでどうとでもできる場合があると思っていた。今回はその適用できる場合なのだろう。

端末を没収されてすぐ使えないからと、ポイントを度外視しなくてよかった。

「50万PP：多く見積もって4倍の200万PP程度までなら、生徒会での出費を除いてもまだクラス貯金が残ってるはずなので問題ないですね。得られるCPを考慮に入れば、最短1ヶ月弱で取り戻せる。」

一之瀬、この案ならどうだ？」

「……確かに、これができるならそこまで節約せずに、しかも他のクラスとも争わずに1位抜けを狙えるかもしれない。支払いは試験後でいいですよね？」

「支払いはそれでいいけど……でも試験の前例では」

「前例なんて作るためにあるようなものでしょう？」

それに、うちがAクラスに達するとボーナスだから頑張れとか言っていましたよね？ ほら、これが目の前にある好機です」

「好機……」

これは特別試験への一手でもあるが、餌としても布石としても担任への踏み絵（というほど大層なものでもないが）にもできる。

僕は一之瀬やクラスメイト達ほど優しくも善人でもない。

ついでにやられたことも、覚えていたからきっちり仕返ししてやるつもりだ。

まあそれはともかく。

担任が難色を表に出している理由は、おそらく新しい何かをすることに面倒かりスクがあるということだろう。

だが僕……いや、僕達を利用するつもりなら、担任からもそれなりの対価をベツトしてもらおう。それが後々、四方や一之瀬が後ろから撃たれない最低限の保障になるのである。

「ちなみに僕はAクラスの特典に魅力とか感じてないので、卒業間近でワンチャンあったら狙ってみようかな、程度にしか考えてません。だから担任ができない・やらないなら、好機を逃すことも軽く許容できます。」

ですが……一之瀬達大多数や担任自身はどうでしょうね？」

「う……」

更にハツタリで当たりをつけて、弱みを見つけたらそこを突いて突いて突きまくる。

勿論、エロい意味ではない。

このように、これまでに得られたピースがあれば、動かすように誘導する話の組み立ては容易という意味だ。今なら一之瀬達の視線も担任を追い詰める一助になるだろう。

追加で——同調圧力をかけられながら欲望と労力の天秤を揺らしている担任に——ダメ押しにずっと先生達に言っつてやりたかった言葉を囁いてやった。

「さっきまで先生方が生徒一同にやっていたことを、自分にやられる気分はどうです担任？」

「！」

「今、着いているのは生徒と同じ席。立場は対等です。」

まずはそれをわかってもらえましたか？」

目を見開いてこちらを見る担任。

教師はかなりの確率で世間知らずとは言いが、ここに至るまで自分

に主導権があると思つて踊る担任の姿は実に滑稽だった。

言葉の戦場で、言葉を途切れさせる失態は見逃せない。

それにしても、不意打ちしたとはいえ、冷静なら「そうはならんやろ」となるところを、まるで交渉慣れしていない新人のような反応。煽り耐性も低いし、担任は本当の意味で実社会に出ていないのかもとさえ思える。

流石にこれは失礼すぎて口に出せないけども。

「——さ、状況を理解したなら、リーダーカードの発行ついでに、キリキリ上と交渉して判断を仰いできてください。今回は早ければ早いほど。安ければ安いほど有利になるんで、好機を生かすも殺すも担任の動きが鍵の一つになるんです」

「ぐ……」

正直、生徒に騙まし討ちを繰り返してブラック環境に陥れてくる教師陣の信用は、もはやストップ安で暴落を続けている。

だから、あちらがそういうやり方で来るなら、こちらも利用し尽くすスタンスでいかせてもらうことにしたのだ。NDK風だったのは、底を見せないように態度をころころ変えるただのかく乱である。

「ううう。私、担任教師なのにパシリ扱い……」

「そんなこと」あつはつは。僕は担任をパシリ扱いできて、とても爽快な気分ですよ。

おっとそうだ。カードの名前は基本東風谷でお願いしますが、もし柴田や他の人になる場合は、僕か誰かがひと叫びしますんで、反映よろしくです」……左京君

腐つても大人ということか、一応早期に言葉を取り戻した担任。

その子供っぽい演技を嗤いつつも、想定していた一之瀬のフオローをインターセプトする。

ここで担任に持ち直されると、折角組み上げた一之瀬や四方の保険に支障が出る可能性がある。

「ふええ、左京君の担任使いが荒いよお」

「ことあるごとに僕を笑つてた報いじやないっすかあ？　ぎつまあ！　ぶーくすくすつ。」

おつと失礼。つい本音が。担任はお早く行ったほうがいいんじゃないですかね？　じやないと、被ってる猫を剥がされるまで煽られることになりますよ」

「……覚えてなさい」

「負け犬の遠吠え乙！　それともう忘れました！」

「メツチャ良い笑顔だなオイ」

「……ふふっ。それでこそ、ですよね」

まあそれはそれとして。

悔しそうに捨て台詞を吐いていく担任を、胸がすく思いの笑顔と言葉で見送った。呆氣に取られているか、呆れた感じのクラスメイトとともに……。

全部が担任のせいではないが、八つ当たりがちようどいい位置にいるのが悪かったのだ。代わりに生徒である僕を良い気分になんてしてくれただから、教師冥利に尽きるというもの、ということ片付けておこう。

ついでにこの良い気分の中に、保険の一手も打っておく。

まごまごしていると、一之瀬含むクラスメイトが担任に何をしようと酷いとか言ってきた、面倒になりそうな気がしてならない。

後で聞いてくる奴がいたら、説明は解説キャラっぽい神崎にでも聞いておけ、と丸投げすることに今決めた。解説できるのか知らんけど。

僕は半分なんとなくで打った手なので、人に説明でき……ないわけじゃないけど、面倒なのだ。

それに今は巧遅よりも拙速が重要。

話や議論や説明で時間を引き延ばすのは、入手ポイント減少を招いてしまうという大義名分もある。

時は金なり万歳である。

「さて、担任が行ったところで保険の策も提案しておく。

つまり権利を買えなかった場合だな」

「買えない場合?」

「ああ、この学校なら充分ありえる話だ。

この場合、僕が思いつける対策としては、最終日付近でリーダーを船に突入させる、リーダーを何らかの方法……例えば故意に不調にしてリタイアさせる、などの手がある」

こちらは通常なら提案する必要もないのだが、今の僕は停学分のC Pを稼ぐ償いをするのをクラスに約束している。

なので、稼ぎが無駄にならない程度に適当な他クラス対策も言っておく必要があるのだ。

「要は失格にしてもらってリーダーを不在にしていまえば、指名されたとしても他が損をするって寸法だ。

個人的に不調にする方は論外として、このルールブックには乗船は禁止、勝手に乗船した者は強制失格と書いてあるからできるはずだ。リーダーにも適用されるかはわからんが。

あとリタイアと強制乗船のペナルティーで合わせてー60ポイントだが、これだけなら計算上東風谷や柴田が稼ぎ出すポイントのほうが圧倒的に多いため問題ない」

「ええ!?……だけどこれって、いいんでしょうか?」

「よくもまあ、そうポンポンと……」

「知らん!」

だけど面倒臭くて回りくどい他クラスの裏工作対策とか真剣に考えたくない。このクソ暑い中、無人島での男女合同集団生活の時点で大変なのに、他所事や些事まで気にしていられるか。それに違うことしたいなら、他の案を出せばいいだけだ」

これだけ駒を進めてしまった状況で、他の案と言われてすぐ出てくるわけがない。

しかもここは木陰とはいえ全員がギリギリ収まる広さの為、思考を乱す暑さもあって、なるべく早い決断が求められるな。

これは反対できない方向に風が吹いているな。

「うっ、こんなすぐに他の案とか思いつかないよ」

「まあ、決めるのは一之瀬だ。僕の案にするにせよ、違う案を出すにせ

よ、なるべく担任が戻ってくる前に頼む。特にリーダーを東風谷のま
まか、柴田など違う奴にするかの決断にはもう猶予がないぞ」

「ここで私にくるの!？」

「なに言ってるんだ。方針や決定はリーダーの仕事だろう。僕はあくま
で提案して、後戻りできないところまで進めただけだ。今回の僕はC
Pを稼がなければならぬからな」

「……………左京君。イイ笑顔でポイポイ私に投げってくるけど、会長に
もあれだけ言われてたのにまた好き勝手に行動起こして、今どんな気
持ちなの?」

その風に乗って一之瀬に次々丸投げしていると、恨めしげに脈絡も
なくあの地獄を連想させる問いをされた。

一応考え——考えるまでもなく、正直な気持ちが口からこぼれ
た。

「うんまあ……………悪いとは思いつつも、少しだけ気持ち良さを感じてい
る」

「聞いた私が馬鹿だった…………。そういえば左京君って、こういう人
だった」

「いやあ」

「照れないで! 正直ならいいってもものじゃないからね!」

「帆波ちゃん、ともかく落ち着いて!」

「そうそう。落ち着いて指示を頼むぞ。学級委員長」

「ぐ…………。こ、この人、誰のせいで落ち着いてないと…………!」

「ナイス変形くつころろ! やっぱ一之瀬は芸風が広いなあ」

「ああああつ!」

…………ふ、ふう。おちけつおちけつ。左京君はこういう人。左京君は
こういう人」

親指を立てて笑顔で一之瀬をおちよくると、新たな芸風を見せてく
れた。

サーブス精神旺盛で結構なことだ。

「ほ、帆波ちゃん?」

「左京、お前…………もつと他にかける言葉とかあるだろう?」

「ふっ。僕は煽りけしかける言葉しか持たない！」

「威張って言うことじゃないだろ」

なんか一之瀬の挙動がおかしいが、前みたいに沈んだ感じはしないので気にしなくてもいいだろう。

それにしても、メスガギの素質といい、聖人的性格といい、あざとい猫語といい、巨乳ムツツリといい、くっころといい、属性てんこ盛り
りの女子である。

もし僕が精神的にも同世代だったら、何をおいても関わらないか、あるいはうっかり惚れて性癖を狂わされていたかもしれない。

ともあれ以前に一之瀬達へ言った提案したいことは言うとうことを、有言実行できてすつきりした。どういう結果になろうとも、これでクラスへの義理は果たしたといえるだろう。

一方、少しして冷静さを取り戻した一之瀬は、そんなすつきりしている僕を何か言いたげに見てきていたが、周りに諭されてもいたのになんとか切り替えられたようだ。

「……………はあ。わかったよ。」

最初の基本方針は星之宮先生待ち。戻ってきたら東風谷さんにリーダーを頼んで、スポットを廻してもらおう。結果がどっちになっても、リーダーはバレていいんだし、少数でなるべく多くのスポットを確保してほしい。

残る私達は拠点を作って整備する班、探索して島にあるはずの食料を集めたりする班に分かれて、手が空いたら自由時間！ とりあえず、これでいってみよう！

みんな…特に負担が大きくなる東風谷さん。この案でいいかな？
「カードが届いたら、ひたすらスポットを廻ればいいんですね？
軽いものですよ」

学園の不敵な巫女様は、自信満々のご様子。
東風谷がこうなっている時は全面的に信じられる。
きつと彼女ならやってくれるでしょう。

しかしこれでなんとか、できる範囲で理想的な采配に落とし込むことができたな。

僕のできる初動はこれぐらいだろう。

ところで。

「あの、東風谷？　なんで僕の腕を掴んでるの？」

「言いだしっぺの夢月さんは、私のスポット巡り班だからに決まってるじゃないですか。先生が戻ってきたら、すぐに出発しますよ！」

「待て待て待て待てっ！」

僕は拠点整備を希望する！　野宮知識とかもあるし適任だろ!?
な？　一之瀬！　四方！　君らからも東風谷に言つてやつてくれよ！　適材適所を考えろつて」

「で、本音は？」

「東風谷についていく大変さの回避と、拠点整備の合間にのんびりする事が目的だろお前」

「なんで僕の内心がわかるんだよ！　四方はサトリ妖怪なの!?!」

「左京はこういう時すぐに顔に出るんだよ」

東風谷が明らかに面倒かつ大変な真夏の無人島走破に巻き込まうとしてきやがったので、一之瀬と四方に助けを求めたら、僕の内心を読んだかのような連携と暴露に阻まれた。

この分だと、大変な部分を丸投げしていたことすら割れていても不思議ではない。

また四方からのツツコミを聞いて、一之瀬が嗜虐的にも見える笑みで口を開いたことも不安要素でしかない。

「にやははは。左京君は本当にしようがない人だにやあ。」

そんなに拠点整備したいんだったら、東風谷さんと帰ってきた後に

やってもらおうかな？ 野宮知識がある人は確かに必要だろうしね」「ちよ、それって僕の労力半端ないだろうが！

てか、一之瀬のそのわざとらしい猫語と意地悪そうな笑顔が全てを物語ってるんだよ！ これ以上、無駄に属性を増やすような真似するな！」

「属性ってなに?! それに、わざとらしいとか意地悪そうとか人間き悪い!」

萌え系各種に妄想癖っぽい片鱗の次はS属性か。

イロモノ枠で数少ない希望がこんなことになるとは何たることだ。

最近、聖人キャラ崩壊の兆候も見受けられる一之瀬は、すでに手遅れの可能性があるかもしれない。

しかし本格的にラノベなどでたまに見る負けヒロイン染みてきたな。

それだけでなくも将来(「あの人には私がないと」みたいな?)ヒモとかに入れ込みそうなハイスペック善人なのに、他人事ながら先行きに不安を感じさせる奴である。主に、喪女の素質的な点で。

「はい、そこまで!」

夢月さん。話を逸らそうとしても無駄です。私と行くことは確定事項です。

神様のご加護がありますし、私も助けますから大丈夫ですよ!」

「お前は、色々強引!! そして歪みがねえ!」

てか、大丈夫なのは元々疑ってないんだよ! ただキツイのが確定的に明らかだから、僕は行きたくないの!」

「え、疑って……いない……んです、か?」

「なに当たり前のことで驚いてんだよ!? 友達や神様は普通信じるだろっ!」

「……あ」

「あっ! もしかして関係ないこと言って、なし崩し的に僕を走破班にしようとする算段か? その手には乗らないからな!」

一之瀬に気を取られていると、次は東風谷が論戦を仕掛けてきた。

しかし経験不足のせい、当然の事を言っただけで言葉に詰まり押

し黙った。

東風谷は別に言い合いに弱いわけではないのに、突然意味不明な言動になることがあるのだ。この時もそうで、何故か口を開けて静止していた。

おかげでたやすく論破はできたが、できれば掴んでいる僕の腕を離してから行動停止してほしかった。

「まあまあ。俺もついて行くし、左京もいい加減諦めて一緒に行こう。」

あと他に何人が運動に自信がある奴も来てくれると助かる」

「あ、じゃあ俺も行っているかい？」

「そうになると女子もいた方がいいよね。私ならバレー部だし、足手まといにはならないと思う。」

あつ、知らないかもだから一応自己紹介しておく、私は安藤紗代ね。よろしくっ！」

その動けない間に、僕がみんなに思い直してもらうことも逃げることもできないうちに、四方が勝手にまともに入れていたからだ。

メンバーは、東風谷、四方、柴田、安藤——そして僕。

東風谷をリーダーとしたBクラス走破班結成の瞬間である。

「……ところで、気配を消して途中から発言もしなかった神崎。今からでも僕とポジション交換してくれてもいいんじゃないだろうか？」

「俺を巻き込むんじゃないっ！ この空気のできるわけないだろうが！！」

「左京君って良くも悪くもブレないよね……」

「いや、もう諦めろよ」

和気藹々とした結成の片隅で、固まっている東風谷に腕を掴まれないから。

担任を待つ間、クラスのトップにポジション交換を持ちかける僕の存在を除けば、美しき青春的一幕となったかもしれない。

52、才能

「あはははっ♪　すごく綺麗な水の井戸。おいしいですよ、夢月さん！」
「うぐぐ」

少し前、南雲副会長がいずれ敵になる気がしたことがある。

あれはなんだったのかと少し気になり、会長や橘書記、葛城や一之瀬などに聞いて回った。

その結果わかったことは、副会長がなにか変革？だかを起こそうとしているので、警戒と対策云々……っぽい会長の所見だけだった。葛城や一之瀬の生徒会入りを阻んだのも、その対策とやらの一環らしい。

「夢月さん！　この御札を持っていれば、風の後押しを受けることができますよ！　なんてったって、風神様のお墨付きですからねっ!!」
「はあはあ」

警戒の中身も軽く聞いたが、僕が思うにすでに実現まで遠くない段階までできているし、会長が今更対抗策を用意しようとしてもほぼ失敗するだろう。

副会長の狙いが（本当かも含めて）どうあれ、表向きまともに働いている以上、会長では性格的に疑うことはできても、証拠もなく降ろしたりといった具体的な……言ってみればズルイ行動には出られないからだ。そして大きく動いた瞬間に察知されて、逆に対策されるまでが世のお決まりパターンである。

それなら尚更、葛城と一之瀬を早くから入れて自身で仕込んでやればよかったのに、それをしなかったのはブラック思考に侵されているからに違いない。

「あつ、あれで4つ目のスポットです！　こんなに早く見つかるなんて奇跡ですね！　これも守矢のお導きと考えると、夢月さんも入信しなくなってきましたせんか？」

「ぜえぜえ」

ただ正直、僕にはこの辺はどうでもいい。

僕や友達にとつて不利な変革をしようと、それは僕の敵と思えるにはひと押しが足りない。

そのひと押し——理事長や校長、あるいはその政敵のような存在と南雲副会長が手を組むことさえなければ、場合によつては協力もできるだろう。

——もしかして、僕はその可能性を無意識に感じ取ったから、副会長が敵になるかも？　と思つてしまったのかもしれない。

そう、現時点で僕が敵だと明確に考えているのは、味方でもある学校組織だけである。一応、綾小路の父ちゃんも保留枠だけでも。

「いい風ですね！　この島にも守矢の分社を建てたくなってきました！　信者である夢月さんが手伝つてくれるなら助かるんですけど？」

「だああああつ！　さつきからうっせえバーカ!!」

ぜえはあ言いながら、必死に走つた僕が見えてなかったのか!?

運動部でもないんだから、身体能力選抜メンバーについてくだけで精一杯なんだよっ!」

「勿論、把握済みです☆」

「なおタチ悪いわ!」

てか、勝手に信者にするんじゃない！　お前はマジで何回断りや諦めるんだよ……」

「ふふっ。諦めたらそこで試合終了ですよ?」

「ほんつとうに、試合終了して…早く」

必死に移動しつつ、どうでもいい想定を深刻っぽく妄想していたが、全くの徒労である。

もはやこんな愚にもつかない現実逃避では、緑の暴走特急を誤魔化せない。

自然の中に入ってテンションが上がっているのか、硬直が解けた後の東風谷は元気いっぱいだ。何で私物をほとんど没収されたはずなのに御札なんか持つてるんだとすらツツコめない勢いがツライ。

トドメに某監督の名言まで放たれ、僕はミッチーの対戦相手の気持ちを実感する事態となつていた。

現在は10箇所目？くらいをチェックして、ちらほらAクラスの生徒を見かけ出したところなのだが、僕の足が小鹿のようになってしまい休憩している。

小一時間、悪路もある道をひたすら動き続けた文化部など所詮こんなもの。

そんな道程でぴったり僕の横について勧誘しながら、息一つ乱さない東風谷がおかしいのだ。

ちなみに、船酔いの影響でいまだ万全の体調とはいえないのに、四方はその洞察力を生かす為、柴田と安藤さんをサポートに付け、偵察に行ってしまった。

ここまで、能力（差はあるが）はあっても体力がない僕と四方がスポットを交代で探索・発見し、それぞれに運動能力が高いサポートを付けて合流と離散を繰り返しながら、ここまでスポットを取得している。

確かにこの方法で、短時間に10？もスポットを取れたのは大きい。最初の方に拠点にできそうな井戸スポットを見つけて、一之瀬に伝達できたのも幸運だ。

だが――。

「どう考えても僕いらなかっただろう！ 東風谷のペアは安藤さんにしたほうが効率的だったって！」

これが僕の心からの主張だ。

だが今は強く断りきれない事情もあって手がつけられない。

この緑のは突っ走ってる時は中途半端だと全く止まらないし、話もまともに通じないのだ。

例えば。

「まあまあ。これからは私が担ぎますから、夢月さんはスポット探しに集中してください」

「は？ 担ぐっておまっ――うおあー！」

「よっ！いいしょー！」

こんな風に。

僕を担ぎ上げる筋力（なんか筋力じゃない気もするが）と、悪路も高低差もある場所で男子を運搬する発想。

マジ東風谷さんパネェわ。

しかし、そもそも四方達も戻ってないのに何故担ぐ？

「HEY、夢月。それから東風谷ガール。」

君たちはいったい何をしているのかね？」

「夢月さんを担いでいます」

「米俵の気持ちになっっている」

「Why?」

「……さあ?」

「「……?」」

そんな担ぎ上げられて思考が乱れている時に話しかけられたから、ついなんとなくのノリで返してしまった。

いや担がれた瞬間に、唐突に頭上から降ってきた高円寺も悪いだろう。

ラピユタでもやってたのか？ とか聞かなかっただけ冷静だと自分では思う。悪い。これ冷静じゃなかったわ。

ある日、島の中、東風谷に担がれていると、高円寺と出会った。

そして妙な沈黙と疑問符の只中にいる。

……僕達は本当に何をやっているんだ？

哲学について考察しているかのような時間は僅かで終わり、3人ほぼ同時に自分を取り戻した。

それから高円寺に先程の集会?での感謝を伝えた後、待機・休憩がてら僕達は世間話している。

「なるほどねえ。東風谷ガールに島中駆け回らせることにしたというわけだ」

「そ。本当はしばらく島で遊んだらリタイアしたかったんだけど、僕は停学分を稼がなくちゃいけないくてさ」

「高円寺さんも私と同じ感じですか?」

「いや? 私は島を一周りしてひと泳ぎしたらクルージングに戻ると

するよ」

東風谷が見せたキーカードを興味なさ気に手に取り、瞬時に重要な部分を見抜く高円寺。

その様子から、Bクラスと同じ戦略ではないことがわかって、人知れずホツとする。この高円寺か綾小路と1週間も競うと、流石に東風谷でも負担がやばい事になると思っていたのだ。

まあそっちは置いて、頼みたいこともあったのでちようどよかった。

「ああ、いいなあ。僕もそうしたかった。

……ところで高円寺。それってすぐじゃないと駄目か？」

「ん？ なにかあるのかい？」

「折角の無人島だし、夜に月見でもどうかなくて。三日月だけど」

「ほう。つまり私に佐倉ガールのエスコートを頼んでいるのかね？」

「流石は高円寺。そう、誘いと頼みだ。船に戻る前にこういうのも一興じゃないか？」

「ははは。確かに以前の夜空は美しかった。こちらにも興味はあるし、理由付けは充分か。それに夜道を綾小路ボーイだけでは流石に不安もあるねえ。

……OKだ。私に任せたまえ」

「ありがとうございます！ 帰りは私が責任を持って送り届けますので、心配しないでください！」

「サンクス！ 助かったよ高円寺。時間は最初の点呼後、場所は船から下りて真っ直ぐ行った林の先にある開けた所の予定だからよろしくな」

高円寺は予想通りすぐリタイヤするようなので、その前に月見に誘ってみるともう一つの目的も察して頼まれてくれた。

鬼龍院先輩もだが、彼らとの話はサクサク進んで気持ちがいい。

それにこういう時——いや普段からか——彼の女子に対しての気遣いはなかなかのものだ。佐倉も安心できることだろう。

誘いと頼みを承諾されてからはたいした話題があるわけでもなく、お互いに進んできたルートでのお勧めスポット（試験ではなく絶景スポット）を話していた。

そしたら思いのほか話が弾み、東風谷がどこから取り出したトマトを齧りながら、3人で大自然の魅力を語り合った。

「お前ら、なにやってんの？」

「な？ こ、高円寺??？」

「はあはあ」

「愛里さん!!!」

「むきゅーっ……」

そうしていると四方達が戻ってきて、それに佐倉と綾小路もついてきた。

幸運が続くものだ。

気づくが早いのか、東風谷は真つ先に佐倉に駆け寄って抱きしめてくる。

東風谷のおかしなテンションも、これで多少落ち着くことだろう。僕達の中で一番佐倉を心配していた東風谷だが、佐倉が探索に出る可能性は少ないのではないかと自分と会えない間に危ない目に遭わないか。と、不安を抱えていたことに僕と四方は、最初のスポットを発見したあたりで気づいていた。

というか、それがあったから僕は余力の限界まで気晴らしの勧誘に付き合ったのだ。四方が放置していたのもきつと大体同じ理由だろう。

だから、『散歩』に出る確率の高い高円寺か綾小路に遭遇できたら、天体観測を口実に確実に佐倉と会える機会を作ろうと思っていた。

高円寺がその頼みを承諾した直後に、実際に会うこともできたのだからもう言うことはない幸運だ。

しかも、佐倉がリタイアする場合の保険も打てる状況が労せずして転がり込んできたのである。

今は、探索と東風谷に抱きしめられて疲労している佐倉を除いて、高円寺に綾小路の注目が集まっているが。

……うん？ ああ。正確には、高円寺が手で遊んでいた東風谷のキーカードに、かもしれない。

試験の性質上、キーカードを他クラスの生徒に渡す事例はあまりなさそうだったので、驚いている原因はこれっぽい。おまけに小さく笑った高円寺が綾小路に向かつてキーカードをパスしたせいで、余計に混乱度合いは増してしまったようだ。四方達まで凝視している。

ちなみに、担任に頼んでいたリーダー指名のペナルティ解除は、80万PPで成立したらしい。

ただ勿論デメリットもあった。

7日目の最終日に他のクラスのリーダー指名ができない。

それに加え、他のクラスからリーダーを指名された場合、Bクラスのマイナスはなくなるとも、正しく指名したクラスには+50試験ポイントが入るといったものだ。間違えば-50ポイントなものも据え置きである。

まあこの程度なら、みんなで仲良くがモットーの我がクラスには問題ないデメリットだろう。

その『みんな』の範囲を学年全体に広げて拡大解釈すれば、デメリットですらない。

元々、一之瀬は他クラスを指名や攻撃はしなかっただろうし、他クラスが上がる分にはむしろ歓迎なスタンスである。

しかしそういうえば、隠れて動くか蹴落とし合いを学校に誘導……推奨？されていたっぽいので、うちみたいな大っぴらなWINWIN戦略はあまり考慮されない可能性があったことによく気づいた。

このような方針を選択するとは、まったく一之瀬は常識外れな学級委員長である。

とある島の中央付近。

友達同士とはいえ別クラスの者達と遭遇したことで、お互いの情報交換が行われていた。

話に参加していないのは、動けない佐倉と無言で佐倉を抱きしめて

いる東風谷。それに「大自然の中に佇む私、美しすぎる……！」とかナルシつている高円寺である。

さつきまで僕と話していたのに、余裕綽々の二人ともが会話に参加しないとか、こいつらはなんなんだ？ 僕は結構疲れてるというのに。

ともかく、まず僕が東風谷と話してる時に高円寺が降ってきたことを言うと、四方達は事情をほぼ察することができたようだ。

その後は綾小路と佐倉用に、月見やBクラスの基本方針、四方達の報告にも補足される形で伝えておいた。

佐倉は東風谷の胸に埋まりながら、綾小路は頬を引きつらせながら、月見の誘いやその他を大人しく聞いていた。

当然だが、東風谷のキーカードは快く返してもらえている。

「つーわけで、僕達は島の南を廻って10箇所「12箇所な」……12箇所のスポットを占拠したところで、Aクラスの奴らが北側との境のスポットに入ってるのを発見した。

だから、南側だけで満足して帰るところだ」

「……………それをオレに話してもいいのか？ 特にリーダーとかペナルティ解除とか色々ぶっちゃけすぎじゃ……………」

「別にいいんじゃないか？」

てか、佐倉の為にDクラスの誰かには教えておいた方がいいと考えてたから、ここで僕と関係ある3人だけと会えたのは助かったぐらいだ」

「佐倉の為？ どういう意味だ？」

「いや、わかるだろ。」

佐倉が万が一リタイアする事態になった時に、リーダー指名分でマインスの帳消しをしてほしいってこと。リタイアしなかったら、そっちの丸儲け」

「……わかるわけないだろ。それに、それじゃあBクラスにプラスがないじゃないか」

「プラスとかそんなのどうでもいい。」

うちはさつき言ったとおり指名されても問題なくできたから、いつ

そ全クラスに指名されてもWINWINなんだよ。それなら僕が不安要素解消の保険に利用してもいいじゃん」

「これに四方達は納得しているのか？」

綾小路はこの言い分に納得できないのか、今度は四方達に聞いていた。綾小路ほどの思考能力で納得できないとはあまり思えないのだが。

「あー、これほとんど左京の案なんだよ。本人曰く、誰も困らない安全な案、らしいから信じてもいいんじゃないかと思ってな」

「一之瀬や四方、星之宮先生は一気に決定まで持ってかれて悩んでたけどな」

「私は実働とサポートしかしてないからよっぼどじゃなければ反対できないし、一之瀬委員長もそういう理由なら納得すると思う」

「左京は停学時や生徒会、さっきのアレがあるからなあ」

嫌な信用と太鼓判である。

でも一応支持はされてるみたいだし問題ないか。

「……少しお人よしすぎないか？ もつとこう……オレを含むDクラスを疑うとか、裏切りの可能性とかあるだろ？」

「ふっ」

「今まで話に入ってこなかったのに、こういう時だけ鼻で笑うのやめよ。東風谷に高円寺」

笑いが漏れてしまう気持ちもわかるが、僕としては笑えない。

それにしても、なんでWINWINに収まる話で、友達を疑ったり裏切りがどうかが出てくるんだ？ 綾小路って、裏切り上等の修羅の世界で育ったの？ なんかちよつと前からブラックすぎる背景が垣間見えるんだけど。

もはやブラックルームとかブラックハウスとかで育ちました、って言われても「あつそう」と軽く流せそうなレベル。まあそんなわかりやすい名前なわけはないんだろうけども。

「東風谷達が笑うのもわからないでもない、つてのは置いといて。

——なあ、綾小路。裏切りは想定するべきことじゃないと思わないか？ 信じられなきや、そもそも契約だって約束だって成立しない

だろ？　それができなくなる事を考えたら、信じた方が絶対楽だつて」

「もしそれで裏切られたら……？」

「その時はその時で、思い知らせてやればいいだろう。」

面倒臭いのは嫌いだけど、一線を越えられた場合に何もしないほど僕は聖人じゃないんでな」

「そうだな。その時は俺もやってやるさ」

「そんな人が出たら、今度は私が真っ先に行って退治してやりますよ！」

頼もしいことだ。

四方と東風谷がやってくれるなら、僕は何もしなくてもいいだろう。

佐倉と一緒に待つというのもまた一興である。

……でもそんな時に本当に何もしなかったら、不思議とより面倒な事態に発展しそうな予感がした。

僕達Bクラスの情報はだいたい話しきったので、次は綾小路の番だ。

佐倉は柴田や安藤の前では内弁慶モードに入れないだろうし、高円寺はそもそも情報交換するタイプではない。

消去法で話すのは綾小路となるわけだが、その綾小路がいつになく混乱——いや、最近の綾小路って結構笑ったり慌てたりしてね？

もう無表情が崩れるのも珍しくないというか、『いつになく』混乱……なんて言えないような……？

ともかく、その綾小路が何か聞いておきたいことがあったようだ。

「話す前に聞いておきたいんだが、何でここに高円寺が？」

「あん？　さっき降ってきたって言っただろ」

「……最初はオレ達3人で探索していたんだが、いきなり早足でいなくなつてな。一度は追いつけたんだが、結局逸れたんだ。」

だから左京達とトマト食ってるの見た時はたまげたぞ」
「待て。」

いきなりいなくなった？ 佐倉といる時に？」

「ああ」

勘だが、これは――。

「高円寺、もしかして気を遣わせたか？ 船のところで僕がぶち上げた
ことが影響してたらすまん。」

それと僕が言うのもなんだが、ありがとな」

「なんでそうなるんだよ！ 女子を置いてつたんだろ!？」

「それはそうなんだろうけど、その場に綾小路もいたんだよなあ。
だったら佐倉の友達として感謝するのが当然というか……」

「どういうこと？ ただの身勝手じゃないってこと？」

佐倉を手助けしてくれたのか？

そう思った僕が高円寺に向かって頭を下げていると、柴田と安藤さ
んが引つかかったのか突っ込んできた。佐倉や綾小路もこちらに顔
を向けている。

そこで一応、綾小路に確認すると頷かれたので、高円寺が抜けて探
索組が3人から2人になったのは事実だろう。これだけだと確かに
高円寺がアレに見えてしまうが、それではおそらく真相には達しな
い。

だから、こうじゃないかと思う推測を話しておいた方がいいだろ
う。特に佐倉に誤解？されると支障が出る可能性がある。

「あーっと、そのあたり想像と違ったら悪いんだけど。」

僕が思うに、高円寺はまず軽く速度を出して、これについてこれな
いならリタイアした方がいいよ。綾小路に手助けしてもらえば船ま
では行けるだろ。って、佐倉に伝えようとしたんじゃないか？」

「え？」

「それで一度は追いつけたんならとりあえず大丈夫と判断して、そこ
でヒントやアドバイスしてから消えそうな印象なんだがどうだ？」

女子にはわりと紳士的な奴だし、微妙に手助けしても不思議ではない
……と思うんだが」

「あつ！ 自然の森とは呼べない、迷わないって」
「それが合っているなら、なんて解りづらい……」
「いやいや。話してみればわかりやすいだろう。多少意地悪にも感じなくはないけどさ」

どうやら佐倉には心当たりがあつたようである。

まったくの見当はずれでなくてよかった。

「……ハハ、ハーツハツハ！ EXCELLENT！」

やはりわかつているねえ！

ああ、夢月の懸念も問題はないよ。なぜなら、アレがなくとも完璧な私なら同じ行動になっただろうことは明白だからねえ」

「つてことは、普通に感謝だけが残ったって事だろ。」

ありがとう。高円寺の見立てで大丈夫なら、佐倉をそこまで心配する必要はないみたいだな」

「愛里さんを気遣っていただいて、ありがとうございます高円寺さん！」

「……ふつ。まったく、たわいも『ある』部員達だ」

後のことを考えると高円寺には恩を売りまくりたいのに、逆に売られまくっている件。

四方や綾小路に対してもそうだが、僕には恩を売る才能がないのかもしれない。

53、子供

高円寺は泳いでくるといふ目線だけ寄越して去っていった。ただ思いのほか話し込んでしまったことに気づいたこともあって、僕達もとりあえずそれぞれの拠点や集場所まで移動しながら綾小路から話の続きを聞くことにした。

高円寺については間違った解釈をしているとも思えないし夜の約束はできたので、佐倉をDクラスから連れ出すことは安心して任せられるだろう。

ともあれその綾小路と情報交換した情報と自分達の探索結果を基に、現在の各クラスの分布・勢力図を僕は頭の中で整理していく。後で四方達と地図などにする為だ。

南側のビーチと林・井戸一帯のスポットはうちのBクラス。

北側のビーチや島唯一の山、そこにある洞窟周辺はAクラス。

島の中央西を流れる川の周辺をDクラス。

同じく島の中央東、客船が停泊する近辺の砂浜やビーチで留まったままというCクラス。

まずBクラスは、僕という足手まとい付とはいえ東風谷が電撃的に南側をほぼ占拠した。

だがAクラスは、それを読んでいたように中央よりやや北辺りのスポットをまず押さえたようだ。要はラインだけを押さえ、最低限北のスポットをゆつくり取れる作戦にしたのだろう。

Dクラスは、須藤他数人が川方面に向かってくる姿が見えた事と聞こえた歓声から割り出した。水場で生活しやすそうな優良な拠点スポットでもあり、東風谷達と見つけた時にもあえて占拠せず残しておいたので、当然あそこを取るはずだ。

Cクラスは、高円寺お勧め絶景スポットの時の話に推測を加えたものである。

これで他クラスになにか用ができて、行き先に困ることはないと思う。

どこかのクラスが1週間という無人島滞在期間を舐めれば、それなりの一般リタイア者が出てしまうと僕は思っている。

一之瀬や四方、それに出る直前に女子を纏めていた網倉さんがいるからうちでは滅多なことにならないだろうが、不運な何か起きた場合に他のクラスと連携がとれるようにしておきたい。

つまり僕が考えるこの試験の要は、競争ではなく適所での協力である。学校や頭が回る奴はそう考えないだろうが。

纏めた情報で気になった部分はAクラスあたりだろうか。

綾小路と佐倉が占拠された洞窟から出てくる葛城と戸塚を「偶然見たと言っていた。この情報だけで考えると、Aクラスは僕達みたいな方針のクラスにスポットを独占されないようにする方針……か？」

なんか違和感があるけど、全員が集まっていた場であれだけブツこんだら、少なくとも葛城の初手は防御に偏ったものになるだろうことは予想はしていた。

あれはリーダー的な立場の奴ほど焦って冷静さを失い、そいつの特性に沿った行動をとりやすくなる学校の誘導を僕が利用しただけだ。だから賛否に関わらず、学校にノセられた奴はそのまま自分が考える最適解——葛城であれば保守的といえる縄張り確保戦略——を採る可能性が高かった。

まだ龍園やDクラスの有力者あたりと組むオプシヨン案の可能性も残っているが、基本将棋の穴熊のような方針を採るだろう。

ただあちら視点で見ると、準備時間を与えないで動くかもしれない僕達という不確定要因がいるし、最初に少しだけ無茶をしてでも縄張りの確保に動くのはわからなくはない。

ついでに言えば、多少なりとも対抗心があっておかしくない同じ生徒会役員の一之瀬がいて、CP的にワンチャン逆転される可能性さえ生える（この試験だけではまず無理だが）うちとは組もうとしないはずだ。

尤も、このリーダーがバレるリスクのあるやり方自体は葛城ではな

く、戸塚かもしくは急進的な奴の案のような気がする。事実、偶然？
とはいえ綾小路や佐倉に目撃されているのだ。

話だけでは、どちらがこの試験のリーダーかはわからない（どちらかというと戸塚が濃厚か？）が、慎重で真つ直ぐな葛城なら欲をかい
て誤魔化し前提の攻撃的ともいえるような回りくどい手にはならない
いではなからうか。ミスリードを誘う目的だとしてもあまりに性
格的にそぐわない。

Aクラスの誰かが焦っている、もしくは葛城達を焦らせている奴が
いる……とかだつたら馬鹿馬鹿しい事をする奴がいるものだが……。

……いや、それ以前に、本当に綾小路と佐倉が目撃したのは偶然か
？

四方と同等クラスの洞察力・思考力と見ている綾小路なら、葛城や
戸塚の行動を読みきって先回りした上で、確認の邪魔にならないと割
り切って佐倉や高円寺を同行させた可能性もある。

綾小路からは、同じ天才でも四方と違って、目的の為なら手段を問
わない者特有の匂いを感じるので、何らかの『理由』さえあれば最高
効率を狙いそうなのだ。

そしてDクラスのポイント事情からすれば、それだけで一応理由に
は充分である。

勿論、他にも理由はあるかもしれないが僕にはわからないし、ぶつ
ちやけどうでもいい。これは頭の片隅に置いておくだけにしておこ
う。

まあ、これはただの想像でしかないので、葛城達へ会いに行った時
にでも聞けばそれなりに判明するだろう。

ちなみに綾小路に聞いても、佐倉がわからない部分でとぼけるかブ
ラフを撒かれることが明白なので時間の無駄だ。案外本当の事を言
うかもしれないが、それはそれで彼に不信感全開の東風谷以外に迷い
が発生する。

触らぬ神に祟りなし、とばかりに深い部分のスルー安定。

これが綾小路と対する時の最適な手の気がする。普段ならともか
く、騙し合いありのサバイバルとかいう非日常な状況なら特に。

何はともあれ、今はやる事をやってしまわないといけない。

四方筆頭に他の面子の記憶力に頼りきりだと、綾小路以外の落し穴に落としてきそうな奴にやられるかもしれない。心当たりもある。それに自分で地理含む状況を把握してない結果、必要な行動ができないとかなったら僕の矜持が許さない。流石にそれは格好悪すぎる。

僕がそうして考えを纏めたり、必要箇所を覚えておこうとしていると、四方や残ったDクラスの二人が高円寺のことを話しているのが聞こえてきた。

「しかし、左京つて時々ハツとすること言うよな」

「オレはてつきり、あいつは暑さで頭をやられておかしくなってるかと……」

「うん。わたしも高円寺君がおかしいのは当然だと思つて、何か意味があるかも？　なんて全然頭に浮かばなかった」

「……お前ら、高円寺に失礼すぎだろう。わからないでもないけどさ」あれは本当は勘頼りの当てずっぽうな憶測ばかりだったのだが、そう言われるとなんか1を聞いて10を知った気分になれるので気持ちがいい。高円寺も乗ってくれてみたいだし、イキれるようなことじゃないけども。

ただ柴田や安藤さんは、あれだけでは不完全燃焼っぽい。再度聞いてきたら面倒だし、暇ができたら適当に誤魔化しておくことにしよう。

それにしても、天文部関係者は回数こそそうないけど高円寺とは何度も話しているのだから、綾小路や佐倉が言うおかしな奴扱いはあんまりではなからうか？　正直、綾小路や東風谷よりはまともな奴だと思う。

それにあいつはイロモノではあっても、あまり意味のないことはないタイプのように見えるので、信用はできるだろうに。

「……………それにしても、一体どういうことなんだ。」

なんか初っ端から2クラスのリーダーがいきなりほぼ判明してしまったり、高円寺の言動に真意？があつたり、月見に誘われたり、事態の展開が速すぎないか？

もしかしてオレは何かの岐路に立たたされてるんじゃないかと思えてきたんだが」

「お、落ち着いて綾小路君！ そんなわけないから！ 少なくとも左京君はこれで平常運転だからね！」

「いや、オレは慌てているわけじゃ」

「うふふ。疑うことが多すぎて大変そうですね、綾なんとかさん！」

「どんな気持ち？ 先手を打たれすぎて早々にやれることも限られちゃった嘘つきさん？ ねえどんな気持ち？」

「早苗さん！ それ、ホントのことでも今言っちゃ駄目なやつ！ 綾小路君は嘘つきっぽいけど、目が優しいから、たぶん、きっと良い人だよっ！」

「……」

「……佐倉。フオローのつもりかもしれないが、むしろお前のほうがダメージ与えてるからな？」

綾小路、今夜の月見は楽しもうな。それと疑うのもほどほどにしておいた方が、平穩に近づけると思うぞ」

おお。僕も思ってたけど、意外と思ったこと言うな佐倉。黙り込んじゃったじゃん綾小路。

一応助言っぽくフオローしたが、反応が読みにくくていまいち効果があるかわからない。新しくわかったことはあるが、勘9割で確信には至らないしな。

東風谷は……まあ隙が見えたらなんかやると思ってたけど、前に僕をからかってきた時よりかなり攻撃的というか挑発的だ。

単純に嫌いというよりも、東風谷にとつての譲れない一線で反復横飛びする綾小路が目障りに見えているのかもしれない。

一方、佐倉は綾小路に内弁慶モードを適用できるくらいには心を許してるみたいだし、櫛田と違って友達認定はしてそう。

櫛田に対しては多分同族嫌悪に近い感じがするから、これからも一定以上仲良くなるのは難しいだろうし、綾小路や高円寺と友達になれそうなのは佐倉にとつて大きな一歩……になるといいな。

綾小路は『演技』で揺らしていた外側にダメージを食らって押し

黙ったが、元はといえば高円寺がいた時からの混乱が噴出した結果……の演出だろう。

ただ微動だにしないほど精神が安定して見えて、彼は予想外の何か
が溢れてこぼれると、いきなり崩れるタイプと見た。

尤も、全部ではなく一部がほんの少し崩れて、それを修正・適応な
どする僅かな変化にしかならなそうだが。

これは外側の能力だけを見て頼りすぎるのは、綾小路の為にもやめ
ておいた方がいいな。

勘だが、彼はどうも妙なバランスの元に成り立っていて、下手に頼
りすぎると地雷的な部分に触れてしまいそうな気がしてならない。

「でもまあ、それはそうと。」

東風谷の為、ひいては僕の安寧の為にも、佐倉は今夜の月見に強制
参加なんで、改めてよろしく」

「心配してるのに、夜の無人島を出歩かせるってどうよ？」

「ふっ。行きは高円寺、帰りは東風谷という磐石のボディガードを手
配してあるんだ。心配などする余地のない布陣だろう。綾小路も来
てくれるだろうしな」

「やっぱりオレも組み込まれてたか。まあ暇になりそうだから、か
えってよかったかもだけど……」

なぜなら、ほら。

気にせず話していると、即座に平常運転に切り替えてくる。

一見だと全て混乱や気落ちした演技だったかとすら思えるが、綾小
路の頭の回転や切り替えが速すぎて凡人の目からはそう見えるだけ
なのだろう。

ちやうどよく月見の印象が薄くなっていたので試しに話を戻してみ
たら、いつも通りの綾小路の反応になったのがその証拠だ。

つまり、言動やおそらく内心にも本物と偽物を混ぜ合わせた上で、
目的達成の為だけに動くのが基本になっているのだ。

これは確かに、信仰を求める東風谷から嫌われてもしかたない。

僕が見るに、綾小路は絶対に神や奇跡を信じない超絶リアリストの
類いである。

どおりで、半分幻想に足を突っ込んだような東風谷には相容れないはずだ。

「というこで夜までもうやることないし、寄り道してしばらく遊びに行かぬ？ 高円寺と話してたら、僕もひと泳ぎしたくなっただけど」

まあ、ただの勘だし、これで印象や態度が変わるわけでもない。

東風谷の標的をズラすついでに、叶ったらラッキー程度のささやかな希望を述べて誤魔化してみた。当然、Bクラスの奴らからは総ツツコミされるわけだけど、これが手っ取り早い着地点になる。

「左京って時々アホになるよな」

「なんでだよ。拠点整備しろって一之瀬に言われてただろ」

「ここでサボるのはないでしょ。一之瀬委員長に言っちゃおうよ？」

「さつきまで疲労困憊だったのに、泳いだら危ないですよ。それに水着はどうするんですか」

「ふう。」

バレなきやサボりにならんだろ。泳ぐのだって野郎ならパンツだけで充分だ」

「「「いやいやいやっ!!」」」

よし。迷惑通り、とりあえず話が流れて全員再び歩き出した。

心配事もほぼ片付いたし、僕はさつきと拠点や海でのんびりしたいのだ。

野放図な発言は、時と場を選べばRTA的な短縮を可能とする。

今回でいえば、綾小路に突つかかる東風谷イベントをスキップ……というか柴田達が上書きしてくれたとわかればそれでいい。あとは誰かが、それぞれの拠点へ帰る流れに戻してくれるだろう。

「おいっ。なんで満足げに頷いて歩き始めたんだよ!」

「ねえ、本当に泳ぎに行かないよね? というか、なんで急に無言になったのこの人!」

「……あー、多分色々メンドくなっただろ。流石に泳ぎには行かないと思うから、このままついて行っても大丈夫……だと思っ」

柴田と安藤さんはまだ騒いでいるが、四方がフオローしてくれて

る。

東風谷はマイペースに佐倉を引っ張ってるし、大丈夫だろう。

満足したらさっさと帰って休みたくなり、電池が切れたように眠気が襲ってきているのだ。

月見の為にも、体力の回復と温存しておくのは必須といえよう。

「愛里さん、西回りなら途中にDクラスが拠点にしそうな川とスポットがありましたけど、夢月さんについて行くと東周りになっちゃいますよ。どうします?」

「動じないね早苗さん。」

「……えっと、拠点?とは別に確か集合場所が左京君が向かってる方向だから、私達も途中まで一緒に行っていいかな?」

「勿論ですよ! 道中危ないかもですし、手を繋いで行きましょう!」

「わわっ」

「……………え? あれ?もしかしてオレ、煽られ損?なんかもう最近、喧嘩ポイントでも導入されようものなら、東風谷と他数人は即買いになりそうなことの連続なんだが?」

「……一人でなに言ってるんだ綾小路」

なので、もう話さないで拠点まで戻るつもりだったのに後ろの変人があまりにおかしいので、つい突っ込みをさせられてしまっていた。

綾小路がまるでみんなの輪に入れなくて拗ねてる子供みただったのである。

これは突っ込まざるを得ない。

でなければ吹き出して煽ってしまう。

折角、東風谷のターゲットが佐倉に移っている好機だったというのに、わけのわからない生物に笑いと哀れみが向いて乗せられてしまった。綾小路はやっぱ侮れないな。

しかし冗談とわかっている(冗談……だよな?)が、綾小路の言葉選びは相変わらずだ。それを独り言で漏らすあたりも芸が細かい。

「さきよ……いや、む、夢月……と呼んでもいいか?」

「……それにしても、綾小路は何故に時々乙女?っぽいモードになるんだ?」

スイッチもわからないし、それまでの流れから考えても、自ら黒歴史を作る方向に進む精神性がまったくわからない。

てか、呼び方なんぞ変に意識すると気色悪いし、なにより野郎同士なんだから好きに呼べよと言いたい。

が、眠いし疲れているのでスルーする。

鬼龍院先輩か橘書記ならお祭り気分になるレベルで大歓迎だったのだが、今の僕には遊ぶ余力があまりないのだ。

「帰還場所は違うけど、いいから行こう。何気に僕はめっちゃ疲れてんだよ」

「……スルー、か」

「あー?」

「いや、なんでもない。」

「……ただ………なんだかんだいって幸運だったな、と」

「ああ、それには同感だな。」

まず佐倉が探索に出てくれたのが幸運で、その上で綾小路や高円寺と遭遇できたのは奇跡的な幸運だったよ。ご都合主義万歳とでも言いたいね」

「ははっ。なんだそれ」

それに、あんなに振り回されて幸運と思えるメンタル。

普段から周囲のいろんな奴から振り回されているのを憊させる。

口に出すとおまゆう案件にもなりそうだから誤魔化したけど、綾小路も何かを誤魔化してる感じがするからお互い様だろう。

まあ、そこらへんの究明は誰かにぶん投げておこう。

何気に今の会話が聞こえてたっぽい奴も綾小路に微妙な視線を向けているので、色々察することができる奴はそれなりにいるはずだ。

なにはともあれ、この時の僕はあと少して休めることに目が向きすぎていたようである。

54、陽キヤ

佐倉と綾小路がDクラスの集合場所に合流していくのを見送り、僕達5人は寄り道しながら拠点に推薦した井戸を目指している。

寄り道といっても、山の幸や野菜、ハーブなどを集めていたのだからサボリではない。

事実、僕と柴田のジャージはその犠牲となって汚れたが、それ以上の収穫はあった。

特に折れた大木の近くでレモングラスを見つけた時は、柄にもなく狂喜した。

これで蚊などの虫に悩まされる心配を減少させられる。このハーブは何気に虫除けとして優秀なのだ。探索には勿論、寝る時にも役立つことだろう。

ついでに匂い袋的なものにして、佐倉達へも月見の時に渡しておくことにした。

それに野菜や山菜もそれなりに手に入ったので、各種類の粉さえポイントで購入できればおやきや団子も作れるだろう。

懸念はお茶やコーヒーだが、こちらには隠し球と当てがある。お茶は確実に、当てが外れなければコーヒーも希望が出てくる見込みだ。

井戸に向かって南下した途中で更に2箇所のスポットを取得し、全14箇所。

主食はどうにもならないが、副菜や虫除けの手段を発見。
島の北側以外はほぼ把握した地理情報。

佐倉達との月見や保険の分を差し引いても、十分な功績Ⅱ交渉材料にできる。

これらは東風谷や四方がほとんど主力だったとはいえ、山菜やハーブを見つけたのは僕だ。この上で必需品といっても良い米や粉、調味料をケチるようなら、この功績を前面に出して押し切つてやる。最低限の衣食住だけは我慢してなるものか。

僕の快適な生活にはしっかりした食事は必須なのである。本日は

おやきと団子、明日はカレーの腹になっているので、もう自分では止められない。

学校が用意したと思しき折れた大木——ここから北北西に直進で川、南西に道なりで井戸、東北東で開けたキャンプ地に適した広場（月見の予定地）のスポット、少し戻って北に行く洞窟なので目印なのはほぼ確定だろう——を横目に進み、大量の生徒が踏みしめた地面を見る。

柴田と安藤さんを伝令にした結果、一之瀬が順当に井戸を拠点とした痕跡ができている。

まだ日は高いが僕達が出発してからおよそ2時間半くらい経つ。そろそろ夜の対策も準備しなければいけない時間だ。

それには乾いた落ち葉や枝を集めてあるかなど焚き火や竈、食事・調理の準備は勿論、風呂やシャワーも重要である。

今の時期で焚き火があるなら最悪は水シャワーだけでもいいが、できれば湯は使いたい。短時間でも信じられないほど安心できて、寝つきが段違いになるからだ。

そんな小さな心配をしながら拠点にたどり着くと、流石に一之瀬とすべきか。姿は見えないが見事にクラスメイト達を纏め上げ、テントを張ったり、竈を組み上げたりしている者達が見えた。

「あつ、帆波ちゃん！戻ってきましたよー！」

僕達を目視するが早いのか、ビニール的な何かを作っている手を止めた白波は、一之瀬を呼びにできたばかりと思われるテントへと走り去っていった。

見回してみると、右奥に簡易シャワー、左奥にトイレ2つ。テントも他に離れた場所にそれぞれ3つあるが、井戸近くを含め林の中である為にあまり広いスペースがない。

だから空いたスペースに点在させた上で、防犯にも最低限の対策を打つつもりなのが窺える。どのテントからも他から声が届くように

して、火の番兼見張りを2〜3人置けば、間違いが起こる可能性は減らせるからだ。

また井戸のそばにも、なにやら装置的なものが置いてある。

汲み上げは備え付けのポンプで充分なはずなので、水質検査・浄水器的な何かかもしくはシャワーの補助や予備っぽい。

シャワーは1台は確実に必要として、追加部分で節約するのはありだ。近くにある小さいテントもそれ用だと考えると納得がいく。

「みんな、お疲れ様ー！」

とりあえず全員分の水を頼んだから、一休みしつつ飲みながら話せるかな？ 帰って早々で悪いんだけど、こつちも結構話すことができちゃったんだよね〜」

溢れる陽キヤ感に押されるが、今回のこちらには説明・報告役に四方と柴田と安藤さんがいる。

目立たないようについていって、僕は先に地図を書き込んでいよう。確か試験マニュアル？に地図や白紙のページがあったはずだ。

僕は一之瀬と四方達が話し合っている間、東風谷に確認を取りながら地図（といつてもだいたい南側だけだが）にスポットや採取場所に印を付けていた。

とはいえ、白紙を1枚拝借して地図を写し、得た情報を両方に書き入れていくだけの作業だ。これから約1週間、東風谷を中心に廻るルートのはすり合わせで少し時間を取られたくらいですぐに終わった。

一之瀬達はまだ報告し合っているが、早いうちに言っておかないと困ることがあるので割り込ませてもらう。

「二之瀬、話し中悪いがちよつと時間をくれ。」

このマニュアルの米粉10kg、格安の5試験ポイントで買えるから頼んでもいいか？ 一応、クラス全員分の1食以上にはなると思うんだが」

「え、米粉？ 何に使うの？」

「団子やおやきだ。」

今夜、高円寺や綾小路にうまいもの食わせるって約束した時に色々考えてたんだが、ここに戻る途中でほおの葉やサルトリイバラ、ヨモ

ギなんかを見つけてな。米粉が安かったら頼もうと考えてたんだよ」
「サルトリイバラ？」

「全員の1食になって、この状況で作れるなら多分大丈夫だよ」
「まず10kgなら40人には充分すぎる量だと思う。それにこねて茹で、軽く炒めて味付けるだけだから、調理が最低限できる奴が何人かでやればそう時間はかからない。器具や食器、調味料は当然頼んでるだろうし。」

ああ、ヨモギは団子に混ぜるけど、ほおの葉やサルトリイバラは団子とかを包んで持ち運ぶ用な」

一之瀬と疑問顔の安藤さんに軽く説明する。

注文して運び込まれる時間で、薪拾いや火起こしをすれば無駄も省ける。

僕が割り込んだのは、ここで虫除けの札をきれば、十中八九街育ちの奴の反対意見（ある奴がいればだが）を押しきれからだ。

「あと四方達が話したかもだが、虫除けに有用なハーブも採取してきた。」

寝る時や探索などで役立つし、効果があると証明されたらポイントの節約にもなる。これで、僕の我儘分を補填したい」

「あの草って、そういう効果があったのか？」

「レモングラスですね。確か蚊やダニ除けでしたっけ？」

「いえーす。匂いが気にならなければ、だいぶ生活が快適になるぞ。」

拠点にしやすいような場所近くにこんなのが偶然自生してるわけないし、折れた大木という目印もあったから、相当気を使って管理してる島なんだろう。いくつかの懸念はかなり可能性が低くなったと見ていい」

実際、管理されている安心感は大きい。

特に井戸の水は、余程のことがなければ普通に飲める予想ができたことは助かる。

ペットボトルはあった方がいいので1回は水を注文する必要があるが、それ以降は誰かが試飲して安全性を確認すれば注文する必要はなくなるだろう。

……学校は金や力の使い処が間違っていると、個人的には言いたいわけだが。

まあともかく。

見たところ、テントの底に敷くマットに支給ビニールを重ねて寝やすい工夫までしていて、この情報の価値がわからないなんてことはない。いい。

僕なりに節約しようという意思を見せつつ、そのまま通す……通させてやる。

その後、思いのほかあっさり提案が通り、担任の元へ注文しに行った。

それからは米粉が届くまで薪拾いだ。

四方は無理させるコンデイションでも状況でもないの、休んでもらうついでに僕が書き込んだ地図の完成を頼んだ。念の為、東風谷に付けてもらったから無理はできないだろう。

加えて、東風谷は田舎育ちっぽいし、理系知識も豊富なので、説明を忘れたおやきや山の幸についても補足してくれる……といいな。してくれなかったら、四方が通訳してくれることも祈っておこう。

薪拾いに行こうとした時にちょうど神崎が戻ってきたので、だるそうにテントから出てきた姫野ともども人足として採用した。薪拾いはともかく、火起こしのやり方をクラスの中心近くの奴に見せておきたい。

ちなみに姫野の方にはちよつと怖い印象があったのだが、野郎と二人というのもアレだったし、一応知らない奴じゃないのもあって、たまたま目に付いた時に思わず誘っていた。それだけの理由である。

僕は3人で薪拾いをすればすぐに終わると樂觀していたが、こうした知識はなかったのか神崎が意外と役に立たなかった。よりによって広葉樹の枝ばかり集めたのだ。しかも湿っていて綺麗に折れないような枝も多かった。

針葉樹（杉や桧など）は火がつきやすいが燃烧時間は短く、広葉樹（クヌギや樫など）は火がつきにくいが燃烧時間は長くなる。それか

ら枝の太さはともかく、湿ったのは火が付きにくいし煙くなるので避ける、といった事も知らないとは思わなかった。

案外この年代では、こうした経験や知識はレアだったりするのだろうか？

「すまない。テレビなどではこういう感じなので簡単に火が着いていた認識だった」

「ああ、着火剤でも使ってたんじゃないか。それに知らないならしかたないさ。」

ただ必要になるかもしれないから、火起こしの手順くらいは覚えておいた方が何かと役に立つぞ」

「……私の集めたのはこれでいい？」

「ん？」

……こっちは乾いてるな。枝は竈の処にもあったし、あんまり集めても無駄になる。必要に応じて集めるようにして、今はこれくらいにしよう。

つーわけで、姫野はあつちに着火用に集めておいた乾いた葉っぱを持ってきてくれないか？ 軍手ないから怪我とかもあるし、広葉樹と針葉樹の枝は僕と神崎が分けて持つ」

「わかった」

「了解だ」

基本必要最低限の会話しかない僕を含む3人だったが、こうした作業に会話はほぼ必要ない。

一人だと大変なので適当に連れてきたが、四方と東風谷を除けば割と最適な人選だったのではなからうか？

神崎が細かい質問や指摘をしてくる以外では支障なく、焚き火を起す。

画面越しなら見慣れた焚き火になる頃には、注文の品々が届きはじめ、一之瀬達クラスメイトも結構な数が集まってきた。

そして網倉がみんなに夕食関係の説明した後は、静かに焚き火を見つめている。

どうでもいいが、火を見ながら枝を分けている後ろでじつと見られると、非常に居心地が悪い。みんなマジメなのか？ とか茶化したい欲求が沸いてくるレベルだ。

そんな中、姫野や東風谷といったコミュ障どもは、当然のようにいつの間にか遠くに避難していた。

……陽キャどもの只中で焚き火をやっていると、できれば僕も消えたいという本音は内緒である。

「えっと、手が空いている人いたら、この火を持って行って竈の方で鍋で湯を沸かしてもらえないか？ 団子は米粉に水か湯をたらして、練りこんで丸めたら沸騰した湯に投入すれば、下準備は大丈夫なので」

まあそんなわけにはいかないの、夕食の準備を集まった手が空いている者達にお願いする。太めの枝に火種をつけて焚き火に突っ込んであるので、これを持って枯れ葉に着火すれば比較的簡単に火がつけられるのだ。

現在、時計では17時過ぎで夕食には早い、1度茹でておけばあとは炒めたり焼くだけなので、暗くなる前に終わらせておけばすぐに食える。

「あつ、時々かき混ぜるとくつつかないし、湯から上げるタイミングは自然に浮かんできて少し待ってからがいいと思う。当たり前だけど、キッチンとかと違うから火には充分気をつけて」

「じゃあさつき麻子ちゃんが説明した班ごとに調理する人、補佐する人、火の調整をする人で暗くなる前に下準備を済ませちゃおう！ 左京君の注意も忘れないようにねっ！ あと薪を調達する人は足りなくなりそうなら各自で都合しあうこと！」

私達は左京君の作業がひと段落し次第、空いてる竈で調理するか、わからないことがあつたら聞きに来てね」

注目されて慣れない状況で何とか搾り出した言葉の後に、なんか不穏な一言が聞こえたんだが？

私『達』って、興味深げに見ている四方はともかく、ここに残っている一之瀬や網倉他数名も僕と同じグループのように聞こえたんだが？

しかも何故か以前にイラストを頼んだ美術部の金田も所在無げに佇んでいるんだが？

……説明、ちゃんと聞いとけばよかった。

「金田君はとりあえずこの班だよ。少しでも知ってる左京君や東風谷さんと同じ方が気楽かなって思うんだけど、どうかな？」

「は、はい。保護された身ですので、できる限りお手伝いさせていただきます」

保護？ 金田はクラスメイトじゃなかったっけ？

駄目かわからん。

いや、そもそも問題はそこじゃない。

竈は全部で4つ。そして3つはすでにクラスメイト達が火を入れ始めている。

導き出される答えは——導き出すこと自体を止めよう。

思考停止して、今こそ無心の境地を目指すことにした。

「ところで、あの、左京君が遠い目になってますが、大丈夫なんですか？」

「大丈夫だ。こいつ、時々こうなるから」

「帆波ちゃんと一緒の班だというのに、この反応。まったく失礼な男です！」

「あはは……」

「安藤さん、柴田君。私達は暗くなってくる前に準備したり竈に火を入れてこよう。左京君の調子じや再起動まで時間かかるかも」

好き勝手言われてるが、擬似悟りの境地に辿り着いた僕には、もはや団子を作ることしか頭の中に残っていない（嘘）。

「おっ、立ち上がった？」

「火種は……忘れずに持つてるな」

「俺、鍋に水を汲んでくるわ」

「僕も手伝います！ せめてこれくらいさせてください！」

一刻も早く夕食を作り上げないと僕の精神がもたない。

それでなくても今日は体力を消耗し、陽キャ達ともかなり話したので、もう寝たいくらいなのだ。

僕の代わりのように金田が雑用手伝いを申し出ているし、調理に集中させてもらうことにした。普通の料理だったらわからないが、たぶんおやきや団子なら僕か東風谷みたいな田舎育ちの方が上手くできる気がする為、適材適所だろう。

月見は残っけていても、これが終わればクラスで僕が今日やれることはないはずなので、本当にもうひと踏ん張りだ。

ゆえに、しばらくは社畜モードで節電させてくれ。対人反応が悪くなるが仕事はきっちりするので、もし無礼を働いても許してほしい。

55、月見（前半、戸塚視点）

無人島初日の夕方。

夕食をクラスで作っている時に、Bクラスの四方と神崎が訪ねてきて、俺と葛城さんを月見に誘ってきた。多分、左京がまた無茶を言ったのだろう。

葛城さんはこの誘いに乗るか迷っていたが、昼過ぎに左京が1年全体の前でやったブツコミの真意を探れるかもと言われ、考えを変えたようだ。

俺もキーカードを託された者として責任感も感じていたが、それ以上に左京が誘ってくる色々を密かに楽しみにしていた。

俺は昔から人に見下されることに敏感だった。

だから葛城さん以外で、俺を見下さない者しかいない天文部は居心地が良い。

まだ学校のシステムを良くわかってなかった4月に相談してしまった時も、それ以降も。左京は詰まった時に助言をくれたりと、決して俺を見下さず、手助けまでしてくれた。

創設者兼部長である左京の気質のおかげか、性格面に問題はあっても天文部に人を見下す奴はいない。左京と四方以外はあまり話せていないが、なんとというか空気感が楽なのだ。

何度か頼まれ事をされて報酬まで貰いながら俺は大して役に立たなかったのに、疎ましく思うどころか見下す素振りさえなく、変わらず接するのは意外と難しい。

俺自身、左京や下のクラスの奴らについて高圧的になってしまう事があるから、それを実感している。

……こう落ち着いて考えると、船で綾小路を押し退けてしまったのは悪かったな。一応月見で会ったら謝っておこう。

あの時は坂柳派閥のクソ共に苛ついていたのだ。

クソ共は表面はともかく、目や態度から見下してるのが丸わかりなんだよ。

それでも俺だけなら我慢もできるが、葛城さんにまでそれを向ける事がどうしても許せない。

左京は性格的に問題も大盛りだと思いが、その点では敬意を払っている。それに少し悔しいが、葛城さんがすんなり生徒会に入れたのは、左京のくれた情報が大きな役割を買っていたことは否定できない。ここまでされたら信頼するべきだろう。

とまあ、そういうこともあって左京達を別に善人とは言わないが、この学校で唯一（葛城さん以外で）裏切りの心配はしなくていい奴らだと今では信じられている。

月見の場には10数名が来ていた。

俺はとりあえず、まず予想通り来ていた綾小路に船での事を謝り、今は葛城さんの対立派閥があつてピリピリしているのであまり刺激しないでくれと忠告しておいた。

一瞬、情報漏洩を考えたが、モブみたいな綾小路なら問題ないだろう。Dクラスだし……。

謝罪と忠告が終え、改めて来ていたメンバーを見回してみると、葛城さんと俺、左京をはじめとした天文部5人。それにBクラスリーダーの一之瀬含む男女6人。

それにDクラスの綾小路と平田と……確かCクラスの金田だったか？も来ている。平田は、何やら左京に礼を言っているようだ。

金田に関しては、葛城さんと契約した龍園がB・Dのリーダー情報を提供するとか言っていたから、早くもスパイを送り込んでいたのだろう。

Dの馬鹿共はまだしも、Bは指名するなら間違わないようにと、俺と葛城さんに東風谷とキーカードという証拠を見せてきたので結果的に意味がなかったが、そんなやり方を採る龍園との契約を信じてもいいのか今更ながら考えさせられる。

今は内側がごたついているし、いつそ左京達と組んでAクラスを葛城さん一色にしてから、外側に目を向けるといふのはどうだろうか？

生徒会の時のように、思いも寄らない案をもらえるかもしれない。

一時的にBクラスに逆転される可能性は僅かにあるが、生徒会役員である葛城さんの下に坂柳を派閥ごと取り込む事ができればお釣りが出る。いや、思わずスポットを占拠して葛城さんに怒られたばかりだから、これ以上勝手に動くことはしないが。

と、葛城さんと同じでに一之瀬が、左京に説教まじりに目的を問い詰めているのを眺めながら、エリートにふさわしいビジョンに耽っている時だ。

「僕の目的は、外部接触禁止の廃止、それにPPを円にすることだ！」
なんか俺の想像とは完全に外れたことが聞こえた。

「ただCPについては、月々の収入やクラス競争の事があるので残したい」

問い詰めたら出てきたその思いも寄らない目的に、葛城さんや一之瀬が固まっていた。

最初は何いってんだコイツ、と思ってしまうたから気持ちはわかる。

そういうものだと思っていたし、無人島の試験やクラス間競争ではなく、学校の制度自体に異を唱えるとは思ってもみなかった。

「そもそも外部と連絡や接触して何が駄目なのかわからん。」

これはクツソ邪魔な規則だし、個人的にブラック企業の色を強く感じる。干渉を禁止…程度ならまだしも、完全に遮断するとかあからさますぎるほどに黒いだろ。資格を取得することさえ自由にできないなら、僕の場合、本当に勉強とインドア趣味しかできないじゃん」

……っーか、こいつ。明らかにそのブラックな部分を公表されない為に、外部と遮断してるって察して言ってるよな。

真面目な葛城さんや一之瀬は、微妙にそこに気づいてない節があるが。

「それって運転免許とかか？」

「それもある。運転免許自体は一応、学校の外側に併設されるような位置に教習所があるから、年齢をクリアして面倒な許可申請ができれば取れなくはないらしい。だけど、車は勿論、バイクも購入・運転で

きる場所がない。他にガチャの商売や部活の実績の為に調べたんだが、企業関連や各種コンテストの縛りがひどすぎて、抜け道を見つけないと運営や応募すらできない。

だから、外部接触禁止だけはなんとしても廃止したいんだ」

だが、この場においては驚く奴の方が少数派……とまでいかなかったも、左京と並ぶ同学年の有名人、東風谷と高円寺は慌てていないと断言できる。

あの見下すことこそないが、他人にほぼ興味を抱いていない二人が面白そうな表情をなっているのだ。

葛城さんや一之瀬すらチラツと見ただけで、話す価値なしとばかりにそれぞれ散っていった者達だ。

「そしてもう一つ。

PPを無くして円にしたい。円があればPPとかいらんないじゃん」俺も思ってたけど、それは言ってもしょうがないだろ」

「だってPPって円とほぼ同じ用途だろう。なのになんでこんな欠陥だらけで、しかもいづれ返さなきゃいけない独自通貨なんか作ったんだよ。」

これのせいで、卒業後の学費や旅費を稼ぐことも面倒な回り道しないといけない。でもそれをしないと卒業即無一文とか、新卒のトラップなのか？ やりたいこともあるし、実家があんまり裕福ってわけじゃないから、せめて最低限稼いでおきたかったのに！

一応、僕と佐倉の分は円を貯金できるようにしてる「……え？」けど、想定以上に稼げるか不安なんだよ。てか、学生とはいえ、稼ぐのに回り道しなきゃ駄目ってなんなんだよ!!

——どうせ電子マネーなら円を使ってもいいじゃないか!」

それを聞いて思いもよらぬ所を突かれたように、何人かが考え込んだ。

入学まもない時期にすでにバイトを始めていた左京。

俺も改めて冷静に考えると頷ける部分はある。

これが目的なら、試験をシカトしようと同学年全員の前で言い放つたのは——。

「奨学金とかあるんじゃないか？」

「奨学金ローンとか僕みたいなのは鬼門なんだよ。社会人になって、かなりの期間返済に苦労するのが目に見えてるし、できれば使いたくない」

「なんでこんな無人島で……しかも試験中にそんな事言つた？」

「聞かれたからつてのもあるけど、今ここなら流石に監視の目がないだろ。だからだよ」

「昼過ぎにみんなの前であんな事をしたのは……」

「それは健康の為に決まってるだろ！」

体弱い奴は本気で大ダメージになりかねない試験だぞ、これは。学校の誘導に乗ったままだと、他のクラスを出し抜こう……まではともかく、陥れようと考える輩すら出かねないから、学校が逸らそうとしていた部分を全員の前で突く必要があつたんだよ」

左京が本当に学校を気にしてるのか、裏に気づいているのかは半々つてとこだが、当てはめるなら出し抜こうとしていたのが龍園で、陥れようとしていたのは坂柳だ。少なくともAクラスでは。

実際に葛城さんと交渉していた時の龍園からは、見下しとともに値踏みの視線も感じられた。ムカつくはムカつくが、葛城さんの華麗な交渉術で必要物資の提供を受ける事が決まり、見た感じ穴もない契約を結べた。だからこつちはいい。

問題は坂柳の方だ。

「なあ左京」

「ん、今度は戸塚か。どうした？」

「今更だが、葛城さんを生徒会に入れるように助言してくれたのは、この目的のためだったのか？」

「んなわけがない。」

普通、友達が自分だけでは達成困難な目的を話してきたら、できる範囲で手助けするものだろう？」

「だろうな。」

もしそうだったら、前の件含めてもつと俺や弥彦を利用しようと動いたはずだ。

だが左京がそうした言動を匂わせたことはない。遊びのように、おちよくつてくることはあるがな」

「……そうですね。すまん、左京」

「いや、別にいいけども」

なんでこんな質問をしたのかと不思議そうに見てくる左京を見て、ようやく確信できた。

こいつは聞かれたから自分の考えを主張しただけで、裏や損得など考えてもいないだろう、と。

バスで具合が悪かった俺に席を譲った時のように、ごく自然とこういう言動になる奴だ。

坂柳とは絶対に繋がっていないだろう。あんな腸が腐ってる奴と合うわけがない。

左京を信じていなかったわけではないし、これまでの付き合いもあるから十中八九ないとは思っていた。ただ葛城さんを補佐する上では、友達とはいえ別クラスの奴を無条件に信じることはできなかったのだ。

それに、左京と攻撃的な坂柳が組むとどんな事をされるのか想像できない。それほど聞いた考察や生徒会入り関連での発想や行動力には脅威を感じた、と葛城さんは言っていた。

証拠こそないが、組んでいる可能性はないと確信できたのは大きい。

なにより、数少ない『信頼できる』ダチを敵だと思いたくなかった。

俺は、曲がりなりにも筋を通した上で、道を切り開いてくれる左京を気に入っているのだ。

なんか月見の前に、葛城や一之瀬に試験シカトの件を問い詰められたので、前からずっと考えていた計画をゲロることになった。

外部接触禁止とPPの廃止である。

とはいっても、大したことを考えていたわけではない。

金や車などの生活資金・移動手段を卒業前までに最低限確保したい僕にとって、本当に邪魔な制度なのだ。僕と佐倉の貯金はそれなりに貯めているが、邪魔なことに変わりはない。

だからこの行動は至極当然のことだろう。

ただぶつちやけ、今は学校に対して何もしてないし、会社運営と卒業後に必要な手をゆっくり打っているだけなのだ。

会社に関しては佐倉を利用してる部分に負い目があるので、謝って許してくれるか心配で引き伸ばしてしまった。それが今まで打ち明けなかった主な理由である。

でも聞いてくる奴がいたら正直に答えようとは思っていたので、まあ良いきっかけになったのではないだろうか。こんな大勢の前で言うことになるとは想定してなかったが。

キヤットルキー関連のフラグ管理と違って、こちらは現実的なもので期間もまだ余裕があるし、気長に好機を待ちつつ、できることをしている。

揃い始めている手札に加え、奥の手と切り札も2種類ずつ考えているし、稼いだ円の分け前も当然佐倉に多めに配分して貯金しているの、最悪目的達成できなかつたとしても佐倉と自分だけはなんとかなるだろう。

それでも経済的に厳しそうな家庭の奴も困りそうではあるので、なんとかできそうな立場である一之瀬と葛城に訴えてみたが、さてどうなることやら。

少しでもこれを重く見て、生徒会とかで発信してくれば、PPや接触禁止をあっち方面から多少緩和できる可能性が出てくる。善性

の強い二人には期待したいところだ。

……そう考えると、最後に戸塚が問いかけてきたことは、当たらずとも遠からずだったかもしれない。生徒会組や戸塚がこの目的達成をもし手伝ってくれるようなら、借り1だな。

話がひと段落着いたと見たのか、はたまたなんか集団の中心人物達が考え事してるからか、四方以外の天文部員+αが集まってきた。

忘れている奴もいるかもしれないが、これは月見なのだ。
よってこちらが本番である。

集まった者達に趣向を凝らした団子やおやきを振る舞う。また許可をもらってクラスからパチつてきた食器やコップに、山の幸を盛り付け、お茶を淹れる。

——お茶？ 茶葉を着替えに包んで密輸しましたけど何か？

船に好きなお茶やコーヒーがなかったら旅行中マジで苦しいので持ち込んでいた物を、そのまま島に持ち込む為に一計を案じたのだ。流石にコーヒーは器具とかがデカイので無理だったが、お茶を淹れる急須なら色々代用できる。よって、どちらを選ぶかの選択は茶葉だけでいいお茶に軍配が上がるのだ。

余談だが、東風谷も多分そうして探索で見たお札とかを持ち込んだに違いない。

そりゃ、だいたい予想できれば誰だってやるよ。僕だってそーする。だからそうしたのだ。

これくらいなら見逃してくれる……っていうのは、あんまり自信がなくなつたから、先生の前では大ぴらに言わないことにしたけども。そうしてもてなしながら舌鼓を打ち、落ち着いた処で佐倉に利用している事を謝った。

勿論、人前だからアイドルやプロデュースに関しては伏せた上でだ。

これで佐倉に嫌われたり避けられたら、それはそれで諦めがつく……かもしれない。

ただ結果は。

佐倉からも他からも特に言及はなく、何事もなかったかのように流された。

尤も謝った時、嫌われるかもしれない不安な心境が表に出ていたのか、みんなは示し合わせたかのように小さく笑っていた。

これは許してくれた……と思ってもいいのだろうか？

また借りを作ってしまった。

しかもこっちは特大の借りなのに、ゲーム制作の事も含めて着々と佐倉への借りが膨れ上がっていく。

そんな貸し借りトントンにできるかすら、段々難しくなってきたという気がする夏の一幕である。

それでも、とりあえず負い目は置いて切り替える。

他も表面上気にしていないように見えるので、僕が気にしすぎるのはナンセンスだろう。

時折求められて夏の星座や月の蘊蓄を語り、しばらく部員達と雑談していると、何故か天文部に混ざってきた平田が唐突に佐倉へ話しかけていた。

「いきなりごめん。ちよつと佐倉さんに聞いてみたい事があるんだ。

責めてるわけじゃないんだけど、佐倉さんってクラスでも話をしてるところを見ないしあまり顔も上げないのに、どうやって左京君や東風谷さんと友達になったんだい？」

平田が佐倉に質問していたが、それは微妙に気になる。

よく考えると、佐倉が僕達へ友好的な感情を向けてくれる理由を知らない。

東風谷からは、佐倉含めた部員達は神様の話を真面目に聞いてくれたから、という理由らしきモノを聞かされた事があった。

そして、僕からは部活動説明会↓バイト・生徒会の流れを一緒にこなしていたら、いつの間にか友達だと思っていた印象だ。なにかあるのなら正直、聞いてみたい。

なので、こんな陽キヤナイケメンに横から意見する勇氣もないことを考慮に入れると、助け舟を出そうという気は起きなかった。

その佐倉は、おそらく初めて話すだろう平田に問いかけられた事で、俯いて、慌てて、部員達を見回しと、一通り内弁慶なテンプレをこなした後。佐倉は目を泳がせながら、なんとか話しだした。

求める答えとは違う話だったけども。

「あつあの……私、自信ないから。だから上手く人と話せなくて……。

でも、左京君や早苗さん……少なくとも左京君がいれば……！」

そこまで言うのと、佐倉は俯いたまま両手をニギニギさせながら——
——小さく笑った？

「わたしがなにかやらかしても絶対に助けてくれるから。

だから、いくら迷惑かけても何かで返せば大丈夫かなって思ってた
す」

おい。良い話かと思えば、コイツそんな事考えていたのかよ。

強くなったとも言いたいが、なにより僕に面倒事を丸投げする気満々だろ。返す気があるだけ、僕や東風谷よりはマシだけど……。

いや以前に頼れと言って手を貸す約束はしたし、助けてもらったりもしてるから、一人で抱えるよりはいいけどさ。

「……なるほど。つまり左京君相手なら失敗して迷惑をかけても助け合えるって確信してるから、自然に普段通りにできるって事かい？

だからこそ友達になれたと……」

「夢月さん、信頼されてますねえ。私でもここまでじゃありませんよ」

「……………羨ましいな」

まあ、佐倉とは入学以来の友達&同僚だしなあ。

性格も長所も短所もお互いそれなりに分かってきた頃合いだから、遠慮もなくなってきたのだろうか？ ある意味、四方よりも深い付き合いだし、容姿も凄まじく良いから、迷惑かけられても悪い気は全くしないけど……。

ただ、彼氏とか好きな奴とかができた時に、面倒な事になりそうな気がするだけだ。大事なことなので繰り返すが、そういう事態になったら面倒にはなると思っている。

それにしても平田みたいに人当たり良さそうでモテそうな奴が、なんでこんな質問を佐倉にしたのだろうか？

もしかして狙ってるのかだろうか？ そんな風には見えないが、よくわからん礼を言ってきたり、僕にまでクラスがどうかの助言だとかを聞いてきたりと、変な奴だからイマイチ読めない。

僕から見ると、平田は綾小路と競るレベルの変人に見えてきている。

それか案外、狙いは佐倉じゃなく東風谷ということもあり得る…のか？

どちらにしろ見る目があるのかなのか。だってあいつら、才能や容姿こそ最高クラスだが、明らかにコミュ障で面倒臭そうな女子達だぞ？

むしろ平田みたいなタイプはどちらも避けそうなのだが…。

違う意味があるなら、同じクラスの男子である綾小路や高円寺がいるんだし、そつちに…何かを聞こうとしても、嘘をつかれたり煙に巻かれるか無視される様が容易に想像できた。

確かにDクラス縛りで何か聞きたい事があれば、僕でも佐倉一択かも。

てことは佐倉に聞くのは妥当なのか？

でもこの場に限定せず、あのご面相と柔らかな雰囲気のリリーダー？なら、一之瀬や葛城みたくクラスに信頼できる友達の一人や二人くらいいるだろ。本当にわからない奴だ。

一応の納得したと思われる平田が退いたのに、後で転げ回りそうな台詞をまだ東風谷に吐いている佐倉。

相手の変化とともに、徐々に場は僕から東風谷と仲良くなった話に移行していた。

だが、微妙に僕も恥ずかしくなってきたので、自分の思考を平田へ無理矢理逸しつつ、静かに天体観測に戻ることにした。

水に流してくれたたっぽいところで、こういった話を聞くのは無粋というものである。

だから四方と東風谷、ついでに高円寺。そのわかつてます……みーたーいーな顔ヤメロ。無粋だっつってんだろ！ 内心だけで口に出してないけども！

無人島ゆえの暗さがあるとはいえ三日月なので月の光は少し弱いが、その分輝きを増している星々に視線を移し、僕は醤油団子を口に放り込んだ。

56、石ころ（後半、高円寺視点）

一人離れて夜空を見上げてみると、四方が来て問いかけてきた。隣には綾小路もいた。

「左京、本気なのか？」

「どういう意味だよ。僕には高円寺や綾小路みたいなスゲー背景なんかないんだから、最低限の準備をしとかないと後で詰むだろ」

「だからって学校のシステムをなんとかしようとするとか、なに考えてるんだよ。」

「……ところで高円寺はともかく、綾小路も裕福な家の出だったのか？」

「どうだろう？ オレはあまり考えたことはなかったな」

「いや、そっちは確定じゃないけど、綾小路のこの世間知らずっぷりや……あー、ちよつと他にも色々あつて、相当な家なのは予想できるかなつて」

綾小路の家や馬鹿親のことは言わない方がいい。

四方も察してはいるかもしれないが、綾小路の地雷原はこのあたりなんじゃという気がしているのだ。

知らなければ触れるような話題でもないから、僕から広める真似はしない。それに広めなければ、馬鹿親がまた馬鹿をやつてこない限り、僕もついでに松雄も平穩にいけるのである。なら藪を突くのは愚行だろう。

まあそもそも人の家の事なんか、察していたとしても口に出すような真似。僕の美学には反するのでやらないが。

「オレは『もう』世間知らずじゃないぞ」

「どの口が言うんだよ。前に明らかな嘘は止めといた方がいいって言っただろう」

「まあ、少なくとも普通じゃない奴だよなあ。ゲームとかもやった事ないって言ってたし、流しそうめんの時も……」

「普通じゃない……いや、でも中にはそういう奴にもいるんじゃない

か？」

「いるかもしれないけど、そういう返しが出てくる事自体が普通からかけ離れてるんだよ。いい加減ズレてることを自覚しろ」

「……こんな世間一般の道から外れてる、む…左京から言われた」

「おい」

それにしても嘘と言いついて出してるんだが、今回に関しては嘘の匂いがあまりしない。

どちらかというところ、真実そう思ってたってそうさ。

綾小路は何故か普通とか平穏とか自由とかかいう言葉に憧れている？フシがある。そしてやり方や結果はどうあれ、その憧れを学んだり実現させてきたという自負があるせいかもしれない。

……うんまあ、そういう奴こそ何かに囚われてることが多いんだけどね。例えば自分は自由だと声高に言う奴こそが、実は不自由なんたのはよくある話なのだ。

綾小路の場合——やっぱり馬鹿親が最有力候補、かなあ。

万が一があるなら、まず息子小路への手を打つことになりかねないな、これは。

「ははっ。いつか言われるだろうと思ってたけど、まさか綾小路からとはなあ。二人共、常道から外れてるし、案外似た者同士かもな」

四方に言われて考える。

僕は常識人。綾小路は生粋のイロモノだが、似てる部分はある……のか？

自分に似てると言われて即座に思い当たるのは、戸塚と石崎くらいなんだが。石崎の方は少ししか接点ないけども。

綾小路もなんか気づいてくれていたか、みたいな雰囲気になってるし、四方共々天才にしかわからない綾小路との類似点が僕にはあるのだろうか？

「似てませんよ」

疑問に思っていると、後から来た東風谷がバツサリ切ってくれた。

佐倉と高円寺も別々の方向からそれぞれ来ている。

ついでに綾小路が、その言葉に一瞬でシユンとなった。

「だよな！ 僕と似てる奴と聞いて思い当たるのは」

「私ですね!!」

「そう——じゃねえ！ より遠ざかったわ。性別からして違うだろうが」

「えー、なんでですか!?! 性別なんて些細なことじゃないですか!」

「わたしも、左京君はちよつと早苗さんと似てるって思う」

意図を察したのかと思えば、おそらく嫌いな奴と僕が似てると言われるのが嫌なだけの感情論だった。

でもその対抗馬に自分を使うなよ。佐倉まで乗っかってきちやつたじゃん。どっちも明らかに似てないけど、せめて四方か高円寺を挙げてくれ。

そんな話が脱線して、僕に似てる奴談義になっていた時にふと気づいた。

——ん？ 高円寺がなんか目配せしてる？

なんでコイツはコイツで、こう…はつきり口に出さないのか。そんなんだから、昼過ぎみたいに誤解されるんじゃないなかるうか。

本人は気にしないかもだし、僕も気にならないけど、人を試すような真似は不快に思われる原因にもなるので、次の機会まで覚えてたら適当に忠告しておこう。

…今更かもしれないが、なんか天文部がコミュ障の巣窟に思えてきた。

まあ今回は意図を察する事ができたので、佐倉をエスコートしてくれた恩を返しがてら目くらましになろう。

天文部関係者はともかく、多分すんなりリタイアする為に平田の注意を引いとけばいいんだろ？

ついでに、これまでとは少し違った煽り方も見せてやる。

と、僕は目的を設定してから切り替え、ここからは道化に徹することにした。

「さてさて、レディース&ジェントルメン！ 皆様、ちゅうもく!!」「いきなりなに?!」

「おつ、左京、余興でもやるのか？」

考え込んでいた奴らがこちらに視線を向け始める前に、全員を僕の前方に置くような位置取りで足元に仕込みをしておく。あらかじめ地面の硬さを試し済みの場所にだ。

これはキャットルーキーで四方がやった奇術だが、やるとしても未だだからパクリには当たらないだろう。

「さっき僕が言ったことで考え込ませる人を出したようだが、逆に考えてみよう」

「逆？」

「そう、僕のようなただの一般学生」「一般学生？」が言っただけの事を信じる事は難しいだろう。

だけど、ハイインリツヒの法則があるように、偶然を利用して積み重ねた奇跡を起こすのは、決して難しいことじゃないとみんなに知ってもらいたい！」

「奇跡……」

ちなみにこの法則は、1つの重大な事Ⅱ29の小さな事Ⅱ300の異常という法則なので、本来は『300の異常を無くす努力をすれば1つの重大な事を回避できる』という使い方をする法則だ。

しかし逆に考えれば、『300も小さな事を起こせば、1つくらい重大な情報操作を行える』という使い方もできると解釈できる。勿論、言うほど簡単ではないが。

「左京、お前が言ったことを頭ごなしに否定したいわけではないが、あれの具体案や成功の見込みはあるのか？ 俺もこの学校に問題はあると思っているが、変えるのは容易ではないだろう」

「そう……だね。それに、その偶然起きる何かを利用してどうするの？ そもそもそんな『何か』を起こせるの？」

「具体的にどうやるかってのは、とりあえず置いていてだな。

偶然や奇跡ってのは、意外と起こせるものだよ。今から実演してやれるのは、チャッチいけどな」

空気を讀んだ葛城と一之瀬が食いついてくれた。

欲を言えば平田に質問してほしかったが、彼は真剣な顔になってい

るのでスルーだけはないだろう。

これで最低限の借りは返したぞ、と高円寺をチラ見すると、笑い出しそうになっている彼が目に入ってきた。

……笑うなよ？ 今、お前が注目されると、僕がやることが無駄になる。

自然に消えられるようお膳立てしたんだから、適当なところでシヨールを抜けてクルージングに戻れよ。これでエスコートの借りは返したからな。

「ここに3つのサイコロがある」

それはともかく、注目が集まっていることを確認すると、僕はあらかじめ鞆から外しておいたサイコロ3つをみんなに見せた。

「あらかじめ宣言して当てる奇跡をご覧に入れよう。」

出目の合計は3だ！」

そして持っていた湯呑に入れ——る振りをして、そのまま足を引いて地面に被せた。

「さて、このサイコロ3つが、1のゾロ目になる確率は？」

「え、えくと、6の3乗だから……216分の1？」

「大正解！ 流石我らの学級委員長！」

「そんじや、悪いが答えを確認してくれ」

軽く弁を弄しつつ、答えてくれた一之瀬に確認を頼む。

ノリの良い一之瀬が確認したサイコロの出目は——1のゾロ目である。

要はもう一組のサイコロを用いてイカサマしたのだ。

仕込んでおいたのだから当然だが、こういうシヨールでは仕込みと演出があればどうとでもできる。

真面目に考えようなんてのは、この場においてナンセンスだと態度で示したということだ。

「これはさつきも言った通りチャッチい奇跡だが……どうだ？ なんか簡単に起こせそうな気がしてこないか？ ましてや小さい偶然ならどうだ？」

尤も、こんな詐術染みたイカサマは素直な奴しか騙せないだろう。

高円寺は勿論、目が良い四方や東風谷も薄く笑ってるし、佐倉に綾小路や戸塚、神崎といった者はまたやつてるよコイツみたいな目で見てる。

いかに真つ直ぐで素直だろうと、地頭が良い葛城や一之瀬だつて内心懐疑的に違いない。

でもこれでいいのだ。

むしろこんな詐術に騙されると、心配になってくるからな。

それに標的にした平田がどういうタイプなのかはわからないが、メツチャ見てきているのでこの余興の目的はまあ達成といつていい。

これ以降は、適当にトークを挟みつつ締めればいいだけなので、ありえないが高円寺が下手を打たなければミッシェンコンプリートだ。楽しい目線を超越されたし、その点については及第点だったのだろう。

僕はしばらく会えなくなる友達に、さり気なく目礼を贈り見送った。

と、それを見てもう充分だと判断したのか、微笑を残し高円寺は音もなく去つていった。

気づいたのは……僕が見る限り東風谷と佐倉、かな？

彼女らも、他にバレないよう小さめに頭を下げていた。

四方と綾小路は何か話してるのでわからないが、気づいていたとしても見逃してくれそうである。

私は誰よりも自分のことを評価し、尊敬し、尊重し、偉大なる人間だと自負している。

故に、誰のことも取るに足らない凡人であると疑っていなかった。私がおかをしようとすれば、常に答えを導き出せる。

凡人が四苦八苦している問題だろうと、私ならばいとも簡単に最適解を思いつく。

学問だろうと運動だろうと関係ない。

私とその他にはそれほど隔絶した差がある。

そんな私が凡人に目を向ける意味などあるのだろうか？

一部、目を引く者もないわけではないわけではなかったが、私に新たな可能性を感じさせるような存在にはこれまで出会ったこともない。

挑戦する気概を失った惰性での生き方。

自分以外から誘導されていることにも気づかず、気づいてさえ打開しようとしなない愚かな凡人達。

挙げ句、足を引つ張ったり、利用し、陥れるような……言ってみれば、自らを高めることを止め、他者を蹴落とそうとするうんざりする醜い思考。

それが学校はおろか高円寺コンツェルンでも大多数を占める事実。

それらに囲まれるのは、退屈でつまらない日々だった。

いつかは思い出せないほど昔だが、その事に思い至った時が、私が凡人を見限った瞬間だったのだろう。

それからの私は、唯一無二の自分を最大限に尊重し、信じ抜いてきた。

興味が湧かない限り、何にも関わらない。

その結論に至ってからそうして過ごしてきたし、これから高円寺コンツェルンを継いでも変わらない私の生き方だと思っていた。

しかし、ある凡人と会ったことで、私の思考には変化が生まれようとしていた。

左京夢月という男がいる。

多彩な能力は持つものの、私から見ればどれも凡人の域を出ない。言わば多少変わっているが、そこらに転がっている石ころのような存在だ。

むしろ周りにいる「奇怪な緑髪」のガールやテイルマン、佐倉ガールのほうが、本来は目を引く存在だろう。私の足元には及ぶ程度の能力や未だ未完成ながら魅せる輝きには、退屈しのぎにはなりそうな可能性を感じる。

しかしだ。

宝石の如き美しさを持つエキセントリックガールやテイルマンですら。

泥で固めた陶磁器の如き美しき輝きを放ち始めている佐倉ガールですら。

——石ころである夢月ほどには興味深くない。

おかしいことをおかしいとはつきり口に出し、自分自身の美学のもとに挑戦することを止めない姿勢。

敬意と礼儀を忘れず、必要だと思つた事に対しては全力で取り組む意思。

ただの石とはいえ、そんな姿勢や意思だけで私にすら手を貸したくさせるあたり、愚かな有象無象とは一線を画する者だ。

そんな不可解・不自然とも言える存在に、珍しく興味が湧いた。だから私は直感に従つて、夢月の停学明けに出向いてみたのだ。

勿論、私の優れた感覚や頭脳は、教室で一言話した時点で夢月の本質に至る答えを導き出していた。

夢月は泥に塗れる凡人だ。

それは間違いない。

だが話すうちに、それだけではない男でもあるとわかってきた。

道理をわきまえ、敬意を持ち、この私に認めさせ、認識を改めさせる間もなく、次々と興味深い事に巻き込んできた。私を尊重することは忘れず、あくまで任意でだ。

そしてそれも一興とばかりに乗ってみれば、それまでのつまらない

生活が嘘だったかのように、退屈などさせぬとばかりに尽くす予想を外してやる……そんな凡人だ。

なるほど、この男は面白い。

——周囲にいる曲者達が評価し、信を置くわけだと納得したものだ。

当たり前をひっくり返し、自分の決断を信じ抜き、足を引つ張る事など考えない。

泥に塗れながら、それでもこの私にさえ美しさを感じさせ、他者をも開花させる在り方。

——自分の矜持の為には労を惜しまず、どんな時も美学を考える。

そして何度か試したが、人であれ能力であれ夢月は大事な部分では決して疑わない。疑う前に、まず行動を起こす面白さと危うさをも備えている。

——それでいて当人の実力は凡庸そのもので、努力や精進することもないという。

——こういう男は、初めてだった。

——君は、どうする？

——頼む。チカラを貸してほしい。

——更に私に対しての言葉ではないが、これらの言葉を想起するに、今は片鱗だけでも、伸び代を加味し、いずれ風格を漂わせるようになればただならぬ本領を發揮するだろう。

——分をわきまえて助けを請い、しかし自分自身への自信が揺るぎないところも素晴らしい。

——だから学校のどうでもいい、くだらない児童ではなく。支配だの、蹴落とし合いだの、欠片も興味の湧かない事柄でもない。

——どこか共感すらできる夢月の繰り出すアレコレなら、茶番に乗ってもいい。

——そう思わせられるのだ。

——トドメに——。

——「まさかこの私のステージに上がって来ようとする凡人がいるとはねえ」

——今はまだ指が見えた程度だが、遠くないうちに白黒つける可能性が

あると、私の頭脳は予測している。

勝負や問題の内容・過程や大小はさして重要ではない。

必要があれば、誰が、何が相手だろうと、夢月は全てを乗り越え、挑んでくる。

あれはそういう男だ。

「いいだろう」

ただ自分を信じ抜いて、やりたいように生き、望む結果を欲してあがく姿。

一度は凡人を見限ったが、まだ捨てたものではないと再度私に思わせられたら、君の勝ちだ夢月。

「せいぜい私を失望させないでくれよ」

特等席を予約していれば、少なくとも退屈だけはしない。

もしも退屈になっても、暇つぶしにはもってこいの部員達がいる。

場合によっては、美しいレディ達と遊ぶことよりも優先してもいいレベルの者達だ。不足はない。

私が認めた誇り高き凡人、左京夢月。

僅かな期待をかけ、正式な名前で呼ぶ榮譽を前渡ししてやったのだ。

この試験が終わり、船で再会した時。

あるいはこれから先。

どんな面白い未来をみせてくれるのか。

楽しみにさせてもらうことにするよ。

57、危険

以降の月見では特筆すべきことはなく、しいて言えば高田寺がいなくなつた事が発覚した後になつた騒ぎになつたくらいだ。

ただ平田が不安定つぽくなつたので、リーダー指名の札を提示してそのプラス分で補填してくれるように頼んで安定化を図つた。綾小路が機転を利かせてくれるとは限らないからだ。

そうするとリタイヤする場合の佐倉の分は10ポイント足りなくなるが、虫よけのレモングラスを付け、賄賂代わりにDクラスで発言権が強い生徒に団子を贈ってもらうことで対処した。

これで駄目なようなら僕がDクラスに出向いて説得するつもりだったが、平田の様子からは一応は安定感が戻っている感じの返事をもらったので問題ないだろう。

一方、その交渉する様子を一之瀬や葛城他何人かは何か言いたげに見ていた。

この交渉自体というより、雑に煙に巻いた僕のショーか、あるいは学校に対しての発言を聞きかかった感じがしているが、言った以上の事は今はできない。それにバイト先や佐倉に関しても言えないから、このまま流させてもらう。

そういう考えがあると認識してくれるだけで、彼女らなら充分だと思える優秀さはあるし、経済面の問題を他人事と思わない善良さもある。

だから僕とは別方面からのアプローチを担当してくれ、と人知れず願っておくだけにしたのだ。

総じてこの月見は、波乱もなく平穩に終わったと言えるだろう。

部員以外の天体に興味もないのに何故か来ていた奴らのことなど、これ以上しらん。

この時は疲れがピークに達していて、月見と佐倉を東風谷と送つていったことくらいでしかまともに脳細胞を行使していないのだ。

つまり誰がなんと言おうと、何事もなくスムーズで楽しい月見だっ

たのである。

ただ本当の問題は、2日目の朝に発生した。
起床直後は、四方共々、柴田に運ばれるほどの状態となっていたのだ。

つまるところ僕と四方は悶え苦しんでいた。

「うぐうぐ」

「いてて」

「だらしねえなあ。四方はともかく、左京は普段から体鍛えてないからそうなるんだよ」

「ほつとけ……ああ、ギシギシする」

僕と四方を襲っているこの苦しみの正体は——そう、筋肉痛である。

走破班にされた時点でこうなるとわかっていたから、昨日は多少無理してでもできることを終わらせたかったのだ。

四方についても、キャットルーキーで彼の親父さんが「なにかのイベントでは張り切って活躍するけど、その後しばらくは調子が悪くなる」的な事を言っていた記憶があるので、気をつけていたつもりだった。無駄だったが。

「面目ない……昨日は……ちよつと張り切りすぎたかな……」

「だから少しはセーブしろつっただろ四方……痛つつう」

しかしそれができないから四方なのだ。

まして僕ごときに制御できる道理もない。

結果、二人揃って絶不調なわけだが、不可抗力である。

それにしても……予想以上に体中、特に足まわりが滅茶苦茶痛い。ゆっくり歩くのが限界だ。

自分のペースだったらここまでにはならなかっただろうが、東風谷や柴田のハイペースに必死について行ったのだから、この状態も残当というべきか。

まあ？ 動けないということは、動かなくていい大義名分が手に

入ったとも言えるので、昨夜の団子やおやきの残りを食べたなら、今日は寝て過ごすしかない♪

夕食にカレーを頼み込むまでは、だらけても「動けないから」という金言があるので大丈夫だろう。

「何か良からぬことを考えてるだろ左京」

「わつるそんな顔してまあ」

「失敬な。」

今日のスポット巡り、僕と四方の代理を、一之瀬と神崎にどう頼もうと考えていただけだ」

それに、これは第2次東風谷浄化作戦を始動する好機。

言葉巧みに一之瀬とのペアを画策してくれる。

誕生日相殺時にこの僕を煽り、今また筋肉痛に追い込んだ手腕は評価するが、代償に僕が転んでもただで起きる男じゃない事をわからせてやろう。

「うつくくく。今日が良き日になるといいな東風谷あ」

「……うわあ」

「ホント、イイ性格してるよ左京は……」

いやあ、本当に楽しみだ。

惜しむらくは、身体中痛いから現地で変化を確認できないことくらいである。

それからしばらくして朝食と朝の点呼が終わり、東風谷は思いの外あっさりと代理の一之瀬と神崎を加えて出発していった。

特に僕と四方の調子が悪い事を報告しただけで、「じゃあ私も島やルートを見ておきたいから、今日は私が行くね。あと……早朝に偵察へ行ってきた神崎君にもお願いできるかな？」という感じにフオロ―してくれた一之瀬は流石だ。

一生ついていきます（嘘）。

ほとんど何もしてないのに、あまりにも思惑通りに事が進んだ為に笑いが抑えきれず、何人かに訝しげに見られた気もしているが、四方もないあの面子なら放っておいても一之瀬が東風谷のペアになる。

なので、この時ばかりは何の懸念も緊張もなく、笑顔でその出発を

見送ることができた。

井戸から少し北に行つたとある李（すもも）の林。

走破班を見送つた後、密かに目星を付けておいた邪魔の入らないはずのこの場所に移動して、僕は眠りこけていた。

「We got him (捕まえた)」

「arrest」(捕まつた)。

……つて、え？　だ……じゃなくて、え……つと、Who are you?」

そうしてひたすら惰眠を貪っていると、何故か謎の黒人に捕まっていた。

は？

「I'm Alberto Yamada.

You can speak in Japanese (日本語でも大丈夫だ)」

唐突すぎて状況がわからないが、彼は山田君というらしい。

ただ最初は思わず二度見するほど驚いたが、森に相應しい静かな感じの雰囲気の人だったのでなんとか平静に戻れた。

次いで英語で話しかけられたが、とりあえず日本語でもOKと(多分)言われたので、お言葉に甘えさせてもらうことにする。寝起きに英会話はきつい。

「あー。山田君は僕に用があるのか?」

「Yes.

boss is calling (ボスが呼んでる)」

「ボス?」

「Ryuen」

リューエン：龍園か。

つてことは、山田君はCクラスの人なんだな。

見覚えがある気はしてただけど、Cクラスに東風谷と乗り込んだ時か停学明けに訪れた時、龍園達の近くにいたのかもしれない。

あれ？ 暗殺とか闇討ち目的じゃないよな？

あのクラスの印象のせいか少しだけそんな思いも湧いてきたが、山田君の雰囲気的に物騒な事にはならないだろう。こんな穏やかそうな奴がいきなり攻撃とかしてくるわけがない。

特に危険な匂いもしないし、冗談とかも通じる雰囲気を感じるのだ。

そもそもジャージ着てるってことは同級生である。それなら、なんかあっても逃げれば問題ない。

まあ、それはともかく。

「まい、ねーみず、Mutsuki Sakyō.

ないす…っー、みーちゅー？」

「Nice to meet you. ……haha」

日本語でOKと言われたが、初対面だし相手に合わせた自己紹介は基本だろう。

尤も、寝起きで頭と舌が回らず、妙な発音になってしまった。そのせいかな山田君にはニカツと笑われたが、嫌味な感じはしないのでとりあえず良い奴認定しておくことにした。

少し話した後、山田君と共にまずはBクラスの拠点へ向かう事になった。

そちらの方が近い位置だったし、どうせ龍園のところに行くなら準備したい事があると伝えたら、山田君に了承されたのだ。

誘いには乗ると即決したからかもしれない。

だいぶ休めたとはいえまだ足は痛い、わざわざ迎えまで寄越して誘ってくれたなら、顔を出すのは礼儀だ。

それにリーダー指名の事も伝えておきたいし、唯一コーヒーの件を交渉できる可能性が残っている龍園とは早いうちに会っておきたかったという事情もある。

実は一之瀬は勿論、葛城や平田にもインスタントでいいから仕入れて、言い値でいいのでPPで売ってくれとは頼んだのだが、本人達はともかく周囲の状況的に無理だと断られている。

だからコーヒーに関しては龍園が最後の希望なのだ。

ともあれ近くに転がしておいた杖代わりの杖について、山田君とぼちぼち話しながらえっちらおっちら森を進む。

山田君は見た目通りに無口っぽく、返ってくるのは英単語がほとんどであった。

ただ僕が適当に喋って会話に切れ目ができても気まずい感じにはならなかったのは、きつと性格や人柄がいいからだろう。途中まで椎名と一緒に来た、みたいな事も言われたので、彼女の友達だったら納得の雰囲気である。

そんな感じにできた会話の切れ目に時計を見てみると昼頃になっており、僕がいかに眠りこけていたかがわかる。おかげでHPが赤から黄色に回復したのは感じるが、数時間の音信不通に対して怒られる予感もあつたりする。

この時間だと東風谷達も帰還してるだろうし、面倒な事にならないといいなあ。

Bクラスの拠点に戻ると、何やら騒がしかった。

山田君に待ってもらおうよう断りを入れ、木陰に一人で休んでいた未だに調子の悪そうな四方に事情を聞いてみる。

どうやら、椎名と綾小路&その連れが別々に訪れてきたのが騒ぎの原因なようだ。

当然の事ながら重要な部分は、綾小路が女連れという部分だ！

四方から聞きながら遠目で見たところ、佐倉でも櫛田でもない美少女っぽい。

………くっ、この敗北感は何だ？

別に彼女とか欲しいとも思っていないのに、会うたびに違う女(錯覚)を連れてくる綾小路が羨ましい。

綾小路を嫌っている東風谷みたいな奴もいるが、イケメンではあるし、やはりモテるのだろうか？

そしてアレな性格と話せばわかる様々なズレで、くっついては別れと、とつかえひつかえになる未来が見えるようだ。なんて女の敵(偏

見と妬み)。

ケツ、ヤ○チンが(風評被害)！

後腐れなくヤれる奴、僕にもプリーズ(嘆願)！

でも冗談は置いといても、あれほどのおっぱいへの執着を持つ彼なら女側も性欲解消には苦勞しなさそう。もしも『その手の女』がいたら、ハーレムすら作りあげる可能性があるかもしれない。

……後で、一之瀬に綾小路には気をつけるよう言っておこう。

万が一、綾小路の彼女やセフレになっちゃったら、雌の匂いをさせてきそうで鬱陶しい。それに一之瀬がそうなると、現時点でも何人か脳破壊される気もしてるし、あの性格で体だけでなく心まで落とされたら一大事だ。

こんな面倒な状況で、様々な力を持つムツツリ二人を隔離させる面倒事には発展させたくない。

正直こんな事は本人たちの自由だと思うが、無人島試験の後半で対策しておかないと不味い優先事項は、この性欲関係だと思う。

童貞が多そうな高1という現状で2日目だからまだ大丈夫だろうが、後半になればなるほど股間を抑え、前かがみになる男子は増えてくるはずだ。

纏まっているうちのクラスでさえ、一之瀬や網倉なんかの目立つ女子にエロい目を向ける奴がそこそこ出る確信がある。僕や四方も例外ではない。

そしてそれを解消しようにも状況的に自分では処理できず、船以上に避妊具が手に入らないことも問題だ。たとえ和姦だろうと、妊娠のリスクが跳ね上がるのだから。

言うまでもなく、強姦ならなおヤバい。誰かが暴走したら、最低でも数人程度は退学や少年院行きになりかねない。下手すれば妊娠含む取り返しのつかない傷付きで……。

それでも船にいる時や月見で、佐倉にだけはいくつか対策を打っておけたが、高円寺の保証があっても心配な部分は残っている。

個人的には、本当に早いうちにリタイアさせておきたいくらいだ。もしあらかじめこの試験を知ってたら、佐倉やついでに椎名などの

自衛手段の乏しい奴だけでも不参加は問題ないようにしておきたかった。

今は注意喚起するとやぶ蛇になる可能性もあるから、気づいた奴だけで自主的に警戒するしかない。

初日は疲労困憊してたから仕方ないが、今晚からは火の番とか言い訳して拠点の中心あたりで抑止力になりつつ、危険性に気づいた奴を交代要員にスカウトすることになるだろう。朝の焚き火跡や様子を観察すると、どうもまだ思い至っている奴はいなさそうなのだ。

真つ先に危険性に気づきそうな四方や東風谷、あと一之瀬と網倉には、かかっている負担的にこんな事頼めないのでが難点だが。

もう三人ほど気づきそうな奴もいなくはないのだが、ムツツリ疑惑がまだ晴れていない奴らなので迷いがある。なにより変な巡り合わせで東風谷に敵認定されたらヤバいという意味で。

今更だが、こんなしわ寄せが僕のような一般生徒まできているあたり、マジでブラックな試験である。

でもまあブラックとはいえ、一応寝やすい場所が確保されているので最底辺じゃない。ゴミや金属片が転がる硬い床で年の半分寝ることになれば、半覚醒状態で1週間野営する程度軽いもの————そこまで考えて、僕の認識してる時間で20年近く経つのに、社畜根性が抜けていない自分に衝撃を受けた。

普通の高校生なら、準備不十分の男女混合野営自体がほぼありえない事に気づいたのだ。

と、シヨックすぎて逆に冷静になり、思考がえらく脱線していることにも気づけた。

待たせている形になった山田君に、申し訳なさが湧き上がってくる。

気づいたなら、せめてこれからはスムーズに事を運ぶべきだろう。僕は急いで思考を切り替えた。

覚悟を決め、3クラスで三つ巴———というか綾小路の連れの黒髪

女子が椎名に突つかかっている?——になっている場所に突入する。

あそこには、面倒臭そうに明後日を向いている東風谷と、道中で聞いた山田君の連れだろう椎名がいるので仕方ないのだ。

しかしあそこに直接突入するのは怖い。

ここは仲介の名手である一之瀬に全てを任せ、僕は椎名とできれば東風谷を連れてCクラスの拠点へ逃げ…訪れるのが吉とみた。

「東風谷く。話し中悪いけど、誘われたからちよつとCクラスへ行つてくるわく。んで、余力あつたら、お前にもきてほしいんだけど……」

「夢月さん! どこに行つてたんですか!？」

「寝てた」。

と、その前に椎名。山田君の連れつてお前だよな? 山田君にあつちで待つてもらつてるから、話が終わつたら来てくれ。お誘いは受けたから一緒に行こう」

「……もう山田君が誘つてたんですか。それでは私がやることもなくなりましたね」

だつて女の争いに見えるアレは怖いし、邪魔するのもなんなので、少し離れた場所から声を出して東風谷と椎名に言葉を届ける。

苦笑してる一之瀬や綾小路はともかく、黒髪の女子がなんか睨んでくるからあつちにはなおさら近寄りたくないのだ。

見られる事自体も怖いので、二人の反応が返ってきた瞬間にUターンする。椎名の声はよく聞こえなかったが、なんとなく予想はできるので問題ない。

ちなみに、あの女子が「初対面」なのにキツイ目線なのは、おそらく初日の影響だろう。最も反発してたっぽいDクラス(綾小路と来るからDだよな?)の生徒ならおかしくはない。

そんな中でも、空気を読まない事に定評がある東風谷はすぐに追いついてきた。

まだあつちでなんか話してるのに、普通に振り切ってくる東風谷はいつも平常運転だ。

しかし見る限り、一之瀬の浄化能力は東風谷には大して効果がな

かったようだ。綺麗な東風谷も見てみたかっただけに残念である。
そうして四方と山田君がいる木陰に着く頃には、椎名も話を終わら
せてこちらに向かって来ている姿が見えていた。

58、本物

Cクラスの拠点に向かう道中。

僕はアルベルト（名前で呼べと言われた）や何故かついてきた金田と話していた。後ろでは椎名が東風谷に話していて、男女で別れた感じだ。

一之瀬や綾小路はまだしも、あの女子生徒には絡まれたくなかったので、思わず四方に言伝だけして急いで出てきてしまった。

まあ、怒られたくないし、ちょうど良かったのかもしれない。

それにアルベルトの話はなかなか興味深く、他のクラスメイトがいたら無口気味な彼とはあまり話せない可能性もあったので、そういう意味でも悪くない。

会話自体は、あまり話さないのは何故なのか？という質問に対し、「six word」だの、「Lunatic」だのという短い言葉が返ってきて、それを金田と一緒に推理して答えまで導いたりして、いつもとは趣が違う面白さがあったのだ。

ちなみに僕と金田が出したアルベルトの難題への結論は、日本語の6つの言葉……そのうちでも最後の2つが難しいと言っていた、だ。

漢字、ひらがな、カタカナ、英数字まではなんとかなっても、間（行間や句読点など）と空気はわからなかったそうだ。おそらく答えに近いのはこれじゃなからうか。

これは以前に外国人の知り合いが似たような事を零していたし、ユーモアも知性も感じる回答はアルベルトにそれなりに合致するのだ。

また僕と金田の推理を聞いていた椎名が東風谷に似たような説明をしていたし、アルベルトの反応も頷いていたから、少なくとも見当外れではないはずである。

ともあれ、そんなこんなで話しながらたどり着いたCクラスの拠点

……というかビーチは、これぞバカンスと言える賑わいを見せていた。

みんな思い思いに楽しんでおり、一之瀬達とは別方向に陽キャ感満載だ。椎名やアルベルトのような物静かな奴は居づらいかもしれないので全員が楽しめるわけではないだろうが、それでも大多数に笑顔を届けている。

やはり龍園はリーダーとして仕切る技能が凶抜けているな。一之瀬や櫛田とはリーダータイプが違うので一概に言えないが、彼女らと比べても人の使い方がわかっている。

卒業して何年か社会人を経てからベンチャーとかを勧めて、あわよくば僕を雇ってくれるよう頼み込むのもいいかもしれない。

「……やはりですか」

しかしこの光景を見てから、金田が苦い顔の演技をしながら、なにか零していた。外見に似合わず、陽キャが羨ましいのだろうか？

僕はどちらかというところ、陽の者じゃなく陰9割の者なのでそれほど思うこともなく、他3人と同じようにただへえ〜って感じである。アルベルトと椎名は自クラスでもあるからだろうが。

てか、この面子だと真面目に考えてそうな金田が浮いてるのがなんか笑える。

ただ表に出すと失礼な事なので笑いを堪えていると、ここまで僕達を案内してきたアルベルトと椎名が木陰で停止した。

ここで許可とかアポ待ちでもするのだろうか。確か他クラスの領域に入る時？には、許可的なものが必要だとかルールにあったはずだ。

「あの、龍園さんが呼んでます……」

なので少しの間、そこでビーチで遊んでる奴らを眺めていると、怯えてる？ような雰囲気の子が声をかけてきた。

少しその態度は引つかかるが、ようやくアポっぽいものが取れたようだ。

それからは、無事チェアで寝そべっていた龍園のところへ案内された。

「よう。ようやく来たかと思えば、なにうちの3人とあんなところで

突っ立ってやがる?」

「まず、お招きありがとな。」

でもあそこで待ってた理由は知らん。案内役があそこで止まったから、アポ的なモノでも取ってるのかと思っただけだ……って、3人?」

アルベルトと椎名……それに怯えてた男子のことだろうか?

でも僕達が留まってたから声をかけに来た奴を、人数に含めるのはどうだろう。

「……あの、さつきから思っていたんですが。」

もしかして左京君は、僕がCクラス所属だどご存知でないのでは?」

「そうなん(ですか)?」

「東風谷さんもですか……」

龍園との挨拶を発端に疑問に思っていると、新たな事実が発覚した。

そして金田のカミングアウトを聞いた僕と東風谷の声が揃う。

「はい。実はそうなんですよ。すいません、印象が薄くて。」

でも昨日も今朝も付いて来る時にも、きちんと言いましたけどね」

「……も、勿論知っていたとも。なあ、東風谷?」

「いえ、なんか初めて聞くような気がします」

「東風谷あ……たまには空気読んで合わせてくれ! 金田に悪いだら!」

「もう遅いですよ。開き直りましょう夢月さん」

クラスの事を気にしていない弊害が、こんな場面で火を吹くとは。

なんで金田がうちに居たとかいう前に、僕と東風谷がクラスメイトすらろくに覚えてない事が露呈してしまった。

特に僕はここに来るまで話してたのに、別クラスだという認識が全く無かったのは悪いと思ってる。

「クツクツク。呑気な奴らだな。それとも——スパイされても問題ないってか?」

「りゅ、龍園さん!」

少し気まずく思っていると、龍園がどうでもいい質問をして助け舟を出してくれた。

話を流されたからか金田が動揺し始めたが、あの話題を続けてもお互い沈むだけなので、僕は当然それに乗る。

「え、それは問題ないけど？　つーかそんな回りくどいことしなくても、今回みたいなイベントなら聞かれたら普通に答えるよ」

「はあっ!？」

「てめえはそれでいいのかよ……」

「龍園君、金田君。左京君と腹の探り合いはしないほうがいいですよ？　なんせ初めから全オープンな割に意外と鋭いですから、徒労感が凄まじい事になります。ソースは私です」

僕が答えると、椎名がデイスリなのか助言なのかわからない言葉を放った。

その通りではあるので反論できないのが悔しい。

でも椎名と腹の探り合いなどした記憶がないのだが、なにをもってその結論に至ったのだろうか？

まあ椎名のごときは、一旦置いていて。

考えてみれば、一之瀬はともかく、昨日の葛城達や神崎他人かが妙に金田を気にしてたのはこれが原因かと、今更ながら思い至る。

金田がCクラス所属だと言われたら、真っ先にその可能性は浮かんでたよなあ。なんでスルーしてしまったのか。

「ハッ。やっぱてめえは潰し甲斐があるな。」

その『早苗』といい、俺のところへ乗り込んできたチビ助といい、Bには面白い奴らが集まってるようだ」

「チビ助……って四方のことか？　何やってんだよあいつ」

「てめえの停学中に俺を脅してきやがったぜ。あのなりでなかなか肝が座った野郎だ」

四方にそんな好戦的なイメージはないのだが。

てか、Dクラスで龍園の視界からフェードアウトさせた意味が消滅してるじゃないか。

あれか。佐倉か東風谷にちよつかい的なのをかけられて、仲間のだ

めに立ち上がったとかそういう話だろうか？　ちゃんと聞いてなかったけど、停学中にいくつか問題が起こったとか聞かされたし……。

「早苗に至っては坂柳と揉めたらしいじゃねえか。」

「聞いてるぜ？　散々煽り散らしたんだってな」

「ああ、そういえばそんな事もありましたねえ。」

でもあの時に夢月さんがいたら、お説教されるのは絶対私じゃなかったですよ。だから夢月さんは猛省してください」

「なんでだよ。話が繋がってないし、そもそもその場に居なかった僕に責任を丸投げするんじゃない。喧嘩売ってるのか？」

いや、違うわ。

東風谷の尻拭いに奔走して、気が高ぶってた可能性が出てきた。

原作のトムキヤッツ入団や野球漫画とは思えない修行みたく、意外と勢いや雰囲気で行動を起こすこともあるからなあ四方。

てか、何気に坂柳って……。

こつちは前に無理矢理聞かされた娘の方だよな？　あの理事長を煽り散らしたとかならむしろ喝采を贈りたいくらいだけど、本当にやってたら大問題になると思う。

しかし娘も同じ学校だったのか。

東風谷と何があつたかは場を凍らせた事くらいしか知らないが、流石に学生同士の口喧嘩の範疇だろう。

「それも面白いかもですね！　ちなみに売ったら買ってくれるんですか？」

「買うわけ……いや。売られた喧嘩は買ってやるよ。今ならそれもすぐ龍園に売れるしな」

「私の喧嘩を即座に転売しないでくれますか!？」

「ククツ。関係ねえこつちに押し付けてんじゃねえよ」

機嫌が良さげだったので、さり気なく東風谷を押し付けようとしたけど、当然のように押し返された。普通に下の名前で呼んでるし、東風谷と親しくなりたいのかと思ったのだが、いらんお世話だったようだ。

その後、龍園は僕と東風谷を歓迎してくれて、バーベキューを勧めてくれた。

喜んで参加を表明すると何故か驚いていたが、笑いながら椎名に案内を頼んでくれた。

驚きの理由がわからず椎名に聞いたところ、どうも綾小路とその連れが先に来て断っていたらしい。だから少し意外だったとのこと。

そう言われるとあいつらが断った理由も気になるも、肉の魅力には勝てない。思考が肉に侵食されるのである。

少し遅いが昼時だし、寝てただけでも腹は減るのだ。

接待を受けるのはかなり久しぶりで、Bクラスの奴らを出し抜いてしまったような気がしている。

やーい、羨ましかろう。僕の昼飯は肉だ!!

……よし。自己弁護の儀式は終わった。ほんの僅か、盗み食いをしているかのような愉悦も混じったが、口には出してないし問題ないだろう。

更に肉を食いながら、ここに来た最大の目的であるコーヒーも椎名に聞いてみると、余っていたインスタント一瓶を分けてくれた。長くても明後日くらいまでには試験を終えるからだろう。

交渉もなくポンとくれるあたり、素晴らしい。

ここは楽園か？ とか言いたくなる気分である。

しかしまたもや一之瀬にバレたら怒られるネタを増やしてしまった。ここは、東風谷と口裏を合わせておくべきだろう。

龍園はスパイとカミングアウトした金田から報告を受けていて、その口止め料がこの歓待と待遇なのは理解している。折角の機会だし、できるだけバカンスを堪能させてもらおう。

残念ながら筋肉痛のせいで食っちゃ寝しかできないが、ここならBクラスの奴らはまず来ない。つまり怒られる心配なく、のんびりできるのだ。

僕と東風谷は共犯者の笑みを浮かべ合いながら、その共通認識を新

たにした。

その僕達を何とも言い難い感じで見ていた椎名に関しては、運を天に任せるので問題ない。なんだかんだでノリが良く、知識・洞察力に優れているのもう見抜けているので、変な方向には転がさない性格なのは割れているのだ。

と、小一時間ほど食っちゃ寝しつつ、3人でそれぞれのエア友達品評会をしていると、龍園の笑い声が聞こえてきた。

「ハーハツハツハ!! マジか!? あの馬鹿野郎、マジで試験を降りやがった! しかもあの真面目一辺倒の甘ちゃん共を口車に乗せた上でだぜ!? 面白いことやってくれんじやねえか!!」

……まあ、最初のアレで賛同を示し、バカンスで豪遊作戦を選ぶ龍園なら気づくよな。

何も考えずにこの試験を受ければ、防御8割、攻撃2割の節約しながら他を蹴落としましょうねって感じになる。

防御に全振りしたうちと、攻撃9割にした龍園は本質的には似た方針なのだ。

もつと言えばBクラスが採ったのは、試験ステージをBクラスだけ隔離したような戦術だ。同じ島の中にはいるし、指名『される』権利こそ残ってるけど、もはや別の試験へのすり替えである。

僕達の代わりに金田からうちの情報を聞かされただろう龍園は勿論、担任が渋ったのも多分これに気づいてたからだろうし、高円寺には即座に看破されていた。

だから月見の前後では、あえて試すような言動になっていた気がする。

何が言いたいかというと、気づく奴はそれなりにいるということである。まあそれを見越して、バレても問題ない安全策を提案したわけだが。

「それに外部との接触条件緩和に、PPの廃止だと? くははっ!

俺も呼べよ、そういう時は! 鳩が豆鉄砲食らったクソ真面目な奴等の顔を見逃したじやねえか!? 想像だけでクツソ笑える……………ハツハハハア!!」

いい趣味なことだ。

安全策を安全圏から提案した僕と違ってこれから龍園は大変だろうに、微塵も表に出さず笑えるバイタリテイ。見習いたいものである。

しかし金田がどう伝えたのか、外部接触の方が何故か『緩和』になっている。

これが金田だけならいいが、他もそうなっているなら誰かの誘導を考えてしまう。

何気にそれが可能で、動機まで思い当たる奴が一人いるのだ。

些細な事ではあるが、落ち着いたら一応確認しておこう。余裕があつて覚えてたら……。

それから再度、龍園に呼ばれた。

僕達に夏のビーチに相応しい楽しそうな雰囲気撒き散らしながら、話しかけてくる。

彼曰く、僕と東風谷、あと四方は、龍園的には面白い奴認定されたようだ。

ちなみに、僕も誰が面白い……というより注目株を聞かれたので金田を挙げておいた。ついさつき推理をし合つた仲だ。あまりCクラスの奴も知らないし、不自然ではないだろう。

少なくとも、クラスも空気も流れもガン無視で、よりによって僕を挙げやがった東風谷ほどは。

コイツはこういう時、スルー安定である。

人前でオモチャ扱い？された事をスルーしながら内心憤慨して睨んでいると、心外です！みたいな顔をしてくるのだ。少しは自分の言動を顧みて欲しいところ。

「そーいや、てめえにはうち以外のクラスで面白えと思う奴はいんのか？」

結果、東風谷との睨み合いが発生していたが、龍園にこう聞かれたので一旦寝かせておくことにした。

「僕？ そうだなあ。Aには戸塚、Dだと……櫛田かな」

「桔梗さんですか？」

「自然に戸塚をスルーしてやるなよ」

「とつか？……誰でしょう？」

「あんな葛城にくつついてるだけの雑魚になんかあんのかよ」

思ったことをそのまま口に出したのだが。

《悲報。この場の誰もがまともに戸塚を認識していない件》

東風谷や椎名など、何度か部室に来てたり宴会やガチャとかで一緒になつてるのに……。

佐倉もだが、戸塚も社会人になって初めて重要性を思い知る能力『だけ』が高いから、この年代だと価値がわからないのかもしれない。「ああいうたとえ不利になろうと裏切ることだけはない奴は貴重だぞ？」

それに友達の鼻肩目を差っ引いても、あいつ……戸塚の本気は潰すべきじゃないと思ってる」

「何故だ？ てめえにそんな義理はねえだろ？」

「……根拠なんかないただの勘だし、固有名詞や詳細も伏せるから伝わらないかもだが。」

あいつだけだったんだよ。僕に相談しに来た時、自分でなんとかしたい、って言ってきた奴は」

「なんだそりゃ。相談に来ておいて自分でだど……？」

「そうじゃなくてさ。僕が面白いと思ったのはそこじゃない」

「「？」「」」

わからないかもなあ。

疑問顔の4人を見てそう思うが、認識すらしてないのはなんとなくもったいなく感じて、思わず強めに推すような言葉が口から出てきてしまった。

「あいつは、自分のリスクは度外視してか……友達の助けになる事だけを考えていた。入学から一ヶ月も経たない時だぞ？ 思い込みも強いし、結構はた迷惑な奴でもあるけど、面白いと思ったね。だからそこで確信したんだ。」

——戸塚は『本物』だよ」

「それ、名前伏せる意味はあるんですか？」

実際、教師や生徒会に目をつけられるリスクも話したのに、迷いなく葛城が目的を達成するための行動を起こしたのはなかなかできることじゃない。

自分の為ならともかく、出会って間もない他人（友達とはいえ）の為に動けるバカには、何故か感じ入るモノがある。

あと関係ないが、東風谷は自重しろ。

「空気読まない東風谷は黙ってような？」

あつ、口に出してしまった。

……何事もなかったように進行してしまおう。

「で、話を戻すと。」

でもさ。その時、聞かされても……このままだと戸塚の持ち味を活かせないと、なんとなくわかつちやつたんだよなあ」

「それでどうしたんですか？」

「そりやするよな、後押し。」

初手をいくつか提示だけすれば、成功率はあいつが信頼してたかつr…友達が押し上げてくれるのもわかつてたし、なによりああいうバカと頭に付けられるような『本気』は潰しちやダメな気がするんだよ。良くも悪くもな」

「……」

バカとは表現してるが、この場合本当に良い意味しか込めていない。伝わるかはわからないが。

「だからってわけじゃないけど、ある意味では自分を重ねてるのかもな。自分の信じるナニカにしか本気になれないって意味で」

「もしかして月見で言ってた夢月さんに似てる人って」

「うん。戸塚と石崎なら似てるって言われても多分頷けるな。顔や性格に他諸々はかなり違うけど」

「……石崎？」

「石崎君に似てる？ 左京君がですか？」

「いやまあ、石崎は戸塚と違って勘100%の印象だから、彼を知って

る君らが違うと思うなら違うんじゃないかね？ 知らんけど」

これ以上、言えることはないの、少し強引に話題を戻す。

なんか深堀りすると、自爆する流れになりそうな予感がしたのだ。

「んで、問題のDクラスなんだが」

「問題なんですか？」

「問題ってより、なんかよくわからん印象が強いんだよなあ」

本当にこれなんだよなあ。

良くも悪くも我の強い奴が多いというか、曲者の巣窟のように見える。

「ホントかよ？ 戸塚もそうだが、前にてめえが名指しした綾小路って奴は、ただの金魚のフンだったぜ？ てめえらの前にうちに来たが、融通の聞かない女の尻に敷かれててな」

「うーん。まあ普段だけだとそうなのかもなんだが……まだ定期テストの結果くらいしか例がないけど、そこから判断するに不気味な何かを感じるクラスなんだよ」

「テスト……ああ、そういえば中間では満点が8人も居たのに、期末では半分くらい名前が消えてましたね」

「そう、それも」だ！

僕としてはテストを買収、とか何らかの裏技を使ったと見てるんだけど、『誰が』までは絞り込めないあたり、奇術師染みた策士がいると考えてる。

それに、多分その策士じゃないけど櫛田みたく面白い資質を持つ奴もいるし、綾小路や平田みたく不自然な言動の奴もいる。忘れちゃいけない佐倉や高円寺も。

ま、ともかく総じて、あそこにはピーキーなスタンドプレイヤーの卵が多いんだ。それが入り乱れて、わけわからない印象になってる感じだろうか」

「スタンドプレイヤーに策士……か」

話してる中で、考え込んだ龍園。

それを見て不意に思いついた。

突然すぎて色々ぶった切る事になるが、借りを返す機会はここだと直感したのだ。

なので、即座に切り替えて行動に移す。

「龍園。アルベルトに、連れてくる前に僕が居た場所を聞いておいてくれ。必要なら僕を利用しろ」

「夢月さん？」

「……？」

「今日は誘ってくれてありがとう。おかげで肉を食べた。ちよつと事情ができたから、僕達はもう帰るよ。」

東風谷、行くぞ」

「え、ええっ!? ちよ、待つてくださいい！ いきなりすぎですよ！」

話の流れガン無視でいきなりの発言であり、今はわけわからないだろうが、椎名もいるし最低限伝わるはずだ。

想像が合っているなら、これくらいの保険はかけておくべきだろう。

僕は静かになった周囲を尻目に、バカンスに誘ってくれた礼を告げて、東風谷と共に龍園達の前から去ることにした。

挨拶したとはいえ、談笑中に唐突に去るとか失礼極まりないが。

こういう非常識を意識してやらないと、龍園と東風谷の性格的にスルーされる可能性が高まるので、仕方なかったのである。

願わくば、龍園がこのヒントを活用してくれますように。

僕はそう祈りながら、ビーチを後にした。

59、失言

「そういえば」

「おん？」

「なんで桔梗さんが面白いんですか？」

「あー。結局有耶無耶なクラスの印象だけしか言わなかったっけ」

「はい。夢月さんなら、愛里さんや綾なんとかを挙げると思ってたので、ちよつと意外で」

Cクラスのビーチを出ると、東風谷が疑問の声を上げた。

確かに色々話していた流れで、櫛田の事も流れてしまっていた。

友達連中は誰もが話の種として甲乙付けがたい人選ではあったのだが、龍園ならリーダーの資質が高い櫛田の話題が良いと思っただ。

まあ、誰でも色々アレだったのは認める。

「いや、リーダーの龍園になら、普通にリーダーっぽい奴の話題の方が良くね？」

「でも桔梗さんはリーダーじゃありませんよ。月見に来ていた綾なんとかじゃない方がそうらしいです」

「そりゃ、櫛田がどつちかというど担ぎ上げられるタイプのリーダーだからだな。担ぎ上げる奴がいなきゃ、適当に好き勝手するだろ」

櫛田の思考パターンや性格的に自分からクラスリーダーになることとはないだろうが、誰かから請われて参謀に付いてくれる奴がいれば、本領・本性を發揮できる状態になるはず。

そうなれば、対人なら一之瀬すら一蹴できる奴になる可能性もあると思う。ついでに、承認欲求が満たされて、あの終わった性格もマシンになるかもしれない。まあ参謀役次第などころもあるけども。

尤も、そうなっても高円寺や綾小路は乗りこなせないと思うが、それは誰でもそうだ。むしろアレらを多少でも操縦できる可能性がある櫛田は、大多数にとつて有益なリーダーになるだろう。

そうならないなら——暴発するか。

愚痴に付き合った時にも思っていたが、いつも限界まで膨らんだ風船を思わせたものだ。

正直、東風谷に紹介する前の櫛田は、疲れ切っていて何をするか分からない怖さがあった。だから櫛田が東風谷と仲良くなったと知った時に誰よりも喜んだのは、実は僕だったりする。不発弾処理が格段に楽になるの意味で。

まだ根本的問題は残っていたが、逃げ場ができただけ好転はしたと確信できたのである。

ちなみにその根本的問題とは――。

「櫛田の何が悪いって、運と周囲の相性が最悪なところだ。本人の性格もそれに次ぐレベルでねじ曲がってるのも、端から見て面白い」

「運と周囲……の相性、ですか」

これに尽きる。

多少違うが、あれはまさに人間関係最悪な職場に、人から認められなくてしかたない新卒が放り込まれるが如し。

会社なら最悪転職できるが、この学校では転校にしろクラス替えにしろ、普通でさえ高いハードルが異常に高い。ほぼ不可能といっている。

そんな中、あの年齢で歯を食いしばって外面を保っているのは絶賛モノである。周囲や状況に変に歪められなければ、リーダーとして大成する片鱗は見えているのだ。

「だって考えてみろよ。」

あいつの愚痴を鵜呑みにするわけじゃないけど、目の前で堂々と胸をガン見して騒ぐ奴らやら、よくわからない根暗やら、協調性皆無な偉そうで嫌な奴やら（全て本人談）。つまり櫛田が努力して維持している部分を投げ捨てたり逆撫でしてくる奴、もしくは追従してる奴しか居ない印象だぞ？

僕ならとつくにプツンしてるね。間違いない。

それを我慢して、あの外面だ。正直、スゲー奴だと思うよ」

「……うあ。改めて考えるとストレス凄そうですね」

「それに平田とちゃんと話したのは昨夜が初だけど、少なくとも一歩

が遅い平田よりはよほど適確なリーダーの器だな。

あと、もし櫛田がうちのクラスだったら、生徒会で多忙になる一之瀬とのダブルリーダーを提案したくらいなのに、聞く限り単なる小集団の纏め役やグループ同士の橋渡し役程度に留めてあるのもおかしい。

要は櫛田が信頼できたり、また担ぎ上げる奴もいないと見た。それが運と周囲の相性が最悪だと思う理由で、面白いと思う理由でもある」

面白いと思つてたからこそ、前に状況を利用して無理矢理（自覚あり）東風谷に紹介したという裏事情もあるが、こっちは関係ないので割愛しよう。

「はあく。夢月さんつて意外と考えてるんですねえ」

「まあ隠れた趣味が『思索』と答えても違和感ないくらいには考えてるな。大抵何の役にも立てることもないし、あんまり口にも出さないけども」

考えても意味がないと感じればともかく、考えること自体は好きだし、自分自身には意味ができる事も多い。だから思索は自分だけの行動の指針にしていたりする。

尤も今回の試験、というかマイナスの穴埋めみたいな目に見える功績が必要な場合は、しかたなく他にも口を出させてもらうけどな。

意識してゆっくり歩き、もう少しで林に入るところで、慌てた感じの声が僕達にかけられた。

「左京君！ 東風谷さん！ 待つてください！ 置いていけないですよ！」

金田だ。

よし。最初の賭けには勝った。

ここで金田が僕達を追いかけてくるということは、龍園か椎名、もしくは金田が気づいて手を打ったということだ。あの様子だと、金田である可能性はなさそうだが。

Bクラスへの義理の方が大きいからあんなやり方しかできなかつ

だが、できれば一挙両得を狙いたい僕としては龍園の選択肢を増やしておきたかった。

あのままではおそらく2択になっていただろう。

だから3番目の選択肢を作ることと龍園の保険にも使えと暗に示し、かつ僕は借りを返したのである。

まだ信用はされてないだろうが、あいつらならこの手に気づいて『利用』してくれると思っていた。

「や、金田。さっきぶり」

「? 彼はスパイと確定したんですよね? どうしてそんな」

「それは僕も聞きたいですよ。僕だってこれでお役御免だと考えていたのに、龍園さんが左京君達を追いかけて、そのまま試験終了までBクラスにいろと言われまして。」

あと、理由は左京君に聞け、と」

「あー、うん。まあそうなるよな。」

とりあえずゆっくり帰りながら話そうか」

僕と東風谷がBクラスに帰り着くまでがリミットだったので、速さを何よりも優先したのだろう。

「なにか急がないといけない事情ができたんじゃ?」

「あれは龍園達へのヒントだ。この結果に導くためのな」

「この結果ということは」

「僕もBクラスである以上、筋は通さないといけなくてな。でも龍園に借りは返しておきたかったから、保険の一手をわかるかわからないかギリギリのラインで伝えたんだよ」

「保険……僕がBクラスで過ごすことが龍園さんの保険になると?」

うーん。微妙に認識がズレてる気がするし、1から8くらいまでを説明しておいたほうがいいかもしれない。

こういう時、現実にも脳内オートやコピー、倍速機能があると便利だなと思う。特に倍速は早口になるから、聞き取れる速さならすごく便利そう。

……こういう発想、なんか自分が天才になったようで妙な気持ちだ。

勝手な印象だが、四方や綾小路と付き合っていると、彼らの時間だけ早く流れて感じることもあるのだ。これは逆に言えば、彼ら自身は周囲が遅いと感じているのではなからうか。

例えばこちらがなにかを話し、向こうも一言二言話したと思ったら、何故か急に納得し出すことがある。これこそ思考速度の圧倒的差が過ごしている体感時間に影響している一例だろう。

つまり、天才達は日々周囲をじれったく感じ、僕達凡人はそれを理解できないのだ。

うん、脱線も程々に、現実に戻ろう。

「まず、いまのところ僕と東風谷だけが金田がスパイだという情報を確定させている。ここまではいいか？」

「はい」

「つまり、僕達が言わなければ金田は、えーと、保護…だっけ？ 保護された名目のままBクラスの拠点で過ごせることになるわけだ。しかもこれからは探る情報もなくなったから、怪しまれるようなこともほぼしなくていい」

「ああ、なるほど。敵にならないし、害もないなら、置いておいても問題ない…：…んでしょうか？ なんかややこしくてわけわからなくなってきました」

「待ってください！ 僕のことを一之瀬さん達に報告しないつもりですか!？」

東風谷がついてこれていないが、思考の方向性がこれ系に向いてないのでしかたない。コイツはどう見ても技術者が研究者向きだ

「そのとおり。」

そうしないと金田がリタイアする可能性が高まって、保険が十全に機能しなくなる。龍園のミスを考えるに、ここをなんとかしておかないと最悪一人負けするぞ」

「ミ、ミス？」

「僕達が最初に龍園のところに呼ばれた時、龍園の傍にあったものは何だ？」

一緒に推理した思考力から考えて、金田ならこれだけで半分くらい

までは理解できるはずだ。

「? ……あつ! 無線機?! いやでも、左京君なら」

「そう。僕達だけならあれはミスじゃなかった。」

でも、僕達の前に綾小路達も来ていたというじゃないか。凡人の僕が気づいて、あいつが気づかない可能性なんてない。確実に気づく」
「……」

「綾小路達が来た時に、無線機があそこになかった事もありえない。龍園がああした要の一つになり得る機器を来客があつたからと手元から離す性格なら、そもそも僕達を呼ばない。だから綾小路達を呼んだかまではわからないが、偵察や挨拶が来ることを想定していたならおそらく僕達への対応と変わらなかつただろう。」

つまり呼びつけて話したはずだ。無線機が見える位置で」

ここまで言えば、僕が何を言いたいかわかつただろう。」

Dクラスの者に、少なくとも戦略の半分くらいは把握された、ということだ。

正直、社会人経験で下駄を履いてれば、よほど向いてない分野でない限り、行動し観察すれば、限定範囲内の理不尽は大抵こうしてやろうとしている事や対処法が見つかる。本来は別クラスとはいえ仲間に向けるようなモノではないが、この学校の方針にある程度は仕方ないだろう。

そして僕のような下駄も履かずに、あつさりそれを超えていくのが天才という存在だ。

材料が揃っていたとはいえ、高円寺がキーカードを見て即座にうちの方針を読み切ったように、綾小路も似たような真似ができておかしくはない。

更に本気でボンクラだと考えていればまだしも、さつき僕が曲者が多いクラスだと龍園に言っている。話半分に聞いても、下手を打つたかもと頭をよぎつただろう。

「あの…夢月さん。あの人、本当にそんなすごいんですか? 買いかぶりでは?」

「まだその可能性はある。数々の片鱗は一応確認しているが、所詮勘

が根拠の大半だしな」

東風谷は綾小路を認めるのが嫌なのか疑問を呈してきた。言葉通り僕も確定はできないので、肯定気味にもとれる返事を返す。

だが言葉とは裏腹に、僕自身はもうほぼ確信している。

綾小路清隆は天才であると。

でなければ、四方の対抗馬として計算に入れたりしない。

目に見える証明はできないから、口に出して断言こそしないが。

「勘、ですか。」

………はあ。夢月さんの勘は馬鹿にできないんですよねえ。ということとは、本当にかn…神様のお告げ通り、綾なんとかは天才の部類なんですか」

「………神様？」

東風谷も助言ありとはいえ、8割方そう見えているようだ。

それについてちよつと突っ込んで何か聞こうかとも思ったが、金田が神様と聞いて僅かに胡散臭くなってきたと言いたげな顔になったので、強引に元の流れに戻す。

信じられない気持ちもわからなくはないが、東風谷や神様方を変な風に思われるのがなんか嫌だったのだ。

「まあ綾小路はともかく、椎名も僕が気づいた事に気づいていたし、あれは龍園の選択肢を実質2つに絞られるミスだっただろう」

実は椎名は確定ではないけど、コーヒーというこの島では貴重な娯楽品をあんなにあつさり譲ってくれた背景は、おそらくこれ関係だと思ふ。

あれから少し考えてみると、こちらが後なのでそれ以外にも何かはあったのだろうが、「全オープンなのに意外と鋭い」という僕への評価はこの判断に影響を及ぼしている気がするのである。

「だから僕は、これからの龍園の『大変な生活』を少しでも楽にするためと。」

『それ』を龍園が確信した時に、金田がリーダーになって龍園の代わりにリーダー指名する保険的選択肢のヒントを出したんだ」

「——っ！」

「それに対し龍園か椎名は、Bクラスへの配慮に隠したそれに気づき、即座に金田を送るという手を打った。それまでの関係ないような話と、あのわかりにくい僕の野放図で非常識な態度だけで。この短時間で」

金田が考える時間を考慮して一息入れ、ついでに少なからず混ざる感嘆の気持ちを抑える。

僕があっち側だったら絶対に気づかず、スルーしている。仮に気づいても、勝敗にもクラス自体にもそこまでの思い入れがない僕では、何もしなかった可能性は高い。

対処をする龍園達と僕の差は、こういうところから生まれていくのだろう。

ともあれ、これで金田がうちの拠点で過ごす為に必要な説得はできただろうか？ と確認がてら聞いてみる。

「以上が、金田の現状に関する僕の予想だけど、どうだろうか？」

「つまり……つまり、左京君は…読み切ったということですか!？」

「は？ なんてそうなる？ 読み切ったのは向こうだろ」

「そうですがそうではなくて!!」
「？」

いかん。金田が理解できない。

懸念点は潰したと思っただけに、何に慌てて？ いるのかわからない。

粗方龍園（達？）の狙いやミスの予想は説明して、見落としもないはずだが……。

なんか口を開こうとしては閉じる謎行動をしつつ、ビーチで呼びに来た男子のような怯え？ さえ見せている金田。

それは東風谷が、唐突に発言して変化を促してくれるまで続いた。

「夢月さん、夢月さん。」

変な雰囲気ですし、ここは一つ、昨夜のお月見のような一発芸でもしたらどうです？ できるだけ馬鹿馬鹿しくて楽しいのをやれば、空

気も一新できると思いますよ」

「む？ 珍しく一理ある「ありませんよ……」。

エア友達に拍手喝采された僕の特技ならば、それくらい軽いはずだ。金田もいるし、アイツを対象にしてやろう」

喉を調整して、思い通りの声が出るか確かめる。

金田の力ない反論など無視だ。

消沈？している奴にも、これならウケると自分で確信してこそ、道は開かれるのだ。

大丈夫。僕ならできる。

「では雰囲気を変えるために、一発芸・椎名の声で椎名が絶対歌わないシリーズを歌います！ 聞いてください!!」

「ブツ！ ホントに椎名さんの声が……!」

「おや？」

スウ~~~~!

『お願いマツチョコ♪ めっちゃモテた〜い♪』

お願いマツチョコ。めっちゃモテた〜いから。

ウツ！ ハツ！ 筋肉お願い〜。

モツプがけ！ サイドチェスト!』

アカペラでうろ覚えでも、メロディーと椎名の声真似は完璧に通ず。

この歌はそれだけで充分だ。

「あはははっ！ ぜんっぜん椎名さんのキャラじゃないですか!?

ひっ！ しかも勝手にシリーズ化とかして怒られますよ……ひっ

はっは、ひ〜」

「……え？ どうなって……? 本当に左京君の口から椎名さんの声

が…ブフツ。よりによって椎名さんの声でなんて歌を……う、うは

はっ！ あっ、ダメだ。止まらなっ…あっははは!!」

『綺麗な私に大変〜身。見てなさい。』

さん♪ はい♪

お願いマツチョコ。めっちゃモテた〜い』

歌つてると二人が静かになったので、僅かに意識をそちらに向ける

と俯いていた。

ふっ。いない椎名に悪いと思って、俯いて僕を見ないようにすることで笑いを抑える算段かもしれないが、残念ながらこの歌は2段構えだ。

僕を見ないことで、本物の椎名の声では絶対に実現しないギャップを存分に味わうがいい。

『……………お願いマツチヨ♪』

ふう。ご清聴ありがとうございます

清々しい気持ちで1曲終える頃には、二人とも再び笑い転げていた。

実は旅行前に初めて聞いた歌なので曲名も知らず歌詞とかも違udarouが、ノリとりズムだけは外さないように気をつけていた。

それだけで笑わせられると確信していたからである。

この異常に耳に残るメロディーは僕に耳コピを可能にさせ、他人……しかも椎名という女子の声で再現する奇跡を起こした。それは可能でさえあれば、それだけのポテンシャルを秘めている。

結果、見事に金田と東風谷の笑いを引き出したのだ。

見よ、大ウケである！

まるで僕には芸の神が憑いていると錯覚しそうなステージだった。

「ブツハハハ！ 予想以上に高クオリティ!! つていうか、夢月さん声真似上手すぎです！ あははは！」

「うつくく。さ、左京君。ぶふっ、椎名さんに聞こえたらどうするんですか!? まだ…ブフォツ……失礼、まだビーチから…ぶふう、そんなに離れてないんですよ！」

「ふははっ。絶賛だな。

金田、安心しろ。もう見送られているし、追いかけてくる用事もないだろ」

「そうですね。左京君がコーヒーに入れる砂糖とクリープを忘れなければ、届けに来ることも、耳に入ることもありませんでしたね。

……私の声って、あんな感じなんですね。なんか不思議な気分です」

???

満足感に溢れていた中、夏の暑さのせいかな幻聴が聞こえた。

だが、その穏やかな声は確かに僕の背筋に物理的に電流を流すかのような威力を伴っている。

だから気のせいと思い込みながらも、一応、念の為に恐る恐る振り向いてみれば。

いないと思っていた椎名様が、ニコニコと笑顔を浮かべていらっしやるではないか！

おかしい。幻聴だけでなく幻覚まで見える。もしくは蜃気楼かもしれない。

念の為、声をかけてみよう。

「……えっと、と、と…届けてくれてありがとうございます?」

「はい。どういたしまして。」

楽しくやっているとところにお邪魔してすみません」
重ねて妙だ。

この幻覚とは会話ができる。まるで本人がこの場にいるかのようだ。

更には砂糖とクリープと思しき物品を受け取ることまで可能とは、最近の幻覚や蜃気楼は高性能である。

「いえ、決して邪魔ということではなくてですね。」

そのお、差し支えなければ、どこからご高覧頂いていたのか教えてもらえないでしょうか?」

「ふむ。椎名の声で椎名が絶対歌わないシリーズ、と左京君が言っ歌い出したあたりでしょうか」

「ほぼ最初からじゃないですか……」

「ああ、間違えました。椎名も僕が気づいた事に気づいていた、ってあたりでしたね」

「最初すらぶつちぎってるんですがそれは」

「ふふ」

流石にこのあたりで、現実逃避はやめた。

見た感じ怒ってもなさそうだし、何事もなかったかのように流すの

が吉だろう。

ただ怒ってる雰囲気はないが——その無言の笑顔が逆に怖いんだけど！

あまりの事態に僕が言葉に詰まっていると、そこへ新たに高らかな笑い声が投入される。

——そう、空気読めない奴筆頭、東風谷早苗その人である。

「ふふっ、うふふ。あーはっはっは！ 想像以上に夢月さんの芸がベストチョイスでした！ まさかご本人がいる前で、あんな声真似の芸を披露してくれるなんて!! あはっ！」

「こ、東風谷！ お前…まさか気づいててあんな誘導を!? 謀られたか！」

「人のせいにしないでくれますか？ 夢月さんが勝手にやったんですよ」

「つぎっけん！ エア友達品評会でこの特技を話してたから画策したんだろっ!? てか、予想とか想像とか語るに落ちてんだよ！」

「朝に私と一之瀬さんをペアにすべく画策した夢月さんには言われたくないですね。」

それに、何でしたっけ？ 真のフィクサーがどうか」

「ああああっ！ それ…は、あの、ちよつと樂をしようか……」

ここぞとばかりにゲス顔で嫌らしい笑みを浮かべながら、僕を煽ってくる東風谷。

まさか昨日や朝のアレらを聞いてたり気づかっていたとは……。

「あれあれえ？ その顔はあく？ もしかしてあれだけ何度も顔に出してたのに、私かなあんにも気づいてないとも思ってたんですねえ？」

「うっ…ぐ。いや…あ、あれは、その…アレだ」

「ほう？ アレとは？」

ヤバイ。

普段ならともかく、思考の許容量を超えかけている今は支えきれない。

この椎名で手一杯と言う時に……！

クソが。昨日はなんかわからん事であんなにあっさり固まった癖に、心配事が減った途端にこれかよ。

いやそれどころじゃない。なんとか言葉を絞り出さないと押し切られる。

お世辞でもいいから、なんとかひねり出せ僕！

「ご、誤解なんだ。

突発的に…綺麗な東風谷が見たくなってるな。一之瀬なら東風谷をより輝かせる事ができると…そう！ サプライズってヤツだ！」

「へえ。でもそれだと、まるで普段の私が綺麗じゃないみたいない方ですね？」

「そ、そんな事があるわけが……。東風谷は普段から、び…び」

「び？ なんですか？」

「美…少、女だと…わかって、いるさ」

ぐう。屈辱すぎる。

外側が美少女なのは認めるが、こんな性格破綻者をそう称したくない。

「24点。

詰まりながらじゃ、私が言わせてるみたいじゃないですか」

「言わせてんだろぅが!!」

しまった。つい反射的に。

「確固たる事実を前に嘆かわしいことです。

まあ、今日のところはこれくらいで椎名さんへパスしておきましょうか。

——そっちの方が夢月さんは嫌でしょうから」

馬鹿な。

僕が…この僕が踊らされている…だと!?

本題をズラされていたのはわかっていただけなのに！

コイツは感情と能力の波がありすぎて、本当に対策が難しい。

僕が呆然となっていると、その間にまだ切り込み方を整えていないというのに、金田は金田で早々に椎名への切り口を作っていた。

各所で発生する問題に対応が間に合わない。それでも今は動くし

かない。

「言い合ってる場合ですか?! し、椎名さん、今のは」

「大丈夫です。怒ってませんから………金田君と……東風谷さんに
は」

「ちよ、最後に不穏な眩きが聞こえたんだけど!? 僕は!?!」

「月のない晩には気をつけた方がいいですよ」

「怖っ! 椎名の雰囲気とその台詞はマジで冗談じゃないから!」

………すいませんでした。もうネタにしないから許して……許して」

「ふふ。冗談ですよ。次からは気をつけてくださいね」

次からとは?

もしかしてもう一回やってもいいけど、椎名に見つからないように
すれば許容してくれ………はい、調子に乗りました。すいません。

全てを見透かされているように感じた椎名の微笑。

それを見てしまった僕は巫山戯ることもできず、チキった。

「うふっ。これは嘘ですよ夢月さん♪ 月のない晩には夜討ちされる
かもしれないですね? 私からも」

「はいはい。東風谷さんもその辺で許してあげましょうね。左京君と
はお友達同士ですし、東風谷さんももうコテンパンにしてるんですか
ら、そろそろ許してあげないと。」

でないと後で気まづくなりますよ?」

「うっ、はい」

「椎名……!」

しかし、失言しても失敗しても、東風谷が尻馬に乗ってきてても、椎
名は真に寛大で温厚な態度を崩さない。

快く許してくれるだけでなく、東風谷まで宥めてくれるなんて!
どこぞの緑のとは大違いである。

Cクラスきつてのイロモノとか思ってたすまん。

だから――。

「ありがとう」

「………いえいえ。今度なにか埋め合わせしていただけるなら、これく
らい普通に許しますよ」

僕もつい油断したのだろう。

「おおっ！ 僕にできることならなんでも言ってくれ！ それくらいお安い御用だ！」

「え？ 今、なんでもって、言いましたよね？」

「あ……はい。言い……ました」

………もしかして僕の今日一番の失言は、これだったんじゃないかなだろうか？

そう思えば思うほど、背筋を伝う汗と嫌な予感が膨れ上がっている。

椎名ならそこまで無茶振りとかしないとは思えど、何をされるかわからないという一点で怖さがあるのだ。あまり彼女を知らないだけに……。

椎名の笑顔に加え、憐れむかのような東風谷と金田の視線が痛い。いやでも、東風谷にはそんな目で見られる筋合いないから。むしろコイツが元凶だから。

なにシレつと手のひら返してんだよコイツ。

「はあくあ。夢月さん、油断しすぎですよ」

挙げ句、この台詞を勝ち誇った笑顔で放つ東風谷を浄化したいと思うのは、当然の理だろう。

覚えているよ。クソ緑が……！

ともあれ、結局この日、僕は椎名に借りを作った。

それも僕の借りランキングで一躍2位に躍り出るほどのものを。

当然、その場で返させてくれるわけもなく。

まだその相手が、椎名だっただけマシ——なんて思えるわけない
だろ。

笑顔の椎名と改めて別れ、僕は茫漠たる不安と敗北感を抱えて帰路
につくのだった。

P、神崎隆二

チカラを持っていながら、それを使わないのは愚か者……だと本気で思っているが、チカラの使い方がおかしい存在は一体なんなのだろう？

それに対し、俺はかつてないほどの憤りと困惑を抱いていた。

無人島2日目、四方と左京が体調を崩した。

というか筋肉痛らしいのだが、満足に動けない二人を見て、一之瀬はこの日のスポット巡りを肩代わりすることにしたようだ。そして早朝に各クラスの偵察に行つて地理をある程度把握していた俺も彼女に頼まれ、同行することになった。

そこまではいい。

東風谷の機動力が予想以上だったのでキツさはあったが、普段接触がなく、滅多に口を開かず「笑わない」東風谷を観察する機会は貴重だ。

それになにより、この面子の中では同程度の運動能力である一之瀬とは隣で走る事になり、ゆつくりではないが彼女の暴れまわる母性の塊をさり気なく盗み見ることもできた。

また以前左京が引き出した一之瀬の可能性も、いまだ脳裏に焼き付いている。2つを組み合わせることで、寮に戻った暁には更に色々と捗ることだろう。

触発されて俺の股間まで暴れだしたらことだったが、運動量の負担とそうなったら社会的に終わると判断する理性、普通に走っている柴田の存在がなんとか『ソレ』を押し留めてくれた。

まったく一之瀬の兵器にも困ったものである。夕方にも巡るなら、見ないよう対策しておかないと、視線が吸い寄せられて変態道一直線ではないか。

考え事をしていたせいで危うく木に激突しそうにもなったが、素材

はそこそこ集められたため、本当にぶつかっていても悔いは……少ししかなかった。

問題は休憩中に発覚した。

尤も、発覚前から東風谷以外からやけに見られているとは思っていた。

思えば、昨日の夕食時や月見で左京が言いたい放題している時にも、共に参加したクラスメイトからの視線を感じることはあった。

しかし、この時に至っても理由がわからず、少数で発言しやすい場であることと気を紛らわせるくらいにはなるかという発想で、同行者達へ向かって疑問を口に出してみたのだ。東風谷は相変わらず我関せずといった態度だったが。

「ところで少々聞きたいのだが。

昨日から何故かみんなに見られているんだが、俺に何かおかしいところがあるのか?」

「あー。えつとね。昨日左京君から聞いてたんだけど……」

「うん?。なんでそこで左京が出てくる?」

安藤が話し出したが、唐突に出てきた名前に疑問が増えて聞き返してしまった。

一方、東風谷以外の3人は顔を見合わせ、頷き合うと今度は柴田が口を開いた。

「まどろっこしいから、もう直球で聞くぞ?」

「柴田君……うん、お願い」

「本当だったら、大変だもんね」

なんだ? 猛烈に嫌な予感がする。

ただの雑談だと思っていたら、やけにシリアスな雰囲気漂って……。

「神崎」

「あ、ああ」

「——お前が左京を操っている真のフィクサーって本当か?」

「……………は?」

冗談かと思つて柴田を見返すが、半信半疑ながらも真剣な表情だ。そしてそれは安藤や一之瀬も。

「昨日の探索中に左京が、お前の意向で動いている、とか言つてな」「自分はただの役者だから、何か質問があるなら脚本家の神崎君に聞いてくれとも言つてたよ」

「でも左京君が100%その…指示で動いてるつてのも、違和感しかないんだよね。だからもしそうなら、どこまでが指示なのか」

「ま、待て待てええええっ!! 何だそれは!? 全て初耳だぞ! それがさも真実かのように聞かれても、俺にはわけがわからん!!」

本当に何がなんだかわからない。

俺は知らないうちに平行世界や異次元にでも転移していたのか？

「うゝん。左京君は、神崎君は謀略を担当してるから、フィクサーか聞かれても警戒して必ず否定するつて言つてたけど……これはどっちなんだろう?」

「左京ううう!! あの男、周到すぎるだろう!」

「あいつ、本当の事しか言わないけど、何気にもっともらしくホラを吹くのも上手いからなあ」

「でも普段冷静な神崎君がこの反応。」

……これは、神崎君もついに左京君の被害者同盟入りかなあ。にやはは……はあ」

左京!! あの男……! 謀略家はどっちだ!! 先手と伏兵の波状攻撃をクラスメイトに仕掛けるんじゃない! 必ず否定するのは事実ではないからだろうが! あと一之瀬は勝手に俺を妙な同盟に入れないでくれ!

しかし探索で一緒だった柴田と安藤はまだしも、接した時間が短いはずの一之瀬にすら半ば信じさせていた手腕は凄まじいが、どういう意図で——もしかして!?

——質問されると面倒くさいよなあ。

その時に脳裏をよぎったのは、一見関係ない薪拾いの時に聞いた左京の愚痴。

かつてないほどの憤りと困惑が、逆に俺に冷静さを取り戻させ、

徐々に事実へと導いていく。

船での僅かなやり取り。同学年の前に堂々と立ち言いたい放題の姿。星之宮先生を言いくるめ、それでいて東風谷や一之瀬に捕まる立ち回り。薪拾い以降に激増した俺への視線と質問者。月見でのいくつかの想定外。

まさかとは思うが……。左京は質問されるのが面倒というだけの理由で、俺を隠れ蓑にして矢面に立たせたのでは？

そう考えれば考えるほど、そうとしか思えなくなっていく。

その為に持てる知識を駆使して情報戦で圧倒して隠蔽し、ギリギリまで俺の対処を遅らせて噂を広め、発覚しても完全に拭い去る頃には特別試験が終わっている計算ではなからうか？ また俺が対処しなければ黒幕という間違った印象が定着してしまうので、対処せざるを得ない二段構え。

試験終了まで左京は好きに過ごし、俺を含めた何人かにさり気なく面倒を丸投げしていく算段だろう。

いつかは俺が言われたが、見事な策略だ。称賛に値する。俺自身が大変に面倒という部分を除けばだが。

「チカラを持つていながら、その使い道が方向音痴すぎるだろうがっ!!!」

俺がついそう叫んでしまったのは無理もないだろう。一之瀬達は苦笑しているが、これは叫びたい。

しかし本人がいない場で言ってもどうしようもないのでなんとか衝動を抑え、俺は思い至った左京の策略を一之瀬達へ説明するのだった。

そして、左京に野営知識の質問に行った者達を中心として、この情報は既にクラス内殆どに広まっている事実を知ることになる。

クラスメイト達も、そんなにすぐ信じるな！ 一之瀬という前例のせいかもしれないが、あまりにチョロすぎるだろう!!!

何気にクラスの結束力が『俺の』仇になる場面をまざまざと突きつけられ、このままでいいのかと小さな疑問が生まれた瞬間だった。

これを知ってしまったから、見られている事が異様に気になってしまふ。

改めて観察すると、目立つ一之瀬や東風谷と同等以上にクラスメイトから見られているのだ。

「予想はできていたがなっ！」

らしくもなく毒づきながら、とんでもなく迷惑な策略を仕掛けてくれた左京を問い詰めるべく、拠点に戻ってすぐに左京を探したが案の定いない。

「四方が」付けたはぐれメタルという異名は伊達ではない。

普段から接触しようと思っても大抵いない男なのだ。

誰に：左京に最も近い四方や柴田に聞いてすら、どこに行つたのか見当も付かない事は珍しくない。東風谷に至っては、話しかけるなオーラが強すぎて話しかける事自体が難しく、意を決して話しかけても無視が関の山である。

更には、左京が試験中で無人島だからと大人しくしている性格ではないのは、初日にやらかした数々の所業によって明らかになっている。

共に島を巡つた一之瀬達はこれから休憩を経て、ハンモックを設置したり暑さに備えて打ち水をしたりといった拠点整備に精を出すようだが、俺は気が急いでしかたない。

だから疲れている体に鞭打って、左京を探し、ついでにクラスメイト達に広められた噂の火消しに奔走した。

この時、もつと冷静になつていれば、東風谷と話していた四方の近くで待つか、彼らに伝言を残すかするのが最善だと気づいたはずだ。数少ない左京を捕える手段は、彼ら左京の友人が握っている事を知っていたのだから。

うちのBクラスは、一部を除き一之瀬を中心に非常に良く纏まっっているといえよう。

入学直後から一之瀬を中心としたクラス運営が形作られ、5月に学

級委員会の発足で役割を決めたのが決定打になった。

おそらく学年で最も結束力あるクラスだろう。

今回の試験でも、最初はアレがあつて混乱したものの、探索や拠点整備などの部門を各人に割り当て、責任者がそれぞれ連携しつつ指揮するシステムをすぐに構築できた。また朝夕の点呼前に、責任者を集めたミーティングをすることで問題解決や生活改善をしている。

これをあの初日にある程度、2日目に確立した一之瀬の手腕は見事なものだ。

学級委員会の役職持ちをスライドして、網倉や及ばずながら俺も手伝ったとはいえ、好スタートを切れたのは間違いなく一之瀬の功績が大きいと確信している。

方針は左京が強引に引つ張っていた面もあるが、間違いなく一之瀬こそがうちのリーダーだろう。

まだ問題の一部と言うべきである左京や東風谷といった者達もいるが、Aクラスのように対立しているわけではない。それに彼らは騒動や問題を起こしても、結果的になんだかんだで良い方向に収めてしまふのだ。

俺は勿論、一之瀬も関与どころか知ることさえ事後がほとんどであるが、彼らはただ状況をマイナスにするような真似はしない。誰かがハマしてもフォローまで自分達でこなしてしまう上に、後始末に奔走する四方の説得もあつて、結果に納得させられてしまふ。

これはDクラスで目撃した騒動が好例だろう。

あの時の左京は、女子の友人を守り抜き、被害を最小限に抑えた上で、自身でほぼ全てのマイナスを持つていつて精算した。

関係ないがあの時、同じ事がどれだけの者に可能だろう？ と思つたものだ。

あれはクラスメイトとしてはともかく、同じ男として一目置かざるを得ない出来事だった。

ともかく、今現在迷惑をかけられている俺にさえそういう印象があるのだから、他は推して知るべしだ。

その為、一之瀬や四方のフォローによって地盤を固め、謝罪の場を

笑いで満たしたことで確立していた左京の影響力は強固で、あの場面を見ていない者でも左京を信じているクラスメイトは多い。そこへ左京自ら投入した俺の黒幕説。

普段苦手としている口や人付き合いを駆使して弁解に走ったが、今はなんとか半信半疑にするのが限界だった。

「何だどつ！ Cクラスに!？」

昼過ぎまでそうしてあちこちを周り、再び戻ってきた俺を迎えたのは、左京が一時現れ東風谷と共に呼びに来たCクラスの者を連れて、Cクラスの拠点へと向かったという情報だった。

朝に各クラスの偵察してきたが、あそこはバカンスといった感じの光景が広がっていて、左京が同学年全員にブチまけた提案をあのカラスだけが実行したかのような印象がある。だから、龍園とのことがなくとも慎重に探ろうかと思っていたカラスだ。

更に金田のスパイ疑惑もあるし、流石にあそこに追いかけては行けない。

「早く面倒をかけてくれる！」

焦燥のあまり、一人残って俺に教えてくれた四方について当たってしまった。

「まあまあ神崎。落ち着けよ。東風谷もついて行ってるし、どうせ夕方の方のスポット巡りまでには帰ってくるさ」

「これが落ち着いていられるか！ そうして俺がまた出発したところで、また左京の蠢動を許せば！」

「そんな無駄なことを左京はしないって。万一、するようなら今度は俺が止めるから、少しは落ち着いて休め。夕方に差し障りが出るぞ。」

「というか神崎。蠢動って……」

四方の呆れた口調に、頭に血が上りすぎていることを自覚する。

そして、穏やかな口調で宥められて僅かに冷静さが戻った。

確かに、この状態では16時からのスポット巡りが大変になる。

俺はなんとか焦燥感に囚われそうになる自分を抑えて、休息するこ

とにした。

結局、左京が戻ってきたのは俺の出発直前である。

一緒に出向いたという東風谷は15時頃に戻ってきたが、流石に話しかけても無視される事がわかりきっている為に情報源にはならない。四方や柴田もいなかったので、代わりに聞いてもらうこともできない。

俺は焦燥に似たモヤモヤを抱えながら、本日2度目の無人島走破に挑むのだった。

「やあ神崎。お疲れ」

「……やあ……だど？」

そしてこの後、三度帰ってきてすぐにようやく居た左京の元へ向かうと、かけられた言葉がこれだ。

よくもぬけぬけと言えるものだ。思わず言葉を失ってしまった。なぜなら、俺が今日1日駆け回った原因の大半が、言うに事欠いて悪びれもせずに「やあ」ときたのだ。

……この後のミーティングでは覚えていろよ。

「他にになにかあるかな？」

2日目最後のミーティングが終わり、一之瀬が全員の意見を聞く。これは学級委員会でのお決まりの流れではあるが、いつもなら誰も意見を言わない。せいぜい遊びに行こう程度だ。無人島の夜だからそれも今はないが。

だが、今日はいつもではない。

俺の黒幕説について、みんなの前で左京から説明してもらわないと気がすまない。

「じゃあ丁度良い機会だから僕から一つ、提案していいか？」

「さきよ」

「左京君？ またなにかとんでも話とかするつもり？」

「……僕の印象がなにかおかしい。」

それに一之瀬の当たりがなんか強くな？ 一之瀬には迷惑とかあまりかけてないつもりなんだが」

「昨日のあれでそう言える左京君は大物だよ」

「……にやはは」

やっと問い詰めることができると口を開くが、左京に先んじられた。

ミーティング後の時間をもらい、左京が強制参加するよう一之瀬達に根回ししていた俺を嘲笑うかのようだ。あまりにも自分を見れていない左京に呆れている網倉。一之瀬でさえ苦笑してるじゃないか。

というか迷惑はまだしも、周囲を振り回すのがデフォルトの男がなにを言う。片腹痛いわ。

「…………ガチャの立ち上げ時にいたから、一之瀬は僕の言うことに察しはついてるかもしれないが、とりあえず聞いて欲しい。それなりに重要な事で一之瀬とは別方向の対策なはずだから、実にはなると思う」

「ガチャ？ 対策？ なんだろう？」

「あれに神社の宣伝以外の意味があつたんですか夢月さん？」

「予行演習つっただら東風谷。ああ言つたんだから、一之瀬や椎名はわかってるだろうに、お前というやつは……はあくやれやれ」

「…………え？ ちょ、私わかつてn」

あの東風谷を煽れる精神は羨ましいが、彼女はその言葉に明らかにムツとしていた。

確かに端から見てもイラツとくる左京の態度に、一撃ならずとも入られてはくれないものかと東風谷に願ってしまった。そうすればスカツとすると思うのだが。主に俺が。

「ムツ！ 調子に乗ってますね。まだやられ足りないんですか？」

「ははは。平常ならあんなに簡単にいかせるものか。さっきは椎名のおかげでできた隙だったと心するんだな」

「……また何かあるのかあ。いつものように流されてるけど、今度はなにを言い出すんだろう…ははは」

どうやら東風谷と話しつつ、何事もなかったかのように話を進めるようだ。

それはそれとして、いつかのごとく一之瀬が流されて溺れている。

振り回される一之瀬は、やはり最高に可愛い。

逃がすつもりはないが、一之瀬の可愛さに免じて今のところは泳がせてもいい気分になった。

俺の風評被害以上に衝撃的な話題など、昨日のアレくらいなものだ。まだあるとは思えな……。

「それは——リストラ：退学対策についてだ」

まだあった。

「！・！・！」

「それが関係するんですか？」

「やはりそれか。試験をシカトしようとか、月見の時の話とか考えると、そこに行き着くもんな」

「うん。四方の言う通り、この学校のブラックさを考えるに、リストラに相当する退学を強いる何かもある可能性は高いと言わざるを得ない。その対策に、一之瀬はクラス貯金という対策を打ち出していたが、あれだけでは不十分な気がしてる」

「ちよちよちよつと！ 不十分って何かそう考える根拠があるんですか!？」

東風谷と四方、それに姫野だけがこの場では動揺していない。

先程までのミーティングでは退屈そうにすら見えていた3人が、真剣な表情を浮かべている。

改めてこいつら…特に左京は視点が全く違うと実感する。優秀さや成績などではないモノで見ている。姫野は少し意外だが、授業のグループ活動でよく左京や東風谷と接していた為、影響されたのか？

一方、左京とそれほどの付き合いがない白波は慌てて根拠を聞いていた。しかし、これが大多数の代弁のようなものだろう。

「根拠か。」

今のところ、思いついているのはAクラスへの移動権の額と、洗脳紛いな各試験での説明だ」

「2000万PPPが？」

「い、いや！ それより洗脳!？」

「まあ言ってみれば、あれはわざわざ大量の裏金使って『異動』可能な

事を周知してるのと、人生経験が少ない高校生に人含めた色々を裏切るように誘導してるわけだから、ブラッくな組織なのは確定なんだよ。それもかなり性質が悪い部類のな」

「そうとしか思えない情報の出し方だったもんなあ」

特別試験に勝つことを考えているのがほとんどの中、こんな考えがどこから来る？

ただ楽がしたいから勝利を諦め、安全を重視した発言だと思っただ。月見での事があってもだ。

唯一同意した四方は、あれからも考えることを止めなかった結果、左京の考えに追いついたのだろうか。

「一之瀬の案を否定するわけじゃないけど、そんな学校が枠内で対策するくらいで防げる程度のぬるいモノを仕掛けてくるとは思えない。PPの額なら最低でも億単位は欲しい。そしてクラス貯金だけでは、3年満額以上で貯めたとしてもそこまでは到達できない。

なら、どうする？」

一之瀬もクラス貯金を言い出した時点では……いや、今に至っても、ここまでは考えていなかっただろう。

もつと漠然とした不安から何か対策を、というのが発端だったはずだ。少なくとも俺はどうする？ と聞かれても何も答えられない。

「僕の大雑把な対策はこれだ。

まず起業して『受け皿』を作る。そして自分達でもできるだけ円を稼ぎ：最低限の経済活動をしながら、息子や娘がこの学校にいる権力者や金持ちに接触。心配する親心を持つ者なら、子供の為に何らかの働きかけ：金やそれ以外の支援をしたいと思うはずだ。内情を知れば、という条件付きだがな」

そして学校の外を持つてくる発想。

クラス間の競争すら気にならず、本気で実現させるという意思。いつも眠そうな四方が。いつもダウンナーな姫野が。いつもつまらなそうな東風谷まで。

左京に乗せられたように、言葉はなくとも……いつになく感情を表に出している。

かくいう俺も、一之瀬や他のクラスメイトも、言葉が出せないまま。なんでもない事を言うように、とんでも話を口にする奇人に乗せられているのかもしれない。

でなければ、興奮している自分に説明がつかない。

それにしても、まさかこんな生徒がいるとは学校も想定外だろう。

「ここで重要なのは、子供を支援したいとは思っても、簡単にはできないこの学校の閉鎖的な制度だ。

だが、今なら学校敷地内に生徒が会社を作り、生徒が所属・運営する場所がある。しかも支援しやすい『とある分野』に特化した会社だぞ？ 情報さえ渡せば、外の味方を増やせる可能性が非常に高い」とある分野がどこを指すのかはわからないが、口ぶりから既にある程度まで実例などを揃え、段取りを整えているのだろう。左京は確信を滲ませている。

「さて、説明も適当にしてみんなが理解したところでやっとな提案だ」

左京はそこで不敵に笑うと、みんなに問いかけてきた。

「特に実家から支援を貰えそうな奴。

——この話に1枚噛まないか？」

Dクラスで龍園に要求を吞ませた時のように。

一之瀬へ生徒会に入る方法を告げた時のように。

なんでもないように、笑いながらとんでもない提案を出してきた。

その後の左京は「返事はすぐにできない：してもどうしようもないし、この話は頭の隅にでも置いといて」と、通常運転に戻っていた……ような気がする。

俺は、柴田に声をかけられるまで高ぶった精神のまま考え事に没頭していたようで、脳内一之瀬フォルダ以外はぼんやりとしか覚えていないのだ。

見れば、いつの間にか左京はいなくなっており、四方達いつもの単独行動組もおらず、残った者達で何事か話していたようだ。我に返つ

たとはいえいまだ興奮状態だった俺も、いつになく誰かと話したくない柴田達に混ざっていた。

つまり、俺が黒幕説を問いただす件を思い出したのは、いい加減興奮も収まった就寝直前である。

……………逃げ切られた。

左京に逃げ切った意識はないかもしれない。

ただ、発想に話の組み方。また振り回されいようにやられてしまった敗北感は、不思議と不愉快ではなくなっていた。

憤りと困惑はまだ胸で燃えているので、リベンジを諦めるつもりはないが。

いい機会なので、2日目夜のミーティングで一之瀬達へ僕の考えた対策を主張しておいた。

そしたら、それから神崎になんか睨まれている。その前から睨まれてた気もするが、ともかく睨まれているのだ。

思い当たることは……これまで彼のギャグをスルーしてきたことに対してか、解説役を適当にぶん投げたことか、はたまたBクラスへ最大限貢献できる策を提案しなかったことか。

いずれにせよ、神崎だけならまだ対抗できるので、我慢できなくなれば直接言いに来ればいい。

完全勝利の策に関しては、四方や一之瀬あたりは気づいて却下するかもだし、僕自身のデメリットが大きいので譲る気もないが、なにより神崎が勝手にその手を打つことはできないので安心できる。

あとあの場で主張した以外にも、いくつか松雄や青娥さんと仕組んでいたりする。

バイト先を通して1度だけなら大金でもマネーロンダリングっぽい裏技で：円をPPに変換でき、その逆は常に可能にするなど、とある用件のついでにいくつかだ。

当然、種銭になるPPもなるべく稼いでおくつもりだ。

ちなみに1度だけなのは、十中八九学校に対策されるからだ。

そうでなくとも、意外（でもないか？）と裏技に弱いらしい堀北会長が引退したら使えなくなる策も増えるだろう、と鬼龍院先輩から助言をもらっている。

だから冬までに1度の変換の機会をできるだけ活用すべく、すでに僕の停学直前に鬼龍院先輩と、つい先日高円寺に、松雄や青娥さんを經由して彼女らの両親には打診している。

あとは綾小路などのブルジョワ階級出身と思しき連中にも打診して、学校へ流し込む総額を可能な限り増やすだけである。

これ以外の計画も全て上手くいけば、学校の経営権にすら干渉でき

るようになるかもしれない。僕のものではないが、金と権力を用いて政府が口を出す間もなく斬り込むつもりだ。

そうだったら、絶対にブラック系のアレコレは全て廃止してやる。一之瀬や葛城を説得する状況や言葉も、その時までには準備しておかなければ。

後から考えると、このような先のことばかりに目を向けすぎて、今を疎かにした。

それが僕が犯した失策の最大の理由だろう。

また椎名の件のような思わぬ事態はありつつも、トントン拍子に進んでいた油断もあつたのかもしれない。

要するに僕は――。

――3日目の朝、一之瀬に朝勃ちを目撃された。
終わった。

無人島生活もそろそろ折り返しにもなると、クラスメイトの大体の生活リズムがわかってくる

夜にやることなく早寝早起きをほぼ強制されるので普段とはまた違うのだろうが、そんな中でも一之瀬と東風谷は特に早起きだ。

二人は5時には目を覚まして動き出していた。

万一の備えの為に、火の番名目で消えている焚き火跡付近で寝起きしていた僕は、半ば寝ぼけたまま顔を洗ったりする二人を見るとはなしに見ていた。

まだ薄暗い時間ではあつたが、珍しい組み合わせだとぼんやり思つたのを覚えている。

なにせこの後に僕は、思わず体を起こすという失策を犯してしまつていたので。

そう。下半身の状態を考えずに、目立つ場所で一之瀬の注意を引く

という失策を。

失策の直前の記憶は否応なく残る。寮の自室に戻ったら、ここを起点に転げ回る事になるだろう。

ともかくこの時の僕は反射的に半身を起こして、二人…一之瀬の方をぼんやり見ていたのだ。

そして前に聞いていた日課とやらをしに行くのか東風谷が一之瀬と一言交わしていなくなると、一之瀬は当然のように目が合ってしまった僕へ向かってきた。

しかし繰り返すが間が悪いことに僕はブーツとしていて、自分の状態に気づいていなかった。

「おはよ左京君。早いね。もしかして起こしちゃ……あ」

みんなが寝ているからか声を潜めて挨拶してくる一之瀬。

だが不自然に言葉を途切れさせる彼女を見て、寝ぼけながらも嫌な予感はしていたのだ。

ここで完全に覚醒していればまだ被害は少なかつただろうに、あるうことか僕は『立ち上がって』普通に挨拶を返してしまった。

「ぴ」

「はよ。一之瀬こそ早いな。んあ、ふあゝあ……僕も顔洗ってくるわ」

いつになく目線を下に集めて絶句している一之瀬を気にせず、その時の僕は寝起きにしては最高な対応だったと考えていた事も救いようがない。

むしろ戦闘態勢のアレを見せつけるような——女子高生には最低の対応を、よりにもよって一之瀬にするあたり、単なる油断という言葉では片付けられない。

顔を洗って目が覚め、枕代わりになっていたタオルが自分の最大化したチ○コにぶら下がっている状態に気づいた僕が、orzしたのは言うまでもないだろう。

自分がそうなったことで一之瀬から視線を送られたのはわかっていたが、もの凄く気まずく感じて、僕は収まるまで水場近くで素数を数えていた。

でもまあ、まだ相手が一之瀬で、僕が見られた立場だったのは不幸中の幸いだ。

これでもし一之瀬ヘラツキースケベ的な事をしていたら、流石に不幸中の不幸な結末になっていたところ。だから気づいた直後は、やつちまったと：全て終わったとすら思ったが、一之瀬がどうも見逃してくれるっぼいと思ったあたりで胸をなでおろした。

あれから不用意に近づいて来なくなり、露骨に目を逸らされたりはしたが、僕を吊るし上げる気配もなく、煽りにも来ない聖人ムーブは健在である。

考えてみると、一之瀬のスペックなら彼氏の一人や二人はいても不思議ではないし、それなら朝勃ちも目撃する機会があつて慣れているのかもしれない。

また男の生理現象に理解があり、一之瀬に欲情していたわけではないと冷静に判断できていれば、あの態度も納得できる。

それならそれで、普段のウブさや彼氏本体が影も形も見えない点に疑問が残るが、僕とは付き合いが浅いからわからない、などの屁理屈はひねり出せるのでそこは目を逸らすのである。

ともあれ、もしこれが東風谷だったら、ここぞとばかりに煽り罵り、とにかくマウントを取りに来ていたのは想像に難くない。

いやアイツの場合、容姿の割には彼氏ができたこともなさそうなくらい処女丸出しだから、逆上してタマを取りに来る可能性もある。命か文字通りかは判断付かないが、あいつの攻撃力で子孫撲滅拳でも放たれようものなら、僕は夢月ちゃんになつてしまう。使つてもないのに、流石にそれは嫌だ。

せめて野郎共なら不快には思つても「うん：まあ、しかたないよな」とか水に流しあえるから問題なかった。だが、普通の女子なら東風谷寄りの対応かカースト最下層に叩き落とされていたかもだし、そう考えると一之瀬はかろうじてマシな相手だったと言えなくもない。

つまり僕にとって一之瀬は、女子以上男子以下の目撃者ということになり、九死に一生を得たのであるQED。いやっほう（錯乱）！

……よし。そういう事にして忘れよう。

朝のミーティングで、今日からスポット巡りは最低1日1回に決まった。

昨日、一之瀬と神崎が代打したことでキツさがわかったのか、僕と四方がダウンしたからか、一之瀬と東風谷が緩和を言い出したのだ。早朝と夕方の2回制という案もあったので、これには走破班一同ホツとしたに違いない。

ただ、それ自体は助かっているのだが、相変わらず神崎が見てくる事に加え、一之瀬の不自然な態度を不審に思った一之瀬シンパどもが僕に目をつけ始めている。

決定打になるようなモノはないのだが、僕を見て顔を赤らめたり、少し離れた場所でウロウロされれば、何かあったと宣伝しているようなものだ。見ようによつては、青春っぽい理由にも見えなくはないのがアレすぎる。

……一之瀬って、こういった面ではポンコツなのでは？ ボクは訝しんだ。

訝しんでも、これではなにも知らない奴等に勘違いされるのはどうしようもなかっただろう。

当然の事ながら、僕と一之瀬は勘違いしていないが、かといってチ○コ勃つてるところを見られ見たからです、とみんなに言うわけにもいかない。

だから、今日はいち早く出発したかった。

一之瀬から物理的に離れればお互い落ち着けるし、時間が経てばシンパども含めて冷静になれるからだ。

問題はその白波を筆頭にした一之瀬シンパに、柴田と安藤が混ざっていたことである。

真実を探求するその熱意は凄まじく、また神崎が裏で煽りやがった事もあって、執拗に何があったのかと聞かれ、しかし「何もない」と答え続けるしかなくて出発が遅れに遅れた。

神崎の野郎、どういいうつもりだ。いつもなら抑えに回ってるだろうに、なにもしていない僕にいやに攻撃的だ。神崎は完全な一之瀬シンプアというわけでもなさそうなんだが……。

一応、これは長引きそうだと判明した時点で、東風谷と四方には今日のスポット巡りはお前らだけで行ってくれとは言った。

だが彼らは出発するわけでも、柴田達を止めるでもなく、静観の構えを崩さない。

四方はともかく、東風谷がハンターのような獲物を探す目になっていたことを考えると、僕を煽れる材料を探っていたのかもしれない。Bクラス、ろくな奴が居ねえ。そう思ってしまったてもしかたのないことであろう。

ともかくそういうわけで、前日8時だった出発時刻は11時にずれ込んだ。

しかも柴田と安藤のターゲットを一之瀬に移した際に抜け出したので、連れは四方と東風谷だけである。

ただ朝っぱらから面倒の連続だったが、それでも悪いことばかりでもない。

スポット巡りを、気心が知れている面子でゆっくり散歩ペースで廻れるのは気持ち良かった。

時に実っている果物を食べ、時に「綾小路打倒計画I」の相談をし、時に四方から問い詰められ、時に東風谷の勧誘話を聞いたり、開放感のある時間だ。

これは柴田や一之瀬や安藤など元気な奴がいなかったのが一因だろう。

基本陰の気質な僕達は、ああした明るい雰囲気は苦手だ。かといって沈んでるのも苦手だが、なんか陽キャからは温かいを通り越して焼き尽くされそうな雰囲気を感じるのである。

僕は女子、東風谷は男子に、四方は両方に薄く。そう感じている面があった。

ともあれ、東風谷の要望で島西部を流れる川を掠めるルートでゆつくり進んでいると、またしても幸運が僕達……特に東風谷に舞い降りた。

てか、コイツに舞い降りすぎじゃね？ 神様がなんかしてるのか？

「早苗さん！ 左京君！ 四方君！」

ともかく幸運の正体は佐倉である。

男がやればキモツ！ と言われるだろうあからさまに偶然の出会いを誘発させるルート構築だが、東風谷の発案なので問題ない。かなりの部分佐倉任せではあっても、これなら気づいてくれさえすれば問題少なく佐倉と会える可能性が高かった。

何度か佐倉と会えて当初の心配が落ち着いてきた東風谷も嬉しうでなによりだ。

しかし今日に限っては――。

「佐倉っ!! おお、我が友！ 天文部の癒やし枠よ！ 会いたかったぞ!!」

僕の方が嬉しいに決まっている。

東風谷を出し抜いて真っ先に佐倉に駆け寄った。

勿論、東風谷を振り返って「ふふん♪」と鼻で笑い、無駄な屈伸煽りも忘れない。きやつ顔が悔しげに歪むのを見るのもまた心が洗われる気分である。

嗚呼、疲れが溶けていくようだ。

「い、癒やし枠!」

「なにを驚く？ あのガチャ○ンとム○クが意外と……でもないか？

ともかくあいつらが毒舌コンビだということは、佐倉も知っているだろう？ それがこここのところ妙に突っかかってくるもんだから、僕は癒やしを求めていたんだよ！」

「突っかかる?」

何故か驚いている佐倉に、どこぞの猫型ロボットにすぎりつく小学生の如く癒やしを求める。それを得る為ならば、僕は卑劣にチクることも辞さない。

荒んだ生活をしている時に、多量のマイナスイオンを放出している

と推定される佐倉のそばにいとやはり落ち着くのだ。故にやめられない、止まらない、手放せない。

僕が女子だったら、暑さを度外視してでも抱きついていたところだ。

「誰がガチ〇ピンとムツ〇ですか！」

あれは、勝ち越したまま逃げようとする夢月さんのせいですよ！」

「勝ち……？ 東風谷に？」

「いや、俺はあれじゃあ一之瀬と神崎が流石に大変そうだと言っただけで」

「僕がいつ東風谷と勝負して何勝何敗だというんだ。」

四方もだ。僕は一之瀬や神崎になにもしてないだろう。言いがかりはいい加減にしてくれ。

な？ 佐倉。最近こんな調子なんだよ」

「3勝3敗2分けですよ。ちなみに昨日まで私だけ2勝でした」

「なにもしてないってお前……。本気……で思っただら……。はあ」

ふつつつ。四方に東風谷、語るに落ちたり。

暗に突つかかっていると認めてしまったな。

これで佐倉がいる限り、一之瀬や神崎がどうかという愚痴？や、勧誘・煽りはし難くなった。

なぜなら、これはほとんど佐倉を話の外に置く内容だからだ。

佐倉の意外と寂しがり屋で内弁慶な性格上、軽く両方に触れて流そうとするだろう。そしてそれを四方も東風谷も綾小路も遮れない。

特にタイムリーな一之瀬の話題は胸にクルので、この展開を待っていた。

「ああそういう……。」

左京君。早苗さんとはもかく、四方君や周りを振り回すのも程々にね？ わ……わたしを頼ってくれるのは……その、嬉しいけど」

思惑通りの話の運びをほくそ笑んでいると、それすらも吹き飛ばす好条件を佐倉は提示してくれた。

当然、僕は厚かましさを自覚した上で、即座に先の約束を取り付ける。

「マジで!? じゃあ遠慮なく頼るよ!

四方達を言いくるめるから、島にいる間は毎日来てもいいか? 今
日みたいに昼頃に時間は固定するからさ」

「——っ! た、たよ……………う、ん…いいよ」

「いよっしやー!! 心の安定的にメツチャ助かる!

それに色々あったのに、許してくれたことも。佐倉。ありがとう」

「……………あ…あう」

佐倉は途切れ途切れながら承諾してくれた。

ボーツとして何か話そうとしていたようにも見えたが、聞いてない
こともなさそうなので流石は癒やし枠の面目躍如といったところだ
ろう。

正直、月見の場では周りに流されていて、後から避けられたりされ
たら絶対に落ち込んでいたと思う。内心かなりそれを心配していた
のだ。

だから会う約束も嬉しいが、それより普段通りに接してくれたこと
に対して僕は礼を言った。

「愛里さん、夢月さんをあまり甘やかさないでください。言いくるめ
られるまでもなく私も会いたいです。無理しなくてもいいですから
ね?」

「だ…大丈夫だよ。無理とかじゃなくて、友達とこんな風に過ごせる
機会なんて学校じゃあんまりないから——だから」

それにしても東風谷の余計な一言もスルーしてくれたし、頼みも聞
いてくれた。

借りも極大だが、相互で友達同士だと思っていた事がなにより嬉し
い。

四方もだろうが、特に僕や東風谷みたいな奴にとって信じられる友
達は最高の宝である。

「わたしもずっとこうしていたい——」

「愛里さん……………ほんつとうに良い娘!!! 大好きです!」

東風谷に完全同意である。ついでに女子同士だから抱きつけるの
が羨ましいまでである。

だから、こんな事を言ってくれる友達を裏切るようなことはあり得ないだろう。

僕は見守るかのような立ち位置にいた四方と視線を交わし、もしも助けになれることがあれば駆けつけることを改めて決意し合った。

「……………オレもいたんだけどな」

何気に佐倉と一緒に最初から居たのに、終始居ない子扱いだった綾小路が呟いたどこか悲しげな言葉は、当然のように風へと溶けて消えていった。

61、邪悪

「うぐおおお！ おもっ…重すぎる。アッコ出る…：圧死するう」
「失礼な。私の体重がそこまでなわけがないじゃないですか」

僕はとうもろこし畑で東風谷に潰されていた。

不服そうに言いながら、それでも僕の必死さを察知したのか片足だけは下ろしてくれたが、依然として僕は踏まれている。

それも体重移動を制御して、僕が立ち上がろうと力を入れた部分を抑える完璧さをもって…：！

「とうもろこしを10本近く抱えてるのはまだしも、全体重乗せたら軽くても重くなるわっ！ つーか両足下ろせや、クソ緑が！」

「ああ。それにしても、夢月さんを見下ろす事のなんといい気分なことでしょう！ だいたい転んだ背中が目の前にあった奇跡を、私が無駄にするわけじゃないじゃないですか」

「聞けよ！ なんでも奇跡にすりやいいってもんじゃないから！」

てか綾小路が横に居たんだから、そっちを蹴り転がしてやれ！」

「おいつー！」

「え？ 普通に嫌ですけど？ 蹴るのはともかく、踏み続けるのを綾なんとかにやるなんて絶対に嫌ですね」

「だからって僕を踏むな！」

「……」

「………綾小路……俺の方に来とけ。悪いことは言わないから」
クソ。本当にコイツはなんなんだよ。

どこでこんなに性格を終わらせてきたんだ。最初の頃はもつとこう、大人しめだっただろう。これじゃあ榎田といい勝負じゃないか。

ん？ 榎田といい勝負？ これはもしかや……。

「さつきから騒々しいですよ夢月さん。私みたいな美少女に踏まれて嬉しいでしょう？ ほら、もっと喜んでください」

「てめえ！ ふざけんなよ！！ 僕をド変態みたく言うんじゃない！」

「あらあらあら。ド変態な夢月さんには相応しい鳴き方があるでしょ

う。ブヒブヒって鳴いてくださいよ」

コイツ！

こんな性格破綻者のド畜生を世に放ってはいけない!! そんな使命感を感じる。

だから今この時、僕は本気になろう。

本気で叩き潰す。

「神に仕える巫女らしく星にでもなったらどうだ!? なんなら僕自ら、星座の一角に蹴り飛ばしてくれるわ!!!」

はっ! しまった。

あまりに巫山戯たことを言ってくるせいで、折角打開策が浮かんだのに、つい反射的に僕まで熱くなりすぎてしまった。

coolだ。coolにいこう。

その為に、まずは一度深呼吸をしよう。

そして反撃の狼煙を上げる事が勝利への道を作り上げると信じる。

氷の冷静さと炎の煽りを併せ持つてこそ、邪悪な存在に打ち勝つことが出来るのだ。

「ふうーっ。」

東風谷よ。今すぐ足をどければ、謝るだけで水に流してやる」

「……なんです急に」

「——お前を断罪する策を思いついた。そう言えば伝わるか?」

「断罪? 神であるこの私を? うふっ。身の程を知りませんねえ」

「神を自称する “先走り” はともかくだ。

これ以上狼藉を繰り返すなら、僕は全力をもってお前を倒す」

「あっはっはっは!! 貧弱な夢月さんにそれができると思っているのですか?」

「できるさ。あまり僕を舐めない方がいい」

「ふふっ。面白いですね。」

いいでしょう。やってみてください。夢月さんが屈服するまで、私は決して足をどけたりしません!」

東風谷、お前は今、敗北確定の書類に判を押したんだ。

この場、この状況でしたその判断を悔やむがいい。

「いや、どけろよ。なんで夢…左京といい、東風谷といい、ブレーキが壊れたような奴ばかりなんだ……」

「こいつらのことはほっとけ綾小路。また巻き添え食うぞ」

「あうう……何か…何をすれば……うー☆ たわー!」

外野がなにやらうるさいが、状況は揃っている。

さあ、征くぞ。

大きく息を吸って、一発ぶちかまそう。

「佐倉ああああ！ 助つけてー!!! この櫛田にも匹敵する邪悪を打ち払ってくれえええ!!」

恥も外聞も投げ捨てて佐倉に助けを求めるのだ！

「はえ？ わたし?」

「……………はっ！ な、何を巫山戯たことを……。私が桔梗さんに匹敵するほどの邪悪なわけがないでしょう!」

「そこかよっ!? こいつら櫛田に何の恨みがあるんだ?」

「しっ！ 綾小路。目を向けるな」

おろおろしていた佐倉が、唐突に舞台上に上げられてキョトンとなったがこのまま押し切る。

勝機は我にあり。

綾小路のツツコミは四方が抑えてくれるみたいだし、東風谷が僕の狙いに気づけば自然とこの暴虐は止むことだろう。

「今現在、物理的に踏みにじられている僕を信じてくれえー佐倉ああああ!! 少なくともこの東風谷が櫛田と同類なのは明白だろおとおお!!」

つまり逆説的にこの世の悪とはコイツのことなんだ!!」

「ああああっ！ さては愛里さんが桔梗さんに苦手意識を持っているのを知って、私を重ねさせよう?! なんて卑劣で狡猾なっ!」

今更慌ててももう遅い。

動揺から踏む力が不安定になっている。

これなら最後のひと押しでタイミングを合わせれば脱出完了だ。

「助けてくれえ佐倉！ 櫛田のように暴虐なる魔の者から僕を！ 頼むううう!!!」

「あああああ「ぐえっ！」あああつ！ 愛里さん違うんですよ!! 私
桔梗さんみたいな邪悪な存在ではなくてですね……むしろ善なる神
様に近い存在と言うかなんというかでして」

「あ……れ？ ええっ!! なんでわたしがいつの間にか………どう
いうことなの??? んえ？」

東風谷のヤロウ……！ 最後、僕の背中を力一杯踏み抜いていきや
がった。

しかしそれ以外は上々の結果である。

ようやく動けるようになり、嘯きながら勝鬨を上げる。

「ふっ。なんとたわいのない。完全に瀟洒な僕に挑むには10年早
かったようだな」

《完全に瀟洒……なんかそのフレーズいいですね》

《あはははっ！ 言われてるよっ！ 早苗が…早苗がこの世の
悪って、暴虐って……ハハハッ》

「夢月さん!! 桔梗さんは友達でそれなりに好きですけど、言って良
いことと悪いことがあるでしょう!?! 諏訪子様も笑っている場合
ではありませんよ！」

私をあんな邪悪な人と私を重ねるなんて!!! 愛里さんに本気で取
られたらどうするんですか!?! 酷すぎます!」

すると、どこからか電波が混線してきた。

東風谷が知らない名前を様付けで零してるところを見ると、後者は
東風谷の神様なのかもしれない。前者はどこか懐かしい気がするの
で、僕関係っぽいが。

まあそれはそうと、残酷な真実を告げる時だ。

「酷い、ねえ。だが、何をどう言おうがお前らは同類だと思っぞ。気づ
いてるか知らんけど」

「なっ!? ……この私が……あの邪悪と同…類?」

「ふ、二人共。櫛田さんの事…どう思ってるの? 本当に友達なの?」

「「そうだ(です)けど?」」

「声を揃えて迷いなく!」

なんか佐倉が慄いているが、先日はきちんと褒めたので、これでプ

ラマイゼロのオールOKである。どちらも本人には聞かれてないし、バレなきや問題ない。

東風谷も敗勢濃くなっているし、これは完全に流れを握ったと見ていいだろう。

勝ったな。我に返った東風谷の弁解の声を肴にとうもろこし食ってくる。

なんにしろ、東風谷が佐倉に駆け寄ったことで拘束が外れたので、悠々と埃を払って立ち上がる。

佐倉に抱きついて弁解を再開した東風谷達を通り過ぎ、四方と綾小路のところへ行くと感想戦のようなモノをやっていた。

「呆れたな。あの状況で東風谷を相手にして、本当にひっくり返してしまうとは……」

「いやあれ、反則だろ。」

てか、櫛田が邪悪な存在って……しかも全員の共通認識みたいになつてたし」

「反則とは人聞きが悪いぞ綾小路。」

味方を増やしたい時は共通の敵を作れって言うだろ？ それを応用して、味方だとかえって困る存在を少し大げさに吹いただけだ」

「少し？ 邪悪がか？」

「……いやまあ、本音が少し漏れた。案外、余裕なかったのかもなあ」
櫛田、すまん。だがお前のおかげできやつを討伐できた。ありがとう。

ただ今更だが僅かに罪悪感っぽいものが湧き上がってきたので、櫛田に内心で謝罪と感謝をしつつ、後でなにかお供えすることで鎮めておいた。

何故僕がとうもろこし畑で東風谷と決闘をしていたのか。

これを説明するには、少し時間を遡らなければならない。

といつても、説明するような事はほぼなく、初日に高円寺が何かを匂わせたらしい場所へ綾小路が行ってみたいと言うのでついてきただけだ。

そして僕達は、巻きつけてあった佐倉のハンカチ（綾小路が頼んだようだ）が目印になって発見したともろこし畑にて、みんなで収穫していた。

勿論これは綾小路や佐倉の功績を挙げたいというのが主な理由ではなく、発言権の強い奴の庇護を佐倉（と必要ないだろうけど綾小路）が受けられるようになるかも、という考えを話したところ東風谷が乗り気になったのだ。それに発案者の僕と四方も賛成し、僕達の方だけ確保して、残りはDクラスに運ぶ事に決まった。どうせ5人じゃ食いきれないし……。

終わったたら、またCクラスのビーチに行つてバーベキューセットを借り、焼きともろこしにして食べてしまえば証拠隠滅完了である。

ただ全部で50本弱もあったともろこしを5人で運搬するのは無理だった。

単純に考えると一人あたり10本の計算になるが、その量を東風谷と綾小路以外はとも持てなかったのだ。具体的には、僕と四方が半分かよい、佐倉は半分いかにくらいしか持てない。これはそこそこの距離を運搬するのが難しいのであって、持つだけならなんとかいけるが。

無理に運ぼうとした僕などあまりの持ち難さに、綾小路の横で転んでしまう始末。

そこへともろこし10本を両脇に抱えたまま全体重を乗せて奇襲してきた狼藉者が東風谷である。これを邪悪と言わずしてなんと言う。

ここから冒頭に繋がり、現在に至る。

なので僕は返り討ちを確定させて東風谷が落ち着くと、彼女を煽り散らしていた。

「あれれ〜？ おかしいぞ〜？ 僕を貧弱とか言つてたのに、容易く言い負けちゃった誰かさんがいるよ〜？」

「ぐぬぬ。愛里さんを利用するなんて…この外道が」

「負け犬の遠吠え乙つした！ ヨホホ。負け犬のパンツ見せてもらってもいいですかあ？ ヨホツ、ヨホホホッ！」

「くううう！ こんなホネだけの音楽家気取りの人なんか不覚を取るなんて……！」

「左京君……」

でも名残惜しいが、ちよつと佐倉の目がやりすぎ、みたいになつてきたので、そろそろ真面目に決着といこうか。

僕はキリツとした顔に意識して戻し、これまでのストレスを解消した。

「お前の敗因はたった一つ。非常にシンプルな一つの答え。

——煽つていいのは、煽り返される覚悟がある奴だけだ！」

ついでに万感の煽りを込めて、上から目線で敗北感を植え付けに行く。

「東風谷。お前には覚悟が足りなかった」

ふう〜！ 気ん持ちいい〜！！

ヤバいな。マジで癖になりそう。

どうでもいいが、こういう煽りはノリと勢いなので、覚悟とか関係ないじゃんとかツツコんではいけないのである。

僕が脳汁をドバドバ出していると、東風谷が騒いだからか新たな来客が現れた。

「来てください葛城さん！ 騒がしいと思つたら左京ですよ！」

戸塚だ。それと名前を呼んでいる以上、葛城もいるのだろう。

「騒がしいのはお前だ弥彦。すまんな左京」

「うむ。苦しゆうないぞ葛城に戸塚。今の僕は大変上機嫌じゃ」

「……四方、綾小路。左京はどうしたんだ？ 初っ端からエンジン全開なんだが」

「あー、東風谷を撃退した直後だからテンション上がってるんだろ。

端から見れば、どっちもどっちだったけどな」

「……………前もそうだったけど、こいつは調子に乗らせたなら駄目だな。オレでもちよつと手がつけられない吸引力だ」

なんか話してるが、ちよつどいい。

祝勝会に誘って、この場の全員でバーベキューに行こう。

友達と海でバーベキューとか陽キャみたいだが、一度やってみたかったのだ。

「よつしや！ みんなでちよつこしを焼きにCクラスのビーチ行くぞ！」

あ、でも37本はDクラスの近くまで持ってって置いてからな。そういう約束だったし」

「はあつ!? なにを勝手な」

「いいからいいから。細かいことは後だ。」

折角こんな島にいるんだから、たまにはパーつとやろう！」

佐倉と綾小路、それにリタイアした高円寺を除くとDクラス全員分で37本。

ここにあるちよつこしは全部で49本。

Cクラスへの手土産分も入れて、12本もあれば充分すぎるだろう。

その後、運搬を葛城達が手伝ってくれたこともあって、無事に川の傍までちよつこしを持ってこることができた。

あとは綾小路にひとつ走りさせて回収してもらえば、こちらは完了である。

ついでに駄目で櫛田も誘ってもらった。来てくれるかわからないが、彼女へのお詫びは早めにしておきたい。

そういう理由だから、綾小路と佐倉は「マジかよ!?!」って目で見てくるのやめろ。本人が居たら、さっきのが露見するかもしれないだろ。

東風谷と四方は、先にまだ巡ってなかったスポットを周ってくるそう、Dクラスに届け物した後、一旦別れた。今日のスポット巡りの

ノルマをこなしてくるとのことだ。

僕は龍園にバーベキューセットを使っているか頼まないといけないので、当然佐倉のいる組。とうもろこしを真っ先に食べたいとかいう理由ではない。

思いのほか簡単に運搬を手伝ってくれた葛城と戸塚は、綾小路と揉めた詫びだとか道中で言っていた。すでに月見で謝ってはいたらしいが、それとは別に偵察に来た綾小路と違う派閥のなんとかかんとか……。

高1でもう派閥とか、Aクラスは大変そうである。

単独で合流した榎田を加えて、Cクラスのビーチに到着すると、そこは昨日とは打って変わって10人に満たない数しか居なくなっていた。既に撤収寸前なのだろう。

ビーチには椎名も居なかったが、まだ龍園が寛いでいて、呆れながらバーベキューセットの使用許可を出してくれた。使用料……とうもろこしを数本で。

ちなみに東風谷が居ない間、佐倉が僕の後ろから離れなかった事を追記しておこう。

榎田もさることながら、龍園がメツチャ怖かったとあとでこっさり教えてくれた。

わかる。僕も彼が中二病と高二病のハイブリットじゃなかったら、絶対ビビり散らしていただろう。

問題というとそのくらいで、それも東風谷が合流してからは安心できたのか、いつもより控えめではあったが佐倉も楽しんでた。

それと目的の一つであった榎田への詫びも……と言いたいが、何故か彼女は笑っている綾小路を驚愕の眼差しで凝視していて、楽しんでいるか不明だった。

でも状態異常に罹ってるわけでもなさそうだし、榎田の陰口っぽいモノで東風谷を言い負かした事もバレなかったっぽいので、綾小路を重点的に笑わせて口を封じたのは我ながらなかなかの策だったと思う。

ただ綾小路を笑わせるのはなかなか骨だったので、僕の高育

のパ〇ンと呼んでほしい。

夕方になり、オレンジの景色が広がるまで僕達はバカンスを楽しんだ。

今日は久しぶりにのんびりできた。

葛城と戸塚、櫛田は用事があるらしく少し早めに戻ったが、誘った奴らがだいたい楽しめたのだとすれば、僕が突っ走った甲斐があるというものである。

それも折れた大木あたりで、終わりを迎えようとしていた。

ただ別れ際、ちよつとした予感が頭をよぎったので、思わず佐倉になんとかなく浮かんだ言葉を投げかけていた。

「佐倉ー」

楽しい日の最後にケチを付ける気はなかったのだが、はつきり口に出して伝えておいたほうが良い気がしたのだ。

佐倉はどうも言いたいことを言えない悪癖がある。

押し付ける気はないが、そんな彼女には平成の主流である「他人に迷惑をかけない」という考え方よりも、昭和の「お互い様」という考え方をなんとか伝えておきたい。

「必要だと思ったら躊躇うな！ 僕でも東風谷でも誰でもいいから迷惑をかける！ 必ずフォローする！」

——思うままにやれっ!!!」

迷惑をかけないようにするのは、裏を返すと他人を利用していることに気づかない事だ。

僕ならともかく、佐倉にはそんなのは似合わない。

時代錯誤とか知ったことか。

昭和の考え方とか僕も知らないから適当だけでも。

突然のこれが佐倉にどう聞こえたかはわからない。

でもこの予感が杞憂で済んでくれればいい。

佐倉と綾小路、綾小路から守ると言っていた東風谷の3人が振り返りながら去るのを見送り、僕はそう願っていた。

62、策士

無人島生活の4日目は前日のような醜態は晒すまいと、この日は誰よりも早く起きた東風谷が去るのを待ってから、顔を洗って今日も今日とて猛っているチ○コを収めようと、僕は奮闘していた。

勿論、東風谷だけではなく一之瀬にも注意していたが、流石に連日ポンコツさを発揮する事はないだろう……と思っていたのだが――

しかし――嗚呼。神よ。何故に我らBクラスの聖女は、こういう事に関して学習能力が働かないのか。

早く収めようと何度も顔に水を被っている僕に、わざとやってんじやねえの、つてくらいに話しかけてくる懲りない一之瀬。体が勝手にビクツと動いた後、振り向く前に速やかに無言で中腰になる僕。それを見て事態を悟る一之瀬。

前日と似て非なるパターンがこうして構築された。

「お、おはよう」

「……はよ」

「そ…の、ごめんね」

しかし今日は僕が最初から覚醒している。

外したら状況が悪化するとわかっていたが、それでもこのポンコツ委員長には釘を刺しておくことにした。

「次も学習しなかったら、嫌って言ってもこの状態でクレ○んのゾウさん芸を見せつけてやるから」

ただこれを本当にやることになったら社会的な死を迎える確率大である為、ちよつとドキドキして迂遠になりすぎたかもしれない。

わかっているのかいないのか、なんかもういつそエロいときさえ感じる眩きを一之瀬は返してきた。

「ゾウさん……」

しかもその言葉に振り返ると、中腰になったことで一之瀬の乳が目の前にくる凶悪コンボだ。

そのせいで一之瀬を見てみると、いつまでもチ○コが収まらない。高1なのに、体つきが佐倉と同等クラスに超高校級なので、子供とは思えないのである。ちよつと凝視した後、思わず首を痛める勢いで再度反転させてしまった。

それを我が手にできる事はないとわかっていても、万乳引力は健在なのだ。その気がなくとも、代償は支払わなくてはならない。

だから、一之瀬のマジボケとか本気でやめてほしい。

背中を向けて丸め、立ち位置をズラして、顔を洗い始めた一之瀬を尻目に因数分解をした早朝。

一之瀬から漂ってくる何とも言えない視線や雰囲気を努めて無視しながら、2日連続で九死に一生を得た自分の間の悪さを呪った。

当然のことながら、次の日から収まるまで寝たふりをしようと僕は固く決意した。

もつと早く思い至れ。そうしたツツコミは黙殺する。

佐倉と約束したことで、今日からはまずノルマ分のスポットを巡った後、会いに行く事にした。

少しでも面倒を減らす為と、未だ真実の追求に余念がない柴田と安藤を佐倉と会わせるのはどうかと思ったのだ。

だからノルマをこなした後、まず僕が密かに抜け出し、東風谷と四方がそれを追いかける、という体の段取りを組んだ。例によって、誰にも何も言っていないがなんとかなるだろう。

——結論から言えば、なんともならなかった。

いつまで経っても、四方も東風谷も追いついてこない。

でもよく考えると、一緒じゃなくても別に困らない気がしてきた。無人島生活では抜け出さない限りはなかなか一人行動ができないので、たまには一人で過ごすのも悪くない。

四方はともかく、東風谷なら佐倉に会いに行ってるだろうし、のんびり行ってさり気なく合流すれば自然に混ざれるはずだ。昨日の綾小路みたく、最初から僕も居た感じに。

そうと決まれば、ぼちぼち行こう。

Dクラスの拠点らへんを彷徨いていれば、なんかいい感じの機会が巡ってくるかもしれない。運を天に任せるのだ。

そうして島を散策して生っている木の実などを食べながら一人の時間を満喫していると、騒々しい声が響いてきた。

「ぎゃあああああああ!! 目がっ……目があー!」

ただ知らない野郎の声であるのは明白なので、僕には関係ないだろう。

なのでそのままスルーしようとしようと一瞬思ったが、近くに来ているだろう東風谷の仕業である可能性が頭をよぎり、念の為に野次馬しておくことにする。

まあ、東風谷が下手人ならあんな声は上げさせないだろうが。

声がしている方へ向かうと、目を抑えながらごろごろ転がっている男がいた。

重度の中二病患者だろうか？ それとも某大佐の物真似だろうか？

なんか面白そうな事になっている。

奇遇にも近くに佐倉と黒髪の女子も居たので、事情を聞いてみよう。

「あなたは……」

「さ、左京君」

「よっ。佐倉……とあんたははじめまして。僕は左京という」

「はじめまして?」

ん? これはどこかで会った事がある反応……か?

僕が知らないけど、相手が僕を知っているというところ心当たりもなくてはない。見覚えがある気もするし、推測のまま決め打ちしても大丈夫だろう。

「いや待て。君は確か噂の」

「あら。何度か会ってはいるけど、私の名前も知っていたのかしら？」
「勿論知っているさ。坂柳さんだろう？」

「誰!? 私は堀北よ!」 とことん無礼極まりない男!

「堀北？」

……あ、そっちなか。すまん。タイムリーだったもんでつい」

昨日、戸塚達から何度か聞かされたので、てつきりこっちなかと勘違いしたようだ。

2 択を外してしまうとは恥ずかしい。

その上、よく考えれば佐倉の近くにいるんだから、Aクラスだろう坂柳である可能性は相当低かった。決め打ちするなら、会長の妹の方が妥当な選択だった。

でも、会長の妹が前触れもなくいきなり出てくるとか想定外にもほどがある。誰か僕に教えておいてくれよ。なんか無駄に怒らせちゃったじゃん。

おかげで佐倉がいるとはいえ、話し難い雰囲気になってしまった。

「なんだ! 何があつた!」

「愛里さん! 大丈夫ですか!」

と思っていたら、綾小路と榎田、ショートカットの女子が駆け込んできて、僅かに遅れて迷子だった東風谷と四方まで登場した。やはりこっちに來ていたようだ。

それに対し、黒髪の女子改め堀北さんはため息交じりに零していた。

「はあ。続々と……。騒がしいことになりそうね」

よくわからないが同感である。

場が混沌としてくるほど輝く人がいる。

上手く状況をまとめるとかじゃなく、目を輝かせて全身から面白そう! という雰囲気を持ち始める奴がいるのだ。

大抵こういう奴は2面性を持つのであからさまではないが、それなりに知っている身からすると一目瞭然だ。

当然、これは榎田のことである。

それでも、そんな内心で高笑いしてそんな櫛田が一応は場を鎮静して、堀北さんに聞き込みしたところ、少しずつ事実が判明してきた。判明した事実を整理していくと、2組に別れて食い物を集めていたところ転がっている男（山内というらしい）が、佐倉と堀北さんの近くに突撃？してきたようだ。

どちらが狙いかはわからないながらも、真っ先に不審に気づいた佐倉が僕が隠し持たせていた痴漢撃退スプレーを山内に吹き付けた：という結果がああ悲鳴らしい。

お茶を密輸する時に、佐倉にも同じように持ち込んでとメールしておいたのが、ギリギリ間に合ったのだ。勿論、この件は初日に確認済みである。

……真相は全然面白くなかった。

「愛里さんに危害を加えようとするなど——下劣がつ!!!」

「ひいひいひい!」

「うわあああつ! ダメ! ダメだから! ちょ、止まって早苗!

これ以上はオーバーキルだから!」

「東風谷! 生まれっ!! 佐倉は無事だったんだし冷静になれ! 左

京もなにブーツと見てるんだ!? 止めるのを手伝ってくれ!」

「なんて力だ……!」

状況を把握するや山内に更なる追撃を加えようとする東風谷。

あまりの怒気に怯え、尻もちをついたまま後ずさる山内。

引き摺られながらも、東風谷を止めようとする櫛田・四方・綾小路。

ポカンとしている佐倉と堀北さん、とショート女子。

「ふむ。」

東風谷、僕の分はアッパーで頼む。一応、紛らわしい動きをしただけの可能性もあるから、再起不能にならない程度の手加減はしてやってな」

「左京は焚きつけるな! 話を聞いてからでも遅くは」

「了解です!! 夢月さんは愛里さんをお願いします!」

「うーい」

「言ってる場合か! 冷静に見えて、もしかして左京も怒ってるのか

!？」

「あ、それくらいならまあ」

「櫛田ちゃん!？」

四方に怒ってるか聞かれたが、当然怒っている。

我が部の癒やし枠に手を出した以上、あいつ『も』無事には済まさない。

昨日の今日で何か起こるとは流石に想定していなかったが、もし自衛の対策を打っていないければ、どんな事になっていたのか想像もしたくない。

故に、今回の僕はただ乗り遅れただけである。

だから東風谷がメインを担当するなら、僕は支援に回る。

だいたいこの佐倉が止めようとしてない時点で、山内とやらに何らかの非があるのは明白なのだ。櫛田もそれに思い至ったのか、何気に止める手を緩めていたので間違いない。

なら、やりすぎにだけ注意して見ておけばいい。

その後、予定調和に追い詰めた東風谷が、止めようとする3人を振りほどき——綾小路だけは東風谷の右腕を抑え込めていたが——つまずいて山内を蹴り上げたところまでは見た。

綺麗な放物線を描き、意識を飛ばす山内。

それも山内の股間の染みが大きくなったあたりで東風谷が飛び退いたので、もう見る意味はなくなった。

恐怖を刻み込むならこの程度で充分だろう。

ちなみに東風谷は振りほどく時、櫛田と四方には配慮して緩く離れたが、綾小路にはノー配慮だったらしい。

それどころか、あわよくば山内のあの汚れた股間に向かって投げ込もうとしていたと、途中で自ら手を放した綾小路が恐怖しながら言っていた。

……やはり東風谷は邪悪な存在なのでは？ 綾小路が恐怖するって相当だぞ。僕でもそこまでしない。

「さて皆さん、ここであったことは他言無用ということの一つお願い

しますね？」

一人だけものすごくスッキリした顔で、いけしやあしやあと言う東風谷。

納得いかない部分もあるが、こうなった以上はフォローしておくべきだろう。

それに『あつち』は僕が対処しておかないと、次があるかもしれない。

「貴女、何を言っているかわかっているの!? また暴力沙汰を起こしておいで」

「あー、堀北さん。東風谷がやらなかった場合、今後の堀北さんに何らかの被害が出ていた可能性も考えると、ここは山内とやらを言いくるめて無かった事にするのがお互いにとっていいんじゃないか？」

「言いくるめる…つて左京君がやるの？」

櫛田に聞かれたが、そんなわけがない。

というか、山内に関してはもうそれほど重要じゃないからどうでもいい。あれだけ色々刻み込まれたんだし、この試験中はとある条件下以外では再犯することもないだろう。

僕の狙いは、本当の問題に無理矢理シフトすることである。

「いや僕はあいつの事を知らないから。」

だから、詐欺師としてもやっていけそうな綾小路にやらせれば万事解決だ」

「詐欺師……ぶっ」

「おいっ！ 人聞き悪い事を言うな！」

「大丈夫だ。綾小路なら洗脳もマインドコントロールも軽いもんだろ？ あいつは今ちようど寝てるし、拠点に引き摺って行きつつ記憶を消してやれ。山内にとっても忘れたほうが幸せだろう」

「さも当然のようにオレが非人道的みたいな認識を広めるな！ てか、そんな事ができるか！」

これが嘘でなければ、山内を誘導した方法は洗脳とかじゃなさそう。ま、この島の環境でそれができる時間や状況はないだろうが。

っーか、もうまどろっこしい。ほぼ直球でなんでこんな事をしたの

か聞くことにした。

「あつれ〜？ 僕の聞く限り、山内って奴の動きが不自然な気がするから、てつきりあゝ「夢月っ!!」おわっ!？」

「夢月さん！」

「綾小路君!？」

「あーっと、ちよつと綾小路と話してくるわ〜。そっちは頼む〜」

話してる途中だというのに、いきなり綾小路に名前を呼ばれて引っ張られた。

そのまま少し離れた場所まで連れ込まれる。

ならばと、あつちは東風谷と四方、こっちは僕。適材適所ってことで、榎田と堀北さんの相手は相棒達に任せる。

綺麗に対処できれば、残り日数は佐倉への心配が粗方なくなるので、災い転じて福となすことにしようか。

しかし、この反応。やっぱり綾小路がなんかやったな。

わざと強めの疑惑を口に出しただけで僕を引っ張るなら、多分口車に乗せたとかなんだろうが、佐倉に被害が出そうだったことにだけは釘を刺しておきたい。

東風谷ほどではなくとも、僕も怒ってはいるのだ。

一応、四方達は見えるが、平常の声はおそらく届かない距離まで引っ張られてきた。

「左京。お前の予想は?..」

そして前フリもない端的な質問。

これまで何度か感じた威圧感を漂わせながら、僕を見る綾小路。

いつもなら戸惑ったり怖がったりするところだが、自ら疑惑を確信に近づけた間抜けだと思いい込めば何ということはない。実は内心かなりビビってるが。

「山内を誘導して佐倉……じゃないな。堀北さんの方か。堀北さんになんかしようとしたんじゃないか?..」

「……何故そう考えた？」

「僕は不自然な奴が自然な事したら、その場にいる関係が薄そうな処に注目する癖があるんだよ」

「不自然な奴が自然な事……？」

相変わらず綾小路は読みにくいだが、雰囲気から察することくらいは凡人の僕でもできる。目から佐倉ではなく、堀北さんが標的だったことだけは読み取れた。

まずは、そこから糸を繋げて目的を逆算して絞り込んでみる。

「櫛田や堀北さんが山内の行動自体には疑問を持っていなかったっばいから、多分山内は普段から不自然な……というか常識的でない奴なんじゃないかと思う。」

これが意味するのは……例えば、綾小路がやれば不自然でも、山内なら「あいつだしな」みたいに流すようなこともできるんじゃないか？」

「そうだな。山内はそう見られている事が多い」

その為にありえそうな事を並べてみた。

すると小さく反応をする箇所がある。堀北、常識あたりだ。

試しに変化を付けた上で、飛躍させた推測を突っ込んで綾小路に聞いてみると、表情こそいつもと変わらないが雰囲気でクロだと直感できる返し。

外していたらタコだが、この流れで外れはない。

ブラフや誘導の可能性もまだ残っていたが、ここで僕は一気に斬り込んだ。

「つまり綾小路には、山内を利用してでも達成したい『何か』があったはずだ。堀北さんに……あるいは佐倉に多少被害が出ようと、綾小路の“役に立つ”情報や工作が。」

あー、候補は絞りきれないが色々あるな」

「……」

実際、馬鹿な行動を日常的にしてる奴を利用するのは、会社でも稀にある。

利用される本人の自業自得や思慮のなさも理由には含まれるが、そ

ういう奴をあの場合で一番利用しそうで知っている奴が綾小路だ。
それに加え――。

「もう一つ。」

月見の場で僕が言った外部接触禁止の廃止。これがみんなの間では、いつの間にか緩和になっていた事がある。僕と四方、東風谷と佐倉以外に、だが」

「それは」

「こちらも証拠はないけど、やれた奴と動機なら思い当たる奴がいる。

うん。あの時に珍しく色んな奴と話しに行っていて、以前に「外部接触禁止を使える」と言っていた綾小路だ」

「……仮にそれらをオレがやったとして」

この件にも綾小路が関わっている可能性がある。

合わせて考えれば、ますます綾小路が黒くなっていく。

さつきまでが8割黒だとすると、今では9割超えでほぼ確黒だ。

ただ、それはともかく意外ではある。

「肯定するのか……」

「仮にと言ったはずだが」

「どうだろうと、これをお前が肯定するのは悪手なんだ。少なくとも僕は、これでDクラスの『策士』が綾小路だと確信してしまった。確証はないんだし、お前がすつとぼけていれば、確信までは至れなかったんだ」

「策士？ 何のことだ？」

この察してるのにとぼける演技を最初からしていれば、僕もスル―するしかなくてお互い面倒も少なかった。

なのに、相変わらず謎な言動の多い綾小路は、変なところで悪手を打ったのだ。四方との将棋でもそうだったが、むしろわざと自分を怪しんでほしがっているようにすら見える。

平穏とか自由とか口にする癖に、不思議な男である。

「中間テスト。」

あれの裏で動いていたのもお前だろ？ 何故・何の為に動いたかはわからないが、結果が不自然だったから候補は僕基準でお前と高円寺

に絞られる。理由は言わなくてもわかるな？ お前らが、突出して不自然な奴らだからだ。

でも高円寺は絶対に違う。あいつが動く時は、表裏なく正面から一気に片付ける。また遊びで動くことはあっても、集団に作用する手は使わない。それはあいつの美学に沿わない」

これで3つ目。

2つまでなら偶然でも、3つが重なるのは必然だ。

その最後のひと押しになる肯定を綾小路はしたのだ。

「……はは。左京の中ではオレもあの枠か」

「消去法でDクラスの策士候補は、綾小路が単独トップになる。一応、次点で平田もいるが、話した限り櫛田よりも可能性は低い」

「確かにそう考えると、オレが策士である確率が高いな。そんなつもりはなかったが」

だって間違っただけで敵対されないよう意図していくつかの過程や言葉を抜いても、裏まで完璧に理解されている確信がある。

その上で、言葉少なに嘘や誘導までさり気なく仕掛けてくる余裕を見せる綾小路。

コイツとの舌戦？は惑わされないようにしないと、東風谷とは違う意味で押し切られる。それ以前に、天才相手に経験値だけで対抗するのは凡人の僕には本来かなりキツイ。

それほど慎重で頭が回る奴なのに、尻尾を見せたのだ。意外すぎる。

一方、対抗する為に必死に頭と口を回す僕をよそに、途中から綾小路はどこか楽しげだった。

昨日のバーベキューでもそうだったが、綾小路には自分を倒せる可能性……のようなモノを見せると楽しげになる傾向がある。

ビーチで笑わせる時はその傾向を利用したが——あ、コイツもしかして、DMか？

こっそり思ってしまった心の声は置いて、これまでに考えていた繋がりをぶちまけておく。これでどうなるわけでもないけども。

「だから最近の僕は、起こった事にドエム……綾小路」——ちよつと待

て。今、何を言いかけた？」を何かと繋げていた。大抵繋がらなかつたけど、今回は繋がってしまった。しかも綾小路が暗に認める形で「危うく口を滑らせるところだった。」

だが、ツッコまれても何事もなかったかのように振る舞っている。少し考えた綾小路は諦めて話を戻してくれた。

「そうそう。一応真面目っぽい話なんだから、巫山戯るのは良くない。」

「……………流石に少し雑すぎたか。それでそれを知った左京はどうしたいんだ？」

「え、どうもしないけど?」

ただ予想を聞かれたから答えたけど、特に希望とかはない。真面目っぽいだけの雑談のつもりだった。

「というか、むしろこんな情報で何ができるっていうんだ?」

「あ、でも佐倉の守りには使えるか?」

「しいて言えば、次からあんまり佐倉を巻き込まないでねってのと、できる時は守ってやってね。って頼むくらいだ」

「は? いやいや。ここまで推理しておいてそれだけか? 普通、オレに何か要求を呑ませるとか脅すとかあるだろ? そうじゃなくとも、これじゃただオレに逃げられるだけになるぞ?」

しかし正直に軽い頼み事をする、綾小路は僕の前では二度目のポカンとした顔になった。

そして戸惑いながらも、えらく物騒な例えを提示してくる。わけがわからない。僕にそうしてほしいのだろうか?

上昇を続けていた綾小路の認識が、一之瀬と同格のベスト・オブ変人に登り詰めた瞬間である。

「どんな普通だ。高校生の癖にそんなこと言うから、綾小路は常識もモラルもないって思われるんだよ。それとも似たようなことを、誰かにやられでもしたのか?」

「……………や…や柱に」

「あー?」

「いや、なんでもない。それより、ならなんでオレとこんな話を……………」

？」

「自分で僕に予想を聞いて、なに言ってるんだ？　だから逃げるとかも意味ないし、色々算段つけた上で言ってるだろうに」

「……そうだった」

「なんだ？　ボケスイッチでも入ってしまったのか？　それか電池切れとかか？」

「右斜45度のチョップでも入れるか、コーヒーでも飲ませるべきかと少し考え、そこでようやく当初の目的を思い出した。」

「話に集中し過ぎてて、大事な事を失念するところだった。」

「それに思い至ったことで、即座にしゃがみこむ僕。」

「突然の行動だった為か、どうしたのかと不思議そうに近づいてきた綾小路へ向かって、僕はそのまま力を溜めて足と拳に乗せて全開放した。」

「——がつ？」

「僕のカエルアッパーが綾小路の顎……じゃなくて右肩に突き刺さる。」

「躲されたとかでなく普通に狙ったのに外した。しかも綾小路が避ける価値すら生み出せなかったようだ。」

「不意打ちだったというのに、綾小路の戸惑ったような「がつ？」が僕の非力さを物語っている。特に一撃を食らわせたのに、疑問形だったことには僕もダメージを負った。」

「まあ、お互い東風谷にやられるよりはだいぶマシだったということので、片付けておこう。」

「い、いきなりなんだ？」

「これで今回佐倉に危険が及んだ可能性についてはチャラにしてやる。」

「さっきの予想はどうでもいいが、これに少しでも負い目に感じるなら、これからはできるだけ佐倉を手助けしてやってくれよ？」

「それは了解したが………どうでもいい、か」

「これでこっちはとりあえず決着だ。」

「結局、実際の被害は山内という男子だけだったし、落とし前として

はこれくらいが妥当だろう。

それに言うだけ言ったし、これ以上長引かせるのは好みじゃない。

佐倉が何か言い出さない限り、水に流してしまうのが一番気楽な選択だ。

感触や反応からして痛くもなかっただろう一撃が当たった箇所を撫でている綾小路を促し、僕達は改めて四方達に合流することにした。

合流するやいなや、何故か東風谷にいつも佐倉にするような感じで抱きつかれた。

役得とか柔らかいか以前に背骨を折られる危険を感じた。勿論、痛み付きだ。その冗談抜きで死すら予感させる抱擁は、僕にアイ〇ズ様を彷彿とさせた。

零れ落ちてくる言葉から察するに、どうやらカエルアツパーを見られていたのも一因のようだが、東風谷の行動原理は綾小路とは違う意味で意味不明だ。その結論や行動に至った過程が全くわからない。

ただ四方や綾小路も驚いていたようだったが、佐倉だけはそうでもなかったあたり、女子にしかわからない何かがあったのかもしれない。

それにしても——なんとも色気のないハグだった。

これがせめて佐倉や櫛田で、ぱふぱふ付きだったらと思わざるを得ない。

てか、サバ折りする勢いで痛みを生じるハグはハグと認めたくない。

痛みのあまり無我夢中で東風谷の乳を鷲掴んで驚いた隙に脱出したら、僕が綾小路に入れた数倍の威力と思われるアツパーが返ってきたことも大幅減点だ。もう少し可愛げのある反応をしてほしいものである。

……いやまあ、色気があつたら今の状況だと色々ヤバかったかもだから、かえって助かったと言えなくもないが。

なんにしろ、これで綾小路が再度佐倉を巻き添えにするような事はしないだろう。

総じてほぼ雑談してただけだけど、怒りも解消でき、佐倉の守りも強化できたしで、災い転じて福となせたんじゃないかなろうか？

63、自然

前の人生、とある政治家と話をする機会があった。

彼が言うには、政治家の仕事というものは1対1の物々交換。等価交換ではなく、物々交換だという。

これは、自分にとって最小限の価値の物を渡し、貰うものは最大限にすること。

簡単に言えば、わらしべ長者のような事を故意にやって、リアリストの論理を常に考え、自分の力を蓄えるのが良い政治家らしい。

つまり民衆の事を考えるとかの綺麗事を実行するには、まず自分が力を持つてからということだ。政治などの大きな改革、または多くの人々を巻き込むには、それだけ自分から渡す『モノ』が必要になるから、ともかくまずは渡せるモノを集めましょう、と。

それを考慮に入れた上で、昨日綾小路と話してまた少し盤面が広がり、核心に近づいたと思えたことがある。

おそらく綾小路の根底は、この考えに近いものをベースにしている。

友達との雑談で要求だの脅迫だの言ってくるのは、渡すものがあるのが当たり前……というかその考え方が染み付いているからだ。

偏見かもしれないが、こういうタイプはとにかく最後に勝っていればいいさ、みたいな徳川家康や劉邦タイプっぽくて重要局面は特に手段を選ばないイメージがある。これは綾小路の印象にピッタリとハマる。

到底、年齢にそぐわず高校生離れどころか常人離れたある意味完成された精神性だが、天才という存在はそんなものなのかもしれない。

しかしこれを考えるに、なんでもいいから一度でも心から負けたと思わせないと、綾小路の視界に入れず、道具や駒としか見られない可能性もある。山内とどういう関係だったかは知らないが、彼を利用した事を指摘しても、綾小路から罪悪感や躊躇いといったものを感じな

いレベルの底知れなさなのだ。

おそらく、友達といえども例外にはならないだろう。

こういうタイプは能力はともかく官僚畑などに多く、他人を駒や数字など『人間』以外として見る奴がほとんどだ。前の経験がそう教えてくれる。

この考えを折らない限り、あいつはそのやり方を繰り返す事を躊躇いすら持たない。

だから綾小路に失敗や敗北という結果を学ばせるのは急務である。

始末が悪い事に、四方など天才の力を極力借りずにだ。これは能力だの実力だので、ただ勝つのでは意味がないからだ。

勿論、難しいを通り越して至難なのはわかっている。

僕が綾小路と同等以上に手段を選ばない策を重ねても、スペック差で勝率5割を超えることはないだろう。まともな手段に限れば1割いけば御の字。その勝率で『綾小路が』勝利を確信する勝負をひっくり返す必要がある。

——あいつのインチキスペックいい加減にしろ！

とか言いたくなる片鱗を見せ続ける奴に、ただでさえ低い勝率を更に下げる真似をするとか自分の正気を疑いたくなる。

だがキャットルーキーの事を除いても、折角縁があつた面白い友達なんだから、できる限りのことはしたい。友達と思ってる奴から、利用できるかと値踏みされ続けるとか冗談じゃない。

なにより、そんな後々ギスギスしそうな関係なんて御免である。もう割り切りのできる分岐点はどうに過ぎていくのだ。この際、綾小路がどう考えているかなど無視である。

だから矜持にも美学にも沿った手札を切る機会を待つのが、友達を諦めない最善手だと信じて進む。

僕は密かに計画を練り直す決意をした。

ふむ。

こうした真面目っぽい思考はなかなか効果的だ。

猛っていた息子も意気消沈している。

その為、今日は完全に回復したのか早起きだった四方やいつも早い東風谷とも普通に挨拶を交わす事ができた。

疑似賢者モード作戦は上手くいったようである。

尤も昨日や一昨日は、起き抜けからエロい身体の一之瀬の難易度が高すぎた面もあっただろう。共同生活する朝方だけでも、脳内モザイクの導入が待たれるところだ。一之瀬は色々エロすぎる。

「昨日みたいに勝手に居なくなるなよ左京」

「気づいたらフツと消えてましたからね。しかも2度も」

「悪かったよ。1度目はともかく、2度目はなんか面倒に巻き込まれそうな気がしてな」

それに比べ、四方や東風谷と接する安定感よ。

ただ昨日、東風谷の死の抱擁から脱した後、堀北さんと知らないショート女子に睨まれ、つい綾小路をデコイに隙を作って逃げ出してしまつてから、延々と責められているのが難点だ。そのまま夕方に帰還するまで一人で過ごしたのだが、拠点に戻ると珍しく…というか初めて四方に説教され、いまだに監視の目が解かれていない。

ああ。佐倉が痴漢撃退スプレーを使った件については、堀北さんが弁護に回ってくれたのもあり、問題なかったらしい。ついでに東風谷のものも佐倉と櫛田が上手く収めてくれたようだ。

唯一、山内だけはあのまま放置された。誰も漏らした男に触りたがらなくて、彼をノせた綾小路すらスルーして帰ってしまったと聞いた。きつと川とかでカモフラージュを施して、自分で戻ったのだろう。人は涙の数だけ強くなるとどこかで聞いたこともあるし、好きなだけ泣いて強くなるという(適当)。

これにて一件落着である。

「聞いているのか？」

しかし一件落着して日を跨いだというのに、それでも四方のロツクオンが外れない。

仕方ないので、話を進める風を装ってさり気なく打ち切る。

「聞いている。僕が消える対策に、点呼前にさっさとスポット巡りのノ

ルマをこなそう、つてことだろ？ そろそろ起き出してくる奴が増える時間だし、行くなら早く行こうか。今すぐ行けば、8時までには戻れるだろ」

「……こうしてみると、聞いてないようで聞いているとか始末が悪いな。俺が言えた義理もないが」

「二三矢さんも時々そう言われますもんね」

「これからは俺も気をつけよう」

「人の振り見て我が振り直せって言うもんな」

「……………左京が言うなよ」

まあこの程度、数々の説教地獄を乗り越えてきた僕の経験値からすれば、ぬるま湯のようなものだ。まして本來說教など柄ではない四方はこの面では敵ではない。

透けて見えるものを推測して組み立てるだけで、容易く要点を突いたかのような返しもできるくらいだ。

裏でこれを画策しただろう神崎共々爪の甘いことである。

ちなみにこれは点呼には必ず僕が姿を現すから、その前に出かける用事を済ませてしまおう、ということらしい。そうすれば消えたとしても短時間で済むのだとか。

ハッ。はちみつをぶちまけたケーキよりも甘い考えだ。点呼を済ませた僕が逃げることを想定していない。

そんな考えでは、僕の怠惰を止めることなど不可能だということを教授してやろう。

ともかく、朝6時過ぎに出発するのはそういう訳だ。実はその為に、あつちで柴田と安藤も準備運動してたりする。

こうして各人の思惑が交差する無人島生活5日目は、走ることから始まった。

それから少し経って時刻は午前9時。

予定通り、日課も済ませた僕は椰子の実片手にバカンスを満喫していた。

「ああ。また左京の脱走に付き合っちゃった。一之瀬や神崎は慌て

てるかなあ」

四方が嘆いているが、むしろ自分から進んで僕についてきた事実を見逃してはいない。四方といえども、この年齢なら遊びたい気持ち勝つのは当然なのだろう。

「ふっ。死ぬまで借りてるだけとか言つとけばいい。借りをな」

「それはもう借りとは言わないんだよ。この前の神崎なんてブチギレかけてたぞ」

「神崎が？ 一之瀬じゃなくて？」

「自覚なさすぎだろ……。いや。一応、一之瀬に対してはその認識があることを安心した方がいいのか……？」

今日は東風谷だけで佐倉と遊びたいというので、スポット巡りを終わらせ、点呼が完了次第、僕はまたもやCクラスのビーチに来ていたのだ。四方も一緒に。

龍園すらもいなくなった無人のビーチにはバカンスの設備だけが残っていて、現在ではバーベキューの時に抜け目なく許可を取っていた僕（とやらないだろうが金田）だけが寛ぐことが可能だ。

飲食物は当然自前なので用意してこないといけないが、このビーチに実っていた椰子の実を尖った石で穴を開ければ、それだけでも南国気分を味わうのに不足はない。

他に人も来ないし、来ても住人が居ないとはいえ他クラスの領域で好き勝手にはできない。

要はプライベートビーチを独り占めということだ。

ビバ楽園である（死語）。

「ほう？ 面白いことを言う。5日目の昼過ぎにしてようやく誤解を解く目処が立ったが、ここ数日俺がどれほど苦労したのか左京はわかっているか」とみえる」

「よう。一之瀬と神崎も来たのか。楽しんでいってくれ」

「……………軽すぎる。なんだ…この、罪悪感など一切ないと言わんばかりの堂々たる態度は」

「……………誰も居ないかと思えば、なんで左京君がここで我が物顔で寛いでるの？」

「東風谷が今日は女子会だというので、僕と四方は自由時間を満喫してただけだ。誰も居ないし、一応の許可もあるから安心してくれていい」

「許可……って龍園君に？」

「いえーす。前に来た時に頼んだらくれた」

「よくまあ、あの龍園君にそんな軽く……にやはは。なんというか……言葉に詰まるね？」

だから苦笑してる一之瀬や口元を引きつらせながら言いがかりをつけてくる神崎が来ようと問題ない。我が世の春は続行だ。

龍園とも大したことは話してないが、心配なら四方に聞けば嘘じゃないのは確認できる。

またいざという時には、動く水上バイクも確保していて逃走手段も万全だし、いつにない自然な対応ができるのは心の余裕が僕にそうさせるのだろう。

「四方」

「ああ、許可のことなら本当だ。一昨日は、目の前で見てた。なんなら龍園も一緒にバーベキューまでやった。

はは……カオスな雰囲気だったぞ。葛城も綾小路も……俺も困惑しっぱなしだったよ。楽しくはあったけどな」

「……詳しくは聞かなかったが、あの日に疲れて帰ってきたのはそういう訳だったのか」

ま、用意していた各種手段を使うまでもなく、残業帰りのサラリーマンを彷彿とさせる空気になった二人を見て、沈黙こそ最善手だと悟ったわけだが。

成り行きを見守っていると、四方が思い出を反芻するかのよう遠い目になり、神崎がどこか同病相憐れむ感じになったのだ。

酒が飲める年齢だったら、これから飲みにも行きそうな雰囲気である。

まあ、僕には関係なさそうな話だし、日向ぼっこを再開するとしてよいか。

「ああっ！ ちょっと左京君、神崎君と四方君をこんなにしておいて

寝ないで!? お願いだから!」

一之瀬を忘れていた。面倒くさい。

「ん。モザイクの導入がまだだから、一之瀬は揺さぶらないで」「なに言ってるの!? こんな一瞬で寝ぼけたの!?!」

隣で愚痴り合いを始めた二人を放おって、寝ようとしたら今度は一之瀬が起こしてきた。

だから一之瀬は、股間にクルから接触してくるのをやめろとあれほど……。学習してくれない一之瀬に、妄言が溢れてしまったじゃないか。

もう寝れそうにないし、これなら日向ぼっこからレジャーへと方針転換した方が無難かもしれない。

思いたったら吉日。切り替えた僕は遊ぶことにした。

「今度はなに!?! どこか行くの!?!」
「海」

「もう左京君が本当にわからないっ!? 誰か通訳をしてほしい!」

それにしても、流石に元祖ベスト・オブ変人は常人とひと味違う。

夏の海でテンションが上っているのか、立ち上がって海でひと泳ぎするつもりなの僕についてくる。ジャージのまま。こちらこそわからないクレームをつけながら。

ちなみに僕はきちんと水着を着用してるし、シャツを脱げば即泳げる。水上バイクやサーフィンならそのままでも大丈夫な形態だ。

だが一之瀬は、ついてきてどうするつもりなのか。

濡れ透け姿大公開の目の保養は、最終日あたりに実行してほしい。きつと僕だけじゃなく、クラス：同学年男子達の大多数が船のトイレに直行することだろう。

まあ今は、万が一、本当に海の中までついてこられると、水着になったとしても被害が僕だけに留まらないので、四方と神崎の為にも水上バイクを選択すべきか。

何故か混乱していた一之瀬を勢いで水上バイクに乗せたまではよ

かった。

始める前は散々渋って、取ったばかりの僕の水車オートバイ免許をまじまじと確認し、何事も経験だとか言ってお口車に乗せるまで非常に面倒だったのもまだ許せる。

だが「左京君！ バイブス上げてこー！」とか「おにーさん！ もつとスピード出してよー！」とか僕以上に楽しんでおいて、降りた途端、我に返ってまた面倒くさいノリになるのはどうなのだろう？

「うう。不覚にも普通に楽しんでやった。また左京君に乗せられちゃった。

帆波は誘惑とノリに弱い娘です……！」

「別に楽しんでいいだろ」

「私……私は楽しんでや……ううん。なんでもない」

この面倒くささである。

エロい意味じゃなく、かなり色々溜まってそうなのに吐き出すこともせず、謎に落ち込んだり、なにか言いかけて止めるのだ。

言っちゃ駄目なことかもだがあえて言おう。

「——クツソ面倒くさい!!」

「え？」

一之瀬は、何故にこんなセルフ罰ゲームをするような考え方になるのか。

楽しいなら楽しい。嫌なら嫌。

好きなことをやり、嫌いなことから逃げる。

生きるのには、ただそれだけがやれば充分だろう。

そんな当たり前もわからないなら、僕におちよくられるのもしかたないよな？

だから心のギアを切り替えて忠告するついでに、恩も返しておくことにした。

「ふう。すつきりした。

しかし一之瀬、お前アレだな。将来ホストとか絶対行くなよ」

「えう？ いきなりなんでホスト？ というかさっきの……」

「言っちゃなんだが——お前って、ヒモとかを養いそうなんだよな」

「ヒ、ヒモ!? 私が!」

「うん。ダメ男に「彼には私がいないと」みたいに入れ込んで、ズブズブに沈んでいくのが容易に想像できる」

「……」

鯉の口のようにパクパクしてる場合じゃないぞ一之瀬。

世の中には、それ以上になり得る性質の悪い劇場型の奴等とかもいるんだ。付け込まれる隙すら作り上げる奴等にとって、この素直さと容姿、ハイスペックさは垂涎の獲物だろう。

……一之瀬の想像力依存だが、多少は免疫っぽいモノも投入しておいた方がいい気がしてきた。

「そんでいざそうなったら「私のせいだ」とか「贖罪しなきゃ」とか言いながら、限界まで……いや限界を超えても、DMのごとく何故か自分以外に尽くすんだ」

「うぐうっ!!! ……あ、ああ……ど、えむ……わ、たし」

「今ならお前にも想像できるだろう?」

「そ……そそそ、想像、できるって……いうか……。なん、ていうか……。こんな適当な妄想で、まるで凶星にミサイル打ち込まれた反応になるあたり、想像力豊かなのだ。まだ手遅れじゃないはず。」

グロッキー寸前のボクサーみたく、切れ切れの言葉を泣きそうな顔で呆然と零す一之瀬を見てるとそう思う。

てか……でも、あれ? ……なんか想定以上に効果バツグンなんだが? ……もしかしてこれ、早めに打ち切った方が良い話題なんじゃ……?

ただ軽く打ったジャブのあまりの効果を鑑み、僕は路線を変更、短縮して締めることにした。まだホスト通いやヒモ・ジゴロについて言及したかったんだけども。

「それを回避したいのなら、日々好きなこととして楽しんで、嫌なことからは全力で逃げるのがオススメだ。ソースは僕自身だから確実だぞ?」

「だけど」

「あー、ジメジメと鬱陶しい!」

必要なことを必要なだけできてれば、あとは難しいことなんて考え

ず楽しむだけでいいだろ！ 一之瀬は必要以上やろうとするから、僕みたいな奴にも付け込まれる……ってだけ覚えとけ！」

「必要以上……」

ただあんな中途半端なところで切れなかったのも、限界まで言葉を削減することで対応したが……それでもどこかで一之瀬の地雷源的なモノでタツプダンスした気がしてくる。

明らかに容量限界を超えて茫然に近い状態となっている。

クソ。思いつきで慣れないことはやるもんじゃなかった。これはそれこそ必要以上に悲観させたかもしれない。

カリスマブレイクした一之瀬は、何故か僕の罪悪感を刺激してくるのだ。勘弁してほしい。

それに一之瀬にこんな顔させたまま四方……はまだしも神崎と合流したら、きつとクラスでの僕の立場が終わる。

だから、さっきのが最後のつもりだったけど、もう1回水上バイクで雰囲気ごとぶっ飛ばそう。

1回頭の中を真っ白にすれば、一之瀬も少しはマシになり、僕も気分爽快に違いない。

「ラストで実践だ一之瀬！ さっきのご注文通りスピード出すから、しっかり捕まってるよ！」

「あ……」

返事はなかったが、バイクを掴む手に力が戻ったのを感じて、僕は再びフルスロットルでぶっ飛ばした。ついでに僕の心のタガも意図的に外しておいた。

「いやっはぁー！！ 無駄だと思いながら、免許取ってよかつたー！！」

「あ………な………なにそれ？ あは……あははっ！！ さきよ……ん……どん………う」

やっぱり風を切るこの感覚は素晴らしい。

離れた船上にいた高円寺が不思議と目にはっきり映って流れていく。

一之瀬が叫んだ声が風とエンジン音にかき消されていく。

いつかの謝罪時のように無理矢理テンションを上げている代償もあるだろう。徐々に周りの景色しか見えなくなっていた。

今この時、僕は嫌なことから全力で逃げている。

柄にもないことを言った恥ずかしさ。一之瀬を無駄に悲観させた可能性。それに伴う、クラスでの立場の失墜……というほど高い地位なんか元々ないが。

これは現実逃避と言っても過言ではないが、こうしていると自然が全て些細なことだと思わせてくれるのだ。

わずかに残る冷静な思考が一之瀬にも少しでも『これ』が適用されてほしいと思いつながら、僕は改めて自然が美しいものだと感じていた。

……………非日常の寝不足が、こんなにも恐ろしいものだと改めて思い知った。

一之瀬への緊張を誤魔化す為とはいえ、おかしなテンションと思考で創り上げてしまったこの海での黒歴史は、次の日の朝まで僕を苛むことになる。

代わりに一之瀬は笑顔に戻ったっぽいけど、我に戻った僕は発作的に何度も転げ回り、フラッシュバックを伴うほどの羞恥に身悶えることとなり、一之瀬どころじゃなくなった。

64、人間（後半、東風谷視点）

「海」

「ふぐつ！」

「水上バイク」

「はうあつ!!」

「一之瀬さん」

「ああああおおっ!!!」

忘れろ！ 一之瀬にイキリまくってた部分だけでいいから！ 頼むから忘れさせてくれええええ!! あああ…昨日の僕！ マジでバツカじゃねえの!?!」

無人島生活も残すところ、あと丸1日くらい。

僕の心模様を反映するかのような曇天の下、東風谷に拷問のごとき仕打ちを受けていた。

「二三矢さん！ なんですよこれ!? メツチャ楽しいです!!!」

「こいつは本当に……。」

いやしかし、左京はなんでこんな言葉でダメージを受けてるんだ？ 昨日の一之瀬「はおつぐ！」も楽しんでたみたいだし、左京がこうなってる理由がわからん」

「私にもわかりませんが、今なら勝ち放題ですよ！ 海！「うごおお

お」ほらあつ!! あはははっ！」

「……東風谷がそれでいいならいいんだけど」

「よ、よくない……デコイ……じゃなかった綾小路を呼んでくれ」

「無茶言うなよ。それにデコイってお前な」

「ムムツ!? 夢月さん！ 一之瀬「おぐう！」さん！」

ああ、地面をゴロゴロ転がりたいのに、東風谷が腕を引っ張るせいで否が応でも歩かなければならぬ定め。市中引き回しとはかくも無残な刑罰であったか。

知りたくなかった。

特定ワードを聞いたたびに、黒歴史がぶり返してきやがる。

叶うことならば、地に頭を打ち付けて記憶を消したいくらいだ。
デコイもこの場に居ないから使えない。

その上、名前を口に出しただけで無駄に勘に触ったようで、僕を引つ張る力まで増してしまった。

八方塞がりである。

しかし綾小路で閃いた。

山内には使わなかったっぽいけど、綾小路には本当に記憶消去術的な技能はないのだろうか？ 藁にも縋る態度で頼み込んだら案外いけるのではなからうか？

とか、愚にもつかない思いつきすら試したい気分だ。

「精神崩壊したカミ〇ユかよ。あんだけ左京を色々問い詰めたがってた神崎ですらツツコむのを止めるほどって、本当に何があったんだ？」

「ね？ 委員長も、左京君はむしろ元気づけてくれたって言ったのに……」

始まりは、朝にスポット巡りどころではない精神状態で丸まっていた僕だ。

それを見た東風谷が、四方から昨日の四方視点——僕と一之瀬が遊んでたかと思ったら、合流した時には笑顔の一之瀬と我に返ってグチャグチャの精神状態になった僕だった——を聞き出した事である。

そこで反応を見られながら検証され、僕の弱味を握った東風谷のテンションが爆上げという現状だ。ふざけんな。

もはや『例のあの人』をあまり名前で呼ばない安藤がオアシスのように思えてくるレベルな僕になんという酷い仕打ち。

僕の無人島生活6日目は、こうした（精神的な）疲労困憊状態から始まった。

なんとか市中引き回しと朝の点呼を終え、ここ数日の日課にしている李の林まで行って、パチっておいた食い物と消耗品いくつかを置いて

て戻ってきた。

きちんと昨夜置いた物もなくなっているので、龍園も元気でやっているはず。

金田にあれだけ言った手前、約束の履行は当然だ。故意に僕を利用させた以上、最低限の支援は押し付けてやるのである。

ただこれだけで僕は全ての気力を使い果たし、再度座り込んで丸まった。

近くにいるのは、東風谷がどこから連れてきた白蛇だけだ。

都会っ子は基本的に生物に弱いようで、この蛇といるだけで話しかけてくる奴が激減するのだ。

これは昨日実証済みなので、これだけは東風谷に感謝している。

その東風谷は風祝のお仕事とかで、珍しく昼過ぎから雨が降り出すと天気予報みたいな事を、焚き火跡でみんなに演説？している。何人かは足を止めて眺めて聞いているようだ。

僕も腕に巻き付いてくる蛇と共にぼんやり予報する様を眺めていると、なんとなく本当に言う通りになる気がしてる。

まあこの曇り空と湿った風だし予報が的中する要素は揃っているのだが、巫女っぽい雰囲気をしてる時の東風谷が言うことはそのまま信じたほうがいい気がするのだ。

それに、こころなしか蛇も頷いているように見える。自然界の生物だけあって、彼？彼女？も無粋はしないのだろう。

昼になると、蛇によるアニマルセラピーによってだいぶ精神を持ち直してきた。少なくともワードを聞いてのたうち回る事はない。

東風谷の予報通りに雨も降り出してきたが、数日間を外の焚き火近くで寝起きしていた僕は、早くから想定して大きな葉っぱで傘を拵えていたから、濡れるのは最小限で済んでいる。

備えあれば憂いなしである。

それに雨自体は風情があって好きだ。

人があまり出歩かないのもあって、傘をさしてそぞろ歩くと雨音だけの世界にいるようで、1日中フラつくのも楽しい。

学校にいる時は、何故か雨の散歩中に東風谷と出くわすこともある

が、そういう時は特に話もしないのであいつも雨が好きなのかもしれない。変な部分で馬が合うものである。

忘れることはできぬ股間の方も、ふとした拍子に一之瀬や安藤などに反応してしまうことはあったが、あと1日ならなんとか持ちこたえられるだろう。

まあ何度か終わったと思ってしまった場面もあるが、全て見て見ぬ振りをしてくれていた一之瀬には感謝している。昨日の僕のイキりっぷりを忘れてくれたら、感謝ゲージも最大値をマークすると思うのだが、まだ面と向かってそれを頼み込むまで精神は回復していない。

しかしどうでもいいが、一人でこれだったんだからテント内は一体どんな事になっていたのか。

テントに入れなくてハンモックで寝ている奴らも、起きてすぐは『降りられない』ようだったから、相当溜まってそうだ。

股間の山がひしめき合って乱立する地獄を想像すると、焚き火での一人寝が天国に思えてくる。

場所と役割のせいかわりない一之瀬に声をかけられるのはアレだったが、彼女がそり勃つチ○コをスルーしてくれる人格者で本当に良かった。おかげでなんとか野宿を続けられたからだ。

また、あと1日近く残っているから早いかもしれないが、他のクラス含めて体調不良によるリタイアはまだ出ていないらしい。Cクラスのを差し引いても、これは奇跡と言って過言ではないだろう。

これは、調べていた四方がどういふつもりか僕に報告してきて……というか、それを聞いた僕の反応を観察するような雰囲気だったが、素直に喜ばしい情報である。知らなければともかく、僕が楽しんでる裏で飯が不味くなる事態にならなくて本当によかった。

……案外、今朝の東風谷の拷問を見て、僕を元気づけてくれたのかもしれない。

ただ昨日Dクラスで下着泥棒が発生したとかで、何か揉めているらしい。

女子会に行っていた東風谷から四方が聞き出したことを整理する

と、何故か綾小路が疑われ、それを佐倉が庇って、盗まれた女子から面罵？されたようだ。そして更にそれを須藤が——須藤？ 平田とかじゃなくて？ 綾小路は疑惑があるからともかく——庇ったが、逃げ出した佐倉を遊びに行つた東風谷と櫛田が保護したという。うん。これだけじゃ、全然状況がわからん。

必要になつたら助けを求めろとは言つてあるから、佐倉待ちだな。その為には、一応は声をかけに行つた方がいいかもしれない。東風谷が慌ててないし、回復してきた時にはすでに降つてたから今日は会いに行かないつもりだったけど、これくらいなら大した手間にはならないから散歩がてら行つてみようか。

「みんな——」

ちよつと雨が強くなりそうだから、今のうちにテントと傘を繋げて広めの雨宿りできる場所を作るよー！ 手が空いてたら手伝つてー！

そんな事を考えている時、一之瀬の号令がかかった。

確かにこちらでも重要だ。夜の間も降り続けるのだとしたら、そうした場所があるのとないのはかなり違ってくる。

最後の正念場と思つて、今日だけある程度固まってやり過ぎすつもりだろう。

ちなみに傘とは、僕が使っている大きめの葉っぱに枝を組み合わせた適当なものだ。

暑さや雨風を凌ぐ程度には使えるが、流石に本当の傘のように持ち運んでは使えない。ただ昨日まで日差しを防ぐ目的で何箇所か作つて設置していて、雨が振り始めても一定の効果があるのがわかり採用された。

それで一之瀬は、テントからはみ出す部分をカバーしたいようである。ハーブの虫よけと組み合わせれば、それなりに使えるだろう。

どっちにも関与している僕は誰かに手伝えと言われるに決まっている。なのでとりあえず蛇を下ろし、言われる前になるべく集団に近寄らないよう気をつけて作業に加わつた。

8月6日の16時頃。

大きな雨宿り場所が完成し、クラスの半数以上はそこで駄弁っている。また近い位置の焚き火跡の傘の下も人気みたいで、僕は新たな安息の場所を求めて彷徨うことになった。

結局、自分の作業が終わったところで適当な木の下で休むことにした。蛇とそれが平気な四方は寄ってきたが、すぐにはDクラスへ向かえそうにないからだ。

なぜなら、東風谷が雨降る中で空を見たまままでいて、様子がおかしい。

一之瀬や安藤は「濡れるよ」とか「こつち来たほうが」とか気遣っていたが、ガン無視である。勿論、僕と四方にも声をかけるよ、的な視線が来た。

ただ、この感じに覚えがある僕と四方は声をかけない。

考え事をしている僕や、集中している四方と似ているのだ。

ここで声をかけたりすると邪魔することになるし、もし神様と話してるなら無礼にもなりかねない。親しき仲にも礼儀ありである。

四方も神様はともかく、邪魔になると理解しているからこそこの対応だろう。

そうしてしばし遠巻きにされている東風谷を眺めていると、いきなり僕と四方……いや、僕に巻き付いている蛇に東風谷は目線を向けて近づいてきた。

不思議なことに雨の中で、顎から雫が落ちているのに、濡れ鼠な感じが全く無い。それどころか、どこか神聖っぽい雰囲気醸している。

そんな東風谷は蛇と僅かに見つめ合った？後、口を開いた。

「夢月さん。一二三矢さん。」

今しがた神様からのお告げがありました。何も聞かず、私に付いてきてくれませんか？ 誰かが助けを求めているらしいのです」

ああ、佐倉に会いに行く予定は変更だな。

「ん。どこへ？ って聞くのも野暮か。わかった。行こう」

「…………お前ら……………本当にいつも突然すぎるだろ。付いてくけどさ」

「……………私を……………神様を信じてくれるのですか?」

「当たり前前だろ?」

「——っ!」

四方とハモった。

まあ普段がどうであれ、珍しく真剣になってる友達が言うことだ。東風谷は何故か驚いているが、信じるのは当たり前といえる。

それにそれが人助けにもなるかもってんなら、疑うのも時間の無駄である。なら、さっさと動くべきだろう。

「一之瀬、神崎、みんな。悪い。」

点呼までには戻るつもりだけど、ちよつと出てくる。だから夕食の準備とかできないかも」

「あと、もし点呼に遅れても探しには出ないでほしい。雨もまだ降り続けているし暗くもなってるだろうから危険だ。その場合、僕達は動かない選択をしてると思ってくれ。」

こっちは僕以外、東風谷も四方も心配いらないうステータスだから大丈夫。その僕は二人に助けてもらおう気満々だから心配いらぬ論。ってことでOK?」

「夢月さん、二三矢さん……………」

何かあったのかと近づいてきた一之瀬達へ四方が言った事に補足する形で、冗談めかした僕の言葉が続く。

冗談めかしてるだけで、本気で危なくなったら助けてもらおうつもりなのは内緒である。

……………僕だけ格好悪いとか察しても思わないように。傷付く。

整備してあるとはいえ、雨降る無人島とか東風谷や四方クラスの能力がなければ、危険かそれに類するモノは約束されたようなものだ。

だから、一応巻き込まない保険のつもりで言った。反省も後悔もない。心配はかけるだろうけども。

「……………3人共、気をつけてね」

「いいのか一之瀬?」

なんなら俺や柴田も」

「ううん。なんとなくそれはしない方がいい気がするの。」

それに……左京君がいるしきつと悪いようにはしないよ」

「帆波ちゃん？」

「あつ！ 変な意味じゃなくてね。なんとなく……そう、なんとなくね？」

でも……あの、一之瀬？

僕を名指しで、なんかギャンブル狂の男を快く送り出す感を出すの止めてもらっていい？ 自分がクス男になった気分になってくるので。

まあそれはともかく。

「さて、ともかく行こうか東風谷、四方。頼んだ」

「おうっ！」

「ふふ……ええっ!!! 任せてください!!!」

出発直前にちよつと残念な一面を覗かせたクラス委員長だけは微妙だったが、なにはともあれ僕達3人は雨の中、何らかの目的の為に無人島を駆け回ることになった。

……自分で思ってたんだが、何らかの目的って明らかにおかしいな？ 何をするかまだ具体的にわかってないから、しかたないっちゃしかたないが。

雨の中、誰かが喧嘩している。

諏訪子様に聞いたこの情報は私を悩ませた。

これは、およそ『普通』の生徒が知り得る情報ではなく『常識的』に考えれば、見て見ぬ振りするのが人の世の正しい処世術だからだ。

愛里さんの安全の為に諏訪子様が遣わしてくれたミジヤクジという神様の言霊は、夢月さんや愛里さんなら多分信じてくれるが、他に言っても信じられないだろう。

二三矢さんですら、無条件では難しいかもしれない。

クラスメイトは……正直、私の方が信じられない。少し前までの思い込みは、いまだ私の中で根付いている。

だから続報の、喧嘩をしていた片方が倒れて、片方が他の何人かと去っていたという情報も困った。

これなら倒れている方の介抱に向かうべきだと判断したが、私一人で出向く理由が説明できない。説明できなければ、流星に誰もその行動を許してくれないだろう……夢月さん以外は。

夢月さん？ そうだ。彼なら。

先日の愛里さんに危害を加えようとした一件でも、人知れず綾小路が黒幕であることを暴いて制裁していた。私の感謝の抱擁を無礼な方法で擲ってはくれたが、彼なら絶対に間違えない。

そう、思い込んで、なんとか最低限だけ口に出せた。

——私は本当は怖かったのだ。

——夢月さんも信じてくれないんじゃないかって、僅かに思っていた。

——でもそれ以上に、神奈子様や諏訪子様すら認めた人への信頼が勝った。

——私自身にもしっかり存在している彼らへの信頼が。

結果から言えば、夢月さんも二三矢さんもあっさり応えてくれた。

信じて後ろに付いて走ってくれている二人には、感謝とも感動とも言える感情が渦巻いて、もうわけがわからなくなっている。

ちよつと目から汗が出てしまうほど嬉しかったが、雨で流れてくれて本当によかった。

更に神奈子様が言うには、二人だけとは思えない信仰心のようなモ

ノまでが、凄まじい勢いで流れ込んできたらしい。初日に渡して以来、使うこともなかった夢月さんの持つ風の御札を通して。それもあまり自覚のない私にさえ。

二三矢さんの分は半分以上夢月さんにも流れていたようだが、流石に真つ当な陰陽師？とかいう資質を持つ者だ。以前に聞かされた諏訪子様の話の通り、世が世なら引つ張りだこだろう。

そしてなにより夢月さん。

彼が居なければ、きつとこうはなっていない。

二三矢さんは勿論、愛里さんや桔梗さんとも、知り合うどころか認識すらしていなかったかもしれない。クラスでも腫れ物扱いのままだったかもしれない。

私がそんな状態だったら、行動どころか……言い出そうとすらしなかったはずだ。

入学当初のほとんど諦めていた私に、なんとなく声をかけて友達にした奇跡は彼でなければ起こせない。そんな確信さえある。

だから奇跡の現人神の末裔たる私が、目の前で奇跡を見せる『人間』に対抗心を持つのも、また当然の成り行きだったのだろう。

・ 早苗。進展。倒れていた娘と誰かが合流して、ゆっくり南？東？に進み始めたつて。・

諏訪子様の続報が来て、我に返った。

思考を切り替えていると、今の声が聞こえていたのか夢月さんがキョロキョロしている。

あなたが身体に巻きつけている蛇が御遣いの神様で、今はそこを中継して言葉を届けてるんですよ、と教えたらどんな反応するだろう？

なんてイタズラ心も湧くが、すぐそれどころじゃないと思ひ直す。

先を越されただけなら別に構わないが、良からぬことを企んでいる輩を知る身からすると、一応現場を確認して安心しておきたいのだ。これまで島での生活は楽しかったのに、後味の悪くなりそうな事は早めに片付けておくに限る。

だから夢月さんにわからせるのは後だ。

私は頭の中で聞かされていた場所を描き、ざっとここからのルート
を算出して、夢月さん達に告げた。

「今の目的地は島の北東の森です」

「今の？」

「はい。ゆっくり南東……というか多分浜辺方面に移動しているよう
で」

夢月さんはともかく、二三矢さんは何故それがわかるのか疑問だろ
うが、説明している時間的余裕はない。

それに予感のようなものがあるのだ。

早く駆けつけなければ、チャンスがなくなってしまうような。夢月
さんや二三矢さんにお返しできなくなるような。

あるいは——とても面白いことを逃してしまうような予感があ
る。

「この天候でゆっくりってことは、助けを求めるっ—か、慎重に動いて
るか怪我してるっぽいな」

「……おそらくそうでしょう」

「なら話すより早く向かった方がいいか」

それにしても絶妙に欲しいフォローを、欲しい時にしてくれるこの
人は、一体何者なんだろう？

自然と話すより行動する流れにしてくれた夢月さんに改めて疑問
が湧いてくるが、それは置いておいて私達は一度領き合おうと駆け出し
た。

65、迷言

雨雲のせいか、森の中なせいか、まだ真夏の16時過ぎだというのに少し暗くなってきた。それもあって、この辺は毎日通っていて見慣れている森だというのに怖い雰囲気を感じる。

と、怖がりながらも異変を見逃さないように進んでいる時、なにか大きな物が滑る音が聞こえた。

「あつちには確かキツめの崖があつたはずだ！ 誰か落ちたかもしれないぞ!？」

「急ぎましょう!」

四方が即座に状況を把握し、提案する。

僕はぬかるんだ地面に気をつけながら、急いで音が聞こえた方へ向かった。

幸いにも先程まで降っていた大粒の雨ではなく、小雨になっていて視界は確保できる。これなら僕はともかく、他が見落とすようなことはないだろう。

不安材料は四方の言った崖に落ちた可能性だが、滑る音が聞こえたということは近くの傾斜の方に落ちた可能性が高い。よかつたとは言えなくとも、まだマシと言えなくもない。

そして小道を外れ音のした方へ向かうと、そこに居たのは――。

地に倒れ伏した女子を見下ろし、冷たい目をしているラスボス風味な綾小路清隆だった。

まあでも、正直東風谷の急ぎ具合で、途中からなんとなくそんな予感もしていた。

良くも悪くも東風谷に影響を与えられる奴で近くにいないのは、左倉を除けば綾小路だけだからだ。その上で、助けに行こうつてのに嬉しげな雰囲気も僅かに漂わせてくれば、結果論だが綾小路をはっ倒せるチャンスでも来たのかなあ？ という憶測が無理矢理成り立つ。

だから四方はともかく、僕には恐怖はあっても動揺はない。そう自分に言い聞かせればあら不思議。その通りっばい気分になってくる

ではないか。

東風谷に至っては、好機到来とばかりにテンション爆上げ再びである。こういう時は頼もしい。おかげで一瞬にして冷静に戻れた。

「あーっはっはっは！ ついに尻尾を出しましたね、この小悪党が!!! この私が成敗してくれます!!」

「はあっ!!? なんでもここにお前らが!!」

状況を見るが早いか高笑いしながら、傾斜や泥濘をものともせず迷いなく飛びかかる東風谷と、驚きつつも即座に応戦する綾小路。

しかし、東風谷の台詞内容自体は状況的にも正義っぽいのに、ぶっ飛ばしたい私欲を色濃く纏っているあたりどうしようもなく悪だ。もしこれで綾小路まで「オレ様の道具ごときがあ!」とか言い出したら、完全に悪VS悪の構図である。

一方、心構えができていた僕は、即座に救助から行動指針を切り替えることができた。

だから、ほぼ不意打ちの飛び蹴りを受けたことでそれなりに距離が離れた綾小路へ、東風谷の物理とは別に精神から追撃を加えておく。「あくあ。やっちまったな綾小路。

ま、安心するといい。友達のよしみだ。骨は拾ってやるよ」

「!?!」
とはいえ僕は東風谷の行動に便乗して、ジョークを飛ばしてみただけだ。

すると、勢いよく僕を見る綾小路…とついでに四方。

あつ、そのせいで綾小路にいいのが一発入った。油断大敵ってやつだな。まあ、僅かに混乱しつつも計算尽くなわけだが。

しかし客観的に見てだ。

さつき聞こえた人が滑り落ちるような音。

倒れ伏す女子。

その女子を、雨の中冷たい目で見下ろす綾小路。

——どう見ても3アウトの事案発生です。ありがとうございまして。綾小路先生の来世にご期待ください。

とか言いたくなる状況なのは間違いないだろう。

だが正直言つて綾小路がそんな考えなしの馬鹿ではないことは、この場の誰もがわかつている。東風谷でさえだ。

ヤルとすれば、完全犯罪以外を狙わない男だ。

なので多分、純粹に間が悪すぎた結果の現状なのだろう。

ただそれはそれとして、東風谷のついでに僕にも幸運の日が訪れていた。

まずは無駄にしないよう綾小路を東風谷に倒してもらって、危ない事にならない保険に四方を残し、僕は雑事を片付ける……フリをしよう。

といつても、見ている以外では倒れてる女子を船に運ぶ程度しか他にやることはないが。

「東風谷く。倒せるなら倒してもいいけど、無理めなら適当に時間稼いでいて〜」

「了解…っでつす！ はっ！」

「おまつ、左京っ！ ぐ、気づいてるだろ!? 止めろよ!! うおっ」

「うん無理。諦めてやられてくれ」

「軽すぎるだろ!! そんな簡単に諦めんよ!」

そんな考え事をしながら倒れている女子のところへ行くと——
げっ。堀北さんじゃん——軽く診察してみる。

素人診察だが、多分風邪だとは思ふ。ただこんな体調で雨に降られて急激に悪化しているっぽい。更にいくつか殴られたような打撲痕まであり、付着する泥から予想はできていたが、さっきの何かが滑り落ちる音は堀北さんか綾小路、もしくは両方で確定だ。

しかしタイミングを図りながら観戦していると、戦っている二人の凄まじさがよく分かる。

この環境下での東風谷の身のこなしも凄まじいが、特に最初の不意打ちと言葉による盤外攻撃の時以外、雨と泥濘の中でクリーンヒットを貰わずに躲し続けている綾小路はどんな目と体幹をしてるんだ？

何らかの武術の有段者クラスとかなんだろうか。

喧嘩には詳しくないが、これは金が取れるレベルではなからうか？
ド素人の僕から見てもすら相当迫力がある。早すぎてよく見えない

事を除けば……。

これだと東風谷がやりすぎないように見ているのも難しい。だが今は少しでも確率を上げたい。そのジレンマが鬱陶しい。

何故かいつものように殴り合いを止めに入らず、静かな目で見ている四方も微妙に気になるが、ジレンマを振り払う意味も込めて、ブラフを用いて綾小路にデバフを重ねがけしておこう。

でももういつそ東風谷がクリティカルとか出してくれないだろうか？ それだと流石にまづいか。

「四方は、あいつらがヤバいことにならないよう見張ってってくれるか？ 僕は堀北さんを船に運どくわ」

「本当にそr」

「おいしいいい!! 左京！ 東風谷を止めてくれっ!! お前ならできらるだろ!! 終わる！ このままだと勝っても負けても、俺の高校生活が終わってしまう!!」

すると四方の返答を遮るように、絶叫とまではいかないが東風谷の攻撃を掠らせながら、見たこともないくらい必死に訴える綾小路。能力的にはまだ四方に頼んだ方が目があると思うのだが、それを聞いてちよつと余裕を削りすぎたかと反省する。

東風谷も攻撃しながら通報を仄めかして煽っていたので、尚更不名誉で不利な事になる予測が綾小路の内部で焦りを加速させていたのだろう。

またまた方針変更だ。

「あー、東風谷？ 悪いけど、譲ってくれない？」

「夢月さんにですか？ 構いませんよ」

「なあお前ら……ちよつと切り替えが早すぎないか……。見ててハラハラしてしょうがないんだが」

「……本当に止まった？」

だからデバフがけを中断し、ついでの詫びを込めて割り込む。

思った通り東風谷は冷静さを保っていたが、素直に止まってくれた事には感謝だな。

正直、まだ少し早い気もするが切り札を1枚切ろうと思う。

「ま、つーわけで…だな」

しかし、この流れならどうにか押し切れる。
宣戦布告の時間だ。

「――僕と勝負だ綾小路」

「……なに？」

「いつか約束した通りに、ぶっ倒してやるよ」

「っ！　ここで切ってくるか」

「夢月さん……！」

これ以上やって方が一、東風谷がやりすぎて綾小路が本気になってしまうと、勘だが東風谷の方が僅かに分が悪い気がする。それならこの状態を引き継いで僕が交代するのがベターだ。

ただ勝負の前に片付けはしとかなないと、別の後味が悪いことが発生するかもしれないと思ったので、あつちは東風谷に頼んでおく。

「東風谷は倒れてる堀北さんを船まで運んでくれ。他クラスとはいえこの場には女子がお前しかいないし、意識がなく結構な熱もあつた。悠長にしてられないかもしれん。特急で頼む」

「はあ。しかたないですね。私が天誅を下したかったのですが」

「悪いな。綾小路もそれで納得してくれ」

「………ああ、わかった。今はそれしかないみたいだな」

東風谷なら、人を背負っても一人で安全に動ける。

そして、さり気なく綾小路にも条件を呑ませる。

これで後顧の憂いはほぼなくなつたと見ていいだろう。

「あれだけ嬉々として殴りかかっていたのに、随分あっさり譲るな」

「二三矢さん。私は、どうあつても気に食わない綾なんとかが痛い目に遭えばいいんですよ」

「左京が勝つかはわからないじゃないか」

「本気で言ってます？　夢月さんがこの場面で負けるような人だったら、この私や神様方が認めることはありませんよ」

「……」

東風谷と四方の会話を聞き流しながら、頭の中で言葉と流れを組み

立てていく。

交代して綾小路を観察・対峙したからこそわかることもあるのだ。おそらく東風谷は本気は本気で殴りかかったんだろうが、彼女の切り札は切っていない気がする。底知れないポテンシャルである。

この点を考慮に入れると、殴りかかったのはどちらかというところ。ポートの意味合いもあつたのではなからうか？

目立たないよう腹を抑えている綾小路のダメージは、多分僕の交代を受け入れさせ、かつなにをするにしろ僕が有利になる程度に見える。

東風谷自身じゃなく、僕の方が気持ち良く勝つと信頼されているとしたら――。

それに応えなきや僕じゃないよな。

東風谷の期待に伝えて、やる気になり始めている綾小路を更に追加で無駄に煽ってやろう。

「おい綾小路。言われてるぞ。どうあつても気に食わないだつてさ」

「いや、何で勝負するかは知らないが、お前が…『夢月』の方が、逆に窮地にいるんじゃないのか？ 想定外の勝負だが、ここまで破られた以上、今までの考えは一度捨てるつもりだ。

――オレは夢月との勝負で出し惜しみするつもりはない」

「望むところだ」

「そしてお前が何をしようと、夢月とオレの1対1なら勝算には圧倒的な差がある」

「その通りだな」

「――っ。お前は……」

僕の狙いを見抜かれているのかもしれないが、それでも綾小路は望む言葉を返してくれた。綾小路の性格的に八方塞がりの東風谷戦を回避さえできたら、なあなあで流そうとする可能性もあつたのだ。

これは、綾小路も少しは僕自身を認めていると思っていいたいのだろうか？

そう考えると嬉しくて、もう一味加えたくなってきた。

勝手なりクエストに伝えて、凡人転生者のやり方で天才様に一泡吹

かせてやろう。

「しっかし、窮地ねえ」

「……東風谷が言っていることを考えれば、負けたら認められていた事を裏切る事になるだろう？　夢月なら東風谷から見放される可能性も考えられるはずだ」

「素朴な疑問なんだが、それをもって今の僕の状況が窮地？　ははは。いつになく面白い冗談だ」

「笑える要素なんか……あつたか？」

不思議そうに聞いてくる綾小路が本当に面白くて笑いが漏れる。

単純な殴り合いならいざしらず、〃見当外れ〃な窮地と、ほとんど僕にルール設定を投げたような流れでの驕りを、完膚なきまでに打ち碎かれた綾小路を想像するだけで面白い。

まあ逆の立場だったら、ここぞとばかりに代わりのアドバンテージを取りに行っていただろう僕基準で考えるのもなんなのだが……。

なんにしろこの油断と好機を逃す手はない。

いつそ勝ちに行こう。

「東風谷と言い争った時のように。葛城と将棋した時のように。

最終地点がはつきり見えた僕を止めることなんてできないと教えてやるよ」

普通なら僕単独では綾小路には勝てない。

当然、それはわかつている。

その上で、勝つのが当たり前のように振る舞う。

これこそが僕の美学だ。

「まだ気づかないか？」

この状況は確かに想定外だし、遭遇戦みたいなものだ。だけど……：悪いな綾小路。こんな事もあろうかと、お前にも通用する手札はいくつか用意してある。弱点を突く奇策から、凡人御用達な脳死のゴリ押しまでだ」

不思議なモノでも見ているかのように目を見開いている綾小路に、先制の大ボラをぶちかます。

今からお前の〃求めていた〃敗北ってやつをプレゼントしてやる

よ。

「あえて言おう。」

この状況は待ちに徹した僕が作り出したものだ」

ハツタリであるのは誰の目にも明らか。

それでもこの言葉で場の流れを全て僕に引き寄せてやる。

こういう凡人の戦い方をなんていうか知っているか綾小路？

「——今回は、負けるビジョンが浮かばないんだよ。たとえばほぼ全ての能力で僕の方が圧倒的に劣っているととしても、な」

力押しっていうんだぞ？

まず手始めに場を食った。

綾小路レベルだと焼け石に水だろうが、譲ってくれた東風谷のご期待とあらばしかたない。僕自身が全力で楽しみつつ、煽りでギャラリーも楽しませないとな。

「四方には審判をお願い。」

物騒な勝負は提案しないけど、綾小路が受けてくれるかがまだ微妙にアレなんで」

「いや……さっきの宣戦布告に加えて、夢月とは約束もあるからな。受けてやるさ」

「ふっ。いい度胸だ。まだ勝負内容も話してないのにな」

地味に綾小路につられたのか、四方もいつもの寝ぼけ眼から真剣バージョンの顔になっている。

ただこんな人のいない場で四方の札を綾小路に晒すのは愚策になるので、安全の為の保険に起用しつつ、さり気なく綾小路を観察できるポジションにしておく。

「……でもお前、東風谷のことがあったとはいえ、こんな場面でいきなり勝負を挑むとか、どうしていつも過程をすっ飛ばすんだよ」

「それが僕だからだな」

「答えになってないぞ？」

「気にするな。綾小路を相手にして、勝率が僕換算で1割弱もある真

剣勝負の機会はあるなくなりな。無駄にはできないと思っちゃたんだよ」

「1割・・・だと？　それが理解できてオレと……？」
ちなみにこれも本音。

実際、坂を転げ落ち、東風谷の数発を受けた状態の綾小路とじゃなければ、正面对決では確実に勝率1割どころか1%すら届かない。

なので、すぐに元に戻るとわかった上でも手を抜かず、綾小路にまたしても想定外というデバフをかけていく。凡人が天才に唯一対抗することを許されたハツタリで。

「1割弱『も』ってお前……」

「前々から思ってたんだが、夢月のオレの評価が異常に高くないか？

なにをもつて判断してるんだ？」

「勘」

「勘……!？」

それにほぼ勝てないと思ってるなら、それこそ四方や東風谷を」

「それじゃあ約束が果たせない。お前を最初に倒すのは僕だ。綾小路打倒計画その1で、それを証明してやる」

「おい、それって」

四方と東風谷には少し話してあったが、その内容が違いすぎることに戸惑っているようだ。

まあ今は綾小路優先である。

やはり綾小路には、重ねがけしてもすぐにデバフ解除されてデフォルト状態に戻る。

あの精神性の上に凍てつく波動持ちとか、やっぱり綾小路はラスボスだろ。キヤットルーキーには登場してなかったはずなのだが……。

だがそれが正しいとしても、なんてことない凡人にひたすら精神を削られた経験など天才様にあるかな？　じわじわ削って勝負までに更なる油断を呼び込み、僕の勝率を上げさせてもらう。

僕達が来た直後の綾小路の目を見る限り、僕でなければ勝ったとしても、綾小路は機械的にリベンジを狙うだけになる。四方であれ、東風谷であれ、同格の天才が勝つのでは駄目な気がするのだ。

そしてそんなつまらない関係にするくらいなら、しんどかろうが約束通りに僕が倒す。

綾小路の幻想……根底にあるモノをぶっ壊してでも、綾小路に僕含めた友達だけは駒のように使わせるものか。

僕が気付けるうちは、綾小路に決定的な一線を超えさせはしない。絶対負かして心を折って在り方を変え、悔しがらせてやる。

「あまり僕を乳首るなよ？ たとえ10回中1回しか勝てなくても、最初にその1回を引っ張ってこればいいだけだ」

「見くびるな、な。ここでふざけるなよ」

軽い攪乱であってふざけたつもりはないのだが、四方に無駄に入っていた力が抜けたようなので、結果オーライだろう。

「ま、気楽にやろうじゃないか。僕が勝つのは確定事項だ」

「……」

「さつき左京は勝つ確率1割とか言ってたような……?」

四方のツツコミから努めて目を逸らして、話がひと段落?したその時、妙に静かにしていた東風谷が目を輝かせて——あ? なんて獲物を横取りした上、あそこの堀北さんを運ぶだけのコイツがこんな上機嫌なんだ?——口を開いた。

よくわからないが、快く頼みを受けてくれるようなら問題ない……のか? コイツだけはマジで四方や綾小路以上に行動原理が読めない時があるから困る。

「ふふっ。二三矢さん。見てればわかりますよ。確率なんて夢月さんには意味がないってこと……」

「それはどういう」

「——夢月さんを相手するなら、常識に囚われてはいけないのですよ!」

しかもなんだ、この……迷言?

遠回しに、僕に常識がないみたいに言わないでくれよ。

自信満々に嬉々とした笑顔を浮かべながら言うから、無駄に説得力や雰囲気が出てるじゃん。

「じゃあ私はあの人を運んできますので、あとはよろしくです」

東風谷は言うだけ言うと、倒れたままだった堀北さんを軽く持ち上げ、あっさり船の方へと歩いていった。

よくわからなかったが、僕の煽りは彼女を満足させられたのだろうか？

これで譲ってもらった分とサポートの分がチャラになってくれると、綾小路を倒した後の面倒が一つなくなるのだが。

66、夢（後半、綾小路視点）

しかし……東風谷のこれはどっちの意味だ？

まあやることは変わらないからどうでもいいか。それより東風谷の見てないところで負けるだけならまだしも、ズルしたらぶっ飛ばされそうだ。

てか、あいつに貫った御札ってズルに入らないよな？ まさか捨てるわけにもいけないし、今更思い当たっても、もうこの場に東風谷は居ないから渡しておくこともできない。

……これ以上、変なことを思いついたり、必要な事を忘れないうちに、言うべきことは言っておこう。

「東風谷の事はともかく、話を戻すぞ。」

景品が何かと、ルール……というほどのものでもないが、勝負内容を言うから綾小路は受けるか否かだけ答えてくれ。もう聞いてるけど一応な」

「わかった」

「まず景品は——勝った方が相手に一度だけ言うことを聞かせる事ができる、だ」

「勝率が低い勝負で、そんなリスクいな」

「ああ。僕の要求は既に決まっている。綾小路『清隆』が卒業まで桜プロダクションに所属する事だ。尤も、所属が条件であって一つを除いて仕事はしなくてもいいし、してくれるなら給料も出す。」

だが、船に戻るまでは最低限の手続きもできないから、その時に詳しく説明しよう」

「……まるでもう勝ったかのような言い方だな」

「勝ってるんだよ。矛盾するようだが、勝率が低くとも100%勝つつもりでやる。それが勝負する心意気ってもんだ」

狙いは強欲に一石四鳥を。

僕は基本欲張りなのだ。

この手は、なにより綾小路の父ちゃんと対峙することがあった場

合、息子小路に後ろから刺されない楔を打ち込める点大きい。こればかりはその時になってみないとわからないが。

ただ僕への命令権などそこまで欲しくはないかもだし、綾小路が違うものがないならこれは変えてもいい。

大したことじゃないと、綾小路に僅かでも思わせられたら勝ち目も上がるので、それはそれで助かる。

「それから勝負内容は、野球……のような大道芸だ」

「だ、大道芸？」

「適当な棒と石を拾って、石をなるべく自分の真上に投げる。そして落下地点を予測してそこへ移動。場所を決めたらもう目線を上げずに、地面へ着く前に棒でヒットさせれば勝ち」

これは四方がトムキャッツの売り込み時に披露したデモンストレーションの亜種である。

全力で投げれば難しくなるが、適当に放ればせいぜい80〜100kmが降ってくる計算だ。尤も今は雨が降ってるので、多少不確定要素も増えている。

分が悪いのは変わらないが、天候などの運要素も馬鹿にできず、反射神経ではなく勘とある程度の計算能力を持つ僕は、最低限勝負の土俵に立てるだけの能力がある。

それに——不思議と負けるとは思えなかった。

「ん？ それだと左京と綾小路どちらもヒットさせたらどうなるんだ？」

「その場合、両者が勝ち。お互いに相手に言う事を聞かせられる、って事で。勿論、相殺するのもありだ。つまらないけどな。」

おっと、どちらも失敗したらサドンデスにしよう。大した時間はかからないゲームだし、本格的に暗くなるまでには決着つくだろう」

「……むしろ普通の日でも当てるのは相当難しいだろこれ。オレでも何度かは調整が必要そうだ」

「そう言って1〜2回ぐらいしか猶予はないんだろ？ あー、いやだいやだ。天才ってのはこれだから、チートとか言われるんだよ」

どうやら内容に目が行って、景品の条件は普通に受けてくれそう

だ。

これは僥倖。

故意に開けざるをえない穴にツッコまれたら面倒になっていた。佐倉関係は本人の了承を得た上で、最低限の縛りを課してからだ。今は「言えない」としか言えない。

ついでにいえば、サドンデスなど端からさせる気はないので、そつちにひっかかってくれたのも助かった。

「ともかくこれで勝負内容は大体開示したが、どうする綾小路？ 受けるか？」

それとも」

トドメに勿体をつけるように一呼吸置き、自信満々な自分を意識して挑発する。

「――逃げるか？」

東風谷が居ないからもうあまり挑発的な態度は意味がないが、やはりこういうデバフ付与を気づかれない煽りは楽しい。

綾小路のような格上相手なら、なおさら格別のワクワク感がある。

そして僕が楽しみに煽ったという事実は、綾小路の答えを一つの結果へと導いていくのだ。

「オレは受けると言っただろう」

そう。承諾という形に。

最大の壁を超えても、僕は手を緩める事はしない。

忘れていた、という風に条件を追加しておく。

「ああ、そうだ。石を投げる高さなんだが、10mを最低限の目安にしたい。高い分にはいくらかでも高くしていいけど、低かったらノーカノンってことだな。」

四方。これって判定できるか？ 微妙に暗くなってきて、雨まで降ってるけど」

「できるとは思うが、一度実際に見てみたいな。それとついでだし、ゲーム自体もやってみてくれないか？ 二人でやれば不公平もない

だろ」

「綾小路？」

「ああ、オレは別に構わない」

「よし。んじや、石を投げて大体を計算しつつ打ってみよう。ハンデとして、もしも練習で綾小路が当てても勝ちつて条件も付ける」

一つ一つは小さくても大分積み上がってきたな。

綾小路のポテンシャルが僕の想定以上なら、これでチャンスは多くて1回。

ま、問題ないだろう。

「いいのか？　あまりオレに有利になる条件を増やさない方がいいんじゃないか？」

「ああ、なるほど。それほど難しいってことか」

「四方が正解。綾小路が想像するより、雨も風もある中で真上から降ってくる石を捉えるのは難事だぞ。まして1度場所を決めたら確認も動けもしないんだから」

こうは言ったが、綾小路も四方も1度でも練習して『条件が変わらなければ』、2度目には成功させるだろう。

この適応能力と学習能力、あるいは集中力とインスピレーションが天才たる所以なのだ。

僕では逆立ちしてもそんな真似はできない。

で、道具を揃えて開けた場所に移動し、やってみたその練習の結果だが。

「うおっ！

……少し離れすぎてたか」

「あー、僕も駄目だったよ。

で、四方。高さの判定……とついでに場所を決めた後に僕達が上を向かないかの判定はできたか？」

二人共、当然失敗した。

それでも落ちてきた石が綾小路はニアミス、僕は届きもしない場所という差が明確になったが。

「ああ。石が一定ラインを超えたら、お前ら二人の頭に注意を移すよ。それで大丈夫だろう」

まあこれは四方が審判できるかの確認だから、綾小路が当てさえしなければ問題ない。

それにしても審判と一口に言っても、暗くなり始めた時刻・天候なのに即興でそれが可能な時点で四方も相当だ。

僕が四方を改めて感心して見ていると、僅かに心配そうな気持ちを滲ませて僕に念を押してきた。

「それは大丈夫なんだが……左京は本当に大丈夫か？　言つては悪いが、さっきは当たる気配もなかったぞ」

「……」

「問題ないな。できないなら、今できるようになればいい。

ただそれだけのことだろうか？」

「——っ！」

「そ、それは……あの時の……」

四方も綾小路も息を呑むような仕草をしているが、実のところそこまでの確信はない。

ただ僕の勘ができると言っているだけだ。

かといって完全に運と勘頼りというわけでもなく、切り札っぽいモノもあり……なにより、なんとというか長年の相棒が傍にいるような、僕を助けてくれていいる存在がいるような……そんな予感染みたものがある。

だからなのか——綾小路には悪いが本当に負ける気がしない。

「さあ綾小路。そろそろやろうか」

「……ああ」

戸惑っているようなこれまでに見たことのない綾小路だが、素直に少し離れた位置で準備を整えている。勿論、僕の方も何ら気負いなく投げる姿勢を取った。

それを確認した四方が、準備はできたかと僕と綾小路に目で訴えてくる。こちらもいつもと違う気配があるが、それでも四方は合図を口に出してくれた。

「それでは——始めっ!!」

僕はそれなりに力を込め、綾小路はかなりの余裕を残して、上方へと石を投射した。

雨であまり見えないが、僕の目では同じくらいの高さに見える。

とりあえず高さはクリアしたということだ。

ならば、あとは以前のように集中力をできるだけ四方の域に近づけるだけだ。

神経を針の先のように研ぎ澄ませ、他の事は意識してシャットアウトしていく。

《………ほう》

《大丈夫》

そして集中モードに移行してから石の落下地点を予測し、そこへ移動する。

投射時に込めた力からして、おそらくそんなに時間的余裕はない。ギリギリになる。

《もう少し前………はい。そこです》

僕はざっと計算して大体の目星だけ付けると、ぬかるみの中で僅かに硬さが残る場所に陣取って構えた。

《まだです。あと2秒》

「——さか!? ……茶………ようっ!!」

それと脳内で数を数えて、タイミングを図りながら更に集中力を高める。

水上バイクの時のように世界から音が消えていくような錯覚の中、すっぱ抜けないように枝を握り直し、その時だけを待つ。

そして——。

——来る!

《今です!!!》

最大級の予感と共に何か聞こえたのと頭の片隅で知覚した時には、自然に全力で枝を振り抜いていた。

乾いた音………と思いきや、湿った水音みたいな気持ち良くない打撃音が聞こえてくる。

「次いで、雨の中を粘着質な音と共に転がる石。僕の振り抜いた枝は、見事投げた石を捕捉することができたようだ。」

集中力が切れたのか、限界以上の力を使ってしまったのか、僕は濡れた地面だというのに座り込み、息を吐いて独りごちた。

「ぶふあく。とりあえず僕の方は当たったみたいだけど、あつちはどうなったんだ？」

「左京の勝ちだ」

「およ？ 四方？」

「……オレの方は強風で流されて木に落ちた」

「綾小路まで？ なんだよその変な雰囲気……」

「どうやら僕が勝っていたらしい。」

それはいいのだが……そんな二人して信じられない、みたいに見られても僕はどうしたらいいんだ？ もつとこう……悔しがるとか、そんな馬鹿な話があるかあ！ とか、このオレが負けた……だど!? とか負けたんならそれっぽいリアクションをしてほしい。気持ち良く煽れないじゃん。

「左京………石を投げた後に落ちるまでの短時間で、凄い土砂降りと急な強風が吹いたのには気づいていたか？」

「ふえ？ あ、気づいてないわ。てか、んなことあったのか？ どうも夢中になりすぎてたみたいだな多分」

「……まさか天候を計算に入れた？」

「………ファンタジーじゃあるまいし、流石にそんなわけ……ないだろう。オレも信じられないが、まだ石だけに集中した結果、風雨にさえ気づかなかつたと考える方が現実味がある。夢月の石が風に流されなかったのも偶々だろう」

まあ、正直煽る余力もないくらいに消耗したし、とりあえず約束を果たしたことで幕引きといこうか。

「これで約束は果たしたから、次からは気楽にやらせてもらおうぞ綾小

路」

ホントこれだよ。

四方の時にも思ったが、こんなに精神削られる勝負はなるべくしたくない。

「なあ左京。結局、約束ってなんだったんだ？」

「四方には言ってなかったっけ？ 停学になる前に、綾小路から倒してほしいって言われた事があってな。じゃあ、いっちょやってみるかってことで、いくつか想定してた。ちなみにシューティングゲームもその一つ」

「……あれって、そんな軽いノリだったのか？」

「……………ははは。お前は大事な奴だよ。あのゲーム以外でこんな隠し玉を用意してるなんてな」

別に用意していたわけじゃなく半分思いつきだったのだが、切り札（初日に東風谷から貰った風の後押しを受ける事ができるという御札）が予想以上に有能だったのだろう。風に流されたという綾小路の石と違って、僕にはきちんと届く位置に落ちてきてくれたのだから。

そのおかげかは知らんけど。

なににせよ、やれることはやって「表向き」の勝負は決着がつき、真意も綾小路には伝わっていると信じることにしよう。

まったく面倒くさい友達である。

茶柱の油断を誘う為に、堀北に対して打った手や最低限のCP確

保、運の悪い偶然から攻撃してきた東風谷。

その東風谷の代わりを言い出したことで始まった夢月との勝負。

左腕と腹にそれぞれ受けた東風谷の一撃は凄まじく、この時点では夢月が代わってくれて助かった。と思っていた。

しかしそのダメージが残っていたオレは油断していなかった。

それ以前に、不可解な点はあれど『あの男』でさえ一蹴する夢月との一戦。油断できるわけがない。

尤も、練習の時に見た限りでは最低でも夢月の勝ちにはならない。そう確信できるほどに、ある種がっかりしたとさえ言える実力にしか見えなかった。

手を抜いているようには見えず、到底ヒットする予想はできなかつたから、本人が予想する通り夢月の勝率は1割未満だったはずだ。

夢月本来の武器は発想と指揮能力だと思っっているから、オレから見るとわざわざ持ち味を殺した勝負を挑んできたようにしか見えなかった。

加えて、練習時点でオレの微調整は完了していた。

夢月よりオレの勝率の方がはるかに高いゲーム。

東風谷との言い争いの時とは違い、口やイカサマなどで小細工もできず、夢月の持ち味を活かすどころか、策や手駒を利用することさえ不可能なルール。

正直、幼児に挑発されて乗った軍人の心境である。

だから本当に本気で真正面からやりあえば、確実に勝てる勝負だと思っていた。

石を投射する時も、練習時の夢月とほぼ同じ高さに調節する余裕まであった。

奇妙な雰囲気は感じていたが、口だけだったかと僅かにがっかりすらしていた。

そうして始まった本番の初回は、突然の豪雨と強風という不運に見舞われたが、これは夢月にも影響する。

当然、サドンデスになるだろう。

「ま、まさか!? 無茶だ左京っ!!!」

と、その時四方の叫ぶ声が聞こえた。

落ちてくる前にどこかへ飛んでいったオレの石に見切りを付け、その声に釣られて夢月の方を見ると。

——激しい雨の中、不格好なスウィングで小石をヒットする夢月が微かに見えた。

ちようどオレの石を吹き飛ばすほど、雨と風が強くなっていたタイミングだというのに。

「……………は？　あり得ないだろう」

四方が呆然と零した声が何故か聞こえた。

それはオレの——。

オレはいつになく高ぶっている内心を抑えるように、静かに深く吐息をついた。

得意分野や知識を駆使しての詰将棋のごとき追い込み。かと思えば、勝算の薄い勝負を挑んだ上でひっくり返してくる理解不能。佐倉や一之瀬から困ったところはああるけど優しく甘いと言われているにも関わらず、目的の為なら即座に諸々を斬り捨ててくる危うさ。堀北という関わりがない相手に対しては、冷徹なまでの判断。

オレをして得体がしれないこの友達は、時が経つにつれ賛否の別れる奴になるだろう。

前に言っていた東風谷や櫛田と同じく悪寄り、という自己評価もある。周囲からは何を考えてこんな奴と友達なんてやってるのかと、不気味がられてもおかしくない。

このように夢月は印象の良い言葉があまり浮かばない奴ではあるが、同時にオレは嬉しくもあつた。

オレ自身が認めて感じ入るほどの『良くない』奴に、認められているという事実が。

不可能だと、勝算などない、と言い切れない程度の小さい可能性を絶対に可能であるかのように言い切り、周囲にまで信じさせて実現さ

せてしまう奴が。

これまでになく面白くて、ある意味で頼もしい。充分に役立ってくれた堀北すら霞むほどの面白い『遊び』だった。なにせ油断は僅かにあったもののまず間違いないと勝てると確信した勝負で、出し惜しみしないと云ったオレが本気でやってひっくり返されたのだ。

夢月に負けた、と落ち着いた今は素直にそう思えるほど綺麗にありえない方法で。

これは前段階の策を破られたことでも、勝負自体でも、その結果でもない。

どこか決定的な部分でオレは負けを認めさせられた。

クラス競争も。茶柱の思惑や堀北が追い込まれたのも。他の奴等にも。

誰を裏切ろうと、どんな犠牲を払おうと、過程すら関係ない。

最後にオレが勝っていればそれでいい。

全ての人間がその為の道具でしかない。

内心で堀北に話していた時にはオレの中に確かにあったそんな考えが。

その為か、夢月の影響なのか、途端につまらないモノに思えてくる。

——僕に勝つには、『あそこ』のやり方では不足だぞ？

気のせいだろうが、オレには夢月がそう言っている気がした。

「……次？」

「勝負回数を1回限りなんて決めてないし、まだゲームも作ってる最中だ。楽はできなかつたけど楽しかったし、またやろう」

「……………ははっ。ははははは!! ああ、またやろうか!」

そしてそれは別の方向から見れば、夢月はオレを楽しませるのではなく、一緒に楽しもうと誘っているのだ。

『次』という言葉と込められた意味に、柄にもなく楽しい感情が湧き上がり、自然と笑えてくる。

一般的にとっても褒められたものではない事を画策したオレを察した上で、勝算を考えないで真正面から挑んできて勝ちをもぎ取ってい

く馬鹿で愚か者丸出しな——こんなに嬉しいやり方をオレは知らない。

これが友達というモノなのだろうか？

「いつでも来いド3流。次は格の違いを教えてくださいよ？」

「あれ？ それだと左京の方にもド3流がかかってないか？」

「実際、僕はいいところ2流止まりだから当然だろ。今回は力押しのごり押しに運頼みを重ねて…その上で何重の偶然の結果だと思ってる？ 僕が必要じゃなかったら、次は絶対誰かにぶん投げてやることをここで宣言しておくからな」

「投げられる奴は大変だな」

「何を他人事のように……」

四方や東風谷……綾小路に投げるに決まってるじゃないか」

「おい」

「……………ははっ」

なかなか収まらない嬉しさの衝動を誤魔化そうと、夜の帳が降りてきて暗くなり、いまだ雨が降る空を仰ぐ。

余韻もなく通常営業に戻った夢月と四方の漫才を聞きながら、不思議な感慨が湧いてくる。

これまで敗者を見送ることはあっても、勝者と語り合うのは初めての経験だ。

敗者はいつも手遅れになってから、自分の惨状を振り返って後悔する。

それは『あそこ』もこの学校も、どこでも変わらないだろうと思っていた。

だが、致命的な敗北でないからか相手が夢月だったからか存外悪い気分ではない。むしろオレは、この雨降るとある無人島でこれまでない爽快な敗北を感じている。

ふと、いつかの月見で夢月が言っていた言葉が頭をよぎる。

東風谷ではないが、気負いもなくオレの『夢』を叶えた夢月という友達と出会えたことを奇跡だとオレは信じ始めていた。

67、幕引き

勝負後の別れ際、ちよつとした会話。

「そういえば夢月」

「ん？」

「オレの事は清隆と呼んでくれないか？ オレだけ名前呼びなのは、友達としてどうかと思うんだが」

「あつ、それなら俺も二三矢で頼む」

「清隆は別にいいけど、二三矢は四方の方が言いやすいんだよなあ」

発音が名字6音から名前4音になる清隆。名字変形2音から名前3音になる二三矢。

うん。やつぱり、「ふみや」より「しつぽー」の方が言いやすい。

「そんな理由!？」

「まさか言いやすいかどうかで判断してたとは……」

「一応言つとくが、これは野郎だけだからな？ いくら言いやすかつたとしても、鬼龍院先輩や橘書紀を名前呼びする度胸は僕にはない」

「……何故、あの二人？」

「名前と名字が同じ文字数の佐倉や東風谷、あと例外の椎名なら、言われたり、聞かないけどOK貰えるなら普通に名前呼びにするよ？ だが、それ以外だと名前を呼べるほど親しい女子自体がない。悲しいことにな」

「一之瀬や櫛田は……？」

「ふとした時の雑談とほぼ事務的な会話しかしたことのないクラス委員長と、友達の友達に近い他クラスの女子に馴れ馴れしくできると？

僕の女性経験値の低さを舐めるな」

「……」

なんか妙な沈黙が漂った気もするが、綾小路改め清隆みたいなイケメンに理解できるとは思っていない。

僕の場合、女子は勝手に親しいと勘違いするとしつぽ返しがあるのだ。なら、僕目線の好意半分は自意識過剰と判断するのが妥当だろ

う。

つまり友好度100点満点中50点が最高得点で、友達補正や貸し借りを加算できる奴だけを僕が名前呼び可能と仮定すれば、理論的には東風谷・佐倉・椎名の3人という解が導き出される。

なんら不思議な事はない。

野郎？

前も思ったが、意識すらしない程度だ。言った通り、せいぜい文字数や言いやすさが判断基準になるくらいだろうか。

そもそもわざわざ宣言してまで名前呼びにする意義がわからない。いつの間にか呼んでいた高円寺や東風谷が近いと思われる。あの二人については、本当にいきなり呼ばれてたから僕からはタイミングを逃し続けているが。

東風谷と合流して清隆と別れるまで、僕達3人は歩きながらこんな感じの適当な話をしたり軽い「情報交換」をしていた。

8月7日。昨日はちよつとしたトラブルもあつたが、なんとか最後まで問題なさそうだ。

島最後のスポット巡りと朝食を終え、Bクラスに礼を告げた金田が去ってしばらく経ち、ようやく試験の終わりを迎える。でも無人島生活は当初の予想と違い、思いついた遊びはだいたい実現できて満喫したので意外と楽しかった。

そんな感想を持ちつつ、今は初期位置に学年全員集合しているところだ。

ただ終了時刻の昼になっても、いまだ先生方が来る気配はない。最後までルーズな事である。

『ただいま試験結果を集計しております。暫くお待ち下さい。既に試験は終了しているため、各自飲み物やお手洗いを希望する場合は休憩所をご利用ください』

そのまま試験終了がアナウンスされた。

しかしまだ船には乗れないようだ。集計結果を発表する為だろうが、早くしてほしい。もう眠くてしかたない。

僕は人混みに巻き込まれないように、なんとか生徒達が一斉に休憩所へ集まって行くのだけは確認し、砂浜から少し離れた目立たない木陰を見つけて座り込む。

見回して見ると、ほぼいないCクラス以外、だいたいの生徒はクラスごとに固まっている。

ただ龍園は金田を連れて、なにかを探すかのようにBやDの集団に行き来しているのが小さく見えた。金田から堀北さんの事を聞いて、彼女を確認したいのかもしれない。

それにしても龍園は50ポイントの保険を捨てて見極めを選んだようだ。なにはともあれ、元気そうで何よりである。

何をするでもなく砂浜の光景を眺めていると、四方と東風谷が寄ってきた。

四方はともかく、東風谷は試験の功労者だろうに、こんな人が居ない場所に来ていいのだろうか？

「……東風谷。お前いいのか？」

「何がです？」

「いや、一之瀬達の近くにいた方が良いんじゃないか？ 今ならきつと勧誘の成功率も高いだろ？ それにトイレとか飲み物とかあるみたいだぞ」

だから一応聞いてみる。

功労者であることに加え、昨日体調不良の堀北さんを船まで運んだことだけは報告してあるので、東風谷の評判はうなぎ登りだろう。

意味がないのでDクラスのキーカードを堀北さんが持っていた事と、綾小路との勝負は報告してないが、ここで勧誘すればクラスメイ卜から守矢信者が獲得できるかもしれない。その為の雨中走破と活動でもあったらうに……。

「必要ありませんよ。それより重要な目的は既に達成していますし」

「あー？」

「……まあ東風谷にとってはそうだろうな」

僕と同じように、こいつらにも他の目的があることは察していたが、東風谷も何かを達成していたのか。

何かは知らないが本人も笑っている上に、四方がわかってそうなので僕は知らなくてもいいだろう。つか、思考を巡らす事すら億劫なレベルで疲れたし眠い。

しかし暑さを物ともせず微睡みかけている僕に、四方が真剣な顔で問いかけてきた。

「左京。まだ解散じゃないけど、個人的に謎が残ってるんだがちよつといいか？」

「んー？　なんかあった？」

「もしかしてこの試験でお前が警戒してたのって、綾小路と……神崎か？」

「……か、神……崎さん？」

あー。やはり四方には気づかれていたようである。結構真面目に聞いてきてるし、こっちも真面目になるか。

というか何気に東風谷。まさか神崎までうる覚えとかお前……。流石に冗談……だよな？

「警戒ってほどじゃないけどな。綾小路はまた別の理由だったし」

「やっぱりか。今回、左京にしては俺達や一之瀬じゃなく、やけに神崎に投げるモノが多かったからな。何かあると睨んでたんだよ」

「そうでしたっけ……？」

他人に関心が薄い東風谷はわからないだろうけど、実際にこの試験で僕が神崎に対して打った誘導策は多いほうだ。といっても、クラス内に神崎だけにとつての面倒の種をいくつか蒔いただけだ。

これは攻撃に意識が向かないような手ばかりだが、5日目に一之瀬とCクラスのビーチに来るまで大丈夫だと確信できなかったのである。

「なんでこんなことをした？」

「あの初動で、最大限クラスの利益になって僕に大打撃がある手を提

案してくる可能性があるのは、神崎くらいかなと思ってた。だから考
える余裕を減らす目的だな」

「クラスの利益だと……?」

「大打撃? 夢月さんにですか?」

この二人は能力が高いくせに、上昇志向は僕と同程度の低さなので
理解できないかもしれない。

でも僕は確信している。

何を犠牲にしようとするかという奴は必ず出てくる。

それが神崎かはわからないが、一之瀬の方針に反対する奴はいつか
理不尽を強いてくる。

サバイバル経験のほとんどない高校生に、テント内に敷くマットす
ら自作させる学校の強いブランク要素まであるのだ。そんな学校か
らしたら、一之瀬の「みんなで仲良く」は気に入らないだろう。なん
らかの方法で反対……戦う事を押し付けてきたり、一之瀬自身が反対
の立場に回るように誘導してきたりする確信があった。

生徒の神崎がどうかではなく学校側がだ。

それが実力主義や自己責任とかいう冷たく平等な世界の現実だか
らだ。

——ハッ! クソくらえだ!

僕にこの世で一番嫌いなモノを簡単に押し付けられると思うなよ
?

是が非でも逃げ切ってみせる。せつかく生まれ直したんだ。高校
生なんて早い時期に二度もあんな目にあつてたまるか。

もう絶対に『楽しさ』を捨てたりするものか!

僕は決意を新たにした。

まあその決意はともかく、ネタバラシだな。

経験値さえあれば誰でも思いつく凡人の考えでも、四方達の実にな
る点があるようなら眠さを堪えて話す価値がある。

「いいか? この試験。うちのクラス最大の利点はなんだった?」

「超絶天才美少女の私ですねっ!」

「団結力……じゃないか?」

「はい、ダメダメ。東風谷は論外。」

「ただけリーダーを指名されても問題ないことだ」

「それがどうしたんだよ」

ペナルティ解除。

この初日に獲得したアドバンテージを応用すれば、安全圏から一方的に他クラスを攻撃できた。そして混乱を巻き起こし、その一方で最大限ポイントを稼ぎまくる。

そんな一人勝ちの策は当然ながら敵を作りまくるが、僕でもここまですり抜けられる程度だし、きつと有能な奴なら更に先の考えを出せたとだろう。

「もし、この状態で走破班全員で『島中』のスポットを独占してたらどうなる？」

「島中……って、もしかして」

「そう。例えば、隙を突いてAとDのベースキャンプを奪う。どちらのクラスリーダーも月見に来てくれるくらいの信用があったんだ。遊びに来たと見せかけて、あちらの拠点を占拠する機会を見つければ不可能ってほどじゃない」

「でもそれは暗黙の了解みたいなものがあるだろ」

「暗黙の了解はルールに定められているわけじゃない。混乱が起こってもうちにポイントのマイナスがないなら、やろうとする奴がいてもおかしくない……と思ってた」

それはあえて言わなかったこの策の裏面だ。

勿論、現時点の一之瀬なら思いついても却下したはず。

だが神崎がどこまで僕の先を行っているかが心配だった。

だから僕はまだしも、東風谷や一之瀬に誘導をかけられないよう攪乱と『僕への』誘導を徹底したのである。

「東風谷がずっと留まれるわけじゃないから一時的にしか無理だろうが、そうして2つのクラスの行き場をなくせば」

「リーダーが簡単に割れるようになって、同士討ちのような形でうち以外が共倒れになる？」

「いえーす。正確にはうちとC以外は0ポイントもあり得たはずだ。」

不当を訴えられても、屁理屈を捏ねて時間を稼ぎ、その間に不満の溜まったクラスの内部分裂を引き起こして、こちらへの目を逸らせばもう勝ち確だ。

初日に僕が全員の前で似たような事を言っただろ？」

「0……か」

「ああ。一応言っとくけど、これはただの思考実験みたいなもんで、僕自身のリスクがかなり大きいから実行する気はなかった。けど……もし圧倒的な勝ちを狙う気がある奴が思いついて提案してくるようなら、できるだけCPを稼ぐ約束がある以上僕は断れない。そうでそうなったら、実現に向けた工作と後始末は滅茶苦茶大変になりそうだな、と。多分、リタイアする者も多く出ただろうし、成否に関わらず僕はおろかBクラスの信用も地に落ちてただろう。

……代わりにAクラスに昇格する目も僅かにあった」

「ああ。Aが何人かリタイアして1044CPポイントを超えればそうなっていましたね」

「ん。東風谷があれ以上にスポットを取りまくって、追加の策でAの獲得ポイントを50以下、つまりうちを指名する分までに誘導できれば可能性が僅かに出てきただろう。見た感じ、あと100ポイントくらいうちが稼ぐのは決して不可能じゃなかったはず」

僕が知る限りでこれを狙う目がある『生徒』は、Bクラスで最も上昇志向が強そうなカースト上位の神崎だけだった。

「……はあ、なるほど。それで神崎というわけか」

「途中で気づいたがその神崎にしろ仲間思いだったから、思いつくのは高い確率じゃなさげだったかな。提案されても一之瀬が当然反対しただろうし」

「だから更に確率を下げる為に、初日から黒幕なんて噂を広めて神崎を攪乱したのか」

「いや、それは単純に説明が面倒かっただけ。本来は解説役だったさ。神崎の思考の方向を、勝つ事以外に誘導できればそれでよかったんだし」

「……神崎。そんな念の為レベルの情報操作で、島にいる間ずっと走

り回ることになるなんて思ってもみなかつたらうに……不憫な」

「うむ。コラテラル・ダメージとはいえご苦勞なことだな」

「お前が言うなよ」

だが別方向に忙しくしたとはいえ、思っていたよりも良い奴だった神崎は、結局最後まで東風谷どころか僕すら利用しようとしなかった。今では彼を悪い方向に見誤って、僕が勇み足的な策を打ってしまった気がしてならない。

取り越し苦勞とはまさにこの事である。

四方達とだらだら話していると、砂浜の方からキインという拡声器の音がして、真嶋先生が現れた。

それを見て整列しようとしている生徒もいたが、わざわざ暑い場所で行きつた事に混ざるつもりはないし声も聞こえるので、注意されるまで僕はこの木陰から動く気はない。四方と東風谷も同じようだ。

真嶋先生も、すぐに楽にしているといいと言ったので本気にさせてもらう。お偉いさんがよく使う無礼講ってやつで、最低限の礼儀だけ残しておけば充分なはずだ。

聞いていると、しばらく相変わらずの上から目線な褒め言葉が続き、ざわめきが消えたり戻ったりしたが特筆すべきものはなく、眠気がぶり返してきたあたりでようやく結果発表になってくれた。

「ではこれより特別試験の順位を発表する。最下位は——Cクラスの100ポイント」

「なにい!?! なんでだよ!」

この結果を受けて、真つ先に一際大きな声を上げたのは、何故か龍園の近くに居た須藤だった。

……いや、あの二人……てか、綾小路や平田もなんで龍園と一緒にいるんだ? 案外、仲良かったのか?

そんな疑問も騒ぎもスルーして、真嶋先生は発表を淡々と続けていく。

「続いて3位はAクラスの170ポイント。2位はBクラスの267

ポイント」

うちは2位か。首位なら色んな奴にドヤれるかと思っただけ、まあ予想の範囲内といったところか。

少しでも頭が回る奴は全て想定済みの順位、そしてポイント。

どよめいているのは、自分できちんと考えていかなかった感じの奴らかな。

「そして1位は………Dクラス。280ポイントで1位となった。以上で結果発表を終わる」

演出の為か、最後まで微妙に溜められて言葉が発せられた。

その効果が一瞬の静寂の後、BクラスとDクラスから爆発したような歓声が巻き起こる。

巻き込まれる前に避難しておいてよかった。この状況なら、ツーンポは遅らせて船に戻るのが吉だろう。あの人混みは僕にはキツすぎる。

「どういうことだよ葛城！」

「お前らが言うなよ!? 試験に協力的じゃなかった奴が、葛城さんを批難する資格なんかあるもんか!!」

再度の大きな声に目を向けると、今度はAクラスが集まっている方から葛城を中心に騒ぎが起こっていた。

ただ取り囲まれてはいるが、葛城は冷静に対応している。戸塚はカッカしているが、あれなら心配いらないだろう。守りを固めつつも、龍園とは別の見極めをしていたからこそその結果と自信に満ちた雰囲気を感じる。

「いや……想定内の結果だ。悪い方だな。」

——しかし、これで信用していい者といけない者の判別ができた。詳しく聞きたい者については来い。ここで話すことではないだろう?」

僕がいる場所とは距離があるので全部聞こえたわけじゃないが、こんな感じにクラスメイトを宥めていた。

流石、『あの』生徒会で役員をやっているリーダーといえる。この年齢で、一之瀬とはまた別のカリスマのようなモノが醸し出され始めて

いるのだ。戸塚の見る目は確かだったということだろう。

リーダーといえば、一之瀬はなんかキョロキョロしつつも、楽しそうなクラスメイトに囲まれて嬉しそうだ。内外で東風谷と双壁をなす活躍だったのだから、こういう時くらい弾けてほしいものである。

Dクラスはそれ以上に大騒ぎしながら船の方に行き、龍園は少しだけさつきDクラスの奴らと居た場所に留まっていたが、離れて待っていた金田と共に船へと歩いていった。

一之瀬達だけは最後まで残っていたが、彼女らも徐々に船に向かいだしている。

それから何分か経ち、ビーチで遊んでも良いとは言われたが、もう砂浜や島に残っている生徒は数えるほどしか居ない。それもじきに居なくなるだろう。

と考えながら座ったまましていると、四方が聞いてきた。

「左京は戻らないのか？」

「もうちよつとここにいる。すぐ行くと人混みに巻き込まれそうで嫌だ」

「うふっ、確かに」

「四方も東風谷も行きたければ行ってくれ。なにするでもなくボーツとしてるだけだから……」

「……そうか。悪いが俺はそうさせてもらおう。みんな疲れてるんだから、心配かけるようなことはするなよ。」

東風谷はどうする？」

「私も行きます。流石に疲れました。早く寝たいです」

二人はもう船に乗るようだ。

それなら、今のうちに伝えたい言葉がある。

僕は二人を真剣に呼び止めて、その言葉を伝えることにした。

「四方、東風谷」

どうせ後で会うけど、僕以外は二人しか居ないこの場は好機なのだ。

「色々助けてくれて——ありがとう」

友達だからこそ僕は不自然に：いや不審に思われていてもおかしくない。

「振り返れば、友達だからと甘えていた面があった気もしている。それを飲み込んで助けてくれた二人と『それ以外』に最大限の感謝を。」

「…………ふふつ。ええ、どういたしまして」

「……………ふつ。こっちこそ面白いモノを見せて貰ったからな。ありがとう」

佐倉や綾小路達は居ないけど、島を去る前にどうしても伝えておきたかった言葉は伝えられた。

不確かな未来の為の不確かな賭け。僕自身の為に精一杯やった無人島での事。

思うところもあつたかもしれないが、嬉しいことに四方達は笑顔で返してくれた。

なんだかんだで楽しんだ無人島の幕引きには、友達と島への感謝で締められてよかったと思う。

4章、思考しない非日常 68、魔法

無人島での特別試験が終わった次の日。

丸一日寝まくった僕は、1週間の遅れを取り戻すのに必死になっていた。

予定では8月の半ば過ぎにとりあえず勝負が成立する程度の完成度になるはずだったが、旅行と特別試験で大幅なズレが生じているのだ。なので、人の来ない船首デッキの展望室でひたすらパソコンに向き合う事になっていた。

ひたすらコードを打ち込んで、打ち直して、テストプレイを繰り返して、佐倉や高円寺を呼んだりしてチェックしてもらっている。すでに高円寺の契約はあと1回しか残っていないので、次が難度の最終調整になるだろう。

一方、佐倉に頼んでいる美しさのチェックは彼女がこだわりを強く出してくれたので、なかなか美麗な弾幕になった自信がある。使っているパソコンのスペック的に現代の最新ゲームのようにはできないが、これなら何度も挑戦してくれる期待が持てる同人作品に仕上がっている。

総じて、現時点では約8割の完成度と言っていい。

ただ問題もある。

テストプレイやデバッグをあと何人かに頼めれば助かったのだが、四方と東風谷が対戦相手になって頼めなくなり、僕の人脈が尽きているのだ。

佐倉と椎名だけはこれまでも時々手伝ってくれているが、あの二人はあまり身体が頑丈そうではない。大量のチェックを投げるのは気が引けた。佐倉は主力でもあるから尚更だ。

ちなみに榎田や葛城・戸塚など他に頼めそうな者は忙しそうなので無理である。

ここまででは良くはないがまだマシだ。

好きでやってるんだし、多少予定が狂っても苦しくも楽しく作業してられる。仕事ではないのだから当然。そう思えないなら、そもそもやっていない。

だが――。

「お前ら！　なんでこんな場所に集まってくるんだよ!?　折角の客船旅行なんだから、バカンスに行けよ！　佐倉以外！」

こんな場所に人が集ってくる意味不明はいただけくない。

改めて言うが、現在の僕がいるのは船首のデッキ。

この場所は近くに遊ぶ施設がほぼないためか、海を見慣れてきた生徒達には魅力がないようで、僕が来た時は閑散としていた。

だが佐倉がひよつこり顔を出してから、何故か続々とポツチどもが現れ、ついにはポツチじゃない者まで増殖してきているのだ。

その数、実に7人。

僕、佐倉、東風谷、綾小路、椎名、四方、一之瀬（来た順）で7人である。

アホか。特に一之瀬はリーダーで暇でもない人気者なのに、どアホと呼んでも過言ではない。

佐倉がいるのは手間を省く意味でもわからないでもないが、他はまったく意味がわからない。僕が作業する横で、貴重な時間を本読んだり海を眺めたりで、なにするでもなく消費しているのだ。唯一、清隆と話してるとはいえ一之瀬までだ。

もう一度、言おう。

アホか。

「佐倉さんだけ残したいんですか？」

「変な言い方するなよ椎名……。佐倉にはさつき新しいシナリオを渡したばかりなんだから、感想くらい聞きたいんだよ」

「シナリオ？」

「といってもたまたま本を読んでいただけで、穏やかに聞いてくる椎名に暴言を吐くわけにもいかない。

しかたなく、もう一つの理由を話す。

ゲームシナリオである。

イメージ通りの美しい弾幕に華を添える助けになるかと思つて、簡単なストーリーを作つてあつたそれだ。ちなみにバージョンは4である。

そんな本当に短いざつとしたストーリーと人物設定なのだが、さつきから佐倉は何故だか数枚の紙を何度も目を往復させて読み込んでいる。気に入ったのだろうか？

ああ。そのストーリーはこんな感じだ。

高度育成『学園』。

20年以上の歴史を刻むこの学園は、代々ブラックな人材を育成し、世界へと輩出していた。

そしてこの学園で頭角を表した人材が所属する『ブラックルーム』と、学園の在り方が気に入らない左京夢月と佐倉愛里。

彼らは、入学してすぐブラック企業理念で運営されている事に気づき、嫌気が差していた。だから左京は『学園の姫君』である佐倉とともに機を待ち、あらゆる手を打ち続け、満を持してついに対抗組織『ホワイトルーム』を創り出す。

一方、学園理念の大半を否定する『ホワイトルーム』を目障りに思つた高度育成学園生徒会は、左京夢月と佐倉愛里の連行をある生徒達に依頼するのだった。

『ブラックルーム』の最高傑作・綾小路清隆。

墜ちた陰陽師の末裔・四方二三矢。

学園の不敵な巫女・東風谷早苗。

それぞれに問題を抱えた天才達は、思うところがあながらもそれを承諾し動き出す。

今年、3人の風変わりな新生と、2人の社会不適合者がこの学園に嵐を巻き起こす……かもしれない。

思い返してもストーリーに問題はない。

頑張つて中二病を再発させても、あまり捻ったストーリーはできなかったからだ。

とすると、引つかかったのは設定のほうか？　と考えると沈黙を破つて、佐倉が騒ぎ出したので対応する。

「学園の姫君ってなに!?　なんかわたしの設定がすごい盛られてるんだけど!!?」

「気にするな。個人的に、佐倉はラスボスというより主人公属性を強く感じててな。参考の為に主人公側が悪、ボス側が善つて物語もいくつか読んで、ノリにノツてる寝不足の夜に書いたらそうなつてた」

まあ四方を除いてだけど。

どつちにしろ学園物とスポーツ物は似て非なる分野だから、見た目的に四方がボス役では微妙だと思つていたのもある。

「寝不足だからそんな事になるんだよ!!　もつと寝てっ!」

それにわたしのどこに主人公っぽさが!?

「ふむ。まずはピンク色の髪だな。プ○キュアならレギュラーは間違いない」

「ピンクの髪でプリ○ユアなのに変身できなかつたら、ああいう物語では地雷でしかないよ!」

素で地雷っぽさを醸している佐倉ならその点もはまり役である。

東風谷と…四方もか?　くらいしかピンク髪というのもわからな
いだろうけど……。

「2つ。人見知りのボツチなのに、メールやSNSなどではイキリ散らす点」

「あ、これ普通にスルーされるやつう!」

……わたし、もうボツチじゃないもん!!」

「SNS上の評価と乖離した現実歪んでいく自意識。自己評価の低さと、ネットの海にのみ存在するアイデンティティー。」

心当たりはありまくるよな?」

「う」

時々やり取りするメールやメッセージなどは、最初別人かと思つた

ほどだ。

実はアイドルだったという属性といい、もし四方が居なければ僕は確実に別方向に舵を切っていたことだろう。

「こんなにエグみのある要素を持つ美少女、常識的に考えて主人公に決まってるだろ！ 物語にしたら絶対に特定の人種の胸に刺さりまくるって！」

「ほぐっ！ 不意打ち来た！ というか、美少女以外のプラス要素まったくくないっ!？」

しかもピンク髪だぞ。

ギターとピンクジャージを付属させれば、この時代ではまだ世に出ていないギターヒーローとして一世を風靡するかもしれない。更に微妙に色違いだがベースを東風谷、ドラムを櫛田、ヴォーカル&ギターを一之瀬とすることで結〇バンド結成も夢じゃない。

「3つ……」

「まだあるの!? もう駄目だって！ よくわからないけど、色々危ないから！」

「……む。そうか」

「なんでちよつと残念そうなの!？」

それにしても、こんなに人がいる場所で内弁慶モードを見せて騒ぐ佐倉は珍しい。何人か目を見開いて驚いてるが、佐倉的に擬態は良いのだろうか？

折角だから聞いてみよう。

「ところで、そんな元気に騒いでいいの？ この場には佐倉があまり知らない奴もいるが？」

「——はうあっ!! あ、ちがつ、違うの！ わたっ…普段のわたしはもつと……あうう、違うの…ですよ」

特に佐倉がほぼ知らない一之瀬（と椎名も入るか？）の視線で我に返ったのだろう。語尾が変なことになっている。

まあ一之瀬に限らず、憐れんでいるような視線がほとんどなので、悪いことにはならないはずだ。際どい情報は出したが決定的な情報は出してないし、その辺は計算尽くである。

「夢月さん!! あまり愛里さんをからかわないでください!

大丈夫ですからね愛里さん。私が仕返ししてあげますから」

「え…仕返しとかいらなから…わたしの記憶を…消してえ」

「恥ずかしがっている愛里さんもまたいいですよね? だからそんな勿体ないことできてもするわけないじゃないですか」

「早苗さんもやっぱリアルだった!」

「ごめんな佐倉。からかいすぎた」

当然、東風谷のフォローが入るのもだ。

ただ真つ赤になって東風谷に縋り付いたものの、あつという間に梯子を外された佐倉が、なんとなく数日前の無人島での僕を思わせたので謝る気分になった。

僕は東風谷と違い鬼畜ではないので、悪い事をしたと思ったら謝る事ができるのである。

佐倉が少し落ち着いたと思えば、今度は予想外の人物が騒ぎ出した。

黙々と佐倉が落とした物語を見ていた綾小路だ。

あんな短文なのにいやに長い時間見てるなどは思っていたが、突如として普段の冷静さをかなぐり捨ててきた。

このタイミングで、無人島でのデバフが時間差で発動してしまったのだろうか。いつもの凍てつく波動はどうした?

「おおおおお!!! はあっ!? なんだこれ!?

ブラックルーム…:はまだしも、最高傑作とか…:ほわっ、ホワイ
トルームう!!! ホントどういうことなんだこれ…:」

「いや、なんで綾n…:清隆「…:え?」が引っ掛かっているんだよ?

むしろお前の設定は、ボム以外はまともに設定したと思っただんだ
が」

なんだろう? 意味不明に荒ぶるの止めてもらっていいですか?

と、言いたくなるくらいこれまでにならぬ狂乱を見せる清隆。あまりに予想外で、名前と呼ぶと言っただのを忘れるところだった。

だって一瞬、あれ？ 僕またなにかやっちゃいました？ と思っ
てしまったほどの豹変なのだ。

だが、先に挙げたように特別に捻った設定など作っていないし、何
が清隆のスイツチを入れたのかわからない。

発言から推察するに、ブラックルームとホワイトルームが怪しい
が、こんな安直で某国の大統領官邸のパチモン臭くてダサイ名前の組
織が実際にあるわけもない。

「確かに。でも俺の設定とかどっから生えてきたんだよって感じのも
あるからなあ」

「でも二三矢さん、よく見ると結構特徴を捉えてると思いますよ。

私に関してはニアミスと言っていいくらいには近いですし」

「ってことは、夢月の印象がそのまま出てるんだな。学校はわかるけ
ど、俺の設定はやっぱり突飛すぎるだろ……」

人物設定を見ていた四方達がなんか言ってるが、清隆の珍しい百面
相が気になって耳に入ってこない。

真剣な顔になったかと思えば崩れ、そうかと思えばこちらを探るよ
うな睨むような感じになり、半笑いで悟ったような遠くを見る顔に入
れ替わる。

本当に何なんだ？ 櫛田じゃあるまいし、無表情がデフォルトだつ
たと思うんだが。清隆ってこういうキャラだっけ？ 無人島でなん
か心境の変化でもあったんだろうか？

僕の思いつく変化する要素は大道芸勝負くらいだが、劇的なもので
はなかったからそこまでは影響しないはずだったのだが……。

「落ち着け。清隆のは単純にバランスを取る為の設定だ。

四方と東風谷が幻想や宗教絡みなら、相反する科学系の…例えばそ
うだな。特殊な養成施設の最優秀クラスの人材って感じの奴が居た
ほうがいいんだよ。なんせ空を飛ぶんだから、それなりの理由がない
とな」

「夢月お前………本当はわかってるんじゃないか!!? なんてこう微
妙に……」

「何が？ 悪の組織の構成員や傭兵とかの方がよかったのか？ 年齢

的にどうなんだそれ」

「おまつ……ああ………はあ。コイツ、勘とか偶然とかで片付けていいのかコレ……」

「?」
こういうネタバレはあまり良くないと思うが、シューティングに必須の飛行や弾幕を可能とする理由には『魔法』かそれに類するものが手っ取り早い。

ゲームの主人公達にもその理由は当然必要なのだから、幻想・科学、そしてどちらの要素も内包する宗教を、それぞれの理由にしたというわけだ。

わけわからん事を言ってるが、清隆もなんだかんだで落ち着いてきたし納得はできたのだろう。彼はあまりゲーム関係に馴染みがないようだから、お約束に対して過敏に反応してしまったのかもしれない。

四方はいたって普通に聞いてきたし。

「ああ。それで俺が陰陽術で、東風谷が神の奇跡、綾小路が科学技術で、空を飛んだり弾幕を放ったりできるのか」

「そ。タケ〇プターとまでいなくても、飛行機械なら小型のもギリギリありそうだしな。ゲーム内とはいえ、綾小路みたいなリアルストが魔法を使うとかあんまり想像できなかったから、ちよつとだけ頭を捻ったよ」

「………そもそもなんで生身で飛行する必要があるんだ?」

「特に必要はない。」

あえて言えば、歩くタイプも一応テストしたけど、このゲームに限っては飛んだ方が美しくなるし面白い。それだけだ」

「………はあー」

長い息を吐き出している綾小路が納得できたかはともかく、とりあえずこれで飲み込んでくれたようである。

「一之瀬と椎名は……」

「にやはは……白い最終兵器の狂人。左京君、私のことそんな風に見てたんだ……? あは、あはは」

「動かないように動く点S……Sは椎名のSですか。なかなか興味深い異名ですね」

「夢月っ！ 椎名はともかく、一之瀬がヤバいぞ！ 乾いた笑いしながら目がヤンデレのように！」

次は一之瀬と椎名か。普通にこの場の全員に回し読みさせられてしまった。

まあ、こちらはストーリーではなく、自分達のキャラ設定だろう。四方に言われるまでもなく、主に一之瀬がヤバそうだと思つてたら触れなかつたのに、もう無視はできない。椎名は許可を取つてるから問題ないだろうが。

ちなみに各ボスに関しては、詳しい説明や一言台詞などを省略してこんな感じだ。

1面、チユートリアルの黒幕・左京夢月。

2面、動かないように動く点S・椎名ひより。

3面、質実剛健な守り手・葛城康平（道中の中ボス、友情出演・戸塚弥彦）。

4面、白い最終兵器の狂人・一之瀬帆波。

5面、通りすがりの自由人・高円寺六助。

6面、学園の姫君・佐倉愛里。

というように、各クラスの知り合いを起用している。

4面のBクラス枠だけは元々四方と東風谷を交互に使おうと思つていたが、挑戦者に回つて無理になったので、他に適確なボス格を考えると一之瀬しか残らなかつたのだ。

「あー。一之瀬の設定は保険だからそんな風には思つてない。この中で唯一無許可で出演させたから、言い逃れられるようにわざとキャラを変えてあるだけだ。

だいたい一之瀬。お前こんな「お久しぶりです綾小路君。貴方に土をつけられて以来、73日と4時間10分ぶりですね」なんて言う狂人じゃないだろ？ そもそも敬語キャラでもないじゃん」

「……ホント？」

「ホントホント。一之瀬を真面目に表現するなら、狂人じゃなくて

もつとフレンドリーな善人かつ面倒そうな奴にする。善人枠が葛城で埋まつてる事もあって、まともじゃない女子キャラを入れたかつたって理由もあるけどな」

「善人…面倒……」

一之瀬が何とも言えない顔で黙り込む。

こっちはこっちで到底褒め言葉と言えないからだろう。

だが、それ以外の要素で僕が一之瀬帆波というキャラを作ると、お色気かヨゴレ担当になってしまいそうだから仕方ないのである。

かといって他のBクラスの面子は使えない。安藤や姫野とはほぼ付き合いがなく、柴田や神崎では絵面的に良くない。野郎がボスの半数以上を占めるより、なるべく美少女を使いたいのは世の理だろう。

ついでに属性過多な一之瀬ならいくらか変な属性を乗っけても大丈夫だと思つて、東風谷用のボス台詞を流用したのは秘密である。

「ちよつと聞きたいんですけど、その台詞のどこが狂人なんですか？」
「あん？」

ふむ……椎名、想像してみろ。

久しぶりに再会してすぐ何日何時間ぶりとか分単位でひけらかしてくるんだぞ？ この隠す気すらない思いの強さ超重量級の奴が狂人じゃなくてなんなんだ？ せめてもの配慮で、年単位を口にする狂人レベルにしなかつただけマシだと思つてほしい」

「……そうですね」

「……………そういうものなのか。恐ろしいな」

これには椎名だけでなく復活した清隆まで同意してくれた。

この台詞はガン〇ムWのぶつ飛んだ某ヒロインと、ガチの狂人だった佐倉のストーリーカーの書き込みからの引用なのでリアリティも抜群なのだ。

当然、心の傷を無闇に触るのはNGだから、混ぜてかなり改変しているが……見たところ佐倉はこれには反応してないな。大丈夫そうで何よりである。

一通り説明し終わると、僕は微妙にざわついたままの周囲を置いてゲーム開発に戻り……清隆との話も今日のところは諦めることにした。

佐倉が最初に来た時に、一応清隆を同僚に引き込んでいいかと、その為に佐倉のアイドル業を話していいかの許可は取れていたのだ。だから、できれば佐倉にも同席してもらって共通説明はしておきたかったのだが、まだ旅行中だし焦ることもないだろうと思いついた。うん。学校への対策をした結果、佐倉：雫のフォロワー数と稼ぎ出した額がとんでもない事になってると、綾小路の父ちゃん関連の説明はそれぞれ後回しにしよう。

これは船に戻って確認した時に目を疑った進捗のせいだ。

青娥さん、鬼龍院先輩・高円寺の両親、松尾の相乗効果は、3者（4者？）が連携も取れてないのに短期間で凄まじい事になっている。清隆はともかく、佐倉がこの現状を知ったら腰を抜かすかもしれない。でも一応そんな状態にした仕掛け人なのに、金持ちってすげえんだな。そんな陳腐な感想しか浮かばないあたり、僕の器はしれたものなのだろう。

だから早く松尾に正式な社長の座を押し付け……任せたいものがある。

60歳くらい松尾にはキツイ舵取りになるかもしれないが、僕みたいな若造が上でのさばってるよりは充実するはずだ。学校制度の変更に加え、言ってきた松尾の要望だけ最低限通したら社長を退く提案するので、それまで僕の部下であることは我慢してほしい。

69、逃げ道

約20億円。

松雄から報告があった現在動かせる金の総額である。

内訳としては鬼龍院先輩や高円寺などの個人資産・出資者関係が5分の4以上を占めている。特に卒業するまでおそろく使い道もないからと快くかなりの額を投資してくれて、なおかつ彼らの実家との交渉に協力してくれた鬼龍院先輩と高円寺には感謝が尽きない。

なので大きな顔はできないが、残りは青娥さんのコネか『何か』や投資、零関連のクラウドファンディングなどを活用して松雄がかき集めてきた金だ。そして数億あれば交渉材料としては充分だったといえる。

その副次効果として、佐倉：零のフォロワー数が数ヶ月前の10倍強になってしまったのはしかたのないことなのだ。

資金はメインの目的ではないが、あればあるほど大きなプロジェクトを可能とする為、死蔵しなければ困ることではないだろう。

更に一応、PPへの変換用にも桜プロダクションや喫茶・芳香を利用して外側にプールしている。勿論、万が一高円寺や鬼龍院先輩などが言ってきたらその分は渡さなければならぬが、見せ金は自前で用意できる状態にはなった。ポイントから再度円に戻すことも数社を通すことにはなるが、現時点でも一応可能だ。

ここまでの動きと額になると色々バレててもおかしくないが、これで理事長や学校、ついでに生徒会と交渉する最低限の準備は整ったといえるだろう。

「左京君!!」　なんかわたしのフォロワー数が……はあはあ……知らないうちにとんでもないことに！　なってて……はあはあ……何か知らない!!?　ぜえ……!」

「夢月、邪魔するぞ」

佐倉・清隆の二人だけと話せる機会は、無人島試験が終わって3日目を訪れた。

都合よく、息せき切ってきた佐倉と清隆だけで現れてくれたのだ。東風谷は不明だが、今日は四方と一之瀬はクラスで集まるらしいので多分ポップしない。高円寺は美しさを追求するとかいう最近送られてくるわけのわからないメールがある場合は大抵来ない。椎名は部屋で本を読むと言っていた。昨日来ていた葛城と戸塚は何度も顔を出すほど暇人じゃない。

つまり話を切り出すのに絶好の機会だということだ。

しかし……うむ。本日は慌てて息切れしてるせいか、いつもより大きく佐倉の乳が揺れてますな。

あまりそういう事を意識しない友達とはいえ、美少女の乳揺れは非常に眼福である。

「安心しろ。想定通り……いや想定以上の成果だ」

「や」

「や?」

「やっぱり左京君の仕業だった!!!」

「うん。月見で謝っただろう? 佐倉を利用してごめん、って」

「こ、これだったのかあ。心当たりが多すぎて何かわかってなかった」「え?」

尤も、そんな風に余裕を持っていられたのも頭を抱えた佐倉を見て、認識のズレに気づくまでだった。

なぜなら僕は佐倉がある程度わかっているものとして話を進めていたのだ。高校生には理解も馴染みも薄い事だということのを失念していた。

そして雫を利用したことを改めて理解したということは、月見の時は理解せずに僕を許してしまったということ……。その怒りの揺り返しがきたら……これはまずいのではなからうか?

今、佐倉に縁を切られると精神的にも事業的にもゲーム制作的にも大ダメージだ。

「すまん!!! てつきり青娥さんあたりから説明されてるもんだとばか

り……」

だから誠心誠意謝罪の一手しかない。

勿論、穴埋めはいくつか考えていたが、関係修復はまずここからだろう。

嫌われるかもとわかっててもその手しか思いつかなかつた。などというのはい訳にもならない。

「え？ えーと……説明？ はされてただけ……こんなに急激に伸びて収益とかなんて、しつかりわかってなかったというか」

「あ、ああ。普通はそうなるか。でも僕からも詳しい説明はしておくべきだった。本当にすまん」

「ううん。左京君が謝らなくても良いんだけど……というか、なんでそんなに真剣になつて」

「だってわかつてなかった事がわかつて、その……利用されてたつてきちんと理解したんだろ？」

「やっぱり僕の事を怒つてたり嫌いになつたり」

「——それだけはないよ」

言葉を遮られ思わず佐倉を見つめると、そこに居たのは珍しく背筋を伸ばして真剣な表情を見せている女の子。

そしてそれは僕の心配を吹き飛ばすような強い言葉だった。

「確かにとんでもなく驚いたけど、左京君は理由なくわたしを『利用』なんてしない。多分、あのお月見で言つた事の為なんでしょ？ それなら慌てることはあつても、嫌いになつたり怒つたりすることなんてないよ」

「佐倉……」

佐倉に甘えすぎている。

無人島の最後で思い至つた四方や東風谷へのその認識を、僕は佐倉にも抱いていたことによく気づけた。

何が準備は整つた、だ。

どれだけの人と幸運に恵まれていたのか理解せず、僕はまた調子に乗っていたのだろう。

この優しくて強い友達がそれを気づかせてくれたのだ。

せめてこれ以上、格好悪い真似だけは決してするまい。
自分の為であり、信じてくれている佐倉の為にも……。

「……なあ、そろそろいいか？　なんかオレの場違い感がすごいんだが、このまま去るといふのもな」

「清隆、空気読め………ありがとう」

「？　なんで礼を言われたんだ？」

「左京君！」

何故か佐倉に怒られた。

でもうっかり佐倉に告白↓失恋コンボをかましてもおかしくないほど嬉しかったのだ。清隆が空気を読まないで入ってくれたおかげで、自分を取り戻し思い留まることができた。

危うく別の意味で気まづくなるどころだった。

「ね、ねえ。ところで左京君達って、いつから名前で呼び合うようになったの？　早苗さんや四方君だって名字呼び……だったよね？」

清隆に内心でも感謝しているうちに、佐倉もいつもの雰囲気に戻っていた。

そして質問されたので、僕も通常状態に切り替える為にもちよつと脚色を付けてふぎけ気味に返してみる。

「清隆と夕暮れの決闘をして真の友となつてからだな」

「け、決闘!?!」

「微妙にホラを混ぜるな。」

オレはちよつとした心境の変化だが、夢月は呼びやすさらしいぞ。ある程度の親しさや要望があったり、名字より名前の文字数が同数以下だとそつちを呼ぶみたいだ。尤もこれは男と友達限定とも言つてたが」

清隆も微妙に変化を付けてくるじゃん。

間違つてはないからそのままでもいいけども。

「じゃあ、わたしとも……名前で呼びあつていい？　む、夢月君」

「はあ？　別にいいけど、変に邪推とかされないか？　佐くr…愛

里って女子だし、目立ちたくないなら」

「あうううー！ むつきや~~~~!!」

「あ、ちょっと」

不覚にもドキツとしたがなんとか名前を呼び返すと奇声を上げ、コマネズミのように走り去ってしまった。

まだ話の途中で、清隆とも中途半端にしか話してないのに……。でも清隆にしかできない話もあるから、これはこれで好機か？

しかしこの距離感がおかしい感じ。もし某ギター〇ーローが実在したら、佐倉は相当近い存在になるんじゃないかと認識を更新した。

「面白い娘だよな。佐倉って」

すると佐倉に取り残された？清隆が聞いてくる。

一応、内心でも佐倉呼びに戻しとこう。

次があるとするなら、今みたいにストッパーがいるかわからない。調子に乗り、うっかり告ってフラれようものなら目も当てられないことになる。

「……完全に同意だ。だけど、奇行が目立つことも多々あるのが玉に瑕じゃね？」

「そこは目を瞑るのが良いんじゃないか？」

「そこに目を瞑ったら、さっきの佐倉を状態異常と勘違いしそうだから瞑れんな」

「状態異常？」

それと僕が状態異常に罹るとしたら一時的なノリか勢いだろうから、その要因になりそうなものにも手を打っておくのが良いだろう。

更にはストッパー候補の一人である清隆に理解を求めておけば、フォローしてくれるかもしれない。だから理解されるかは別としても、僕の恋愛に関する見解を話しておく。

「アレだよ。恋愛とかいう理解できない病気のこと」

「ああ……って、流石に病気はないだろ」

「体温上昇、脈拍異常、頬の紅潮、動悸・息切れ。

恋愛を発症するとこのような症状が出るらしいが、これはもはや風邪などに近い状態異常と言っても過言ではないと思わないか？ 違

うというなら教えてくれ」

「……………む。なるほど。改めて考えるとそうかもしれない。付け加えるなら、正常な判断力の低下や認識阻害などの精神的異常もある。

確かにこう並べて立証してみると立派に病気だな」

「だろ？ 性欲ならまだ理解可能だが、それ抜きでもこんな症状が出るんだ。何らかの要素が身体に作用して異常をきたしているに違いない」

「いや、それはホルモンやフェロモンと呼ばれるものじゃないか？」

「それだけじゃ説明付かない現象もあつてだな……………」

そうしたら、まさかの僕の恋愛観に同意を示してくれる逸材をこんなところで発見。

恋愛ガチャの時に知っていれば、龍園との交渉を任せて更なる成功に導けた可能性すら感じる。惜しいことをした。

佐倉が去った後のデッキで男二人、奇妙なシンパシーを感じる恋バナ？をするのだった。

少し興が乗って雑談が長くなってしまったが、おかげで肩に入っていた力が抜けた。

これなら切り出しにくい話題もまだマシになるだろう。

「ところで話は変わるが、清隆の桜プロダクション所属についての話をしてもいいか？」

「ああ、勿論だ。元々その為に来たようなものだしな」

「助かる。」

まず前提からいくつか説明しないとイケないのですが、守秘義務は守ってもらわないと駄目なものと、できればこれから言う1つの役割だけはやってほしい。代わりに仕事は任意で、給料はやった分だけ。これだけは同意してほしい。

同意できるのなら、この書類に印鑑……………なかつたらサインと指紋を頼む」

僕はそう言って清隆に、用意しておいた一枚の契約書と朱肉を差し

出す。

『私、綾小路清隆は桜プロダクションで得た情報を決して漏洩いたしません』

名前と印鑑を記入する部分も当然あるが、この契約書に書いてあるのはそれだけだ。

そして清隆ならこれだけで充分だと信じる。

これは持論だが、共に仕事をする上ではまず信じる事から始まるのだ。信じなければいい仕事などできない。友達だったら尚更だ。

「……えらくシンプルな契約書だな」

「雇用契約書は今度また別に書いてもらう。これは情報を漏らすと僕以外にも迷惑がかかるからその為の処置だ。だまし討ちするようであれば、経緯が経緯なので最低限の縛りだけはさせてくれ」

だからこの契約書に関しては契約違反されたとしても罰則規定は設けない。

裏切られるなら、その時はきちんと責任の取り方も考えている。そのリスクを許容してでも信じるのは、僕的に必要な事だと思う。

「緩いな」

「言うなよ。それは自分でもわかってるけど、これから清隆にとっては蒸し返したくないだろう話もある。僕が腹を割って見せた上で、清隆の逃げ道を用意しておくには、これくらいがせめてもの誠意なんだ」

「てことは……」

「それに今のである程度察するなら、ガチガチに固めても同じだろ。

罰則とかもないから、踏み込む気があるならさっさとサインしてくれ。踏み込まないなら、勝負の事も気にせずこのまま去ってくれてもかまわない」

僕がそう言うと、清隆は一瞬動きを止めたもののさらさらっとサインしてくれた。

「これでいいか？」

「OKだ。あと、これによって清隆が直接的な不利益を被ることはないといと誓っておく。どこまで信用できるかわからないが、たとえ聞いて

すぐに情報漏洩したとしても罰則はない」

「罰則は、だろう」

「うんまあ……どこの情報かも影響するけど、報復処置はあるかも？
僕よりヤバい奴らはそれなりにいるから。なので、直接的って言った」

「話を聞けば、そのヤバい奴『ら』が誰かわかるのか？」

「わかる奴もいる、とだけ。」

なんせ桜プロダクションは表向きアイドル事務所で、佐倉は雫というアイドルだからな。もし佐倉に害をなすようなことしたら、誰よりも先に東風谷が殺りに行くだろう。

……あつ、当然のことながら、これを清隆に言う許可はもう佐倉に貰ってある。同席する前に逃げちゃったけど」

「へえ……へえっ?! 元々顔立ちが整っているとは思っていたが、あの佐倉がアイドル……この情報を漏らしたら、東風谷以前に天文部全員を敵に回しそうだな」

その通り。

佐倉関係の情報を漏らしたら、僕はまだしも東風谷や四方、場合によっては女に優しめな高円寺——そして、なによりヤバい青娥さんを敵に回す可能性が非常に高い。

最もヤバい青娥さんの存在こそ言えないが、青娥さん抜きでも充分ヤバい面子なのは清隆も身にしみて理解できているはずだ。

「そんじゃ前置きはこの辺にして、僕の目的から現状をざっと話して、起こりうる事態、清隆を会社に所属させる理由なんかを順に行くぞ。疑問や不快に思う箇所があるかもだが、清隆の利益になる案も用意してるから、それを聞いてから質問・反論してくれると助かる」

「大丈夫だ」

軽い念押しと流れを承諾してくれたので、僕は予定している決定事項を簡単に口にする。

「まず一度聞いている清隆なら予想は出来てるだろう直近の僕のためのだが——外部接触禁止及びPPの廃止……と+αだ(ボソ)」

「ん……？」

「いや、なんでもない。

ともかくこの目的を実現させる為の用意ができたので、旅行が終わったから学校との交渉に入る予定だ」

「は？ 用意？ 学校との交渉？」

「ああ。協力を約束してくれた者達の力が大きいのが、即金で約20億『円』用意できた。学校の背景からするとこれでも不足する可能性はあるが、最低限交渉の土台には辿り着けると見てる」

「に、20億……」

清隆が呆然と零した。

彼には笑われこそしてないが鬼龍院先輩や高円寺に指摘された時と同じく、彼もこの額では実現が難しいと思っただろう。

やはりもう少し待って、更に金を集めてからにした方が良い……のはわかってはいるができない。

あまり時間をかけると鬼龍院財閥や高円寺コンツェルン、青娥さんの心変わりに加え、学校に勘付かれて下手すると手遅れになる約束がある。『彼』の表情から推察できる状況はかなりギリギリだった。

それにこれは勘だが、鬼龍院先輩や高円寺みたいな実家の上に「常識的な」天才は、流石にそんなに生息してないと思われる。

正直、これ以上あれクラスの器を見つけられる気がしない。時間を消費して中途半端に人数や金だけを増やすくらいなら、対策を打たれる前に先手必勝するのがベターな気がする。

もはや毒を食らわば皿までの境地である。

「んで、僕がここまで急いでいる理由から清隆が少し関わってくる」

「オレが……？」

「先月、うちの会社に入れた松雄という者がいるのだが、彼が言うには清隆の父ちゃん、父小路は容易に引き下がる人間ではないらしい。つまり以前に清隆に見せた誓約書の内容を破ってでも、再来する可能性はそれなりにある……んじゃないかと思う」

「だろうな。てか、父小路って……」

「あ、松雄は父小路の元部下らしいが、清隆は知ってたか？」

「ああ。オレがこの学校に来るまでの世話役……のような人だ」

「通りでな。それで清隆の事も知ってたっぽかったのか」

「聞いてたんじゃないのか？」

「いんや。部下であったこと以外、ほとんど推測だった。

まあそれはともかく、父小路を知ってる奴二人がそう思うなら、更に情報の確度は上がる。これは本当にそう遠くないうちに対峙することになるかもな」

友達の父親に地獄を見せるなんて、清隆関係の後始末抜きでもやりたくはないが、あくまで攻撃してくるならやるしかない。

「で、その際、松雄との連携速度の遅れで命取りになる可能性は排除しておきたい。外部接触禁止の縛りのせいで色々不便になって、今は僕と佐倉のバイト先を経由してるから、どうしてもワンテンポ遅れるんだ」

まったく面倒くさいことである。

まず僕から青娥さん、松雄、それからそれぞれにといった具合に、このネット社会なのに情報伝達で何工程も踏むとか馬鹿らしい。

せめて普通の学校くらいの縛りだったら、僕もここまでしなくて良かったのだが。

「もしかしてオレに頼みたい1つの役割って」

「そう。お察しの通り。もし僕が父小路に反撃した時には傍観してほしい」

「……………え？」

「無茶な事を言ってる自覚はある。なんか仲悪そうとは感じてるが、ある意味で清隆に父小路を助けるな見捨てろって言ってるようなものだからな。

……………だけどそこを曲げてなんとか頼む。僕には学校があるとはいえ、松雄や会社はもう後がない。手段を選んでいると地力の差で押し切られて破滅まで一直線なんだ」

「……………なんか想定の中に存在しない役割なんだが」

ゴニョゴニョ言ってる清隆は置いといて、言葉に合わせて僕は真剣に頭を下げた。

清隆を情で動かせるとは思っていないが、多少は考慮に入れてくれ

ると信じて正直に頼み込む。

それと何が清隆の利益になるかがいまいち不明なので、とりあえず清隆に投げてできることはすると意思表示しておく。

「だから反撃手段に少々悪辣な手を使う事になるが、その為にはPPはまだしも外部接触禁止の縛りが邪魔すぎるんだ。まずそこに対処しないと話にならない。」

勿論、清隆への配慮は忘れていないので、要望とか相談があれば学生である間に言ってくれ。可能な限り力になる事を約束する」

「……………は？ え？ オレのか？」

「この傍観と配慮の為ってのが、清隆を桜プロダクションに所属させたい主な理由だ」

「……………」

清隆はついに黙り込んでしまったが、これは必要な説明なのだ。

これによって清隆が父小路を助けたかったりして確約や協力が得られなかったとしても、情と利の両面から僕のやりたいことを説明しておくのは後々意味が出てくる。

「あと松雄によると清隆も父小路の狙いの一つ…というか主目的らしい。父小路の誓約も、学校に対しては抜け道を作っておいたが桜プロダクションには手を出せないようにしてあるし、少しは守りの役に立つはず。」

ただ清隆がそんなの必要ないってんなら、佐倉に関する守秘義務さえ守ってくれば最初に言った通り勝負での賭けは忘れてもいい。でももし清隆が父小路についた場合、親子諸共反撃することになるとだけ覚えておいてくれ」

「……………」

たとえ今回の話を断られたとしても、逃げ道は間違えないように忠告しておく。

息子の前で父親を悪く言うのは控えるが、僕の中の父小路は息子がどう言おうと関係なくゴリ押ししてきそうな人物像なのだ。それをわかってはいるならいいが、わかってないなら清隆は父小路に付くべきじゃない。

また清隆の事を除いても、いくつか想定される父小路の目的を考えると、接触禁止や不可侵の誓約以外の対抗策などいくつあっても困るものじゃないだろう。

最後は清隆には脅しのようにも聞こえたかもだが、彼が父小路に付いたらきつと手心を加える余裕はなくなる。要は単なる事実確認である。

「夢月。前々から思ってたがお前の弱点になり得るぞ……その開けっ広げすぎるところ。少しはオレを利用しようと『考えた』方がいい」ただまあ、暫く沈黙した後には口を開いた清隆から、予想通りに「僕を利用しろ」という裏の意図も読み取られて、釘を刺されてしまったわけだが。

むしろ佐倉の件を含めて、僕が友達を利用したくない……本当に嫌なことは押し付けたくないという自分勝手な部分を窺められてる気さえする。

しかし鬼龍院先輩といい、高円寺といい、規格外な奴は揃いも揃って僕がOKを出しても僕を利用しようとしなのは何故なんだろう？ その共通点がなんか笑えてしまう。

「ははっ。言葉の分野でも格上とか……もう白旗上げるしかないじゃん。

てか、素直に僕を利用しろよ。龍園の方がまだ素直だったぞ」

「生憎だがオレは事なかれ主義でな。逃げるより平穩の方が好みなんだ」

「ぶっは！ そのちぐはぐさで良く言えたな。清隆の弱点は擬態の下手さですかあ〜？ ぶはははっ！」

「……これでもイメージでしか知らなかった頃よりはだいぶ良くなったと自画自賛してるんだがな」

小さく零すその言葉から察するものもあつたが、あえてそこには触れずに笑い飛ばす。

すでに覚悟を決めている友達の意思を尊重するのは当然。元々清隆に対して僕にできるのは、ちよつとした逃げ道を提示するだけだ。

何にでも手を出すのは無粋というものだろう。

ともかく、かように理解さえ得られれば、『逃げ道』というものは意外と応用が利くものである。

それを理解した上で意思を示してくれた清隆の面白さも着にして笑い合い、僕はようやくやく少し肩の荷が降りる心地になった。

70、調整

僕の守ってやる代わりに傍観してろ（意識）という意思を聞かせても、一時静止しただけで清隆に変化はなかった。少なくとも表面上は。

でもどう受け取ったか読みにくいので出方はわからないが、コイツなら下手な事はしないだろう。釘も刺されたことだし、時が来るまで放置する方針を固めておく。

そうして普段の態度に切り替え清隆と雑談していると、二人ほぼ同時に緊急メール、次いで船内アナウンスが入った。

どうでもいいが、マナーモードにしても鳴り響くキーンという音は心臓に悪い。説明こそされていたものの、よりによって夏休みの船旅中に緊急事態を想起させる真似をしなくてもいいだろうに。

せつかく良い気分だったのに台無しである。

「またこの学校お得意のアレか……」

「アレだな」

僕が内心と表情でこれでもかというほど面倒くさい、と語っていたのだろう。清隆は小さく笑いながら同意してくれた。

見たくもない届いたメールを確認してみると、当たり前のように特別試験の開始が告げられている。

内容はなにするか不明。ただ僕は2階202号室に17時20分に集合とだけある。清隆にも見せてもらおうと彼は18時に204号室らしい。

それだけ確認して端末を鞆に放り込む。できれば全てを忘れてしまいたいがそういうわけにもいかず、軽く思考を巡らせる。

この時間差はクラスの違い……なわけないな。これまでの学校の回りくどさを考えるに、意味の薄い事を考えさせるだけの嫌がらせと見た。意味不明・非効率のブラックな鉄則に則っているし、その認識で大きく違うことはないだろう。

しかし清隆のクラスだところいった機会はチャンスでもあるから

まだいいが、必要十分なCPがあるうちのクラスにはただただ面倒くさい。そんなこと思ってるのは性格が僕に近い少数だけかもだけども。

だからか断って誰かとチャットを始めた清隆を見ながら、真剣風味になったコイツがほんのちよつと羨ましくなった。

……何気に僕にもメールやチャットが来ていたのにまったく気づかず、端末をしまったまま忘れたのはそのせいである。

何やら忙しげな雰囲気になった清隆がどこかへ行ったので、呼び出し時間の少し前になるまで気分転換に船内を彷徨ってみた。

娯楽施設や飲食関係、はては機関室まで踏み入る事ができる自由さに改めて驚きながら心配しつつ、僕は先程までとは段違いに深く思索を巡らせる。

そう。本日の夕食について。

今日までずっとパソコンで作業をしていて、サンドイッチやおにぎりなどの片手間で食べられる物ばかりだったのだ。呼び出しが終わったら、たまには落ち着いて食事を楽しもう。

なので、時期外れではあるが、鍋などがあればゆっくり楽しめるだろうと結論付けて、飲食関係の施設を重点的に覗いておくことにした。

そうして有意義な探索を終えるところちょうど時間の少し前だったので、僕は2階フロアに足を踏み入れ、目的地に辿り着いた。

指定の部屋をノックすると中から許可が出たので入室する。

「時間になるか他の生徒が揃うまで、そこで座って待っていなさい」その声から予想はできていたが、Dクラス担任の茶柱先生がこの部屋の担当のようだ。相変わらず教師にあるまじき胸元の開いたエロい格好をしている。しかも僕一人なのが不思議なのか、話しかけてこそ来ないがやけにこちらを見てくるのだ。

……こちらも胸元をガン見してやろうか。この不適切エロ教師が。これならまだダメっぷりを晒しまくりなのに地雷女っぽい担任の方

がマシである。

てか、僕だけかよ。こんな先生と二人きりとか洒落にならない。今ならそれこそ担任が乱入してきても「ごゆつくり」と言い残して消えることも視野に入れるほど気まずい。他の奴もすぐ来るらしいから、まだ耐えられるけども。

「おつ、左京じゃんか」

「は!? 左京君? あんた、クラスで搜索されてたよ。電話も繋がらないって」

チラチラ見てくる茶柱先生との気まずい時間を耐えていると、僕の名前を呼ぶ二人の男女がほぼ同時に現れた。女子は姫野で、もう片方の名前はわからないが、おそらくクラスメイトと思われる。

姫野は面倒くさそうな事を教えてくれたが、とりあえず無難に頷くだけでやり過ぎすことにした。しかし、いつもダウンナーなのに何気に面倒見の良い女子である。

「揃ったな。では少し早いけど、これより特別試験の説明を始める。全員着席しなさい」

新たに来た二人はまだ何か話そうとしていたが、茶柱先生はだいたいの事はスルーする方針のようで注意すらせず、着席を促すだけだった。

何を話しても墓穴を掘る気がしていた僕がいる中でのその対応は、神対応と言わざるを得ないだろう。

エロくて怪しいだけの先生だと思っていたが、少し見直した。

二人のクラスメイトが大人しく着席し、茶柱先生から試験の説明が始まった。

それによると今回の特別試験は干支になぞらえたグループ別のゲーム……みたいなモノで、僕を含めたここにいる3人は丑(牛)グループらしい。しかもこの場にいる3人だけじゃなく、他の各クラス3〜4人を加えてシンキングするとかいう内容だ。

ちなみに茶柱先生が出てきた牛グループのメンバー表にはこうあった。クラスメイト二人の名前を知る為にもしつかり見ておく。

Aクラス、沢田恭美 戸塚弥彦 西春香 吉田健太

Bクラス、左京夢月 姫野ユキ 渡辺紀仁

Cクラス、椎名ひより 野村雄二 矢島麻里子

Dクラス、池寛治 佐倉愛里 須藤健 松下千秋

佐倉と椎名、戸塚以外だと僕が知っているのは姫野と須藤だけだ。同じクラスの渡辺某も、名前を今知ったばかりという体たらく。

何をするかはともかく、もし顔や名前が鍵になるような試験ならお手上げだっただろう。なんせ半数以上まともに知らないのだ。

尤も、ルールを聞いてる限りではそれらは重要な要素ではない。

なぜなら渡辺がポツポツ質問してる中で試験結果をまとめると、こんな感じになるからだ。

結果1、グループ全体で優待者を共有する全員勝利

結果2、隠し通す事に成功した優待者の勝利

結果3、優待者だと暴かれた優待者の敗北

結果4、優待者を間違えた裏切り者の敗北

これだけで見ると結果4以外はどれでも良さそうだが、報酬の差を考えるとそうはいかない。

結果1は、優待者に100万PP、それ以外のグループメンバーに50万PP。

結果2は、優待者に50万PP。

結果3は、指名成功した者に50万PPと所属クラスに50CP。更に指名された優待者の所属クラスから—50CP。

結果4は、指名失敗した者の所属クラスから—50CP、更に優待者に50万PPと所属クラスに50CP。

騙し合いと競い合いを奨励するこの学校では、WINWINな結果1の難易度が爆上がりするのは目に見えている。結果1と2は、最終日までもつれ込むのだから尚更だ。もしそれを真つ当に狙うなら、入念な根回しか策が必要となってくるだろう。

なんせ報酬もさることながら、試験時間を大幅に時間短縮できる結果3という有力な選択肢があるのだ。結果4というリスクを負っても自由を求める奴には魅力的に違いない。

僕なら優待者が違うクラスの知らない奴なら、何手か打った上で観察して指名。そういうのが得意な奴は、僕を含めて何人も心当たりがある。説明で例に出された人狼ゲームの鉄則を応用するだけで、かなり絞り込むことができるだろう。

自分を含めた自クラスの奴が優待者なら、適当な他クラスの奴に指名させて報酬山分け。CPはそいつの手柄にもできるし無駄がない。

これは勿論、この試験だけを見て普通に勝ちを狙うなら、だが。

それにしてもなんだ？ 前に比べてめっちゃ楽な試験みたいだが、この考えになにか落とし穴でもあるのか？ 友達や知り合いがグループにいない奴とかが居心地悪そうなのはわかるが。

しかし……ふむ。この条件下ならやることは1択だな。わかりやすくていい。

僕が優待者になった時だけ面倒な工程を踏むことになるが、その分考える事もなくなるので一長一短というところか。でもそもそも14分の1なら当たらないだろう。

まあ自らそんなフラグを立てたせいか、大当たりするわけだけども。

『厳正なる調整の結果、あなたは優待者に選ばれました』

説明が終わってから、速攻で鍋を食べに行き、その後は翌朝の8時まで僕は部屋にも戻らずあちこちから素晴らしい夜空や風景を眺めていた。

昨日の夜に部屋へ戻る前にチラッとメールを確認したところ、一之瀬達女子連中が来るとあったので、同室の奴らが旅行前の約束を守ってくれたのだろう。だから約束通り一晩中部屋に戻らず、作業の合間に第一・第二に船首・船尾のデッキ4つの展望室を巡り歩き、存分に船旅を堪能していたのだ。

だから少し寝不足気味ながらも、満足はしていた。だが、そんないい気分には水を差すかのように、この通知メールが来た。空気を読んでほしい。

しかもかなりの数の着信やメール、チャットも来ている。

表示される件数だけでうんざりしてきて、通知メールだけ確認した後、思わず電池切れを装い電源を切ってしまった。場所と13時集合とわかればそれでいいはずである。

憂いのなくなつた僕は、試験開始までの5時間の空き時間を有効活用すべく、休憩室のソファで眠りについた。

一眠り（およそ4時間半）すれば、通算6回ほど行われるグループディスカッションの1回目だ。

軽く身だしなみを整えた僕は、試験の説明が行われた2階で牛と書かれたプレートの部屋に時間ギリギリになるよう入室する。見回すと、部屋の中には円形のテーブルを囲うようにして、計14の席が用意されていて1席以外は埋まっていた。

ギリギリの時間を狙っただけあって、僕は最後の一人である。

知り合いの何人かはようやく来たか、的な雰囲気を迎えてくれた――。

『ではこれより1回目のグループディスカッションを開始します』

ので、知り合いに挨拶しようかと思つたら、開始のアナウンスが流れてしまった。僕はしかたなく口を閉じ、唯一空いていた渡辺と佐倉の間の席に腰を下ろす。

「じゃあ牛グループの、グループディスカッションを始めたい。

……おい左京。早速で悪いがお前が仕切ってくれないか？ 俺もAの他の奴もこういうの苦手だし、今回の試験では葛城さんから軽く返す以外で話はするなつて指示があるんだ」

「あん？ それでなんで僕？」

「この場ではお前しか頼める奴がいらないからだよ！ 言わせんなつ」
席につくと、戸塚が仕切りだし……たかと思えば僕に無茶振りしてきた。

これはおそらく、沈黙する者から吊られていくという人狼ゲームを参考にした指示だろうが、よりによって僕に進行役を投げないでほしい。他に仕切り屋がいたら、無駄に争うことになってしまう。

「待て待て。まだ他に」

「そうですね。左京君なら問題ないでしょう」

「俺もいいぜ。俺も寛治も試験って言われてもよくわかってねえしな」

「……渡辺か姫野さんという選択肢も」

「あるわけないだろ。常識で考えろよ」

「一之瀬さんどころか学年全員の前で意見できる左京君以外誰がいるのよ」

「……」

「と思い、また僕のような目立たない奴がいきなり仕切りだしたら反発も多いだろうし、やりたい奴にやらせようと言おうとしたら、椎名と須藤はおろかクラスメイトさえ戸塚に賛同しやがった。地味に右方に座る佐倉までココココ頷いて賛同を示しているのが、諦めるしかないことを示唆していた。」

全クラスで僕に押し付けにかかってくるとはふてえ野郎どもだ。

余談だが、佐倉や：A・C・Dクラスの残りの面子は明らかに仕切るタイプじゃないのが見て取れるので流石に話を振れなかった。

「満場一致だな。じゃあ左京、頼むわ」

「ぐ……く。後悔するなよ戸塚」

「何をだよ」

「僕のやる気の無さをだ」

「は？」

本当に後悔することになるだろう。

腹をくくって(僕にとって)理不尽な2択を提案される未来に……。

念の為、他の面子にも視線は向けたが、残念ながら反対してくれる奴はいない。

だから僕は説明された時の記憶を掘り起こして、なんとか最初に自己紹介しろと指示されたことを思い出して、左方に座っている渡辺に話を振る。

「えーと、じゃあまず自己紹介しろって学校から言われた気がするから、順番にしようか。はい渡辺」

「お、おおう…いきなりだな…何言えばいいんだ？」

「最低限のフルネームだけでいいだろ」

「あー。俺は渡辺紀仁で…って、これだけでいいの？」

「いいんじゃないね。ああいう指示があったってことはそれだけに必要なんだよ、多分」

「多分かよ!？」

「はい次々。姫野さん」

「スルーしちゃうんだ。まあいいけど。」

私は姫野ユキ。よろしくしないでいいよ」

とりあえずBクラスは乗り越えた。

だが次は椎名だからまだいいが、その隣はCクラスの奴でいいのだろうか？ 全く知らない奴が半数を超えているので、クラスごちゃまぜに座ってたら名前どころか所属も覚えられる自信がない。

「椎名ひよりです」

「野村雄二」

「矢島麻里子よ」

うっ。やっぱり名前だけだと、どのクラスの奴かすらわからん。クラスも言う流れにしておくべきだったか。

でも椎名の横にいるんだしCでいいんだよな。Cということにしておこう。

「沢田恭美だよ」

「西春香です」

「吉田健太だ」

「戸塚弥彦だ。」

……てか左京。お前さつきから目が泳ぎまくってるぞ。人を覚えられなくてどうしよう、とか焦ってる内心が丸わかりだ。少し落ち着け」

見破られた!？」

いや、確定ではないはず。友達はともかく、それ以外にはなんとか

「ま、まさかそんなわけが」

「——ありますよね？」

わかります。私も印象が薄い人はいつまで経っても覚えられなくて困ることがありますから」

椎名あ!?

なんてことを言ってくれはりますのん！ 初対面の奴らに印象薄いとかもろに言ってるようなものですやん！ 思わず変な方言的思考に侵されたじゃねえか！

しかし前から思ってたけど、こいつマジで言葉の急所突きのみを極めてるんじゃないか。普段ポーっとしてる癖に、なんで通常『口』撃がこう何度も即死級になるんだよ。言われなきや、知らない奴は君とかで誤魔化す算段だったのに。

ただ、おそらく椎名にとっては自然な一言だったのだろう。

だがそれ故に、椎名のこれはフォロージャやない。口に出しこそしてないが、佐倉も僕の真横で似た視線を送りながら頷いてるからなおさらわかる。

これは同病相憐れむ雰囲気だ。

はっ！ いかん。このまま戸塚や椎名に話させると、僕まで椎名の同類のように見られてしまう。

幸いにも次は知ってる奴だから、速攻で流せばまだ誤魔化しは可能なはずだ。

「……………はいっ！ 次！ 須藤、お願い！」

「須藤健だ……あん時は世話になったし、別に名前くらいいいけどよ。お前、俺にもわかるくらい動揺してて大丈夫かよ？」

「ふ……ふっ。実にナンセンスな質問だな。ぼぼぼ僕はそもそも動揺などしていない」

「いや思っきりしてるだろ。初めて話す俺にまでわかるとか相当わかりやすいぞ。」

あ、俺は池寛治だ。自己紹介忘れてつい突っ込んだしまった」

「ていうか、それ高円寺君の真似？ 驚くほど似てないんだけど……。」

でもまあいいか。私は松下千秋ね。よろしく」

「さ……佐倉……あ、いり……です」

「ま……真似。しかも高円寺……って、あれ？ 高円寺ってこんな口調だっけ？ なんかわからなくなってきた」

美人系の松下さんの言葉にシヨックを受けた。そんなつもりはなかったのだが……。

ついでに、どさくさ紛れに横で佐倉が自己紹介を差し込む声が聞こえたが、この引っ込み思案が機を見るに敏というべき成長をしたことを僕は高く評価する。

佐倉を上げてれば、現実逃避の一助にはなるからだ。

そうして精神を立て直した僕は、改めて誰とはなしに他に何かあったか問いかけてみた。

「で、あー………他ってなんかあったっけ？」

「特にはなかったと思うが、左京はまだ言うことがあるだろ」

すると、なるべく話さないと聞いていた戸塚が僕に物申ししてきた。

「ん？ 何が？」

「お前だけ自己紹介をしてないってことだよ！ ついでにこれからの試験時間をどうやって過ごすのかとか色々あるだろう！」

「え、ああ。確かに忘れてた」

「俺は葛城さんからあんまり話すなって言われてるんだから、しつかりしてくれ」

「おお。わ……わかった」

超理不尽！

つーか自己紹介はともかく、僕にどうしろと言うんだ。

でもとりあえず、自己紹介がてら注意事項でも話しておくのが無難かな。

僕は落ち着く為に、咳払いをしてから話を切り出した。

「あー。えーと、コホン。僕が優待者の左京夢月です。」

僕としてはあわよくば結果1を狙いたいです。結果3を狙うようなら名前間違いとかしいように気をつけてくだs」

「……はあっ!!」

ぶつちやけ今回は成果なしの方が無難だと思うとやる気が出ないし、そうなると狙いはこの2つの結果しかない。

言ってみれば、この高校版のノルマ調整である。

ちなみにノルマ調整とは、大きな成果を出すと次から大幅にノルマがキツくなる↓それを避けるためにノルマギリギリを狙う事である。

例えばノルマを成果100と仮定した者が二人いて、Aは成果101、Bは頑張つて成果120を達成した場合。Aの次のノルマは変わらないが、Bは次に成果105とかでも怒られるくらいハードルが上がる事があるのだ。

これはブラック企業あるあるで、やる気があつて努力した新人とかが燃え尽きる一例だ。

ここは一応高校だから当然少し違うが、それでも無人島で成果を出したBクラスは一旦ブレーキをかけた方がいいはず。まだ先は長いのに早々にハードルを上げられては堪らない。

一之瀬の考え次第でクラス内から反感を買う可能性を加味しても、一度馬鹿をやつて見せておくと一之瀬へのちよつとした援護になるので、それには僕が適任だと判断した。

あんまり他の奴がこういう事をするとも思えないし、時々説教されてる僕なら「またやつてるよ」てな感じで許してくれるだろう。また大したことでもないし、他クラスの反応も大きなものにはならないと思っていた。

「うおっ！…なんだその反応……びっくりした〜」

「それはこっちの台詞だわ!! なにいきなりバラしてんだよ!?!」

そう思つたので、部屋の結構な割合から大声出されて驚いていると、渡辺からツツコミが入った。

部屋は何人が大きな声を出した後には静まり返っており、不思議と僕達のクラスへ視線が集まっている中で、なかなかの度胸である。

とはいえ、お互い会話の中身は大したことではないので、僕も思つたままの主張で返すだけでいいだろう。

「え〜。だつてみんなで大金獲得か、時短&クラス貢献かつて試験だろこれ。どつちにするか決めるなら、最初に言つておいたほうが時短

になるし事故もなくなるじゃん」

「これがすでに事故なんだよっ!」

「はは。御冗談を」

「冗談じゃねえ!!」

「というか試験を時短って……それでいいの?」

すると渡辺が騒ぎ出し、姫野は途方に暮れたような顔で何か零していた。

まったく。姫野はまだしも、騒々しいことである。

ともあれ何故か予想外の混乱は起こっているが、こうして僕の船上特別試験はクラスメイトを宥めすかすことから始まった。

71、意気投合

軽く宥めたことでBクラスの二人は少し落ち着いてきたが、僕はまだ部屋中から注目されている。

……なんでだ？ 自己紹介もしたし、僕のありきたりな希望も述べた。どこにもおかしい部分などないはずなのだが、椎名と佐倉以外から引き続きドン引かれている気がする。

そんな風に困惑している時、部屋の中では比較的冷静に見えた池？と須藤が質問してきた。

「なあ。大金獲得ってなんだ？ 俺達も貰えんの？」

「俺はクラス貢献つてのがちよつと気になる。いまいち試験がどんなもんかわかってねえけど、前に迷惑かけたから少しでも取り返してえ」

ただ質問内容を考えるに、この二人はこれがどういう試験なのかなんとなくしか理解していないように見える。それなら、面倒でもきちんとメリット・デメリットの説明をしておいたほうがいいだろう。どちらも……特に須藤の気持ちはよく分かるからだ。

「そんじゃあ、簡単に説明するな。あーと、まずは池の質問から。」

結果1を達成すると、僕に100万PP、このグループ全員に50万PPが貰える。これは全6回、時給10万弱のメールを送るだけの簡単なバイトをすると考えればだいたい間違いない。その性質上、4つの結果の中では唯一『グループ内』全員に利益があるけど、6回のデイスカッションの最後までやることになるから面倒くさい結果でもある。要は簡単だけど時間がかかるんだよ」

「でも、やっぱこれ狙いが良さそうじゃね」

「うん。僕もそう思った。けど、馬鹿にするわけじゃないけど、DかCクラスだと結果3狙いもありかもしれない」

「それがクラス貢献ってやつか？」

「そうだな。須藤が言ったクラス貢献が一番得られるのは、結果3と4。これは50万PPに加えて50CPも貰えるから、こっちは『所

属クラス』の利益が大きいな。だからこつちを欲しいって奴もいると思う。

ま、PPはPPで使い方によってはクラス貢献もできるけどな。だって制度を作ったり変えたりもできるんだぜ？ 普段遣いできる利便性も合わせるとたくさんあった方が絶対有利になる。金は力だよ皆の衆。……何気に怠け者の僕としては、何らかの事情で授業に出席したくない場合とかに、代返する権利を買ったりなんかもできるかもしれない……とか考えてるわけだが」

「そんな事もできんのか!？」

「さあ。でもできても不思議じゃないシステムに見えないか？」

「……」

実際に葛城や一之瀬が生徒会に入る権利も買えたり、現時点で金に相当するPPはCPよりも重視すべきだと思う。査定や成績的なCPよりも、即物的なPPの方が応用も利くからだ。

ともあれ。

「んで、話を戻すと、結果2と4は機会こそ違えど指名を外すことで優待者が得られる報酬。そしてこのグループの優待者は僕だから、まず結果2と4はない。それだと僕しか利益がないから、他は狙う意味もない。

言ってみればこれは、僕が結果2・4を狙わないと明言するためのCO、カミングアウトともいえる」

というか、もし僕が隠す選択をしたとしても、佐倉と椎名の観察眼を考えると早晩バレていたと確信してる。この二人、コミュニケーションに反比例して異常なほどの洞察力があるのは、これまでの付き合いで多少わかってるのだ。

少なくとも椎名には見抜かれていただろうし、佐倉は優待者が僕じゃなかったら見抜けない可能性もあったが、何の因果か優待者は本当に僕である。

だから結果3になるなら、できるだけ佐倉か椎名……ではなく借りがある須藤に指名してもらいたいものだと、僕は内心目論んでいた。無人島で須藤が穴埋めできたかわからないので……。

「あつ！ 結果3だとPPは指名した奴しか貰えないからそこは注意な。

ちなみに僕が考える結果3と4の何よりの利点は、今すぐにも試験を終わらせられる時短性能だ。だから指名するなら、なるべく早く頼む」

尤も、須藤に指名しろなんて直球で言うのは理解されるか怪しいので、『僕』の利点しか言わない。それでも、これでほしい理解できただろう。

Bクラスの『戦術的』には結果4を狙いに行きそうと予測しているが、『戦略的』には結果1、無理ならCかDに指名してもらい結果3にするのが、長い目で見ると後々生きてくる。

そう思ったからこそ、正直に打ち明けたのだ。

「まあ難しく考えず、PPが欲しければ結果1。PPの独り占めやCが欲しければ結果3を狙うといいよってこと。ただ、できれば戸塚達Aクラスは指名を控えてくれると助かる。CPはなるべく必要ないところに回したい」

「……必要などころってのが、CやDクラスってことか。しかしそれだと左京達Bクラスだけが損するんじゃないか？」

戸塚はそう言ってくれたが、一概にそうとも言い切れない。

何度も繰り返し返すようだが、この試験のみで見ればその通りでも、先を考えると現時点で大勝ちするのは微妙な気がしている。

「僕としては100万手に入れるのも、速攻で試験が終わるのもどっちでも利点がある。それに前の試験でそこそこのクラス貢献はできたと思うから、微妙に上下の差がまった今回は勝ちを狙わない方がいいんだよ。こんな早い段階で勝ちすぎるとろくなことがない」

何気に目に見える成果を出しすぎると、先生や学校に何か企まれると僕は見ている。ここはその程度には信用できない学校だ。

ちなみにこれは戸塚に言うと同時に、クラスメイト2人にも言っている。

無人島での試験で僕は停学分マイナスの倍、100CPくらいは働いた自負がある。勿論、東風谷の力が大きかったのはわかっている

が、僕の功績もあるはずだ。なら50CPくらい使ってもどうとでもできるし、必要ならまた取り返すこともできなくはないと見ている。

だから今回みたいにCPを担保にPPを稼げる機会があれば、僅かな可能性だろうとPPを選ぶ権利はある……といいなあ。CP狙いの奴ばかりでもない今なら、絶対こつちの方がいいと思うのだが。

なぜならノルマ的なこれまでの試験の例を考慮に入れると、アレらのような騙し合いで他クラスに勝ち続けるのは、相当しんどくなるはずだからだ。その時にPPは重要な役割を担うことになるだろう。

さつきも口に出したが、ポイント……というより金は力なのだ。

ついでに言えば、1週間無人島で共同生活したことで見えてきたクラスメイト達は、リーダーの一之瀬ほどでなくとも良い奴揃いだっただ。なら、この学校が推奨する蹴落とし合いにはなるべく参加せず、いつでもトップを狙えて、かつ下位すぎない位置を保っているのが良策だと思う。

その為には僕の望みや感情を除いても、CやDに勝ちを譲りつつ、しっかり利益を確保できる手が望ましい。

つまり今回で言えば、結果1の大量PPのGETが最良。結果3なら50CPを対価に僅かばかりの信用が得られる次善。結果3は自分だけで利益を独占するよりはマシ程度だが。当然、時短の面で僕個人としては嬉しいのもある。

でも100万も欲しいいっちゃ欲しいので、一応はそっち方面の流れになるような誘導もかけておこうか。

「ところで、これはあくまで僕の考えだけど、全員に利益がある結果1は難しいからこそ面白いと思わないか？」

「難しい……？　なんでだよ？　全員が得するんだろ？」

「いや、須藤。この学校のやり方からして、人や他クラスを裏切ったり出し抜いたりするシステムじゃん。仮にこの場の全員で結果1にしようってなっても、それぞれのクラスにいる頭良い奴らが「ラッキー。さっさと左京を指名しろよ。確認も忘れずにな」ってなる可能性は高いと思う」

「っ！」

でもさつきから妙なところで反応してる奴らがいるな。

戸塚はともかく、あのAクラス？の女子達はさつきも声を出してたし、ハツタリを利かせておいた方がいいかもしれない。一応、まだ最低限の保険は打てる状況だし、須藤や池と話しながら議論誘導もかけておこう。

「確認？」

「僕が本当に優待者かどうかだ。辿り着けたら最後のデイスカッションで見せるつもりだけど、優待者の通知メールだな。つまり証拠だ」

「ああ！ 優待者なのが嘘かもってことか!？」

「可能性としては池の言う通りだけど、早く証明しても百害あって一利なしだから、これは最後まで引つ張ることになる。欲をかいったり変に深読みすると、損したり疲れることになるよ、ってな感じの保険だな。だから結果3で指名するなら、各クラスのリーダーか頭の良い奴に相談してからのの方が角が立たないぞ。無駄に不興を買うこともないだろう」

こう言っておけば、余程の考え無しがいない限り、1回目が終わったらリーダーかそれに準ずる奴に連絡を取り、やる気なら2回目までに…もしくは2回目のデイスカッションで何か仕掛けてくるだろう。なんなら、少し早送りしてもいい。須藤が頭から煙を出しそうになっているので、彼が冷静になるまでのささやかな時間稼ぎの保険だ。

尤もこんな保険は簡単に破綻させることができる。

僕が言った事を『本当』だと見破ればいいだけなので、多分やらないだろうが佐倉と椎名には楽勝だろう。それ以外でも、早期にしっかりと思考を巡らせて観察できる奴に当たりを付けられるなら、ポイントくらい得られなくても惜しくはない。

勿論、結論が結果1となって100万得られれば万々歳だ。

なんにしろ今のBクラスに必要なモノはCPじゃない。結束力も総合力もあり、CPも十分にAクラスを射程圏内に入れている。だからこの試験で狙いに行くとしたら、+αの予備武器強化だと僕は思っていた。

……個人的には、外してもそれほど惜しくないな。真面目な奴に

は怒られるかもしれないが。

「ま、それでも他に出し抜かれる心配があるなら今すぐリーダーに報告したり、指名メールを送るといい。残念ではあるし、あつちも試験中だから返事に時間はかかるかもだが、楽に早く試験を終えられるぞ？」

僕がそう言うと、椎名と姫野、Dクラス組以外は一斉に端末を取り出して操作し始めるのだった。繋がるか知らんけど。

しかしどうでもいいが、唯一Dクラスの奴らの言動だけ、誰かの影響や統率を感じないのは面白い。本人含む何人かにリーダーだとは聞いていたけど、これを見るに平田は統率者というより、みんなのヒーローとか相談役的な立ち位置なんじゃないだろうか？

ルナティック苦労人なお立場、誠に愁傷様である。

「さて、だいたい言うことは言ったが……。まだ何かあるか？」

話が途切れたので時計を見ると、デイスカッション開始から約30分程が経っていた。

残り半分か。時間は設けたが、いまだに指名された通知は来ていない。

もうやることもないんだけど、次があつたらマジで何をやればいいんだ？ 枕を持ってきて昼寝の時間にするとか？

……僕はいいけど、ブーイングが出そうだな、それ。

そんな事を考えながら質問の有無を問いかけたが、何も返ってこなかったので一声かけてから寝ることにした。すでにみんな思い思いにボーツとしてたり、端末いじったり、顔を見合わせてるし、もう仕切り役も必要ないだろう。

「ん、もうなさそうだな。じゃ、そういう事で。」

残りの時間や…あるとするなら次以降のデイスカッションはそれぞれ好きに過ごそうか。てか僕はそうするから、なんかあれば声かけて。僕は寝る」

「待った!! というか、試験中にいきなり寝ようとするな！」

言うだけ言ってテーブルに突っ伏そうとしたら、端末をいじつていた戸塚が声を上げた。何か葛城？から指示が返ってきたようだ。

「今、左京宛に葛城さんから伝言が来た。最初のディスプレイオン終了後に話せないか？　だそうだ」

「葛城が僕に？　別にいいけど、あいつの部屋に行くの？」

「いや、ここにきてくれるらしい。ほら」

と言って、来たばかりの葛城のメールを見せてくる。そこには確かに、終わったらすぐ牛グループの部屋に行くから僕に待ってもらえ、的な事が記されていた。

しかし一応は試験中なのに、よく返信したな葛城。真面目な奴だから少し違和感はあるが、変なグループになってしまっただけで困っているのか、そういう話だろうか？

「あ、あのっ！　左京……くん!?　わ、私も橋本くんから左京くんの話があるって言われたから、会ってあげてくれないかな!？」

「は？　橋本？　誰それ？」

葛城らしくないなど首を傾げていると、さ……沢田？　西？　のどつちかが橋本とかいう奴も僕に話があるとやってきた。

……いや、マジで知らない名前なんだが。

「まあ僕としては、どっちにしる待つことになるし、来たければ来ればとしか……。どこのクラスかもわからんけど……」

「Aクラスだよ！」

「お前ら、勝手な事するなよ！　葛城さんの指示に従わないつもりか!？」

「戸塚くんだって、話すなって言われてるのに話してるじゃん！　だいたいうちのリーダーは葛城くんじゃないよ！」

「なに!？」

すると、なんか唐突に言い争いが勃発した。

状況の変化に着いて行けてないのが僕だけかと見回せば、Aクラスと思われる3人を除き、もれなく他全クラス蚊帳の外である。他所でやれ、と言いたい。言わないけど。

「お、おい。ほっといいのかアレ。喧嘩みたいになってるぞ」

「ふむ。だるいし面倒臭い。時間が経てば収まるだろう」

「あんたはそういう奴よね。だるいのはわかるけど」

だから当然、渡辺や姫野に遠回しにどうにかしなくていいのか？
みたいに言われても、なにかするつもりはない。というか、どうすることもできない。

しかし何故に蚊帳の外になった者達は、僕に視線を向けてくるのか。特に佐倉と椎名の視線は僕に効くので勘弁して欲しい。

「夢月君……」

「佐倉。そんな目で見てきても、事情もわからず仲裁なんかできんて」

「!? 夢月君!! 名前!」

「あー?」

……ああ、愛里って呼べど? 昨日、途中でいなくなったから、どっちで呼ぼうか迷ってな。無難に名字呼びのままにしておいたんだ」

「……………名前で呼んで」

「ん、了解。そっちがいいならそうするわ、愛里」

「うん! 夢月君!」

それにしても佐倉改め愛里も、言い争いをBGMに呑気な話をするようになったかあ。遅くなったものだ。

と、感慨深く思っていると、怪しむような目つきの池から話しかけられた。

「……………なあ左京って、佐倉と付き合ってたの?」

「あつ……あ」

「ねーよ。つーか、ここ30年、彼女いたことすらねーよクソが」

その言葉に佐倉が過剰に反応してしまったので、即座に否定する。ただ真横で佐倉がビクンとなつてちよつと慌ててしまい、思わず前の人生込みで返してしまった。ほぼ忘れてる記憶だから、彼女できたことない、だけでよかったんだが。

「30年って、左京君の年齢超えてるんですけどそれは」

「言葉の綾だ。気にするな。」

あと友達ポイントはともかく、恋愛ポイントは全く稼いでないし、そんな風に思われたらさくr…愛里が困るだろ？ ついでにフラれて気まずくなったら僕も困るし、名前呼びくらいで変な疑惑をかけるのはやめてやってくれ」

「フラれる前提なんですね……」

椎名には突っ込まれたが、これでなんとか誤魔化せただろう。そもそも転生などという事象を本気で捉える奴はいないだろうが、愛里や椎名…それに東風谷や高円寺なんかだと僕の正直を見抜いて、本気にする可能性はあると見ている。なのできちんと話を逸しておいた。

「いや愛里に限らず、冷静に考えて、今の僕が告ったら誰であろうとフラれるのは確定的に明らかだ。なんせ恋愛的に好きな奴がいらないどころか、恋愛という状態異常も理解できていない。おまけにステータスも軒並み平凡ときている。おそらく、この現状で僕と恋仲になる女子はいないだろう」

「……」

尤も割り切ったセフレならあり得るかもしれない。

ただそれはそれで問題も多く、純粋な奴からは響感を買うこと請け合いだ。しかも愛里含めた周囲には処女丸出しなイロモノ女子ばかりなので、セフレ何ぞ作ろうものならどうなるのか予想できないまである。

また何よりの問題は、僕自身がそれ系を苦手としてのことだ。友達ですらほぼ身体的接触もできない（東風谷などへの反撃を除く）ほど緊張するチキンだというのに、イチヤついたりするのはハードルが高すぎる。

こうした一通りの誘導を終えた僕は、結論を述べてみた。

「……という彼女ができない言い訳を導き出したんだがどう思う？」

「知らねーよ！ 風変わりな彼女募集だったのかそれ!？」

「ていうか効果的かはさておき、なに堂々と彼女募集してんだよ!？」

俺だって彼女欲しーよ!？」

池と渡辺の魂の叫びに対する答えはこうだ。

僕は彼らに慈悲のあるドヤ顔を向けながら、ノリで両手を広げて言

い放った。

「ふっ。 同士達よ」

「な、 同士だと!? まさか左京…お前も、 なんだな?」

「俺もだ! 心から彼女が欲しい!!」

するとなんか渡辺が釣れた。 しかも椎名の隣にいた野村? 付きだ。

「な、 なにい!? CやBクラスのお前らも『そう』なのか? 実は平田

の同類だったりしないだろうな!」

「流石に左京は違えだろ!」

「当たり前だ! あんなイケメンのモテ男と一緒にするな!」

「お、 おおっ!! 同士よ!」

注目を浴びるのが苦手な愛里から話題を逸らそうと適当に嘯きながら口八丁していたら須藤も乱入してきて、何故か女子連中には呆れた視線を向けられ、 Aクラス以外の男子四人とは意気投合していた。 言い争っている戸塚はともかく、傍観していたAクラス? の吉田? も仲間に入れて欲しそうに見てきていたが。

それにしても、彼らにはどうしてあの意見が彼女募集に聞こえたのだろうか? コレガワカラナイ。

「馬鹿ばっか……」

「馬鹿達が相乗効果したみたいだねえ」

姫野と松下さんから聞こえた言葉が一番現状に合っている気がした。

ただ僕は本当に彼女を欲していない（というかそれどころじゃない）ので少し心苦しいが……まあ、話は逸らせたし、それなりに楽しいし別にいつか。

それに愛里はこれで完全に槍玉から外れたようだし、 Aクラス組もいまだに言い争ってるんだから、ちよつとくらい騒いでも罰は当たらないだろう。

なにはともあれ、誘導成功である。 当の佐倉や…あと話に置いていかれた椎名はポカンとしてるけども。

P、一之瀬帆波

私と神崎君は、『竜』グループで1回目のグループディスカッションの時間が終わると、結構な大所帯で牛グループの部屋へと向かった。

いつもやらかす人が、またやらかしてくれたからだ。ディスカッション半ばでそれが知らされた時はちよつとした騒ぎになり、収まった頃には呉越同舟でやらかした人の部屋へ向かうことに自然と決まっていたのだ。あの人は、その場にいらなくても本当によく引っ掻き回してくれる。

もう一つ別のグループでも問題が発生したと知らされていたけど、そっちは四方君が頼まれてくれた。それにできれば、そちらはこれから行く部屋にいる左京君を連れて行った方がいいので、今日は待つてもらおうことにした。

ただやらかしたとは言っても、それほど心配はしていない。

仮に左京君が失敗していて、これを足がかりに二人（左京君を入れて3人）の優待者全てを当てられても、回答ミスさえしなければ150CPのマイナスで抑えられる。いざとなったら四方君も本気で狙いに行くと試験前に言っていたから、上手くすれば100ポイントのマイナスにできるかもしれない。

それに甚だ迷惑ではあるけど、左京君はほとんど無駄なことをしないから、これはきつと彼にとつて必要な事なのだろう。問題は何に必要なのか全くわからず、しかも後になっても判明しない事が多々あることだけど、これまでの例からすると考え無しということだけは無い。それくらいには信頼している。

例えば無人島の初日に、左京君は言った。

安物買いの銭失いをするくらいならきちんと食事しよう、と。その前にも色々あった影響か、これには反対意見もあった。しかし、左京君は健康や運動量などを例に挙げて話に行った子達を納得させた。その際、ついでのようにやらかしてもくれたが、曲がりなりにも1人

でクラスの意見をまとめたのだ。

そして結果的に、それは正解だったと思う。

最初は最安値の栄養食・水セットが有力な選択肢に上がっていた。クラス単位で1日6試験ポイントだったから、味気なさそうだったけど安く済ませるならこれが一番だったのだ。だけど、大食の子もいれば少食の子もいる中でそうしていたら、物足りなく感じたり無駄にしたりといったロスが出ていただろう。

一方、左京君は、初日以外は一俵60kg(5日約400合、1人当たり1日2合分)で50試験ポイントのお米セットを推していた。これは手間はかかるものの、大食の子も少食の子もどちらも満足できる案だった。まとめて炊いて食べきれない子の分を回せばいいからだ。金田君がいた事も考えると、栄養食にしていたら揉めてしまったかもしれない。

こんな感じに自分勝手なように見えて、ちゃんと周りのことも考えている人だと私は認識していた。

無人島での特別試験が終了し、うちのクラスが最後に乗船した時もそう。

直前まで試験結果の発表が行われていたというのに、どこへ消えたのか試験で大きな役割を果たした例の3人の姿はなかった。乗船した時に四方君と東風谷さんは合流してきたが、最後まで探しても左京君の姿はなかった。

しかも合流してきた東風谷さんも、当然のようにいつの間にかいなくなっている始末。

左京くんも含めたあの二人はほんつとうに、いつも自由気ままである。

「HEY! テイルマン」

「高円寺か。久しぶりだな。どうした?」

その代わりというか、船のデッキには初日にリタイアした高円寺君がいて、四方君に声をかけてきた。

すると、自然に散っていくクラスメイト達。彼は彼で最初の頃の東

風谷さんに似た雰囲気があり、ともすれば視界にも入っていないのでは？　と思ってしまうくらいに他者に興味がない事がわかる。こうして四方君の横には私もいるのに、私は彼の眼中にないくらいだ。奇矯な性格以上にそれがきつと……怖いのだろう。普通の人は知らない・理解できないものを怖がってしまう。

四方君以外で私だけが残ったのは、左京君と笑い合う高円寺君を見て知っているからだ。

それを知っていれば、何の用事なのか気になるのは私も毒されてきたのかもしれない。

しかし、Dクラスのみんなから勝手にリタイアした事を責められていたらしいのに、普通に抜けてくるあたり、左京君達と通じるものがある。類は友を呼んだのだろうか？

思わずあちらのクラスリーダーに同情しそうになり——うちに2人も問題児がいる事実を思い出して、一人で内心頭を抱えた。なんなら普通に高円寺君と応対を始めた四方君もどこがおかしい。

「いやなに。結果はどうなったかと一応聞いておこうと思ってねえ」

「結果……お前のことだから試験のじゃなくて、左京……いや、夢月の結果か？」

「ははは。Exactly！

君もわかってきたようだ」

ごめん。あまり高円寺君のこと知らないけど、せめて四方君だけは変な世界をわかってほしくないと思ってしまった。

それにしても、これまでどこか一線を引いていた四方君もついに左京君を名前で呼ぶようになったか。

……やっぱりあの日、私も無理にでも付いていくべきだったかなあ。少し羨まし……くない！　私には私の役目もあったし、ついて行ったら絶対振り回された。

「それでどうなったんだい？」

「夢月が勝った」

「……ほう。私が見た限り達成確率は皆無に近かったと思うのだが？」

「ああ。本人達もそう言ってたよ。俺も目の前で見てたけど、夢月が勝つ予想はできなかった。

ただ夢月曰く、策を重ねて運を呼び寄せた力押しの結果らしい。俺から見たら奇跡としか思えなかったがな」

私に変な考えを振り払っている間にも二人の話は進んでいく。

その話から推測すると、左京君は試験ではない勝負を誰かとしていたみたいだ。

そして勝った。

誰と何をしたのかはわからないけど、四方君の感じだと危ないことじゃなかったようで、少しホツとする。

「くっくっく。夢月らしい」

「全くだ。」

で、お前は どうする?」

「私はこれまで通りさ」

「……はあ。東風谷といい、綾小路といい、夢月は大人気だな。わからんでもないが」

綾小路君? もしかして左京君が勝負していた相手は綾小路君なんだろうか?

左京君の友達だったり、堀北会長や星之宮先生からできるだけ見ておくように頼まれたり、堀北さんとうちに偵察に来た時に鋭い指摘をしてきたり、色々只者じゃないとは思ってたけど本当にすごい人なのか。四方君が東風谷さんと並べるくらいなもの。

この学校、油断できない人ばかりだ。

「ティルマンも好きにするといい。夢月は言われずともそうするだろう?」

「それが問題なんだよ」

「ハッハッハッハ! 確かに。凡人と自覚した上で美学を持って好きにやる夢月は、ある意味天才の天敵だからねえ」

天才の天敵。

高円寺君が口に出した彼の評価は不思議としっくりくる。

別に隠れて動いてるわけじゃないのに、どうしてか彼のペースに巻

き込まれているのは、私も実感しているからだ。私自身は天才なんて者じゃないけど、予想できないタイミングの隙を予想できない方向から突かれてしまうというか……。

「笑い事じゃない。あいつ、あれで自分を凡人だと確信してるぞ。そのせいで俺も東風谷も綾小路だって何度か負けてるのに、普通にやれば負けるからってあらゆる手段で逃げようとするんだ。しかもあいつが天才認定した奴からの勝負は、挑もうにも理由がないとなかなか受けてくれないから、白黒付けたければ東風谷のように唐突に挑むか、『理由』を作るとかするしかない。そしてどの方法も俺には向いてない」

「夢月が凡人だということは否定しないけどねえ」

「それ自体は俺も否定しない。」

——けど、あいつには何かがある。でない、あの異常とも言える吸引力の説明ができない。これはもう疑惑じゃなく確信だ」

私と同じものはわからないけど、四方君も高円寺君も何かを彼に感じているのだろう。二人は私よりも左京君に近いのだから、より気づく機会が多いはずだ。

「あいつの目的はなんとなくわかるんだ。だが……なんでそうするかという動機がわからない。何らかの確証を得る為には勝負事が手っ取り早いんだが……」

「それこそなんとなくだと私は思うけどねえ。夢月には動機などそれほど必要ないのだよ」

「好きでやっている、か」

「わかっているじゃないか。そう、人の為にやっているのではなく、夢月は好きでやっているのだよ」

「……………じゃあ、俺もたまにはあいつらのフォロー以外で好きにやってみるかな」

「そうしてみたまえ。おそらく夢月は期待を違わない」

「ははっ。ありがとう高円寺。」

少し気が楽になった礼と言ってはなんだけど、面白い土産話をしてやるよ」

そう言った四方君は、初日に左京君がぶちまけた事の裏側を話し出し、高円寺君は楽しそうに笑いながら聞いていた。

私には何のことかぼんやりとしかわからない部分も多かったけど、その四方君と高円寺君の会話は後々まで私の心に残ることになった。

でもこの時に私が聞いていて思ったのは、受け入れられないというのが最初だった。気づいてなかったけど神崎君を疑っていた事もけど、こうした事が必要になるかもしれないとは考えさせられた。そうなったら、左京君は頼りになるだろう。

だからというわけでもないけど、聞いていた私はこれまで以上に左京君に注視して張り付いておくことにした。

左京君になにか起こるたびに斜め上の発想で動かれると、いつの間にか問題などが解決されてしまう。いや、それ自体はむしろありがたいんだけど、よくわかんなかったけどよくわかんなかったね、では済まないレベルの影響が出る事と、次に繋がられない事が問題なのだ。

これまで何度かは関わられたけど、佐倉さんのストーカーの件やガチャの商売が上級生の間でブームになっていた件に、生徒会、停学etc。左京君の考えや裏側は、隠しもしてなさそうなのにいまだに謎のほうが多い。しかもある程度近くにいたり、四方君に聞いたりしないと最後まで何もわからない事がほとんど。

しかし改めて考えると、本当に不思議な人だ。

生徒会長や南雲先輩、多くから敵視されたりしている龍園君なんかとの間に立ってくれていることもある存在。仲間としてはかなりの問題児だけど、なんだかんだで何度か私にも手を差し伸べてくれた。私がリーダーなのにも関わらず、思わず甘えなくなるほどに……。

いつもなにをやらかすのか心配だけど、いざという時には頼りになつて楽しみな人。それが私にとつての左京君だった。

だから無人島でもなるべく積極的に話しかけに行つたのに、ことごとく間が悪くておちよくられたりセクハラされたりといった始末。ただ左京君自身が苦手と言っていた私だからか、偶然はあつてもいわゆる『そういう目』で見られた事はないと思う。もしそうだったら、い

くら私でも距離を置いていただろう。

無人島生活中、近くにいて時間がある時はずっと彼を観察していたけど、左京君はアレな言動（どこかに食料を持って行ったり、1人で彷徨いたり）は多発しても邪な動きをすることはなかったと断言できる。試しに水上バイクなどで偶然を装って確認したから間違いない。それどころか海では、逆に元気付けられたくらい。

それに幸い、といつていいのか左京君がそういうセクハラのような事を仕掛けるのは、どうもいまのところ私だけらしい。

四方君や綾小路君にも聞いたが、東風谷さんや佐倉さん：女子には紳士的とまでいかなかったも、その：ああなっているアレを見せつけてきたり、ゾウさんとか……え、えらいとかドMなんて言われていないようなのだ。千尋ちゃんによると、私は男の子に怖がられてるらしいのに、どうしてその私だけが……。

ま、まあそれはともかく。

つい聞きいってしまった四方君と高円寺君の会話は、なるべく左京君の傍にいようと改めて私に思わせるに充分だった。誰かがついてないと、彼は勝手にどこへ飛んでいくかわからない。東風谷さんや四方君が付いているとわかってるけど、できる時は自分が付いている方が安心できるだろう。

そう思つて彼を探すようになったのに、予想以上に全然見つけれない。

無人島試験後だと、四方君に付いて行つてようやく少し話せた程度。その上、特別試験が始まったというのに、行方不明になるなんて思いもしなかった。

———というか、大きい船とはいえ船旅中にほぼ丸1日音信不通になるつてどういう事!? 苦手だと言つていた私だから繋がないと思つて神崎君たちにも連絡入れてもらったのに、返信どころか既読すら付かないなんて。左京君のほうれんそうは、放置・連絡ミス・早々に忘却なの? 試験が開始されてからは、デイスカッション前に話すことも会うこともできなかつただけ!? こういう試験だから一味違う意見が欲しかったのに! それに姿を現したと思えば、優待者

だと初手カミングアウト!? だめだこの人。誰か…私がいなくてもつと駄目になる気がすr…あれ? なにか引つかかるものか…??

でも、本当にどうしてくれよう。いつそ不興を買う事になっても本当に付き纏った方がいいのかなあ。それをする価値はあると思うんだよね。四方君や東風谷さんとも仲良くなれるかもしれないし。

考えれば考えるほど、私の中でその意思が固まってきているのを感じていた。

「一之瀬。大丈夫か?」

神崎君に声をかけられて我に返った。

いけない、いけない。

ちよつと異様な雰囲気と人達に当てられていた。

私は歩きながら、改めて一緒にいる他の面子に目を向ける。星之宮先生からもあらかじめ聞いていたが、竜グループは例年各クラスのリーダー格を集めたグループになるらしい。

クラス間の競争をさせているのにそんな慣習があるからこんな事になるのは必然、と深くため息を吐きそうになって、ぐつと堪えた。流石にそれは声をかけてくれた神崎君に悪い。

「ありがとう。大丈夫だよ神崎君」

私、神崎君、葛城君、龍園君、平田君、堀北さん、櫛田さん。それどこからか合流してきて葛城君とにらみ合い、元々良くなかった空気を更に悪くしてくれた橋本君。この私達8人で、牛グループの部屋に向かっている。各クラスの中心人物が揃い踏みだ。きつと左京君も驚いてくれることだろう。その慌てる様を想像すると、ちよつとワクワクして心が落ち着く。

そんな感じに自分を落ち着けていると、葛城君が牛グループの部屋をノックしていた。

室内は、一部を除いて意外なほど和やかな雰囲気だった。

特筆すべきは夏休み前に喧嘩して停学になった左京君と須藤君で、遺恨なんかないみたいに話しているのがすごい。こういう男の子達のさっぱりした関係は、女の私には理解し難いけど少し羨ましく感じてしまう。

「いらつしやい葛らg……ほ、ほう？　何だこの面子は……？」

とりあえずオットセイの声真似でもするか。オウツ、オウツ！」

和やかだった牛グループの部屋に、オットセイ？の鳴き真似が響き渡る。

左京君はいつも通りだった。いつも通りのわけのわからない態度で迎え入れてくれた。

先手必勝。私は笑顔を意識しつつも、まずは逃げないよう釘を刺しにいった。彼相手だと、話が始まってからでは遅いといい加減学んだのだ。

「にやはは……相変わらずだね左京君。後で話があるから逃げないようにね」

「なにこの一之瀬。僕に優しくない。偽物なんじゃないか？」

「まずその言動が私に優しくないからお互い様だよ」

「なあ一之瀬。左京は一度病院にでも連れて行った方がいいんじゃないか？　この状況で俺になんとかしてくれ、みたいな視線をさり気なく寄越してくるんだが」

「神崎。僕を異常者のように言うんじゃない！　ちよつとどうやってこの場から脱出するか、と考えただけだ！」

……ところで話しかけたのは私とはいえ、この状況でも左京君の視線が私に多く集中してるんだけど、この奇行は私が原因だったりする？　どうして彼は、私や星之宮先生を苦手に行っているんだろうか？　思い至った可能性に私は頬が引き攣るのを感じた。

「クク。現実逃避してんじゃねえよ」

「あはは。いつも自由だねっ。左京君」

「うっわ。龍園はまだしも、明るい榎田って気色わるっ。来るのはいけど、かぶった猫は早めに剥いてくれよ」

「はっ。」

「ひいつ。い、イキってすみませんでした」

私と神崎君に続くように、龍園君と櫛田さんが割って入っていた。龍園君はともかく、何気にあのいつも明るく優しい櫛田さんに凄まじれるとか、左京君の煽りスキルは今日も絶好調なようだ。

それにしても、すぐにいつもの櫛田さんに戻ったとはいえ……あんな櫛田さん、初めて見た。

東風谷さんといい、神崎君といい、高円寺君といい、左京君が関わると思いも寄らない顔を見せる人がいる。更に軽口を叩き合うのが付いてくると、もしかしてこつちが本性？　なんて思っちゃう。自分に照らし合わせると失礼な話だけどね。

櫛田さんの珍しい一面を引き出したことを感心しているうちに、場が少しだけ落ち着きを取り戻し、牛グループの残っていた人達と入れ替わる。左京君含め何人かはまだ残っているが、渡辺君や姫野さん、他クラスの人は左京君とは軽口を叩き合いながら出ていった。龍園君を睨んでいた須藤君みたいな人もいたけども。

その時、戸塚君を揉めていた人達ごと退室させた橋本君が左京君に話しかけた。

「おいおい。左京ってのはお前か？　聞いてたよりもずっとわけわからない奴だな」

「君は？」

「西から話は通つてると思うが、俺が橋本だ。」

……これまで散々逃げ回りやがって。2ヶ月近く探し回って、ガチャなんかで名前は聞いても姿を見たことなかったから、本当にいるのかすら怪しく思い始めていたぜ」

「ガチャの時の僕は、ほぼ裏方に徹してたからなあ。あれの花形は女子組だったし」

「それはうちのクラスでも共通認識だ。授業中でも見失うなどザラ。話をしようと思っててもほぼいない。連絡は大抵通じない。もはやU MAと言っても過言ではないぞ」

「にやはは。確かに。いっつもいないよね左京君」

左京君に接触を図ろうとしていたのは、橋本君……ではなく十中八

九葛城君と対立している坂柳さんだろう。四方君や東風谷さんが壁になるかのように動いていたから、図らずともこれまでガードされていたと思われる。

そんな思惑は察していたけど、自己紹介を軽く流されつつ僅かに困惑しながら零す橋本君に、僅かな共感を持って加わる神崎君と私。

あの二人がなんらかの意図でそうしていたなら、と神崎君は思ったのかさり気なく話の方向を変えたので、私も乗っておいたのだ。左京君の事だから滅多な事はないと思うけど、橋本君に主導権は渡さない方がいい。

「いるよ！ 逃げてたつもりもない！ たんに知らなかったただけだ！」

あと端末関係は忘れることあるけど、授業をフケてるみたいに見えるんじゃない。人混みが苦手だから、集団から離れたところを定位置にしているんだよ。それ、存在感がないみたいで心に来るからヤメロ」

「存在感云々で言うなら、左京君は落差が激しすぎるけどね」

それにしてもさつきまで重たい空気もあったのに、左京君が加わるだけで誰がいようと空気が軽くなるのは素直にすごいと思う。一晩、音信不通になったことは後できつちり追求するけどね。

ともかく竜グループの私達と牛グループで残った数人が着席して、改めて話し合いが始まった。

「それで、今回はどういいうつもりだったの？」

「どういいうつもりだ左京？」

開幕早々、葛城君も私と同じ疑問があつたらしく被った。でも優待者を自分から明かした真意を聞いてみたいのは、仲間（葛城君は友達としてかもしれないけど）として当然のことだろう。

「やっぱりその話か。ああ、優待者を明かしたことなら、遠くないうちに普通にバレルからだよ」

「バレル……って誰に？」

「いや、こんなに簡単なゲームなんだから、多くても3〜4回グループデイスカッションしたら、優待者の割り出しは難しくないだろ。どうせ当てられるなら早い方がいいじゃんってだけ」

左京君の雰囲気がいつの間にか変わっていた。

それが可能かはさて置いて、私は表情が出ないように気をつけて左京君を再評価した。

私が知る勘処の左京君は、基本的に人から奪うことも利用することせず、その上で流されてはいけなさと考えている。これまでの彼の行動がそれを裏付けている。

だからこれはきつと、自分が優待者なことを隠しきれないと見て、勝負を投げ出したという作戦だろう。

勿論、それだけなら考え無しの愚行だけど、投げ出した先はCとDクラスの間。Aクラスが出し抜かず、無人島のように最後に入手ポイントの発表があれば、どちらが裏切ったかは一目瞭然となる。そうなれば、どちらが裏切っていたとしてもCとDのクラス規模の食い合いは避けられない。ううん。正確にはその手を使う可能性を作り出されるのが狙い？　むしろ龍園君なら、進んで裏切るよう指示すると読んでいる……とかって可能性もあるかな。

私なりに考え込んでいる間に、堀北さんが強い口調で詰問していた。

「貴方は何を根拠に優待者の割り出しが難しくくないというの!？」

「え？　このゲーム、それなりの口か観察力があつたら、指名するかはさておき1回目でも当てられると思うぞ？　んで、そのラインを超えてる奴は僕の知り合いに限定しても結構いる。特に堀北さんの所属クラスなんてそれがかなり多めだし、まず全グループの優待者を把握するところから交渉を始めるんだろ?」

「そんなわけないでしょう!」

「じゃあCP重視の慎重気味な戦略なのか？　言っちゃあなんだが、AだのBだのはただの記号だし、この学校だとそんなのより先に目を向けといた方がいいモノがあるぞ」

「……それはなに?」

当然と言った風に返した左京君は薄く笑って、それ以上堀北さんに答えなかった。こういう場での彼の底知れなさは龍園君にも通じるモノがある。なにせ星之宮先生や掘北会長さえ時に翻弄するほどだ。

無人島試験では左京君と二分するB・Dクラス勝利の立役者となった堀北さんだけど、話した限り私や葛城君と思考が近い彼女では分が悪そう。左京君の考えを僅かでも理解するには、それなりの付き合いがあっても難しい。

「……少し聞きたい。」

左京は、この試験で『勝つための』最適解をどう考えている？」

「勝つためなら龍園と組む以外ないな」

「即答か。……しかし龍園は」

「クク。ここで俺を出すか」

なぜならすぐ後に神崎君に答えた最適解を私は思いつけない。冷静に考えれば前に傷つけられた子もいる私達Bクラスの心情的には難しく、しかし効率面からは妙案とも言える。だけど、実現への道筋を描ける人は相当限られてくる。それに最低限半分は察せなければ、こうした道筋などの条件達成には至らないだろう。

正攻法ならまだしも、こうした枠外のを当たり前のように放つてくる左京君相手だと、着実に積み上げていく私のようなスタイルだと相性が悪い。

「待ってくれ！ 左京は知らないかもしれないが、龍園を信用しないほうがいい！ 契約を結んだ上で出し抜く非道を平気でやってくるぞ！」

「だとしても、うちのクラスが組むのなら龍園以外ありえない。あくまで勝つためなら……だけだな。他のクラスでは不確定要素が多すぎる」

そしてそれは葛城君にも言える。根本的に見ている物が違うときえ感じるのだ。

「不確定要素？」

「……あんまり言いたくないが、さっきのグループディスプレイで、Aクラスは1人を除いて言い争いが起きていた。これはただ1人のリーダーがいらない証明になる。そしてわざと時間と好機を作ったのに、誰もどこかに連絡を取ろうとしなかったDクラスに至っては、表向きそこにいる平田がリーダーらしいけど実情は不在ということ

も十分にありうる。この状況なら、裏切られる前提でも龍園一択だ」
「な」

「つーわけで、龍園。指名する指示を出すならなるべく早く頼む。通
知メールでの証明はできないけど、お前ならやれるだろ」

「くはははっ！ やっぱてめえは葛城や一之瀬と違って、敵として不
足ねえな。リーダー格が集められた竜グループに配置されなかった
のが不思議なくらいだぜ」

「ああ。それは当然だろ。僕はリーダーでも補佐でもない一般生徒だ
からな。指示がなければ凡人らしく細々とやらせてもらうさ」

左京君が一般生徒？ 凡人？ 細々？

なんの冗談…と思いかけて、そういえば自称凡人とは事あるごとに
言ってたなと思ひ出す。でもその自称にそぐわないことばかり起こ
しておいて、あっけらかんとしているのはどうかと思う。

だから私にしては珍しくチクチク言葉が溢れ出るのを抑えられな
かった。

「……その指示どころか相談すらさせてくれずに行方不明になったの
は誰かな？ それに前回は今回のコレも、一般生徒とか凡人とかがや
ることじゃないと思うんだけど？」

「あーあー。聞こえないなー」

……あ、あの、龍園でもDクラスの人でもいいから、するなら
早く指名する指示出して？ CPも手に入るよ？」

「貴方、ふざけているの？」

「クツクツク。俺に命令するんじゃないよ。する時は俺が決める」

「しないよ。今それをする、左京君への助け舟になっちゃう。私と
しては左京君にもっと困って欲しい」

「え？」

龍園はまだしも、榎田さんのいつにない態度を見るに、榎田さんも
左京君に思うところがあるのだろう。至極真つ当な返しをしていた
掘北さんや平田君が榎田さんを見て驚いているが、私にはその気持ち
が少しわかる。

左京君は普段が普段だからか、なんか困らせたくなる雰囲気……と

それすらも受け入れてくれそうな何かがあるのだ。

それにしても……。

改めてこんな場で私を含めた各クラスのリーダー達と対峙しているのを見ると、左京君は龍園君や……東風谷さんのような人を使ったり奪ったりする資質こそ持っていないと思う。それなのに与える事で利益を確保していそうな奇妙な風格がある。それは案外、奪ったり勝ったりする事を重視する人達にとっては、天敵であると同時に天佑でもあるのかもしれない。

競争に熱心なこの学校では珍種もいいところだ。ある意味、東風谷さんや高円寺君以上に独特な空気を持つ左京君が次に何をやってくれるのか、とつい注目してしまう。争いごとが嫌いな私だから尚更……。

「でもまあともかく！」

金が欲しいなら僕に乗ってみないか？ イギリスの哲学者、フランシス・ベーコンの言葉に「なんととっても最上の証明は経験だ」というのもある。みんな大金ゲットして、幸せになる経験をしようじゃないか。な？」

だから一応の信頼はあるんだけど。

強引に誤魔化す時には必ず見る左京君の悪そうな笑顔に落ち着かない胸騒ぎを覚え、私はこれから少なくとももつと仲良くなるまでは、できるだけ彼に張り付いている未来を確定させた。私が付けない場合は、四方君や神崎君に頼むことにしよう。

流石にやりすぎかもしれないけど、私とは全く違うタイプの思考と、私にはできない事ができる左京君にはそれをするだけの価値がある。それになんとなくだけど、彼は『鍵』になりそうな予感がしてならないのだ。

ただそうなった時に嫌がるだろう左京君を想像して、ちよつぴり楽しい気分になったのがいつも振り回されている意趣返しなのは内緒である。

72、不確定要素

僕の問いかけに最初に前向きな返答をくれたのは、2番手だと予想していた龍園だった。やはり本命は上手く動けないと見ていいだろう。

「……ククツ。いいぜ？　今回はてめえにノセられてやる。一之瀬とは無関係に、牛グループは指名しないよう言っというてやるさ。ひよ。お前が見張っておけ」

「はあ。それは構いませんが、よろしいのですか？」

「念を押さなくとも要点はわかってんだろ。その価値はある」

「どちらになっても私達の利点はある、ですか。そうですね。私ですうにかできることなら、そこは抑えることにします」

「ああ、それだけでいい。左京を潰すのは『次』だ」

「……………そういうのマジでやめてくれよ。乗ってくれた礼は言うけど、イジメ良くない。絶対」

この背筋が凍るような脅しとも犯行予告とも取れるモノが返ってくる想定していたから、本命には動いてほしかったがしかたない。椎名が居てくれただけマシと思っておこう。

「クククク。言ってるよ。」

で、てめえはどうするんだ葛城」

「冷静に考えてみれば、左京の案にはうちに損害を与える要素がない。それどころかクラス全体としてみれば、利益があるだけだ。それなら互いに利益がある話を俺が断る理由はない」

「……………」

「つまり？」

「いまだにお前は…龍園は信用できないが、左京のグループだけの話なら俺も乗ろう。尤もAクラスの『不確定要素』を考慮に入れるなら、俺の方を信用できないかもしれないが」

「なに言ってるんだよ葛城。クラスはともかく、お前ほど信用を得た奴はそういないだろ。つーか龍園と違って、これまでの所業から葛城が

裏切りとかするわけないじゃん。万が一あっても本意じゃないだろうから、お前か戸塚に借りてるものを使ったとでも思っとけ」

「左京……」

正直、僕の考える最もありえない可能性の裏切りは葛城・戸塚だ。あり得たとしても、ほぼ確実に他者の迷惑が絡む。彼らの場合、頭の出来がどうこうというより、裏切ることや出し抜くことに向いてなさすぎるのだ。

「おいおい。俺は裏切るとでも？」

「理由があればな。でも龍園は意味もなく、次を失くすような馬鹿な裏切りはしないだろう。だからやるとしたら——まあこれは言わない方がいいか。無粋だしな」

反対に、理由ができればほぼ確実に裏切ると思われる龍園だが、こちらも龍園の無人島での戦略から大体の方向性は読める。そこから大きく逸れない限り、今の時点で裏切る意味は薄い。また椎名のやる気次第で強弱は変化するとはいえ、平和主義の彼女の口添えも期待できるはずだ。

それでも理由ができるとすれば、状況の急変や誰かの暴走などなんらかのきっかけが発生した時だろう。

「橋本。お前に言う義理はないが」

「ははっ。みなまで言わなくていい。ここで協力しないなんて言えるわけないだろ。信用できないかもしれないけれど、姫様には俺から言っとくさ」

いくつか想定していると、葛城が橋本を疑わしそうに見ながら話していた。

しかし姫様？ 作ってるゲームは知らないだろうし、愛里のこと……じゃないよな。話の流れから、最近何かと葛城達の話題に上る坂柳さんのことか？ 理事長の娘らしいから、あだ名が姫様でも一応納得できるかな。

葛城の態度が橋本に敵対的なのは、橋本が対抗派閥とやらの奴だったからのようだ。……うわあ、めんどくせえ。

「ただ——左京」

「ん、僕？」

「やり方ならいくらでもあるって覚えておけよ」

「橋本！」

そう言うなら、上手くやれよ橋本。意図が透けている脅しなんて、葛城の反発を買うだけで草も生えない。それが目的なんだろうけども。でも、やるならもつと清隆や高円寺を見習え、と言いたい。

「一応、Aは指名しないでは言ったけど、別に強制でもないからやりたきややれば？ あんまりお勧めはしないけど、僕は報復とかもしないしご自由にどうぞ」

「……それは貰えるはずのポイントを貰えなかった奴の恨みを買うってことか？」

「いや？ あ、でもそれもあるか。だけど僕が言いたいののは、龍園も葛城もあえて言及しなかった誰かが裏切った場合の事や、こうした学校で独走体制に入るリスクとかも考えとけよ、っていうアレ。あー。あと汚れ役もほどほどにな。自分の意思じゃないなら尚更だ」

「どういう意味だ……？」

「……」

「ハッ。親切なことだな」

「混ぜっ返すなよ龍園。試験はまだしも、リスクはあんま考えてる奴がなあ」

「リスク………あゝ、クツソ。考えがマジでわかんねえ！ コイツ、どっか根本的な部分のネジが外れてるんじゃないの!？」

このように橋本が利益を度外視してでもなんとか話題を誘導しようとしている意図は読めるし、裏も透けているのである。ただ仮想単位でいうと、対峙した時の0.3清隆ほどの圧力しか感じない。僕でさえ逆用して混乱させることが容易いのだ。誰に……多分噂の坂柳さんだろうが、ただ意地悪で面倒なだけの手にしか見えないモノに踊らされそうになっている手駒候補、って感じなのかな。いらぬ世話かもだが、早期の脱却をお勧めしたい。面倒だし自分から望んでる可能性もあるから、これ以上言わないけども。

なにせよ清隆から仕掛けられた誘導や嘘と比すれば、橋本には圧

倒的なスペック差と経験値不足を感じる。

ん：あれ？ いや、もしかしてこれは清隆達が規格外すぎるだけか？ 東風谷や清隆と軽くやりあった時とかに知恵を絞りすぎて、僕の基準がおかしくなっている疑惑が浮上してきた。驕りの領域になると問題だし、少しずつでも調整しておいた方がいいかもしれない。僕自身のスペックを勘違いしてはいけないのだ。

ただ基本スペックは置いて、社会人経験を総動員してギリギリ……なんて高校生はそうはいないと信じたいが、四方に東風谷、清隆、高円寺、鬼龍院先輩などに多少でも対抗するには……って、結構いるじゃん!? なんなら生徒会のトップ二人も入ってくるし、次点クラスも僕よりは格上であることが多い。更には知らない奴も当然存在するだろう。

ますます慢心している場合ではないな。凡人がそうなれば良い力モ以外の何物でもない。なにより調子に乗った僕は世界で一番嫌いな部類の人種だ。何事も程々に抑えておかなくては。

となると、橋本のこれにも偽装工作などの線を頭の隅に置いておくほうがいい。わかってて引き下がる手もあるし、これからも僕に関わってくるつもりだから、あえて思惑を透かしてみせた、という可能性もないわけじゃない。葛城達に対抗している奴らだ。油断はできない。あやうく橋本をそこそこ程度の奴と印象固定するところだった。

まあともあれ、橋本のこれは実質降参（話し合いでわからない降参と同義。異論は認める）ということでもいいだろう。あとはDクラスだが、ここは言質とかが意味のある現状じゃなさそうだから、これからの行動で分岐するだろう。

「失敬な。僕ほど画一的な優等生はいないというのに、なんて事を言うんだ。お互い儲けられる提案だっただろうが？」

「貴方は一言目にはお金や儲けの事を言うのね。品性はお金では買えないわよ左京君」

僕の中では決着が付いたので、橋本の挑発をのらりくらりと躲しつつ、目で葛城を抑えつつ、どうやって幕を引くかと考えていると、今

度は堀北さんに喧嘩を売られた。こちらは橋本より更にわかりやすい人でよかった。

「ハッ。浅い見解だな。人は金に余裕ができてこそ上品になるものだよ堀北さん。クラ○カと一緒に出直してきたまえ」

「ク○ピカ？ 貴方は何を言ってるの？」

「ブフォッ！ そんな返し、初めて聞いたぜ。どっから出てくるんだよその発想」

「当然といやあ当然だったが、やはりコイツじゃねえな。ククッ。だが敵とさえ見られず、口だけで格下だと証明されるなんてなかなか面白れえ見世物だったぜ。どんな気持ちだ？ 『堀北』」

「……どうしてそうなるのかしら。左京君はわけのわからないことを言つて、話を煙に巻いただけじゃない。格下の証明なんてされてもいないのだけれど」

まあどっちも正論だよな。

けど、さっきの橋本もそうだったけど、言い合いでは勝利条件は場合によって変わっても、無条件の負けは話がわからない方って事になりがちだ。双方の知識や得意分野を把握して同レベル以上で言い返せない、僕や龍園みたいなタイプからはこう見られる。

要は彼女は思考も言葉もマトモすぎるってことだ。格下かは判断が分かれるが、龍園は堀北さんを見切り始めているのだろう。

多分堀北さんは、兄の会長に似てIQの内訳が偏っているタイプなのだと思う。どっちも知的な雰囲気はあるが、交渉能力を求めるEQは低めと見た。

本来、EQが高い人は相手の考えを想像する。プロファイリング能力も高いのでIQも高いはず。逆もまた然りだけど、人には得意不得意があるので偏ってしまうのはあり得ることなのだ。

ちなみに、IQの内訳は学習能力、理解能力、概念形成能力、情報処理能力、論理・理性適用能力のレベル。こうして並べると、なんとなくIQとEQはリンクしている事がわかると思う。

ところで唐突な余談なのだが、現代で学力が高いのは平均よりも少しIQが高めの奴らだ。本当にIQが高い能力の奴は、うちの学校含

めた現代のほぼ全ての学校システムでは厄介者扱いされて排除される。これは二度の中学時代で実例をいくつかこの目でも確認しているので、以前に挙げた例外を除いて間違いない。

そしてリンクしているが故に、EQでもそれは似た事情となる。人付き合いの幅が広いのは、本当はEQが平均より少し上で、感受性が鈍感だからこそ気にもしないということ、というようにも解釈できるのだ。

つまり真にEQの高い奴は、他人の悪意をまともに浴びてしまつて、心が疲れ切ることになってしまう。よほどの目的か桁外れの忍耐力がなければそうなるはずなのだが、僕の友達には一人、それを承認欲求を満たす事でかろうじて乗り切っている人物がいた。

「だよね！ 堀北さんのことはともかく、私も左京君と知り合つてからずっとわけわからないって思つてたよ！」

そう。ここにきて突如として乱入してきた櫛田こそがその実例で、本来は本命の交渉相手と想定していた奴である。

「え、あの、櫛田…さ、ん？」

「櫛田さん？」

「だからつてわけじゃないけど、左京君にはまず一言言いたいことがあるんだよねっ」

ただいかにEQ・交渉能力が高い櫛田でも、心が疲弊し続けている状態で、理解のある仲間もほぼいないのでは半分もその能力を活かせない——と、思っていた。

櫛田は何のつもりか満面の笑みを浮かべながら、橋本や堀北さんが発した降参の言葉に力強く同意して僕に向かつてきた。そのまま戸惑っている平田や堀北さんにも返事せず、にこやかに顔のまま僕の近くまで来ると、耳元でボソツと一言。

「邪悪」

……

……

……

「ひ、ひいいいっ！ 何故その言葉を僕に!? 気づかれ…いや、知ら

れている？ どうして？ どこから漏れた？」

「ふふっ。さて、どうでしょう？」

その油断は僕への奇襲となって襲いかかってきた。交渉のカードと関係ない部分で。

だから手ぐすねを引いて必殺の一撃を狙っていたその一言は、僕の背筋を凍らせたのだ。一気に恐慌状態一歩手前である。

勿論、いまだに櫛田の笑顔からは全く怒りの気配を感じない。彼女の外面は強固な笑みの形で内側を覗かせない。しかし性格的に東風谷とのアレが知られているなら、怒っていないとも思えない。

隣を見ても、部屋内で今のが聞こえていただろう左の一之瀬（こっちは櫛田と反対側だし、微妙に聞こえてないか？）はともかく右の愛里が怯えているし、恐怖を感じる邪悪な笑顔なのは間違いない……はず。

なにより櫛田がこの場で乱入する必要性はないのにどうして……？ 櫛田の性格を考えても、この行動はリスクしか生まないとわかるだろうに。

いや、こういう場合での謎の行動は、困惑よりも恐怖を増大させる。まさかそれを承知で、僕に何かを仕掛けるつもりか？

真相を探るべく恐る恐る櫛田さんを見る——が、その輝くご尊顔に浮かぶ笑みは相変わらずお美しい。うん。僕が白雪姫に出てくる鏡ならば、世界で一番美しいのは櫛田様と答えてもいい。

だから、ね？ 背景に見える黒っぽいオーラを収めようじゃないか。美しさが損なわれてしまう。それは世界の損失である。ご機嫌麗しゆくならないともつたいないぞ☆

とかいつそご機嫌取りしたいのに、恐怖で頭は回っても口が回らない。何故だ？ なんだかんだで、さっきまでの僕は有能ムーブ的なモノで場を支配していたはず。それがどうしてこうなった。てか、ご機嫌麗しゆくならないとってどんな日本語だよ！ ☆とかふざけてんの僕の脳内!?

「左京君」

「ひゃ、ひゃいっ！ なんていざいましょうか!？」

「にやはっ♪ なにそれー♡　なんで私相手にそんなに固くなってるのー♡　まるで、ざあーこ♡　みたいだよっ♡」

「いえ、そのようなことがあるうはずも……ごさい、ません」

空回りする頭に加え、恐慌中の突然のソレには対応できず、僕はどこかの政治家のような返しをしてみました。

考えなしに感情で動いているのでなければ、東風谷にも匹敵する読めなさ。本当に、今日の櫛田様は一味違う。

「私が今日ここに来たのはね。試験とか関係なくてね。久しぶりに左京君とお話がしたいなー、って思ったからなんだけどー」

「ははあー……　全て櫛田様の仰せのままに！」

「あはは♡　左京君おもしろい♡　じゃあ今日……は一之瀬さん達の用事がありそうだから、明日以降に連絡するねっ！」

「はっ！　連絡、お待ちしております！」

反撃手段を思いつかない今は、ひたすら下手に出るのが無難だろう。

うう。それにしても、さつきまでビシツと決まっと思ったのに、今では櫛田以外、呆気にとられた表情でこちらを見ている。そんな目で僕を見ないで。あと逃げ遅れていた愛里と椎名、ついでに一之瀬はうんうん頷かないで。そうされると、毎回こんな感じみたいじゃないか……思い返すと結構な頻度でこんな感じにもなっただわ。

「あと左京君は知らないかもしれないから、一応言っとくけど」

「……………おぐう」

まだなんかあったのか。

話が終わったと思っただけで考え事に逃避してたから、思わずカエルが潰れた時のような声が出てしまった。

でもこれで彼女がこの場で話したい話は最後なのだろう。珍しく周囲の空気を気にせず再度僕に近づいてくると、念を押すかのような口調でトドメを放ってきた。

「……私からは逃げられないよ」

「……………」

もはや僕からは言葉も出なかった。蛇に睨まれたカエルの気持ち

を現在進行系で味わっていた。

どうやらラスボスは清隆じゃなくて、櫛田だったようだ。

某大魔王の台詞を使いこなして退出していく櫛田にはそれだけの風格がある。

この学校で僕に恐怖を感じさせた生徒ランキングでは、紛れもなく

——櫛田がNo. 1だ。

それでも、かろうじて収穫と言えるモノがあっただけ不幸中の幸い
と言っているかもしれない。忘れていたもう一つの不確定要素さえ
なかったら、だったが……。

73、演技

1回目のディスカッションが終わり、だいたい1時間ほど経った。ディスカッション後には各クラスのリーダー達が押し寄せてきて問答が始まり、最後には櫛田が全てを持っていき有耶無耶になってファイナル。それが終わったかと思えば、僕は櫛田ショックから我に返った一之瀬と神崎に両側を固められて連行された。

さっきまでの話し合いで一之瀬や神崎が後半ほぼ発言しなかったのは、ディスカッション後に僕を拘束する事に重点を置いていたからかもしれない。

でもあの面子とあの場で話すまでもなく、僕の発言が今回のBクラスの方針にある程度沿っていた……とかだったらいいなあ。望み薄だけでも。

連行される時、何気に最後まで残ってくれていた愛里や椎名も、他のみんなも助け舟は出してくれない。挙げ句、話があるとか言っておざわざ来訪したというのに、葛城もまたの機会を楽しみにしているとか言い出して結局帰ってしまった。龍園や橋本、掘北さん、平田もそれぞれで微妙に態度は違えど普通に僕を見捨てて帰った。薄情な者達である。

まあ、これで勝手に牽制し合って、牛グループの奴らに結果1を指してくれるようには言ってくれるなら、上々の成果という事にもできる。少なくとも、それがDクラス以外にとつて最も得な結果だと一定の理解はされたはずだから、打つ手は限られてくるだろう。

この上で僕が指名されたら候補が相当絞られるから、そんな奴が出ないことを願いたいものだ。……個人的には、出てくれてもいいけども。むしろ出てきてほしいとすら思うけども。

そして現在。

僕は場所を変えながら、クラスメイトが多く集まるレストランでクラスの色んな奴からヤーヤー言われ、それを聞き流し続けていた。今

は一之瀬が僕にほうれんそうの重要性をキツく説いていて、当然のようににわかった風を装い神妙に頷いている。

連続で起こる喫緊の問題に、内心頭を抱えながら。

「わかった？」

「そんなの10くらいは承知だ」

「あ、これはあんまりわかってないでしょ。百も承知のうちの十つてことだよな？　ほとんどわかってないじゃないの」

「……ぐっ。僕をわかってきてるな」

そのせいで集中できない理由もあって、また正直に内心を吐露してしまい誤魔化せない。度重なるイベントによる精神的疲労で、頭のキレが鈍っているのを隠せなくなっていることもある。

それでも僕の口八丁を見破るとは、一之瀬もまた僕を追い越していった者の一人になったのだろう。こういう変人には、僕のような常識的感性では計り知れない成長速度があるのかもしれない。

というか、一之瀬がまたどこかおかしくなっている。それがどこの部分かは明白なのだが、僕からは指摘しにくい事情をも一之瀬は作り出していた。これを自覚した上でデバフ込みでやっているなら、なかなかの策士である。

いや、待て。こうして何度も見破られ、封じ込められるということとは、つまり一之瀬は最初から僕の遥か上にいた？

そう脳内で思い込んで次に打つ手を編み出す。

「ふっ。一之瀬、免許皆伝だ。もう僕などに構う必要はない。やっちゃったことは仕方ないし、これからは気をつけることを約束しよう。」

だからな？　いい加減、手を離そう？」

「大丈夫だよ左京君。妹が小さい頃には毎日繋いでたし、これは小さい子が迷子にならない防止だからね」

しかし乗り越えられた後方師匠面する策はまたも失敗に終わった。更に勇気を出して、やんわりデバフの根源を指摘しても梨のつぶて。菩薩の如き悟りきった笑顔で僕を子供扱いしてくる。

そう。現在の喫緊の問題とは、小さな子にするように一之瀬が僕の

手を握り続けている事なのだが、こうなった理由は勿論不明だ。また柔らかな手の感触のせいで思考がまとまらなくて、内心が垂れ流し状態&失敗続きになっている。ボケとスルーを駆使する一之瀬に対し、せめてもの悪足掻きでツツコミに回るしかできない。

東風谷といい、櫛田といい、なんでこうも面倒を起こす奴が次々と沸いてくるのだろう。

「なに言い出したのこのとぼけた美少女は!? 僕は妹どころか男で同級生の他人なんだけど!？」

「び、美少女……ま、まあまあ。この試験の間だけだから。私の妹になつたつもりで」

「そこはせめて弟だろ! いや弟でもないけども!? てか、なんで一之瀬は時々突拍子もない面が顔を出してくるんだよ!？」

「そんなに変かなあ。左京君が行方不明にならない対策なんだけど……」

「変以外のナニモノでもないわ! さっさと手を離せ! このポンコツ委員長!」

「お姉ちゃんをそんな風に言うなんてひどいなあ」

「あああああつ! 話を通じねえ!? お客様の中に通訳の方はいらつしゃいませんかー!？」

「それは毎回こっちの台詞なんだよ左京君」

話し合いと櫛田ショックの後、気が抜けたような雰囲気次第々と解散しようとしている中、愛里と椎名に癒されようとしていたら、一之瀬が奇妙な勢いを発揮して僕の手を繋いできた。そのせいで再度呆気にとられた皆の隙を突かれて、レストランの大部屋まで連行されたのである。

おかげでそれから緊張&混乱しっぱなしで仕方ないし、一之瀬に話に来るクラスメイト達もクラスの象徴に拘束されている僕を変な目で見てくる。非常に居心地が悪い。

しかも普段は抑えている精神のストッパーが外れ気味だから、結構怒られそうな言葉選びをしているというのにほぼスルーされるなど、平常のチヨロい一之瀬ではありえない。もつと感情的になつてくれ

れば、誘導する選択肢もできるのだが……。

なんとか普段のチヨロ之瀬に戻す方法はないものか。

「まあなんだな……夢月が一之瀬に迷惑と心配をかけすぎた自業自得だな。一之瀬が安心できるようになるまで、役得と思って楽しんでけ」

「役得なら役得らしく。パフパフの一つでも……あつ！」

四方の他人事みたいに投げやりな言葉と返しで、また一つ思いついた。

そうだ。勇気を振り絞る事になるしリスクはあるが、これをやれば一之瀬は僕から離れるに違いない。

僕は電飾が光る天井を見上げ、独り言で気合を入れ直すと魔法の呪文を誦んじた。電灯は意外と眩しかった。

「つしゃあ！ やってやる。やってやるぞ！」

「ど、どうした夢月？」

「……ぐ、ぐへへ？ 一之瀬……ね、姉ちゃん。おおお俺様と手を繋ぎたいなら、亀仙人のごとき要求をされるって覚悟の上だろうな？」

パ、パフパフだ。パフパフを要求するぞ？ 嫌だろ？ 嫌に違いない

！ ゲ、ゲースゲースゲス??？」

「左京君。なにその……笑い？」

うおおあああつ！ それでも死ぬほど恥ずかしい！ 一之瀬どころか誰の反応も見れないほど恥ずかしい！ 僕、何やってんだと人生を振り返りたくなるくらいに！

本当は繋がれてない方の手をワキワキさせつつ、更にセクハラ言葉を重ねるつもりだったが僕には無理だ。すでに臨界点を突破して頭が沸騰しつつある。

でもこれで僕は、クラスの嫌われ者にランクダウンすることができてる。なんととっても、公衆の面前でクラスの中心にセクハラをかましてやったのだ。今のところ思ったよりも周囲の反応は薄いが、一之瀬シンパまでいる中での暴挙には批難轟々だろう。

できるならこの手は使いたくなかったが仕方ない。ただ、この後は逃げ道になる言葉を用意すれば、ミッションコンプリートにできるは

ずだ。ここまでやってしまった以上、変更はできても退くことはできぬ。続く言葉は真逆だけでも。

「だが僕は退くし、媚びるし、顧みる。手を離せば要求を取り下げ、謝罪もしよう。行動を起こすなら今のうちだぞ一之瀬」

「左京君。そのざつこいサウザー様はやめて？ イメージ崩れちゃう」

「そこじゃない！ 手を離さないとパフパフを要求するって言うてるんだから、ここは嫌悪感たつぷりに僕から離れる場面だろう!？」

「？ さつきからなに言ってるの？」

「ま、まさか……パフパフが何かわからない……のか？」

絶望だ。

僕の圧倒的絶望はボケと無知の形をしていた。このギャグみたいなセクハラ言葉を知らないとなると、直接的な表現をするしかない。更にゲスっぽくした上でだ。

果たして僕にできるだろうか。いや、やるしかないのだ。

「……てか、一之瀬って北斗の拳は知ってるのかよ」

「当然。中学の時に行ってた美容院に置いてあったから、待ち時間で全部読破したよ」

「マジかよ。女社会どうなってんだ」

それにしても、おかしい。

通じなかったとはいえ、勇気を出してこれほどゲスっぽく振る舞ったのに、柴田と話す一之瀬の声音には変化がない。いくら一之瀬でも「きも」とか「近寄らないで」とか「童貞乙w」とか罵倒を繰り返して……は性格的に流石にこないか？ でも近い表現の異論反論はあつてしかるべしだと想定して心構えしていたのだが、まさかここでボケスルーとは。恥ずかしすぎて顔が見れていないのでどこまで効果があつたかも微妙だが、声にはそのような気配が感じられない。

てか、なにさり気なくセクハラ耐性を身に付けてんだよ。無人島から僅か数日で彼氏とかから仕込まれたのか？

誰だよ余計なことしたの。そのせいで今の僕が苦勞してるのがわかってるのか。その彼氏とやらか、あるいは良からぬことを吹き込ん

だ奴が推測通りに存在するなら、意趣返し程度の仕返しはしてやろうと僕は決意した。

とりあえず後で僕に対し「おうおう。俺の女になにしてくれてんだ」みたいに美人局してくる奴が、一之瀬の彼氏候補最有力だな。

ふん。もし来たら、返り討ちにしてくれる。だって彼女持ちにだけは負けたくない。僕が他事ありすぎて作ろうとすら思えないのに、一之瀬みたいな彼女を作ってるリア充など羨ましすぎる。そんな奴に僕はぜってえ負けねえ！

いやいや。そんなことはどうでもいいことだった。

問題は、耐性関係なく、女子として怒るのが当然な言葉と態度をスルーしてきたことだ。

一之瀬は当然として、ここに来ている女子連中や僕と同室の四方達からも責められる覚悟があったのに、そんな気配すらないのはどう考えてもおかしいのだ。摩訶不思議アドベンチャーなのだ。亀仙人だけに。脳内のノリツツコミがうるさすぎるわ。

北斗の拳の話で盛り上がってきた奴らをよそに、内心でわちやわちやししながら疑問に思っていると、白波や網倉さんまで参戦してきた。

「情けないですね左京君。無理もありませんが、帆波ちゃんと手を繋いだけで鼻の下を伸ばしちやつて。まあ、妬まし…羨ましい…：あー、とにかく情けないですよ」

「お前の目は節穴か!? 伸ばしてねえわ！ むしろ浄化される危機に戦々恐々してるよー！」

「とういか左京君さあ。そういう台詞は帆波ちゃんの顔を見て言つてこそだと思ふよ？ 真っ赤になって上を見ながら言つても、無理して言つてる感がどうしてもね〜」

「あんなアホな台詞を言うだけで恥ずかしいのに、顔なんか見れるわけないだろう!?! つーか、手え握られてる時点で一杯一杯だったの!」

「なるほどー。やっぱり左京君はこういうのも苦手、と。じゃあ手を繋ぐのは正解だったね」

白波達にした僕の精一杯の反論にも、一之瀬からは確信を得たように頷く気配だけでやはり嫌悪感などが僕に向いている気がしない。

耐性が付いて無敵か？ いや前に精神ダメージを受けていた事例はあるし、短期間でやりまくってたとしてもそうなるはずがない。ならば、伏せ札のあぶり出しとさらなる低みを目指して、よりパワーアップさせてトライアンドエラーである。

「正解じゃないから！ ほ、ほら、えーと…僕が一之瀬をどっかに連れ込んでエロいこととする心配とかあるだろ。年頃なんだし、警戒心をもつと持て！ 待つてろ。もう1回演技するから、見逃さずちゃんとドン引け！」

「ちゃんとドン引けって……」

「いくぞー！ ぐへへ……いや、やっぱりこっちの方がより下劣っぽいかな？ よし。

ぜ、ゼハハハッ！ これ以上僕の手を繋ぎ続けるならお前の、一之瀬の……ちちち乳に顔をう、埋めてやるぞ！ ええ!? おい!!! 吐き気を催すほど嫌だろう!? ゼハ、ゼハハハハハッ！

——離さねえなら!!! パフパフ祭りはある!!! 終わらねえ!!!」

元ネタとはかけ離れてしまうけど、よりゲスさを際立たせる口調なら個人的にはこれが一番だと確信している。

幸い、爆笑して緊迫？した雰囲気をぶち壊してきそうな東風谷がこの場にいらないから、僕にできる限界までゲスく直接的にできた。というか居たら、東風谷を身代わりに誘導することもできたのになんで居ないんだ!? いらぬ恥をかいたじゃないか！ あいつも問題を起こしたらしいとは聞いているし、説教される対象だろうが！

……クソ。居ない奴はともかく、途中ちよつと声が震えてしまったが、この程度なら誤差だろう。

更にはわかりやすくパフパフがなにかの解説も付け加えて、警告を入れれば完璧である。

「天に見ろー！ 地に聞けー！ このゲッスイ笑い方と要望を！ 僕の想像だが女子が身の危険を感じるだろう低俗な下劣さだぞ？ つまり一之瀬が狙われてるんだ。クラスのみんなも早く僕から一之瀬を引

き離さないとんでもない事態に発展を」

「いやー。それこそ自分で言うことじゃないだろ。演技って言うっちゃってるし、夢月が黒○げというのは無理がある」

「うん。それに形だけ真似ても必死さが滲み出すぎてて、欠片もそういう事しそうな目をしてないよね」

「……残念ながら、私にも本当に実行しようという気が全然見えません。もっと真面目にやってください」

「ち、ちげーし!? やらないってよりやれねえんだわ! でも万が一はあるって考えろよ!? 一之瀬の身の安全がかかってんだぞ!」

「万が一、とか……はあ。無礼ではあっても、その気はないって言うてるようなものじゃないですか。そういうところですよ左京君」

ぐう。一之瀬の狂信者の癖に味な真似を……。白波なら白波らしく、冷静にダメ出しとかせず暴走でもしてろよ。見れないけど、気のせいか一之瀬から優しげな雰囲気と言葉まで漏れ出してきたじゃないか。

「左京君……もう諦めよう? 迷子にならないって私が確信できたら開放してあげるから」

「一之瀬は一之瀬でいつまで言ってるんだ!? だから迷子なんかならないっつってんだろが!」

しかし何故だ。何故ここまで言ってる誰も怒らない? 理解できるよう解説まで加えたのに、何故僕の完璧なエロガツパの演技が誰にも通用しない? ファンタジー的な何かからジャミングっぽい攻撃でもされているのか? この手繋ぎ状態で、低俗でエロ系な言葉まで出しても、一之瀬の筆頭シンパである白波すら煽れないとは……。本当にどうなっている?

だが想定が外れても、反応がおかしくても、何も通用しなくても、僕は諦めるわけにはいかない。

もういい加減憐れんでいるようにも聞こえてきた一之瀬の優しい言葉、しかし絶対に受け入れるわけにはいかなくて何度目かの否定を繰り返す……ように見せておく。勿論、同級生で誕生日まで同じ奴に、子供扱いなど断じてさせるわけにはいけないのは本気だが。

これが通用しないのなら——かくなる上は、全てを押し流す自爆覚悟の奇策第二弾に打って出るしかあるまい。

「そもそもなんで昨日は行方不明になったんですか？」

「神崎達から女子が部屋に来るってメール来てたから、僕はてつきり誰かがみだり——ふがっ！」

「柴田、四方！ 緊急事態だ！ 左京の口を塞いで取り押さえろ。巻き添えを食うぞ！！ 手伝えっ！」

「ええっ!? 神崎君!？」

だから改めて白波に聞かれた時に、いつそ伏せていた方の情報開示を行おうとしたら、信じられないほど迅速に僕の口を塞いで指示を出した神崎に阻まれる。また少し遅れて、柴田と四方も動き出す。

まさに、あちらを立てればこちらが立たず。

「あっ！ あれか!? って、やべえ！」

「あー。流石にそれはバラされるとマズいか」

「むぐうつ！」

「暴れるな左京！」

それは無理な相談である。口を野郎に抑えられて暴れない奴などいない。

だがそれは置いて、八方塞がり……かと思われたが、よほどシモ系の話をバラされたくないのだろう。焦った四方達3人がバラバラに僕に、ひいては僕と手を繋いでいた一之瀬に殺到する素振りを見せたことで新たな光明が見えた。

——好機！

ここしかない、僕は一気に思考速度を最高速に切り替える。

他に意識が向いて微妙に力が緩んだ一之瀬と、僕の口を塞いでいた神崎を後回しに、士気に差がある四方と柴田を見て取って心の余裕を作ると、位置関係と状況を把握して最速で最適解を導き出す。

3人十一之瀬がいかに僕より多数で格上だろうと、突発事態ではやりよう次第でどうとでもできると教授してやろう。

まず間違つて一之瀬に怪我させない為と、精神にかかっているデバ

フの負荷を失くす為に、素早く丁寧に手を外して両手を自由にする。二度目はないかもしれないので、辛抱強く機会を待ち、あえて繋がれた手を力で外そうとしなかったのは、この油断を誘う為だったのだ。

首尾よく手が外せたことで、僕に更なる余裕と普段の思考能力が戻ってくる。同時に先程までの自分のアホさ加減も自覚してしまっただが、自己嫌悪は忘れてしまうことにした。

「あ……手、離れちゃった」

そして微妙な寒気をスルーしつつ、格段に楽になった肉体と精神でもって、神崎ごとさり気なく体の向きを調整して備えておく。更に自由になった両手で必要分だけ力を込めてタイミングを合わせ、慌てていて突進する勢いになっていた柴田を四方のいる方向へと流す。僅かに体勢を崩して正面衝突を誘導しただけなので、二人の運動神経ならば誰も怪我なく無事落着くことだろう。

ヨイ、ドンのスポート・競技や喧嘩なら無理だったが、突発的なアクシデントへの対応なら、クレーム処理に定評のあった僕を優越する者は同年代にそうはいないはずだ。四方級の奴と直接当たらなければ、身体操作に応用して対峙した相手同士の方向をぶつける事も不可能ではない。

「うお、あつぶねっ!」

「おわっ!」

それを実行すると予測通りに、四方と柴田は直前で自ら転がり正面衝突を避けた。怪我をさせるつもりはなく、数瞬さえ稼げればいい僕にとってベストな結果である。

ここから次の障害&壁候補になるのは一之瀬だったが、良い目が出たのか手が離れてからは戸惑うばかりになっており、神崎にほとんど意識を割けたのは幸運だった。

なぜなら、ぶつかりかけて転んだ四方と柴田に注意がいった神崎の目くらましに、できるだけ素早く動いて一瞬でもノーマークになる必要があったからだ。それには慎重かつ大胆な立ち回りが要求される。余裕があるに越したことはない。

「なに!?」

左京が消えっ!」

最後は急速にしゃがんだことで僕を見失った神崎の焦点がブレたと確信できた瞬間、足に溜めた運動エネルギーを開放して、目を付けておいた誰もいない所に飛び込みながら場を離脱した。

無人島での生活は、僕の逃走スキルにさらなる磨きをかけている。今の僕は、僅かな隙でも自由への道筋を描き出すことができるのだ。そもそもなんで逃げ出したかって？ 精神と面倒臭さが限界だったからだよ！

「感謝するぞ神崎！ 助かった！」

「左京お！ ふざけ——」

「神崎、四方！ 悪い！ 油断した！」

「やられた！ 夢月が逃げるぞ!？」

「——くつ。左京を逃がすな！ 誰でもいい！ 店の入口に回ってくれ!!」

好機を作ってくれた神崎に礼を述べた僕に対し、神崎が吠えた。また転がりながらも逃走を阻止しようとしてきた四方と柴田もいたが、他の奴は状況がよくわかっていないので指示があっても即座には動けない。唯一動けるはずの神崎も、転んだ四方達二人と突発事態に戸惑う一之瀬が壁になるよう飛び込む前に位置取りを計算しておいた。この状態では、仲間を躲し、または飛び越えて僕を追うなどできようはずもない。他を押し退けるほどの理由もないし、止められる者もいない。

これぞ僕式リアル振り飛車である。

「ふぁーはっはっは!! もう遅いわ！ さらばだ明智くん！ じゃなかった一之瀬くん！」

「馬鹿なっ!!? この状況で逃走を許すだど!？」

「……きよ……ん………て……う……!!」

転がる勢いで立ち上がるやいなや、最速で最短でまっすぐに一直線に。

進路上にいた生徒やボーイ・ウエイトレスの間を縫い、僕は悠々とレストランを抜けた。思わず某怪盗の捨て台詞を気持ちよく吐き出し、あつという間に姿が見えなくなった神崎の遠吠えと誰かの声が優

雅な調べに聞こえるほど、素晴らしい開放感を感じながら……。

それは今日イチで格別の気分であった。

ともあれ僕は早足のまま見事逃走を果たすことになる。

当然、常識的な優等生の多い我がクラスメイトは、これ以上非常識な追走もできず齒噛みするばかりだっただろう。

自分で自分を褒めてあげたい。よくぞ僅かな隙を見逃さなかったな、と。

……ただ非常時だったので、レストランで数々のマナー違反を犯したことは許して欲しい。僕の未来に、下船するまでにこのレストランへ謝りに来る予定が追加されたのは、完全なる余談である。

74、共謀

新しい夕方が到来する。

昼下がりの大恥を記憶から消去した結果、もういくらも経たないうちに美しさと希望に溢れた夜が訪れる夕方だ。

問題は、諸般の事情により逃亡者となったことで、面倒と絶望の未来が待っている夕方でもあること。

だから神も言っている（錯覚）。

——今日は厄日だ、と。

逃亡を果たした僕は、部屋に同室者がいないとわかっているうちに、自分の荷物からディスプレイ中との時間潰し用にもなる本を数冊持ち出していた。勿論、連れ去られる前まで持ち歩いていた荷物やパソコンもそのまま持ってきた。少し荷物が多くなっても、最悪部屋に戻らなくていい状態にはしておきたい。

ただ鳴ると鬱陶しいし端末は置いてきたかった。だが、櫛田の件があるので持ち歩いていないと何を言われるかわかったものじゃない。つくづくタイミングが悪いものだ。

『本日も高度育成高等学校所有船にてお楽しみのところ申し訳ありません。』

迷子のお知らせを致します。

高度育成高等学校学生寮にお住まいの1年B組、左京夢月くん。『迷子』の1年B組、左京夢月くん。同じく1年B組、保護者の一之瀬帆波さんがお待ちです。この放送をお聞きの際は、早めの連絡または端末の電源を入れることをお勧めします」

そうして首尾よく事をなしてしばらく経った頃に、担任の声で船内放送が流れてきた。どうやら一之瀬は、担任を頼ったようだ。

ただ逃げ出した時点で、この手もあるだろうと読んでいた。勿論、僕は先手を打っている。リスクを犯してまで自室へ寄り道したこと

だ。ここで道具や材料を持ち出せたことは、選択肢を増やすのに一役買ってくれる。

それに、速さこそなかなか迅速な対応と言えなくもないが……ふっ。青いな。本物の子供の迷子と違い、僕が気にしなればどうということもない平凡極まりない手だ。後で役立つかもと必要以上に迷子という言葉に反発して見せて誘導していたとはいえ、東風谷や櫛田ならそれをしない場合のペナルティっぽいモノも付け加えて追い込んできていただろう。

それができない事実こそが、正攻法に寄りすぎて成果を逃してしまおう一之瀬達の弱点である。

『繰り返し放送致し——ブツハ!!! もう、ダメっ! さっきようくくん? こんな放送流されてどんな気持ち? ねえどんな気持ち? 担任を任せられるようになってそう長くないけど、うぷぷ…私、生徒の迷子搜索放送なんて初めてよく。ぷくくすくすっ』

それを思えば、一之瀬に加担してテンション高く煽ってくる担任が隣れに思えてくる。

同級生が保護者などと言って誰が信用するのか。せいぜいがクラスメイトだけだろう。

僕にスルーされる想定をしていない担任や一之瀬は、可哀想なくらい視野が狭かった。

『星之宮先生! 左京君を煽ってどうするんですか!? 船内放送で探して欲しいって、頼んだだけなのに!』

『だって…うふっ。迷子とか保護者とか聞かされて、もう私おかしくておかしくて』

『おいっ、星之宮! まだマイクのスイッチが入ったままだぞ!』
『あっ、ヤバ』

最後はグダグダな会話とともに、ブツリと放送が終了した。

着想はともかく、突発事態への対応が弱すぎるし、なりより善人的対応に縛られている。言ってみれば、ずる賢い立ち回りの警戒をしながらいいのである。四方や葛城、堀北会長にもそういう節があるが、一之瀬はより顕著だ。

ただ僕の経験上、こうした善人が本気になった時が最も恐ろしい。流石に一之瀬レベルは初めて見たが、稀にいて類似する葛城タイプは最重要の目的が定まった時に、とんでもない推進力を発揮する場合があるのだ。基本性能も高い奴らだし尚更注意が必要になる。特に一之瀬は、予想外に想定外で不思議生物Xというべき確定変人でもあるので、敵対したくない者(するつもりもないが)堂々の首位である。だから、なるべく刺激・接触しない方がいいと思っていた。

具体的な想定はできなくても、色々ぶっ壊れた奴の企みを真に打ち破る者がいるとしたら、一之瀬が最有力だと僕は見ているからだ。尤も、スイッチが入っていない今は、ただのハイスペック善人お化けなわけだが。

一之瀬の言動から推察できる思想の「みんな仲良く」という言葉は、聞こえは良くても基本的に戦争と差別を生む呪いだ。そのせいで海外ではバブル景気あたりの頃から禁句とすらされているが、ブラックな人達には譲れない常套句らしく日本で強く否定する奴はあまり見ない。

『みんな』は自分の仲間で、他は『自分と関係ない人』。結果、仲間内だけで群れて、周りと諍い、対立を深めていく事になる。これを主に主張する脳内がお花畑な連中の矛盾と言ってもいいほどであり、この学校のシステムにも合致する呪いだろう。

ただ――。

勘だが、一之瀬のあの「みんな仲良く」は多分養殖モノだ。

なんらかの事情で元々善良だった性質に、更に過度な善良さが上乘せされた結果だと思われる。男女差があると言っても、葛城を上回る善良さを得ている事には相応の理由が必要になるはず。そうでなければ『ああ』はならない。

そう考える要素が、一之瀬のセルフ罰ゲーム的な考えと、今のところ学校が押し付けてくる「みんな仲良く」とは別物な点。本来の『それ』とは違うから、ブラック思考に寄っていかない限り、僕が一之瀬を本気で避けることはないだろう。

よし。理論武装の弾作成はこの辺にしておこう。最近の一之瀬や

神崎はいまいち想定しづらい場合があるので、いくつかの言葉を用意しておく。後で楽ができるのだ。

「呼ばれてますよ。まったく。夢月さんは事あるごとに問題ばかり起こしちゃって」

「——っ！」

……ふ、ふう、なんだ東風谷か」

ともかく、あれなら心配することないと、一応周囲の警戒だけしつつ、僕はあまり人がいない船首方面へと足を向けていた。そんな折に死角から声をかけられたので少し驚いてしまったが、東風谷だったので事なきを得た。

ただ不機嫌になる要素があるせいか、僕はともかく東風谷は無駄に突っかかっけきそうな雰囲気だ。こうした時、東風谷とは言葉のドツチボールになりやすい。お互いに八つ当たりだとわかってるから、本気で険悪な雰囲気はないけども。

ちなみに一之瀬達に連行された場に居た安藤からの情報では、よりよって東風谷に加え清隆とも同グループになり、空気が最悪になったらしい。島ではいつも元気だった安藤がひどく疲労して終始突っ伏していた。

「なんだとはご挨拶ですね。迷子の迷子の夢月さん？」

「ハンッ。またなんかやらかしたらしいお前が言えたことか？ 聞いてるんだぞ？ どのかのグループで清隆と睨み合ったとかなかったとか。お前こそ問題ばっか起こしやがって、なあ？ さつきまで品行方正な僕が説教を受けてたんだから、今度はお前が受けるよ」

「お断りします。というか、夢月さんが品行方正とか冗談も休み休み言ってください。私こそ真に品行方正・容姿端麗という言葉がふさわしいでしょう」

「東風谷にそんな言葉が似合うわけ無いだろ。冥府魔道とか潜影蛇手とかにした方がいいんじゃないか？」

「はい？」

「あー？」

「……」

一難去つてまた一難。

案の定、僕と東風谷はほんの少しの言い合いの末、額がくっ付くくらいの近距離で睨み合う。このクソ緑だけは調子に乗らせてはいけないと、僕の中の何かがささやくのだ。

しかし、いつまでもこうしているわけにもいかない。

どちらともなく目線を外した僕達は、無言のままそれぞれ進みだした。奇しくも同じ方向に……。

船首デッキに來ると、予想通り人は「ほぼ」いなかった。見覚えのあるピンク髪が、隅の柱に隠れるようにして独り言？を零してるのが見えるだけだ。

僕はなんとなく東風谷と顔を見合わせ、折角の機会だしと目で意思疎通が行われ、瞬時に和解した。東風谷も考えていることは同じようで何よりである。

意思の統一がなされた僕達は、背を向けてなにかボソボソ言っている愛里にゆっくり近づいた。

「……夢月君」

「おう。なんだ愛里」

すると気づいていたのか、背を向けていた愛里に名前を呼ばれたので、返答を返した。

「とおおおおお!!?」

返答を返すと愛里は奇声を上げ、猫背のままウルトラマンのように飛び上がった。これはいつもの奇行だろう。

「……ジュワツ?」

「あ、やっぱりそれ?」

「い、いい、いつ、いつの間にそこにい!?!」

「いつって、ちよつと前に愛里がエア友と話してた時くらい?」

「エ、エア友お……!?!」

愛里は着地と同時に振り返り、その豊満な胸を押さえて叫ぶように

呻くように言葉を絞り出した。

周囲には誰もいないし、鳥や動物など話しかけられる生物は存在しない。神様やお化けの気配もない。ならば合理的に考えて、ぼっちの固有能力を発動させていたと見て間違いないだろう。

「愛里さん。今ならいいですが、あまり目立った奇行は控えたほうが」
「そうだな。否定するわけじゃないが、一般的にウルトラマンごっこは女子高生として微妙なんじゃないかと思う」

「違うから!! なんか変な方向に勘違いされている!?!」

「恥ずかしがらなくていいから安心しろ。僕も東風谷も同じ穴のムジナだ。聞いたところ東風谷がスーパーロボット系で、僕は戦艦系だからエア友の方向性は違うが」

「本当に違うからね! わたしはただ夢月君を名前で呼ぶ練習してただけだから!!」

下手な言い訳である。

そこそこの付き合いと友好感情のある友達を名前で呼ぶのに、練習が必要なわけがない。愛里も我ら社会不適合者5人衆の例に漏れず、嘘や言い訳が下手なのは周知の事実である。なによりタガの外し方が甘い。

よし。それなら、この内弁慶が開き直る為だ。ここは僕が一肌脱ごう。

「うんうん。猫背のまま虎になりたいから力を溜めてたんだよな? いいじゃないか」

とりあえずウルトラマンよりは、虎やギターヒーローに誤解された方がいくらかマシだろう。面白いし。

「おお。俯いていたことにそんな意味が……。流石、独特なセンスですな愛里さん!」

「ああああつ!!? どんどん明後日の方向に誤解されていくう!」

照れたり慌てたりといった愛里の素直すぎる反応の横で、僕と東風谷はご満悦になった。さつきまで不機嫌だったのに、ニヤニヤ笑いが隠せていない東風谷の笑顔が全てを物語っている。

そう。これは最初からある程度察しててからかっただけである。

つまり愛里の癒やし成分を摂取して、東風谷のついでに僕も癒やされようと企て、その為にかかった。ただそれだけだ。

突如として始まった東風谷との共謀劇だったが、互いの狙いを瞬時に把握し、息の合ったコンビネーションで愛里の反応を楽しめた。おかげで有意義で心安らぐ時間を手に入れることができている。

東風谷早苗……相変わらず味方ならば頼もしいからかい仲間である。

愛里がワタワタするのを見て僕達は笑顔を取り戻し、互いの手を取り合つてガシツと握手した。

こんな性格な奴が友達なんて、愛里の苦勞が忍ばれると思つてしまったのは考えちゃいけないのだ。そのように僕は素早く自分を棚に上げ、内心で東風谷に全てを押し付けた。きっとあつちも似たようなこと思っているから、実質ノーカンなのは間違いない。

というわけで、僕と東風谷は献身的な愛里に消耗していたMP回復をしてもらった。癒やし杵として十分な働きだったと言える。楽しそうに笑う東風谷を見るに、彼女にも異論はないようだ。

ただこれ以上やりすぎると嫌われる可能性を上げてしまうので、愛里を軽く落ち着かせた後に二人に一言断つて、僕は展望室奥の小部屋へと行くことにした。こういう時は、大抵東風谷の方が上手くやる。僕はそろそろPC作業の続きを始めよう。

そうしてゲーム制作を開始してから3時間近く経つただろうか。

外が暗くなってきたあたりで、まだ居た（また来た？）愛里と東風谷が部屋へと入つて来た。僕とはいえ、自ら野郎だけが居る部屋に入つてくるとは、一之瀬と同じく警戒心が薄い奴らである。青少年的には、薄い本的な展開を望んでいるんじゃないかと期待してしまうではないか。

まあ冗談はさておき、その後は会話少なく適当に駄弁つていただけなので、彼女らにとって暇つぶし程度なのだろう。逃亡中の身ゆえに目立つ多人数での行動は控えたかったが、この二人ならば問題ない。存在感のなさやポツチ体質、人を察知する能力は僕をも凌駕する逸材達だ。事実、2回目のディスプレイまで一緒に居ても、彼女ら含

めて通報どころか話しかけてくる奴すら出なかった。そもそも人がいる場所を避けて移動したりもしていた、というのもあっただろうが。

時間になったので別グループの東風谷とは部屋前で別れた。

ああ。雑談中に東風谷がどんな問題を起こしたのか本人に聞いたところ、清隆と同じグループなのは間違いないが、そちらはほぼ無視で通したらしい。でも、どこかのクラスの女子3人組に前に殴られたと絡まれ、威圧して返り討ちにしたのが真相のようだ。

……これって、以前に僕とCクラスに乗り込んだ時にぶちのめしていた女子も、兎グループに混ざっていたのではなからうか？ 名前は知らないけどもし絡んできた奴がCクラスだったら、その可能性が高そうである。

まあ東風谷曰く、もう目も合わないくらい怯えているっぽいし、他にも注意が向いていたとの事で、もう東風谷が絡まれるような問題は起こらないだろう。東風谷にギスギス兎の雰囲気が悪化させない判断力が残っていて何よりである。清隆や安藤は大変かもだけでも。

東風谷のことはともかく僕と愛里は、牛グループの部屋に入室した。

すると入るやいなやディスプレイ前前に、堀北さんから結果3にする指名メールを出すよう要請された、と開口一番に須藤や池に相談された。なんでも今より先を考えて、なるべくCPを取れるところから取っておきたい的な事を言われたらしい。いや、こんな事を僕に相談されても困るのだが……。

ただ結果3にすると、敵対まで行かなくとも他（他のクラスだけじゃなくタダ働きになる愛里と松下さんも）からの印象悪化に加え、二人で山分けしても入手ポイントが半分になってしまうのでそこは考えとけよと返したら、ちよっと考えとくと言われた。

それにしても、なんというか堀北さんはこの要請からも滲み出ているように、意識が高すぎて足元に目がいつてない印象。ぶっちゃけ自

分中心とした天才や秀才だけで全てを決めたいのかもだが、この学校とクラスの総人数でそれをやるのは非現実的だ。僕のような私の強い凡人や愛里や一之瀬などの善良な奴を相手にそれを通そうとすれば、どこかで失敗に繋がるだろう。

しかし何らかの事情で彼女がこのまま失脚せずに兄のような立場に立ち、その時に利用もできない凡人以下だと彼女に見られたらどうなるのか微妙に心配になってくる。正直、何故堀北さんがあの各クラスのリリーダークラスが集まった中にいて、須藤達に要請を出せるのかわからないが、もしもこの先でリリーダーとして頭角を現してくるようなら注意しておいた方がいいかもしれない。

なぜなら意識高い系かつ多くの才能を持つ者がリリーダーの集団には、僕のような凡人のいる場所がなくなるのだ。となれば、クラス的に愛里がかなり苦しい位置に立つことになる。堀北さんの人を見る目はわからないが、金を軽視しているかのような発言からすると、はつきり言って彼女から愛里が凡人以下に見られる可能性は高い。念の為、対抗策は打っておくべきだろう。

あとその愛里は、僕と須藤達が会話している隙に、無駄に洗練された無駄のない動きで無駄に存在感を消しつつ、座席に座って空気のように振る舞っていたのを僕は見逃していない。この内弁慶は意外と肝が太いのか何気にいつも平常運転である。

「さて。そろそろ真面目に、記念すべき第2回目のグループディスプレイを始めていくぞ。みんな、今日もよろしく」

「なんで2回目記念なんですか？」

「2回目に限らず、全てが僕達の記念日だろう」

「絶望的なセンスのなさ」

「ダッサ。無理して言ってるのが丸わかりで気持ち悪い」

「……………ふう。椎名はともかく、松下さんに姫野。お願いだから、僕の心を抉るのはそのくらいにしよう？ 2回目が無い事に賭けてたから、やることを考えてなくてつい言っちゃっただけなんだ」

とまあ、堀北さんについてはさておき。

このグループディスプレイの場合は2回目にしてすでにやるこ

とがなくなり、ゆるく話すだけの場と成り果てていた。

僕は今のところそれほど重要度の高くないリスクを考えながら、一応僕が仕切り役（まだ効力あるかは微妙だが）だったのでその役割を切り出しつつ、返された言葉の切れ味に泣きそうになっていた。一之瀬達がいかに優しかったのかわかるエピソードである。

ともかく今の状況には、D以外の各クラスリーダーからお許しが出た影響もあるだろう。そうでなければ、僕が誰かに指名されて終了だったはずだ。愛里は難しいにしろ、椎名に確認を取れば僕が本場の事を言っていると龍園にはわかる。しかも以前の引き際を考えると、あいつには決断力もある。そう思えるくらいには僕は龍園を『信頼』していた。葛城は言うまでもない。

だから牛グループで2回目のデイスカッションが開催された事自体が、まだ確定してはいないが、とりあえず結果1を目指す意思を結論づける状況証拠となる。

……個人的には、それでも誰か：橋本を呼んだ西さんとか、愛里以外のDクラスの誰かとかがやると思ってたんだけども。

「やることないんだったらさ。なんかゲームでもしねえ？ 1時間もじっとしてるのってメツチャ暇じゃん」

「……そうだな。俺『は』賛成する。左京はどうだ？」

「……うん。私『は』賛成。左京君は？」

そんなゆるい空間にも、微妙に緊迫感のある数人はいる。

池が提案したなんらかのゲームをするのに、いち早く賛同した戸塚と西さん。揃って僕の方を向いて聞いてくる。近くに座ってるというのに、Aクラス同士では目も合わせない徹底ぶりだ。なんだこれ。面倒くさい。

「んー。じゃあ希望者はゲームでもして時間潰すか。」

あつ。てか、道具あるならいいけど、誰か持つてるか？」

「部屋にはトランプとかUNOとかあるけど、今は持ってきてないよ。みんなは？」

誰とはなしに聞いてみると、松下さんがフォローしてくれた。ありがたいものである。

しかし本を持ってきていた愛里や椎名は、みんなでやるゲームには反対のようで首を横に振っている。僕も内心ではその意見に賛成だ。また他にも何人かはやりたくなさそうだ。

でも所詮は暇潰しなんだから、個人個人好きに過ごせばいいんじゃない、と僕は思っていた。しかたないから、最低限グループ内をまとめられるけども。

ちなみに愛里の持っている本はさっき僕が貸した物で、少し変わった作風の群像劇？のような推理物だ。作者の「かみないつし」は無名に近いが、アレツサンドロ・バリツコを彷彿とさせる雰囲気が好きで最近のマイブームになっていて、何冊か購入していたのである。

またバリツコ作・海の上のピアニストも持っていたのだが、東風谷が持つてしまったので、今は手元にない。おかげで僕の手元に残っているのは、夏川草介作・神様のカルテだけになっている。なのでデイスカッション終了までに、椎名から何冊か借りれないかな。なんて、目論んでたりもした。

暇潰しの案については、そうして話し合いが行われた結果、全員がゲームなどの道具を持っていない事が判明し、その日はなにもなくてもできる即興怪談大会が開かれた。

これなら参加したくない奴まで順番が回らない可能性も高く、コミュ力の低い愛里や椎名にも優しい。苦手そうだったり嫌そうにしている奴がいたら、僕や……なんか反発し合ってる戸塚・西さん、ムードメイカー気質が見受けられる渡辺や池へと振って誤魔化せば、仕切り役特権でどうとでもできるはずだ。

あと意外……でもないが、個人的にはこの怪談で最もみんなを震え上がらせる語りをしたのは松下さんだったと思う。河童は水子の暗喩だという事前知識があった僕でさえ、彼女が語った「河童の池」という怪談にはゾツとするモノを感じた。高1の子供とはいえ、クール系の美人に怪談は相性抜群である。

尤も、語り部としての参加をしなかった椎名が本気だったら、どうなっていたかわからないが。椎名は何故か愛里の持つていた本に気を取られていて、珍しく興奮気味になっていた事は怖がりな奴にとっ

ておそろく僥倖となったことだろう。

75、悪友

デイスカッションが終わると、椎名が愛里を誘ってどこかへ行ってしまった。僕も誘われ、愛里には継るような目を向けられたが、椎名なら問題ないと思っていたのもあって笑顔で見送った。今日はたくさん話して疲れているので少しゆっくりしたい。

あと戸塚や須藤達からも遊びに誘われたが、西さんや松下さんなど女性陣の視線がなんとなく痛くて断る以外の選択肢はない。対立構造っぽい者達には、仕切り役をやっている関係上、どちらかに付いた感じに見えないよう配慮すべきだろう。

なので旅行中なのに、今日も今日とて僕は楽しいボツチ飯である。そんな感じに夕食を空いていた小部屋で軽く済ませ、PC作業をしていると23時過ぎになっていた。日課の息抜きだけしてもう自室で寝ようとデツキに足を向ける。あそこは基本的に人が少なく、夜空を眺めるに良好な場所なので、一日の締めくくりに最適なのだ。

そしてデツキに到着し、あと数日で満ちる月を眺めながら、僕は船のデツキに腐っているだろう視線をずらす。

無人島での月見から約10日ほどが経過し、船上から見る月はだいぶ太ってきた。満月でこそないが、海の上から天体観測する機会はありませんないので、毎日違う顔を見せている自然を楽しむことができる。

毎夜こうして少しでも明るくない場所で観測していた僕にとって、心休まる一時だった。

そう。『だった』だ。

現在、デツキは何組かのカップルがいちゃつく盛り場と化していた——爆ぜろ。

このクソ暑い時期に、肩を寄せ合い、時折はしゃぐ声も聞こえてくる——代われ。

無人島以降でカップルが増加したとは聞いていたが、まさかここまでとは思わなかった——滅べ。

昨日まではこうではなかった。

娯楽系の施設に入り浸っていたのか僕の天体観測を邪魔する者達は極少数。それくらいなら我慢というかスルーできるし、大抵すぐに移動するので問題なかった。

しかし、現在Bクラスから僕は指名手配犯のように搜索されていると姫野や渡辺に聞いたし、放送の件もある。木を隠すなら森の中、という観点から見れば好都合にも思えなくはない。暗くて顔が判別し辛く、僕が居ても誰かに声をかけられたり気づかれることは少ないはずだからだ。

テツペン超えてみんなが寝静まった後に部屋へ戻ろうとしていた僕としては、それまではゆっくりと夜空を眺めて、目障り耳障りなモノはシャットアウトするのが上策だろう。

そう思い直した僕は、目立たないようデッキの隅っこに陣取り、本日 の天体観測に精を出すのであった。当然、独りで。

どのくらい夜空を眺めていただろう。多分、1時間も経っていない。途中、猿グループと少し遅れて馬グループの試験終了のメールが届いたのと前後して、僕宛の通信もたくさん届いた時間はあったが、櫛田からのものはなかったので軽く流してスルーした。さほど重要位置でもない僕なら、寝てたとか言っとけば何も言われないだろう。

と、それは置いといて、普通なら僕がこんな短時間で天体観測を切り上げることはないのだが、そうもいかない事態が発生している。

うん。原因はいつの間にかいた真横（というほど近くはないが）の知り合い二人だ。海の音に混じって微かに聞こえる声からすると、龍園と櫛田がいる。暗いし不躰だから目で確認はできないが。

なににしろ……え？ こいつらってそんな関係だったの？ とか一瞬思ってしまったが、片方だけならともかく、中二病&高二病ハイブリットに邪悪な承認欲求モンスターのカップルなどありえていいわけがない。シドーとハーゴンが同時に出現しては、無理ゲーにもほどがある。サマル王子に自分を重ねる僕としては、櫛田とボス格の組み合わせはマジで絶望的なのだ。

ただ性格的に混ぜるな危険を象徴する組み合わせは、なにより本人

達が嫌がるはずだ。あっても何らかの取引的な利用し合う関係なんじゃなからうか。というか、そうあつてほしい。

清隆との初対面時は早とちりだか事故だかだったのが、櫛田や東風谷みたいな悪友のメス顔は想像だけで不気味さを感じてしかたないのだ。これが愛里なら素直にショックを受けたかもだが、どうも彼氏がいる性格破綻者という存在は理解の外である。

そんな風に顔は良い癖して悪女感・喪女感をこれでもかと漂わす友人・知人に思いを馳せていると、話が終わったのか龍園が去っていた。去り際に近くを通る時、目が合った僕に向かってニヤリと笑ったので、予想通り色っぽい話ではなさそうだ。おそらく櫛田にアプローチをかけるなら今だぞ、といらん世話を焼いたと思われる。もしくは、話し合いの時に櫛田から「逃げるな」と言われた事を暗にからかつている線もあるか。

「い、一緒に星空でも見ませんか？」

しかし僕は当然アプローチなどかける気がなかったもので、天体観測に意識を戻そうとしたその時——勇者が現れた。

その男は龍園が去り、僕がなにも動かなかつた間に、時間差で一人になった櫛田をナンパしたのだ。龍園と話していた時より櫛田が僕に近づいていた為に、なんか知ってる声もはっきり聞こえた気がする。

「あ、れ？ 綾小路、くん？」

「その声……櫛田だったのか」

気のせいじゃなかった。やっぱり綾小路清隆だ。

まさかこんなところで、櫛田をナンパする友達の黒歴史を目撃することになるうとは……。いや、本気で櫛田を狙うなら黒歴史にはならないだろうが。

「一人……か？」

「うん、そうだよ。綾小路君はナンパ？」

「ああ——って、違う！ ちょっと左京と話してた状態異常の事を考えてたら、つい心の声が出てしまったただけだ！」

櫛田は落ち着くための冗談だったのだろう。乗りかけて慌てて否

定する清隆に、なにそれと小さく笑うと、息を吸うように嘘を吐いた。「じゃあ一人とも独り身だね。ここじゃ、ちよつと肩身が狭かったから嬉しいかも」

「い、いや。えーと、とりあえずオレは先に戻るから」

「もう帰っちゃうの？」

「眠くなってきたしな」

やばい。なんか笑いそう。でもまだ笑うな。笑ったら確実に見つかる。二人が、せめて片方だけでも去るまで堪えれば、この厄日最後の面倒も後回しにすることができる。それまでは我慢するんだ。

だけど聞こえてきてしまう会話に、否応なく笑いがこみ上げてきてしまう。どっちも嘘が見え透いているのに、キツネ（清隆）とタヌキ（櫛田）が化かし合いをやめないからだ。

清隆のとりあえずつてなんだよ。櫛田もすぐに清隆が帰ったら、まだ姿が見える龍園を発見されて嘘がバレバレになるだろ。もつと強く引き止めるよ。

というように、ツツコミどころ満載の清隆と櫛田のやり取りは、端から聞いていて面白かった。この後も、デッキの入り口付近でニヤツきながらわざと残っていた龍園に気づいた櫛田が、慌てて清隆に抱きついて色仕掛けを駆使しつつ足止めしてる一幕など、笑いを堪えるのがかなりの苦行だったほどだ。

「ご、ごめん。私、その、急に綾小路君に抱きついたり、変なこと言ったりして……」

「ブハッ!! ククツ、ブフフツ! あ、やつべ」

でも僕の我慢もここまでが限界だった。

メツチャ恥ずかしそうに殊勝っぽい態度で謝る櫛田に、僕の笑いダムは決壊を迎えた。冷静に考えたらそんなにおかしくないのに、笑っちゃいけないとなると途端におかしくなるといふアレである。また吹き出したことで、二人にも気づかれてしまった。

龍園も急いだようになくなったので、あいつもどこかで馬鹿笑いしているのかもしれない。ハイブリット種はイメージ戦略が重要なのだ。笑うところはなるべく見せたくないだろう。

「は？ 左京、君……？」

「う、ん？ む……つき……だと？」

「はははははっ！ す、すまん。盗み聞きするつもりも邪魔するつもりもなかったんだが……ブフ。こ、堪えきれんかつ……あつはははははっ！」

抱き合い離れようとした姿勢のまま固まる二人に、再度笑いがこみ上げてまともに謝ることさえままならない。この天然芸人コンビの前では、本職でさえ形無しとなるのはなんとかならないのか。

カップルが溢れる船上デッキにて、落ち着くまで僕の笑いが響き渡った。

僕が落ち着くのを待たずして、逆ギレして真っ赤な顔の櫛田が理不尽にも清隆をどこかへ追い払った。彼がどこへ行くのか。それは誰にもわからない。不憫な。

それもまた面白かったが、なんとか堪える。昼のこともあるし、1対1になったからには、これ以上刺激すると僕もヤバイ。

さっきの試験終了メールの件でだいぶ減ったが、まばらとはいえ他の人も居る為か、清隆だけでなく僕と櫛田も昼過ぎにも使っていた荷物を置いている近くの部屋に移動することになったが。

「……で、いつからいたの？」

「お前と龍園が来るずっと前から星を見てた」

「やっぱり。じゃあもしかして全部聞いてた？」

「なわけないだろ。清隆と化かし合いしてた時と違って、結構距離あったから聞こえてないよ」

「でも左京君なら、なにを話してたか予想できてたりして」

立て直してすぐ、明らかに突っ込まれたくなさそうに清隆関係から話を逸らそうとする櫛田に引っかけかりを覚え、しかし僕はあえてそれに乗る。まだ判断材料が足りない。

「できてはいるよ？ 当たってるかは別としてだけど」

「ふん。その予想、聞いてもいい？」

「んー。じゃ、結論から。」

多分竜グループの優待者は、櫛田が龍園つてこと。どっちかという
と、櫛田の方が濃厚かな」

「……」

そこで櫛田はなんともいえない目で僕を見て、口をつぐんだ。でも
こんなことは、色仕掛けに引つかかったりとか余計な事に思考がいつ
てなければ清隆にも察せられただろうし、櫛田も気づいているだろ
う。その清隆を放流して、僕を残したのは何の意味があるのか気にな
っている。

櫛田からそれを聞き出すには、本題までの繋ぎとして、適当な推測
で話を組み上げて会話を続けておくのがいいだろう。興味を引けれ
ば、櫛田という短期では最強クラス、長期でもそこその人材が力を
貸してくれる可能性が生まれるかもしれない。四方の件や、愛里がク
ラスから弾かれない対策を打つものにも、櫛田は最高の人材である。東
風谷以外に僕自身のパイプも繋げておくに越したことはない。

ほとんどの天文部員は、なまじ能力が高い奴が揃っているせい
か保険や守りの手を苦手としているフシがあるのだ。でも僕のように常
識的な者からすると、せめて予測できる問題くらいは楽にしておきた
い。

「なぜなら龍園の基本戦略の柱はCPじゃなく、PPだからだな。昼
に集まってきた時、一応は僕の提案にも乗ってくれたし、おそらくこ
れは大きく違わない。なら、より大きい報酬がもらえる結果1狙いは
龍園にとって好都合の結果になる。更に龍園から櫛田は相当確率が
低くなるが、櫛田から龍園ラインならそこまでありえなくはないと思
う。何らかの『土産』があると仮定すれば、だけでも。」

つまり、優待者の櫛田が龍園に組む提案をして了承された。これが
僕的には一番すっきりする推測とラインになるな」

だから龍園も引き合いに出して、あり得なさそうであり得る龍園・
櫛田の協力策を暴いたように見せた。昼に僕がした提案を聞いている
た櫛田には、説得力があるように聞こえるだろう。櫛田は、僕が野放
図にしたあれを根回しして実行しようとした。という風に受け取れ
るからだ。また間違っていたとしても、他の可能性を改めて展開させ

ることで方向転換も可能ときている。

昼の反省を鑑み、何気に東風谷を相手にするのと同等级以上に複数の筋を想定しつつ、僕は話を締めた。

尤も、続く櫛田の言葉からすると、ここまでする必要はなかったかもしれないが。

「あくあ。流石、早苗にまで “本気では” 敵に回したくないなんて言われる左京君だね。ほとんど正解」

不思議とスツキリした笑みを浮かべながら、櫛田はそう宣った。

「で、それを知った左京君はどうするのか？ 帆波ちゃんか神崎君に言っつて、すぐに竜グループの試験を終わらせる？」

「しないってわかってんだろ。しても大して僕が得るものがないどころか、マイナスの方が多いじゃん。やるわけがない」

「マイナス……あの時に言っつたりリスク、ね」

「そ。勝ちつてもものは、必要以上だと何かが溢れてマイナスに転じるものだよ。だから目的以外では、勝ちすぎに注意つてな」

会話の結果、副産物的に確信した。

櫛田にとつて、このマイナスやリスクを上回る何かがある感じ。昼には名字呼びだったのに、あえて一之瀬を下の名前で呼んだ点。僕を試してみたいな口調。

総合して判断するに、今の櫛田はAクラスになることを目指していない。厳密に言えば、最大の目標にしていない。この憶測が正解しているなら、櫛田の目的さえわかれば協力できることを飛躍的に増やせる。

「だから先もわからない中で、あえて勝ちを捨てるの？」

「僕は入学からそう経つてない時期に、他のクラスと本気でやり合う必要はないと思つてるだけだ」

「なら帆波ちゃん達だけを注意すればいいつてことだね」

「そして4クラスで泥沼の対立関係に？」

「……」

最低限の照明しかない月明かりの目立つ部屋で、降つて湧いたこの機会。

無駄にするには惜しいので、軽く踏み込んでみた。一見、話は繋がってはいないが、冷静に先を読めば櫛田にはこの意味が理解できるはずだ。

「……左京君にはあんまり嘘をつきたくないな」

「僕のスタンスは最初からそうだ。嘘や真を巧みに使い分ける櫛田みたいな奴に、騙し合いでやり合えるなんて驕ってないさ」

このように櫛田との交渉事では、見抜かれることを前提に本音で話したほうが良い。

対話するたびに思うが、やはり交渉やコミュニケーション能力に関しては、僕の知り合いでも屈指なのだ。方向性が異質なので比較対象でもないが、正直言って高円寺以外とは比較にならない。この高円寺やついでに清隆みたいなのと違い、全て見抜いているわけでもなさ気なのに、繋がってないようで繋がっている話の主導権を取ってくるのだ。

まあ東風谷を説得して動かせる時点で、自力だけの僕よりも格上なのはわかっていたことだが。

「ふふ。ありがと、でいいのかな？ ……だけど『一之瀬さん』達も探している中で、左京君だけがこんな暗い場所で私と意見を戦わせているのは何故？ 左京君なら、Bクラスのみなどと楽しくやれるでしょ」
「生憎、僕は集団の中にいるのが苦手だな。どちらかと言うと、みんなで盛り上がるより少数と話してるほうが好きなんだ」

「実は私も、って言って信じる？」

「普通に信じる。だってお前、東風谷と似て信者的なのを増やすのが目的の一つだろ。目的や嗜好の為とはいえ、人間関係のフォローしたり調整したりを無理してやるより、気心が知れた奴と話してる方が楽ってのは納得もできるしな」

この手の常日頃から疑心暗鬼に陥っているようなタイプには、説得は逆効果になる。行動を起こさせる為の起爆剤を刺激するだけで充分だ。櫛田の起爆剤は、承認欲求か目的そのものである可能性が高いので、焦って探らなくとも問題はない。

そして、それなら僕の有益さを示せばいいだけだ。櫛田の目的が必

須のものではない限り能力も関係なく、彼女の目的に沿った感じに見えるだけでいい。東風谷という櫛田の友達もいるわけだし、龍園とは違った形の悪友兼協力者となれるだろう。

「へえ、ふーん………ねえ。ちよつと聞きたいんだけど、左京君はクラスメイトみんなが敵に回ったら、つて考えたことある？ それでもし本当にそうになったら、どうやって対抗する？」

「あん？ まあ考えなくてもないかなあ。定期テストの結果張り出しとかSシステムとか、あからさまにそれを見越してる感じだったし……」

「そう、だったかな……」

ただ更に踏み込もうとしたら、微妙に流れというか話の方向を変えられた。これは一定の価値を僕に見出したのか、それともただの雑談的な繋ぎか。どちらにせよ櫛田の雰囲気がおかしい気もするが、まず真面目に答えておくのが無難か。表情と反応からして地雷をかすめている感覚がある。

「で、対抗策か。ぱつと思いつくのは権力、暴力、財力に嘘と真実と情報。ああ、魅力や知力なんてのもそういう場合には強いかな。でもまあ、櫛田も知つての通り、僕はこの殆どを使えない。どうやら嘘も上手くないみたいだしな。」

その上で、あえて挙げるなら僕が知る真実だけでしつちやかめつちやかにするか、財力あたりで自分以外にターゲットを逸らすのが僕向き……な気がする。てか、真実にしろ財力にしろ、うちのクラスだと一之瀬達の中にヤバい奴が居ない限り、一時しのぎにしかならなそうだけでも」

「ふうん。左京君って、こういうこともしつかり考えてるんだね。でも意外……ではないかな。」

それにしても………真実、ね」

社会に出るともう3〜4個増えるけど、学生の間はこのあたりが現実的なラインの対抗策だろう。東風谷や龍園なら暴力や知力、四方や愛里なら情報や魅力の札が適してそうだけど、僕だけが狙われたなら言っただ通りの反撃法か、面倒くさくなつて逃亡、あるいは無抵抗のど

れかを選択しそう。

考えるに、この学校でならそうなくても多分問題ない——最悪僕個人の退学処分までなら。この学校の情報が外にほぼ広まってない時点で、おそらく退学は適当な学校への転入を条件に出されて口止めされ、情報を出したら行つた先の学校を退学。みたいな推測が、だいぶ楽観的ではあるが成り立つからだ。そうでなくとも手はあるしな。つと、僕向きと言つたせいかな。櫛田が、財力はまだしも眞実の方に引つかかつてしまったようだ。考え込んだ、というか物思いにふけてる？

これは眞実の強さをフォローしておくか。櫛田はきつと眞実や情報、魅力やそれを使つての権力等々の選択肢の多さが強みなタイプ。もしその一つを疑問視するようになったら、その分の選択肢が減つてしまう。

「あつ、眞実が弱い札とか思つてないだろうな？ 確かに他に比べて汎用性やインパクトは弱いけど、使い所を考えれば最強の札に化けるんだぞ」

「……っ。うん。わかつてる………本当に……よくわかつてるよ」
重要なことなので2回言いました、つてか？ なんか実感籠もつてそうだけど、この年齢でそれをわかつてたら、それは不運以外のナニモノでもないんだが……。眞実を行使して反撃をする事態に、中学以前の時点で追い込まれたつて証明にもなるので。

うん。地雷っぽい。忘れよう。触らぬ神に祟りなしである。

「あー。でも、やっぱり左京君はわかつてる。わかつてるねっ」
「あー？」

しかし、なんだこの唐突な櫛田の……ウツキウキ感？

何度も「わかつてる」と繰り返した後、笑顔になった櫛田の思考が読めなくなつた。それはまるでいつかの東風谷のようで——。
「そういうえば話は変わるけど、知ってる？ 最近、龍園君も左京君を探してるけど見つからなくて、代わりのように綾小路君と堀北さんに絡んでるつて話」

「え、清隆はともかく、堀北さんの事とかほぼ知らないんだけど、櫛田

にでも謝つといた方がいいのか？ 正直、龍園の事とか僕に言われてもって感じなんだが……」

そしてまたもや、誤魔化すように露骨に話を変えられたんだが何を言いたい……いや、聞きたいんだ？ 東風谷との口喧嘩の件でこすり倒されると思っていたのに、蓋を開ければ関係ないところで次々に話が入れ替わる。今日の櫛田の話運びはどこか奇妙なモノがある。

つーか、個人的には、龍園が僕を探してたつて情報に何気に寒気がするんだけども。これ以上聞きたくないし、ひと当てしつつ、僕からも話を変えてしまおう。

「あはは。そんなのいらないよ。むしろ見かけるたびに楽しい気分になるから、私からはもつとやれつて言いたいかな」

「ああ。苦しめられる前に苦しめろ。つてどっかの奴も似た事を言つてくれたっけ。そんな感じか」

「あははつ。その人、すつごく性格悪そうだね。早苗？」

「ははつ。東風谷なら言いそうだよな。」

ま、櫛田のことなんだけどな。自己紹介乙」

「ええつ?! そんな事言つてな」

「なに驚いてんだよ。僕に困つて欲しいみたいと言つてくれたじやないか。あれの類似だぞ? どうした東風谷の同類。急に察しが悪くなつてきたんじゃないか?」

「……ほんつと、ここで煽りを入れてくるあたりが左京君だよな。早苗が悪友つて言うのもわかる気がするわ」

これで少しはいつもの空気っぽくできるだろうかと、軽くからかいを混ぜてみた。

結果、呆れた風の櫛田は口ではそういうものの、なんとなく機嫌が良くなつた気がするから、まいっか。東風谷もだけど、こういう可愛いとところもあるのが、邪悪なだけと言ひ切れななんだよなあ。僕が彼女達を悪友と思ひながら、友達とも見ている所以である。

何故か観察されているような無言の時間が少しだけ挿入された後、微妙に真剣な雰囲気醸し出した櫛田がおもむろに口を開く。

「左京君ってさ。『堀北』の事、どう見た？」

「え？ いや、さつきも言ったけど無人島で一言と昼に二言話しただけの奴に印象とか……ないこともないけど、人に聞かせるようなものじゃ」

「いいから聞かせて。私にとっては重要なことなの」
「う。わかったよ」

その真剣風味な雰囲気には押され、僕はつい承諾してしまった。

でも堀北さんって、僕から見るといつも喧嘩腰だからあんまり良い印象ないし、櫛田が彼女を友達だと思つてたら、陰口叩いたみたいに怒られないかな。かといって、無理にお世辞を言つても見破られそうだし……ええい、ままよ！

「じゃあ、その。一言で。」

——現時点では、痛い人：だと思ってるよ」

「痛い人……」

「補足すると、努力してれば評価されるべき、とか思つてそんな子供つてあからさまに社会未経験で痛くて、か……さ、最高だよな？ そういう意味だ」

しまった。本当に一言だとわからないかもと思つてフォローを入れたつもりだけど、追撃でこき下ろした陰口に聞こえてしまったかもしれない。しかも途中で気づいて無理矢理に捻じ曲げて最高なんて付けたから、不自然極まりない。そのまま痒くなるとか言うよりマシだったと思うが。

普段おしゃべりな櫛田が、真顔のまま沈黙してるのも不安を煽ってくる。

陰口だと勘違いされるとなんだし、なんとか言い繕わなくては。

「ほら。堀北さんって、龍園（高2病）と一之瀬（正統派？イロモノ）の微妙な部分を足して2で割つた感じじゃん？ だから見ててなんか痛々しいというか香ばしいというかなんというかで……やっべ。フォローしようとするほど墓穴掘ってる気がしてきた」

「……」

「ち、違うんだ。えっと、堀北さんはかわいい？ そ、そう。あまり覚

えてないけど、多分、おそらく、きつと顔は良かったから、多少の痛々しさなんてマイナスにならないって！ うん。かわいいは正義。ちよつとそれだけじゃあの残念さが相殺されてない感はあるけど、それでもアレだ。人によつては、一応、ギリギリ、プラス位置にはいるから！」

「……」

人を褒め慣れていない弊害がこんなところで。

本音だけど、どう聞いても褒めてない。僕に本心から褒めろつてのが、そもそも無理だったということか。てか、良いところを知らなくて付き合もない相手だと、容姿くらいしか褒める部分を思いつかない。

ついに俯いてしまった櫛田は、僕自身で思い返してもド下手な褒め言葉に何を思うのだろうか？ そもそも僕にはぼ知らない相手の印象を聞いてきたんだから、こうなるのもある意味しかたのない事。という受け取り方をしてくれると助かるのだが。

「あの、その。櫛田……櫛田？」

「あ」

「？」

「あっははははははは!!」

「ええっ?!? は？ なんで!?!」

僕にはどうしようもなかったコレをどうしようかと悩んでいたら、様子が変だった櫛田が唐突に顔を上げて笑い出した。もはや意味不明でわからなすぎて怖い。

でも記憶は曖昧ながら、こんな事が前にもあつた気はする。確かあの時は東風谷がいた……はず。そこから紐解けば、なにかわかるかもと記憶を探る。

まず、あいつはどうやってこれを鎮め給うたのか。巫女だか風祝だかの仕事で、鎮静の技能を修めているから可能だったのか。それとも友達だからか。

……経緯すら全く思い出せないし、わからん。思わぬところで、東風谷の凄さを思い知った。

「はあー、おかしい。左京君みたいに思ってることそのまま言ってるのがわかると、尚更おかしくなるんだねっ！ 初めて知ったよ」
「お、おう」

しばし櫛田は笑っていたが、自己完結したのかどこか平常と違う笑顔のまま冷静さを取り戻した。一方、ペースを握られてしまった僕は、情けなくただ相づちを打つのみである。

えっと、それで堀北さんについては許されたのだろうか？

「ホントは左京君に『あの事』でネチネチ言いつつ、ストレス解消しようかと思ってたけど、もうここまでにしとこうかなっ。でも今晚はそれよりずっと楽しかったよ。ありがとう」

「へいへい。お前にそれを漏らした清隆によろしくな」

「……うふっ♪ 正解ははご想像にお任せします！ じゃあまたね左京君。おやすみ」
「おやすみ」

その反応は肯定と変わらないんよ櫛田。

てか、流石に櫛田が明確なボロを出すようなことこそなかったけど、反応的にやっぱり今回もあいつが元凶かよ。消去法で清隆8割、東風谷1割、その他1割だったから、昼にはなんとなく察してたけども。

でも結局この日の櫛田は、本当は何を本題と設定していたのか。いきなりな話題変更が多かったせいもあって、不思議と機嫌が良くなったあの笑顔からは何も読み取れなかった。急に帰っちゃおうし……。怒ってはなさそうだったのだけは幸いである。

ただ別れ際、さり気なく確認しつつカマかけできたのは、僕にしてはなかなか機転が利いたといえるかもしれない。

尤も、清隆が裏で櫛田を僕にけしかけた意図は、多分遠回りに愛里は利用しない、とでも言いたいのだろう。だが、他にも動くから足止めの的に邪魔するなど言ってるようにも取れなくはない。いや、そう考えると、もしかしてまたもやなんかやろうとしてるのか？

……駄目だ。情報が断片と推測だけなので堂々巡りになる。

今はなんか知らんけど、悪友の機嫌が治った。それだけで満足して

おしづ。

76、法則

櫛田が去った後、切り替えたつもりだったがなんとなく引つかかるモノがあつたので、部屋から月を見上げながら考えてしまう。

——今更だけど何者なんだ清隆って、と。

あいつ、いつも違う女のケツに張り付いてるじゃないか。おっぱい好きじゃなくて本格的に女好きかよ——じゃなくて！ 清隆は、相手に向ける感情と目的達成に使う手段を完全にわけているとしか思えない。うん、こっちだ。

偉人で例えると、コルテスのようなタイプ。そんな高校生なんて、存在自体がいまだに信じられない。あいつの周囲に異質な『狂育者』でもいたのか？ どういう事情があれば、ああいう若くして政治家みたいな裏を匂わせる奴ができあがるんだ。背景がブラックな事以外、清隆のこれまでが全く想像できない。

答えてくれるかわからないけど、本人か松雄に聞いてみるべきか？ これまで地雷っぽく思えてあえて突っ込まなかったが、知らない方がヤバイ気がしてきた。

ちなみに父親の方は、松雄に聞いた印象ではピサロっぽいし、こうしたアンガーマネジメントのできないタイプの権力者はそれなりにいる。

前の人生で30歳前にそここの会社で技術職から部長職昇進を果たし、蹴ることになった経験をした時に腐るほど見た。

その際に、達成不可能な要求を出され、できないと客前で暴力含む罵倒やパワハラを繰り返し受けたり、リストラ・左遷などを仄めかさされて昇進辞退や退社するまで散々嫌がらせや脅迫を受けまくったので、場所によつてはありふれているとも知っている。また自分以外の被害者も幾人か見てきた。中には左遷どころか自○にまで追い込まれる人すら記憶しているのだから、あの手の輩は対策も比較的練りやすい。

余談だが前の僕の場合、脅迫状や録音データという証拠を持参して

も警察は動いてくれなかった。なので、愛里の時も警察や学校を信じて頼るといふよりも、動かざるをえないように利用するつもりだった。この経験が今の僕の考え方を形作っている面があるのは否定できない。

ともかくその経験からすると、直接会ったことはないが、地位は高そうでも現時点でさえ弱点や隙がちよいちよい見える点から、父親の方は能力や冷酷さはあっても腹黒いタイプではない。権力と金頼みの強引な小細工なんて、本当に腹黒い大人から見れば可愛いものである。

正直、旅行中にいくつか想定していた『権力者のゴリ押し』の報告がなかったあたりからおかしいとは思っていた。

一息に踏み潰す事ができないとなれば、時間や余裕がなくとも普通はひと手間くらいは動く。懐柔しつつ松雄を勧誘したりして包囲、こちらにわかるような匂わせや根回しなど打つ手はいくらでもあるのだ。なのに青娥さんはまだしも、会社や松雄に何かをしてこないのはおかしい。表向きの動きがなかったのは、青娥さんが何かしてるのを差し引いても、限定的にしか手札を行使できないとしか思えないのだ。

だから勿論、弱小会社の僕達は油断できないが、父小路の謀略や搦め手に関してはそこまで警戒も必要にはならない気がする。面倒臭く複雑な人種と違い、ある意味で単純といえそうな相手だったと予測がつき、僕は部分的にホツとしていた。

……逆にいうと、だからこそ怪しいが。この先でそれ系の仕掛けをされたら、父小路に裏がある可能性まで出てくるので。

まあ清隆に話を戻すと、休み前や話から推定される父小路のやり口とかに似て（権力またはハイスペックな能力と使ったものに違いはあるが）はいるものの、清隆にはより老練な影を踏ませない厭らしさがある。更にはアポロ・アーウィンに近い天成のサイコパスっぽさ……他人への関心の薄さや感情を排したような振る舞い。知性や適応能力、学習能力の高さ。

これらを総合するに、清隆はおそらく能力だけは父小路よりも格上

だろう。

ああ。サイコパスに犯罪者などのような悪いイメージを持つ者もいるかもしれないが、これらはリーダーや参謀として全体の利益を追求するのに適した資質といえる。常に情を排して個を見ず集を見て、効率的に『平等』に判断ができるからだ。

そんな生き方を僕はできないししたくもない。だが、少なくとも自国にミサイル打ち込んで何度も似たような自演したり、不況が少子化の原因なのにその少子化対策で財源確保して結果的に不況を加速させる、なんて本末転倒な馬鹿をやったり言ったりする政治や経済を知らない奴らよりは、清隆や高円寺みたいな奴の方が政治家とかに向いているだろう。てか、将来を考えるとマジでなあってほしい。切実に。ともあれ、ああいう政治家に向いてる精神性の奴らと、高校生のうちに同期で会おうとは思ってもみなかった。

それを踏まえると、清隆の天才性は遺伝や家庭内教育などで底上げされただけじゃない。僕が思うに、むしろ清隆は父親を警戒してたり嫌ってる風に見えて、実は父親から学べるものはない……自分には不要と思い始めているのではなからうか。そして清隆の性格を分析する限りでは、そういう相手にはなるべく手札を隠そうとするはずだ。

四方の最大の武器が集中力だとするなら、清隆は学習能力だ。少なくとも、天才と確信できる者に必須のキャパシティ……環境や努力を力にする精神は清隆自身のものでらう。清隆の裏で動いたり隠したりする性質は、何らかの形で父親が関係する。＼そこ＼で自分を隠す有用性を学んで後付けでああなった、とかなら一応繋がってくる。

清隆の背景を推察する上で、特殊な環境下で育ったのはもはや確定的に明らかなのだ。だが、仮にそんな状況でアポロに比肩する以上の実験体扱いされたとして、あそこまで奇妙な育ち方をするものだろうか？ 実際のところを想像できないのでアレだが、僕はないと思う。少なからず影響はあるだろうが、あれは四方の同類、天然の特化型天才が更に環境で研磨されたタイプだ。

それにしても、そんな荒唐無稽な憶測を除いて考えても、橋本どころか同年代基準では図抜けた策謀家がいるのが冗談かと思いたくない

る。

今回だつて話の流れ次第では、意図に気づかなかつたり、櫛田と敵対したり、あるいは僕が櫛田の下僕的な存在にされてた可能性もある。前もって追ひ払ってくれた櫛田に感謝するまであるくらいだ。油断できないにもほどがあるだろう。

……しかし自分でも動きながら状況を操るとか、マジモンの本職スパイとか作業員とかじゃないだろうなあいつ。

裏を『使わない』高円寺と違つてまだ隙や抜けはあるものの、影に気づくまでがまず一苦勞で、気づいても対処にヒヤリとさせられるとか、天才であることを加味しても高校生とは思えなくなつてきてるんだけども。一之瀬も別の意味で特殊な類だが、清隆から感じるモノは前の人生ですらあまり見なかつた闇深さだぞ。サバ読んでなければ、あの年齢でだ。

しかもそんな奴が四方や東風谷じゃなく、敵意こそ感じないが何故か僕に策の焦点を合わせてる気がするのは気のせいか？　じゃなければ友達とはいえ、なんで清隆が僕みたいな凡人に策略染みた事を仕掛けてくるんだよ。一度勝負したんだから、まともにやりあつたら文武ともに相手にならないつてわかつて——いや待て！　だからこそか？

飛躍してしまう仮説だが、清隆も僕と同じ転生者だつたとすれば話は違つてくる。前が政治家や官僚なら、父親と老練さが逆じゃね？　とはならず、そういうこともあるよね、と納得もできるからだ。

このせいで明確には気づかなくとも、なんとなくで注意を向けてしまふモノなのかもしれない。すると今回も前回は清隆流の挨拶代わりという可能性が浮上してきた。

なにせ僕自身という前例がある。何人かそういう奴が居ても、ありえなくはないはず。

更にこれほどの才気を感じる清隆がキャットルーキーに出演してないのは、僕と同じイレギュラーだからだと考えると話を通る。他のイレギュラーっぽい高円寺や東風谷は実家の職業柄や性別などで登場できないかもだが、清隆は選手でなくても何らかのポジション、

四方の友人役とかトムキャッツに入団する策を吹き込む無駄に怪しい人役とかで出そうなんだけどなあ。……キャットルーキー開始前に表舞台から消えてなければ、だけでも。

地味にこつちもありそうに思っているあたり、僕が感じている彼の闇深さはなかなか底知れないのかもしれない。

でももしかしてそうかもとは思えど、どこまで行っても確定はできないし、清隆に口を割らせるなど、僕から明かしてもほぼ不可能で意味もない。だからどうだって話だし……。

なので、清隆が転生者じゃなかったり、万が一『そう』でも転生者同士が争う系の仕掛けとかがないことを祈るしかない。ホント、どの神様でもいいからマジで頼む。

日が変わり、やっとこさ厄日が終わったというのに、僕は船上の月明かりの中でしばらく誰にも届かない祈りを送っていた。

そんなこんなで祈りを終えて切り替えると時間が経っており、気づいたら人の気配がほとんどなくなっていた。

なんなら大人用のラストオーダーも終了し、ほとんどの施設が店じまいをしている午前2時過ぎ。

思ったより遅くなった自室への帰り道にて、トイレの側で酔いつぶれて寝ている担任を発見した。色々見えちゃいけないものが見えているのに、ここまで嬉しくない美人の寝姿は初めてである。現実とは非情なものだ。

僕は少し考えて、ただスルーするのも矜持に反するのと、なにより邪魔だったので隅っこに引きずっていきつつ、肩らへんに筆ペンで張り紙をしておいた。

『地雷の口酒女ここに眠る。』

危険につき触れるべからず！』

ヨシッ！ これで安心安全だろう。

いかに美人だろうと、こんな事が書かれた妖怪・口酒女（一字違い）

として安置しておけば、うっかりガワで騙されてお持ち帰りしてしまう被害者は減るはずだ。船の平和はこうして保たれたのだ。いやあ、良いことをした。

当然のことながら、この善行に迷子放送なんでものに加担して僕を笑ってくれたことは関係ない。僕は一日一善を実行しただけである。「待たせ……おい！ チェー！ どこいつ———そこか!？」

僕が正義のヒーローのごとき活動を終えて角を曲がった直後、どこか聞き覚えのある女性の声が担任の潰れている方から聞こえてきた。「む？———ブツ。なん、なんだこれは!？ お、おい。起きろ。ぶふつ……!？」

「んああ？ サエちゃんうるさい〜」

「おまつ、ぶはつ！ チェー：お前、なにを貼り付けている？ ふふふ…地雷。口酒女……ふ、ふははははは！」

「なによお、もう。笑い上戸?！」

「か、肩、肩……ククツ」

「ん、なにこーr———つ!？ はあ~~~~~つ!？」

もう夜も更け、ともすれば朝と言ってもいい時間だというのに、うるさい大人達である。少しずつ離れている僕にも、まだ笑い声と遅れて怒号のような叫びが聞こえてきた。高校生気分（いや、酒なら大学生気分か）もいい加減にしてほしいものだ。

遠ざかる担任達の笑い声と怒り声は、僕に良き眠りをもたらしてくれそうだから、今回は大目に見るけども。

翌朝、僕は引きつった顔の同室者や一之瀬達に包囲されながら朝食を取っていた。

さつき担任がこんな事は左京君しかやらないだの、紙と筆跡が一致するだの、ストーカーチックな言いがかりを付けてきたので戸惑っているのだろう。でもすぐ半笑いの真嶋先生と茶柱先生が現れて引きずられていったので、僕の記憶からは速やかに消去された。そのまま食事を続行していたら、周囲の顔が引きつっていたのである。

ただ僕にはなんのことだかわからないという態度を貫いていたので問題はない。いや、面倒事と見るや回れ右して自分だけ去って行った東風谷に意識を持っていかれて、どうでも良くなったが正しいか。ちなみに珍しく僕の食事に同席者が多数なのは、神崎達に引っ張ってこられたからだ。

寝静まっていた自室に戻り、ベッドで寝ていた僕を最初に発見したのは、早起きだった神崎らしい。そこからしばらく僕を叩き起こそうとしていたようだが、午前3時近くまで起きていた僕を目覚めさせるには、最近遠慮の減少してきた四方が目覚めるまで待たねばならなかったとか、あの逃げ方をしておいて普通に自室に戻ってきて寝るなとか愚痴られた。

それで昨日とは違うレストランで、食事を取りながら愚痴を聞かされていたというわけだ。担任といい、神崎といい、暇なことで羨ましい。他にやるべきことくらいあるだろうに。

「まったく小姑属性持ちの奴は難儀だな」

「な——左京、お前……」

一言にまとめて思っていることを小さくこぼすと、言葉を失った神崎の愚痴がようやく一段落した。そして朝食も終わる頃には、Bクラスの主要メンバーも集まってきており、そこで昨夜の猿グループの推測と馬グループの顛末に話が移る。

話によると、どうやら猿グループにはBクラスの優待者と高円寺が居たとのことで、彼が試験を早く終わらせるためにさっさと指名した。というのが四方や一之瀬達の推測なようだ。

それに対し、馬グループには四方が居たので、優待者だと当たりをつけていた南という生徒を指名してマイナスの低減を狙った結果が、この2グループ試験終了の顛末に繋がっているらしい。

昨夜の連続した僕への連絡は、これに関する意見を求めてのことだったようだ。

僕が端末の電源すら落としたことで一之瀬や神崎から怒られ、ほうれんそうを徹底するよう再び要請されたことで、そう察することができた。

「てか、気が向いたらほうれんそうもしっかりするかもしれない、って言ったんだからもういいじゃん。いつまで説教してくるんだよ」

「……」

「一之瀬、神崎。これは駄目だ。試験の話をした方がまだ建設的だ。言いたいことはわかるが、夢月はこういう奴だからな。あまりやると、また逃げられるぞ」

また要請されている時、一之瀬に昨日のような僕の手や腕を狙う動きが見て取れたので、何度か軽くはたき落としたのはどうでもいいことだろう。僕に二度同じ手が通用すると思うな。忘れた恥を代償に僕は成長したのだ。

そうした暗闘を経て、一旦諦めた一之瀬は四方のフォローもあり話題を試験に戻した。説教よりは話し合いの方がまだマシンなので、僕も乗っておく。

「……左京君は、本当に高円寺君が当ててると思う？」

「そりややってれば、当ててるだろ。適当にやっても、あいつが総計2時間も観察したんだ。間違いがあるわけがない」

「まあ、俺も確信を持って南が優待者だと言えるし、高円寺ならむしろ指名が遅かったとすら思うな」

「確かに。あの時間だったし、なんか面倒事を天秤にかけて、指名する事を選んだ感があるよな」

「あー。そうかもしれない。誰かに協力しろとか言われて鬱陶しくなった、なんてありそうだ」

四方や東風谷は高円寺についてもフラットに見ているので、僕と近い印象になるのだろう。

高円寺は清隆とは逆に基本プラス方面の判断基準も持っているが、例外もある。人や物事の美醜だ。あいつが面白い・美しいと思えば乗ってくれる事もあるし、つまらない・醜いと思えばどんな事をしても無駄だ。

このように高円寺六助という男は、わかりにくいと見せかけて意外とわかりやすい行動原理なのだ。問題はそのラインが気分次第な点なのだが……。

「猿と馬はこれで終わったからいいとして、ここからの予測はどうなる？ 状況が変わったことで龍園が動けばことだぞ」

「うくん。龍園君はまだ動かないんじゃないかなあ。あの感じだと、ギリギリまで最大限の利益を諦めない気がする」

「そうだな。CPを得ることよりPPを重視してるなら、今は根回しをしている段階だろう。現時点でできる予想は、できるだけ結果1のグループを増やして、できないならAやBを落とす、ってところか。だから動くとなれば、最後の最後になるんじゃないかな」

「ってことになるなら、法則を解き明かすのにも力を入れてくるかもね」

昨夜の櫛田の件もあるし、僕は龍園なら8割以上の確率で結果1にできる確信を持てたグループ以外を指名すると見ている。

ただちよつと気になる単語が出たので聞いてみた。

「法則？」

「うん。優待者には選ばれる法則みたいなものがあるんじゃないかって神崎君や浜口君が」

「無人島試験では表向きのルールの他に、左京やDクラスの堀北が利用した裏ルールのような逆転の可能性を秘めたものが存在した。それなら、この試験にもそういった学校から明かされない法則があつてもおかしくはないはずだ。そして今に当てはめると、試験の鍵は優待者だから優待者には選ばれる者には法則があるのでないか、と」

何気にもたまたま堀北さんの名前が出た。代わりに清隆の名前が出ないということは、清隆が祭り上げようとしたのは堀北さんか？

知ってるはずの四方が伝えてないということは、偶然か確信を持ってないのか？

……これだけじゃまだどうにもできないな。清隆に関しては置いておいて、今は話に集中しよう。

「僕達は左京君を含めたBクラスの3人に加え、四方君が見抜いたと思われるDクラスの南君という材料があります。これを元に、法則を解明することもできなくはないんじゃないでしょうか。説明では厳正なる調整と言っていましたし、必ず何らかの手が入っているはずで

す」

「へえー！ 観察して当てる以外にもあるんだな」

試験に思考を戻し、神崎や続く新顔の説明に感心した。僕にはない着眼点だ。

てか、考えてみれば、全てのグループ内に高確率で優待者を見破れる奴がいるとも限らなかつた。これもまた、この学校特有の不可解な救済措置の一つなのかもしれない。それを元に法則が存在すると推理していくとは、やはり神崎を筆頭に頭の良い奴はそこそこいるのだろう。どうにも固そうな感じはするけども。

ところで一之瀬が口に出した浜口君というのは誰だ？ 神崎の後に補足情報を言った新顔か？ メガネに見覚えがある気がするのでクラスメイトだとは思いますが、無人島での金田っぽいポジだったらアレなので後で四方に聞いておこう。

しかし法則か……。

高円寺が指名したって情報が正しいなら、どこかで法則の存在を確信し全体の難易度が下がったのを理解して、サラツと出し抜いた線が頭をよぎった。あいつにこの試験は窮屈すぎるだろうし、無駄に拘束されるなんて嫌いそうだな。こっちの気持ちもわかる。

だってこれは、僕が優待者じゃなければやろうとしていたことに近いのだ。それができる状況が揃っていて、あとひと押しを待っていたと考えられる。あんな変な時間だったのも、おそらくなにか不快になる要因とかがそのひと押しになったからだろう。気に入ることがあつたなら、初日くらいは様子見しても不自然じゃなかつた。

僕だつたら、気持ちよく寝てたのを起こされたとか、なんかやつてるのを邪魔されたとかあつたら、多分発作的に速攻で終わらせて自分を試験の外に置こうとする。そうすればこれ以上、その要因に関わらなくても良くなるからだ。

僕と高円寺では事情は違っても、自分が優先順位の1番上なのは同じだと思う。そしてその下にクラス全体の利益（僕はクラスの上に、友達と借りある人が割り込むが）を置いているのも。

何が言いたいかと言うと、高円寺はクラスの最大利益と不快要因の

排除、他いくつかを天秤に乗せて、自分にとって指名をするのが一番
“マシ”だと判断したのではなからうか。

……まあ、下手の考え休むに似たりと言うし、終わったことで人の
ことをいつもまでも考えるのはナンセンスか。今度会った時にでも
話の種にするくらいで丁度いいだろう。

適当に試験や高円寺についての思考を切り上げ、僕は人が集まって
いるこの場所から抜け出す機会を狙い澄ますのだった。

77、仕切り役

朝食の後に逃げるのが面倒になったので、寝直したら昼になってた。

この時は、なんだかんだで柴田が起こしてくれたので礼を言う。朝に叩き起こされたせいで少し不機嫌だった僕に気づいていて、水に流す気遣いをしてくれたからだ。それはそれとして、一之瀬や神崎に塩対応したことには一言あったが。

柴田によると、なんでも僕が寝た後に神崎と再訪した担任が愚痴り合いを始め、苦笑した一之瀬が場所を変えてなだめてくれたと聞いた。こつちもありがたくはあるけど、ちよつと東風谷あたりに協力を頼んで手を打つ必要があるかもしれない。

でも柴田や四方の自然な気遣いは素直にありがたかった。これなら自分が子供扱いされても納得はできる。押し付けがましくない美德は、僕のような者にとつても好ましい。

話し終えた柴田が部屋に残る四方に挨拶して先に出たので、僕も挨拶と身支度を終えて牛グループの部屋に向かう。

入室すると、ほとんどの面子が揃っていた。何気にやることもないのにやる気のある奴ばかりで偉いことだ。これが若さというものか。肉体年齢は僕も同じくらいだけでも。

デイスカッションも3回目ともなれば、大体の空気感というかメンバーの人柄がわかってくる。適当な仕切りでも何かしらの反応は返ってくるとなんとなくわかってきたので、この頃から僕は自分の口から出る言葉に身を任せる方針を固めていた。一言でいうと、出たとこ任せである。

「本日もほとんどの生徒が集まった。正確には勝手に集まった」

「いや、一応試験なんだからそりゃ集まるだろ」

「望まれずとも集まるみんなのやる気がツライ。主に適当に寝て過ごそつか、みたいなこと言えない部分が」

「蜜に群がる虫みたいな例え方が微妙に嫌だな」

「そもそもその例えが侮辱的なんじゃ？」

渡辺や姫野は空気を読むのが上手く、試験時間前なのに仕切るのを微妙に補佐してくれたりする。初手、無視とかスルーは悲しいから助かる。

そして友達の愛里と椎名、戸塚はともかく、他のほぼ話したこともなかった者達に関しても、駄弁るようになって少しずつ普段の顔が見えてきた。

「さて、まだ開始まで時間はあるが、先に聞いておきたい事がある。

今回、何をするか誰か案はないだろうか？」

「あつ、わりいけど寛治がちよつと遅れてるから待ってやってくれ」

「悪い。お待たせ！ なんとか時間には間に合っつてよかつたー」

「……須藤。池を責めないであげてくれ」

「そうだよ。やめてあげて。池君がかわいそう」

「責めてねえよ！ 待ってやってってくれつつただらうが!？」

例えば、Dクラスの松下さんは一見クールな美人っぽいのに、頭やノリが良くてこんな風な軽口にも乗ってくれる。須藤の発言直後にちようど池が登場してくれたので軽くおちよくつても、短款的確な言葉でリスクの少ない追い打ちフォローを食い込ませてくる手腕はなかなかのものだ。

「池は泣くんじやない。遅刻したんだから、まずはみんなに謝ってか
らな？」

「泣いてねえ！ それに謝っただろ!？」

「ふふ。会話が……うふふつ、成り立ってない」

「庇つてから謝罪させようとしてるあたりが支離滅裂すぎる」

「……ふふつ」

池や戸塚は何気にムードメーカーやツツコミとして、リアクションが優秀だ。特に僕へだけじゃなく、笑いながら割って入った椎名の発言をよりの確な表現に変換できる戸塚は、コミュ力や察する能力も高いのだろう。

またこうした場では、目立たないよういつも気を張っている愛里を笑わせる芸人魂も見習いたい。

……やっぱりどつちかが仕切り役になった方が良いんじゃない？
僕よりは適任だろこいつら。代わってくれないかなあ。

「謝罪に関しては須藤だろ」

「うおい！ 俺に飛び火させんな!？」

……場合によってはブチ切れるからな」

「前も池が泣きながら、ブチ切れた須藤に謝罪してたもんな」

「寛治と左京は昨日の昼に会ったのが最初だろうが！ なに捏造してんだよ!？」

須藤はこうして話す機会がなかったら、悪い奴じゃないけど乱暴者、という印象を変えるのは難しかったはずだ。ちなみに僕の謝罪は須藤のイメージは、以前に僕と停学明けに謝りあったからである。

「ふつ。真実を曲げてても正しく歩み続ける。それが僕だ」

「左京こそ、いつも曲げてるんじゃない?！」

「みんな楽しそうで何よりだ」

「コイツ、こんな空気にしておいて満面の笑みを……!！」

牛グループ全体として見ても、なかなか気楽で良い面子が揃ったんではなからうか。ちよつと一部で対立関係になってて、何故か僕に当たりがキツイ場合があるけども。

試験開始時間になったので、僕は今回の議題を切り出した。

個人的に、ちよつとだけ松下さんの前に置いてあるランプやUNOが気になっているが、アレは後回し。それより、ちよつといい暇潰しの材料がある。

そう。昨日や朝に、一之瀬達から言われた噂を否定する材料集めという話の種がな。興味を引くために、そのままじゃなく少しアレンジも加えるが、高評価間違いなしな自信のある言葉も用意してきたのだ。

「試験が開始されたし、他になければ今日は女子を口説く言葉大会をやるう。独断と偏見、それに仕切り役特権で審査員はこのグループの女子達だ。異論反論あろうと勝手に敢行するので、みんなは諦めてくれ」

それがこの口説き文句大会だ。

これなら男女の興味を引け、噂の否定材料集めに応用もでき、僕がモテるかもしれない一石三鳥の職権乱用を可能とする。

付き合う気はないけど、モテモテにはなってみたい。そんな男の夢を、試験に乗じて実現（推定）させる自分が策士すぎて怖い。

「あ？ 左京、お前いきなりなに言ってるんだ？」

「うむ。とある筋からの情報で、僕がわけわからん事ばっか言ってるなどという根も葉もない噂を聞いてな。ただ一応確認くらいはして、もし存在するなら払拭しておいた方がいい気がしたので、この暇な時間を私物化して証明しようかと」

「それですよ。その発言内容がわけわからないんですし、証明されませんでしたね」

「……さて、と。まずは言い出しつぺの僕から女子を胸キュンさせる言葉を食らわせて、主に椎名の口を封じることにはしようか」

「スルーしても、一瞬で論破された事実はどうしようもないわよ。でもなに言うかちよつと興味あるから、聞いてはみたいかも」

椎名はスルーして、姫野のリクエストにお答えする。

てか、早く女子に黄色い悲鳴を上げられたい。誰かに惚れられたらどうしよう。困ってしまうな。

「ふっ。いいだろう。僕の口説き文句はこれだ。

——ほっほっほ。参考までに言っておくと、僕の月収は20万超えですよ？」

僕は逸る気持ちを我慢できず、口説き文句を某宇宙の帝王に寄せて堂々と言い放った。

その結果は——。

「くっくっく。多くて10万前後の生徒がほとんどの中でのこれには、流石に女子達も振り向かざるをえな」

「う、うわぁ」

「しよぼいフリーザ様……」

「しかも発言内容が典型的なモテない男」

「成金ムーブにしてもセコすぎるでしょ」

総スカンだった。

期待のぶん、その衝撃は凄まじいモノがある。

「……何故だ。僕の考えた最高の口説き文句が」

「いや。あんたは自信満々だったみたいだけど、正直ドン引きだったよ。確かにこんなアプローチしたら100%振られるわ」

「だよねえ。むしろ納得したくらいかも」

「……」

今どきの高校生には、金は通用しなかったか。などと誤魔化そうとしても、フルボッコにされている現状では口撃がくるたびに負けを悟り、黙らざるをえない。

というわけで、某裸エプロン先輩に倣って、さん、はいっ！

——また勝てなかった。

これが場に適した文言だろう。心の中だけで、口には出せないけども。

「完璧に論破された時って、人は無言になるんですね。勉強になりました」

「なんてモノを学んでるんですか椎名さん！ えっ、この人はまともなんだよな!?!」

「野村君。落ち着いて。椎名さんは教室にいる時からおかしかったでしょ？ だからこれも平常運転だよ」

「何故、私までおかしい人扱いに……」

結果、愛里まで微妙な視線で見てる中で、予想を外した僕と……どういうわけか椎名が頂垂れることになった。

まだ僕しか大会○に参加してなかったが、これ以上続けても傷つくだけなのは明白なので、閉会することにした。

「……………あつ、ごめん。」

ちよっと口論に負けそうだし、心も折れそうだから話題をすり替えさせて」

「おまつ、なに勝手なことやってんだ!」

「馬鹿野郎! これでもし他の奴がモテモテになったら悔しいだろう

がっ!? 畜生、モテると思ってたのに……こん畜生!!」

「酷い逆ギレを見た」

「というか、負けそうじゃなくてボロ負けしてたと思うけど」

「姫野！ 正論でDVしてくるのはNG！ たった今、そう決まった！ 各方、よろしくお願いいたす！」

「……それはまあ別にいいけど、じゃあ何するの？」

すると、やる気になっていたつぽい池に文句を言われそうだったので、無理矢理インパクトのあるおちよくりを挟む事にする。事実を突きつけてくる者達は当然スルーである。

ともかく好都合なことに、昨日一之瀬達から逃げ出した時、ポケットに入っていた物品を持っていているのだ。これはすでに口に入れる気がなくなっていたから、ここらで消費してしまうのが良いだろう。誰かに押し付けられればなお良し。

不都合な事を記憶から消し去り、小さくはっちゃけることで僕は切り替えを図ることにした。

「うむり。ここはまず空気を変える為、怪しい白い粉でもキメてバイブス上げようと思う」

「左京がいきなり危ないこと言い出した!？」

「つーか、切り替え速すぎだろ！ さっきまで全力で落ち込んでたじゃん！ なに一瞬で立ち直ってるんだよ!! 慰めようかなとか考えた俺が馬鹿みたいだろうが！」

「いやいや。話題をすり替えるって言ったろ？ そしたら気分も変えるに決まってるし、問題ないってことだ。で、話を戻すぞ。」

これ、何気にイイ粉なんだよ。みんなにも分けてあげよう」

「こ、こいつ……!？」

「イイ粉……いい、いらねえから!？」

「ヒィ〜ヒツヒツヒ」

「その笑い方、怖えよっ!？」

こぼれないよう紙に包んだ怪しげなそれを振ってみんなに見せ、特に反応の良かった池と渡辺に執拗に絡む。目指すは、ウザクキモいアウトロである。

「あげるってえ。遠慮するなよ。いい粉は文字通り、すっげえ
いいから」

「やめろお前……それ、法に触れるもんじゃねえだろうな!」

「フヒヒヒヒ……池君。渡辺君。共にキメようじゃあないか。イヒヒ
ヒヒ」

「キメねえよ! 不気味に笑いながら近寄ってくんなし!」

嫌よ嫌よも好きのうちというし、嫌がる反応をされると更にエスカ
レートさせたくなる。でも他の呆れた感じの雰囲気を見るに、ここら
が切りどきだろう。話も完全に流れたし、ネタバレしつつ素に切り替
えて試験に戻ることにしよう。

「ま、これ砕けたラムネなんだけどな」

「ラムネかよ!?!」

「紛らわしいわ!」

「いや、こんな監視の行き届いてそうな場所で、法に触れるようなこと
するわけないじゃん。一応言っとくと、成分はブドウ糖、コンスタ
チ、クエン酸の純度100%ラムネだ。この中だと、僕のオススメは
クエン酸かな。掃除にも使える優れもの」

ドラッグかなんかと勘違いしたんだろうが、退学を通り越して逮捕
一直線の犯罪を意味もなく敢行するほど馬鹿じゃないぞ僕は。須藤
すら呆れた感じを出してるのに気づかないなんて、この2人のノリや
すさと扱いやすさは尋常じゃないな。

と思いつつ、ちやうど近づいていた池のポケットにラ
ムネを滑り込ませ、自分の席に戻りがてら渡辺にも同じように滑り込
ませた。最後にさりげなく仕上げの注意喚起をすれば厄介払いも完
了である。

「ぶっちゃけたただのジョークだよ。君達、詐欺に引っかけやすいそう
だから気をつけてね☆」

「く、くううう! この野郎!」

榎田だの清隆だのを相手にするのは違って、滅茶苦茶安心する。こ
れこそ普通の高校生の反応だ。

裏を考えなくていい会話で、僕自身の精神安定を図る策は成功とい

えよう。

どさくさ紛れに、前日レストランで転がったせいで粉々になったラムネを渡辺と池に押し付けることに成功した。目ざとい何人かには呆れた目を向けられたが、話を逸し、使い道がない苦手な物を消費できたのだ。成果は上々と言えるだろう。

むせるから、ああなつたラムネは苦手なんだよな。

更に二人にポケットの中身に気づかれる前に、素早く次の手を打つ。気になっていった松下さんの前に置いてあるトランプがやりたくてしかたなかった。

「冗談はこれくらいにして、今日はトランプを持ってきてくれた人がいる。なので、悲願を達成させたい」

「悲願？ そんな大げさなものには繋がらないと思うけど」

「いやいや。松下さん、ありがとうだよ。一人用じゃないゲームとか僕には思いつかなかった。

というわけで、はるか昔のブームの時に遠くからやってる人を高頻度で眺めていたカードゲーム、大富豪をやっぺいこう。てか、メツチャやりたい」

「——え？ 大富豪？ 左京君ってやったことあるんですか？」

椎名に意外という感じで聞かれたが、当然の疑問だろう。僕達に縁遠いモノには違いない。

まあ話を通すためには、自信を持って返す他ないが。

「ないけど大丈夫。昔、イメージトレーニングは万全にしておいた。ルールはぼんやりとバツチリだ」

「どつちなよ……？」

「なんでそんな悲しいこと言うんですか？ 昔の左京君は私なんですか？」

「今度は椎名さんまで本格的に乗っかるの!? え、でも。これは流石に冗談だよな？ 普通に話してるし、冗談であってほしい！」

胸に秘めた野望と知識の有無を主張すると、松下さんが自問するかのようによくこぼし、疑問ができて立ち直った椎名は悲しげな表情

で再度質問してきた。

しかし僕が二人に答える前に、どこかの琴線に触れたのか思わずと言った感じで自分のキャラを忘れた愛里がツツコんでくる。

こんな人前で、内弁慶モードが出てきてしまったか。ゲーム設定の時といい、最近はその場に誰か友達がいるだけで油断するようになってきているのかもしれない。そこを突いて、ついでに一手を打とうとして僕が言えた義理もないが。

でも後で浮くとかわいそうなので、あらかじめ元気付けておこう。さっと目を向けると、椎名もそのつもりみたいだしな。

「ははは。愛里。」

——僕達ワンチーム。椎名含めて友達で仲間と同類のワンチーム。冗談でないことは君にならわかるはずだ」

「そうです。初めてのお友達が左京君と言っても過言でなくくらいのボツチ仲間。それが私達が共有する唯一の絆でしょう？ 高校に入るまで友達と遊んだ記憶がある人は、私達の中にはきつといませんかよ」

僕らのそれが効果的かは置いといて。

「……と、友達……仲間。」

じゃなくて！ 声かけられなくて仲間に入れないにしても、大富豪くらいはあるでしょ！ 私はちゃんとパソコンでやったことあるよ！ なんてそんなわたしまで胸が痛くなる黒歴史をおおっぴらに公開する必要があるのって言うてるの!?!」

「人、それを五十歩百歩と言う。見ろ周りを」

「え？ あっ」

これまで空気のように過ごしてきた一見地味少女の力強いツツコミは牛グループ内に衝撃を与えたようで、愛里は驚きや憐れみとともに注目されている。

この瞬間、愛里は間違いなく僕や椎名と同列と認識されたのだから。

そう。ぼっち体質だと。

「その……前はカツとなっちまって悪かったな佐倉。でも今は左京達

「がいるんだろ？ よかったじゃねえか」

「あ、あの。佐倉さん。今度、私達と遊んでみる？ ちよつと居心地悪いかもしれないけど、最初だけだから。フォローもするし、軽井沢さんにも言つとくから。ね？」

「あ、ああ……。また夢月君に乗せられ……。あうううっ」

それに気づいた愛里には、もはや須藤や松下さんの最大限に気を遣ったフォローやお誘いを受けるどころか、返答を返す余裕さえなかった。一応は試験中ゆえに、逃げ出すわけにもいかない。

こうしてにっちもさっちもいなくなり、愛里はうめき声を漏らしつつ、顔を真っ赤にしてテーブルに突っ伏した。

今回はからかう意図もなく、ほぼ愛里の自爆のようなものだが、後で椎名も誘つてケアしておこう。じゃないと、僕が愛里をからかったり乗せたりするのを趣味みたく思われる恐れがある。

邪仙や悪友どもと違って、僕にはそんな趣味はないと認識してもらわないとな。

毒舌家の多い周囲の中で、唯一と言いきつてもいいオアシス。それが僕にとつての佐倉愛里だ。事実がどうあれ、やめられない止まらなかつぱえびせん的存在に嫌われる可能性は極力排除しておかなくてはならない。

……それに、これが愛里がクラスのどこかのグループに入り込める一助になったら幸いだ。

女子のかわいい奴が排斥されたりイジメられたりする場合、大抵の要因はその対象が『独り』であることだ。女子じゃない僕含む天文部関係者や椎名もそれはほぼ同条件だが、対抗手段に乏しいのは愛里だけである。なので僅かに心配していた。できれば前に東風谷が相談していたように、愛里を櫛田の小グループにネジ込みたかったが、本人が櫛田を苦手に思っているのではしかたない。

代替案として心配性でおせっかいだとは思っても、愛里が最低限溶け込める一手は打っておくべきと考え実行しただけだ。

ともあれ、僕は耳まで赤くなっている愛里の後頭を見てほっこりした後、決意も新たに愛里のその様を椎名にお任せすることにした。

愛里とそれに寄り添う椎名を除き、人数の関係でトランプ組とUNO組にクジで別れ、ついに悲願成就の時がやってきた。僕は勿論、特権でクジを引かずにトランプ組の大富豪である。

しかしふんわりとしかルールの把握をしていない僕では、しばらくは負けを糧に戦法を構築することになるだろう。

ということ、大富豪6人組にて僕は初戦から6連勝の後に、メンバーを景気よく煽り散す。そしたら、危ない目になった松下さん指揮の総攻撃を受け、都落ちの憂き目にあっていた。計算通りである。やはりゲームは本気でなくては面白くない。僕が負けた時になんか松下さんがアチャーって顔になったが、本気じゃなさそうだったから雑に流れに乗せた事とは関係ないはずだ。

まあそれはともかく、以降はこの日カード運が良くなかった渡辺と池とドベ争いをしながら雑談していた。

「数学って将来何の役に立つかわかんないんだよなあ。そのせいでイマイチやる気にならないっていうかさ」

「あー、俺も。でもやらないと退学がなあ」

そんな中、敗戦処理していると、池が典型的な勉強できない奴ムーブをかましだし、渡辺も同調し始めた。

その雑談を聞いて、先んじて上がっていた同じ大富豪組の松下さんやAクラスの沢田さんの彼らを見る雰囲気ゴミを見るようなモノに変わり、股間がヒュンツとする。僕には高度な性癖が備え付けられていないのだ。

てか、個人的には発言に問題ない気もしてるんだけど、自他ともに努力だの成績だのどうでもいい。ってのは、意外と少数派なのかもしれない。

しかし、結構あからさまな変化だったが、こいつらマジで気づかないのか？ そう言いたくもなる。だってさっきまでは空気も読んだし、気づくだろ普通。それにシックスマンことCクラスの野村は勘付いているっぽい。気づいていて言い出せない。そんな印象。なぜなら居心地悪そうだからだ。

このまま放置するとちよつと面倒になりそうな気がしたので、僕は蘊蓄で空気を変えることにした。

「数学は汎用性が高いし、役に立つ場面も結構あるぞ。僕の場合だと、無人島での地図作成や簡単な測量、プログラミングに使う場面は多かった。そうでなくても……具体的に、そうだな。三角関数なら、ちゃんとやればマイ○ラなんかのゲームにも応用が利く……と思う。座標からアークタンジェントで最短の帰り道を割り出したりとか」

ゲームに絡めるのは安直かもしれないが、案外こういうどうでもいいことから勉強を始めたたりする奴はいたりする。何を隠そう僕が半分そうだ。ちなみにもう半分は読書や論文関係。

この目的は女子連中の思考誘導なので、池達が勉強とかをやる気になつてもならなくてもいいというのがいい。主に手間がかからない部分だ。

なんにしろ、勉強やりたくねー、という意味を別方向に誘導するなら、小ネタや身近な体験談などで『適度な』関心に変換するのがきつかけ作りの常道。これは学生でも社会人でも変わらないはずである。

「左京。お前、馬鹿じゃなかったのか!? なに賢そうな事を言つてんだよー!」

「ふははっ。僕はそれなりに賢いのさ。」

しかし知識マウントは思いのほか、いい気分だ。いい気分ついでに言うと、ソシヤゲとかのダメージ計算なんかにも役に立ったりするから、効率的な攻略を目指すなら必須級といつてもいい。ゲーム無双の道は数学から始まる……なんちゃってな」

「ああ、池……。こいつ、馬鹿に見えるけど、うちのクラスの成績トップ陣の一人。俺も信じられないけどな」

「はあ!? この左京が? マジかよ……」

ただ池達には意図が外れて自慢話みたくなつてしまったが、これはこれで気分がいい。

ざまあ系や俺TUEEE系の疑似体験でいい気分もできた上で、とりあえず女子の放つ空気は変わった……。はず。なんか何人かから妙な視線を感じるけども。まあ野村もホツとしている感じだし、多分も

う大丈夫だ。もう問題など起こらないだろう。

そう楽観していたが、その後もこうした小さい冷戦的なモノがあったり、UNO組の須藤や戸塚・西などがちよつとした問題を頻発させ、何度か奔走することになるとは、この時のいい気分になっていた僕には知る由もなかった。

……もう二度と適当な組分けなんかしない。

ディスカッションが終わる頃には、そう考えるくらいには仕切り役が面倒くさかったとだけ言っておこう。もし次があったら、何か手を打つ必要性を感じるくらいに。

78、指名

4回目のディスカッションでは、入室した時から戸塚と西さんが言い争っていた。

このまま最後までやりあってインターバル期間に入ると流石に気分が悪いので、柄でもないが強引に仲裁しておくことにする。

「戸塚に西さん。お前ら、いい加減うるさいぞ」

「左京!？」

「左京君!？」

「そもそも僕達はここになにしに来てる?」

「そ、それは、林間学校的な豪華客船旅行の特別試験で……」

「そう。船旅にきてるんだ。ずっと揉めてたら船旅もギスギスになって、少しはあっただろ楽しかったことも塗りつぶされちまうぞ」

「で、でも」

「残りの時間でも、遊びとかで思いつきり楽しめないし、せつかくの食事なんかもますぐなる。お前らはそんな旅行の思い出にしたいのか? 僕は嫌だから止めるし、これからはできるだけ配慮する。だから名ばかりの仕切り役として仕切る。お前らはせめて無視し合え」

「……わかった。雰囲気悪くしてすまん」

「……う、はい。みなさん、すいません」

他にもギスギスが伝染する戸塚と西さんに絞って、無理矢理引き離すよう采配する。須藤や池なども火種を作ることにはあったが、明確に対立してるAクラス組を優先だ。火種が常にくすぶっている2人を分離させれば多少マシになるだろう。

でも説教臭いのもまた後味がよくないので、西さんはともかく戸塚に適当な声を出させることで、空気の入れ替えをしておこう。前にエリートを自認していた戸塚には、ブラックジョークあたりが面白そうである。

「しっかし戸塚。お前の目先の感情で目がくらんで間違いを犯す感じは、確かに政治関係のエリートっぽくていいな」

「……………左京はいちいち発言が危ないんだよっ！ 何も良くないだろうが!」

「意外とハニトラとかにも引っかかりそうだし」

「ここぞとばかりに畳み掛けるな!」

「まあまあ。将来、もし戸塚が中国美女に議員会館通行証を発行しても、生暖かい目で見守ってあげるから」

「ガチの売国行為じゃねえか!? 流石にそんな真似するほどじゃねえわ!」

「そんな事やつても参院で当選したりするんだから、民主主義ってよくわからない」

「だから危ねえつつつてんだろうが！ なんかリアルに感じすぎるんだよお前!」

素に戻ってこっちでは起こっていないモノをぶっこむ僕に、僅かに静止してから乗ってくれる戸塚。お互い水に流そうという意図が伝わらなくて、馬鹿にしていると取られなくて良かった。これも葛城と一緒に、たびたびからかってきた集大成というものかもしれない。

てか、こういう話についてくるって時点で、高1から政治や経済の情報集めとかしてるんだな。他は結構ポカンとしてたりするし、エリートと言うだけはあるってことか。

まあなんにしろ、これでわけわからないっぽくありながらも、部屋内がマシな雰囲気に戻ったので良しとしよう。愛里と椎名……あと松下さんには変な目で見られたが。

このデイスカッションではこんな風に最初だけごたついたものの、ゲームとかもせずに時間まで…少しオーバーしつつ、そんな風に戸塚を含めて駄弁っていたり、本や端末を見てたりと思いきいに過ぎただけだった。

それから終了のアナウンスが流れてしばらくすると僕に用事が入り、前2回の解散と同じく残っていたみんなに「んじゃ解散」とだけ言い残して退出することになった。

東風谷の所に向かうためだ。

これは僕も彼女にちよつとした用事はあつたが、本人含めた何人かから呼ばれたのが主な理由になる。東風谷から来たばかりのメールを見せたら、愛里と椎名も付いて来てしまったけども。

というわけで僕達は兎グループの部屋……ではなく、何故か非常階段に向かつていた。東風谷も妙な場所を指定するものだ。

それと牛グループの部屋を出ると、試験が終わつてもうこの2階フロアに来る必要もない四方が、出待ちしていたかのように現れた。でも東風谷が僕だけにメールを送信するとは考えてなかったから、四方や櫛田あたりは来るかも思つていた。

しかし何気に四方が来た点からも、東風谷の誰でもいいから早く来い、という見えない圧力をひしひしと感じるのは気のせいだろうか。

「やあ。夢月達も東風谷のところか？」

「ん。なんかわからんが、安藤さんや浜口、東風谷からも来るよう頼まれててな。ただ今しがた送信されてきたメールを見ると、東風谷だけ急かしてるし、違う用件っぽかったからこつちを先にと思つて」

「そうか。俺もだ。あいつがどこどこに来て言うのは珍しいからな」

「きつと対人関係だろうな。それ以外なら力づくでどうとでもできるし」

「……夢月君達つて、早苗さんの事を信じてるんだね」

四方と話していると、何を思つてか愛里が言わずもがなな事を言い出した。

東風谷をどうにかするのは、誰だろうと相当苦勞する。底の見えない腕つぶしや偏った頭脳、なにより文字通りの神様がついてるのだ。消去法で、スパッとやれない人間関係について助力を求めてきたと考えるのが妥当だろう。

「まあ俺達は仲間だからな。仲間は信じるものさ」

「え？ 僕は、あいつならなにかやらかすと確信してたからだけど？」

東風谷のトラブルメイカーっぷりにも困ったものだよな」

それを四方は綺麗にまとめているが、実際ヤツが何かやらかした可能性は高いと思う。だってこの試験を例えるなら、ああいう猛獣みた

いなのもまとめて狭い場所に押し込んで飼育しようという無理無謀系だ。普通の奴だけならともかく、猛獣を混ぜてこんなことしたら当然問題は起こる。

だから僕は東風谷ならいつかヤルと信じていた。

そういう意味で、やはり高円寺の見切る判断は絶妙なタイミングだったといえる。問題が起こる前に速攻で終わらせたのだから。

「またそういう事を……。素直なのは良いことですけど、ブーメランになりますよ」

「うん。椎名さんの言う通り、それは夢月君が言っちゃダメなやつだと思う」

でも心の綺麗な奴から僕までヤツの同類っぽく見られてるのは、なんとというか……こう、ちよつと心にクルので、自信を持って東風谷とは違うと断言しておく。

「僕はトラブルなんか起こしたことないぞ。失礼な」

「確かにあんまり自分では起こさないけど、夢月君っていつも問題やトラブルの近くにいろよね」

「むしろ発端が自分じゃなくても、真っ先に飛び込んでくのが夢月だろ」

「……………いえ、自分でも結構起こしてませんか？ 直近でも全クラスのリーダーが牛グループの部屋に押し寄せてきたり、迷子放送とかされていたと思うのですが」

「気のせいだ」

「でも」

「気のせいなんだ」

「……………」

「全て気のせいだとわかってくれたようだな。僕は嬉しいぞ」

真摯な説得により、連れはみんなわかってくれたようであり、笑顔で圧をかけた甲斐があった。

ていうか、僕が問題なんか起こすわけないじゃん。面倒くさい。むしろ火種を消して回ってる側だったの。

雑談しながら4人で歩いていると、非常階段の手前のドア付近に2人の男子を発見した。しかも片方はまたしても清隆である。

あいつは、なんでこう何度も先回りしてくるのか。マジで僕って踊らされてないよな？ 清隆にも伝えた通り、特別試験とは関係なく、あと1週間くらいは誰かに踊らされるわけにはいかないんだけども。まあ考えすぎか。

「や、清隆…とお連れさん」

「夢月？ なんでここに…って、考えるまでもなく東風谷か」

「いえーす。なんか事情知ってるん？」

「いや、オレも来たばかり」

「お前は左京っ！」

清隆と挨拶を交わしていると、清隆の連れが僕の名前を呼んだ。

最近、僕が知らないのに僕を知ってる奴が増えてる気がする。アレだな。担任がめっちゃクソ怪しい。具体的には放送とか。

「はいはい。左京ですよ。」

で、君は？」

「俺は…Dクラスの幸村だ。まさかこんなところで」

「えっと、悪い。聞いたってなんだが…すまんが話は後にしてもらってもいいか幸村君。なんか急かされてる感じのメールをもらったか？」

幸村が話しかけてきたが、断って先に用事を済ませようとしたところ、開けようとしていたドアの向こうから、ガンツという衝撃が伝わってきた。

それを認識した僕は「え？ あの娘が？ まあいつかやると思っていましたよ。友達として残念ですけどね」といった少年A的言葉を放つ準備をしつつ、対東風谷用の精神に切り替えた。そのままこの場にいる面子を突っ切り、ドアまで行って開ける。

「「あ」」

扉を開けた先は最初、背を向けた東風谷しか見えなかったが――

「ねえっ!! あんたならわかるでしょ!? お願いだから手を貸して

よ！」

「いい加減にしてくれませんか。凶々しく付き纏ってきて鬱陶しい」
「なんでよ!? こいつら、最初から許すつもりなんてないのよ!? 佐倉さんを助けるなら、あたしも助けてくれてもいいじゃない!!」

「軽井沢! あんたふざけんじやないわよ! 関係ない東風谷さんまで巻き込んで、恥知らずにも程があるわ!!」

「……はあ。夢月さん、早く来てくれないかし——あら?」

聞こえてきた声で場の状況が明らかになるにつれ、そこは女子5人? のド修羅場だと察知できてしまった。

どうやら僕はどこでもドアを使用して、異次元に来てしまったようだ。一度閉めて180度転進するのが、この場合の対処として最上だろう。

「失礼しました〜」

「夢月さん。待ってましたよ」

だから急いでドアを閉めようとしたのだが、振り返った笑顔の東風谷と目が合い、ガツと僕の肩を掴まれてしまった。

ヤバい。笑顔なのに目が笑ってない。逃さない離さないと態度で示しているかのようだ。

これは僕に面倒を丸投げするつもりだと確信し、必死の抵抗を言動に乗せる。

「こんな女子同士の争いに僕を巻き込むつもりか!? このトラブルメイカーが!」

「つか、肩から手を離せ! そんなに離れたくないとか僕のこと好きすぎかよ!」

「ふふっ。そうですね。いつもグツドタイミングに来てくれる夢月さん大好きです。お望みなら愛してると言っておいてもいいですよ?」

「やめろお前! 鳥肌立ったわ!」

てか、早くこの場を離れないと本当に面倒に巻き込まれる。愛里や椎名の前で、百合の間に挟まる男にはなりたくない。いや、キャットファイトに乱入する男か? どうでもいいわ!

「なんでこんなに人が来るの! 私達はただ軽井沢をリカに謝らせた

いだけなのに！」

「ヤリマンのコイツが呼んだんじゃない!? さっきもマジムカつく事してくれまし！」

「しかも左京君だけじゃなくて椎名さんまでいるよ!? ヤバいって！」

「ちよつと左京君!! 東風谷さんとの喧嘩は後にしてあたしを助けて! こいつらあたしを強引に拉致して暴力も振るってきたんだから。マジ最低じゃない? ウザいから消えろとか言われたんだよ!」

「あつ、今度は左京君!? 手当り次第とかマジ最低!」

嗚呼。遅かった。事態は混沌としつつ、騒然としてきており、挙げ句の果てには知らない奴らが僕の名前を呼んでいる。微妙に東風谷からスライドされてきたのが面倒くさすぎる。

いつそ東風谷V S 金髪V S 女子3人、ファイツ! とかで片付かないかなあ。流石に無理か。

……というか僕としては、トレイン行為しておいて嬉しげに笑ってる東風谷こそがマジ最低でムカつくんだが。女子達の日線を見るに、罵倒も東風谷へは向いてなさそうだし、なんてものに巻き込んできやがったんだよコイツ。

でも今更矛先を戻して愛里達にまで火の粉が飛んだらと思うと、一旦僕で止めておいて最低限の事態収拾は必要だろう。

そこも計算尽くだと察せられるあたり、東風谷は真に邪悪である。

しかたないので嫌々事情を聞こうとしたところ、金髪の女子がこっちに寄ってきたので、躲していきり立っている女子3人組の近くに移動する。

金髪は陽キャっぽい外見なのに、こんな短い時間でコミュニケーション能力。冷静に外から見ると、揉めているっぽい3人と全く『会話』していないのが丸わかりなのだ。おそらくコミュニケーション経験自体が少ないとみた。

間違いない。

金髪は高校デビューの元陰キャ……つまり裏切り者だ。

こういう陽キャ系コミュ障は苦手な部類だし、できれば清隆あたりを壁にしてやり過ごしたい。

だから金髪には睨まれても、さっきの応酬も考慮に入れて3人の方を冷静にさせる方を優先する。まして金髪寄りに見られる挑発行為など以ての外。3人の方も金髪を鼻で笑ったりして挑発していたが、まだこっちの方が面倒が少ないと僕の勘は言っている。

それにしても金髪が睨んでいる対象が奇妙だ。

僕と女子3人だけじゃなく、東風谷…ではなく何故か関係ない愛里に視線が行ったり来たりしている。まあ、普段目立たないようにしているのに、主に僕や東風谷のせいで姫ムーブに見える時がある可能性は考えていたから、女子で鼻につく奴がいてもおかしくはないが……。佐倉さんを助けるならと言ったし、金髪から愛里に何らかの隔意がありそう。

しかし、どうして昨日今日と僕はこんな貧乏クジばかりなのか……東風谷のせいだ。

考えてみれば、なんとなく場の流れは話し合いレベルにまで持ちなおしてきたのだから、もう東風谷から事情を聞き出してこっちに巻き戻してやる。当事者のくせに丸投げして1人だけ脱出など絶対に許さん。

僕は内心で華麗に手のひらを返した。

「東風谷。事情説明」

「まず私の問題はすでに片付いています。今は、軽井沢さん…その金髪の人が横暴な振る舞いをしたとかで、そっちの3人が誰かに謝られて迫ってみたいですね。ちなみに、さっきの私は巻き込まれただけです」

人知れず切り替えた僕が簡潔に尋ねると、ちよつと真面目になった東風谷から情報がもたらされる。

ダウト。とかつて、ふざけて言えないのがツライところ。嘘でもなさそうだしな。

「重要な点は別にあります。『軽井沢』は無人島の5日目に愛里さんを一時クラスの拠点から追い出した犯人です」

「ちよ、ちよつと待つてよ!! あの時は下着がなくなつて動転してたんだつてば! そんなつもりじゃなかつ」

「軽井沢あく? あんた、やっぱり他でもやってたんだ。これも因果応報つてもものかもね」

「うるさい! 東風谷さん、この話は昨日決着したでしょ!? もう蒸し返さないでよ!」

事情を聞いたら聞いたで、また更に面倒くさいことになってきた。

愛里の方を見ると頷かれたので彼女の性格上、説明は正しいけど別に仕返ししたくないし、目立ちたくないとか揉め事に関わりたくないとか考えていそうだ。

ついでに珍しく他人を呼び捨てした上で、東風谷自身でなにかしないということは、先に言われた通りすでに話がついている。もしくは、愛里の考えを尊重しているということ。これは東風谷と愛里を知っていれば、だいたい予想できる。

つまるところ、僕にはくすぶっている部分の解消を求めている……のか?

……マジかよ。女子同士の揉め事とか、僕にどうにかできると思えないんだけど。でも見回しても、解決する案くらいポンと出せそうな友達連中が揃つて動く気配もない。

東風谷はともかく、四方、椎名、清隆どころか目立たないようにしてる愛里まで、四方の後ろから僕へ期待するかのような眼差しを向けているだけだ。他は当事者を除くと、苛ついている感じの幸村君だけが浮いてるのがなんとも……。

ていうか、ここから寝覚めが悪くならない為には、ほぼ無関係の僕がなんとか一件不時着程度までは持つていかないといけないのか……嘘だと言つてよ、幸村君（とぼちり）。

「そしてこつちの3人のうち1人は、以前に私に喧嘩を売つてきて返り討ちにしたCクラスの人です」

「ちよちよちよ、私達は東風谷さんになにかする気はないよ!? 軽井沢に謝らせたいだけで、龍園君にも言われてるし、もう東風谷さんや左京君と敵対する気はないから!」

「だそうです。あとさつきも言いましたが、それとは別に彼女達の友人が軽井沢さんの被害を受けたとかで、本人に直接確認させた上で謝らせたいのが今回の発端らしいですよ」

「だからそれはあたしじゃないって言ってるじゃない！ 意味わかんないっての！」

「軽井沢！ あんた、またとぼけるつもり!? さつき問題にするってなった途端、やったって認めたじゃない！」

僕が頭を抱えなくなっている間も言い合いは進み、東風谷以外がまたヒートアップしてきた。放っておくとキャットファイトか東風谷無双が始まりそうだったので、嫌だが……本当に嫌でしかたないが、割って入って僕にできるたったひとつの冴えたやり方を提案してみる。

「ああ、揉めるのは後にしてくれ。まずCクラス?の……えーと」

「……真鍋よ」

「そう、真鍋さん達に提案したい。」

えーと、東風谷は勿論、あつちの金髪を感じたとどうあつても謝らないぞ。なら頑張っても時間と労力の無駄だし、いっそリーダー連中に訴えてしまわないか？ アイツのせいで友達がく、とか。謝らせろく、とか。慰謝料寄せ、とか。

大丈夫。龍園がどう判断するかわからないけど、少なくとも一之瀬や櫛田なら話くらいは聞いてくれるはず」

「待ってってば！ あたし」

「私達、東風谷さんには本当に何もする気はないから！」

「あ、マジでそうなの？ 他の二人も？」

僕の提案を遮った金髪の声を更に遮った真鍋さん達の主張に聞き返すと、非常階段にて3人の首ふり人形（縦）が誕生した。

彼女達が東風谷と敵対したくないっていうのは、どうも本心からのようだ。念入りに何度も言っていることから、東風谷への恐怖すら感じられる。

そのおかげで僕にまで従順なのはいいのだが、この怯えっぷり。東風谷はどんだけ恐れられてるんだよ。後々問題にならないだろうな。

まあ東風谷に敵意を向けないなら、あとはこの3人と金髪の問題だけだ。Cクラスの奴らにも最低限のフォロワーを入れて、出しかけた疲れる提案は引っ込めておく。金髪が折れれば、それが一番楽だからな。

とはいえ、言った通り金髪が素直に謝りに出向くようには見えな
い。かといって、この場だけでなあなあで済ますと、女子特有の陰湿
な何かをやらかすかもしれない。そこへ東風谷が混ざったら確実に
面倒事に発展する。

ならば次は金髪の方にも話を振り、利益と感情で揺さぶって――。

………面倒くさい。なんで僕がどうでもいい奴らのために、女子
の修羅場で思考回したり口舌を振るわにやなんのだ。

友達の誰かが問題の中心にいるならまだしも、本当に巻き込まれた
だけっぽい東風谷から更に丸投げされたというのがわかり、一気に冷
めて面倒になってきた。

だからすぐにも言い合いを再開しそうな睨み合ってる女子4人や
ギヤラリーを思考から追い出して切り替え、投了の一手を口に出す。
雑に盤面をひっくり返すだけなら、考えるまでもなく簡単なのだ。

道筋が見えた僕は、笑顔で高らかにそれを言い放った。

「よしー！ 面倒になった！」

東風谷――優待者を指名してしまえ」

そう。東風谷が兎グループの試験を無理矢理終わらせてしまえば、
これ以上こいつらと関わることもないという寸法である。

「え？」

「はい？ 誰をですか？」

「誰でもいいけど、お前が確実な名前を知ってるあの金髪のでいいん
じゃね？ 東風谷と同じグループでなおかつ敵みたく見てたなら、フ
ルネームも覚えてるだろ。確率的にハズレだろうが、僕が口添えして
やる。誰でもいいから指名して、兎グループが集まる理由をなくせば
全方位オールクリアだ」

「なるほどー！ じゃあすぐに送りますー！」

「え、ちょ」

東風谷は本当に決断が早い。普通なら少しは迷うところでも、淀みなく端末を操作して速攻でメールを送ってしまった。

慌てて阻止しようとしたのか、伸ばされた金髪と幸村君の手がどことなく虚しく映る。

「「「あ!!」「」」」

しかし東風谷の決断したら躊躇のない果敢な在り方。マジで尊敬するわ。僕が女だったら惚れてたかもしれない。ドヤ顔するのが目に浮かぶから口には出さないけども。

『兎グループの試験が終了いたしました。兎グループの方は以後試験へ参加する必要はありません。他の生徒の邪魔をしないよう気をつけて行動してください』

多数の通知音に呆気にとられたような声を出す者達を尻目に、僅かなラグの後にみんな一斉に届いたメールに目を通すと、すでに試験終了している猿や馬グループの時に来たのと同じような文面。昨日で知ってたけど、結果3や4はこんな感じにすぐ終わるんだな。

でもこれでBクラスはトータルでー50CPか。ワンチャン金髪が優待者だった場合にだけプラスになる。

まあ結果4だろうと東風谷に暴れられるよりずっとマシだし、東風谷と四方の自由時間が増えれば、愛里に付いてくれるよう頼むのも容易い。必要経費とおこう。

でも…はあ。一之瀬達への言い訳を考えとかないと……。

「ふう。終わった終わった。とりあえず一件落着、と。」

どつかのクラスに50万PPと50CPのプラスかマイナスが入るけど、インターバル前に時間拘束がなくなっただけで良かったな東風谷」

「はい！ 夢月さん、踏ん切りをつけてくれてありがとうございます！でも約束は忘れないでくださいね」

「一之瀬達に弁解するのを手伝う、だろ？ わかってるさ。考えはあるから、泥舟に乗ったつもりで不安に思っている」

「そこは安心させるところでしょう？ 相変わらず女の子の扱いがなってませんね」

そんな中で東風谷と話していると、昼の牛グループのデイスカツシヨンを知らないとはいえ、今の僕にクリティカルに刺さる事を呆れた笑顔で言ってきたやがった。

てか、誰のせいでこんな面倒事に巻き込まれたと思っているんだ。やっぱりこの協調性が欠片もないクソ緑には、いつぺん『わからせる』必要があるようだな。

昼にモテなかった事が思い出されてイラツときた僕は、八つ当たりを意識しつつ東風谷へ意趣返しを仕掛けることにした。

「女…の、子？ 東風谷が？」

「なにかおかしな点でも？」

「べつつにいく。自分で蹴散らせただろう修羅場を僕に丸投げした誰かさんが、あんまり女の子って感じがしなかっただけだ」

「…なるほど。これは私に喧嘩売ってると受け取ればいいんですね？」

「好戦的なことだ。とても女の子とは思えないな」

「は？」

「ん？」

好都合なことに、この場のほとんど全員が静かになっていたので、東風谷へ巻き込んできた意趣返ししようとしたら、結果的に睨み合いになっていた。

まったく。なんでこいつはこう容易く突っかかってくるかね。もっと大人になってほしいものである。

P、 軽井沢恵

なんて覇気のない……面倒くさそうなことを隠さない奴なの。

あたしが初めて対面した時の左京君の印象はそれで、東風谷さんに指名する指示された時など、後先考えずつい罵ってしまふところだった。

だって凡庸な見た目。弱そうな身体つき。頭の悪そうな話し方。思っていることがモロに出ている表情。

どれをとっても、とても平田君が褒めていた要素が見当たらない。こんな奴があつさり試験を終わらせてしまったのだ。

オマケに女子に恐怖心でも抱いているのか、あたしや真鍋達を見て面倒と感じつつも怯えている様は、まるで迷子のキツネリスのよう。というか、東風谷さんを怖がらなくせして、あたしを怖がるのか意味がわからない。

しかもあたしが助けを求めているのに、駆け寄ればあろうことか真鍋達の方にすり寄る始末。佐倉さんの時は、須藤に飛び蹴りまで食らわせて二人共停学になるほど必死だったのに……。

そんな一部を除いて情けない印象なのに、ぱっと見ただけでわかる東風谷さんや高円寺君のような単独で立っている人に共通する雰囲気、こんな奴にもあるなんて不思議でしょうがない。あたしが見て聞いたこれまでの彼の実績が、そう見せてただけかも知れだけども

無人島5日目の朝にDクラスで下着泥棒が発生し、その犯人探しが始まった時のことだ。

須藤の一件から、佐倉さんには守ってくれる人達がいると知り、どこか佐倉さんに嫌悪感のようなものがあたしにはあった。

だからあたしは、盗まれた下着があたしの物だったことも手伝って、気づいたら彼女に意地悪く当たってしまった。

「あれえ？　もしかして佐倉さん、地味で目立たない綾小路くんが好みだったり？　あの破茶滅茶な左京くん狙いじゃなかったのお？」

「——違うよ。そんなのじゃない」

下着泥棒の疑惑をかけられた綾小路君を庇う言葉を発したのが、その佐倉さんだったからだ。

あたしが犯人でもおかしくないと思っていた綾小路君を佐倉さんは庇った。その上、ちよつと突けば引っ込むかと思えば、思いの外しつかりした口調で反論してくる。

僅かに手が震えていたので平気だというわけでもないのだろうが、それでもあの時のあたしにさえ浮ついた気持ちで発言したわけではないと感じさせた。

なぜなら佐倉さんの目に宿る強さは、いつか誰かが教室で見せたモノに似ていて、あたしをはじめとしたクラスメイトを黙らせるだけの力を持っている。

「ただ綾小路君は……私の友達はそんな事を絶対にしない。それだけは信じられる」

それだけ言うと、急に自分に注目が集まっていることを自覚したのか、小動物のように視線を彷徨わせ、一気に情けなくなったが。

「あえお……いあ、うう……」。

きよ、今日は話しすぎてわけわからなくなっちゃったので……そのお……ごめんなさいでした!!!」

ゴニヨゴニヨと言うが早いか脱兎のごとく逃げ出し、安全の為に櫛田さんが追いかけて行ったが、あたしは佐倉さんを見直していた。あたしと違って、ただ寄生するだけの娘じゃないと知って。

後であたしなりにじっくり整理してわかったが、この時までには同族嫌悪染みたモノを佐倉さんに感じていたのかもしれない。もしかすると羨ましい部分も……流石にそんなわけはないか。

——まさかこの島での佐倉さんへの八つ当たりが、左京君を通して巡り巡ってくるなんて。

驚愕と変化の連続の中で、あたしは必死にリカバリーを考えていた。

そう。あたしが兎グループの優待者。それも確実にバレてなかったのに、左京君の当てずっぽうで当てられてしまった不運な、ね。

運命の「意趣返し」って皮肉なのね。島で佐倉さんに八つ当たりしてなければ、人に無関心な東風谷さんに名前を覚えられることもなく、あたしが指名されることはなかったろう。多分、抑えようとはしてたけど、彼女が唯一敵意を見せていた綾小路君くらいしか候補はなかったはずだ。

でも指名はされてしまったけど、これはこれで良かったのかもしれない。

Dクラスでこれがあたしの失態になっても、言い訳もしやすい状況ではあるし、こつちなら平田君は確実にフォローを入れてくれる。だから最低でも立場は守られる。

ただこうなった以上、左京君には真鍋さん達との諍いを後に引かない形で終わらせてくれないと割に合わない。てゆうか、あたしを助けてくれるまで逃せない。

次に真鍋達に捕まったらアウトだってこともわからせて、色仕掛けしてでも絶対には味方に付ける。ただのお人好しってわけじゃなさそうだけど、佐倉さんへの対応を見る限りクラスは違っても助けを求めるときには最適に近い相手だ。

そしていくら面倒くさそうでも、いきなりきて好き勝手やった代償を払わせてやる。

寄生虫らしくあたしの生き汚さを見せてやるんだから！

そう決意はしたものの。

左京君自体は取り付く島だらけに見えるのに、近づこうとすると完璧に気づかれて避けられるのは一体……。

「陽キャ系コミュ障怖い……デコイを、清隆を間に入れるにはどうしたら」

しかも、ようやく逃げないギリギリの距離まで近づけて何を考えて

るか知ろうとしたら、とんでもなく失礼な独り言が聞こえてしまい、一瞬状況を忘れて頭に血が登る。

ボソつと言っても聞こえてんのよ！ なに？ あたしって初対面でコミユ障に見られたの!? 少しは隠そうとしたらどうなの!?

それもなにか思いついた風に、また真鍋達の方に逃げるオマケ付きだし！ コイツ、マジで……！

「そうだ！ 龍園が真鍋さん達にこれのことを聞いてくるだろうけど、実行犯は東風谷、教唆が僕ってしつかり伝えてね！ あいつ怖いから、なるべく目を付けられたくないんだよ。椎名もだぞ？ 頼むからな」

「……左京君。その、もう手遅れでは？」

「言うな椎名。まだ3割くらいは取るに足らない奴と思われている可能性はあるはずだ。僕は最後までそれを信じ抜く」

そんなにあるわけじゃないでしょうが。馬鹿なんじゃないの。

少なくともうちの教室であの怖そうな人が高笑いしてた時には、目を付けられてたとあたしでも思う。無人島で全員集合した時も最初や最後に名前を呼ばれてたし、雑魚呼ばわりな人達よりはずっと注目されてるはずだ。

誰だか知らないけど、もつと言ってやって！ と、内心応援してやったのに、反論を聞いてすぐ諦めた顔で首を振る椎名と呼ばれた女の子。

「ガーーーーッ!!! なんで高円寺といい、左京といい、無軌道な奴ばっかりなんだっ!?!」

「あつ、ちよつと。今のは僕じゃなくて東風谷が原因で」

「うるさいっ!! どっちでも試験が終わってしまったんだから同じだ!」

「どっちでも同じなら東風谷にしと」

「夢月さん？ 試合再開ですか？」

「そもそもお前が発端だろうがゴルアっ！ 責任を折半にしてやっただけありがたいと思いやがれ!」

「~~~~っ! もういい! 帰って寝るっ!!!」

それに業を煮やしたのか、今度は見覚えのある男子の大声が割って入る。

だが、この期に及んでなお漫才を繰り広げる左京君と東風谷さんに言葉を失くし、えーと幸村君？は足音荒く去っていった。終始存在感なくて頼りなかったけど、最後のツッコミだけはこの場の全員が同意するところだろう。自分の問題がなければ、あたしもふて寝したいくらいだし……。

一方、ともすればキスでもするんじゃないかという距離で再度睨み合って互いに罵り始めた二人に、どうするんだこれ？ みたいな空気が非常階段に蔓延していた。

あ、一瞬ドアが開いて誰かがUターンした。そりゃこんな場面に出くわしたら逃げるか。できることなら、あたしも逃げたい。逃げるわけにはいかないけど。

あたしが現実逃避したくなっている間にも、無駄ないがみ合いは続いている。

「おい、そのクソ緑」

「名前で呼んでください。ムカつきます」

「……ほう？ ほうほう？」

「早苗ちゃん」は名前で呼ばれたいんだ。じゃあ、これからは馴れ馴れしく呼んでやろう。

どうだ？ 野郎に許可なく名前呼びされる感想は？ 狂喜乱舞し

てもよいぞ？ くつくつく」

「……」

でもここまで来ると、なんとというかこの二人は、一周回ってももの凄く仲がいいんじゃないかって気になってくる。

……あたし達は何を見せられてるんだ、って意味で。口も挟めないから尚更。

「なんか言ってくれ！ 無駄に滑ったみたいになってるじゃないか」「いえ、すいません。夢月さんのちゃん付けに吐き気と驚きで言葉が出ませんでした……あと何故かほんの少し嬉しい

……………ふっ」

ん？ 今、楽しげだった東風谷さんが嘲るように笑って誰かを流し見た？ 誰に……綾小路君？ なんで？

……てゆーか、東風谷さんに何したらこんなことになるの綾小路君。もう敵意がわからさまじやない。

「酷すぎだろっ！ 東風谷だって僕をさん付けで呼んでるじゃないか！？」

「もう普通に早苗でいいですよ。今更名字に戻されるとすごい違和感」

「ゴイツ、マイペースすぎる。一回呼んだだけなのに、違和感とか言い出して煽りながら唐突に素に戻るとか……。あつ、真鍋さん。できればその友達、今のうちにここに呼んでくれる？ いっそ全部片付けちゃおう。」

それにしても。はあ、早苗……かあ。めっちゃ今更だよなあ。てか、もっと嫌がると思ったのに」

「それは言わないお約束ですよ夢月さん。私も思ってますけど」

むしろ一瞬、綾小路君に向けられたソレを気にしない左京君の方がマイペースなような……？

それにしても東風谷さんを相手に、よくもまあ喧嘩できるものだ。デイスカッション初回の自己紹介であたしの名前を言った時、多分彼女からしたらほんの僅かの敵意を向けられただけで、あたしは動けなくなった。そこから時間をかけてなんとか体裁を保って話をするまで、生きた心地がしなかったあの東風谷さん相手に。

あの時は部屋中が凍りついたかと思うほどだったのに、今はどこかギャグっぽい。それに言い争ってもすぐに仲直りできるところを見ると、本当に友達なんだなと素直に思える。かなりの変化球だけど。

……思わず左京君達の会話に気を取られていて、サラッと挟まれた真鍋への二言を聞き流し、行動も見逃してしまったことで、あたしの運命は決まってしまったのだろう。良くも悪くも。

言い合いも一段落ついて息をつき、東風谷さんを放置することにし

た左京君が、初めてあたしを見て口を開いた。
軽い口調に隠れて、怯えながらではあったが。

「金髪。ちよつと聞きた」

「か・る・い・ぎ・わ！ 軽井沢よ!? ようやくまともにごつち見たかと思えば！」

真面目な時くらいちゃんと名前で呼んでよね！」

「お、おおう。軽井沢さん、だな。わかった。

すまん。君、かなり苦手なタイプなもんで、つい脳が名前を覚えるのを拒否してしまつてな。右から左に抜けてたわ」

「「ぶ・ふうー」」

失礼な物言いにも我慢して、あたしが気を遣つて優しく訂正してやったというのに、ふざけた返事が返つてきた。苦手なくせに煽つてくるとか、コイツはどういう神経してるのか。

しかもそれを聞いて、真鍋達が吹き出した。急いで後ろを向いて肩を震わせるその姿は、なかなかイラツとくる。

でもなによりもイラツときたのは、目の前のコイツだ。

「……ぶつ飛ばされたいの？ あんた」

「滅相もない。ただ、そのお……なるべく直接話したくないから、軽井沢さんとの間に清隆……綾小路を入れていい？ こち……早苗よりはマシになると思うんだけど。主に君が」

「おい夢月！ 勝手にオレを巻き込むな！」

「ふう。清隆。適材適所という言葉を知らないのか？」

——この場の2大コミュ障は独断と偏見により、清隆ときん……軽井沢さんがツートップなのは明白だ。コミュ障同士仲良くやってくれ。そしてできたら説得してくれ」

「ふざけて……うん？ 待て。説得？」

驚くほど失礼！

畳み掛けるような失礼の数々に言葉が出ず、笑っていた真鍋達でさえ静かになっている。これに比べれば、綾小路君と親しげなことなんか毛ほども気にならない。

こんな初対面で真正面から、顔見て話したくないとか言われたの、

過去を含めてさえ初めてかもしれない。でもムカつくはムカつくけど、逆に興味まで湧いてしまった。

しかもこれ、多分左京君はほぼ素だ。

彼や東風谷さんには、どこことなくあたしに似た匂いを感じる。だから追い詰められて、あたしは思わず助けを求めてしまったのだろうか？ わからない。

「うん。まあ、軽井沢さんが謝罪して済むなら、済ませといた方がいいよって感じで。正直、どうでもいいとも思ってるけど、放置すると滅茶苦茶寝覚め悪そうな事態に発展しそうな気がしてる。

でも今なら、かろうじて丸く……16角形くらいに丸っぽく収められるんだ。それなら諍いレベルのうちに全部片付けて、さよならバイバイがまだマシかなって……」

「寝覚め悪そうな事態？」

「16角形？ ああ、確かに丸っぽいですね」

「だから！ なんてあたしが謝らないと」

「だけど興味は置いといて、あたしはどうかこの戻ってきた流れを変えたくて言い募ろうとしたが、それも遮られる。」

東風谷さんが変なところで頷いてるけど無視だ無視。空気読まない自由人はお呼びじゃないの！ そんなことより——。

「軽井沢さんは、いいからちよつとだけ話に付き合ってくれ。できれば東風谷の方を見るのを推奨」

「……っ」

「推奨、じゃありませんよ。まったく」

「清隆、軽井沢さんから僕に視線が通らないように、そこを動くんじゃない。いや、むしろ遮るように臨機応変に動け。デコイ…壁…えつと、と、友達なんだしこういう時くらいは助けてくれ」

「お前、その流れでよくオレを友達とか言えるな」

「愛と勇気だけが友達のヒーローも、仲間と同じようなこと言いそうじゃん。頭変える時とか」

「そういえば、ボールは友達のサッカー選手もボールに怒りをぶつけようとしてたな。」

……友達って一体」

「ふむ。では便利な男ではどうか？ 意外と自分からなりたがる奴もいるらしいぞ」

「どうか、じゃない！

はあ。これ以上、夢月に言っても倍になって返ってきそうだな。傷口を広げない為には大人しく聞いといた方が良さそうだな」

ほとんど知らないけど、いつもなに考えてるのかわからない無表情な綾小路君さえ、困惑して左京君のペースに乗せられている。

あたしにも綾小路君にも失礼極まりない事を言ってるのに、普通に要求通りに動くとか綾小路君は機械なの？ もっとはつきり言ってみてよロボット人間！

とは思っても何故か言い出せない空気があつて、結局は壁（）ができて左京君が見えなくなつた。それで本当に安心したような声になつたのが腹立たしい。

でも怒るような余裕があつたのはここまでだった。

安心した左京君が切り出してきたのは、あたしに結構刺さる話でまた考えさせられるものだったからだ。

「……で、だ。

関係ないところから話すようだけど、無人島の試験で何が一番ヤバい事だったかわかる奴いる？ あ、気づいてても四方と東風谷は言うなよ」

「は？ それと今がなんの関係があるのよ？」

「最初から女子達の前でストレートに言うのは、気が引ける話題なんだよ真鍋さん」

ここからの話題は、きつとDクラスでは考えた人も少ないだろうことで、それでいて結構重大な懸念だったと思う。

「女子達に言うのは気が引ける……？ もしかして」

「あー。そりゃ椎名は気づくよなあ。

うん、多分想像の通り。僕が島で最も警戒してたのは、監視ができない場所で誰かが誰かに襲われることだよ。それで暴力にしる性的

なアレにしろ、被害者になる可能性が高いのが弱く見える女子だ」

「……それがなんだったのよ」

真鍋は考えてなかったから苛ついた感じだが、島で下着を取られた経験を持つあたしにはこれは他人事じゃない。

この事を強制的に考えさせられた：思い出させられたから、あたしはそれから男子を煽りすぎないように注意していたのだ。あれは結果的に男子の仕業ではなかったと判明したとはいえ、それまでは平田君以外の男が怖くてしかたなかった。

「わからないか？ 島では結局大丈夫だったみたいだけど、今はまさにその懸念が再燃しかねない状況なんだ」

でも今は、真鍋達からなにかされることしか頭になかった。

そこへ改めて突きつけられたものは、身体に冷水をぶっかけられた時以来の感覚に近い。

それだけあたしは目の前のことだけで精一杯だったのだろう。

「ぶっっちゃけた話をする。

——もし軽井沢さんか真鍋さん達のどつちかが誰か男に報復や手伝いを頼んだりした、と仮定した場合にどうなるか想像してみろ」

「そ、れは」

「そこまでいなくても、相手にマイナス感情を持ったまま何らかの決着をしておかないと、考えがどんどん過激な方向へいくぞ。例えば、アイヒマン実験とかならこの船の環境と君らの関係性なら無理矢理再現できなくもない。そして偶然でもそういう状況が整ってしまつたら、歯止めの効かないリンチになつてもおかしくないんだ。

そんな事になつたらどつち側にも不利益しかないだろう？」

あたしは目先の恐怖に踊らされて、浅いところしか見てなかったかもしれない。平田君は「あたしを助けてはくれなくても」そんな事をしないだろうというのもある。

人の悪意に底がないなんて、あたしはよく知っていたはずなのに……。

「軽井沢さんと真鍋さん達の力関係を客観的に見ると、軽井沢さんはこれから逃げ続けることになる。下手したら学校に戻つてもだ。そ

れならまださつきと謝った方がいい。

そうして筋を通した上でまだ何かあるようなら、その時こそ堂々と助けを求めればいいんだ」

まだ無人島から日も浅く、男に襲われる恐怖は忘れきっていない。だからなんちやら実験？とかはよくわからないけど、そんな事態になることは充分あり得ると思えた。真鍋達になにをされるかも怖かったが、男を利用されることはもつと怖い。

「真鍋さん達も、どこかのタイミングで軽井沢さんが男を引つ張り出してこないって言い切れるか？ またどこかの現場を写真なんかで押さえられたらどうする？ そこまでいく前に、適当なところで切り上げるのがいんじゃないか？ 何されたかとか謝られる人次第ではあるかもだけど、もう強制的に真鍋さん達と軽井沢さんが集まれる機会はないんだし、こころで手打ちにしておくのがマシだと思うのだが」

あたしだけでなく、真鍋達にも同じように忠告している。

さつきまでのあたしなら、なに甘いこと言ってるの!? くらいは言いそうだけど、前提を崩された今は……。

「ともかく、どつちが痛い目にあつたとしても寝覚めが悪すぎる。

だからまあ、確認？謝罪？して済ませられるなら、お互い最悪にはなりえない今の状況で済ました方がいいよ、つてことが僕は言いたかったわけ」

でも、なんでだろう？

面倒くさげでムカつく男ではあつても、左京君からは不思議と本当にどうにかしてくれそうな何かを感じる。

あたしがよほど馬鹿な選択をしない限り、この場で決着をつけてくれそうというか、どつちかが酷い目に遭うようなことにはしなさそうというか。大事なことを思い出せそうというか。

本来、左京君は敵なのに、初対面なのに。真鍋達と話をつけることも、左京君達がいるなら大丈夫なんじゃないかと樂觀してしまう。

ただ寄生することに慣れきつたあたしには、最後のひと押しが欲しい。弱い生き物が勇気を出すきつかけを。

判断に迷っていたあたしはなんとなく、一言も喋っていない佐倉さんを見てしまった。

意識していたから、あたしは気づけたのだろう。佐倉さんだけがこの場にいなから、唯一左京君が名前を出さないようにしていた事に。

そしてその佐倉さんの視線の先には当然――。

そんな佐倉さんの目を見て。

このままじゃあたしは嫌だ！

助けてもらうんじゃないで、あたしも自分で助かってやる！！

全部と言わなくても取り返してやる！！

と、色々起こりすぎてグチャグチャになっていた内心から、これまでのあたしらしくない意思が浮かんできたのはどうしてだったのだろうか？ まるで諦めたフリをしてた間に溜め込んでいたモノが溢れ出したかのような……。

謝る……か。

一度だけ信じてみてもいいかもしれない。

左京君もだけど東風谷さんがここにいる以上、最悪でも真鍋達は強引な手段には出られないだろうし、終わらせてくれるならそれに越したことはない。

なにより佐倉さんは信じる事ができたのだから、あたしにもできるはず。

「し、志保ちゃん？……」

あたしがそんな事を考えている時に、非常階段のドアを開けて現れたのは――。

79、聖人

諸藤リカさん（この時点では名前を知らなかったが）が来てから少しの話し合いを経て、軽井沢さんが謝ってとりあえずの和解をしてから去って行った。

本当はここまで付き合う気はなかったのだが、愛里と椎名の期待の眼差しを無視できるほど僕は達観していない。

しかも四方や早苗、清隆には何度も投げようとしたのに、わざとらしく目を逸しやがる。四方には無駄に注目を集めたくなかったからまだいいが、こういうのは力がある奴がやれよと何度も怨念染みた意思を早苗と清隆には送り続けていた。無駄だったが。

だから結局最後の最後まで僕が、右往左往することになってしまった。

あとクラスメイトが保証人的な位置にいた方が安心できると思つて、清隆と椎名にはそれぞれC・Dの者達に連絡先を交換してもらい、しばらくの間の経過観察を頼んだ。何故か僕も連絡先を交換することになったが本気でいらぬ。今後、使うこともないだろう。

ただ登録連絡先に女子が6人（ついでに椎名とも交換した）も一気に追加されたのでアドレス帳が20人の大台に乗り、早苗や愛里、それに野郎共にドヤれる可能性が生まれたことだけは幸いか。椎名以外、連絡してみろつて言われてもできないからアレだけでも。

ともあれ軽井沢さんが素直に謝罪してくれたおかげで、変に拗れずに済んだのにはホツとした。おそらく諸藤さんが来るまでの時間稼ぎ&謝罪する気になる誘導が功を奏したのではなからうか。女子なら持つてるだろうリスクを煽った甲斐がある。他はともかく、愛里の前ではあまり言いたくはなかったがしかたなかったと考えるしかない。

この一件、精神面はともかく僕としては大した手間でもなかったし、もうパツとやって吹き飛ばしてしまうことにした。

MVPは諸藤さんをあの非常階段まで呼んでくれた3人のうち誰

かつてことで、ソイツに全部押し付ければ万事解決である。実際、今頃は打ち上げとかで持ち上げられていることだろうしな。

この後は、この場に残ったいつもの面子を誘ってみんなで天体観測をして気分転換した。

天体観測の途中、メールで呼んだ高円寺はともかく、平田、龍園、葛城、神崎（一之瀬は殺到する相談にてんやわんやで、代わりに神崎が来たらしい）がどこからかバラバラと入れ代わり立ち代わりに来た。

ただ天体観測以外で僕が関係してたのは高円寺をメンバーに加えた事と、軽井沢さんの彼氏だったらしい平田に感謝されたことくらいだ。あとは優待者を指名したクレームだったので、それぞれに合わせたい訳で撃退しただけ。例えば、僕が明言したのは牛グループだけなので他グループの指名は関係ないとか、真鍋さん達や軽井沢さんを引き合いに出して指名してなかったらCかDに変な弱みができてたかもとか……。

滅茶苦茶強引な言い分だけど不承不承でも納得させられたのは、おそらく実際に指名した高円寺、四方、早苗の全員が制御し辛い奴らだと話すことで理解したからだろう。四方が高円寺に対抗する為に指名したと聞けただけで、他二人はほぼ無視を貫いてたから一目瞭然である。

ああ。ついでに言うと、龍園など端末を忘れたとかで2度も来訪した。

うっかり属性持ちの中二病患者とかコイツはどこを目指しているのか。

その時の僕は葛城と話していて又聞きだったが、清隆や四方が再訪した龍園の対応含めてなんかやってくれたらしい。葛城が帰った時には本人が居なくなっていたので、せめて今度話す時には龍園にキヤラ付けの徹底を呼びかけてやれと言ったら、何がおかしいのか大笑いされた。的確なアドバイスだったろうに解せぬ。

まあ僕としては、いつもの天文部+αでデツキに天体観測をして帰って寝ただけなので、日記をつけていても「なにもない一日だった」の一文だけの日だったといえる。

日が変わって、休養日なのか試験日時に挟み込まれたインターバル。

僕と早苗は、呆れた感じの何人かに囲まれて一之瀬から説教を食らっていた。勝手に優待者を指名したことじゃなく、妙な方向で。

「だからね。左京君は私が見てないと、何かやらかす心配が次々と湧いてくるの。お願いだから、ちよつとだけ大人しく私と居よ？」

「一之瀬お前……。いつから悪い男に入れ込んだ不幸な女ムーブなんかするようになったんだ？　しかも僕を仮想悪い男に設定するんじゃない」

「……な、なんのことかな？　私はただ左京君の姿が見えないとドキドキするだけで」

そう。一之瀬におかしなスイッチが入って、自覚を持って暴走しているのだ。

だって僕の軽口に対し、一之瀬の声には動揺が滲んでいる。こいつあ黒だ。

確実に『ソレ』を意識しつつやってやがる。普段から彼氏とそんなプレイしてるんじゃないだろうか。ただ一之瀬は慣れてなさそうだから、相方の方が変態か常識がないかのどつちかだな。

しかし動揺して完全ではないとはいえ、こんなムーブまで習得させるとか、いまだに実態の見えてこない一之瀬の推定彼氏はマジで何者なんだ。この調教途中みたいな状態を考えるに、一之瀬の心と身体に教え込んでいるのか？　エロ同人みたいに……。

と、それは置いといて、あらかじめ早苗に打診しておいた札を切る時が来たようだ。本来はこの仕込みの為だったのに、あんな面倒にまで巻き込まれたんだからコイツにはキリキリ働いてもらおう。

「やるぞ早苗。早急に対処しないと面倒事が増えるかもしれない」「ええ。本当にあれをやるんですか？　それならせめて――」

テンション爆上げでいきましようー！

「よっしや、了解！　この勢いはもう誰にも止められないぜ――っ

て、何やらせるんだよ!」

「二人共。急に変な雰囲気を作らないで? 見て感じてこの空気」

「無理しないでいいですよ一之瀬さん」

「最初から無理してないから、そこは大丈夫。でも無視はできないからね」

おお。さり気なく僕の手を取った早苗。

こいつ何気に、わけわからない流れを作るのめっちゃ上手いな。

やろうと思えば櫛田の表バージョンみたいなのもできるんじゃないか。目配せしてくるし、準備もできるとか至れり尽くせりじゃん。

よし。僕も上手くやってやろうじゃないか。

「てか、手を離せ早苗」

「いやあああ! 私のお金でギャンブル行かないでえー!」

「ふざっけんな! ちょっと倍にしてくるだけだろうが!」

「ダメダメ! 夢月さん、置いてかないで!」

いきなり悲痛っぽい声で熱演しだす早苗に、笑いを堪えてオラオラ系を意識して返す僕。

これこそ一之瀬に客観的自分を知らしめる策略である。

「ふむ。どうだ一之瀬? こう、胸に去来するものがないかね?」

「……東風谷さんまで付き合わせていきなり小芝居を始めたと思えば、何が言いたいの?」

「そりゃあ、さっきの一之瀬を客観的にみたらこんな感じにも見えるんじゃない、っていう問題提起なんだが」

「にやはは。」

……………左京君。私の我慢の限界でも測ってる? 流石

の私もそろそろ」

「一之瀬。こいつらに真面目に付き合っているとおちよくられ続けるぞ。それより結構時間経っちゃったけど、そろそろあの指名についても詳しく言っておきたいことがあるんだが。十中八九、優待者が軽井沢だと示す法則を見つけた」

「軽井沢さんが?」

……この話は後でね左京君。絶対に有耶無耶にしないからね？」
「はいはい。よしなに……覚えてたらな」

こんな風に、僕は朝食の席で一之瀬達からの説教を時に聞き流し、時に早苗と協力しつつ乗り越えたり、複雑な顔で怒る一之瀬に再度説教を食らいながら、これの『対処』について考えていた。横目に見た四方と早苗も似たような懸念を抱いているようで、言動にも何らかの思惑が感じられる。

とはいえ今回は悪巧みなわけではなく心配に近い。

その証拠に、僕と同じような立ち位置の早苗は演技以外では無言のまま観察してるだけだし、そこまでの流れを断ち切った四方は軽井沢さんが優待者だったんじゃないか？とかホラを吹いて、僕と早苗をフオローしつつ早く話を切り上げようとしていた。

これは一之瀬を仕事モードにすれば、まともっぽくなることを理解できてきたからこそ実行された四方の強引な方向転換だろう。僕と早苗では、どうも妙な方向に話にしか持っていけないからだ。

「昨夜、優待者の法則を色々考えてたんだが、おそらく干支とあいうえお順だと思う。例えば兎グループのメンバー表だと、子丑寅卯の4番目が優待者。つまり綾小路、安藤、伊吹、そして軽井沢、という感じになる。俺の馬グループもこれに照らし合わせると南が優待者になるし、夢月の牛グループは夢月になるからほぼ間違いはないはずだ」

「なるほど。とすると、俺と一之瀬がいる竜グループは……櫛田か」
てか、よく聞くとフオローやホラを吹いてたわけじゃなく、法則は本当にこれっぽくないか？ 遅くまでなにをやっているのかと思えば、試験の法則を割り出してたのか。

これが合ってるなら、保険の最後のピースは揃ったことになる。四方の大金星である。

また、ここまで説得力のある法則の仮説があれば、一之瀬関連の懸念を解消してもどこからも文句は出ないだろう。

ただ問題は――。

「なあ、みんな。

兎みたく指名する方がいいグループはともかく、他はなるべく結果1を目指す方針にできないか？ 優待者指名の指示しといて都合がいいかもだが、クラス成績よりも金を稼ぐチャンスだぞこの試験」

「金つーかポイントだけどな」

「左京君って、本当にCPはあんまり重視してないんだねえ。でもPの使い勝手を知っちゃった私としても、どうしようか悩むところではあるんだよね。葛城君や桔梗ちゃんはともかく、龍園君がどう出るかも心配だし、早めに手を打つ必要性もわかるけど」

「それに一気にAクラスに躍り出るチャンスを手放すというのも、もっと考えるべきじゃないか？」

確かにAクラスになるのが一番の目的なら指名をするのがいいんだけど、どうにも気になる事に意識を取られてそっち方面の言葉が浮かばない。

いかん。一之瀬がどちらに傾くかがターニングポイントになりそうな気がしているし、せめて先送りにしとかなないと、本当に試験結果次第でAクラスになってしまうかもしれない。

「待つて欲しい。確かに龍園の事は考えといた方がいいけど、こんな短時間で数百万ものポイントを稼げるのって、これからそんなないと思うんだよ。葛城や龍園も一部とはいえ乗ってくれてるし、協力して稼げる機会は貴重なんじゃないかと」

気になっている問題とCP狙いになりそうな話をどうしようかと、とりあえず指名させない話を僕が切り出した時に、清隆に堀北さん、須藤の3人が現れた。いつもなら面倒な組み合わせだけど、今なら喧嘩売ってくれる相手が来たのはありがたい。

「金金金。ビジネススマン染みた振る舞いは恥ずかしく……ないわね。むしろ当たり前かしら」

だが、堀北さんは今日に限って喧嘩を売ってこなかった。

目的は一之瀬とほぼ同じで、兎グループの試験を終わらせてしまったことで話をしに来たからだろうか？ さつき四方が話した法則の話が聞かれた上でだったら間抜けな話だが、清隆以外は顔色が読みやすい堀北さんと須藤だし、それはきちん観察すれば判明する。清隆

には多分もう情報が割れてるから、それを伝えていない前提条件付きだが。

そう思っただけで新たに来た3人を観察しつつ、軽く突いてみた。

「なんだよ。また喧嘩売って来たかと思えば、どこがおかし——ッ!?!」

「どうしたの左京君」

そこで堀北さんを初めてはつきり観察した僕に、二兎を得られる幸運と天啓が舞い降りてきた。法則についてのことなど、どうでもよくなつたほどだ。

飛んで火に入る夏の虫、という不謹慎すぎるだろうか。

振り返って改めて見た堀北さんの顔色が良くない。さつと目を走らせた温度計は、室温27℃、湿度も70%近いというのに、微かに寒そうにもしている。

ともかく勘違いの可能性を考慮に入れ、早苗と一之瀬が揃っている幸運にも感謝しつつ堀北さんへ質問しておく。

「……堀北さん。もしかして今、寒かったり怠かったりしないか？

ビタミン剤とか処方されてるか？」

「左京君？」

「は？ いきなり何が言いたいのかしら？」

「清隆、須藤。一緒に来たなら、堀北さんにそうした症状が見えたり、話した中で何かおかしな点に気付かなかったか？ 堀北さんにとつては結構重要なことだ。気づいてたら教えてくれ」

勘違いだったらなんなので、清隆達にも聞いてみる。

須藤は気づいてなさそうだったが、清隆は少しだけ思い出すような仕草をした後、答えてくれた。僕がそれなりに真剣なのがわかったからかもしれない。

「俺は……ちよつとわからねえ」

「……そうだな。さつきの朝食で少し話したただけだが、寒そうに見える時もあつた……気がする。確証はないが」

「充分。お前がそう見えたなら、可能性があるかもしれない」

「だから何のこと？」

考えてみれば、無人島で彼女が倒れてたのを見てからまだ1週間くらいしか経っていない。

「なるべく必要なところだけ言う。」

この環境での寒気や怠さは熱中症の疑いがある。それもかなり重めだ。すぐに医者診察を受けるか、体を冷やしてビタミン剤などを飲んだ方がいい。遭難者が、寒いのに暑く感じて服を脱ぎたくなる症状と近い危険な状態、と言えは伝わるか？」

あの時は風邪だけだと判断していたが、重度の熱中症や塩分不足による低ナトリウム血症による夏バテなども原因だったら、適切な処置をして安静にしてなければなかなか回復しない。

これらが風邪だと誤認されることは稀によくあるから、念を入れておいた方がいいだろう。

「無人島では風邪かとも思ったが、これだけ長引いてるなら熱中症の可能性を疑うのを勧める。もしくは低ナトリウム血症による夏バテか。いずれにせよ、医療者が面倒ならうちの担任あたりに診てもらえばはつきりする。こうした不調は、あまり舐めない方が良いでしょう。」

だから教師に信頼厚い一之瀬。担任のところまで付添を頼めないか？ 診察するなら、男の清隆・須藤や僕とかよりはマシだと思うんだが……」

「……………はっ！ も、勿論私はいいいけど」

クラスリーダーを顎で使いたくはないが、一之瀬以上の適任は思いつけない。榎田か愛里がいれば、そっちにも頼んだのだがいない。早苗はアレだし、堀北さんはこの場にいるうちのクラスの女子とは見るからに付き合いがなさそうだ。

なにより一之瀬を行かせれば、説教も半分回避でき、懸念の解消にもなる。四方や早苗も賛同してくれるに違いない。

「早苗の見立てだとどうだ？」

「そうですねえ。」

聞いた限り、確かに熱中症か夏バテっぽいです。早く連れて行ってあげた方がいいと思いますよ。本当にそうならなかなか治りませんから、ビタミンや塩分をきちんと摂って安静にしてください。

私としては、減塩の嘘に引っかけた健康常識を実行してしまっただのではないかと。あ、減塩については厚労省のホームページに間違いだったと記されているので、興味があったら調べてみてください。コレステロールとかの嘘もあって価値観が変わるかもで」

「ストップストップ！ 好きなこと聞かれたオタクかお前は！ そうした事は担任や本職に任せとけて」

普段人前では無口気味なのに、いきなりベラベラと喋りだした早苗に注目が集まる。

周囲がポカンとしてたから一応演説？は止めたが、早苗は見事に僕の意図を汲み取って後押ししてくれた。

神様から薫陶や助言でも受けているのか、早苗は化学・医療方面にはめっっぽう強い。それこそ付け焼刃の僕などより高度な知識を持っていて、無人島でも筋肉痛に効く薬草とかを処方してくれた。クラスメイトは…一之瀬はこの事を把握しているし、世話になった者もある。これで僕の言ってた事にも説得力が増すことだろう。

一方、僕は口ではこう言いながら、その隙に端末に最初から登録されていた担任へメールを送っておいた。

堀北さんの不調については勿論、『本命』の一之瀬を休ませることにしてだ。珍しく朝から疲れを見せていたので、担任の元へ送り込んで強制休養させようと考えていたのである。今日はデイスカツションもないし、一之瀬がゆっくり休むことに文句がある奴はいないはずだ。

ただ疲れてそうなのを指摘しても、肝心のドM委員長は絶対に休まない確信があった。さつきまで僕達が遠回りに色々やってたのは、彼女を休ませる為である。おそらく正攻法は、網倉や神崎あたりが打診して断られてるだろうし……。

だから渡りに船とばかりに、堀北さんの不調を無理矢理絡ませたのだ。堀北さんを連れて行った先にいる担任から言われれば、優等生の一之瀬は素直に休むに違いない。

くつくつく。我が渾身の説教回避策に落ちるが良い。あとは神崎経由で網倉・白波あたりにも同行してもらい、ゆっくり休む為にとか

一之瀬の端末を預かるよう吹き込めば完璧である。

てか、誰だか知らないが一之瀬の彼氏はなにをやってるんだ？

変なことを教え込む前に、手抜きと加減、休むことを教えてやれよ。ちよつと見るだけで微妙に無理してるのがわかるとか、一之瀬は明らかに働きすぎだろう。

「よくわからねえけど、堀北がどつか悪いのか!？」

「あー。そのへんは本人しかわからんが、不調が続いてるなら舐めないう方がいいよってことだ。どうなんだ堀北さん？」

「……何故」

「？」

そうしたわけで一之瀬の心配をしつつ、上手くいきそうだと内心ホクホクもしていると、何故か堀北さんの面倒モード？が発動していた。今日はやることもないだし、本当に不調ならさっさと休めばいいものを、なにが気に障ったのか噛み付いてきた。

しかし甘い。この場には疲れてるっぽいとはいえ聖人がいる。

ほとんどの奴に優しい一之瀬が、同級生の不調を言われて放っておくわけがない。

「何故貴方達…貴方は……敵の施しなんか、誰が受け」

「堀北さん。本当に左京君達が言うように調子が良くないの？ 他所のクラスだから敵って言われちゃうのはしかたないけど、辛そうな人を心配する気持ちはわかってほしいかな」

「……え？」

あ、あれ？ でも予想していた一之瀬のフォローが、なんだか心に痛いぞ？

堀北さんの性格上、迷惑とか大きなお世話とか言われるのは想定していたけど、一之瀬の聖人っぷりを間近で見ると、利己的な心の汚れが僕に悪さしているのかもしれない。見れば四方はともかく、早苗も衝撃を受けた顔になっている。

お経を唱えられた孫悟空ってこんな気持だったのかなあ、と共感してしまいそうだ。

「……ちよつと失礼」

予想外のダメージに僕が遠い目になっていると、気を紛らわすためか早苗が堀北さんの診察？をしようとしていた。

「触らないで……！ 私は一人で……」

早苗が伸ばした手を振り払おうとして、堀北さんはテーブルの角に手の甲をぶつける。

うあ、痛そう。

涙目になってしまった彼女に罪悪感っぽいものが湧き上がり、口に出してはいなかったが、流石の僕も一之瀬のついで扱いは酷かったかもと思に至る。いや、堀北さんがどんな心情でこうなったのかわからないが。

「そのお、大丈夫……」

「触らないでって言うてるでしょう!?!」

更には何かしなきゃみたいな心境になった僕がつい伸ばした手も、当然のようにパシッと払われ。

さっきまで比較的穏やかだと思っていた堀北さんが、いきなり怒り出してしまった。

「なんなの貴方は!?! なんのつもりで私を助けるようなこと……お金!?!」

「いや、こんな当たり前のことで金なんか取らんわ。どんなイメージだよ。ああ。一応言っとくが、他のモノもいらなからな」

あ、反射的に返してしまった。実際、堀北さんはついでだったし。

……それにしても、なんか想像以上に僕の印象が悪い。てか、ひよつとして堀北さんの地雷を踏んじやいました？ 自己管理できてない奴……みたいな聞こえ方したとか？

「くっ。じゃあ、なんのつもりで！ 私を貶したかと思えば、そうして善人ぶったりして……。何が楽しくて!」

「いや。あ、あの、ともかく落ち着い」

「ええ、左京君も東風谷さんも思い通りになって楽しいでしょうね！

良い事も悪い事もなんでも好きにして、望んだ結果を呼び寄せる強さがあつて！ 兄さんさえ……!」

「に、兄さん？ あ、そういえば会長の妹だし、もっと気遣った方がよ

かっ」

「堀北さん」

堀北さんの突然の激高に加え、自己完結したり、会長？が話に出てきたりして、わけわからなくなっていたら一之瀬が割って入ってくれた。

！
こういう場面ではなんて頼りになるんだ。流石我らの学級委員長

「まずは一度休もう？ きつと堀北さんは疲れてるんだよ」

「放っておいて！ 一之瀬さんには関係ないわ！」

「……今の堀北さんは冷静じゃないように見える。不調でもあるみたいだし、他所のクラスとはいえ、そんなの放っておけないよ。お節介かもしれないけど、私は困ってる人がいるなら手助けくらいはしたいんだ」

「……っ」

一之瀬の善人オーラに当てられたのか、何故か大人しく…悄然となった堀北さん。

言葉というより人柄で堀北さんを鎮火させた一之瀬に、クラスメイト達や須藤は感心したように目を向けている。四方や清隆もしっかり状況を観察しながら、目を瞞る仕草もしているということは彼らにも予想外ではあったのだろう。

僕？ 勿論、早苗と同じようにドン引きである。

なんだこの慈愛すら感じる雰囲気と包容力。高1の女子が持つようなもんじゃないだろ。ツライ時、苦しい時、あの巨乳に顔を埋めて抱きついてもよしよししてくれるんじゃないかと、錯覚しそうになっただわ。

堀北さんとの間に入って宥めてくれたことに感謝はしているが、やはり一之瀬は恐るべき変人だと確信していた。

80、気質

余裕があれば助ける。

僕はこれを現実的な言葉だと肯定的に見ているせいかな、助けやそれに類する行動に善行・偽善の違いや上下はないと考えている。

だが、しばしばこういう考え方は批判されたりする。その取り組む姿勢や内容によっては偽善と取られてしまう場合があるのだ。しかも身を切るように全力で他人を助けに行く者と比較してきたりして中途半端だと見てくる奴は、意外かもだがかなりの過激派だったりする。

これはもしかしたら中学時代の一之瀬や葛城なら、経験しているかもしれない。

自分に余裕がないのに、自分より他人を優先する事を異常なくらいに称賛して、それ以下だった者を批難するなんて、ボランティアなどに一度でも真面目に参加すれば何度も目にするし、下手するとどちらかを自分が受ける。という現実を……。

言い換えれば、そいつのキャパシティを超えた行為を要求して、成否に関わらず褒め称え……ついには信仰の域にまで至ってしまう。ここまでくると『信者』は盲目的になってくるので、協力を惜しむ者にさえ敵対的な言動になる事がある。これは守矢神社の信者になるのとはわけが違う。

なにより善行だとしても、本人が疲弊 or 寝不足になるほど（あえて言うが）タスクを強要するのはどうだろう。この上、要求レベルに達しない場合、偽善とか甘いか責められるよくある胸糞展開になったら、櫛田よりも救いが無い。曲がりなりにも世話になってる奴なんだから、最低限そんな未来に来ないように動くのは当然である。

また近いモノに、選り好みせず大勢の声に耳を傾けるとい意識高い考えもあるが、これを文字通りに一人で実践すると聖徳太子みたいな特殊な資質がなければ普通は潰れる。誰かに入れ込んで変わったなとか、都合の良い事しか聞かないとか難癖付けられたりしてな。ち

なみにこれはかなりソフトな部類の表現だ。……不愉快極まりない。僕は人との接し方で他人がどうこう言うのはナンセンスだと思っただけだ。

まあこの学校には、忍耐と努力、調整で一応これを成り立たせている櫛田。自分から自分にヘイトを集めるような振る舞いをしてる龍園といった変人もいるので、一概には言えないわけだが。

ともかく、本来は分担するものなのだ。

大勢を相手にする有名人や芸能人なんかは大抵やっているもので、悪意は直接本人に届かないよう事前にチェックする人が守っているのが普通。こうした少し前から僕や青娥さんが愛里：雫にやっているようなことは、当たり前前の仕事として存在する。

そして、こうした限られた世界の『当たり前前』を知らない奴が、加減せずに耳を傾け受け入れる事を実践することにより、悪意を受け入れることになって結果的に潰されるのが僕はマジで嫌いだ。

なんというかこう、自覚や悪気の有無に関わらず、善人を食い物にしてるみたいで、美学や誇りを欠片も感じない。

さつきは、一之瀬がいかに非凡だとしても、高1の女子に押し付け過ぎに見えてついやってしまった。流石にクラスメイトもそんな気はなかっただろうが、僅かでも兆候が見えるなら中身大人な僕が軽く対処しておくのが無難、とだけ後で言い訳しておこう。

少し前、僕は無人島で一之瀬に適度に逃げることを勧めたし、一定の理解は得られるだろう。これだけが唯一自分だけで手軽にできる自衛手段なのは自明である。

経験上、本質的に優しいと見えた人間は大切にしておいたほうがいいのだ。

これは一之瀬だけじゃなく、愛里や松雄にも言える。優しい人間の近くにいることが、自分も楽しく生きられる秘訣だと僕は思っている。

一之瀬ほどの善人になると僕自身では近づき難いが、変に捻じ曲げられそうになっていたらできる手助けはしておく価値があるだろう。日々の楽しさに相当な差が生まれるからだ。

そう。白状すると、僕達は一之瀬にかなりの負担がかかっているのが顔色から透けて見えて、無理矢理にでも休ませようとしていた。負担の何割かは僕や早苗関係かもだし、一之瀬が望んでの現状だとしてもブラツクな生活に見える事に変わりない。

なにより一之瀬が疲れを見せていると、僕：『俺』が退社した直後を思わせる。放っておいて、後ろから討たれたり、喜怒哀楽が薄くなったたり、なにかに強く依存する素振りを見せる事態になろうものなら、『俺』の古傷まで開いてしまう。一之瀬だけじゃなく、そんな事態は可能な限り阻止するつもりだ。知り合い以上の胸糞悪い展開は断固としてNGである。

つまり何が言いたいかと言うとだ。

一之瀬、騙してすまんが、大事になる前に今日だけでもゆつくり休んでくれ。

ついでに堀北さん、不調っぽかったのを利用してごめんなさい。

なんやかやで落ち着かせた堀北さんを担任の元へ案内する一之瀬の背に、僕は内心で言い訳がましい謝罪をしながら二人を見送った。

一之瀬と堀北さんの姿が見えなくなる頃には思考の切り替えも終わっており、網倉と白波、神崎に時間を置いて担任のところまで行き、一之瀬の端末を預かってもらうように頼む。

担任にメールで一之瀬を休ませることと、仕事っぽい事をさせない為に端末を取り上げ、それを誰か寄越すのでBクラスの女子に渡してほしい、と連絡を入れてあるのだ。

端末を一時預かるのは、同性で一之瀬の一番の友達に見える網倉が適任だろう。白波と神崎は念の為だ。

予想通り、彼女らも一之瀬の疲れには気づいていて、休むよう言っても聞かなかつたとの事で快く協力してくれた。

てか、やっぱり直接言っても駄目だったか。この分だと、僕が言っていたら逆効果になっていただろう。

まったくもって面倒くさい。

一之瀬も四方に負けず劣らずの相当な頑固者である。尤も、僕にも計算外な事があった。

それは――。

「怠惰の策略に落ち、安らかに眠るがいい一之瀬。

くつくつく。はあーはっはっは！」

「人が減って束縛から解き放たれた瞬間、急に魔王的なセリフ吐かれると反応に困りますね」

「聖女・一之瀬よ！ ふかふかのベッドでしっかり疲れを取ってくるといいわ！」

「言い直さないでください。そんなこと言う魔王は魔王じゃありません」

人が減ったことによる開放感。

これが僕を狂わせたことだ。

……連日のように人の中に居たことは、思っていたより僕と…早苗（早苗がズレたツツコミをしてくるのを考えると）にも負担が大きかったのかもしれない。

一之瀬に網倉や神崎、心配になったのか須藤が続き、いつもの面子だけが残ると笑いを堪える必要がなくなつて、つい中二臭いセリフと高笑いが出てしまった。

これも全ては龍園のせいである。

あいつの悪影響は、やつてる時は楽しいから始末に悪い。しかも我に返ると、黒歴史が更新されてしまう時限式なのだ。

僕は思考を切り替えながら、改めて龍園の危険性を認識していた。

「というか、堀北のことをもう完全に忘れてるだろ夢月」

「流石に忘れとらんわ。去っていく時だって、一応内心で謝ったんだぞ」

「まあ堀北さんは、コイツにとつて元々おまけみたいなものだったしなあ。屈折しまくってる気遣いをする奴だよ」

「いや、屈折させなかった結果が網倉さん達だろ。頑固者には多少やり方を変えた方がいいんだよ……きつと、たぶん、おそらく、めいびー」

「なんにせよ、ゆっくり休んでほしいですよね」

「ホントだよ。一之瀬が素直に休んでくれてたら、おちよくられたり性癖っぽいのを晒されなかったのにな」

「……つまり堀北は、間が悪かったんだな。本当に不調気味だっただけ幸いというわけか」

尤もそんな認識について考えてたのも、いつもと何ら変わり無いコーヒーブレイクに戻りつつ、軽く雑談して散るまでだったが。

一之瀬が担任におそらく拘束されて、朝から夕方になるくらいの時間が経った。

その間、他の面子は何事かやることがあるらしく僕は1人になった。ここは船首以上に生徒が来ない船尾方面の大人向けエリアの一角。稀に先生や船員を見かけるくらいで、若い奴向けの施設がほぼないのでいわゆる穴場的スポットになっているのだろう。

近くにはフリーの休憩室もあり、僕が夜明かした時や1人で作業に集中したい時には入り浸っていたりする。

なので時折ジャズっぽい演奏の流れるレストランの片隅に陣取り、今日もゲームの完成を急いでいる。長期休暇明け数日前にはとりあえずの完成に辿り着き、ゲーム勝負をしたところ。

長期休暇の機会を逃すと、僕の性格ではズルズル長引きそうだからだ。

そして長引くほど、デバッグとかで遊びすぎて僕だけが上達する。そうになると、難易度が馬鹿みたいに上がる問題が起こる。事実、現時点でも高円寺に何度かそれは指摘されていて、攻略不可能な部分が出てきた。

勿論、僕にできる最高難易度を作ろうとしてはいるのだが、無理ゲーになるのは本意ではない。それを避け、ギリギリのラインに調整するのが協力者達に求めていたものである。

綾小路達の胸を借りる以上、一緒に楽しめる物を作るのはせめても
の礼儀だろう。

それにしても、中学時代に何作かゲームを作っていた事やスケッチを楽しんでいた事が、ここに来て役立つとは思わなかった。完全な初心者だったらゲームでは挑まなかったかもしれないが、もし僕が初心者に近ければこの数倍の期間を要したことだろう。下手したら年単位で。

僕は感慨深く見慣れてきたゲームのオープニング画面を眺めつつ、思考の邪魔にならないジャズ演奏を聴きながら、物思いに耽っていた。

と、席を外していたもう1人が戻ってきた。つい1時間ほど前から同席していたのだが、これで彼との最初の契約は満了である。

僕は改めて心を込めて礼を口に出す。

「今回はありがとう高円寺。高円寺がいなかったら、確実にやりすぎて不可能弾幕が何箇所かできていたよ」

「ふっ。私にはたやすいことだ。本来、レディ以外にはこのようなことはしないのだが、気まぐれの幸運に感謝するといい」

「シエンロンかよ。高円寺って何気にノリもいいよな」

「ははは。私にそんな口を利けるのも夢月くらいなものだよ」

高円寺はそう言うが、なんかというかコイツは話しやすい。

僕が特別というより、弁が立ちはずきり物を言う彼自身が、軽口を叩ける雰囲気を作り出しているのだろう。

これなら多分、一之瀬や櫛田と同じような人気者で忙しいだろうに、そんな中で手伝ってくれるとはありがたいものである。

余談だが、なんで高円寺がクラスリーダーじゃないんだ？ という出会った当初からの疑問は、普段は面倒臭がつて傍若無人なイロモノに徹しているから、といった結論が僕の中ではすでに出てたりする。

勝手な想像だけど、個人的にはすごい納得できる推測だ。事情は違っても、早苗や鬼龍院先輩あたりを知っているとなおさら。

「しかし、いいのかね？ この難易度では東風谷ガールに10回前後のトライ・アンド・エラーでクリアされてしまうが？」

「それでいいんだよ。クリアされないゲームに価値はない。

てか、わかってるだろ？ 本気で勝ちには行ってるけど、これが1

回目で拗れた時用の仲直り保険だったって」

「hmm……。それ以外の目的もありそうだけどねえ」

「ま、当然あるけどな？ 高円寺含む何人かには察せられるだろうさ。わざわざ綾小路打倒計画『Ⅱ』なんて付けたんだし、気にする奴に對する目くらまし程度の意味しかこつちにはないよ」

「……なるほど。主目的はテイルマンか」

「どうしてそこで四方が」

しかし話をしている中で気を緩めていたからか、足を組み優雅な笑みを浮かべた高円寺が突然切り込んできた。しかも疑問形でないあたり、確信まで持たれている。

口が軽くなっていた隙を突かれた……。というより狙っていたのかもしれない。

それにしても全く繋がりを出さなかったはずなのに、どこからその推論が出てきたんだ？

常識的に考えて、清隆や愛里についてなら計画名や制作の柱でもあるからまだわかる。早苗も、高円寺の視点では目立つだろうからおかしくはない。でも親しくはしていても、僕がなるべく頼らないようにしていた四方がそこで真っ先に挙がるとか、どういう道筋でそれに至ったのか全くわからない。

それでも僕は一応、一縷の望みに縋ってみるが、やはり高円寺は甘くなかった。以前の鬼龍院先輩のように、僕を軽く見透かしてくる。いや、別に何か隠そうとか騙そうとかしてたわけじゃないが。

「いかなるゲームもルールの上で成り立っている。一見ではどれだけ違っているように、どんなゲームもいくつかの根源的なルールに辿り着くことができる。」

つまり夢月が何をゲームの設定目標にしているかさえ導き出せるなら、効率的・高確率な手段を逆算して、勝利条件に近づけるといいうわけだ。

それを踏まえれば、チャレンジャー達……いや、テイルマンがここまでする道筋を見極めることこそ、夢月の目的ではないかね？」

「……はは」

意図して話をズラされたが、ここまで見抜かれていると、もはや笑うしかない。

嘘やハツタリもありえない。まだ最終調整こそ不十分だが、すでに現時点のゲームクリアという証明はなされているのだ。たったの4時間弱のテストプレイで。

凄まじい反射神経とセンス、直感である。

「これなら利益を度外視してまで、ほぼ初対面だった私に賭けた理由にもなる。まあ、そこでジョーカーを引いてくる吸引力には少しだけ不可解に感じたけどねえ」

また体つきや無人島での事からわかる身体能力関連のみならず、頭脳も相当なもの。

頭で即座に問題を理解でき、実行し得るだけの要素を余すことなく持ち合わせている高円寺。これに身を置いていた環境も加えると、同時に動いていたらほぼ全ての分野で到底敵わないだろう。

鬼龍院先輩の時にも思い知らされたが、高円寺の気質と巡り合わせに僕は感謝していた。

ふと話が途切れたので外に目を向けると、話に集中していたのかいつの間にか19時を回り、窓から見える景色が橙から紫になっていた。そろそろ夜のようだ。

これで高円寺とのバイト契約は終わりかあ、天体観測に呼んだらまた来るかなあ、とか現実逃避気味に思っているとおもむろに高円寺が口を開いた。

「ああ、そうだ。事が起こる前に、一度夢月と話しておくことがある」「ん？ さっきのやゲーム関係じゃない話か？」

「その通り。レデイでもないテイルマンに関しては基本ノータッチが私の性質なのでねえ。これからの話しこそが私の本題だよ。心して聞きたまえ」

「あ、ああ。何のことが予想できないが、そういうなら真剣に聞こう」
「だったらなんでさっき頭脳と言葉で僕を圧倒したんだよとツッコミたいが、何らかの意味はあるのだろうか。無意味なことをほぼしない

高円寺は、変則的ではあっても非常にシンプルだ。僕の知らない事情で動いているのかもしれない。

「夢月……卒業後、高円寺コンツェルンに来る気はないかね？」

「は？ まさかのスカウト？」

ともかくそんな高円寺からの本題は勧誘だった。

僕とか、人材としては明らかに使い勝手悪いだろうに、この学校に来てから妙に誘われたりするのには幸運期……俗に言うモテ期みたいなものに入ったのだろうか？

「YESだよ。」

気質、発想、行動力、計画性、柔軟性。これらを私“も”高く評価している。間違いなく夢月はこれから台風の目になる、とね。

奇貨居くべしとどこかでも言われていることだし、君という刺激を上手く投入できれば高円寺コンツェルンには益々の隆盛が期待できるだろう」

なんか予想外に高く買われてない？ 誰でも……それなりの頭がある奴ならできることしか僕はしてないのだが……。

いやまあ、借り物とはいえ数十億単位を運用して色々ぶち抜いたのを高円寺は知ってるから、『高1としては』破格の存在に見えるのか？

ただ広い視点で経済を知る高円寺からすればなんてことないはずだが、自分が所属する学校に変革の素を撃ち込んだ僕には、また違った印象を持った可能性はある。

あつ、考え込む前に返事はきちんと返しておかないと。

「うくん。すまんが断る」

「ほう。理由は？」

「早苗や先輩に対して断ってるってのも理由の一つとしてあるけど、なにより僕には卒業したら最低数年くらい旅しようって約束があるんだ。それを果たすまでは、ガッツリどこかに所属するわけにはいかない。

結果的にでも、僕の美学に反することはしたくないからな」

「ふっ……ハーハッハ！ 断られる事は予想通りだったが、美学とはねえ！ やはり君は面白い」

将来的に大企業への内定に等しい話を受けないのはもったいないとは思ってるが、小さな神様との約束は破りたくない。ゆえに鬼龍院先輩の時と同様、なるべく丁寧の説明してお断りを入れるしかないだろう。機嫌良さげに笑ってはいても、親しき仲にも礼儀ありというかならな。

「約束破って就職するのも、不義理をして旅に出るのも、どっちにしろ美学も矜持も感じないだろ？ だから誘ってくれるのはありがたいが、卒業後の約束はなるべくしないようにしてるんだ。

……早苗のところだけは、在学中でも入信したら抜けさせてくれなさそうだから、面倒の一言で断ったけどな。言うまでもないだろうけど、早苗には言うなよ」

「ははは。言わないさ。レディを泣かせる嘘ならともかく、むしろやる気を出させる発破になっていくからねえ。こちらも面白いことになりそうで、話に乗っても良い気分になってきたよ」

「不吉なこと言うんじゃない。なんか僕が大変な事になりそうで不安になってくるだろ。」

——つて、待て。高円寺。最後、何の話だ？」

高円寺が話に乗る？

それは流石に聞き捨てならない。場合によっては、心の準備や切り札、諦めが必要になってくる。

まあ、こうして匂わせだけでもしてくれる時点でありがたくはあるので、そこは比較的中立だといえるのかもしれないが。

「ふっ。東風谷ガールとテイルマンによる余興というやつだねえ」

「よ、余興？　なんか僕には不穩に聞こえるんだが気のせいかな？」

インターバルの夜。

そうは思っても、僕の疑問に答えないまま端末を取り出して操作する高円寺に、なんとなく嫌な予感を感じてしまうところある喫茶店での一幕。

予感が当たっているか否かは、神のみぞ知ることだろう。

81、覚醒

「こんばんは左京君！」

「お、おう。こんばんは？」

高円寺と別れて自室に戻ると、完全復活を果たしたと思われる一之瀬が訪ねてきていた。

復ッ活ッ。一之瀬帆波復活ッッ！ とかは僕のキャラ的に言わないほうがいいだろう。ドン引きされる確信がある。

ただ夜だというのに彼女の方から陽キャパワーいっぱい元気よく挨拶してきたので、僕は軽く引きながら挨拶を返す。

しかし向こうから声をかけてきたのに、一之瀬は何故か通り道で固まって邪魔してきた。なので僕はしかたなく彼女の横をすり抜けて、自分の荷物があるベッドへと移動する。

まあ不可解な点はあるけれど、この程度の嫌がらせなど早苗や清隆に比べれば可愛いものだ。やろうと思えば、一之瀬を素直になれないツンデレ美少女に脳内変換して愛でることすら可能である。

なんにしろ、調子が戻ってなによりだ。

きつと担任か網倉あたり（白波や神崎は息抜きの面では信用がないので）が上手く一之瀬をリフレッシュさせたのだろう。朝に見た時より格段にスツキリした顔色になっていたので、懸念はとりあえず解消されたと見ていい。

内心安堵しながら他に目を向けると、同室者3人は揃っていて、何気に一之瀬以外にも網倉と白波も来ていた。

ん？ あっ！ 僕を含めて室内に男4人、女3人。そして元気（意味深）になった一之瀬。

これはもしや、中学の時のアレな場面の再現では？ なんか速やかに撤退するのが良策な気がしてきた。

知り合いの濡れ場から逃げたくなるのは人情だししかたない。うん。ちよつと誰と誰が組みなのか知りたいけど、知ったところで気まづくなるだけだ。スルー安定だろう。

微妙に自身の混乱を自覚しつつも、小さな僕がこの判断をしたくなる気持ちは理解できると思う。

そうと決まれば……でも、ちよつとシャワー浴びたい気分だし、また一晩部屋に戻れないとなると疲れと汗は流しておきたい。

僕は少し考えて、断りを入れてひとつ風呂浴びておくことにした。一応存在する消灯時間まではまだあるし、短時間なら待ってもらえるはず。

僅かな時間を我慢できずに誰かが盛る可能性も考えたが、速やかに部屋を出ることを意識の中心に置いておけば、友達のエロシーンを目撃しても対応が遅れない自信はある。

また念の為、乗船初日と無人島後にも持ち込んだコンドームの在庫を男子全員で確認してるし(数に変化はなかった)、特に入念にチェックしていた神崎がいれば、避妊に関しても問題ないだろう。

「悪いけど、ささっと風呂入ってくるわ。そしたらすぐ出てくから、安心して20分ほど待っててくれ」

「出てくって……夢月、お前またなんか変なこと考えてるだろ」

「変なこと？ 今の僕はさりげない気遣いしかしてないぞ」

「左京の気遣いって、アレな予感しかしないんだが」

「……」

「……女子が来てるのに、帰ってすぐシャワーに駆け込む左京君の気遣いっていったい」

「帆波ちゃんをスルーしたことといい、この男は本当に……」

「シャ、シャワー……」

四方が訝しげに、神崎と柴田がどこかハラハラと、網倉と白波がブツクサと、一之瀬はウロウロと……って、さっきから何やってんだコイツ？ ポンコツ聖人型奇行種は復活してもわけのわからない生感である。

ともあれ僕は手早く着替えを掴んで、どこか妙な雰囲気醸し出した室内から浴室に逃げ込んだ。

だが、湯を貯めている時間で服を脱ぎ、身体を洗おうとした時に気づいた。

タオルを忘れたことに。

なので、ちよつとお見苦しいモノを見せることにはなるが、取りに戻ることにした。当然のことながらチンコも戦闘態勢に入っていないし、一之瀬や網倉なら見慣れたモノだろう。白波はアレかもしれないけど、フオローが入れば特に問題でもないはずだ。

そう考えていたのだが――。

「え、もう出て」

「あ」

「い、いぎやあああああああつ!!!」

「何やってんだお前エ!!!」

「なんで全裸のまま出てくる!!!?」

浴室から出ると、振り返って僕を目にした網倉が真っ赤になってしゃがみ込み顔を覆った。同じく白波は力の限り騒ぎ出す。柴田と神崎は怒り出し、四方と一之瀬は固まって凝視してくる。

結果は、男子も女子も慌てふためいている組と固まってる組に分かれ、阿鼻叫喚の大混乱である。

「ああ、ごめんごめん。タオル忘れちゃってたから取りにな。一回服を脱いじやったから面倒くて」

一応、柴田などはル〇イのモノマネする余裕があるようだが、どうやら僕は軽く考えすぎていたみたいだ。

特に僂げな容姿とは裏腹なクツソ汚い悲鳴を上げる白波にはすまんことをした。どう見ても、そんなキャラじゃなかった……いや、元からイロモノ100%だったわ。内心とはいえ、謝って損した。

「じゃあ……ええつと、アデュー?」

幸い進行方向には無言で凝視してくる一之瀬しかいなかった。再度すり抜け、僕はなんとか自分の荷物からタオルを取り出すと、這々の体で浴室へと舞い戻った。

てか、あいつらってこれから彼氏彼女でヤルんじゃないのか? たかが背景に過ぎない僕の全裸程度で、なんでここまで大きな反応が起こる?

……もしかして、ただクラスの用事とかで来てただけで、僕の穿ち

過ぎだったりするのではなからうか。

そうだとしたら、仮面も付けない変態仮面がこの地に降り立った奇跡を無駄に顕現させてしまったこととなり、僕は奇跡を起こした現人神ということになる。

ふっ。早苗のお株を奪ってしまったか。悪いな。緑の巫女様を神の才能で上回ってしまったて。

浴室にいても聞こえる外の声だけでわかる混乱から目と耳を逸らし、身体を洗った僕はゆっくりと湯船に浸かって現実逃避に勤しんだ。

風呂から出ると女子達は全員いなくなっており、僕が部屋を出て放浪する必要もなくなっていた。

どうやら本当にヤル予定ではなかったようで助かった。安心できた僕は、またもや方針を切り替えて寝ることにする。

その為、だいぶ早めではあるが安眠できた。

あと些細なことだが、僕が本格的に寝る体制に入った時に神崎や柴田がなんか騒いでたが、白波の絶叫ほどではない。まあこれくらいの騒々しさなら、若さゆえに仕方ないことだろう。かなり眠気も来てるし、寝るまで我慢できればどうということはない。

翌朝、船上の試験最終日。

僕は朝食をとった後に、風に吹かれない気分になったので第2展望台に赴いている。

柴田は昨夜のことを怒っていたが、友達と約束があるらしくいなくなった。だが、何故か呆れた感じに見てきていた四方と神崎も付いてきた。

すると今日も今日とて、最近の日課のごとく一之瀬が説教しに来る。四方か神崎が居場所を知らせているのだと思われる。これもいずれば、どげんかせんといかん。

それと網倉と白波も離れたところに来ているが、ダークサイドに落

ちた雰囲気の白波を網倉が宥めているだけっぽいので、僕には関係ないだろう。

「左京君！ ついに私だけじゃなく他の子にまで、チ……いん……えつと……ブ、ブツを見せびらかして！ 部屋内だったとはいえ、女の子になんてモノを見せるの!? それに大事なア、アレなんだから、人前であんな風にブラブラ揺らしちゃダメだよ!!」

「ほう……色々曖昧だが、まずアレとは？ 僕がナニを揺らしていたと？」

「ななな何ってそれは」

「具体的に言ってもらわないとわからないなあ。知ってんだろ？ なあ一之瀬」

「そ、そういうのがダメなの！ セクハラで捕まりたくないでしょ!」
ふむ。一之瀬が説教してくるが、冷静ではないことが見て取れる。

証拠に赤面したままはつきり口に出せないのに言い募ってくるどころや、僕のゲス煽りをまともに受けているところなど、隙がいくつも見受けられる。今なら更にゲスく引つ掻き回せば、謎に包まれた彼氏の情報を落としてくれるかもしれない。

それにしても、彼氏がいるにしては相変わらず不思議なほどのウブさである。

無人島でズボン越しとはいえ、最大化してる時に見られたのを何度かスルーしてくれたのだから、男慣れはしてると思うのだが。

「いやでも、白波とー、あと網倉さんはどうか知らないけど、一之瀬は戦闘態勢に入ってるチンコだって見慣れてるだろ？ ましてや通常状態のチンコ程度、見比べる余裕すらありそ……」

「左京君は今とんでもないこと言ったよ!!」

ていうか、見慣れてるわけじゃないじゃない！ あんまり変なこと言う
と本当に怒るからね!」

「はあ？ でも一之瀬だったら彼氏の何人かはいらるだろ。それなら野郎の全裸くらいは、いくらでも見てるんじゃないか？」

「なん、かつ……ぜん……」

だからさりげなくその一件を思い出させようとしたのだが、こうし

た方面から攻められるのは一之瀬的にはとんでもないことだったのか結構な衝撃を与えたようだ。過呼吸みたいな事になっている。

僕がやったとはいえ、折角昨日休ませたんだから、しようもないことで体力を使わないでほしい。

「ちよつと待って下さい!!! 帆波ちゃんに彼氏!?!」

「あつ、こら千尋! あんたが絡むとまたややこしくなるから、ちよつと離れてなって!」

「ああ……左京が綺麗に火種をつけていく……」

「おい神崎! 巻き込まれる前に退避するぞ。こういう時は触らぬ神に祟りなしだ」

「あ、ああ。そうだな。ここならチン…騒いでも問題は少ないだろう」
良い機会なので一之瀬の彼氏についてさり気なく探りを入れてみたら、外野にも飛び火して一時的に騒がしくなった。

白波が復活し、網倉がそれを抑え、四方と神崎がそくさと去っていく。女子ばかりになってしまったし、僕も四方達について行つては駄目だろうか……駄目っぽい。何故か一之瀬にロックオンされている。

てか、白波が一之瀬の彼氏を知らなさそうって……。

相当上手く隠蔽しないとあの狂信者は誤魔化せないだろうに、どうやって掻い潜ってるんだよ。ここまでくると、存在自体が怪しくなってくるんだけども。

まあなんだかんだで、周囲も少し静かになってきたし、もう少し落ち着くまでゆっくりとテイクアウトしておいた食後のコーヒーでも楽しみながら……。

バシイッ!

「……っ、何を!?!」

「じゃないから! 関係ない顔して呑気に寛ごうとするとか……!」

というか、大人っぽい気遣いを感じた端から、ことごとく自分でぶち壊していくのは何なの!?! 最近の私が憧れかけてた左京君のかっこよさをどこにやったの!?!」

と思ってコーヒーに手を伸ばした時、一之瀬が持っていた鞆からハ

リセンを取り出して僕に叩きつけてきた。

コーヒーも溢れなかつたし、被害もなく痛くもなかつたが驚いた。ところで、かつこよさと言われても、僕の目に届く場所には落ちていないのだが、一之瀬の気の所為ではなからうか。言われたこともないし。

てか、それ以前に。

「そもそもなんでハリセンなんか……。まさかわざわざ学校から持ってきたのか？」

「そつんなわけないでしょ！ 新しく作ったの！」

「なあ一之瀬。お前、やっぱ頭おかしくなってるって。一体、何を想定してそんなもん作ったんだよ」

「…………。な、お…………くつ！」

「あ、彼氏とのプレイ用か？ だったら僕に使うなよ。一之瀬の彼氏が嫉妬して、僕に聞かしくなってきたらどうする。普通にその美少女フェイスとエロい乳だけで満足させてやれって。性癖歪むぞ？ 手遅れかもしれんが」

ここまで隠蔽に長けた奴なら実行には移さないだろうが、妙なヘイトを買う可能性はある。なので一応、ストップをかけてアドバイスしておいた。

すると、一之瀬は突然俯いて震え出す。そのまま、いつものようにいてそうではない乾いた笑い声を響かせる。

「…………にやははは」

それにしても今日の一之瀬、なんかいつにもまして変なんだが。しかも微妙に僕に近寄って来てないか？ だってこの距離でハリセンを振り上げられたら狙いは僕しかない——。

「ちえすとおおおおお!!」

「おわあっ！」

バシイという音が、それまで僕の座っていた椅子からした。勘が働いて、僕に向かって振り下ろされたハリセンを間髪回避したからだ。「な、なん。い、いちのひえ？」

最初に食らった時で痛みがないことはわかっていたが、普段温厚で

優しさの塊な一之瀬が薩摩武士みたくなつたのに面食らつて、驚天動地の神回避である。あまりのことに驚きすぎて呂律が回らなかつた。しかしハリセンなら鬱陶しくはあるが、いくら叩かれてもダメージはない。

だから即座に精神を立て直した次撃日以降は、適当に受け入れることができた。バシバシ叩かれながら、僕は落ち着いて椅子に座り直す。高1女子の唐突な八つ当たり？を数発受けても怒らない度量くらいは僕にもあるのだ。

「私に、私に彼氏なんているわけないじゃない……………この……………このっ！」

——悪かつたわね!! 男の子に恐れられてる面倒くさい女で！ 恋人どころか男子の友達にだって一歩引かれるような女で！ そのせいか好きな人すらできなかったことなくてっ！」

「あ、帆波ちゃん気にしてたんだ」

「ね。ちよつと意外かも」

一之瀬、心からの主張。

ハリセンの連打を受けながらではあつたが、それは確かに僕まで届いた。喪女予備軍の方だったかと。

白波達が零すことから察するに、気にしてる部分を突いちゃつたみたいだし、僕は数発叩かれたことを許し、できるフオローと助言をしておくことにした。いつまでもこれが続くのはごめんだし、ここは切り替えて優しく励ますのが大人の男というものだろう。

僕は連打されるハリセンを見切つて掴み、一之瀬へ心からのアドバイスを送つた。

「い、いや。そんなことまで言つてない。」

それに、その、ドン引いてたのは否定しないけど大丈夫。一之瀬くらしいどエロイ女子なら普通にモテモテだから。ほ、ほら、さつきも言つたけど、子供ながらその乳はもはや兵器と言えるだろう？ それ使えば大抵の男は落とせるって」

「……………落と……………させ……………せんよ」

「うっわ。帆波によく……………ここまで子供扱いしつつセクハラかませ……………」

「うわああああんっ!! どエロいってまた言われた! 全然褒め言葉じゃないし、引いてるのも否定してくれなかった! それどころかセクハラ重ねられた!」

そう思い、頑張つて一之瀬のアピールポイントを推してみたが、口調が幼さを感じさせるほど退行するとは思わなかった。やつちまつたかもしれない。

白波と網倉はあまりこういう一之瀬を見たことなかったのか、繰り広げられる彼女の痴態に呆気にとられたまま何事か呟きあっているのは幸いか。一之瀬シンパ筆頭と親友にまで参戦されなくて助かった。

てか、聞き流しちやつてたけど、一之瀬つてマジで彼氏いないどころかできたことないの?

じゃあ、誰から調教されてるんだ? エア彼氏? それ変態レベルが高すぎて、普通の同年代では御せないんじゃない?

ああ。つまり早熟にもこの歳で処女を拗らせた結果、現実の彼氏を作れるスペックを変な方向に無駄にフル活用。自分の脳内に高性能なエア彼氏を創り上げ、そのエア彼氏からセルフ調教を受けちやつたのか。

ところどころ穴があつたのは、一之瀬自身の知識や経験にないからだろう。

そりゃ、これでは現実の男と付き合うなんて難しくなるわけだ。

一之瀬の優秀な頭脳が創造した『彼氏』と比べれば、大抵の野郎なんぞハズレ同然。2次元オタクが現実に興味なくなるのと同じアレである。いや、全方位に聖人だった一之瀬がそうだとはいえない。推測だけでも。

でも、これで僕としては謎が少し解けた。

にしても、なんか喚いてる一之瀬は――。

「――面倒くさいな。」

言われてみると確かに、一之瀬つてモテない要素もふんだんに盛り込まれてるかも。それでも容姿的に作ろうと思えば簡単そうだが、拗らせてる部分が深く付き合うほどどこかでネックになってきそう」

「うぐうつ！ め、面倒くさい……拗らせてる……うう」

「なにより美少女なのは疑いようもないけど、どうしようもないポンコツ臭も漂ってるからなあ」

「……」

改めて考えると、これでなんで恋人がいるって勘違いしたのか。僕も外側のスペックに幻惑されて、イロモノである存在の本質に目を向けてなかった可能性が浮上してきた。

言われて一之瀬の認識を更新してみたら、これだけ面倒くさいと恋人側にも相当な要求がありそうだなと深く納得できたのだ。そのせいで、つい言わなくても良いことが口からこぼれ落ちてしまった。

ただ、ここで一之瀬が覚悟を決めたような目になったのは理解できない。

昨日休ませて体力・精神力共にMAX近くで、今も曲がりなりにも僕ができる限り励まし助言したので、そんな流れではなかったはずなのだ。

しかし一之瀬はそこそこ沈黙の時間を挟んでどうにか微笑む顔を作ると、彼女らしからぬ目をしたまま口を開いた。

「にやはあ。」

「……………覚悟してね左京君。好き勝手した上で、散々乙女にデリカシーのないことをやったり言いまくってくれたお返しをしてあげる」

「なんだいきなり。僕としては、ご遠慮願いたいが」

「はい。却下。もうまとめて返すことを決めちゃったからね！」

でも僕は一之瀬のこの雰囲気じゃあるが。

言うなればこれは、何かが許容量を超えたことによるヤケクソ的態度である。なんでわかるかという、僕自身で経験済みだからだ。

「……こんな自爆テロに巻き込まれてはたまらない。回避&断固抗議しかあるまい。」

「返すも何も自分から自爆したんだろ!？」

「うるさいよ。こうなったら死なばもろともだね」

「僕を巻き込むんじゃない！ リーダーだからって勝手がすぎるぞ

！」

「……あはは。にやはははは。にやくはつはつは！」

左京君がそれ言うんだ。思わず笑っちゃったよ!!」

だが、本格的に議論誘導を開始しようとする矢先、一之瀬が壊れた。なんかいきなり笑い出した。それはもう、高飛車な感じにイロモノ溶液を混ぜ、金髪縦ロールが似合いそうな勢いで笑い出した。あざと女子を変に取り入れた猫語混じりなのが、残念さを助長させている。心当たりはないが、一之瀬がこんな急変するとか、もしかして僕はどこかで読み違えていたのか？

「巻き込むも何も、何度も自爆させられた私に怖いものはないよ。だからもう遠慮もしない。でも左京君には私から返すものがあるんだよねえ。」

だから……ねえ、やつと捕まえた左京君？ 哀れな子羊の左京君？

神様にお祈り済ませた？ ここまで私の心をかき乱した贖罪の覚悟はいい？ 私の準備はできてるよ？ にやはははつー！」

「どこの吸血鬼だ。そういうのは龍園だけで間に合ってたんだよ」

「まだそんなこと言う余裕があるんだ？ じゃあそんな左京君へのご褒美に、要望を一つだけ叶えてあげる。勿論、逃げる関係はなしでね」僕だけでなく白波達の前でもあるという事を忘れ、ぶっ壊れたテンションのまま黒歴史を量産していく一之瀬。

問題は僕に矛先が向いている点だ。逃げ道がありそうで存在しない。褒美とか要望とか言ってるけど、これの真意が僕の出方を伺う一手であることと、網倉と白波に警戒を促す言葉になる計算で放たれたことだと割れている。

こんなアレになってるのに、無駄に周到である。

僕が活路を開くには、多少ギリギリの線を攻める必要があるだろう。

「じゃあ、えつと……できれば終わった後、一之瀬がよくこれみよがしにバインバイン揺らしてるエツツッ！ なおっぱいで僕の顔を挟んで、パフパフ付きで慰めて欲しいかなって」

「……にやはは。左京君がそのふぎけた口を聞けなくなるまで、しっ

かりお説教してあげるから」

しかし、少しは慌てふためいて話が逸れないかなと振った無理めなセクハラも。

一之瀬とは思えない凶悪に見える笑顔で軽く流され蹴散らされた。何をやっても通用しないと、僕の勘も警鐘を鳴らしている。

これは壊れたと言うより——覚醒。

ふと脳裏をよぎった物語の主人公とかに発生しそうなイベントが。何故か、今この時。

一之瀬に訪れてしまったような気がした。

「——いつものように楽しんでね」

そういう経緯で、僕は逃げられないようガシイと肩を掴まれたまま。

漫画だったら目がグルグルしてそんな笑顔の美少女に至近距離から囁かれ。

どうしてこうなった？ と、これからの時間を思いながら一人で途方に暮れるのだった。

82、損得

謎に覚醒した一之瀬の膝詰め説教は、説教ソムリエの僕をしてなかなかキツイものであった。

何度か逃げようとしたのだが、物理的に抑えられている上に、網倉と白波も去らずに残ったので好機を生み出せなかったのだ。それに普段とどこか違うとはいえ、一之瀬相手では強硬手段は取れない。正直、お手上げだった。

でも読み切れていない部分はあれど、内容はなんであれ一之瀬に溜まつてるモノを吐き出させさせた事は彼女の精神にプラスの効果があるだろう。執拗にセクハラしてタガを外し、ついでに僕が避けられる誘導はまずまずの成功といったところ。

これで前日に休ませたことと併せて、クラスの要が精神・肉体両面でベストに近い状態を覚えることができたはずだ。ガス抜きと発散はリーダーの必須技能なので、習得させる事は一之瀬の能力を十全に発揮できる底上げになるだろう。

これだけやれば次から『それ』に僕は必要ないはずだし、これにて船上試験での予備武器強化はひとまず完了である。

しかし普段温厚で優しい人が怒ると面倒くさいのはわかっていたが、一之瀬があそこまで面倒くさくなるのは予想外だった。

ああなつた理由だって、励ましや助言……ん？ いや冷静に考えると、いかに一之瀬だろうと女子ならキレても不思議じゃなかったか？ 今思えば必要以上に怒涛のセクハラ責めだったし、これから嫌われたり避けられても納得できる気がする。一之瀬のお人好しすぎる性格からして、僕を避けるまでには至らないかもしれないが……。

でも個人的には、タオル忘れの一件でチンコを凝視してたムツツリだとか言わなかっただけ気を遣っていた方だと思う。これで怒つたという事は、僕が手加減の度合いを間違えたのか？

うーん。はつきり何があの聖人を怒らせたのかわからないので、再発防止は難しいかもしれない。

ま、まあ、クラスリーダーが新たな耐性を得たと考えれば、後で彼女が部屋を転がりまわる黒歴史も無駄にはならないだろう。

本当に嫌われても、無人島での数々が脳裏をよぎるおかげで一之瀬への苦手意識が向上していたから、むしろ好都合ともいえる。不都合はあるけども。

ようやく、まだなにか言いたげな一之瀬が話を切り上げた時、5回目デイスカッションの時間まで1時間を切っていた。

ただ僕は今、精神的に疲弊している。理由は述べるまでもないだろう。無駄に振り切った一之瀬が原因であることは明白なのだから。

そして昨日、一之瀬を無理矢理休ませといて、疲れている僕が休まないのは筋が通らないので、一計を案じることにする。おあつらえ向きのシチュエーションがこれからやってくるのだ。利用しない手はない。

そう。当初より考えていた試験時間を利用した昼寝である。実現させるにはもう時間的余裕がないので、ここからは無駄な行動はできない。

僕は最短・最小限で達成可能な者に絞って牛グループのメンバーにメールを送った。勿論、ほとんどの連絡先を知らないのですが、ここでは友達を頼る。

渡辺には四方、姫野には東風谷。

Aクラスは、戸塚と戸塚を通して橋本。

Cクラスは、椎名。

Dクラスは、とある用件ついでに櫛田……とあまり人と繋がっていない愛里。

彼ら彼女らに伝達をお願いし、牛グループ各員へまくらを持参するように頼んだ。持つべきものは、繋がりをたくさん持っている友達である。

そうして策と根回しをもって臨んだデイスカッションでは、呆れ？が部屋中に蔓延する奇妙な昼寝時間になった。でも呆れっぽいものはあろうと、全員まくらやクッション、タオルケットなどを持参して

いるあたり、昼寝に反対する者はいない様子。素直な奴ばかりでなによりである。

結果、前の人生でほぼ日常だった死屍累々とでもいうべきデスマーチ後に酷似した状況が牛グループの部屋に出来上がったが問題ない。せいぜい部屋内にある監視カメラを見ている者達が困惑するだけだ。

他に、須藤による堀北さんの状態報告と、戸塚含む何人が兎グループの指名について聞いてきたりもあったが、どちらも僕にとってさして重要ではないので「お大事に」と「たまたま目にした諍いを止める為」と言うことで事なきを得た。

でも正直、もつと何かしら言われると思っていたので少し意外だ。案外、一之瀬によるBクラスの印象のおこぼれが、僕にも影響して信用度が上がっていたとかだろうか。

しかし後に、こうした事情で試験中にグループ全員で雑魚寝したという珍事として噂されることになるのは、社会人経験のある僕の目をもってしても予測できなかった。

……だつてやることないんだし、寝てもいいと思うじゃん？ まさか他のグループが全て真面目？にやっているととは思わないだろう。

昼寝した僕はデイスカッションの時間を余裕でぶつちぎり、3時間ほど眠りについていたらようだ。

起きたら当然ほとんどの面子は解散した後で、部屋内には愛里だけが残ってくれていた。

それにしても、起き抜けのスッキリした状態で見ると愛里はなんとなく良くして愛妻感まである。いや、妻とかできたことないけども。

「おはよう愛里。結婚して」

「あ、おはよ——うえええええっ!!?」

それがなんか嬉しくて、ついポーズしてしまった。

結果、慌てふためく愛里を見て、あれ？ 驚いてはいるけど意外と悪くない反応。僕が起きるまで待つてくれたみたいだし、これって結婚を撤回して付き合ってたって言えばワンチャン付き合えるんじゃない？ みたいな邪念が湧き出したが、そんな騙すようなこととして仮に

恋人になれても長続きしないだろう。

それにエ○ゲじやあるまいし、一之瀬と違って嫌われるのが大ダメージになる愛里にセクハラはご法度だ。弁明の余地なく即フラれなかっただけで御の字としておこう。

僕は負けかけていた良心と、付き合えたとしてもしばらくあまり暇がなくイチャつけないことを思い出して欲望を抑え、断腸の思いで誤魔化すことにした。

「すまん。寝ぼけてた」

「はわわ…あわわ……」

ついでに、どこぞの幼女軍師のようになってる愛里の口に、持っていた飴玉を放り込み沈静化を図る。愛里から発生するリラックス効果を活用し、僕と愛里双方の頭を冷やそうとしたのだ。

こういうこともあるうかと、僕は一口サイズの菓子を常に隠し持っているのが生きた。ちなみに、以前のラムネもこの一環である。

飴玉が功を奏したのか愛里がちよつと冷静になり、口をモゴモゴさせ出した。

喉に詰まったりしたら危ないので細心の注意を払い、万が一にも備えていたが、おそらく成功といえるだろう。

「…びっくり(モゴモゴ)した」

「まさかそんなに慌てるとは思わなかった。悪い。大丈夫か？」

「う、うん(モゴモゴ)」

それにしても、口をモゴモゴさせる愛里もリスみたいで面白い。いつまでも観察していたい気分だ。

「ところで今の愛里の写真撮っていい？」

「え(モゴモゴ)? いふいにやりなんで?」

「飴玉モゴモゴさせてるのを、リスとかとコラしたら面白そうってだけだが」

「確かにそうかも…?」

あつ(ガリツ)! だ、駄目だよ。考えたらなんか恥ずかしいし」

「ああ、それもそうか。残念だけどしかたないな」

その着想を利用しつつ、誤魔化しへの話運びもまあ成功である。愛

里からもわざと乗ってくれなくさいけど。

ただ勢いで飴玉を噛み砕いてしまったからには、どのみちコラ写真はもはや手遅れだろう。バリボリいつてるし。

……こういう事しようとするから、朝から一之瀬に怒られたんだろうな僕。

でも自分であまりいい男ではない自覚はあるが、何気にこういう自分が好きだったりもする。たとえモテなくてもだ。

それからは最後のデイスカッションの時間までここに居座って、愛里とのんびり駄弁っていた。先生か誰かが来て退去を命じられたら移動するつもりでいたのに、何故か居座れてしまったのだ。ラツキー。

愛里とも、旅行期間に入ってからには久方ぶりのゆったりした時間だったからか話も弾む。

特に僕が愛里に貸した本の作者「かみないつし」が椎名の父親という事実を聞かされた時は、それがきっかけで椎名と友達になったと聞かされたのと同じくらいテンションを最高潮に持っていた。それ自体でどうこうする気はないが、よくできた群像劇を描ける作家先生は僕の永遠の憧れである。

また途中、起きてから呼んでおいた櫛田と早苗、四方が来てくれて『保険』も託せたので言うことはない。

櫛田は簡単に説明するとすぐに緊急性に気づいて5分ほどで退室していったが、これをもって僕が試験で打てる手は最後を残し、すべて打ち尽くした。これで順当に行けば8割、予定外があっても5割は固いだろう。

僕が櫛田に持ちかけた話はごく単純だ。

櫛田に四方が導き出した優待者の法則を教える代わりに、愛里と高円寺、ついでに清隆が困った時にちよつとでいいから融通してやってくれ、と条件はそれだけである。

拘束もないゆるい条件を付けた上で、順当にCPを得れば櫛田の手柄となり、万が一四方の提唱した法則が間違っていたとしても僕に騙されたと自分のクラスに誘導をかけられる。

それを思いつき実行できるくらいの能力が櫛田にはある。だから乗ってくれると思っていた。

ただ愛里に勘づかれると負い目を持たせそうだったので、早苗に気を逸してもらっている間にコトを進めさせてもらった。尤も、別にバレても構わない。あくまで念の為の措置だ。

法則を発見した四方と早苗に賛同を得ている以上、愛里にバレようとそんなの忘れるくらい遊んでしまえばいいからだ。人と状況が揃っていると、こういう時に選択に幅が出るので助かる。

——借りは返したぞ櫛田。あとはお前次第だ。

彼女の去り際、内心で櫛田にそう投げて肩の荷を下ろした僕は、残った四方と早苗、さっきの話が飲み込めていなそうな愛里とともに談笑を再開するのだった。

そしてまた数時間が経ち、僕がこの船でする数少ない残りの仕事の時間、6回目のグループディスカッションがやってきた。当然、四方と早苗はすでに退室している。

前回までと違うのは僕と愛里が最初から居た事くらいだが、続々と入室してくるグループメンバーに「こんばんわ」と挨拶していくのはなかなか新鮮だ。なんとというか新人の下っ端になったような心持ちである。

そうして全員が揃うのを待つて、前置きから話を切り出した。

「えーと、今回でディスカッションは最後なわけだけど、約束通り優待者の通知メールをみんなに見せる前にまず言わせてくれ」

僕はなるべく誠意が伝わるよう立ち上がり、頭を下げながらグループメンバーに向かってお礼を言った。

「なんだかんだで、最後まで付き合ってくれてありがとう。」

正直、話し出す時に「あ」とか、「えーと」とか高頻度で付けちゃう僕が仕切り役にされた時は、正気かコイツら？　なんて思ったけど、

全6回のディスカッションの時間は結構楽しかったよ」

「俺、最初は退屈かもって思ってたけど、意外と楽しかったぜー」

「ああ。ゲームとか白熱したよな」

「堀北が言うには、どこも張り詰めてたみたいだし左京はよくやってたんじゃねえか？」

……サンキュな」

「……わたしも」

「いやあ。まあ僕だし？ 当然ていうか？」

「はいはい。調子乗らない」

「……はい。みなさん、ありがとうございました」

すると、これまでのディスカッションでも発言の多かった池や渡辺、須藤などが嬉しいことを言ってくれた。控えめだが愛里も。

僕はそれに甘えて最後で抜けがないように、気を引き締める事で返礼とする。けして驕った瞬間、姫野に窘められたから敬語になったわけではない。

「ははっ。珍しく真面目か？」

……俺も悪くなかったぞ。前なんか気を遣わせて仲裁までさせたしな」

「戸塚…友達だし別にええんやで。」

てか、真面目っぽいのはしかたないだろ。締める時に締めないとメリハリがなくなるし、裏切る場合はともかく、ここまで辿り着いてディスカッション後の回答タイム？でなんか間違えてPP貰えませんでした、とか最後の最後で笑えないことにはしたくない」

「確かに。貰える物は貰っておきたいよね」

だから冗談めかして戸塚へも軽く返しつつ切り替え、あえて裏切りの話を出したのに、何故か和気あいあいとした雰囲気になった。

この雰囲気壊すのは忍びないが、最終確認と注意事項への言及は必須だろうと早めに話を戻す。なんか今度は松下さんが目を細めて怖いので。

というわけで、本題である。

「で、あー。ちよつと脱線したけど、これから通知メールを表示して僕

の端末を右回りでまわすから、名前間違いが起こらないように改めてしっかり確認してくれ。これは結果3にするつもりの人が居たとしてもだ。

結果2はまだしも、結果4だけはなんとしてでも避けたいからな」「なんでだよ?」

「結果4は、Bクラスが得する代わりに、間違えたクラスが損するからだ。」

僕を牛グループの仕切り役にした以上、他クラスに『損』を押し付けるような事は矜持に反する。損して得取れつてのが僕のやり方だし、これだけは譲れない。それに交渉事はWINWINにはできなくても、自分だけじゃなく相手の損得も考えといた方が後々に生かせるつてのが僕の特論だ。

なので、頼むからマジで気をつけてくれよ?」

本当に結果4になるのだけは避けたい。

どんな理由であれ、特にDクラスから結果的にCPを奪うような事になろうものなら、次に何かする場合はしこりになつたりしそう。それなら僕の評判とうちが少しポイントを落とされた方がまだマシだ。金の恨みは面倒臭いのである。

「改めて明言しとく。」

僕、左京夢月がこの牛グループの優待者だ。

これを確認した上で、自分の意思にしろ、誰かからの指示や要請にしろ、優待者指名しても結果3なら僕は構わない。自クラスの為にそうするのがいいと思つたら、遠慮せずにやってくれ」

「「「.....」」」」

AやCにしても同じだ。

だから念入りに、しようもない事で禍根を残す可能性は念入りに潰しておく。

またそれをした結果、僕以外がどう思うかは何度か言ったし、関知するところではない。やりたければやればいいのだ。

おっと、でもミスが減らす確認はしておかなければ。

「それと一応、順当に行つた場合の最終確認だ。」

結果1にするには、試験終了時刻と…ちよつと聞こえは悪いが裏切り者に許された時間が過ぎた上で、対象者全員が決められた回答時間に正解しなければならぬ。今回で言うと、僕のフルネームをこの場にいる全員がその時間に答えることになる」

「それって、回答専用の時間があるってことか？」

「僕達Bクラスは茶柱先生が最初に説明していたが、20:30〜21:00の間だけが結果1の回答を受け付けるらしい。その時間以外で回答を送信すると、結果3になってしまう？ので気をつけてくれ」
「ここらへんが、学校の意地が悪い部分である。」

僕は茶柱先生の説明しか聞いてないが、これまでの例からすると他クラスへの説明もテンプレに違いない。

つまり、ある意味で優待者の法則やそれぞれの結果よりも重要な回答時間についてはわかりにくく説明してきた、ということだ。おそらく勘違いや思い違いをしてしまった者もいるだろう。

最後のデイスカッションまで辿り着いて、自分の意思やリーダーとかからの要請ならまだしも、学校に誘われた凡ミスで全員の報酬をふいにされてはたまらない。

なので、そこはしっかり言及しておく。

「個人的には、他の結果と比べて破格の報酬があるし、学校はよほど結果1にしたくないと感じる。そのせいか微妙にわかりにくくなって箇所もあって、結果3の優待者指名メールとは違い落とし穴への誘導がある」

「……試験終了後は直ちに解散し、一定時間他のクラスの生徒同士で話し合いを禁ずる、ですね」

「そう。椎名の言う通り、試験のいくつかの禁止事項にはこうした他の結果への誘導が隠されていて、結果1の難易度を上げているんだ。」

例えば、椎名が言った禁止事項は他クラス同士で助け合いや団結、または相互監視をさせず、誰かを裏切らせて結果3か4になんとか誘導したい意図しか考えられない。誰でも魔が差したり、疑心暗鬼や欲に駆られたり、理解度が低かったりでやってしまう可能性はあるから、そういう奴を狙い撃ちするって意味だな」

「……そ、その…なんで、こんな…?」

「十中八九、ポイント…金だろう。グループ内全員で合わせて700万くらいの報酬と、誰かが50万の報酬。」

「そりゃ、経理をはじめ運営する側は、結果1にだけはしたくないさ。生徒同士の騙し合いを奨励し、CPという副賞を付けてでもな」

「……」

椎名と、珍しく愛里がこんな場で普通に発言して合の手を打ってくれた。1人で話し続けるのは大変なのでめっちゃ助かる。

「でも学校がそう言ってるからって、僕達も乗ることはないだろう?」

頑張ったご褒美に金か成績どっちがいい? って聞かれる前に、成績だろ! 成績に決まってる!! さあみんなで成績を選ぼう!!! みたいに押し付けられるように誘導されると納得できないというかなんだかなあ。と感じられるんだが、君らはどうだ?

人は大事にする物が違うから一概には言えないけど、冷静ならみんなと協力して金を選ぶ奴が多そうな気が僕はしてるんだけども」

CPを最優先で狙いに行く奴は一定数いるだろうが、それでも大多数は『信じていない』と僕は信じている。

だから結果がどうなるうとも、この場でもリーダー達が集まった時にも言葉を尽くしたのだ。

言葉こそが人である証明。

この真理だけは獣同然の相手じゃない限り、どこでも変わらない。

またこっちは関係薄いけど、友達以外の僕と話したそれなりの数がAクラスを目指す意思を持っていた。これは直で聞いてはないけど、話してる中でわかるものから察せられる。

例外として、一応友達内では愛里と櫛田にもその意思はあるっぽいけど、優先順位はそれほど高くなさそうだった。Aクラス昇格・維持・移動よりも優先される目的があるらしい者は除外である。

これらを踏まえた上であえて言おう。

学校が目指させる『以外』の道筋を歩んでいたのは、僕の知る限りでは早苗と龍園だけだ。

そもそもそういう方向へ歩んでいない僕、四方、清隆、高円寺など

といった者から見ると、彼女らは面白い。少なくとも僕は。

何らかの理由で足を止めていて、再び歩き出した早苗と愛里。

自分の目的の為には、他から歩まされる暇はないと言わんばかりな龍園と櫛田。

愛里と櫛田はほぼ突つかかってこないからともかく、早苗と龍園は少し手を返すだけでイキイキとしてくるのがわかるから、それが面白くてつい対抗策を打ってしまうのだ。

「結論としては、学校の誘導に負けないよう結果1に導くには意思が必要ってことだな。」

——デイスカッション終了後、『何があっても』20:30までは心を落ち着けて、時間が来てからは間違えないようにメールを送ることだけを考える意思が」

こんな風に。

早苗はいまいち行動予測が難しいが、龍園にならまだ打つ手を考えられる。

この釘刺しと合わせて櫛田に打った手なら龍園の一人勝ちだけは防げるだろう。雰囲気強面なアイツは怖いけど、一人勝ちしてドヤ顔されるのを想像するとなんかムカつくからしかたない。

なので、Bクラスが僅かに下がるだけの現状維持をしつつ、ついでに愛里達Dクラスの収入アップを睨む対抗策を打っておいたのだ。真つ当に試験に取り組んでいる一之瀬達や葛城・戸塚達A・Bクラスの者には言えないが、あいつの思考予測に加えて櫛田と組んでいる以上、どうやってもそれなりの数の優待者が龍園に指名される流れはおそらくもう止められない。

それなら抑えのついでに、櫛田へのパイプ強化にもなる一手は未来の糧にできるぶんお得感があるだろう。

「……………ふむ。選択肢と情報を与えた上でどちらが得か選ばせる。更に自分の意見をそつと乗せることで望む方向へ導く……………ですか。」

やはり左京君は大したものですね?」

「ははは。椎名こそ」

あ、でも椎名にはおおよそのことがバレテラ。

これこそ議論誘導とか人心掌握術とかじゃないですか、なんて聞こえが悪い言い方されなかつただけ温情といえる。

他はみんな何言ってるんだって感じだけど、椎名から零れ落ちた短い言葉で僕は軽く見抜かれた事を悟った。

もし龍園に全てを伝えられたら、達成率5割を下回るだろう。そしてデイスカッション直後に速攻がなければ、“また”椎名に助けられることになる。

どちらにしても、無人島からこつち椎名への借りがどんどん膨れ上がっていくのはどうにかしたいと思う僕なのだった。

あれ以上なにか言う気はなかつたのか考え込むように椎名が黙つてからは、段取りや禁止事項の確認などが話し合われた。

また須藤や池、渡辺からも不安な点についていくつか聞かれ、それに僕や戸塚、わかる何人かが答える形で牛グループはみんな自然と結果1を全員が目指す決定がされる事となる。

そうして話し合いがなんとか纏まり、ついに時間が来てアナウンスが流れると、打ち合わせどおりに最後の挨拶をみんなで交わし、クラスごとにまとまって解散した。

仕切り役だった僕は、姫野や渡辺とともに一番最後に退室である。先に退室していく不思議そうだった愛里と、ほぼ策を見透かされた椎名からの視線が痛かった事は言うまでもない。

そして、運命（大げさ）の結果発表時刻22:00——になる前の19時30分頃から。

鼠、虎、蛇、鳥、犬、猪の都合6つのグループが終了したメールを立て続けに受信する事になる。

しかし最後まで牛グループの通知メールが来ることはなかつた。ちなみに自室やクラスの集合場所だと、ひと騒動起こる先読みをしていた僕が一人。巻き込まれないように、人気の少ないジャズ喫茶へ移動してPC作業していた事もまた言うまでもないだろう。

83、宴

8月13日の22時過ぎ。

時折騒がしく店前を通り過ぎていく生徒達をスルーしながら、僕は常連になりつつあったジャズ喫茶で休憩中の船員達の間で溶け込んでいる。

最後のデイスカッションで話した際に、同じ牛グループだった吉田健太君がPC技能を持っている事がわかったので、即座に交渉・採用した。彼にいくらかの作業を投げる事ができた為、余裕ができたのだ。

……もつと早く知りたかった。

ともかくそうしてまったりしていたら、通知メールが届いていた。確認した試験結果はそれなりに予想通り。

結果1は牛・竜・羊が3つ。

結果2は0。

結果3は鼠、虎、兎、蛇、馬、猿、鳥、猪が8つ。

結果4は犬が1つ。

Aクラス	—200CP	600万PP
Bクラス	変動なし	600万PP
Cクラス	+100CP	700万PP
Dクラス	+100CP	800万PP

この結果とポイント増減からは龍園や櫛田の頑張り、そして誰かの奮闘が垣間見える。特に牛グループ以外で結果1を達成した竜と羊は、涙ぐましいとも言える根回しと努力を重ねて得た成果だろう。

そして予想はできていただろうに、それでも裏切りや出し抜こうとしてこなかった葛城と戸塚は、やはりこの騙し合い試験に向いてなさすぎた。一之瀬もそうだったが、信頼を得る選択は結果的に儲けにくい。

生徒会の一件から、葛城も一之瀬も真面目過ぎて要領が悪い場合があることにはなんとなく気づいていた。しかも参謀的ポジションの

戸塚や神崎も本質的には真面目側。

真面目なのは美点でもあるんだけど、いつでも良い結果になるわけじゃないのだ。なんでも利用するずる賢さや我を通す凶々しさが本人か参謀にあれば……早苗 or 龍園もどきが増えるだけだな。うちの学年の良心二人か周囲がそうなたら気が休まらない。想像するのも却下したい。

それにこつち方面の高い適正持ちはBクラスだとそれこそ早苗くらいしかないし、割り切つてダメージを減らす、もしくは肉を断たせて骨を断つやり方がまだ合っているだろう。

ただ今回の試験結果は相性が悪く奮わなかったが、先々まで考えると多数にとつて良い選択になりそうだと僕は思う。

問題はクラスメイトの理解を得られるかが道を分けそうな点だ。同じクラスの一之瀬はまだしも、葛城は対抗派閥がどうとからしいので近いうちに手腕が試される機会が訪れるかもしれない。

ちなみに僕が所属した牛グループは、交渉や根回し以前の問題というかなんというか……最初から雰囲気は緩かったから、戸塚達Aクラス同士の諍いを仲裁した時点でこうなる下地ができてしまっていた。まあ最初と最後含めて僕が仕切つた影響も少しはあるかもだが、つくづく幸運なグループに入れられたものだ。おかげで100万貰える。

どちらでも良かったから特に心配していたわけでもないが、終わってみると好都合8割な希望的展開になった。

ポイントの支払いは9月らしいが、これにて船上特別試験は無事終了である。

頭から終わった試験のことを消し去り、かなりガラガラの喫茶店の光景に僕は目と耳を移す。

聞くとともになしに心地良い音楽を聞いているといっそうジャズや知らない音楽に浸れて、想像上の世界を旅しているようである。まるで

早苗に貸した本『船上のピアニスト』の主人公のごとく……。

なにせ国立の学校所有船なのに、実にバラエティに富んだ客層。すぐ数えられるくらい少数とはいえ、ざっと見回すだけで多様な人種・種族が入り乱れていて見てるだけで楽しい。それに今は美しくも悲しげな曲になっているが、さつきまではその少ない客がノリノリになるくらいに盛り上がっていた。

歌手なのか自由に歌えるのかたまに音楽に合わせた美声を響かせていたラテンっぽいにーちゃん。どこかの担任のように、浴びるように酒を飲んでいる金髪のねーちゃん。タバコの煙で周囲を灰色にくすませる白人のピアニスト。この時間に来てハンバーガー食いだしたアルベルト。野武士みたいな雰囲気夜を眺めるどこかの生徒。宙に浮かび胡座をかく、なんかドーナツみたいな縄？を背中にくっつけた神様。その近くに浮いているどこか懐かしい気がする白っぽい神様？ ピシツと背筋を伸ばしハードボイルド感を漂わせるマスター。席を替わってピアノの前に座り、吟遊詩人のごとき弾き語りをしている早苗……って、早苗っ!!?

え？ なんているの!？ 思わず変な声が出そうになっちまっただろうが!

と、一瞬驚いたが、確か指名の件で遅まきながらクラスの要注人物認定されたとかで、一之瀬や網倉・白波と同室にされたと言っていたのを思い出した。それならここに来ている事にも納得できる。そんな事態になったら、僕も放浪の旅に出るかもしれないからな。気持ちにはわかる。

それにしても、早苗の演奏は相当なものだ。良い腕と声をしている。性格にそぐわない曲な気もするが、場の邪魔にならないこれこそまさに生きた音楽といったアドリブは歳に似合わぬ熟練を思わせる。微妙に孤独を感じさせる曲調にこそ違和感はあるが、一流との境界を分ける音楽に乗せられる情動も文句なしだ。

つくづく何をやっても上手くこなす奴である。人間関係と文系知識以外は。

ただ何度も言うが、あまり『普段』の早苗と合っていない感じの曲

調なのは、やはり少し気になった。

そういうリクエストなのか、店との契約とかで演奏させてもらっている対価なのか、自分の持ち味を生かせるのがこれだと思っただのか、はたまた別の理由か。いや、人物を考えなければ耳に優しい演奏なのだけでも。

少し考えて、僕は見なかったことにした。アルベルトと神様とは目があったので、手を振っておいたが。

「夢月さん？ 他人のふりとは相変わらず連れませぬねえ」

まあ僕が見なかったことにしても、あれだけの感知能力。演奏を終えると、即バレして絡まれてしまうんだけども。

「あんまりふざけたことをしていると。」

—— お前をぶつ殺すゾ☆

「普段の口調に合っていない唐突なバイオレンスしんちゃんヤメレ」

「……自分で言ってるんですけど、よくわかりましたね」

「田舎とかで再放送を結構観てたからな」

いきなりネタ会話をぶっかけられたが、僕や四方、高円寺など常識人枠じゃないイロモノなのでしかたない。こういう性格の幅が広い奴と付き合うのも何気に大変である。

しかし思っただけど、類は友を呼ぶという。つまり早苗や清隆のようなイロモノを呼んでいる元凶たる類友がいるということだ。それは愛里か櫛田か……あるいは一之瀬か。

愛里や櫛田はそうさせないからいいとして、では例えば一之瀬から避けられるようになったら、彼女が呼び寄せていた何人かの類友も僕の周囲から消えるのだろうか。

……ちよつと一之瀬にやりすぎたアレコレは早計だったかもしれない。許されるかわからないけど、次の機会まで覚えてたら一応謝っておこう。

「また何か変なことを考えてますね夢月さん」

「考えてないって。一之瀬に謝るところかなってだけだ」

「そこで一之瀬さんの名前が出てくるあたりでもうおかしいんですが

それは」

イロモノの考えはわからない。

だから逆に僕の常識的な感性もイロモノにはわからないのだろう。

「いや。自分がやった事で巡り巡って友達失くしたら寂しいだろ？」

だからちよつと思ふことができて謝ろうって結論に至っただけだ」

「……………あの改変5才児の話題からどうしてそれに至るんですかね。夢月さんって、話すのに通訳必要とか言われたりしません？」

「ん、ああ。そういえば、無人島かどつかで一之瀬から言われたような……………でもそれだけだぞ」

あの時はなんでだっけ？

一之瀬がヒモを囲いそうってのは少し覚えているけど、黒歴史の印象が強くて流れが思い出せない。パラダイスにイロモノが乱入してきて……………そんで、なんやかやで僕が恥ずかしい事言っちゃった感じだっけ。

……………なんでそれで通訳がどうか出てきたんだ？

「私は今、夢月さんがコミュ障な理由の深淵を覗いた気がしています。

悪い意味で敵は己の中にあり。会話、コミュニケーション、気遣い。

夢月さんは「重要な時以外」これらをおろそかにしているからそんな事になるんですよ！ 神奈子様がそう言ってます！」

「僕がコミュ障なわけないだろ。いい加減にしろ！」

「いい加減にするのは夢月さんなんですよねえ」

「だいたい早苗は僕のこと言えないだろうが」

「私はこれでも用事がありますが、こんな時に一人きりで過ごしてるなんてコミュ障以外のナニモノでもないじゃないですか。もう少し付き合いを増やした方がいいのでは？」

余計なお世話だ。って言いたいけど、神様の名前を出されてるし耳に留めておくしかない。いつになく穏やかな早苗の返しに毒気を抜かれたというもある。このくらいの反論に抑えておくべきだろう。というか。

「てかお前、いつからか神様の名前を隠さなくなったな。うつかり名前呼んだら罰が当たるかもしれないからやめてくれよ。その名前つ

て普通は隠されるようなものなんだろう？」

「さつき気軽に手を振っておいて今更過ぎるでしょう。それに夢月さんだけなら、神奈子様も諏訪子様も普通に接して欲しいと思いますよ」

《そうね。早苗も嬉しがるし、落ち着いたら神社に参拝に来なさい。歓迎するわよ》

「神奈子様！ 余計なことは言わないでください！」

なんか胡座かいたまま神様がふよふよ来て茶々入れてきたんだけど……。

僕の勘は小さな神様と違って強大な神様っぽいと言ってるのに、その割には鷹揚というか器がでかいというか。いや、むしろ大手？ だからか？

でもこうして一柱と一人を見ていると、信仰対象ってより早苗の家族みたいだな。

一言だけで手を振って、またふよふよ飛んでいった神様を見送り、何故か僕は友達の家族に挨拶された気分を味わっていた。

「……はあ。早苗のところの神様って意外とフランクなんだな。僕の知り合いの神様もそうだから、わからなくはないけど」

「威厳を漂わせたほうがウケる時はそうするみたいです。夢月さんには……まあ、色々ありましたからね」

色々とは、お供えやガチャの件だろうか。今思い出すと、敬意もクソもない俗まみれなことしかしてないが。ただ神様や早苗の言い方的にも、僕が礼を失っている感じじゃないので特に意識しなくて良いだろう。

相手に合わせて対応を変える柔軟性は、流石早苗の仕える神様である。

案外、いつの間にか最初にして唯一の守矢信者になっていた愛里か、よく僕達（というか早苗）のフォローに走ってくれている四方になら、世間でイメージされる神様っぽい対応になるのかもしれない。

「——来ましたね」

早苗が珍しく穏やかだったので、警戒心なくなるとなく世間話していたら、唐突にその時はやってきた。

口を開いた早苗が雰囲気だけはいつものまま後方に視線を移す。僕もそちらに目を向けると、四方と愛里、高円寺の天文部が勢揃いしていた。試験が完全に終わったので、他のクラスの生徒と接触しても問題なくなったのだろう。

……なんか嫌な予感がしてきた。と思った瞬間、早苗が高らかに宣言しだす。

「これから夢月さんには！ 天文部部長の座を賭けて私達と勝負してもらいますっ!!」

勝負？ なに言い出したんだこの緑巫女は。それに信者になれ、じゃなくて部長の座？

欲しいならわざわざ勝負するまでもなく、いつでも譲るが？

部長なんて面倒くさいだけだと思ってたけど、誰かやりたい奴でも居たんだろうか？

僕はその思った数々の疑問を端的にまとめて口に出した。

「あー？ なに言ってるんだ？」

「東風谷。先走りすぎだ。旅行の締めくくりにはって付けなくちゃ夢月もわけわからないだろう」

「いや、四方。そんなん付いても何もわからないんだが」

「ご、ごめんね夢月君。早苗さんからどうしてもって頼まれちゃって」
「わかると思うけどねえ。レディの余興に付き合うのも紳士の嗜みだよ夢月」

「……ああ。これが高円寺の言ってるやつか。」

でも勝負ってなにするんだよ？

四方までフォロワーせず突っ走ってくるので少し混乱したが、愛里と高円寺の言葉からようやく少し察する事ができた。

つか、これはいつもの早苗の勝負したい病か。

今回は船上で店の中だし、荒っぽいことにはならなさそうだが……。

でも事態が呑み込めてくると、他の部員を巻き込んだ点と勝負の景

品に少し違和感。もしかして考え方が発起人が違うのか？

高円寺と愛里はまずないとして、四方が乗り気っぽいのが引つかかる。そこから憶測を繋げていくと、早苗でなければ消去法で首謀者はまさかの四方？

「それは夢月さんが決めることです！　自分が勝てそうな勝負にするもよし、楽しさを優先するもよし。」

ともかく、ライバルである夢月さんと決着をつけずに旅行を終えるのが私は嫌なので！」

「いつ早苗のライバルになったんだ僕は？　てか、ここまで状況を整えておいて、方法は僕に丸投げかよ」

「こっちの人数のほうが圧倒的ですからね！」

「……あー。一応聞いとくが、勝負するまでもなく誰かに部長を譲るっていうのは」

「通りませんね。私は夢月さんと勝負すること自体が目的なので！」
「……」

疑問は置いていて、まったくもって勝手なことばかり言いやがる。早苗にはもう少し常識的な振る舞いをしてほしいものだ。

一旦視点を切り替えて、早苗に勝負を撤回させるのを諦めた僕は、空氣的に無駄だと思いつながら他の意見も聞いておく。

「はあ。で、早苗以外の考えはどうなんだ？」

「俺はなにが来ようと問題ないぞ。できるだけ準備は万端にしてある」

「夢月がどう挑むかには僅かな興味があるねえ。まあ完璧な私なら何が来ても問題ないさ」

なんか本当に四方がこの面子を集めた感じがしてきたんだけど気のせいかな？　準備とかやる気がありすぎなような？　高円寺や愛里すらも話に乗せてるし……。

早苗だけならもっと直接的になるのはこれまでからわかりきってるし、不確定要素や外堀を埋めて変幻自在な誘導を企てる清隆とも違うやり方。

挙げ句、この四方の短い返答や珍しい態度から察することのできる

のは、仲間と協力し合って目的を達成しようとする少年漫画的な手法。これは僕が持つ四方のイメージと合致するのだ。更に早苗が妙に前に出ているのは、言い出しっぺの四方以上に乗り気になってしまったからだと仮定すれば一応説明がつく。

前から何度か四方に言われてはいたが、僕と勝負したいってのは本気だった？ でも勝つ意味も負ける意味も見いだせなかった僕が逃げ続けたから、早苗をはじめ他の部員を動員して断りにくくした感じか。

だとしたら今回は断らずに本気で勝負を受け、きちんと僕の底を見せておくのが友達というものかもしれない。

それはそれとして、面倒かつ是が非でも勝つ理由はないとはいえ、ただで負けるのは悔しいので適度にボチボチと力を尽くさせてもらうが。

「……わ、わたしは…その、なんであれ旅行の最後の夜にみんなで集まれるのが楽しみで」

てか、関係ないけど愛里にマジで癒やされるわー。

自信に満ち、好戦的な他と比べ、明らかに異質な勝負の動機。

釣られて変な方向に思考が行っていた僕をいつも『幻想』に引き戻してくれる愛里。

それはまるで、新たな道筋を照らしているようである。

話を聞きながら内心でこっさりその道筋を形にしていると、金を使わないで済む豪華客船での打ち上げと勝負を繋げる案がふと頭に浮かんだ。そう視点を転換させてみれば、打ち上げの余興としてなら勝負も悪くないと思えてくる。みんなが集まるのが楽しいかはともかく、宴やそれに類するものは好きなのだ。

それと勝ち負けに特に意味がないなら、いっそ弾けちゃって押し流してしまおう。

ならば全員が気分良く終われる勝負法が良い。

うくん。でもそんな勝負って何かあったっけ？ と勝負に使えそうなモノはないか見直し……ピンときた。

『海の上のピアニスト』のあのシーンと、ここがどんな店かを思い出

されて、頭の中で一つの答えが導き出されていったのだ。

僕は深く考える前に、それを提案してみる。

「じゃあ、音楽対決はどうだ？ 勝敗はこの店にいる人達の反応で」

「それにしましょう！ 夢月さんに借りた本でピアノにハマって練習しましたし！」

「……ふっ。では私はバイオリンにしよう。美しく偉大な私にはふさわしい楽器だ」

「……ちよつと自信ないけど、俺はチェロかなあ。中学の時に少しかじっただけだが」

「え、あの……わたし、楽器なんてできないよ？ 歌も多分人並みだし、足を引つ張つちやうんじゃ」

「愛里、それ普通だから。普通は経験ないものだからな？」

それは早苗が弾いてたピアノや、入店してから置きっぱなしだった楽器群（店のマスターに言えば、使わせてくれるらしい）を見て思いついたアイディアだ。簡単に言うと『海の上のピアノリスト』に描かれていたピアノ対決を、数人用にアレンジしたものである。

言つてから、あまり音楽系の経験者はいないんじゃ？ と思つたのに、当然のように愛里以外の3人は自信ありげ。早苗の歌や演奏はさつき聴いてたから知つてたけど、クリエイティブ分野などの評価が著しく低いこの学校でこれとか多芸すぎないかコイツら。これだから天才は……。

あと……気のせいかも知だが、この流れを読まれていたような違和感もある。

特に提案してノータイムで、練習も互いの能力把握もしてないだろうに、トントン拍子に段取りを組んでいく部分。まるで想定していたうちの一つを詰めるかのような手際の良さには、かなりの本気度が漂つてないだろうか？

突発的だった清隆との勝負とも違う。

これも天才と対峙する感覚……？

まあ本気かどうか以前に、まともに当たれば天才どもを相手にするのはかなり骨が折れそうではある。楽器など演奏できない僕はなお

さら。

だが、それなら用意されたのと似た『別のステージ』で勝負すればいい。

天才特有の自負と勘違いしている部分を突けばそれができる。

ただこのままだと問題もある。

そう。本職のアイドルとはいえ、歌や踊りで売ってるわけじゃない愛里が向こうで浮くのは明白なのだ。

なので不安そうだったのにつけこみ、逸般人は逸般人同士、一般人は一般人同士のチーム分けを申し出ることでも対処してみる。僕一人だと心細かいし、声質の良い愛里が受けてくれたら嬉しいので万々歳だ。

「ところで、一応そっち4人が僕と対戦希望みたいだけど、どうしてもってわけじゃなかったら愛里は僕の方に来ないか？ 勝ちを見据えられるほどの札はないから僕の結果に巻き込む事にはなるけど、足を引っ張るなんてことだけはなくなるぞ。

てか、むしろ僕が助けてほしいからこっち来て。お願い愛里」

「えっ！ わたしが夢月君の助けに？ で…でも、いいのかな？」

常人寄りなら、あちらの組について行くのは難しいと見た引き抜き。

それを受けて愛里は少し困惑気味に早苗と四方を見たが、おそらく意思を尊重する為にどちらに付いても大丈夫だと言うはず。僕としては頼もしい相棒になるので、唯一好戦的じゃない愛里はなんとか引き入りたいが、向こうからしてみれば必須というほどでは……ない和良好的な。

ぶっちゃけ、なんとなく愛里には有利不利じゃなく、自分を必要とする度合いが大きい方を見抜いて付いてくれる印象があるので、正直に助けを求めてみただけである。

「私は構いませんよ。この勝負なら危ない事はありませんから、愛里さんも気にしないでください」

「そうだな。考えてみれば、人数的に夢月の方にはもう一人追加するのがバランス良いか。

……うん。佐倉がいいなら夢月を助けてやってくれ。対戦相手が言うことじゃないかもしれないけどな」

「ほう……」

「早苗さん、四方君……それに高円寺君も。あ、ありがとう。夢月君はよろしくね」

「ああ、よろしく頼む。それとありがとな」

特定の者には甘い早苗と四方に後押しされ、高円寺はわからないが反対ではなさそうだ。それもあつてか愛里はやはり僕を助ける選択をしてくれた。

まあ向こうが戦力過多に見える為、自分がそれほど必要ないと感じた可能性もあるが、音楽分野なら同程度か僕が少し劣る程度の能力だと思われる。こっちの方が愛里も気楽にやれるだろう。

願わくば、宴の余興にほどよい緊張感になつてくれれば幸いというものである。

84、サクラ

僕は負けを確信していた。

カラオケで曲をセットして歌うだけなので合わせる必要のない僕と愛里は、対戦相手である早苗達が軽く音合わせするのを聴いたからだ。

悲しげでしつとりとした曲ながら、早苗のピアノと高円寺のバイオリンが自由奔放に突っ走り、それを集中力全開にした四方のチェロがフォローする。ただそれだけで、練習だというのにコンサートとか開けば金が取れるだろうレベルの三重奏。

「あいつら、インチキスペックもいい加減にしろよ」

「……あはは」

もはやオーケストラを数回見に行っただけの僕が聴いてわかる演奏である。

愛里すら苦笑いしてるあたり、知ってて罫を張りやがったな四方達。ぱつと見て勝ち目は清隆との大道芸勝負よりなお低いとか、真つ当にやって負ける気が完全に失せた。

なので予定通り、勝ち負け自体をぶっ壊し+αを狙う方針を取ることにする。

すでに愛里も引き込んでしまったし、最悪無様を晒すのは僕だけではない。

てか、このレベルの奴らが凡人一人に勝負を申し込むんじゃない。打つ手なんか邪道の2つか3つしか思い浮かばないだろうが。それに愛里が付いてくれなかったら、僕一人でこれに対抗しなきゃならなかったって、ふざけんか？ ここまでくると勝負じゃなくて、能力の力押しとか圧殺とかいうんだよクソが。

勿論、あいつらにもプロと比べれば流石に連携や技量不足が原因のミスも僅かにあるが、それ以外では付け入る隙もない。少しばかり歌に自信があるうと、素人二人でどうにかなるわけがない時点で終わってるだろう。

しかも高円寺はともかく、四方と早苗はあんな事前情報を言っていない、明らかに練習を積んでやがる。僕は演奏を聴きつつそれを感覚で理解し、愛里が教えてくれた情報から大まかな流れを組み立てた。あの正統派な音楽と美しさに対抗するなら、それ以外のモノを使うまでだ、と。

切り替えた僕は、パソコンから音楽ファイルを引っ張り出し、愛里にギリギリまでその歌を練習しておくように頼む。それなりに古い曲の為か「これでやるの!？」と驚いていたが、カラオケのど自慢程度では勝負にもならない以上、勝利条件と場所の特性を利用させてもらう。

ふん。高円寺には悪いが、四方に早苗。僕に全力を出せる状況で無理ゲーふっかけてきたことを後悔するがいい。そっちがその気なら、天才様に勝負を投げ捨てるという僕の意地を見せてやる。

あらゆる手段で悪あがきする凡人とはどういうモノか改めて教授してやろうじゃないか！

ただ決意してから数十分後。

ちよつとした問題が発生している。軽い練習をしているだけの三重奏に釣られたのか人が集まり出しているのだ。先程までは数えられるくらいしか客もいなかったのに、今ではもう8割近くの席が埋まっている。

それだけの魅力に溢れる演奏なのはわかるし、こちらとしては好都合でもある。客の半分は船員や教師で、これは音楽に惹かれて来ただけだろうから存分に感動してもらいたい。

問題は残り半分で、B・C・Dクラスのリーダーかその周辺、あと僕の知り合いも相当数来たことだ。

親切にも真っ先に寄ってきて素直じゃない感じに情報を落としてくれたツンデレ龍園によると、どうもどこかで試験の答え合わせ的な鏝迫り合い？やA・Bクラスは反省会をやっていたところに、四方と早苗がそれぞれ葛城と一之瀬、櫛田を呼んだらしい。そしてその連絡

が届いた時に、周りにいた者達も付いてきたというわけだ。

ちなみに後で知ったが、部員全員が誰か友達呼ぼうぜってな事になったみたいで、愛里は椎名、高円寺はなし。おそらく愛里が友達になったと言っていた椎名に興味湧いて、早苗あたりが提案したんじゃないかと思われる。

清隆のことを、時々でいいから……思い出してください。ことあるごとに忘れられる彼が不憫でならない。知らんけど。

ま、それは置いて、僕が知っている面子は。

Aクラスは葛城、戸塚、橋本。

Bクラスは一之瀬、神崎、網倉、柴田、浜口、安藤、白波。

Cクラスは龍園、椎名、アルベルト、真鍋さん達4人。

Dクラスは櫛田、清隆、須藤、平田、堀北さん、軽井沢さん。

あと牛グループのメンバーだった者達に、橋本と話してる知らない男女の生徒。ただ男の方は、アルベルトとほぼ同時に来店していた野武士っぽい生徒だ。なのでこの二人はAクラスの可能性が高そう。

多分、橋本や関わりが薄いかわからない奴らは偶然だろう。

しかしなんか各クラスの首脳陣っぽい奴らが集結しちゃったのは、試験が終わって暇ができたからでもあるかもしれない。

いやまあ、アルベルトは僕以外の誰よりも早くから店に来たし、龍園は僕と……櫛田に軽く絡んだ後ですぐ帰っちゃったから、Cクラスは椎名とアルベルト以外、ほぼ知らないも同然の人ばかりだったが。ともあれ、人が集まってしまった事により、愛里を前面で活躍させるプランは変更を余儀なくされた。

折角隠せてるのに、こんな余興でアイドルだとバレル可能性を上げるのは流石にNGである。やるとしたら、僕に注目を集めた上で愛里がノッてくれる形が理想だろう。

その為には――。

「愛里」

「ひゃあっ！ ど、どうしたの夢月君!？」

「悪い。すまんが少しプラン変更だ。最初は僕が一人で歌い始めるから、愛里は早苗達と居てくれ。それでサビのあたりで僕の後ろあたり

に入ってくるようにできるか？ 勿論、僕が観衆を乗せられなかったら、そのまま人前に出なくていい」

「え、どういう」

「……この人数で目立つと雫だとバレるかもしれない。正直言って助けは欲しいが、だからって愛里の隠したい事を台無しにするのは嫌だ。なので、僕の歌にノッてくれた風なサクラ役的な感じで助けてくれないか？」

歌の反復中だった愛里のイヤホンを勝手に外し、他に聞こえないよう耳元で囁いた。

女子にすることではないので驚かせてしまったがしかたない。

「……ふふっ。わたしの名字と同じだね。サクラって」

「うん？ ああ、そういえばそうだな」

「——わかった。この歌ならわたしでもそういう演出はできるよ！」

「おお……！ 頼もしいぞ愛里。ありがとう」

「………こつちこそ……た、頼ってくれてありがとう」

ちよつと詰まって関係ないことを返されたので無理があるかと思っただが、愛里は大丈夫と変更を受け入れてくれた。

でもなんか嬉しそうな笑顔をされると、うっかり告ってしまいそうになるのでやめてほしい。

特に最近の愛里は、何かの拍子に可愛く見えてしまう時があるのだ。友達とはいえ、普通の美少女に微笑みかけられるのはマジでヤバい。

勘違いしてフラれない為にも、微妙に話を逸しておくのも大人の手練手管だろう。

「ところで、愛里が嬉しそうなのは」

「ううう嬉しそう!! わた、わたしが？」

「へ？ お、おう。古い曲だけど、気に入ったのかなって」

「あ……ああ、曲ね……うん。すごく明るい曲だよ」

「だろう!?! 僕のお気に入りセレクションでもトップ10には入るから、夏の手にはマジでオススメ！ もう一つと迷ったけどやっぱり」

さあ……」

と、考えていたのだが愛里が挙動不審になったどきくさで変なスイッチが入ってしまい、ドヤ顔でオススメ曲を布教している僕がいた。

……ふっ。見よ！ これこそがモテない男たる所以である。

そんな感じでやっている間に、23時になった。

すると今度は櫛田と一之瀬が、どこからか持ち出したマイク片手に司会のような事をやり出した。それに合わせて、呼ばれたり訪れたりしていた人波が一段落したところを見ると、打ち止めか誰かがあらかじめ決めていた設定時刻になったのだろう。

『お集まりのみなさん、いきなりこんばんはー！ 一之瀬帆波だよー！

それで今夜は特別試験の打ち上げで、東風谷さんVS左京君の組に分かれて音楽対決するそうです！ 次は何をやらかしてくるのか楽しみですねっ！』

『やつはろー！ 櫛田桔梗ですっ！

帆波ちゃんと一緒に頼まれて、この音楽対決の勝敗を判定しに来ましたっ！ 気が向いたら後で早苗か左京君の良かった方に一票入れてね！

みんなも試験結果には思うところあるかもしれないけど、今だけは忘れて楽しませよう！』

また彼女らはそれだけではなく、これまで同級生や一般？客に説明・盛り上げなどの対応もやってくれていたりする。

おかげで僕や反復を再開した愛里、早苗達のところには、最初にフライング気味に龍園が来ただけで助かってはいるが——明らかに仕込んでるだろこれ。

櫛田は早苗が頼んだにしても、一之瀬も一枚噛んでいるみたいだから、四方の本気説がますます濃厚になってきたな。

人気者二人を用意したのは、人数を増やしてどちらも退けない逃げられない状況を作り、その上で僕が愛里に主役を任せすぎるのを防ぐのが目的くさい。僕の打ちそうな逃げ手は、先読みされていると見て

いいだろう。

てか、僕相手にここまでするとか、常識人ぶっていたけどやっぱり四方もイロモノ枠だったということか。その本人は我関せずとチェ口弾いてるけども。

それにしても、一之瀬は頼まれただけで自然だろうからまだいいが、こういう場での櫛田のあざときは、本当に下手な怪談よりもゾツとするものだ。

彼女らが陰の者の元気を吸い取るスピーチ？をしている時、櫛田への視線が不気味なモノを見る目に変化していく。堀北さんが視界に入って、なんか少し彼女に親近感を抱いてしまった。きつと帰りたくても帰れない何らかの事情があるのがわかって。

人のこと言えないけど、堀北さんもまたご愁傷様である。

小一時間の音合わせっぽいモノが終わったようだ。

自信と自負に満ち溢れた四方達から、先攻後攻を選ばせてくれると言われたので、僕と：今は話す余裕がない愛里は当然後攻をもらう。僅かに目があるとしたら後攻しかない。

また人数合わせにもう一人分助っ人を頼んでもいいらしく、カラオケの機械を操作する役として愛里が呼んだ椎名が頼まれてくれた。

それと、なんのつもりか清隆もピアノの腕を売り込んでくれた（隣で堀北さんと須藤が目丸くしていた）が、技量はともかく僕がやるうとしていることと清隆の性質が致命的に合わない為、別に割り振らせてもらった。勝負までに椎名にカラオケの機械の使い方をお教えやってみてほしい、と。

そう頼むと、清隆と何故か堀北さんは凄まじく微妙な顔になりつつも、了承してくれた。ギリギリまで歌う曲をリピート再生して覚えている最中の愛里をチラチラ見ながら。

妙に愛里を気にしているのは気になったが、四方と話していた一之瀬が店の中央付近に立って口を開いた為、突っ込むのを止める。

そして本当に時間が来たみたいだったので、愛里にそろそろ反復を

やめるよう軽く背を叩きながら、その司会を聞いて我がクラスの聖女に祈りを捧げてみた。

『さーて！ いよいよ肩慣らしが終わって先攻後攻も決まり、まずは東風谷組の演奏です！』

東風谷さん、四方君、高円寺君。頑張つてねっ！』

いいぞ一之瀬。

もつと…もつとだ。

陽キヤの全力全開パワーを早苗に浴びせかけろ。

邪悪なる者に光りあれ。

そして僕の時は控えめに頼む。

が、当たり前のように（少なくとも表面上は）効果はない。

僕に呪術の才能はないようだ。

しかし関係ないが、元気を吸い取るとか、一之瀬の正体はサキユバスかどこぞの極貧リッチーではなからうか？ そういう設定で夜のお供にしている奴もいそう。

そんな内心をよそに、滞りなく四方達の演奏が始まった。

やがて聞こえてきたのは天上の音楽といってもいい程のピアノとバイオリン、そしてそれらを包み込むようなチェロの音色。

更には弾き語りにも関わらず、音量抜群にして透き通る早苗の歌声。

こういう場合のステージなのか店の中央にある台の上で。

3人が3人共、威風堂々とした『らしき』を出しつつ、それでいて深みのある三重奏が走り出し、そこへ早苗の孤高な本質を曝け出すような歌声が加わり響き渡る。

観衆も演奏が始まるまではあんなにざわついていたのに、今ではもう一音も聞き逃さないように聴き入っている。

それはふざけて変な念を送っていた事を僕が恥じ入るほどの——
—これまでに聴いたことがない凄まじいまでの『音楽』だった。

本物のオーケストラを何度か聴きに行った経験もある僕がそう思うのだ。

音の魔力とでもいうべきモノに捕まって、大人である職員や船員

も、勿論高1の同級生達も没入させてしまう。本格的な音楽をやっていた奴がいたとしても、これには心動かさずにはいられないだろう。それほど演奏。

横を見ると、愛里など目が潤んでいるくらいだ。

他の客と同様、いやそれ以上に共感性の高い愛里は早苗達の演奏に感化されている。

惜しむらくは、曲から孤高や孤独を感じられるせいで悲愴成分っぽいモノが混入している点。感動させるほど心に染み入るような音楽は、愛里の表情に僅かな憂いを帯びさせる。稀に起こる意味不明な曇りを誘発させたというところか。

落涙レベルならそれはそれで目の保養であっても、美少女は笑っている方が好きな僕としてはここからが腕の見せ所だろう。いかに愛里を乗せて僕ともども頭空っぽにできるかに、旅行のハッピーエンドが掛かっていると言っても過言ではない。

勝負の勝ち負けや試験なんかより重要なモノの為、僕は歌う前に気合を入れ直した。

歌い終え、最後まで素晴らしい演奏をしきつた3人は、全方位に向けて優雅にお辞儀した。

『……………あ、ありがとうございますっ！ さ、早苗も高円寺君も四方君も凄い演奏だったね！』

役割分担でもしていたのか演奏が終わると櫛田の司会になっていた。動揺からか彼女の声は、いつになく上ずってしまっている。櫛田の仮面を揺るがすレベルの演奏だったということか。

ていうか、拍手喝采がなかなか止まないんだけど。スタンディングオベーションか涙すら流して余韻に浸る観衆の二択って。

……………この後、僕と首尾良くいけば愛里が歌うんだけど、すげえやり難い。

まあでも先攻なら忘れ去られるだけだっただろうから、後攻なのはまだ細い道筋が残ってると言える。僕達が先攻で後攻にこれを聴か

されていたら、どの道も残されていなかったと素直に思う。

「愛里。無理しなくていいからな？」

「あ
やったら楽しそうって思った時だけノツてくれたら、それで充分」

さて、道化で終わるか、窮鼠猫を噛むことができるか。

セクハラにならないように愛里の肩を軽く叩いて一言投げかけ、僕はステージに向かう。

櫛田もだが、何気に一之瀬がさっきの演奏に深く感動してるっぽくて司会が沈黙しているから、再起動してエナジードレインをかけられる前に自分で動いただけだ。

まあ誰が応えてくれてもくれなくても、僕は僕のやることをするだけである。

「ふふんっ！ どうでしたか夢月さ」

「おう、御三方。ナイスミュージック！ よかったら僕の方にも『参加』してなー」

「……………」

「ははは。君はいつでもbeing oneselfだねえ。それでこそ夢月とも言えるが」

「何のことだよ。タツチ代わりに褒めただけだぞ。」

あつ、代わりで思い出した。途中まで愛里をよろしく。ちよつとプラン変更しちゃったから」

「……………ふっ。任せたまえ」

すれ違いざま早苗に煽られかけたので、称賛で返しつつ愛里のことを頼む。

早苗と四方が何故か言葉に詰まったとはいえ、高円寺が快く請け負ってくれて後顧の憂いはなくなった。

これで心置きなく最初のパートを道化に徹することができます。

——本当にいいんですね？」

「ああ。椎名もありがとう。助かった」

「……………では」

ステージに上がると、その脇に置いてあるカラオケ装置のところから椎名に声をかけられた。

彼女にも礼を告げると、心配そうではあったが頷いてスイッチを入れてくれる。

そして音楽が流れ出したのを確認して、僕は不完全なパリピ左京に自分を切り替え——たまたまアルベルトと目が合ったので、なんとなく英語で第一声を放った。

「さあっ！ ITXS SHOWTIME！」

音楽が流れた直後、できる限りの大声を出した為か驚いた観衆に注目される。

あの天才3人衆と違い、僕には演奏経験は殆どない。技量だって声量だって早苗には到底及ばない。経験には多少自信があるけど、頭脳も容姿も魅力も四方や高円寺と比べれば平凡極まりない。ないないづくしである。

だけど、そんな僕だからこそ思いつく手というものがある。

「んばばっ!!」

しんみりと三重奏の余韻に浸っていた何人かが、いきなり流れ出した先程とは真逆な方向性の音楽と僕が叫んだ謎言語に目を丸くしていた。

ちなみにスピーカーから流れてきた音楽は、前の『俺』ですら現役で見ていたわけじゃないとあるアニメのオープニング。

——んばば・ラブソング。

『俺』の学生時代での想い出深い歌であり、またそれだけでなくその底抜けに明るい歌詞とメロディーは、一人で行ったカラオケで唐突に襲ってくる虚しさをいつも吹き飛ばしてくれた。

しかもなんというか、現状にベストマッチな南国を楽しんでる気分に浸れるのだ。

2週間にも渡る船旅の締めくくりと、感動的で正統派な音楽に対するにこれ以上のモノはないだろう。

「青い海が呼んでる 白い波も歌ってる

真っ赤な 真っ赤な 太陽追いかけて

走っておいでよ パラダーイス！」

しかし歌うだけならともかく、このあからさまに陽の者の専売特許的な明るさは、一之瀬や柴田といった者達の在り方を真似しなければ表現できない。その為のパリピ左京再びだ。だから誰彼構わず元気に片っ端から巻き込んでいけるテンションだけは無理してでも維持する。

それを愛里が助けてくれたら、火に風とばかりにゴリ押せるポテンシャルを秘めた曲だ。

「そよ風リズムで ヤシの木が踊るフラダンス

真珠の貝殻 浜辺いっぱい あげよう

いらいらするなんて いけないよ

もう何にも 心配 いらないよ

んばば んばんば 呼んでる

んばば んばんば 歌ってる

真っ赤な 真っ赤な 太陽追いかけて

走っておいでよ プリンセス！」

そうして悟空を待つクリリンのような心境で、界王拳（気分）を使いつつ歌っていれば。

ほら。歌詞のように、曇りを吹き飛ばしたような表情の愛里が駆けつけてくれた。今ならサクラ的なポジショニングもバッチリだ。

僅かな間奏にて、良いところに入ってくれた愛里と笑い合いながら、ハイタッチを交わす。時々見せる愛里の満点笑顔は、いつだって最高に僕のテンションを上げて楽しい気分にさせてくれる。

まさに鬼に金棒である。

本職のアイドルになれるほどスター性のある相棒の合いの手があれば百人力。

むしろ状況が許せば、僕が添え物になってもよかった。

歌詞だって間違えても問題ない。

ノリとリズムで適当に「んばば」とか歌って自由に楽しむ。

ただそれだけでいい。

高みに至った技術や声量は人を惹きつけるけど、凡人の作り出すノ

りやリズムだつて場を選べば負けちゃあいない。

あの孤高を感じさせる素晴らしい演奏のあとだからこそ、なおさら陽気なメロディは反動で身体も心も踊らせるのだ。

なにより愛里がノツてくれたので最後の心残りも消えた。

やっぱり美少女は曇つてるより、楽しそうに笑っているのが至高である。

「夜空のパーティー三日月も見てるショータイム

星屑のかから 瞳いっぱい あげよう

くよくよするなんて いけないよ

もう誰にも 遠慮は いらないよ

んばば んばんば 聞こえる

んばば んばんば 叫んでる

でつかい でつかい ぼくらのラブソング

歌っておくれよ プリンセス!」

四方達3人は天才と呼ぶに相応しいものをそれぞれ持っているだけに、自分や自分と同格に近い者が最も活かせるやり方を好む。だから勝利条件を勘違いしていたのだろう。ノリという勝負時は弱い手札のまま地利を活かす道を、自分の実力への自負が覆い隠してしまつて。

当然のことながら、格式張つたコンサートやコンテストとかでは通用しない手だが、こういう適当に歌つて飲み食いするカラオケっぽい音楽系の店においては少々事情が異なる。この場での勝負を想定するなら、四方も早苗も場に合つた陽気な手札を用意するべきだった。

負けを確信した凡人は、こういう悪あがきをするのである。

勉強になつたかな天才諸君?

……なんて、いつもみたいに煽れないけどな。考えが読みきれしていない以上、あえてこの道筋を残した可能性は捨てきれないし。

「青い海が呼んでる 白い波も歌ってる

真つ赤な 真つ赤な 太陽追いかけて

走つておいでよ パラダイス!

んばば んばんば 聞こえる

んばば んばんば 叫んでる

でっかい でっかい ぼくらのラブソング

歌っておくれよ プリンセス!」

まあ愛里は笑ってるし、僕も楽しかったので勝ち負けや決着は好きに決めればいい。僕は負けを認めている。

吹っ切れて晴れ晴れとした気分で歌い終えると、早苗が。四方が。高円寺が。いや、もはや何柱かの神様さえ含むみんなが。何故か笑いながら僕に一撃入れたり、ステージに来たりして、歌ったり踊ったりし始めた。

それ自体は少し困惑したが、歌にノツてくれたわけだからいい。だが――。

おい、対戦者の天才どもお!? お前らの一撃は重すぎんだよ! 大笑いして参加してくるまでは良いけど、僕のHPの半分はてめえらが持ってたんだからな! 少しは自重しやがれてんだ!

こいつらに言いたいことがある。

内容は見ての通り。だが、直接言つてやりたくても無理だ。

なぜなら椎名が誰かの言い出したアンコールに応えて、もう一回歌えとばかりにまた曲を流し出したことで、歌うのを止めるわけにもいなくなつた。ここでそうすれば空気読めてないにもほどがあるだろう。

そんな収拾つかなくなってきた光景を見て何を思ったのか、最後まで司会っぽい役割を全うしようとしていた一之瀬と櫛田まで視界の隅ではっちゃけだしたのが見えて……。

「んばば んばんば 聞こえる

んばば んばんば 歌ってる

でっかい でっかい ぼくらのファンソング

歌っておくれよ プリンセス!」

普段のブレイキ役が揃つてノリノリになつた今。

もうこの勢いは僕の手を離れて止められないと悟り、限界までこいつらに付き合つて歌い続けることを覚悟した。

ただ個人的には。最後の最後まで、ド突かれたり、ハグしてくる相

手に愛里・椎名が早苗に独占されて参入しなかったのが残念でならない。少しは僕にも甘酸っぱい青春的な役得がほしかった。

代わりに何曲か歌った後、テンションの上だった野郎どもと野郎を物ともしない早苗に、代わる代わる絞め落とされたのが旅行最後の記憶であることは真に無念である。

……ところで途中から考えてなかった僕が言うのもなんだが。確か僕が負けたら天文部部长がどうか言っていたと思うのだが、次は誰にするつもりなのだろう？

まあ、部長交代はともかく。

人の企画で好き勝手に楽しんで、友達連中含む奴らも盛り上がったっぽいし、2週間の旅行の締めとしては悪くないだろう。

とりあえず僕は疑問を忘れて切り替え、主に手助けしてくれた何人かに向かって、感謝の気持ちが伝わっていると信じて。思考を止めることにした。

ありがとう。んばば、んばんば、めらっさめらっさ。

ダメージレースNO. 1な早苗のベアハッグによる痛みと苦しみを、そんな良い感じ風に綺麗な内心で誤魔化しつつ、僕は完全に意識を手放すのだった。

4・5章、日常から見えてくる願い事 85、奇跡（後半、高円寺視点）

数字は嘘をつかないが嘘つきは数字を使う。

このマーク・トウェインの名言の有名な例が、時々思い出したように報道される国の借金や某国のGDPだろう。中央から地方へ移動させる資金を借金として計上したり、●●して数倍増しに見せたりと、他国にはない項目を無理に混ぜてあの手この手で水増しされている。更に数字の限定的な部分だけで煽り、自虐的に下げるなり実態より大きく見せるなりして世論誘導を行うのだ。

それでいて数字が公表されていても、自分で調べず鵜呑みにして信じてしまう者が結構いるのが世の現実というものである。

都合のいい嘘で固められているのは、一部の権力者にとってさぞ笑いが止まらない世情だろう。

さて、そういう手も使うと思われる嘘つきな権力者と対抗する場合にはどうすればいいか。

嘘だと公表すること？ 違う。そんなモノはいくらでももみ消せるし、完全に敵対してしまう。

先を読んで一撃で急所を突くこと？ 違う。攻撃などすれば下手をしなくともこちらが危うい。

金や能力などを使って内部から改革すること？ 違う。あえて無理とは言わないが、内部告発を筆頭に属する組織へ反旗を翻すように見えることは、犯罪を犯すよりも多大なリスクを背負うことになる。前科者より告発者の方がより冷遇されるのは、圧倒的多数の前例と『俺』の経験や記憶からも明白である。

ならばどうするか？

—— 答えは簡単だ。

それ以上の力で踏み超える。それしかない。

具体的な方法の実行には運と下地になる武器が必要だが、幸いにも

僕には両方に当てがあり、また各所から想定以上の協力を得られた。なので、これから向かう事になったある場所に到着する前に、全ては達成されたと青娥さんから報告をもらっている。

あとは求められたら名目上トップの僕が責任を取ればいいだけだ。その用意はできている。

懸念点である鬼手は、消費税を8%に上げた理由である社会保障を名目に、財務省関連の金庫番的な存在が介入して押しつぶしてくるこどだったが、貯め込まれた年間約50兆ずつ増える日銀資産などの金をまともに運用したり動くことは僕も『俺』もまずないと見ていた。前の人生の最後の方でも、貸借対照表で700兆円近くなっていたのに、まだ借金ヤバいとか増税増税言って（言わせて？）そっち方向へ世論を誘導していたのだ。

まして8%への消費増税から1年程度（2015年現在）。これまでものお偉いさんの腰の重さからして、国立とはいえ一学校に少額でも定額以外を早期投入されることはありえない。

そもそも国の財政が黒字になるほど民間が不況に叩き落される事は、経済か歴史をそれなりに勉強した者には常識だ。それなのに生まれ直してから情報を集めても、通貨発行権を持つ国がプライマリーバランスとかいう馬鹿げた経済政策を目指している方向性は、固有名詞以外ほぼ同じだった。

そこに「民のかまど」で出てくるような美しい理念はなく、ただ強欲と吝嗇を感じるのみである。

だから僕はこの時点で、財政を担うお偉いさんが席取りゲームや無駄な蓄財とかよくわからないことにしか興味ないと推測を固めることができた。

まあ、それもあって前も今も常識的に経済を見られる者は資金調達に苦勞することになり、そこに活路を見出して僕達が利用したわけだ。

ストーリーカーの件で最初に構想を聞かせた時には、青娥さんに笑われ、当時の愛里にはポカンとされたが、こういう理由で僕なりの成算があった。尤も、あの時は危険への対処が第一で、あわよくば学校の

対応を見て年単位で数歩前進できれば、と考えていたただけだが。

それに正直、7月の終わりまで手を打ち続けて半分程度の進捗だったので間に合わない想定もしていたが、鬼龍院先輩・高円寺の存在と、なにより松雄が文字通り息子の為に死ぬ気で働いたのだろう。

おそらくターニングポイントは、父小路の圧力と嫌がらせ、それに端を発した松雄の入社時、息子の行末を相談されたことだ。画面越し面接でのあまりの必死さに、好きだった祖父の顔が浮かんで、計画に一捻り加えてねじ込む案を一緒に考えてしまった。

だから松雄の期待以上どころか奇跡と言っても過言ではない完璧な仕事は、それほど息子を大事に思っている証明だろう。まったくもって羨ましい。

しかし父親か。

僕は可能になっても連絡も帰郷もしないつもりだが、前の人生と同じなら早くとも高校卒業時の約2年半後、兄貴は多分そろそろか。

なんのことかというところ、大学の学費は出さないと親父に言われるはずの時期なのだ。つまりここで奨学金という名の借金を背負うか否かで、ブラック企業から逃げる選択肢の有無が決定されると思っている。

一応、家を出る前に兄貴にも小さな神様にも『俺』の事と合わせて話しておいたが、今はどうなっているのかわからない。兄貴のことだから大丈夫だとは思いたいけども。

思考が脱線してしまった。

……ともかく松雄というか計画に話を戻すと、僕や青娥さんも必要な大枠はこなしたとはいえ、彼の不断の努力と願いには頭が下がる思いだ。

持つべきものは有能な『共犯者』である。

というわけで、宴の翌日。

昼頃に下船し、あとは学生寮へと戻るだけという段になって、行きにも乗った黒塗りバスに乗り込んでいく生徒達を尻目に、僕と高円

寺、葛城と一之瀬の四人には別のお迎えが来た。生徒会組とは対象が違うが、想定通りにそれぞれ呼び出されたのだ。

しかもリムジンなどという高級かつ広々とした車である。冷蔵庫やドリンクバー、今はあまり見たくないがカラオケなんかも付いていて、10人くらいなら問題なく寛げそうである。

この待遇は大企業子息の高円寺がいたからかもしれないが、せっかくなので到着まで備え付けの設備を使って存分に堪能することにした。

「君らはなに飲む？」

「私はダージリンのファーストフラッシュを頼むよ」

「紅茶か。一応茶葉はあるけど、最低限の黄金ルールくらいしか知らんから、文句言うなら自分で淹れるよ？ ポットも電気しかないし」

「それでは仕方ないか。私に相応しい物はなかなかないからねえ」

「代わりにブルマンNO.1なら、それなりに美味しく淹れられるぞ。この機会にコーヒーに手を出してみないか？」

「ふむ。いいだろう。満足できたなら僥倖といったところか」

ノセタ……というよりノツてくれたが、布教完了、と。

僕の腕でも物が良ければ、高円寺の舌なら次に繋げる可能性は残せる自信がある。コーヒー党にはできなくとも、まあたまには飲んでみるかなってレベルにできたら、少し入手のハードルが下がるかもしれない。

生まれながらの金持ちは、質実剛健な家かなり多い。

高くても良い物を手に入れて長く使うし、気に入らなくとも目が肥えていて騙されにくいから、良い物なのはほぼ確定。なので高く売れる。その為、ゴミをほとんど出さないのが由緒正しい上流階級の見分け方だ。

見るからにそこに分類される高円寺が気にいって飲むようになれば、彼がよく行く店でも仕入れてくれるようになるだろう、きつと。

ちなみに余談だが、ゴミを最も出すのは成金系。

買い物をもっとする層であり、すぐに飽きて捨てるのを繰り返すので大量のゴミが出る。経済はこういう層が回してる面があるので悪く

は言わないが、個人的にはあまりお付き合いたくなくなったりする。生活の派手なタイプは、どうも僕と相性が悪いのである。

「葛城と一之瀬もコーヒーでいい？ ジュース系も結構あるけど」

「左京、お前……よく適応できるな」

「にやはは。こんな上流階級っぽい車だと、やっぱり緊張するよね」
揺れもほぼないまま走行し始めた車内で、真面目な二人が固くなっていた。

まあ高1の一般家庭育ちなら無理もない。いくら乗る前に「ご自由にお使いください」と言われても、汚したりこぼしたらどうしよう、とか思ってしまうものだ。ここらへんは社会経験の有無が見えやすい。

僕のような精神おっさんは、どこでも大して変わらないからな。高円寺は彼本来の気質と居場所に近いからだろう。

「ふう。こんな風に呼ばれたのは高円寺と僕がメインで、君らはオマケで添え物。アングスタン？」

だからせめて少しでも気が楽になるよう事実で挑発し、場所が気にならないくらいに発奮を促す。この二人と現状なら、解禁できた爆弾2つで足りるだろう。

「む、では左京には誰かに呼ばれる心当たりがあったということか」

「旅行中も次々と色々起こしておいてまだあるの？ 今度はなにやらかしたの左京君……生徒会からの緊急招集がオマケって」

「あー。多分緊急招集は僕の呼び出し関連だと思う。ゴメン」

「左京関連？」

「直球で言うと、すぐにじゃないけど月見で言った外部接触禁止とPを学校に廃止させちゃった。あと一人の生徒を途中編入させたから、9月から同級生がひとり増えるよ。名前は松雄栄一郎君。同じクラスになったら、よろしくしてやってな」

「ふっ」

「……………は？」

よし。葛城と一之瀬の容量限界を超えてオーバーヒートしてるっぽい。これで一緒に緊張も吹き飛んだことだろう。

真面目な奴らは想定外の事態を突きつけられると機能停止するこ

とも多いので、こういう時に助かる。

ま、僕を問題児みたいに言うから意趣返しされるのだ。しばらくそうして、いい子ちゃんな脳みそに混入してきた情報を噛み砕きながら、静かにしているといい。

静かになつた二人の横で、僕は高円寺と昼下がりのコーヒーブレイクを楽しんだ。

そして思いのほか早く学校に到着し、狐につままれたような顔の生徒会組と別れると、僕らに迎えの人が来ていた。一見、にこやかな笑顔の絶えない役人っぽいおっさんだ。

「監査の月城です。理事長室までご同行願えますか？ 左京夢月君、高円寺六助君」

この時の僕は――。

よりによつて監査役を迎えに寄越すとか、なに考えてんだ理事長。丁寧で機嫌良さげに見えて、メツチャ怖い空気を漂わせつつ観察されてんじゃん。ぜつてえキレてるよ。暇じゃないのに、ガキ二人の迎えつてこの月城さんを馬鹿にしてる？ おら、さつさと付いてこい。死にたいのかガキども。とか思われてるよ。

なんて月城さんの内心をアレな方向に想像しつつ、不思議と底冷えのしてくる声の主に大人しくついて行つた。

あと3回くらい変身を残してそうな人には、素直に従うのが吉であろう。

私は少し前を歩く夢月の背に、昨夜を思い返す。

あれには月が似合う男だと思わされたものだ。

それでいてレディのエスコートが様になるようなならないような

不思議な男である。相応しい舞台を演出させれば、その雰囲気場で場を呑み込んでしまおうだろう。月は人を惹きつける。

夢月はまさに名前通り、夢の月のような男だった。

「なるほど。得心がいった。」

……ははっ。でもやっぱり馬鹿だろあいつ」

隣にいるテイルマン、四方二三矢の小さく溢れる笑みと呟きが聞こえる。

遅まきながら、全体像が見えたのだろう。佐倉愛里という鍵を引き抜かれた時点で、勝ちも負けもなくなっていた、という事実には。

そう。おそらくあの場で唯一の『勝者』を、勝負に最も意欲のなかった者とするところこそが夢月の設定目標である。

東風谷早苗は1曲目が終わるまで無言で我慢すると、真つ先に駆けていった。

これは夢月の考えというより、彼女にとっては重要な存在への印象を変化させられたのが要因として大きい。たとえ大多数が塗り替えられた『レディ』の印象よりも、打ち上げパーティーに変貌させられた元勝負事に意識が向いていたとしてもだ。

良い意味で期待を裏切って一人のレディを開花させたことは、ごく限られた範囲においてそれだけの意味を持つ。

誰が考える？

重要と考えなかったとしても。負けてもかまわないとしても。規模は小さくとも晴れの舞台で。

自分の勝敗を投げ捨てて、たった一人の気晴らしに利用するなど……。

聞けば、夢月のことだから「自分の為」と答えるだろうが、幾人かはあの在り方を知り、曇り空から覗いた月光のように感じたかもしれない。

「まったく変わった男だねえ、夢月は……。」

それで君はどうするのかねテイルマン？」

「ははは！ 決まってるだろ。せっかくあいつがやらかしてくれた機会だ。踊らにゃソンソン、ってな！ さあ、俺達も行こう。」

ああ。高円寺風に言えば、興に乗ってやろうってどこか？」

「ハーツハツハツハ！ OKだよ。道化になるのもたまには一興かもしれないからねえ」

この時すでに、東風谷ガールの信頼が込められた平手を背に受けてむせていた夢月。

表に勝負を台無しにされた意趣返しと、裏に『友』と楽しもうという思惑を忍ばせて。

私とテイルマンは笑い合おうと、さらなる追撃と華を添える為、月の似合う男が作り出した渦へと飛び込んでいった。

この宴の余興を見ればわかる通り、夢月にはもう一つの不可思議な特性がある。

醜い者には醜く、美しい者には美しく。素質がなければ無能に、何であれ素質があれば優れて。そう見えてしまう鏡の如き性質。期待をかければ裏切らず、勝利あるいは敗北を望んでいけば、やり方・能力の多寡に関わらず望まれた結果に近い落着をさせる。

これが『夢月の周囲に』私すら目をかける価値のある者達が集まる理由の一つだろう。

本人の自覚がないのは、筋を通すことだけで前を…目的『のみ』を見据えているからだ。

だから——これも私にはわかっていたことだ。

「左京君。何故君はこんな事を？」

「それを答える前に一つ聞かせてください坂柳理事長」

「……なんだい？」

「これから先、『生徒』が退学者を決める特別試験はありますか？ Y ESかNOでお答えください」

目の前でなんてことのない石ころであるはずの夢月が、学校組織相手に優位に立って……いや、すでに勝者となっている。

理事長をはじめとした理事に学部長・事務長、それに監査。彼らを相手に、結果を覆せなくなってから必殺の一撃を携え現れた。外側か

ら見るからこそわかる憎らしいほどに効果的な演出だ。

高円寺コンツエルンや鬼龍院財閥を通じて、高度育成高等学校に政府から圧力をかけ、外部との接触を可能とさせ、プライベートポイントを廃止して日本円を学内通貨とする。無論、自分でも言っていたように、すぐというわけではなくそれなりの期間を要するだろうが。

「それはどういう」

「それ以外の答えは、言えないと判断して肯定と捉えさせてもらいます。勿論、沈黙も」

「……」

「やはりありますか。」

……話を戻しますが、僕がこんな事をした理由は2つ」

私は理事長の僅かに引き出された感情を覗き、夢月の本質に興味を引かれていた。

これまでも認めていたつもりではあったが、まだ認識が甘かった。そして改めて認めざるをえない。

——夢月は本物だと。

「まず1つ目は言うまでもなく直近の危機：綾小路清隆の父親対策なのは理事長もご存知でしょう。尤も、こちらもすでに手は打ち終えめました。僕はほとんど何もできてませんが、対面することがあれば余程の阿呆でない限り、彼は十中八九手を退きます。また学校への助力を願うことも最小限に手配したつもりです」

「生徒の力になる。それすら信用できませんか」

「すいませんが、最悪の場合を考えさせてもらいました。外と連絡が取れるだけで、いざという時に取れる手段は現状と雲泥の差です」

信じられないことに、夢月は時に私すら予見しない発想と速度で物事を実現させていく。その恐るべき視点の違いは、ほとんどの者は全てが終わってさえ、夢月が成した真の意味に気づけないだろう。

また仮に最低限の能力を有した上で気づけたとしても、同じ事ができる者はどれほどいるだろうか？ 私の口添えがあったとはいえ、学生の身で単身大財閥の長と話をつけて動かし、可能な限界を見極めて政府をも動かす。神業にも等しい行動力と幸運でもなければできない

ものではない。

これを本当に実現させてしまう手腕こそが、夢月を稀有な存在足らしめている。

「ああ。高円寺コンツエルンや鬼龍院財閥に話を通して動かしたように見せて、鬼島先生の派閥を数十億程度で操って学校に圧力かけたのは」

「いえ。対策を打ち終えている以上、こっちの理由ではありません。どちらかと言うともう一つの理由——学校自体への抑止力が目当てです」

「抑止力？」

「はい。僕はあまりに基準を満たしていない、あるいは本人の同意がある。つまり退学が妥当である。そんな状態であれば反対するつもりはありません。

しかし、例えば生徒を生徒がリストラ……切り捨てるための試験なんてものがある可能性を少し前から考えていました。つまるところ、僕はそれに対抗する為の保険を準備していただけです」

しかしそれは夢月の弱点でもある。

競争原理の視点が無いということは、勝ち負けや才能含め、ほとんどの事象に執着しないという欠点に繋がるからだ。

彼は基本挑まれなければ競おうとも戦おうともしない。だから私でなくとも、それなりの者が勝つ気で『夢月をやる気にさせないうちに』倒そうとすれば、いとも簡単に達成できるだろう。

「確かに君ほどの聡明な青年なら、そう考えるのもわからないでもない。理不尽に思える試験。説明不足だろう方針。不可解な成績の判断基準。

だけど、今はまだ『疑問』に思うかもしれないけど、きつとこの先で分かってくると信じている。こうして直に話して確信した。

君は人の上に立つ資格を持つ者だよ。本来、面接時点で弾かれて然るべき生徒だけど、幸いにも何らかの偶然が作用して入学できたんだね。あるいは天才というのは、君みたいな者をいうのかもしれない」
そんな夢月が友と認めている者以外に対する時、ほぼ同じ変わらない

い態度なのには当然気づいていた。

教師だろうと、醜い振る舞いをしている者だろうと、男女すらも関係なく。

逆に言えば、友と認めない限り、どんな相手だろうと本当の意味で夢月を揺るがすことはできない。周りが何を言おうと我が道を突き進む夢月の性質は、私にとって小気味良く、笑い出しそうなほど面白い。

取るに足らない情報も聞こえてはいたが、これと比べれば些末なことでだろう。

理事長が劣勢：敗勢を悟って自信を溢れさせた風を装い、夢月を持ち上げて小賢しく誘導しようとしているが、そんな引掛かけにかかるとはならない。気に食わないと：間違いだ、理不尽だと確信すれば、あらゆる手段を行使して物事をひっくり返してくる男なのは、あの余興を通して更に明確になった。

これまでの夢月を表面的な情報でしか知れないにしろ、いまだに『ただの才人』と見ている坂柳理事長の見る目の無さが憐れになってくる。

「いや、人の上に立つとか、天才とか、凡人の僕としてはどうでもいいというか、そう言われてもって感じなので。

ただ、自分の矜持を自分で傷つけるような真似だけはしないだけです」

「……………！ 君は」

「それより以前にこの学校は社会の縮図だって聞きましたけど、ブラック企業ばりの騙し合い出し抜き合いが社会って、どんだけ偏ったことを僕ら生徒に植え付ける気ですか。ゲーム感覚もいい加減にしてください。

こっちはその大人のお遊びに退学や将来まで賭けさせられてるんだから、たまったものじゃない」

「……………ククッ」

私が考える夢月の最大の武器は意志の強さだ。当然、かけられた誘導にあっさり気づいて返す。

名声も地位も能力すらも心底どうでもいいと考えている男に、世辞混じりの誘導をかければこうなるのも必定だろう。

ちなみに最後に笑ったのは、監査の「月城」と名乗っていた男だ。おそらく、この場で唯一あの男だけは本質が見えている。これだけで一応、記憶に留めておく価値はある。

しかしそもそも理事長は、夢月を持ち上げた程度で騙されて方向性を誘導・修正できるとでも思っていたのだろうか。思っていたとしたら、あまりにも侮りすぎている。夢月だけではなく、私を含めた夢月の友も全員だ。

——ここで僕が理事長に乘せられたら、協力してくれた高円寺や鬼龍院先輩に対する裏切りになる。そんなの矜持にも美学にも反するしありえない。

聞こえるはずのない夢月の意思が伝わってくるから、口は出さないが。これはおそらく最後まで……。

隠さない凡人の内心程度を察することなど、この私であれば造作もない。

尤も、それ以外も伝わっていたが、夢月が言葉にする前に読み切るというのは無粋の極みだろう。

なぜなら。

「なので、この先で『誰かが』もし僕の友達や恩人を理不尽な目に遭わせるようなら」

夢月の土壇場になる瞬間に見せる輝き。

この私の心すら動かす夢月の啖呵は、泥臭くも美しい。

「——絶対に守り抜く!!! 誰だろうと、一部の者しか納得できない退学なんてさせるものか! それでもやるつもりなら覚悟しろ!」

もう一度見ておきたかった『奇跡』を邪魔しない為。

「つて、坂柳理事長に宣言するためだけに本日はお招きを受けました。お時間、ありがとうございます」

取り繕いつつも手先が震えているのを見るに、怖いもの知らず・常識知らずというわけではないだろう。力関係を見誤る愚か者でもない。

ゆえに、夢月の言動が当然ではないことを私はわかっていた。

天才なだけ、強いだけ、能力が高いだけ。

私ほどではないにしても、この程度の者達ならいくらでもいる。

その者達は天才だから。強いから。能力が高いから。当然のように戦う選択もできるが……夢月は違う。震えるほど緊張し、恐怖しながら、明らかな上位者へ啖呵を切ったのだ。

それは決して当然のようにできることではない。

だから私は改めて夢月の評価を上方修正した。そしてどうして夢月の周りに人が集まるのかまた少しだけ理解が進んだ。

やはりあの時、この私が認めたのは正しい選択だった、と。

父の指示で来た特に思い入れもない場所だったが、こんな男がいるなら面白くなるだろう。

凡人とはいえ、たびたび美しい在り方を魅せる左京夢月は私の友としても■■■■としても不足はない。

86、信頼

あゝ。気疲れしたし、口に出すの怖かった。今回は仕方ないけど、もうこんな貧乏クジは絶対引かない。絶対にだ。メツチャ怖かった。でもとりあえず、言いたいことは言えたいし帰るか。

礼儀には反するけど、これまで外部接触禁止の規則には違反しないよう必ず青娥さんを通すという面倒な工程は欠かさなかったし、怒られる事はあっても大きく罰せられない最低限の保身はしていた。当然、規則の抜け道を使い倒せって学校の教育方針通りに、犯罪や規則違反は犯していない。

だから、後ろ盾も意識しながらグレーゾーンのギリギリで立ち回った僕は、理事長であろうと相当な無理をしない限り排除できないはずだ。なら引き際を弁えて、多少失礼になってもさっさと帰ってしまっただ方がいい。

そしてついでに僕と違って拒否もできただろうに、何故かこんな鉄火場へ自分から付いてきた高円寺に目で帰るか聞くと、小さく笑ってついてきた。

無駄な行動はしない奴だから、何らかの目的はあると思ってたんだけど普通についてくるのか。結局、高円寺は話さなかったけどなにに来たんだ？

僕は責任を追及される流れだったらともかく、理事会で聞かれるだろうことはまず松雄に片付けさせてからきたから、報告と宣言だけしてさっさと退散するつもりだったんだけど。

友達で大口スポンサーの一人でもあるから、いてくれただけでも助けにはなったが、退屈だったんじゃないだろうか。

「ま、待ちなさいー」

「理事長。外部接触禁止とPP廃止に他諸々。あと松雄栄一郎の途中編入の件もありますし、これから忙しくなるんじゃないですか？政治家や財界人の方達との折衝も増えるでしょうし……」

僕のような一生徒にあまり時間はかけない方が、きっと『実験』の

状況は好転しますよ」

「っ！ 左京君！ それでは、あまりにもつたいな」

先に高円寺を通し、僕も出ようとした時、理事長が僕を呼びとめた。ただこれ以上話しても意味がないので、暗に大人同士・お偉いさん達で話してくれと実行犯達へ丸投げする。

予測できる穴埋め案も松雄や青娥さん、ついであつたので生徒会方面へは葛城に託してある為、でしゃばりすぎるのはよくない。引き際を見誤ると本気で僕が危ないかもしれないし、他の領分を犯すのはなるべくしない方が良いのだ。

理事長がまだ何かを伝えようとしているのはわかっていたが、曲がりなりにも総責任者で大人なんだから、僕と遊んでいる暇などないと話を切る。

短くとはいえ、もうお互いに必要な言葉は交わした。生徒と理事長ではどこまでいっても対等にはならないし、続きはお偉い人達とやってくれ。恩もある人ではあるが、どうも友達を侮られたように感じがちよつとムカツときているのだ。

理事長以外に一人、車まで迎えに来てくれた月城さんの雰囲気もヤバくて注意を割かざるを得なかったが、もう僕と会うこともないだろう。だから無礼で攻撃的だとは思っていたが、思い切らせてもらった。

集中して観察していたのでわかる。

月城さんとはかく、この場のお偉いさんは空調の効いたこの部屋で汗が隠せていなかった。また直接会話した理事長は、考え込む時に指を遊ばせる。答えに迷えば机を撫でる。

このようにブラフかもしれないが、わかりやすいサインがあつた。これで押しまくらないのは駄目だ。尤も、後先考えず啖呵を切ってしまったのは反省点である。

でも、ほとんどの外の交渉事は松雄と彼を通じてその息子に全権を渡して、青娥さんという切り札もブラフに使っただけなので、理事長や政治家の先生方、高円寺・鬼龍院2財閥などのお偉いさんの目からせめて僕くらいは吹き飛んでいくといいな（希望的観測）。最後の方

で理事長は誘導しようとしつつ、謎に僕を持ち上げていたが正しく凡人だとは認識できていることだろう。

あとは……集めた金は、使ったぶんと見せ金にしてたぶんの回収見込みも少しはあるし、いざという時の為に保険の手も打っておいたから、返済の心配はないはず。これでよほどの予定外が重ならなければ、物理的なモノはほぼ精算できる。

なんせ交渉過程でそれなりに性質もわかってきた大企業をバックにした保険だ。子供の伝がある学生を裏切つて無駄に破滅させるより、このまま流れに乗る選択をしてくれるくらいには信用している。

しかし今更ながら、2財閥の子女子息がいたとはいえ、政府から学校に圧力をかけさせて、制度を根本から変え、ついでに混乱に乗じて松雄の息子の編入をネジ込ませてしまったことに、自分のやったことながらちよつとビビってる。編入に関しては、松雄の入社時の約束だったのしかたない面もあるが……僕の将来、もしかしてヤバいのではないという思いが湧き上がっていた。

特に扉が閉まるまで、細目を開けて鋭く見てきた月城さんに手の震えが止まらない。勿論、クスリとかの禁断症状ではなく純然たる恐怖である。

こちらに関しては想定がまだ甘かったと痛感しつつ、僕は高円寺とともに理事長室を後にした。

これほどの規模の学校の理事長だと、腹心？懐刀？もメツチャ怖いんだとか、葛城みたくもつと石橋を叩いて渡る慎重さが欲しいところとか、なるべく自分の考えを逸らしながら。

最善の速攻終了がなされなかった為に、わざわざ手間を掛けて途中から船上試験を真面目に受けたのは愛里の周りに人を増やすのが主目的だし、少しでも僕に注目を集めて松雄への援護射撃する為でもあった。また愛里が単独にならないように、陰ながら早苗や椎名、櫛田に頼んでいるのも、同級生以上に学校への警戒に他ならない。

それほど僕はこの学校を警戒している。

少なくとも、いきなり自国でやるには不安だからと、実験するよう
にまず世界初のL〇B T法案とか民営化とかのアレな政策を他国に
やらせる某国と、右から左とばかりにそれを実行する某国くらいに
は。どちらの国とも似た匂いがするからだ。

でもこれでその警戒は必要だったと確信できた。

僕含めた友達の中で学校から不要と判断されるのは、僕が何もしな
かった場合はおそらく愛里〈僕&東風谷〉四方の順。理事長との話か
ら読み取れたこの方針が正しければ、これからもできるだけ愛里周り
は固めておいた方がいいだろう。

そんな事を考えながら理事長室から出ると、鬼龍院先輩に……何故
か生徒会一同+αが勢揃い（担任などの教師もいるし、多分知らない
奴は役員だろう）していた。中には、ついさつき別れたばかりの一之
瀬と葛城もいる。

「左京・ はははっ!! やってくれやがったな、てめえ! ふははは
ははっ!」

その中であつて、真つ先に駆け寄ってきて上機嫌にバシバシ僕を叩
いてきたのが、ほぼ話したことのない副会長なのはどういうことだ?

これでは可愛い女子が近づきづらいだろうが。どうせなら橘書記
あたりに、キヤー左京君素敵! とか、カツコイイー抱いてつ! と
か言われたいんだよ僕は!

恐怖心が雲散霧消したことには感謝するけども。

「なんかやらかすなら一言言えつつただろ!? 学校制度の根本改革
なんて面白そうな話を独り占めしやがって左京この野郎! しかも
決闘とか、外を利用するとか、プツ: ははははははっ!! 最高だぜこの馬
鹿野郎!」

「ちよちよちよ……痛い痛い! 副会長痛いです!」

「うつせえ! 俺のテンションを限界突破させたお前が悪い!」

わけのわからないことを言いながら、僕にヘッドロックをかけてく
る南雲副会長。

周囲も気にせず我関せず歩を進め、いち早くこの場から離脱して
いった高円寺。

副会長に先を越された、みたいな顔をして固まっている鬼龍院先輩。

助けてくれる気配もない唾然としているようなギャラリィ。

結束力も統一性の欠片もない集まりである。

あつ、やべ。高円寺に渡しておく物があつたんだつた！

副会長に、なんだこいつ？ とウザく思いながらも、ある用件を思い出したので僕はなんとか副会長を振り払い、去りかけていた高円寺を慌てて呼び止める。幸い、副会長は堀北（兄）が止めてくれた。

「高円寺！」

「ん？ まだ何かあつたかね？」

「悪い！ 約束の物を渡すのが遅れた。これに入ってるから確認してから収めてくれ」

「約束の物？」

個人資産の投資と、実家に口添えしてくれる代わりに、2000万PPを用意するのが僕と高円寺・鬼龍院先輩が交わした約束だ。期限は高校卒業までだったが、用意できた以上は早めに渡しておいた方がいいだろう。

中身は当然、外に学校の目を向けさせておいたついでに、桜プロダクションと喫茶・芳香で報酬や仕入れなどをフル活用してマネー（ポイント？）ロンダリングした綺麗なポイントだ。半分くらいは松雄栄一郎の編入の為に使ってしまったが、それでも二人と約束した額には届いていた。

これは愛里：雫の人気爆発のおかげである。

雫の魅力もさることながら、青娥さんと松雄が奮闘したあれがなければ、少し足りないまま学校に対策されて、特別試験で得た100万や愛里の50万に手を付けて補填することになったかもしれない。それでも足りない可能性はあつたが。危ない綱渡りだった。

僕は他に決定的な情報が伝わらないよう注意して手早く説明しながら、「約3000万PP」が入った天文部会計用のカードを高円寺に差し出した。

「……まさかあの程度の口約束と投資・口添えだけで、これほど早く用

意してくるとはねえ。本当に予測を外してくる男だよ君は」

「高円寺と鬼龍院先輩がいなかったら、こんな短期間の計画では破綻してただろうから当然だろ？」

「……っ」

「僕は本当に感謝してるんだ。ありがとう！」

このお礼も心からだ。

視界に捉えている鬼龍院先輩も含めて、僕はできる限りの感謝を二人に伝えた。

高円寺はあの程度と言うが、一般人には到底不可能な手助けをしてくれた。また鬼龍院先輩だけではコネクションが足りず、高円寺だけでは始動が遅れただろう。どちらかがいなかったら、松雄の頑張りがあつたとしても達成には当初予測の冬前までかかったはず。

つまり対策を打たれる前に速攻できたのは、二人が協力してくれたおかげなのだ。

前に言われた鬼龍院先輩の見立てでも成功率4割程度だったらしいし、本来なら妨害なり横槍なりがあつたとすれば感謝しても足りない。

「それと宴の負けもあるから、高円寺はそれを持つ代わりに天文部の部長か会計どっちかに就いてくれ。肩書だけ付けとけば、部活用のカードを持つ名目は立つ。勿論、自分のカードに中身を移せば、面倒事は増えるけど肩書はいらない。

どっちでも好きな方を選んでくれ」

生徒個人のカードだと、ポイントや金の動きが学校に筒抜けになる。

鬼龍院先輩には意向をあらかじめ聞いていたからそのまま振り込んだが、高円寺が面倒事を嫌うなら肩書を付けて風よけになる程度のアフターサービスの選択肢はある方が親切だろう。ここまで恩を受けたのなら、できるだけ返せるようするべきだ。

当然、肩書を渡したからといって、何かを要求しようなどと考えてはいない。高円寺がもし部長の席を望んでも、言われない限り仕事はこれまで通り僕がやるつもりだ。

恩には恩を返すのが、僕の流儀である。

「——くっ！ ははは！ ハーッハッハッハッハ!!」

そしたら確認してすぐに大爆笑された。

「ジョーカーを引いておいて！ ははっ。そ、そんな、そんな……バ、馬鹿ツ：馬鹿正直に！ ふはっ！ やりきった清々しい顔で自分の利益を全て差し出してくるとはねえ！ ふっははははは！ ハハハハッ！」

高円寺は腹を抑えて身悶えるように、記憶の限りでは最大級に笑い転げる。

日頃からよく笑う奴ではあるが、ここまで大笑いして人を：僕を『褒めてくる』高円寺を初めて見た。いや、言葉だけなら悪口にも聞こえるんだけど、常に優雅さを意識してる高円寺の口からスラングっぽい言葉が出ると、貶す意図を感じないのもあつて遠回りな称賛にしか聞こえないのだ。つまり早苗や龍園と違ってムカつかない。

ただ、なぜ突然こうなったかは半分以上不明である。それほど高円寺を理解するのは難しい。

僕が疑問符だらけになっている間も高円寺はしばらく笑い続けた。笑う理由がわかっていっているような顔をした鬼龍院先輩が寄越したミネラルウォーターを当然のように飲み干すまで。

2人の絵になるやり取りを経て高円寺はようやく落ち着き、こころなしか真剣風味に口を開く。

「よく覚えておくといい夢月。」

たとえ他の誰が認めなくとも私が認めるよ。君が勝敗にこだわらないまま成し遂げた事と併せてね」

「……？」

「誰にも異論は唱えさせない。天文部部长は君で、会計は私が引き受けよう。」

この私を動かしたことを誇りたまえ」

「？ おう。サンキュ。仕事はないようなものだけど、高円寺の好きなようにしていいからな」

「ふっ」

僕はただ約束を守っただけなのだが、この意味深で別の意味が含まれてそうな言葉によくわからない迫力？説得力？を感じる。なぜなら高円寺の口元には笑みが形作られ、眼差しからは敬意すら浮かんでいたからだ。

それは僕に結構な衝撃と困惑を齎した。

だが具体的な形にできなかつた僕がとりあえず普通に答えを返すと、高円寺は再び小さく笑って今度こそ去っていった。

「ふふつ。私も聞きたいことはあつたが、今なくなった。それではまたな後輩」

「ふえ？ あ、はあ。先輩も今回はありがとうございます」

その高円寺の後姿に僕の勘が良くも悪くも強く反応して困惑しているうちに、自由人同士で共鳴したのか鬼龍院先輩まで去っていく。それはなんか不思議と彼らからの『信頼』を感じさせるもので――。

まあ先輩の場合、2020万PPを振り込んだ事についてが用件で、高円寺との会話から全体像を察しただけなのかもしれない。

だからというわけでもないが僕はもう止めることなく、いつになく上機嫌な二人の友達が去っていくのを見送った。なんとなくランナーズ・ハイになったかのような気分になりながら。

87、命名決闘法案

「さて、僕も帰るか」

「いや!? 帰るなよ!」

「え?」

やることは全て終わってみんなもいなくなったので、そろそろサバイバルと船旅の疲れを癒そうと寮に帰ろうとしたら、予想外にも誰かに腕を掴まれ引き止められた。南雲副会長だ。てか、生徒会のみなさんがいまだ残っていた。

……すっかり存在ごと忘れてた。高円寺達が濃すぎるせいである。

「お前には説明してもらいたいことがたくさんあるんだよ左京この野郎!? 特に新評価と決闘だ! ふはっ! それが生徒会もすっ飛ばして大改革したくせに、後始末だけこっち投げて無視して帰ろうとするとかどういう見だコラ!?!」

「ちよ、早い早い。早口すぎる上に笑いが混じって、なに言ってるか入ってこないですって!」

「いいから来いっ! 臨時の生徒会室でじっくり申し開きしろ!」

「申し開き!? いや違うんです! 僕は完璧で幸福な生徒ですから、無視とかじゃなく忘れてただけっていうか」

「より酷いじゃねえか!」

わからないまま弁明したことで、副会長の扱いが雑になり怒られてしまった。とことん生徒会と相性と間が悪い僕である。

そうして何故か前と違う場所の臨時? 生徒会室まで連行された後、なんだかテンションが不安定な気がする(突然笑いだしたりする)副会長含む生徒会一同と教師数名に囲まれた。といっても担任達、教師は口を出してこなさそうだが。

周囲の空気に微妙にビビっていると、堀北が口を開いた。強引な後輩が、人畜無害な後輩に狼藉を働いている現状を見かねたのだろう。すでに疲れてる風な感じに助け舟を出してくれた。

あ、堀北は7月の長時間に渡る説教以来、僕の友達認定したので目

の前にいる限り彼に敬語は使わない。年上で生徒会長とはいえ、友達に一步引いた態度はない。友達の妹である堀北さんについてはその限りじゃないが。

「はあ…左京。さっきの二人とのやり取りや、外部接触禁止とPPの廃止を学校側から通達された件についても聞きたいが、南雲が最も聞きたいのはおそらくこの2つの提案だろう」

「この2つ？」

なんかあつたつけ。

というか、どれだ？ さっきの送迎車にいる間、ゲーム制作の合間に用意しておいた案を葛城にもいくつか送信しといたからそれ関係だとは思うが、葛城はそれを提出したんだ？

「まずこのCPをクラス成績に、PPを個人成績とする『純評価ポイントシステム』。

そして個人・クラス・学年問わず、いずれかのポイント・要求・成績を賭けて、誰でも誰とでも自由に勝負を申し込めるといふ『命名決闘法案』。

2つの案もそれ以外の案もよくよく中身を見れば、確かに実力主義の観点には立っているが……」
「あー、そのことだったのか。

個人的に単純に制度を破壊するだけなのはちよつとナンセンスかなと思つたんで、不備の穴埋めとしていくつか提案したんだよ。なんでもかんでも隠したり回りくどくする必要はないだろ？」

確かにこれは副会長の興味を引く可能性は高かつたか。

今は静かにしてるが妙に鼻息フンフンになってたから、よほど彼の内角を抉る提案になったようだ。

……なんてこつた。これでは面倒くさそうな副会長に目を付けられてしまう。

回避策は…今は誤魔化すかやる気なさそうに説明するくらいしか思いつかないな。聞いてきたのが堀北だから説明するしかないけども。

それと堀北の言い方からすると、どうやら葛城は早々に僕が送つた

メールの案を全て生徒会へ提出したらしい。

好きに利用するようメールには記載しておいたのだが、自分の有利な案だけを伝えたり小出しにする……ある意味、必要な狡さには思い至らなかつたのかもしれない。そのせいで結果的に副会長の琴線に触れる案が伝わってしまい、副会長の変なテンションへと繋がったのだろう。

ちなみに堀北が聞いてきたのは、その案の中の2つ。

まず最初に口に出してきた純評価ポイントシステムは、PPをただ廃止にするのもつたいたいと思つて、再利用する一案として用意したものだ。

基本的にはCPで月収やクラスが上下することに変わりないが、それに学業成績など個人で査定される新PPを主に優等生のセーフティにする案である。

例えば、2000CPのクラスなら通常はポイントの1000倍で2万支給だが、そのクラスで60新PPを所持する生徒の場合だと500倍の3万支給。つまり月収：支給額が多い方のポイントが適用される、みたいな感じ。

これなら5月のDクラスのようにCPが0になつても、真面目にやっていた奴には個人成績のぶん、最低限のリターンが確保される。

そもそも船や無人島、シヨッピングモールにプールや広大な運動場に加え、生活費など生徒の為の設備に莫大な額を投資しといて、成績優秀な生徒にまで実力主義とか連帯責任とか言つて割りを食わせるとかありえない。金は使うべきところにはケチらず使つた方がいいんじゃないか、つていう提案だ。

これは5月にSシステムの説明や一之瀬銀行の話を聞いた時から、タイミングが合えばどこかで提案しようと思つていた。

また新PPの多寡で、特別試験などで少しだけ有利になつたり、定期テストの赤点退学に少し融通が利かせてくれたり、生徒会入りする資格を得られたりといった特典を付ければ、頑張っているけど運動音痴で学業はそこそこ以上、またはその逆、あるいは特化型の奴のフォ

ローにもなる。尤も、こちらは明確な苦手分野がある早苗・愛里や椎名用に考えておいた裏道でもあるので、詳しく全部は口には出せないが。

まあ、連帯責任の巻き添えなんかの問題が多いCPも、これがあれば少しは安定するだろう。

そして命名決闘法案。

こちらは最近、妙に勝負事に巻き込まれることから思いついた。

要は試験とか以外で血の気の多い奴らのガス抜きと、上位層のやる気を減退させない為の案だ。このままだと四方や高円寺などがいつかひっそりと背を向けてしまう気がしていたので、格上な奴用の刺激剤である。

だって、ただでさえ上の生徒も下の生徒も能力『平均』を中の下の中の上にする的な教育方針の学校なのに、騙し合いなどの盤外対応まで加わると、本当の上位層は凡人に埋もれたり、やる気を失くしてしまう。

高円寺は明確に、四方にも微妙にその傾向が見られるので、何度か僕という凡人の対抗策を見せてテコ入れしたが、本来は能力が近い奴ら同士で競い合う方がいいだろうという考えだ。

他にも、同じ時間を使った努力の成長率を倍と仮定して数値化した場合、10の得意分野と1の苦手分野では実に18もの能力差が生まれるという考えもある。

勿論、これは単純な仮定だが、弱点や欠点を克服するより得意分野や好きな事を伸ばす方が、やりがいも実感もあるし、楽しく効率的じゃないかと個人的には思う。誰だって好きな事なら頑張るのも苦じゃないから、目に見えて成長率に差が出てくるのだ。

僕としては、苦手or嫌いな分野を『必要以上に努力しろ』なんて考えはクソ食らえである。

あと一応、中身には意味のない勝負はNGとか、事前に勝負方法や景品を双方で取り決めて、負けた場合には余力があっても盤外攻撃や場外乱闘はなしで潔く負けを認める。等々、スポーツマンシップ的な美学も組み込んで取り繕っておいたから、採用されれば1芸特化系の

生徒の有効性も少しは認められるかもしれない。

さしあたっては、船上の音楽対決や知られてないけど無人島で清隆とやった勝負が、命名決闘法案の先駆けみたいにできそうか。

微妙にこの学校らしくはないが、あつた方がちよつとは気分良く納得できるようになるだろう。

ともあれ、光るモノがある奴に技量を十全に発揮できるだけの条件を整えるのが、キャットルーキーに至ることに限らず、ブラック環境に陥らない道筋だ。理事長や生徒会長が無能なら、どうあつても捻じ曲げられて却下の方向に持っていかれたかもしれないが、少なくとも無能ではないのは幸運だった。

僕の経験上、無能なお偉いさんは改善案が出された大抵の場合、有能な下に席を取られるのを恐れて冷遇するものだからな。それならそれで打つ手も変える必要が出てきていた。

まあどの案にしろ、そのまま採用もないだろうが。

と、内心思いながらプレゼンみたくぎつと聞かれた案について説明していると、先程からなにか聞きたげだった葛城がついに話に入ってきた。

「左京、何故これを俺だけに送って来たんだ？ 連絡先の交換をしているのなら、会長や南雲先輩、同じクラスの一之瀬にも送るのが妥当だろう？」

「葛城に送ったのは……あー。試験結果で、その、ええつと」

「……むう。左京なりに気を使ったということか」

「お、おう。なんというか、船であんなこと言っておいて…不義理だったような、貧乏クジ引かせちゃったというか……。その、悪かったなって」

「ふつ。それはお前が気にすることではない。俺もお前には助けられているからな」

うんまあ。この点は口が重くなる。

葛城は心の整理をしてたっぽいし、聞かれるのも予想していたけど、やっぱり言いにくい。

生徒で葛城だけに送った理由はいくつかあるが、僕的に重要なのは筋を通すことだったからだ。

無人島でも騙し合いゲームでも、戸塚とちよいちよい手を貸してくれたり、真面目で真摯に取り組んでたのに、方向性は違えど僕と同等クラスに貧乏クジな結果。これで葛城が責められるようになったら罪悪感が湧くので、少しポイント稼ぎの手伝いして薄められないかな、と。

今の返答に加え、宴に来てくれたことや送迎車での態度を考えても許してはくれてるっぽいけど、それに甘えるだけなのは僕の矜持が許さない。

尤も、学校が故意に開けていると思われる穴の放置は元々気になっていた。だから落ち度の少ない奴への巻き添えを減らせるような案を多く混ぜたのだ。公平な葛城の性格的に、問題や課題などのきつかけさえ示唆しておけば、どう出ても対処はしてくれただろう。

そんな打算もなかったと言えば嘘になる。

それとぶつちやけこれらの案は、何故か凡人たる僕に無理ゲーな勝負が何度も飛んできていた不公平感を、他の奴らへおすそ分けする為でもあったりする。

またこの2つの案は、生徒同士ゆえに総CPの変動もないし、ポイント獲得手段になるので学校にも生徒にも特に悪いことではないという計算の上だ。ただ学校や生徒会は、企業の査定システムに近くなる為になりに整備や処理が面倒になりそうだが、実力主義を掲げる指導者集団ならこれくらいはやってほしいという願望も混じっている。

丸投げみたいでも、社会の要である会計や財政を知る上で実践に近い経験は重要だろう。

……まあ、葛城への筋の通し方とは別に、理由が多岐にわたりすぎてて説明が面倒くさいわけだが。

こうした理由から僕が歯切れ悪く言い訳していると、ちよつとクルダウンしたと思われる副会長が話を変えてきた。

正直、助かったと思いい、副会長関係の話題を記憶から引つ張り出し

て強引にそちちへ移行する。

前に話した事と堀北から聞いていた情報から考えると、一時的にでも手を貸してくれる可能性は副会長が生徒会で最も高い。多少でもやりあえるところを見せておいた方がいいだろう。

「しかしさつきから聞いてれば、やったことの割には思ったより軽い理由だなおい。命名決闘法案はこのままでも結構考えられるし、成立したら例えば俺でも気軽に会長へ勝負を挑めるようになる革命的な案だぞ。さつき見た時は思わず笑っちゃったほどなんだがな」

「でも副会長もなんかやろうとしてるんでしよう？ だったらこれを叩き台にして、もっといい感じに修正して堀北を説得してくださいよ。それ聞いてたから提出した面もあるんで」

「……ハッ。俺を試してんのか？ 伝統をぶっ壊すついでってか」

「んな大げさな……。この2週間で何回かほぼ負け確な事態になって、それならまだ勝ちの目もできる余地があった方がいいなって考えただけです」

ただ副会長は、前に巻き込んでもいいよ的なことを言ってきたんだから、挑発と誘導で返さないでほしい。今回は一応「葛城に向けて」ちゃんと生徒会へ情報発信したんだからさ。

と、僕の誘導返しを聞いて、今度は一之瀬が思い至ったような顔で疑問を口に出してきた。

まあ彼女からすると、自分の案だった銀行関係の副次効果（あれ？ 5月時点では僕の勘違いだった？ ……まいったか）を勝手に派生させた部分もあるので、何か違和感があるのかもしれない。あの宴の次

の日だから、今はあっちの印象が強いだろうけども。

「あつ、あの音楽対決……？」

「そ。一之瀬や葛城もあの宴にいたからわかるだろうけど、どうやっても片方の勝ちがなくなるような勝負は普通はつまらないだろうなって」

「……」

ともあれ、南雲副会長がニヤニヤ笑いで本命をズラしつつ仕掛けてくるのと、一之瀬がどう思ったかは少し気になるが、これで葛城と一

之瀬の思考を逸すことはできただろう。

ついでにポイントこそ賭けてなかったけど、あの宴みたいな勝負を試験で繰り返されるだけでジリ貧になっていく可能性。それもクラスリーダーとしては無視できないはずだ。

いかに優秀だろうとこうして考える事の種類を増やし、マルチタスクを一定以上流し込めば口数は減らせる。友達やリーダーにするこどもでもないが、現状を落ち着かせるにはしかたない。

聖徳太子じゃあるまいし、一気にたくさん聞かれても僕のような凡人には答えきれないのだ。

しかし説明も終わりに差し掛かり、場が落ち着いてきたかと思えば、一難去つてまた一難。

「……お前はいつからどこまでを見据えていたんだ？　こんなものはすぐに用意できるものではないだろう」

満を持して介入してきた堀北生徒会長である。

質問攻めはマジで勘弁してほしい。もう許容量いっぱいなんだけど。

「えっと、いつからと言われるとだいたい6月の頭あたりから形になってきたんだけど……どこまではー。は、ははは。で、出たところ任せの思いつくまま手あたり次第に対応策を考えてた。って言ったら……堀北は怒る？」

正直、これが僕の本音だ。

できるだけブラック環境に陥らない為の多種の案を用意しておいて、ちょうど良い機会が来たので放出しただけだったりする。無人島の最初に真嶋先生が説明しつつマウント取りに来た事で、『そう』だと確信してしまったので。

「……怒らない。というより今は呆れと驚きが勝っていて、逆に何も言葉が出てこない」

「6月の頭？　あの流しそうめんやってた頃？　もしかしてその少し前に銀行や信用創造の案を言い出してきたのって……」

「俺と一之瀬が生徒会入りする制度を作り出す案も、その副産物の一

つだったというわけか」

「ククッ」

でも本音で返して、言葉が出てこないのは良いことだった。

堀北は説教マニアかってくらい話す割合の半分以上が説教で構成されてるからな。プライベートではまだしも、公の場では読み切れない副会長と葛城・一之瀬も合わせて、沈黙か考え込んでいるのが僕の精神安定上は最も楽である。

「ちよつと左京君！ さつきから、なに会長にタメ口聞いてるんですか!?!」

しかし、堀北を黙らせたのがまずかったのか橘書記にツッコまれてしまった。他にも口は出してこないが、名も知らぬ役員達？も同意見なようだ。

それでしかたなく僕から見た事実を言い訳に使う。

「あ、いや。橘書記はあの時いたのでわかると思うんですが。」

葛城達が生徒会入りした時、僕って堀北から長々と説教されたじゃないですか。んで、それが終わってやっと帰れるってなった時に、あとは戸締まりだけだったので堀き…会長を飯に誘って話したら、なんだか色々面倒になりましたね？ これから遠慮しないとも言われたし、同じ釜の飯を食って友達になったのなら敬語はもう不要かなと」

「俺が友……だど？」

……まさか友人と認識されたからこうも突然気安くなったとは」

そんな迷惑なのか嬉しいのかわからない形容し難い顔で零されても、こうした認識は返品不可なので諦めてもらおう。堀北はすでに僕の友達枠に組み込まれている。

一方、橘書記への僕の返答に少し考える仕草をした堀北だったが、何を思ったか顔を上げると追認と取れる言葉を放ってくれた。

「橘。左京はこのままでもかまわない。むしろこの男に謙られると不気味だ」

「会長がそう言うならいいですけど、私や南雲君には敬語を使うのに

……」

「というか、なんでそうなる？ 会長に説教されて飯に誘う？ そのまま話したら友達？ 今回の事と併せて意味がわからない。なんなんだコイツ……」

僕の言い訳を聞いても数人の不満顔は崩れなかったが、堀北がOKを出しているのを見て渋々態度を軟化させた。橘書記と他1名はまだグチグチ言ってるが、流星は生徒会長である。

愛里：と多分早苗が世話になってる人だから、理解してくれて助かった。他はともかく、なるべく橘書記からの不興は買いたくない。もし堀北がタメ口OKじゃなかったり、明確に不快な素振りを見せてたら、普通に敬語に戻すところだ。

面倒くさいことにならなくてよかった。

この後も、執拗に粘着してきた南雲（コイツに関しては、あまりにウザかったので呼び捨て&タメ口にしてやったがスルーされた）を躲しつつ、ただひたすら新制度に移行する準備作業に、僕が学校&葛城経由で提出した提案の質疑応答と細かい部分を詰める生徒会での作業に巻き込まれた。

しかも、左右をピツタリ南雲と一之瀬に貼りつかれるオマケ付きだった為、いまのところこの学校で唯一と言つていいストライクである橘書記と楽しくお喋りすることさえできなかった。

なぜなら南雲と一之瀬が、競うように僕のやったことを細かく聞き出そうとしてきたからだ。しかも一之瀬に至っては説教混じりで……。

それにしても、南雲は知らないが、なんか一之瀬の押しが強くなっている気がする今日この頃。

でも最近セクハラしまくられていい加減嫌っているだろう僕に、その押しの強さを発揮しなくてもいいだろうに。クラスメイトとはいえ、嫌っている奴にも張り付こうとするそのドMな性癖をもう少し抑えないと、いつまで経ってもまともな本物の彼氏ができないぞ。

まったく先行きが不安になってくる残念な学級委員長である。

ともかく、今回はすでにほとんど終わった事なんだから、なにをやったかなんてどうでもいいだろうと適当にはぐらかせたが、次があるなら何らかの対策は必要かもしれない。

まあ僕のことだけなら別に話しても良かったけど、青娥さんや高円寺などに迷惑かかる部分は伏せなければならぬ。嘘をつき通せる質でもない為、面倒でもいちいち「言えない」と言うしかなかったのだ。

なので、他と交流する余裕はできなかつた。

それはそうと、折角のまともな女子（橘書記）と話せるチャンスをついにしてくれた2人は、僕に後腐れなくやれてお互い楽しく性欲解消できる3年生以上の女子を紹介してくれるまで絶対許さん。どの道、橘書記に相手がいるのは一目瞭然だから、行けたとしても友達止まりだという事実からは目を逸らすのである。

なにより、中身が残念チャンピオンだろうと、確実にモテる容姿とステータスをしてる2人だけになおさら腹が立つのだ。

ただ僕は常日頃からCOOLでダンディーな大人なので、心の中で生徒会室の安寧を願って反撃せず、人知れず神様に祈りを捧げることですり替えを図ることにした。

できるなら予定のなくなるはずの秋以降に！

このモテない僕に祝福を！

真面目に相手するのが面倒くさくなつたから、現実逃避していたともいう。

88、月

最近、たびたび言われるようになったのだが、僕は凡人という言葉を利用して自覚がある。

無論、自分が真実そうであることに疑いはない。

しかし、この行為には何か考える必要がある時と余裕がない時などに、改めて自分に、ポカをしてないか、穴はなかったかと問いかけることで調子に乗りすぎるのを防ぐ効果もあるのだ。

これを挟むことによるメリット：いや、デメリットを抑制する効果はなかなかのものだ。

その為の鍵とも自己暗示とも言うべき言葉が『凡人』である。

一例を出すと、僕の『俺』時代、新社会人だった頃に一度デカいミスをして、しかし大した被害もなく事が終わり、チームや会社は安堵感に包まれたことがある。

大きなミスをしてしまったのに運良く事態收拾してしまうと、反省も見直しもせずに感情が落ちていくのが大多数の人間だ。僕もその例に漏れず、終わったような気になってしまっていた。

そんなみんなで「大事にならなくて良かったな」と笑い合っていたところに当時の上司登場。

まあ当然、滅茶苦茶怒られるわな。で、社内は勿論、取引先や関係者に謝罪行脚をすることになったとさ。

この時に、自己分析する限りでは頭も発想もそう悪くないけど、危なっかしい部分も目立つ自分の特性に初めて気づいた。

だからそれ以来、自分は凡人だからと繰り返すことで、助けてくれた人達への感謝と多重チェックだけは忘れないようにしている。案外、それだけで責任やリスクの重みに潰されれないものだ。ついでに大穴に向かってしまった場合のブレーキにもなってくれる。

つまりポカをしても対応を誤魔化さないことが、成功率を上げ、失敗を減らす事に繋がるということを知った。

もつと言うと、成長に繋がっていく学びとはこういうものなんじゃ

ないかと僕は思う。

ところで関係ないと思いたいが。

前に聞いた会長や一之瀬のやり方だと守りたいモノを守ることは可能かもしれないが、守られたモノにとってはどうなんだろう？ 誰だろうと、何だろうと、恩や好意は感じても同列な存在として並び立てるようになるとは思えない。本質は変わりようがないし、成長の芽に日陰を作って腐らせるようにならないだろうか？

正直、あいつらに守られる可能性が高い奴……最も会長や一之瀬に近く見える橘書記や白波などが、似たような失敗やミスを犯してしまう気がする。しかも成長する機会からも守られてしまうから繰り返しだ。

あくまで僕の推察と経験によるものだから、そもそも失敗しないとか、成長タイプが違うから問題ないとかあるかもだけど……。

本当に関係ないと思いたいが、会長や……それに一之瀬と真面目に話すとどうにもこの辺に勘が働いてしまう。なんというかいざという時に公私を分け『すぎる』というか、常に自己犠牲の……守り『すぎる』手札を入れている奴の匂いというか。

だから彼らには苦手意識を感じたり、全面的賛成ができないんじゃないかと推測している。ただ僕が思い込んでるだけかもしれないが。

朝——。

それは大抵の学生や社会人にとって憂鬱の始まりといえる。

しかし夏休みである今は、とても清々しく目覚めることができた。

晴れやかな気分で知る現在時刻は14：30。

……朝やないやんけ。ちよつと寝すぎたようだ。

8月15日。

2週間の旅行↓生徒会での缶詰作業の翌日は、世間一般ではお盆真っ只中。

尤も、どちらかと言うと神道寄りな僕にはほぼ関係ない行事だ。寝

正月ならぬ寝盆しても問題ない。某教授も祝日に働くなんて非国民のすることだと言っていたから問題ない。なんかさつきから端末が鳴りっぱだが、問題ないといったら問題ない。

てか、人間の適正仕事時間は週16時間だと最新の研究結果でも出ている。どんだけ超過すれば気が済むんだ。マジでこの国の人間は子供時代から働きすぎる。

だから今日は、雨ニモマケズ風ニモマケズ、自堕落に過ごす心を決めている。人間失格とはまさに僕のことなのだ。

これにはダメ人間と思いたくなる者もいるだろう。

しかし少し待つてほしい。布団に潜る時、次は目覚める事ができるのか不安に思う僕を無理矢理目覚めさせるのは非道というものだ。丸一日睡眠の誘惑に抗うのはそれほど難しい。

つまりだ。用もないのに僕は布団から出たくないということである。二度寝サイコー！

まあこうなっているのにも一応理由はある。

2週間の旅行が僕達のスケジュールを圧迫しているのだ。明日から昼・夕の1日2回分で5日連続勤務なので、僕は勿論…多分愛里も今日は充電期間に当てていることだろう。

よし。これだけ力説できる理論武装を用意しておけば、クーラーの効いた涼しい部屋で寝てた言い訳には充分といえる。

ということ、このまま明日まで寝直すことにしよう。おやすみ。

16日の昼前、僕は喫茶・芳香へ向かっていた。

すると、同じように向かっているとされる「2人組」を見かけたので、いつもと少しパターンを変えて声をかけてみる。

ベテランのチャラ男っぽい南雲副会長と橋本、ついでに船で見かけた黒歴史清隆をトレース。これに独自のアレンジを加え、足して4で割り、流れを構築してから僕は『愛里』に声をかけた。

「愛里ー！…こんちわっ！」

……じゃなかった。姉ちゃん可愛いねえ。僕とお茶しない？」

「……」

「こんにちは夢月君。」

「ところで……なに、その…ナンパみたいなの」

「お茶しない?」

「あ、これループするやつだ。」

「……えつと今からバイトだからちよつと。ていうか、それは夢月君もなんじや」

「そうか。まあ当然、同じ境遇な僕も今ちよつと無理なんだけど」

「自分から誘っておいて!」

「お、スルーされるかと思つてたけどノツてくれた。」

黒清隆とアレンジ分を混ぜたせいかわな事になつていたが、これは茶化すしかあるまい。

なぜなら夏の日差しの下、スタイルがヤバすぎるのに薄着な愛里といて、バイト中にムラつときたらコトである。会話内容だけでも冗談染みていけば、ギャグ時空へ持つていけるだろう。

「なんだ愛里。やつぱり僕とお茶したいのか?」

「うくん。け、結構です?」

「イツエゝス!」

「あ、僕もこれからバイトなんで結構です」

「なんだつたのこの会話!」

「暇つぶし」

「………全く変わらないよ、この人。旅行ではなんというか………凄い? 時もあったのに」

僕の内心も知らず(知られたらマズいが)、呆れたような雰囲気を出し始めた愛里。

これならうっかり告つてしまう事態には陥らないはずだ。

愛里には、きちんと自分の魅力を自覚して、モテない男にも嬉しそうに微笑みかけるのは自重してほしい。

「で、私がいるのに無視して愛里さんをナンパする理由をそろそろお聞きしても?」

そして最初からいた早苗に対し、いなかっただかのように振る舞つたのも表向きの理由がある。

「一言で挨拶しながら、異変がないかチェックできるじゃん。なんかあったら、流石に早苗が反応するだろ。」

「ついでに愛里だけナンパしたのは、単純に初対面の時のリベンジかな」

「あの時の……」

「え、そうなんですか？ 愛里さんと夢月……って、最初はそんな風に声をかけられたんですか？」

「う、うん。ちよつと事情があつてね」

「……ああ。これが後に繋がってくるんですね」

「また裏よりも表が深い理由の場合、軽く触れることで影響もチェックできる。こうして早苗に打ち明けられる（バイト時間が迫ってるから今は無理だが）レベルなら問題ない。」

「でも想定していた異変についてツツコまれると面倒なので、微妙に逸しておく方がいいか。」

「まあ、瓢箪から駒で愛里とデートできる可能性にもワンチャンあるかと賭けてたから、意図して早苗を圏外に置いてもいたが」

「夢月さんにナンパされるのもムカつきますが、選ばれなかったらそれはそれでムカつきますね」

「うっわ。お前、それ面倒くさい彼女ムーブじゃん。ものすごい似合うな早苗」

「ふっ。夢月さんにもわかりませんか。私の魅力はやはり私が最もわかってるんですね。しかしこの完成された美貌がわからないとは哀れなことです」

「お前、そのご自慢の顔にニキビできてるぞ」

「えええええっ!!! ど、どこです!? 美の化身とすら謳われる現人神のどこにそんな」

「嘘」

「僕の指摘に、お綺麗な顔面を崩壊させて慌てる早苗。」

「そこへ端的な真実をぶち込むと、瞬時に冷静さを取り戻して人を殺しそうな目で睨んでくる。」

「……………今日を夢月さんの命日にしたいんですか」

いつもより格段に低い声で零された言葉から漏れ出るモノを感じて、死の宣告かとブルっちまつたぜ。

疑問形で聞こえないあたり、対応を間違えると半ギレがブチ切れになりそうな恐怖を感じる。

「わ、悪かったよ。ただ…その、あまりに調子乗ってるナルシストがウザくて、つい」

「遺言はそれで良いんですか……?」

「は、ははは。早苗は冗談が上手いなあ!」

「……」

無言になり、ズイツと顔を近づけつつ、震える拳を大きく振りかぶる早苗。

「ごごごごめんて!」

だから無言で拳を握りしめるな。ジョークのつもりだったんだ。さあ、握り固めた拳を解いておくれ。仲直りの握手しようじゃあないか

「……………次はありませんよ」

「雉も鳴かずに撃たれまいに、つてきつとこういう時に使うんだろかね」

《プフツ》

うん。これ以上やったら、本当にヤバいと確信できる。ニキビの冗談一つで、こんなになるとは思わなかった。

こころなしか愛里も責めるみたいな目で見てくるし、太ると並ぶ女子のNGワードだったのかもしれない。

僕の左手を握りつぶさんばかりの手痛い早苗の握手と、なんともいえない目で見えてくる愛里の視線に耐えつつ、バイト先近くの広場で早苗と別れるまで、生きた心地がしなかった。

——ここまでは大体いつも通りの流れだった。

連勤初日の僕には、昼間の時間は薬品棚をDIYするのとパソコン周りの配線を整理する仕事が割り当てられた。愛里には内回りの清掃や薬品の入った瓶にラベルを貼る作業だ。

もうどうでもいいが、相変わらず喫茶店らしい仕事皆無である。それで夕方からのバイト時間後半は、人気が急上昇したアイドルの戦略会議をする予定になっていたのだが、ここで問題が発生した。

愛里が椅子に座り込んだまま動けなくなったのだ。

「ご、ごめんね……急に、その……きちやって」

「あああああ〜〜！ どどどどうすれば!? 愛里大丈夫か病院か!?」

「いや慌てすぎでしょう。左京さんも女性の生理現象くらい知っているでしょうに」

女子が急激に調子を悪化させた場合、真っ先に思い至るのはほとんどの人が月のモノ、生理だろう。愛里もその例に漏れず、たまたま今日当たってしまったということだ。

今も前も男の僕には想像できないがかなり辛そうで、家屋に入って愛里を目にした瞬間などは軽くパニックってしまった。青娥さんが落ち着かせてくれなければ、旅行の疲れに熱中症や日射病が加わってしまった可能性が浮かんでいた僕は、間違いなく病院に走ったことだろう。

「とりあえずここで休んで貰って、落ち着いたら左京さんに学生寮まで送ってもらってくださいまし」

「え!? それは流石に迷惑なん」

「了解です!!! 他に必要なものは!?」

「必要というか男性の左京さんが邪魔なので、少し席を外してくれませんか」

しかしまだバイト中で良かった。

船上だったらともかく、これが無人島で来ていたら誰を敵に回そうと聞く耳持たず、マジで手段を選ばず愛里をリタイアさせていたと思う。大ポカをやらかす時の僕とはそういうモノと知っているのです。

ともあれ、それからの約30分程はとても長く感じた。

意味もなく机を拭いたり、湯を沸かしてハーブティーを淹れたり、無駄にうろついたり、早苗に寮の女子エリア外まで迎えに来てくれる

ようにメールしたり。

冷静な部分はあるけど、端から見たら非常に滑稽な姿だったことだろう。時間が経過して現れた青娥さんと顔色が悪い愛里には、呆れ混じりの笑いを贈られた。

「それでは悪いですが左京さん。佐倉さんを送っていつて貰えますか」

「はいっ、了解です！」

「じゃあ愛里、背中に乗ってくれ！」

「ええええええええっ!!! の、の、乗るう!!? 夢月君に!？」

「振動が伝わらないように、なるべく迅速に運ぶ。早苗に迎えも頼んでおいたから安心してくれ」

「そ、そうじゃなくて！ 夢月君に、の、乗るのがアレで……その！

そそそれにわたし歩けるよ？」

「まあまあ。佐倉さん。ここは殿方の顔を立ててあげましょうね？」

きつと居ても立っても居られないのでしょうか——それに

「はいっ、わかりました！ わかりましたので、青娥さん。その先はどうか」

「ふふっ。お大事にしてくださいね佐倉さん」

冷静さを取り戻した後の話だが、愛里を背負ってまで寮に送る必要性はなかった気がしないでもない。

まして野郎におんぶされるなんて、クソ暑い中だと僕の汗やら体温やら冷や汗やらで地獄だろう。それに愛里が薄着だったことから、エロとか下心とかの悪い方に取られてたら更にマズい状況になっていた。

それと愛里を寮に送りとどけ、とあるモノが収まる時間を置いて戻り、仕事を抜け出した事を謝ったら、この一件を青娥さんに大笑いされてからかわれることになった。

愛里の反応や青娥さんのフォロー、二人の会話もほとんど耳に入っていなかったし、普段クールガイな僕がそんな事すら思考に浮かばないほど動転していたのが、よほど面白かったのだろう。

つまり僕は、初対面以来の格好悪さと醜態をまたしても仕事場で晒

してしまつたことを悟ることになる。

それを僕はまだ知らない。

尤も、この時の僕は頭の中が真っ白。せいぜい愛里を背負つた時に意外と軽いな、くらいに思った程度で、余計な事どころか何も考えられていなかつたわけだが。

店から出て、猛暑が残る夕暮れを進む帰りの道中。

「夢月君……………きだよ」

焦りながら揺らさないよう背に負つた愛里が何か零した。

ただ名前を呼んだ後、感觸的に僕の背中へ顔を埋めたのでよく聞き取れない。なので、背負い直すついでに、詰まり気味な生返事みたく聞き返す。

「……………んー？」

「月が綺麗だよ、つて言ったの」

「ああ。満月過ぎたばかりだからなあ」

「……………今日はありがとう」

「はいはい。どういたしまして」

うんまあ。滅茶苦茶ドキツとしたよね。告られたかと思つた。

心拍数もうなぎ登りである。

だつて古典でよくある文句だし、暑苦しいだろうに礼を言いながらまた背中に顔を埋めてくるし……………。

……………僕、溜まつてんのかな。一瞬、愛里相手なのに送り狼になりかけたわ。

なんとか学生寮に辿り着き、早苗に愛里を預けるまで、不整脈でも起こしたのかつてくらい心臓バクバクだったことは言うまでもないだろう。

愛里への心配と不調で頭がいっぱいだった為に、下半身がモッコリするどころじゃなかつたことは、不幸中の幸いだったと言わざるを得ない。

昼に煽って不機嫌になっていた早苗にモツコリ現場を見られてたら、どこその10tハンマーを振り回すパートナーのごとく苛烈な何かを叩き込まれていたかもしれないのだから。

てか、それ以前に。

確定はできないが、何気に「愛里って実は僕のこと好きなんじゃね？」って思い始めてる。案外、突っ込んだら上手くいきそうにさえ感じるのだ。

思うに、これはモテない男の基本装備である認識誤認フィルターが発動している可能性が高い。僕にはほぼ未経験な恋愛分野で転生前の記憶がなく、時間と余裕があつたら、距離を置かれる覚悟で当たって砕けに行つたかもしれない。

しかしキャットルーキーの件が最低限片付くまでは、仮にOKされても恋愛やら付き合うやらはどうあつても時間と余裕的に不可能だ。

まだまだ穴が見えている現状で、エロ猿と化して色に溺れている暇はない。自重が吉だと判断できているだけマシと言うべきだろう。

だが、二足の草鞋の片方が脱げる残り数ヶ月くらいの間で、愛里が誰かと付き合いだしたらと考えると、後悔する可能性はある。

早苗や櫛田と違い、滲み出てくるアレさがほとんどない愛里は女の友達として本当に貴重なのだ。状態異常や性欲が原因で嫌われたり、誰か彼氏ができて疎遠になったりしたら、寂しくなるのは間違いない。彼氏に関してはまだしも、せめて修復不能な喧嘩をするのだけは避けるのが最良だろう。

……関係ないが、純愛過激派どころか恋愛もよくわかってないのに、NTRっぽいことにはかなりの拒否感があるのは、まったく我ながら自分勝手に難儀な事である。

それでも以前に僕は決めてしまった。

目的を達成するためにやれることをしつかりやる、と。

自分自身に誓ったことだ。

下準備と目的以外何も成せなくとも、これだけは絶対に守ってやる。

冷静に戻ってきたせいで、さつきまで存在していた背中の愛里の

『重み』に今更気づいて、反応を始めた下半身から意識を逸すように僕は決意を新たにす。

そして残っている仕事を片付けに喫茶・芳香へ戻りがてら空を見上げると、顔を出してきた月になぜだか笑われているような気がした。

P、坂柳有栖

私以外の生徒が2週間の旅行を終え学生寮に戻ってきてから……いえ、それ以前からクラスメイトが口々に噂する同級生がいます。

「左京夢月……」

彼ほど名前が話題に上るたびにこちらの判断を狂わせてくる者は、いつか全面白一色の部屋で見た『彼』以来でしょう。

最初に名前を聞いたのは4月。

教室で葛城君に注意された際に戸塚君が漏らし、そこから推察できたのはSシステムの注意喚起と生徒会に入る為の助言。それをしたのが左京君。葛城君だけでも正確な情報と適した切れ端さえ得られれば割り出せたでしょうが、それを早めたのは彼でしょう。

次に聞いたのは6月。

あの平等なお父様が規則違反してまで届けてくれた緊急連絡で、とある生徒がストーカー被害にあっており、被害者をその生徒から逸す為に他に……私に移そうとしていたフシがある生徒がいるので注意するようにと。

この時は情報が少なくはつきり誰かはわかりませんが、神室さん達に調べさせたところ、事件解決後にお父様を打ち上げに誘った生徒がいることが東山先生・星之宮先生から判明。そしてその打ち上げを開催した生徒こそが左京君であり、お父様を誘ったのも注意するようになられた生徒も同一人物の可能性が高い。

その後も恋愛ガチャという低俗な商売を始めた。Dクラスの生徒と喧嘩になって両者停学した。葛城君と一之瀬さんの生徒会入りに絡んでいた。無人島を初日にジャックしようとした。船の特別試験中にグループ全員で昼寝を敢行した。などなど、正確ではないだろう生徒間のものだけでも話題に事欠きません。

特に興味深いのは船上で行われた干支試験において、聞く限りですが常に冷静に人を見て初手で躊躇わず鬼手を切っていることです。しかも会話した橋本君にさえ理解できない意味を込めて。

もしも連絡が遅れるか、私や橋本君が意味を理解せずに葛城君を落とす計画を続行させていけば。おそらく私の派閥にかなりの傷を負わせ、一気に押し込む算段も考えていたはず。

読めない部分はあっても、想定される彼の頭の巡りは決して悪くない。本当に裏切られる可能性は考えていたでしょうね。

その可能性を考えた上で、私を除いたクラスリーダー達に要求を呑ませているのがまず見事。それも纏まっつての裏切りはないと見切った上で、です。

このような同級生がいることは想定外。何らかの目的の為に動き出したのか、元からの才能が開花したのか。

いずれにしろ、左京君のいるクラスへはしばらく情報収集……いえ、本人との接触は急務になったといえるでしょう。橋本君や葛城君も、彼を放って置くことは良しとしないでしょうし。

ただ以前から（私自身は会うどころか姿を見かけたことすらありませんでしたが）その話題性に橋本君や珍しく鬼頭君が興味を持って何度かコンタクトを取ろうとしていました。しかし話題には上るくせして、特別試験で確実に遭遇できる根回しをするまでは姿を見ることができなかつた、と橋本君は言います。本当にそんな奴がいるのか、と。

これは左京君の神出鬼没具合もさることながら、彼の側近である東風谷さんや四方君が、Bクラスリーダーの一之瀬さんと協力して妨害したからだと推測することができます。

なぜなら7月に左京君が停学になったことで、経緯とBクラスの雰囲気に興味の湧いた私も出向いてみたことがあるからです。

その時は、彼について「よくわからないけど、まあ……良い奴？」と口を揃えたかのような反応しか返ってきませんでした。

といってもこの時は半ば以上、左京君は話を切り出すための材料でしかなく、興味深い身体能力と才気を感じる東風谷さん目当てだったので、特に対処はしませんでした。

まあ、目当てだった綺麗な「黒髪」の女子、東風谷さんには、左京君の名前を出した途端に敵意を向けられ「ぷっ。子供みたいな体型に

見合った内面で背伸びしてるんですかあ？ それとも貧乳力が強すぎて内外にも影響しすぎてるのかしら？ 心配ですねえ」と非常に無礼な対応をされましたが。

敵に相応しいかと思ひ、出向いた先で無駄に煽られた事は絶対に許しません。今でも一言一句、脳裏に刻み込まれています。

最後まで私を坂なんとかと呼び続けた事と合わせ、いずれ然るべき報復を。

と、あの不愉快な東風谷さんは一旦忘れましょう。今は左京君のことでした。

それにしても。

浅知恵で行動を起こす人というように蔑んでいる部分と、先見性豊かな好敵手候補と期待を寄せている部分がせめぎ合っています。

最初から順に私が持った印象を挙げていけば、柔軟な思考を持ち他クラスも助ける愚か：優しさ、自己犠牲を巧みに使いながらも冷酷非情、小銭欲しさに敵に正体を晒すずさんで短絡な策略、先を見ず感情的、先を見据えた周到な手筋、怠惰な快樂主義者。

なんですかこの矛盾の塊は。

と、そう旅行に出発するクラスメイトを見送る時まではそう考えていたのですが、これだけ学生のラインを踏み越える事をされては、もはや放置する猶予は与えないのが上策。搦め手もここまで回避されるのでは、正面から当たるしかありません。

「しかし、わかりませんね」

此度、彼が学校に变革を齎した目的です。これが一向に読めません。

確かにこうすることで、生徒たちに一定の効果があることは認めましょう。ただピースが揃っていないのか、彼をそうさせた理由だけが空白のままです。

『全校生徒の皆さんにお知らせです。一時帰省、ご家族へ連絡、学外活動など、東京都高度育成高等学校敷地内から外出する際は、適切な理由を外出申請書にご記入の上、提出してください。なお、受理には約1週間ほどかかりますのでご了承ください』

旅行より数日後、このような通知が『何通か』学校から届きました。ホームシックになりかけていた者も、実家と連絡を取りたかった者も、校外へ用事のある者も、旅行から帰ってすぐに来たこの通知には心躍らせたのは想像に難くありません。特に女子からは歓迎の声が聞こえてきますし、部活動で大会などに出場する者も制限・監視が大幅に緩和されてやりやすくなったとも聞きます。

また私にとっても良い退屈しのぎになる命名決闘法案。

大半の生徒はこれらを学校と生徒会によるものだと考えているようですが、もうここまでできたなら間違いないでしょう。

左京夢月。

彼の仕業です。

入学前に、高円寺君や神崎君など上流階級出身の生徒には監視も付けたというお父様の報告書を見ているので、少なくとも首謀者は完全にノーマークだった一般家庭出身の左京君で確定です。

しかし、それほどのことを起こしながら、彼の目的と利益だけがまだ見えてこないのです。

さらなる問題は、これ以上があるのかどうか。

左京君を知る誰に聞いても、悪意のある者、野心的な者ではないと言います。ですが、ここまでの行動力の持ち主にこれ以上好き勝手に動かれては退屈しのぎどころではありません。せめて目的を見極めておかなければ、気づいた時には全てが終わっていることもありえます。今回のように。

特にお父様が私の同級生に出し抜かれるなど、初めて聞きました。これだけでも警戒に値するでしょう。

兆候を認識していながら、今まで直接動けなかったもどかしさがありますね。身体的にも一応の責任者としても軽々には動けません、それでももっと早くに現場へ出向けていれば、と思わざるを得ません。

「やはり一度、どういう形になっても会っておくべきですね」

事ここに至っては、姿を見たこともない声を聞いたこともないでは話になりません。ちやうど彼と親交のある葛城君が和解を申し出て

来たところですし、それに絡めて見極めを。

取り込めるのならよし。私の敵になり得るならそれもよし。ただの凡俗なら裏にいる者の存在を推察できるのでよし。

いくつかの指示を出し終えた私は、機会を作りつつ、待つことにしました。

旅行から1週間ほどが経過し、いまだ彼を捕まえた報告がないまま迎えた8月22日。

葛城君とその派閥との話し合いの場。

「左京夢月君。

——貴方に命名決闘を申し込みます」

私は橋本君に適当な条件を付けてもいいからと、この場に左京君を呼ぶよう頼んでおきました。条件は『葛城君』との命名決闘で今年度の暫定クラスリーダーを決定し、その立会人としてあえて立場上は部外者で中立の左京君を招く、というもので調整されたようです。

普通なら他のクラスの者を招くのは無理筋な話でしょうが、何故か戸塚君が乗り気になってくれたおかげで実現しました。普段、目障りで短慮な者もたまには役に立つものですね。

それを利用して、他クラスの派閥争いの中だったからか居心地悪そうに現れた左京君に向かって、挨拶もそこそこに新しく導入された命名決闘を申し込んだのです。こうでもしないと、噂に聞くはぐれメタルには逃げの一手があると踏みました。

予想に違わず彼が発案者であるなら、ルールも固まりきっていない今しか断られる選択肢を排除できないでしょう。

「姫様っ！ それは」

「なんのつもりだ坂柳!?! 今日Aクラス内での和解の話し合いだったはずだ！ 他クラスの左京に仲立ちしてくれるよう頼んだのは、こんな非礼を浴びせる目的だったのか!?!」

少なくとも今は左京君と敵対しないよう進言していた橋本君と、彼から見ればそういう名目で呼んでいた友人に命名決闘を仕掛けられ

た葛城君。

全て想定済みの反応です。

尤も、クラス内で私以外に一人、頷いて納得を示す者がいるのはほんの少し意外でしたが。

「和解ですよ？　ですが、それだけでは左京君の利がありませんので」「利だと？」

「はい。私から話しても構いませんが……左京君には理解できるものではありませんか？　敵に塩を送ることになるので、ヒントはあげませんが」

この態度だけでわかります。

やはり葛城君は物事の裏を読むのに決定的に向いていない。基本的に優秀で頭も悪くないのですが、そのままの意味で受け取ってしまう。

勿論、それは強みでもありますが、融通の利かない性質は足を引く張る事も多い。2度の特別試験の結果や入学直後に生徒会入りを断られたのは、この面が影響していたのでしょうか。

さて、その葛城君が目を向けなかった点に気づかせ、点を線で繋いだと思われる左京君はどう返してくるか。

これまでの彼の実績と情報が正しく、他者の思惑をすぐ読み切る思考力と仄暗い部分があるのなら、私の狙いも見抜いて理解を示すはず。また裏で彼に知恵を与えている人物がいたとしても、この場では左京君自身の考えで答えなくてはならない。

どちらにせよ、見極めには充分といえるでしょう。

「ええっと、つまり坂柳さんはBクラス……じゃなくて僕か僕達を利用したい、または協力したい、って解釈すればいいってこと？　だったら受けるけど、僕より一之瀬の方が良かったんじゃない？」

「うふふ。それでは解答ですね。途中式はどうですか？」

「ちよつと待て！　なんでそうなる!!　一之瀬の名前もどっから出てきた!?!」

結果は、私にとって好都合と言えるでしょう。

確かにこれは役者が違います。

周囲にいるのは葛城君含めてAクラスでも指折りの駒がほとんどです。しかし私が短く何を問いかけて、左京君は何を返したのか。解答も途中式もなんのことか理解できていない。

これでは困惑し凡庸な態度で振る舞いつつも、何食わぬ顔で私の思考に迫ってくる左京君の相手はできません。

「そうなる？　って言われてもなあ。」

葛城を通してここに呼ばれた時点で、勝負というか情報把握？遊び？目的だつてのは予想が付くし、なら一之瀬の方が先だろう。まあ坂柳さんの反応から考えると、僕関係のナニかつぽいが」

「だからなんでそうなるんだよ!？」
「いや、橋本。」

坂柳さんが直接話したいからこの場に僕を呼んだんだろ？　言いたい事があるだけなら葛城でも橋本でも言伝すればいい。聞きたいことがあるならそれも伝言を頼めばいい。メールやチャットもあるんだから、いくらでもやりようはある。

なんせ見るからにフットワークが重そうな坂柳さんなんだ。本アドでなくても適当な捨てアドで充分用件は伝わるさ。

それが面と向かって話したいことがあるとすれば、理由も限られるってものだよ」

状況把握や対応能力は、過去にお会いしたお父様の交渉相手や優秀な部下の方々と比べても遜色ないどころか部分的に凌駕している。

それでいて実力者の凄みを感じない。実績を考慮に入れば、あつて然るべき風格が彼にはない。あるのは普段と変わらないだろう自然体で要点を見抜いてくる不気味さだけ。

「ほう？　ではその理由とは？」

「……あー、葛城の前では言いにくいんだが」

「なに？　俺が関係するの？」

「関係っていうか多分坂柳さんへの印象が悪化しちゃうんじゃない。あと坂柳さんも不快に感じるかも」

「ふふっ。そうなつても構いませんから言ってください。後でフォローさせてもらいますので。ああ、私に関しても大丈夫です」

「ええ……？」

「悪化……」

及第点とはいえ紳士的な気遣いもできる。

想定はしていましたが、本当に『彼』以来の当たりを引いたかもしれないですね。

「んー、あつと、じゃあ僕の想像だと念頭に置いてもらった上でだからな？」

葛城君と私を見て言い辛そうに前置き、諦めたように左京君は話し出しました。

「まずどういう関係かはわからないけど、坂柳さんのお父さんや学校自体を…あえてこう言うけど、誑かした僕に興味が湧いたんじゃないか？　それで僕『以外』が僕に入れ知恵しているなら、そいつらがいるかも確認したい。こんな感じかな、と」

「続けてください」

「その為に効率的なのは、僕の友達や知り合いが極力少ない状況を作る必要がある。これなら僕一人の能力を最初に見定められる可能性は高い。夏休みにいきなりこんな状況になる想定なんか誰もしていないから、僕に入れ知恵しておくなんてのもほぼ不可能だ」

「ふふ……続けて」

「だから坂柳さんは出会い頭にできたばかりの命名決闘を申し込み、試すような聞き方をしてきた。僕自身が有能であるか無能であるかの確認と——もう一つの理由で」

「……………もう一つの理由？」

驚愕している最中の葛城君がかろうじて絞り出した問いかけ。

これに至っている時点で、条件には達している。

「僕が敵か味方の『どちらか』になり得るかどうかだ。

そして基準以上に有能であり敵か味方の条件を満たしていた場合、何種かの下準備をしておかない理由はない。初対面であることも利用して、多少強引で……あー。い、陰湿な手も視野に入れるはずだ」「なるほど……なるほど。これは」

口ではそう言っても、私への負の感情は見えない。必要なことだと

理解しているからでしょう。

またここでお父様や学校に対してした一件を詳しく出さなかったことも評価できる。私が情に流されない性質であると見られている証明になるからです。

「つまりと今この話は、クラス内の決着をつけるついでに軽く勝負して、僕の能力を確認した上で自分に——坂柳さんに付け、寝返れってことなんじゃないか？」

「パーフェクトです、左京君」

「……ふはっ。か、感謝の極み」

わざと口に出さなかったと思われる葛城君に関してと……彼も私を認めているからでしょうか？ 笑いを零し妙に芝居がかつていた最後以外は。

ま、葛城君の方は左京君の立ち位置では言えないでしょうから、手落ちの類いではありません。

それに私の狙いを言い当てたことで周囲を絶句と驚きの中に置き去っていますので、正式な手段を誤魔化したことに誰かが気づくとしても時間を要するでしょう。

ただ命名決闘の真意をあらわにされた以上、今ここで私が言うべきことも限られてしまったわけですが。

「それでは返答はどうなりますか？ 左京夢月君」

「NOに決まってるだろう。坂柳有栖さん」

そしてここまで分析できた左京君の性格上、効率的でお互いの最善に通じる解答が返ってくると想定していた私まで、即答の「NO」には不覚にも目を見開いてしまいました。

私は静かに驚きとともに息を吐き出し、得られた情報を整理して切り替えていく。

ほぼ私の狙いを見抜いた上でこの返答になるということは、左京君はリアリストで効率主義者の一方、理屈でも感情でもないなにか理解できないモノを行動指針にしている。それでいて自分を隠すことなく明快に晒すとともに、相手にも隠すことを許さず見抜いてくる。

結論。彼は、間違いなく天才・鬼才の類と言えるでしょう。

「会ったばかりなのはまだしも、葛城や戸塚と対立してたつてわかつてるんだ。そもそも、そつちに付くわけがない。リスク少なく葛城達に借りを返せるかもって思ったから命名決闘自体は受けるけど、僕の利はこれだけで充分。これ以上は不要だ」

利益が大きい道筋を理解しながら、迷いなく自分には不要と言いつつ左京君。

あの斜に構えた癖の強い橋本君、何度か彼を見た程度の鬼藤君や神室さんまで、彼との対立に反対するわけだとようやく納得できました。

自分のみならず他者の展望を推察し、流れを組み立てる思考力。たつた一人でアウエーな状況をくぐり抜ける度胸。確たる武器もなく、この場で唯一頼れる友人である葛城君にすら全面的には頼れない状況で自分を通す沈着冷静な立ち回り。

僅かな片鱗でも目撃してしまえば、慎重にもなるでしょう。

それにこうした要素は分析できましたが……それよりも強く感じたのは面と向かった時のナニか。おそらく見ているだけではわからない説明できない雰囲気もあります。

橋本君が船で彼と会話して、言語化できないと言い辛そうに零していたそれ。尤も、橋本君をあしらった程度では、お父様を出し抜いた時ほどの本領は発揮していないでしょうが。

あり得ない事ですが、もしも万が一、私が『彼』を葬れなければ。天才の証明ができない状況に陥れば。

今、目の前にいる左京君が全てを持っていくだろう……という根拠も確証もない曖昧な直感すら湧き出してきています。

冷静な部分では乗せられないように思えていても。憶測だと判断できていても。

この時の私は、いつになく漠然としたモノにペースを乱されていた、と後々に思い至ることになる初対面の印象を持たされました。

思考に沈んだ隙を突かれた教訓と一緒に……。

「それで話を戻すけど、命名決闘ってなににするの？」

「あからさまに話題を逸らされましたが、これ以上は選択肢を潰されると判断しましたか。」

「私は少し考えて、左京君の分析と並行しつつ、望む方向への軽い議論誘導を仕掛けてみました。」

「……左京君ならどんな勝負を選びますか？」

「僕が好きを選んで相手が坂柳さん一人なら、腕相撲とかフィジカルオンリーで短時間の勝負を選ぶな」

「流石にそれは受けられませんか」

「だろう？　でも坂柳さんをよく知らない僕じゃ見た瞬間にわかる弱点を攻めるしかない。だから一度、命名決闘の筋が通るように話をしよう」

「筋とは」

「情報がある程度開示した上で、坂柳さんが望むやり方に僕が納得のいく調整を加えるってことだ」

「そうしてわかってきたことは、左京君はとにかく遠慮がないこと。」

「何を考えているのか、なりふり構わずあり得ない案を混ぜてくる。」

「初対面の私は勿論、下手をすれば後ろで話を聞いている葛城君や戸塚君の不信を買いかねないことでもあつげらんかんと。」

「そういう当たり前にある風評や印象を気にする素振りが一切見えない。」

「案外、だからこそ葛城君達の信頼を得たと言えるかもしれません。」

「知ってるかもしれないけど、改めて言おう。」

「僕は葛城のような高潔な奴じゃないし、意識高い指向性もない。あの友達曰く、リアリストっぽいナチュラリストらしいぞ。あと学力はそこそこ上位、運動は苦手寄りの普通。」

「うん。こんなところか」

「つまりその情報を参考に私が提案するのですか。」

「……ふむ。学力に自信ありならチェスなどの盤上遊戯はどうでしょう？」

「あー。それなら、できれば囲碁か将棋がいい。チェスは駒の動かし

方くらいしか知らないから、それなりに覚えがある奴だと相手にならないと思う。そうやって提案するってことは、坂柳さんは自信あるんだろ?」

「それは残念。」

ま、結構です。それなら将棋にしましょうか」

あつさり望んだ方向に進んだ話と併せて、遠慮のない問いかけに内心の呆れと関心を呼び起こされます。ですが、正直から繋げてきた彼の友人への気遣いを無下にすることもありませぬ。

私は最上に近い一つの想定、それを受け入れ——。

結果論ですが、この時の私は多少なりとも私と左京君双方の実力を知る葛城君が口を出してこなかった事をもっと深く考えるべきでした。

それから始まった一局は、私が見極めを重視していたこともあり、30手ほどまでは様子見。

ここまでで将棋に関しては大した打ち手ではないと判断できたので、じわりじわりと少しずつ追い詰めています。

『盤上には生き方が表れる』

と言われることもありませんが、左京君にそこまで求めるのは酷でしょう。あくまで趣味・教養レベルで身に付けたものと、彼の真価は別のところで発揮されます。

チェスの片手間に覚えた程度の私に及ばなくとも、評価は変わりません。

「これは俺の……」

「葛城さん?」

なぜなら盤面を見ている葛城君と戸塚君が思わずといったように零したことで、葛城君との対戦経験を基に発展させた戦法なのだろうと推察できます。経験を糧にして実力を底上げできるのですから、それだけでも一角の人物でしょう。

それでも現状、こちらの戦法は居飛車で持ち駒は飛車・角1つずつに有用な駒7つ。左京君の戦法は“穴熊”寄りの守備陣形で持ち駒

は歩が2つ。戦局もそれを証明するように私の優勢……いえ、左京君は詰んでいないだけで、すでに逃げ惑うのみになっています。

純粹な地力の差が勝敗を分けたということですね。

尤も、拍子抜けする弱さというほどでもありません。

それにいまだ真剣な表情で盤面を睨む左京君の目は、決して諦めていない。

かといって、もはや私の勝利は揺るぎないでしょう。

積み上げた優位は少々のことではどうにもならない。まして彼の悪足掻きでジリ貧を覆すには――。

柄でもありませんが、潔く終わらせてあげるのが情けというものでしょうかね。

そう引導を渡す為に本気で詰めにかかりましたが、どうしてか詰めきれない。攻めかかっても最後の一線だけは守られる。先を読み、逃げ道を塞ごうとしても、損害を出しつつ左京君の玉だけは逃がされる。

攻めを捨て、逃げと守りに注力したかのような無駄な足掻きに、少しずつ苛立ちが募ってきます。

というか、左京君の実力ならすでに勝負がついていることもわかるはずです。

葛城君の進退に差が生まれる予測から負けられない心情は理解できますが、投了して条件に口を出す方が私の心証も良くなる。

何故、悪足掻きを止めず逃げ回っているのか。

あらかた見切られた状態で、私に無駄な時間を使わせるほど自分の評価を落とすと、彼が気づかないはずがない。

わけのわからない判断基準に苛立つ。私が有能と認めた左京君が、愚か者のような手を打つことが何故だか癪に障る。それとも彼には何か違うものを見えているとでも。

その後も左京君の玉は30手、時間にして20分近く逃げ回り、僅かだった私の苛立ちも表出しかねない域に到達しつつありました。

こうして勝負はついたと盤上から意識を逸して精神を乱したことが、あのような結果に導いたのでしよう。

——その一手。私は左京君の玉から離れた勝負の行方に何も貢献しない自陣に一手を打ってしまいました。

打ってしまった瞬間、自分の失策を悟りましたが、それはあまりにも——あまりにも遅すぎました。

これは言うなれば、トドメを刺す寸前に手を緩め、反撃の隙を作る愚策。

ひたすら好機を待ち続け、逃げと守りに徹していた左京君がこの隙を見逃すわけがない。

そこからはこれまでと打って変わって、考え抜いていたと思われる苛烈で的確な早指し。立て直そうにも、急かすようにノータイムで急所を狙ってきて対処を迫られる。

左京君が即座に自陣の穴を塞いで攻勢に転じ、数手で立て直し途中で緩んでいた私の防壁を突き破った頃には、盤上の支配者は入れ替わっていました。

私が。いかに最も得意なチェスではなかったとはいえ、なんて致命的なミス……を？　いえ、これはまさか私の集中が途切れる瞬間を作り出された!?

自分の犯した勝敗を分ける重大なミス。攻守も入れ替わり急激に悪化する戦局。勝ちを確信し苛立っていたところからの急速な変化。

集中力を欠き、終わったものとして片付けていた私。

なにより——守りながらも。逃げながらも。考えることを止めなかつた左京君の鋭い一転攻勢。

もはや盤上の勢力図は一変しています。

これからもう一度本気になったとしても、戦局を覆すのは至難と言わざるを得ないでしょう。

私自身でさえ信じられない自分の悪手から、僅か10数手。

「参り……ました」

「対局ありがとうございました」

なんとか結果を受け入れて切り替えた私は、左京君に掠れてしまった声で負けを認めていました。手遅れになってからとはいえ、短時間

で思考を全力で回転させてしまった為か喉がカラカラです。

しかし悔しきは感じていますが、納得と心地良きの方が遥かに大きい決着は久しぶり……初めての体験かもしれません。

嘘を見抜いて利用する者はこれまででいくらか知っています。ですが正直から真実を見抜き、推論を組み立てて細い道筋から流れを構築してくる者は。表から裏を読んで隙を作る者は予想外でした。

ここへ誘い出された件を持ち出して、感情豊かに葛城君へ夕食奢りを強請る姿からはやはり小物の雰囲気しか感じませんが、まさに人は見かけによらぬものでしたね。

ともあれ、これで少なくとも2年生になるまでは葛城君がクラスリーダーです。

命名決闘は口実でも、最初から『どれか』の結末に落着させる予定でした。その予定の中には、確率は低いと考えながらも私が下に付くというサブプランも用意してあります。

気を遣う必要は発生しますが、元々のプランに修正を加えて整えれば、葛城君を操ることは容易でしょう。読みきつてきた左京君の動きを加味しても、他クラスと彼がクラスリーダーではないという壁があります。守りに寄りすぎている葛城君が相手ならそこまで難しくありません。

ただ、今の一局を結果だけで見ている戸塚君や他数人ははしやいですが、頭の回る者が呆然としているのもわかります。

これからクラス同士で当たる機会があれば、左京君は強敵として立ち塞がるかもしれないのですから。

橋本君のように違う意味で考えることが増えた者は別かもしれませんが。

さしあたっての私の役目は、葛城君の『補佐』としてクラスを纏め上げ、実績を得ていくのが良さそうですね。

今なら、団結するなら外敵を作れという鉄則で、今回の一件も最大限活用できるようにしよう。

別れの挨拶を交わした左京君を含む半分ほどの人数が去ってから、私は周りを気にせず、先程の一局を振り返り余韻に耽る。

様子見の序盤で敗色濃厚とみるや、対戦者の私自身に活路を見出して好機の種をまいて耐える戦術に切り替え、最後は正攻法での逆転劇。それも葛城君の守りを彷彿とさせるやり方で。

これが入学からたかが数ヶ月で、お父様の受け継いだこの学校に变革を齎したイレギュラー、ですか。

話には聞いていました。実際に会話してその実力を認めつつもりでした。

ですが、言い訳しようもなく完全に舐めていたということでしょう。彼自身の実力は大したこともない『見切らされ』隙を作り出されてしまったことに、最後の最後まで気づけませんでした。

考え抜くことで細い道筋を照らし出した左京夢月。

そして最大のモノを除いて、徹底的に私の弱みを突き、強みを薄れさせ、一撃で勝負を決する。

確かにまんまとしてやられた屈辱を晴らしたい思いもありますが……。

「これはまた面白いお相手が現れてくれたものですね。

——ふふ。うふふふ」

それ以上に、ちょうど退屈していたところでした。

完膚なきまでに敗北したというのに笑い続ける私は、残って訝しげに見てくる周囲すら気にならないくらい、葛城君達と去っていった凡庸を装う勝者への期待が抑えられませんでした。

果たして『彼』以外の「天才」は、これからも私の渴きを潤してくれるのでしょうか——。

89、妖怪

連勤3日目には愛里が復帰して、最初は無理しないよう気遣いながらも平常運転の生活に戻った。

空き時間でゲームの最終チェックもできたし、少し愛里のシフトがズレてしまったものの、予定は順調に消化できているとあっていいだろう。

しかし順調だと落とし穴が開くのは、一級フラグ建築士の方々が悪さをしているのかもしれない。

そのまま滞りなく5連勤期間が終わると、今度は葛城達を通して理事長の娘である坂柳さんから接触があつたのである。

想定される中でも上位の面倒事がついに来たと思つた僕は、逃げ出したい気持ちを必死で抑え込んだ。

話を持ち込んできた葛城と戸塚によると、Aクラス内の派閥争い解消の話し合い：その仲立ちだそうだが、それは名目だけだろう。手ぐすね引いている幻影が目に見えるようである。

そう。顔を出せ、と。

正直、自分がやつちまつた自覚のある僕は理事長の娘が同級生にいると思ひ出してからは、いつ接触してくるかとビクビクしていた。

なぜなら、殴つたら殴り返されるといふのは物理・精神関係なく、どんな境遇・場所・時代においても当たり前の常識みたいなもの。父親に殴りかかっておいて、娘には見逃されると考えるほど僕はお花畑な脳みそをしていない。

船上試験で橋本に告げた『リスク』は、当然僕にも適用されるのだ。相違はあるが、この辺は清隆とその父への対応とも似た事情である。まして立場やルールごとぶつ飛ばしたばかりでは、どこからも守つてはもらえないだろう。それは都合が良すぎる考えだ。

尤も、坂柳さんが大人しく穏健な人物なら在学中避け続けても大丈夫だった気はするが、誰に聞いてもヤバ気な匂いが漂ってくる人物な以上、腹をくくるしかない。

「はじめまして。坂柳有栖です」

「うおえっ!?!(っ)っ(っ)丁寧はどう、も? さ、左京夢月…です」

そんなこんなで身だしなみを整えて指定された店に赴き、自己紹介を交わした坂柳さんの印象は目力が強い美少女。でもやっぱり感じるヤバ気な雰囲気、僕の勘はゲージ3本消費して一之瀬に対するのと同様クラスの最大警戒モードを自動発動していた。

端的にいうと、ビビりまくっていた。

しかし、そんな怯え狼狽える僕に、坂柳さんは表面上は楽しげに命名決闘を申し込んできた。それに加え、彼女のクラスメイトにも根回ししてなかったらしく、説明も対応も初対面の僕に丸投げしてきた。僕が想定してなかったら、このジャブで沈むところだ。

一応、無駄とはわかっていつつ、最初らへんではなんとか一之瀬や他事とかに丸投げできないか試みていたが、坂柳さんは惑わされな

い。なので、諦めた僕は一度だけサンドバッグになる覚悟を決めたのだ。だからって、そんな☒を弄んで楽しげなのは如何なものかと思う

が。てか、僕がただの馬鹿だったらどうするつもりだったんだよと言いたい。

「パーフェクトです、左京君」

「か、感謝の極み」

しかも緊張感が高まったところで、この某吸血鬼と執事ネタをぶち込んできたのだ。直後のフルネーム呼び勧誘付きで。

なんとか対応するネタで返せたが、脳裏に浮かぶ歪んだ顔で言う吸血鬼と現実の落差に吹き出しそうになった。こんなの「NO」以外のどう返せというのか。

終始微笑混じりの上品な態度だっただけに、そのただ一言浮きまくっていた言葉が僕の記憶に深く刻み込まれたのは言うまでもないだろう。

とんでもなく意表を突く会話スタイルである。外見は可愛らしい幼女が、真面目くさった顔して笑わせにくるなんて信じられない。

勿論、僕はあの瞬間から、坂柳さんを何をしでかしてくるかかわからない奴に認定した。

あんな方法で自分の印象をアレな方向に覆してくるとか、もしかしくなくとも結構ヤバい娘なのは確定である。

間違いない。

坂柳さんは外見こそロリっ娘美少女だが、その実態はDS性悪陰湿の3大害悪プレイヤー？だ。

何のプレイヤーか知らんけど。

なぜなら、ネタ以外にも対局までずつと言葉少なに僕が言いたくないことを言わせようと誘導してくる。

しかたなく頭が回る者にはわかりきった説明と対抗策で乗り切ったが、そのせいか部屋が静寂で満たされてしまった。ただほとんどの者が黙ったのは、坂柳さんが邪魔が入らないよう下準備のようなモノをしていたからかもしれない。

どちらにせよ、この一事だけでDS・性悪・陰湿の3要素を高い水準で保持していることが窺える。

なんでこの学校で出会う生徒……教師含めた人達は、かなりの確率で容姿だけはハイレベルなイロモノばかりなのか（嘆き）。前に清隆に冗談で言ったイロモノ指数でも採用しているのか？

本当にそういう基準や容姿で生徒を集めてるなら、理事長他幹部陣の趣味を疑いたい。もっと高円寺とか網倉とか池とかの普通っぽい生徒を増やして欲しいものである。

ともかく話を戻す。

坂柳さんのヤバさに気づいた時は、少しでも媚を売っておかないと利用価値がないと判断されて、どんな目に遭わせられるかわかったもんじゃないと思わされた。あの場には早苗や青娥さんとかのワイルドカードも存在しなかつたし、僕自身を見切られるタイミングが重要になったといえる。

といっても、何も反応なくとも別クラスである為に大体の想定はしていたので、僕にできたのは坂柳さんが用意していたと思われる台本を盗み見……推測して周囲に理解を求めただけだが。

わかりきった用件なら、なんとか僕にも想定できるので助かった。少しは彼女も配慮してくれたようだ。

尤も不幸を回避するには、社会人経験で培ったコールド・リーディングも応用して、話の流れを坂柳さんが望みつつも微妙に違う方向へ持っていくしかない。そうしなければ、即座に見切られて3大害悪に相応しい仕打ちを受けていた可能性が高かっただろう。

……あと暗に「満足できなかったら、これから葛城がどうなるかわかってんだらうな？」的な事も匂わされたので、逃げるのも断るのもできなくされたのもある。ついでに念のいったことに僕は命名決闘の発案者でもあるので、そっち方面の言い訳も塞がれていた。

だから元々始めから逃げられない状況で更に追い詰めてきた罠に對し、またしても勝算の低い打開策を打たざるを得なくなつたのだ。坂柳さんからすれば軽い遊びだっただろう将棋に必死になつたのはこういうわけだ。

それからの僕は、皮肉と失礼にデバフを織り交せて放ち続けて会話で攪乱したり、彼女が何気なく言い出してきたチェスだけは勝ちの目が見えなかつたから逸したりと頑張つて抵抗した。

奮闘むなしく自信に満ちた態度を崩せなかつたことから、負ける可能性の方が高いことは察していたけども。

なお坂柳さんとの対局は、不思議なことに僕に軍配が上がつた。雰囲気と彼女の棋力から見て、どう考えても僕が負ける流れだったというのに、妙な打ち方をしてきたからだ。

序盤の30手あたりでも見覚えある形だなどは思っていたが、中盤あたりから某名人の有名な一局をトレースするように寄せてきた。最大の勝因はおそらくこれだ。あとは気づいて微調整しつつ、その流れに乗っただけである。

偶然覚えている試合の棋譜だったからよかつたけど、知らない試合なら普通に負けていただろう。

こういう形だったので出来レースかもとは思いつつ、どこかで逸れる可能性も考えたが、結局あの一手含めて最後まで坂柳さんは予定調和な手を打ち続けた。

勿論、僕も周りが見えなくらい必死に集中して思い出しながら打った。前に四方や葛城と打った後、念を入れて覚えてる限りの棋譜並べをしておいた事が功を奏したのだ。

ただ一つ疑問なのは、彼女が何故、あえて負ける方の役を選んだのか。

これには理解に苦しんだが、今の将棋界には何故か羽○名人も未来の藤○8冠もないので、本来は勝つはずの役と棋譜だったのかも知れない。それならわかる。

それか多分だが、幼い相手と将棋をやつてると稀に遭遇する自分は棋譜を知ってるのに相手は知らない。なのに、相手の才能豊かであるがゆえプロの手筋と被る現象が起こっていたのだろう。

悪手まで被った点には新たな疑問が生まれるが、これは精神を乱すデバフ発動がたまたま被ったタイミングになったと考えれば……そんな都合の良い事があるか？ いや、実際にそう見える事象が起こったんだけども。

……考えてもわからないし、もうトッププロの棋士に匹敵する才能がある指し手ゆえの不幸な事故。ってことでもう片付けてしまおうか。

あれ？ でもこれで片付けると、素でトッププロの打ち筋に近い同級生とかいうわけわからん天才と、存在しない名人の威を借る出来レースをしちやつたつてことにならないか？

そうなる僕と僕は大人気なく外見詐欺幼女を衆人監視の前でわからせちやつた鬼畜男？ もしくは天才系メスガキにお仕置きをするどこぞのわからせおじ……おにーさん？

うあ。字面だけだと事案みたい。ものすごく外聞悪いな。この秘密は墓場まで持っていこう。

ま、まあ、葛城の対抗派閥の長らしいし、話した感じでは清隆に勝るとも劣らぬ知性も感じたので格上は格上だろう。そんな相手に生半なやり方は通用しない。経験と知識のゴリ押しはさぞかし彼女の不興を買っただろうがしかたなかったのだ。

実は最初から会話による情報収集目的で、勝ち負けに重きを置いてなかったとかだったら……あの攻撃的な打ち筋と前フリであるわけ

もないか。

ともかく、こんな勝ち方をした上、実質何の意味もない命名決闘の前哨戦である話し合いでは、坂柳さんが投げてきたとはいえ、デートとかで嫌われる禁じ手で自分の考えを並べ立て相手に話させない手法を取り込んで、場の主導権を握り続ける。なんてこともしちゃったわけだし、坂柳さんからの敵かそれに準ずる認定は、もはや確定的に明らかだろう。

だって別れ際に見てしまった坂柳さんの好戦的な冷笑は、怒らせた一之瀬すら凌駕するんじゃないかと思うほど恐ろしかった。余裕なかったとはいえ、完全に敵対するつもりはなかったんだけどなあ。

望み薄だけど、葛城や戸塚が後でフォローしてくれるのを祈るばかりだ。

あと………あわよくば、僕を坂柳さんへぶつけようと動いていた戸塚の思惑にも、当然気づいていた。最初は誘導が下手すぎて、逆に違う意図かと勘違いしそうになったけども。

「左京！ よくわからないけどすげえじゃねえか！ 坂柳のあの顔見たか!? はははっ」
恐ろしい笑顔ならしつかり記憶したが？

食事処に来る前からテンションが上がっていた戸塚に、僕は軽い恨み言を返す。

「戸塚。お前、とんでもないことに巻き込んでくれたな」

運と経験値で乗り越えただけで、股間が縮み上がる坂柳さんを笑うことは僕にはできない。ベッドで向けられようものなら、EDになってもおかしくないとすら思う。男を萎えさせる系女子三銃士の称号は彼女にこそ相応しいだろう。

ちなみにこれは這々の体で葛城に飯奢りを強請って危地を脱出した際、戸塚と葛城に零した愚痴。それほど去り際の坂柳さんの笑顔が怖かったので、思わず漏らしてしまったのだ。

「悪かったって。でも左京も船で埋め合わせするって言ってくれただろ？ お前ならスカツとするようななんかをやってくれると思っ

さ」

「弥彦！ まさかお前……最初からクラス内の問題を左京に……!?!」
すると思ったより葛城が強く反応してしまったので、フォローを入れる。

「あー、葛城。そのへんはあんまり気にするな。どの道、僕が学校にしたことを考えれば、遠からずこうなつてたと思うぞ」

「しかしー!」

「あの、葛城さん。勝手にしていません。けど、坂柳達の腐った性格を考えると」

「だから左京を利用したと?」

「う。その、流石に勝負にまで発展するとは思ってなかったですが。

……改めてすまん左京。俺、葛城さんを馬鹿にされて我慢できなくて、ついお前を頼っちゃった」

「はあ……。それは良いけどお前ら、これから気をつけろよ」

「気をつける? 坂柳にか?」

まあ戸塚の思惑自体はどうせやらなきや駄目な事のついでだったし、聞く限り葛城への助けのつもりだったのだろう。目くじら立てることでもない。飯を奢ってもらって気分が落ち着いてから釘を刺したら、こうして申し訳なさも見受けられたしな。

それと一応は凡人枠同士なんだし、僕にできるアドバイスもサービスでつけといた方がいいか。

「そうだ。ぱつと見の印象でなんだが、ああいうタイプは敵味方関係なく扱いが難しいって相場が決まってる」

「腸が腐つたような奴だからなあ」

「おい弥彦！ 流石に坂柳に失礼だぞ!」

……具体的にどういう考えか聞いてもいいか左京」

てか、戸塚は坂柳さん嫌いすぎじゃね?」

それでいて徳川家康の参謀・本多正信の評を出すなら、頭脳だけは認めている感じか。

つと、今は葛城だった。

僕は本当の意味では、対峙した者にしか伝わらないだろう坂柳さんの

怖さを遠回しに口に出した。言うことを考えながらだったので、何度か詰まったが。

「釈迦に説法かもだけど、どう言えればいいか……。」

うーん。僕が思うに、頭がべらぼうに良い奴は思考を現実に投影できるとだよ

「はあ？」

「つまり自分の思考を信じぬき、感情すらもその理論で抑え込んでしまっただけ」

「感情を理論で……？」

「え……と、んー。権限を得るほど。偉くなればなるほど。やらなきや駄目な事の答えがなくなっていくのは、葛城も少しは実感してるだろ？」

「……リーダーや生徒会のことか」

「ん。そんな時、人に聞いても答えが出てくるわけもないだろ？ そうなると実質、頼れるのは自分の考えと作った答えだけになる。」

そしてそれをブレさせるのが、いわゆる無能の働き者だ。反対にブレずに自分の理論を信じ抜く奴は、一本筋が通つてると言えるな。案外、後者のこういう奴っていないんだよ」

なぜならあのヤバそうな坂柳さんを封印できるかは、葛城に懸かっていると言つても過言ではない。できなくとも、僕が知る数少ない処世術を教えておけば、何かで役立ててくれるかもしれない。

坂柳さん相手になると、どこまで通用するかわからないけども。

「で、例えば高円寺や早苗って、実家的にも能力的にも将来偉くなるのはほぼ確定してるし、しっかりと自分をブレさせない強さがある。だからまあ、こいつらって僕から見るとすげえ頭良いとは思ってる。」

……ちよつと話して一局やっただけだけど、多分坂柳さんもな」

「……」

「それが何だよ？ これからは葛城さんがリーダーなんだから坂柳が従うのは当然」

悪いが戸塚のその考えは遮らせてもらおう。嫌うにしても、その考え方だけはマズい。

僕は少し強めな口調で、対応を『間違えなければ』的確な助言をしてくれるだろう者への作法？を口に出した。

「忠告だ戸塚、それに葛城。」

僕が言うのもなんだけど、僕ならまだしも坂柳さんを『あからさまに』利用しようとする方が良い。なるべくどっしり構えて彼女の好きにさせるのが、多くの場合で良い結果に繋がると思う。きっと性格的に合わないと感じる事も多いだろうけど、彼女にはひと呼吸置いて過程と結果の天秤を考えてから介入するのを勧める。少なくとも頭ごなしの命令や反対だけはしちや駄目だ」

「それはやってみるが……おそらく難しいな」

「わかっている。ただ、これは僕の勘だけど、話半分でも頭の片隅に留めとして。なんかそれをするとなズい気がするということか……スツキリしない予感があるって事を伝えときたかったただだから」

アドバイスのつもりではあったが、真面目で苦労性な葛城には微妙に合っていないやり方なので、悩み事を増やしてしまったかもしれない。

勝っても負けてもこれからの大変さを想像できるだけに、坂柳さんと同じクラスだったのは誠にご愁傷様である。

忠告をどう受け取ったかその日の食事中、葛城はなにか考え込んでいるようだった。何人かの派閥？の☒達や、何故か飯処まで付いてきて今の話を聞いていた橋本と一緒に。

てか、なんか普通にいるけど、橋本って坂柳さん側の奴じゃなかったのか？ まあ飯と話しかけてないし、あることないこと報告されなければいても別にいいが……。

ん？ そもそもあくまで状況証拠と言動からの推測であって、確定してなかったっけ？ 橋本がうちのクラスでいう四方やあるいは櫛田・平田みたいなポジションだったら、ここにいるのも船での事もおかしくはない。見る限りでは、そこそこ溶け込んでるので全くない可能性でもないだろう。

……面倒くさいし、とりあえずそう置いて僕は気にするのをやめた。

その後、些事を気にするのをやめてスッキリした僕と戸塚、他数名は葛城だけは気にしながらも、「考えすぎだろ左京」「そうかもな」と笑い合い、タダ飯のご相伴に預かった。奢りのうなぎは格別であった。

だけど後から考えると、こんな風に戸塚を流しておいて、賭けるものや何らかの契約もせず、葛城達を無視するかのような坂柳さんにはムツときて、つい僕まで当たりを強くしてしまったのは今になって短慮だった気がしている。

というか、自分の弱点を痛感している。

先日の理事長や愛里の件でもそうだった。

僕は友達が軽んじられたり危難に陥った場合、冷静ではいられない。流れも利益も忘れて突っ走ってしまおう。それでいて、それ以外の奴に対しては割り切ってしまうあたり、凡人のありふれた精神性がモロに出ている。

おそらく坂柳さんにはそこを突かれたのだろう。

戸塚を責めたりしなかったのは、彼の事を笑えない：他人事だと思えないからだ。

きつと四方や清隆、高円寺ならこんな無様は晒さない。僕には無理だが。

今回も坂柳さん自身というより全体から状況を逆算したまでは良かったが、余計なものまで見て感情的になるなど2度目の元は大人としてあるまじきこと。3大害悪っぽいと判断してはいたんだから、もつと穏やかなやり方もあっただろうに……。

しかし反省も後悔もしてるけど、短期間で理事長父娘に喧嘩売るとか何やってんだ僕。

「……よし！ 反省終わり！」

何気に思考が悪い流れになりそうだったので、僕は意識して独り言で吐き出し、馬鹿馬鹿しい方向へと自分の思考を切り替えた。弱点への対処法はわかりきってるんだから、発展性のない思考や回想はNGである。

こうした事ができなければ、ブラック企業でそれなりの期間勤めるのはキツイ。僕がこのスキルを有するのも当然だろう。ふう。

それにしても、一応は負かしたはずの相手が笑い出すと、こんなにわけわからぬ恐怖が襲ってくるとは……。笑顔は本来攻撃的なものとか言われるのも納得である

思い返すと、初めてCクラスを訪れた時、龍園の脅しに恐れをなした際に笑い出しちゃって悪かったと今更ながら謝りたい。あの時の僕はさぞ不気味だったことだろう。

人のふり見て我がふり直せとはこういう事だったのかと、新たな知見を得た。龍園はまだしも、次があつたら坂柳さんにはまず謝罪から入って速攻で逃亡する算段を立てておこう。

でもぶっちゃけ、次に坂柳さんと出くわしたら、なんとしてでも四方か清隆あたりにぶん投げてやるけどな。

勘だけど、ああいう表面上冷めたタイプは危ない激重感情を持っていそうな気がしてならないのだ。

それに能力云々以前に、どこか妖怪的な怖さがある彼女とは失礼な話だがもう会いたくない。

僕のイメージだと、小5ロリと書いて悟り妖怪(本当は覚りだが)とかみたいなの？ 小学生でないのは確定しているが、何気に外見のイメージにはピッタリである。

同じ幼いっぽい妖怪でも、座敷わらしのような比較的平和なモノとは程遠い印象だったので、こちらが真つ先に浮かんだと思われる。

そして坂柳さんが有名妖怪なら、陰陽師・四方こそまさしく適任なお相手である。

だから妖怪大戦争は、僕が居ないところでやってほしい。僕の代わりになんとか清隆あたりを置いておくから。あの二人がかりなら、流石の坂柳さんも調伏できることだろう。

適材適所とはこうして使うものだ。

え？ 妖怪には巫女の早苗や愛里？

愛里はわかり易い強みがない為に相性が悪そうだからともかく、早

苗に坂柳さんをぶん投げたら、制御不可の修羅場にしかならない確信があるので却下だ。ペンペン草も生えない荒野や嵐、極寒世界の出現など誰も望んでいないのである。

……ほんの少しだけ、邪神（早苗）と有名妖怪（坂柳さん）、それと悪魔（櫛田）で創出される地獄の三つ巴に怖いもの見たさな興味はあるけども。

そこへ例えば清隆を放り込んだら、一体どんなことになってしまうのだろうか？ 光景を想像すると、グランドゼロに一人佇む清隆……なんか無駄に似合ってて格好良いな。

まああなたにもあれ、今ならちよつと話して将棋で一勝しただけなので、坂柳さんもそのうち忘れてくれるレベルに留まっているだろう。理事長絡みのアレコレはあるものの、しばらく遭遇しなければ「どちら様でしたか？」とかなってくれるに違いない。うん、きつとそうだ。そうになったら「はじめまして。綾小路清隆です」とか偽名を名乗って、本物にバトンタッチすれば全て解決である。

こうして心の安定を保つ為、ぎつとした坂柳さん対策の方針を定めた僕は、この恐怖の記憶を忘れることにした。

90、平穩

8月24日。

同人ゲーム・小東方高育桜がついに完成した。

僕含む学生のみでの制作だが、ゲームとして成立するくらいには自信がある。時間の制限と、適任がいなくて音楽だけはフリーの物にアレンジを加えただけになっているが、今できる事はやりつくしたといえるだろう。

完成する直前には勝負用PCを貸し出し申請して、昨日のうちに関係者へ連絡も入れた。

呼んだメンバーは天文部員に、清隆、椎名、絵を描いてくれた数人、最終盤プログラムを手伝ってくれたAクラスの吉田、計画発表時にいた櫛田、姫野、葛城・戸塚。

先日の件から現状を考えるに、Aクラス組はおそらく来られないだろう。

他も椎名、姫野、櫛田は来てくれるかわからない。

それでもメイン対戦者の清隆は来てくれると思う。基本暇してる印象があり、なりより誘って断られた試しがない。ついでに昨日、一人で完成を祝う宴会をする為の買い出し先で、なんかどこかの女子とエレベーターに嵌ってたので、雑談話の種もある。

……エレベーターに同級生(多分)女子と二人で閉じ込められるとか、それってなんてエ〇ゲ? と。

そんな羨ましいシチュエーションに遭遇すれば、普通は邪魔するだろう。

だから事態が発展する前に阻止するのは友達として当然のこと。アイツだけ幸せになるのも不幸になるのも、どっちでも飯が不味くなる。不愉快極まりない。

ぶっちゃけ、僕もおこぼれに与りたい所存である。

また僕はこの件があつた影響か、ささくくれた衝動を抑えきれず、つい迷惑行為予告をやってしまった。

自分から勝負参加を言い出した四方と早苗にも、来てくれないければイタズラしちやうぞ、とハロウイン的な脅し文句を送っているのだ。抜かりなく愛里に部屋番号は聞いているので、怒涛のピンポンダッシュをされたくなければ来るはず。

余談はともかく、愛里が参加スルーするとも思えないので、これで最低限の出席者は確保できただろう。

高円寺は気まぐれを起こすかもだが、協力者達にはなるべく来てほしいと思っていた。せっかく色々準備したし。

あ、準備で思い出した。

ほとんど貸し出しだが、四方用のマウスやキーボードだけは自前で用意した。彼はキャットルーキー原作でゲームに熱中して、ゲームコントローラーを破壊していたので念の為だ。

それと何人か連絡先を知らなかった（絵を依頼した美術部の金田と一之瀬の絵を描きたいと自ら現れた白波、発表の時にいた姫野）ので、知ってそうな奴に言伝も頼んだ。友達の誰もが連絡先を知らなそうな金田以外は、まあなんとかなるだろう。

下準備して時期を選べばもつと多く揃えられるかもしれないが、僕は完成した今こそやりたい。

ただそれだけが今日にした理由である。

今日までに、学校関係のアレコレに、バイトやAクラスの集まりに呼ばれたりとちよつとした事もあったが、何事もなく完成までこぎ着けることができたのは何かが僕の味方をしている気がするからだ。だから、この勢いは逃せない。

あとは思う存分に清隆…と四方・早苗で遊んで禊を済ませ、最後にはクリアされて全てを水に流すだけだ。

来られるかわからない者もいるが、こんなお遊びを手助けしてくれた愛里や高円寺、他の協力者などの者達には感謝している。

9月1日に払う報酬以外に、どこかの鳥居越しに見える湖と桜が描かれた絵。その絵をプリントしたDVD（ゲームを入れてある）を関係者に対戦者全員に渡すつもりだが、これで足るだろうか？

アイドル・雫のサインやブロマイドとかも頼めば付けられそうだけ

ど、秘匿する必要もあり、なにより呼んだ半数以上はあんまり興味なさそうなんだよなあ。

できればオープニングの絵を悩んでいた約一週間前。絵をくれたカエルみたいな丸い目？の付いた帽子を被った金髪の女の子にもなにかあげたいところだが、生徒会に頼んで調べても該当する生徒がいなかった。

なんで僕はこう謎が多いモノに接触してしまうのか。なんとなく『畏れ』を感じる存在だったのが、考えをややこしくしてくる。

なので、こちらもなんとなく鳥居繋がりで巫女の早苗に3枚渡すことでお茶を濁すことにした。神様のぶんだと言えば、疑いなく受け取ってくれるだろう。

しかしあまりに素晴らしい絵だったので、出処とかシチュエーションとか気にせず採用してしまったのは我ながら少し早計だった。

このモヤモヤは、また打ち上げ的な宴会を行うことで解消するのがいいかもしれない。そうするのがいい気がする。

というかゲーム制作に結構苦労したので、僕自身のご褒美に誰も参加しなくても打ち上げを決行することにした。

……コイツ、宴会ばっかやってんな、というツツコミは黙殺である。無人島ではただ食材を焼いただけで、正式なバーベキューができなかったのだからやりたいのだ。やはりバーベキューは燻製あつてこそというもの。

場所もガチャをやった守矢神社に開けたスペースがあったので、ここで準備してもらおうよう早苗に頼んでおいた。早苗に断られて一人になったとしても、それはそれで気楽だろう。

あとついでに、本場の人？っぽいアルベルトにも声をかけてくれるよう椎名に伝達しておいた。来てくれるか、そもそも誘えるかは不明ながら、音楽対決の時といい、何故か縁を感じる巨人である。

ともかく僕は、申請しておいた余分なパイプ椅子を運び入れるなど各種下準備を整えていき、軽く部室の掃除を済ませる。

そして学校から借りておいたモニターを設置・設定し、PC3台を並べてゲームをインストールすれば、あとは人が来るのを待つだけ

だ。

しかし8時頃に来たのは、流石に早すぎたかもしれない。だいぶ時間が余りそうである。

とりあえず勝負は本日10時に天文部部室と伝えている。急ではあるし、夏休み中の登校になるので無理のない時間設定を選んだ。誰も来なかったら寂しいなんてもんじゃないからな。

僕は独り誕生会や独りクリスマスみたくならないよう祈りながら、一息入れることにした。

現在時刻は9時。

準備はほぼ完了した。

時間が早すぎるので当然だが、僕以外まだ誰も来ていない。でもやることはとりあえず終わったので、しばらくゆっくりできるだろう。

そのまま校舎の外れなせいかさそここの広さを有する静かな部室にて、外から僅かに聞こえる部活の声を聞きながら、コーヒーで一服しているとノックがあった。

気の早い誰かがもう訪れたのかもしれない。

「いるのか夢月?」

「珍しい。一番乗りは清隆だったか。小腹が空いている僕の素敵な胃袋はここぞぞ」

先制代わりに自分の腹を指しながら、言葉の一撃をかます。

不意に遭遇すると、いつも違う女子という清隆への妬みの籠もった一撃だ。

正義は我にあり。

「……オレが最初なのか。まあ1時間も早いしな」

「ふむ。見たところ食い物とかも持ってないみたいだし、もう帰っていいよ」

「おい! 夢月にとってオレは差し入れだけの存在か!? だいたいお前が呼び出したんだろっ!」

「冗談だ」

「まったく。最近、ますます遠慮がなくなってきたな」

まあ本当は清隆が最初に現れるのは少し意外だったので、なにかあるのかと変化球な挨拶を放っただけなのだが。

すると、安定の反応が返ってきた。無視しようとしても、ボケにはツッコんでしまう悲しき芸人の性である。

しかし最近ことごとく先回りされてるように感じていたので、久しぶりにおちよくれて一安心だ。うん、まだ遊べる。

ただ、まだ話したそうな感じだったので聞いてみた。

「で、こんな早く来て僕になんか用か？」

「ん、ああ。昨日の礼を一言言おうかと思っただけで特にないんだが、なんとなく」

それにしても、相変わらず意味のわからない嘘を吐くものだ。

聞きたいことの予想はいくつかできているが、清隆から聞いてくるまでのらりくらりと遊ばせてもらおう。

「ふくん。ま、ゆっくりしていつてね」

「それ、何かの定番挨拶なのか？ 前もどこかで聞いた気がするんだが」

「そうだな。丁度いいから、コーヒーをもう一杯淹れてくれない？」

「つて、さっきから全然話が繋がってないじゃないか！ なんでオレが」

「ふっ。違うぞ。僕は『友達』であるお前の淹れたものが飲みたいんだ。前にお前の淹れたコーヒーを飲んで以来、自分のものだけでは満足できなくなってるな」

「と、友達？」

……仕方ないな。淹れてやるよ」

こんな安いエ○ゲーみたいな台詞で、本当にやってくれる清隆がチヨロすぎる件について。

でも流石に友達って言葉に弱すぎやしないか？ 普段の冷静さや思考力・洞察力はどこへやら。清隆特攻のIQが著しく落ちる魔法の言葉だったりするのだろうか？

もし誰か他の奴がいたら、哀れみや共感の表情を浮かべるのが容易

に想像できる。だって前も何も、清隆にコーヒーを淹れてもらったことないし……。

僕もこれにはツツコミ入れられると思ってたから、内心ビツクリである。

ちなみに共感すると思われるのは愛里と椎名。

何気にあの二人も、意味は違えど友達という言葉に強く反応する。中身おじさんは心配になってくるので、機会があったら知らない人について行かないよう注意を促しておこう。

「あつ、そうだ！」

清隆が出しっぱなしのカセットコンロでやかんに火をかけるのを目をやりつつ、僕は清隆に持っていた邪念を浄化して切り替えた。

そして、いつまでも本題を切り出してこないのを改めて遊んでみようかと考えていると、ふとした思いつきが浮かんだ。

せっかくだし、提案してみるか。

「清隆の誕生日っていつ？ もう終わってたりする？」

「？ オレの誕生日？ 10月20日だからまだだが……」

「あー、10月かあ。なら、なんとか誤差にできるか」

「なんだ誤差って」

「うん。誕生日を今日にズラしてくれ」

「……ズラせるものなのかそれは」

「人生80年として2ヶ月くらいなら、やってやれないこともないんじゃないか？ 別に戸籍変えろとかでもなく、今日ってことにしといてっていう自己満足だし」

「それならまあ……いいのか？」

「大丈夫だ。世間では好きな日を誕生日に変更するのはよくあることだからな」

「へえ、そういうものなのか」

「んじや、決定。ちよつと待ってな」

いくつかの意味で少しフライング気味だが、清隆のブラックっぽい背景的生い立ちと世間知らずな面を考えるに、細かいことは飛ばしてもいいだろう。反应的に正式な誕生日じゃなくても、自信ありげに世

間ではこういう事もあるとか言つとけば、バレるまでは意味もなく騙せそうな気がする。

ともあれ清隆からの承諾を得た僕は、船のレストランへ騒いだ詫びを入れに行く時に貰った包装紙の残りでそれっぽく装いブツを作成した。

「Happy Birthday清隆」

「え」

「はい、誕生日プレゼント」

そして鳩が豆鉄砲を食ったようになってる清隆に、手早く包装したゲームDVDを手渡した。驚いて見えるが、あらかじめ誕生日変更の承諾を貰った上でなので、こうした流れになるのは予想済みだろう。

最初に来訪した清隆へのちよつとしたサプライズである。

「中身は今日の勝負するゲームだから、またやりたくなつた時にでも開ければいいと思うぞ。インストールとかでわからない点があつたらいつでも聞いてくれ」

「あ、え？ オ……」

「発声練習でもしてるのか？ なら抜けてるのは「い」と「う」だな。それと後でバーベキューを予定してるから、よかつたらそつちにも参加よろしく」

「う……い？」

お？ 少しは喜ぶかと思つたけど、リリースしてしまった。

チョロい部分はあるくせして反応が読みにくい奴である。

ふむ。再起動スイッチはどこだろうか？ わかりやすい場所には見当たらないので、放つておくしかないか？

まあ清隆は強い子なので大丈夫だろう（適当）。

なんにしろ、湯が沸いてきたのにこの様子ではコーヒーを淹れてくれるまで時間がかかりそうに思え、しかたなく自分で淹れる事にした。

清隆は最近起こつた学校関係の情報とかを聞きにこんな早く来たんだろうに、コーヒーを淹れ直し、平常運転に戻つても話を切り出し

てくることはなかった。

なので、僕は代わりに直近で出会ったヤバ気な坂柳さんを遠回りに伝えることで、丸投げの下準備をしておく。きつと清隆なら面白い結末に導いてくれることだろう。

「つまりだ。坂柳さんはかなりの美少女だったし、清隆も面白く感じる……かもしれないぞ。葛城達に頼んで紹介してもらったらどうだ？」

「夢月がそう言う時は、なにか面倒事をオレに投げようとしている時だ。その手にはもう乗らない。オレの平穩を簡単に崩せると思うなよ」

甘い。歯が溶け落ちるほど甘いピーカンパイに激甘チョコレートソースを練り込んだかのように甘すぎる。

頭の出来と策略に関してはともかく、会話力はいまだ発展途上というわけか。僕に遊ばれない為には、それでは足りないとわかっていないと見える。

「ふっ。お前の平穩。

——いつから崩れていないと錯覚していた？」

「なん……だと？」

「最初からだよ。最初から清隆に平穩などというものは存在しない。平穩とか事なかれ主義だとか言うくせに、不審者ムーブする奴に平穩の二文字は似合わない」

「不審者ムーブ!? いやっ！ そ、それでもオレは……!」

しかしさつきもそうだったが、こういう意味のない会話になると途端に遊ばれてくれるとか対人能力が偏りすぎではなからうか？

極まったボツチ・椎名と内弁慶ボツチ・愛里は別枠としても、僕や早苗より部分的にコミュ力が低そうに見えるんだけども。それなりに話す友達になった所見からも、なんでそうなったと聞きたくなる驚きの低さ。正直、僕の想像力の限界を超えている。

……これまでどれだけボツチだったんだコイツ。

そう疑問に思う間に、どこまで本気なのか清隆の演技にだんだん熱が籠もってきた。

まあ僕としては都合が良い。面白くなってきたぞと更なる追撃を撃ち込もうとしていると、入口の方から呆れたツツコミが入った。「何をやってるんだお前は……。意味のない寸劇で無駄にシリアスな雰囲気出しやがって。まったく」

四方だ。

気づくと9時半を回っていて、そろそろ早めに来る奴が集まり出したのだろう。時間切れである。

「四方……?」

「ちわー。四方もやる? 清隆イジリ」

「おおいっ、夢月! いつの間にさっきの話題からそんなモノにすり替えてたんだよ!! 思わず乗ってただろうが!」

え? 素で乗ってたの? おちよくりには気づいてると思ってた。顔を見てもいまいち本気が読めないの、念の為に注意喚起しておいた方がいいかな。

「……清隆。お前… 飴ちゃんあげるから、とか言われても知らない人についてくなよ? いくら清隆でも危ない場合はあるからな?」

「し、しないわっ! オレは子供か!」

「いやー。綾小路なら、ちよっとしそうではある」

「四方まで!」

流星に飴ちゃんは冗談だが、友達だろうか? とか、奢ってやるから来いよ (条件付き) ! とか誘われたら、どこでもホイホイついていきそうだ。さっきのコーヒーの件からして。

いや、反論にちよつと詰まった感じからして、経験済みなのかもしれない。社会勉強付きで。

ともあれ清隆を軽く流した四方は机に並べてあるPCの起動画面とDVDを見て、少し感心したように零した。

「しかし実質1ヶ月くらいで、よくゲームなんか完成させたものだな」
「ふははっ。もしもできなかつたら、全面白一色の部屋で過酷な強制労働を課せられると思えば本気になることは実に容易い「ブフォツ!」のだよ……。なんだ清隆? 相変わらず奇妙なツボしおつてからに」

「ゲホッ、けほっ…ゴホッ！」

「え、マジで大丈夫か？ 風邪…とかじゃないよな」

「き、気管に…ゴフツ」

「…大丈夫みたいだな。大方、コーヒーが変なところに入ったんじゃないか」

四方の称賛を受けて自慢気に嘯いたら、その間に一旦落ち着こうとしたのか、ちよūdōコーヒーカーップに口を付けていた清隆が咳き込んだ。

驚愕した顔付きで本気で咳き込んだように見えたので心配になって背中をさすったが、ただむせただけのようだ。まあ、驚くようなこととはなにも言っていないしな。

たまに変に爆発力を持って騒ぐ奴なので問題ないだろう。

それでも少し不思議に思いながら四方と挨拶を交わしていると、なにやら微妙に清隆から警戒したかのような視線を向けられた。

疲れたため息とともに僅かな時間で警戒は解除されたが…：また清隆が天然マッドメイトの本領を發揮しやがったかもしれない。

こういうところだよ。四方が警戒する雰囲気に向け出していたし、順当に不審がらせたようだ。

『深淵を覗く時、深淵もまたこちらを覗いているのだ』

これは有名な哲学者であるニーチェが著書内で記したフレーズだが、今の清隆にも当てはまる。なぜなら不自然な挙動をする者を警戒するのは当然のことだからだ。なんてことない場面で警戒してくる奴がいたら、そりや逆にソイツ：清隆が警戒対象になるだろう。

これからゲームするというのは、何がしたいのかわからない。自分を警戒させて、いったい何になるのか。

時々、天才じゃなくて紙一重の方じゃないかと思わせてく…：

…：思わせてくる？ まさか自分を馬鹿だと思わせるのが目的か？

いやでも、すでに強力な手札を何度も見せている僕や四方にそれをして無意味だろう。現に四方には不審がられている。皇居や都庁

付近でも歩かせたら、一発で職質されるくらいには挙動が怪しかったからしかたない。

でも清隆への敵意が確定気味な早苗はアレだが、四方ならもうそろそろコイツのアレさをわかってきてるんじゃないか？

そう考えて、これは一回聞いてみるのもありだろうと、僕はカマを掛けてみた。

「だけどそろそろわかってきただろう、四方？」

「ああ。綾小路の不審さは天然なんだな？」

やはりわかっているようだ。

「不審……天然……これはオレに向けられている……のか？」

「その通りだ。知り合ってから以降、清隆が不自然・不審じゃなかった試しがない。だから、いちいち気にするだけ損だぞ四方」

「……」

「なんて紛らわしい。つまりこれまでの綾小路の怪し気な言動は——」

清隆の発言を肯定気味にスルーして、思うまま答える。

四方も薄々勘付いていたのだろう。核心に迫っている感触がある。

これなら解答を出しても問題ない。

僕は領くと四方の言葉を引き継ぎ、明快に言い放った。

「——いつもの発作だ」

「それは……おいたわしいな」

見解を語ると、清隆を見る四方の表情からみるみるうちに敵意みtainなものが消え、手の施しようがない患者を見る目が変わる。

残念なナマモノへの理解が進んだのだ。

人騒がせな変人でもいいかもしれない。

「待ってくれ！ それじゃまるで病気みたいじゃないか!? 流石にそこまでじゃないはずだ！ オレがそんなに不審だったとでも!?!」

一方、清隆はというと、不本意に思っていることを前面に出しつつ主張するが、もはや本人以外の誰も彼の残念さを疑っていない。

「当然だろ？ むしろなんで不審じゃないとか思えるんだよ。都合の良い妄想もそこまでいくと才能かもな」

「はっ？」

「本物は知らないけど、ところどころであからさまに工作人員みたいだもんなあ。こんなに怪しい奴はなかないぞ」

「……………つ。オレは……………オレは、それほどまでに浮いて『いた』というのか？」

「それを気にするんだったら、陰キヤムーブな普段まではともかく、ブラックな背景を匂わせるきな臭い言動をなんとかしろ。僕達以外にも、お前のクラスメイトだって少なからず変に感じてるはずだ」
「言つとくが、綾小路は夢月以上にアレな部分があるからな？」

「というか基本無表情なのに、なんでそんなにポーカーフェイスに感じないんだよ。しかも変なところだけだから余計にたちが悪い」

「む、夢月…以上……………に？」

ただ四方。

実際にそれがわかるのは同格付近の奴だけだ。少なくとも僕は普通にわからん事の方が多い。

ついでになにかは不明だが、僕をアレなボーダーみたく設定してるんじゃない。自分をイロモノと認識してないイロモノはこれだから困る。

それに、どこにショック受けてるんだよ清隆も。それじゃあ僕が普通の高校生じゃないみたいだに聞こえるだろうが。

二人の言い分を僅かに不服に思ったが、清隆にはできるだけ自覚を持ってもらうのが先かもな。この際だから、前から思っていたことを言つてやろう。

と思つたけど、四方が言つてくれるみたいだから任せた方がいいか。多分、思つてたことに差はないはずだ。

「そ、んな…まさか、夢月より……………!? オレは…ただ、普通の高校生として」

「だからな? そもそもそれがおかしいって事にいい加減気づけっ! 普通の高校生は『普通』を意識して振る舞わないんだよ。近くで見ると、普段は普通な…ちよつとアレな夢月より不自然極まりないだつて」

「?!？」

もはや清隆には言葉もなかった。

無理もない。

自分が不審人物だったと突きつけられたのだ。

おそらく今の清隆には、夜のランニングの休憩中に通りがかりの女性に悲鳴を上げられた上で、一目散に逃げられたかのような衝撃が走っていることだろう。客観的に、はあはあと吐息を荒げつつ俯いて休んでいたから女性視点でヤバ気だったのは理解できるが、あれは昔の『俺』にとつてとてつもないショックだった。逃げられた際に折れたハイヒールの残骸から立ち去った後、飲んだ缶コーヒーはとても苦かった。

てか、さつきから僕にも流れ弾が飛んできてんだけど。

嫌な思い出まで想起されたんだけど。

ふむ……四方が僕をどう見てるのかよくわかった。覚えてろよ？

「ふうー」

……こんな時だが、綾小……いや、これからは俺も友として清隆と呼ばせてもらう。お前も二三矢と呼んでくれ。少しはこっちから胸襟を開かないと、言いたいことも遠慮してしまう」

「ふ、二三矢……」

一方、景気よく言いたい放題した四方は一息入れ、トーンを通常に戻し清隆へ語りかけた。

こんな状況でも四方に友と呼ばれたのが嬉しいのか、清隆は一瞬口元を緩めて、ぎこちなく名前を呼び返す。

おお……！ これは、清隆のあまりの残念さを見かねたのか麗しき友情が生まれたのかもしれない。

「その上で指摘しよう」

清隆。お前は浮いて『いた』じゃない。常時浮いて『いる』の間違いだ」

「……………お」

即座に過去形と現在進行系の違いを指摘されて撃沈されてるけども。

そして僕には清隆が小さく呟いた言葉が聞こえてきた。

「Oh My Got」と。

いや、コイツ。ショツク受けた感じの裏で、実は余裕あるだろ。

なんで唐突にアルベルトみたいなキャラになってんだよ。

91、前日談

ペンは剣よりも強し。

時の権力者・リシユリユーが使った権力者のサインは武力よりも強いという意味の格言である。

これにはもう一つ、言葉は暴力に勝るといふ使い方もあるが、僕としてはこちらよりもしつくりくる。適切な使い処を見極められるなら、職権濫用は最強の手札の一角だと考えているからだ。

僕も一度は使ってみたいものである。

四方が来てからしばらく経った現在時刻は、10時ちよい前。

元々そこまでの人数は予定していないが、ポツポツと訪れて来た。朝の挨拶を交わし、好きな席で待ってくれるように案内する。

もう10名くらい来ているというのに、かなりの割合が単独風味な空気を醸してゐるあたり、とても我が天文部らしい。

予想通りAクラス組、それと椎名含むCクラス組は来ていないが、僕が呼んだほとんどの者が来てくれた。それに予定外の者も何人か来訪している。鬼龍院先輩と一之瀬だ。鬼龍院先輩はともかく、一之瀬は白波か四方経由だろう。

てか、どこから情報を仕入れているのかはまあいいが、この二人がいると部屋内の美少女率が上がるので微妙に緊張するな。

……さて、それはそうと。

僕自ら購入した専用の一人掛けソファを高円寺が使っているのはいい。どうせゆつくりできないことは目に見えているからな。

雫の撮影用に購入したお洒落？な椅子を鬼龍院先輩が使っているのも愛里が許してるからいい。

この二人はいつもいつの間にか来ていて、常にギリギリ怒れないラインで好き勝手するのでもう諦めた。それで彼らが満足するなら安いものだ。恩もあるしな。

でも早苗。お前は許さん。

来てくれた全員に渡した絵とDVDを見た前後？で驚きと動揺をあらわにしたかと思えば、突然上機嫌になって何故か愛里を抱き上げた上で女子連中を囲いだしたのだ。

現在、早苗が座っている場所自体はもう一つの普通のソファーだけど、膝の上に愛里を乗せ、左右に姫野と櫛田を侍らせ、一之瀬と白波まで近くに寄せている。つまり部室内の女子ほぼ全員だ。

前フリもなくハーレムの主人を気取るなんて、女の風上にも置けぬ奴である。こういう奴がいるから、男余りなどという悍ましい状態ができてしまう。

もはやモテない野郎に喧嘩売つてるとしか思えない。

コイツは部屋内のモテない男子…主に僕が、幻の血の涙を流しているのが見えないの？ 羨ましすぎて真顔になったのも？

見えてないんだったら、人として必要な想像力が欠如してるだろ。

愛里以外はノーセンキュー女子とはいえ、少しの間でいいからそこ替われよ。

しかもだ。

何が楽しいのか僕に向かって「ふふんっ♪」と言わんばかりの笑顔で煽ってきやがる。

「ふふんっ♪ ねえ夢月さん。羨ましいですか？ ねえねえ、羨ましいですよ？ うふふ」

「羨ましいに決まってるだろっ！ なに気軽に男の夢を叶えてんだよ!？」

「嫌ですねえ男って。ただのスキンシップじゃないですか。というか夢月さんもこういうのって憧れたりするんですか？」

「そりゃ……一度はやってみたいだろ。男として。実践し続けるにはかなりの度胸・耐性が必要で、なにより関係の調整が面倒くさすぎるとは思うけども」

「ああ、女心がわからない朴念仁ですもんね！ 何人も侍らせるなんて夢月さんには不可能でしたか。それは見せびらかしてごめんなき

い♪ あははっ！」

「コ、コイツ……!」

訂正。口に出してきやがった。しかも僕を的確に見透かした上でだ。

これには流石に温厚な僕もカッチーンときたね。

完全にスイツチが入り、邪神を討伐する決意を固めた。

日本全国、一億人のモチない男女諸君よ。

ちよつとずつでいい。

オラに力を分けてくれ。

そうして見えない同士達から勇氣と力を借りた僕は、元氣玉をぶつける時のクリリンのように、早苗へ思考と集中力の大半を割いた。

「ハンツ、上等だ。ゲーム前の前哨戦としてちよつどいい。その喧嘩、買ってやろう」

「ほう。今度はなにをするつもりです？」

「早苗を弾劾してやる。ちよつど櫛田と、呼んでなかった一之瀬も何故か来ていることだしな」

「え、私？ 私も早苗の弾劾に関係あるの？」

「桔梗ちゃんと同じく、私も心当たりないんだけど……」

「というかその前に、私を呼んでおいて帆波ちゃんを呼んでなかったのが驚きなんです」

ちよつどこちらを見ながら何か話していた悪魔と聖女、それに白波がなにか言ってるけど、今の僕の目と耳には入らない。

否。入れない。

「はははっ！ 早苗よ。泣け！ 叫べ！ 面倒くささに頭抱えて（説教から）逃げ惑うがいい！」

聖女・一之瀬の怒りを買って無事で済むと思うなよ？」

「本当になに!? 来て早々、聖女とか怒りとかツツコミ処が多いんだけど!」

「あー、後にしましよ『帆波ちゃん』。左京君ってこうなると、なに言っても無駄だから」

なんか最近、僕ばかり受けている気がする一之瀬の説教を、お前にもおすそ分けしてくれる。勝負が終わった後にでもな。

思い知るがいい。

これが同士一億人の妬みと聖女の威を借りた僕の方だ！

「ククツ。年貢の納め時だ、早苗。」

一之瀬、そしてこの面子の前で、傍若無人なお前とお前にいらん知識を与えた奴を明らかにして、まとめて矯正してやろう。一之瀬がな！

「なんかまた私が登場した!? そして安定のスルー！」

「はて……知識？ 何のことですか？ 以前のことがあるので一応考えましたが、全く思い当たりません」

「下手なとぼけ方をすると、墓穴を掘るお前の面白い姿が露呈するぞ？ まあ、しなくても僕がさせるわけだが」

とは言うものの、どうやら早苗は本当に思い至っていないようだ。

なんか一瞬それに嫌な予感を感じたが、まずは前提条件を整えようと、僕は勢いに任せることにした。

「ただ僕も鬼じゃない。正直に言えば手心を加えてやってもいい。」

その為には——手始めにお前にNDKとメスガキに「メスガツ……！」ついて吹き込んだ奴の名前を吐け。前に一之瀬もこの件については頭を抱えていたし、味方を増やせるかもしれないぞ？ まあ僕は櫛田だと」

「夢月さんですけど」

「確信してるんっ——ぬえ？」

聞き間違いか？ あり得ない名前が出てきたんだが？

「え……は……なんて？」

「夢月さんですけど」

「??？」

「——左京君？」

あまりの予想外に言葉が認識できなかった。

そして強制的に素へ戻されれば、突如として冷や汗が吹き出てきて止まらない。更には櫛田と一之瀬が名前を呼んできた時など、体が勝手に大きくビクンツと揺れた。

勿論、まずは自分の耳と嘘を疑ったが、早苗に嘘を言っている気配が一切ない。考えてみると、とぼける理由もない。再度聞き返えした

返答もバツチり僕の名前だった。

「くふっ！ 後輩が何をやらかすのか期待していれば…ふふ、これはまた無駄に盛大な墓穴を…ふ、ふはははー！」

「夢月さん…嗚呼、夢月さん。ふひっ…く、くおれはやってしまいましたねえ？ 策士、策に溺れるとはまさにこの事。最高ですね！うひっ、ひはははっ!!」

皮肉かてめえ。

って、鬼龍院先輩と早苗が笑いだしたが、それどころではない。

指摘されるまでもなく、なんかとんでもなく下手を打った気がする。具体的には投げたブーメランが自分の後頭部に直撃したような…。

「ああ、なるほどね？ 自分が吹き込んだのをすっかり忘れて、私のせいだと思い込んだと。

…左京君って、実はバカなんじゃないの？」

更に櫛田から呆れた表情と言葉を向けられ、ようやく以前に早苗と櫛田へ面白半分に吹き込んでいた微かな記憶も蘇ってきた。

そんな意味不明な状態でありながら、思考に残った冷静な部分は現状を分析し。

——これは孔明の罠だ！

と、叫んだところでどうにもならないと、カラカラと空回りする脳内計算機は導き出す。

気づくと、出鼻をくじかれるどころか、櫛田も状況を把握した途端に輝かんばかりの笑みを浮かべだしている。邪悪な者共にとって、僕が墓穴を掘ったと思われる今は大好物な状況なのだろう。

なんてイイ性格してやがるんだ。そんなだから邪悪なんて言われるんだよ。

「……………そつか。やっぱり左京君が元凶だったんだね。なるほどー」

しかも味方につける予定だった一之瀬まで、敵に回りかねない声色で極めて不利な方面の納得をしている。その声とほぼ同じタイミングで背中を伝った冷や汗の痺ましき感触に、動揺が増幅されてしまっ

た。もはや彼女の方を見られないレベルだ。

何故か一瞬で四面楚歌になった現状は、僕に大混乱を齎していた。「さ、さあ〜て。では夜も更けてきたし、そろそろ寝ようか。おやすみ」

「まだ朝の時間で、これから左京君が作った楽しいゲームをするっていうのに?」

く、櫛田!

某猫が某ネズミを追い詰めた時のような笑みしやがって……!

邪悪なる悪魔め! 滅せよ!

「……ででは早速ゲームを始めようか」

「弾効はどうしたんです? ぶふっ…それに見たところまだ人も揃ってなさそうですし、10時にもなっていませんが?」

早苗え……!

元はといえば、お前がハーレムもどきを見せびらかしてニヤニヤ煽ってきたのが原因だろう!? それなのに歯向かった僕は許早苗ってか!? 少しは手心を加えたらどうなんだ!

この笑顔のまま暴風で全てをなぎ倒す自然災害が! 鎮まり給え!

「……………」と、友達を弾効するなんてイケないことダヨネ? 僕にはそんな事、とてできない!」

「左京君のどの口がそれを言うの」

「おそろしく調子の良い手のひら返し。オレでなきや見逃しちゃうね」

一之瀬はともかく、清隆までだと!? こんの坂柳さんの類似生物、ネタ好き妖怪KY野郎! 僕になんか恨みでもあるのかよ!?

てか、みんなに言ってるから見逃されるわけないだろ! 気づいても口に出さない気遣いがあるだけだというのに……!

櫛田も早苗も笑顔を黒光りさせて蹴ってくるな! 冤罪ふっかけそうになったことはマジで悪かったから! お願いだから許してください! 対応人数が多すぎてもう無理!

どうすればいい? なにか……なにかないか。

！

「そ、そうだ！ 四方は呆れを顔に出し、愛里も怯えてるだろうが、という方向は……駄目だ。方向転換するには無理矢理すぎるし、弱すぎる。」

「かくなる上は——他の面子も笑ってないで助けてくれ。予期せぬ事態なんだぞ、と助けを求め……僕が一応女子相手に下手打ったこの状況で助けてくれるわけがない。高円寺や鬼龍院先輩も笑いを抑えたくらいだ。他は言うに及ばず。」

「ヤバい。策が何も思いつかない。言葉が出てこない。逃げられない。僕の知識と経験の泉もついに枯渇したか!？」

「何がヤバいって、特に対抗札がない「にやはは」とかを付けない真顔の一之瀬がヤバい。」

「僕は説教してくる一之瀬に詳しいんだ。今回逃げられても、次の機会を虎視眈々と狙ってきてきなかなか忘れてくれないだろう。聖女のくせに執念深い奴である。」

「いや、でも！ 仮にも僕は天文部部长で、このゲーム勝負の開催者という権力者でもある。強権を振りかざし、アホのフリをすることで、何事もなかったかのような勝負への移行を可能にできるかもしれない。」

「リシユリユーも言っている。」

「ペンは剣よりも強し、と。」

「自分を信じる——ポカやらかした直後の自分以上に信じられない者がいるわけないだろ!？」

「嗚呼。弁解や打開策っぽいモノが、浮かんでは口から出す前に消えていく。」

「万策尽きたか……!？」

「しかし万策尽きて詰んだ事を悟り混乱状態に陥った僕を、天は見捨てなかった。」

「おや、こんなに大勢……。」

「もしかして私が最後でしたか？ そうでしたらお待たせして下さい。」

ませ」

「し、椎名あー！！！ よく……本当によく来てくれたあー！」

「えっ？」

なんとという圧倒的天運！

椎名ひより大明神のご来臨である！！

やはり僕には幸運を司るナニかが付いている!!!

思わず叫ぶような声で歓迎してしまった。

「助かったよお。来てくれてよかった。ありがとう椎名さん！」

「え、ええ。どういたしまして……椎名、さん？」

困惑する椎名に最大限のおもてなし。

彼女の存在が全てを塗り替えてくれた事への返礼である。

「ささっ、どうぞこちらにお座りくださいませ。我が天文部で3番目の良い椅子ですよ！」

「は、はあ。何故遅れた私がこのような待遇に……」

「何を仰る椎名大明神。わたくしが接待するのは当然ではないですか。なんといつても腐つても部長ですぞ？ 最後にご来臨なされた椎名様のご案内とゲーム勝負の開幕合図はわたくしの役目であり権利でもあるのです！」

「今度は大明神？ それにさ、様付け……。いったい何が起こって」

「立て板に水のごとく、よく出てくるな」

勢いだけで椎名を……ひいては部室内の流れを押しきろうとする最中なんだから、清隆はいい加減ちよっと黙ってくれ。

この際、椎名への借りが更に加算されることさえも許容できるほどの幸運。決して無駄にできないのだ。

大歓迎ムードを壊せる奴なんてここにはいないと、僕は固く信じている。

「さあつ！ お呼びしていた皆様が揃ったところで早速始めるとしましょう！」

ゆえに強引に話を水に流しても、それを止めようとする者も存在しえないだろう。

「小東方高育桜、お披露目です！」

権名を特等：1等席に案内した後、僕はスリープ状態にしてあったPCを確認しながら、ゲームのオーブニング画面にしていた。

誰が呆れてようと。誰が笑ってしようと。

「それじゃ話は今度にしようか」

「そうだねっ！」

誰にロツクオンされようと。

そして——『ナニ』に視られていようと……。

僕は一瞬だけ目を閉じ、『それまで』を無理矢理忘却して切り替えた。

「清隆、四方、早苗。」

まずPC前に座って、画面中央のメニューにある「START」ボタンを選択してくれ」

「き、切り替えが……早すぎる！」

「この空気のまま、しれっと説明に入るんですか!？」

いきなり説明を始めたからか、僕は穴が開くほど注目されているな。

早苗が席に着いた為、膝から降りた愛里や白波が慄いたように何か零してるが、今はスルー安定である。他の訓練された客人達は大なり小なり切り替えているみたいだから、コイツらが少数派だろう。

「難易度選択画面になっただろ？」

梅がイージ、竹がノーマル、松がハードになってる。違いは梅の弾幕量を1とした場合、竹が3、松が9。

だけどゲームに慣れてない清隆には悪いが、今回のお前らは全員「松」を選んでもらう。ちゃんと救済措置は用意してあるから、大丈夫……だと思おう」

「救済措置？」

「クリアまでコンテニューを1回だけOKにしてある。自機が落とされても大丈夫な回数は1UPアイテムで増やせるが、初期のままだと4回落とされたらゲームオーバーなんだ。これはその場で1回だけ

落とされた回数をリセットできるシステムってところ」

「なるほど。1UPについては」

「そういうアイテムがある。後で軽く説明するけど、多分説明するよりやった方が早いな」

「わかった」

清隆も理解してくれたようなので次だ。

流石といえる切り替えの早さである。

「難易度を選ぶと、次は自機選択画面になるから、それぞれ選んでくれ。自分のでも他人のでも問題ない。ただ決定ボタンを押すのは、説明が終わるまで待ってくれ」

「自分以外でもいいのか？」

「お試しで色々選ぶのも、こういうゲームの定番だ。一応勝負だから1機に絞って熟練度を上げる方が得策な気はするけどな」

アドバイスのついでに、清隆はゲーム初心者みたいだから、口頭で軽く性能差もしておくことにしよう。

「また各自機の特性も説明しておく」

綾小路機はスタンダードな連射型でサブウエポンに誘導弾付き。癖もないから初心者向けといえる」

「……おい夢月。オレのボムの説明部分。櫛田『リア充大爆発』ってなんだ」

「技名は気にするな。画面全体攻撃の弾消し…使ってる間は自機が落とされないし、攻撃力もそれなりの回数制限がある切り札だ」

「そういう事じゃないんだが」

「……………はい。追加」

でも愛里や白波は普通にスルーできるけど、横からボソツと眩かないでくれ櫛田。寒気を伴ってくるせいでスルーに精神力を消費する。

それに何をナニに追加したんだ？ 気になってくるだろうが。

「次に四方機は回避特化型の誘導弾メイン機体。当たり判定が他2機の半分ほどしかなく、速度も綾小路機の1.5倍。更にとどの位置からも弾が命中する代わりに、攻撃力も控えめになっている。上級者向けかもな」

「使いにくいのか?」

「人によるとしか言いようがない。ただ、性能は四方の集中力には合ってると思う。」

ちなみにボムは風水『陰陽の幻想』。通常攻撃の強化版って感じで弾消し回避に使うのが賢いかも?」

「集中力……」

「あつ、それと四方のPCだけマウスとキーボードを変えてあるから、スタートする前にテストしてくれ。具合が悪かったら交換する」

「……いや、これでいい」

「そうか。使いにくく感じたらいつでも言ってみな?」

「ああ」

物理的に破壊される懸念については、言う必要もないだろう。

借り物さえ無事ならいいので、自前のもも予備としていくつか用意してあるしな。

「最後の東風谷機は攻撃力集中型。誘導弾はないが、ただ直線レーザーを敵にぶち当てて3機中最高の攻撃力でねじ伏せる。」

この自機のテストプレイで高円寺が叩き出したハイスコアを僕はいまだに超えられない。癖は強いが、使いこなした時の最強機体はこれだろう」

「わかってますねえ。これで……これがいいんですよ!」

「早苗ならそう言ってくれらと思ってたよ。偉い人にはわからんらしいからなあ。」

いよつ、ロマンを解する女!」

「ふふつ。もっと言ってくさい!」

はあ。今は好都合だけど、機嫌が山の天気のようにコロコロ変わる女、とか言っちゃった方がよかったかな。どうしてか今日は平均のテンションがいつもより高いが。

「そんな早苗が使うだろう東風谷機のボムは、奇跡『海が割れる日』。画面半分を覆う極太レーザーの照射で、全てを呑み込む使い方がベストだろう」

「くっふふ。ブレ〇トファイヤー……」

「どつちかというとハイ〇ガキヤノンだったんだが、まあ喜んでるならいいか」

「……夢月君も早苗さんも古いロボット系が好きだもんね」

少し駆け足気味な自機説明だったが、この3人なら理解できたはずだ。

ついでに微妙に慌ててたせいで説明が前後してしまったものを加えれば、大まかなシステムはだいたい説明できるだろう。

「で、基本操作は8方向2ボタン。移動とショット、ボムになってる」「ボムつてのが、夢月が言っていた切り札でいいんだよな？」

「うん、あつてる。ボムは落とされるまでに3個持つてるから、抱え落ち……使わないまま撃墜されないのが最初の鉄則になるだろう。」

あとアイテムは3種、赤色がショット強化。青色がボム増加。緑が1UPだ。といつても、緑はクリアまでいつても2個しかないけどな」

「そういえば、シューティングにありがちなエクステンドはどうなってるんですか？」

「ノーマルの竹までは10万エブリだけど、松はなし。だから今回はスコアでの1UPはないと思ってくれ。なくてもクリア可能と判断させてもらった」

質問でこういう用語が出てくることは、多分早苗が3人の中で最も経験豊富だろう。

ちなみにエクステンドとは点数などによる残機UPで、10万エブリはスコア10万点ごとに1UPという意味である。

「……ああ、これは高円寺がテストプレイでなんかやったな」「フッ」

うんまあ、これは四方の言う通り。

あいつクラスだと残機が溢れるヌルゲーになる、とまでは言わないが、緊張感が損なわれるので削った。初心者 of 清隆には悪いけども。

ともかく一通りゲーム説明は終わったので、僕は自分のPCでモニターとその他のテストをしながら最後に条件の確認をしておく。

最後に挑戦者の勝利条件は、30回ゲームオーバーになる前にゲー

ムクリアをすること。勝利報酬は僕にできる範囲のなんでも。ただし他人や権利が関係する場合は拒否権付き。

これについてなにか異論反論に質問はあるか？」

「夢月が勝ったら……俺達の誰かがクリアできなかつたらどうなる？」

「え？ あー、お前らが手加減しない限りないと思うけど、その場合は今日の飯奢りでいいや。考えてなかつたし」

「……自分が勝った時の事を考えてないとかコイツは本当に」

「まあ夢月さんですしねえ」

3人を高円寺と同等クラスと仮定すると、ゲームに慣れてない清隆と機材を壊しちゃった時の四方が僅かに落とす確率があるかな、って程度にしか考えてなかつた。モニターで観戦してれば、無駄な手抜きや不慮の事故対策もできる。

だから正直言つて、僕の勝ちほぼないと思つていたのだ。

てか、こういうゲームで製作者が勝つたらつまらんと個人的には思うのだが。その為に、愛里用のイージーや僕用のノーマル難易度機能を付けたわけだし。

と、清隆からも質問が飛んできた。

「ゲームオーバーってことは、さっき言つてたコンテンツニューはどうなるんだ？」

「当然カウントする。だから15回『最初からSTART』してゲームオーバーになるまでつてことになるな」

「……了解だ」

あまりに回数が高むと、腹ペコになるくらい時間がかかるかもしれないが、清隆の学習能力・適応力なら悪い癖さえ出さなければ問題ないだろう。

というか、アイテムを取り逃さずいった場合でもコンテンツニュー合わせて10機×15回のハードモード。普通なら初心者にやらせる試行回数や難易度じゃないが、こいつらならなんなくクリアすると何故か確信している。

ちなみにゲームに使わないPCとモニターは観戦用だ。

チャンネル1が早苗。2が四方。3が清隆。デフォルトでは早苗の1番に合わせてあるが、勿論切り替えることも可能。

観戦する者が僕以外にいてもいなくても、いちいちゲームしてる後ろに回られるのは気が散るかなと思ったので、最低限の配慮はしておいた。

「よし。これで説明は終わりだ。他になにか質問はあるか？」

軽く見回してみるが、ただ静かな視線を返されるのみ。

「ん、なさそうだな。」

キャラ選択して決定にカーソルが合ってれば、Enterキーでゲーム開始になるわけだが——そろそろ全員準備できたか？」

「ええっ！ どんとこいですよー！」

「できました」

「問題ない」

「んじゃ、1回目は操作確認の為、落とされても気にするな。カウントには入れない」

早苗はともかく、他二人には必要だろう。

正直、ひとまず目的は達成したので、楽しんで遊んでもらえればそれでいい。

もしこれでクリアされたら諦めるしかないが、調整なしとはいえ高円寺でさえ7回もかかったのだ。だから僕は樂觀している。

「今日はいっちょ楽しんでいってくれ！」

不具合なく音楽がオープニング&最初の道中曲に変わったのを確認して、僕は3人の挑戦者へ発破をかけた。

ところで僕はちよつとした遊び心と我儘で、暗転に挟んだ自己満足がある。

ゲーム開始直後に5秒間だけ。

ストーリーどころか四方や清隆、愛里にすら関係なく浮かび上がる『僕以外には』意味不明だろう文字列。

「あれ？ なにか暗くなりましたよ？ 変な文章も出て」

「ああ、そういう仕様だ。すぐにゲーム開始になる」

「なんだこれ。キャットルーキー？ 前日談？」

「おう。ブラックルームとかホワイトルームとかが、何故か清隆に評判が悪かったからな。あんまり自分以外に従わない新人って意味で、変更を加えた」

「へえ、猫みたいな新生ってことだな。いいんじゃないか」

「ありがとう。僕も結構良い感じのサブタイトルにできたと思ってるよ」

僕だけの為に、オープニングの隠しタイトルに遠回しな意味を入れておいた。

『ようこそキャットルーキーの前日談だと思っている学園へ』

今を生きる現実とキャットルーキーという物語を混同しないように戒めを。

EX、小東方高育桜

学園の姫と呼ばれる存在が健やかに過ごす為だけに、忠実？なる従者・左京夢月は命名決闘をはじめ数々の制度を創り出し、学園を根本からひっくり返し、学園の対抗組織・ホワイトルームを設立した。

この左京と佐倉が起こした改革は、後に「夢桜異変」と呼ばれるようになる。

それに対し、高度育成学園生徒会はブラックルームの精鋭を投入することを決定した。

承諾したのは、綾小路清隆、東風谷早苗、四方二三矢の3人。彼らはそれぞれの思惑で事態解決に動き出す。

茶番と奇妙なオープニング、最初の道中でのチュートリアルを経て、ようやく本格的に始まった小東方高育桜。

最初のステージは、作者の左京がチュートリアルと言っていただけあり、緩めの弾幕に設定してあるようだ。

勿論、三者三様に優れた資質を持つ『強き者』は難なく突破していく。

そして最初のボス、チュートリアルの黒幕・左京夢月の待つ空き教室の拠点へと辿り着いた。

「ぐはははっ！ 我こそは黒幕の魔王・左京夢月！ 私など貴様らの足元にも及ばんわ!!」

……だから…えーと、なんとか佐倉共々、見逃して貰えませんか？なんでもはしませんが、ちよっとお得なプランがあるんですよ。話し合いますよ」

「初っ端から黒幕で魔王が登場からの命乞いとかふざけてるんですか!!? 私は敵のことごとくを退治しに来たんですよ!!!」

「お得なプランを紹介してくる黒幕か。なんか嫌だな」

「……第一声で降参するトップとか斬新すぎるだろ。絶対これ普通じゃない」

「ぐう。聞く耳持たないか。しかたない……！ それなら3人まとめかかってくるが良い。あつという間にやられて度肝を抜いてやろうではないか」

戦闘前の会話通り、どうやら準備運動にもならない模様。

あつさり撃破である。

最も操作がぎこちなかった綾小路でさえ、お試しと思われるボム一発使用しただけで終わった。

どうでもいいが、このボムの顔型爆発はおそらくモデルになった楢田と思われる者の反感を買ったことだろう。

「弱い……」

「当ったり前だろ!? 僕はチュートリアル! ゲームオーバーになるたびに見ることになるんだから、弱くないとね!」

「何を言ってるんだ?」

「というわけで——サラダバー」

「は? 観念したかと思えば、逃げるだど? 命名決闘の約定はどうした!?!」

「油断しました! 追いかけてみましょう!」

「あ、ああ」

動き出して早々に黒幕・左京を発見・撃破するものの、呆気に取られた隙を突かれ意味ありげな笑いを残した左京に逃走を許してしまう。

これよりいよいよ本番ということだろう。

今、類も見ないほどの追走劇が幕を開ける……! !

本番というのも怪しくなってきた。

道中こそ魔法陣からのトリッキーな砲撃弾幕が自機の行く手を遮り、綾小路の残機を一つ減らし、難易度の上昇を感じられた。

だが、次の渡り廊下で出てきた2面ボス、椎名ひよりもまた——。

「うふふ。私こそは動かない点S・椎名ひより！ 左京君なんて黒幕の中で最弱です！ 黒幕が左京君しかないという点を除けば！」

イロモノだったからだ。

「さあ！ 何故か私が相手になりました。かかってきてください。あつという間にやられてみせますから」

「何なんですかこのイロモノ集団は!? 本当に学園の敵対組織なんですか！」

「珍しくノリノリに動いてるな椎名。いつも儂げな雰囲気の本を読んでいたお前はどこ行った」

「ここまでの二人、勝負前から負け宣言してるんだがそれは」

呆れた風な会話ではあっても、3機の総計で4つのボムを使わせる健闘。いまだ序盤のボスといえど、やはり少し強くなっている。

倒した後の道中ではまたも左京が現れ、一発で倒されては逃げていく。まるで自機達をどこかへ誘うように……。

その先にある正面玄関にいたのは、新制度での学園の守り手と目される3面ボス、葛城康平と戸塚弥彦のコンビだ。

「葛城、戸塚。まさかお前らまで……」

「違うつ！ ちょっと俺と弥彦は、その……左京に借りがあったな。それで今はしかたなく……そう、しかたなく！ し……質実剛健な守り手、というモノをやっている。すまんがここを通りたければ、命名決闘で俺・葛城康平を負かしてから行ってくれ。それが新たな秩序を守り、義理を通すということに繋がるだろう。繋がってほしい」

「ここにきてようやく少しまともな敵が！ やつと面白くなってきました！」

「これ本当にまともか？ むしろ巻き込まれた感が出てるんだが」

「勝負とは。勝ちとは。負けとは一体……うごごご」

葛城の頭上に光を浴びて反射させるレーザー攻撃で、逃げ場を潰され3機が一つずつ残機を失う。おそらく度重なる緊張感の欠けた会話シーンと葛城の涼しげな頭の利用法により、集中力を削がれたせいだろう。

新たなステージに突入し、ホワイトルーム本拠と目される桜公園へと繋がる遊歩道入り口では他と少し雰囲気が違う。

そんな中で登場する4面ボスは、何やら描き手に思い入れでもあるのか、やたらと精緻に描かれた美少女、一之瀬帆波。その彼女『への』不意打ちから始まった。

「にゃ〜っはっはっは！ みんなの超絶美少女アイドル・帆波ちゃんです♡ 君のハートを撃ち抜いちゃいますよ〜♡」

『ひああああっ!!! やめてやめて！ こんなにリアルな私の顔で……ああああっ！ 左京君！ なんてももの作るの!?!』

『この帆波ちゃんも……素敵です！ 私、撃ち抜かれちゃったかもしれませんが！』

『あつ、これもしかして……』

「ここをひっぱったら、どうなるとおm——っ!!」

登場から手鏡を覗き込みつつ、投げキッスとともに雫のあおり文句だった言葉をノリノリで放ってから闖入者に気づく一之瀬。

これは相当恥ずかしい。

「い、一之瀬……」

「なにやってるんだ？」

「またイロモノですか！ しかも一之瀬さんまで……くっ、遅すぎましたか」

「……………ああ〜っ!!! ちがつ、違うんです！ これは君達を迎える台詞を考えてて、色々試したらいつの間にか来てたんです！」

「はい。わかってますから。前に「ざあ♡」とか言っていましたし、本来はそっちなんですよね？」

「え？ 一之瀬ってそうなのか？」

「……ああ、まあ確かにそういうこともあった」

「へえ。クラスリーダーの意外な一面だな」

「にゃああああっ！ ねえ東風谷さん、みんな！ お願いだから、違うってわかってくださいー！」

「うんうん。わかってる。わかってるよ（ますよ）」

「あ、ああ……これ、絶対わかってません。なんで私はこんな役なの

「……？」

『うにゃああ……。想像以上に恥ずかしい。私じゃないってわかってるのに』

『帆波ちゃん、あつちで休憩しましょう？ 私が付き添いますからね？』

しかも畳み掛けるように黒歴史と思われるモノが開陳される。

本来は色白だろう顔を羞恥で赤く染め上げ、赤みがかった金髪よりもなお赤くなった顔。絵でもそうだが『外側』でも似たような顔になっっている。

憐れにも全身でイロモノを表現している彼女には、外側からのやり取り、悲鳴と抗議、それに称賛の声が聞こえるかのよう。創られた黒歴史を白日の下に晒された彼女に笑いが止まらない。

「……うう、左京君に上手くノセられてしまいました。こんなところで恥ずかしいです。相手に綾小路君がいなかったら絶対来なかったのに……！」

「二之瀬、大丈夫か？ いつも以上にポンコツ臭がしてるぞ？」

「言わないで四方君。これも全ては綾小路君と決着をつける為なのです」

「……一之瀬さんがここまでイロモノに侵食をされているなんて！？ これは早急になんとか……。するのも面倒なので、もう私達は通っていないですか？」

これまでに登場した人物達と明らかに違うタッチと表情差分。

明るい笑顔。赤面する半泣き顔。悟ったような諦め顔。他にも細々とした変化も描かれている。

一之瀬帆波という人物だけに、何枚もの精緻な絵と長めの会話シーンがあることには、なにか意味があるのだろうか？ 制作者の性格上、あまりその他大勢の中の一人に過度な肩入れはしないと考えていたのだけど……。むしろ他の誰かが一之瀬の出番を増やすようにねじ込んだ印象を受ける。ほんの僅か興味深い。

「いいですよ……。って言えたらどんなに良かったか。すいませんが四

方君と東風谷さんにも付き合って頂きます。綾小路君との決着がつくまでは通せません」

「何故オレに？ 因縁でもあるのか？」

「はっ！ そ、そうでした。恥ずかしすぎて混乱してしまいました。」

えー、コホン」

「咳払いして誤魔化すつもりか」

「お、お久しぶりです綾小路君。貴方に土をつけられて以来、73日と4時間10分ぶりですね。本日はお日柄もよく、絶好の報復日和。」

なので——白い最終兵器の狂人・一之瀬帆波！ いざ推して参る……って誰が狂人ですかあ!？」

それにしても、一言で狂人だと理解できる言葉選びは秀逸だ。あの『玩具』にこんな使い方があったなんて思いも寄らなかつた。

今度、わたくしも遊びで使ってみましようかね。

「いや、非常に似合った二つ名だと思うが」

「褒め言葉になってないですよ！ この非常識男っ！」

「ははっ、まさか。オレもこれまでに常識を学んだんだ。それによると、女子にはとりあえず似合ってるという言葉で褒めるのが良いらしい」

「すまん一之瀬。綾小路は女子とのコミュニケーションを雑に褒めることだと学んだらしい。これでも大真面目だと思うから許してやってくれ」

「……ふくん。そっかそっか。じゃあこれなら意趣返しになりますかね」

「あつ、一之瀬さん。それはやめた方が……」

恥ずかしさを誤魔化す為か急に態度を変えた一之瀬。

やろうとしている事を察したのか東風谷が割って入ろうとしたが、それは一歩遅かった。

「にやははっ。綾小路君おもしろい♡ ざあくこ♡ で、よわよわ

♡ なあなたに私が教えてあげましょうか♡ 女の子の、こ・と♡」

「だだだ駄目に決まってるだろ一之瀬！ こんなところでそんなふしだらな！」

「駄目なのはお前らの頭だよ」

「確かに」

『左京君!!』 いくらなんでも唐突にこれって！ これじゃあ私が頭おかしい娘みたいじゃない！』

『オレも流石にここまでじゃないぞ！ 常識的な褒め言葉くらい考えられるに決まってるだろ！ 例えば……これはこれで可愛いぞ、とか！』

『え、この物語はフィクションであり、実在の人物・団体とは一切関係ありません。』

「……ってことだから、騒ぐのはやめような？ 一之瀬と清隆、それに白波も」

外側ではクレームが飛び交い、制作者が伝家の宝刀を抜いているようだ。

「はあ〜〜〜」

常識に囚われないのと、間違った常識を学ぶことは似てるようで違うことだぞ綾小路、一之瀬」

「もう良いです！ この恥ずかしさを拭うには、問答無用で綾小路君を打倒することでは解決できません！」

「……結局こうなるんですね。一之瀬さんも」

気の抜けた煽り合いを強引に終わらせると、会話からはなかなか想像できない多数の一般生徒を喚び出し、容赦のない弾幕を降らせる一之瀬。

これにより四方が2機、他が3機ずつを落とし、東風谷・綾小路がボムを使い切る。

お試しを除いて初見とはいえ、だいぶ後がなくなってきた。と、思えば一之瀬の撃破後、1UPアイテムを落とし、少しだけ盛り返す。油断できないことに1UPアイテム取得時、3度目の左京の奇襲があつて危ない場面もあつたが。

5面は華やかな桜舞い散る遊歩道。

そこにいたのは通りすがりの自由人・高円寺六助。

やや荒めなタッチながら優雅に佇む様は、なかなかの雰囲気醸している。

「おや？　もしや君達が私の相手かね？」

「高円寺……！」

「お前までいるとは」

「高円寺さんは首謀者とは関係ないですよ、多分」

「なんのことやら。レディに客が来るとは聞いていないが」

「約束があると言えば通してくれるのか？」

「いいや、通さないよ。夢月から、ここにいる間だけでいいからレディを任せたと頼まれているからねえ。簡単に“通しては私の完璧な精神に僅かな傷が付きかねない”

「……もしかして佐倉愛里は、命名決闘法案なんかを創る為、左京に利用されているのか？」

「レディを見ればわかる。尤も、彼女の元まで辿り着ければ、の話だけどね」

「くっ、お前ら気をつけろ。こうなった高円寺は手強いぞ！」

「わかっています！　お互いの邪魔にならないようバラけましょう！」

「わかってはいたが、なんて我の強い奴なんだ」

「君達もまたほんの僅かだが興味深い。それに免じて、見事な美しさを乱す資格があるか、この私が試してやることにしようか」

「望むところです！」

「ふっ。いいだろう。私はやると決めればやるし、やらないと決めれば絶対やらない。今回はやると決めてしまったのでね。」

——さあ！　手加減はしてやるから、かかってきたまえ！」

問答が終わると、これまでにない速度の弾幕の嵐。

小細工なしにただただ速い弾速で、自機狙いとパターン弾幕を組み合わせた正統派な強さだ。これまで、一部を除いてそれぞれの者に似合った弾幕だったことを考えると、おそらく制作者が高円寺という者を『純粋な強者』と見ている証左だろう。それは台詞の節々からも見てとれる。

そうなると、突破された後ですら余裕の表情を浮かべていた高円寺

もまた規格外な一人なのかもしれない。

ここで3人はコンテニューまで使う羽目になり、残機は四方と東風谷が2、綾小路は次に落とされたらゲームオーバーというところまで追い詰められた。

明らかに難易度が上昇している。

制作者がここを2番目の山場だと想定していたのだろう。高円寺の弾幕が最後の方だけ緩かったのは、難しくしすぎて抑えたというところですかね。

機械的パターンに適度なランダム要素を混入させた初見殺しは、わたくしにも通じる左京夢月の匂いを感じる。

だが、そのままではゲームとして使い物にならないので、不可能弾幕にならないように、適した壁になるように、調整を加えたのだろう。2〜3度ほど目にすれば突破できるようなレベルに。

そんな中、表向きの目的がある綾小路や東風谷もだが、特に言動や意識で制作者が最も注視していた四方二三矢は流石と言えるだろう。

落とされた回数こそ他二人とほぼ同じだが、ボムの使用回数では断トツに少ない。それこそ壁と言ってもいい多数の弾幕が襲い掛かって、的確に小さな穴をすり抜けて、再び高円寺の正面を陣取り誘導弾以外もかなり命中させている。

攻撃力が他より劣るといふのに、撃破までにかかった時間は3人ほぼ同時という時点で、よほど集中して操作していたのだとわかる。素晴らしい。

人並み外れた集中力という前評判も、リップ・サービスというわけでもなかったようだ。

巨木と言って過言ではない一本桜の前。

高円寺を突破した後の6面は道中もなく、敵の出現もない。ゆつくりと大きくなる桜を眺めているだけだ。

嵐の前の静けさでもいおうか。どこか神秘的な美しさを感じる。

「これは見事な桜だな。あの高円寺が言っていたのはこの木のこと

だったのか」

「桜……もう片方の首謀者の名字も佐倉だったな。関係ないとは思うが」

「ああもうっ！ そんなのどうでもいいんですよ！ イロモノばかりでちつとも気持ちいい退治ができない方が重大です！」

「私達で作った場所に勝手に乗り込んできて騒ぐなら帰って」

「「!」」

会話を始めた自機達の前にそう言いながら現れたのは、6面のラスボスである学園の姫君・佐倉愛里。

本来の性格を知っていると、不思議と笑いが零れそうになるほど魅力に溢れた姫君を演じている。

「まあ私達の仲間に変わり者が多いのは事実だけだね」

「ここを佐倉達が作った？」

「うん。桜の木以外は左京君がほとんど。それを葛城君達も手伝ってくれたんだよ」

「……そういえば左京はどこだ」

「一之瀬さんの後は見てませんね」

「呼んだ？」

「左京君！」

役者が揃ったということだろう。

何故か左京はサングラスをかけスーツに着替えているが、彼を傍らに控えさせた佐倉のラスボス感は格段に増した。もしもこれが左京ではなく、ここまでに出てきた葛城や高円寺なら増すどころか溢れ出ていたことだろう。

それを意図しているにしては、一貫して軽い態度の左京がこの場では浮いているが。

「弱い癖に散々おちよくつてくれた上で逃げ回ってくれたが、ようやく年貢の納め時みたいだな左京。お前を葬るのはこのオレだ」

「ふっ。僕の逃げ足を侮ってもらっては困るな綾小路。弱いからこそ僕はあらゆる手を尽くし」

「……くなく」

「ん、どうした佐倉？」

「左京君は……左京君は弱くなんてない！」

「え」

「左京君はいつだってみんなを助けてくれた！ 才色兼備で容姿端麗、その上で天才なわたしを信じて頼って……そして助けてくれた！

そんな人が弱いわけない！」

「うぐう。謎の罪悪感が……」

「……おい、黒幕がラスボスの言葉でダメージ受けてるぞ」

「この様子だと、佐倉さんが利用されてたってわけでもないみたいですね。むしろ左京夢月が自分から利用されるように動いたってところでしょうか」

(正解)

シリアスとシリアルがだんだんと交差してくる。

よくできた物語とは言えないものの、わたくし個人にとってはなかなかおもしろい展開になった。

「だからわたしは信じるよ！ 本当に強い人は、他人の為に自分の力を使える人だって！」

そんなシリアル方面を華麗にスルーした佐倉の言葉から、音楽と霧囲気が変わった。

「そんな左京君を葬ろうとするのなら。他の二人はともかく、あなたはわたしの敵だよ。」

だから——」

「お前にそれができるといえるのか佐倉。本気で来るのなら、オレも実力を出し惜しみしない。」

それに——」

「——桜の下で散ってもらおうよ、綾小路君！」

「——オレを葬るのはお前じゃない」

『綾小路君！ わたし、こんな自惚れまくったこと言わないからね！』

あくまでゲーム内のわたしだから！ ちよっと良いなって部分はあつたけども！』

『わかってる。オレが悪役みたいな台詞言ってる時点で、こうなるの

は当然だな。諸悪の根元は明らかだ』

『清隆。その言い方だと、僕がそうみたいに見えるだろ。てか、これ以前にお前が似たような事を言っ』

『制作者なんだから、諸悪の根元は夢月以外ありえない!』

『……』

ああ。外側の会話で理解できました。

綾小路の…というかこれまでの登場人物の台詞は、制作者が現実で言われた言葉のアレンジが混ざってるみたいですね。それなら別に遮ってまで隠すような事でもないとは思いますが、物語のクライマックスでは無粋ですし流しておきましょう。

「よくわかりませんが、戦う気になったのならぶっ飛ばすまで!」

——大人しく手柄を預けてください、全ての黒幕!」

「こうなったら仕方ないか。」

——依頼は確実に達成させてもらうぞ、ふざけた道化!」

「えっとお、じゃあ話し合いに持ち込むまでは佐倉が落ちないようにフオロー入れることにするかな。なんか僕を狙ってるっぽい奴らがいるけど。」

それにしても——流れに一人だけ置いてかれた感が半端ない!」

ともあれ、各々そうして煽り合うと、ついに最後の戦いが幕を開けた。

物語的には3対2のようだが、ゲームでは当然2対1。

佐倉の桜を模したと思われる美しい花びら型炸裂弾と、神出鬼没な左京の不規則に変形したレーザー&保護色な見えにくい弾幕。

これらを掻い潜れず、まず綾小路が。次に東風谷の自機が落とされゲームオーバーに。粘りはしたものの、そう時間はかからないうちに四方も。

初見とはいえ、思いのほかあつさりでしたわね。

最初の方しかわかりませんが、佐倉の弾幕は明確に、左京の弾幕はレーザーの軌道と転移にパターンがあったので、精神を乱されていなければもう少し粘れたかもしれません。

まあ聞いた話ですが、操作反転の左京単独シーン、安置を素早く判断できなければ確実に撃墜される佐倉単独シーン、クライマックスのコンビネーション弾幕など、初見殺しというだけではない壁もあるらしいので、あくまで粘れた可能性に過ぎないと思いますが。

一回ではエンディングに到達しませんでした、わたくしはあらかじめ物語だけ読ませて貰って知っています。

それによるとラストは、ストーリーに出てきたホワイトルームやブラックルームを統合して、キャットルーキーという集まりになり大団円という流れです。

これがゲーム内の左京の第一声に繋がる伏線になるのですから、最初に読み終えた時は感心しました。また、そのキャットルーキーになった全員で宴会するエンディングもなかなか面白い着地点なので、せっかくですし全員クリアしてほしいものです。

……おそらく、左京夢月の『願い』はそうなる事で僅かずつ前進するのでしようし。

「あらっ？」

おっと。気分良く続きを視ようとしたら、遠見の術に介入されました。

東風谷早苗と左京夢月に憑く神々ですか。

目こぼしはこれまでということですね。過保護ですこと。

まあ直接見ずとも、左京さんの送ってくれている映像があるので、生の会話が見れなくなる以外の問題はないですが。

他も侮れませんが、強大な崇り神に目を付けられると厄介です。

少し惜しくはあれど、ここは退いておくべきでしょう。

この時代に『あんなモノ』を憑けている東風谷早苗にもまた、左京さん同様に数奇な運命を感じますね。

それにしても……。

自身の意に反してわたくしに肩入れさせた一方、何度かわざと見せた術や希少な道具を歯牙にもかけず、本気で口約束を守ることと真の意味でわたくしに強いと印象付けた。それにより諦めかけていた人間の可能性を思い出させたのは、特異な前世を含めてすら50にも届かない：肉体年齢にして20にもならない子供でしたか。

非常に強固な意思や精神力の持ち主といえるでしょうが、それだけでなくわたくし好みの悪辣さまで持ち合わせている。あの若さです。

今でもあの日の事は鮮明に覚えています。

無理難題をふっかけた時、面白くない回答が返ってきていたら、きつとわたくしは彼にも佐倉さんにも興味を失い、玩具も投げっぱなしでここを去っていたでしょう。

……しかしまさか、わたくしの無理難題に更に乗せてきた上で、実現可能に『見える』提案をされるとは思いませんでした。

また提案自体もさることながら、横で軽く手を広げ、「素晴らしい」と言わんばかりの表情でわたくしを乗せようとしていた左京夢月。

貴女が僕を同類だと、同じ穴のムジナだと言ったのでしょうか？　こんな風に終わらせて貴女は楽しめるんですか？　と。暗に僕は貴女を利用するから僕『達』で遊んでいいよ、と。

自身も困惑していたでしょうに、あの昔のわたくし自身を思わせる笑顔には、久方ぶりに意表を突かれて心から笑ってしまいました。

その為、最初こそ遊び半分でしたが、ここ数ヶ月でかなり考えも変わってきています。

厳密にその未来が見えているわけでないにしろ、望む未来の為に必要な手を打ち続け、人やそれ以外までも巻き込んでほぼ不可能を可能にさせた。

能力それ自体はともあれ、頭脳明晰、金剛不壊、不老長寿の『仙人』

であるわたくし相手に知恵と共感を武器に立ち向かえる——強き者。

人間のままにしておくには惜しい存在です。

というか、人間に甘んじている存在ではないとすら思えます。生死を超越していないのに、ほとんど何事にも縛られていない部分も含めて。

只人のまま自然に振る舞い——それでいて清濁を併せ持ち、わたくしや芳香ちゃん、堕ち神のような存在すら受け入れる度量は、あの御方とは別方向に興味深い存在ですわね。

なにより紙一重としか言い様のない瞬間。

佐倉さんの時も。松雄さんの時も。そして……今回も。そもそも、最初にわたくしの元まで辿り着いた一件も。

必要な存在の前に、必要な時に必要なモノを手にして現れるその在り方はまさしく——。

まあ、急がなくとも左京さんの気質から考えて、まだまだ機会はあるでしょう。その気質のせいもあって、わたくしのモノにはならないとわかっていますが、もう一度は遊ばれてくれるらしいので何か考えておきますか。

時に邪仙とも呼ばれるわたくし、青娥娘々と、そうとわかつて契約したのですから。

92、同類

最後に清隆がクリアして勝負も恙無く終わり、守矢神社の裏手にあつた広場に移動しての燻製パーティー。

そこに到着するやいなや、櫛田に隅まで引つ張られてきた僕は窮地に追いやられていた。

「で、あんたさつき何やろうとした？」

「あの…櫛田、さん？ 僕が悪かったからファイアの女幹部みたいな笑顔にならないで？ 誰かに見られたら猫が剥がれちゃうよ？」

「へえ。私にそんな危ないイメージがある？」

少しでも空気を換えようとジョークを飛ばすと、普段と同じ快活な笑顔に一瞬で戻り、櫛田は繰り返し問うてくる。

勿論、僕が返す答えは服従と太鼓持ちに決まっている。

「ありません！ ないから……ほら、いつものように優しく明るい人氣者な櫛田でいよう？」

その答えは、桔梗の花言葉に相応しく可愛らしくも上品さを漂わせた仕草で……首に手を回され、カツアゲするチンピラの如き囁きで返された。

「そう。私はそういうイメージよね？ 今度ふざけたこととして私のイメージを壊そうとしたら——引っこ抜くわよ？」

「あつ……ああ、はい。それは勿論。でもそれ以前に舌を引っこ抜かれたら、それどころじゃないっていうか」

「なに言ってるの。舌じゃなくて、あんたの股間に付いてるモノを引っこ抜いて早苗のお嫁さんにしてやるわよ、って言ってんだけど？」

「ひ……ひ……ひいいいい！」

いや、カツアゲどころではない。紛れもなく脅迫だ。それ以外のナニモノでもない。

そう。これが脅しだとわかつてはいる。

だが男では到底出てこないその恐ろしい発想に、身体がバイブレー

シヨン機能を作動させるのを僕は止められない。

早苗と同じく、至近距離で見つめ合っても色気は欠片も存在しないが、内に秘めた狂気は売るほど感じられる。そのベクトルの中心は微妙に僕から逸れてる気もするが、なんにしる相当溜め込んでいたようだ。

「私も本当は優しい対応をしたかったわよ？　でもあんた何した？

早苗諸共、帆波ちゃんにお説教させようとしたよね？　それにゲームで私の顔を何度も綾小路君に爆破させたよね？　あと旅行ではなんつった？　邪悪？　被った猫剥いでから来い？　あはつ。面白いことを公言してくれるじゃない」

口に出すこととは裏腹に、白い歯を見せながら清らかな風に笑う櫛田が怖すぎる。ブラツクラグーンの某スパイのようだ。

この凄みのある笑顔があれば、きっと坂柳さんともやり合えるに違いない。それが起こり得るとしても、絶対その場に居合わせたくない。と気持ちを新たにした。

けど、何気にこれは非常にアイドル向きな性質といえよう。もう少し愛里が櫛田に近づけるようになったら、思いついたアイディアを愛里に話してみることにしよう。

ともかく今は平身低頭一択である。

「…はいっ！　そう…なんというかあのですね。そのお詫びの意味を込めて、これから誠心誠意ご期待に添えるよう頑張らせてもらうので、なんとか許してはもらえないかなー、なんて」

「じゃあ、私の事をお姉ちゃんって呼んでこれから協力する？」

「協力しま…お姉ちゃん？」

だから二つ返事しようとしたら妙な単語が挟まってきて、意図がわからず言い淀んだ瞬間。

「はおつぐう…!？」

櫛田から繰り出された強烈な膝の一撃に、僕は腹を抑えて膝をつき、くの字体勢になった。

想定以上の威力だ。チラツと見えた薄ピンクのパンツを楽しむ余裕もない。

「返事は？」

「は…ぐう。きよ、協力します」

「ああ、私は優しく明るい桔梗ちゃんだし、男の子に膝蹴りなんかしてないよね？ 左京君がそうなたてるのは持病だよねっ」

「そ、の…通りです」

なんだコイツ。マジで悪魔なんじゃないか。

そんな気がしてくる。

だってこんな傍若無人なのに、顔だけ明るい時の櫛田のままなのだ。膝で僕を沈めておいて、楽しそうな笑顔で白々しい事を既成事実扱いしてくる。

いともたやすく行われるえげつない行為を、被った猫と可愛くもどす黒い笑顔で無効化しようとする櫛田に、僕は未恐ろしさを感じざるをえなかった。

清隆、葛城、戸塚。

もしお前らが早苗や坂柳さんと敵対したままなら、次に今の僕に近い立場となるのはお前らかもしれないぞ。ゆめゆめ自重を忘れることなかれ。

ゲームが終わって移動する段になると、ああして櫛田に連れ攫われて脅迫を受けたが、目論見自体は成功だろう。

具体的に何かわからないが櫛田への協力を約束して戻ると、一之瀬が真っ赤になっていた。気が向いたららしい早苗や姫野にからかわれ…呆れられて？ 白波や椎名、愛里の女性陣に慰められているようだ。この波に僕も便乗し、スモークチーズやサーモンなどをお供えして完璧なフォローをすればキャラにできるはずである。

聞こえは悪いがこれは特殊詐欺、振り込め詐欺などを代表とする手口の応用だ。金は関係なくても、精神を動揺させて少し細工するだけで、一之瀬がやろうと思っていたことを忘れさせてくれるならやり得というもの。

本来、この手法は不安や恐怖、焦りなどで判断を狂わせるのだが、黒

歴史の掘り起こしによる羞恥という感情も、説教回避という目的に絞って使えば充分に実用に耐えうる。まして有能であれ、精神が未熟な高1の女子を手玉に取るくらいなら、僕程度の浅い知識でもなんとか可能だ。

つまり、ゲームさえ始めてしまえば、他はまだしも最も厄介な一之瀬だけはあのキャラ変とリアルな絵に反応してそれどころじゃなくなると思っていた。

これを意図していたわけじゃないが、これでもかと一之瀬の黒歴史を詰め込み、絵師の要望を叶えるべく無理矢理ねじ込んだモノで、いい感じにわけわからない味を出した甲斐がある。

というか、だから呼ばなかったのに、自分から飛んで火に入る夏の虫になるとは酔狂なことだ。船で触りは見たんだから、想像できただろうに……。

なんにせよ情熱を燃やして多数の絵（一之瀬のだけ）を描いてくれた白波と、あのタイミングで来てくれた椎名には改めて感謝である。

「僕はこの非現実的とさえ言える学校や試験の数々を」

「どうするんですか？」

「心の底から楽しむことにした！」

「二いつええええええいつ!!!」

「hmm…道理だねえ」

「ええっ!? 早苗さんや櫛田さんまで!？」

「こいつら……さっきまでのことを流そうとしてやがるな」

「何故、あのゲーム前からの雰囲気や特別試験の話に。それがどうしてこの結論に繋がるの……?」

なので、あとは特別試験とかの学校関係で話を逸らしながら、無理矢理な勢いを作り出せば、あとは僕を拉致ったことで変な注目を浴びた櫛田や、不思議と上機嫌が持続していて相づちを打ってくれた早苗を乗せて引き入れられる。そして櫛田がその気になれば、バーベキューの開催宣言するだけで楽しい一日だった、ということにできるだろう。

最大の窮地は乗り切ったな。残りは仕返しくらいだ。

「ふつ。個人的にパリピとは相容れないが、時に学べるものもあるというんだよ」

「言葉通りこれからは試験も楽しもうということですか？」

「いっえーす。手始めに敷地からの外出、円の導入などはすでにほぼ確定事項にしてある。理不尽が避けられないなら、オープンにした上で予定している理不尽をやるならやってみろと行動で示してやったんだ。学校がどう出るかはいくつか想定しているが、少しはマイルドにしなければ世間から批難が集中するだろうな。ケツケツケ、いい気味だ」

「これ夢月がやったんだよな。いまだに信じられないんだが」

「え!?! あのお知らせって左京君がやったの!?!」

「ああ。櫛田も無人島の月見の事は平田にも聞いてるだろ。あれを本当にやりやがったんだよ」

このビッククウエーブに乗ったままあえて興味を引きそうな学校の話題を出すと、何人かもノツてくれた。

考えてみたら、この場の何人かは旅行後、今日まで会ってなくて知らなかったっぽいからかもしれない。清隆はあまり詳細を話してないのに、当たり前のように察しているけども。

「悪い顔……。左京君って、意外と周到だよな」

「まあ神様にすら予想できない場合がありますからね。実際、異性関係以外は頼りになると思いますよ」

そうして話題が完全に変わり、聞き手に回ろうとしていると、人聞き悪い事を零した姫野。はまだいいが、引つかかる事を言い出した早苗。

この時には、コイツとついでに櫛田へこの方面からの仕返しを思いついていた。ゲーム前後で、僕を陥れた意趣返しだ。勿論、自分の力は隅っこに置いておく。

「は? 聞き捨てならないな早苗。お前や櫛田だって浮いた話なんか聞かないじゃないか」

だから充分な勝算をもって踏み込む。

「巫女が多情なんて噂が立ったら、信仰を集められないじゃないです

か。守らせる囲いや金づゝ恋人も上手く作れるかわかりませんし、ワ
ンチャンを狙う人で芋づる式集金ができるくらいでしょう」

「……東風谷って、ナチュラルにクズっぽいところあるんだよなあ」
「早苗さん……」

「ていうか、懲りないわねえ左京君。また私を巻き込むつもり？」
「そういうわけじゃないが、恋人とか色っぽい存在がお前らにはいる
のか？ いる想像がまったくできないんだが？」

普段かガチャで櫛田に何か仕込まれたのか、早苗と四方達が言つて
る事は置いといて。

僕にはすがりつく勢いで頼み込めば、意を汲んでデートくらいはし
てくれる可能性のある愛里がいる。

こんな確定喪女共とは格が違うのだ。

話を持って行く方向次第で、勝率はそれなりと見ていいだろう。

「しかし恋人ねえ。微妙に縁がないというか、暇がないのよね私」

「ま、それはそうなんだよなあ。僕ももう少し予定が少なければ、そっ
ちにも注力できるんだけどな」

「私ですね」

「でも、僕は多分やる気になればそれなりにはモテると思うんだよ。
忙しい…そう、忙しいから、当分やる気になれないけど」

「……船である本気がわからない口説き文句でスベっておいて、本当
にそう思ってるの夢月君」

「左京君は忙しいを強調してますが、自分でも問題を理解しているの
では」

「夢月さんがモテるわけじゃないじゃないですか。どうやってもモテない
属性の塊でしように」

「さっきから寝言でも言ってるの左京君。きちんと睡眠とったほうが
いいわよ」

なんだと？

僕時間で30年くらい前に彼女がいた経験を持つ僕なんだから、モ
テる要素は持つてはるはずだわ。確かに船ではちよつと、ほんの僅かに
アレだった部分も無きにしもあらずといえるかもしれないが、4人も

の女子にそんな事を言われるほど絶望的なわけではない。

てか、かろうじて可能性がある愛里や椎名はまだしも、コイツらにだけは言われたくない。

「あー？ 少なくとも良いところまではいけるに決まってるんだろ。お前から確定喪女コンビと一緒にするな」

「左京君？ 熱でもあるんじゃない？ 頭を冷やす氷とかもらってこようか？」

「あはっ、喪女とはわかってませんねえ。この中で一番美しい存在と言ったら、神である私以外いないでしょう。つまり完璧な造形美を持つ私こそが潜在的には最もモテる存在……」

「勝手に言ってるナルシスト」

「はあ、自惚れが強いのが早苗の欠点よね」

「はっ」

いくら美少女だろうと、性格終わってる早苗がモテるわけないだろう。

できて、容姿に寄ってきた者と付き合っては別れるを繰り返す処女ビッチ巫女の誕生である。

「そもそもモテるって言うなら、常識的に考えて私みたいな愛嬌抜群の美少女でしょうが。言い寄られてる数で言ったら私が最多に決まって」

「櫛田(桔梗さん)が一番ないわ。誰かと本気で付き合いたいなら、その捻じ曲がりきった性格直してからどうぞ」

「ああ!!？」

もつとありえないのは邪悪なる悪魔、櫛田だ。

コイツが打算と策略以外で誰かと恋人関係になるところなど想像できない。チンピラのような「ああ!!？」に加え、先程の脅迫は記憶にも新しい。

現存する彼氏候補の可能性は、せいぜい乳で誘惑した場合の清隆と奇特な性質を持つ龍園くらいなモノだろう。

「「……」」

結論。この3人の中ではやはり僕が最も異性にモテる。Q.E.D。

僅かな沈黙の中、僕は理論武装を完了し、目的を見定めた。

「あはは。」

……あんたら、やっぱ一度わからせないと駄目みたいね」

「あらあら。誰が誰をわからせるですって？ 夢月さんをですか」

「上等だ。僕も凶に乗ってるお前らを黙らせる方策を考えていたところだ」

「おい。なんでこんなどうでもいい話題から、いきなりクライマックスみたく火がついてるんだ!? 落ち着け！」

「そ、そうだよ！ 普段からみんなモテる事とか考えてないのに、こんな事で喧嘩するなんておかしいよ！」

四方達に言われなくとも僕は落ち着いている。

落ち着いて早苗と櫛田にわからせる方策について考えている。

「ふっ。四方、愛里。」

——もはやそんな事はどうでもいいんだよ！ こいつらには、順序良俗に反しない程度にわからせてやる！」

「そこだけは同意ですね。邪悪なる者共を退治するのも巫女である私の努め。二人まとめて、この私の実力でひれ伏させてやります！」

「勝手なこと言ってくれるわね、あんたら……いや？ ううん、左京君は私を舐めすぎよ。」

早苗、まずは協力して左京君を叩きましょう？ きつとその方が佐倉さんも安心できるわ」

「ふむ。ひとまず乗りましょう！」

「櫛田こそさっきのことで僕を舐めすぎてないか？ 早苗もだ。証明が終わった僕に隙はない。それを忘れてるなら思い出させてやらないとな！」

早苗と櫛田はタガを外すと、周りが見えなくなる欠点がある。この場に誰がいるかを考えれば、精神的に痛い目を見せるのも難しくないはずだ。

「安心できないよっ!? 櫛田さんもやっぱりあっち側だったの!？」

「やっぱりって……佐倉、お前」

「あつ！ ちがつ、違うの！ 待って四方君！ えと……これは……に、

似た者同士っていうか同類っていうか？」

「いや、なにも違わないから。それ、もうフォローできないくらい認識が固まってる証拠だろ」

「……あ、あう」

何気に飛び火して、愛里も真理に辿り着いたようだ。

だが四方が言い聞かせてくれるだろうから、僕は僕の事に集中した方がいいだろう。流石に早苗と櫛田をわからせるには、僕も全力を出さざるをえない。

「……………全員同じ穴のムジナだろ、アイツら」

「にやはは。仲良いよねえ、あの人達。」

……でもちよつとあの遠慮のなさは羨ましいかも」

少し離れたところで単独組や清隆と一時の羞恥から立ち直った一之瀬とかもなんか話してるが、そんなことはどうでもいい。

今は一刻も早く、僕がモテると証明しなくては。

しかし言葉でわからせようとした僕に対し、櫛田と早苗が初手から物理で対抗してくるのは予想外だった。

「反省の色なし。やりなさい早苗」

「あーっはっはっは！ 行きますよ夢月さん！」

「ちよ」

櫛田がけしかけ、笑いながら信じられない速度で踏み込んできた早苗。

目が合って振り上げた拳がくつきり見えた次の瞬間、僕は空を飛んでいた。須藤に殴られた時よりも飛距離だけなら更新しただろう。ホコリまみれになる程度にはゴロゴロ転がった。

それにしても不自然なダメージの少なさだが、分社とはいえ神社の敷地内だからか神様が守ってくれたのかもしれない。

「大丈夫ですか夢月さん!？」

「大丈夫じゃねえ！ すごい速度の拳だったわ！」

かなりぶつ飛んだことで、今更心配になったのか早苗が駆け寄ってきた。

僕は即座に飛び起き、当然の権利で抗議する。

「わ、私の拳は……愛です！」

「アホかあ！ お前はガーブなの!？」

「ついテンション上がったまま手が出ちゃっただけですよ！ とうるか避ければよかつたじゃないですか！」

「避けられるわけないだろ！ 正面からでも動けんかったわ！」

「なんでですか!？ 目で私の手を追ってたじゃないですか!？」

「見えるのと避けるのじや難易度が絶望的に違うの！ 受けたくなくても受け取っちゃうんだよ！」

「私の愛を受け取るとか情熱的ですね？」

「ぎげんなっ！ 避けられんほど速くてデカすぎる愛などいらぬわ！」

クソが。のらりくらりと意外にしぶといし、つけこむ隙が少ない。どっからこんな変な言い訳の仕方を覚えてきやがった。

「サ、サウザー様……にしては、ちよつと情けなさすぎるかな」

「一之瀬。いきなり夢月が吹っ飛んでショックを受けるのもわかるが、正気に戻れ」

「ああして元気に言い合っているんだから大丈夫ではあるでしょ。きつと早苗にも左京君にも心配なんかいらないよ。あははっ」

「……凄まじい二人だよねアレ」

「……櫛田さんの変わり身も相当だと思いますが」
「早苗さん、すごく楽しそう……」

それに僕がぶっ飛ばされて早苗と言い合っている間に、並外れた処世術を持つ櫛田は一之瀬達と自然に合流してやがる。

冷静に考えてみると、普段の櫛田ならけしかけや脅迫はまだしも、自ら蹴りにくることは流石にない。ちよつといつもより猫かぶりとかガが外れてるのに気づいて、自身の印象を軌道修正する為に離脱したのだろう。

「ふふっ。私の愛はロケットパンチですからね！」

「おまつ、お前えええ……！ 笑い事じゃねえ。なんで自慢げなんだよ!？ マジで、メツチャふっ飛ばされたんだぞ！」

しかし櫛田はともかく、今は嬉々として巫山戯たことを抜かす早苗を何とかするのが先決だ。

そしてコイツを言い負かしつつ、櫛田を追い詰める流れを構築しなければスツキリしない。

ははは。逃がすものか。早苗はもとより、どんな手を使つてでも絶対に櫛田は巻き込んでやる。

「美少女の愛なんですから、喜んで受け取らなくてははいけませんよ夢月さん」

「無理だっつーの！ ドMで変態な一之瀬や清隆じゃないんだし、常人には足が震えるレベルで重すぎなんだよ、早苗の愛は！」

「待ってええええっ!!! 無駄に私を巻き込まないで！」

「不当にオレを変態扱いするんじゃない！ なんでオレの印象はそんななんだよ!？」

「ほう。それは私がヤンデレということでしょうか？」

「精神じゃなく物理のな！ てか、物理のヤンデレってなんだよ!？」

「知りませんよ！ 夢月さんが言ったんじゃないですか！」

「聞けよ！ 聞いてないな畜生！ あと一之瀬について詳しく。これはあくまで生物的観点から興味があるだけだ」

「ああ、もうっ。綾小路君までおかしくなってるじゃない！ 左京君が関わるとどうしていつもこうなるの!？」

櫛田のセーフポイントの中心は、見たところこの場では一之瀬と清隆だ。

だからまずはここから広げて、傍観者気取りの奴にも戦禍を体験させてくれる。

ついでに言うと、そのムツツリなおっぱい星人は多分平常運転だぞ一之瀬。ジゴロ適正の高い表向き清隆には、決して騙されるな。最低でも櫛田クラスに『濁』に染まってないうちは、おそらく手のひらで転がされるだけだぞ。

なんか軽い考えで動いた結果、飛竜昇天破を放つ状況みたくなくなったのが微妙にヤバい気もするが、もう賽は投げられた。今更引き返すことなどできようはずもない。

だいたいここまで場が滅茶苦茶になってたら、多少は目的外の人数が増えるくらいなんでもないと思う。いいよな？ いいに違いない！
というわけで、ここからは遠慮を投げ捨てていかせてもらう。巻き込まれたことを恨むのなら、僕を陥れた早苗と櫛田にしてくれ。

「「「……………はあ」」」

約1時間後。

無意味な論争をしていた事に気づいた僕達『7人』は、揃って脱力感に囚われていた。正氣に戻ったからである。

途中から一之瀬や清隆に櫛田を含む他数人を巻き込んだ論争は、拡大の一途を辿って長引き……終わった頃には「僕（私・俺・わたし・オレ）達、なにやってたんだろう？」との思いにみんなが駆られていた。

結局、僕はほとんどバーベキューできず、高円寺と鬼龍院先輩が観戦しつつ自由に飲み食いして自由に帰っただけだ。燻製はかなり残ったので、論争がひと段落したあたりで椎名や白波、姫野、顔を出したアルベルトにお土産として包んで渡して帰した。高円寺とアルベルトが付いてれば、帰り道に万が一の危険もないだろう。

何気に先んじて2発もらっていた僕は勿論、四方や清隆など男子も、たんこぶや服の汚れができていたりする。女子にそれがなければ、最後の理性が仕事をしたからだろう。

それでも早苗以外はノーダメというわけでもなく、特に櫛田が何故か我に返ってから呆然とし続けている。それに一之瀬や愛里なども「ごめん。先に帰ってて」と、白波達や椎名を帰してからは脱力しているようだ。

普段が面倒くさい奴らは大変そうである。

それにしても人氣が少ない神社の裏手とはいえ、これほどの人数の高校生が揃って、遠い目で夕日を眺めているのはさぞかし奇怪な光景だっただろう。

だけど幸い無粋する人はいないし、これもまた青春時代の1ページ

として誰かの脳内に残ることになるはずなのでもう許してほしい。
「と、ところで島やさつき燻製作る時に、火付けで使ってた松ぼつくりの『ぼつくり』ってなんだろうね？」

ちようど良いことに一之瀬が先陣を切ってくれた。

本日は結構ボコボコになってるけど、不屈の精神と好奇心で次々と沼にハマりにきてくれる彼女に感謝の念が尽きない。

当然、僕は笑顔を取り戻し、その流れに乗って煽動する。

「な？ やっぱり一之瀬ってこういう話題が好きな奴なんだよ」

「え？ どういうこと？」

「……ぼつくりは、ふぐりの訛りのことだ」

清隆もナイスフォロー。

相変わらず妙な豆知識に詳しい奴である。

「ふぐり……？」

「うむ。別名は金玉のこと。好きなんだよな？ こういう下ネタが」

「き、金七」

「いやあ。一之瀬って学級委員長のくせして、意外とムツツリでエツチだよなあ」

「ちがっ……知らなかったの！」

当然、僕は一刻も早く忘れる。でないと、ソイツに押し付けられない。
い。

押し付け先は、話を逸らそうと自ら墓穴を掘ってくれた一之瀬と、次点で解説してくれた清隆がイチオシだろう。黒歴史のゴミ箱とも称される一之瀬と、日常茶飯事に黒歴史を製造する清隆ならば、今日の事も押し付けられ……綺麗に浄化してくれるに違いない。

弁解してくるのをわかった上だからかいつつ有耶無耶にし、僕はさりりと通常営業に自分を切り替えた。

ただ全てを適任に丸投げして切り替えはできたものの、何故に僕達に無駄な争いが起こってしまったのかが、いまだにわからない。

今思えば、普段の冷静さを欠いていた気もする。大人の余裕がある僕ともあろう者がこうなってしまうとは、不思議なこともあるものがある。

争いは悲劇や喜劇などのドラマを生むことはままあるけど、本当に
なにも生まない虚しい争いもあるのだな。

結局この日、帰り道で下弦の月を見上げながら思い返した僕がわ
かったことはこれ一つだった。

93、分水嶺

ゲームから数日後、すっかり覚えていた一之瀬の襲撃イベントはあったが、勢いがかなり失われていたので割愛。僕に与えた効果の少なさから、これで彼女も勢いと機を凶る重要性について学んだことだろう。

あれは言ってみれば、激しく動揺するナニかをぶち込み、精神を揺さぶったところでリミットを突きつけ、更なる動揺と混乱を与える。そして冷静になる猶予を確保しつつ、話題を違う方向へと誘導して逃げ切ったのだ。

僕は過去の記憶から抜粋した真実を使ったが、『ナニか』には本来は嘘を使うもので、作られたリミット内でそれを解消する方法を提示するのが定番。これこそ特殊詐欺の典型的手口、その応用である。

だから、あの時の櫛田がいつになく仮面を外して拉致やら膝蹴りやらをしてきたのは、船で近い事を話していたのも要因の一つだったのかもしれない。

コイツ、マジで一之瀬に実践しやがった、と。

まあ櫛田は櫛田で溜め込んでるモノが多そうだから、アレで少しでも発散できたなら幸いだ。

これから助けてもらう場面も来るかもしれないし、友達としては弾ける方がずっといい。それに彼女の中で真実の使い方にバリエーションが生まれれば、負の方面だけじゃなく楽しむ方面のストレス解消もできるようになる。

認めたくはないが話してて楽しい奴なので、愚痴やらストレス発散の一助くらいしてもバチは当たらないだろう。

櫛田についてはともかく、一度でも機を外してしまえば、自分の意図を押し切るためのパワーや機会も少なからず失われる。僕がある場だけしか一之瀬の再訪を恐れなかったのは、土壇場でこの策を思いついていたからである。

これで未来に一之瀬が特殊詐欺に遭おうとも、耐性を得ることがで

きただろう。この経験と耐性を持っていれば冷静さを失わず適切な対応ができる可能性は上がったはずだ。

いやあ、同級生に詐欺耐性を付けてやるなんて良い事をした。そろそろ僕も聖人君子を自称しても過言ではないのではなからうか。

後半になってようやく食っちゃ寝しまくった夏休みも、残すところあと2日。

ピンポイントなイベントこそあったものの、平和にダラダラと過ごせた。これも聖人と見紛うほど僕の日頃の行いが良いからだろう。

その為、僕も佐倉も基本予定を消化できてギリギリでバイトの日数をクリアし、今日は特に目的を持たない暇人ども+αが天文部の部室へと集結していた。

「先輩はともかく、お前ら暇なの？　ここに居ても、マジで僕が天体望遠鏡の手入れしてるだけで面白くないだろ」

「そんな事ないよ。わたしもカメラのお手入れしてるし、それにここはなんか落ち着く…実家のような安心感があるというか」

「いや。意外とそういう仕組みなんだなってわかって面白いぞ。分解して整備したりするんだな」

僕の問いかけに、真つ先に言葉を返してくれた愛里と四方はまだいい。実家じゃないけど。

「ふっ。実にナンセンスなクエストだねえ。この場以上に暇つぶしできるモノで溢れている場はないよ」

「愛里さんや夢月さんが居て、退屈なんて感じませんよ。というか神社のお役目が終わると、やることないんですよねえ。誘われたプールも桔梗さんだけじゃなさそうでしたし……」

「くくっ。後輩。君がやらかした数々の所業は、色んなところで芽吹いているようだ。誰だってそんな面白そうな場面を見逃したくはないだろう？」

なんだこの自由人3銃士。

結構予定ありそうな奴らなのに、まるで意に介さず堂々と振る舞っ

ているとこちらが間違っている気さえしてくる。

特に先輩とかここに居て大丈夫なのか少し心配だったが、王者の風格すら醸しているのを見ると、お茶の一つでもお出しした方がよろしいのではなからうか？

と、何か言おうかと迷っていると、天文部に尋ね人。

次いで扉がノックとほぼ同時に開かれた。返事を返す暇もなかった。

「おう左京。お前、10月になったら生徒会に立候補しろよ」

「は？ ついにボケたか。断るに決まってるだろ」

来たのは南雲。

開口一番、ボケた勧誘をされた。

天文部をやめなきゃいけないことは当然として、こんな我が世の春を謳歌してそうなりア充と同じ組織に入るわけがない。前に話した感じ、南雲も僕がわざわざ創部したのは知っているみたいだったし、わかってたと思うんだが。

それか本気で若年性認知症の可能性を疑った方がいいのだろうか？

「誰がボケだコラ。そうくると思っ、ちゃんと用意もしたから逃さねえぞ」

「用意？」

「お前、明日プールで俺と勝負しろ」

「？ プール？ 勝負？ いきなりなんのことだ？」

「プールの開放日くらい知ってるだろ」

「か、開放日？」

「……チツ。知らねえとか、どんだけ人と交流してねえんだよお前。念の為、俺が動いといて良かったぜ」

唐突に来たくせに、何故か呆れ返った感じに説明してくれた南雲曰く。

今日含めて3日間に一人に付き1度、学校施設のプールが9時〜17時の間だけ開放されているらしい。興味なさすぎて記憶に残っていないかったが、そういえば顧問の東山先生からも言われてた気がする。

る。

そして明日がその最終日で、副会長が僕（達？）を遊び？命名決闘？に誘ってきたというわけだ。

内容は、なんかで競って負けたら僕が生徒会に入れ。とかそんな感じに勝手な話を投げっぱなしで、返事を返す前に南雲は去っていた。

「……何なんですかあの無礼な男は!? うちの部長を引き抜こうとした上に、勝負の順番も飛ばそうとするなんて!」

「ああ、まったくもって横暴だ。この場所を作った夢月がいなくなるのは許容できない!」

「南雲の奴もなあ。後輩に絡む事情は理解できなくもないが、少々調子に乗っているようだな。現状で満足していればいいものを……」

南雲がいなくなると、天文部に集う者共が意気投合していた。鬼龍院先輩はちよつと違うかもだけでも。

というか。

「いや、勝負の順番とか初耳なんだが？ てか、お前ら、一応僕のこと部長だつて認識してるのな」

「ま、まあ夢月君がいなくなったら、きつとここもなくなっちゃうから………そんな事になったら、わたしも嫌だな」

愛里はそう言うが、そんなことはないだろう。

それに南雲は言いたいことだけ言って片手落ちのまま帰ったから、引き抜きなど無用の心配だ。

なぜなら命名決闘の必須条件である僕の同意も勝った時の話もないし、そうでないならスルー安定だろう。水場とはいえ必要な用事もないのに、このクソ暑い中で出掛けるとか正気の沙汰じゃないと思っていたので、永遠の後回しで問題ない。

それを指摘しようとはしたが、ヒートアップした話はすでに僕が置き去りになっている。なので開きかけた口を閉じ、まあ勝手にすればいいかと切り替えた。

そして何事か話し合う部員達を放っておいて、僕は天体望遠鏡の整備に戻る。

明日の予定は、寝まくって起きたら新学期になっていたという伝説作り、もしくは1日中クーラーの効いた部屋でゴロゴロすることに決まっているのだ。ボケ倒してきた副会長に構っている暇はない。

夏休みの最終日、7:30頃。

予定通り惰眠を食るつもりだった僕の部屋に四方、早苗、愛里が襲来した。

てか、寝床から見えないいつにない光景が……清隆を呼んだ時の教訓で2つに増やした椅子に座る女子二人。ふむ。愛里は白で、早苗はピンクか。我ながらヤバいほど素晴らしい目覚めだ。

ただ四方はまだしも、そのせいもあって早苗と愛里に朝起ちを誤魔化す為、朝から寝ぼけたふりして密かに円周率を計算する羽目になったが。

「やっぱり寝てたか」

「早めに来ておいてよかったですね」

「夢月君……行く?」

……うん。流石に部屋まで呼びに来られたら普通に行くから、これ以上起き抜けの高校生男子の股間を刺激しないで? 体勢・位置的に、こつちへ寄つて来た愛里に女豹のポーズで揺さぶられて囁かれると、寝床がベッドじゃなくて低いからかやたらとエロく感じる。全然、収まらない。

「わかったからちよつと待って。そんなすぐに起きられるように僕はできてない」

「……ああ。すまん、そうだった。佐倉に東風谷、こつち来てくれ。まずはコーヒーでも淹れて待ってよう。使っていいよな、夢月」

「ん、ありがとう。コーヒーとお茶はアイスのやつが冷蔵庫にあるから、適当なコップで飲んでいいよ」

四方がフオロー入れてくれて助かった。

早苗や一之瀬あたりには、多少『テント』を目撃されてもどうとでもできるが、愛里に見られるのは困る。内弁慶のくせに、どうしてか

僕を積極的に連れ出そうとしてるし、このやる気が変に化学反応したら顔を合わせ難くなってしまおう。

あつ。てか、今更気づいたけど、昨日の南雲の誘い。

印象にそぐわないガバガバさだとは思ってたけど、僕じゃなくてコイツらをやる気にさせて連れてこさせる目論見だったのかも。部長を生徒会に勧誘することで、天文部にゴタゴタを持ち込んで外堀を埋め、それを達成できたからさっさと帰ったと。

こうなったら、行くしかないけどさ。回りくどいやり方だなあ。スレートに自分の引き立て役兼ほどよい暇つぶしになってくれ、でいいじゃん。何をやりたいか知らんけど。

3人が一息つく頃には、僕も起きられるようになっており、適当な残り物で朝食を仕上げてみんなで食べた。

何気に早苗もおにぎりを持ってきていたのが、時間短縮に繋がった。こういう時に、マメで家庭的な奴がいてくれるのは助かる。時々、おすそ分けし合ってるから、お互いの勝手がある程度わかるというのも大きい。

朝食後。

急かしてくる部員達にどうせまだプールが開いてないと説得して、なんとか身支度の時間を確保。これ以上時間短縮しても意味がないはずなのに、自室にまで来たことといい、いつにない強引きである。しかたなく限界まで引き伸ばして、8:30に自室を出てプールに向かうことになった。

またエレベーターホールで何人か見知った顔がいたが、特に用はないので通り過ぎる。

その際、気づかれる前にと普通に歩みを止めぬ僕と早苗、僅かに足を止めるものの進みだした愛里。四方だけは誰かに挨拶しようとして試みていたが、容赦なく置いていく素振りを見せると呆れたため息を吐いて付いてきた。

うむ。これこそ天文部の模範的行動である。

聞いていた通り、9時になるとプールが開放されたので入場する。

同時に、何故か池を先頭にした清隆達4人が駆け出し僕達を追い抜いていったが、そんなに楽しみにしていたのだろうか？ 若いつていいね。

更衣室に入り、一番人口密度が低い場所を探していると、先程の4人が奥で不審な動きをしていた。池がしやがみ込み、壁になるように清隆と山内が立ち、須藤が意味もなく（いや、あるのか？）周囲を威嚇している。

ただ四方が偶然来ていた神崎や柴田と話に行ってしまった現状、なんか僕の方を見てくる須藤や清隆に話しかける気も起きず、さつさと着替えてプールサイドに出た。

最速で更衣室を出たからか、どうやらプールサイドには僕が一番乗りしたらしく監視員しかいない。

なので、貸し出しの浮き輪を膨らませて、流れるプールでプライベートプールを満喫する。浮き輪を膨らませてる間にちよこちよこ人も増えだしたが、なかなかの独占気分は僕を満足させた。

しかし時間が経つと、周囲に人が増えてきて騒がしくなってくる。それに学校施設のはずなのに、ジャンクものの出店が展開され始めていた。ちらほらガチャの時に見た顔が店舗にいることから、おそらく上級生が運営しているのだろう。お祭りのな特別試験でも実施されたのかもしれない。

流されながらぼんやりと賑わってきた様子を眺めていると、遠くから四方と清隆からの視線を別々に感じた。

四方はいち早く水上へ『避難』した僕と何か話したかったかもしれないが、目立つことが予想される何人かが来るだろう現状では、愛里よろしく気配を消すのが無難だろう。

それにしても先日、改めて四方と友達になっていたというのに、相変わらず一人でいる清隆にほんの僅かに親近感が湧く。だが僕と違い、あれで平穏とか事なかれ主義とか言うんだから矛盾の塊である。浮かないようにしたいなら四方に話しかけるくらいすればいいのに、と思いつつ視線を切った。

と、その時、空気というか注意がとある場所に流れ出すのが見なく

てもわかった。

プール入り口から、一之瀬が現れたのだ。

尤も本人は、多数のエロ目線に集中砲火されていても、まったく気にした風もなく四方、次に清隆へ話しかけに行っている。話しかけられたら、冷静を装えていても男の肉体的におつきしないか気が気じゃないだろう。

あれほどの容姿とエロボディで、乳をバインバイン揺らしながら活発に動くのだから、万乳引力の法則は彼女の為にある言葉である。容姿やサイズは比肩しようとも、基本激しい動きをしない愛里では瞬間最大風速でしか超えられないからだ。

その愛里といえば、いまだ現れていない。

普段の早苗が何事も迅速なせいが一之瀬より少し遅れただけで、不思議に感じてしまう僕がいる。まあ着替えに時間がかかる印象のある女子が、柴田や神崎より早い時点でどこかおかしいが。

もしかして、僕は早苗に価値観を歪ませられているんじゃないかなろうか。

「夢月さん」

「んあ?」

つらつらとどうでもいい事を考えていると、ザバリと水音を上げて静かにその早苗が現れ、並走するように揺蕩っている僕の浮き輪に掴まった。

ん? 愛里はまだ来ていないよな? まさか本当に何かあったのか? 心配が顔に出ていたのか、早苗は珍しく安心させてくれる笑みで太鼓判を押してくれた。

「ああ、愛里さんなら大丈夫です。まだ着替えないように言っただけだから来たので」

「よかった...って、着替えないように?」

だが、すぐに笑みを消し去ると、声を潜めてその理由を口に出した。

「はい。更衣室が盗撮されました」

「は?」

「録画機能付き遠隔カメラを搭載したラジコンが、女子更衣室の通風孔付近にあります」

「おいおいおい。マジか……マジか」

「マジです。今はどうとでもできるようメモリーカードを抜いて動けなく細工した上で、通風孔を鞆で塞いでますが」

「それで愛里はどうしてる？」

「私の動きを不審には思っているはずですが、着替えは待ってもらってます。明確な事はまだ言ってます」

「……多分、最後までその対応が良いな。ストーカー事件の後遺症が出そうな事は、なるべく知られない内に処理するのがベターだ。犯人の見当と対応は？」

「よりにもよって、早苗がいる時に性犯罪を実行する奴が居ようとは……。」

ある意味、どこぞへ突き出されるより地獄を味わうかもしれない。

「明確に誰かは教えてもらえませんが、関係者5人に諏訪子様が軽い『呪』をかけたそうです」

「じゅ……呪術とかのじゅ、か？ 軽いとはいえ、神様の呪い……まさか死んだり再起不能になったりしないよな？」

「ええ。私の口から言うのはアレですが……その、男性のシンボルがしばらく機能停止するとか」

これってアレだろ。

好みの美少女と役得なイベントが起こっても。告白なんか成功したとしても。フェイバリットなエロ動画を見つけても。

イ○ポだから——なにもできない。

自覚の有無に関わらず、ラジコンに細工をしたことから十中八九、犯人達は機械に詳しい者を含めた高校生男子。周囲には可愛い女子が溢れるほどで、曲がりなりにも同じ屋根の下。

この状況と年齢でイ○ポとか、生殺しにもほどがある。しかもそれが5人……。

予想を上回る男にとっての地獄の一つだった。

「……………うあ。しばらくがどれくらいにもよるけど、自業自得と

はいえエグすぎる罰だ。しかも5人も…てか、こんな手の込んだ盗撮って…：徒党を組んでまでやることかよ」

「私は手ぬるいかと思っただんですが、夢月さんの反応からするとかなり効果的な天罰みたいですね」

これで手ぬるいとかコイツは鬼か。

僕だったら、学校に突き出されて退学処分とどっちがマシか悩むレベルだ。いや、キツイ報復をしたい気持ちもわからなくはないけども。

でも多分、神様にとっては戦後しばらくから広まったウーマンリブの男女『平等』ではなく、日本古来の男女『公平』という価値観の方が馴染みあるのだろう。社会的地位を利用した性的要求や強姦Ⅱ死刑の時代で長く存在していたのなら、確かにこの罰は現代社会に合わせて加減しているのかもしれない。

…：そもそも、物理的拘束さえなければナニされても合法という法解釈は、平等の良い部分だけで教えられた僕でも首を傾げる（いや、どちらかというところだと恐怖する、か？）ところだったが。

ともかく、その神様達と深い付き合いがある早苗もまた然り。古いつか流行に乗れてないとかいうわけではなく、根っこの価値観が純日本的なのだと思う。

それはそれとして、男としては想像だけでも恐ろしい天罰だ。

「相当ツラく厳しい。この学校、内面はどうあれ、妙にルックス良いのが揃ってるから、それを見て自分が反応しないのはじわじわ効いてくるぞ。長期になったら、無気力になったりするかも知れん」

「無気力…：綾なんとかみたいにですか？」

「清隆は内心が読みにくいから微妙だけど、表向きならそんな感じ。しかし誰だか知らんが、この代償は高くついたなあ」

首尾よく成功していても、実際の女子とエロい事できたわけじゃないという事実も憐れさに拍車をかける。

早苗や愛里が被害受けていない前提の上でだから、そう思うだけでもだけでも。

「それなら犯人を割り出し、証拠を付けて突き出すのは勘弁しましょ

うか」

「許せる被害だったらそうしてやれ。犯罪の報いは生き地獄だけでも充分だろう」

「被害……愛里さんとお手洗い寄ってから見つけたので、桔梗さんや一之瀬さん、他数名はおそらく生着替えシーンを撮影されてますよ」
「僕にそれを聞かせてどうしろと?」

「夢月さんも抜き取ったメモリーカードの録画映像、見ます?」
「証拠と一緒に汚物は消毒してやれ。本物で偶然なら喜んで見るけど、僕にそんな趣味はない」

朝のパンチラみたく目の前にあればともかく、これはリスクとりターンが釣り合っていない。

まあ正直、見たいか見たくないかで言えばそりゃ見たいが、この件については下心なんか二の次三の次だ。

仮に櫛田や一之瀬の全裸が鮮明に映っていたとしても、色々やれる可能性もない女子の着替えシーンなど後で絶対に虚しくなる。いくら可愛くて発育が良かろうと、どの女子も僕が手にすることはないのだから。

「うふっ……汚物を消毒ですか。確かに。」

それじゃあ、さっさとアレは処分して愛里さんと呼んできますね」
「うーい。一応、他も気をつけるよ」

「誰に言ってるんですか。私は勿論、諏訪子様がそんな見落としをするだけでも?」

「そつちじゃねーよ。最近は……なんとなく愛里にとって重要な分水嶺にいるような気がするから、友達だからって変に干渉しすぎないようにな、ってこと」

「……これも夢月さんの勘ですか」

「勘というか、愛里から何かを決断しそうな奴の匂いがあるだけ」
「諏訪子様と似たような事を……:……まあ、それはともかく。ようやく諸々片付けられそうですし、不愉快な事は忘れて気兼ねなく『遊ぶ』ますか」

また後で、と早苗は言い残して浮き輪から手を離し、更衣室へ戻っ

ていった。

ん？　そういえば、早苗が僕のところに相談？　しに来た目的はなんだ？　聞いた限りでは全て早苗と神様で対処済みだったから、僕は必要ないじゃん。

僕が盗撮に関与してるかの探り？　男にとつての罰の重さの確認？　それとも何かを試された？　朝のパンチラの一件に勘付いてて、その釘刺しとか？

……うん。早苗の考えは基本わからないし、やぶ蛇になったらコトだから、もういいか。

一人、浮き輪に尻を突っ込んで水の流れるに揺られながら、僕は文字通り無慈悲な天罰を落とされた誰か5人へ適当に南無く、と一応祈っておいた。早苗達以外、今はまだ誰も気づいていないかもしれないが。

94、親友

早苗が去ってから相変わらず水の上で揺蕩っていると歓声が聞こえた。一之瀬の時とは違い、今度は主に女子の注意がこちらに流れているのがわかる。

とこぞにいけすかないリア充がいるのだろう。よって見に行く価値なし。不愉快極まりないからだ。

まあ他人がモテている現場を見なければ、どうということはない。こちらにも、一応バラエティー豊かな綺麗どころは友達に揃っている。扱いが難しい点とイロモノ揃いな点を除けば、目の保養に不自由はしない。早苗……と鬼龍院先輩もか？ はマジで危険物っぽい匂いがあるけども。

気を紛らわせる為に、なんとなく女友達の性格難をなんとか容姿で打ち消せないか試みていると、本日三度目のどよめきが上がった。

立てば悟空、座ればネテロ、歩く姿はシン・ゴジラな東風谷早苗、堂々の再登場である。愛里も共に歩いているということは、無事盗撮の件の後始末は片付けたのだろう。

それにしても、早苗の例えがほぼ男キャラで、なんなら巨大怪獣が混ざっていてもまったく違和感がない。それこそがヤツに抱く僕の印象を物語っている。

そして一緒にいる愛里は、普段どおりの見事な気配断ちと猫背にラッシュガード？の合わせ技により、注目をほとんど早苗へ流している。愛里が元々の素養に加えて橘書記の薫陶で特殊な処世術を会得したように、早苗は櫛田の人気取り技能を自分流にアレンジしたのだ。

それにより、この状況ができ上がっているのだろう。

確信はできずとも、前々からその節は見え隠れしていた。

単独なら人を寄せ付けないのに、こういう場で愛里もいる時にあって早苗が目立つように振る舞っているのは、隠さない性格ゆえでもあるが愛里を守る意味が大きいと思う。

あれだけ美少女でなおかつアイドルなのに引つ込み思案な内弁慶だと、色々と面倒事を引き寄せるはずだからな。櫛田や交流を作りにくる一之瀬などの人気者にもそれをするあたり徹底している。

彼女達は、メリットとデメリットをお互いに補い合っているのだ。また早苗が愛里のぶんも注目を惹き付けければ、信仰が得られる可能性もあるし、友達同士であることを除いてもWINWINになるようできている。

ただ現在、この仕組みになっているのは多分早苗だけの考えじゃない。あの『悪い部分』も抱き参らせるようなやり方からは、もつとなにか器が大きい……そう。船で見た早苗の神様っぽい感じを受ける。きつと助言かそれに類する手助けがあったのだろう。こういう点を見るに、革新的かつ早苗への情の深さが垣間見えて興味深い。

四方と合流し、僕の方へ向かってくるいつもの3人を眺めながら、そんな事を考えていた。

うん。二度目の歓声が出た中心に向かって、3人に連れてこられた時点で予想はできていた。

「よう。ちゃんと来たな左京」

そして今、確信に至った。

先程のリア充は南雲だ。

よろしい。まずは僕の敵認定をくれてやろう。

「来たくなかったんだけど、南雲の打ち込んだ釘が思いのほか深く刺さってみたいでな。朝、呼びに来られたよ」

「お前が昨日きちんと対処してたら、ここには来なくて済んだかもな」「ここには、って別で仕掛ける気満々じゃないか。それなら一之瀬や葛城、あるいは会長あたりを絡ませられるよりマシだろう」

「くつくつく。お前は気づくんだな、嬉しいぜ」

上機嫌に笑う南雲だが、逆に僕の抱く落胆と憤りは相当なモノ。

自分が何をしてしまったのかわからせてやる。

「僕は嬉しくない。友達で野郎混じりとはいえ、女子が起こしに来てくれる夢のシチュエーションの直後、面倒事になる予想しかできない

んだぞ。折角なら、もつとこう…色っぽい展開になって欲しかった」
「そう言うなって。お前にも利益がある話だぞ」

「利益があつたとしても僕には必要ないんだよ。今日一日、寝て過ごす予定が台無しになったじゃないか」

「インドアにも程があるな。夏休み最後の日に先輩が思い出作りしてくれるんだぜ？　ここは泣いて嬉しがるどころだろ」

「ははは。抜かしおる。南雲自身の見極めと退屈しのぎ目的の『決闘ごっこ』なのは割れてるっつーの」

「……へえ。なるほどな。学校や会長でさえ出し抜くわけだ。ま、俺には及ばないだろうが」

「それは単なる事実だ」

「……………あつさり認めるのかよ」

甘酸っぱい青春イベントか、だらけきつた伝説を打ち立てる計画。

僕のそれを全て台無しにした上で、自分のモチモチなりア充現場を見せてつけるとか羨ましくて妬ましいなんてレベルじゃない。もはや南雲雅という存在を、全人類・全同士の敵認定したいくらいだ。

つまり僕の言いたいことは、だ。

南雲は失敗を犯したということ。

たった一つのシンプルな失敗。

——お前は僕を……僕達を怒らせた。

盗撮事件も起きて内心落胆していた僕の目の前で、リア充っぷりを見せつけることで！

僕のみならず、陰に生きる者達を煽り散らしてきた極悪非道の輩！！

こんな煽りカスは断じて許しておけない!!!

だから条件と道筋が整ったら、勝負をうっちゃってでもおちよくり倒して恥をかかせてやる。

気を取り直してニヤニヤ言い出してきた勝負内容に軽口を付けて聞き流しつつ、コスモを燃やせ、とばかりに内心で何パターンかの想定をした。

「ほう？　水中バレー？　ならば後輩側の人数が足りないな。私にも一枚噛ませてもらおうか」

「なるほど。天文部の一員としては私も参加すべきだろうねえ。最後の一枠は、この私が見事こなして魅せよう」

「鬼龍院に……高円寺か。お前の事は聞いているし、何度か見て知っているぜ。そのわりには付き合いいいじゃねえか」

「フツ」

「……」

したんだけど……鬼龍院先輩も高円寺もどっからわいてきたんだよ。

どこかで登場タイミングでも図ってたの？ 勝負自体は人数を理由にタイムマン勝負を選ばせ、適当にやって負ける気満々だったのに、勝ち筋が見えてきちゃったじゃないか。そうなると僕も大変になるから、口だけ番長ムーブで終わらせるのが楽だったんだけどなあ。

しかも話に割って入ってきたくせして、言うだけ言ったら南雲どころか周囲を笑って無視するとか、なんでこう規格外な奴らは理解不能な行動原理なんだ。

特に、僕を引つ張ってきた四方達が珍しく話が終わるまで大人しく？してた間に、いつの間にか当たり前のような顔してメンバー入りしてる部分がワケわからなすぎる。早苗が増えたみたいで、頭痛が痛い（誤りにあらず）。

いやバレーだと人数足りなかったから、ありがたいといえはありがたいんだけど、気分で計算外の天才が乗ってくると凡人の処理能力では追いつかない。

……でもこの二人を無様な負け試合に巻き込むわけにもいかないし、ここは難しく考えずに初心を貫徹しつつ、いっそ取ってしまった方がいいか。

僕が人知れず方針転換している間。

自由人が半数を越える僕達のメンバーに華麗にスルーされた南雲だが、器を大きく見せる為か肩を竦めて流す事にしたようだ。口元が小さく引き釣ってるが。

思わぬ援護射撃になったので、せっかくなら軽く一撃入れるついで

に初心ノルマをこなしておこう。

「フッフッフ。喜べよ左京。俺に真正面から挑んできた後輩はお前が初だぜ。敵として潰されるのもな。せいぜい俺を退屈させないでくれよ?」

「南雲……その「フッフッフ」って、もしかしてプレッシャーのあまり過呼吸を起こしたのか? 僕達が怖いなら後ろで震えててもいいんだぞ? 無理せず安静にしておけ、お坊ちゃん」

「——あ?」

先制のデバフ付きジャブだ。

というか、むしろ僕が挑むように仕組んできたのは南雲なんだが。ほぼ連戦な疲れが出てきたのか、また痴呆モードに突入したのかもしない。これはラッキー。

「……………てつめえ! 誰が過呼吸で恐怖に震えてるだ!! 煽り返しのつもりか!」

挑発には挑発、と来るとは思わなかったのか一瞬、絶句した南雲。

やはり見立て通り、攻撃力は高いが防御力に難ありなパターンSか。これならなんとかできそうだ。

「おつやおやあく? も・し・か・し・て・く、凶星を突いちゃいましたあ? でもそれじゃあ器の小ささが露呈しますよ。自称! 自称・次期生徒会長なら、これくらい軽く流していただかなくては——わたくしめは、自称・次期生徒会長をおめでたいおつむだと勘違いしています」

「ブツ。さ、流石にそれは失礼なんじゃないですか、夢つく……部長殿」

早苗が吹き出しかけたのをなんとか思いとどまり、ナイス相づちを打ってくれた。なので僕も、流れに即した丁寧で慇懃無礼な口調で上乘せする。

「いやいや。早苗君こそ、なに失礼なこと言ってるのだね。こちら現職の生徒会副会長で自称・次期生徒会長ですよ? この程度でお怒り遊ばすことなどありえないでしょうに。ねえ、自称・次期生徒会長殿?」

「や、野郎!! 黙って聞いてれば1年のくせに上から目線で調子に乗りやがって……! それが目上の俺に対する態度か!」
ハマった。

南雲の視界から、吹き出すのを堪える為か俯いてしまった早苗すら外れ、僕に注意が集まったのを確認した。

もちろんアドバンテージになるので、ニチャリながら揚げ足を取りに行く。

「はあくやれやれ。自称・次期生徒会長のどこが黙ってるんですか? 凶星を突かれた程度で支離滅裂になるなんて、先が思いやられますなあ」

「凶星なわけねえだろうがっ!」

「それに目上というのは立場が上の者を言うのですよ? 年齢差と生徒会副会長だと加味しても、南雲のそれは実に生意気極まりないふてぶてしい態度なんじゃないですかねえ?」

「なっ……! だったら、そういうお前はなんなんだ!? 自分のことを棚に上げてんじゃねえぞゴルア!!」

「ははっ。ところで、何が「な」なんですか? 言葉に詰まって余裕を失うようでは、一流からは程遠いですよ。カルシウムを多めに摂ってはいかがでしょう」

「っんの野郎! 話をコロコロ逸しやがって! てめえこそ——」

「な、南雲っ! 落ち着け! いつもの冷静なお前に戻れ! 後輩程度、勝負前から乗せるのも簡単だから安心しろ、って言ってただろ!」

お前が乗せられてどうする!」

僕と南雲の言い合いに、呆氣に取られていた向こうのチームメイトらしき数人がいきり立つ南雲を抑え込む。

当然、後ろで見下しから唾然へと変化していった彼らの存在は確認済みである。だからこそ安全に向こうのエースに感情デバフをかけられた。

自信家で攻撃的な奴は自分が攻撃されたくないから、少しでも気にしてるところを突かれると激高するのは定番である……と『僕が思った』思ってもらえただろうか?

まあ流石に途中から演技が混じっていたのには気づいている。

少し特殊な経験値効率をしているのか、この年齢で南雲は場の盛り上げ方をわかっているな。演技が上手くて、まるで本気で怒ったかのようにだった。僕がああ域に到達したのは、おそらく前の20代後半。かなりの潜在スペックである。

しかしなんであれ南雲が乗ってくれた以上、これで僕に攻撃を集中されても不自然には写らないだろう。

……勝負を面白くする演技だよな？ 迫真すぎてなんか心配になってきた。

「ゴイツ、やっぱりとんでもないな」

「あはははっ！ 夢月……夢月さんって、煽る時だけ丁寧言葉になることありますよねえ。ぷふっ。イキイキしてます」

「あ、あわわ。夢月君、副会長の先輩になんてことを……。でもちよつとスカツとしたこの気持はいい」

でも四方と愛里にはなんか少し引かれてるみたいだが、コラテラル・ダメージだろう。差し引きで言えば得だし、万が一演技じゃなくても問題ない……と思うことで精神の安定を保とう。

ちなみに高円寺と鬼龍院先輩には何故かメツチャ受けていた。鬼龍院先輩など、前かがみになり腹を抑えてビクついているほどだ。

ただその態勢と位置だと、意外と着痩せしていた先輩の凶器が揺れまくる様と、時々ビクンツとなる綺麗な身体が僕の目に飛び込んでくる。慌てて目を逸さなければ「モッコリしていつてね」な事態に発展したことだろう。

これからスポーツするのだし、敵味方の男子を行動不能にしないよう気をつけてほしい。

南雲がチームメイトに引きずられていき、残ったのは向日葵？の髪飾りを着けた明るい雰囲気の子。僕の苦手なタイプなので、当然の権利で素早く早苗と鬼龍院先輩の後ろに逃げた。

すると呆れた風に「雅は行っちゃったけど、コートが空くまでお互いに作戦タイムねっ」とだけ僕達に告げて、南雲が引きずられた方向

へ去っていった。

ケツ。名前呼びの balanサー美少女が付いてるイケメンには、勝敗関係なく敗北感を与えてやる。妬みの感情を舐めるなよ。

というわけで、確認してから作戦タイムだ。

先輩と高円寺は聞くまでもなく……なんなら無粋だが、他は状況から察せられるだけだしっかり意思を聞いてないからな。

「えーと、参加してくれる面子はこの場の僕含めた6人でいいんだよな？」

「ああ、最初から俺達はそのつもりだ」

「運動苦手だけど、わたしも頑張ってみたい。足手まといになると思うけど、メンバーに入れてもらってもいい……かな？」

「勿論ですよ、愛里さん！」

「ふつ。我がチームの足手まといナンバーワンはおそらく僕になる。愛里には譲らんから無用の心配だ」

「……威張って言うことじゃないだろ夢月」

いやあ、表向きあれだけ南雲を挑発したんだから、少なくとも序盤の失点の大半は僕になるだろう。推定される南雲の統率力なら、集中砲火を浴びてもおかしくない。そして僕にそれを捌ききる能力はない。

尤も、それを逆手に取る配置は考えている。

「ま、じゃあそれでいいとして、僕の方針はこれ。」

作戦名：好きにやろうぜ！ だ」

「好きになって……」

「具体的な基本配置は、まず先輩と高円寺、早苗が前衛・アタッカー。そして僕と愛里が後衛・レシーバー、四方がセッター……でいいの？ 水中バレー、てかバレーのルールもよくわからん」

「とりあえずそれでいいんじゃないか？ 俺もよく知らんし」

ルールのなものを知ってる奴か、上手く統率してくれる奴がいれば、そいつに臨時のまとめ役を頼みたかったけどどうもいなさそうだ。先輩や高円寺は条件満たしてる気がするけど、やってはくれないだろう。

「今言ったことから察せられるように、基本は身体能力の劣る僕か愛里が狙われるだろう。だから愛里のフォロワーには四方が付いてくれ。僕の方はギリギリまでではなくとかしてみせる。」

それらを踏まえた上で、意見や質問があれば言ってみようか」とは言うものの、特に反論されなさそうだ。

もっと面白い作戦があれば、誰かが言ってくれようかな。勝つ事だけを目的とするなら別だけど、これはあくまで決闘『ごっこ』である。それなら投げる先を四方二三矢にして、南雲に異才というものを見せつけてやるのが作戦の趣旨だ。

つまり今回の肝は、主に四方のプレーヤーとしての能力以外も頼りにしている点。

やる気を見せている四方の集中力からして、愛里を守りながらも洞察や分析の能力をフル活用してくれるだろう。身長もあるが、その為の後衛・セッターだ。

そして、どこを狙ってくるかなどを先読み・フォローできるレベルまで四方が達すれば、その頃までに僕がボコボコになっても問題ない。どこにボールが上がるかと、頼りになるスタンドプレーヤー達がなんとかしてくれるだろう。

あとは愛里にも、自分の守りを意識してくれるよう促せば必要充分である。

「愛里の方にボールが来たら、とにかく怪我しない事だけ考えて。んで、余裕があったらボールを打ち上げてな。この面子なら見当外れの方に飛んでも、他がなんとかしてくれるさ。な？」

「はい！ 任せてください！ どんな弾道でも相手コートにぶち込んでやります」

「あつ、あと参加してくれるなら、危ないから眼鏡は外してくれ」

「う、うん。ありがとう。それくらいならなんとか……なるといいな」
「失敗しても気にするな。この面子だと愛里がいないと僕の持ち場以外は狙いが分散する。そうになったら四方がヤマを張れなくなるから、最低限の守りの為に必要な役目だと認識してほしい」

なぜなら、四方が作戦を実現可能にする為の鍵は愛里以外あり得な

い。僕以外の塞げる穴がないと、下準備した意味が薄れてしまう。

運動ができなくとも、洞察と分析の面から四方を最も効果的にサポートできるのは愛里ただ一人だ。

「必要……わたしが」

「もちろん。僕には愛里の助けが必要だ。そして愛里にも僕の助けが必要だったら嬉しい。」

心を通わせる親しい友達、親友ってそういうもんだろ?」

「あ」

誰がどう思っているように、愛里だけじゃなく僕はこの場にいる仲間をこう思っている。

なら正直に気持ちを伝えておくのも、たまにはいいだろう。

特に愛里は珍しく自分から参加を表明したのだから、目一杯頼らせてもらう。

そして愛里が頑張ってる中で、僕だけダウンするなんて矜持が許さない。

……なんだこの背水の陣を応用した作戦、完璧か? と、ボロクズ同然にされる前に内心で自画自賛して自己防衛しておいた。

「はは。夢月らしい激だな」

「……うっはー。くっさいセリフですねぇ」

「うっせえ。これから格好悪いところ見せる予感があるんだから、少しは僕にも格好つけさせろや」

最低でも四方が読み切るまでは格好悪い所を見せるし、最後まで僕が立ち続けるには仲間頼らなければ立ち行かない。

「まあ、格好良いこと風に聞こえたかもだけど、ぶっちゃけ僕自身も愛里も困扱いなわけだが。愛里には悪いが、僕と一緒に引き立て役の枠を埋めてくれ」

「おい」

「……い、一緒に」

愛里はなんか…変な感じの状態になってそうだが、それ以外の4人は小さく笑いと冗談を零したので、理解して受け入れてくれたのは間違いないはずだ。

なぜなら助け合いたいのには嘘ではない。

チームスポーツにおいて囿というのは、周りに人材が揃っている場合に限り効果的だ。四方の能力と組み合わせれば、本職じゃない身体能力ごり押し集団に刺さる可能性は高いだろう。

「それに何度も言うけど、副会長の性格的に多分僕が最もミスが多くなるはず。なんせ、なんとかボールを上げて、前衛3人で攻撃しまくる作戦だ。ハマれば強い代わりに、ハマるまで耐え忍ぶのは主に僕の役目になる」

「ですがそれでは守りが薄くなりませんか？ 私と夢月さんの位置も交換した方がいいのでは？」

「いや、前衛は守りもコンベネーションも最初から捨てて好きにやれ。やる気にならないなら、居てくれるだけで：棒立ちでも構わない。それでも前衛全員、『条件を整えば』試合を支配できる奴で揃えたい。そしてそれが最も楽しく美しい勝ち筋だと思う。負けても僕がなんか手伝うだけみたいだし、気楽なお誘いだから楽しんでいこうじゃないか」

実際、南雲は命名決闘の条件を満たしていないので、先述通りこれはただの決闘ごっこだ。負けても強制力はなく、申し訳程度の手伝いでもこなせば、それで終わりにできるだろう。

おそらくこの事も愛里がわかってるか微妙かな、って程度で全員承知していると思われる。そうでなかったら、とつくの昔に早苗あたりがなんらかの動きを見せているからだ。

「クックック。安心しろ後輩。私が付いていて負けるなどありえない。今日は祝杯でも上げるとしようではないか」

「ははは。そうだねえ。サウスクラウドボーイに私の暇つぶしが務まる程度の実力があればいいのだが」

また普段周囲に関心を向けない二人が相手方を見下すように……すでに勝っているかのような発言をしてるあたり、南雲のしたナニかが実は部員達の気に障っていた可能性もある。僕も大概イラツと来ていたが、ナチュラルに敵を作る性質っぽいから憶測くらいはできる。

四方が間に合わなかったら、自分から動きそうな雰囲気である。

「……この二人が異様に頼もしいのは置いといて、最初に全員に言うておきたい事がある」

ともあれ、プールまで来てるんだし、作戦が決まったらあとはスポーツを楽しむだけだ。

その前にチーム結成のお礼を言っておくべきだろう。

「勝負に付き合ってくれてありがとう。こういうチームスポーツだと、僕だけじゃどうにもできなかった」

「うふふつ。楽しそうだったから乗ったままですよ。でも攻撃に手は抜きませんが、愛里さんが危なくなったら勝手に後ろに回りますからね！」

「そこらへん含めての「好きにやろうぜ！」だ。僕達みたいなスタンドプレーヤーの集まりには、スタンドプレーしか求めないよ」

思惑通りにいけば、『個』の規格外4人で蹂躪できる。それまでに僕が潰れない条件付きで、勝利も付いてくる。そして南雲は僕を口だけの凡人と評価し、他に目を向けるだろう。

そうするには、衆目の中でどんな無様を晒そうと笑っていよう。

天才達の道筋を整える事ができたなら、勝ち負けなんかどうでもいい。誰か一人でも、十全に実力を発揮させられれば目的達成だと今決めた。

「んじゃ、紳士淑女諸君。

面倒くさい事は考えず、自分の好きにやろうじゃないか。僕と愛里が汚れ役を引き受けたから、整った合図と同時に暴れまわれ」

僕の道しるべは用意した。

戦いは始まる前に結果が決まっていると言うが、望む結果の為にギリギリまで粘るしかない。彼ら彼女らがそこを変数に置き換えれば、入力されるモノ次第でいくらでも改変する余地ができるだろう。例えば、初手は僕の耐久力が試されることで、四方が本気を出すかどうかで。

そう。もう人事は尽くして天命を待つ段階。

要点はシンプルに、後ろがボールを上げられれば、前が決めてくれ

ると信じるだけでいい。

だから信頼できる面子が助けにきてくれた事実には、僕はこの場でできる限りの感謝を伝えた。

夏休み最終日、オマケのお誘いを気楽に気の合う奴らと楽しもう。

95、 願い（前半、佐倉視点）

2つあるコートの方で3年生の試合が終わり、ついにわたし達の出番がやってきた。

ちなみにもう片方のコートでは、1年生のB・Dクラスの人達が試合している。あっちでは、色々入り混じった複雑な目で見てしまう櫛田さんや須藤君が活躍しているようだ。あ、あと綾小路君もいつもの不思議な挙動で参加している。

それよりわたし達だ。

わたしが属する夢月君チームと南雲先輩率いる2年生チームで、水中バレー勝負。ルールは15点先取で、サーブは2回ずつで交代。

こんな勝負の片隅に、運動の苦手なわたしが参加することになるなんて思いもなかった。けど、早苗さんに言われて夢月君が取られるかもと思つたら、つい自分から進んで参加していた。

こうなつた以上は、みんなに迷惑かけたくない。

「オラァー！」

そうして始まつたわたし達の試合だったが、南雲先輩の独壇場と云つてもいいくらい。

今の時点で、すでに1対8の点差がついている。

勿論、わたし達が1の方だ。試合前に夢月君が言っていたように、夢月君を集中攻撃されているのが要因の一つだろう。

なんとかボールに触れても、他がフォローできるようには上げられていない。更には四方君が綺麗に拾つても後が続かないし、わたしなんて夢月君以上にまともに前や上に飛ばない。

しかもサーブも簡単に拾われてしまう。

「どうしたんだ左京？早くコイツらに手を打たないと取り返せない点差のまま決めちまうぞ」

また南雲先輩が言うように、前衛の3人がほぼ棒立ちしているのも大きいかもしれない。しかもそれを夢月君も四方君もわかつているはずなのに、注意すらしない。

作戦通り（早苗さんと一緒にこっさり四方君から補足してもらった）とはいっても、本当に攻撃以外何もしないなんてものすごい強心臓だ。わたしだったら、絶対オロオロしてしまう。

一方、四方君はずっと真剣な顔してわたしをフォローしてくれてるけど、そのぶん夢月君には何度もボールを打ち込まれて失点を積み上げられている。

ただ二人共、何かを狙っているのか珍しく無言のまま。夢月君など笑みを浮かべてはいるものの、バシヤバシヤともがいているだけのように見える。

この時のわたしには作戦があるとはいえ、圧倒的劣勢の上にチームワークも皆無に見えて、理性では負けちゃうんじゃないかって思ってしまった。不思議と感情は真逆だったけども。

逆に2年生の先輩達は声を出し合って、明らかに図抜けていた存在の南雲先輩をバックアップ。そのコンビネーションを上手く使われて、次々と得点を重ねている。

すごい迫力のスパイクをブロックして唯一得点した早苗さんは警戒されているけど、ジャンプしても届かない山なりの軌道なら、早苗さん含む前衛は動かないともう見切られていた。

「うぶっ」

「なんだよ、意外と歯ごたえねえな。口だけだったのかよ」

早くも疲労が表に出始め、受けそこなったボールを顔面に受けて背中から水の中に倒れた夢月君に、失望したような声を漏らす南雲先輩。

向こうは試合が終わったのか、ちょうど観戦していたわたしと同じクラスの山内君が「顔面レシーブ！ カッコわりい〜」と叫んで、普通の声援に混じって一部の観客と大きな笑い声を上げる。

あつさり1対9になったから、つまらないのかもしれないけど。コントみたい滑稽に見えたのかもしれないけど。

彼の精一杯の頑張りを否定され、嘲笑われてるようで。

それらの声が聞こえていたわたしにも、だんだん沸々としたモノが湧いてくる。

が、その時——。

「けほっ……ハッ。たかが8点差だろ」

「俺の方は1失点なんだがな。頼りの仲間は半分以上棒立ちで動かない。後衛の一人はマシだが、短時間で疲労を隠せないお前ともう一人は穴だらけ。見てわかるほど惨憺たる有様じゃねえか。お前、このままじゃ本当に何もできずに負けるぜ？」

「——それがどうした」

そんな空気を変えるのは、いつも呑気で迂闊な——でもいざという時はけして焦らず頼りになるわたしの『親友』だ。

咳き込みながらようやく口を開いた夢月君は、この劣勢を最初から予見していただけとは思えないほど自信と不敵さに満ちた笑顔で、あろうことか南雲先輩を挑発しだした。

「左京、夢月……！」

「まだ『僕』が弱いつて……負けたつてのが確定しただけじゃないか」

カメラを持ち込めない状況なのが本当に惜しい。

こんな時に呑気な話だけど、この日最高の一枚候補だったかもしれないのに。

「能書き垂れてないで、トドメを刺しにかかって来いよ。なるべく早くな。」

南雲こそ早く仕留めないと——蹂躞劇が始まるぞ？」

「……っ」

咳き込み、肩で息しているくらい疲弊しているのに、夢月君はなんでもないことみたいに反撃の狼煙を上げ、南雲先輩をナニかで圧倒して出そうとしていた言葉を中断させる。

外見の特徴だけで見たら、何かを成し遂げる期待なんかできないかもしれないけど。あっさり自分を弱いとか負けたなんて断言する人だけだ。

わたしは夢月君が『強い』と知っている。

だって絶望的ともいえる状況だ。勝利に至る道筋はあまりに細い。諦めるか、焦って動けなくなるか。わたしなら、多分この二択。

なのに夢月君は第三の選択肢を作り出し、仲間が諦めない限りは諦

めないだろう。それくらいの付き合いと理解はある。

たとえばそれほど可能性が低くても、彼は信じた道を突き進む。

そしてそれをみんなが助けるって断言できる。

まだ出会って半年も経ってないけど、これまでの彼の在り方がわたしにそう確信させる。

きっと『わたし達』の部長は、0を1にすることだってできるのだ。

「ははっ。よく言ってくれた。もう大丈夫だ。俺に8割は任せてくれ」

「サンキュー四方！ 結構ギリギリだったから助かった！」

「速攻を目指すから、あと少しだけ踏ん張ってくれ夢月」

「へっ。軽いもんよ」

疲労からかよろけながらも、飄々とした中に確固たる意思を持って気高さを感じる笑顔。

その在り方を間近で見て軽口を叩き合ってる四方君が。気づけば早苗さんが。高円寺君が。鬼龍院先輩が。わたしまで。

夢月君のその独特な雰囲気としかいえないモノで心を動かされ、笑みが浮かんでくるのを止められない。

「待たせたな、天文部諸君。」

このまま素直に順当に負けてやることはない。そろそろ好き勝手にやろうじゃないか。『僕達』の勝ちへの道筋は整えた：いや、四方が整えてくれた」

言っていた合図。

合図と同時に、真剣に試合に集中しつつも、心配の為か緊張した面持ちだった四方君の雰囲気の本気のそれへと変わっていく。前衛の3人も笑い声を零して、後衛に信頼を向けてくる。あの高円寺君までだ。

鬼龍院先輩以外は、あの素晴らしい音楽を奏でたみんな。

夢月君とわたしとで曲がりなりにも競い合い——勝ち負けのないハッピーエンドに持ち込まれてしまった人達。普段がどうであれ、夢月君ならやる時はやってくれるとみんなが信頼している。

絶望的な状況には変わりないはずなのに、我ながら単純なことにそ

れに思い至っただけでもう……わたしには負けるなんて思えない。

いつも夢月君は人をワクワクさせてくれる。楽しませ、癒してくる。

わたしを癒し粹だって言うこともあるけど、誰かが悩んだり困ったりしてる時に吹き飛ばしてくれるのは大抵は夢月君だ。

それは焦がれることすらある彼の持つナニかがそうさせるのだろう。

「——あの調子に乗りたいわけ好かないクソイケメンをぶっ倒すぞ」

ただ、なんでこの人は最後まで格好良く決めきれないのだろう。これと特定の人への逃げ癖さえなかったら、南雲先輩にだって負けてないのに……。

わたししか気にしてないかもしれないけど、妬みの籠りまくったそれで一気に身体から余計な力が抜けるのを感じていた。

ともかく、それからは四方君の指示の下、後衛の3人でかなりボールを前衛に回す事ができた。

2回だけだけど、わたしも成功と言っても良いトスを上げられて貢献できた。

本気になった四方君の読みは的確で、ぜえはあ言ってる疲労困憊な夢月君も指示された着弾地点に間に合いさえすれば、きちんとボールに手が届く。勿論、四方君本人が最も多く拾っていた。

そして多少無理矢理でもボールを上げさえすれば、前衛の誰かが決めてくれる。明後日の方向に飛んでも後方でなければ、どうしてかドンピシヤな場所に誰かがいる。

なにより仲間を信じ切り、役に立てないわたしだって動けば誰かが応えてくれると思えた一体感がそこにはあった。

ついでにその一員となることで、最近のわたしが見失ってた本当にやりたかったことも思い出せた。

後で思い返せば、この日はわたしにとって重要な分水嶺になったのかもしれない。

15対13。

一時はあんなに負けそうだったのに、終わってみるとわたし達が

勝っていた。

予想外の大盛り上がりな展開に歓声を上げる観客。信じられない、というように呆然とする2年生。それと憑き物が落ちたように、何かを吹っ切ったように笑う南雲先輩。

それに対し、わたし達の誰もが静かな自然体のまま。

人の間を抜くようなフィニッシュを決めた鬼龍院先輩。誰もが諦めたコート横の審判台？の裏からスナイプした早苗さん。大胆不敵に南雲先輩の上からスマッシュを叩き込んだ高円寺君。途中から試合を動かし続けて勝利に導いた四方君。

わたしから見た『4人』は誰も彼もが飛び抜けたスターだった。

「ほう。それは珍しい食べ方だな」

「餡子とコーンフレーク…ですか」

「バニラアイスにこれをかけるのが俺のジャスティス。夏といえばこれしかない」

「なるほど。テイルマンも定番にひと味加えるのだねえ。庶民とはそういうものなのか、夢月も似たようなアレンジをしていたよ」

「ああ、当たらずとも遠からずってやつだな。俺は夢月が船でやってきたのを見てから、マイブームになった。それまではそのままが多かったよ」

尤も、そんなみんなは試合が終わるとすぐに対戦相手も歓声も放つて、夢月君の奢りという昼食…おやつの話してる。なんとというか普通は人が群がって来そうなものなのに寄せ付けない。

改めて思うけど、マイペース極まりない人達だ。

それとなによりこの曲者だらけのスター達とわたしを率いて、最後まで立ち続けた夢月君。

一人でいても孤独を感じさせない彼の傍は、不思議な心地良さがある。本人はそんなに望んでなさそうなのに、変わった人が集まるのはその彼特有の空気みたいなモノのせいかもしれない。

ふとそんな事を考えた。

活躍した他の仲間達が談笑する所にお邪魔するのは目立ちそうな

ので、プールから上がって一人で座り込んだ夢月君のところへゆつくり向かう。体力や心に余裕がない時、何故か吸い寄せられるようについ彼の近くへ行ってしまふのだ。

その途中、初めての心地よいスポーツの疲労を感じながら、なんとなく試合が始まる前に夢月君から言われた言葉が頭に浮かんでくる。

——僕には愛里の助けが必要だ。そして愛里にも僕が必要だったら嬉しい。

——心を通わせる親しい友達、親友ってそういうもんだろ？

そう言われた。

そう求められた。

夢月君にとっては、何気ない言葉のつもりだったかもしれない。

でもわたしにとっては、最高に嬉しい誘い文句になった。

早苗さん達と寝ていた夢月君を強引に連れ出した先で、わたしの望んでいた言葉が貰えるなんて夢にも思わなかった。

頑張って踏み出して本当によかった。

今まで嫌な目を向けられたことはある。

もうだいたい前な気がするストーカーのように、気持ち悪い目を向けられたこともそれなりにある。

好意寄りの視線を向けてきて、付き合いたいと言われたことも一応ある。

比べるようなモノじゃないけど、夢月君は……こういう女の子として嬉しい部分よりも、ずっとずっと嬉しい信頼を向けてくれる。

内容は夢月君と一緒に囃役だったけど。

勉強でも。運動でも。こんな役に立たないわたしを仲間として見てくれて……頼りにしてくれるなんて。

そして——わたしが心から求めていたモノと一緒に探してくれた。

それだけでも充分だったのに……。

真っ直ぐな目でわたしを見て、わたしが必要だと……わたしにも必要とされたって、言ってくれた。

出会った頃から、夢月君にはそういうところがある。

いつもわたしが欲してるモノを、本心からとわかるやり方で渡してくれる。

正直、踊り出したいくらい、泣き出したいくらい。

胸一杯にナニかが満たされていくようで、たまらなく嬉しい。

心の底から欲しいと思っていたわたしの願いは。

きっとわたしに見えていなかっただけで、こうして渡される前から叶っていたのだろう。

……困った。明日から学校なのに、今晩は寝られないかもしれない。いい。

でも今は――。

「夢月君、お疲れ様。みんなのどこ行く？」

「……あー。ちよつとだけ休ませてー。てか、おかしい。めつちや丸投げなのに、なんで僕がこんなに疲れてるんだー」

「だって……ふふふ。あんなに頑張ってたから」

「はあ〜。どうしてこうなった」

もつとこの人と話していたい。

お月様みたいに道しるべを照らして……心を通わせてくれるわたしの親友と。

このやる時はすごいけど、いつもはちよつと情けなくてどうにも締まらないのに、時にすごく嬉しいモノをくれる――。

「あつ、愛里。疲れてるトコ悪いけど、後で天文部の集合写真を頼めるか？ 愛里じゃないと、高円寺が納得する出来にならない気がするってさ」

「……っ。うんっ、いいよ！ 任せてー！」

夢月君というだけで、楽しくてしかたないから。

なんだろう？

試合が終わってから、妙にいろんな奴に見られてる気がする。目立って活躍したのは僕と愛里以外の4人だから、僕達が足引っ張ってなきやもつとすごい試合になったかも？とか仲間以外からは思われてんのかな。

でも少し待つてほしい。

僕は精一杯やった上でボコボコだったからしかたないけど、愛里は本領が運動と全く噛み合っていないんだし、そっちは大目に見てくれ。

格好悪いところを見せたばかりなのに。その上、ちよつとした頼み事をしたというのに。まして助けられておいて。

休んでいた僕に笑顔を向けてくれる愛里を悪く思われたくない。

てか、今日はなんか周囲の視線を気にするどころじゃなくなるくらい愛里が可愛い。

なんというか、こう……嬉しき？　が目に見えて溢れんばかりの状態になってるっていうか？　いつになくそれを前面に押し出して、テンションが上がってる。

それが伝わってくるので、お互い疲労が目に見えるのに、思わず「ちよつと僕の部屋に行こうか」とか言いたくなる。もしも彼女ができたらしい夢を叶えたいくなる。

愛里が知らないとはいっても、流石に盗撮事件があったばかりでそんな真似はしないが。

でもその理性が残ってるとはいっても、この状態はマズい気がする。

誘うこと自体もそうだけど、勢いでエロいこと頼んだらOKしてくれそうに思える錯覚がマズすぎる。順当に断られた場合は勿論、万が一：億が一、本当に押し切れてしまったら、自分と『もう一人』が元

気になりすぎてしまう自信がある。

言葉に詰まりながらなのに楽しげなのがわかる愛里と話しながら、十代半ばの性衝動という制御が極めて困難な男の本能を僕は今更ながらに実感していた。

いやでも……そもそも愛里の上機嫌っぽい雰囲気はどうしてだ？

さつきは終始やられっぱなしで僕自身は負けを認めた発言をし、四方と前衛3人が一気に盛り返したわけだが。特に試合前半らへんでは、南雲や観客から笑われてくるくらい無様だったというのに……。

そう考えると、愛里のこれは優しさによる慰めか活躍できなかった者同士の共感、か？ 微妙に違和感あるけども。

しかし、こういう時こそ先輩や他の部員の出番だろうに、何故か少し離れた場所で雑談しつつ、僕達を微笑ましげに見て近寄ってこない。

早苗、愛里の分水嶺は多分これじゃないから、今こそお前の空気読めなさを遺憾なく発揮してくれ。いや、いつそ誰でもいいから——

「よう左京。お楽しみのところ悪いな」

誰でもいいとは思ったが、お前じゃない。

「去れ、リア充。」

僕は今、役得を感じつつも、変なことにならないよう考えるのに忙しい」

嗚呼。確かにどうするか少し困ってたけど、闖入者が現れたことで愛里が気配絶ちしてしまった。もはや今更どうしようもないだろう。

グッバイ。僕の甘酸っぱい青春イベント。

そしてこんにちは死ね。面倒事を予感させるトラブルメイカー。

「ククツ。わけのわからないことを……。勝利報酬はいらねえのか？」

「決めてもなかったし、元々何かを要求する気なんかはない。欲しい物もない。はじめとかつけたいって言うなら負けを認めた僕個人じゃなく、活躍した他の奴らに聞け」

「つくづく欲がねえなお前。もっと勝ち誇って煽り散らすと思ってた

ぜ」

「必要も功績もないのに、わざわざ煽るわけがない」

「つまり試合前と最中は、その必要があったってことか」

「当たり前。僕から注目が逸れるのをなるべく遅らせないと、盤面を整える前に狙いを分散されるからな。負けに巻き込むには気が引ける面子だったから、あいつら次第で試合には勝てるようにしておきたかった」

「……」

これだけだとどうも納得しきれてないみたいなので、話を終わらせる為にしかたなくあのやり方を採用した真の理由を明かす。

「あと単純にモテまくってる南雲がムカついた。それだけ」

「ふっはははは!! それが本音かよ!? くはっ…おまつ、お前!

直球にもほどがあんだろ! ムカついたって、それだけって…くっくっ、こんだけ素直でよくもまあ。はーはっはっは!」

モテ男の余裕か? 馬鹿笑いしやがって。だから言いたくなかつたんだよ、クソが。

とその時、笑いを収めて雰囲気を変えた南雲がチラリと僕の後ろへ視線を向けたので、遮るように顔を伏せた愛里の前に立つ。こんな男に眼鏡を外した状態の素顔を覚えられるなど、目立ちたくない愛里にとって是不幸でしかない。

僕? 目立つ・目立たない以前にどうでもいい。目立たない方が面倒事は少ないと思うが、本意じゃない友達の矢面に立つ役くらいならやってもいいかな、程度。

「そっちはお前の彼女か? 大事にしてやれよ」

「ほっとけ。関係がなんであれ大事にするのは確定してるっての。……っ。てか、なんのつもりか知らないけど、南雲が仕組んだ事は終わっただろ。もうあっち戻れよ」

南雲と話してる最中に、まさかの愛里から背中を触られてちよつとビクツとしたが、なんとか持ち直して取り繕う。

そしてこちらを見ている2年生の方を指す。話を優先したのか意外にも南雲には見逃された。

「ハッ。せっかく俺から報酬の件を詰めに来てやったつてのに、可愛げのねえことで」

「僕にそんなものを求めるな。それと何もいらんつて言ってるだろうが。これで借りは返したからな」

「借り？　なんのことだ？」

「わからないなら一之瀬か葛城にでも聞いてくれ。ぶつちやけ疲れてて詳しく話す気力がない」

「……まあ、お前がいらぬならそれでいいか。余分なモノがあると楽しめないしな」

でも、いつかなんかやってくるな、この野郎。

何をいつはともかく、コイツは今『何かを企んだ』。

今回は純粹に勘だけど、当たっている自信がある。

どうやら僕への関心を失せさせる策の方は失敗していたか。僕的に肝心な部分は、どちらかということだったのだが。

「またな、左京夢月」

「金輪際ご免だよ、南雲雅」

勿論、僕の本心は言葉通り。

あー、面倒くさい。また関わってくるつもりだよこれ。自分の属する場所の常識をそれ以外の場所でも通用すると思ってる奴は非常識だからいけない。

少しだけ早苗が清隆に抱く不信感を理解できた。僕が南雲に感じるのは、似て非なるモノではあるけども。

それにしても今日は疲れた。

早苗が抱きついた時、たまにはぎいてる愛里成分配合・アイリニウムを僕にも摂取させてくれないかなあ。水着から着替えた後でエロ抜きでいいから、今は心の安らぎが欲しい。

南雲の後ろ姿を確認して、ようやく気を抜けた僕は座り込みながらそう願った。

笑いを零しながら南雲が去っていくと、今度はB・Dクラスの奴らや野次馬が接近していたが、ゴーイング・マイ・ウェイを地でゆく部員達が軽く散らしてくれた。本当に疲れてるので助かる。

一応、あいつらの話し声は飛び飛びで聞こえていた。僕の奢りで飯に行くつもりだろう。

出来すぎた結果になったのは彼らの功績なので、その程度なら軽いものだ。明日は給料日だしな。

僕は、仲間だけになってから存在感を戻した愛里が差し出してきた手をなんとなく握って立ち上がり……なんか自然に握り返しちやつたけど、ラッシュガード着用とはいえ水着の女友達との身体的接触っていいね！ 不思議と警戒心が薄い時がある愛里に感謝感激である。

四方や高田寺とささつと着替え、プール入り口で待ちながら考えていたのは、そんな煩惱まみれな思考。当然、鋭い女性陣に察知されるわけにはいかないので、それを散らす為にも野郎共の話に混ざりにいく。

そして合流した僕達は記念撮影の後、鬼龍院先輩お勧めの食事処へ赴くことにするのだった。

5章、花道へと繋げる日常 96、クロ

僕が心底から嫌悪・忌避するブラックとはなにか？

情報を集めて僕なりに分析すると、ブラック企業というモノはバブル前とバブル崩壊後の2つに大別される。

ただ拘束時間や待遇など基本的な内容はだいたい同じだ。違うのは自分の意思と報われるかどうか。

簡単に言うと、バブル時代以前の日本企業は粗利の6割を賃金にしていた。らしい。僕の体験ではないのでなんだが、それでも数字が記録されているし『俺』の社員時代の先輩が定年退職する時にも言っていたのを覚えているので、大きく間違っていないだろう。

しかしバブル以降は、というか今は平均で粗利の2割程度になっている。これは中間搾取『など』が広く巧妙に横行するようになったからと思われる。

つまり労働生産性が低下したとか時々言われるのは、労働者が働かなくなったのではなく、働きに対して企業が賃金を払っていないという意味である。

何・故・か、報道される労働生産性は逆の意味で使われているのがほとんどなわけだが。

ちなみに、このOECD平均の3分の1な現代日本の労働生産性。そのままバブル以降の人件費比率に当てはめられる。

そりゃ払うもんを払ってもらえなければ、頑張る気なんて出るわけがない。バブル以前のように働いた労力に見合うだけ稼げるならまだしも、自分の意思もなく働かされて稼ぎも少ないのでは、バカバカしくもなるだろう。だから昔はよかったと言う人の一部は、仕事自体はキツくても、少なくとも給料分は報われていた経験がそう言わせるのだと思う。

ここから更に規模を大きくしてみれば『俺』が死ぬ少し前、財○省

の増税につぐ増税で毎年GDPの1割ずつを日銀資産に積み上げていくのを見て知っている。

今もいずれ表面化する予測が僕にもできるほど、同じ道を進んでいく。

このままなら、活用することもなく無駄に溜め込んだ金が、最後に見たGDPの約1.4倍になる日もきつと近いだろう。悪名高き大企業の内部留保も僕が社会人になる前に、GDPを超えるかもしれない。

そして、彼らはけして放出しないだろう。これまでの例からいっても、中間搾取と未来の為になる支出の阻止だけは断固として継続するという負の意味での信用が山盛りだ。

なんせ二度目の人生でも、大災害が起きてすら逆に復興増税とか前と同じ事をほざいたのだ。

また未来に起こるかもしれない話だが、某国で戦争が勃発した時に即決で6000億バラまいてやったのに、上記と違う国内の大災害が起きた時は散々渋って40億しか出さなかった。彼ら彼女らの発揮する国内へのケチさは尋常なものではない。一度、自分達の所属を聞いてみたいくらいである。

しかも、テロで非業の死を遂げる元首相のような拉致問題関連を提起したり、若い奴が宗教に騙されないように取り締まる法案を作ったりしていた……良くも悪くも、未来を感じさせてくれる政策を打ち出したりするまともな功績のある政治家が、前と比較してもかなり少ない。

そのくせ、「日本をぶっ壊す」とか「2位じゃ駄目なんですか？」とかのアレな政治屋だけは固有名詞が違うだけで存在した。

そして前と同じように（僕の中学時代までの記録を見た限りだが）、聞こえが良い言葉だけで本当に日本の良い部分ばかりをぶっ壊したり、技術者達が努力して開発した最先端技術を格安で売り渡して……十全に活用できないままほぼ無駄にしていたのだ。

他にも貴金属の「金」を利用した錬金術もある。

こうした金融取引の錬金術で有名なのは、幕末の日米修好通商条約

ででたらめな金・銀の交換レートを教えて、大量の銀と引き換えに多額の「金」をハリスなど外国勢が巻き上げたことだろうか。

これと似たようなことが現代日本にも存在している。

またもや財務○関連だが、通貨ではないとして貴金属の「金」に消費税をかけたことが原因だ。これにより、海外から「金」を持ち込んで換金すれば消費税のぶんだけ儲かる、という裏技染みた金融錬金術が誕生した。

しかもこれが国際問題になっても「金」にかける消費税を止めようとしないうけのわからなさ。

……海外のエリートや『まともな』人材が、中間まではともかく、この国の政府・官僚・企業の上層部はクレイジー、と相手にする者を厳選する理由が少しわかっただろうか。

このアレなお偉さんが根っこにいて、各所に見えるブラックさが僕は本気で大嫌いで忌避している。

20年後、いやもつと先になってもいい。冗談抜きで高円寺や鬼龍院先輩、清隆あたりが日本社会を背負って立つてほしい。あいつらなら『汚染』されなければ信頼できるし、場合によっては全面的に支持するのも吝かではない。

僕は勿論、四方や早苗、愛里は明らかに政財界やメディア向きの性質でも指向もないからなあ。

ともかく、これらのアレなお偉いさん達を知っていると、高円寺を筆頭とした天文部関係者の何人かは僕を除いて至極まっとうなエリートにしか見えない。学校の実験的なあれこれで染めようとしてくるなら、阻止してやろうと思うくらいには情も湧いている。

てか、日本社会を背負う人材の育成云々というなら、せめて妨害はしないでほしい。

だからというわけでもないが、旅行が終わって学校へ戻る車中で、未来のまともなエリートになる可能性が高い高円寺、そして一応は葛城と一之瀬もか。彼らの認識がどうなっているのか気になって、試しに遠回り気味に聞いてみた。わかっててそこに飛び込むなら、僕がしているのは余計なお世話だからだ。

2週間の旅行で、クラス単位はともかく、学年単位で最も手軽で簡単に親睦を深める公式イベントがなかったのは何故か、と。

思い当たるものがなかったのか葛城と一之瀬（まあこの時はあまり正常な状態じゃなかったが）は判別できなかったが、高円寺は即答してくれた。

「夢月が言う、同じ釜の飯を食う、というのはクラスを超えて横の繋がりを強化するからねえ。それはこの学校では不都合が多いのだよ」

当たり前のように、僕が濁した内容と理由を明らかにした高円寺。

2週間もあって、キャンプファイアーやレクリエーションどころか、学年全員で集まるだけでできる食事会・交流会などの公式イベントが存在しなかった事実。

小中で修学旅行や林間学校を経験しているなら、あるはずのものが無いと普通は不審に思ったはずだ。

特別試験と明言され、学校の特殊性やらなんやらと誤魔化してても、普段はほとんど交流のないクラスが違う同級生同士で仲良くなる機会すら作らないのは、教育機関としてどう考えてもおかしい。

特別試験じゃなくて特別『実験』なのかと思っただけだ。

この四方や椎名が旅行初日の船上で察していたこと。気づいて即座に諦めて切り替えたこと。

それは同級生に対し、競争心ではなく敵対心を煽る学校の気に入らないやり方だ。

無論、僕視点でも、典型的なブラック企業的手法「横の繋がりを極力作らせない」「限られた仲間・上司以外に相談させない」に該当する。黒以外のなものでもない。

いくつかわざと言葉を抜いてはいるが、学校が明確に意図してクラス内と他クラスを敵対させようとしていることを、やはり高円寺は『深く』理解している。その上で、自由に振る舞っているのだろう。

それを理解しているのに、僕に手を貸してくれたのは素直に嬉しかった。

この時点ですでにやれることはほぼ終わっていたけど、これにはせめて貸し借りをトントンにしたいと思わされた。清隆は少し特殊な

事情込みだけど、鬼龍院先輩も。

……うんまあ。そんな事を考えていたから、支払い用の天文部のカードをギリギリまで渡し忘れてしまっていたのだけでも。

自分を通し、約束したら守る、なんてのは僕には常識みたいなものだが、上記の非常識がまかり通る学校や世間一般はそうではない。だから、それに応えてくれるだけでも信用・信頼に値する。

それもあって、僕はこの自分が作った天文部を気に入っているのだろう。意味不明なイロモノが集ってくることなど、些細なこととして……。

南雲達2年生と天文部の面子で決闘ごっこした次の日、9月1日の夏休み明け。

学校からポイントが支給され、干支試験の報酬とともに約110万PPが振り込まれた。

そんな本来ならテンションの上がる給料日だというのに、僕と四方は筋肉痛に苦しんでいる。おそらく愛里も似たような状態だろう。

息も絶え絶えに午前を乗りきり、早苗に肩を借りてなんとか昼食を済ませた。

今日は昼から2時間ホームルームらしく助かったが、もしも体育とかなら見学するしかなかっただろう。

ああ、そうだ。この時に、律儀なことに松雄栄一郎君も挨拶と礼をしないと現れた。

第一印象は、僕達の間でこれまでいなかった（あえて近い奴をあげるなら平田か？）誠実っぽい好青年である。

そして真摯な礼をされ、部下としてなにをすればいいかと問われた。

だが、僕はこれまできつかけ作りと指示出ししかやってないし、働きは親父さんへ上乘せしてやってほしいと頼んだ。

実際、成した事はほとんど松雄の働きによる。それなのに、ただその時の社長が僕だっただけで息子に恩を着せるつもりはないと返しておいた。

そう返したのに、なんか妙に好意的で僕を立てる態度なままなのが落ち着かず、強引に流れを変えてそのまま世間話に移行していたら、結果的に栄一郎と呼ばせてもらうことになった。

親父さんと紛らわしかったってのもあるが、ほぼ初対面で名前呼びをOKするあたりコミュ強なのだろう。

ちなみに僕はどう呼んでくれてもいいと伝えたら、栄一郎からは「社長」固定になってしまった。

もう少し落ち着いたら、松雄に社長を譲ると伝達していたのだが伝わってないのだろうか？ はたまた伝わった上で、譲った後にまた呼び方が変わるのだろうか？ 律儀で思い込みが強そうな性格なだけに、どっちもありそうである。

まあ初対面でもわかる真面目な奴でもあるので、変なことにはしないだろう。少し恥ずかしいけど、好きにすればいいかと早々に諦めた。

また世間話で出たが栄一郎はCクラスに配属になったそうで、編入と同時に龍園から従えと言われて即座に断つたらしい。

ただ初日だったからか時間がなかったからか攻撃や喧嘩にまでは発展せず、まずは上司（僕のこと？）に挨拶や判断を仰ぎたいと乗り切ったようだ。

勿論、自分で判断しろ、僕に情報を流すとか筋違いな真似はするなと忠告しておいた。違うクラスになったとはいえ「息子を頼みます」みたいに松雄から言われておいて、スパイ染みた事をさせるのは不義理にもほどがある。

ただ一応の立場上、しばらくは部下であり、学校的には競争相手でもあるので、ここに馴染むまではある程度手を貸すのが無難だろう。

そうしたなんやかやがあり午後の時間ギリギリで席につくと、ちょうどBクラス担任の星之宮先生がやってきて説明を始めた。まだだ

いぶ先だが体育祭の件らしい。

どうでもいいが、愛里に頼んで天体観測のついでに集めていた文化祭展示用写真は無駄になった。薄々勘付いていたが説明を聞く限り、そもそも文化祭が存在しない。

まあ外部接触禁止が『一部』なくなつたといつても、ごく最近のこと。外部から客を招き入れるのはご法度だった上、元々開催していない行事をすぐにできるわけがない。実験的に段階を踏んで、少しずつ手を打っていくのだろう。

と、今は体育祭だった。

「資料の通り、私達Bクラスは白組だよ。今回の体育祭は全学年を2つの組に分ける方式を採用してるから、BクラスとCクラスが白組、AクラスとDクラスが赤組になってます。味方のクラスの子とはみんな仲良くしてね」

うちのクラスの味方といえるのはさっきの栄一郎や椎名、龍園のクラスか。

椎名と栄一郎はまだしも、龍園と仲良くとかジョークで言っているのだろうか？ 一之瀬はそれでも頑張るだろうが、向こうが受け入れるとはあまり思えない。足の引つ張り合いにならなければ御の字だろう。

「負けた時のペナルティーはかなり重いし、手を抜かないようにね」

さらりと担当が言ったペナルティー。

これはおそらく夏休み中の特別試験、その大盤振る舞いの露骨な調整だ。やけにCPもPPも入手機会があつて不思議だったが、ほぼマイナスしかない調整行事が控えているのなら、飴と鞭の考え的に鞭も用意しておくのが自然だと思に至る。

ちなみに配られたプリントに書かれている要点はこんな感じ。

紅白の負けた組にマイナス100CP。勝った組は変動なし。

学年別でも1位が50CPを得られるだけで、2位からは0CP、3位はマイナス50CP、4位はマイナス100CPというように、50ずつマイナスが増加される。

つまりCPを得られる結果は、自クラスが所属する組が勝った上で

学年1位のクラス成績を取らなくてはならない。

他の説明は一之瀬や神崎、柴田などが質疑応答してたのを聞いていて把握した。

だいたい上位入賞すればちよつとした報酬、PP入手か定期テストでの加点。最下位はPP罰金かテストでの減点。

そして所属する組には競技ごとの得点が入る。

あとはMVP：最優秀と学年別最優秀3人が選ばれることくらいか。

その中で多少は気になったマイナス要素は、最下位の生徒10名が次の筆記試験で10点の減点を受けるというもの。

ただ知り合いには愛里や椎名などの運動を苦手とする者はいても、10点程度で危機に陥るような者はいない。担任にもどのような形になるかは答えられないらしく、多少は気になったがあくまで多少止まりだ。

「それと1年生にはあまり関係ないと思うけど、紅白の組の総大将をそれぞれ選出します。勝った組の総大将には特別報酬100万PPと所属クラスに50CP、負けた組の総大将には同じだけのマイナスが付与されます。総大将の選出は、体育祭開催の1週間前に投票、3日前に集計して通知形式になっているから、それまでに誰か考えておいてね」

担任も言うように、このいかにも取ってつけたような追加ルールは僕には関係ないだろう。

多分、ホームルーム後半の全校集会で、仮のまとめ役をする3年生か生徒会役員あたりが選ばれるはずだ。学年を超えた繋がり自体が基本ないので、そもそも選択肢がない。

僕は南雲……か会長の名前に決めようとしたけど、彼らはAクラスで赤組か。この後に全校集会があるらしいので、見聞きした上級生の名前でも書いて押し付ける未来を予定しとこう。

また競技のスケジュールについては……う、僕には結構ハードそう。

プリントに記載されているのは、合計11種目。全員が参加しなけ

ればならない種目だけで、性別限定種目も含めて6種目もある。

午前。

- ① 100メートル走（全）
- ② ハードル競争（全）
- ③ 棒倒し（男子）
- ④ 玉入れ（女子）
- ⑤ 綱引き（全）
- ⑥ 障害物競争（全）
- ⑦ 3学年混合選抜騎馬戦
午後。

- ⑧ 借り物競走
- ⑨ 四方綱引き
- ⑩ 男女混合二人三脚（全）
- ⑪ 3学年合同1200メートルリレー

しかも純粋な身体能力を競う競技がほとんどで、運でもなんとかできそうな借り物競走は全員参加じゃない。特に午前のプログラムは最後の騎馬戦以外、全員参加の競技が連続していて僕でもかなりキツそう。まして愛里や椎名には地獄のラインナップである。

「それからここにある参加表には全種目の詳細が書いてあるんだけど、君達が全部決めて記入した上で、担任の私まで提出してね。ここまで生徒に全部をやってももう形式は他ではほとんど見ないと思うから気をつけて」

「全部、ですか？」

聞かないでくれ神崎。詳しく聞くほど、一之瀬の話し合いへのモチベーションが上がってしまう。

まだ体育祭本番までは結構あるんだし、それまでは適当でいいじゃん。

「うん、全部。競技の出場順や選抜競技の選出なんかだね。詳しくは参加表にあるから、後でよく読んでおいてね。」

あつ、それと提出期限は体育祭1週間前から前日17時。遅れちゃうと、ランダムで割り振られるし、受理されたら変更も『簡単には』で

きないからホントに気をつけてね！」

ほら。1ヶ月くらい先の話だ。

体育っぽい授業が増えるってだけでも面倒なのに、話し合いで体力測定的なのをやるうってなあって、その結果を基にまた話し合いを何回もやって、堅実に詰めていきましようってなるのが目に見える。

面倒くさすぎる。

「あの、星之宮先生。受理された参加表は変更できないって、体調不良になった場合は……」

「基本的に個人競技は失格、団体競技は失格になった生徒と組んでる生徒全員が失格だね」

「き、厳しい」

続いている説明を聞きながら、隣の席から小さな呟きが聞こえた。

だが、無理をさせてまで出場させるよりはいくらかマシだろう。

実際に『俺』が言われた言葉で、熱が40度を超えようが腕がもげようが出勤しろというのがあった。

元気な通常時だったら、現実はずんびゲーじゃないんだよと返したいところであるが、惜しむらくは大抵それを言われる場合は意識朦朧かそれに準じる極限状態である。常に体力ゲージ黄色以上にならない社畜の悲しき現実は、たやすくそれを呑み込むものだ。

……筋肉痛の影響か今日は変な方向に思考がずれるな。

「ただ全員参加じゃない借り物競争、騎馬戦、四方綱引き、リレーは一応救済措置もあるよ。参加表を覆す代償に1回につき10万PPが必要だけどね」

誰が払うか。普通に欠場でいいだろ。ペナルティも他がフオロとしてやればいいじゃん。なんだそのブラック理論。と言いたいところだが、クラス競争に真面目な奴ほど代役を立てたがるかもしれない。クラスの為、とか言つて。

「だから私も保健医の立場から気を配るけど、自己管理はしっかりだね。どんな状態でも頑張らなくちゃいけない時は、社会に出ると必要になってくることも多いから」

僕としては、そんな状態の生徒を自己管理や自己責任など冷たい論

理のもとに頑張らせるなど言いたいが……。

それはそうと。

二日酔いで末期のアル中みたくなくても、多少遅刻しても、朝には教壇に立つ担任がこれを言うと言説力があるな。流石、時たま一之瀬や網倉に介抱されながらホームルームとかをやってるアレな大人はひと味違う。

「他に質問がある子は……左京君」

「へあ!? な、なんですか?」

ビビった。

考え事をしているのをボーツとしていたと取られたのか、担任から名指しされた。

「ちゃんと私のお話、聞いてた?」

「聞いてました。アレですよ。二日酔いでツラくても自己責任だから、やることやらなきゃ駄目だよってことですよ」

「……ホント、君は独特な解釈をするね」

うつわ、真つ黒お。とか口から出なくてよかった。

ちようど二日酔い状態の担任の事を考えてたおかげだ。反射で返したから、もう少し早く聞かれてたらヤバかった。

「質問がないようなら、あとは伝達事項なんだけど」

こういう時は、後ろの方の席で助かる。

一之瀬や神崎、柴田も前に固まってるし、クラスの中心から物理的な距離が離れてるこの席はなかなかの良ポジだ。担任の追及もすぐ止まる。

僕は安心して、プリントにあつた全校集会がこれから行われること。それと、それまで自由時間と言っている担任から目を逸らした。

質疑応答で時間を使ったせい全校集会まであまり時間がないというところで、クラス会議は持ち越しになった。ちようどいいので、直帰の流れを想定しておく。

そして四方と…何故か一之瀬と担任が寄越してくる視線を気にしつつ、僕は2通のメールを送る。駄目なら別にいいが、ついでと念の為である。

だから片方の返答は当然YESだ。

総勢400名ほどが集まった体育館は、室温は調整されているはずなのにひどく暑くて息苦しい。

しかし話を聞いておかないと困ることもあるので、いつぞやのようにポツカリと空いている早苗のスペースを間借りしつつ、我慢して拝聴する。

今回は四方も神崎に肩を借りてていないから静かなものだ。ゆっくりと聞きたいことが聞けた。

赤組の総指揮は3年Aクラス藤巻で、白組は3年Bクラス板倉、と。それぞれの組の総指揮を採るのは彼らなようである。

総大将と何が違うのかわからないが、決定されるまで借り置きした繋ぎなものだろうか？

てか、どうでもいいから、その名前だけ覚えたら一刻も早くここから脱出したい。筋肉痛と暑苦しき、人混みのトリプルパンチでもはや限界。

「話し合いするつもりはないってことかな？」

意識を出口に集中しタイミングを凶っていると、珍しく一之瀬が誰かに食って掛かっていた。

いや、最近は結構僕とかにもあなったりしてるから珍しくはないのか。そう考えると、特定条件下ではそれほど聖人ってわけでもないのかもしれない。年齢的にある意味当然だが。

勿論、今の僕にそれを気にする余裕はなく、注目が集まって道が空いたのを好機とばかりに、一目散に早苗と体育館の出口へ向かった。

「こっちは善意で去ろ——おい。俺達より早く去ろうとしてやがる奴がいるぞ？ 見てみろ」

「はあ？ そんな奴いるわけ——つて、左京じゃねえか!？」

「しかも東風谷さんまで！」

「お前らのクラスの奴から先に去ったんだ。もう話し合いする必要はねえだろ。どうせ腹の探り合いになるだけだろうしな」

「ああ、あの二人はまた……」

なんか柴田や網倉さんに僕の名前を出されてるが聞こえないふり。対峙してる龍園を放つてまで僕らの方には来ないだろう。

それよりも息苦しさに加えて、こっちに視線を送る南雲と坂柳さんを捉えている。一之瀬達から後で怒られてでも早く逃げないと、面倒事が這い寄ってくるのは確実だ。

ゆえに、龍園が一之瀬達を引き付けてくれてるうちに消えるのが吉である。サンキュー、ドラゴンボーイ。

「ねえ、龍園君。こういう『試験』で協力なしで勝つ自信があるの？」
「さあな。だが、あの野郎は『体育祭』で何かを狙ってやがる。ククツ、それには協力なんていらねえかもしれないねえぜ？」

クラスのことはいりーダーモードになった一之瀬がなんとかしてくれるはず。

閉まっていた扉を開け放ち、僕は早苗とともに外へと飛び出した。「親切で忠告してやるが、今回は俺達よりあの野郎を繋ぎ止める方法を考えた方がいいぞ。でないとお前ら甘ちゃんどもは、いつか足をすくわれ——」

だから僕に聞こえていたのはそこまでだった。

体育館から出ると、熱風に出迎えられてそれどころではなくなったというのもある。

まあ暑さは一瞬だけのことで、肩を貸してもらっていた早苗から？生じているとおぼしき涼しい空気によって、だいぶマシになったが。こういう天然か神様の快適な恩恵っぽいモノを感じる時、少しだけチートが欲しくなるのは内緒である。

97、協力

「カエルって可愛いよな。特に目が良い」

《お、わかっているねえ！ 目の付け所がいいよ》

「あの透き通った丸い目って、見てると純粹さに心が洗われる気分になるといふか。あつ、それで思い出したけど、洩矢様が被ってる帽子に付いてるのって『生きてるカエルの目』だよな？ あれ、気になっちゃってさ」

《おおっ！ 前に私の帽子をまじまじ見たのはそういう理由だったのか。人の子としては珍しいんじゃない？ 不可思議よりカエルかどうか気にするなんて》

「いや、結構カエル好きって思うぞ。都会っ子には厳しいかもだけど」

《へえ。昔だと見向きもされないことも多かったのにな》
早苗の肩を借りて訪れた守矢の分社、その境内にある池のほとりにて。

小用で早苗が席を外してる際に現れた神様と僕は、カエル談義をしていた。談義というか、双方言いたいこと言ってるだけだけでも。

一応、すぐナニモノかは察することができたので最初こそ敬語を使ったのだが、名前を教えられた時に普段のままが良いと言われ、それならいいかと畏れだけは残しつつ普段通りの態度にしたのだ。

勿論、鳥居と湖の絵（あれは諏訪湖らしい）と無人島での御礼は、僕なりにきちんとした。これほどの畏れを感じる神様。けして荒御魂を刺激してはいけない。

ただ、なんというか少し会話しただけでわかるほど、掴み所のない神様でもある。和御魂との境が酷く曖昧で、見た目に反してとてつもない清濁を併せ持っている存在。

まあ、最低限の作法さえ守れば大丈夫だろうとは思うが。

「……なんで普通に会話してるんですか。諏訪子様、夢月さん」

洩矢様と話していると、戻って来た早苗は呆れた風にそう言った。

呆れた『風』であつて、何気に嬉しさを隠せていない。余程、神様
：洩矢様を好いているのだろう。こういう部分は素直に微笑ましい
ものである。

《だつて私も前に会つてるし、今更畏まるもんでもないでしょ》
「僕は畏まつてはいるつもりなんだけど……」

《それにお土産にお酒も貰つちやつたしく？》
「はあ。神奈子様と仲良く分けてくださいね。奉納をちゃんと偶数本
にしてくれたんですから」

《あははっ！ わかつてるつて。じゃあ、またね。早苗、夢月》
仲良さげに話す一人と一柱から僕は自然にスルーされた。

そして洩矢様は、そのまま地中に沈むように消えていった。

消える直前に名前こそ呼ばれたが、流石は早苗の神様である。船で
会つた神様もそうだったが、マイペースこの上ない。

これは、早苗が戻ってくるまで僕に付き合つてくれてたつてことか
？ それとも……。

僕達は少しの間、洩矢様が消えていった地面を眺めていたが、早苗
がここに来た理由を聞いてきた。

「さ、切り替えましょう。これから桔梗さんが来るんですよ？」

「ああ、そうだった。協力がどうかつてことと早苗に伝えといてつ
てメールが来ててな」

おかげで、元々の用事を思い出した。

ゲーム後に脅された後はなにも音沙汰なしだったのに、今日になつ
て連絡が来たのだ。

「協力……夢月さんもするんですか？」

「も、つて早苗もかよ。早苗が知つてるなら、なんで僕に伝言頼んだん
だ、あいつ」

早苗に僕を連れてくるように言う方が確実じゃないか。

と、その疑問に答えるタイミングで待ち人が現れた。

「そりゃあBクラスを動かせるのは、一之瀬さん以外だと私が弱みを
握つた左京君だけだからじゃない。前にパレットと交渉した時に

言ってたけど、主要人物にアポを取るのは当然なんですよ？ 一之瀬さんには……ちよつと言えないことだしね」

「櫛田……早いな。てか、僕はクラスを動かすなんてできないぞ」

「桔梗さんが言う夢月さんの弱みって、口約束だけなような……？」

「桔梗さんのそれで大丈夫なんですか？」

「わかってるわよ。こんなの普通なら信じないけど、左京君は……ねえ？」

「あはは。まあ、夢月さんって口に出したことは割ととんでもないことでも守りますし、実際に実行さえしてますからねえ」

そして、またこつちでもスルーされた。

クラスを動かせるとか過大評価も良いところなんだけど。できて、せいぜい個別に数人くらいが限界だと思う。

「それで話を戻すけど、本当に直近の協力はしてくれるの？」

「直近……体育祭か？ そこでなんかやるってこと？」

「なんでも堀北さんを活躍させたくないみたいですよ。このままだと、クラスの主導権が握られかねないとか」

協力内容を聞いていたのか早苗が教えてくれたが、あの堀北さんが？ ちよつと意外だ。

「……マジで？ 堀北さんって、傍らに人は無きが若しを地でいく傍若無人じゃなかったの？ どう見てもリーダータイプじゃなかったんだけども」

「Aクラスに昇格する為にしかたなく、らしいわよ。1学期や無人島での功績もあつて学年内での株も上がってるし、平田君や軽井沢さん、綾小路君とも協力関係を結んだみたいね。……忌々しいことに私を除外した上でね」

ん？ それってほとんど清隆の功績じゃ……ああ。いつもの珍妙なムーブで、堀北さんが活躍したように見せてるんだったか。清隆のこれまでから考えると、堀北さんを道具や隠れ蓑として利用してる対価に、多少の手助けはしてる感じなのかな。

僕の見るところ、アイツは堀北さんを友達寄りには見てるものの、明確に同格と……友達とは思ってない気がする。

「桔梗さんを除外？ これまでの功績もある縁の下の力持ちをリーダーの集まりに引き入れないって、どういう理由なんです？」

「知らないわよ。ただ四人で集まって話し合ってたから、堀北の意見を取り入れたとかなんじやない？」

「……嫌い合ってますねえ」

それに加えて、なにかの要因で誰かにも疑われてるとかなんじやなかろうか。でないと、外す理由には弱い。

というか、僕としては堀北さんだけが活躍したみたいになってるのも違和感。

それを言うなら、干支試験では櫛田がポイントゲッターだったし、普段からクラス内を調整するバランス師だぞ。それを嫌いなんて理由で外し、他にも許容させるか普通。

なんだ、この不自然…とまでいかなくても変な流れ。清隆、あるいは平田か軽井沢さんがなんかしてるにしても、妙に堀北さんが持ち上げられてるような……。

許容・誘導してるのが清隆なら狙いは……じゃなく、もしかしたら清隆も誰かの都合で動かざるをえない状態？

アイツもアイツで、天才である疑いはないし、人や状況を操ったりは得意でも、他を信じたり頼ったりを基本しないからなあ。多分、僕や四方も完全に信用されているわけじゃない。だから何らかのリスク？ 弱味？ の可能性が僅かでもあったら、念の為に自分だけで動くかもしれない。

相変わらず面倒くさくてよくわからない清隆の平穩基準である。

まあなんにしろ、今は櫛田か。

こんな本来の櫛田ならクラス内で話し合ってるだろう状況で、僕や早苗と話に来ている時点で、自分の軽い扱いに内心かなりキていると思われる。

世渡り上手な櫛田ならまずないだろうが、新しいイベント告知の直後にここに集まってる事が知られたら、新たにスパイ疑惑をかけられてもおかしくないからだ。

「……………それで二人共……改めて頼むけど、私に協力してくれる?」
そんな櫛田はそれなりの沈黙を経て、改めて頼み事をしてきた。

具体的に何かははまだ予想できないが――。

「私の頼みも協力してくれるならいいですよ」

「念を押さなくとも協力するって言っただろ。何かはわからんけど、友達を物理・社会的問わず抹殺しろとか無茶言われないうり約束は守る」

これはきつと櫛田にとって、相当な勇気を振り絞った申し出だろうと察することができた。それなら真面目に答えるのが、悪友であり友達というものである。冗談めかしたけども。

「友達……? 左京君にとって堀北は友達?」

「は? なんで堀北……って、話の流れからすると妹の方か。だったら友達じゃないけど」

「生徒会長は友達だと思ってるの?」

「まあ一応」

だが櫛田は予想外の部分に突っかかり、矢継ぎ早に詰め寄せられた。なにかわからなくて困惑しつつ返していると、早苗のフォローが入った。

「桔梗さん。夢月さんがこう言っている以上、大丈夫ですよ。適当に聞こえるかもしれませんが、夢月さんの一線は確実に超えてません」
その早苗の言葉がどう聞こえたのか、櫛田は再び躊躇するように少しの間の沈黙を挟んで口を開く。

「……………堀北鈴音の退学。それが私の目的、って言ったらどうする?」

「え、頑張ってる?」

「誰が応援しろと言ったあ!!?」

「ぶふっ! すごい反応速度のツツコミ。そして夢月さんの反応が軽すぎる」

あ、これは本当に本音だな。

ストレートに本命をぶちこんで来るとは考えてなかったから、つい面倒を回避しようとする癖が発動してしまった。

それでもまだ軌道修正はできるだろうし、疑問に思った事もあるの
で聞いておこう。

「てか、その反応的に、マジでこの目的に協力しろって？ 無理とは言
わないが、あんまり意味がないんじゃない？」

「意味が、ない…………？」

「どういう事です？」

まあ、僕はまだしも早苗に話を持ってきていたあたりで、排除を視
野に入れた誰かへの攻撃だとは思ってたが。

その対象が堀北さんってのも、考えてみれば納得だ。あんだけ愚痴
をこぼしてて実は大好きだったら、櫛田の頭を疑わなくてはならな
い。

それはそれとして、普段と比べて視野狭窄っぽいのが微妙に気にな
るので、軽く指摘してみるか。

「いや、だってさ。よく知らないから憶測混じりだけど。

櫛田の性格と目的、状況を整理していくと、何らかの理由で堀北さ
んがいるデメリットが大きいからそうなってるんだろ？」

「そう、ね。嫌いだったのもあるけど」

「でも、それって櫛田の才能と努力をそんな風に注ぎ込んでまで達成
する価値があるか？ どっちかって言うのと平伏させて、抑え込む方が
櫛田の性質に合ってる気がするんだが」

うくん。堀北さん関係は僕の印象的には陰口になっちゃうから
言葉を選ぶつもりだったけど、櫛田は彼女を嫌いすぎてむしろ囚われ
てる感じがする。

ちよつともつたないし、ここは正直な感想で冷静さを取り戻すの
が良さそう。

「抑え込む…………で、でも堀北は学力や運動、ぐ…じ、実力が」

「いくら堀北さんの基本性能が高かろうが、何をしようが、何を言おう
が、情報戦で圧倒するのは櫛田の十八番だろう。それとも堀北さん
に、櫛田を上回るコミュニケーションや根回しの能力があったり？」
「それは…それだけはない！」

「つまり見方を変えると、学業成績以外は視野が狭いコミュ障じゃん」

「……っ」

はつきり言つて、嫌い合つている？櫛田に真正面から当たつたら勝算が低いという情報を落としてるのだから、情報戦では敵にもならないレベルだと断言できる。馬鹿正直に真正面から当たらなければ良いだけのことだからだ。

更に学校の個人成績と付随する知性、あと容姿こそ上位クラスみただが、それだけでは一時的にしか人は付いてこない。清隆が付いてるっぽい不確定要素はあつても、櫛田が同じ土俵に上がらなければ放つといっても問題にならないだろう。

ましてその時に——だったら尚更だ。

「で、櫛田はそんなコミュニケーション障が、いずれ成長とか覚醒とかして『櫛田の舞台』で自分を脅かすようになるかと本気で思つてると？」

「思つてるわけないでしょ!! 勉強や運動で少し劣つても、あんな無駄に偉そうで嫌な奴なんかが言うことよりも、私が言うことを信じさせるわ……よ」

なんだ。やっぱり自分でわかつてるじゃないか。

妙に張り詰めてたから、きつと判断力が狂つてたんだな。

「だろ?・なら焦るな。櫛田が今現在努力して大事にしてる風評を落とす真似をするまでもない。単純に堀北さんがそのデメリットとやらを使おうとした時に、逆に笑つてやればいい。周囲の信頼度に大差があれば、真偽がどうだったとしても勝手に心折れるようにさえできるはずだ」

堀北さん自体は割とどうでもいいが、自分のクラスの有力な優等生?を退学させるデメリットは櫛田が思うより重くのし掛かるだろう。

船で見た堀北さんの体調不良を心配していた須藤や、自分の道具を手入れするような目を向けていた清隆。僕が知るだけでも、この二人からは敵対を覚悟しなければならぬし、他の印象も悪化する確率が高い。そこまでいかなくとも難しい舵取りを迫られてしまう。

それなら櫛田の資質を存分に活かした罠と逆撃コンボで迎え撃つ方がアドを取れる。

焦らず機会を狙い澄ませば、性能差があろうと格付け完了させるの

も難しくはない。ついでに開き直って「私を敵にまわすなら、クラスごと潰すわよ？」みたいな感じで締めれば、猫かぶりバージョンとの対比も相まって、面食らった奴らのいくらかは櫛田の味方となるだろう。

「僕流の情報戦の基本、ウサギとカメだ。自分の能力や評判は日頃から上げつつ、リスク少なく相手の信用を落とす機会は見逃さずコツコツ失敗させる。排除…あー、この場合は退学か。退学は利用価値がなくなってるからな」

「…友達のをそんなところへ追いやろうなんて、左京君『も』悪い人だねっ」

「も、って櫛田も自覚あるじゃないか。こういうのは使い方次第なんだよ」

「あははっ。まあ、ね」

自分で実践したことはないが、これは社会人時代に『俺』が受けた嫌がらせ経験の基本と応用だ。

これを権力者や人気者にやられると対処が難しくなり、その間に実行者はどんどん上へと登っていく。そうなれば、ほぼ詰みだ。

「うっわあ。夢月さんも桔梗さんも、相変わらずイイ性格してますよねえ…：：：本当、うっわあですよ」

早苗は笑って引いたフリしてるが、普通の高校生には受け入れにくいだろう。それに人も選ぶだろうが、櫛田なら問題ない。

なぜなら、言うは易く行うは難しの典型でもあるけど、僕が見るところ櫛田はこれを成立させる類まれな資質がある。

また努力と忍耐に関しても、まさに指折りの人材だろう。

ま、この学校の性質から考えて、余程じゃないと堀北さんの利用価値がなくなるとは思えないけどな。なんか変な感じに思い込んで櫛田には言えないが。

女の思い込みは一生モノというし、櫛田も例外ではないのだろう。

多分意味はないけど、普段の猫かぶりに戻って早苗と同類の笑みを浮かべる櫛田を見て、内心そう思った。

98、目的

「で、早苗は櫛田に何を協力してもらおうんだ？」

櫛田の話はひと段落着いたし、いくつかの目的の為に予想はできるけど早苗にも話を振っておく。コイツの考え次第では、話の方向性を慎重に選ばないといけないからだ。

「私ですか？ 私は守矢教に夢月さんを入信させる手伝いを頼むつもりでした。だから夢月さんが素直に入信してくれたら、手間がはぶけますね」

「本人の前では、そういうのは少しくらい隠してくれ。てか、何度も入らないって言ってるだろ」

やっぱり勧誘関係かよ。

予想に違わないけど、違ってほしかった。

「そんなこと言わずに、ちよつとだけ…先っぽだけでいいですから」

「それは男の台詞なんだよ！ しかも下ネタ系のな！」

「こんなに誘ってるんだから、もう左京君も入ってあげればいいじゃない。何が不満なのよ」

「面倒」

むしろ、これ以外の理由を言うのも面倒になってきたまである。

「面倒って、あんたねえ」

「これですよ。夢月さんがいつも面倒くさがって逃げるから、私を超絶面倒くさくしてるんです。責任取ってください」

「ヤリ〇ク野郎の次はメンヘラかよ。引き出し多いな、早苗」

「……それをすぐわかつちやう左京君も同類だと思うな」

笑みが生暖かくなってきた櫛田に本腰入れられると面倒では済まなくなるので、ちよつと強引だけど少し前から考えてた逆勧誘に変換してしまおう。こっちでも判断する材料は入手できるだろう。

本人には突然かもだが、櫛田の資質にはもう一つ適正があるしな。

「あ、話を変えるけど櫛田。さっきの協力は約束するから、できたら僕の提案も聞いてほしいなって。……エロいことじゃないぞ？」

「え？ なに？ 今更、左京君がそんな頼みをするとは思わないから、聞くだけ聞いてあげる」

「お、おう。ありがとう。で、あー、その…だな。」

櫛田、アイドルに挑戦してみないか？」

アイドルという職業である。

微妙に僕も信用されてるっぽいのが少し意外でもってしまい、ただでさえ怪しい話なのに更に怪しく聞こえただろうことが難点だ。

愛里への借りをそれなりに返せて、櫛田の言う協力にもなる妙案だと思っただけ、唐突すぎたかも。まあ、話を早くしておくに越したことはないだろう。

「えっ！ それってまさか」

「…あんだ、本気？」

「もちろん本気。早苗は気づいたか？ 最近思いついたけど、性格的に櫛田ほどアイドルに向いてる奴って居ないんだわ。あと本職が神道系だからあまり関係ないけど、早苗が次点かな」

「それじゃあ愛里さんは…」

「どうしてそこで佐倉さん？」

「ああ、悪い。察したかもしれないけど、愛里に関しては本人と話すまで伏せさせて。ただ、もし櫛田が承諾してくれたら、カメラマンは愛里になるとだけ覚えといて。腕は確かだと言っておく」

話しておくのが礼儀だろうが、呼び出しが急だったので、愛里には匂わせくらいで根回しが完全に済んでいない。しかしまだ早苗が口を滑らせただけで、櫛田の性格も計算に入れると修正は利く。

「あ、あぁー！ あの時集合写真つてもしかして」

「ふっ。高円寺が認めるレベルだ。箔付けにはもってこいだろう？」

「今度は高円寺君…？」

ただ当然のことながら、アイドルという表舞台じゃなく、裏方系の仕事かしたいという愛里本人の確認は取っている。

尤も、愛里がグラビアアイドルを辞めるとかではなく、あくまで将来的な夢らしい。船でフォロワーが激増したことを知ったタイミンで、嬉しさよりも困惑っぽい感情を大きく出していたのが不思議で

聞いてみたのである。

すると、できれば将来はカメラを扱う方面でやっていきたい、と返ってきた。

だからそれを見越して、旅行途中から高円寺には厳し目の採点も頼んでいて、愛里の天体や風景の写真を見てもらった上で及第点に達したと聞いている。今は正規の勉強が不可能な状況なので、良いモノを見分ける目を持つ高円寺の及第点は指標になるだろう。

また仕上げにプール後の記念撮影で認める言質を引き出せ、鬼龍院先輩からお褒めの言葉をもらっていた。

余談だが、プールに僕達全員を呼び込んでこの機会を確定させてくれた南雲への借りは、勝利報酬を求めない形ですでに返している。

あの時は疲れてて一之瀬や葛城に説明を投げたが、二人なら僕が小さな借りでも返すことに拘っているとわかっていいるから、細かい部分以外は説明できるはずだ。

「……夢月さん。私には干渉するなって言った癖に」

「うはははっ！ どうなつても良いように準備することにかけては、まだまだ小娘共より上のような。策とはこう打つのだよ早苗君？」

「小娘て……」

「……すっごい調子乗ってる。左京君って人生楽しそうだよね」

ともあれ、この愛里の技術とセンスに加えて、櫛田という素材。更には、あわよくば高円寺・鬼龍院の2財閥から後援すら得られる可能性もあるかもしれない。

あそこはかなり特殊な業界ゆえに、しっかりしたバックと逞しい処世術が必須なのだ。そして現時点でも、現役アイドルの愛里以上にほとんどの条件が揃ってる櫛田。

これは愛里のカメラマンとしての実績作りと、櫛田の承認欲求を満たしつつ目的達成を両立させる奇跡的なWINWIN関係なのではなからうか？

クラスも同じだし、もはや天の采配にも思えてきた。

そして櫛田がそんな背景を僅かでも使いこなすことができたなら、たかが学校の1クラスで上位程度の堀北さんなど羽虫同然である。

なんだそれは！ ゴミのような言い分だ！ ハハハハッ！ とか堀北さんを笑うことさえやり方次第では可能だろう。

まあ流石に、こんな怪しい話をすぐに受けないだろうが。

だからせめて僕が心から楽しんでる様を見せつけておいた。挑戦したいと櫛田が僅かでも思ってくれれば儲けものである。

と、あえて懸念を考えないように話していたら。

「でもさ。その話に乗る余裕が今の私にはないのよね。だから、今回だけは堀北潰しに協力して……くれないかな？」

「え、でもさっきの話からすると、それは止めておいた方がいいんじゃない？」

「だから元々こつちを先に言おうと思ってたんだだけだ」

「そういうことだったのか！ ようやく合点がいった！」

再度の協力、それに余裕がないという言葉で、思わぬところが繋がってきた。

更には早苗の考えも確信できた。

やはり根は悪い奴ではなく、僕にも近い。それがなんとなく嬉しかった。

「夢月さん？」

「びつくりした。いきなり大声出さないでよ」

でも、ともかく今はぶっこみの時間だな。

「——龍園だな」

「は？ なんて椎名さんのクラス……でしたっけ？ あの長髪の人が出てくるんです？」

「……馬鹿と有能の間で反復横跳びしないで、左京君。せっかく最近、馬鹿なんじゃないこの人、って思えてきたところだったのに今日で台無し」

疑問符を浮かべる早苗と呆れたような櫛田だが、考えてみれば堀北さんよりも櫛田の方が材料が揃っている。狙われないわけがない。

「失敬な。僕は有能に決まってるだろ。凡人だけど」

「はいはい、凡人凡人。」

で、何に合点がいったんですか?」

「櫛田の方は干支試験の結果と：ガチャや無人島でのこともちよつとは影響してるかな。アレらが現状に繋がってるってこと」

「もつとわかりやすく言ってください。夢月さんは、ただでさえ意味不明なんですから」

お前が言うなよ、意味不明代表。

「端的に言うと、櫛田は龍園のターゲットに選ばれたってことだ。それと多分堀北さんもな」

「どうしてそうなるんですか」

先にうちかAクラスを落とすかと考えてたけど、慎重なのか体育祭はうちが形式上の仲間になったからなのか、龍園はまず『潰せる』ところに仕掛ける事にしたようだ。

しかも、ちようどいいターゲットも目星が付いている。

「龍園の視点で考えてみる。」

2つの特別試験、自分の一人勝ちかBクラスを利用して万々歳。と思つて蓋を開けてみたら、無人島では嵌められそうになり、干支試験では指名を取り合う羽目になっている。原因の首謀者と思われるのは、『僕達』を除けばどっちもDクラスの奴だ」

「それって」

「そう。無人島では堀北さんらしいし、干支試験では櫛田だな」

「……っ」

正直、無人島に関しては清隆だと僕達は確信してるが、風評では何故か堀北さんということになってるので、龍園が目を付けるとすれば、おそらくまずは堀北さんだろう。尤も、彼女の裏にいる存在には気づいてそうだけでも。

「あれ? ちよつと待つてください。だとすると、桔梗さんが狙われたのは船で二三矢さんが見つけた法則を横流しした夢月さんも原因の一つ?」

「うむ。そうとも言う」

「なにシレッツと言ってるんですか。マッチポンプスレスレですよこれ」

「人聞きが悪い。櫛田はあの時点ですでに龍園と接触してたから、どのみち目は付けられてたさ」

「ですけどー!」

「ああ。そういう考え方もできるんだ。……早苗、あれがなかったらもつと足元見られてたかもだし、結果的に良かったとは思うわよ」

「それならいいんですが、なんかモヤモヤしますねえ」

笑顔を浮かべつつも、微妙に不自然ではあるが上手い『サポート』だ、早苗。コイツとはそれなりに考えが一致しているのだろう。この調子なら話を締められる。

そう考えながら、僕は龍園に話を戻した。

「ともあれ、この情報を得て攻撃的なアイツならどうする？ Aやうち、僕達の前に、どっちかは…いやいや、アイツならどっちも潰しておこうとするはずだ。だけど現実的なプランを考えれば、解はまた異なってくる。」

その結果起こる事態はというと、干支試験でアイツと交渉していた櫛田になら『次の機会』を作る可能性がある。両方いつぺんに潰そうとすると、二兎を追う者は一兎をも得ずになりかねないからな。上辺だけでも窓口がある櫛田は、とりあえず利用する方向で考えておくだろう」

また確信まではいかないので言えないが、清隆の思惑もどこかで絡んでいるはずだ。龍園だけでは不自然な部分が多すぎる。

無人島から……いや、もつと前から意味のわからない動きをしているのは、着々と何らかの布石や手札を揃えているから。もしくは誰かが清隆の邪魔か妨害をしていてその対抗、といった可能性もあるのだ。

「むー。あの人からすれば攻撃しやすいのは桔梗さんですが、それだと堀北さんを見逃してしまいうリスクがある。桔梗さんは暴力的に狙われるのは避けたいし、堀北さんも潰したい。」

結果、両者の利害がそれなりに一致して、狙いを堀北さんに流したってことですか」

まあ、清隆関係は足がつく情報がなさすぎて、どうしようもないか

ら後回しだ。

それを抜いても、櫛田の発言から繋がってくる事柄は、早苗がまとめたように考えるのが妥当なので問題ないだろう。

「そんな感じかなと。龍園はかなり周到な考えをする奴だったし、狙いを絞って確率を上げられるならそれも有りだろう」

「船でも思ってたけど、よくそれだけで繋げていけるわね」

「僕、凡人なんで。思いつけるモノは考え尽くしておかないとな」

「着地点がおかしくなることも多いですけどね」

「うるせえ。着地くらい各自で適当にやればいいだろうが」

「そのへんが適当なせいで色んな人が苦労してるんだけどね」

「僕は楽だからセーフ」

「……夢月さん。私や二三矢さん達にもそうしてるから、仕返しされるんですよ？」

「え？ なんだって？」

「……」

話が変わる方向に行きかけてたので、ひと昔前の難聴系定番セリフでやり過ぎした。さぞ、イラツときたに違いない。初めて使ってみたが、なかなか便利な煽り言葉だ。

「ともかく話を戻すと、だから現在は龍園が堀北さんを狙うようになってるわけだな。上手い落とし処だと思う」

龍園の思考は外れ気味ではあっても、今のところ学校のやり方には沿っている。

それは根っこは近いが清隆とも似て非なるやり方で、リスクを可能な限り排除する清隆に対し、ギリギリの一線で綱渡りするような博打を平然とした顔で打ってきそうな怖さ。

なら櫛田から見ても本命の堀北さんを龍園に狙わせつつ、自分の保険も用意しておきたいだろう。僕と早苗がそれだ。

「ただこれに力関係を考慮に入れると、当然条件が付く。

僕が知る龍園の考えを予想するなら、Dクラスと次にぶつかる機会とかで堀北さんを含むクラスの情報を渡せと迫り、それを呑む代わりに櫛田は見逃す、とかかな。直接的ではないけど、これが協力……とい

うか保険が欲しい事情なんじゃないか？」

底がある程度見切った上、どちらからでも自分のクラスを裏切る話まで出たら龍園は櫛田を見抜けた、と思うだろう。つまり櫛田の脅威度の低下。龍園的に、真の理由はこちらかもしれないが。

「……………ふう。あんたらつてホント、馬鹿なのか有能なのかかわからない。だいたいは正解よ。脅されはしてないけどね」

呆れてるのか感心してるのかわからない風に、櫛田はそう零した。脅されていないとは言ってるが、ああいうタイプはクレバーに暴力や恐怖を利用してくるから恐ろしいのだ。仲間にならずとも、敵対はしたくないものである。

まあ、自分の危機回避でもあるとはいえ、そんな奴と繋がってまで堀北さんを潰す目的を忘れない櫛田も十二分にヤバいわけだが。

ともあれ、この日は具体的な行動は求められず、龍園とは微妙に別方向の堀北さん対策(櫛田の評判を上げ、堀北さんを下げる方法など)と、龍園が櫛田を裏切った場合の保険をふんわりと話しあった。まだどこのクラスも何も決定されてないから、当然といえば当然だ。

しかし色々と邪悪な奴ではあるが、冷静になってとりあえず堀北さんの早期退学を思いとどまってくれてよかった。協力すると言っちゃったからには堀北さんを『倒す』には協力するけど、流石に故意な退学を狙うのは僕的にNGである。

尤も、早苗の納得したような笑顔からして、わざと僕が退学云々の部分から逸そうとしていたのは、ほぼ確実にバレてるけど…………櫛田には教えないだろう。

だって僕も早苗も、櫛田の友達だ。

なにより友達と思っているからこそ。決定的に道を踏み外しかねない道なんて。誰かを退学にさせようとする目的なんて。

——— 勿論、断固阻止に決まっている。

それなら意固地にさせないよう、それとなく別方向に誘導するのは当たり前だろう。

もし本当に堀北さんを退学させてしまったら、良くも悪くも櫛田の精神バランスは大きく崩れる確信がある。

だから会話を誘導しつつ、櫛田の性質に沿って彼女が楽しい気分になれる案を出せてホッとしている。今は話すつもりもなかったアイドルの件まで出した甲斐があるというものだ。

いやまあ、人の機微に敏い櫛田のこと。その上、感情や考えが顔に出やすい僕と早苗なので、櫛田が騙されて『くれてる』だけかもしれないが。

でも時間は稼げそうだし、きつとあとは早苗か清隆あたりがなんとか片を付けるだろう。

99、 統率者

おかしい。

本日、2015年9月2日、太平洋戦争終戦の調印から70周年。僕はこの日が、日本・中国・韓国以外の国では日本の終戦記念日になつている事がおかしいと思つていのではない。上陸時に漏らした写真を取られたマツカ○サー、ビビリ乙ww、なんてのが可笑しいわけでもない。実際、北方領土では笑い事でもなかったしな。

おかしいのはBクラスの雰囲気である。

龍園なら全校集会で僕と早苗が真つ先に脱走した材料を使って、Bクラスに不信の種を巻いたはずだ。制度上、体育祭は味方のクラスだからクラス間の問題までには発展させなくとも、『僕に』何らかの疑いの目が向く程度の情報操作を行うだろうと想定していた。

それがどうしたとか。

早苗は元より、僕にもちよつとした注意があつたくらいで、疎ましがられたり嫌われてる感が全くない。四方が残つてたし、フォローはしてくれただろうから本格的に嫌われる心配はしてなかったが、厄介者としても扱われていない。

まあ、要因は考えるまでもない。

うちのリーダー・一之瀬帆波だ。

どうやったかはわからないが、自分を含むクラスメイトの不信を根こそぎ消し去つたのだろう。これこそが、最初の学級委員会の時からわかつていた僕が彼女に敵わないと思わせる明確なリーダーの資質である。

信じること。疑うこと。

信じさせること。疑わせること。

普通の凡人はこれらを両立させて、ケース・バイ・ケースにバランスを取るもの。

だが稀に片方に特化した奴がいるのだ。そしてソイツらの多くが人の上に立っているのを、僕は経験で知っている。

すなわち、信じる方面の統率者が一之瀬で、疑う方面の統率者が龍園だ。

そういう奴は不思議と機会や能力などにも恵まれるから、大抵ひと目でも雰囲気を見ればわかる。今回に照らし合わせれば、疑わせようとした龍園の策を、信じさせることで一之瀬が返したのだろう。

だから早苗になにもないのは、おかしくないのだが……。

クラスメイトとはいえ、着々と一之瀬ポイントをマイナス方面で稼ぎ続けている僕にまでそれを適用させるのがおかしい。いくらなんでもお人好しすぎる。

寄らばおちよくり、話せばセクハラ、見せる姿は煽り場面ばかりだぞ。しかもほぼ一之瀬限定の対応がこれだ。その上、先日は尊敬する先輩と言っていた南雲をも目の前で煽り、仲間の威を借りて地を舐めさせた。

これで何故、あの不思議生物は僕を『守ろうとする』？

もはや一之瀬の僕への評価は、底辺を突き破っている頃合いだろう。見られていたかと思つて見返せば、目を逸らされる事があるのがその証拠だ。表面だけなら逆にも見えなくはないが、これだけやってまさか好意を持たれてるとは流石に思えない。

だからこそ何を考えているのかわからない。メサイアコンプレックス的な強迫観念に近いナニかを感じるのみだ。

早苗：いや、四方か柴田に真意を聞いてもらうか？ もしくは月イチの約束をした会話の日にでも聞いてみるか？

かといって、少しでも知ろうと僕自身で近づきすぎれば灰になってしまう。陽キヤのほぼ頂点に位置する一之瀬が強力な聖属性持ちで僕は暗黒属性寄りなので、浄化の危険性が高いのだ。

……まったくもって、色々な点から厄介なリーダー兼問題児である。あつちもそう見てるかもだけでも。

数日経過し、体育祭準備のために設けられたと思われる最初のホームルーム。週に一度、2時間を自由に使えるそこで、体育祭のクラス

方針はあつさり決まった。

各々の希望で好きに決める案が早々に可決されたのだ。他に能力重視や他クラスの情報重視といった案も出ていたが、僕としては楽ができて推薦競技に出なくていいこの案は賛同できた。

勿論、全員参加競技以外は出ない所存である。

ただ判断基準がまだあやふやな部分もあり、残った1時間ほどクラスメイト全員の身体能力を測定することになった。速攻で話し合いを終えた上に、生徒会役員の一之瀬がいた為か、あらかじめ手配していたのか、運動場や測定器具も空いていたのもあつて即確保できたのである。

正攻法を主にするなら、目立ってしまったても時間を無駄にせずこうして動いておくのが最適解の一つだろう。

それと、ペアや組が必要な競技のお試し選定も同時に行うらしい。例えば、騎馬戦や二人三脚などだ。親密度や相性もあるので、これらは単純な希望や身体能力だけでは測れない。

というわけで今は、跳躍力や握力などを測定する組と、待ち時間で競技者の選抜をする組に分かれている。時間がないので、走力やリレーとかの連携は体育の時間でないとできないが。

ちなみに、僕は何故かみんなから組やペアのお試しの方へ入れられた。四方や早苗と一緒に。

それでクラスメイト達の半数が、順番に身体能力を測定している待ち時間。

まずペアを決める必要があると一之瀬他幾人から思われている問題児の二人三脚のお見合い（仮）が始まっていた。

なお、当然のように僕の最初のペア候補は半強制的に早苗である。

「きや」

「おわ——ぐっふうー！」

そして、最初の一步で反対の足を出す息の合わなさを、周囲のクラスメイトと……他はホームルームやってるのに、もう動いたうちを窓から見てくる他クラスの生徒達に見せつける。

二人して見事に逆足を出して、ビターンとコケたのだ。次いで、勢

いよく脇付近に突っ込んできた緑頭の一撃は、僕の息の根を一瞬止めた。

痛みは左程でもなかったが、衝撃と恥ずかしさを誤魔化す為、僕はわざとだと周囲にアツピールしつつ、早苗に恥を押し付けることにした。

「まあ知らない奴は多いと思うんだが、二人三脚って実は相方を転がす競技なんだよね。」

——どうだ早苗？ 自分で動きを制御できない状態で転がる気分は？」

「夢月さん、言ってることとやってることヤバすぎます！ 大体、転んだら自分も痛いでしょ!?!」

「ふっ、痛いとはわかっていてもやりたいことは完遂する。それが僕だ」
「なにカッコつけてるんですか！ 信じられないくらいカッコ悪いですよー!」

「何を言おうと抵抗しようと思駄だ。それでもやるというのなら、僕を引き摺って行くんだな」

「わかりました。では遠慮なく」

「えっ、ちよ!? おい！ 本気で引き摺ろうとすr——おああああ!!」

「そりゃ、東風谷にそんな事言えばそうなるだろうよ」

流星、極悪非道な早苗である。本当に引き摺られた。

スタート地点で一緒にいた呆れ顔の四方と白波が、だんだん遠ざかっていく。あつちは平和？でいいなあ。

早苗のペアが僕か四方しか務まらないとみんなに思われていて、もう片方の四方は白波が希望を出して早々に取られたのがケチの付き初め。

現在、僕は早苗に取り憑かれている。

って、それどころじゃない!

「ちよちよちよちよっ！ 痛い痛い！ い、いやあああ！ 早苗ええああっ!! これは協力が物を言う競技なんだから、そんな事しちゃ駄目だろおおお!!」

「どの口がそんな事言うんですか！」

普通にペースが早い早苗に振り回されて、ガンガン色んな場所へダメージが入る。

「はうあつ！ いったええ！」

「……こんな……こんな事が許されるわけが……!!」

「うつつつぶ。私の無様な姿を笑おうったってそうはいきませんよ？ 貧弱な夢月さんなんて、怪我させない程度に蹴散らしてやりませぬ！」

「二人三脚で相方を蹴散らすんじやねえええええ！」

切実な僕の叫びはどこへも届かない。

結局、お試しの第一走は引き摺られるだけで終わった。

「……二人共、相変わらず仲良いね」

「一見だけだと、息が合ってるのか合っていないのかわからない奴らだよなあ」

折り返しのゴール兼スタート地点近くで、一之瀬と柴田の陽キャコンビも結成されていたようだ。極めて不名誉なことを言われている。

これはさつきと終わらせて、これ以上の練習をしなくて良いようにしなくては……。やっと痛みがなくなってきたのに、また筋肉痛になるまで絞られてしまう。なにより何度も練習するのは面倒くさい。

「待て、早苗。これ、冷静に息を合わせればいけるって。あんなにキラキラしてる一之瀬・柴田のリア充ペアに負けるのは癪だ。僕が合わせるから、この程度の壁なんか軽く乗り越えて、あいつらを置き去りにしてやろう」

「キラキラってなんだよ、おい」

「……なるほどー。左京君からはそう見えるから、南雲先輩にもああなるんだね。なるほどー」

幸い、近くで試しに息を合わせて走ろうとしているモチベーション向上の材料も転がっている。

「そうですね。私達なら乗り越えられると信じましょう」

「ああ、僕達の愛と友情パワーならできるさ」

「愛と友情の力……」

「そして二人共聞いてないんだね、やつぱり」

2 走目は一之瀬・柴田ペアとも走るみたいだし、僕達が譲歩しあえば普通に走るくらいはわけもないだろう。

ただで練習を何度もさせられたり、美男美女のリア充ペアに負けるなんて不愉快極まる。少しでも爪痕を残してやろう。

それには早苗が鍵になる。

この規格外を乗せれば、僕は合わせるだけでいいはずだ……理論上。まあ、こんな適当なパワーがあるわけもないが。

だから姿勢がブレないようしっかり肩を抱き寄せ、さっきの早苗のペースを補正・想定して、僕にも合うようパターンを組み直せばあるいは――。

「……ホントに乗り越えられちゃいました。というか、私のリズムに付いて来れるなんて」

そうして走りきった結果を受けて、早苗がどこか呆然と零す。

僕も同じ気持ちだ。

初見とはいえ、あの乳でありながら並以上の運動能力な一之瀬はまだしも、おそらくクラスでも1・2を争う走力の運動部所属・柴田のペアを、早苗をよく見ながら合わせただけで追い越せるとは思っていなかった。

「今の絶対に失敗する流れだっただろう！ 今のでできなくて、いや愛とかねえから！ ってツツコむ流れだろ！ 友情はともかく、最初のあの息の合わなさで愛を成立させてんじゃねえよ！」

僕はなに言ってるんだ？

何故か付いていってしまったことで錯乱してるのを自覚しつつ、早苗に口喧嘩を仕掛けてしまった。

成功したんだし、あとは測定の方が終わればいいだけだったというのに……。無駄に寝た子を起こしてしまった。

「知りませんよ！ 夢月さんが私を好きすぎるのがダメなんですよ！

あらあら、私って罪な女ですね？」

「つぎけんよ、クソ緑が！ それは早苗の方だろ！ 無人島や船で愛里へするように僕に抱きついてきたことは忘れてないからな！」

「そ、それは関係ないじゃないですか!？」 よりによって夢月さんに抱きつくなんて、あの時の私はどうかしてたんですよ!」

……うん。愛とか言っちゃったせいで、口に出すのも恥ずかしい某ガン〇ムの黒歴史的なラブラブなんちゃらくがほんのちよつと頭をよぎったから。

「あいつら、勝つても喧嘩になるのかよ。つーか、前から時々言ってるけど東風谷のどこが緑なんだ? 緑要素、カエルの髪飾りくらいじゃねえか」

「にやははは……それはともかく、私達、負けちゃったね。もつと息を合わせないと駄目かも」

しかし納得できないが、なんか異様に早く息を合わせる事はできた。これでもう練習しなくていいと思うと、心が軽くなる。

無人島で振り回された経験が生きたといえるかもしれない。

それはそれとして、最近の早苗はああ言えばこう言うようになってきて、言いくるめるのも一苦労だ。またハイテンションな時も多くなつてきており、入学当初の大人しく見えなくもない頃の面影は、あまりない。

元氣いっぱいな早苗をお祓いするには、どこへ行けばいいのだろう。

「夢月は運動『能力』はともかく、運動『神経』はかなりいいぞ。それに日頃から一緒にいることも多い東風谷だから、無意識にやろうとすることがわかるんじゃないか?」

「……それが以心伝心のアドリブ芸を生んだってか。相当、キツかったけど」

「二三矢さんが言うなら、そうなんでしょうね。私に付いて来られる以上、多分間違いないと思います」

こうして四方か、今は居ないけど愛里がクールダウンさせてくれるまで、暴走特急な性質を遺憾なく発揮し続ける。

四方が来てくれたおかげで、ようやく足を繋ぐ紐を外せたくらいだ。ローテンションにしたいわけでもないが、時々疲れる。

それにしても……くそう。なんということだ。

一応外見は美少女なのに、まったく役得やエロさを感じないどころか、もはや野郎や櫛田と同等。くつつくことで残暑の暑苦しさ倍増を感じるのみである。これが普通の女子だったら、もっと嬉し恥ずかしいイベントとなったことだろう。

僕はそのまま早苗を下から見上げ、僅かに生じた男としての嘆きを蒼天に輝く太陽へ放って片付けた。

さて。切り替え、さくさく場所を移動して次は測定だ。

これだけでも終われば、面倒はかなりスキップできる。残り時間はギリギリだが、僕達後半測定組は効率良く跳躍力や柔軟性を記録していた。

そのまま問題なく器具などが必要な測定を終わらせ、後は握力を残すのみとなった……のだが。

不可解なことに測定の間、僕は前後をずっと一之瀬と神崎に挟まれている。ちなみに早苗は四方と一之瀬が前後である。更に周囲には柴田や網倉、安藤に白波まで巡回している。女子に握力測定はあまり必要ないというのに……。

「あの……この並び順はなんだ？　なんか護送されてる気分になってくるんだが？」

「いい得て妙だな。目を離せない要注意人物の監視を任された神崎だ。一之瀬とともに、よろしく頼む」

誰ともなしに問いかけると、神崎がふざけた返しをしてきた。

「よろしく、じゃねーよ！　早苗なら勝手に監視してろよ！」

「左京君も監視対象なのを自覚してない？」

「僕がそんな対象になるわけないだろう！」

「……本気で言っているのか？　お前は龍園をも凌駕する同級生……いや、全校生徒の中でもやらかし率No. 1の左京夢月だぞ？　星之宮先生からもマークするよう指示があったほどで、むしろ東風谷の方がついでに近い」

あ？　やらかしだのマークだのって、神崎はなに言ってるんだ？

いや、それよりも。早苗以外、神崎の発言にうんうんと頷いていて、

なんか周囲の空気同調率に危機感を覚えるレベルなんだけども。

「ヤバい。もしや、僕の信用度がだいぶ下がってる!？」

「元からだと思うぞ」

「それマジ？」

「胸に手を当てて考えてみる。思い当たることなんていくらでもあるだろう」

胸と聞いて、背後から一之瀬のおっぱいでも揉んでやろうかと一瞬思ったが、それを実行した時点で僕は終わりを迎えてしまう。なので、普通に答えることにした。

「ん？ 思い当たること……思い当たる……特に何も思い当たらないが？」

「つんなわけないだろうがっ！ 女子もいる中で全裸闊歩したのは忘れてねえからな！」

「……柴田君。むしろそれは忘れて？」

思わずと言った風にツツコンできた柴田に加え、神崎とペアになった網倉さんが額を抑えている。これは当然、スルー安定だろう。

「夢月さん、もしかして記憶が……。さっきやりすぎましたかね」

「いや、至って健常なままだ。てか、失礼だな早苗」

「健常なら思い至るはずなんだよっ！」

「やはり記憶が」

「引き摺られただけで記憶が消えるわけないだろ。常識的に考えて」

ともあれナイスサポートだ、早苗。柴田も2度も叫んでくれてありがとう。

プチ痴呆症を演じることで、話題が本筋から逸れた。

あとは僕の真前で、背後霊（前なのに背後霊とはこれいかに）のように佇む一之瀬さえ有耶無耶にできればこっちのものだ。誘導してくれた早苗の為にも、あとは握力測定を乗り切るだけ……勝ったな。

しかし――。

「……みんな、落ち着こう？ 左京君のことだから、そういう風に演じた上で、混乱に乗じて色々有耶無耶にしようと狙ってるんじゃないか

な？ 私にはそう思えてならないんだ。ねえ、左京君？」

その鶴の一声で、ビクツ。と身体に電気が流れたように反応した。「なるほど。た、確かに左京ならやりそうだ」

「だから演技の可能性も考えて。慌てちゃうのは駄目。いつも冷静でいないと。そうだよね、左京君？」

な、なんだこれ。一之瀬にかなり見抜かれてないか？ じゃなかったら、必ず最後に僕を振り返って名前を呼ぶのは如何なる意味がある？

「あ、これ見抜かれたヤバいつて顔だわ」

「左京君って定期的にやらかすよね。流星はNo. 1」

気を取り直して僕の顔を覗き込んでくる柴田や網倉さんに、反論とかするのは下策だ。この混乱をきちんと鎮めてからでないと、本当に色々バレてしまう。お口チャックである。

とりあえず『内心』で吐き出して、少しでも落ち着くことにする。「やらかしたくてやらかしてるわけないだろ!? てか、ヤバイヤバイ！ 覚り妖怪は坂柳さんじゃなくて、一之瀬だったか!? Y E S ロリータNOタッチ？ てか、あのエロい体とか、どう見ても小五ロリになんか見えないじゃん！ あと爆乳さとり妖怪が心を読めるなんて、エロ系以外のどこに需要あるんだよ!?! 僕はなに馬鹿な事を考えているんだ、この非常時に！ と、ともかく本物の妖怪でない限り、正解は沈黙がベストアンサーなはずだ！ そう。あの乳でそんな非現実的な能力まである訳がない！ 持論を信じぬけ、僕」

おつ、柴田や網倉さんが距離を取った？ てか、他の奴らもザザツと後退した。

なんかわからんが、考え込んでるうちに好機が到ら……。

「ふくん。やつぱり変な事考えてたんだ。今回は妖怪にエロ、ロリときたかー。

でも……にやはは。左京君ってすぐ顔と口に出るから、きちんと対応すれば隠し事はできないね」

妖怪にエロ、だと？

「表向き無口なCOOL BOYを装っていたはずなのに、内心を讀

「まれた!? あり得ない!」

「無口なCOOL BOY……。左京君にはあんまり似合わないな」

「ば、馬鹿な……。一之瀬! さっきから何故僕の内心がわかる!」
ことごとく読まれている思考盗聴の謎は、笑顔でズイツと近づいてきた一之瀬が種明かしをしてくれた。

「にやはは。左京君、途中から全部口から漏れてるって気づいてないの? 気づいてないか。私をエロ妖怪呼ばわりするんだもんね!」

口から漏れてた? 妖怪云々が?

てか、関係ないけど、エロと妖怪をくっ付けるんじゃない。なんか違うモノを連想しちゃうだろうが! エロゲーとか! エロ同人とか!

あれ? でも……。怒ってる風に見えて、意外と楽しんでないか、一之瀬。不思議と機嫌良さげにも見える。坂柳さん妖怪説を笑う性格でもないから、自分がそう呼ばれたのが嬉しい? 統率者と言えど、一之瀬も一応女子なんだしそんなわけないだろう。じゃあなんで? ……ああもう、なんで一之瀬にはこう、いちいち複雑な考察を必要とするんだよ。

「——クツソ面倒くさい!」

「……ほら、また。無人島でもそうだったよね?」

「う、ぐ。まさか僕にこんな癖があるとは」

思ったことが口から漏れ出すのを止められない。

また立証されてしまったのもマズいし、どこかでもやってたら目も当てられない。

僕はそうなったら特にヤバい場面を意識して必死に思い出そうとした。ハードラックとダンスつままった場面を重点的に。

「あれ? 意外とショック受けてる!? 左京君が!」

考え込んだのをショックを受けたと見られたのか一之瀬の雰囲気が変わったがそれどころではない。

「もし真面目な交渉時にも発動してたとすれば……。後で聞き込みをした方が……」

「いやいや！ 私が知る限り、それはないから！ 多分、気を抜いてる時だけだと思うから！」

「……………そう？」

「うん！ きつと大丈夫だよ。大人っぽい時はしっかりして見えるよ。頼りがいもあるし」

一之瀬というクラスリーダーに太鼓判を押され、元氣付けられたことで重大な懸念は薄まったが……きつと今の僕、すっげえ情けない。

高1女子に悪癖を暴かれ、立場が逆転して慰めまでされるとか、大人の精神も形無しである。この化け物…包容力お化けめ。同級生の僕に慈しむような目を向けるんじゃない。

でも、一応思つとく。

ありがとう。

「ブフーーーー！ あつは！ 確かに坂なんとかは子供子供してましたもんねっ！ わかります!! あははははっ！」

「わかっちゃ駄目なんだよ、東風谷。」

夢月と東風谷は、なるべく坂柳に会わせない方がいいだろうな。空気を吸うように煽りまくるぞ、この調子だと」

「というか一之瀬に対してもだが、あの坂柳を妖怪扱い。しかも小五ロリって……………左京、恐ろしい奴」

一方、一之瀬以外は坂柳さん妖怪説で盛り上がっていた。

これは以前に考えていた想定通り、坂柳さん対策をしてくれそうだ。それだけは不幸中の幸いである。

そんなこんなで、テンションが落ち込んだまま測定した僕の握力は34.8だった。

クラス内で断トツに低いその数値に手抜き疑惑をかけられたが、生憎とこれが僕の全力である。ただ正直四方が全力を出さなければ、そこまで浮かないと思っていた。

しかし想定は外れた。

「スポーツは速さだぜ！ 快速柴田マンの力の源は脚なんだよ！」

「ふっ。負け惜しみを。大抵の男子スポーツはパワーに決まってい

る」

神崎が現時点での握力最高値をマークし、柴田が次点となった事で珍しい二人で煽り合っていたところ（ちなみに柴田が64kgで、神崎が69kgらしい）、二人の陰から小さな体躯の四方が現れて一刀両断したからだ。

「スポーツは——集中力さ」

そう言っつて測定器具を握り込んだ数値は脅威の90kg。負けず嫌いが発動して大人げなく全力を出したのか、手をプラプラしてなければ僕も驚く周囲に紛れられたかもしれない。

勿論、僕の感情大半を締めるのは呆れと心配である。

アイツは故障が怖くないのか、と。

これにはどう対処したものかと考えていると、自分の測定を速やかに終わらせて神崎と交代した一之瀬に声をかけられた。僕の監視の為か、測定が終わったのにいまだに張り付かれているのだ。

早苗から解放されたら次は神崎、更にその次は一之瀬とか、僕は呪われてるんじゃないだろうか。

まあ、言いたいことがあるので二人で話せるのは好都合でもあるが。

「左京君は四方君の結果に驚いてないんだね」

「ああ、アイツは色々並外れてるからな。ある程度、的を絞らせてやれば結果は出すさ」

負けず嫌いで頑固な性格的に、それが難関なのだが。

「だけど——」。

一之瀬に頼めることじゃないかもだけど、なるべく四方に無理はさせないでくれな？」

「それは当たり前だよ。仲間なんだし」

「……ホント頼むな？ アイツつて夢中になった瞬間、無自覚に身体の限界を超えるから結果より故障が心配になるんだよなあ」

「故障……？ 四方君が？」

これまでで痛感しているが、僕や早苗だけじゃ四方を止められない場合が多い。

「だけど、クラスメイトの活躍する場面を選ぶ事ができる一之瀬に助けてもらえれば、四方が無茶する機会そのものを削減できる。今ならアレを確認させるだけで、一之瀬にもその必要性は理解できるだろう。」

「四方の手を見てみる。身体の後ろに回して隠そうとしてるから、ちようどこつちから見える」

手招きして立ち位置を調整し、柴田や神崎と話しつつさりげなく手を後ろに回す四方を静かに指す。

すると遠目ではあるが僕や一之瀬の目に、無駄に力を発揮しすぎた結果が飛び込んでくる。

「え……………プルプル震えてる?」

「身体ができてないのに、いきなり90kgなんて握力を発揮するからだ。あれは少し痛めたかな」

「そんな」

「ま、少しなら多分大丈夫。無人島やプールで僕が無理させちゃう事もあったけど、2〜3日で回復できてたしな。それに今は周りがケアできるし」

「早めに知ることができて…よく見てくれてる人がいてよかった。」

「……………それで、どうするのがいいのかな? 左京君はどうしたいの?」

「本人はやる気みたいだし、好きにさせるのが一番だと個人的には思う。ただ『少しだけ』気を遣えば、きつと想定以上の結果を出してくれる奴だ。だから一之瀬が決断する時に、この少しだけを思い出してくれば充分」

「少しだけ、つてのがポイント。」

「四方に限ったことでもなく、リスク管理を疎かにするわけじゃないが、助力や手回しは本人にどうしようもなさそうな時だけ、必要最小限でいい。」

「例外を除き、僕の友達全員はそんなに柔じゃない。」

「ぶっちゃけ特別扱いしろってわけじゃなくて、身体能力を発揮させ続けるのと、短時間に何度も連続行使させないように気をつけてくれ」

たら、僕ら的には嬉しいなってだけなんだ。四方に適正な場を選べば、今見た通りに間違いなくエース級の柴田や神崎も超えられると断言しよう」

その僕のちよつとした意見は伝わっただろうか？

一之瀬はリーダーとして優秀な采配を振るうし、伝わっていると信じてしよう。

「……わかった。競技順を決定する時に参考にさせてもらおうね」

「よろしく頼む。信用がない僕じゃ、クラス内の決定に関わりにくいからな」

「そんなことないと思うけどなー。さっきはああ言われてたけど、左京君って自分が思うより信用も影響力もあるよ？ 私だって……」

まじまじと僕を見つめながら、言葉を途切れさせる一之瀬。

しかし言葉や容姿がどうかじゃなく、統率者&善人特有の綺麗に透き通った視線を受け止めて――。

意外と僕は彼女に嫌われていなかったのかもしれない。

と、そう思えたのは多分救いだった。

最近、格好悪いかアレなところばかり見せてるし、内心が漏れてたんなら普通に終わってると考えてたので。

だから勿論、好かれているなどと阿呆な勘違いすることはないが。

勘違い男を量産する聖人的な振る舞いは、なにより止めてほしいものである。

100、清楚

一通りの測定が終わればトレーニング、それとミーティング。

Bクラスでは、これが体育祭までの日常ルーチンに組み込まれた。体育の時間割合が増え、先に述べたように週に2時間のホームルームを自由に使っていると通知されたからだ。

やる気のある者はその時間で何らかの競技の自主練をしたり、ミーティングでは自クラスのみならず他クラスの偵察・情報収集、その分析をする。

大まかにはこんな感じに決まっており、僕のようなやる気があまりない者は基本昼寝の時間と化していた。まあ、僕以外は大抵真面目に取り組んでいるので、肩身は狭いわけだが。時々、四方や姫野、ごく稀に一之瀬が息抜きで話しに来るくらいである。

それ以外は、人数合わせで選抜競技の騎馬戦に出ることになってしまったので、連携練習をやるようになったら集まる気楽なモノだ。

個人競技の練習や基礎体力の向上？　するわけがない。そういうのは、やらざるをえない時にだけやれば必要充分である。

というわけで、それまでと何ら変わりのない日常を送っていた。

微妙な変化は、仕事仲間にも栄一郎が加わったことか。主に松雄との連絡や事務作業を手伝ってくれるようになった。

尤も、名義上は別会社所属である為か喫茶・芳香へ来ることは許可されなかった。これは青娥さんの判断だが、気まぐれな優しさを少しだけ感じたのでおそらく好意なのだろう。

なぜなら栄一郎みたく比較的常識的な奴に、人外魔境その2であるあそこはヤバそうだからだ。ちなみにその1は当然、守矢神社。

理の外側を知らないなら知らせない方がいいというスタンスは、僕も仙人も神様も似たようなモノなのだと思われる。

どこまで気づいてるか不明ながら、両方と密接な関わりができてしまった愛里はご愁傷様である。

そんな平穏な日々であったが、9月のある土曜日、たまたま部室

で一人だった時のことだ。

前触れもなく堀北学が訪ねてきた。

まあ、これ自体は問題ない。おそらく遊びに来ただけだったのだろう。適当に世間話をしつつ、しばらく茶をしばくと学（妹もいるので名前呼びにしろとのこと）は席を立った。

「兄さん！」

「鈴音……」

問題は学が帰る際、僕が少し話題に出して即打ち切られた妹の方が清隆と訪ねてきたことで発生した。

しかも兄妹が遭遇したことで何故か生じた不穏な空気と、堀北さんにはほぼ声をかけず、僕と清隆には声をかけて帰るといふ学の謎ムーブ。

おかげで清隆にはまだしも、僕へ強い視線が降り注いでいた。複雑？不仲？な関係ならそう教えといてほしい。

「……………」

僕一人だけだった部室に、今や珍客を含めて3人。

静寂が訪れる中で、僕の茶をすするズズツという音、そして学が来るまでやっていったジグソーパズルをはめる音だけが響く。

僅かな間で、なんと居心地の悪い空間になってしまったことだろう。もはやパズルを完成することに集中するほかの選択肢はないと思ひ詰めるほど。

「……………遅くなったけど失礼するわね、左京君。不躰だけでも、貴方が兄さんの友人に相応しいか試させてくれないかしら？」

一方、長めの沈黙を挟んで僕…と清隆を睨みつけ、面倒な事を言い出す堀北さん。僕の答えは当然決まっている。

「嫌だ。面倒」

「……………!?!」

「ブツ。む、夢月」

僕の返答が気に入らなかったのだろう。眉間にシワを寄せ、一瞬言葉に詰まってから堀北さんは不機嫌そうに口を開く。

てか、その影で吹き出すんじゃない清隆。下手すると追加で怒らせ

ちやうだろうが。

「貴方は挑まれた勝負から逃げるの？」

「うん。逃げる」

「それでは貴方の不戦敗ね」

「ん、それでOK。僕の負け。お疲れ様でした」

「……」

だから腫れ物に触るように慎重な対応を心がける。

負けを認めて適当に軽い要求に応えれば、興味を失くして帰ってくるはずだ。予想に反して、押し黙りはしたものの動こうとしてくれないけども。

しかし久々のゆっくり休める土曜日に、試しだかなんだか知らんが僕側の理由なく面倒な事をするつもりはない。堀北さんを嫌ってる櫛田もいないし、煽る意味もない。

それならパズルに集中してる方が有益だろう。

「ちなみに君ら…堀北さんは本当は何をしに来たの？」

とはいえ、完全に無視するのもなんなので、ピースをはめながら用件くらいは振っておく。

「………情報収集と………最近、私にさえ名前が聞こえてくる貴方の…見極めよ」

「じゃあ、僕に勝ったし目的はそれなりに達成？」

「あれを勝った負けただで受け取っていいものなのか」

いいんだよ。早くお帰りいただきたいんだから、清隆は少し黙っててくれ。

「………私の勝ちと言うなら、Bクラスの情報を教えてもらえる？
それを勝者の権利ということにしてあげるわ」

「あん？ 情報？ 体育祭関係で僕のだけなら別にいいけど」

「構わないわ。貴方程度ではどうせクラス運営には関わっていないでしよう？」

「正解」

こんなただの情報なんか役に立たないけど、手ぶらで帰るのが嫌なんだろうか。せめて出場順とか確定するまで待てば、多少マシな収穫

になつたろうに。

それにしても話し出す前に微妙に長めの沈黙が挟まるのは、堀北さんの癖なのだろうか。

「あ、僕の測定結果は…えーと、あった。これな」
とか思いつつ、僕の測定結果を書いておいたメモ帳を堀北さんに渡す。

あれを何度もやらされては面倒くさいと、何かの役に立つかと思つてメモしといたのが役立つた。

テーブルを滑らせて渡したが、堀北さんも流石にメモ帳を持っていくような真似はしないだろう。

…早く帰ってくれるなら持つてかれても別にいいけど。パズルを完成させるのに邪魔だから。

「やはり礼儀知らずで無能な愚か者だったようね。時間を無駄にしたわ」

「無駄な時間お疲れ様 ♠

必要かわからんけど、僕の測定結果見終わったらさつきと帰つてね」

休みを邪魔された上、ナチュラルに煽られて、ついムカツとした気持ちヒソカ的なセリフにして返してしまった。

彼女は人をささくれさせることにかけては、櫛田が言う通りトップクラスかもしれない。もしも櫛田がこの場にいたら、僕は彼女の兄・堀北学直伝奥義『論理的説教畳み掛け』でぐうの音も出させず、おちよくくり尽くしていただろう。

「堀北。お前は本気で夢月…左京が愚か者でしかないと思うのか？ さつきもお前の兄貴が訪ねてたくらいだぞ？」

馬鹿、清隆！ 僕の？ 堀北さんの？ フォローをしてくれるのはありがたいけど、話を続けようとさせるな。帰る流れになりかけてるのが、またぶり返してくるじゃないか。

「……ふん。兄さんの考えはわからないけど、それ以外の何があるというの？ 大した成績でもないし、実績もない。負けても何とも思わない。覇気もなければ、努力しようとすらしない。綾小路君みたいに

実力を隠している風もない。女の私と勝負する最低限の気概もない。あまつさえ、努力する周囲をよそにこんな所でジグソーパズルなんかやっているわ。私が見たところ、ただの怠惰な愚か者よ、彼は」

「実せk」

「うん！ だいたいその通り。愚か者かは別としても、僕はただの凡人だよ！」

清隆の議論誘導を遮る為と、あまりに延々と続きそうな長広舌のデイスリだったのもあって、愚か者部分以外は一言に纏めて強めに肯定しておいた。堀北さんが情報戦をできない人で助かった。

てか、どうでもいいけど本人をデイスるなら他でやれ。

「……………そう……………そう、ね。兄さんは何故……………」

「堀北……………」

すると堀北さんは、メモ帳を置いて何事か零しながら部室を出ていき、清隆もそれに付いていった。

ようやく僕の愛する静寂が再び訪れた。

しかし、その静寂は微妙にレア程度に収まってきた部室の外から聞こえた清隆の堀北さんを呼ぶ大きめの声と、しばらく経って清隆だけが戻ってきた事によって破られる。

「夢月は堀北に興味なさすぎだろ。それとも、ないとは思うが櫛田や……………龍園に何か吹き込まれたか？」

「ねーよ。誰にでも間が悪い奴っているだろ。僕の場合、堀北さん以外に一之瀬も間が悪いこと多いしな」

清隆はそう聞きながら、僕がやっていたパズルを次々とはめ込んでいき、あつという間に完成に近づけた。

だが仕上げを僕に残すあたり、性格を読まれている気がする。やっていることに区切りを付けないうちは、まともに話す気にならないって僕の性格を。

しかし改めてそう考えると、堀北さんはお互い様だが一之瀬って運

が悪いな。彼女にとって間が悪い奴が、僕含めて同じクラスに何人もいる。

四方はまだしも僕や早苗を使うのって、クラスをまとめ上げる時に大変そうである（小並感）。

と、つい思考が脱線している間に最後のピースだ。

「つまり敵意はないと」

「ない。お互いに疲れるっただけだ」

「……」

静かに僕の反応を見てくる清隆。

ちよつと正直に言い過ぎたかもと思い、またジグソーパズルも完成したことだ。せっかくだから堀北さんを絡めて、この学校の流儀LV3を試してみる。アレンジとラーニングを添えて。

「はあ。清隆。堀北さんについて僕が言えることは…そうだな。

——食料自給率。お前にはこれでわかるか？」

でも清隆クラスなら楽勝の社会知識系の謎掛けだろう。

「それは…堀北の視野が狭い、と言いたいのか？」

案の定、清隆は瞬時に理解を示す。

これは何を使って計算するかで結果が変わる、というのを理解していない奴なんじゃないか。という問いかけだ。僕がそれなりに頭を捻っても一言で通じるんだから、清隆も似たような印象を堀北さんに持っていたのかもしれない。

相変わらず、どこか共感させてくる奴だ。

「わかってんじゃないか。ああいう奴は、話すたびに説明とか求められるから疲れるんだよ。色んな意味で櫛田とは真逆の性質だな。話しにくいって意味で」

「ああ。確かに堀北はそういうタイプだな。オレも何度か苦労させられた」

「お前もアレなのに取り憑かれてるんだな」

「これまではほとんど夢月や龍園がやった事も原因だがな。一番の原因は…違うが」

ちなみに例に出した食料自給率に関しては、日本では世界的に珍し

いカロリーベースになつてるアレだ。

なんか40%切つたとか言われてるやつで、重量ベース、金額ベースなど、他にもあるスタンダードな計算法は考慮されない。

それに何故か食品ロスや生産廃棄分を消費の分母に加えてるので、余計に自給率は低く計算されている。

更に重量ベースでは約70%、金額ベースだと約80%。他国では計算に入らない食品ロスを加えると、日本の食料自給率が100%を超えるというのは有名な話である。

だからこそ、「食料自給率が低い」とか言いながら、減反政策や生産廃棄を農協なんかがやってる理由も見えてくるわけだが……清隆が本題をわかればいいので詳しくは割愛。

要するにこの食料自給率の例でいうと、堀北さんからは「40%を切つた」という部分だけ知らされ、一面的な情報に踊らされて行動してる奴の匂いしか感じないのだ。

ぶつちやけ透けて見える考えが薄っぺらいし、誰かの後追いにすら思える。前提にある下地が子供すぎて話を通じないので、僕と相性が悪くなるのもしかたないと言えるだろう。

「堀北に見える問題は、ある程度の奴には一目瞭然というわけか」

「言語化できるかはまた別だけどな。なんとなくレベルに広げたら、堀北さんと付き合いある半数くらいはそう感じると思う。頭良い幼児みたいなもんだから成長性はあるかもだけど」

最後の点だけは清隆にも近いと言える。

……ああ。これも清隆が堀北さんに付いてる理由の一つかもな。愛里など一部の成長株と話してるのを見る限り、コイツってどういうわけか他人を成長させようとしてるフシがあるし、そういう性癖なんだろう。最近はそれも少しずつ薄まってきた感じはするけども。

「なるほど……なるほどな」

しかしナニがなるほど、なんだかねえ。

こんな遠回りな謎掛けで納得するのわからんが、お帰り願ったのはむしろ勘の部分。

「なにより第一印象が清楚って点も大きい」

これが僕的には重要である。

「ん？ いきなりなんで褒めた？」

ありや。これは言葉の印象が違うパターンか。

これは指摘しておかないと、思わぬ部分に波及をすることもかもしれない。

「清楚って褒め言葉か？」

「夢月は違うのか？」

「いや、褒め言葉ではあると思う」

「なんか引つかかる言い方だな」

「あー、僕はちよつとマイナス面の印象が強いのかも」

「マイナス面？」

「だってさ。清楚って言うത്それこそ堀北さんとか……早苗とか思い浮かばない？」

ついでに言わないけど坂柳さん。

「あ、察し」

「だよな。清隆ならわかると思ってた」

「……暴走しがちと言いたいなんだな」

「あつれ〜？ 僕はそんな事は思っていないよ？ でも清隆は堀北さんや早苗をそう見てるんだな」

「ここでハシゴを外すなよ」

「グツソ面倒くさい女達よ、見ているか？ ガワがお綺麗なお前らをうつわあと思う男はここにいろぞ？ ご要望とあれば詳細に語り聞かせてしんぜよう」

「オレの方こそ聞かせてやりたい、この言葉を」

それにしても、清隆のなんとなくからかいたくなる雰囲気はなんだろう？

微妙に考えが似てるのか、共感できる場合が結構あるのも不思議だ。肉体はともかく、僕の中身はそれなりのおじさん系だと思うのに。

「冗談はさておき、あの暴走特急に感じる性質が僕を逃げ腰にさせるんだよ。あんな呪物に取り憑かれるなんて早苗一人だけで充分だ」

「ぼ、暴走特急、呪物……くくつ。確かにそうとも言えるな」

笑ってんじやん。てことは、清隆も度々被害を被ってて、そう思ってるんだろ。もつと素直になれよ。

「んで、平穩を崩そうとする奴からはなるべく距離を置きたいものだろ。友達になった以上、早苗はもはや手遅れだが」

「できればオレもそうだな。夢月もみたいだが、オレにも堀北とはちよつとした事情があつてな」

「……お互い、とんでもない地雷原に引きずり込まれちゃったもんだよな」

「……言うなよ。せつかく考えないようにしてるんだから」

「………悪い。話を変えよう」

内心の勢いあまつて、目を逸らしている現実をつい言ってしまった、二人で遠い目になりかけ……同じタイミングで首を振つて、どうでもいい話題へと軌道修正する。

「それにしても清隆が堀北さんに付いてるのは、やっぱり友達だからとかだけじゃなくなんかあるんだな」

「ま、夢月なら察してるか。そつちに迷惑かけるつもりはないから安心してくれ」

またわかりにくく伝えてくるなあ、コイツ。必要な手は打ち終えたつて解釈でいいのか、これから打つ目処が立ってるのか。それとも思考レベルに合わせて、僕にギリギリわかるように話す配慮してるのか。

最後だつたら、早苗や高円寺よりかは器用なモノである。普段はまだしも本気のあいつらが99%理解困難だとするなら、清隆は80%90%程度に収めてくれるので比較的親切?だ。

それはともかく、いくつかの視点を想像するに、清隆が2~3手は仕掛ける(仕掛けた?)可能性があるので、当たり障りないところを暗に提案しておいた。

「お前は大丈夫なのか? 龍園を甘く見すぎるなよ」

「……つ。そこで龍園の名前を出す夢月だから言うが——問題ない。今のところ、概ねオレの想定通りに進んでいる」

友達として当たり前の心配に対して、僅かに言葉に詰まった清隆だがその断言に迷いは見受けられない。よって、コイツの直近の狙いは薄っすら見えてくる。

先程の「そっちに」という言葉。まず打っておくべきはCクラス、龍園への対策だと判断したのか。気づいてるだろう櫛田の件も合わせれば、堀北さん用でもある保険って感じだろう。

思い付くまでなら僕にもいくつか浮かぶけど、軽く実行してしまうだろう部分が清隆の凄みである。

「はあ。その心配はしてないし前も言ったけど、必要なら僕でもいいから利用しろよ？ お前、そのへん無駄に不審な言動が目立つからなあ。四方にも言われてたけども」

「ははっ。肝に銘じとく」

「ホント、気をつけろよ。お前がやろうとしてるのって、普通の奴にはかなり危ない橋なのを忘れるな」

「……わかってる。だが勝算しか残してないから、余程のことがなければオレだけで充分だ」

「それでも、いつそ櫛田の事くらいはバレないように早苗に投げちまえ。ここだけの話、クラス全体の優先順位は僕と同じ程度には清隆も低いだろ？ お前の目的がなんにしろ、賭け時は多分まだ先だと思っぞ」

清隆が龍園や櫛田に気づかないなどありえない。

伏せておく事も考えたが、こういうのは僕以外は言わなそうな気がするし、裏を見通して高い予測精度で自分の考えを実行してくる奴なので、なにか言っておかないと変に動かされる事になりかねない。

またそういう奴だからこそ、『早く完璧な手を打った結果』亀裂を決定的にしそうな予感もする。

なので、これを言ったところでたいした影響はなくとも、やっておく価値はあるだろう。あるといいな。

「……………ははは。なんかこういうの…いいな。理解されてる友達同士って感じがして」

気を揉む僕をよそに、本人は吞気を装いつつ——珍しく本音に聞

こえる穏やかな言葉を零してたが。

でも意表を突かれたように、気を抜いたように笑ってるのに、それでも頑なに頼ろうとしないあたり清隆の底にあるモノは根深いな。おそらく僕じゃなく四方でも同じだろう。

今はちよつとした提案と『呑み込んでやる』のが友達にできる精一杯のようである。いかに天才だろうと、高校生相手に情けないものだ。

まあ、信用とか信頼とか言っても清隆には無理があるのでわざと利用なんて返しておいたが、これだけ釘刺しとけばコイツが見誤ることはないだろう。

見極めるための思考力は、なんだかんだいって僕達の中でも凶抜けているのだから。

101、嘘（前半、堀北学視点）

それは夏休みの最終日、夕暮れ時の生徒会室。

「会長……い、どうか、どうかお願いします！」

その地を吐くような嘆願を俺にしてきたのは、なんと南雲雅。俺の後輩で2年の副会長だ。

南雲は俺とは違い、何事も行動する事で道を切り開くタイプの間。これまで俺にも幾度となく挑みかかるかのように突き進んできた。

それがどうだ？ 左京と幾度か接触した事で南雲も少しは変わったのだろうか？ 含むものがある雰囲気そのままに、どこか必死な姿を見せている。

「会長が会長である間に、あんのクツソ生意気な左京夢月ともう一度だけ真剣勝負を……！」

聞けばプールの開放日に命名決闘を申し込み、団体水中バレーで返り討ちに遭ったらしい。そこまではいい。

問題はそのビーチバレーの前後で南雲を散々に煽り散らし、これまた2年の鬼龍院楓花を一時呼吸困難に陥るほど笑わせた事だ。

数度会っただけだが、あの他者にはほば興味を持たない女子をそのままで笑わせる煽り。それが南雲の自負とプライドを酷く傷つけたのは想像に難くない。

「アイツが前に提出した提案の中に、体育祭の提案があったはずですよ！ そこには総大将の設置、また3学年合同リレー以外に全学年男女選抜騎馬戦と全学年男子棒倒し、全学年女子が的あてという提案もありました！」

以前に『あの男』が学校相手に改革を齎した時の提案を言っているのだろう。

たしか「応援合戦とか創作ダンスとかがないと華やかさや盛り上がりには欠けるので、イベント限定の目玉を作っては？」とか、「学年ごとより全学年の方が効率的で派手になる」とか、そうすると玉入れのま

までは女子が溢れるので「的あて勝ち抜き戦とか面白いんじゃないですかね？」などと色々言っていた記憶がある。

「なるほど。それなら直接対決ができる」と

「はいっ！ このままだと学年が違う左京と直接対決できる機会は多くありません。ですので、機会を増やすためにもまず会長の在任中に体育祭の改革を！」

俺は良くも悪くも、これまで事を荒立てないように歩んできた。

出された課題を淡々とこなし、凧いだ場所で過ごす日々。

『見本』であること。

『規範』であること。

それこそが正しいと信じ抜いていた。

なにか行動を起こし、変えることなど考えもしなかった。諦めていたともいえるだろう。

しかし去年。目の前にいる南雲が入学して、気にかかる点はあるがらも、次々と新しい道を切り開いていった。

そして今年、左京夢月という男が入学し、嵐を巻き起こした。

南雲が切り開こうとしていた道を、強風で強引に道にして舗装するかのような嵐でだ。

結果だけは南雲の目指す道と近いものになったかもしれないが、強引すぎたがゆえに先も見えなくなった。あるいは左京には見えているのかもしれないが。

「だが、命名決闘で左京にする要求はどうする？ 理由がなければ、意味のない決闘に乗る男ではない。ポイントや何らかの優遇でも釣られないだろう」

「それも考えてあります！ 俺が勝った場合の要求は左京の生徒会入り。」

そして左京が勝った場合は——」

俺にとつてもだが、南雲にとつてはまさしく青天の霹靂だったのだろう。

学年での争いにほぼ決着が着き、退屈しかけていたところへやってきたイレギュラー。

まして遊びで集団戦とはいえ、直接当たっていいようにやられるなど南雲のこれまでからはあり得ない。

左京への悔しさと忌々しさを隠さない態度ながら、僅かに期待と喜びも垣間見える。

南雲に関しては、いまだに疑っているところもある。

学年を纏める偉業を成した南雲は南雲で油断のならない男だ。

不確定だが、敵対した生徒を退学に追い込んでいるという情報もあり、表裏を使い分けているとするなら、本質は変わっていない。ゆえに、とても信用できない者だろう。

だが――。

「あの案を実現するには、去年：例年と比にならないほどの作業量・交渉になるぞ。しかも体育祭の生徒への通知は明日だ。最低限だけでも変えようとするなら、今日は相当帰りが遅くなる。

それでもいいのか？」

この『本気』は本物だと信じられる。

「勿論ですよ！　ありがとうございます！」

「そうと決めれば時間がない。まずは作業の優先順位を決めなければな」

「とりあえず明日でないと間に合わなくなる総大将だけでも、突貫で教師の通知マニュアルに加えましょう！　なんなら、これからいくつかの競技を整理して時間に余裕を作り、効率化を図ってやりますよ！」

細かい部分は9月中に詰めていけば、新人達の実力底上げにも繋がります！」

承認された安堵を平常の不敵な笑みに潜ませ、この信用できない後輩は渴望するようにこれまでにない『健全な』やる気を見せていた。これまで最低限の作業以外、生徒会室に寄り付かなかったが、本気で実現に向けた働きをしてくれるだろう。

元より勝負事には真摯な男だ。

その為なら俺も先輩として、責任者として手を貸そう。

しかし俺を友と呼んだ2つ下の後輩も、厄介な男に目を付けられたものだ。

南雲は手強いぞ、左京。

南雲のここにくての変化の兆しがある原因には、余計なことを除いても俺も当たつてみたい。

この呑気ともいえる判断はそんな感情もあつたことに……俺が気づくのはだいぶ後になつてからだつた。

それは2年半以上も。いや、これまでの人生でも、心から信頼できる友をあえて作つてこなかつた事から派生した『過ち』。

『嘘』を見抜けず傍観しかできなくなるという『後悔』。

そしてそれが巡り巡つて、鈴音の『始まり』に繋がつていくことを俺はまだ――。

9月は、櫛田や清隆関係で微妙な事こそあつたものの、あとは龍園のところへ出向いて栄一郎にお互いの情報とかを流さないよう明言してもらつたり、彼のクラスの仲間を受け入れられるように頼んだくらいで、特筆すべき事は起こらなかつた。

せいぜい増えた体育の時間と、長めのホームルームが面倒だつただけだ。

一之瀬が采配を存分に振るえるクラス内は、輪をかけて順調。平穩万歳である。

四方や早苗が出場する団体競技関係でちよこちよこ話を振られたのと、くじ運のせいで僕が借り物競走にも出ることになつてしまった以外は、揉め事もなく終始スムーズに話が進んだ。

また伝えておいた四方の懸念についても配慮してくれた。仮決まり（提出は最終日らしい）となつた四方の競技でも、一之瀬はそれな

りの余裕を持たせてくれたのだ。

10月に入っても、参加表の提出はBクラス学級委員会の決定であり、体育祭の各組総大将の投票もあったが板倉？とかいう3年生にほぼ決まっているようなものなので、こちらにも僕には関係ない。

体育祭3日前、昼休憩後に戻ってきたら教室の前方で担任や一之瀬達が談笑していたのも、日常を証明しているようで落ち着く光景だ。

「好きなタイプ？」

「先生にもそういうのってあるんですか？」

まあ微塵も興味の湧かない話題ではあるが。

「……ええ。私よりも年上で落ち着いた雰囲気があつて……それでいて、その人がそばにいると幸せになれるの」

「先生よりも年上……？ え、誰かいましたっけ？」

「ふふっ。わからないのも無理はないかもね。この学校じゃ、ほぼお目にかからないから」

「もしかして学校内にいない？」

「いえ、いるわよ？ よかったら紹介しようか？」

「ええええっ！ で、できるんですか!? 本当に!? だったら是非見てみたいです！」

網倉がそう聞くと、担任はおもむろに自分の懐に手を入れた。

「内緒よ？ あんまり褒められたものじゃないしね。今日は偶然ここにいるから、ちよつとだけ会わせてあげる」

「ここに!!! 電話じゃなければ教室の外つてことでs」

あからさまに怪しい話なのに、根が素直な奴が多いせいだからかわれてるな。普段を考えれば、行き着く先は想像できると思うのだが……。

そんな聞くとはなしに聞こえてくる話し声をよそに、担任は財布から1枚の紙幣を取り出して、こう宣った。

「紹介するわ。私の一番大切なひと♡」

——福沢諭吉様よ

予想通り、いや予想以下の大人としてとてつもなくみつともないカミングアウトである。

「……………はい、撤収」

「そんなこつたらろうと思った」

「下手したら常時酔っぱらいの地雷女なのに、金狂いでもあるのかよ。マジパねえな」

だが約半年ほど訓練されたBクラスの生徒は動じない。素早く切り替え、華麗にスルーしていた。ついでに、会話が聞こえていた僕の口からも本音が零れた。

「まあ、待ちなさい。お金と恋人が人を幸せにしてくれるのは事実。それなら両立できるこの恋人は最高でしょう？」

「……………」

「だから美人のくせして生き遅れかけてるんだなあ。いや、かけてるんじゃない、すでに手遅れだったか」

「あと左京君はさつきからボソツと口撃力高い言葉投げかけるの止めようね？ 私、泣いちゃうよ？」

「どうぞ(自由)」

結構な距離があつたというのに、担任はグリーンと僕の方を向き、ニヤニヤと可愛さを欠片も感じない事を言い募ってきた。

「…………私にそんな事言っちゃっていいのかわかる？ 楽しいお知らせもあるんだけどなく。止めてくれたら早めにくっそり教えてあげても」

「だが断る。いい年こいてナニ言ってるんです？」

「こ、この、クソガキツ……………」

「ハハツ。僕がクソガキなら担任はクソババアですね」

「こ、こ(こつ)」

「ニワトリの物真似ですか？ 鳥頭にはびつたりつすね」

「…………っ！ 私っ、担任教師！ 左京君っ、生徒！」

「今度は片言に退化したんですか。あ、ニワトリからなら進化ですね、一応。どつちにしろアルコール中毒か更年期障害なら、早めに療養行った方がいいですよ」

「……………キレそう。このガキは何倍返ししてくるのよ、ほんつとうにもう……………」

「というより。あの、星之宮先生…………言葉が」

しかし距離があるということとは安全だということ。

ゆえに、気分でなんとなく担任の猫を剥がしても、すぐにホームルームだし何も起こりえない。

安全圏から煽れるのは、いつも人生に潤いを与えてくれるものだ。特に年甲斐もなくテンション高くした担任が浮かれてるのを撃ち落とすのは良い気分転換になる。

僕としては、心安らぐ朝のひと時。言ってみれば平穏である。

そう。平穏な日常だと考えていたのだが。

チャイムが鳴り、なんとか立て直した担任が本日の伝達事項——
体育祭の総大将の発表に移った。

最初は先程の煽りの影響かヤケクソっぽく見えていたが、今は一転して再びニヤニヤと胡散臭い笑顔を浮かべている。そういうところぞぞ。

「では体育祭の総大将の発表をしま〜す！

白組の総大将に選ばれたのは——」

それを傍観していたところ、何が楽しいのか担任がウキウキとした態度のまま発表した内容によって事情が変わった。

「全学年B・Cクラスから107票を獲得した1年Bクラス左京夢月君で〜す！ ひゅ〜、パチパチ！ 次点の3年板倉君は49票、三席の一之瀬さんは37票の文句なしで断トツ得票数だねっ。おめでと〜う！」

どうやら担任は、ついにシラフのまま酔っ払う特技を発現させたようである。

常に酔っ払った社会人失格は速やかに帰ってどうぞ。

いや、まあ。これは流石に正当なる現実逃避の一環だが。

富、名声、力。

その全てを希求する酔いどれ担任・星之宮知恵先生。

彼女がホームルームで言い放った戯言は、生徒達をおかしなテンションへと駆り立てた。勿論、僕もだ。

「僕が総大将だと？」

欲しけりやくれてやる。むしろ貰ってくれ！ 誰かが勝手に押し付けた！」

生徒達はAクラスを目指して夢を追い続ける。

世はまさに実力主義という名目の騙し合いを奨励する大後悔時代！

てか、まさか戯言じゃなくて真実だとは思わないじゃん！

「こいつ、ワンピース好きすぎかよ」

「でも、そう決めつけていいの？ 単純に左京君に投票した人が多かっただけじゃ」

見るからに性善説を信奉する一之瀬だが、今回その解釈は無理がある。

「特に目立ってもない1年坊主に、白組内の半数：全校生徒の約4分の1が投票するってどういう理由が考えられる？」

「……目立ってないことはないと思うけど」

「でもそれ以外は確かにそうかもな。普通なら、あつても一之瀬への投票が上振れする可能性くらいだし」

「じゃあ本当に誰かが……？」

第一容疑者になりそうな龍園のやり口と明らかに違うので、その誰かは悪意を利用できる者。そして僕はソイツ『ら』に心当たりがある。「ふん。こんな票操作なんて事をやりそうな奴は、すでに二人まで絞られている。奴らのどちらか、あるいは両方が噛んでいると見て間違いない」

ならば逆転の発想。僕もやっていいはずだ。

心当たり……2年の大半を動かせる（票操作）とかほざいてた南雲と、攻撃的で陰湿な手段（煽動・誘導）を活用しそうな坂柳さんを仮想敵に仕立て上げる。今の段階では言いがかりに等しかろうと、誰もが納得する有力候補だろう。

あくまでこれは生徒なら、という前提条件が崩されない限りにおいての候補だって部分は伏せておくが。だって『それ以外』はやらないだろうし、関与があるならどうしようもないからだ。

「こんなに早く絞れてるの!？」

「というか二人だと!？」

「どちらだったとしても次に打つ手は想像がつく。おそらくこれから体育祭本番までの数日間は忙しくなる」

ともかく、実際にやったかどうかは関係ない。

僕の平穏を崩せばどうなるか見せしめになってもらう。

それと残りの3日間に僕が動かざるをおえない事情を作ること、合法的に練習をサボることも可能。

勿論、後者がこうしてリーダーの一之瀬を差し置いて、無理やりクラスの主導権を握りに行く主な理由である。

「忙しく? 左京君が?」

「そうだ。上げて落とすのは基本。なら無意味に僕を上げた以上、次は落としにかかってくるはずだ。いや、すでに落としにかかっている可能性が高い。僕が対応しないと大火事になりかねない」

「落としに……って、ちょっとみんな見て!? 全学年用の掲示板!」

網倉が叫ぶように言い放ち、見つけた『1年Bクラス、左京夢月の実態』というスレを確認してみると。

『面倒事は可能な限りスルー』

『楽することに余念がない快樂主義者』

『隙あれば人に丸投げの無責任男』

『一言目には金、二言目には儲けの守銭奴』

『先輩や教師すらおちよくる煽りカス』

『手段を選ばず学校を脅す危険人物』

『——左京夢月は犯罪者だ!』

と、本当にそのようなことが多数コメントされていた。

「……………あれ? これ、ほとんど事実じゃん」

ただ、そう。攻撃的なモノはあったものの、誹謗中傷の嵐かと思いきや、僕自身も領けることしかなかったのだ。最後の方だけ論調が違おうし、脅迫や犯罪者云々は拡大解釈だが、夏休みにした事や管理外端末のroot化などを思えばそう言えなくもない。

これってアレか。僕に致命的な情報が得られなくて、しかたなく悪

口系の数で押しただってことでは？　もしくは、お祭り騒ぎの後始末が楽になるよう配慮したとか……？

「首かしげてる……つか、そんなこと言ってる場合か!？」

「なんだこれ!?　昨日の今日でものすごい数だぞ！」

「それにほら！　コメントされた時間っ！」

「は？　全て今日の8時以降だど!？」

「まさかこんなタイミングで攻撃があるなんて！　本当に誰なの!？」

内容があまりにもくだらなくて白けてしまったが、そんな風に感じたのは僕と四方、早苗くらいだったようで、ちよつとした騒ぎになっている。

なにより何故かリーダーである一之瀬が、端末に目を落としたまま俯いているのも大きい。絶対的なブレーキ役がないのだ。

でも逆に考えれば、これは気持ち良くなるチャ〜ンス！　と思つた僕は、威風堂々たる態度を意識して立ち上がり、某魔王のように手を振るって人生で一度は使つてみたかつた言葉を言い放つた。

「——騒々しい。静かにせよ」

別に収まらなくても言えただけで満足だったが、そこは優等生だらけの我がBクラス。ピタツと静まってくれた。ノリの良いことで何よりだ。

しかし、これは想像以上に気持ちいいな。

僕は変になつたテンションのままの思考の片隅で、大雑把な自分の未来を想定しつつ、普段通りに振る舞う。

「魔導王の鈴木さんまでやるんですねっ、夢月さん！」

「時と場合による。やりたいと思つたからやった。それだけだ。

てか早苗、普通にアイ○ズ様でいいだろ。なんで人間名？」

「こつちの方がカッコいいからです！」

「ははは。それだけの理由で空気を一新する奴は夢月くらいだよ」

「お前らもやろうと思つたらやるだろう？　この気分屋共が」

とりあえず今は早苗と四方の援護に笑い合いながら力を得たことだし、強引に話をまとめて——ついでに。

「さ、左京……君……」

……よし。なんであれ一之瀬が顔を上げてこつちを向き、なに言ってるかは聞こえないが口は動いた。

あのクラスの中心が俯いているとろくな事がない。欲求を満たすついでに、内側をまとめ上げられる程度までさり気なく持ち直してもバチは当たらないだろう。

これで後始末は考える必要はなくなり、クラス内を鎮静化するだけで済むからだ。対応自体は僕だけでも難しくない。

「あー、みんなに言いたいんだが、龍園を思い出せ。あのみんなに警戒されまくってるのに堂々とした立ち振舞いを。あれは色々と参考になるコミュ障レベルMAXだぞ」

なぜなら、多少なりと龍園を見て知っているのだから、アイツの在り方の模倣に行き着くのは順当な発想といえるだろう。

そしてアレンジを混ぜて視点を少し変える考えがこれだ。

「そもそも悪い噂だろうと悪名だろうと、知名度を得ることに違いない。対応次第で名声に転化させるのもできなくはないんだ。コメントのほとんどは真実だしな。だから騒ぐことじゃない。不幸中の幸いだと思うべきだ」

「だけどっ」

「それにこれはむしろ好機とも言える」

「なっ……！　こんな根も葉もない…事もないけど酷い噂されてるのに！」

つーか、Bクラス内で僕を批難・排除する方向に話が行かない時点で、流言飛語としては片手落ちである。誹謗中傷や人格攻撃としてもだいぶ手ぬるい。

言い換えれば、日頃の一之瀬が築き上げた結束力の前に、仕掛けた奴はすでに敗北しているということ。

これなら黒幕を南雲、流れに便乗したサブ黒幕を坂柳さん……ということにして仕立て上げるのも容易い。プラスαを得るためのポーンステージと見た場合、全てはひっくり返せるのだ。

ふっ。自分達の日頃の行いと風評を恨むんだな。

「僕が総大将とかいうのに祭り上げられたなら、最低限の上級生との

接触は急務。その時、無名よりかは知名度を得ている方が多少なりとも追い風になる」

「「……」」

「僕を敵に回した奴らの策を利用して、体育祭本番では煽りまくってやるから安心してくれ。」

くつくつく。想像すると笑えてこないか？ 自信満々に準備して打った手を、逆に利用されて歯噛みする南g…坂y…偉ぶってる奴らの姿を。負け犬の遠吠えはいつ聞いても心地良いぞ。ましてやいつも余裕こいてるアイツらのものだ。ふ、ふはははっ！ や、やべえ、めっちゃ笑えてきた！ あくはっはっはっ！

「すごいな。完全に悪役のセリフだ」

「推測が当たってるなら、状況的に正当っぽい反撃ではあるんですけどねえ」

当然、ピンとくる奴にはわかる程度に名前も匂わす。

特別な適正がない僕だからきつと反撃も手ぬるくなるだろうが、それはお互い様だ。早苗や櫛田の手を借りるなら苛烈な反撃もできたが、そもそも仕掛けが手ぬるいものだからそこまではやりすぎだろう。

だけど社会人経験を持つ元おっさんを舐めるなよ。たとえ関係なくとも、僕じゃなければイジメと取られる手を打った代償は支払わせてやろうじゃないか。ま、得票数から考えて、少なくとも関係してない事はありえないと僕の勘は確信しているがな。

それからひとしきり笑い、落ち着きを取り戻した僕は四方と早苗以外が沈黙している事に気づいた。

なので少し考え、担任を含むクラス中から注目を浴びている居心地悪さと沈黙を振り払う為に、穏やかな口調を心がけて落ち着かせようと試みた。

「なに、心配する必要はない。僕は正しく正当な行いでもって対応しよう」

「い」「あ」「げ」

「？」

「今更取り繕っても遅すぎんだよ、この野郎！」

「あと左京君が正当な行いとか何を根拠にそんな事言えるのよ!？」

「今、全員が心配してるのは左京がなにをやらかすかだ！ まさかまた何処かへ殴り込むつもりじゃないだろうな!？」

ふむ。一斉に言われたので、なに言ってるかわからん（すつとぼけ）。聞き流す方向性が妥当だな。

ついでに、殴り込みと聞いて目を輝かせ始めた奴はステイだ。これを見つ先に選ばうとする早苗には難しいかもだが、それが最終手段一步手前なのは社会常識といえる。

ただまあ、僕が目をつけられた結果、巻き込んでしまったクラスメイト達には謝罪が必要だろう。

「それと……えーと、負け組になったらごめん。100万PPは自分で払えるけど、50CPのマイナスは必要経費だと思ってくれたら助かるんだが」

「ゴ、コイツ！ スルーして普通に話を続行してきやがったぞ!！」

「それもすつごいツツコミ難しい部分を申し訳なさげに……！ なんなの、この人!？」

無論、全て計算の上である。

だが、なんか天文部員と本調子じゃないっぽい一之瀬以外全てで意見を一致させてる気がするの、そろそろ本題に入って話を締めるとしよう。この特別ホームルームは、理由があれば参加・早退自由だと最初の方に決まってたから、時間計算しなくていいのは助かった。

「んじゃ、そういうわけだから体育祭までの3日間、僕を自由にさせてな？ うん、そう。正義の対策の為に」

「完全にサボる気満々じゃないか！ これが本音か!？」

「なんでこう、この人が正義とか言い出すと胡散臭さしかないの」

「悪く言われてるの左京君なんだよ!？」

「それ絶対口実にしようとしてるだろ!？」 あっ、待て！ 引つ掻き回すだけして、勝手に帰ろうとするんじゃない!？」

いつかを思い出すクラス内、総ツツコミである。

目ざとく気づいた奴もいるようだが、こういう時に輝くのは戦略的撤退だろう。あとは本来のリーダーや首脳陣に任せれば、良きに計

らつてくれるはずだ。

「それでは方針決定も成されたことだし解散だな！ 本日臨時の司会進行は僕、左京夢月がお送りしました。Bクラスのみんな、See you later」

時は来た、ということだろう。

今こそ話しながらさりげなく準備していた帰り支度を実行に移す時。

締めめの挨拶を早口でした僕は、無駄なく迅速に鞆を掴んで教室をあとにした。

「ああー！ 嘘でしょ!? ホ、ホントに帰っちゃった！ ……クソわよッ!!」

実は僕自身以外は何も決定されてないけど、問題ないだろう。

清隆や高円寺なら理解できる程度の事は言つてある。それなら一之瀬や神崎もいるし、充分だと判断させてもらおう。

それに正直、色々飽きた。順を追って説明する意思に、面倒臭さが大差で勝ってしまったのだ。しかたない。

だから今日はバイトのシフトが被ってる愛里に、体育祭までなるべく僕に近寄らないよう忠告だけして、さっさと帰って寝るとしよう。

……てか、おい。うちの担任ってルックスとフレンドリーさが数少ないウリじゃなかったのか？ 最後に聞こえた担任の声、異質なお嬢様臭っぽいなんか感じたんだけども。

と、自然に付いてきた四方と早苗に聞いたら、もうそんな小さな事どうでもいい。確かにそうだ。あつはつは！ で全て片付いたのは完全なる余談である。

ああ……うん。僕は本当に仲間に恵まれてるなって、改めて思った。それだけの余談。

これから体育祭までの数日間、一之瀬や神崎、柴田などを止めてくれると確信できたので。

102、前夜

10月8日の木曜日。

体育祭が明日に迫り、どこの学年・クラスも最終準備が始まっていた。

この頃には噂は校内を駆け巡っており、僕は色々仕込んでくれた奴らのおかげで悪目立ちしている。まったくもって陰湿な方面の手際が抜群なことだ。

今いる食堂では、気を張っている時の早苗のごとく遠巻きにされており、僕自身がこれを体験するのは久しい。と、ここに留まる為に頼んだコーヒースをすすりながら懐かしい気分になった。

そんな優雅な昼下がりである。

勿論、社会人時代のパワハラと脅迫状、嫌がらせの3コンボからするとかなり生温いが、それもまた学生らしくて微笑ましい。

更に明らかに周囲と隔たりが存在し、時々聞こえるように陰口つばいモノを僕に届けてくれるのも趣がある。生贄の総大将とか常識のない犯罪者とか言われて思わず小さく笑いが零れ、噂してた奴らに引かれてしまった。

これが龍園の見ている光景、か。知らんけど。

まあ、何人かのサンプルを観察できた結果、裏で動いている存在を確信できた。ただの凡人に親切なことだ。それ以前にわかりやすかったから、今更ではあつたが。

なぜなら今いる食堂に入った時もなかなか凄く、多数の上級生と思しき者達(ほんの少し同級生もいたが)が一身に注目を浴びせるのは、仕込み以外では考えにくい。

コーヒーの前にチョコパフェを食べている時も、読み物をしている時も、なにか変化あれば反応してくる彼ら彼女らは面白いものだ。

いつそポーズを決めながら「気ん持ちいい〜〜!」とか変態チックな真似をしたらどうなるか、好奇心を抑えるのに苦労した。

一人で無駄に居座って悪目立っているだけで、獲物が入れ食い状態

になるのもたまらない。

2年生は注目を浴びせかけられるばかりで話しかけてこなかったが、見ず知らずの僕を心配するかのような人の良い3年生と一部の1年生には、いくつか本番での仕込みを頼むことも簡単だった。

10回の成功よりも1度でも失敗したら傷が付くと考えている実力至上主義者の卵相手は楽でいい。

こういうエサの役回りが、僕のような経験値だけが取り柄の奴に回ってきたのは誰にとっても幸運だったのだろう。繊細だったり、真面目だったり、責任感が強かったりする奴には多分かなり酷な仕事になるだろうから。特に生態に謎の多い女子がターゲットだったら、ダメージでかそうである。

そして3年生にあまりそういう攻撃の意図が感じられないということは、南雲の手が入っているのはほぼ確定である。また大穴で学が噛んでいる可能性も考えていたが、それがなくなったのはそれなりに大きい。

坂柳さんに関しても、先ほど葛城・戸塚と橋本が僕を見て何か話してたから、何らかのリスクが少ない手を打ったと推測できる。でなければ、直接話しに来る奴らだ。

まあ、清隆などの容易に足を掴ませない奴を相手するよりかは、幾分マシな状況だったといえるだろう。

……さて、そろそろ目を逸らしてたところへ意識を戻そうか。

ここ2日、あえて一人で目立つところにいる僕の状態を知って、遠くから愛里が心配そうな目を向けているがこちらは大丈夫。

早苗をはじめ、天文部関係者が彼女を守らないわけがない。事情もある程度話してあるし、本番に応援を頼んだことで少しは精神も安定したはず。巻き込まない体制は磐石といえるだろう。

昨日別々に冷やかに来た鬼龍院先輩や龍園達、堀北さん（清隆付き）も、適当な雑談や煽りだけして帰ったからあっさり見切ったのだろう。龍園に至っては、残りたがる栄一郎を石崎に命令して遠ざけてくれたのでグツジョブである。感謝を告げたら、訝しげに見られた

が。

いやまあ、栄一郎に関しては、編入早々に一応の上役が集中砲火浴びてたら不安になる気持ちもわからないではない。だけど、他人を気にしなければゆったりとした食事 or 読書タイムなのはわかるだろうに。

特に問題ないコイツらはいいのだ。

一際、妙な事になっているのは一之瀬である。

落ち込んで見えたり、逆に無理に明るく振る舞ったりと、躁鬱の落差が激しい。それでいて、普段通りだと本人が言い張ってるから始末が悪い。

しかもクラスでやること(総大将は必ず棒倒し or 玉入れ、騎馬戦、リレーの3競技に出なくてはならないらしく、僕をねじ込む調整など)とかが終わると、僕の近くに来てたりする。その勤勉さだけはいつも通りなのだが、いつもと違う点としてほぼずっと一人なのだ。

監視するとは神崎からも聞いていたが、少々僕に構いすぎではなからうか？ 話してないとはいえ、今の僕のそばにいるのはヤバいとわかるだろうに。

てか、神崎よりも一之瀬が張り付く割合がかなり多い。僕が総大将になった次の日からずっと暇さえあれば……なんならクラスのことを網倉や柴田に任せて暇を作ってまで近くに佇んでいる。端末やPCを頻繁に使ってるから仕事はしてるのだろうが、誰かが来ても一人にしてほしいとか言って遠ざけてまで。

なんなんコイツ？ 実は僕のこと好きなの？ 今すぐ告白されたら……断るしかないけど、なんかのボーナスタイムだったら後でめっちゃ後悔しそう。いや、到底色っぽい事を考えてるようには見えないし、一之瀬の好感度など投げ捨ててるような僕なので、冗談だけでも。むしろ、考え込んでいる、というか落ち込んで？ 後悔？ してるように見えなくもない。

「……」

ふむ。一之瀬を好きな野郎共。

いるんなら今こそ好機。

上手く慰めたり優しくすれば、案外コロツと落ちるかもしれないぞ？

龍園か清隆以外だったら僕も邪魔しないから、突撃して明日の体育祭までになんとか元気にしてやってくれ。

つて、わけにもいかんよなあ。

そろそろ夜だし、自己申告通りに一之瀬が処女だとすれば、今夜やられたら明日に支障をきたす。股を気にしながら、飛んだり跳ねたり走ったりする一之瀬はあまり見たくない。頑張つて上位にいる評価や成績も必然的に落ちるだろうし……。

なにより周りにたくさんいる彼女の友達か男の誰かがそのうち元に戻すだろうと樂觀していたのに、こんな顔を見せられたら流石に気持ちよく寝られない。

なら、適任でも得意でもないけど、僕も対処してみるか。やるだけやれば諦めもついて、よく眠れるだろう。

仕込みもだいたい終わつたし、天体観測しながら待てば、失敗してもすつぽかされても体育祭で僕が寝不足になるだけである。

よし。そうと決まれば、思い立つたが吉日。

近くに本人がいるけどメール送信、と。

そして話しかけられる前に、間髪入れず速攻で立ち去る。

もはや目立つ必要はないし、彼女はちようど話しかけられてる。追いかけては来ないだろう。

しかし一之瀬の内面はどんな事になっているのか。女子とは真に謎多き生物である。

愛里や椎名もそうだったが、普段優しげな女子は何が琴線に触れるのか：あるいは何が地雷かイマイチわからない。この点だけは早苗や櫛田を見習ってほしいものだ。見渡す限り地雷原なら全体に目を向けられる。

……いや、やっぱないわ。本来の意味のレディーファーストじゃあるまいし、そもそも地雷がある前提で接さないといけないとか気が休まらない。優しい娘は優しいままできてほしい。

途中から思考が脱線していた事に気づかないまま、僕は寮の裏手に

あるスペースに移動して、天体観測の準備をするのだった。

10月8日20時頃、学生寮の裏手のスペース。

僕はシートを敷き、自室から持ち出した座布団を枕代わりに寝転んで月を見ていた。本日は気温もほどよく良い夜である。

「——う君！ さきよ……んってば！」

だから妙に揺れる視界を感じつつも、月を一心不乱に眺めていられた。

「左京君!!」

「うおあつ！」

当然のことながら、そこへいきなり割り込んできた陽キャ美少女の顔は精神にダメージを与える。

てか、ドキがムネムネして、頭突きしそうになったじゃないか。

「驚かすな、一之瀬！ 前もって声くらいかけてくれ！」

「散々かけたよ！ 揺すっても反応してくれないから、どうしようかと思ったよ！ こんなところで寝転んで反応もしないとか、人騒がせだから本当にヤメテ」

「……ま、それは置いといて」

「置いとかないで」

ちよつとそれもそうだな、って思ったので次から気を付けよう。いくら車が来ないからって、駐車場っぽいスペースで転がるのは踏まれる危険性もあるかもしれない。

「で……あー。なんでここに一之瀬が？」

「左京君が呼んだんでしょ!? 時間指定なくて場所だけのメールで！」

気づいて慌てて来たら、左京君は目を開けたまま仰向けになって反応しない！ 寿命が縮んだよ！」

「あ、ああ。そうだった。すまん、忘れて没頭してた」

「……はあ。もういいよ。それで用件はなに？ やっぱり例の噂の相談をする気になった？」

ため息をついて幸せを逃した一之瀬が聞いてくる。

これは昨日、一度だけ持ちかけられた話を言ってるのだろう。だが、信頼できる友達がいる僕には無用のことである。

「ん？ 友達が真剣に受け取らなきゃそんなのどうでもいい。今更疑うようなことはお互い無粋だしな」

「そんなの!？」

「それに逆用もしたから、もう何も必要ない。終わった話だ」

「終わった話って……。で、でも何か私と話したいから呼んだんじゃないの？」

「だから、どっちかという逆なんだが——その前に」

逆?と首を傾げながら言う一之瀬。

でもまず僕は灯のライティング調整をして端末を操作した後、しとかないといけない事の確認がてら必要な質問をする。

「一之瀬って彼氏できた? もしくは好きだったり気になってる奴いる? あつ、名前は出さないでね。いるかないかだけでいい」

「え? ええっ!?! そういう話つてことはもしかして」

「ともかく、いずれかがいるんならソイツの元へ急行してくれ。現在時刻20時過ぎなので、急がないとお楽しみが減るぞ?」

「はにゃ??!」

驚くようなことも、許容量を超えるようなことも聞いてないのに……なんだ? 一之瀬版宇宙猫か?

彼氏とかいたら僕が話すのは筋違いだろうと聞いたが、はしたなくポツカリと口を開けて……。何か突っ込まれたいのか? 生憎と水筒のお茶しかないが。

「大丈夫。彼氏になってなくとも、今の湿度高い状態の一之瀬が抱きついてジツトリと落とりに掛かれば大抵の奴はイチコロよ。清隆と龍園以外なら応援するから、その恵まれた容姿を存分に活用してエナジードレインした上で、明日の朝までに湿気を取ってこい。運動面への影響を考えて、最後までは致さないようにな」

「え? 本当にどういうこと!?! え、待って? 何がなんだかわからない。話が予想外すぎる方向に雪崩れ起こしてて私……」

混乱してはいるものの、なんか普通に元気っぽいんだけど、これって手を打つ必要があるんだろうか。

しかしこのまま帰したら、朝には元に戻ってるか確信が持てない。もう少しこの話題で突っついてみるかな。

「この反応は喪女のままということか。それでも気になる奴さえないとは、年頃の娘としてどうなんだ」

「恋愛かは別として気になる人はいるよ!! その人の事を考えると『胃』がギョングンして、ヒヤヒヤドキドキの夢がギツシリになるも——あつ!」

なんだよ「あつ」って。聞いちやダメなことだったとでも言うのか？

しかしどういう趣味してやがるんだ、一之瀬は。

擬音が多すぎて、ギャップ萌えにしてもわけがわからん。

てか、エア彼氏じゃなければ、気になる人とやらも自分勝手な周囲を振り回す系ダメ男に思えるんだがそれは。

「なんだソイツ。あからさまにヤベエ奴じゃん。」

……いや? 一之瀬の趣味がヤベエのか? てか、気になる人で、

胃がギョングンなるとか初めて聞いたわ。でも、まあいいか。

よし、ソイツの元へ向かってリフレッシュしてこい」

「……………向かっていいんだね? 本当に?」

それは勘が反応する不穏な態度だったが、僕が筋違いを避けるには背中を押す選択しかない。

「いいから頭からっぽにして行け。一之瀬の様子がおかしいと、なんか不安になってくるんだよ」

「はい、来たよ」

「あ?」

「えい———ついいいい〜!!」

不可解な様子を見せて突然飛びかかってきたので、僕はヒラリと身を躲して立ち上がり、一之瀬がシートに倒れこんだ瞬間、その背を踏んづけた。一応、対早苗用の警戒をした上で靴を脱いどいてよかった。

「ふぎゅっ。むぎゅ〜！」

「ふはははっ。早苗にやられっぱなしだからと侮ってもらっては困るな。一之瀬が運動を得意としているのはわかっているが、僕にそれでは足りない、足りないぞ！」

「ちよちよちよ、待って！ 踏んでる！ 私を踏んでるから！」

ともかく、どういうわけか奇襲してきた一之瀬の反論を聞き流しつつ、もひとつ高笑い。

「当然、わざとだ。いきなり飛びかかってくるとはふてえ奴」

「ごめんってば！ ちよつと私も東風谷さんみたいに……」

「黙れ。そんなお前を教育してやろう。」

お前に足りないもの、それは——」

そして力一杯に息を吸い込み、一之瀬の背中を足でグリグリしながら景気よく煽り散らす！

「情熱、思想、理念、頭脳、気品、優雅さ、勤勉さ！」

そして何よりも—— 速 さ が 足 り な い !!」

うつわ。数日前に教室でやったアレコレより気持ちいい。僅かに溜まっていた陰口のストレスが溶け消えるようだ。

やはり格上相手の煽りはひと味違う。速さ以外はほとんど一之瀬に完敗してるわけだが、そこは目を逸らすのである。

「……うぐう………にやはは。ダメだったかあ。でもやっぱり左京君って、口でセクハラはしてもエロいことはしないんだね」

「は？ 踏まれたまま、なに言ってるんだ？ バリバリしたいが？ エロいこと大好きな普遍的男子だが？」

「嘘だね。自惚れるわけじゃないけど、私にどエロいとか言うくせに抱きつこうとしたら即躲して、踏んづけて煽ってくるんだもん。エッチなことしたいんだったらそんなことしないよね」

「ハッ。馬鹿なことを。時と場合を考えろ」

「時と場合と……私のことを考えてるんだね。ありがとう」

なんでそうなる？ 一之瀬の脳内変換に不具合が出ているようだ。

なぜなら僕がエロに流されたら、目的達成不可になる可能性が高いのにするわけがない。気心知れた奴以外に対しては、必要な時に必要

な分だけをやるのが紳士の美学というものだろう。

……踏まれて感謝するようなポンコツには、もっと強く言うしかないか。

「一之瀬の気分転換の為に呼んだのに、本当にエロいこととして曇らせたら本末転倒だろうが！ アホなの!? ちゃんと頭使ってる？ ドMな学級委員長さんよお!」

「あ、それ……気づいて——って、グリグリ踏まないで！ あっ、ちよ、強っ！ にやあー！ にやっ!? にやはははははっ!! あ、あれえ!」

自明な言葉を強めに投げかけ、一瞬だけ足に力を込めると一之瀬は少し暴れ……何故か笑いだした。

「人が『あんまり』いないとはいえ、野外で踏まれて嬉しそうに笑い出すとか真性だな！ ついに某クルセイダーに見紛うほどドMな自分を受け入れたか、この変態!」

「違っ！ なんか勝手にい、にやはっ。わ、笑いが込み上げてて、あははは!」

「いつか性癖に合致するSな彼氏ができるといいですね！ 末永くお幸せに！ くっ、リア充爆発しろ!」

「だ、だから違うって！ あっははははは!」

背中に笑いのツボでもあったのか、もうさして力を入れてないのに笑い続けてやがる。近所迷惑な奴である。

103、主人公

一之瀬帆波。

僕の所属する1年Bクラスの学級委員長でクラスリーダー。

校内でも有数の陽キャであり、自然と場の中心に立っていることが多い逸材。更には優れた能力バランスとお人好しレベルカンストの優しさと包容力を併せ持つ化け物でもある。

しかして、その実態は——ドMの変態である。

おそらく容赦なく罵声を浴びせて奮い立たせたことで、ついに開いたのだろう。

貶されて喜ぶ新境地を……！

こんな変態でも、恋人を作ろうと思えばすぐ作れる容姿や性格、スベックにカリスマまで最低4物も持っているという事実。

僕は今、世界は不条理に満ちていると嘆きたい気分だ。

こんな世の中でいいのかあー！ と。

「ふはあつー！ ふう、ふう」

内心苦悩し、妬んでいる間に、笑い涙を拭った一之瀬は差し出したお茶を一気飲みして、笑いの波と笑い転げていたせいで荒い呼吸を落ち着けた。

「うっわ。吐息エロツ！」

「……なんでそういう事言うかなー、左京君は」

「癖になつてんだ、隙を見逃さず八つ当たりするの」

だから僕が八つ当たりしたり気味の嫌がらせをするのは、正当なる権利である。それに水筒を渡したのは僕とはいえ、全部飲み干した一之瀬にも非はあるはずだ。

「でもエツチなのはダメだけど……久しぶりに心から笑った気がする。なんだろう？ 今の私、すごくスッキリしてるの。これは左京君のおかげだし、広い心で見逃してあげよう。……なんてね。にやはは」

それなのに彼女はスッキリとした笑顔を僕に向け……え？ なん

でこんな清々しい雰囲気になってんの？ さっきのは流石に冗談だよ？ 煽られ。踏まれて。ダメ押しのセクハラまでされて。直後にその相手へ笑顔を向けるとか、一之瀬の精神構造はどうなってるんだ？

更には夜なのに十全に放たれる光属性の見えない波動から聖女たる所以を知った僕は、ダメージを受けた気分になった。

これは一刻も早く、聖なる力を抑え込まねば！

それには――。

「ぐ、ぐあああつ！ はあ、はあ。い、一之瀬よ。よくぞ僕を倒した」「急にどうし……というか、倒した？」

「しかし光ある限り闇もまたある。僕には見えるのだ。再び闇から何者かが……早苗という問題児が現れよう」

「あ、これってドラゴンな国民的ゲームの……」

かの大魔王に肖るのが無難だろう。

早苗や櫛田に比肩してくるなら、これくらいやらないと効果が薄いかもしれない。

てか、これも知ってるのかよ。ジェネレーションギャップはどこいった。

「だがその時お前は、別の問題にかかりきりになって手が離せまい。それが何かは見えないがな。わははは……ぐふっ」

「何か見えないのはね？ きつとそれが左京君本人だからだよ。だって私にははつきり見えるもの、その未来」

「あの……ネタに僕をぶっこむのやめてもらっていい？ なんか本当にそんなことになる気がしてくるじゃないか。どうせなら早苗に盛れよ」

「何を今更。ほぼ確実に起こる未来だと私は思ってるよ」

「……」

ふう、危なかった。ゾーマ様のお言葉を借りなければ即死だった。偏見にまみれた返しはされたが、これくらいなら問題ない。

やはり闇！ 闇こそ全てを解決してくれる。

光が溢れるような清々しい雰囲気の一之瀬さえ中和して、呆れた感

を出してくれたのだ。早苗への誘導は失敗したが、許容範囲である。一方、そんな一之瀬のDM疑惑がより濃厚になってきて、本気で開けちゃイケナイ扉を開いちゃったかと違う心配が湧いてるわけだが。そして、もはやどうしようもないわけだが。

まあ、僕の対女子スキルでは達成見込みの低い用件——女子を通常状態に近づける——を実行するまでもなく、なんか勝手に立ち直った？のはよかったけども。

「何はともあれ、左京君。今夜は元気づけてくれてありがとう。お礼に私にできることだったら力になるから、遠慮なく“何でも”言つてね」

「マジで!?　じゃあ遠慮なく。ひゃっほ〜い!」
何でも。

一之瀬のような美少女から飛び出すと、素晴らしい言葉である。言つたばかりなのに、またしてもつけ込む隙を与えてきやがったので、追加でもう一手。わざと歓声を上げて反応し、今度は慎重にラインを越えないよう『馬鹿な真似』を実行に移してみた。

「ひくっさっ・パイタッチ!」

具体的には、正面から隙だらけな——高1のくせして豊満すぎる一之瀬の母性の象徴を揉みしだいた!

それにしても懲りずに隙を晒す奴である。リスクはあるが僕が役得と泥を被るから、直接痛い目見ることでもいい加減学習してほしいものだ。

「え——あつ」

唾然とした顔を観察しながら、高校生離れた乳を揉む。

身体は大人顔負けだけど内面は子供っぽい一之瀬に、精神的な痛い目を体験させつつ、肉体的には痛くしないよう力加減に注意すると……このくらいが妥当かな。正直、役得よりもすぐく気疲れするが、直接行動じゃないと証拠にならない。

ひと揉み、ふた揉み、さん揉み。

そのまま、ふくむ。いい乳だ。三ツ星は確定だな!　と口に出そうとしたその時。

「は——んっ！　くっくっ！」

「ないすそばっとお!!」

どこかエロく聞こえる吐息を零して我に返った一之瀬のローリング・ソバットが、ようやく僕を弾き飛ばしてくれた。

「……………左京君。何の真似かな」

倒れ込んだ僕の前に仁王立ちする一之瀬の発する言葉は、問いかけではあっても疑問形に聞こえない。迫力はなくとも、相当お怒りのようだ。

これだけやったのだ。その表情には怒りに加えて、敵意や恐怖、元を取ってやるといった負の感情が浮かんで……………ない？　は？　怒りが要因だろう。少しだけ顔は紅潮してるが、なんか痛い目に遭ったって感じじゃない。どうなってるんだ？

早苗や櫛田ならもっとうとう、ここぞとばかりに責め立て——いや待て！　変態確定とは言っても聖女である事に変わりはない。そもそもあの邪悪らと同列視する判断が間違いだった？

思い至った推測に、アイツらと違って付き合いが薄い女子にするべき戦術ではなかったかと、僕は悔いる気分になった。

しかし、後悔したり呆然となってる場合ではない。ここでこの愚行を止めては、リスクを払ってやったこと全てが御破算だ。押し切れ、僕！

だから、ことごとく想定を外してくる一之瀬の反応に内心混乱しながらも、なんとか用意しておいた……………これだけは曇りのない感謝を僕は伝えられた。

「自信を持って、一之瀬。蹴りは慣れない感じのへっぴり腰だったが、素晴らしく良い乳だった。お前の力……………いや、乳は確かに僕の力となってくれた。ありがとう……………本当にありがとう！　今夜は良い夢が見れそうだ」

「こ、この人。感謝してるだけ？　あんな……………え、本当にどういふつもりだったの？　ダメ……………全然わからない。通訳はどこ？」

あえて立ち上がらずに勢いに力を受けて感謝『のみ』を伝えると、氣勢を削がれたように困惑してしまおう一之瀬。ここは普通、もっとお怒り

を滾らせ、アドを取りに来る場面だろうに。

また性別は違うが、四方や清隆、高円寺あたりなら、正確に真意を見抜いた上で流されず自分を通してくるはずだ。なら、一之瀬もすぐ気づかなくても大丈夫だろう、多分。

しかし問題は現在である。普段の雰囲気に戻ったのはいいが、あまりのチョロさと素直さ。

——一之瀬え……なんて雰囲気流されやすい娘！

これには流石に心配が再燃しだったので、忠告と警告のセットを届け、軌道修正しておく。

「でもこれに懲りたら、男に何でもか言っちゃダメだぞ☆ 次に言ったら、マジでそのエロい乳に顔埋めてやるからな？」

「あ、これ違うな。新種のセクハラ……セクハラ!? 左京君！ エツチなのはダメだって、さつき言っただけでしょ!? そのうち、あなたって本当に最低の屑だわ！ とかって言われちゃうよ!?!」

「いや、なんで一之瀬がそのネタ知ってんだよ。やっぱリムツツリじゃないか」

試しに方向を変えて、椎名からラーニングした言葉の急所突きを繰り出すと、リアルではあまり聞かないぐうの音とともに、真つ赤になつて早口で捲し立ててきた。

この部分的にポンコツなのは、もうホントに駄目かもわからんね。

「ぐ、ぐぬう………と、ともかくっ!! あんまり私以外にはそういうことしないように！ 当然だけどこの学校は特に厳しいんだからね！ 今度こそ退学になっちゃうからね!?!」

「誤魔化したな」

「お、おお、お休みなさい!!!」

そして高1女子のくせに、エ〇ゲ知識かそれに準じる知識を持つことを暴かれた一之瀬は、真つ赤な顔のまま就寝の挨拶を投げつけ走り去っていった。勿論、大つぴらにされたら致命傷なはずだった僕の痴漢行為は、一之瀬自らがセクハラへと置き換え、少なくともこの場では水に流された。

マジでか……。色々負担をかけた分の借りを返すつもりで、気分

転換と彼女の選択肢を増やそうと、一之瀬のヘイトを僕に向ける策まで呑み込まれてしまうとは。彼女の善性の強さと種類を見誤っていたのかもしれない。

……ま、まあ想定外だらけだったが、なにはともあれ僕の誤魔化しは完了である。そういうことにしておこう。

ふっ。他愛もない。経験値が足りていないな。動揺しすぎだ。レベルを上げて出直して来い。

その暁には、四方と愛里と早苗と高円寺と清隆に丸投げする準備をして待っていてやろう。一之瀬が上り詰めた場所の遥か下からな。

って、嘯いとけば読めなかった流れの誤魔化しにはなるかな。

ついでに、さっきの乳揉み場面の録画も……よし。僕の顔と行為はバツチリ。一之瀬は暗さもあつて髪色も不明瞭で特定困難。完璧だ。

後で「この動画を使えば、一之瀬にリスクなく僕・左京夢月に打撃を与えられるよ。効果的に使ってね」って文章を添えて、一之瀬に送っておこう。

櫛田式の応用だからどこまで使えるかは一之瀬次第だけど、これを渡しとけば少なくとも僕が一之瀬を信用している事は伝わるだろう。

この痴漢行為で今度こそ好感度が下がりに、これから警戒されるだろう僕からの信用などいらんとは思うが、証拠付きの信用が彼女の気負いを減少させてくれたらベスト。完全に察する事ができなくて、マイナスな結果だけ残つてもベター、ということしておく。とりあえず、現時点の僕ができる手は打つたことで満足した。

ただ自分で言うのもなんだが、惜しむらくは乳を揉む僕の表情が真顔であまりスケベっぽくない点。

行為のみで警戒させることに集中しすぎて、「げへへ」や某男女平等にドロップキックする鬼畜男っぽい恐怖心や嫌悪を催す言葉や態度にまで頭が回っていなかったせいだ。一之瀬の妙な反応はこれを見抜いていた可能性がある。

天然マツドメイトである清隆の域に到達するのは、僕には難しかったようだ。

しかし結局、ここ数日の一之瀬の様子が変だったのと、普段通りつ

ぼく戻ったのは何が要因なんだったんだ。考えられるのは——あ、女子特有の月イチで不安定になる生理現象か？

今更思い至っても遅いが、つまり僕はそんな状態の女子を踏みつけ、乳を揉み、色々誤魔化して帰したゲス野郎ということになる……？

………考えないように。いや、忘れてしまおう。早苗か高円寺に露見したら、また空を飛ぶ可能性が生まれてしまう。触らぬ神に祟りなしである。

一之瀬が去り、首尾を確認してから思考を切り替え、僕は反対側にある建物の陰に視線を向けて声をかけた。もう一つの予感があった為だ。

「なんとなくここに来ると思ってたよ、四方」

「……やっぱり気づいてたか。なんで気づいた？」

「勘」

一之瀬を踏んでる時に、野生の四方がいる気がした。

確信染みたものはあったが、僕の感覚と直感やはり間違ってたなかつた。

というかいらないと思ってたなら、いくら最悪嫌われてもいいと思ってる一之瀬相手でも、精神的ブレーキなしに二人きりであんな真似まではしない。

それに信用していると伝える為に一之瀬側から僕の弱点を作らせても、他にそれを知る奴がいなければ意味が薄れてしまう。

「勘って、お前なあ。そればかりじゃないか。これまでからすると本当にそうなんだろうけどさ」

「しよがないね。そうとしか言えないし」

「俺がいることに気づいた上でアレか？」

「というか、四方がいたからこそ、だな」

そしてその立会人には『主人公』属性を持つ四方がうってつけだつ

た。

ああ、キャットルーキー関係のという意味の主人公じゃなくて、何らかの物語を作りそうな奴という意味の主人公である。個人的には、愛里や戸塚にも似たような属性を感じている。

ちなみに、他にヒロイン属性やボス属性などを感じてる奴らもいるが割愛。ヒロイン属性は橘書記だけだからともかく、僕の主観でボス属性持ちは妙に数が多いからだ。

「……まあ、それはいい。本当は良くないけど、それは一旦置いておく」

「置いておくまでもなく、持ってたっていいよー」

「ふぎけるな。夢月に話があるんだ」

「話？」

四方の珍しく真面目な雰囲気を見て茶化すのはやめ、きちんと聞く事にする。

「一之瀬から聞いた。体育祭で俺にインターバルを充分に取らせれば、東風谷や柴田と合わせてトップ3独占も可能かも、だって？」

「ああ、うん。利用したみたいで一之瀬には悪いが、この協力をしてもらう為に小細工と焚き付けを少々」

「お前の目的は結局なんなんだ？　なんとなく予想はできるが、夢月の口から聞きたい」

「直近の目的なら四方、お前だよ」

今回は真剣みたいなので、しっかりと目を合わせつつ、手を打ったことを認める。

もう変更できないし、バラしても問題ないだろう。

伝えたいことはシンプルにストレート一本でいこう。

「——トップだ。僕を使い潰すつもりでやっていい。さっきの一之瀬含めてマックスベットしておいた」

一之瀬が不調だと、全体のバックアップが不十分になるからな。慣れない真似とリスクを払ってでも、僕にできることはする。

「……っ！　夢月、お前」

「僕にはできれば見てみたいモノがあるんだ。強制はしないけど、そ

の為なら全力で手を回す」

「なんでそこまで……」

それにしても、なんでそんな質問なんだ？

さっきの痴漢行為か、ここ数日の早苗と一之瀬以外の暴走を止めてくれてた件を言及されると思ってたんだが。それなら普通に返礼つてことで済ませられたのに。

てか、今はまだ片鱗程度だけど、キャットルーキーを除いてもスターの輝きを感じるんだから、友達のそれをより輝かせたい&曇らせたくないの言うまでもなく当たり前だろう。

「あん？　なんでって」

一之瀬とは逆に、重要部分『しか』わかってない可能性が出てきた四方の問いかけ。

まあ当然といえば当然かもしれない。材料がない状態では、いかに四方といえども正答まで導き出せない。

だけど、未来がこうなるかもしれないなんてのは誰も信じられないし、僕だつてわからない。理屈も合理もなく、きつと理解すらもできないだろう。

それなら、某ゲームの聖人・サミュエルの言葉を借りて、現時点で言えることだけでも本音で明かす。

「四方以外に賭けても勝てない……だろう？」

だが、そのまま言うのは恥ずかしい。

続きは僕が思った言葉に即席フィルターを通して、それなりに納得ができるように変換して伝える。

「天才達が跳梁跋扈する中、凡人の僕では勝ち目は薄い。なら、その力がある奴の場を整えるのが最適解の一つだろう。んで、これが僕が自分で決めた目的と役割だ。」

お前ならできると信じてるぜ、相棒」

友達や、まだいないかもしれないがファンを助けるためなら全力を出してくれる奴なのは、これまでの付き合いでわかっている。飄々として見えて四方は情に厚い男なのだ。

内実が力押しだろうと、本気で助けを求めればきつと助けてはくれ

るだろう。

「……………はあ。いつも勝手に調子良いこと言いやがって。終わったらお前の隠してることを聞かせてもらおうかな。逃げるなよ?」

「逃げないさ。僕が好きでやってることだしな」

「好きで……………か」

「おう。だからもう隠す気はないよ。体育祭が明日の金曜だし、休養に1日空けて日曜に関係者を集める。そんな時に、そのへんも全部話すからそれまで待っていてくれ」

元々そのつもりで、青娥さんに頼んで喫茶・芳香に時間と場所を確保しており、四方以外の愛里と早苗、高円寺、鬼龍院先輩に声をかけてある。来る来ないは自由だけど、四方と愛里には話しておくのが筋だろう。

確実に長くなる話なので、邪魔が入らず、喉も潤せ、腹も満たせる条件を揃えるのは面倒だった。灯台もと暗しというべきか、バイト先に全て揃ってるのに気づくまでだったか。

ついでに来週の月曜は体育の日で祝日だから、宴会して全員潰れてもOK。好都合な三連休である。

「ほう。」

……………ところで、こんなところで夢月が一之瀬を踏んづけて高笑いしてる動画が撮れてしまったんだが、どう使うのがいいと思う?」

「逃げないって言ってんだろ! 恐ろしいブツを作り出すな!」

「あっはっはっは! お前が言うなよ。ははっ」

「笑ってんじゃねえ!」

これまではぐらかし続けてきた因果が巡ってきたのか、なかなかトリッキーな札まで使われて念押しされてしまったけども。

まあ、お互い様ではある。

明日の体育祭で僕が『したい』ことにもひと区切り付くまで、はぐらかすしかないのだから。

人事を尽くして天命を待つ。

そんな心境になりながら冗談を言い合っている僕と四方を、一之瀬が来るまで魅入っていた月と■■■が静かに見下ろしていた。

104、始まり（前半、四方視点）

「はじめましての人ははじめまして。

1—B、天文部部長の左京夢月です。

今回、1年なのに何故かこちらの組の総大将に推薦されたので、挨拶させてください」

体育祭にて。

学校史に残るだろう左京夢月のパロディ演説は、こんな弱腰ともいえる第一声から始まった。

この時点では、夢月をよく知る者以外、なんだこいつは？ なんてここに立っているんだ？ コイツがああ噂の……。みたいな印象だっただろう。

幸い：と喋っているのか、ここ半年ほどの付き合いで本人は気にせず、仕方のないことだとわかっていても、友達が侮られ、悪く言われるのは気分がよくない。

ただ夢月は、クソ度胸と鈍感さ、そして独特な雰囲気併せ持つ自称凡人の奇人だ。

このまま無難に終わることだけはない。

結果も勝敗も評価も印象も。

それらのことごとくを覆ってきた夢月なら悪評も吹き飛ばしてくれる。

左京夢月という俺の友達は、人にそう思わせ認識をひっくり返すことにかけては、天才よりも天才的どころがあった。

それに今まで俺を含めてあれだけ癖の強い天文部の奴らを曲りなりに纏め上げ、普通なら会話ですらありえないだろうくせ者複数となんらかの関係を持ち、続けざまに起きたトラブルや試験も即座に解決に導いてきたのだ。

生徒会から今回の話があったと知った俺をはじめとする夢月の友達連中全員は、もはや夢月が何かをやらかすことを疑っていないかと思う。

そしてそれが本格的に『始まった』のは、挨拶と事情説明を語り終え、深呼吸した夢月の雰囲気が変わってからだった。

入学してすぐに体験した東風谷や堀北先輩のような静寂を強制するものではなかったが、気づいた時には不思議と話に聞き入ってしまう空気を創り上げていたのである。

そして場を整えた夢月は静かに口を開き――。

「諸君、僕はおちよくなるのが好きだ。

諸君、僕はひっくり返すのが好きだ。

諸君、僕は煽り散らすのが好きだ。

そうする為に、攻めるのも、返り討ちも、罠に嵌めるのも、集団で圧殺するのも。

正攻法で相手の策を叩き潰すのも、不利な状況を覆すのも、逃げ隠れするのも。

また違った趣があってそれぞれ好きだ。

学力で 運動で

特技で 容姿で

暴力で 権力で

策謀で 競技で

試験で 遊戯で

本気で実行するありとあらゆる行動が好きだ。

僕より格上である奴らに黒星をつける瞬間などは心が躍る。

策謀を張り巡らせ、撃破を狙う奴らを返り討ちにするのが好きだ。勝機を逸し、目に諦めを宿した生き残りをなぎ払う時など胸がすくような気持ちだ。

正面から正攻法で打ち破るのが好きだ。

死体蹴りしつつ、煽り散らす仲間を見た時などは感動すら覚える。

逆転の可能性を胸に秘め、逃げ隠れするのはもうたまらない。

恰好の的となったことを理解できず、倒される瞬間まで希望を捨てない様は最高だ」

何かを仕掛けられ南雲先輩から抜擢された夢月が、鬼龍院先輩と東風谷を左右に侍らせ、最初の弱腰な印象を覆す凄まじい存在感で演説していた。

俺も一応近くにいるが、おそらく夢月以外は誰の印象にも残らないだろう。

「諸君、僕は煽りたい——」。

もとい、勝利をもたらし、地獄の獄卒にも勝る煽り文句で、偉そうな奴らへ上から目線で見下ろすことを望んでいる。

諸君。僕の仲間になった学年問わずB・Cクラスの全ての者達よ。

君達は何を望んでいる？

勝利を望むか？

情け容赦なく、ことごとく、殲滅すら視野に入れて。

勝利し尽くし、三千世界の鴉を殺すような。

より爽快な完全勝利を味わってみたくはないか？」

『勝利！』

勝利！

勝利！』

「よろしい。

ならばまず勝利しよう。

煽るのは僕に任せてくれ。

億千万の言葉でもって、完璧な勝利に更なる華を添えてみせようではないか。

だが——半年。

上級生にいたっては、最長で2年半。

長きに渡って堪え続けてきた諸君には、それだけでは物足りないだろう。

だから総大将の僕が独断で宣言しよう。

これから行われる体育祭は——もはや戦争と呼んでも過言では

ない!!

戦争を!!

一心不乱の大戦争を巻き起こす!!」

勢いだけで、いつの間にか体育祭が戦争にすり替えられていた。興奮して叫ぶ者もいる中、敵味方の意味不明な士気がどんどん上昇しているのを感じる。

天生のアジテーターといふかなんといふか、夢月のペースに巻き込まれてB・Cの上級生達も——いや、この場にいる全校生徒が、高揚の只中にいる。

もう誰も夢月をただの1年だと侮っていない。

というか、もはやそれまでの噂など——そんな些細なことは忘れてる。

「尤もこちらは、わずかに天才の数は劣っているかもしれない。

一方、あちらは堀北学に南雲雅という二枚看板を擁し、1年にも油断のできない者達がいまだ潜んでいるだろう。

だが、諸君は一騎当千の強者だと僕は信仰している。

ならば、諸君と僕を合わせれば、約2万と1人の大集団となる。

こうなれば、いかに天才がいようと関係ない。

上で胡坐をかいて、偉そうにしている連中に目にももの見せてやろうではないか。

連中に恐怖と屈辱を思い出させよう。

連中に敗北と零落を思い出させてやる。

連中に勝利と成功を奪われた記憶を忘れられなくしてやる。

天と地の狭間に、奴らの哲学では思いもよらないことがある事を!

刻み込んでやろうではないか!!

さあ、征くぞ諸君!

各々気に入らない奴らに全ての私怨をぶつけてやれ!!

盛大な八つ当たり戦争の始まりだ!!」

「二二」う、うおおおおおっ!!! 戦争! 戦争じゃあー!!! イケ

メンと彼女持ち転がすべしっ!!!」

——野太い雄叫びとともに左京夢月は、高度教育高等学校で伝説

になった。

……

……

……コノヤロウ。

自陣どころか全校生徒を口車に乗せやがった！

——俺は口を引きつらせていた自分を見つけた。

——俺は自分が震えているのに気づいた。

——俺はいつになく冷静でいられないことを自覚していた。

——俺は、笑い出しそうな、叫び出しそうな、意味不明に奮い立つ

た心持ちで武者震いしていた。

そしてそれは俺だけではない。

野太い妬みを多分に含む雄叫びが目立つが、普段は大人しそうな生徒までも男女問わずにノセられている。

夢月とともにいる壇上の東風谷や鬼龍院先輩はおろか、俺の隣にいた佐倉すら興奮に上気した顔を見せている。

——勝負処のコイツはこれほどなのか。

何かを起こすことは予想できていたのに、改めてそう思わされてしまふ始末だ。

ただまあ、流石に夢月に耐性が付いていたので、すぐに自分を取り戻すことができた。

他の友達連中も同じだろう。

夢月は突飛な言動こそよくあるが、必要なことを必要な分だけやつ

ていること。

ならば、これも夢月にとって必要なことだということ。

そして、それが何らかの目的。

すなわち、自惚れによる誤認でなければ、俺をなんらかの分野で飛躍させることを目的に様々な手を打っていて、これがその集大成だということとはもう割れているからだ。

それにしても、いささか大げさで無駄に壮大ではあるが、そこは夢月の趣味だろう。

あいつはノリにノっている時、東風谷のいう神でも乗り移ってんじゃないかってくらいの勢いを発揮するのだ。本当に神懸りだったとしても驚かない自信があるほどに。

「それでは皆様。長々とご静聴ありがとうございました」

それはそうと、夢月は全く静聴していない盛り上がりきった観衆をよそに、マイペースにあつさりそう締めると演説していた壇上から降りてきた。

いまだ相当数が狂ったように叫んだり笑ってたりしているのだが、一緒に降りてきた東風谷や鬼龍院先輩とすでに普段どおりに会話していた。下で待っていた俺や佐倉も自然に加えてだ。

周囲が気にならないのがスタンダードになってきている事に僅かな戸惑いが頭をよぎるが、夢月と付き合う時にそれを気にしたら負けである。

しかしこれだけ好き勝手に煽りまくって、夢月が言う『天才』の相手は俺や東風谷に丸投げする内心がわかるだけに、どう考えればいいのか悩む。

普通なら怒るべきなんだろうが、日頃から夢月の勧誘ネタを求めている東風谷を見ていると、彼女を手伝って神社に放り込む材料が転がり込んできたと考えるほうが面白いかもしれない。

入学当初から東風谷を知る身としては、夢月を守矢神社の信者に引き込みたい意思は明らかなのだ。

確かに最優先で勧誘したい人材であろうことは間違いない。

なにせ神に仕え信仰を求める巫女（の亜種か？）の東風谷にとって、

これほど求心力や影響力のある者はどうしても確保したいだろう。また能力もさることながら、限られた変人共を自然に受け入れる器も捨て置けない。

いつの間にか到底友達にはなりえないような人格の奴でさえ、一定の信頼を寄せる友好関係になっっているのだ。程度は違えど俺や東風谷自身もその一人である以上、あいつ付近の居心地良さはわからないでもない。

つまり東風谷は夢月を引き入れられれば、情と実利の双方を満たせるのである。

佐倉も事情は違えど、似たようなものだろう。

夢月は、1学期に佐倉を襲った数々の不運から守り抜き、自分に被害が出ようとお構いなしで頭と手を尽くして解決とアフターケアまで突っ走った事までである。

それに資質を見抜いて、人知れず頼られることに飢えていた佐倉に主力になってくれるよう頼み込み、俺・東風谷・高円寺を相手に夢月と共に臆さず戦い抜いた記憶はまだ新しい。

結果はどうあれ、その後を見ればあれが佐倉にとって素晴らしい経験と自信になったことは疑いようもない。

彼女は夢月の力を借りて飛躍を成し遂げたのだ。

他にも、清隆、戸塚、一之瀬。

彼らもある時期から、迷いを吹っ切ったような清々しい顔で奴と話していることが増えた。

幾人かは何があつたか俺の知るところではないが、夢月が何かしたことだけは確信できる。

なぜなら俺が知る夢月は、自分は変化せずに周囲に変化を齎すプラチナのような本質だからだ。

それらを踏まえた上で、前夜に夢月から言われた言葉。

「四方以外に賭けても勝てない……. だろ？」

——— 今回は俺の番。

まるで言外にそう言われているようで嬉しかった。

ノセられているのはわかっていたが、夢月に期待されることがこれ

ほど心湧き立つことを初めて知った。

『あの時』の佐倉の気持ちがある意味でようやく理解できた。

コイツみたいなのに、好きなことを好きにして、それでいて人の期待に応える生き方は、自分も周りも楽しいことだろう。

俺も好きにやっつていいんだ、と思わせてくれた夢月と友達になれたことに。

親父の易と事情や気まぐれが上手いこと合わさった幸運に俺は感謝していた。

同時に昨夜、思いついて新たに行く末を占ってみた事が脳裏をよぎる。

子・寅・卯・辰・巳・午。

丑・未・申・酉・戌・亥。

——綺麗に二つの陣営に分かれるが、子が全て引つ掻き回しているだろう。

という、どう考えても子に対応するのは夢月だろ、と思わせる結果が何度も出たのはきつと……。

「お疲れ様です。パクリ乙」

「パ、パクリじゃねえし！ オマージュだし！」

総大将の義務である演説を適当に終わると、見栄えの為に後ろに付いてくれていた早苗からドキリとする指摘をされた。

早苗と鬼龍院先輩を左右に侍つてくれるよう頼んだのは、その状態で偉い奴らに正義？の鉄槌を下すのはさぞかし格好良く気持ちいいと思っただからである。

格好良くは自分の趣味だが、実際に気持ちよく言いたいこと言えた

ので結果オーライだろう。

早苗の指摘に動揺して思わず声の上擦ってしまったが、仕込み数日のほぼぶつつけであれをこなすにはそうした勢いが大事なのだ。

そして、その勢いは某少佐にあやかる以外、凡人の僕では得る手段を思いつかなかった。いつてみればそれだけなので、オマージユで合っている：はず。

あらかじめ上級生にサクラを仕込んでいなければ。

途中の「勝利！」と返させるあたりでポシヤった可能性を考えれば。虎の威を借る（早苗と鬼龍院先輩などへの）根回しを怠っていれば。どこかで失敗していた可能性は高い。

これらを考慮に入れると、オマージユとはいえ、まあ及第点の演説にはできたと思う。

「さっきの聞いて改めて思うんですけど、夢月さんって頭のネジをいくつも失くしてますよね」

「ほう？」

……僕は産まれた時より頭痛を持病としていてな。この痛みに耐え切れず、先日病院へ検査に行ったんだ。そこでレントゲンを撮ってもらったところ、なぜかネジが頭の中に——あるわけないだろ。いい加減にしろ」

「お前がな。なんなんだよ、そのノリツツコミ」

「これは純粋な疑問なんだが、後輩の減らず口はどこからわいてくるんだ？」

「本当に不思議ですよねえ」

「佐倉えもんく、みんながいじめるんだよく。なんとかして〜」

「巻き込まれた!? っていうか、わたしがいつの間にか謎の役に……」

「言いたい事も言えない愛里の為を思って、思ってもない役に就任させてやろうかと」

「愛里さんが思ってすらいなかったら、それはもう完全に夢月さんの妄想なんですがそれは」

自己弁護を組み立てていると、早苗にふざけたことを言われたので、いつもの5割り増しでふざけ返したら総ツツコミされた件。

基本愛里以外は毒舌寄りの奴が多いので、こうした状況ならこいつと勝手に思ってる愛里を巻き込んでみてもみたが、早苗に守られた。ちなみに、5割り増しでふざけているのは、敵方にいる友達・知り合いや生徒会関係者からの視線がなんか怖いから。

つまりは、気を紛らわせる為である。

なんなら味方方面や知らない奴からもそれ系の視線を感じる。

思うに、味方の士気を上げるついでに敵方の士気も上げてしまった事が、まずかったような気がしているのだ。

楽しげではあっても、特に格上と認めている奴らに睨まれるのは恐怖でしかない。

頼む時は深く考えもしなかったが、今は敵方の愛里や学年が違う鬼龍院先輩に応援を求めたのもヤバかったかもしれない。

せめて彼女らに、僕に向けられているこれが向けられないようにできるだけ注意しておこう。

「それにしても。」

——元々頭が切れる奴とは思ってたが、よく目的を見失わず、ここまでの困難を乗り越えてきたな。後輩は見上げたものだよ」

「おおう。先輩に褒められると普通に照れますね」

「ククツ。」

……ああ、1年早く卒業しなければならぬことが本当に惜しいな」

そんなことを考えつつ、しばらく歩きながらみんなと話していたが、別れ際に鬼龍院先輩から労いの言葉をもらった。

飾り気のない言葉であり、人となりがわかる嬉しい言葉である。

まだ本命の目標へ向かう途上ではあるが、彼女が口に出したのはここまで辿り着いたことに対しての言葉だ。

何度も実現の可能性について忠告や助言をされて——結果的に無視してきたことが思い出され、少し感慨深い。

「先輩……色々ありがとうございました！」

だから、僕はそれを万感の思いを籠めた感謝を伝えることで返した。

「……ふっ。まだその言葉は早いだろうか？」

「それは先輩ものでは？ 先輩の卒業って1年以上も先ですよ？」

「ふははっ！」

そうか。そうだな。ははっ、私としたことが、少し感傷的になっていたようだ」

「まあ、そういうこともあります」

「そうだな。」

ククツ。今まさにそうだ」

顔からほんの僅かな寂しげな色を消し去り、冗談めかして笑い合ってから、鬼龍院先輩は本来の持ち場に向かっていった。

どうにもならないことを考えるのが僕は好きではないので、これではよかつたのだろう。

今となつては、キャットルーキーだけが僕の大事なものではないのだ。

鬼龍院先輩はその一つなのだから、お互い楽しく過ごせるようになるのが一番である。

まあ、それはそれとして。

「ふむ。先輩に褒められて湧き上がるこの気持ち。」

これはまさか——承認欲求か？」

「「台無しだよっ（だ）（ですよ）!!!」」

鬼龍院先輩が去り、いつもの面子だけが残ったタイミングを見逃さず、僕は空気を壊しにかかった。

これだよ、これ。

やはりこうしてツツコミ入れてくれる友達は大仕事である。

おちよくり甲斐がある。

その友達に、なんかこう……生暖かいような目を向けられるのはアレだったので、つい雰囲気破壊してしまうのは誰もが共感できる事柄だろう。

ただそうしたら、今度は想像以上に四方達の反応が揃ったのがなんとなくおかしくなり笑ってしまった。

去ったはずの鬼龍院先輩やそれ以外の存在達まで笑っているような不思議な感覚すらある。

それがまた楽しくて笑っていたら、そのうち4人全員で笑い出していた。

まだいくつかは障壁もある。

だけど、乗り越え、乗り越えさせるための仕込みはやれるだけやってきた。

それなら、こうして友達と笑い合う時間もまた疎かにすべきではないだろう。

ところで、その後。

愛里を迎えに来た清隆に託し、四方と早苗の3人で自分のクラスへ向かう途中。

僕は走馬灯のごとく、なんとなくこれまでを思い返していた。

鬼龍院先輩の言ったことに考えさせられたのか、演説でふざけたのを反省していたのか、死に瀕していたのか。

——否。

答えはどれでもない。

清隆まで『僕に向かって』静かな戦意を滾らせているのがわかって、現実逃避したくなつたからである。

……………どうしてこうなつた？

105、パロディ

10月9日、最初の競技である100メートル走開始の約10分前。

清隆が僕に向けてくる戦意を削ぐ為、追いかけて限りある時間でデバフを仕掛けることにする。

僕に対してなにかするのは別にいいが、彼に限っては秘密主義を拗らせたりしてるので、逆に限界まで手を抜く可能性がある。なのでワテンポ前の根回し必須なのだ。

なぜなら、それをしないと素直に楽しむこともしない面倒くさい性格をしているとすでに割れている。

だから何故か四方まで付いてきてしまったが、気にせず愛里がDクラスの奴らに紛れるのを待ち、清隆一人になったタイミングで仕掛けた。

「先程、早苗に言葉で遅れを取ったのが悔しくて一泡吹かせたい。で、チョッパヤでやらないとケツカッチンだけど、清隆に意見を聞きたくてな」

意味が伝わらないよう某魔方陣な漫画に倣って無駄に死語？な用語を使いつつ、適当な理由で早々に話を切り出す。

「遅れってというか自爆だったけどな」

「てか、なんだよその変な言葉」

「ノリだ、気にするな。」

ともかく今度は僕のコミュ力を見せつけてやろうと、とっておきの奇策を炸裂させるつもりで、これからある計画を実行に移そうとしてるんだ」

「む。夢月の計画で、実行か。」

「……少し興味があるな。どんなものかオレにも教えてくれるのか？」

「ああ、もちろん。成功率がいかほどか聞く為に清隆の所に来た」

「成功率？ オレに対してじゃないのか？」

「清隆でも四方でもない。対象は早苗だ」

「東風谷相手の奇策なのに、清隆に聞く？　なんだそれ」

「というわけで、いくぞ？　……コホン」

二人とも流石にわからないようだ。

無理もない。いかにコイツらだろうと、逆にこれだけで察せられたら罠足り得ない。

僕は咳払いして息を吸い込み、他に聞こえないよう注意しながら策を言い放った。

「このメスガキがつ！　いつも僕をコケにしやがってクソが！　特製催眠アプリを食らいやがれ！　と言って自己暗示アプリ画面の端末を早苗に向け」

「教材が最低すぎるだろ。効くと思ってるのか」

「お前、もう船を降りろ。犯罪を犯す前にな」

かかった。

「……ほう？　清隆、四方。」

——お前らは知ってるんだな『これ』を」

「はっ！　まさか」

「ははは。冗談に決まってるだろう。早苗相手に効かないとは思ってるが、万が一効いたらエラいことになるじゃないか。それでもマヌケ共は見つかったようだがな」

そう。これを知っていること自体で、マイナスの結果に持っていられるのだ。

更に知らなくとも、推測と想像でエロ系だと察しが付いてしまう清隆と四方には、二段構えになっていたようだがな。

「あ、あぶり出したと!」

「まあ？　変態力最高クラスな清隆はともかく、四方までかかるとはお笑いだつたよ。やはりエロは男子共通の話題だな。大爆笑（棒）」

「う、く……こいつ」

「誰が変態力最高だつて……」

ふっ。無駄な足掻きを。

この流れになった以上、特に対清隆の手札なら溢れんばかりであ

る。

友達のよしみだ。トドメを刺してやろうか。

「初対面の屋上。おっぱい星人」

「……」

「あげようと思えばまだまだあるぞ。清隆の黒歴史の貯蔵は充分だ。本格的に論戦を張ってみるか？ 修学旅行編で黒歴史上映会をされた殺○ンセーみたくしてやろう」

尤も、今それをやる時間はもうないわけだが。

「く、黒歴史。まさかオレが……」

敗勢を悟ったのだろう。清隆は言葉が出てこない様子。

最初の競技、100メートル走まで時間がないので、余韻を惜しむ間もなくただ清隆を狙い撃つ。すぐ回復されるとわかっていようと、コイツにデバフをかけてやれば、回復する時に無駄な戦意も一緒に緩和できるかもしれないからだ。

それはそれとして、頭が回る奴は余計な部分まで全て見抜いてくれるから、最短最速での攪乱が可能となる。頭の良さを逆手に取ってからかうのは、なんと楽しきことか。

「あつひやつひゃ。自分の仕掛けた罠に格上がかかるこの爽快感……！ たまらないでおじやるな！」

「そんなにはしないけど、こいつってやる時は絶妙な罠を仕掛けるんだよなあ」

四方の諦め混じりの称賛が心地良い。

「……………なんだよ、その笑いは。しかも、おじやるなって。てか、格上……………からかうなら少しはオレを低く見積もれよ」

「断る。僕は他人の視点でモノを見ることができからな。高く見積もって、おちよくりが成功した方が楽しい」

「その言葉を悪用する奴、初めて見たぞ」

この攪乱により、まだ体育祭は始まったばかりだと言うのに、疲れたような雰囲気になった清隆と別れることができた。

体育祭最初の競技、100メートル走の順番待ちになっても、やる

ことはあまり変わらなかった。

僕と同じく1番手だった須藤や渡辺相手に、パロディ演説について聞かれ、リクエストにお応えして競技が始まるまで暇つぶししていた。

「もうこれで（人間関係が）終わってもいい……。だから——ありつたけを……！」

「最低最悪のゴンさんじゃん！」

「僕はこれからの良好な評判を諦めることで、さっきの演説力を引き出した！」

「そんな誓約あるか！ あんなに盛り上げといて裏はこれかよ!？」

「どんなに汚くたって、誰に称賛されなくてもいい。ただひたすらに一番を！」

「ゴンさんか裸エプロン先輩のどっちかに絞れやつ！」

「どこか憎めないタイプの敵キャラムーブしてんじゃねえよ！ つか、俺が1位確定だっつーの！」

「それはどうかな？ 敗北感の僕が最も親しき友のようなモノ。案外、気まぐれで須藤に取り憑くかもしれないぞ」

「わかりにくいところで史上最強の弟子まで混ぜんじゃねえ！ わけわからなくなつてんだらうが！」

一緒に走る奴らからはいちいちツッコまれてたが。力が有り余つてんな。いや、2番手以降からももの言いたげな視線が飛んできてたから、みんなのテンションがおかしくなってるのかもしれない。

演説前まで僕のアレな風評が蔓延してたから、どう接すれば良いのかわからないのもあるんだろうね。大変なことである（確信犯）。

いやあ、ネタ消費しつつ、適当に思い付いたセリフで遊ぶのは実にいい。

須藤と渡辺は知らない仲じゃない奴らだし、だいたいノリも把握してると、こういう事もできて楽しいものだ。

それに渡辺はともかく、須藤は清隆とは違う意味で気合のノリが半端なかったの、彼の空回りを避けるには力を抜かせるのも必要だろう。普通に気合が入ってるだけなら気にしないが、どこか空元気気味

というかヤケクソ感みたいなモノが漂ってくるのだ。

その正体を探ろうといくつか聞いたところ、須藤は体育祭限定でリーダーをやっているらしく、しかも誰かと何かの賭けをしたとのこと。

どおりで、やけに力が入ってると思った。須藤みたいな体育会系は、得意分野で賭けとかを持ちかけられると必要以上に力が入る印象があるからな。力のベクトルが決まっている単純馬鹿（褒め言葉）は純粹に強い。

それにしては、不調……とまでいえなくとも、なんか前と違う雰囲気な気がするの気になるが。

なお、100メートル走は順当に須藤が1位、渡辺が3位、僕は4位に終わった。

ナポレオン・ボナパルト。

言わずともしれた評価の高い歴史評論家が多い一方、本職の歴史家や戦略・戦術家からはうんとなくなってしまうこともある偉人である。

何故そのようなことになっているかと言うと、彼の活躍した18世紀にはすでに銃火器が登場していた。だが、新しいものに手を出さない保守的な将軍が多かったのか、剣の時代の陣形や戦術を変えていない背景がある。

そこで大砲を後方に下げて前線の支援に回し、銃兵を集中運用して中央突破する新戦術を考案したのがナポレオンだ。初期に常勝を欲しいままにした彼は、まさに天才の名に相応しいだろう。周辺国が対抗するため、一斉にその戦術を学びだすのもよくわかる。

そして周辺国が対抗できるほどの新戦術が浸透した時こそが、ナポレオンが凡庸以下……勝てなくなった彼の斜陽の時代である。後年、老害に等しくなってしまう英雄を、僕は一発屋に極めて近いんじゃないかと勝手に思っている。

ビジネスで例えるなら、新規事業に成功して一世を風靡したけど、時代の波に乗れず、それどころか成功体験が邪魔して変化から取り残

されてしまったというところか。

こういった歴史的教科やついでに地理的教科『じゃない』社会科はあまり授業などで触れられないが、歴史上の出来事はどこの部分を切り取るかで印象や評価がものすごく変わるので面白い。

だが年代や用語、観光ガイドみたいな暗記系統しか学校で教えてくれないのは、歴史好きの一人として間口が狭くなってるようで残念に思う。地理も儲かりそうな部分や産業関係だけだしな。

社会背景を学ぶのは、多様性を作る上で重要な要素だと思うのだが……。

しかし思考力や多様性を生み出す可能性を潰すのは、ブラック…いや、もっと根本的な部分に問題が発生するように思えてならない。

こうした教育方針になってる理由は、多様な人物を形作る背景を教えないことで、操りやすい画一的な人材を育成してる、とかだろうか。

物事の表面しか……表面すら見ていない奴は結構見てきたからなあ。表面でさえ多様性を受け入れられない奴は、自分の狭い見でしか物事を見られなくなるだろうに。

うんまあ、なんでこんな思考になってるかというところ。

松雄や理事長から得た情報からすると、清隆の父親は了見が狭いナポレオンタイプなんだよなあ。

違う見方をするなら、自信家で考え方をけっして変えない頑固者タイプ。対抗した場合、話の落とし所がほとんどないタイプとも言おう。

これの何が関係してくるかというところだ。

父小路の破滅に至る網は張り巡らせていたのだが、余裕ができて冷静になり、指向分析が大方終わった後にふと思ったのだ。

清隆に協力してもらえないだろうか？ と。

だって攻撃してきた理由すら知らないまま、友達の父親を地獄に叩き落としてもいいものだろうか。直接的にはともかく、少なくとも清隆の考えと意思を確認しないとスッキリしない結末を迎えかねない。なら、話くらいは通しておくべきだろう。

勿論、この期に及んで和解などと言うつもりもないが、勝者総取りの資本主義的な冷たさを嫌悪する僕としては、『ソレら』の同類になる

ことは御免被る。たとえ向こうがそのつもりだったとしてもだ。

なので、父親の目的の中でも大きい部類と思われる清隆関係を材料に、撃退しつつなあなあにする道も模索しておきたい。

これが甘い判断だと自分でもわかっている。実際、被害にあった松雄親子からすれば後顧の憂いを失くしておきたいだろうが、どうか納得のいく着地点はないものか。

一度、清隆・栄一郎・僕の3人で集まって、認識のすり合わせと対策を練り直すのもいいかもしれないな。

僕以外から見た思わぬ落とし穴があるかもだし、清隆や担任、南雲なんかで日頃から趣味と実益を兼ねて予行演習はしてるが、理事長の時みたく本番で冷静さを保てなくなってはコトだ。天才と秀才の見解を聞き、受け入れられる要望を調整するにはこれが一番楽そうな気がした。

最初に走って暇ができたので、つらつらとそんなさして重要じゃない考え事をしながら、残りのレースを気楽に観戦していた。

とりあえず思索から現実に戻して、僕的に特筆すべきは7組目。

四方に戸塚、清隆・平田、栄一郎と知り合いが多くておつ、と思っ
て見ていたが、四方と平田のデッドヒート…となる予想を外れ、そこ
そこの距離を離して四方が1位、平田が2位、ダークホースの編入生・
栄一郎が3位に。

平田に負けたものの追い続れていた栄一郎は、なかなかの身体能力
を持つようである。

ちなみに清隆は何らかの理由か体力の温存のためか5位。戸塚は
そのすぐ後ろで6位だ。

あと他の流れを知り合いだけ抜粋すると、3組目に葛城と神崎が
走っていて神崎が1位、葛城が3位になっている。

9組目では龍園以外の強者がいなくて龍園の独壇場。

ラストの10組目では、最下位になった金田を筆頭にほぼ全員置き
去りにする柴田の独走状態だった。

この結果を見て思うことがある。

……圧倒的じゃないか、我が軍は。

勿論、僕含め負けている試合はあるが、エース級の3人全てが1位。他の2レースでも1位を取っていたので、1年男子の半数のレースで勝っている。

まだ始まったばかりとはいえ、幸先の良い出だしである。そりゃ、こんな感想が出る気分にもなろうというもの。

息継ぐ間もなく、女子のレースになってもうちのクラスの勢いは止まらない。

1組目の一之瀬こそ、Cクラスの矢島？木下？という女子2人の後塵を拝して3位だが、4組目の安藤、8組目の南方？、9組目の網倉が1位を獲得していた。一之瀬の結果に関してはまだ調子が良くないのかと一瞬思ったが、単純に『運悪く』陸上部でCクラスの女子エース級2人と当たってしまったみたいだ。

余談でかつ人が悪いが、少し助かった。

白組総大将が初っぱな4位なので、バツが悪かったのだ。これはクラスリーダーの一之瀬もだが、他クラスのエース級と当たって中位な言い訳、というか敗因がわかりやすい。

巡り合わせとはいえ、総大将やリーダーがともに1位を取れなかったのは結果的によかったといえる。

一之瀬はともかく、僕には元々1位を取れるほどの身体能力はないけども。

注意して見ていた愛里と椎名は奇遇にも女子5組目で当たり、愛里が僅差でブービーを勝ち取った。あの重そうな乳の分の不利をよく覆したものだ。

早苗がサラシとかで胸を固定するといい、みたいなアドバイスをしていたのでそれが実ったのかもしれない。胸だけに。

ついでに彼女らと一緒に走った櫛田は1位を取っていた。

「夢月君っ！ 見たた!! わたし、頑張ったよー!」

色んな方面に感心していると、愛里が息切らせて駆け寄ってきた。今日も眩しい笑顔である。アイリニウム補給ありがたい。

しかし、ここ救護用のコテージ近くなんだけど、よく見つけられたな。他人と関わりが少ない人間絶縁体同士には、引力でも発生してるのだろうか。

てか、真っ先に一応は敵方の総大将のここに来て話してて大丈夫なんだろうか。

勿論僕は嬉しいし、何故かコテージ内にいた高円寺の近くとはいえ……。あ、高円寺はさつき走ってなかったから別に不思議でもないのか。

でも、まいつか。コテージが影になってるし、騒がなければ見つかりにくいだろう。

切り替えた僕と愛里は声量を落として息を整えつつ、しばらく一緒にその後の競技を観戦することにした。

「おう。よく椎名に勝てたな」

「うんっ！ わたし、初めてドベじゃなかったよ！ えへへ」

「よし、ご褒美に椎名への煽りを伝授してやろう。まずはドベであることを当てこすりつつ、最弱決定戦で負けてどんな気持ち？ ねえ、悔しい？ ねえねえ、と周囲でウザく……」

「しないよ!! わたしはひよりちゃんにそんなことしないから!」

「え？ 1に煽り、2に毒舌、3・4がなくて、5に感謝の我が天文学部員がそれではいかな。僕でも早苗でもいいから手ほどきを受けとかないと対抗できないぞ?」

「しなくていいから! 感謝以外初めて知ったよ、そんな決まり!」

あ、感謝はことある事に言ってたから、浸透してるっぽい。それなら煽りと毒舌の必要性もわかってそうなものだが、愛里の性格的に不向きなのはわかるのでしかたないか。

「あつ、早苗さん! ……と、堀北さんに伊吹さん」

「堀北さんも早苗と同じ女子最終組なんだな。てか、伊吹さん? 愛里と同じクラスの奴?」

承諾しないとわかってからかっていると、愛里が1年女子の最終レースに目を向け、オマケ?付きで早苗の名前を口に出す。それと初めて聞く名前が飛び出したので聞いてみた。

「ううん。伊吹さんはCクラスなんだけど、無人島で……ちよつとね。夢月君も会ってるよ」

「へえ。全く覚えがない。どいつ?」

「3コースで堀北さんを睨んでる人。なにかあったみたいで、練習の時も堀北さんを睨んでることがあったよ」

3コースにいるのはショートカットの女子で、彼女が伊吹さんだろう。確かに堀北さんを睨んでいる。その堀北さんは早苗を睨んでいて、早苗は不思議そうに堀北さんを見返している。

というか、あれは顔か名前を思い出せないって顔だ。まったく。もっと興味を持ってやれよ。僕が言えた義理もないけども。

「なに、あの面倒臭さそうな人間関係。絶対巻き込まれたくないんだけど」

「あ、あはは」

それを除くと、ひと目見ただけで、早苗以外はメビウスの輪のごとく意識してるのが見て取れる。

殴り合いでも発生しそうな女の争い（ガチ）には、関わりたくないものである。愛里すら苦笑している理由もわかるというものだ。

その、ある意味注目の一戦。

伊吹さんの好スタート……をぶつ千切ったのは早苗だった。

スタート自体は伊吹さんの方が早かったのだが、意識していたのが関係していたのか、伊吹さんが振り返ろうとした（おそらく対象は堀北さんだろう）その一瞬で早苗が抜き去ったのだ。そして中盤になる頃にはあっさり後続を引き離し、追いつがることも許さず、早苗が1位でゴールした。

また驚愕した面持ちの伊吹さんが隙を見せたことで2位争いは熾烈を極め、堀北さんの猛追もあって勝敗はビデオ判定に委ねられるほどになる。

結果は伊吹さんが2位、堀北さんが3位だった。

「は、速あ……」

「怖あ。アイツら、戦争でもしてんのか。後半は競技する気迫と顔じゃなかったぞ、あれ」

特に伊吹さん・堀北さんは修羅道に足を踏み入れてそうだった。

「……さつき大戦争とか演説してた夢月君が言っても説得力ないよ。そして早苗さんには驚かないんだね。わたしも慣れてきたけど」

「ふっ。異常とか意味不明なのはそのまま受け入れるが吉。これが一番楽になれるぞ」

「……………そうかも?」

愛里はすでに早苗と付き合う時は無意識にそうしてるし、これは言いくるめではない。

大事なことなので、繰り返す。

素直な愛里を僕の仲間に引き込もうと言いくるめたのではない。受け入れると諦めるが実はイコールで結ばれるのも関係ない。

友達同士だろうと、愛里まで早苗の同類になる必要はないだろう。

106、お礼

作戦なんて上手くいかなくて当たり前。

だから、それを覆すことのできる奴は有能とか言われるのだ。

リーダーなどを率いる者の下に付いた時にこの部分を重点的に見ておくと、一つ一つの成否より広い視点で物事を見定められる。また、自分がリーダーになった時に使える手札が増やせるだろう。

これの類似で、ジョージ・パットンの名言に「来週完璧な計画を実行するなら、今すぐできる次善策を即座に実行しろ」というものもある。これはどうせ完璧に遂行できる作戦なんてありえないという彼の経験から来ているのだろう。

実際問題、現実で完璧などあり得ない。

別に軍事でなくても同じだ。計画実行は結局人間がやるんだから、完璧な遂行は無理とまでは言わなくとも非常に難しい。

だから指揮官の仕事は、リカバリーをはじめとしたミスやハプニングへの対応がほとんどなのは経験者ならわかるはずだ。現実とは完璧とは程遠いものなのだから。

ところで、うちのBクラスには他のクラスにない学級委員会というシステムがある。

総指揮を採る委員長兼クラスリーダーが一之瀬であることは言うまでもないだろうが、当然それ以外の役職もあったりする。

僕が知っている役割としては、神崎と浜口は書記として勉強会など学業イベントの対策を補佐してたりするし、網倉は副委員長として女子のまとめ役ともいえるべき一之瀬のフォローや裏方をこなしていた。

そして無人島や体育祭など運動系でクラス指揮を採るのが、実行係の柴田と女子方面をカバーする安藤である。

これは無人島の探索・走破班に混ぜていたからわかりやすいだろう。ともかく、身体を動かす事が多い役回りには基本最初に立候補、または選出される。

要するに、Bクラスの体育祭指揮は柴田なのだ。

女子は一之瀬や網倉（安藤はあくまで実行役）が仕切る事も多いが、特に男子はほぼ彼の指揮下にあるといつていい。つまり行き過ぎた勝手な行動をとれば、何らかの対応を取られるということ。

最初の競技終了と同時に姿を眩ませた者は、その対象に該当するだろう。

そう……まさに僕とか。

愛里との逢瀬（過言）を楽しんでたら、高円寺がいるコテージの方が騒がしくなっていた。

まだ時間はあったが、僕や愛里も見つかると誰かに文句言われそうだったので、しかたなく彼女と別れてBクラスが集まっている場所にやってきた。2種類の競技であるハードル走の準備のため、という大義名分は準備済みである。

無論、柴田が席を外したタイミングを見計らっている。

「待ちに待った時が来たのだ！ 僕の理想と証明のために！ 目的達成のために！」

1年Bクラスの白組諸君よ！ 僕は帰ってきた!!」

「はいはい。左京君はちよつと大人しくしてようね。いつものように消えてたせいで、みんな探してたんだからちやんとごめんなさいもしようね？」

「ご、ごめんなさい」

そこで有耶無耶を狙ってみたら、なんか勢いで言わされてしまった。

……普段怒らない奴が怒った感じ出しているとなんでこんなに怖いんだ？ そんな一之瀬を何度かぶちギレさせた僕が思うのもなんだが。

「しかし「すみません」や「申し訳ありません」じゃなくて、子供がするような「ごめんなさい」か。……一之瀬。的確に心を抉る術を身に着けてるな……！」

「夢月……お前な？ そういうとこだぞ」

「ぶつ。怒られていますよ。風来坊もいい加減にしないでですね」

みんな誰かを探してる風だったので、和ませようと誰も望んでいない系のセリフを放ちながら合流したら、目が一向に合わない一之瀬から子供扱いされた。コイツはお母さんか。

ついでに四方に少し、早苗にも煽られた。コイツは子供か。

でも僕に話しかけてるっぽいのに、一心に早苗を見つめている一之瀬はどちらがより問題児かわかっているのだろう。

ま、一之瀬はともかく、調子に乗った早苗には一撃を入れておくべきだ。

「この野郎……自分を棚に上げやがって。一之瀬お母さんの爪の垢でも飲んどけ」

「野郎じゃありません〜ん！ 私は夢月さんと違ってきちんとしていますよ。お母さんの爪の垢を飲むのは夢月さんでは？」

「二人共、喧嘩しないの！ じゃれ合いだってわかっているけど、体育祭が始まったばかりなのにハラハラさせないで。あと二人が私をどう見てるか詳しく。なにお母さんって……？」

ただあまり一之瀬の心労を増やすのもなんなので穏便にやり合おう、と早苗にアイコンタクト。しかし穏便な論戦張ろうと言葉を抑え気味にしたのに、再度の一之瀬の介入があったので、いつもと方向性を変えることにする。

ふっ。久方ぶりに七色の声色使い・左京夢月の技巧の冴えを見よ！

論戦はブレインだぜ！

「んん、っん！……どうしたんですか夢月さん。いつもよりかっこいいですよ。これからは様付けで呼ばせていただいてよろしいですか、夢月様」

「それ、もしかして私の声と真似ですか？ あまり不敬だと、おろしませすよっ。」

「……次から次へと、よく出てくるね」

「一之瀬。スルーされてるうちに、少し離れた方がいいぞ。東風谷はともかく、夢月は流れ弾があるからな」

「流れ弾……はあ」

早苗の声を真似て僕の称賛&様付けしたら、ズイツと来てドアップ

な真顔早苗になった件。

しかしコイツ、自分の声色使われたくらいで、ノータイムでこんな恐ろしい雰囲気になるとか。さつき僕だけ愛里と会ってた現場を見られたのが関係しているのだろうか？ 嫉妬乙。

まあ四方のフォローもあり、一之瀬が諦めた風に介入を中止したので結果オーライだろう。

それはそれとして。

「怖すぎるだろ!? そんなサ○ジ専用文句みたいな脅迫、リアルで初めて聞いたわ!」

「私にはできないとでも?」

「できそうだからツッコんでんだよ!」

「なに言ってるんですか。神である私がおろしますよと聞いてるんですから、返事は優しくしてね、もしくは喜んでお願いしますのどちらかですよ?」

「ざけんなっ! 返事を選択肢が終わってるだろ!」

冗談でもおろされるのは嫌なので、必死にツッコミ返していて『彼女』の接近に気づかなかったのが。そしてそれが、たまたま一之瀬が離れたタイミングだったのが。あるいはここ数日高頻度で『僕に』使われていたのが。

「お久しぶり、というほどでもありませんね、左京く……」

「ちよつと坂柳! 今は——」

きつと不幸な事故の始まりだったのだろう。

「妖怪は口出さないください! 坂なんとかも退治しますよ」

「うっさいわ、世間を知らないちびっこは黙ってる! どっちが身体の前後か区別つかない小五口りは、ママのおっぱいでもしゃぶってバブバブ言ってるのがお似合いだ!」

「……あっ!」

炎上を恐れず、ギリギリを攻め続けた者が会得できる究極の現代版北斗神拳——その名を、ジェンダーフリー・北斗百レス拳。

小さい影だったので、奥義を使うまでもなくこれで充分だろうと

放ってしまったのは、幸運だったのか不運だったのか。

「え、妖…怪？ 前後の区別がつかない？ 小五ロリ？」

「そう！ 坂柳さんはようか——えっ？ 坂柳さん？」

「つい。つい、ね？ 早苗のノリで言っっちゃいけない相手に致命的な暴言を放ちちゃったかなって。」

「気をつけよう。口は急に止まらない。」

早苗との口喧嘩に飛び込んできた銀髪の子供…に見える御方を確認して、目を疑ってももう遅い。

「なんかなろう小説のタイトルみたいだなあ——って、現代の北斗神拳継承者を気取ってる場合じゃない！」

「おいおい、死んだわアイツ。社会的に」

「おかしい人をなくしちゃったね。社会的に」

「渡辺に網倉あ!？」

「ざけんなっ！ まだ死んでないし、「社会的に」って付けときやいいみたいな雑なアレはやめろ。」

「冷静になれば策はあるはずだ。そう、えっと、例えば……。」

「ザ・ワールド！ 時よ止まれ！」

「いや、むしろ巻き戻って？ そしたら丁寧に取り繕うから。言うつもりはなかったんです。」

「神よ、お願いします。」

《《無理だ。諦めろ》》

「無理ですか。そうですか。」

「……………ところで、どちらの神様です？」

「「……………」」

「現実逃避は程々にして……でも、本当にどうしよう。時が止まったかのようになってる。渡辺や網倉のように時々、ボソツと聞こえる吐きはあるけれども。」

「「……………ぷっ」」

「早苗このバカッ！ 緊急事態に笑ってんじゃねえ！」

「真澄さん？」

「しかし僕には長く感じた凍れる時間の秘法的な効果は、一瞬の輝き

だったららしい。

唾然としたような者共の中、早苗と真澄さんと呼ばれた女子が揃って吹き出し、再び時は動き出す。

「うひっ、あははははは！　ちびっことか小五ロリとか……前後の区別ができないとか！　ひくひっひひ！　夢月さんのその罵倒バリエーションはどっから出てくるんですか!?　に、似合いですぎっ！　ひははははっ!!」

「ちよ、早苗マジやめて!?　取り繕えなくなるから！　何事もなかったように礼儀正しく挨拶し直しても、傷口が塞げなくなるから！」

「ブッフオ！　坂っ、坂柳にママのおっぱいしゃぶってろ……ぶっは！」

「とつくに傷口が腐敗してますってこれ!?　あはははっ！　やっぱあ……はあ、はあ。止まらなっ、はははは!!」

「あ、お。えと……これ、もう。僕は……ど、どう……しようもないんじゃない」

反射的に止めようとツツコんだが、もはやこれまでだろう。早苗はもとより、坂柳さんの連れの女子まで決壊したようにしか見えない。

僕は一応抵抗しつつも、早々に諦めていた。

「ちよ、やめ。あっは！　くっ、笑わせないで！　ふふっは！　だから嫌だったのよ、付いてくるの！　ぶっふふふ！　さ、坂柳が……バブバブ……結構似合ってるじゃない!?　んほお！　けほっ、ごほっ。そ、想像が暴走して……お腹痛い。くうっ、静まって私の腹筋……!」

「……」

てか、早苗もだが、このくっ殺が似合いそうな女子はなんなんだ。堪らえようとしているのはわかるけど、失敗してんだよ。仄かに中二臭さを漂わせつつ、文句言いながら笑ってんじゃない。軌道修正できなくなるだろうが！

ともかくなんとかしななければ、坂柳さんとの争いに巻き込まれてしまう。

妖怪大戦争は嫌だ。妖怪大戦争は嫌だ。妖怪大戦争は嫌だ。

———そうだ！　人に押し付けければいい！

「……………ふふつ。そうですか、そうですか。つまり貴方達
はそんな人なのですね」

背筋が凍るような冷笑。

本格的にヤバい。坂柳さんのエー〇ール面が出てきてしまった。

「早急に誰かに丸投げしなければ、僕まで呑み込まれてしまう。かと
いって、四方や一之瀬はダメだ。柴田は席を外したタイミングだし、
渡辺や網倉さんに投げるのは鬼畜の所業だろう。」

となると奴に頼るしかない。

「ひいっ！ ま、待ってくれ、坂柳さん！ ぼ、僕はだな、実は…………えー
と、左京ではないんだ!!」

「…………何を言い出すかと思えば。では貴方は誰だというのですか？」

神崎…………にしようかと思っただが、そうすると今度は神崎が敵に回る
のは確定だろう。なら、本人以外どこからも文句が来なくて、Aクラ
ス以外の所属でかつ許してくれそうな奴。

「僕は…オ、オレは綾小路清隆と言っただな。本当はDクラス所属な
んだ？ 今はちよつと用があつてここに來ているだけでだな??
さっきのはつい出てしまった本音だったんだ??」

「……………はい？」

つまり清隆一択になる。

しかし空回りする思考が現実を描き出した道筋は丸投げではない。
自分でもわけのわからない成り代わり？だった。

結果、坂柳さんは外見相応のキョトン顔になった。

ありのまま今なにか起こったか話すと…………な、なに言ってるかわか
らねーと思うが、僕も自分で何をしているかわかってない。頭がどう
にかなつてそうだった。

普通に丸投げするだけのところを自分から難易度を上げただけ
じゃあ…断じてねえ。

もっと愚かしいものの片鱗を味わったぜ。

と、僕の冷静な部分はネタに走っているが、いっぱいいっぱいだった
状態で取り繕おうとも土台不可能な話である。

「いや、名前を呼ばれているのに、綾小路に丸投げするのは無理があり

すぎるだろう左京」

「もう普通に謝った方がまだマシだよ左京君。どんどんドツボにハマってるから」

「ちがうだろー!! 左京言うなしっ! 僕…オレは清隆なんだって! 今だけでいいからマジで話を合わせて!? お願いだから! 妖怪に目を付けられたくないんだよ僕は! だから…だから! ねっ!?! ねっ!?!」

「……必死過ぎる。これはもう手遅れだと思いが」

「というか、また妖怪って言ってるし」

神崎や一之瀬達の助言も手遅れ感が半端ない。

男とは、吐いた唾は呑めぬ生物なのだ。

だから、昨夜嫌われたのはわかっているのに、それでも一之瀬の善性に期待して縋りつかんばかりに必死に頼み込む。ツツコミや口は聞いてくれるけど、今日は一度も目を合わせてくれないわけだが、この手しか僕には残されていない。

僕と一緒に暴言を吐いた早苗? 坂柳さんの連れといまだに笑い転げてるよ。

遅すぎたんだ。腐ってやがる。性格が。

「……………綾小路清隆?」

しかしその時、奇跡が起きた。

なんと坂柳さんが清隆の名前に反応したのである。

冷静に考えれば、本人と会った瞬間に全て理解されるというのに、この時の僕はあるうことか奇跡を背景に倍プッシュしてしまった。

「おおっ! もしかしてお近づきになりたい? それならここ数日の『お礼』に喜んで紹介するよ! かなりの変人だけどイケメンには変わりないし、天才だしで、坂柳さんだったら楽しめるかもな! …… 榊田がネツクになるが」

「お礼……ですか。しかも、ここ数日の……………ほう」

え、まさか本当に持ち直した? イケメンの効果か? もしそうならイケメンすげえ。

「ああ、もう滅茶苦茶」

「お前が綾小路じゃなかったのか？ 手のひらクルクルじゃないか」

「ちよつと待つて下さい、夢月さん！ 桔梗さんがネックとか聞こえたんですけど!? 綾なんとかが『手強い』のは否定しませんが」

僕の言い分は、すでにボドボドになつてゐるから今更だろう。

笑いを収めた早苗だつて普段言わないこと言つてゐるし、奴に丸投げすることに異存ないようだ。でなければ、清隆を持ち上げるような真似をする女じゃない。

それに早苗は認めたくないかもだが、邪悪と黒歴史の代表例がお似合いに感じるのは僕だけじゃないはず。

更には、これまでも清隆は櫛田という邪悪を人知れず封印してきたのだ。きつと古事記にも、彼らは源頼政と大妖怪・ぬえの転生体のよくな扱いで書いてあるのは間違いない。

しかし今の最優先はともかく坂柳さんだ。

清隆の名前を聞いてから瞬時に怖い雰囲気を引つ込めた彼女に、有る事有る事を吹き込みつつ全力でプレゼンする。

「左京君から見ても、綾小路君は『天才』なのですか？」

「そりゃあもう！ 弱点こそあるけど、それを除けば学校内でも文武ともに匹敵どころかまともにやり合える奴すら少ないくらいのが天才だ！ 顔の作りはかなり整つてゐるし！」

「……」

「えっ。綾小路君ってそんなにすごい人なの？ 確かにその片鱗はわからないではないけど」

最初に質問してきた坂柳さんが黙つてしまつたからか一之瀬が聞いてくるが、ここは正直に答える。当然、無人島やゲームなんかは伏せるが。

てか、あんまり容姿に関しての反応がないな。面食いじゃなければ、ただ能力を持ち上げるだけにしておく方が無難か。

「すごいっていうか規格外な部分が多いんだよ。僕だと裏技使わなかつたら、まずどんな分野でも勝てない」

頼むぞ。四方に早苗、それに姫野と一之瀬もか。僕が運良くやり込

めてた事例は言わないでくれ。頼む。ほんっとうに頼む。

万が一にも清隆の評価が下がったら、坂柳さんの注意をアイツに逸らせない。

——坂柳さんの封印も頼んだぞ清隆。櫛田、堀北さんに続く3人目だが、お前ならできると信じている。

なぜなら僕の考えはこれなのだ。

だから心の中で祈りを捧げ、坂柳さんの興味が清隆に移ってくれるのを心から願う。良くも悪くも、坂柳さんに興味を持たれるようなことにはなりたくないものだ。絶対面倒くさいことになる。

僕は遠い目を意識しながら、坂柳さんの意識を清隆へスライドするように投げ捨てた。

まだ何か話した気な坂柳さんだったが、いよいよハードル走の時間が迫ってきたので、見学の彼女は待機場所へと戻って行った。

なお一緒に来たのはいいものの、笑いが収まらず口元を引き攣らせたままのお連れさん。彼女を見る坂柳さんの目が絶対零度だったことをここに追加しておこう。

早苗と一緒に笑って笑ってるからだ。美人系なのに、残念な笑い上戸とはもったいない。

ま、坂柳さん共々、なにしにきたか…それ以前に名前も知らないが、ご愁傷さまである。

「あゝあ、夢月さんいいんですか？ 綾なんとか大変なことになるかもしれないよ。ふふっ」

「清隆…ドンマイ。この一件はBクラスの秘密とすることにしよう。うくくっ」

「…夢月、東風谷。お前ら、大変とかドンマイとか言いつつ、サラッと清隆を売ってたが。あと笑いが漏れてるぞ」

なんにしる危機を乗り越え、あとは誘導成功という結果が残っただけなので気楽なもの。

ハードル走の待機場所に向かいながら、ようやく口を開いた四方の指摘も心なしか良い気分で聞ける。

内容はこんなに効果があるなら、前の時にも使っとけばよかったということか。違う？ あれ？ てか、四方つて僕が夏休みに坂柳さんと会ったこと知ってるのか？

ま、いいか。どっちでも。早苗を見るとなんか楽しそうだし、たまには悪ノりに付き合つてやるのも悪くない。

「しかたない……！ しかたないんだ!! これも全ては清隆の為……！ 不審者ムーブする清隆と面倒臭そうな匂いをさせてる坂柳さんを掛け合わせたら面白そうだななんて思つてない！」

「そうです！ 私達も心苦しいですが、安全圏から綾なんとかや坂なんとかのその後を想像すると楽しくなってきましたね！」

僕と早苗は身振り手振りで未来へのワックワクを示す。

「ああ！ 一瞬で矛盾する言葉が出るくらい心踊るよな！ 思惑通り封印してくれるだろうか？」

「ふふふ。どうなりますかねえ。獄門疆みたいなのを使つてくれると、私にも討伐する理由ができるのですが」

「……隠しきれてないぞ」

「だつて別に隠してないしな」

「そうですね」

「ちなみに本当はどう思つてるの？」

僕と早苗の言葉とは裏腹に浮かぶ笑顔のせいだろう。早苗だけを見る一之瀬は疑問を抱いたようである。

「「ぎまめ」」

「気に入らない人を陥れるのつて楽しいですよ？ そういうことで

「イケメン税の徴収代わりだ。なに、清隆なら滞りなく調伏or封印してくれるさ」

一之瀬への返しは早苗と第一声がかぶつた。早苗は日頃の不信任、僕はイケメンへの妬みなので内情は違うだろうが、思っていることはだいたい同じなようだ。

「左京君達は……ほんつとに」

「最低だよ、こういうところ」

「……うん。でも素直な性格ではあるよね」

「無理やり良い風に言えばだけどな」

しかし良い奴揃いのクラスメイト達には、賛否両論…よりもほんの少し印象悪めだったらしい。聖人・一之瀬だけはなんとかフォローしてくれようとしていたが。

でもまあ、それなら温めておいたネタの出番だ。

「問題ない。とある宇宙人も言っている。

——バレなきや犯罪じゃないんですよ、と」

「いや、ほぼ確実に近い未来でバレるけどな」

「というか、その発想は地球人じゃない…つまり実質、夢月はエイリアンって事か」

「言葉の切れ味が鋭利やん（エイリヤン）ってか。やかましいわ」

「でもこういうクソ思考してる夢月さんも私は嫌いじゃないですよ？」

「ああ、お前らは同類だからな」

待った。それは流石に聞き流せない。って感じならいけそうである。

「取り消せよ……！ 今の言葉……！」

……まさか、有名なネタとはいえ早苗と一言一句違わずかぶるとは。

「息ビツタリ……。打ち合わせでもしてるのかって具合ね」

「つーか、エ〇スのそれが被ることあるか!？」

「うふつ。夢月さんは言うと思ってました！」

その状況を打開しようとした僕と早苗のネタかぶり&綱倉さんと四方の指摘が、僕にクリティカルヒットした。まさか早苗に読み切られるとは……。

なので動揺を落ち着かせるためにも、当然話を逸らす。いや、本来は動揺する理由もなかったんだけども。

「さ、さあ〜て。気分も良くなったところで次々。ブワア〜と行ってみようじゃあないか。はっはっは」

「そうですね！ ふふつ。テツペンの景色ってやつを見に行くとしま

すか！」

「話の逸し方、揃って雑すぎるだろ」

坂柳さんが帰ってから、何故か四方のツツコミがキツめな件について。

やっぱり罪のない一般清隆に丸投げしたのがいけなかったのだろうか？

ともかく茶番はさておき、晴れやかな心持ちになったところで、ここで少し競技の進行状況をおさらいしておこう。

まずこの学校には、木やネットで区切られているが広大なグラウンドが2つ隣り合うようにある。中央には先程僕と愛里がいた救護、休憩、来客用と思われるコテージが点在しており、それぞれのグラウンドの周囲に白組・赤組できっちり分けられている。

そこで僕達1年生は100メートル走を男子・女子の順で行い、次は2年生の男子・女子、3年生だけ女子・男子の番になる。これは1年生が2種目の競技であるハードル走を、2・3年生は先に行うためだ。そして1年生がハードル走の時は、2年生が100メートル走、3年生は休憩、というようにローテーションされるらしい。

だから今は1年生が休憩というか隙間時間になっていて、坂柳さんが訪ねる余地が生まれてしまったのだろう。

つまり広大な二つのグラウンドを使った2学年同時進行になっていて、100メートル走とハードル走を行っている。

そういう部分で時間を短縮しているのだろう。複雑ではあるが効率的では…あるのか？ 同じ競技にした方が煩雑にならない気がするのだが。

まあ、大変なのは運営だから別にいいけども。

また5種目の綱引きと6種目の障害物競走でも、同じ構成となっていて。1年が綱引き、2年が休憩、3年が障害物競走というように。こちらは準備に時間がかかる競技だからだと思われる。

しかしなんであれ、競技の間に最低1学年は休憩を入れる部分に学校の配慮を感じてしまうあたり、僕もだんだんと認識を誘導されてい

るのかもしれない。

なので、序盤かつ点数的に勝ちの流れがあつて取り返しがつくうちに、ここらで一度実験しておくことにした。

具体的には、僕はこちらでも一番手だったハードル走を完全に捨て、手で全部のハードルを倒しながら悠然と歩いてゴールしてみた。当然、最下位である。

結構な数の罵声とごく少数の笑い声を聞きつつ、注意深く全体を観察してみると、やはり督戦するかのような者達の中に教員やスタッフが混ざっていることに気づく。おそらく生徒は学生のうちからそんな同調圧力を『学習』していくことで、「自クラス以外は全て敵」みたいな認識になるのだろう。

ブラツクなやり方を計算し尽くした仕組みである。

「おま、お前なあ……あれほど先輩達から手を抜くなと言われたらどうがっ！」

「そうだよ！ それに左京君って影響力あるから変な目で見られてたよ？ 男女問わず、何人かは似たような事しちゃってたし」

「それは影響される方が悪い。僕は悪くない。あとこれは手を抜いたんじゃない、実験だからセーフ。ま、大丈夫。もうやらないよ。大まかにはわかったし」

尤も、そんな事情は他には関係ないのだろう。

考え込んでいると、ハードル走を終わらせた柴田と一之瀬から怒られた。相変わらず、一之瀬は目を合わせてくれないが。

後ろでは四方や神崎なども苦笑している。僕の思惑通りに、100メートル走の後の事が有耶無耶になったからだろう。

……うん。一応走って全部ハードルを倒した愛里はともかく。

天啓を受けたかのように。散歩するかのように微笑みながら。いつそ勝ち組の風格を漂わせてゆっくり最下位ゴールした椎名。それと男子にも何人か見られた運動苦手と思われる奴らは勝手にやったのだ。

だから僕は悪くない。

「なにわけわかんないこと言ってるんだよ！ みんな頑張ってるんだか

ら、次こんなことしたら本当に怒るからな！」

「へいへい」

「へいはいっか…はいは一回だ！」

それでも、ところてん式誘導術は体育会系に効く。

実験ついでに試しておく価値はあっただろう。

そして一度怒ったら、それで終わりになるのも助かる。爽やかなスポーツマンは粘着気質な部分が少ないのだ。まあ、何度も繰り返ししたら流石にキレるだろうが。

ただ柴田は体育会系の運動部なせいか、真剣にやってないと見られると面倒だ。事実、僕以外のハードル全倒しの奴はいても、真剣だとは見られているようで特に文句はなかった。

でもこれくらいシンプルな考え方は好みなので、もうやらないことを約束してささつと切り替えた。

107、龍虎

棒倒し。

白組113名、赤組総勢110名、総勢223名で各学年の3本の棒を倒し合う個人的には花形競技の一つである。

仕込みをしてる時に聞いた例年のものは各学年ごとの試合だったらしいが、今年は誰かさんが何かしたようで全学年競技に変わったという。

これに関しては、微かな『俺』の棒倒しの記憶でも100名前後でぶつかり合ってた気がするから、本来の形に戻しただけかもしれない。

ちなみに現在は、選手宣誓もしていた赤組総大将の藤巻という男子が、1年が総大将とはそっちの組に同情するよ。だが、うちの組は優しいからな。胸貸してやるからかかってこい。的な煽りしてるが、これもそれぞれの学年で計6回戦が全2回戦になったことで空いた時間を、口上合戦にしてしまおうという試みらしい。

そして合戦ということは、僕もしなくてはいけないわけだ。

……わざわざ例年と変えてまで煽られる機会を作るとか、学や南雲も実はMなのだろうか？　なんかこの学校、変人とMの割合高くね？　僕のような常識人には理解できない領域の奴が多すぎる。

口上を聞く限り、向こうの総大将藤巻は見るからに真つ当な優等生タイプ。うちのクラスでいうと柴田っぽい3年生。

選手宣誓といい、言っってはなんだが言葉に毒がなさすぎて、口上としては面白味に欠ける。学か南雲、もしくは高円寺や櫛田あたりにやらせてたら結果は違ってきたはず……ということとは。

これって僕へのフリだよな？　やるなよ、やるなよ？　絶対やるなよ（やれ！）っていう……。

それなら男子のみとはいえ、せつかくの全学年競技。

開会式の僕の約束とリクエストにお応えして、煽りと士気高揚を狙うしかあるまい。

偉い奴らへの面子攻撃を気兼ねなくやらせてくれるとは、なんと親切なお心遣いだろう。開会式と違って仕込みはないけど、これはこれでテンションも上がるというもの。

さて、そろそろ狩るか♠…じゃなくて僕の番か。一発カマしてやるとしますかね。

「初見さんどうも…って開会式が初見だったっけ。じゃあ改めてよろしく。

毎度おなじみ皆様のアイドル、清く正しい白組の総大将・左京夢月です」

「挨拶が長え！ 出やがったな馬鹿野郎！」

「赤組諸君、安心してください。僕は長々と話すつもりはありません。言いたいことは一つです」

マイクを渡されアドリブ挨拶から入ると、どこからともなく野次が飛んできた。

なので…というわけでもないが、ちよつとした意図を込めて単刀直入に終わらせる。

「学校秩序の象徴・堀北学、制度改革の急先鋒・南雲雅。

——君達二人に宣戦布告する」

これだけでノーリスクでサボれるからやり得である。

「僕が怖くないなら、二人まとめてかかって来い。

勿論、僕は諸君らの賢明な判断を期待して、のんびり『真ん中』で待たせてもらうとするよ。そしてかかって来なければ、リア充の頂点に位置する君達を倒すのは他に任せ、安全圏から気が済むまで煽り尽くしてみせよう」

来ても結果は同じだけだな。

「では赤組諸君、健闘を祈る！ ハアーツハツハツハ！」

あ、以上です。対戦よろしく願います」

「って、最後お!? 唐突に素に戻るな!!」

「バッカお前。名前出した二人ならまだしも、向こうの総大将・藤巻さんまでかかってきたらどうするんだ。入れ食いになるじゃないか。あつ、これオフレコで」

「だったらマイクのスイッチ切れやつ！ 無駄に上級生煽ってんじゃねえ！」

「うむ、予定通りだ。柴田君、ツツコミご苦労」「は？」

赤組に言うことは言ったので、もうマイクはいらないだろう。

柴田のツツコミが響き渡ったのを確認の後、労いの言葉の前にスイツチを切って、何故かポカンとしてる柴田に渡す。

あとは自陣に向き直ってなるべく大きな、それでいて赤組に聞こえないレベルの音量で――。

「さて、白組諸君！」

僕は約束通りに諸君らの勝利条件を整えたぞ」

「……はっ！ ま、まさかさっきのは」

「学と南雲に理不尽な二択を強いてやった。

来れば大して戦力にならない僕に拘束され、来なければ1年坊主相手に勝負を逃げたと面子は丸つぶれ……という風に持っていく。

はてさて、藤巻さんは残る可能性が高いとはいえ、絶対的な指揮官不在か求心力低下のどちらを選び、その状況下であちらの2・3年生はどこまで持ちこたえられるかな？ 楽しみじゃないか、なあ諸君」

味方に種明かし。

向こうがとつきに反論できない状況での、誘引計と煽りを組み合わせた回避困難な理不尽。

これこそ凡人との経験値差というものだよ、リア充エリート諸君。

僕自ら各種フラグを爆破してやる。

思いつきさえすれば打破も容易いけどな。

しかし……いやあ、捨てられないモノが多いお偉いさんにはツライ状況ですなあ。

「そこまで言うんだ。あの堀北や南雲相手に勝算はあるんだろうな、1年坊主！」

「向こうにいくら特級の戦力がいるとしても。勝負は時の運と言われることはあっても。棒倒しという競技に限っては個人の能力や運などいくらでも指揮で薄められる。まして実質の指揮官への半強制2

扱。まともな指揮がとれるとは思えない。そこへ2学年による挟み撃ちがあれば――」

「各個撃破の条件は整うか」

更には、この板倉(だったはず)という3年生とのやり取りには手応えを感じる。

赤組が例年の戦術をそのまま運用すれば、学年を越えた連携は取れない。そこを加味して、十分な勝算があると見込めたのだろう。

ゆえに僕は領いて自信満々に『約束』の履行を宣言した。

「そうだ。これが諸君ら待望の完全勝利への道筋だ」

能力的にも容姿的にも、生きてるだけでフラグが立つが如き極悪の輩ども。

学は友達でもあるし遊んでなさそうだから何も手を打たせない程度で済みますが、南雲には容赦しない。

二次元世界を現実を持ち込んでヒヤツハーするイケメンに正義の鉄槌を。

ジャツジメントのお時間ですの(お嬢様風に)！

「う、うおおおおおっ!!! 総大将！ 白組総大将!! 白組総大将・

左京夢月っ!!!」

おや？ でも完全なる私怨の上、今回は何も仕込んでないんだが、開会式のを覚えてた人達がノツてくれたのか。なんか鬨の声っぽいのが広がっていく。こんなに持ち上げられると思わず木に登ってしまいそうだ。

なら僕も某少佐殿を最後まで演じることで返礼にしようかな。調子に乗って上級生に指示なんかも出しちゃおう。今の雰囲気ならイケるかもしれない。

「総大将の僕から改めて伝達。

最低限の防衛戦力を残し、上級生2・3学年の攻撃役を集中運用。赤組上級生から総力で順次潰していけ。なあに、柱が不安定になる上に、最低でも倍近い戦力差だ。あちらにも連携される前に全て挟み込んで押しつぶせばいい。後ろは考えず、速攻でな」

尤も、適正攻撃人数もわからないし、学年ごとに運用して2つの学

年で挟み撃ち↓3連戦。これが安パイの戦略だ。それを共有できるなら、何か想定外があろうと敗勢の雰囲気にも呑まれることはないだろう。

ま、学年やクラスの枠を外に置ける誰もが考えてるだろうけどな。

「これは勝てる！ 勝てるぞ！ 堀北に勝ってAクラスに上り詰めるんだ！ みんな気張れっ!!!」

「南雲に一泡吹かせるのは今しかない！ 堀北会長の隙を突くのは心苦しいが、俺達で南雲の快進撃を止めてAクラスに返り咲くぞお!!!」

「「おおー！ やってやる!! やってやるぞー!!!」
うおっ。びっくりした。スッゲー大声だ。

誰もが考えてることしか言っていないのに、2・3年生のテンションがおかしくなってる？ 青春ってやつか。

しかし、まったく……。決め台詞前なのに勝手な上級生達だ。協調性という概念を知らないとみえる。聞いてなくても無理矢理言うけどな。

「さあ白組諸君。

—— 赤組に地獄を創るぞ」

「「うおおおおおっ!!! 左京！ 左京！ 左京！」

少佐と言えば、やっぱりこれを入れてはナンセンスだろう。

てか、盛り上がってたくせに聞いてたのかよ。マイクは柴田に渡しちやって持ってないから、大した声量もなかったのに……。

ちよつと恥ずかしいけど、手でも振り返しておくかな。野郎がやることじゃないけど、最初にアイドルを名乗った以上、おかしくはないだろう。

まあでも、途中少し不思議な上級生のテンション上昇があったが、決め台詞を言えて大変満足できたし、ノリの良い上級生も応援してくれた。

あつ……でも勝手に自分達の学年の持ち場へ行っちゃった。落ち着きのない云々って通知表に書かれてるんじゃないか、あの人達。

ま、いいか。ノってくれて気持ちよかったし。

とまあ、さあこれから試合までまったりとしようか、って感じで1年生の棒のところまで行こうとしたら、来るのは黙ったままではいられないこの男。

「おい左京。俺はよ」

「んあ？ 龍園？」

「俺達Cクラスにはなんかねえのか」

こいつまで何を当たり前のことを。

報連相や確認のつもりか？ 性格に似合わないことをする。

「龍園に指示なんかいるのか？ いらんだろ」

「ククツ。それがわかってんならいい。潰す役は俺達がもらうぜ」

「ん。頼んだ」

「——あ？ 頼ん……っ」

ほらみる。慣れないこととするから、変な部分で言葉に詰まる。

やっぱり龍園ってコミュ障だよな。すぐ立て直せるあたり、非凡ではあるけども。

「つーか、そういう話はうちの男子リーダーの柴田か神崎に言えよ。総大将を押し付けられたとはいえ、僕はただのパンピーだぞ」

「てめえみてえなパンピーがいてたまるか！ いつ下剋上を狙ってやがる。早くしやがれ。予定が狂うだろうが」

「狙ってねーよ!! 自ら貧乏くじ引きに行くのはお前と一之瀬、あとは葛城くらいなもんだって自覚しろや！」

「……クツクツク。貧乏くじとは言ってくれるぜ」

よく言えるな、コイツ。

何を使うかは人それぞれだけど、支配とか統率とか面倒事の極みなのは自明だろう。それを自分から買って出る奴じゃないと、アクティブ派のリーダーたりえない。稀に担ぎ上げられるリーダーはいるが、周りが恵まれてないと櫛田みたく浮いてこられないからな。

僕がどちらでもないのは誰が見ても明らかかなはず。

ここらへんの認識がおかしいのが、コミュ障リーダーたる所以なのかもしれない。

「左京。Bクラスへの指示はどうなるんだ？」

「あー？ だからなんで僕に聞くんだよ。柴田か神崎に言えって」

「ああ、そういえば夢月はさつき聞いてなかったのか。一之瀬からの指示で、棒倒しは夢月の指示に従ってほしいらしいぞ」

「はあ!? なに考えてんだよ一之瀬の奴。勝負を捨てたか?」

「おいおい。貧乏くじの方からためえに寄ってきたんだ。もつと喜べよ、左京」

龍園……! このコンコンチキの百々彦テンロクロー（意味不明）が! ここぞとばかりに嬉しそうに煽ってきやがって! 味方じゃなかったら……あつ、やつぱ怖いから泣き寝入りしてたかも。

しかたない。切り替えるか。

「何だその顔は?」

うつせえ。自分がどんな顔になってるか気になってくるだろうが。

切り替えたんだから龍園は黙ってる。もしくは自分の持ち場に帰れ。

「……柴田と神崎もそれに賛同してるのか? 納得できないなら、今のうちに代わってくれても」

「あ、ああ。俺は賛同……している。というか、上級生に指示出して動いた時点で左京以外の指揮はないと思うが」

「俺もさっきのアレで納得した。元々、人を率いるのは得意じゃないし、左京なら従ってもいいぜ」

神崎や柴田もか。

それにしても、一之瀬に嫌われるリスクは覚悟してたけど、クラス関係のなんかを投げてくるレベルって判断に困るな。

好意的だと見れば信用するようになった。悪意的だと見れば僕の苦手っぽい分野を投げて困らせることにした。こんな感じだろうか? ?

一之瀬の性格だけなら好意的な方じゃないかと思いたくなるが、流石に痴漢された次の日に好意を向けるほど常識外れじゃないはず。ただ、なら悪意かというところも違う気がする。いったいどういうつもりだ?

……まあいい。凡庸な指揮しか僕にはできないけど、幸いにも煽つ

た内容を利用できる状況。最低限ならなんとかなるだろう。

「はあ。んじや、龍園達Cクラスが攻撃に回るらしいし、僕達は防御。その指示を出せばいいんだな？ 誰でも思いつく考えしかないけど、本当にいいんだな？」

「誰でも……ねえ」

「夢月の思考は致命的なまでにズレてるからなあ」

「失敬な。普通の指示くらいなら僕にも出せるわ」

そんなに疑うなら見せてやる。僕にもできるってことをな。

「えーと、まず防御全体の現場指揮は柴田がやれ」

「おい！ 言った端から俺に丸投げすんな！」

「いや、これにはきちんとした理由があつてだな。僕がBクラス内に混ざつてると、学…生徒会長と南雲が迫ってくる可能性があるから、何もないグラウンドのど真ん中待機が安定するかな、と」

「あ、ああ。確かにそれがあつたな」

「そうなるって指揮なんかできないじゃん？ んで、こういう競技だと背が高くって棒を支える役に適した神崎より、俊敏さと勢いがある柴田を前面に出した方が一致団結できるだろ？ 元々は柴田指揮で練習してみたみたいだし」

「なるほどな」

うむ。1戦目だけだろうが、この『休み時間』の為に煽つたと言っても過言ではない。

「だから大雑把に言くと、柴田が全体指揮とスクラム組んで迎撃。棒に取りつこうとする奴への対応も忘れるな。神崎はパワーのある奴を中心に棒の死守と後方指揮。四方と体格の良い数名は遊撃として力が強そうな主力——赤組1年なら須藤か…Aクラスは大きな体格の葛城と雰囲気がある野武士っぽい奴かな？——が突撃してきたら勢いを流し続けて時間を稼いでほしい。」

こんな感じかな」

どうだ！ なんて威張れたことじゃないし、僕に指示されるまでもないだろうが、一応全体での方針共有は重要だ。ついでに向こうのEーS級が来た場合の対応を四方に任せてしまえば、時間稼ぎには充

分。

だから僕は淡々と必要な手だけ言つとけばいいだろう。

「待てー！ 四方と須藤や葛城・鬼頭相手では体格とパワーが段違いだぞ?! 時間稼ぎなんてできるのか?」

「支点・力点・作用点を意識して出足を挫くことも、おそらく四方なら可能だ。あまり動かず、棒以外の方向へ力を逃すようにすれば、向こうの主力を足止めはできるだろう。できるよな?」

攻撃の要の龍園を名前通りに龍とするなら、機動防御の鍵になる四方はキャットルーキーに因んで虎(猫)である。

攻守に龍虎が揃って最強に見える。

僕が好きに配置できるなら、この采配がロマンがあつて好みだ。

「うーん。やってみないとわからないけど、要領がわかればなんとかつてところかな」

「踏み出す足をなるべく注意して見てれば、身体のどこに力が入るか、そして体勢を崩すタイミングがわかるはずだ。そこを突け。プールや握力測定の時の集中力があれば難しくない。なんなら僕がやった早苗との二人三脚の練習時を参考にしろ。あれも早苗が力を入れる部分を先読みしただけだからな」

これは本来、キャットルーキー3部の主人公でキャッチャーの寅島がホームベースを守った際の手法の応用だが、この程度の助言をしておくだけで洞察力と集中力が並外れた四方なら充分応用可能。

「あ、でも怪我しそうなら無理するなよ? 柔よく剛を制す、剛よく柔を断つというように、相手が強すぎたら退くことも頭の片隅には入れておけ」

勿論、向いてない競技で無駄にふっ飛ばされることもあるまい。なんなら逃げ回ってもOKだ。

ただ四方がやる気みたいだし、それなら彼に向いた方法の一つでも伝えておけば、なんかの足しにはしてくれるだろう。

話がまとまって配置に付いたところで競技開始となり、防御役なのに途中まで龍園達Cクラスに混ざって限界ラインまで移動中(紅白の

攻撃役同士の接触は禁止、防御役同士は特に規制がないため）、思わぬ人物が声を上げた。

「社長！ 僕も！」一緒にさせてもらえないでしょうか!？」

「栄一郎？ え、でも僕と来ても得られるものはないよ？ それに龍園の指示に従わないのはマズいんじゃない？」

「龍園君っ！」

「ハッ。勝手にしやがれ。元々、松雄は定数外だ。抜けようが影響はねえ」

「いや、ボーッと立って向こうが乗ってきたら話すだけの予定だし、栄一郎の身体能力を無駄にするのはどうなんだ？ 活躍の機会とかも失くしちゃうぞ」

「活躍よりも、いざという時に僕が社長をお守りしたいんです！ だからお願いします！」

最初以外は人がいないから、土埃も上がらない目立つグラウンドと真ん中で危ない状況になるほど、学や南雲は考えなしじゃないと思うが。

……それに保険もきっちり確認済みだし。

「僕は臆病な小心者だから、そんな守られるような状況にはならないようにしたつもりなんだがなあ」

「その割には大胆不敵に宣戦布告してやがったがな」

「つまり行き当たりばったりしかない能力値・計画性って証明だろう。ま、向こうが僕と同程度だった場合、僕単独だと不都合が多いから栄一郎が付いてきてくれるのはありがたいがたくもあるが」

「ハッ。よく言うぜ。何度も直接うちに乗り込んで来る野郎がよ」

「社長！」

「あー、わかった。ただ栄一郎は一応攻撃役だし、よっぽどでない限り手を出さないでくれよ？ 学はともかく、南雲は薄暗い面が結構ある。嵌め手を想定しといてくれ」

「はいっ！ 了解です！」

でも……野郎とはいえ、こいつも真っ直ぐな目で頼まれるとどうも、な。

低い可能性だけど、仮に上手くカモフラージュされて、僕がどっかに一撃KO↓学と南雲どちらかが即帰還、なんてことになるようなら先がだいぶ楽になるだけだし、理性では僕一人の方がお得だとかかってるんだけども。

そんな事を考えつつ、ギリギリ向こうの迎撃が届く位置……つまりグラウンドのど真ん中に到着するまで少し話した龍園達を見送り、僕と栄一郎のボツ立ちタイムが幕を開けた。

学と南雲は来るつもりなら、どの配役が適当か想定しているだろう。僕の動きを確認して動くまで、栄一郎とのんびり観戦しているようかね。

栄一郎が固くなってたので、気儘にオススメの夕飯メニューを一人で話しまくっていると、まず南雲が、少し遅れて学がやって来た。

「やってくれんじゃねえか、左京」

「……水が流れるように押し包まれて、赤組の棒が倒されていくな。こちらの攻撃は……到底間に合わないか」

ふっ。来る事にしたなら、自分達を攻撃役にしとけばいいものをひよったか。勝ったな。

「ご名答。僕への直接行動もオススメしない。生徒会のトップ二人には釈迦に説法だろうけど」

「チツ、攻撃役同士は接触できない。そして防御役同士の接触は禁止じゃないが、防御役はセンターラインを越えてはならない、だろ。クソが」

「そちらのお望み通りにふっかけてやったんだから、感謝してほしいものだな」

「……ふう。今回は流石に負けたか」

学が言うように、全方位から囲んだことで速攻で赤組3年の棒が倒れ、主戦場は2年の陣地へ移された。

しかし我が白組上級生の勢いは疲れを感じさせない。このまま赤組上級生から潰しきるが早いかな、龍園達1年の攻撃役が1-Aの防御陣を貫くのが早いかな、といった状況。

また南雲の言うこのルールが僕を守ってくれる。

場にいる4人の中でセンターラインを越えられるのは、攻撃役であるCクラス所属の栄一郎だけだ。

翻って白組陣地に目をやれば、全学年で攻撃の決め手に欠け、攻めてきた中では唯一突破力を感じさせる須藤は、多少押されているものの四方が巧みに翻弄して時間を稼いでいる。

清隆が本気で来てたらまだわからなかったが、その可能性を下げるためにあらかじめおちよくっておいた。アイツの性格上、僕か四方くらいにしか本気になれないだろうから問題ない。

高円寺対策も一応いくつか想定してたけど、今日はこれまでずっと救護用のコテージにいる。

調子が悪いのか、手抜きか、はたまた……まあ、あの自由人には最大限の対策をいつでも使えるようにしておけば、『競技なら』対応できなくはないはずだ。天才の中でも突出して完璧なだけに、高円寺の信念と美学を貫く姿勢はありがたくもある。

あと赤組のパツと見の印象だが、攻撃は全ての学年で全体的に士気の低めな各Dクラス、防御は優等生的な陣を敷く各Aクラス。これなら、学年内以外での連携はないな。学と南雲を誘き寄せた甲斐がある。

それでむぎむぎと煽られに来るんだから世話はない。

ただおそらく対応する時間がなかったのだろう。

白組上級生の金槌と金床作戦も、龍園率いるCクラスの一斉突撃も見事にハマっている。特に数は互角だというのに、名槍の貫通を思わせる龍園の攻めはとて真似できない。

やっぱり敵に回したくないな、アイツ。ってのは置いといて。

「今回？ はっはっは。安心するといい。棒倒しは白組の完全勝利で終わる。学にも南雲にも最後まで指揮はとらせないしな。2回戦もここに来なかったら、栄一郎に拡声器持って来てもらって煽りまくり、士気をドン底に叩き落としてやろう」

「左京、てつめえ！ 正々堂々と勝負できないのか！」

……よし、気づいてないっばい？

「おいおい南雲君、嗚呼…南雲君。君こそ現状把握もできないのかい？ 今まさに正々堂々たる勝負の真つ只中だろうか？」

「ただくつちやべってるだけだろうが！ これのどこが勝負だ!」

「そうだな。攻める、または守るべき棒どころか、何も無いこの場ではお互い時間を無駄に浪費しているだけだ」

「それがなにか？ 身体能力が低い僕は一向にかまわんけども。放つとけば他で勝てるし」

正々堂々『口で』戦いたいから、僕に総大将なんてポジションを押し付け、様々な変更を敢行したんだろ。好きに話して何が悪い。

南雲から場所も材料も用意してきたんだから、僕としては範囲内で最大限のお礼をのし付けて返してやらないとな！

「……くつ。冷静になれ。こんな目立つ場所で手を出したら勝ち負け以前の問題だ。左京の口は塞げない。つまり棒の攻防どちらかに急ぐのが最適……だが、かといって左京を無視して競技に回ると、後まで影響が出るレベルの煽りが全体に広がる」

「手詰まりか。そもそもここに出向かされた時点で、打てる手は潰されていたか」

尤も、二人とも状況は把握しているのだろう。

打開策にこそ頭が回っていないが、その表情には諦めが浮かび始めている。

「いえ…す。だから決着つくまで僕と駄弁ってるしかないよ。気楽にしてくれたまえ。」

てか、あんなあからさまに僕に煽ってくれ、みたいな口上合戦を作ってたみたいだし、そのつもりだと思ってたんだけど？ 未然に防ぐなら、学か南雲が総大将になって『あの場』で反論するか、競技内容自体に調整を加えるくらいしかないんだしき」

「……」

実際、『南雲』はどういうつもりで僕を総大将に持ち上げたんだ？

軽いちよつかいにしては大袈裟な割に反撃される想定が甘いし、意外と頭に血が上ってるようにも見える。僕にいい気分でも味合わせたいのか？ それならご期待にお応えしておくのが礼儀というもの

かな。

「ああ、それと南雲には礼も言っておくか。僕に情報戦を仕掛けてくれてありがとう♪」

「……………」

「総大将はともかく、知名度を得られる機会がなかったら、こうも上手く事は運ばなかったよ。まあでも——」

それにしても、笑いが止まらないとはこの事か。

反撃できないリア充を煽るのって、何故こんなに楽しいのだろうか。自然と満面の笑みが浮かんできってしまう。

「あくはっはっは!! 悔しいのう、悔しいのう。後輩に自分の策を利用されるってどんな気持ち? ねえねえ、南雲君よお? もしかして思い通りになると思っちゃった? 残念無念だねっ!! かつわいそう! ぶわあくはっはっは!」

「ぐっ…………こ、こいつ!! モンキーのジジイみたいに馬鹿笑いしやがって…………!!」

「二之瀬や葛城の報告にもあったが、やはりあの状況は南雲が仕掛けていたのか……………む? つまり赤組や俺は南雲への反撃に巻き込まれた? ……まさかな」

いやあ、楽しいひと時を過ぎさせてもらったよ。

南雲は言葉を失くしてしまっただが、心からの感謝を贈ろうではないか。

逆に星空のように広大な心を持つ僕にちよっかいかけた幸運に感謝してくれてもよいぞ?

なんか、ひと言も喋らなかつた栄一郎と、苦悩するかのようを考え事し出した学には悪かつたけど、とても楽しかった。

更にはあともう一度、ノーリスクで休みつつ駄弁る機会があるとか、リア充爆破はこれくらいにしといてやろうという気分だ。

だから——。

同士達よ、仇は討ったぞ。

心安らかに。

と、澄み渡った青空の如き心持ちの僕は祈りを捧げ——全てを水

に流して忘れることにした。

　　なんでか来ている……その青空に浮かびながら、笑いまくってる人
ならざる存在達から目を逸らしながら。